
剣創のロクエンティア

神宮寺飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣創のロクエンティア

【Nコード】

N7039I

【作者名】

神宮寺飛鳥

【あらすじ】

世界は“縦”に出来ている。全てが数字と生まれによって決定された世界、ロクエンティア。人々は与えられた役割に従い、運命に等しい階級によって支配されていた。六つの階層に分かれた世界、有限の煉獄……。人々はただ従い、飼い馴らされる事で命を繋いでいた。覚醒したアニマを封じる為、昴たちは第一界層へと向かう。全ての階層が滅び、姿を見せた世界剣を背景に、少女の物語は一つの終わりを迎える。連なる運命と煉獄の連鎖に終止符を打つのは、誰かを愛する優しい心。たった一人、貴方の為だけに私は

剣を取る。これは神に抗う男と罪を背負った少女の、世界を終える
為の物語。愛の剣が紡ぐ、煉獄の反逆ファンタジー、ここに閉
幕！ 4 / 29 : 無事完結しました。長らく応援ありがとうございました。

序(前書き)

もうどうにもまなねだぜ！

序

落ちていく。遙かなる天空より、死と同義の大地へとまっさかさまに。

伸ばした指先がするりと抜けて、温もりの余韻と共に遠ざかって行く。何故こんな事になった？理由は思い出せない。だが、あいつの悲しそうな顔だけが瞳に熱く焼きついていた。

見上げる空は皮肉なまでに蒼く、全てが静寂の中にあつた。落ちていく。認識と自我の境界、俺ははつきりと“死”の足音を聞いた。

死ぬ。そう思った時、時計の針が巻き戻るような、そんな奇妙な音を聞いた。だが世界は元には戻らない。重力の法則から逃れる事も出来ず俺はただあるべき力に従い落ちていく。

どんどんあいつが遠ざかっていく。何かを叫んでいるのが見える。だが何を言っているのかもわからない。判断出来なくなる。認識がズレていく。俺は死ぬのか？

一瞬の静寂の後、まるで早送りのように空が遠ざかっていく。身体はアスファルトへと叩きつけられ、グロテスクにひしゃげるのだろう。血反吐を吐き出し、見るも無残に儂く散るのだ。人の身体の強度の限界を超え、俺は当然の理と共に死へと落ちていく。

あいつは、どんな風に見送るのだろうか？俺が死ぬ瞬間を見て、どんな風に生きていくのだろうか？出来る事ならばせめて……俺を見ないで欲しい。死ぬ瞬間くらい、お前は解き放たれていていいというのに。

落ちていく。遙かなる天空より、死と同義の大地へとまっさかさまに。

断末魔の声さえ上げる余裕もなく、俺の五臓六腑は潰れて爆ぜた。

“ 煩い ” 。 そう大声を上げたい気持ちを抑え、ロゼ・クラウンは小さく舌打ちした。それは今の彼に出来る精一杯の抵抗であった。

砂上を駆け抜ける一両の列車があった。年季の入った外見からもその中身を想像するのは容易である。狭苦しい車内には左右の壁際に長椅子が置かれ、そこにずらりと様々な人々が座らされている。彼らは一様に手錠を嵌められ、まるで地獄へ向かって進んでいるかのように頂垂れた様子である。実際、彼らにとってこの列車は地獄への引導を渡す物であり、その表情は決して間違いではない。

ロゼは視線だけで周囲を眺め、それから隣に座った人物へと目を向けた。やはり、この緊張感のある車内の中でこいつだけなのだ。ぐうすかと、いびきをかきながら眠っているのは……。

罪人を地獄へと運ぶ砂上列車の中、誰もが辛気臭い顔をしているというのに、この人物だけはぐうぐうと眠り続けている。それも出発からここまで数時間、ずっと眠りっぱなしなのである。

一体どんな神経の持ち主なのか……。ロゼが溜息を漏らしたくなるのも無理はなかった。彼にはそれなりの理由がある。今、必死に思考のパネルをあちこちへと回転させている最中なのである。しかしこの人物のいびきのせいで、思考がまとまる気配はない。

奇妙な人物だった。体格からして男だろうか。全身を白い布で多い、顔もやはり白い仮面で覆われている。一見すると何処かの呪い屋のように見えない事もないが、それにしただってあまりにも奇妙だ。

「ぐおおお……っ」

「……………」

ロゼは何も言わず、目を閉じる事にした。ロゼも周囲の罪人の例外ではなく、手錠を嵌められこのまま行けば数時間後には地獄の門を開く事になる。ここで思考をまとめなければ、それを避ける事は不可能となるだろう。

「やってやる。やってやるぞ……」

言い聞かせるように口の中で何度か呟いた。車内での私語は禁止され、常時ではないとは言え武装した騎士が車両を行き来しているのだ。久しぶりに発した言葉は小さく、しかしロゼに時間の感覚と思考を取り戻すのに十分な効果を発揮した。

もう何時間も黙りこくってただ揺られているだけで、思考がすっかり麻痺してしまっている。出発の時は騒いでいた罪人たちも、まるで催眠術でもかけられたかのように今は一様に口を紡いでいる。冷静に思考を纏め、ロゼは組んだ指先を何度も組み替え呟いた。

座ったまま前屈みになり、零れた汗が木製の床へと散っていく。出発前、ロゼには確固たる自信があった。この地獄行きの列車から脱出するという、確固たる自信である。だが今それは揺らぎつつあった。何時間もこんな所に缶詰にされていれば気が滅入るのも当然だろう。計画は上手く行くだろうか……何度も段取りを頭の中で組みなおす。構築しては崩し、また最初から……。まるで三途の河原にでもいるかのような気分だった。

上手く行かなければそれで終わり……。嫌な予感を拭い去るかのようロゼはきつく目を瞑った。ここまで来た以上、やるしかないのだ。開始時間まで残り僅か……。予定通りに全て事が進めば良いのだが。

「ふわぁ〜あ……。あー、良く寝た……」

その時である。隣に座っていた男が大きく伸びをしながら目を覚

ましたのである。仮面をつけている所為で欠伸をしたのかどうかもわからなかったが、男は伸ばした腕が手錠で拘束されている事に気づき、小首をかしげた。それから周囲をぐるりと見渡し……あろう事か口ゼの肩を叩いてきたのである。

「なあ。あんた、ここどこだ？」

「……はあ？」

「だから、ここはどこだ……？ あれ、なんだこの格好……？ 意味不明なんだが」

「………意味不明はこっちのセリフだったの」

苦々しく思いつつも結局はそう返してしまおう口ゼ。幸い今は見張りの騎士もいないのだ、多少喋ったところで小声ならばバレはしない。男は自分の状況がよく飲み込めていないのか、突然徐に立ち上がり、歩き始めた。

「お、おいっ！？ 何やってんだ！ 死にたいのか！？」

「死ぬ？ 俺が？」

「馬鹿か！ 見張りに見つかったらお前、その場で殺されるぞ！ 頼むから僕の予定を狂わせないでくれよ！」

「………なんだか良く判らんが、座つてりゃいいのか？」

「ああ、そうしてくれ……っ」

男は素直にロゼの言葉を聞き入れ、元の位置に収まった。そうして暫く黙り込んだ後、再びロゼの肩を叩く。

「なあ、本気でこれがどういう状況なのかわからん。なんで俺はお面をつけてるんだ？ こりやどこに向かう列車だ？」

「お前……いい加減にしろよ。わからないわけがないだろ……？ 罪人を“アンダーグラウンド”に輸送する列車の中だよ。って事は、なんだか知らないけどお前も何かやったんだろ？」

「いや、俺は清く正しく生きている……いや、まてよ？ あれか……？ あれなのか……？」

男は頂垂れ、暫く考え込んでいた。ここでこの男が騒ぎでも起せば、計画に支障が出るかもしれない。ロゼはそれを思うと気が気ではなかった。実際、乗員が一人騒いだところで計画はどのようになるはずもないのだが、神経質なロゼには悪い方向にしか想像が働かなかった。

そうして再び、当たり前の沈黙が戻ってくる。最早ここは異界の中だったのかもしれない。男が立ち上がったたり座ったり話したりしているのが、周囲の乗客は目もくれない。まるで死者を冥府へ運んでいるかのようだ。生きているのは自分だけ……そんな悪い妄想に取り付かれるロゼ。そんな時であった。大きな異変、予定を狂わす出来事が起こったのは。

「何だ……っ!？」

大きく列車が揺らぎ、乗員たちが席から振り落とされる。今まで時が止まっていたかのような静寂だけがあった車内に悲鳴と戸惑いの声が上がった。ロゼもその中の一人である。当然、予定の時間ま

ではまだ早すぎる。

見張りの騎士が慌しく目の前を走り抜けていくのが見えた。ロゼは慌てて振り返り、外から光を取り込むためだけについている小さな丸い窓へとへばりついた。そうしてロゼは息を呑む。砂上では、大いなる不運が列車に並走していたのである。

「よりによつて、“魔物”……!? こんなところで……!?」

砂上の世界　そこは、“砂海”と呼ばれている。第六階層、“オケアノス”の七割を占める巨大な砂の海である。読んで字の如く、それらは細かい砂状の粒子によつて構成されており、絶えず“上の世界”から零れ、この海に満ち満ちていく。

船や列車を使わねばその上を進む事はままならず、生身の人間ならばゆつくりと砂の圧力の中に沈んでいくだけの死の世界。そんな砂の中を生き生きと泳ぐ怪物の姿があつた。

砂の魔獣　。オケアノスに救う魔物である。蛇のようにうねる長い胴体に、魚のような頭部を持った異形……。砂にまぎれる黄色に似た色の鱗が光を弾き、何度か波間で輝いている。

最悪だつた。最悪と言う以外に表現する方法が思い浮かばなかつた。冷や汗を流し、あとずさるロゼ……。次の瞬間、異形は一瞬で列車へと間合いを詰め、その巨大な胴体を強かに打ちつけたのである。二度目の衝撃　。続けて二度目の悲鳴が上がつた。

列車は本来の進路を外れ、見当違いの方角へと進行を続ける。その時点でロゼの計画は破綻を開始していた。車内に突っ伏し、焦るロゼ……。振り返つた視線の先、直ぐ背後の車両は衝撃で切り離され、砂の海の中に取り残されていた。

ただ落ちていくだけの砂の世界に取り残され、小さくなっていく車両……。そこにも当然、この車両と同じように狭い中に押し込まれた沢山の罪人がいたのだろう。そして次に沈んでいくのは自分かもしれない……。ロゼは意を決して立ち上がった。

「くそっ！　なんでこんな事に……っ！」

歯を食いしばり立ち上がる。ロゼは突然その両手に力を込めると、あっさりと手錠は外れて床に転がった。手首を締め付けていた冷たく硬い金属の感触から解き放たれ、ロゼは車両を後にしようとして歩き出した……その時である。

「ちょっと待てよ」

背後から腕をつかまれ、一瞬見張りの騎士がやってきたのかと呼吸が止まる。しかし背後に立っていたのは例の白い布を被った男であった。

「鍵外せるんだろ？　俺のも外してくれよ」

「見てたのか……。放せよ、お前の鍵を外してやる理由がない」

「外してくれないなら邪魔するぜ？　お前、この列車から脱出したいんだろ？」

仮面で顔は見えなかったが、男がにたりと笑ったのが容易に想像出来た。まあ別に、外してやってはいけない理由も無い。自分の鍵を外してしまった時点で見つければ殺されるのは間違いないのだ。ある意味、囷として使えるかもしれない。ロゼは少々思案した後、男の手錠に手を伸ばした。

ロゼの腕、服で隠された部分が淡く輝き、次の瞬間鍵が外れて男は自由となった。ロゼと同じようなリアクションを取り、それから男はロゼの隣に立った。相変わらずパニック状態が続いている車内において、二人だけが妙に冷静である。

「で？ 何か手があるんだろ？ 一口かませるよ」

「……………手なんて呼べる程大したもんじゃないよ。ただ、動力が付いている車両は先頭のやつだけだ。そこから後ろの車両にいる限り、切り離されたら即アウト……………」

「喋ってる暇があったら前に進んだ方がいいって事か」

二人は頷きあい、同時に走り出した。ロゼは慎重に進もうと連結部で一度停止したのだが、男はロゼとは違いそのまま次の車両へと突っ込んでいく。

次の車両にも見張りはいなかった。騎士も罪人の監視どころではないのだろう。このままではこの列車そのものが砂の仲間入りをしてしまうのだから。

男は次々に列車を進み、二人は先頭車両の近くにまで移動してきた。その時、連結部分で様子見していたロゼに不幸が降りかかった。三度の魔物の体当たり……………それにより、連結部分が目の前で解除されてしまったのである。

慌てて飛び移ろうとするロゼの目の前、割り込むように魔物の胴体がうねりながら通過していく。その瞬間頭の中が真っ白になった。飛び移れない。それはつまり、死を意味している。死ぬ。それをハッキリと自覚した瞬間、ロゼの身体はふわりと浮かんでいた。目の前にあったのはあの男の奇妙な仮面である。男は列車から限界まで身を乗り出し、虚空へと伸びていたロゼの手を掴んでいた。である。片足を砂の上に滑らせ、片手で列車を掴み男はロゼを引っ張り寄せる。砂に触れていたブーツが焦げつき、男は小さく悲鳴を上げてロゼと共に車両の中へと倒れこんだ。

危機一髪であった。目の前で、つい先ほどまで一緒だった罪人たちが砂に流されていく……………。肩で息をするロゼの隣、男はブーツの

底を気にしていた。

「あ、ありがとう……危なかった……助かったよ。で、でもどうやって……？」

「あ？ ああ、あの化け物の背中に片足付いて、お前片手で持ち上げて……化け物が通り過ぎたら砂の上を滑って、引つ張り寄せただけだ」

言ってしまったえば別段難しい事はしていないのだが、それをあの瞬間出来てしまうのが異常である。男は先ほどから、どこか感覚的にズレているかのようなだった。慎重さに欠ける いや、欠如しているのは迷いや恐怖なのかもしれない。

あまり考えている暇は無い。男も焦げたブーツの事を気にするのは止めたようだった。二人は同時に立ち上がり、それから先頭の車両を見据える。そこでロゼは違和感を覚えた。その正体を確かめる為に駆け寄る。そして、思わず眉を潜めた。

「クソッ！ 全然進路が修正されないと思ってたら……！ 騎士は全員もう脱出艇で逃げ出した後か！」

「脱出艇？」

「先頭車両についてるんだよ……。もしかしたらそれが使えるかと思っただけ、もぬけの空だ……！」

操縦士を失った列車はただ闇雲に直進を続けるだけである。このままではどこに辿り着くやもわからない……。慌てて操縦室に飛び込むロゼ。その背後、男は腕を組んで周囲を眺めていた。

「さっぱりだな。俺には動かせない」

「僕が何とか動かしてみる……！」

「出来るのか？」

「ていうかやんなきゃ殺されるっ！！ あんなデカブツ見たことないよ……！ 早く、何とか進路を戻さなきゃ……」

「そうか。じゃあ列車の操縦はお前に任せる。俺はあつちを何とかする」

何とかするって、何をどうやって？ ロゼがそう問いかけようと振り返った時であった。男は自らの身体を覆っていた布を掴み、一息にそれを払い退ける。

現れたのは筋肉質な男の両腕であった。細身の体躯、しかし引き締まった肉体……。黒い髪が揺れ、何よりもその腕の刺青に目を奪われた。

それはただの刺青ではない。所有者に力を与える、“紋章”^{スコア}と呼ばれる物であった。だが、男の腕全体を覆うようなその巨大な紋章は普通の紋章などではない。ロゼには判る。ロゼも紋章を扱う人間なのだ。今までそれなりに種類は拝見してきた。

だが、それはなんだ？ 余りにも巨大で、余りにも無骨な紋章……。それが輝き、男の掌の中で剣を形作る。紋章と同じく無骨で黒く、巨大な剣……。それを肩に背負い、男は面を取り払った。

異様な雰囲気のある男であった。少なくとも、オケアノスで見る人種ではない……。思わず呆けるロゼの背後、男はゆっくりと靴を鳴らして歩く。そうして振り返り、笑みを作っていた。

「化け物は俺に任せる」

「任せろって……」

「俺は強い。だから俺に任せろ。なあに、化け物退治は初めてってわけでもないんだ。つってもまだ、三回目だけだな　！」

剣を担いで男は車両から助走を付け、砂の海に跳んでいく。空中で剣を両手で構え、まっさかさま　。砂の上をうねる大蛇の腹へと着地し、鱗の上を火花を上げながら滑っていく。

硬く、よく滑る鱗……それそのものが刃のように触れる物を切り刻んでいく。その小さな突起に擦れ、男の鋼の靴底が削れていた。踏ん張りを利かせ停止し、同時に剣を腹へと突き立てる。あんなにも硬く頑丈だった鱗が砕け、肉に食い込み血を舞い上げる。紅い噴水を前に男は笑みを作り、唇を舐めて走り出す。

腹へと付きたてた剣を引きずり、一気に前へ　！　化け物の悲鳴があがった。腹の上の異物は胴体を掻っ捌きながら急所である頭部へと突っ込んでくる……。大蛇は雄叫びと共に列車に体当たりを食らわせる。男の体が衝撃で吹っ飛び、しかし突き刺した剣を軸に腹の上へと舞い戻る。うねる大蛇は今度は砂海の中へ　。男も当然、それに巻き込まれ砂中へ沈んでいく。

「お、おいっ!?!」

口ゼは窓の向こうを眺め思わず声を上げた。蛇は遠くへと移動しつつ、何度も地上と砂の中を蛇行している。進路は元に戻りつつあるが、男の安否には繋がらない。あれだけ何度も執拗に砂の中に引きずり込まれては、いくらなんでも振り落とされてしまうだろう。

しかし予想に反して蛇はほとんど元気を失っていった。腹の上から男の影は消えたが、今度は激痛にのた打ち回るかのように激しく頭を上下させている。それが真っ直ぐに列車目掛けて突っ込んでく

るのが見えた時、ロゼは今度こそ死を覚悟した。

蛇の頭が列車に激突しそうになった瞬間、何故か突然その首は跳ね落とされていた。やや遅れ、列車の上に何か飛び移ったような音が聞こえる。ロゼは窓から顔を出し、天井を見上げた。そこには切り落とされた魔物の頭に剣を突き刺し、全身返り血だらけで佇む男の姿があった。

熱砂の風を浴び、男は気持ちよさそうに空を見上げている。ロゼは空いた口がふさがらなかつた。なんだか良く判らないが、砂の中で何かがあり、結果として魔物の首は列車の上に転がっている……。

「よお、進路はなんとかかなりそうか？」

「お前……何？ 何なんだ？」

「俺？ 俺か……。さあな、俺もそれが知りたいんだよ。でもま、名前だけは知ってるぜ？」

男は深く息を吸い、身体を伸ばし、それから唇を動かした。静かに唯一、己の中に残った名を紡ぐ。

剣創のロクエンティア

良く晴れた空の下、男は高層ビルを見上げていた。自身の体がどんな形になってしまったのかはあまり考えたくはなかつた。

あんなに高くから落ちたのか 他人事のようにそんな事を考える。道行く人々の晒し者になり、中身を晒し、ああ、まるで滑稽な

エンディング。

意識が薄れていく。全てが暗闇に落ちていく中、誰かの叫び声が聞こえた気がした。それが全ての始まりにして全ての終わり。そう、物語のプロローグ。

男にとって二度目のチャレンジが今、この束縛された世界の中で始まるうとしていた……。

邂逅、リターン（1）

ビルの隙間に見える青空の向こうに手を伸ばす。子供の頃、私はそこにいつか届くのだと信じていた。

いや、届かぬものなどなかった。私にとって全ては手中にあり、世界は私の為に動いているのだと、幼い頃は本気で信じていた。当然だ。幼い子供とはそういうものだ。世界の限界を知らなかった。現実を知らなかった。知らないという事は罪であり幸福でもある。天井を知った時、私は罪から解放され幸福を剥奪される。

右手で携帯電話を操作する。別にこれといって目的があるわけではなかった。だが、何かを弄っていると落ち着くのだ。気持ちを落ち着かせる薬として携帯電話を扱う。呼吸をするが如く、である。そんな人間今時珍しくもない。私も大衆の中の一人に過ぎない。

学校帰りの電車の中で考える事は常にアンニユイであり、まるで夕焼けの色を切り取ったかのようだ。差し込む紅の光の中、私はマフラーに少しだけ顔を埋める。

世界の色彩などわたしにとってはどうでも良い事だ。だが人は染まり易く、気づかぬ内に何かに流されている。そんな人生が嫌だと思つた所で具体的にそれを処理する力を私は持たない。滑稽な道化だ……。

などと、メンヘラ染みた事を思考しつつ私は眼鏡を外して目を閉じた。なんだかんだ言いつつもテスト明けの帰り道は清々しい気持ちに溢れている。これで後は冬休みに入るだけというものだ。

大学生にまでなつて何故まだテストなんてものをしなければならぬのだろうか。来年には二十歳になるというのに、小学生の頃と変わらずにテスト如きに左右されている……。まるで進歩がないというものだ。

指先は留まる事を知らない。画面はボヤけているが、私は只管にキーを打ち続ける。思考した事をそのまま文章化する事など気づけ

ば他愛の無い技術となっていた。今の私の思考の全てを文章化し、保存することが出来る。あとで読み返せば顔が赤くなる事は必至なのだが……。

「……………過去の自分からの悪意あるテロだな、これは」

電車が目的地に到着する頃にはすっかり日が暮れようとしていた。駅に降り立ち、吐き出す息が白く立ち上っていくのを見送る。お世辞にも都会とは呼べない地方都市の、それでもにぎわっていた場所から山のふもとまで戻ってきた。私にはこれくらいが丁度いい。

高い場所は、好きではないのだ。そもそも馬鹿と煙が高い場所に昇りたがるのであって、私はそのどちらでもないのだから高い場所が好きでないことになんらおかしい事はないと思う。

暫く歩き、私は目的地の前で足を止めた。辿り着いたのは私の下宿先であり、怪しい武術を世に広めている道場である。日本家屋の隣に割りりと立派な道場があり、その前で女性が道場の周りを掃除しているのが見えた。こんな寒いのにご苦労な事だ。

「ただいま戻りました、奥さん」

「あら？ スバルちゃん、おかえりなさい」

どこか子供っぽい笑顔を浮かべる和装の女性。しかし髪の毛は栗色で、目は緑である。何人なのかは不明だがとりあえず日本人という線は薄そうだ。

彼女はこの道場の師範、その奥さんであり下宿先の管理人でもある。とはいえ今この家に下宿しているのは私一人で、管理人というよりは家主というか、この家の主というか……まあそんなポジションなのだ。

奥さんは竹箒を片手に私に歩み寄り、徐に頭を撫でてきた。白く

て綺麗な手が頭を撫でる度、何となく心が癒されてしまう……。この人は何歳なんだろうか？ なんとというか、全然歳をとらないような気がする。そんなわけないんだが……。

「今日も一日大学ご苦労様っ！ よしよし、なでなで……」

「う、うう……っ」

なんでこの人は会う度に私を子供扱いするんだ……？ 判らない。自分では、それなりに見た目は大人っぽくしているつもりだし、喋り方とかだつて気をつけているつもりだ。なのにこの人はいつもこうだ。正直、苦手な部類に入る。

何が苦手つて、撫でられている何となく心地よくなってしまふところだ。危険すぎる……。他人に心を簡単に許すのは大人ではないと思うのだ。だから、私は全然興味ないような素振りでもやり過ごす。

「そういえば、師匠は？」

「うん？ そうねえ、道場の中に居るんじゃないかしら？」

「かしら、つて……」

「あ、私夕飯の支度しなくちゃ。スバルちゃん、今日はお鍋だからね。あの人にも言っておいてね」

奥さんはおしとやかに去って行ってしまった。なんだろう……負けた気がする。あの人には永遠に叶わない。そんな気がする。

仕方が無いので道場の扉を開く。外から見ても灯りがもれていた。ので中に居る事は判っていたのだが……。まさか中を一生懸命雑巾がけしているとは思わなかった。

「師匠、何やってるんですか？」

「……昂か。いや、道場の掃除をちよつと最近サボってたからな。そろそろ、綺麗にしておこうと思ったんだ」

「……奥さんに怒られたんですね」

「……。まあ、そうとも言うな」

容易に想像が出来る。基本的にこの人は奥さんに頭が上がらないのだ。理由は不明だしあまり考えたくも無い。あの奥さんは実に旦那に対して容赦が無い。どうやら内縁の夫らしく、籍は入っていないらしい。その辺にも複雑な事情があるのかもしれない。

妻に頭が上がらないこの人だが、私はそれなりに尊敬しているし彼のことが大好きだ。勿論、変な意味ではない。私もあの奥さんを敵に回すような勇氣はないし……。

胴衣姿のまま一生懸命に雑巾を絞っているこの人は、これでも常軌を逸した強さの持ち主なのである。噂では以前どこかの国で戦争を経験したとかなんとか……。拳だけで色々な敵を倒したとか、そんな噂がある。実際この人の動きは何をどうやっているのか素人では全く理解出来ず、さっさとプロの格闘家にもなればいいのに、と思う。しかし以前それを言っただけで見たところ、

「あんまり表舞台で使っていい力じゃねえからな……というか、あまり目立つと怒られる」

との事。一体どんな設定なんだろうか。表舞台では使えない力って何なんだ……と、思う。しかしあえてそのあたりに深く首を突っ込む事はしなかった。多分、奥さんの関係なのだろう……。

しかしなんだかんだで私を受け入れ、今では家族のように扱ってくれている夫妻を私も尊敬しているし、家族だと思っている。二人は私の遠い親戚に当たるのだが、あっさりと私を受け入れてくれた。こうして、今日も門下生ゼロの道場を掃除したり、家でゴロゴロしているだけの人が、一度戦えば滅茶苦茶強い。一体どうやってこの家を支えているのかは判らないが、兎に角この人は私にとっては恩人なのだ。

一度受けた恩は必ず返すべきだろう。だから私は形式上この門下生という事になっている。まさに一人目の弟子である。師匠と呼んでいるのは、奥さんがそう呼んだ方がいいと提案してきたからだ。以来、彼は私にとって師匠となった。

「師匠、手伝います」

「いや、鼻に手伝いまでさせたらまた怒られるから勘弁してくれ……」

「肩身が狭いですね……」

「……無理にこっちに来てもらってるだけに、俺も文句は言えんだ。以前一度あっちに帰られた事もあるしな」

「……やはり、実家は外国なんですか？」

「外国……まあ外国だな、うん」

何故か師匠は腕を組んで頷いている。まあ、それは当然あの容姿で日本人ですって事もないだろうし……。結局奥さんには内緒にするという事で私は師匠を手伝って掃除を終えた。バケツの中の冷たい水で指先が痺れる……。冬場にやる事じゃあないよなあ……。

二人一緒に道場を出て母屋へと入る。玄関入って直ぐにある階段を上り、私は自室へ。そこで鞆を置き、マフラーを手に取りつつ窓から外をじっと見つめた。

この辺りは、大学周辺に比べると大分灯りが少ない。だが私にはこれくらいの方がまぶしくなくて丁度いいのだ。我ながらいい場所に下宿出来たと思う。

人の喧騒から離れた場所に居れば、少しは気持ちも落ち着くだろう……そう言っていて私を送り出した両親の事を思い出す。きっと清々したと思っっているに違いない。自分で言うのもなんだが、私は面倒な女だ。

ふと、急に寂しさに駆られる事がある。自分が一人ぼっちなのではないかと思えてくるのだ。そういう時は震えが止まらなくなり、あの日の事を思い出してしまう……。

あの日、私はとても大切な人を目の前で失ってしまった。彼は私を救おうとして、その命を奪われたのだ。他にもない、この私の手によって……。

落下していく速度は比例して私の心さえも闇の中へと吸い込んでいく。誰かの悲鳴が聞こえ、耳の奥で繰り返し反響した。あの時のことは忘れられない。何度でも思い出す。何度でも、何度でも……。実に面倒な女だ。こんなだから、誰からも必要とされない。この世界から消えてしまうことが出来たらどれだけ幸せだろう？　だが私は生きなければならぬ。それが、彼が命を投げ打って救った、私の命の重さそのものなのだから。

「夏流さん〜！　勝手に台所に入っちゃ駄目だって言ってるでしょ！？」

「いや、腹へって……あぶねっ！？　熱したフライパン振り回すヤツがどこにいる！？」

「これが私の聖剣ですよ」

「意味わかんねっ!! す、昴助けてくれえっ!!!!!!!!!!」

外からそんな声が聞こえてきて感傷的な気分は一発で吹き飛んでしまった……。何やってるんだろうか、あの人たちは……。

目尻の涙を拭い、私は部屋の外へと歩き出した。ここには私の新しい生活があり、新しい日常がある。そうだ、忘れてしまえばいい。悲しい出来事など。悲しい過去の事など。

邂逅、リターン（1）

「はあ？ 記憶喪失？」

素っ頓狂な声を上げるロゼの背後、男は窓辺に立ちぼんやりと砂の景色を眺めていた。

“魔物”との遭遇から数分……。漸く調子を取り戻した砂上列車に揺られ、男はずっとぼんやりとしている。その全身は魔物の返り血に染まっていたが、ロゼから受け取ったタオルのお陰で今は多少はましな格好になっている。

とはいえ、独特の血の匂いは中々取れる事はなく、ロゼはそれを気にしてか一定以上距離を置き続けていた。男はそれさえも気にする様子はなく、差し込む強すぎる日差しの下静かに髪を靡かせ続ける。

罪人を乗せた砂上列車はそのほとんどを魔物の襲撃により失った。護衛の騎士も逃げ出した以上、この列車がなくなっただとところで誰に

もその行方は判らないだろう。ロゼにとっては幸運とも呼べる状況が完成した。何故ならば彼の目的はこの列車の強奪だったのだから。列車を操縦しつつ、ロゼは背後を気にしていた。ほとんどの罪人が砂の中に消えていった。生き残ったのは二割か三割……それだけあれば上等だろう。魔物の襲撃に対してこの列車は何の装備も持ち合わせていない。使い捨て。罪人が死のうがどうなるうが別段構わないのだ。貴重な労働力ではあるが、その命を守る為に魔物と戦う危険を冒す必要はない……それが騎士の、“帝国”のやり口なのだから。

「じゃあ、お前……自分の素性もわかんないのか？」

「ああ」

「ああ……つて、なんだよそれ。自分の事だろ？ もうちよつと取り乱せよ」

「そう言われても、記憶失っちゃってるんだからしょうがないだろ？ 取り乱したところで、俺が記憶喪失である事実はかわらねーんだしよ」

「まあ、そりゃそうだけどさ……。あんた、“魔劍”^{マジ}の使い手なんだろ？ だったら身元もわかりそうなもんだけどな」

「……魔劍？」

「なんだ、魔劍の事も忘れたのか……。あんたが出したでかい剣のことだよ」

「こいつのことか？」

男は手を頭上に伸ばし、思い切り振り下ろす。気づけばそこには剣の形が紡がれ、鈍く光る切っ先がロゼの顔の横でピタリと静止していた。

「つぶねえっ!? ざけんな、事故つたらどうするつもりだ! ！
　　つちは運転中だぞ!?!」

「事故るもクソもあるか。なんもねえじゃねえか……ここ砂漠だぞ」
「そういう問題じゃないだろっ!! ！ 兎に角それはどっかやっつてくれ! ！ 気が散る!」

男は口元を歪ませるように悪戯っぽく笑みを浮かべ、剣を消失させた。再び腕を組み、壁に背を預ける。ロゼにしてみれば魔剣使いに会うのは珍しい事であり、魔物を駆逐する魔剣を突きつけられるのは正直生きた心地がしないことだ。

溜息を漏らし、激しくなってしまった動悸を落ち着けるように胸に手を当てる。そんなロゼとは対照的に男は風を浴び、気持ちよさそうに空を見上げていた。ロゼにはその男の表情が解せない。

「なああんだ……? 何でそんなヘラヘラしてられるんだ? ！ ついさつき、死にかけたんだぞ?」

「過ぎたことでウダウダ言ったって。俺たちは生きてんだろ?」

「そりゃそうだけどさ……。あんだ、名前……なんだっけ?」

「さつき言ったる」

「悪いね、物覚えが悪いんだ。特に馬鹿の名前は覚えるだけ無益だろ？」

「なら俺の名前を覚えても無意味だな。自慢じゃないが、俺は馬鹿だ」

白い歯を見せて子供のように笑う男。むっとした表情で振り返るロゼが眼鏡を中指で押し上げる。男はロゼの隣に立ち、その肩を叩いた。

「ホクトだ。多分そう呼ばれていた。今度は忘れるなよ、ロゼ」

「なんで行き成り呼び捨てなんだよ……」

「あ？ 細かいこたいいんだよ。それより、どこに向かってんだ？ 後ろの車両の罪人さんたちが不安がってるぜ」

「煩いな……。あんたらは黙って大人しく待つことも出来ないのかよ。言われなくたってもう見えてくるさ」

ロゼがそういうや否や、列車と並走するように砂海が動き始めた。何かが砂の中にもぐっている。それも、先ほどの魔物よりも何倍も巨大な何か。

ホクトは手の中魔剣シンを召喚する。しかしそれを見たロゼは慌ててホクトの腕にしがみ付いた。

「待った！ あれは魔物じゃない！ 斬るな！」

「はあ？ 魔物じゃないならなんだ？」

「僕たちの……“拠点”だよ」

砂の中からゆっくりと巨体が姿を現していく。それは見る見る内に砂の上に姿を晒し、巨大な胴体から伸びた翼を広げ、砂を巻き上げながら光の下に現れた。

一見するとそれは魔物にも良く似ている。広げた翼を再び砂の中に戻したその姿は細長いカプセルのようだった。ロゼが手を振り、列車を停止させる。それにあわせるように謎の物体も列車の傍に身を寄せるようにして停止した。

「……………潜水艦？」

「そう、潜水艦。僕たちはホームって呼んでる。正式名称は、“ガルガンチュア”……。寄せ集めで作ったもんだけど、結構良く出来てるだろ？」

自慢げにそう語るロゼ。しばらくするとガルガンチュアから梯子がかかり、乗員と思しき者たちが下りてくる。ロゼはその乗員たちに駆け寄り、一言二言話をつけるとホクトのところに戻ってくる。

「潜水艦か。かつちょええな。俺も乗ってみたいぜ」

「あ、そう？　じゃあ丁度良かった。はい、これ」

「んっ？」

ホクトの手を取り、徐にロゼが装着したのは　手錠であった。何が起きたのか判らず暫くの間ホクトは目を丸くする。ロゼは笑顔のままホクトの肩を叩き、頷いた。

「お前危なすぎ。しかも怪しすぎ。悪いけど一緒に来てもらおうよ」

「……………。おい、ちょっと待て！ 助けてやったるがっ！！」

「何が記憶喪失だよ…………。魔剣使いが何で罪人と一緒に運ばれてたんだか知らないけど、記憶喪失ってなんだそれ。信じられるかよ」

「信じる信じないはお前次第…………いや待て、信じてくれ。俺は本当に記憶喪失だ」

「おーい、誰か適当にこいつを牢屋に放り込んでおいてくれ」

「ちょ…………。人の話を聞けっ！ くそっ、ぶった斬るぞ！？」

しかし、手は拘束されている。しかも集まってきた乗組員たちは全員剣で武装し、ホクトにその切っ先を突きつけている。冷や汗を浮かべ、目を瞑るホクト。大人しくついていくしかない…………。

ホクトがガルガンチュアに連衡されるのをロゼは列車から見送っていた。そんなホクトと入れ違いに列車にやってきたのは一人の女剣士であった。ロゼや乗組員たちと同じ軽装をしており、腰にはサーベルを携えている。ロゼの元まで歩み寄ると一礼し、ロゼの身体を気遣うようにそつと手を伸ばした。

「…………無事で何よりです、若」

「だから、僕は若じゃないって何度言えば判るんだ！？ 僕の事は、団長と呼べ！」

伸ばされた手を払いのけ、人差し指を立てて剣士へと突きつける

ロゼ。剣士はたじろいだ様子で慌てて頷き、それから言葉を訂正する。

「失礼しました、団長」

「リフルはいちいち心配しすぎだ！ 団長として、これくらいは当然の働きだろ！」

腕を組んでそっぽを向くロゼ。その後姿をリフルと呼ばれた騎士は安心したように見守っていた。そう、今回の作戦はロゼの単独行動であり、下手をすればロゼの身がどうなっていたかは判らなかつたのだ。

当然リフルはそれに反対した。しかしロゼの強い意志により作戦は実行に移されたのだ。実際、予測不能な事態によりロゼの計画は頓挫しかけた。列車を奪い、罪人を救出する事……それは魔物の襲撃によりガルガンチュアとの合流予定ポイントが大幅にずれた事により一度は失敗しかけたのである。

ガルガンチュアからの襲撃に乘じ、ロゼが列車をのつとるという作戦は失敗に終わった。が、結果的にホクトという予想外の戦力の参戦により作戦は成功と呼べる形に落ち着いたのである。

リフルは優しく微笑み、ロゼの肩を叩いた。ロゼは鬱陶しそうにリフルの手を払いのけ、ガルガンチュアへと歩いていく。その足取りは先ほどまでの緊張した様子とは打って変わって軽快であった。ロゼ本人も自覚している事だ。まだまだロゼは一人前には程遠い、団長と呼ばれるには経験が足りない青二才だ。だからこそ、リフルの支えが必要なのだ。そしてだからこそリフルの姿を見てロゼの緊張は解けたのである。

団長の後を追いつ、リフルは歩いていく。背の高いリフルと小柄なロゼが並ぶと姉弟のように見えなくもない。リフルは背後を振り返り、真剣な表情で目を細めた。

「魔物の襲撃、ですね」

「……ああ」

「本当に良くご無事で」

「“魔劍^{シン}”使いが乗ってたんだよ。そいつが魔物を倒したんだ」

「……魔劍、ですか？」

「記憶喪失だとか言ってるけど、帝国のスパイかもしれない。せいぜい丁重に取り調べておけよ」

「……判りました。ロゼ、貴方は休んでおいってください。貴方は我々“砂の海豚”にとってかけがえのない存在なのですから」

ガルガンチュアの中へ消えていくロゼを見送り、リフルは静かに列車全体を見渡した。酷い損害である。まともにここまで走ってこられたのが不思議なほどに。

安物とはいえ、一応は高速移動をする頑丈な列車である。並の魔物ならば、追いつく事も壊す事も難しいだろう。ならば答えは見えている。同時に疑問も浮かび上がるが。

「……魔劍使い、か」

小さく呟きリフルはガルガンチュアへと姿を消した。砂の海の上、救助された罪人たちが涙を流しながら互いの無事を喜び合っている……そんな景色を、目の焼付けながら。

邂逅、リターン(2)

“現実”と“非現実”との境界線は何処にある？

目の前で繰り広げられる光景の中、私はただ尻餅をついて啞然とする事しか出来なかった。いざという時、私は酷く無力だった。だがそれも致し方のない事だと思う。だって、そうだろう？

私の前に立ちふさがったのは白い装束の何者か。その人物は白い仮面で顔を覆い、その手にした剣を輝かせている。だがそれは私に向けられているものではない。むしろそれは私を傷つけるのではなく、守る為に意味を成そうとしている。

彼の目の前には一人の男の姿があった。対照的な黒い装束に黒い仮面……。どここのファンタジーだ？ 幻想にも程があるだろう。そんな格好 常識的に考えて在り得ない。

二人は剣を持っていた。所謂西洋剣である。あの、ゲームとかでよく見る、両刃の。二人は刃と刃を押し付け合い、ぎりぎりとそれを震わせている。いや、まて。そんなことよりももっと気になる事がある。今こいつ 何て言った？

「逃げる、昂……！」

「あ……？ えっ？」

白い影が動いた。黒い影を押し返し、剣を揮う。二つのシルエツトは何度か交差し、刃を打ち鳴らす。白い影は私の方へと一瞬振り返り、その視線を捕らえる事が出来た。瞳の中に移りこむ自分の姿が何故かハッキリと見て取れて。私ははつとする。脳裏を過ぎる様々な景色。声。

在り得ない。あるはずがない。けれどもそう思ってしまう。ビルの屋上、私は立ち尽くしていた。最悪の想い出が蘇る。落ちていく

あの人の姿　落下と同時に悲鳴があがり、世界が変わってしまうような音が聞こえた。

立ち上がり、追いかける。黒白の影は何度も刃を交えながら移動していく。一息の跳躍で民家の屋根の上に飛び移り、そのまま走り抜けていく。気づけば私は走り出し、それを追いかけていた。

足がもつれ、転びそうになる。ただ上だけを見て走り続けた。月の綺麗な、静かな夜の事だった。何故こうなった？　何が原因で？　思考は時を遡る。何度でも、何度でも。

非日常の足音が聞こえる。現実が壊れていく。私の世界が侵されて行く。それは恐らく、たったの七時間の間に起きた幻想。意識を遡り、原因を究明する。辿り着いたのは昼過ぎの大学、友人と共に見た一人の女だった。

「……………」

思わず欠伸が出そうになるお昼時。私は大学には行かずに家の掃除を手伝っていた。

正直、先ほどまで寝ていた所為でとても眠かった。自分で言うのもあれだが、私はシャキッと目覚めた事が一度としてない。起きてから二、三時間はぼーっとしているのだ。まあ別に困らないからいいのだけれども。

庭先を竹箒で掃き掃除している奥さんと、それを手伝う自分……。これも別段珍しくない普段の光景だ。暇な時は家の手伝いをする。それくらいしか暇を潰す方法もないし、それに夫妻には毎日世話になっているのだから。

「ふうつ　大体お掃除終わったかな？……？　昂ちゃん、お手伝いご苦労様」

そう言っ て額の汗を拭いながら彼女が私に手渡したのは小銭だった。所謂お小遣いというヤツであるが……別にこんなものをもらう為に手伝っているわけではないのだが。

彼女は私が手伝いをする と必ずお小遣いを渡したがるのだ。理由はなんだか良く判らないが……。兎に角こんなものは受け取れないのでいつもどおり突っ返す。するといつもどおり、彼女は私の頭を撫でて微笑んだ。

「えらい、えらい」

「うう……」

「ううん、昂ちゃんは可愛いわねえ……。ずっとなでなでしていたくらいよ」

「かつ、勘弁してください……！」

自分でも顔が真っ赤になっているのがわかる……。慌てて退くと彼女は“恥ずかしがることなんかないのに”とか言いながら笑っている。いや、恥ずかしいに決まっているだろう。十九歳にもなって頭なでなでは流石に恥ずかしいって。そうだろう。

「師匠はまだ寝てるんですか？」

苦し紛れに話題を変更する。夫のこととなれば彼女も饒舌になるし、思考がそちらに傾く事を私は知っているのだ。まあその結果、師匠が大変な事になる可能性もあるのだが……許してください、弟子の為です。

「あの人つたら、半ばNEET状態だから。困っちゃうわ、もう」

「……………。NEET、ですか」

まああながちはずれではない気もする。一体どうやってこの家は生計を立てているのかが本当に謎である。二年近くこの家でお世話になっているのだが、あの師匠がまともに働いている所を見たことは今の所一度もない。大学にいつている間に働いている可能性もあるが……。

「でも、昴ちゃんがいてくれると本当に楽しいわ。娘みたいで」

「むす……っ!？ え、貴方たちそんなに歳いつてないでしょう…

…」

「ふふふ、これでも十五になる娘がいるのよ。今は遠くで暮らしてるけどね」

マジで？ と思わず口走りそうになって言葉を慌てて引つ込めた。いやいや、十五歳の娘って……。ん？ この人何歳なんだ？ 二十代前半くらいかと思っていたのだけれど……。

まあ、彼女たちの事情については余り口出ししない主義だ。そもそも娘なんて一度も見えていない。つまり二年は彼女たちも会っていないということなのだろう。どんな娘だかは知らないが、留学でもしているのだろうか。奥さんは外国人みたいだし。

そんな事を考えつつ、奥さんの旦那に対する愚痴を一頻り聞いた頃だった。滅多に鳴らない携帯電話が鳴り、メールの着信を告げた。

「あら、お友達かしら?」

「……………どうでしょうね」

携帯電話を取り出し内容を確認する。それから少しの間考え込み、私は竹箒を片付けて奥さんに告げた。

「ちよつと大学に行つて来ます」

「今日はお休みじゃなかったの？」

「の、はずだったんですが……………呼ばれてしまったので」

「お昼ご飯はどうするの？」

「途中で何か食べていきます」

本当の母親より母親らしい言葉を投げかけてくる奥さんの優しい気持ちを感じる。我が家には会話なんてなかったし、私は両親には嫌われているのでこういう会話は久しく経験していない。だからここにいと居心地がいいのかもしれない。本当の家族のように感じることが出来るから……………。

部屋に一度戻り、上着を羽織つて外に出る。駅までは徒歩で十分くらいかかるが、まあ別段気にはしない。この田舎町を歩くのが私はそれなりに気に入っているのだから。

駅に到着、電車に乗り込む……………。それは日々のルーチンワークであり、特に意識せずとも行う事が出来る。その傍ら私は送られてきたメールの文面を特に興味もなく眺めていた。

“ すごく美人の先生が学校に来ている ” 。超をつけてもいい。下らない内容だった。故にそれに興味があつたのではなく、ただどこかに出かけたかっただけなのかもしれない。

友達と呼べる人間は私の周りにも居るし、それを維持するには最

低限の付き合いが必要になる。その為には大学にこうして休みの日
だろうが赴かねばならないし、そうしなければ私は大学の中で孤立
してしまうだろう。

孤立してしまう事を恐れているわけではない。元々こっちに来る
まではどこに居たって孤立していたのだから。友達が居た方がいい
と思うのは、あの奥さんに心配をかけなくて済むからだ。彼女は私
がいつも家の中にいると、時々心配そうにこっちを見ている。私の
事情を聞いているのかもしれない。だから、私は正常である素振り
をする。

本当の家族のようだと思う反面、そう思うからこそ心配をかけた
くないと余所余所しく思考する自分がいる。それは矛盾だ。だが、
それでいいと思っている。友達を失う事よりも、今の環境を失う事
よりも、奥さんや師匠に心配をかけるほうが私はよほど嫌なのだか
ら。

邂逅、リターン（2）

“砂の海豚”の移動拠点である、潜水艦ガルガンチュア。そ
の牢獄の中でホクトは肩を落としていた。

「なんでいきなり投獄なんスか……パネェっす」

見張りはいるが、先ほどから声をかけても何の反応も示さない。
魔剣と呼ばれていた力を使えば脱走も簡単なのだろうが、それはそ
れで問題が大きくなりすぎる。

ホクトの脳内にある思考は、如何に面倒くさくなくこの問題を解

決出来るか　ただそれだけであつた。結局力づくというのが一番
楽な気がしないでもないが、この砂上ではガルガンチュアから逃げ
出したところで行くアテもないのだ。

仕方がなく腕を組み、溜息を漏らす。牢獄の中はお世辞にも綺麗
とは言えなかった。が、あまり使われていないのかそう汚れている
わけでもない。鉄の壁が露出した四角い箱の中、ベッドとトイレだ
けが設置されている。ホクトはベッドの上に座り込み、壁に背を預
けた。

暫くぼんやりと時を過ごしていたのだが、ふと振り返る、薄そう
な壁の向こうから声が聞こえてきたのである。それも暢気な鼻歌……
。ホクトは背を預けたまま壁を拳で何度かノックする。

「よお、楽しそうだな」

『うん〜?』

声は壁から、というよりは隣の牢獄から聞こえてきた。狭い空間
である所為か、やけに二人の声は反響している。

『うん、楽しいよ〜。えっとね?　でも、君はどこにいるの〜?』

暢気に間延びした声だった。しかし、愛らしい少女の声である。

それだけでホクトは何故かテンションが上がり、ニヤリと口元に笑
みを浮かべた。

「俺は記憶喪失の魔剣使い……ホクト様だ」

『……………?　シンの使い手なの?』

「ああ。お前、どうしてここにブチこまれてるんだ?」

『……………。うさね、何も悪い事してないの……………なんで捕まったのかわかんないの』

ホクトは一瞬、眉を潜めた。“うさ”……………？それが一人称なのだろうか。というか何も悪い事をしていないのにつかまったとなると、自分と境遇は同じという事になる。

「俺も何もしてないのに捕まったんだよ。怪しいと言われてな……………」

『そうだったの？ 可愛いそうだね……………。可愛いそうだよ』

「ああ、可愛いそうだ……………」

『うさもね、可愛いそうなの……………。ちょっとね、おなががすいてね……………この船にもぐりこんでね？ ご飯を分けてもらってただけなんだよ』

「……………。それは泥棒じゃねえの？」

ホクトの指摘の直後、壁が揺れた。ガツンという音が響き渡り、向こうで誰かが暴れているのが判る。どうやら驚いて振り返り、壁に頭をぶついたらしい。

「だ、大丈夫か……………？ 今結構いい音がしたぞ」

『う、うさはね！ 泥棒さんじゃね！ ないのですよっ！！ はむはむ……………』

「何か食ってんじゃねえかよ!?　つか、ここは飯出るのか……?」
『出るよ』　これがねえ、結構おいしいの〜っ!　はむはむっ
「………………。まあなんでもいいけどな」

溜息を漏らし、硬いベッドの上に横になる。硬いというか、最早鉄の箱そのものようである。寝心地は絶対によくなかったが、ホクトは横になったまま時間を過ごす事にした。

ガルガンチュアはもう発進したのだろうか。重苦しく響く駆動機関の音だけが船内に響き渡っている……。暫くの間ホクトは黙り込んでいたが、その間隣の部屋からも声は聞こえてこなかった。

「なあ、おい」

声をかけてみるが返事がない。仕方がないので壁を軽く叩いてみたが、やはり返事はない。そして返答の代わりに、

『むにゃむにゃ……。もう、おなかいっぱいだよ……。そんなに、食べられないよう……。えへへえ』

という、幸せそうな寝言が聞こえてきた。

「寝てるのかよ!　そしてなんだそのお約束の塊みたいな寝言はっ!?!」

飛び起きて一人でツツコむホクト。しかし直ぐに空しさが押し寄せてくる。溜息を漏らし、再びベッドの上に座り込む。時間が経過するのがとても遅く感じる……。

もしかしたらもう何時間も経過しているのかもしれないし、まだ

数分しか経っていないのかもしれない。隣人が眠ってしまったので会話も出来ず、暇をもてあますにも程があつた。仕方がなくホクトは自分の身体を調べる事にした。

彼の記憶の連続性は罪人の輸送列車の時点で途切れ、本来続いているはずの記憶のレールは過去へは延びていない。彼は自分が何故あの場に居たのか、あんな格好をしていたのか、何一つ判らないのである。

記憶喪失である事を特に不便だとは思って居なかつたが、暇があるのだから調べてみるに限る。ホクトは自分の服装、装備などを立ち上がって確認する事にした。

砂漠で暮らしていたのか、非常に軽装である。鎧の類は一切見られず、ただ皮の防具が要所にだけ施されているだけの服装……。魔剣使いというものが戦士であるというのならば、些か頼りなくも見える。

腕には巨大な刺青……。魔剣を出し入れするのに必要な物らしいことはわかるが、それ以外は一切不明。鏡がないので自分の顔までは確認出来ないが、特に何か問題がある顔とは思えない。

「むしろイケメンに違いない……」

牢に入れられる際、腰のベルトに下げていたナイフを奪われたが、それを含めればホクトの所持品は全てとなるだろう。ベッドの上に諦めて座り込み、そこでふと気づく。そういえば服の下に何か違和感がある、と。

首から提げて服の中に入っていたのはネックレスだった。その先端部にはなにやら細長い円形の物体がついている。手に取ってみると、それはいくつかの種類の絵柄のプレートがはめ込まれたパズルであつた。

「……………？ 小型のパズル、だよな」

筒のようなパーツを回転させ、同じ絵柄を縦にそろえる……恐らくそんな遊びに使うのだろう。ために少し動かしてみたものの、それが纏まる気配はなく直ぐに飽きてしまった。とりあえず服の中に戻し、溜息を漏らす。

「ヒントはこれだけかよ……。駄目だ、お手上げだな」

諦めて頷く。どうせ明確な手がかりが出現するとは思って居なかったのだ、落胆はない。ベッドの上に寝転がり、鉄の天井を見上げながらホクトは静かに目を閉じた。

しかし、まどろみの中に落ちて行きそうな意識は扉が開く音で妨げられる。立っていたのは一人の女剣士。ホクトは身体を起し、立ち上がる。

「やっと出してもらえるのか？」

「……ああ。直に港に到着する……。その前に貴様の処分を決めておかねばならない」

「処分ねえ……。だから、俺は何にもしてないだろうに」

「魔剣はそれだけ危険なのだ。お前も使い手ならば理解しているはずだ」

後頭部を掻きながらホクトは小さく息をつく。魔物を両断するだけの力を持つ魔剣……確かに凄まじい力を持つのだろう。だがその所有者としての自覚はホクトにはない。

そもそも、自分が何故ここに居るのかそれさえもわからないのだ。魔剣を悪用するとかその責任とかそんな事は正直な所思考の範囲に

はない。しかし、納得は行かずとも従うのが良作なのだ。何せ何もわからないのだから。

目の前の女剣士　リフルに従えばそれでとりあえず問題は無い。腕を組み、少しの間思案する。ここで暴れたところで何のメリットもないだろう。暴れるにしても、最低限の情報を入手してからの方が得策。

ふと、隣の牢獄へ視線を向けるが中に誰が居るのかは確認出来なかった。リフルに手錠をはめられ、ホクトは大人しく歩き始めた。金網の張られた床の上を軋ませながら歩き、前をホクト、背後をリフルが歩く。

「この船大丈夫か？　見てくれは頑丈そうだが、中身ボロボロじゃねえか」

「貴様は黙って歩けばいい。今は船ではなく己の身の心配をする事だな」

「つれないねえ……」

剣の柄で背中を叩き、急かすリフル。二人がそうして辿り着いたのは砂の海豚の団長、ロゼの待つ部屋であった。

壁には学術書の詰まった本棚……。奥まった所には古ぼけた執務机がある。リフルは中にホクトを押し込むと、自分も中に入り扉を背にするようにして剣に手を伸ばした。

「よおロゼ……。俺を自由にする気になったのか？」

「それはない。これは尋問だよ、ホクト……。君は一体何者なんだ？　その魔剣は？」

「何度も言わせるなよ、記憶喪失なんだ。さつきも少し自分で思い出そうとしてみたが何も判らん」

「……………まあ、その辺も含めてこいつを用意しておいた」

それは水晶球に手形を掘り込んだような奇妙な道具だった。古ぼけたケースの中から取り出したそれを机の上に置き、ロゼは椅子の上にもふんぞり返る。

「それに手を載せて過去の事を思い出すんだ」

「ん？ 嘘発見器みたいなもんか？」

「厳密には記憶を遡る魔道具だよ。それであんたが記憶喪失なのかどうか、そして記憶喪失なのだとしてもあんたが何者なのかが思いだせるはずだ」

なるほど、とホクトは頷いた。全くこれを拒否する意味はない。正に願ったり叶ったりなのだ。己の手を水晶球の上に翳し、何の躊躇もなく乗せる。そうして目を瞑り、己の存在に対して尋問を開始した。

何者で、何故あの場に居て。何故こんな事になっているのか…………。眉間に皺を寄せて考え込む。しかし、ホクトの脳裏には何の記憶も蘇る気配はなかった。

「……………？ おい、何も思い出さないぞ」

「何……………？ さつき僕が試した時は動いたはず……………」

「壊れてんじゃないかねえのか？」

「いや、そんなはずはない……だが触れている限り術式からは逃れられないはずだ。お、おかしいな……？」

ロゼは立ち上がり、小首をかしげながら水晶球を眺めている。手に取り、あらゆる方向から見つめてみる。しかし特に以上は見られないし、水晶球に刻まれた術式の紋章にも異常はなかった。

その後も何度かホクトに道具を使わせたりロゼ本人やリフルに試させたのだが、結果としてホクトだけは魔道具の効果が現れなかった。リフルとロゼは互いに顔を合わせ、首を傾げる。

「どうなってる……？ ホクトには魔道具の効果を受け付けない術式でも刻んであるのか？」

「それらしい装備は見当たりませんが……」

「……アテになんねーだろ、そんなわけわかんねえ道具」

「何いつ！？ うちの財宝に向かってなんて口の利き方だ！ 撤回しろ馬鹿！」

「はいはい、すいませ〜ん」

「こ、この男……ッ！ー！」

「落ち着いてくださいロゼ」

ホクトに殴りかかろうとするロゼを羽交い絞めにし、リフルが呟く。ホクトは耳の中に小指を突っ込んで明後日の方向へと視線を向けていた。

冷静さを取り戻したロゼはリフルを振り払い、眼鏡を中指で押し上げる。深く溜息をついて椅子の上に座り込み、ホクトをにらみつけた。

「あんたが普通じゃないって事だけは判ったよ。魔道具が効かないとなると、いよいよ帝国のスパイの可能性がある」

「おいおい、なんでだよ？ つーか帝国ってなんだ」

「何！？ 帝国の事も忘れたのか！？」

「だーかーらー！ なんもわかんねえつつってんだろが！ 記憶喪失なめんなよコラア！」

「何でそんなに生意気なのかわからないけど……まあいいさ。だつたらーから説明してやる。どうやら、お前の記憶は魔道具か何かで嚴重に封印されているようだからな。そうでなければおかしい」

「その魔道具つてのもよくわかんねーんだが」

「だから説明すると言ってるだろ！ さて、何から説明したものか……。まず、結論から説明しておくか」

ロゼは腕を組み、思案しつつ頷いた。そうしてロゼに視線を向け、眼鏡を輝かせて拳を強く握り締める。

「我々ギルド、“砂の海豚”の目的は一つ。驕る帝国から下層住民の利権を取り戻し、この世界の秩序を正常化する事だ」

何を言っているのかは全く判らなかつた。だが、こうしてホクト

は知る事になる。この世界に起きている事。この世界そのものの事。そして 魔剣とは何なのかを。

ロゼは椅子に座り、ホクトも座るように促された。二人は机を挟んで向かい合い、見詰め合う。語るロゼの口調は真剣そのものであり、ホクトはそれを真面目に聞かざるを得なかった……。

邂逅、リターン(3)

闇に染まり始めた世界の中を走る走る。理由は単純明快。危険を察知し、そこから逃れる為に……。

何故私は走っているのだろうか？ どこへ向かっているのだろうか？ どこに向かえばいいのだろうか……。逃れたいと願っているのか、それとも非現実が自分を捕らえに来てくれる事を待っていたのだろうか。どちらにせよ息が上がる。

肩で呼吸を繰り返し、白い息を吐き出して仰ぎ見る。何故、ここに来てしまったのだろうか？ 都市開発の夢の跡、高層ビルの中にまぎれる暗闇の城。あの日以来、私がずっと避けてきた場所。

今や誰にも使われていない曰く着きのビルの中へと飛び込んでいく。エレベータは停止している。階段を上がるしかない。ずらりと上へと伸びる螺旋階段。モダンな雰囲気その空へと私は駆け上がっていく。

早く早く、急がなければ。何に急いでいるの？ 追いかけていているから？ それとも追いかけているから？ 私に逃げろと言ったあの人の声を覚えている。あの人の後姿を覚えている。もしもこれが私の妄想でないのなら……彼は。あの人は。足が痺れ、突き刺すような寒さは体温を奪い痛みにも似た感触で全身の神経を侵食する。屋上へと続く重苦しい扉を開け放ち、風に迎えられて私は記憶の迷宮へと辿り着いていた。

そこはあの日、大切な人を失った場所。そして私が世界の終焉を本気で祈った場所。こんな世界なくなってしまうばいいのと思いつた結果失ったのは彼だった。振り返る。周囲には誰も居ない。何度でもきよるきよると見回す。あの人の影を探して。

「逃げろって……！ どこに逃げればいいっ!？」

ここまで走ってきて漸く気づく。私はとんでもない愚か者だ。屋上に走りこめばそこは袋小路、当然の行き当たり。逃げ場はなく、退路は一つ……。

額の汗もそのままに携帯電話を取り出した。時刻はもう直ぐ十八時。なんでこんな事になっているのか。まだまだ人通りも多いこんな場所で。街のど真ん中で。何から逃げて何を恐れる。

思い出す。記憶の糸を手繰り寄せる。剣と剣をぶつけ合う二つの影。周囲の訝しげな視線も、世界の常識も、何一つ気にもかけず私の目の前で起こった出来事……。ただ、大学にいつて。ただ、それだけのはずだったのに……。

風が吹き、私の髪を靡かせていく。屋上から身を乗り出して見下ろすのはビルからビルへと飛び移りながら戦いを続ける二つの影である。気づいていない人もいるし、気づいている人もいる。非日常が現実の中に浸透してくる。せめて、もっと夜になってからやればいいのに。

二人の剣士は壁を蹴り、空中で何度も刃を交える……。その攻防は素人目には完全な直角であるように見えた。身を切るような冷たい風……。祈るように私は携帯電話を握り締めた。

と、その時である。身体に異常が起きた。咄嗟に私は振り返った。全身に重力の力が付加される。いや、元々それはあったものだ。だが今はそれを強く感じる。何故？

「あ……？」

背後、誰かが立っていた。私の方に、手を伸ばしていた。いや、違う。突き落とされたんだ。あの時と同じように。私がそうしたように。誰かが私を　突き落とした。

振り返りつつ、落ちていく。空が、一気に遠のいていく。死ぬ。空に投げ出された薄気味悪い感触と共に血の気が引いていく。

絶叫はなかった。叫び出したい程怖かったけれど。それは決して声にはならなかった。

私は確かに見たのだ。その、私を突き落とした人物の顔を。暗闇の中、街の灯りに下から照らされ、彼女は無感情に私を見下ろしていた。長い黒髪が風に揺れ、スーツ姿の女は無言で私に死を押し付ける。

そうだ。大学の。大学で、会った。見たんだ。美人教師。友達に呼ばれて、誘われて。確かあの時何かを言われた。何だった？ 思い出せ。思い出せよ。思い出せって。！！

死ぬのか。あの人にやつと会えたのに。やつとここまで辿り着いたのに……。いや、違うのか？ 呼ばれているような気がしたのだ。この場所に来なければならぬような気がしたのだ。それは、私の本能が死を望んでいたという事に他ならない。

私の魂は何年経ってもここに括られたままなのだ。そう、だから堕ちていくのは必然。予め決まっていたこと。そう考えれば何も不思議なことはない。

堕ちていく。堕ちていく。堕ちていく。突き落とされて死ぬ。何も判らないまま死ぬ。強制的に押し付けられた死、そのなんと後味の悪い事か。

嫌だ、死にたくない。命は現金だ。自意識は死を恐れている。私はきつく目を瞑った。堕ちていく。体がアスファルトに砕かれるまで何秒もかからない。だとすればこの永遠にも等しい思考の時間は？

「嫌だ……！ 嫌だよっ！ 死にたくないよ………！ 兄さん
っ！！！！！」

叫んだ。誰にも届かない。でも、叫ばずにはいらなかった。時が止まるような気配がした。身体はアスファルトに叩きつけられる瞬間その硬い大地をすり抜け、更に堕ちていく。どこまでもど

こまでも。周囲に広がっていたのは完全なる闇だった。私は落ちていく。何処までも、落ちていく。

眼下、何かが見えた気がした。誰かの声が聞こえた気がした。私は思わずその声の主へと手を伸ばす。必至に掴もうと何度ももがいた。そうして手繰り寄せた光の向こう　私は、確かに彼女の手を取っていた。

「……………眼が覚めたか？」

目の前には綺麗な真紅の瞳があった。燃えるように紅い髪……時代錯誤の和装。ああ、なんだ。全部夢だったんだ。ふと私は安堵する。握り締めていたのは、彼女の白くて柔らかい手だった。綺麗な手だ、と呆然と考えた。待て。そうじゃないだろう。

周囲を眺める。どこだ、ここは？　見覚えがない。何故か、布団の中に寝かされている。全身汗びっしょりだ。何故？　何が？　どうなって？

「ようこそ、“ロクエンティア”へ。歓迎するぞ、救世主よ」

だめだ、思考が上手くまとまらない。過去の事も今の事も理解が追いつかない。顔に手を当てると、眼鏡がなくなっていた。きつく眼を瞑り、思い出そうと努力する。私は何故　ここにいるんだ？

邂逅、リターン(3)

「ごしごと、モップを片手にホクトはガルガンチュアの船内を掃除していた。掃除が開始してから既に数時間……額に汗して働く爽やかさに男は微笑を浮かべていた。

「な、わけねーだろ」

ガルガンチュアの階段を上り、船体の上に身を乗り出す。作られた夜の闇の中に浮かぶ暗闇に居城……。砂の海の上に聳え立つ人工島、“カンタイル”は微かな灯りをちらほらと灯し、闇の中にその全体像をぼんやりと浮かべている。

胸ポケットに突っ込んだ湿気た煙草の包み紙に手を伸ばし、ホクトは指先を弾いて小気味いい音と共に手の中に小さな炎を召喚する。魔術と呼ばれる力に限りなく近い、しかしそれを超越した“魔剣”の恩恵……。両腕にびつしりと刻み込まれた漆黒の炎の術式を使いこなすのは、既にホクトにとって何の問題にもならなくなっていた。乾いた砂漠の冷たい夜風の中に煙を吐き出し、ホクトはモップを片手に世界を見下ろす。世界と呼べる全ては限りなく広がり、砂と風と黒だけが広がっている。寂しくあり、しかしそれを美しいとも感じる。恐ろしい物は得てして奇妙な魅力を帯びる。先入観に囚われずに物を見据えればその眼に映る物は全て美しい。

強めの風に神を流せばロマンティックな気分になる事が出来る。ここで音楽でも流れて、酒があつてついでに美女でも居てくれれば最高ののに。言葉に出さず、口元に失笑を浮かべる。そんな彼の願いは一つだけ叶えられた。

背後には黒い装束を纏った一人の剣士の姿があった。額から頬にかけて裂かれた大きな傷跡を隠すように顔を眼帯で半分覆っている女剣士、リフルは男の背後に立ち言葉もなくその背中を見据えている。片手は常に、腰から下げた剣から離れる事はない。

「……………なんだよ、掃除サボったくらいで後ろから叩ッ斬るのか

？ 物騒だな、おい」

「そうする必要性があるのならばそうする。だが、今はそうしない」

「今は、ね……。可愛げねえなあ、リフル。もうちょい笑ってみせろよ、美人なんだからよ」

「必要の無い事だ。あまり軽口を叩くなよ魔剣士……。お前のさえずりは癪に障る」

リフルの言葉は抑揚のない、限りなく冷淡な声だった。表情にも一切の変化はなく、ただ唇だけが言葉を刻んでいるかのように見える。それはとても客観的には奇妙であった。

剣士の見せる表情、吐き出す言葉は守るべき主君の傍に居る時とはまるで異なっている。“砂の海豚”の団長にして“少年”、ロゼ……。彼の決定に従うことこそ彼女の使命であり、ホクトの処分に關しても同じ事である。

結論として、ホクトはこの砂の海豚で暫く行動を共にすることになった。立場としては、外部から参戦した“傭兵”である。長話が終わった後に契約の書類に血印を求められ、ホクトはそれに応じた。それは魔術的な強制力を持った魔道の書のひとつである。その契約書がある限り、ロゼの命を奪うことは出来ず、契約からそれた行動を取る事も出来ない。

その魔道的束縛によってようやくホクトは身の潔白を一応証明され、同時に雇われの剣士となった。巨大な魔剣を扱い、魔物を駆逐する程の力を持つ剣士。戦闘能力が高い人間は何人居ても多すぎるという事はないのだ。特に、世界に反旗を翻すようなこの組織にとっては。

「私は貴様の監視を命じられている。ロゼはああ言っていたが、私

は貴様を信用していない。少しでも組織に不利益な行動を取ったその時は――

「俺を殺すのか、人形？」

まるでからかうような口調で笑みを浮かべるホクト。次の瞬間二人は同時に腕に刻まれた紋章を輝かせる。瞬きと同義の時を超え、鮮やかな彩と形を構築した剣が二人の手の中に納まり、互いのシルエツトへと突きつけられる。

魔剣士二人。それは、リフルがホクトの監視を命じられた理由。リフル以外には誰にもホクトを阻止する事は出来ない。“魔剣は魔剣でなければ拮抗出来ない” 当然の理であった。

組織の中でたった一人だけの魔剣所有者であるリフルがホクトを倒す可能性を持つ唯一の存在なのである。ロゼはリフルの実力をよく理解している。彼女はたった一人でこの組織の切り込み隊長を務め、組織の守護者として何年も戦ってきた歴戦の魔剣使いなのである。リフルは強い。魔剣使い同士の戦いでもロゼはリフルが敗北する所を見たことがなかった。

ロゼから絶対の信頼を得ているリフルであるからこそ、ホクトの監視が務まるのである。ホクトの能力は未知数であったが、リフルが手にした細長く美しい装飾の剣はきつとホクトの無骨な刃を凌駕するだろう。だが、リフル本人は不安を抱えていた。ホクトの魔剣は得体が知れないのだ。展開速度も素早く、身のこなしも賞賛に値する。一体何者で、どんな魂胆があるのか……それは絶対に彼女が突き止めねばならない謎の一つだった。

「おいおいおつかねえなあ……？ 女の子とイチャイチャできるのは大歓迎だけどよ、ベッドの上でも剣突きつけあうのは御免だぜ？」

どちらともなく、剣を消失させる。もとよりお互いに斬りあうつ

もりはないのだ。ホクトにそんなことをするメリットは皆無だったし、リフルはロゼの命令に逆らう事は出来ない。結局なんともいえない空気の気まずさだけが残り、ホクトは紫煙を吐き出して空を見上げる。

一瞬だけ見たあの黒い剣。巨大で、無骨で、邪悪で、血を喰らい、肉を喰らい、光を飲み干すような歪な剣。希少な存在である魔剣の中で、それは更に一線を画すかのような独特の存在感を放っていた。

「……貴様、その剣の名は？」

「は？ 剣の名？」

「“継承名”だ。それほどの術式、貴様が単独で生み出したものではないのだろうか？」

「いや、ぜんぜんわからん。俺は記憶喪失なんだ、教える時は手取り足取り、教えてくれないとな」

ホクトはゆつくりとリフルに歩み寄り、肩に腕を回す。顔と顔とが近づき、互いの吐息を感じるほどの距離になった瞬間、リフルは視線を逸らし肩にまわされたホクトの腕をひねり上げた。

「……寄るな、阿呆」

「いでででっ！？ つとに可愛げねえなあっ！！ ちくしょー、この組織女の子が少なすぎだぜ……」

目尻に涙を浮かべているのは腕の痛みの所為だろうか？ それとも組織に女の子が居ない発言の所為なのか……。リフルにとっては

どうでもいいことだ。思考は意味を持たない。忠義は命令を意味し、それを遂行することに意義があり。ならばそれを正さねばならない。

「いいから黙って働け。働かざる者食うべからず、だ」

「おりや傭兵よ？ 振り回すのはモップじゃなくて剣なの」

「いいから黙って働け。働かざる者食うべからず、だ」

「……大事なことから二回言ったんですね、わかります」

ホクトは冷や汗を流し、モップを片手にすごすごと階段を降り船内へと姿を消した。風の中、リフルは腕を組んだままそれを見送る。一際強く吹いた風はリフルの長い髪を靡かせていく。

“この世界”は。 “ロクエンティア”は。 決して公平な世界などではない。世界には差別と区別と分別が蔓延し、人々はありとあらゆる意味で別けられ、その生まれ、人種、素性に依存する。

リフルは思い返していた。ホクトは本当に記憶喪失なのだろうか？ だとしたら 彼は理解出来ただろうか？ 複雑怪奇という言葉葉がびつたりと当て嵌まる、この世界の歪みに歪んだ熱病にも似た構造を……。

「この世界は、一つの巨大な縦社会なんだ。文字通りのな」

執務机を口ゼが指先で叩き、忌々しげに呟いた。ホクトはそれを座ったまま小首をかしげながら聞いていた。話はとても長くなる。とてもとても、長い話だった。

ロクエンティアと呼ばれるこの世界は、縦に六つの層を成し、世界と呼ばれる構造が構築されているのだ。それぞれが“^{プレート}界層”と呼

ばれる国家、あるいは土地、或いは群集　定義はない。あくまでも界層と呼ばれるもので構築され、それを縦に六つ重ねるようにして世界は在る。

誰がそうしたのは判らない。誰かが気づいた時にはそう在り、そう在るが故に人々はそう生きるしかなかった。かねての時代、世界には無限に広がる大地があった。この星の上に、大地は確かにあったのだ。

「だが、今はないんだ。どうしてかはわからない。ロクエンティアは……世界は。虚無の海の上に浮かぶ最後の地なんだ」

「……浮いてんのか？」

「そ、浮いてんのさ。縦に一本伸びたシャフトと呼ばれる巨大な竪穴の周囲にプレートがくつついて、それが六つ縦に存在してる。それぞれが国であり、大地であり、そのプレートに住む人間によって人種、風習、所属国家が違う。勿論これは一定じゃない。定義がないんだ、世界に」

人種も。人権も。定められては居ない。地続きではないから。上と下に隣人がある。隣り合わせの大地はシャフトを中心に顕現された円の世界……。歩き出せばやがて旅立った土地に辿り着く、そんな世界。

「ただ、界層は一つ一つが馬鹿げた巨大さで、一体どれほどの大きさがあるのかもまだ判らない事が多い。この世界で人類の歴史が始まって何百年も経つけど、その世界の全様を知る人間はまだ何処にもいないんだ」

しかし、それでも世界が存在する為にはルールが必要となる。か

つて世界はその無秩序さから全ての界層を巻き込む巨大な大戦に飲み込まれていた。その戦がいつから続いていたのか、誰が始めたのか……そもそもその戦より前には大地があったのか、それも誰にもわからない。ただ人は滅びかけ、その時に強制的なルールを生み出し人々を縛る事により滅びを免れたのである。

秩序とは、混沌とは正反対に位置する事柄である。人々は混沌とした状態から強制された秩序の中へと落ちていった。時の流れ、時代の動きがそうであったのだと言えばそれまでだ。だが、それだけで世界は終わらない。

「何故なら世界は続く。人々はもう大戦の事なんちゃ覚えていないのさ。残ったのは強力な上下社会と支配体制……。下の者は上の者に文句一つ言えない社会だ。僕たちはその世界のルールをぶち壊す為に戦っている」

「革命家気取りか？」

「今は犯罪者でも後世で英雄と語られればいいじゃないか」

「成る程ね……。で、具体的には何と戦ってたんだ？」

「“帝国”さ。第三階層の全てを支配する独裁国家、ハロルド帝国……。そこから下のプレート、つまり第四、第五、第六界層は全部帝国の支配下……。そこに生きる人間は秩序という名の支配に繋がれた奴隷なんだ」

ロゼの口調は正に忌々しそうにという表現がぴったりと似合う。歯軋りし、机の上で組んだ指と指をぎゅっときつく絡ませる。ホクトはそんな怒りの様子とは裏腹に飄々と話を聞き流していた。

「で、俺がそのハロルド帝国のスパイじゃないかって疑ってたわけだ」

「帝国には反乱分子を抹殺する為の闇の部隊があるって専らの噂でね。そこに所属しているのは、全員魔剣使い……そういう話だ」

「でも俺はただの記憶喪失ちゃん」

「連中は目的の為なら手段は厭わないんだ。どんな馬鹿げた方法でも、どんな在り得ない状況でも、秩序を抹殺しようとする人間を消しに来る。犯罪者なんだ、疑うのは当然だろ？ 僕は所詮追われる立場だからね」

「……………成る程、ねえ」

ホクトは深く椅子に腰を落とし、溜息を漏らした。“砂の海豚”の状況は理解出来た。帝国云々世界云々の事は正直半分以上聞き流していたが。

そもそもホクトにとっては明日生きる事さえ困難なのだ。記憶というものは生活の全てに関与してくるものである。記憶は人が命を依存させる部位である。眼に見えて切り離されるようなものでもないが、だからこそなくしてしまったら取り戻すのは容易くない。

なんだかんだいいつつ、ロゼの長話の途中でホクトの答えは見えていた。そうして立ち上がり、話が終わった場合にロゼへと歩み寄る。直ぐにリフルが反応し腰から下げたサーベルを突きつけたが、ホクトは意に介さなかった。

「なら、俺をここに置いてくれよ」

「何？」

「あんたらの秘密を知っちゃった。街に降ろしたら言いふらすかも
しれないぜ？」

「貴様……！」

背後、リフルの殺気が強まりホクトは冷や汗を流した。まったく
冗談の通じる気配が無い……。飄々とした性格のホクトと生真面目
なりフル、どうやら相性は最悪らしい。

しかし、ロゼの方はそうでもなかった。ホクトの話聞き、確か
にと納得する部分がある。当然降ろすわけにはいかないのだ。残さ
れている道は必然限られてくる。

「口封じは必要だろ？」

「その通りだね」

「だが俺は死にたくない」

「だからここで働く……僕らの仲間になるって事？」

「ロゼ！」

「リフルは黙っててくれ。団長は僕だ。僕が決める」

ロゼにそう凄まれてしまったのはリフルは何もいえなくなる。歯痒
い気持ちのまま剣を鞘に収め、一步後退。それを視界の端で認
識し、ロゼは改めてホクトをしげしげと眺めた。

「僕らと来れば犯罪者だよ」

「他に行く所がねーんだ、しょうがねえ」

「君には魔剣使いの力がある。それなりに危ない橋も渡って貰うよ」

「危ない橋ねえ……。危ない列車なら経験したぜ？」

「……………成る程、判った。まあどっちにしろ最初から僕はこうするつもりだったしね。君がそういつてくれると手っ取り早くて助かるよ」

頷き、ロゼは予め用意していた魔道具を引っ張り出した。それを机の上に広げ、ホクトに突きつける。笑みと共に、契約の言葉を吐き出しながら。

「おーい、リフル」

はっと、リフルは意識を現在に回帰させた。気づけば風の中に身を投げ出し、立ち尽くしていた。背後、先ほど船内に戻ったはずのホクトが階段を上がり顔をのぞかせている。

「何だ？」

「そんな所でぼーっとしてたら風邪引くぜ。なんだ、恋煩いか？」

「……………私はその手の下らない冗談が好きではない」

「そーですか。ま、しってますけどねー」

「……………ッ」

「そんな睨むなよ。こえーねーちゃんだな……つたく」

横顔に笑みを湛え、ホクトは階段を下りていく。正直、判断には迷っていた。ホクトの様子、記憶喪失にしては随分と余裕の在る態度。高度な思考と鍛錬が要求される魔剣を使いこなす技術……。

胸騒ぎがあった。なにか、とんでもないものを組織の中に引き込んでしまったのではないか？ 冗談を言ったり笑っている彼の姿を見るとその馬鹿げた妄想を一蹴したくもなる。だが、心の中にしこりはのこる。

見極めればいい。ただそれだけのこと。リフルは頷いて歩き出した。何もやることはかわってなどいない。ただ組織の為に。口ゼの為に。出来る事を、命令を、忠実に遂行するだけなのだから。

邂逅、リターン(3) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

* 第一回*

スバル「どうも、初めまして。主人公の昴です……」

ホクト「ちーす。主人公のホクトです」

スバル「主人公は二人です……」

ホクト「だなあ」

スバル「……………。更新速度、異様に遅くなってしまったな」

ホクト「まあ、リアルでゲームばっかしてちゃしょうがねえな」

スバル「今回も、ちょっと変わった小説にしたいと頑張ります……」

ホクト「おう、がんばれがんばれ」

スバル「えと…………。がんばります！」

ホクト「おう！」

スバル「…………。えと、他にいう事はないから……」

ホクト「おう」

スバル「お願いだから、何か喋ってくれ」

召喚、救世主（1）

私の記憶は連続しない。頭の中でそれは途切れ途切れになり、私は私を形成できなくなっていく。

まるで夢から覚め、現実へと強制的に放り出された意識のように。夢の中身はうる覚えになり、全てを正確に把握する事は叶わない。つい先ほどまで、それは間違いなく現実であったはずなのに……。

追われた記憶。見つけた懐かしい人の背中……。私の前で静かに言葉を語った誰かの影。花壇の前の記憶。高層ビルから落ちるシルエット。私の姿がそれに重なる。そう、私はあの時確かに死んだはずだった。

背後から、誰かの手が伸び。私の背中を押し。まるで風に吹かれる木の葉のように。あっけなく私は落ちたのだ。あの、地上へと続く死と同義のアスファルトへと。

次に目覚めた時、私の目の前にあったのは見たこともないような幻想的な景色だった。世界は一瞬で色を変え、形を変え、意味も名前も変えてしまう。窓辺に立ち片手を額に当てる。眼下に見える景色は確かに都市の物だ。しかしそれは私の知る都市とは余りにもかけ離れている。

時代錯誤な和風建築が立ち並び、それが遙か彼方まで続いている。見下ろす景色の広大さから自分のいる場所が非常に高い場所にあることを知る。そこはお城の一室。連なる塔が市街を見下ろし影を作る。空を鳥が過ぎ、風が私の汗ばんだ肌を撫でていった。

「なん……で？」

それが私の第一声だった。それ以外に言うことなんてなかった。動悸が早まる。夢なら覚めてほしいと思う。いや、どこまでが

“どっちが夢” だったのだろうか？

背後、衣擦れの音が聞こえ私はゆっくりと振り返った。そこにはやはり幻でもなんでもなく、私に語りかけてきた女性の姿があった。見た事も無い派手な衣装　十二単、と言っのだろうか？　で身体をすっぽりと覆っている。しかし大きくはだけた肩口や胸元を見ると随分と洒落た印象を受ける。紅の髪を結び、端正な顔つきのその人は扇を片手に口元に笑みを浮かべていた。

「大丈夫か？　うーむ……召喚の手順を間違えたかのう？」

彼女は眉を潜め、そんな言葉を呟いた。その意味を頭の中で必至に反芻してみる。“シヨウカンノテジユンヲマチガエタカノウ”……？　駄目だ、理解が追いつかない。思い悩む私を他所に、彼女はそつと手を差し伸べてきた。その手が私の髪を梳き、思わず息を呑む。

白く抜けるような素肌……とてもきめ細かく、まるで作り物のような手だった。気づけば彼女はすつと身を寄せ、私の目の前でその紅く輝く瞳を瞬かせている。

「……………ふうむ？　お主、名はなんと云う？」

「え…………？」

「名じゃ。名くらい持つておるのらう？」

まあそれは持っているのだが、状況も判らないまま……行き成り自己紹介しろとでもいうのだろうか。しかし他にどうしようもないのもまた事実だった。結局私は完全にこの状況において異物なのだ。言われるがまま為されるがまま……それが楽なのかもしれない。

「私の、名前は……昴……です」

何故か敬語になってしまった。いや、まあそれも当然の事もしれない。彼女はおそらく年上なのだ。それに初対面の相手に馴れ馴れしく話しかけるといいうのも、私の性格的には無理な相談なわけで、彼女は私の名前を聞き、扇子を閉じて片目を瞑った。何かを考え込んでいるように見える。その間、私はただじっと時が過ぎるのを待っていた。彼女の瞳には不思議な強制力と魅力があり、私は視線を逸らせない。まさに蛇に睨まれた蛙状態である。

「成る程のう。昴……良い名じゃ。それに、顔立ちも愛らしい」

両手を私の頬に沿え、彼女はそっと顔を近づけてきた。まるで恋人のように　　気心知れた友人のように　　いや、これはむしろ愛玩動物に対する視線？　　兎に角普通ではない奇妙な物を感じた。この人は一体　　。ついでといえはついでになるが、身の危険も感じる……。

「……わらわの名はミュレイ・ヨシノ。お主をこの世界に召喚した者じゃ。まあ、つまるところお主の“あるじ”ということになるのう」

「……………？」

につこりと、妖艶に……しかし童女のような無邪気さもかね合わせたような笑みを浮かべるミュレイ・ヨシノ……。彼女の言っている言葉の意味が私にはさっぱり理解出来なかった。

暫くの間、考え込む。もう本当に勘弁してほしかった。私は死んだのか？　ここはどこで、こいつは誰？　それともこれは全部夢の中の出来事で、私が望んだ妄想の産物なのだろうか？

ミュレイは私からそっと手を引き、優しく微笑んでいた。気品の

ある、大人びた女性だと思った。思わず見惚れてしまいそうなその笑顔も、こんな状況では素直に受け取る事は出来ない。

「しかし、まさかお主のようないかにもひ弱そうなのが召喚されるとはのう……。やってみるまで何が出るのか判らんのが興じゃが、中々愉快的な結果になったわ」

「は、はあ……？」

「わらわも異世界人を召喚するのは始めての経験じゃからのう……。じゃが案ずる事はない。お主の待遇は保障しようぞ」

「……それは、一体どういう……」

私がそう質問しようとした時だった。部屋の襖が静かに開き、一人の少年が入ってくるのが見えた。その装束もやはりミュレイが着用している装束と意匠が似ている。

「お呼びでござるか、姫様？」

「……ござるか？」

「こやつはわらわの護衛、“シノビ”のウサクじゃ。ウサク、彼女に色々と案内してやれ」

全くわけがわからないまま話がどんどん進んでいく……。私は最早、半ば諦めるような心境で静かに溜息を漏らした。

ああ、どうせ思い通りにならない人生だったんだ。別に今までと何も変わらない……。思い通りにならなくて、周囲に流されて生きていく……。別にそんな生き方も悪くないのかもしれない。言い聞か

せるように心の中で何度かそう呟き、私は目を閉じた。

「了解でござるよ！ 姫様の命令とあらば、拙者は何でもするでござる。大切な御客人のご案内、しかと仕りござる！」

その、ござる言葉は合っているんだろうか？ ふと、そんな事を考えた。何でもござるってつけりやいってもんでもないと思う……。

少年　ウサクは私の前に立ち、そつと手を伸ばしてきた。お手を拝借　まさにそんな感じである。人懐こい笑顔を浮かべている彼は私がそれを拒絶する事は微塵も想像していないように見える。そこには不思議な強制力が発生し。私はその手をおずおずと取っていた。

「では、早速城下に繰り出すでござるよ！　ニンニン」

「……………」

だから　そんな事を言う忍はいないんじゃないだろうか。そんな事を考える私をほつたらかしにウサクは部屋から私を連れ出していく。ミュレイはそんな私たち二人を、背後から楽しげに見送っていた……。

召喚、救世主（1）

「しっかし……傭兵とは名ばかりの雑用だよな、俺って……」

第六界層オケアノスに存在する砂上都市カントイルは、一日殆どが“夜”である。ロクエンティアと呼ばれる世界は、基本的に無数の鉄板が縦に連なり構築されているのだ。当然、下層ともなれば太陽の光が差し込んでくるのはごく僅かな時間のみなのである。

他の界層では人工太陽装置と呼ばれるものが存在するが、最下層に等しいオケアノスの住民にそんな物は入手出来る代物ではない。結果、このカントイルにはごく僅かな時間の日中と、その殆どを占める夕暮れ時……そして一日を支配する夜だけがあった。

紙袋を片腕に抱えるように持ち、ホクトは溜息混じりに歩いていた。その隣にはホクトと肩を並べて歩く、白髪の少女の姿があった。白く闇の中で余計に冴え渡るような白雪の色はふわふわと歩行のステップにリズムをあわせるように上下している。

「買い物、買い物。買い物って、楽しいねえ」

「……おい、うさ子」

ホクトに名を呼ばれ、少女は立ち止まった。厳密にはそれは名前ではなくあだ名である。理由は単純明快、彼女の頭から大きなうさぎの耳のような何かが生えているからである。

少女、通所うさ子は衣装も独特であった。つやつやとした、不思議な質感の布で作られた服を着ており、一見すると高貴な井出達に見えない事も無い。しかしその実体はガルガンチュアに忍び込み、食料を盗み食べた所為で牢屋に放り込まれた間抜けな少女である。

牢屋でのやり取りもあって、二人はその後意気投合していた。勿論、うさ子もホクトもガルガンチュアでは絶賛雑用係中である。砂の海豚所属となったホクトは兎も角、何故うさ子までもが雑用になっているのか……それには色々事情があった。

話は数日前に遡る。カントイルに停泊したガルガンチュアで様々

な仕事を覚えるホクトは偶然うさ子が牢屋から出される所を目撃したのである。牢屋から出したのはロゼであり、そして何故かロゼは困ったような顔をしていた。

「どづした、ロゼ？」

「……ホクトか。なあ、あんたから何とか言ってくれよ。もう僕はうんざりなんだ」

「……何がだ？」

「記憶喪失なんだって、こいつも……」

「はっ？」

眼鏡を外し、眉間を片手で揉むロゼ。その傍ら、目をうるうるさせて座り込むうさ子の姿があった。ホクトもそうだったので何も言えないのだが、記憶喪失などそうホイホイ出てくるものでもないだろう。

乾いた笑いを浮かべるホクトを見上げ、うさ子はうるうると目を輝かせていた。そんな少女を男は腕を組み、上から下までじっくりと舐めるように見つめる。

ふくよかな胸……愛らしい紅い瞳……。あの耳　のようなものはなんだか不気味だったが、細く、しなやかな肢体は十分に魅力的だった。何より胸が大きい……それはホクト的には大きなポイントだった。

「ロゼ……」

突然真面目な顔つきでロゼの肩を叩くホクト。そうして爽やかに

笑顔を作り言った。

「記憶喪失で不安がってる少女に対してお前は紳士的じゃないな」

「……………まあ確かに、紳士的ではなかったかもしれないな」

「そつだ！ 女の子にはもっと優しくしろ！ それが……………組織のリーダーってもんじゃないのか？」

「なんでお前にリーダーうんぬんを説かれなきゃならないのかイマイチ納得行かないが、まあ確かにそうかもしれないな……………」

ロゼの脳裏に浮かぶ、普段からこき使いすぎているリフルの後姿……………。時々とても疲れたように項垂れている寂しげな背中を思い出すとなんとなく良心の呵責というものが発生する。

「う、うーん……………だが僕は組織のリーダーとしていつも威厳を保つ為にだな……………」

「よしよし、もう大丈夫だぞ。この眼鏡の兄ちゃんが面倒みてくれっから」

「え？ ほ、本当？」

「おおい！？ 勝手に話を進めるなっ！！」

気づけばホクトは少女の隣に膝を着き、その頭を撫で回していた。少女は撫でられるのが気持ちいいのか、片目を閉じて為されるがままにしている。ふわふわの髪の毛の質感は髪の毛というより動物の毛に近い。それを堪能するホクトの首根っこをつかみ、ロゼが引っ張り

倒した。

「おいコラ傭兵……？ 主を無視とはいい度胸だな……」

「へ、別に契約したけどお前の犬になつた覚えはないぜ」

「……減らず口を。“ 我は命ずる。ホクトに罰を与えよ”！」

次の瞬間、ロゼの腕に刻まれた紋章が輝きを放ち、気づいた時にはホクトの身体に電流のような痛みが流れていた。身体を仰け反らせ、跳ね回るホクト。それを少女は目を真ん丸くして眺めていた。

「いつてええっ！？ 何しやがる！？」

「契約は絶対なんだよ馬鹿。あんたは僕の命令には逆らえないの。わかった？」

「ち、ちくしょおお！！ 人権無視じゃねえかつ！！」

「こうでもしなきゃ安心出来ないだろうが……。それより、そつちの子の事だけど、あんたが面倒見るってならガルガンチュアにおいてもいいよ」

意外と話がすんなりと進み、ホクトもうさ子も動きを止めてしまっていた。まるで奇妙な物でも見たようなその目つきにロゼは居心地悪く視線を逸らす。

「そ、その代わり、あんたの給料から生活費は天引きするからな！」

「な、なんとというツンデレ……」

「つんでれー！ つんでれー！」

「意味は全くわかんねえけどなんか腹立つ……」

そんなこんなでもう一度電流の罰を受けた後、ホクトはうさ子の面倒を見る事になったのである。もっとも、二人とも記憶喪失のため面倒をみるなどという問題でもなかったのだが。

ホクトとしては、組織の中に女の子成分が増えればなんでもよかったのである。砂の海豚は九割は男性であり、女性と会う事は殆どない。絶世の美女もいないわけではないが、棘が多すぎてどうにもならない。

「それに比べ、こっちは棘なさすぎてイマイチ盛り上がらないんだけどな……」

「うん〜？」

「いや、何でも……。それより頼まれた買出しの品、多すぎじゃないか……？ まあ、これもロゼなりに俺たちが早く生活に馴染めるように気を使ってくれたのかも知れないけどさ」

「そ、そうだったの〜！？ ロゼ君、とっても優しいんだね〜！」

「……いや、あいつは鬼だよ。くそ、契約なんてするんじゃないかっ
た……」

「そうかなあ〜……？ うさはね、今の生活がとっても楽しいんだよ〜。ホクト君と〜、ロゼ君と〜……後の人は名前が思い出せないけど〜、皆大好きなの〜」

名前が思い出せない時点でそれは大好きなのかどうか疑問なのは？ そう思ったが口には出さないホクトであった。

見渡すカンタイルの町並みは広く、人の数も多いように見える。それもそのはず、そもそも第六界層には本来都市など存在しないのである。オケアノスはとつくに滅んでしまった界層であり、そこに広がっているのは無限の砂の海だけである。

そんな砂の海の上に聳え立つカンタイルは常に移動を繰り返している人工島で、上位界層からの支配から逃れたいと考える人間は反帝国の組織が利用している、反帝国思想のよりどころなのである。

故に街の治安は決して良いわけではないが、上下関係や出身界層などを気にせず利用することが出来、砂の海豚のような人間にとっては便利な街なのである。当然豊かさは他の界層の都市には劣るが、空気はどの都市よりも垢抜けている。

「いい街だよな……って、うさ子？ おーい、うさ子やーい」

ふと、気づいたら人込みの中を一緒に歩いていたはずのうさ子の姿がみあたらなかった。周囲をぐるりと眺めてみると、数十メートル離れたあたりの屋台の前でうさ子は停止していた。慌てて駆け戻ると、店には串焼きが並んでいる。

よだれをだらだらと垂らしながら目を輝かせて屋台にすがり付いているうさ子を引つpegがそうと試みるホクトであったが、うさ子はテコでも動かない。串焼きを焼いている男が冷や汗を流し困ったような表情を浮かべる中、ホクトは背後からうさ子の頭を強くひっぱたいた。

「ふぎゅっ!？」

「どこまで食い意地が張ってるんだお前は……」

「あ、あれ？ ホクト君、いつからいたの……？」

「うん。さっきからお前をひっpegがそうとしていたわけだが」

「は、はうう……。おなかすいたよう……。おなかすいたよう……」

「帰ったら飯があるだろ？」

「でも、この砂魚の串焼き……おいしそうなの……」

よだれをだらだらと垂らし、目をキラキラさせるうさ子。無言でそのよだれをハンカチで拭い、ホクトは溜息を漏らす。

「……すみません、串焼き二つ下さい」

「か、か！？ 買ってくれるのっ!？」

「だってお前動かないじゃねえか……どんだけ執念たっぷりなんだよ……」

「わああっ！ ありがとう、ありがとうだよホクト君！ すりすり…… すりすり……」

「やめてくださいよだれつけないでください俺のズボンそれしかないんですやめてくださいお願いします」

うさ子の頭を鷲掴みにし、引っpegがそうとするホクト。しかしうさ子はその細い体からは想像もつかないほど強い力で頬擦りを続け

ており、ホクトは一着しかないズボンが悲惨なことになるのを指をくわえて見ていることしか出来なかった。

「……。すみません、領収書もらえますか？　あの……砂の海豚の団長口ゼって名前で……」

こうして無事串焼きと領収書を手に入れたホクトとうさ子の二人は買い物再開した。魚の串焼きを美味しく頬張り、ほっぺたが零れ落ちそうなほどもきゅもきゅと噛み締めているうさ子の隣、ホクトはそつと買出しの品々の領収書の中に串焼きの領収書を忍ばせた。

「しっかしお前、良く食うなあ……」

「はむはむはむ……っ」

「あ、聞こえてないですか。さいですか」

とりあえずうさ子がどこかにいってしまったないようにその手を握り締めてホクトは移動を開始する。そうして通りがかった中央の広場で大型の屋外モニターにニュースが流れているのを見つけた。

空中に浮かび上がった光のディスプレイの中、様々な情報が飛び交っている。ふと、それらの文字は全く見覚えが無いような、そんな奇妙な感覚に囚われた。何が奇妙かと言えば、ホクトはそれを読む事が出来るのである。なのに見た事がないように感じるのだ。

矛盾は兎も角、足を止めてニュースのテロップを読み続ける。うさ子は既に串焼きを食べ終え、櫛をしゃぶっている所であった。非常に行儀が悪いのだが注意するだけ無駄なので何も言わずに見上げ続ける。

「……………帝国皇帝、誕生百年の記念式典迫る、か」

ロゼたち砂の海豚をはじめとする反帝国勢力が戦いを挑んでいる男がもうじき誕生後百年を迎えるという。帝国国民にしたら祝うべき事柄なのかもしれないが、この反帝国の街では街頭モニターを見上げる人々は皆忌々しげである。

「つか、百年で……………誕生日の事じゃないよな？ いや、どういう意味なんだろう……………まあ、いいか」

どちらにせよ今の自分には関係ない　そう考え視線を下ろす。すると、串焼きを持っていたはずの手の先にうさ子がかじりついているのが見えた。一瞬何かの目の錯覚かと思いい目をきつく瞑り、そっと目を開いてみる。しかしやはり、うさ子が串焼きにかじりついている。

「おま！？　人の分まで食うやつがあるかっ！！」

「おなかすいたよう……………」

「わかったわかった、もう帰るから！！　お家に帰るまで我慢しなさいっ！」

「はあい……………」

こうして二人は早足で帰路に着くことにした。勿論、串焼きの領収書は経費では落ちなかつたので、ホクトの給料から天引きになつたのは言つまでもない。

召喚、救世主（2）

風が気持ちのいい街だった。

第四界層、プリミドール。そこにある国、ククラカンの首都ラクヨウというのがこの町の名前だという。私の隣を歩き、楽しそうに先ほどから喋り続けているなんとも明るい忍さんが教えてくれた事だ。

ひたすらに意味がわからなかったので私は直ぐに考える事をやめた。ああ、これはきつと何かの悪い夢なのだ。私には関係の無い事が延々と続いている。どこまでも、どこまでも……。

ラクヨウは首都というだけあり、とても賑やかな街だった。少し油断するとウサクとはぐれてしまいそうになる。しかしウサクから遠ざかるうとすると、ウサクは私の後に吸い付くようになってくるのだ。流石忍ということなのだろうか。

ひたすらに人でごった返した街を歩くのはどこだって疲れる物だ。しかしこの街には活気と呼べる不思議な空気が漂っている。客引きの声があちこちから飛び交い、人々は笑顔で歩いている。まるで住人全てが隣人であり、友人であるかのようにさえ思えてくる。

「どうでござるか？ ラクヨウは。ククラカンの中でもここより活気のある町はどこにもないでござるよ」

「……は、はあ」

何故彼は初対面の相手に対してこんなにもフレンドリーなのだろうか。マスクのような物で顔の下半分を覆っているので顔全体は見えないのだが、目だけでニコニコしているのがわかってしまう。

正直、私はこういう人は苦手だ……。私はそもそも人間が好きじ

やない。他人といるとなんだかとても疲れるのだ。見覚えのない街という事もあり、私はとても孤独な気持ちを味わっていた。見ず知らずの町、見ず知らずの人々の波……そこに乗れという方が無理な話なのだ。

ずれた眼鏡を中指で押し上げ、私は小さく溜息を漏らした。そんな小さな仕草でさえウサクは見逃さず、私を気遣うようにして声をかけてくる。

「大丈夫でござるか？ 姫様は街を案内しろと仰りましたが、無理にそれに付き合う必要はないでござるよ。姫様の言う事は、大抵無理難題なのでござる。」

「そう……なんですか？」

「然り！ 毎日あの姫様と一緒に暮らしていると、命がいくつあっても足りないでござるよ。あ、勿論これはオフレコでお願いするでござる。」

オフレコで。忍者がオフレコで。

「しかし、昴殿はどうにも拙者が想像していた救世主とは違う気がするでござるよ。その、奇抜な召し物は最新のファッションとかいうやつでござるか？ 拙者、忍装束以外着たことがないのでファッション？ には疎いのでござるが」

「いや、これは……」

「救世主というからには、凄まじい剣豪のようなものを想像していたでござるよ。しかしこう可憐な乙女が出てくるとは……いやはや、姫様は何をなさるか実に予測不可能でござるよ。」

なんでこいつこんなに楽しそうなんだろうか。こっちが言葉を挟む暇もない。しかしちゃんと私の事は気遣ってくれているのか、通りに面した茶屋に連れて行ってくれた。木製のベンチの上に座り、ウサクが注文してくれたお茶を口にする。ようやく一息つき、町の喧騒を眺める余裕が生まれてきた。

ウサクは隣でもぐもぐと団子を頬張っていた。なんとというか、奇妙な世界観の街である。深々と溜息をつき、静かに手にした湯飲みに映り込んだ自分の顔を覗き込む。

記憶の中、私は確かに死んだはずだった。何故ここで目覚め、何故こんなことになってしまったのか……。気持ちに余裕が生まれてくると、同時に不安も湧き上がってくる。疑念は心を支配し、ぴりぴりとした痛みにも似た苛立ちがこめかみを刺激する。

高層ビルから落下する記憶。振り返って見た誰かの姿……。大学で話した言葉の意味。呼び出しのメール。朝の掃除……。記憶は確かに頭の中にあるはずなのに、まるで別人の記憶を見ているかのようになんてそれが正しく連続してくれない。

滅茶苦茶にデフラグされまくったデータを見ているような気分だ。ふと、ズボンのポケットから携帯電話を取り出してみる。勿論電波は来ていない。それはもう判りきっていたのだが、確認しておきたかったのだ。

「それ、なんでござるか？」

「……………ケータイ」

「けえたい…………？　なんだか良く判らないでござるが、カツコイでござる！　して、これは武器か何かでござるか？　投げたりするのどござるか？」

「いや投げない投げない」

暫くウサクは携帯電話について聞いてきたが、彼にとっては所詮意味不明な機械なのだ。直ぐに興味を失ってしまったのか、私の隣に座り込みのほほんと空を見上げていた。

「平和でござるなあ……」

「……………そうですね」

そう語りながら片手で携帯電話を弄る。やはりメールも電話も使えるはずがない。薄々わかっていた事だ。というか既にハッキリと明言されている。私は今、何がどうなってしまったっているのか。

目が覚めた時、私の目の前にはミユレイの顔があった。彼女は言った。“異世界人を紹介するのは初めてだ”…………と。目の前にはどうみても時代錯誤の景色が広がっている。文明錯誤、というのも付け加えていい。

アジアンチックな町並みだが、こんな場所は私の知る世界にはどこにもありはしないのだ。私は何者かにビルから突き落とされ、殺された…………。あれが夢や幻ではなかったのだとしたら。その直後、私はこの世界に召喚されたのだ。

我ながら馬鹿げた推測だ。しかし最早推測の域をとくに飛び越えている。目の前には淡々と事実が並んでいる。狂ったのは私の方なのだろうか。だとしたら、どれだけ幸せだろう。

私は、殺された…………。誰かに、何かの理由で。どうして殺されなければならなかったのか。もし本当に死んだのだとしたら、ここは死後の世界という事になる。私の身体は高層ビルから落下したとは思えないほど無事で、傷一つない。それもまた謎だった。

もしかして。もしかすると。私が現実だと信じていた世界は…………。全て幻だったのかもしれない。そんなことあるはずもないけれど。

でもそれくらい、今のこの世界は現実味に溢れていた。

何もかも、無駄になってしまった……。そう思った瞬間、言葉に出来ない悲しみが押し寄せてきた。私は、ずっと何とか“償って”生きて行こうと思っていた。死んではいけないと。生き続けなければいけないと。

でも無駄になってしまった。決めた覚悟も……。彼の言葉も。今日までしてきたことが全部なかった事になった。もう、確かめる事もできない。私と一緒に暮らしてくれたあの夫婦の事も、別にどうでもいいとおもっていた友達の事も。

「……………ど、どうしたでござるか？ 昴殿……………お口に、合わなかったでござるか……………？」

不安げに、ウサクが語りかけてくる。理由はわかっていた。私の頬を流れる熱い雫……………それを彼が見つけてしまったからだ。

私は何も答えられなかった。大丈夫とも駄目とも言えなかった。団子はおいしかったし、お茶も気に入った。でも、そうじゃない。そうじゃないんだ。

全部駄目になっちゃったんだ……………。そう考えたらもう、止められなかった。あんなにも嫌だったあの世界……………でも、そこで必死にあげて生きてきたんだ。

血や汗も、流した涙も……………あの世界にはきつと染み付いていた。だから私は苦しくて死にたくて居なくなりたくて消えてしまいたくて……………でも、それでも生きていた。

涙を拭えず、ただ目を閉じて頂垂れた。何よりも情けなかった。腹が立った。こんなにも私はあの世界の事が懐かしい。あの世界の所へ、帰りたいと思っている。

「す、昴殿……………。拙者、ど、どうしたら……………あわわ……………っ!？」

私がいなくなったら、奥さんはどんな顔をするだろう？ 師匠は……？ 私が帰ってくるまで、夕飯を始めずに待っているに違いないんだ。

二人ともきつと、帰ってきた私をしかってやろうと待っているんだ。でも私は戻ってこない。どれだけ待っても、もう戻ってこない……。

きつと、二人はとても悲しむんだ。奥さんは泣いてしまうかもしれない。私が居なくなったら、あの道場はとても静かになるだろう。師匠もきつと、寂しがらう。

もう戻って上げられないかもしれない。いや、きつと戻れないのだ……。どうしようもなく、悲しくて。寂しくなった。そんな事、感じるようなことはなかったはずなのに。

携帯電話を握り締める手が震えていた。それはもう何処にも繋がる事は無い。私は非日常と呼ばれる下らない世界に巻き込まれた。いや、突き落とされたのだ。あの、最悪の思い出が眠るビルの上から。

召喚、救世主(2)

「なあロゼ、これは確認なんだけどよ」

「どうした」

「砂の海豚は……反帝国組織なんだよな」

「その通りだ」

「反帝国組織つてのは、第三階層エンビレオに存在するハロルド帝国をやつつける為に活動しているわけだ」

「卑劣な社会を生み出す帝国に対する正義の戦いだ」

「うん。じゃあ、その正義の戦いの為にやる事が　これなのか？」

カンタイルに存在する、ギルド労働組合本部　。そこでロゼとホクトはクエストボードと呼ばれる巨大な掲示板の前に立っていた。二人の周囲には同じように掲示板を眺める人々の姿があり、二人はもう数十分はこうして掲示板を眺めている。

砂の海豚は反帝国組織であるが、それ以前に組合に所属するギルドである。ギルドには帝国の認可を受けているものから非合法な物まで様々な物が存在するが、基本的に組合によって取りまとめられている。

この砂上都市カンタイルは移動するギルド本部でもあり、それ故に三百六十五日二十四時間常に人でにぎわっているのである。ロゼたちがこの街に立ち寄ったのも、当然そうした理由を含んでいる。

砂の海豚の拠点は潜水艦ガルガンチュアである。しかし、ある意味この街は大きな意味で彼らの拠点とも言えた。ガルガンチュアがカンタイルに停泊してから既に数日が経過している。その間、ロゼもホクトも反帝國的な活動をする様子は一切なかった。

「あのなあ、組織を維持するのにどれだけ金がかかると思っているんだ……？　ガルガンチュアの維持費だけでも凄まじいんだぞ」

「それで資金調達にこうしてお使いを引き受けてるわけね……」

「お使いじゃない、依頼だ馬鹿！　そもそも、適度に組合に貢献し

ないと色々と面倒なんだぞ。組合からの補助だって受けてるんだからな」

ギルド本部はそれぞれのギルドの元締めであり、砂の海豚もギルドである以上それに逆らう事は出来ない。砂の海豚は反帝国組織である以前に、ギルド組合に所属するただのギルドなのである。

帝国でさえ、ギルド本部については追求の手を止め、放置している状態にある。反帝国組織なども別け隔てなく困い、中には犯罪者まがいの集団もある為当然帝国としては取り締まらねばならないのだが、結局帝国だけではどうにもならないこまごまとした問題はギルドに委ねているのが世界の現状なのである。

故に、帝国はギルドを黙認している。当然行き過ぎたギルドに対しては警告もするが、それを裁くのはあくまでギルド本部である。ギルド本部と帝国は非常にデリケートかつ曖昧な関係を維持していた。

ロゼたち砂の海豚もギルドからの依頼を斡旋して貰い、それをこなすことで活動資金を稼いでいる所謂弱小ギルドの中の一つだった。依頼の内容は子供のお使い程度のものであれば、魔物の討伐まで非常に幅広く引き受けている。その態度から年々仕事は増えているが、当然経済的に厳しい時だってあるのだ。

「例えばそう、新しい魔剣使いと大飯食らいを仲間にした時とかね……」

「なあ、俺の給料ってちゃんと出るよな？」

「それはあんたの頑張り次第じゃないか？ まあ、この間倒した魔物の頭が結構高く売れたから暫くは困らないんだけどね」

「俺の活躍だぞ、それ……」

肩を落とすホクトの傍ら、ロゼは顔色一つ変えずにクエストボードを眺めていた。ホクトの事は眼中に無い様子である。仕方なくホクトはその場を離れ、周囲を見渡した。

ギルド本部はクエストボードが並んでいる以外の部分を見れば巨大な酒場と呼ぶのが相応しい。四六時中酔っ払いたちの騒ぎ声が聞こえてくる、非常にやかましい場所だ。ホクトは全くそんな事は気にしなかったが、うさ子などは酒の匂いを嫌がり強く留守番を希望した。

依頼を引き受ける手続きをするのは団長の仕事である。ロゼも騒がしさを好むタイプではなかったが、この場合は仕方が無い。適当な席に勝手に座り、両足を投げ出して身体を伸ばすホクト。砂の海豚に入って一週間……。なんとも平和な時間が続いている。

「……暢気な事だな」

ふと、隣から声が聞こえて視線を向ける。そこには仏頂面のリフルの姿があった。視線だけでホクトを見下ろし、呆れるように溜息をついてみせる。

「そう言われても、ロゼが依頼を選んでいる間は暇だろうが」

「貴様も魔剣士ならば常に凜としている。だらけた態度は魔剣士にとってはよくない事だ」

「だからってお前みたいに常に怖い顔してたら精神的によくないと
思うんだが」

ホクトの言葉にリフルが睨みを効かせる。慌てて立ち上がったホクトはそのままそくさと逃げるように店の外に出た。夜の冷たい

空気が吹き込み、欠伸を浮かべる。昼と夜の感覚が無いこの街だったが、眠くなるものは眠くなるのだ。

「平和なのはいいんだけど、退屈だよなあ……。せめてこう、もっとヒロイックな出来事がないと盛り上がらないよな」

そうしてホクトは腕を組み、想像してみる。例えばこう……聞こえてくるのだ。遠くから走ってくる少女の声。少女は叫ぶのだ。

「誰か、助けてっ！！」

少女は悪漢どもに追われており、捕まってしまったらあんなことやこんなことになってしまいうに違いない。想像していてちよっと口元が緩んでくる。だがそうならない為に、色々と下心もあるので助けてあげたりしたいのだ。

颯爽と現れ、悪漢どもをばったばったとなぎ倒すホクト……。少女はそんなホクトの勇敢な姿に一目ぼれ。そのままお嫁にもらってくださいとか言い出したりするのだ。

「我ながらキモい妄想だな……って、おっと」

「きゃっ!?!」

ホクトの腕の中、一人の少女の姿があった。白い、フードの着いたコートを着込んだ少女は顔が良く見えない。しかしホクトは悟ってしまった。正面から走ってきたこの少女は、おそらく道のど真ん中で妄想していた自分に激突してしまったのだろう、と。

しかも、身体に当たってみてよくわかる。この少女、フードの下は間違いなく巨乳である。ホクトの目が輝き、一瞬で凜々しい顔つきに変わった。紳士的な物腰で少女の身体を気遣い、優しく微

笑む。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

しかし、どうやら少女は大丈夫ではないらしかつた。しきりに背後を気にしており、ホクトの顔は見えていない。せつかくカツコイ顔をしていたのに意味がなかったと表情を歪め、眠たそうな顔でホクトは少女の視線の先へと自分の視線を重ねた。

すると、そこにはいかにも胡散臭い感じの悪漢っぽい男たちが走ってくるのではないか。どうやら先ほどの少女の声は妄想ではなく現実のものだったらしい。となると、その先の展開も現実になるかもしれない。

「追われてんのか？」

「え、ええ……」

「しょうがねえ。結婚するにはまだちと早いかな……！　まずはお付き合いから始めようぜ」

「……はっ？」

呆気にとられ立ち尽くす少女を背後に押し退け、ホクトは前に出る。駆け寄ってきたのはいかにも小物そうな悪漢であった。

「なんだてめえ！　庇い立てするなら容赦しねえぞ！」

と、悪漢が叫んだ所でホクトは直ぐに動き出した。叫んでいる悪漢の顔面に靴先を減り込ませ、吹き飛ばす。見事に振りぬかれた蹴りは少女のコートをはためかせ、一瞬ホクトの視線はそちらに向け

られてしまった。

スカートが捲れたかと思ったのが期待はずれ、少女はちゃんとスカートを両手で抑えていた。舌打ちするホクトに背後から悪漢その2の繰り出したナイフが迫る。それを見もせず左手の人差し指と中指で挟み込んで止め、手をひねって刃を押し折る。

人間の力では出来ない事がある。しかし、この世界の人間にはそれを可能にしてしまう力が存在する。魔力と呼ばれる特殊な力を持つ人間　しかもその究極である魔剣使い、それがホクトの肩書きなのである。ナイフ程度でどうにかできるはずもなかった。

背後から襲ってきた男の襟首をつかんで放り投げ、大地に叩きつける。そのまま追加で襲ってきた三人目を振り返ると同時に足払いし、崩れた所を踏みつけて動きを止めた。一瞬の出来事であり、大きな騒ぎにさえなることはなかった。

「なんだこいつら……？　超弱いぞ」

「あ、ありがとうございます」

「礼には及ばねえよ。おっぱいは正義だ」

「は……？」

「それで、君の名前は　　と」

次の瞬間、甲高い金属音が鳴り響いていた。思わず目を瞑り身を縮こまらせた少女の前、ホクトが手を突き出していた。握り締めているのはつい先ほどまでベルトに下げられていたナイフである。それを引き抜き、少女目掛けて投擲されてきた何かを弾いたのである。直ぐに少女はその招待に気づいた。手裏剣　そう呼ぶのが相応しい投擲武器である。ホクトが弾き、それは少し離れた大地に突き

刺さっていた。そちらに視線を向けた瞬間、まるで隙を見計らっていたかのように連続で手裏剣が投擲されてくる。

ホクトは直ぐに前に出てそれを全て弾き飛ばす。たまたまギルド本部の前で酒を飲んでいた男の酒瓶に弾いた手裏剣があたり、ビンが砕け散った。

「今度はその辺のチンピラって感じじゃねえな」

ナイフを片手でぐるりと回し、逆手に構えなおす。人込みの中に紛れ、唐傘を被った数人の人影が見えた。ホクトは直ぐに少女の手を引き、弾かれるように走り出す。

「ちょ、ちよっと!?!」

「いいから逃げる! 事情は知らないが、ありやちよつとした腕前だぞ!」

「あ、貴方を巻き込むわけには……っ!」

「助けてって、言っただろ?」

背後、再び手裏剣が飛んでくる。少女を抱き寄せ、ホクトはそれを回避した。唐傘の男たちは追いかけてくる。移動速度はホクトたちよりも速い。

仕方がなく、ホクトは少女を抱きかかえた。両手がふさがってしまつのは問題だったが、今はそうしなければ逃げ切れない。両足に力を込め、一気に加速する。少女は腕の中、じつとホクトの横顔を見つめていた。

「女の子が助けてって言ったらな、男は助けるものなんだよ」

「……それが、貴方の騎士道……ですか？」

「そんな大層なもんじゃないさ。男は女を守る。そうさ、常識って奴だ」

背後から飛んでくる手裏剣をかわしながら走り続ける。暗い、狭い路地を抜け。疾風のように駆け抜けるホクトの移動に吹かれ、少女の被っていた白いフードがはらりと下りた。

金色の長い髪が風に広がり、少女の顔が露になる。ホクトはそれを見下ろし口元をにやけさせた。少女は紛れもなく美少女だったのだ。これは間違いなく、ヒロイックな展開だと言えるだろう。

壁を蹴り、それを三度繰り返して建造物の屋根の上へ移動する。夜の闇の中浮かび上がる街を飛び回る。その間少女はずっと、じっと黙り込んでホクトの事を見つめていた。

地獄と呼ばれた場所（1）

少女は、“彼”に見覚えがあった。それは、記憶をそう遠くまで遡らずとも済む程ごく最近の出来事。

アンダーグラウンドへと向かう罪人を乗せた列車の一つであるとある事件が起きた。砂の海を移動する列車が大型の魔物の襲撃を受けたのだ。

騎士たちは直ぐに列車を放棄し脱出。襲ってきた魔物が希少種かつ危険種に指定されている龍種の魔物であった事がその大きな理由である。まともに相手をすれば死傷者の発生は避けられず、そしてそこまでして守るべきものは列車には積まれて居なかった。

帝国の命令によりアンダーグラウンドへと輸送されていた罪人たちであったが、彼らの命はただの労働資源、アンダーグラウンドでの強制労働に参加するだけであり、基本的に代用品など掃いて捨てるほどあるのだ。それを命懸けで守るなど、そんな事は実に無意味な事である。

帝国の護送騎士が脱出艇を使って脱出する中、少女は手を騎士の一人に手を引かれ脱出艇に乗り込み、遠ざかっていく壊れかけた列車を見送っていた。体当たりによって列車の車両が次々に切り離され、罪人たちが砂の海にゴミのように投げ出されていくのを遠巻きに眺める事……それだけが彼女に許された事だった。

しかし、心が痛む事はなかった。アンダーグラウンド送りになるような罪人は、とても重い罪を背負った人間である。それが砂の中に沈んで死んでしまったとしても、それを救えなかったとしても仕方ない……。何も出来ない無力な自分に対する言い訳のようなその思考の最中、彼女が目にしたのは龍へと向かっていく一人の剣士の姿だった。

剣を呼ぶには余りにも巨大で。人がその手で翳すには余りにも重

く。戦闘に対する美など微塵も感じない、荒々しい剣捌き。騎士たちが訓練し習得する剣術とそれは余りにもかけ離れている。完全なる我流。黒き剣の騎士は龍に立ち向かい、恐れる素振りさえ一つとして見せる事はなかった。

夜の闇の中、その男は今日の前で自分を抱きかかえて走っている……。それがまるでとても不思議な事であるかのように感じていた。生きているなどと誰が考えただろう？ あの列車と共に沈み、消えていて当然の存在……。龍種は並大抵の腕前の人間では歯向かう事すら愚かしい真正銘の化け物である。それと対峙し、そして退治し、男は今日の前に実在する。

「 そんなにカッコイイかい？ 俺の顔は」

「 え つ？ 」

男は薄明かりの中、調子よく微笑んで見せる。少女はそう意識せずとも彼の事をずっと見つめ続けていたのである。急にこの状況が気恥ずかしくなり、少女は顔を赤らめつつそっぽを向いた。

少女が視線を逸らすのとホクトが停止するのはほぼ同時だった。急ブレーキをかけるホクトの足元で民家の屋根が削れる。正面、唐傘の者たちが迫って来ていた。当然背後からの追走も続けられている。

「 挟み討ちってわけね」

「 も、もう十分です！ 私に関わらず、貴方だけでも逃げて下さい……！」

「 お？ そういう事言っちゃうの？ 悪いね、お兄さんそういう事言われると頑張りたくなっちゃうんだよな」

ホクトはそつと少女をその場に下ろし、空に手を掲げる。黒き光が編みこまれるように、ワイヤーフレーム状の剣の幻影に“実体”が付与されていく。召喚された黒き魔剣を片手で軽くいなし、肩に乗せて男は笑う。

「悪いが俺は優しくないんでな。雑魚相手だろうが容赦なく必殺武器使っちゃももんね」

「黒い……魔剣……」

やはり見間違いなどではなかった。あの時見た、黒い剣士。しかしだとすれば彼は少女にとって二つの意味で脅威である事も意味している。一つはアンダーグラウンド送りの罪人であるという事。そしてもう一つは 龍殺しを為すほどの腕の剣士であるという事。帝国騎士団でさえ手を焼く大型の魔物をあの場たった一人で討伐したとでもいうのだろうか？ 過ぎた力を持つ人間は帝国にとって脅威である。それは管理され、帝国騎士団に囲われて当然の腕前……。

男は軽く剣を振り回した。掠れた民家の屋根が圧力で吹き飛び、火花と同時に瓦礫が舞い上がっていく。浮かび上がる腕の紋章……それを見て唐傘の者たちは動きを止めた。

ホクトはそれで口元に笑みを浮かべる。お互いに判りきっている事だ。相手は暗殺者。ホクトの実力を見て理解出来ぬほど無能ではない。仮に全員で同時に飛び掛ったとしても、屋根の上から転がり落ちるのは自分たちの切断された首なのだ。暗殺者たちは理解する。

唐傘たちは同時に動きを止め、くるりとその場で反転して走り去っていった。それを見送り、ホクトは魔剣を消滅させる。残されたのは壊れた屋根の上に立ち尽くす二人の姿だけであった。

「逃げるぞ！」

「え？」

「誰ん家だかわかんねえが、屋根ふつとばしちまった。俺修理代なんて持ってないからな」

「え、ええっ!？」

二重の意味で驚く少女。その身体を再び抱きかかえ、ホクトは跳躍した。屋根の上から街中へとダイブしていく。人通りの少ない裏路地に降り、そこから人通りの多い中央の広場を覗き込む。

「流石にもう追ってこないだろ……。よかったな、もう大丈夫だ」

「は、はい……。ありがとうございます……」

しかしホクトの予想に反して少女の反応は微妙であった。貴重な魔剣使い、しかもアンダーグラウンド送りの大罪人である。それが目の前で龍をも殺す剣を見せ付けてくれたのだから、怖じるなど言うほうが無理な話である。

てつきり、助けてくれてありがとう！ と胸に飛び込んでくるものだと思つて準備していたホクトは空しく抱きとめる為に広げていた両腕を収めた。手が寂しくなり、壁に背を預けて首から提げたパズルをいじる。

「……で？ 何であんなおっかないのに追い回されてたんだ？」

「そ、それは……」

「そんなにドン引きすんなよ、傷つくな……。俺はね、紳士なのよ？ そりゃあまあ、色々あって反帝国組織の傭兵なんかやってるけどさ……」

「反帝国組織!？」

何故かその言葉に大きく反応する少女。逆に驚いてしまったのはホクトの方である。ここは、無法者の街カンタイル……。反帝国組織の人間など、街を歩けば数え切れないほどすれ違う。

目を丸くするホクトに対し、慌てて取り繕うように咳払いする少女。そうしてゆっくりとフードで頭をすっぽりと覆い隠してしまう。見えていた綺麗な金色の髪が隠れてしまい、ホクトは内心舌打ちした。

「た、助けてくれた事には礼を言います……。では、私はこれで……」

「ちょっと待った」

「ひっ」

慌てて立ち去ろうとする少女の肩をつかむホクト。小さく上げられた悲鳴にさらに傷つかずには居られなかったが。涙を流しつつホクトはそれに耐えた。

「まだ連中、近くで君が一人になるのを待ってるに決まってるだろ」

「え?」

「ここも監視されてるはずだ。俺と一緒にいるから何もしてこないだけでな」

見れば北斗は片手でパズルをいじりつつ、常に視線はあちこちへと向けられ索敵を続けていた。当然、暗殺者たちの狙いが少女であるのならば簡単に諦めるはずがないのだ。それは少女自身も良く判っていた事だ。

まさかこんな所まで追いかけてくるとは思って居なかっただけに今は彼らがどれだけ本気で自分を殺そうとしているのかが理解出来る。ちらりと目の前の男の様子を上目遣いに覗き見た。筋肉質な身体、長身に長く伸びた後ろ髪をテキトーに結んでいるだけの髪型……。お世辞にも礼儀正しい紳士には見えなかった。

「まだ一人にはならないほうがいい。判ったか？」

「……………はい」

最早断る事も怖くなり、少女はただコクコクと首を縦に振り続けた。ホクトは周囲の様子を警戒しつつ、少女と肩を並べて歩き出す。

「俺の名前は、ホクト」

突然ホクトがそう口にするので少女は思わずビクリと肩を震わせた。そんな反応に苦笑を浮かべ、ホクトは歩みを止めずに続けた。

「自己紹介くらいしておいたっていいだろ？　ったく、なんか妄想してたのと全然違う展開だぜ、とほほ……………」

「あ、はい……………！　私は……………私の名は、シエルシ……………」

「シエルシ、ね。よし、こっちだぞシエルシ。ちゃんと迷わずビクビクついてこいよ」

「冗談交じりにそう語るホクトの背中中は確かに頼り強かった。目深に被ったフードの下、シエルシは蒼い瞳にその背中をじっと映し続けていた。

地獄と呼ばれた場所（1）

「それで……？　なんでそのままその女の子をここに連れてくるんだ、お前はっ！？」

ガルガンチュア船内に存在するロゼの部屋から家主の怒号が響き渡り、乗組員たちが首をかしげていた。扉の向こうではロゼがホクトの襟首をつかみ、青筋を額に浮かべながら微笑んでいる。

「ここにつれてきてどうする！？　何度も繰り返すがうちは反帝国組織なんだぞ！？　そんな素性も判らないヤツを連れ込むな馬鹿が！！」

「ロゼ……お前口を開けば馬鹿、馬鹿って……馬鹿っていったほうが馬鹿なんだぞ？」

「煩い馬鹿！　死ね馬鹿っ！！」

ホクトの頭を揺さぶりまくるロゼの背後、呆れた様子でリフルが

腕を組んで黙り込んでいる。言葉もないというか、正に何もいえないという様子である。そんな奇妙な状況の中、接客用の椅子の上に座り込んだシエルシは緊張した様子でそれを眺めていた。

正面には頭から奇妙な耳のようなものを生えさせた少女が一人でもぐもぐとシエルシに出されたカットフルーツを食べ続けており。もう何がなんだかわからなかった。危険な状況から脱出できたのはいいのだが、これでは気持ち的に危険なままである。

シエルシを連れて行く場所ということでも他に何も思いつかなかつたホクトが悪いのだが、ある意味それも無理の無い話である。何しろホクトはここしか安全な場所を知らないのだから。それが理解出来る故に余計に口ゼはなんともいえない怒りに包まれていた。

「つたく、厄介ごとが増える一方だよ！ 僕は忙しいんだぞ！？」

「暇だったからギルドボードの前ウロウロしてたんじゃないかよ」

「何か言ったかタダ飯食らい……？」

「あ、ひっでえ！？ 仕事してんだろ俺だつてちゃんと！！」

「あなたの仕事の報酬は全部うさ子の食事代で消えてるからな。あなたは現在タダ飯食らい同然なんだよ馬鹿」

ふと、ホクトの視線がうさ子に向けられる。にこにこ笑顔でフルーツを頬張っていたうさ子であったが、背中に突き刺さるような視線に冷や汗が滲んでいく。

「まあ、うさ子はあとでこつてりと絞るとして……」

「今の問題は、彼女をどうするか、でしょう」

見かねてリフルが口出しする。ロゼもようやくホクトの胸倉から手を伸ばし、溜息混じりにずれた眼鏡に手を伸ばした。ようやく話を前に進める事が出来そうだ。

「シエルさん……とか言ったかな。あんたがどうして暗殺者に追われているかなんて事には興味ない。僕はあんたをここでかくまう積りはないからね」

「おい、ロゼ……」

「ミスターごくつぶしは黙ってる。とにかく、うちみたいな小さい組織は信用が大事なんだ。不必要な揉め事は避けるし、足がつきそうな事はしない。疑わしい人間も、ガルガンチュアには入れない……。当たり前だろう」

ロゼの言葉にシエルシは項垂れてしまう。落ち込んでいるシエルシにうさ子は口の中から食べかけのリンゴを取り出しそつと差し出す。シエルシは青ざめた表情で首を横に振ることしか出来なかった。

「女の子を暗殺者の中に放り出せっていうのか？」

「暗殺されるような事をするのが悪いんだろっ」

「ひっでー……。聞きましたうさ子さん？　うちの団長はこれだからまったく……」

「そっだよそっだよ！　ロゼ君、ロゼ君っ！　ごはんのおかわり二杯までってね、うさはおかしいと思うのっ！」

「そつだそつだー！！ このツンデレメガネー！」

子供が二人、ロゼの周りで野次を飛ばす。再びキレそつになるロゼを抑え、リフルが溜息混じりに前に出た。

「それ相応の事情があるのは理解したが、来るもの拒まずというわけには行かないのが実情だ。私たちは見ての通り小さな組織であり、君の為だけに行動する事は出来ない。護衛が必要なら、ギルドで依頼を申し込むといい。それ相応の金額が必要となるが、それが現実的だろう」

「……………そつ、ですね」

リフルの言葉は全く以って正論であり、かつ現実的に彼女の為になる言葉であった。頷き、黙り込むシエルシ……。ホクトは腕を組み、少しの間考え込んだ。

「だったら、その依頼俺が引き受けるぜ」

「え？」

「俺は砂の海豚所属扱いになってるが、基本的には傭兵なんだし……シエルシの護衛は俺が引き受ける」

「また馬鹿が勝手なことをほざきはじめたよ……………」

「馬鹿で悪かったな。俺は、命狙われてる女の子を街中に放り出すなんて下種な真似はしたくないだけだ。砂の海豚は驕る帝国を倒す正義の組織なんだから？ それが悪漢に追われる美少女を助けられないの

「かよー！」

美少女、というところがミソである。またいつものようにホクトのよく理屈は判らないが迫力のある説得に圧され、後退するロゼ……。弱ったロゼを見つめ、うさ子も同時に立ち上がる。

「そつだよ！ ごはんのおかわり、三杯！ 三杯まで引き上げてよ！！」

「「いや、だからそれは関係ないから」「」

ホクトとロゼが同時に振り返り、うさ子を指差す。うさ子が部屋の隅で膝を抱え、空の茶碗を箸で叩くのを無視して二人は話を纏める。

「……………シエルシ、だっけ？」

「は、はい」

「どうする？ 悪いけど、うちはそんなに資金的にも人材的にも余裕がないから。護衛に付けられるとしたら、その頭の悪い傭兵一人と、あとは客に出されたカットフルーツ全部食い荒らす馬鹿女くらいしかいないけど」

シエルシは二人を交互に見つめる。確かにこれは、ちゃんと考えて答えを出すべき問題のような気がした。しかしホクトの実力は折り紙つきである。龍さえも討伐した一流の魔剣シンの使い手なのだ。これ以上の護衛はそうそう見つかる事はないだろう。

仮に、追っ手側にも魔剣使いが現れるとしたら。そんな事はロゼもホクトも想定していないのだろう。そこまでして命を狙われ

る理由が彼女にあるのだと、二人は気づいていないのだから。だがシエルシは知っている。その可能性は決してゼロではない事を。

見れば、確かに弱小だが潜水艦の性能はそう悪くなさそうである。文字通りの少数精鋭の組織、ということだろうか。ギルドに詳しくないシエルシが知る良しもなかったが、砂の海豚は中小ギルドの中では名の知れた組織である。気質は決して悪くなく、依頼成功率は非常に高いのだ。

シエルシがそうして考え込んでいる間、ロゼとリフルもまた別件で耳打ちを交わしていた。ホクトは暇だったのでうさ子の隣に座り込み、その頭を撫でて慰めている。暫く思案の空白が続き、答えはほぼ同時に決まった。

「……お金なら、あります。私を……私の護衛を、正式に依頼させてくれませんか？」

「ああ、引き受けるよ。値段は　　こんなもんでどうかな？」

ロゼが机の上のそろばんを弾き、シエルシはほっとした様子で頷く。契約の書類を書き込み、とんとん拍子に護衛依頼が決まっていた中、護衛する張本人はうさ子のとなりでボーっとしていた。

「契約成立　　っと。ギルド本部の仲介料がない分安いと思うけど？」

「はい。この値段なら、手持ちで十分お支払い出来ます」

「じゃあ、部屋にはリフルが案内するから。これからの事はとりあえず休んでから考えよう。僕たちはまだ少しこの街に留まるしね」

リフルに案内され、シエルシが部屋を出て行く。それを見送り確

認し、ロゼはホクトを手招きした。

「おう、どうした？」

「彼女の護衛はあんたに任せるよ。あんたが連れ込んだんだし、責任は持てよ」

「ああ、そりや当然。しかし珍しいな？　ロゼにしては聞きわけが言いというか……」

「まあ、僕には僕なりに考えがあつてね……。彼女のご機嫌取りもあんたの仕事だ。初めてのクライアントなんだから、丁重に扱えよ」

ロゼの言う考えというものがひっかかったが、一先ず目先の問題は解決したのだ。ホクトは頷き、大人しく従う事にした。仕事があるからとロゼに部屋を追い出されたホクトとその足元に転がったうさ子が移動を開始したのは、それから数分後の事だった。

「おいうさ子……しっかりしろ」

「ごはん……ごはん三杯……」

「……………お前、そんなに食つてると太るぞ」

「……………？」

「え、なにその“何言ってるのか理解できない”みたいな目……」

うさ子が知性の無い目をしている頃。リフルに案内された客間の中、シエルシは深く息を着き同時にマントを脱いでいた。

マントに覆われていた金色の髪を解き放ち、身体についた砂を落
としながら少女は窓の向こうを眺める。港に停泊する無数の船の姿
……無法者の街。思えば遠くに来てしまったものだと、感慨深くな
る。

白い、蝶を模した髪飾りが窓ガラスに映り込んだ影の中で輝いて
いた。マントに覆われていたのは、白い装束であった。オケアノス
の海では滅多に見る事の無い、上位階級の人間だけが着る事を許さ
れた魔道装束である。

ドレスにも似た、しかし動きやすさを考慮された戦闘服は彼女が
本来着用しているものではない。その上着を脱ぎ、ハンガーにかけ
る。備え付けのシャワールームを見つけ、周囲に人の気配がない事
を確認し服を脱ぎ始めた。

「待っていてください、お母様……。私が、必ず貴方に」

蒼い瞳に憂鬱を映しこみ、少女は目をそっと瞑る。白い素肌が露
になった下着姿のまま、胸にそっと手を当てる。少女の背中には巨
大な術式が刻まれている。その術式を全て露にするかのように、下
着にそっと手をかけた。

「……………で、覗いてるのバレました、と……………」

シエルシのいる客間の外、頭から血を流すホクトの姿があった。
隣に立っているリフルの拳から血が滴っていることから大体の状況
は推測出来る。

「結局、なんであっさり引き受けたんだ？ 面倒ごと以外の何者で
もないだろう、あの子は」

正座させられたままホクトが真剣な表情でリフルに訊ねると、剣士は静かに目を閉じた。血の滴るグローブを剥ぎ、ヒールを鳴らして踵を返す。

「貴様には関係の無い事だ」

「そう言うと思ったよ」

「貴様こそ、何故彼女を助けようと思った……？」

完全に振り返る事無く、留意するためだけに僅かに首を回してみせるリフル。問いかけは余りにも無意味なものだった。理由など、考えたところでキリがない。

「そうだな……。強いて言うならば、美少女だからかね」

「……………ロクでもない理由だな」

「だが真理だろ？ いい格好したいから、男は本気で頑張るんだ。本気で何かを為せばそれはちゃんとかっこよく見える。嘘から出た真になりゃいいのさ」

「……………覗きをしようとして正座させられている男の言葉でなければ、もう少し説得力もあったのだろうかな」

何も言わず、そのままリフルは立ち去っていく。その口元に笑みが浮かんでいたように思えたのはホクトの妄想だったのかもしれない。

何しろ、ホクトはリフルからの代理命令 術式により拘束され

ているホクトとロゼの上下関係の代理行使　により、全く立ち上がることが出来ず足が痺れたまま正座させられているのだから……。

「……………ちなみにこれ、いつまで続くんだ？　おーい、リフルさんやーい……………」

結局ホクトの正座はリフルがど忘れ　故意か過失かは定かではないが　してしまい放置され、翌日の朝になるまで誰にも気づかれず助けられる事もなかったと言っ……………。

地獄と呼ばれた場所(2)

「アンダーグラウンドが、何故地獄と呼ばれているのか……貴方は知っていますか？」

一日の大半を支配する砂の海の上、ガルガンチュアは静かに進んでいる。船上部にあるバルコニーには潜航の名残である排除し切れなかった砂が残り、シエルシの足音をより大きく闇に響かせた。

風が優しく吹き続け、シエルシの髪は靡き続けている。萎びた煙草を口に咥え、その隣でホクトは手すりに背を預けて空を見上げていた。煙は風と共に流れて去り、シエルシは言葉を続ける。

「それは、誰もアンダーグラウンドの事を知らないから……」

アンダーグラウンド。それは、六つしかない界層の中、最下層とされるオケアノスよりも下に存在する、謎の地下領域である。

そこへ送られるのは帝国に反逆した罪人たちと、それを監視する為の騎士だけである。一般人にとってアンダーグラウンドの存在は非常に不透明であり、そこに送られた人間は誰一人戻ってくる事はない。故に人々は未知の領域であるアンダーグラウンドを恐れ、そこに送られることを死と同義に感じていた。

恐怖と畏怖は連なり、地下にある世界に対し人々は自然と地獄という言葉を用いるようになった。それは決して不自然な事ではない。誰も、その存在を証明出来ない。少なくとも、そこに足を踏み入れない限りは。

「貴方たちは、アンダーグラウンド送りになった罪人たちを助けたそうですね」

「結果的にそうなっただけで、助けたつもりはねえけどな」

「……ですが、結果的には。そうなったのでしょうか？ 助けましたは、何処へ……？」

「さてね……。そのへんは、俺じゃなくてロゼのほうが詳しいんじゃないか？」

そう片目を閉じて笑うホクトであったが、実際の所彼は助けた罪人たちがどうなったのか、知っていた。ガルガンチュアに乗せられた罪人たちは、カンタイルの町に放たれたのだ。勿論、重罪人は然るべき処理を行った。しかしあの列車に積み込まれていた罪人の殆どは、反帝国思想であると判断された一般人なのである。

帝国は、反帝国思想の人間に対して一切の容赦をしない。慈悲はなく、反論や言い訳を聞くつもりもないのだ。反帝国思想である可能性さえあれば、それだけで大罪人として扱われる事となる。

カンタイルでは当たり前のように存在している反帝国主義者たちも、表では別の顔を持っている。砂の海豚が何でも屋同然の組織として活動しているように、表立って反帝国活動をしている組織は非常に少ないのである。

ロゼの目的は、そんな反帝国主義者たちの救出と帝国の計画の阻止であった。結果、列車に乗せられていた罪人の半数以上が砂の中に沈み……。しかし生き残った罪人たちは救出することに成功した。その成果を成功か、或いは失敗かと判断するのは難しい所である。少なくとも計画した本人であるロゼは納得していない様子だった。

冷たい風の中、シエルシは長い金髪を風に靡かせ憂鬱さを湛えた瞳で世界を見つめている。風の向こう、まるで誰かがそこに存在しているかのように……。白い、見覚えのない装束が風に尾を引いている。ホクトは煙草を片手に身体を起し、シエルシを見つめた。

「風邪引くぜ。こんなクソ寒い中、ぼんやりしてたらよ」

「……それは、貴方も同じ事でしょう？」

「俺は船内禁煙だからしょうがなくだ。そろそろ潜航の時間になる。どっちにしる、戻った方がいいぜ」

「あの」

歩き出したホクトの背中、そこにシエルシは声を投げかけた。男は煙草を指先で弾き、砂の海の中に放り込む。その行いは決して褒められた事ではなくシエルシは一瞬眉を潜めたが、諦めたのか言葉を続けた。

「どうして私がアンダーグラウンドに行きたいと言い出したのか……不思議には思わないのですか？」

「不思議だな」

「……理由を、訊かないのですか？」

振り返り、首をかしげるホクト。それから少しの間考え込み、シエルシへと歩み寄る。

「訊いて欲しいのか？」

「いえ、そういうわけでは……」

「だったら訊かないさ。話したくなったら話せばいい。君は俺のクライアントなんだ。必要なことを、必要なだけ求めればいいさ。違

うか？」

全くの正論である。しかしシエルシは納得の行かない様子だったが、いつまでもここで話しているわけにもいかない。ホクトは艦内の掃除を命じられており、現在絶賛サボり中なのである。

再び艦内へと続く扉に向かって歩き出すホクト。今度はもう、シエルシもそれを留めるようなことはしなかった。振り返り、再び砂の海を眺める。この界層は 余りにも寂しく、冷たく……物悲しすぎる。

ホクトが吸い込まれていったガルガンチュアの口へとシエルシもゆっくりと降りていく。迷いは勿論、消えたわけではない。

ガルガンチュアがカントイルを出港して三日目。事の発端は、クライアントであるシエルシが口にした、一つの我俣であった。

地獄と呼ばれた場所（2）

「アンダーグラウンドに行きたい……？」

食事時、食堂に集まって砂の海豚のメンバーたちが食事を取っている時の事である。突然、シエルシがそんな事を言い出したのである。

アンダーグラウンドと言えば、当初からシエルシの目的地であった。何しろそこに忍び込む為にあの列車の中に潜んでいたのだから。しかしその事実は伏せられており、彼女はこれからもそれを話す予定はなかった。

事情は、誰にも話せない……。本当の事を話せば彼らがどんな顔

をするか判った物ではない。彼女に求められているのはこの状況の中、いかに彼らを騙し、ただのクライアントとしてアンダーグラウンドに潜入するか。その一点に尽きると言える。

一方、ロゼとリフルはどこかその突拍子もない言葉に対して眉を潜めつつも、納得しているような節があった。さて彼らがシエルシの企みに感じているのかどうかはともかくとして、クライアントからのお願ひ事である。当然、無碍にするわけにもいかない。

しかしそんな探りあいにも近い状態が続く食堂の中、二人だけ暢気に食事を継続している者が居た。白い耳をばたばたと上下させ、幸せそうに目に星の輝きを宿している少女が一人。その隣で煙草を啜えている男が一人である。

「んで、そのアンダーグラウンドってのは……何だ？」

全く状況についていけないのも無理はない。ホクトは記憶喪失なのである。見かねたようにリフルが溜息を漏らし、目を瞑る。

「アンダーグラウンドとは、第六界層オケアノスよりも更に下に存在する、いわば第七の界層の事だ」

「へえ、そんなもんがあったのか。でもロクエンティアは、六番目までの界層しか存在しないんじゃないか？」

「アンダーグラウンドは“界層”^{フレイト}としてのナンバリングを受けていない。帝国の方針でな。尤も、あそこはナンバリングを受けていようがいまいが、あまり関係がないのだが」

アンダーグラウンド。それぞれの界層を一番目から1G、2G、3G……と略して表記するこの世界において、アンダーグラウンドのコードは“UG”で通っている。UGが界層としてのナンバ

リングを受けていないのにはいくつかの理由があるのだが、その中で最も大きな理由として上げられるのが“他の界層との差別化”である。

UGには街と呼べる施設は存在せず、古よりそこは“地獄”であると語り継がれてきた。実際にUGに立ち入る事は帝国によって禁じられ、送り込まれた罪人たちはそこで強制労働についているだとか処刑されているだとか、様々な噂が存在するがその実体は未だ不透明である。

そんな通常の世界とはかけ離れた場所　地続きの地獄としての演出であり、UGという名前はそれに相応しいのである。制定したのは帝国だと言われているが、結局の所帝国の一部の人間以外にUGがどうなっているのかは判らないのである。

「特に、反帝国主義者はUG送りにされる事になっている。人々は迷信的なUGの存在を未だに恐れ続けている……。UG送りは、反帝国主義者を押さえ込むいい薬でもある」

「それで地獄なんて演出されてるわけだ。実際は地続きなんだから、地獄も天国もあったもんじゃないんだろうけどな」

「確かな事は、UG送りになって無事に帰ってきた人間は一人も居ない……。それだけだ」

語り終え、リフルはグラスに注がれた水を一気に呷る。緊迫した空気の中、うさ子がもぐもぐと口を動かす音だけが響いていた。

「……お前、全く緊張感ないのな」

「もきゅ？」

「つか、皆もつとつくに食い終わってるのに、何回もおかわりしやがって……」

「だって、二回まではいいって！　いいってロゼ君が言ったもん！　言ったよね？　言ったよねっ？」

「……言ったけど、本当に毎回二回きっちりおかわりするか、普通……」

居候に近い形で居座っているだけなのだから、もう少し肩身の狭い思いをするべきなのだが、うさ子にそうした神経を求めるだけ無駄なのかもしれない。

話が脱線してしまったが、シエルシはずっと肩を縮こまらせたままである。こちらはクライアントなのだから、もう少し偉そうな態度でもいいくらいである。遠慮している……というより、シエルシはずっと緊張した様子だった。おそらく彼女の気が休まった瞬間はガルガンチュアに乗り込んで以来、一瞬たりともないのだろう。

「それで、アンダーグラウンドに行きたい理由というのは？」

腕を組み、ロゼが語りかける。シエルシは背筋をびくりと震わせ、微かに震える声で言った。

「それは……その……っ」

「言うておくけどね。アンダーグラウンドに潜入するなんてのは、馬鹿のやる事だよ。クライアントの護衛を引き受けはしたけど、自ら死に行くヤツを守る事なんて出来るはずがない」

「おいおい、そんなにヤバいのかよ？」

「ヤバいで済むわけないだろ……？ アンダーグラウンドは帝国の騎士団が駐留しているゲートを通過しなきゃ潜入できないし、仮に潜入できたとしても何がどうなっているのか全く判らない場所だ。危険は完全に予測不能……何が出るのかも判らないのに、依頼人を守れるか」

UG関連の情報は帝国により完全に操作されているし、UGへの道は帝国管理のメインゲート以外には存在しないとされている。入ったら誰も出てこられない地獄……そんな所にわざわざ行きたがるのは死にたがりくらいのものである。護衛しろといわれても、地獄の川まで共に渡るのは御免被る 当然の反応だった。

「報酬なら、払いますっ！ アンダーグラウンドまで……私を送り届けてくれるだけで構いません！」

「報酬って……。死亡確率の高い依頼がギルドでどれくらいの相場で依頼されてるのか、あんたわかってんのか？ それに金額の問題じゃない。そんな依頼、組織全体に関わる事だ」

ロゼの正論にシエルシはぐうの音も出なかった。ただおずおずと引っ込み、項垂れるだけである。

「しかも理由はいえないと来た。バカにしているとかわれられてもしょうがない」

「そ、そんな事は……」

「おいロゼ……あんま子供を泣かすなよ」

「わっ！？ 私は十九歳ですっ！ 子供じゃありません！」

十九歳といえは口ゼより年上である。見た目的にも小柄な口ゼよりは年上なのだが、どうにも世間に関しては口ゼよりも無知らしい。少なくとも自分は子供ではないと叫ぶような人間は、どこからどう見ても子供そのものだ。

「十九歳ねえ……。そりゃ大人だ。うん、大人だとも」

「何故、ニヤニヤしているのですか……？」

「身体は大人！ 頭脳は子供！ ってか？」

ホクトの視線はシエルシのふくよかな胸元に向けられている。慌てて両腕でそれを隠し、敵意を込めた視線でホクトを串刺しにするシエルシ。ホクトの冗談は一向にシエルシに理解される気配はなかった。

「貴方は……騎士道とは程遠い方なのですな」

「生憎傭兵でね。育ちも多分、あんまりよくない」

「身なりを見れば判ります……！ 貴方みたいな人に助けられたなんて……」

屈辱。言葉にせずともそれは全員に伝わった。シエルシにしてみれば、あの月夜自分を助けてくれたホクトは少なくともヒーローだったのだ。ピンチに颯爽と現れ、自分の命を救ってくれた剣士……と書けば、少女向けのメルヘンな小説にでも出てきそうな男前である。しかし蓋を開けてみればこの通り、ただのスケベであった。

期待していただけにシエルシの怒りはより一層である。

そして、そんなシエルシの気持ち全員それなりに理解しているつもりだった。冷やかな視線は四方八方から降り注ぐ。ホクトは煙草を灰皿に押し付け、苦笑を浮かべる。

「なんスか……？ 皆さん、視線が怖いッスよ」

「兎に角、私をアンダーグラウンドまで送り届けてくれるだけでいいんです！ 帰りは構いません！ 報酬も支払います！！」

「だったらまずどうやって送り届けばいいのか！ しかも帰りは構いませんって、あんた大金を今用意出来ないんだろ！？ 報酬はあんたが生きて帰ってこなきゃもらえないだろがっ！」

「それは……！ それは、その……」

「ったく、あんた言ってる事が滅茶苦茶だ……。具体的に潜入方法はどつするんだ？」

「それは……！」

シエルシは一瞬ためらったが、少しの間思案しそれから迷いを振り切るように首を横に振った。立ち上がり、机の上に小さな半透明の石を置く。そこには術式が刻まれており、薄い長方形に石は何かの機械部品のようにも見えた。

「ここに、UGへ通じるルートが記されています」

ロゼとリフルが驚き、身を乗り出した。ホクトもそれに倣って石を見下ろす。ホクトにしてみればそれはなんの変哲も無いただの石

なのだが、術式を魔石に刻み込んだ一種の記憶媒体である事は見る者が見ればすぐわかる。

「帝国が使用している通常のゲート以外にも、“シャフト”に侵入する方法はあるんです」

「ロゼ先生、シャフトって何スか？」

「……。シャフトというのは………というか誰が先生だ誰が」

「いちいちツッコまんでいいから、話進めようぜ」

カチンと来たロゼであったが、正論である。仕方がなく周囲を見渡し 長い櫛を一本、テーブルの上から手に取った。そしてそれを徐にうさ子が食べているサラダの中に突き刺したのである。

「ああああああ ツー？ うさのトマト ……!!!」

櫛に次々にトマトを刺していくロゼ。その度に悲鳴染みたうさ子の声があがり、最終的に櫛にはトマトが三つ、突き刺さっていた。

「ロクエンティアはこういう世界だ。巨大な櫛に、世界が六つ突き刺さってる」

「……………判りやすくて助かるが、うさ子が目を見開いたまま燃え尽きて真っ白になってるぞ」

「知るかバカ……。で、シャフトというのはこのトマトを刺している櫛に該当する」

ロクエンティアは一つの巨大な塔　シャフトを中心に連なる板状の巨大な世界である。それぞれの界層の中心にはシャフトがあり、シャフトによって世界は支えられているのだ。

現在でこそ各地に上下の世界を行き来する為の装置が開発されているものの、かつて世界はシャフトによってのみつながれていた。故にシャフト周辺では幾度も戦乱が巻き起こり、シャフトを制する人間が天下を制するとまで言われたほどである。

「ま、今じゃ帝国の管理下になっているけどね。シャフトさえ押さえておけば、上下の移動を監視する事も、大規模な世界移動も簡単に行えるってわけ」

「なるほどねえ」

「で、UGが界層の一つに数えられていない理由の一つがここにもある。UGは、厳密にはプレートじゃないんだ。シャフトの中つまりオケアノスより下のシャフトの中に存在するんだよ」

ロクエンティアに存在する六つの界層は、文字通り間違いなどではない。最下層は第六界層のオケアノスであり、そこから下に世界はないのである。シャフトはオケアノスより下に続いてはいるが、そこにトマトは突き刺さっていないのだ。

「へえ。じゃあ、シャフトに進入さえ出来れば……UGに行けるんだな」

「逆にシャフト以外からは全く進入出来ないから、UGに行くのは難しいという事でもあるんだ。帝国に管理されてるからね」

櫛からトマトを一つ引き抜き、ロゼはうさ子に向かって投げる。

うさ子は目を輝かせ、ぱくりとトマトに食いついてみせる。もぐもぐと口を動かすうさ子をドン引きで見つめるシエルシと、呆れたように笑うリフル……。ロゼはトマトを投擲しつつ、話を続ける。

「シャフトは通常、一つの界層に一つしか出入り口が存在しないんだ。だからそのたった一つの道を封鎖するのは帝国にしてみれば凄く簡単な事なわけ」

「はむっ!」

「それは同時に僕たちの侵入が酷く難しいということでもある」

「はむはむっ!」

「だけでもしも他にルートがあるっていうなら、まあ不可能ってわけでもないかもね」

トマトを全てキャッチし、うさ子は満足げに両手を掲げた。ホクトが笑いながら拍手をし、シエルシがやはりドン引きした様子でそれを見つめている。

「問題は、UGがどうなってるか……だな」

ホクトの言葉にロゼは頷いた。今は兎に角そのもう一つのルートというヤツを解析してみるしかない。記憶媒体を持っていたものの、シエルシはその中に記されている情報を解析できなかったのである。つまり、どうやって行くのかは未だに不鮮明である。

すぐさま媒体の解析をする為にロゼが部屋に戻り、リフルもその後が続いた。残されたシエルシとホクト、そしてうさ子の三人は食堂に残り、解析を待つのであった。

「……………あの……………ずっと、気になってたのですが」

「ん？」

「その……………うさ……………子？ の、頭にあるのは……………なんででしょうか？」

「わからん」

「耳……………でしょうか？ ずっと、動いてるんですが……………」

うさ子の耳は犬の尻尾のようである。感情に反応し、まるくなったり伸びたりする。嬉しい時はぱたぱたと上下させて喜びを表現するし、へこたれると耳もしょぼくれるのである。

シエルシは余程それが不気味だったのだろう。恐る恐るという様子でホクトに問いかけてくるのだが、ホクトにだってなんなのかわからない。そしてホクトは何を思ったのか、突如うさ子の耳をむんずとつかんで見せた。

「な、なんで耳をつかむのーっ」

「あ……………耳なんですね、それ」

「耳だよーっ！！ 耳以外の何者でもないのー！！」

「なんか……………ぐにゃっとしてる」

「やあーっ！ 耳つかんじゃらめえーっ！ー！！」

じたばたと暴れるうさ子。暫く楽しそうに笑っていたホクトであったが、うさ子がぐったりしてきたので慌てて手を離れた。結局ソレがなんなのかは誰にもわからない。

「だって耳……ちゃんとあるじゃないですか」

シエルシの言うとおりである。うさ子の耳は、ちゃんと人間にあるべき位置に生えているのである。では頭から生えているその物体はなんなのか……大いに謎であった。

「何はともあれ、UG行きになったとしても俺の護衛は継続だ。よろしくな、シエルシ」

「……………」

しかし、シエルシは無視である。どこか不機嫌そうなのも無理はない。シエルシにとって、ホクトは最も嫌悪するタイプの人間である。軽々しく、礼儀知らずで緊張感に欠け、何より女性に目が無いのだ。正真正銘の三枚目である。シエルシは元々男性は苦手だったが、ここまで嫌いなタイプも珍しい。

無言で席を立ち、そのまま立ち去ってしまうシエルシ。それを見送りホクトは求めた握手の手を空しく引っ込めた。ふりかえるとうさ子がお茶を飲んでほっと一息ついている。その緩んだ頬が妙に気に入らず、また耳を鷲掴みにするホクトであった。

地獄と呼ばれた場所(2) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場

> i 3 4 5 9 | 4 9 <

うさ子「うさ子でもわかる！ ロクエンティア教室のお時間だよ！」

ホクト「……………まあ色々突っ込み所はあるけど、ここは飲み込むぜ」

うさ子「というわけで、このコーナーでは本編で疑問な事を、うさ子が解決しちゃます！ 第一弾である今回は……！！ ずばり！ ずばり！！ “砂の海豚”はなんで“海豚”なのか！ です！！」

ホクト「……………まあ、なんでイルカなんだろうな？」

うさ子「うんうん」

ホクト「もっと強そうな動物の名前にすればいいのにな」

うさ子「例えば？ 例えば？」

ホクト「砂の……サメとか」

シエルシ「いいじゃないですか、イルカ。かわいいですよ」

うさ子「でも、食べられないよ？ その点、サメはまだ食べられるところあるし……………」

シエルシ「……え、そういう問題なんですか？」

ホクト「なら、砂のクジラとかにすればよかったのにな」

うさ子「！？ ホクト君、ホクト君！ それはね、名案なのっ！！

早速ね、ロゼ君にお願いしてくるのっ！！」

シエルシ「ええ！？」

ホクト「で、結局なんでイルカなんだ？」

リフル「私も知らないな。先代の団長の時からこの名前だから、今は亡き先代の団長に話を聞くしか答えを知る事は出来ないだろう。それよりロゼ様に変な事を吹き込むのはやめる」

うさ子「でも、クジラの方がおいしいよ？」

リフル「……だからどうした」

ホクト「そんなわけで、第一回はここまで！ また次回、お会いしましょう！」

うさ子「……でも、イルカって漢字でかくと、すっごく美味しそうだよね！」

シエルシ「ええ！？」

地獄と呼ばれた場所(3)

「本当にここが、あのシャフトの中まで続いているのか……？」

一歩一歩歩む度、砂を踏む感覚が靴裏から伝わってくる。見上げる視線の先、そこには天へと続いている巨大な塔の姿がある。世界を支えるシャフト　大分近づいて見るそれは、塔というよりは巨大な壁そのものだ。

遠く、遠くから眺めなければシャフトが塔である事は判らないだろう。崩れ、風化した瓦礫の山の中ホクトはその中の一つに腰を降ろし、煙草に手を伸ばした。周囲には砂の海の中に小さく浮かんだ島のようになっており、そこにはいつの時代の物かも判らない建造物が連なっていた。

シャフトにほど近い場所に浮かぶ島　ユエナ遺跡。かつてこの第六界層にまだまともな大地があり、文明が栄えていた頃の遺跡の一つであるとされているその島にホクトたちは上陸していた。

ガルガンチュアは現在島に隠れるようにしてその身体の半分以上を砂の埋め、潜伏している。暢気に煙草を吸っているホクトとは対照的に他のメンバーは緊張感のあるきびきびとした動きを続けた。

遺跡の影から覗き込むシャフトのメインゲート方向、そこには無数の帝国の戦闘用艦が駐留している。列車が一つ、UG行きのゲートに吸い込まれていくのを見送り、ロゼは眼鏡を押し上げたため息を漏らした。

「ユエナ遺跡……ここの警戒は本当に皆無なんだな。媒体の情報が間違っていないければ、この中に」

「UGへの道が……」

風の中、シエルシが小さく頷いた。一日の大半が夜であるが故に、彼らは闇の中に浮かんでいる。ほぼ光も無い世界であったが、遺跡周辺には小さな光の粒が舞い、それが彼らの道しるべとなっていた。記憶媒体に記されていたUGへの抜け道、それがこのユエナ遺跡にあると発覚し、ホクトたちはここを目指して移動を続けてきた。実際にシャフトに近づいてみてわかるが、メインゲートの警備は尋常ではない。当然突破は不可能であり、今はこの不確かなルートに頼るほか無い。

浮かび上がる光の粒をうさ子は楽しそうに追い掛け回していた。リフルが先に遺跡の出入り口を調べ、ロゼたちを呼ぶ。ホクトもそれに倣い、岩の上から立ち上がった。

遺跡の入り口は封鎖されていたが、ロゼが術式を改竄する事で封印は解除される。ホクトには何をやったのか理解出来なかったが、それはシエルシにも同じ事である。ロゼが扉に手を翳し、呼吸をするかのように成し遂げたのは高度な暗号解除術だったのだから。

「ロゼ……貴方、どこでそんなに高度な魔術を……？」

「独学で学んだんだよ。僕には戦闘能力はないからね。組織を支える為に、頭の方を良くしたのさ」

「ほお。すげえなあ、ロゼ。ちょっと見直したぜ。列車の中じゃ緊張してビビりまくってたのによ」

その言葉にロゼが笑顔のままホクトの靴を思い切り踏みつけた。声にならない悲鳴を上げるホクトであったが、誰も彼に同情はしなかった。余計な事を言うからそういう目に遭うのだ。

「あれは、初の単独任務で少し緊張してただけだ！ バカ！」

「へいへい……。ま、これで道は開けたわけだが……」

ホクトはそつと暗闇を覗き込む。地下へと続く階段が、ひたすらに続いているように見えた。ためしに近くの瓦礫を放り込んでみる。どこまでも落ちていく音がする。

「封印されてたってことは、未開の遺跡ってわけだ。さて、鬼が出るか蛇が出るかってなもんだ」

肩をすくめるホクト。しかしリフルとロゼは特に動揺する様子はなかった。ただシエルシだけは不安なのか、先ほどからずっと緊張した様子で握り締めた剣を見つめていた。

剣は元々彼女が携行していたものではなく、リフルに貸して貰ったものである。多少は剣にも覚えがあるというシエルシの言葉に、これから身を守るのにないよりはいい　というのがリフルの判断だった。

握り締める白い剣の柄は美しい装飾が施され、シエルシに良く似合っている。しかし戦闘用というよりはアクセサリ……。ただのお守りくらいにしかならないだろうということは誰もがわかっていた。それは、彼女の剣の持ち方を見れば一目瞭然である。

「しつかしいのか？　俺は兎も角、ロゼとリフルまで来ちまって。砂の海豚は放置かよ」

「アンダーグラウンドへ続く道がわかれば、それは大発見になる。それに依頼は依頼だしね。金はたんまりもらうつもりだし　ガルガンチュアは暫く潜航させておくから大丈夫だ」

そういう問題でもない気がしたのだが、ホクトは特にそれ以上言

及はしなかった。ロゼとリフルにも、当然それなりに考えがあるのだから。そんな中、光を追いかけていたうさ子はホクトのところに駆け寄り、シャツの裾をぐいぐいと引っ張った。

「ねえねえ、ホクト君ホクト君？」

「あん？ なんじゃらほい」

「あの、ふわふわ〜ってしてる光はなあに？」

「んなもん俺が知るか。ロゼ先生に聞け」

「ロゼ先生！ ロゼ先生っ！！」

「面倒だからって僕に投げるなよ……そして誰が先生だ」

ロゼにすがりつき、頬擦りするうさ子。困った様子でそれを引っぱがし、ロゼは周囲を見渡した。ふわりふわりと浮かぶ無数の光……それは遺跡にだけ見られる現象であり、ロゼも決して見慣れていないわけではない。

「遺跡には、濃い魔力が漂ってる事が良くあるんだよ。すると、発光現象を起し……まあつまりたぶん魔力っぽい何かであるという事くらいしか判ってないんだ。誰も研究しないしね」

「ほへ〜……。じゃあ、あれは全部魔法さんなのかなあ？」

目をきらきらと輝かせるうさ子。そんなうさ子を放置し、リフルは内部を偵察していた。片手で術式を発動し、掌の上に浮かぶ小石大の光の結晶を出現させる。地下へと続く階段は完全に老朽化して

いるが、何とか進む事が出来そうだった。

「ロゼ！ 先に進みます！ ホクトは最後尾でバックアップだ！」

「気が早いねーちゃんだ……。じゃ、ラストは俺が行くことでほら、どんどん行けよ。一人ずつしか通れねえぞ」

「わ、わかっていきます！ そんなに押さないでくださいっ！！」

ずっと黙り込んでいたシエルシを階段に押し込み、続いてうさ子も押し込む。最後にホクトは周囲を一回り眺め、それから暗闇が続く階段へと足を踏み入れたのだった。

地獄と呼ばれた場所（3）

ユエナ遺跡内部はまず、地下へと続く非常に長い階段で始まる。階段を数キロという長い距離進み、そうして漸く違う景色へと辿り着く事が出来るのだ。

永遠に続くのではないかという長さの階段とその狭さに全員息苦しさを堪えきれなくなりつつあった頃、リフルの合図で開けた場所に出た事を知る。それぞれが階段を出て見たのは地下に広がる巨大な神殿だった。

地表と同じく魔力の光が内部を薄ぼんやりと照らし出し、非常に高い無数の支柱が乱立している。石造りの大地を何度か踏みしめ、ホクトは漸く一息つく。

「階段なっげえ……」

「はふう……。うさはおしくらまんじゅうになってしまっかと思っ
たよ」

「……それは、なる物なんですか？」

シエルシ、うさ子、ホクトの三人がそんな事を口走っている中、
リフルは既に周囲の警戒を。そしてロゼは分析を開始していた。ふ
わふわと舞う水色の光……。それを手の中にそつと包み込むように握
り締め、目を細める。

「……珍しいな。これは、水の“魔素”^{エイル}だ」

オケアノスは砂の海である。その全域に、基本的に水は存在しな
い。水は他の界層から運ばれてくるもので全てがまかなわれており、
この世界において非常に貴重なものである。しかし耳を澄ませ
ばどこからか水の流れる音が。しかも、ごうごうと大量の水が勢
い良く流れている音が聞こえてくるではないか。

漂う水色の光は水の力がこの遺跡に満ちている証拠である。それ
をそつと握り潰し、ロゼは振り返る。水源地としてだけでもこの遺
跡には計り知れない価値がある。ロゼは満足した様子で振り返り、
ホクトたちの会話に参加した。

「ピクニックじゃないんだ。あんまりはしゃぐなよ、みつともない」

「しかしとてつもなく広いな……。道とか大丈夫なのか？」

「一本道なら、まだよかったのだが……。これでは遭難する可能
性もありそうだ」

リフルが腕を組み、困った様子でそう呟いた。ホクトは少し歩き、遠くまで見渡してみる。水の流れる音が奥から聞こえ、魔素が濃くなっているのを感じる。

「なあ、この水ってどこから来てるんだと思う？」

「……オケアノスに地下水源は存在しないはずだから、この界層じゃない事だけは確かだよ」

「だったらこの水を目指せばいいんじゃないか？ 少なくともこの界層じゃなどうか繋がつてるんだろ？」

「………………。まあ、他に全く情報も手がかりもアテもないんだしな……。おそらく、水はシャフトの中を通っている水脈ダクトに関係しているんだろうし……。だとすれば、水の方に行けばシャフトに出られるかもしれない」

「まず、UGに行く前にシャフト探さないとなのね……。こりゃ骨が折れそうだ」

ロゼとホクトが話し合っ中、背後ではリフルがうさ子に小さなペンを手渡していた。きらきらと光るペンを手に、うさ子は耳をぱたぱたさせて喜びを表現する。

「リフルちゃん、これくれるの？」

「…………リフルちゃん……？ いや、これは貸すだけだ。来るなど言っているのに無理についてきたんだ、貴様にも仕事はして貰わねば困る」

リフルはペンをうさ子から奪い、近くにあった支柱にサインを施した。サインは一度光って浮かび上がった後、すうっと柱に溶け込むようにして消えていく。

「これで支柱に時々チェックを入れてくれ。万が一道に迷った場合の目印になる」

「わあ〜！ それ、うさにも出来るお仕事かなあ!？」

「ああ。別に目印になればなんでもいい。兎に角何か書いてくれ」

うさ子の手にはポンとペンを置くリフル。うさ子は初めて与えられたまとも(?)な仕事に奮起し、耳をぱたぱたさせながら早速近くの支柱にお絵かきを開始したのであった。

「おーい、とりあえず水源を目指す事になった！ ちゃんとついてこいよー!」

「は、はいっ!」

シエルシが慌てて走り出すが、うさ子はまだお絵かきに夢中である。リフルがうさ子の首根っこをつかみ、ひょいと持ち上げる。見れば柱には誰かの似顔絵が書かれていた。

「……これは、誰だ?」

「え? ホクト君だよ たばこ〜すぱすぱ〜 えろえろ〜へんたい〜」

楽しそうに歌っているうさ子をずると引きずり、目眩のする頭を抑えリフルはホクトたちに合流した。やはり、つれてくるべきではなかったのだ。艦内で出発メンバーを決める時、号泣しながら床の上を転がりまわり一緒に行きたいと訴えたうさ子……それに負けてしまった過去の自分が恨めしく思えた。

ようやく出発の準備が整い、リフルが先頭、そこにロゼが続き、うさ子とシェルシを挟み込むようにして最後尾にはホクトが続く。そんな縦に続くポジションのまま、遺跡探索は開始されたのであった。

暫くの間、広大な空間に響き渡る靴音と砂を踏む音だけが世界の全てだった。列を乱す事は許されず、これでは殆ど階段での状況と変わらない。シェルシは終始緊張した様子でずっと剣を抱きしめるようにして握っているし、うさ子は鼻歌交じりでピクニツクの気分である。リフルは先頭を警戒しつつ移動し、ロゼは魔術で光源を確保……。それをホクトは最後尾から眺めるだけだ。

「なあロゼ先生、ちっと質問」

「だから先生じゃない！ で、なんだ？ 今必要なことか？」

「いやあんま関係ねえけど。この遺跡って、いつの時代のものなんだ？」

「さあね……。紀元前である事は間違いないけど、流石にいつの時代のものかまでは判らないよ。遺跡も、基本的には帝国の学者が調査するもんだし。遺跡を無断で荒らすのは基本的に罰されるしね」

「じゃあ俺たちモロにアウトじゃねえか……。しかし、全く警備なんてなかったぞ？」

「そこは確かに納得の行かないところだけど、こんな辺境に罫を仕掛ける意味もないだろ？ 単純に帝国の人材不足か、テキトーな仕事の所為なんじゃないの」

ロゼがそう語り、正面を見た時であった。リフルが突然ロゼの前に腕を伸ばし、行動を阻害する。正面、何かが蠢く気配があった。リフルが無言で剣を抜き、ロゼは背後に跳ぶ。何が起きたのか判らないシエルシはただおろおろと周囲を見渡し、うさ子は支柱にラクガキをしていた。

「どうした！」

「ホクト、前が出る！ 何かが来るぞ！」

そう叫んだ所でリフル目掛けて何かが跳んできた。それは横薙ぎに広範囲を吹き飛ばし、いくつかの支柱を押し折ると同時にリフルの身体を宙に吹き飛ばす。

轟音と共に支柱がいくつか倒れ、シエルシたちの上に落ちてくる。ホクトは一瞬で魔剣を召喚し、それを振るって支柱を弾き飛ばした。砂埃が舞う中、ロゼはシエルシの手を取って後退する。

「ロゼ！ シエルシを頼む！」

「判ってる！ って、うさ子は何やってんだ！？」

「はわわわわわ……！？ ロゼ君のお顔を書いていたら、突然柱が怒って倒れてきたあ……！？」

完全到的外れ、しかも場違いもいい所である。魔剣を構えたホクトが一瞬真っ白になり、ロゼが無言でうさ子の頭を引っぱりたい。

「いたい！？　なんでぶつの！？」

「いいからこつちだバカッ！！」

「みみーっ！！　耳ひっぱっちゃだあああっ！！　うわあああ
ん！　ロゼ君のいじわる！　いじわる！」

ロゼがシエルシとうさ子を連れて後退するのとすれ違い、吹き飛ばされていたリフルが走って前線に戻ってくる。盛大に吹っ飛ばされたわりに、その身体は無傷であった。

いつの間にか抜いたサーベルで攻撃を防いだのだが、リフルが手にしているサーベルは真つ二つに押し折れていた。ホクトは横目にそれを見て眉を潜める。

「お高そうなサーベルがおしゃかになつちまったなあ」

「……………全く、こんなものがあるとわかっていれば最初から魔剣を出したと言つたものを」

二人の正面、そこには巨大な触手が無数にうねっていた。鋼鉄の鱗を全身にびっしりと纏った蛸のような魔物である。蛸と違う点があるとする、その胴体は非常に鉱石に良く似た材質で構築され、術式の紋章が輝いている事だろうか。八本の触手はそれぞれが独立して動き続けており、暗闇に浮かぶその不気味な姿にリフルは不快感を露にする。

「こいつがいるから、このザル警備か……………」

「ん？　ただの魔物じゃないのか？」

「帝国の烙印が捺されている。帝国に飼われる、番犬の一種だ」

「趣味悪いねえ……。ま、だったら遠慮せずやっちまっつていいんだろ？」

「問題ない。殲滅するぞ」

リフルが虚空に手を伸ばす。腕に刻まれた緑色に輝く術式が浮かび上がり、虚無の空間に剣を象った現実が構築されていく。風が遺跡の中を吹きぬけ、その渦の中心を引っ張り出すように、リフルはその魔剣を召喚する。

光が爆ぜると同時に目に見える程濃い風の魔素が吹きぬけ、リフルの手の中には二対の剣が握り締められていた。それは片や剣と呼ぶには余りにも細く。片や剣と呼ぶには余りにも薄く。剣の部分しか存在しないそれは、武器というよりは何かの芸術品のようだった。二対の剣を正面で重ね、甲高い音をならし火花と共にそれを構える。

“響魔剣グラシア”。リフルの手に召喚され、そして彼女がこれまでの戦いの中で常に命を預けてきた相棒。ホクトはそれに倣い、黒き大剣を構えた。

「あんたの剣、随分と華奢なんだな」

「貴様の剣が無駄に大きすぎるだけだ」

二人はそう一言だけやり取りし、同時に駆け出した。繰り出される触手の一つをホクトは大剣で薙ぎ払うが、びっしりと触手を埋め尽くしている鋼のように硬い鱗が火花を散らせるだけで魔剣は触手を切断出来ない。

「かつてえ!？」

「当たり前だ。オケアノスの魔物は、全て鱗に覆われている」

それはオケアノスの海が、実は莫大な量のナノマシンによって埋め尽くされているという事実由来する、魔物の進化の結果だからである。

オケアノスの砂は表層だけであり、いくつか下の層には無数の生体ナノマシンが蠢く層があるのだ。砂の中に沈んだものはナノマシンによって分解され、砂となる。オケアノス全体を埋め尽くすこの砂の海は、かつてこの界層に存在した全てをナノマシンが分解した結果生み出されたものなのである。

当然、砂の中を移動するだけでもナノマシンの影響を受ける事になる。故に特殊なシールドを搭載した潜水艦など、きちんとした装備で困われなければ人間はこの海では生きていく事が出来ない。魔物も然りである。

「魔物はあの鱗でナノマシンを弾いて生きているのだ。簡単に斬れると思うな」

「何？ それは、連中は全身に潜水艦のシールドがついてると思っただろうがいいのか？」

「そういう 事だっ!」

「道理でお堅いこって……」

リフルは素早い身のこなしで触手の攻撃を回避し、風に舞い上がるようにして本体へと襲い掛かる。回転し、二対の刃で連続して本

体を斬り付けるが、やはり火花が散るだけでダメージを与えられる気配は無い。

「こいつ、龍種よりも硬くねえか？」

「らしいな……。ロゼ！ 強行突破しましょう！」

背後、ロゼが頷く。ロゼはシエルシとうさを連れ、魔物の脇を抜けるようにして走り出した。しかし当然敵もそれを見逃さない。結果、ホクトとリフルは魔物がロゼたちに襲い掛かるのを阻止する形で立ちふさがった。

「まともに相手すると疲れそうだな……」

「甘えた事を言うな。戦って死ぬのが傭兵の仕事だ」

「はあ〜……。ほんとと、可愛げねえよなあ……。あんたってさ」

攻撃を二人同時に防ぎ、ロゼたちが抜けるのを確認して後退しながらロゼたちを追いかける。三人は着実に水源地に向かって移動しているが、魔物はどこまでもしつこく追いかけてくる。

「はわわわ……。っ！？ ロゼ君、すごいのが追いかけてくるよ！」

「見れば判る！！」

「……。ロゼ！ あそこー！！」

シエルシが走りながら指差した場所、そこには水源と思しき巨大な湖があった。湖が出来ている場所の上、滝のようになっていたが

見ればわかった。それは予想通り、折れた水脈ダクトの一つだった。つまり、ここは既にシャフトの内部であるという事になる。

いつの間にか目的地に到着していたのだが、背後には巨大な魔物が迫っている。リフルとホクトならば倒せない事もないのだろうが、これから何が起こるのか判らない事を考えるとあまり無駄な体力は使いたくないのが本音だった。ロゼは周囲を見渡す。湖の向こう、そこにシャフト内の通路に続いている道を見つけた。

「ホクト、リフル！ こっちだ！！」

「先に行つてな！ 足止めしてから追っかける！！」

「ロゼ、お気をつけて！！」

魔物は湖への狭い出入り口を突き破り、豪快に追いかけてくる。地鳴りが続く中、ロゼは二人に任せて走り出した。そんなロゼに手を引かれ、シエルシは戸惑うようにして叫んだ。

「いいんですか！？ あの二人を置いていつて！！」

「素人が残ってるより数倍マシだよ！ あの二人ならうまくやるさ！！」

三人が遠のき、ホクトは剣を改めて構えなおした。正面には巨大な魔物、背後には湖……背水の陣、とでもいうのだろうか。冷静に考えてみればここである程度何とかしておかないと、帰り道で大変なのは目に見えている。

「じゃあねえな……ちつとばかり本気出すか」

ホクトが両手に力を込める。腕の術式が発動し、魔剣に黒い光が送り込まれていく。それを横目で眺め、リフルも同じように剣に魔力を込めた。

「可愛そうだが、足の何本かもらっていくぜ？ タコちゃんよ！」

黒い魔剣を大地に叩きつける。迸る禍々しい波動が飛び散り、魔物は怯むように後退した。剣を片手で頭上に振り回し、肩に乗せホクトは静かに笑みを浮かべた。

烙印（1）

シャフトの中へと飛び込んだロゼの眼下、巨大な縦穴がぽっかりと口を空けて彼らを待ち受けていた。巨大な筒の内側を這う蛇のように、下へと向かう階段が続いている。中央部には無数のケーブルが密集しており、更に破裂した水脈ダクトから漏れた水が滝のように溢れ、階段は水浸し状態になっていた。

水が流れる階段の上は良く滑る。ロゼは注意しつつ、階段を下り始めた。その後にはうさ子とシエルシが続き、三人はひたすらに続く地下への階段を駆け下りていく。

「ロゼ、ここは……!?」

「おそらくシャフトの中のいくつかに分かれたエリアの一つだね……! この縦穴がどこまで続いているのかも、どこまで行けばUGなのかもわからない!」

「はわわ……前途多難だよ」

しかし、前人未到の地下への道である。しかも正規ルートではなく、古代遺跡を利用して進入したのだ。道などあるはずもなく、判るはずもない。一寸先は暗闇……しかし立ち止まる事は出来ない。

古びた階段の上を流れる水を踏みしめ、一步一步を下っていく。全てが轟音に押し流されてしまいそうだった。ふと、シエルシは振り返り頭上を見上げた。彼らは　ホクトとリフルは無事だろうか？

シエルシは見ている。ホクトは、驚異的な戦闘力を持つ龍種を単独で撃破しているのである。それがどんな手段を用いたのかは判らないが、龍種は帝国騎士団でさえ複数の部隊で相手をする危険な魔物である。それを単独で撃退したホクトなのだ、彼ならば問題は無

い　　と思つ。

確信は無い。彼がいかにして龍種を退け、そしてそれはこの状況でも再現し得る可能性なのか　それをシエルシに判断する方法はない。頭上では滝の音にかき消されるようにして戦闘の音が聞こえてくる。しかし、立ち止まるわけには行かない。ここで止まるわけには、いけないのだ。

目的があつた。勿論、こんな物騒な場所にまで忍び込むからにはそれなりの。だからそれを果たす為には犠牲も止むを得ないと覚悟した。自分は大切な目的の為にここに居る……だから、仮にホクトたちが戻つてこなかつたとしても　歩みを止めるわけにはいかない。

一方、上のエリアでは剣戟の音が鳴り響いていた。ホクトの繰り出す魔剣は漆黒の波動を纏い、魔物の鱗に叩きつけられていく。先ほどまでは一方的に弾かれるだけだった刃は命中する毎に鱗を砕き、確実に手傷を負わせる事に成功している。

「しっかし硬いな……！　リフル、あんたの剣じゃどうにもならないんじゃないか!？」

「馬鹿を言え。この程度、どうということはない」

「強がつちゃつてまあ……」

剣を引きずるような姿勢から駆け出す。ホクトの魔剣、その切っ先が大地を擦り火花を上げた。身体を旋回し、剣を繰り出す。魔物が伸ばした触手に対するカウンターである。

振り上げられた刃は触手を打ち返すと同時にその身体に巨大な傷を負わせる。切っ先の軌跡をなぞるように、鱗が爆ぜ、遅れて血飛沫が舞う。魔物の甲高い悲鳴にも似た鳴き声が響き渡り、ホクトは後方へと跳躍し、剣についた血を払った。

「めんどくせえな……」

「本気を出したらどうだ？」

「あんだこそ、出し惜しみしてるんだろ？ それとも部外者の前じや本気は出せないってか？」

ホクトの指摘は正に凶星であり、リフルは無言で眉を潜めた。リフルは魔物の討伐は馴れたものであり、最早生活の一部であると言える。本気を出せばこの程度の魔物に遅れをとるはずもないのだ。

響魔剣グロシアは、本来二対の剣として扱うものではない。その正しい扱い方は彼女にとつての必殺であり、そしてその奥の手は出来れば伏せて置きたい切り札の一つである。グロシアを降ろし、リフルはホクトにその場を譲るように一歩後退した。

「出し惜しみはお互い様だろう？ 龍種を退けた男の戦いではないと思うが」

「……………ま、それもそうだな。でも本気でやるの疲れるから嫌なんだよなあ……………ま、しょうがねえ やるか」

頭上、片手で剣をぐるりと回し上段の構えを取る。ホクトの目つきが変わり、腕の紋章が漆黒の輝きを増し始めた。黒い波動が大地に魔方陣を構築し、魔剣が秘めた力が徐々に開放されていく。

「見せてやるぜ……………！ これが俺の うほっ！？」

決め台詞を言おうとしたその時、隙だらけのホクトの身体を触手が襲った。吹っ飛ばされ、遙か彼方に飛んでいくホクト。それを追

うように魔物は巨体を触手で持ち上げ、大きく跳躍し宙を舞った。迫る巨大な影にホクトは目を見開き、驚きながら魔剣を構える。防御には成功したが、そのままシャフトの壁を破壊し、巨体はホクトもろとも瓦礫にまみれて縦穴へと落ちていく。

「ロゼ君ロゼ君、上！ 上っ！！」

「な、なにいいいいいつ！？」

轟音に三人が頭上を見上げると、そこには落ちてくる瓦礫と魔物、そしてホクトの姿があった。ロゼは二人を庇うように壁際に伏せる。落下していくホクトは空中で触手と魔剣で打ち合い、何度も火花を散らしていた。

「足止めするんじゃないかったのか！？ あの馬鹿ッ！！」

巨体を支えるという役割を放棄し、全てが攻撃に回され触手は四方八方からホクトへと襲い掛かる。空中で自由に身動きが取れず、思わず舌打ちする。剣で攻撃を防ぐのにも限界がある。触手の一撃を防ぎきれず、側面からの直撃。身体が吹き飛び、魔剣は手から離れてしまう。

吹っ飛ばされ壁にブーツを擦り付け減速する。靴底が燃え上がりそんな摩擦の中、何度か足を放し、身体を回転させて壁に両足を着く。そのまま減速した勢いを取り戻すように壁を落下と同時に走り始めた。

魔剣は空中をクルクルと舞っている。それを睨み、ホクトは溜息を一つ。両腕の術式が光を帯び、走り続ける足取りを追うように魔力の炎が付随し始める。

炎を帯びた靴で壁を蹴り、一気に魔物へと迫っていく。同時にそれを迎撃する触手が放たれた。それは何の武装もしていない物理攻

撃だが、体表にはびっしりと鉄をも切り裂くような鱗が敷かれているのである。まともに接触すれば、文字通り“すりおろし”になってしまうだろう。

壁を蹴った勢いそのままに正面から迫り挟み込むような二本の触手を両足で蹴り、減速する。それを交互に蹴り、更に跳躍。いくつかの瓦礫を蹴り、魔剣を手に取ると同時にそれを揮う。黒き炎が軌跡を辿り、斬撃は広がって魔物の触手の一つを一撃で両断した。

「なんだ、あの威力……!？」

「はわわ、落ちてっっちゃうよう!？」

ロゼたちの目の前で魔物の足が宙を舞い、同時に彼らを追い抜き魔物とホクトは落下していく。ホクトの両腕に刻まれた術は熱量を上げ、魔剣の刀身に紋章が浮かび上がる。同時にホクトの目つきが変わり、両手で握り締めた大剣を魔物目掛けて真下に構えた。

「まったく……俺だってな、たまにはちゃんと真面目に働かなきゃあな……! クビになるのは、嫌なんでよ　　!!」

魔剣の全体が黒い炎で覆われる。一気に落下速度が上がり　否、ホクトは虚空を蹴って真下に向かって飛んだのである。そして迫る触手の一つを回転しながら縦に叩き割り、更に追撃で繰り出された触手を両断。潜水艦のバリアにも匹敵する装甲をいとも容易く両断し、黒い炎を撒き散らしながら落ちていく。

剣を虚空に投げ、それを魔物目掛けて蹴り飛ばす。柄の部分に炎が灯り、ぐんぐん加速した魔剣は最高の硬度を誇る魔物の胴体に深々と突き刺さった。血飛沫は零れ落ちる事はなく、頭上へと吸い込まれていく。ホクトは更に虚空を蹴り、右の拳を大きく振り上げた。

「必殺　　！　ただの……パンチッ！！」

突き刺さった魔剣目掛け、炎を灯した拳を叩き込む。衝撃が周囲の瓦礫を全て吹き飛ばし破碎する。魔物の体内で衝撃が爆ぜ、鱗の中身がぐしゃぐしゃにひしゃげ、細かく刻まれた血液が飛び出した。

「おおおおおおおおおお　　ッ！！　らあああああ
っ！！」

剣を掴み、脆くなった鱗の“継ぎ目”を縫うように縦に一閃！文字通り、駄目押しの追撃であった。魔物は断末魔の声をあげ、落ちていく。それとほぼ同時に縦穴の最下層　行き止まりへと巨体は落下。それに伴い、巻き込まれるようにしてホクトの姿も崩れた瓦礫の中へと消え去っていった。

烙印（１）

「いや、死ぬかと思った」

階段を駆け下り、ロゼたちが見たのは瓦礫の山に埋もれた魔物、そしてその上に座ったホクトであった。あまりにもものほほんとしたその物言いにロゼはあんぐりと口をあけたまま固まり、シエルシは凄惨な光景に若干引いていた。

遅れてリフルが階段を下りてくると、ようやく全員集合となる腰でも打ったのか、ホクトはよろよろと魔物の上から降りてきた。そ

の全身は返り血と埃で酷い事になっている。

「……よ、寄らないで下さい！」

「ええ〜……。俺、折角倒したのに……。なあ、うさ子？」

「ホクト君、くさい……。きちゃない……」

うさ子は鼻をつまみ、イヤイヤと首を振りながら後退する。ホクトは魔物の返り血を浴びてしまっている。落下する魔物の上にいるのだから、まあ当然の事である。荒事に慣れているリフルは兎も角他の三人にはちよつとばかり近寄りづらい状態であった。

「俺、頑張ったのに……。ひどくね……」

一人、シャフトの中を落ちてくる滝の中に入り、身体を洗うホクト……。その間口ゼたちは魔物の状態を確かめていた。何が起きたのか、堅牢な鱗はズタズタに引き裂かれ、更にその下は滅茶苦茶に碎けてしまっている。内蔵や肉片が飛び散り、これまた酷い状態だった。吐き気がしてきたのではシエルシはその場を立ち去り、隅の方で座り込み、膝を抱えている。うさ子は魔物の肉を齧ってみたが、まずくて食えた物ではなく泣き出しそうな顔をしていた。

「……リフル」

「……………」

リフルは無言で頷いた。この魔物は一般的な戦闘力の魔剣使いではこう簡単には対処できない相手だった。しかもホクトはどうにも本気で戦っているようには見えない。底が知れないと言えば聞こえ

はいいが、戦いに対して不真面目で危機感が無いとも言える。何より正確な実力が測れないのでは、仲間としてどれだけ頼りに出来るのかもわからない。

その辺りも考慮し、わざわざ残ってホクトの様子を見ていたりフルであったが結局ホクトの真の実力は不明なままだった。しかし、ロゼは確かに見ている。強力な防御でさえ切り裂いた黒い炎の刃……。

「……魔法の一種か……？」

「ぶはーっ！！ あゝ、サッパリしたあゝ……」

ホクトが頭から水を滴らせながら戻ってくる。流石に全身水を浴びるわけには行かなかつたのでまだ血の匂いは取れないが、随分と先程よりはすっきりした様子である。ロゼがタオルを投げると、ホクトは礼を言つて頭をわしわしと拭き始めた。

「しかし、なんか妙じゃないか？」

「妙……？」

「ここは前人未到の遺跡なんだろう？　なのに帝国の番犬がいるってのはどういふことなんだろうな？」

それもそうである。しかし、確かに帝国の烙印が捺された魔物であつたように見えた……が、それが事実だったかどうかはもう確かめる事が出来ない。魔物はホクトがスタスタにしてしまったのだから。

ロゼは遺跡に入る時、封印の術式を解除する暗号を使用したか、それは帝国のコードではなく、古代遺跡などでよく用いられている

旧式の封印式であった。封印を施したのは帝国ではない……が、出入り口があそこ一つだけとは限らない。

「ま、いるもんはいるんだからしょうがないだろ」

「そりゃごもつともで」

ホクトはタオルを首からかけたままうさ子を見やる。うさ子は魔物の肉片を吐き出し、滝で口をゆすいでいる所であった。シエルシはグロテスクなものから目を逸らしたい一心なのか、ひたすら無機質な機械の壁を見つめている。

「このパーティー大丈夫なのか……？」

「それを守るのがあんたの仕事」

「ですよね」

「二人とも、いつまでやってるんだ……。先を急ぐよ」

ロゼの声にうさ子とシエルシは相変わらず顔色が悪く、うさ子はずぶぬれの顔をロゼのマントで拭いていた。

頭の上にたんこぶを作ったうさ子を最後尾にロゼたちは移動を開始する。階段で行ける場所はここまでであり、あとは横に続いている道を行くしかない。鋼鉄で出来た扉はロゼが手を翳すと紋章が浮かび上がり、自動的に開いていく。構造としてはシャフトは遺跡の中身と良く似ていた。

ドアを潜ると広大な空間が広がっていた。無数のワイヤーやケーブルが天井から垂れ下がり、瓦礫や機械部品が山を作り視界を遮っているが、道は間違いなく続いている。灯りを片手に歩き出し、口

ぜは周囲を眺めつつ言った。

「ここがUGなのか……？」

「ゴミ捨て場にしか見えねーぞ」

「遺跡からは、大分歩いたと思うんだけどな……」

ロゼとリフルが先を進み、うさ子はその後をちよるちよるとついでまわっている。一方、シエルシはやはりまだ気分が優れないようで、口元に手を当てたままうんざりした表情を浮かべていた。

「魔物は苦手かい、お嬢さん？」

「……魔物が好きな人なんて居ませんよ」

ロゼたちとは少し離れた場所を歩くシエルシにホクトは歩幅を合わせて声をかけた。シエルシは内心、少しだけほっとしていた。不安や不気味さに押しつぶされそうな気持ちだが、ホクトの軽々しい口調で少しだけ和らぐような気がしたからだ。

しかし実際は何の解決にもなっていない。久しぶりに出した声は喉に張り付くようで、気分が悪い。飛び散ったグロテスクな魔物の内臓を思い出し、シエルシはまた顔を蒼くした。

「貴方は……魔物の討伐に慣れているんですね」

「そんな事はないと思うぜ？ まあ、記憶喪失だから判らないんだけどよ」

「記憶……喪失？」

シエルシは目を真ん丸くし、興味深そうに小首をかしげた。そういえば、記憶喪失については話していなかったかもしれない……。そんな事を急に思い出した。ホクトにとって記憶が無いのは既に当たり前であり、ロゼたちにとっても共通の認識となっている。わざわざ道行く人々に自分は記憶喪失ですと伝えて歩くわけもなし……。シエルシがそれを知らないのは当たり前とも言えた。

「まあ、色々あってな。今は、ロゼたちところで世話になってるんだ」

「……………そう、だったんですか」

彼が記憶喪失だと聞き、シエルシは余計に彼の事が判らなくなつたような気がした。別に理解したいわけではないが、あれだけの力を持った魔剣使いなのだ。さぞ名のある賞金首が、或いは騎士なのだと考えていたのだが……。

「貴方は……………“キャバリエ剣誓隊”という物を知っていますか？」

「……………キャバ……………キャバクラ？」

「キャバリエです！　なんでわざとそうやって間違えるんですか！？」

「そんなマジギレせんでも……………。剣誓隊ねえ……………いや、見た事も聞いた事もないな」

「そうですね……………？　貴方ほどの腕前の剣士なら、剣誓隊の一人だと言われても信じてしまいそうですが」

剣誓隊とは、帝国に所属する魔剣使い集団の名である。帝国権力の象徴とも言われ、皇帝を守護し、帝国にとって仇為す者を切り払う最強の騎士団……それが剣誓隊キャバリエなのだ。

この世界で最も高い戦闘力を持つのは、魔物を除けば魔剣使いである。魔剣使いの数はとても少なく、そこら辺に転がっているというわけではない。その魔剣使いの存在に対抗し、帝国の権力を維持する剣の象徴……。反帝国勢力にとっては最大の脅威であり、絶望と同義でもある剣士たち。その中の一人にホクトを数えてもいい……シエルシはそう見立てていた。

最も、帝国騎士団から独立した組織とは言え彼らはそれなりの地位にある貴族である。ホクトのように無礼ではないし、見た目もきちんと気を使っている事だろう。剣誓隊など実物は見た事もないが、想像の中でシエルシはそう考えていた。

「貴方は実の所、何者なんですか？」

「正義の味方　とか？」

「……………はあ」

「なんで溜息つくかねえ」

「貴方と話すのは、徒勞な気がしてきました。とても疲れます」

「もう少し肩の力を抜きなさいよ。リラックス、リラックス」

ホクトが瞬時にシエルシの背後に回り、露出した肩を両手でもみしだく。突然の事に小さく悲鳴を上げるシエルシ　そしてその所為で前を歩く三人が振り返ってしまった。

戻ってきたリフルが剣の鞘でホクトの頭を強打し、男はボタンとその場に倒れこんだ。シエルシは怯え、逃げるようにしてリフルの背後に隠れてしまっている。

「……本気で殴つたら、今……」

「貴様にはこれくらいしないと効かんだろう？」

「……………おい、血が出てる！ 頭から血が出てんぞ！？ いーけないんだーいーけないんだー！ やーいやーい、暴力女ー……………ふおっ！？」

再び傷口を叩かれ、ホクトは無言でその場に膝を着いた。背後で漫才が繰り広げられている中ロゼは辿り着いた扉に手を翳し、ロツクを解除する。

開かれた道の向こう、そこに広がる景色にロゼは思わず息を呑んだ。果てしなく広がる空間　ここは本当に地下であり、シャフトの中なのだろうか？　あまりの広大さにまるで本当に別世界へやってきたかのような錯覚に囚われてしまう。

生い茂る木々があつた。そこには樹林があつた。しかその木々の全ては結晶で構築され、青白く輝く光が乱反射した眩い世界が広がっている。大地も、木々も、壁も、天井も　全てが結晶に覆われている。

命を感じない、鉱物の世界……………。一步恐る恐る足を踏み入れると硝子でも踏みしめているかのように足元は軽くひび割れ、陥没した。しかし歩けないほどではない。ロゼは振り返り、ホクトたちを呼びつけた。

「うお、すっげえな……………。なんじゃこりゃ……………？」

「これが……UG……」

シエルシとホクトが周囲を眺め感嘆の声を漏らす中、うさ子はザクザクとそこらじゅうを走り回り、楽しそうにきゃあきゃあと声を上げていた。砕けたのは大地の表層だけであり、いくつもいくつも折り重なった硝子の層は暴れれば暴れるだけ砕け、陥没していく。

メンバーがぐるりとUGの世界を見渡す中、うさ子は既に陥没を始めていた。懸命に両手を振って助けを求めるが、誰も気づいていない。そんな中、シエルシは前に出て結晶の木の葉に手を伸ばした。繊細な少女の指先ですら、触れるだけで葉は砕け、散ってしまう。

「……綺麗」

「だな。聞いてた話とは、随分ちがくねえか？　なあ、ロゼ」

「地獄であることには変わりないだろう？　命の無い世界だ。しかし、まさかオケアノスの地下にこんな場所があったなんて……」

驚いているメンバーの背後、埋まっていたうさ子をリフルが引っぱり上げる。このまま放置されてしまうのかと思っていたうさ子は泣きながらリフルの胸に飛び込んだ。そんな事が行われているとは知らず、シエルシは前に歩き出す。

「行きましょう……！　きっと、この道がUGに続いているはずですよ！」

「あらま……お嬢さんやる気だよ。おい、あんまり先に行くと迷子になって泣いちゃうぜー」

「仕方の無いクライアントだ……。追うよ、ホクト」

「あいよ」

二人が走り出すのを見てリフルもうさ子を抱えたまま走り出す。純粋なる結晶の大地、そこに彼らは足跡を刻み、しっかりと歩き出したのであった。

烙印（2）

シエルシの記憶の中、決して色褪せる事のない思い出がある。それは、彼女がまだこの世界の事を何も知らなかった、幼い子供の時の出来事であった。

彼女はこの世界の中ではとても恵まれた立場にあった。帝国の管理下であり、しかしその中で最大の権力を与えられた第四界層プリミドール……彼女の生まれ育った故郷には、幸福な世界が広がっていた。それは、彼女たちにとっては……だが。

夕焼けの景色の中、シエルシは大切な人の手を握り締めて歩いていた。故郷である王国、ザルヴァトーレの城を背景に二人は城下町を見下ろす。紅く染まり、輝く白い街。丘の上には花畑が広がり、色とりどりの花たちが自由を謳歌するのように咲き誇っている。

幼いシエルシはその場所が大好きだった。秘密の場所……彼女と母とそう決めた。金色の髪を風に靡かせ、母は優しく微笑んでいた。白いドレスがはためくその横顔をシエルシは笑顔で見上げている。

「……………シエルシ、今日はね、大事な話があるの」

「だいじな……………はなし？」

「ええ。とてもとても大事な……………貴方にとっても、私にとっても。そしてこの国にとっても……………」

母の表情はとても寂しげで、しかし慈愛に満ちていた。母はそつとその場に腰を下ろし、シエルシと視線を合わせ、顔を近づけた。額を合わせ、二人は息のかかるような距離で見詰め合う。

長く、白く、そして優しい母の指が髪を撫でる……それだけでシエルシはとても幸せな気分になる事が出来た。彼女の事が大好きだった。彼女の事だけが、家族と呼べる存在だった。そして彼女の全てを信じ、疑う事さえもしなかった。

常に優しく、穏やかで。誰かを憎むという事を知らないような、そんな女性だった。誰にでも平等に愛を与え、そしてそれはシエルシにはより一層に感じられたのである。

「これから、この世界は変わっていくのかも知れません……。私は、近いうちにこの街を去らねばならないでしょう」

驚くシエルシの頭を撫で、彼女は優しく微笑んだ。唇に人差し指がそつと止まると、それだけでもう動揺の言葉は現れる事も無く。シエルシはただ、黙って母を見上げた。

「貴方は、貴方の信じる世界で……貴方が信じ、正しいと思う事をやり遂げなさい。それが、貴方に課せられた……役目なのですから」

祈るようなその言葉を思い出す度、シエルシは彼女の言葉の意味を考える。だがそれは未だに判らないままだった。どうしたら理解出来るのか、それも判らない。いつしかその事を考える事を恐れ、真実を知る事を恐れるようになっていた。

そんな彼女にもう一度会いたいと、話をしてみたいと思つたのは単なる気まぐれだったのだろうか。それとも、彼女に与えられた役目がそうさせたのだろうか……。知りたくなつたのかもしれない。せめて最後に、彼女のあの言葉の意味を……。

UG　そこは、結晶の木々が生い茂り、宝石の大地が広がる世界……。広大な大地は、シャフトの中だという事を忘れさせるに容易く、そしてそれは実際に通常のシャフトの中とは異なっていた。

先を行く口ゼが推測した事を語り、シエルシは内心噂で聞いてい

た事と照らし合わせつつ自分なりに思考を編みこんで見た。曰く、UGとはシャフトでありシャフトではない場所に通じているという事……。第七の界層は、実際のところは存在して。そしてここがそうなのかもしれない。或いは、シャフトとも界層とも全く異なる世界がそこにあり、そしてそれを今目撃しているのかもしれない。

明確な事実は何一つ存在せず、そしてそれを裏付ける証拠も見つかっていないのだ。故に、ここに来たという現実全てがただ徒労に終わるかもしれない可能性をシエルシはきちんと理解していた。大切な人に、会いたかった。その為に此処まで来た。何の確証も無く、乏しい手がかりだけを頼りに……。

宝石の樹林の中を進む仲間たちを見つめ、シエルシは戸惑いに心を揺らしていた。彼らは何故、自分にここまで付き合ってくれるのか……。金が目当てなのだろうか？ 当然それもあるだろう。だが、それだけではきつとないのだ。特に、損得の感情とは縁薄そうなの男などは。

自分の命を救い、そしてここまで護り、共に歩いてくれた傭兵。思い描く理想の騎士とは程遠く、しかし頼りになる男だ。頭から流れる血をタオルで拭きながら歩く姿は間抜け極まりないが、それは余裕の表れとも言える。

彼に出会った時、運命が動き出したような気がした。なんて、乙女チックな事は口が裂けても言えないだろう。何しろ今はもう彼に大してロマンチックな事など何一つ期待していないのだから。

故に今、胸を苦しめる事象があるとすれば、それはシエルシがこの無謀な計画に彼を巻き込んでしまった、という事である。彼が自分を助けさえしなければきっと、今頃彼らはこんな所には居なかったはずなのだから。

ロゼとリフル、二人の考えはわからなかった。ホクトの仲間だから付き合ったのかとも思っていたが、ホクトが記憶喪失だと知ってはそうでもない気がしてくる。結局ホクトも自分も、つい最近顔を合わせただけの他人なのだから。

では、彼らの目的は？ 反帝国組織の中に身を置くだけでも緊張でいっぱいシエルシにそこまで考える余裕を求めるのは酷だったのかもしれない。ともあれ、旅はそれぞれの目的に付随し動きつつあった。

「ぴよんこ、ぴよんこ、ぴよんぴよこぴよん」

一人だけ、スキップしながら能天気歌っているうさ子に目を丸くするシエルシ。第四界層から出るのはこれが初めてなのだが、世界にはあんな奇抜な人間もわんさかといえるのだろうか？ 少女の疑問に対する答えは当然YESではないのだが、それは誰にも判らない。

「……………止まれ」

先頭を進むリフルが小さく、しかし強い口調でそう仲間たちに告げる。宝石の大地の上を走り、樹林を抜けたその先には道が途切れ、崖になっていた。木々に身を隠しつつ様子を伺っている仲間たちの所に駆け寄り、シエルシも做って眼下を見下ろしてみる。

絶句 という以外に表現のしようがなかった。眼下にあったものの、それは巨大な要塞であった。目で判る程それは巨大であり、機械的であり、そしてそれを取りこ囲む騎士の数は尋常ではなかった。

「おう、騎士様がいらっしゃいませ」

「……………帝国騎士団か。かなり大規模な部隊のようだ」

「……………リフル、あの要塞」

ロゼの言葉にリフルは頷く。そう、その要塞は 殆どがまだ、結晶の大地、壁の中に埋まっていたのである。全体像を見下ろす事が出来るからこそ気づけた事実である。その巨大な要塞は、まだ殆どが埋まったままで見えている部分は全体のほんの一部に過ぎないのだ。

恐らくその要塞の発掘に当てられているのだろう、無数の罪人たちが同じ白い作業服を着せられて結晶の大地を削り続けていた。シエルシは思わず眉を潜める。これが、UGと呼ばれていた世界の正体……。

「罪人さんたちはここに送り込まれてたわけねえ……。ロゼ、発掘されてるありゃあなんだ？」

「……たぶん、古代文明の遺跡の一部だと思うけど……現代の戦艦にも似ているような気がする。よく、わからないな」

「引き返すべきです」

会話を遮るように、そして思考を遮るように リフルが声を上げた。仲間たちは同時に顔を上げる。リフルの提案は尤もであった。

「ひ、引き返すって……何故ですか？」

しかし慌てたのはシエルシである。当然、彼女はまだここに来た目的を果たしていないのだ。ようやくUGに到着した……ただそれだけである。しかし周囲の視線はシエルシの発言が場違いである事を物語っていた。

「敵戦力は見ての通り圧倒的だ。この様子だと、見えているだけの騎士が全てではないだろう。この少人数で何かを出来る状況ではな

い。ルートを確保し、地下に何かあるのかがわかっただけでも成果とすべきだ」

「そんな……。それは、そうですね！」

「あなた、自分の目的も言わなくせにこれ以上僕らを付き合わせようっていうのは虫が良すぎるんじゃないの？」

「う……」

全く以って当たり前のようにその通りだった。一つとして反論できず、シエルシはぐっと息を呑んだ。指と指を絡め、きつく握り締める。此処まで来て……。此処まで来て、目的を果たせない。そんな最悪の可能性が脳裏を過ぎった。

「あなた、ここで何をするつもりだったんだ？ 地下には謎の結晶樹林があり、そして埋まった古代遺跡を罪人が発掘させられてる。どう考えても帝国の機密案件だ。無闇に手を出すのは自殺行為だよ」

「そ、それは……。それは、その……」

シエルシは何も言う事が出来なかった。目的を話す事も、ここで諦めて引き返す事も、両方が彼女にとって最後のチャンスが失われる事を意味している。退けない、しかし一人では前に一步も進めない……。そんな八方塞の状況に黙りこくる事しか出来なかった。

そうしてシエルシが一切の打開策を持たない事を悟り、リフルは腕を組んで背を向けた。ロゼも同じように背中を向け、その場を去ろうとする。うさ子は仲間たちをきよるきよると見渡し、それからシエルシの隣に立ってその手をぎゅっと握り締めた。

「シエルシちゃん……」

「私は……」

「僕たちの仕事は君をUGまで送り届ける事　それだけだ。何故なら君は、そこに到着してから何かをするという依頼を僕らにしないし契約書にもそれは書いてない。僕らのすべき事は、ここまですべて君を連れてきた後に君を連れて帰る事だけだ」

ロゼの言う事は正しい。だが、だったら最初からつれてなんてこないで欲しかった　とも思う。何故二人はそれを理解しつつ、ここまで自分を連れてきたのか？　わからない。だが、どうしようもない状況にシエルシは完全に打ちのめされていた。気づけばじわじわと目尻に涙が浮かんでくる。

「シエルシちゃん、一人じゃ危ないから一緒に帰った方がいいよ？　泣かないで……ねっ！」

うさ子が背伸びし、シエルシの頭を撫でる。それで一気に心が折れて泣き出しそうになった　その時であった。

「俺は帰らないぜ？」

声は、シエルシの背後から聞こえた。崖の先、ホクトは両手を腰に当てて遺跡を見下ろしていた。ホクトの声にロゼとリフルは呆れたように戻ってくる。

「何言っただ馬鹿……。あの大軍に突っ込むつもりかよ」

「死にたいなら勝手に死ね。ロゼを巻き込むんじゃない」

「おいおい、つめてくなあ……。たった数週間だけだが、同じ釜の飯を食った仲間じゃあねえかよう」

二人はまるでホクトの話など聞いている気配がなかった。しかしシエルシだけは驚き、目を真ん丸くしていた。ホクトは少女の所まで歩み寄ると、うさ子と同じようにシエルの頭をわしわしと撫でた。

「女の子が泣いて頼んでんだ、付き合ってやるっぜ」

「……ホクト」

「なあに、心配すんな。俺に策アリだぜ？」

「ホントかよ……」

「ホントホント。ロゼ、ちょっと耳貸せ」

溜息を漏らし、ロゼがホクトに近づいていく。次の瞬間 信じられない事が起こった。

ホクトはロゼの身体を片腕で抱え上げ、同時にあいているもう片方の手でシエルシを抱きかかえたのである。少女と小柄な少年は同時にきよとんと目を丸くする。リフルも同じく何をやっているのか判らず、思考停止してしまった。だが次の瞬間ホクトの考えに気づき 魔剣を召喚する。

ワイヤーフレームが魔剣を構築する瞬間にはホクトは既に走り出していた。少年と少女は顔を見合わせ、冷や汗を浮かべる。ま、まさか 脳裏に最悪のイメージが浮かんだ。そしてそれは、当たり前のように実現する。

「わああああああっ!?」

二人が絶叫を上げると、リフルが構築した剣を振るうのはほぼ同時であった。ホクトはあろうことか、ロゼとシエルシを抱えたまま崖を飛んだのである。それを阻止しようとしてリフルが繰り出した斬撃、それはホクトの足で阻止されていた。

厳密には足の下に構築された巨大な魔剣である。その板を器用に足先で操り、リフルの攻撃を弾くと同時に魔剣の上に乗る、ほぼ直角の崖を一気に滑り降りていく!

「ロゼ ツ!? ホクト、貴様あああっ!!!!!!」

「はわーっ!? ホクト君たち、楽しそうな事してるよう! うさも、うさもやるーっ!!」

うさ子が一人、崖を飛び降りていく。それに続きリフルは忌々しげに舌打ちし、魔剣を装備した状態で崖を下り始めた。身体能力を魔力で強化したりリフルは一瞬で加速し、風を纏って滑空するかのようになり降りていく。

途中、転倒し転がるうさ子を追い抜きリフルは走り続ける。だがホクトはそれよりも更に早い。ボード代わりにした大剣の上に乗る、更に魔剣からは黒い炎が噴出し見る見るホクトたちを加速させている。

「いいいいいい やっほおおおおっ!!! 楽しいな、

ロゼ! シエルシ!!」

「やだああああああっ!!! 死んじゃうっっっっっ!!!」

「ホクトあんた　！？　裏切ったのか！？」

「人聞きの悪い事言つなよ！　男なら　正面突破だぜっ！！」

「　無茶するなあああああっ！！　」

結晶の坂を猛スピードで駆け下りていくホクト。楽しそうに声を上げ、泣きじゃくるシエルシと気絶しそうになっているロゼを放置し、そのまま真っ直ぐに帝国騎士団がうようよ集まっている遺跡へと降りていく。

魔剣から黒い炎が瞬き、次の瞬間三人は飛翔していた。騎士団の頭上を通り抜け、そのまま大地へと着地する。スピンを繰り返しながら停止したホクトはロゼとシエルシを降ろし、魔剣を足先で拾い上げて両手で構える。

「し、死んじやうかと思いました……」

「……あんななあああああっ！！！！」

「文句は後後！　さあ、行くぜえっ！！　帝国騎士団、覚悟オツ！！」

ホクトは魔剣を振り回し、騎士団目掛けて突っ込んでいく。異常事態の発生に戸惑い浮き足立った騎士団は怒涛の勢いで迫ってくるホクトに尻込みしている。その隙を衝くように飛び掛ったホクトが放った魔剣の一閃が、一瞬で数人の騎士を薙ぎ倒して行った。

「この　　ッ！！　馬鹿野郎がッ！！！！」

「うっ！？」

リフルの振り上げた拳は何の容赦も躊躇いも無くホクトの顔面に減り込み、吹き飛ばした。床の上に倒れたホクトに馬乗りになり、リフルは更に拳を左右から連打する。

彼女がそうまでするのは当然理由があった。ホクト、ロゼ、リフル、そしてうさ子の四人はUGにある地下遺跡に付随する形で建造されていた駐留基地に連衝され、そこにある牢獄に押し込まれていたのである。

遺跡へと突入したホクトたちであったが、あるう事がホクトは適当に暴れただけで抵抗をやめ、大人しく捕まってしまったのである。それには流石に誰もが驚愕し、殺意を覚えた。無謀な突撃を先導したホクト本人が、真っ先に両手を挙げたのである。当然の憤慨であった。

ロゼは部屋の隅にあるベッドの上に座り込み、両手で頭を抱えていた。うさ子はそんなロゼの足元に座り、膝を抱えて丸くなっている。ホクトが殴られるのを止める者は居なかった。うさ子はとめようつとしたのだが、崖を転がりまくったせいで気持ち悪くなっており、動くたびに吐きそうだったので自重したのである。

数回、牢獄の中に拳を叩きつける音が響き渡り、リフルは血のついた皮のグローブを床に投げ捨てながら立ち上がった。ホクトは口元から血を流し、顔を腫らしながらゆっくりと身体を起す。

「いててて……。し、死ぬう……」

「殺さないだけありがたく思え、裏切り者め……！ 貴様の所為でロゼまで……！！ やはり、貴様を仲間にするべきではなかったのだ……！」

背を向けたまま、リフルは壁に拳を叩きつけた。ホクトの無策かつ裏切りに等しい行動の所為でこの有様である。転がって瀕死になっているうさ子は兎も角、ロゼもリフルも口を開く事さえ億劫なほど怒りと失意に狩られていた。

ホクトをここで殴ろうが殺そうが、こうなってしまったものは仕方が無い。派手な登場の所為で完全に包囲され、逃げ場も無かった。問答無用で殺される事は無くこうして何とか生き延びているものの、状況は最悪である。

「ねえねえロゼ君ロゼ君、これからどうしよう……？」

「僕が知るかよ……」

「脱出出来ないかなあ？」

「無理だよ。この部屋は、術式を封印する特別な術が施されている……。魔剣はおろか、魔法だって使えない。脱出は不可能だよ……」

方法があるならロゼとてもう試しているだろう。だが、それがないからこうして頂垂れているのである。うさ子はロゼの隣にちょこんと座り、落ち込むロゼの頭をなでなでした。ロゼはもう嫌がる素振りも無く、ただ撫でられている。

この状況を引き起こした張本人であるホクトは口元から血を流したまま、堅牢な鉄格子に手を伸ばしていた。そこには術式がびっしりと刻まれ、対魔剣能力者用の牢獄である事を感じさせる。目を細め、何かを思案するホクトの背後、うさ子は耳をへこたれさせたま

まロゼの手を握り締めた。

「ねえ、シエルシちゃんは……大丈夫かなあ？」

そう、この牢獄には四人の姿しかない。侵入者の数は五人。依頼人であるシエルシがこの場にはいなかった。彼女は拿捕された時は一緒だったのだが、独房に移送される途中で騎士たちに別のところに連れて行かれてしまったのである。

「大丈夫かなあ？ シエルシちゃん、可愛そうな事になってないかなあ？」

「……ならないよ。なるわけない。だって、あいつは」

そこまで言っただけでロゼは口を閉じた。今更言った所で意味の無い事だ。帝国に探りを入れるつもりで、とんだ貧乏くじを引いてしまった。まさかホクトに裏切られるとは思って居なかっただけに、ロゼは酷く打ちのめされていた。

シエルシがここに居ない理由はとてもシンプルであり、単純な事だった。それを知っていたからこそリフルもロゼもここについてきたのだ。だが、こうなってしまうては意味がない。うさ子はロゼを励ますように懸命に頭を撫でたり背中をさすったり手を握り締めたりするが、ロゼは元気になる気配がなかった。

帝国は反逆者に容赦をしない。殺されなかった理由はシンプル、つまりこの後尋問が待っているという事だ。侵入者の在り得ないこの場所に侵入した者たち……当然、事情を聞く事は今後の対策に繋がるだろう。勿論ロゼは簡単に口を割るつもりはなかった。だがそれが意味するのは、非人道的な拷問に身を投げ出すという事。

ガルガンチュアで待つ仲間たちを巻き込むわけにはいかない。ここで死ぬ事が得策なのかもしれないが、装備も取り上げられ死ぬ事

もできない。拷問を待つだけの身で明るくなれという方が無茶な話である。ロゼは何度目か判らない深い深い溜息を漏らし、考えるのも嫌になつて静かに目を閉じたのだった。

シエルシが連れて行かれたのは牢獄ではなく、客間であつた。当然部屋の鍵はかけられているものの、シエルシの身体に傷は無く、拘束されている気配もない。窓辺に立ち、外の世界を見つめる。そこには騎士に強制労働を強いられている罪人たちの姿があつた。

彼女が独房ではなく客間に連れ込まれた理由は当然存在する。そしてそれこそが彼女がここにやってきた目的でもあつた。ゆっくりと窓辺に背を向け、シエルシは溜息をついた。こんな事になつてしまったのは間違ひなく、自分の責任だから。

彼らは無事だろうか？ いや、楽観的に考える事さえもが罪である。そう、彼らはもう無事ではすまないのだ。反帝国主義者たちの成れの果てはこの場所に相応しい。永遠の強制労働、そして死に絶えればゴミのように捨てられるだけである。

窓辺から去つたのは、彼らに待つ現実を見つめる事が恐ろしくなつたからかもしれない。拳を握り締め、シエルシは泣き出しそうになる自分を戒めた。泣いてもどうにもならない。どうにもならないのだ。巻き込む覚悟をした。騙してきた。だつたらそれを 初志貫徹するだけではないか。

迷う心の最中、彼女を現実に引き戻したのはドアをノックする音だった。返事をしていないのに扉は開き、一人の男が部屋に入ってくる。男は騎士と呼ぶには粗暴な風貌をしていた。この隊では当たり前前の事なのだが、騎士は騎士の正装をしていない。無精ひげはそのままで、髪もボサボサで伸ばしっぱなしというのが相応しい、まるで犬のようだと、シエルシはぼんやりと考えた。そしてそれはあながちはずれではない。男は、犬のような男だつた。

「これはこれは……。ザルヴァトーレ国からはるばるようこそ、シエルシ殿」

「……………」

卑下た笑いを浮かべ、男はくすんだ瞳にシエルシを映し込んだ。それだけで自分が穢されるような気になり、シエルシはそっと視線を逸らした。

「自分は、帝国騎士団所属、UG駐留軍指揮官、ブラム・シグマー
ル中佐であります。以後お見知り置きを」

「……………中佐、あの……………」

「彼らにはまだ手荒な真似はしていませんよ。その点はご心配なく……………。しかし、図々しくも無謀な輩ですなあ。まさか、貴方様を拉致し、ここまで連れてくるとは……………ねえ？ シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ王女？」

フルネームで呼ばれる事にシエルシは抵抗があつた。しかしそれが彼女の運命を決定付ける名であり、そこから逃れる事は出来ない。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……………。それは彼女が第四界層にある王国、ザルヴァトーレの王女である事を意味していた。

第四界層は帝国の恩恵を最も受ける世界であり、当然帝国との関係も厚い。シエルシは帝国に生かされ、自由を許され、そして満足な生活を送ってきた。帝国の指導に従い、帝国の手足となって生きてきた第四界層の民なのである。

この事実を知れば、ロゼモリフルも黙ってはいなかつただろう。文字通り、自分は敵なのだから……………。だから、己の身分を明かす事

は出来ず。そしてここに来た目的を語る事もできなかった。

悔しそうに両手を握り締めるシエルシを見つめ、ブラムは口元を軋ませるように笑った。上から下まで舐めるように視線を向けるとそれに気づいたシエルシが戸惑うような顔をする。ブラムは両手を挙げ、首を横に振った。

「こいつは失礼。噂に違わぬ美しさですなあ、姫」

「……………ありがとう、中佐」

「では、事情をお話頂きますね？ 帝国の騎士として、貴方から今回の件について訊かねばなりませんので。貴方が全て話してくださいれば、他の連中に手荒な真似をする必要もなくなります」

ブラムが椅子の上に腰掛けると、シエルシは頷きベッドの上に腰を下ろした。そうだ、話そう。事情を話そう。何もこんなにコソコソする必要などなかったのだ。帝国騎士とて、自分はザルヴァトーレの姫……。何か出来るはずもない。それに全て話してしまえば、ホクトたちはもしかしたら酷い目に合わないかもしれない……。

つい先ほど己を戒めた少女の決意はあっさりとは崩壊していた。無理も無い話だ。彼女は今までそうやって生きてきた。都合の悪い事からは目を逸らしてきた。それが姫としての彼女の人生だった。だからあっさりと砕け散る。消えてしまう。

楽観的な考えをする事そのものが罪である。そう、己を戒め拳を握り締めたという、過去でさえも……。

烙印(3)

世界は、無慈悲で残酷だ。

帝国の支配、世界の秩序……。シエルシは知らなかった。知っているつもりだった。だが、知らなかった。何も。何一つ……。

何故、帝国の支配がここまで強固なもので。それを知っているのに口ゼたちのような、反帝国勢力がいくつもいくつも帝国に立ち向かおうとしているのか。その理由も、考えようとはしなかった。

目の前に広がる現実が、彼女の知らなかった世界であり。そして突きつけられたその現実にはナイフのように鈍く輝きシエルシの喉元に深く深く捻じ込まれるのだ。痛みにも似た、噎せ返るようなおいと共に。

何もかもが順調のはずだった。楽観的な考えは砕け散り、順調の意味を見失った。シエルシは堪えきれず膝を付き、両手で口を抑えた。身体の震えは何から来るものだろうか？ 恐怖？ 絶望？ 嫌悪？ どれも正解でありどれも不正解だった。それは、魂の芯から来る震えだったのだから。

「どう、して……？ これは……これは、どういう事ですか中佐ッ！？」

嘆きの叫びが響き渡り、その答えとして退路とも呼べる扉が閉ざされた。恐怖に青ざめるシエルシの背後、ブラムはニヤニヤと笑みを浮かべている。立ち上がり、ゆっくりと後退するシエルシ。その足元に何かが引っかけかり、その何かに気づいたシエルシは小さく悲鳴を上げた。

足元に転がっていたのは、女性の死体だった。ボロボロの布キレを一枚だけ纏った女は生きているのか死んでいるのかも判らない。

うつ伏せに倒れるようにして転がっているその姿に動揺し、シエルシは尻餅をついてしまった。

「シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……。第四界層、ザルヴァトーレ王国の第三王女……。お前の目的地がここだ。お前が望み……。お前が開いた扉だ」

シエルシは震えながら背後を見渡した。そこは、基地の内部にある一室……。奥まった場所、地下室のひとつである。そこには目を覆いたくなるような凄惨な光景が広がっていた。傷だらけの、ボロボロの女性達……。部屋の壁際に座り込み、誰一人口を開こうとはしない。だが、視線だけがシエルシに向けられていた。闇の中に無数の獣が潜んでいるかのように感じる。恐怖　ただ、それに駆られてシエルシは立ち上がった。

慌てて背後に駆け出すと、そこには退路を塞ぐようにブラムの姿がある。男はシエルシの両肩を掴み　しかしそれを拒むようにシエルシは手を払いのけ、後退した。どこにも逃げられない……。混乱し、恐怖に怯えるシエルシの表情はブラムにとっては極上だった。

「中佐、どういふ事ですかこれは……！」

「見ての通りだ。罪人の部屋の一つですよ、姫……。貴方が探していた、貴方の母親もここに居たのさ」

「お母様が……？」

シエルシは目を見開き、口元に手を当て悲痛な表情を浮かべた。

そう、ブラムの発言は決して間違いなどではない。この場所こそ彼女の旅の終着点……。失った母を求めて旅をした少女の、目的地である。

彼女が国を出てUGを目指した理由……。それは、かつてUGに送られ戻ってくる事の無かった彼女の母親に会う為だった。彼女は直に、どこにも出かけることの出来ない身分になる。故に、これが残された最後のチャンスだった。

ザルヴァトーレを出て、ここまで必死でなんとか辿り着いた。母は……母は無事なのだ、楽観的に信じていた。だが、目の前に現実がある。どうしようもない、無慈悲な世界の象徴のような現実が。彼女の母はザルヴァトーレの女王だった。しかし、反帝国思想に染まっているとの嫌疑を受け、そのまま帝国に連衡。裁判の後、封印を受けこの地へと送り込まれたのである。そしてそれが、幼少のシエルシの心の中に在る母の最期の記憶であった。

母にもう一度会いたい……。子供染みた、甘えた考えである。反帝国思想に染まっているとされている母親に、国がシエルシを会わせるはずもない。彼女が母に会う為には一人、ここまで何とかして自力で辿り着かねばならなかったのだ。

そして今ようやく辿り着き　この様だ。自分自身を嘲笑したくなった。シエルシの目の前にいる大量の罪人たち……。ブラムは一つしかない出入り口の扉を背に、腕を組んで笑っている。

「UG送りになった人間は例外なく強制労働だ。男は寝る間も惜しみ、食うものも口々に与えられず一日中遺跡の発掘……。体力が尽きたら、死体は同じ罪人に処理させる。その繰り返しだ」

「……………酷い」

「酷い？　当然の事だ。下層出身の罪人なんざ生きてる価値もねえ、帝国に飼われるだけの家畜なんだよ。この部屋はな、騎士たちの慰安所なんだよ」

「慰安所……………？」

「 いいツラの女が揃ってるだろ？ こんな辺境に派遣されてきた騎士たちの、“お楽しみ”だよ姫様」

言葉の意味は、一瞬理解出来なかった。というより、理解しなかった……というのが正解だろうか。この場所に、母親がいたという事実……その事実にはエルシの心は一瞬で暗い絶望に突き落とされた。

UGに送り込まれ、こんな牢獄当然の場所に閉じ込められ、来る日も来る日も騎士達の慰み物になる……。ただそれだけの、何の価値も無い、文字通り家畜のような日々……。そんな地獄に母が突き落とされ、ここで生きたというのか。

振り返り、母親の姿を探した。しかしどれが母親なのかももうわからなかった。エルシは歯を食いしばり、決死の覚悟で振り返った。平然と笑っているこの男……。ブラム中佐が許せなかった。

「お母様はどこですか！ 答えなさい中佐！！」

「さあ、どうでしょうねえ」

「ぶざけるのもいい加減に んっ!？」

屈強なブラムの腕が伸び、エルシの口を塞いだ。余りの腕力差にエルシの細腕でどんなに必死に引き剥がそうとしてもそれは叶わない。顔を抑えられ、エルシは泣きながらブラムをにらみつけた。

「命令するのはこっちの方だ、たかだ第四界層程度の生まれで偉そうに……。お前も帝国の人形に過ぎないんだよ、エルシ姫」

もういやだと叫び出したかった。逃げ出したかった。怒りで消えていた恐怖が蘇り、体がいう事を聞かなくなった。ここにいる、生きていくのか死んでいるのかもわからないような女達と一緒に……。毎日毎日何処の誰かもわからない男に襲われ、踏みにじられ……。そんな未来を想像してしまふ。その瞬間、ぐちゃぐちゃになつた心は彼女の身体に素直に反映され、抑えていた口元から胃の中の物を全て吐き出させた。

「おいおい、もうおかしくなってきたのか？ まあ、いい所育ちのお姫様にはきついかもしれねえなあ……。でもな、姫様。こんなのはこの世界じゃ当たり前前なんだよ」

上の界層の人間が下の界層の人間を好きにする事を、帝国は了承しているのだ。上の者は下の者を道具のように扱い、奴隷のように扱い、それで当然なのだ。それに逆らう事が出来ず、下の人間は毎日道具としての人生を送っている。

「それを知りませんでしたっけ？ いいや、知ってたはずなんだよ姫様！！ お前は目をそむけてきたただけだ。この世界は、帝国のためだけに存在しているんだよ！」

シエルシの腕を掴み、強引に引つ張り起すブラム。シエルシは泣きじゃくり、嗚咽を漏らしながら目を逸らしていた。その身体を玩具のように放り投げ、また壁に叩きつけるブラム。シエルシは痛いのか怖いのか悲しいのか、もうわけが判らなくなっていた。

「ひ……っ！ ひ……いつ！」

壁際に座り込み、頭を抱えるシエルシ……。ブラムはその前に立ち、シエルシの服に手を伸ばした。腕力任せに強引に衣服を剥ぎ取

られ、露になった下着を隠すようにシエルシは腕で胸を隠す。ブルムはそれを滑稽そうに一笑した。

「幸い、お前はとんでもない上玉だ。あそこにいるどうでもいい女達とは違う扱いをしてやるさ。お前は司令官である俺専用の奴隷になればいい。服も着飾ってやる。風呂にも入らせてやるし、エサも与えてやる。どうだ、幸せな人生だろ？」

「……………んな……………！　こんな、ことを、して……………！　許される、わけ、がっ！」

その言葉を遮るようにシエルシの頬をブルムの平手が打った。頬を叩かれるのなど生まれてこの方一度も経験していないシエルシは目を丸くし、頬を片手で押さえた。

「許されるんだよ。UGにお前みたいなお姫様が来るなんて誰が思う？　誰もここには入れないし、確認も出来ないんだよ。誰も助けになんてくるか！　お前の事は誰にもわからない。お前はそのまま、ここで道具として一生を終えるんだよ！」

ブルムの高笑いが部屋に響き渡った。シエルシの心はその声により、一層深い絶望へと叩き落された。誰も、助けに来てくれない……………。それは当然の事なのかもしれない。

自分は砂の海豚を騙し、利用した。裏切り者と呼ばれた母に会う為に、国の人間からも逃れてきた。誰も、ここにいる事を知らない。誰も、シエルシを助けには来てくれない。くるはずがない。もう、だめだと思った。心の底から失望した。もう何もない。何も……………。母がここで死んだように、自分もこんな浅ましい、醜い心の男に蹂躪されて死んでしまうのだ。そう考え、きつく目を閉じ項垂れたその時だった。

「目を閉じるな。顔を上げる。希望を見失うな、抗え。自分の運命に 背を向けるな」

誰かの声が聞こえた。少女は言われるとおりに顔を上げた。次の瞬間、ブラムの身体が横に吹っ飛び、派手に床の上を転がっていったではないか。

気づけば封鎖されていた出入り口の扉は解き放たれている。薄暗闇の中、その男はシエルシを見下ろしていた。黒髪を靡かせ、男は手を差し伸べる。大きく、力強く、優しい手を。

剣は、余りにも巨大で。それは、剣と呼ぶには相応しくない。戦いに向かず、そして男は決して高貴などではない。だが、優しくそして何より途方も無い力を感じさせた。シエルシは伸ばされた手を握り締め、立ち上がる。そして彼の名前を呼んだ。

「ホクト……………」

「よう、姫さん。助けに来たぜ」

あっけらかんと、まるで当たり前のようにそう言って笑うから。心の中で潰れかけていた沢山の気持ちが一気に息を吹き返し、その感情はせき止められず涙となって零れ落ちた。

ホクトはシエルシの頭をわしわしと撫で回し、それから頭を抱いて自分の身体に押し当てた。ブラムは直ぐに立ち上がり、その様子を睨みつけている。ホクトは剣を肩に乗せ、ブラムを睨み返した。

「うさ子、シエルシを頼む」

部屋にびよこんど、うさ子が飛び込んでくる。そのまま泣きじゃくっているシエルシに駆け寄りその身体を優しく抱きしめた。うさ

子は痛ましい状態のシエルシを見て眉を潜めた。

「りょうかい！ シエルシちゃんは、うさが責任持って脱出させますっ！」

「心強いぜ！ よし、うさ子隊員！ 脱出せよ！」

「ホクト君も、きっと無事で脱出してね。うさ、待ってるからね」

ホクトは何も言わず剣を掲げた。立ち去ろうとするうさ子の手を離れ、シエルシが振り返る。男は背中を向け、振り返る事はしない。だが、わかった。彼は聞いている。彼女の話を聞いている。彼女の心を聞いている。

「…………おねがい…………」

だから、心の底から願った。搾り出すようなその声はみっともな情けない。だが きつと彼には届いていたから。

「…………こんなの…………壊して…………っ！！」

黒き剣を振り下ろし、構える。男は顔を上げた。その表情は彼が振り返れない意味をあつさりと体現していた。ホクトは怒っていた。当たり前のように激怒していた。この状況に。傷だらけのシエルシに。いたいけな少女をいたぶり、笑っているあの男に。いつになく真剣な表情は鋭利な殺気を放ち、普段のホクトとは打って変わった様子である。仲間には見せたくない、本気で誰かを殺す時に見せる男の顔だった。

「…………任せときな、シエルシ。俺は…………仲間を裏切ったりしな

い。見捨てたり　しない」

うさ子がシエルシの手を引き、部屋を出て行く。それを感じ取り、ホクトはその力を一気に振り絞った。黒い炎に全身が包み込まれ、魔剣が唸りを上げる。大気を伝い、部屋全体が軋み悲鳴を上げるような膨大な魔力　。圧倒的な力を前にブラムは息を呑んだ。

「なんだ、てめえ……！？　魔剣使い……どうやってあの牢屋から脱出した！？」

「そう焦らずとも教えてやるよ……。じっくり楽しもうぜ？　お前の趣味に合わせてやる。じっくりたっぷり、痛めつけてから喰らってやる」

魔剣の刀身に術式が現れ、それはやがて巨大な眼球へと姿を変えた。不気味なそれはぎよろりとブラムを睨み、刀身は変形し、剣は二本に別たれた。それが本来持つ、彼の魔剣の姿なのである。

「切り裂き屠り、喰らい尽くす　！　食事の時間だ……起きろ、ガリユウツ！！」

剣が吼えた　　としか表現のしようがなかった。ぎよろりと浮かんだ眼球が血走り、ブラムを見つめている。獲物を寄せと。食らわせると。まるで催促するかのようにな。

「ホクトは、何者なんだろうな」

呟くようなロゼの言葉、それを受けリフルは手にしていた魔剣を降ろした。基地内通路、そこは既に退路として確保されていた。所詮駐留している騎士団はUGという外敵の存在しない世界に駐留しているだけであり、相手をするのは大方奴隷……。そんな場所の騎士団にリフルが遅れをとるはずもなく。迅速に行動し、目に付く敵は片っ端から排除してしまうのにそう時間はかからなかった。

ロゼは基地内の監視システムを操作し、隠匿を済ませてある。別行動し、シエルシを助けに行ったホクトとうさ子、二人が戻ってきた時に直ぐに脱出出来るようにルートを確保するのが二人の役目であった。

既にロゼはオケアノスへの脱出ルートも確保し、後はホクトが戻るのを待つだけとなっている。こうなると二人は暇をもてあましてしまう。ホクトの加勢に行ってもいいのだが、ここを死守するのが役割なのだから出過ぎた真似は自重しておこうと判断したのだ。

「あいつ、いとも容易く鉄格子を突破したんだよな……」

ほんの十数分前の事である。ホクトは突然、部屋の中で魔剣を取り出し、鉄格子を両断したのである。余りにも突然の事でロゼもリフルもただ呆然とするだけだった。

何故、封印されているはずの魔剣が使えたのか？ その理由をロゼは瞬時に把握していた。先ほどまでホクトがいじっていた鉄格子のうちの一本、そこに刻まれていたはずの術式がすっぽりと丸ごと消え去っていたのである。

それはどういう事なのか？ 部屋全体にかけられた封印の術式は、壁に刻み込まれた術式と鉄格子の術式、それらが取り囲むあの部屋の中だけに限定的に発動している。ホクトはその中の一つ、鉄格子

の術式を消し去り、魔剣を封印する術式を破壊したのである。

後は剣さえ出せれば脱出は容易い。脱出されるとは考えてもいない騎士団は内側からズタズタ。脱出ルートはアツサリ確保。そしてホクトはまるで予定調和であったかのように、うさ子と共にシエルシを探しにいつてしまった。

何もかもが出来すぎている気がする。まさかとは思うのだが、ホクトは最初から内部に潜入し、脱出する事を考えていたのではないだろうか？ そんな邪推までしたくなってしまう。リフルはホクトの裏切り行為を許してはいなかったが、ロゼはこれらの出来事がただの偶然だとは思えず、必然ホクトの作戦だと考えた。となれば、裏切り行為の理由も納得出来る。

あのまま大量の騎士団を相手に正面突破するより、一度捕まって内部から戦った方が確かにリスクは少ない。この基地はそう広くはなく、通路での戦いとなれば数の威力は十分に発揮されず、騎士もリフルたちを取り囲めない。結果、リフルは各個撃破の要領であっさり脱出ルートを確保したのである。

「術式を消し去る能力か……。何をやったのかわからないけど、相当特別な能力者だな、あいつ」

「……………勝算があつたとしても、こんな危険なやり方は到底受け入れられません。ロゼの身に何かあつたら、私は……………」

「そんな過保護に心配するなよ……………恥ずかしいな。まあ、今頃あいつならシエルシを助け出してる頃だろう」

うさ子を一緒に連れて行ったのは、うさ子の嗅覚が非常に優れていたからである。においてシエルシの場所がわかるうさ子の能力を使い、ホクトは真つ直ぐに進んでいったのである。本当に何もかもが良く出来すぎている気がする。それはロゼにとっては少々気持ち

の悪い事だった。

「ま、僕たちはシエルシが帝国下にあるザルヴァトーレの姫だとして行動を共にしていたんだ。彼女が何か、帝国にとって大事な秘密に関わってると思ってね」

それこそがロゼたちがシエルシについてきた理由である。記憶喪失のホクトはともかく、反帝国組織の人間にとってザルヴァトーレの姫は有名な存在である。帝国の力と恩恵を大きく受け、下層の人間を虐げるザルヴァトーレの姫なのだ、当然攻撃の対象である。忘れるはずもない。

シエルシは更に、本名を名乗ったのである。そこまでされれば流石に馬鹿でも気づくというもの。何も知らないホクトとうさ子以外の人間は、砂の海豚のメンバーは全員シエルシの素性に気づいていたのだ。

「僕らは彼女を利用した。でも、ホクトは利用するのではなく、本当に助けようとした……。僕らだって、裏切りだなんだと人の事は言えないのかもね……」

「……ロゼ」

「ま、戻ってきたら確かめるさ。あいつの力の正体も……考えも、ね」

通路を振り返るロゼ。それとほぼ同時に基地全体に揺れが走った。リフルが顔を顰め、ロゼが呆れたように溜息を漏らす。噂の剣士はどうやら派手に戦いを開始した様子だった。

烙印(4)

この世界は、“縦”に出来ている。それは、誰が口にした言葉だったろうか？

ある日、ある時、一人の女王が言った。それは一人の騎士に向けられた言葉。屍を敷き詰めたような真つ赤な絨毯の上、まるで御伽噺のような夕焼けを背に、騎士は剣を女王に向けていた。

女王は美しいドレスを鮮血に染め上げ、そして微笑んでいた。己へと剣を向けるその男へ、静かに両手を差し伸ばし。口ずさむのだ。まるで歌うように。そして男は剣を振り上げた。それが彼に出来る唯一の饒だったから。

「てめえ……！ ふざけんじゃねえぞつ！！ ナメてんじゃねえツ！！！！！」

ブラムの叫び声が響き渡る牢獄の中、ホクトは唸る魔剣を肩に乗せ笑みを浮かべていた。景色の中には死と絶望が満ち溢れている……。それらを砕くように、ホクトは魔剣を空に向かって掲げた。黒き闇の剣は蛇のようにうねり、形状を感じさせずまるで意思を持つ生き物であるかのように蠢き、天井を突き破り光を降り注がせた。天井に空いた穴から降り注ぐのはUGの天井に設置された、作業用の人工照明の光である。それは決して明るくない。しかし、闇一色に彩られていた世界の中に希望の如く降り注ぐ。罪人たちが顔を挙げ、文字通り久方ぶりに瞳に光を吸い込んだ。

「御託はいいからかかってこいよ。お前も魔剣使いなんだから？ 勝負は口じゃなくてよ。男なら、黙って剣で語れよ」

「……………後悔したって遅いぜ……………たかが魔剣使いの分際ですよっ

「!!」

怒号と共にブラムの腕が輝き、術式が浮かび上がる。帝国騎士団所属、ブラム・シグマール。この卑下た男がUGという辺境で、しかし中佐という地位でありながら一つの基地を任されているのは当然理由がある。

ブラムは騎士の一族であり、一族に伝わる魔剣の継承者でもあった。その態度や功績は兎も角、戦闘能力で言えば騎士の中でも頭一つ抜き出ている。構築されたのは左右十本の指から伸びるように装着された、細く長い剣であった。

それは、剣と呼ぶには余りに華奢であり。余りにも歪で、そして剣と呼べるほど少ない数ではない。文字通り、その運用方法は“爪” 。対象を八つ裂きにする事だけを目的とした、異形の武装である。

「逝くぜ……!! 爪魔剣、ハイゼットオツ!!」

魔剣装備による身体能力の向上。その効果は如実に現れていた。魔剣の種類により、その効果、方向性は異なる。ブラムに与えられたハイゼットの最も優れた能力。それは速力。

初動の差は圧倒的であった。ブラムが駆け出すのとホクトが駆け出すのはほぼ同時。いや、むしろホクトのほうが反応は素早かった。しかしホクトが大剣を振り下ろすよりも何倍も早くブラムの爪は獲物へと襲い掛かった。

目だけでそれを捉え、反射的に身体をそらして攻撃を回避したホクト。それは非常にビビットな反応であった。衣服の胸元が裂け、僅かに避け切れなかった斬撃が胸から血を排出する。大剣は未だ直振り下ろすモーシヨンのまま。その刹那、ブラムは駆け抜け既に背後に回りこんでいる。

今度は目で追う事さえも出来なかった。獣染みた。いや、それ

を圧倒的に超える速力。ハイゼットに特殊な能力は存在しない。だがそれゆえに能力は特化され、限りなく研ぎ澄まされている。ただスピード、それだけである。そしてそれがホクトにとって最大の脅威でもあった。

視界でも捉えられない完全な死角からの攻撃。戦闘開始数秒における、圧倒的な速攻による決着は確定したはずだった。しかし、爪による攻撃はホクトが肩に乗せた魔剣によつて防がれていた。爪と剣が衝突し、火花が散る。ブラムは舌打ちし、後方へと跳んだ。回転しつつ壁に着地し、跳ねるようにしてブラムは大地をすべりホクトの側面へと回り込む。減速する為に大地に突きつけた剣が再び火花を散らし、ホクトはその音に反応して視線だけでブラムを捕らえた。

魔剣同士が激突した時に見せる火花は厳密には火花ではない。互いの魔力を具現化して形成されている剣は、何かと打ち合う度に魔力を消費するのだ。より頑丈な方が、より密度の薄い方を削る……。その再が発生する言わば“魔力の削りカス”が火花のように瞬いて見えるのである。

先刻、攻撃を行ったのはハイゼットであった。しかし、魔力が削られたのもまたハイゼットのほうである。ホクトがただゆるりと構えただけの魔剣ガリユウは見た目的には形状も一定ではなく、揺らぐ炎のようなそのシルエットは柔らかくそうに見える。しかし、その魔力密度はハイゼットを遥かに上回っているのだ。

そもそも何故攻撃を防御出来たのか。ホクトの反応速度は完全にハイゼットに置いてけぼりを食らっていたはず……。とすれば、答えは簡単である。それが彼の魔剣、ガリユウの能力であるということ。

「奇妙な剣だな……」

ホクトは答えず、ただ魔剣を構える。まるで攻撃を誘っているか

のようだった。二人の一瞬の打ち合いに既に罪人たちは怯え、部屋の隅に移動して震えている。それを横目に確認し、ホクトはわずかばかりの安堵を感じていた。

ガリユウは巨大な魔剣であり、そのリーチ、攻撃力は通常の魔剣の比ではない。全力で揮えば罪人たちをまきぞいにして容易にこの施設の壁を破壊して余りあるだろう。故に、全力で戦う事は叶わない……。

勿論、個人的感情に基づいてあっさりとは決着をつけてやるつもりもなかった。ガリユウはうねるような蛇の形から再び刃として結晶化し、浮かんだ瞳でぎよろりとブラムを睨んだ。

「まさかてめえ、その剣……」

笑みを浮かべるホクト、それが答えだった。そう、ホクトは二撃目、己の感覚でそれを防いだわけではなかった。ホクトが何もせずとも、魔剣の方が勝手に動いて攻撃を防いだ。それが正解である。自立性を持ち、自動的に行動し、主を守る魔剣……。ガリユウが持つ性質の一つである。勿論、意思を持った魔剣などそうそうあるものではない。騎士団という戦闘組織に所属していたブラムでさえ、そんなものは見た事も聞いた事もない。

しかしそれで動揺するということのも馬鹿げた話である。魔剣はそれぞれ一振りずつが別々の能力、形状を持つ武装だ。自立した魔剣があつたとしてもおかしい事はない。より複雑な能力を有する魔剣であればあるほど高位の剣であるとされているが、ただそれだけの事。

戦闘において勝敗を決するのはただ剣の位だけではないのだと、ブラムはこれまでの戦闘で理解している。問題は相性。ホクトのガリユウは非常に遅い、のろまな剣だ。それに比べハイゼットは文字通りの速攻。恐れる必要性はどこにも感じない。剣が自動的に攻撃を防ぐなら、それを上回る速度で圧倒するのみ。

ブラムが動くまで、その思考は凡そ十秒。それでも戦闘中で

ある事を考えれば気が遠くなるほど長い時間であった。当然ホクトは動き始めている。が、それを追い越しハイゼットの爪はブラムを容易に彼の懐へ飛び込ませる。

繰り出される一撃　！　首を跳ね飛ばし切り刻むその攻撃コースは確定していたはずだった。しかし、何故かまるで行動を全て読んでいたかのようにホクトは魔剣にて爪を防御する。先ほど、ブラムが動き出すより前　ホクトは動き出していた。そしてその動きの結果、ホクトは防御に成功したのである。

矛盾していた。未来を予知でもしていなければそんな事は在り得ない。ここにきて改めて動揺がブラムを襲った。ホクトが動いた。それを追い越して攻撃した。だがホクトは攻撃を防ぐ為に動いていた。

まぐれだと自分に言い聞かせ、しかし後退したのがブラムの警戒を示していた。周囲を高速で旋回しつつ、四方八方からホクト目掛けて襲い掛かる。しかしその尽くをホクトは剣で受け、ただ空しく火花が散るだけであった。

「なんだと……！？　なんで……なんで防御出来んだよ！？」

直後、攻撃の爪は空しく空振り、ホクトがカウンターで放った蹴りがブラムの顔面に減り込んでいた。ホクトのブーツは特殊な鉱物による装甲が装備されている立派な防具である。それが顔面に減り込めばどうなるか。

思い切り吹っ飛び、壁に激突するブラム。それだけでブラムは瀕死の状態に陥っていた。カウンターにより、防御姿勢は一切不可能だった。脳がグラグラと揺れる中、何が起きたのか判らずただ男は鼻と口から血を流しながら頂垂れていた。

「よお、お前……本当に魔剣使いなのか？」

ホクトの足音が聞こえる。敵が近づいてくるのを感じる。ブラムは顔を挙げ、立ち上がった。ホクトが掲げた剣は黒くうねり、燃え上がっているように見る。闇の剣　ブラムはそれを見て、漸く思いついた。

彼がUGに来て間もなくの事だった。帝国から直接通達された、危険人物として指定された罪人の一人。黒き刃を操る魔剣使い。“魔剣狩り”とも、“龍殺し”とも呼ばれた男がいた。その存在を思い出し、それをホクトの姿に重ねた。

「そ、そんなわけねえだろ……!?　“魔剣狩り”は、死んだはず……!?」

と、呟いたところで気づいた。つい先ほどまでゆっくりと歩いていたはずのホクトが目の前に立っていたのである。早すぎる移動に視線が追いつかない。つい先ほどまで、ホクトは遅かったはず。馬鹿でかい剣を担ぎ、ノロノロと動いていたはず。眼球をぐるりと持ち上げ、上を見上げる。それよりも早く、ホクトの繰り出した腕がブラムを壁に叩きつけていた。

鋼鉄の壁を突きぬけ、ブラムは隣の部屋に押し込まれた。壁は見事に穴が空き、ひしゃげている。隣の部屋は同じように牢獄が続いていた。放り込まれたブラムが立ち上がり、顔を上げる。そこにはもうホクトの靴があった。

靴先がブラムを蹴り飛ばし、まるでボールか何かのように軽々と壁に叩きつけられる。力が違いすぎた。まるで魔物でも相手になっているかのような錯覚にブラムの意識は薄れていく。だが気絶するよりも早く、ホクトの繰り出す拳が腹に減り込んだのだ。

血と汚物が同時に噴出し、ブラムは無様にのたうち回った。ホクトの拳は腹を突き破っていたのだ。何が起きているのか理解が追いつかなかった。相手は。ホクトは。まだ、剣さえも使っていないというのに。

「静かになつたな……んっ？ お喋りは御仕舞いか？」

「て……めえ……」

血塗られたブラムの爪が伸び、ホクトの腕を掴む。ホクトは容赦なくその腕を取り、あらぬ方向へとへし曲げた。悲鳴が上がる中、彼がシエルシにしたのと同じように、倒れたブラムの顔面を踏みつけ、大地に魔剣を突き立てる。

「魔剣狩り……！ てめえ、魔剣狩りだろ……！？ なんだ、この強さ……おかしい……おかしすぎる……ッ」

「その魔剣狩りつてのがどこのどいつなのか知らんが……そんなに言うならお前の魔剣、俺が狩ってやるよ」

ホクトが魔剣を引き抜く。蝕魔剣ガリユウはゆっくりと瞳を閉じ、代わりに変形し巨大な口を開いた。ぽっかりと開いた口は最早剣でもなんでもない。ただ比喻するならば、それはそつ、龍の顎に似ている。

「ガリユウは雑食でな。相手が何だろうが、ペロリと食っちゃまんのだ。相手が岩だろうが鉄だろうが……魔剣だろうが人間だろうが。術式だろうが、な」

「や、やめろ……！」

口をあけた魔剣がダラダラとよだれを垂らしている。そんなおぞましいものが目の前に突きつけられ、慌てないはずがなかった。ブラムが冷や汗を流し、懇願する。その姿にホクトは優しく微笑みを

作った。

「た、頼む……！　そうだ、この基地はお前にやる！　男も女も好きにさせてやる……！　地位もやるう！　俺は帝国の騎士だ、お前達なんかよりよほど　！？」

言葉が最後まで通じる事はなかった。まるで堪えきれなくなったかのように、ガリユウはブラムへとかじりついたのである。胸から上が丸々食いちぎられ、大量の鮮血があふれ出し残った肉体はびくびくと細かく痙攣を始めていた。

ぐしゃぐしゃと噛み砕き、飲み干すガリユウの口から血が滴り落ちる。その悲惨な食事光景にホクトは溜息をつき、ガリユウを空いている手で軽く小突くのだった。

「お前、容赦なさすぎ……。ま、いいや。綺麗に残さず食べよ。魔剣は特に　お前の好物だろ？」

残った肉塊をむしゃむしゃとガリユウが食べつくす中、ホクトは返り血を拭いながら溜息を漏らしていた。どうしようもなくあっけない最後だった。が、それで相応しいのかもしれない。

「　てめえは、そうやって許しを乞う人間を許したかよ……？」

ガリユウが全てを食いつくし、残ったのは血溜まりだけであった。ホクトはそれを見届け、ガリユウの力を再び封じる。手元に残ったのは化け物染みた恐ろしい魔剣ではなく、黒く巨大なだけの“ただの剣”であった。

「ごちそうさん　　と」

剣を解除し、両手をズボンのポケットに突っ込んだまま部屋を出る。元の牢獄では罪人たちが怯える視線でホクトを見つめていた。狂気染みた化け物の力、その片鱗を目撃してしまったのだ。彼女たちがそれを恐れ、次は自分の番ではないかと嘆くのは当然の事であった。

故にホクトは何も言わず、ただ扉を潜って外に出た。うさ子とシエルシはどうやら先に行ってくれたらしい。距離が多少離れていても気配は感じられるので、当然二人がこの場に居合わせていない事は知っていたが、それでも安堵せずにはいらなかった。蝕魔剣ガリュウ……その食事風景は、少々仲間に見せるには衝撃的すぎる。

立ち去る剣士は何も言わなかった。言葉は何も意味をもたないのだ。ホクトに今、彼女たちに言える事など何もなかった。ただ立ち去る彼は、その出口へと通じる扉の鍵だけは、閉める事はなかった。

烙印（４）

基地からの脱出……それは、かなりの大騒動になった。ロゼは予め罪人達を逃がす準備を進めており、脱出ルートは無数に確保されていた。勿論全員を守り、きちんと逃がす余裕などあるはずもない。腐ってもそこにいるのは帝国騎士団……世界最強の武装組織である。ホクトたちは元々自分達がやってきた、ユエナ遺跡から地上に通じるルートへと走り出した。しかし同時に罪人達は自分達を拘束していた術式から開放され、閉ざされていたシャフトへのルートが解き放たれるのを見て一斉に逃亡を凶つたのである。それはある意味、ロゼたちから目を逸らす絶好の目晦ましでもあった。

むしろ、そうして利用する為に罪人を使ったのだが、結果的に罪人たちは地獄から逃れる事に成功もしたのである。その理由を口ゼたちが知るのはまた先の話なのだが……。

長い長いシャフトの階段を上がり、広大なユエナ遺跡地下を走り、地上に出る頃には全員がすっかり疲れ果てていた。奇跡的な、しかし当たり前のように流れた一連の脱出騒動の結果、彼らは何とかこうして無事に地上に戻る事に成功した。それはやはり奇跡と呼ぶべき事だったのかもしれない。

「ふわあ〜……。うさ、すっごくいっぱい走ったよう〜……」

「それは、僕もだよ……。よく、ここまで走ってこられたって思うよ……」

全身汗だけで、乱れた呼吸も半分戻りそうにない。そんな中冷ややかな様子なのはホクトとリフルの二人である。流石に魔剣使いの体力は一般人とはかけ離れているだけある。

色々と疲労で全てが先送りになり、彼らはお互いに言葉を交わす事さえも叶わなかった。なだれ込むようにそのままガルガンチュアへと逃げ込み、ようやく自分たちがUGからの脱出に成功したと自覚する。そこから彼らを本当の意味での疲労と、緊張感から開放された筆舌に尽くしがたい安心感が襲ったのである。

潜航するガルガンチュアの中、砂の海豚のメンバーは口ゼたちを出迎えた。誰もがつかれきっていたが、最も憔悴していたのはシエルシであった。敵である事が公になり、しかし結局彼女に他に逃げ場も行き場も存在しない。シエルシは半ば強制的に部屋へと連衡され、ホクトはそれを黙って見送っていた。

「本当に、とんでもない目にあっただよ……」

「ロゼのお手柄だな。よくあんなに脱出ルートを確保出来たなあ」

「別に、術式は基地の中核で管理されてたからね。そこをリフルと一緒に襲撃して、後は扉の鍵をタイマーで開くようにしておいただけだよ」

ロゼの言葉をホクトは腕を組んで聞いていた。二人の足元ではうさ子がぼったりと倒れこみ、通路の真ん中だというのにぐうぐうと寝息を立てている。ロゼは肩を竦め、それからホクトの背中を叩いた。

「納得行かないって？」

「……………ああ。まあ、シエルシが帝国側の人間であつた以上、拘束するのが砂の海豚としては当たり前なんだろうけどな」

「弱った女の子を大人数で捕まえて、どうこうするのは気に入らないんだろ」

ホクトは黙って身体を伸ばし、それからロゼの頭を唐突にくしゃくしゃと撫でた。そうして足元のうさ子を拾い上げ、笑顔を作る。

「俺は、団長の決定に従うまでさ」

「……………都合のいい時ばかり団長扱いか」

立ち去りながらホクトはひらひらと手を振っていた。ロゼはそれを見送り、そして彼もまた歩き出した。止まってる事は出来ない。休む事は必要だったが、どちらにせよロゼには通路の真ん中で眠り始めるような度胸はなかったのだから……………。

その頃、シエルシは部屋に半ば軟禁されるような状態にあった。ベッドの上に座り込み、ただぼんやりと何を見てもなく床を見つめていた。彼女の目的が果たされる事は無く、そして知りたくも無い現実をただ思い知らされるだけの結果となってしまうた。

母に会う為に、わざわざあんな場所まで向かったというのに……全てが無意味になってしまった。残された未来に希望は見えず、どうしても泣き出さなくなってしまう。しかし何故だろうか？ あの騒動の後のせいか、感情が凍りついたように動かなくなってしまうた。

みすばらしい姿の罪人たちと、それを嘲笑い使役する帝国騎士団……。全てが理不尽であり、そしてそれが当然でもあった。それを理解し、知っていたはずなのに……いざ直面した当然の二文字に、シエルシは成す術なく打ちのめされたのである。

膝を抱え、目をきつく瞑った。もう何も考えたくはなかった。砂の海豚に何をされようが、もうどうでもいい。あらゆる意味で自暴自棄になるシエルシ、そんな彼女の部屋の中に入ってきたのはリフルであった。

シエルシは顔を上げず、足音だけで来訪者の存在を知る。リフルも疲れきっていたが、それでもシエルシの前に立ち、その肩を叩いた。

「シャワーくらい、浴びたらどうだ？」

それはぶっきらぼうだったが、リフルなりにかけた優しい言葉であった。シエルシは肩を震わせ、嗚咽を殺して泣いていた。リフルはその隣に座り、慰めるわけでもなく何を言うでもなく、ただそこに座り続けた。

シエルシはずっと涙を流し続けた。ぼろぼろの服装のまま、泥だらけの顔のまま。誰かが隣に居てくれる事が、今はとても嬉しかった。顔を上げる事が、とても恐ろしかった。今はせめてもう少し。

僅かな間だけ……現実から目を逸らしたかったから。

烙印(5)

「一人ぼつちは寂しいから……だからきつと、嫌な事ばかり考えちゃうんだよ」

カンタイルの町並みを眺め、うさ子はそう呟いた。人工太陽の恩恵を受けられない夜の街はそれぞれが必死に輝こうと灯りを振りまいているかのようにも見える。冷たい風が吹きぬけ、うさ子の癖のついた髪を揺らしていく。ホクトはその隣に立ち、腰に手を当てて街を見下ろしていた。

ぴよこんと跳ねるように振り返り、うさ子はホクトを見上げた。くりくりとした丸い目が男の姿を映し、ホクトは静かに笑顔でそれに応える。伸ばした手でうさ子の髪をわしわしと撫で回し、それから煙草を取り出した。

「シエルシちゃん……きつと、とつてもとつても辛いんだろうねえ……」

シエルシが己の目的やこれまでの行動を全て洗い浚い白状したのは、数時間前の話である。UG脱出から丸二日　それが、砂の海豚が彼女から情報を引き出すのに要した時間であった。

ロゼとリフルの質問にシエルシは大人しく答え、そこに何も感情を織り交ぜる事はなかった。敵への尋問　そう読んだところでなら差異のないその聴取にホクトとうさ子は参加する事はなかった。故に、それは人づてに聞いたものである。

それでももうさ子は胸を痛め、シエルシにとても同情していた。ホクトはと言うと……特に何を言うでもなく、何をするでもなく。また暇をもてあますような砂の海豚としての当たり前の日々に戻りつ

つあった。

「うさはね、記憶喪失なの。だからね、シエルシちゃんの気持ちを、本当の意味でわかってあげることが出来ないの……。記憶がないから、大切なものがないから……。だから、その痛みを感じてあげられない」

ぱたんと、うさ子の巨大な耳が落ちた。もこもことした、しかし柔らかい弾力を持つ耳は先ほどから頻繁に上下している。ホクトは火をつけた煙草を片手に紫煙を吹き出し、空を見上げていた。上の世界に阻まれた、遠く高くしかし有限の空を。

「ねえ、ホクト君ホクト君……。？ シエルシちゃんの事、助けてあげられないのかなあ？ うさたちには、何もしてあげられないのかなあ？」

「うーむ……。それは難しい問題だなあ、うさ子隊員……」

そう、難しい問題なのだ。砂の海豚としては、帝国の要人を捕らえる事が出来たというのは大きな成果なのである。仮に、帝国側が彼女を軽視していたとしても、彼女の故郷である第四界層プリミドールの王国、ザルヴァトーレは黙ってはいないだろう。彼女を捕まえ、人質として運用し、それだけでどちらにせよ帝国に対する攻撃とすることが出来るのだ。

人質などという手は帝国には通用しない わかっている。それは、ロゼもリフルも、ホクトとて理解している。だが、それでも帝国への批判を募る事は出来るかもしれない。帝国という余りにも巨大な組織を相手に出来る事は限られている。

砂の海豚でどうこうしなかったとしても、他の組織に売り渡せば金にだってなるだろうし、利用する方法はいくらだってある。ロゼ

モリフルも最初からそのつもりでいたのだから、このまま手放すとは考えにくい。

「隊長は、ロゼ君の言葉には逆らえないからなあ……。それに、シエルシ自身が今後どうしたいのか、というのも問題だしな」

「……………はう。うさ子隊員は、困った困ったなのです……………」

「所詮、人間一人に出来る事なんて限られてる。俺達は聖人君子じゃないし、全知全能でもない。許せないものはあり、救えないものもある。それで当たり前なんだ」

UGで、罪人達全てを救えなかったように。当たり前のように背を向けて逃げ出したように。仲間を守る為に彼らを犠牲にした。救う為に救わなかった。人生とはそんなもので、一人に出来る事もそんなものなのだ。

せめて祈る事くらいしか出来ない世界の中で、人が誰かにして上げられる事などごくごく限定された物である。それでもシエルシを助けたいと願ううさ子は純粹で、真つ直ぐに悩んでいる。それがホクトには何故か嬉しかった。

「俺達に出来る事は限られている。守れない物は守れないし、救えない物は救えない……。でも、今うさ子はシエルシの傍に居てやる事が出来る。決定的にあいつを救う事が出来ずとも、傍に居るだけで救える事もあるさ」

「……………ふわあ。隊長、くすぐったいよう」

「はっはっは！ うりうり〜！」

うさ子の頭をわしわしと両手で撫で回し、ホクトは白い歯を見せ
て笑った。うさ子は耳をぱたぱたとさせながらホクトに抱きつき、
頬擦りしてから跳ねるように後退し、謎の敬礼　のようなポーズ
を取る。

「じゃあ、うさ子隊員はシエルシちゃんをなでなでなでなしに行
ってきますー!!」

「おう！　うさ子隊員、出撃せよ！」

「らじゃああああっ!!」

うさ子が元気よく走り去っていくのを見送り、ホクトは煙草を口
に啜えた。胸も大きく、顔も愛らしくスタイルもいい美少女なのだ
が、どうにも“そういう目”で見る事が出来ないのは何故だろうか
……？　雑食を自負しているホクトは独りでに悩みつつ、もう一度
街を見下ろした。

世界は理不尽だ。そしてそれが当然でもある。失望も絶望も、こ
んな世の中では有り触れた言葉だろう。ならばそれを前にした時、
そしてそれを踏みしめた時……。どんな選択をするのか、それこそ
がこの世界を生き抜く為に必要な力なのかもしれない。

一人で煙草を吸うのは心地良い時間だった。考えるべき事は山積
みだったが、ホクトは気持ち切り替える術を知っていた。常に思
い悩んでいたところで、現実はその簡単には変わらないのである。
いつまでも意味もなく悩んでいるのならば、いつそ逃げていると言
われようが悠々と過ごす事……。結果的にその方がいざという時いつ
もより踏ん張れるのだとホクトは考えていた。

夜風は紫煙を絡め取り、あつという間に吹き飛ばしてしまう。悩
みも吐かねばきつと消え去る事は無いのだ。燻して散らす……。あと
はすつきりとした心で考えればいいだけの事。

ぼんやりとそうして一人で夜景を眺めていると、ドタドタとうさ子の足音が聞こえてきた。こんなにドタドタ走るのはうさ子くらいしかないのです、直ぐにわかってしまう。振り返るとうさ子は慌てた様子でホクトの元に駆け寄り、そのまま叫んだ。

「ホクト君ホクト君、大変大変なのっ！！ シエルシちゃんがね、居なくなっちゃったのっ！！」

「はいい？」

「だーかーらーっ！ シエルシちゃんがね、居なくなっちゃったのっ！！」

両手をぶんぶん振り回しながらそう叫ぶうさ子。ホクトは疲れた表情で肩を落とし、冷や汗を流しながら視線を伏せるのであった。

烙印（5）

シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレの人生は予定調和の四文字の中を飛び出さないものであった。

生まれた時から帝国の保護の恩恵を受ける第四界層プリミドールで暮らし、そこで姫として何不自由ない、理想的な生活を送ってきた。下層の人間ならば誰でも羨む、ロマンチックな夢物語の住人……。そう、彼女は決して不幸などではなかった。むしろ恵まれていたのだ。

食べる物に苦勞する事も、住む場所を求めて彷徨う事もなく。魔

物の脅威に怯える事も、その身を穢す事も無かった。そんなシエルシにとつてこの旅は “家出” はとても勇気の必要な、そして無謀な行動であった。

彼女の自由は、いずれ消える……。彼女が姫として自由にのびのびと、そして幸せに育てられてきたのは全て迫る収穫の時の為。カントイルの夜の中、シエルシは一人砂の海を眺めながら静かに思いを馳せていた。

この街に来て、そしてホクトたちと出会った。旅の目的を果たす事は叶わず こうして失意に暮れている。色々な事があった。色々な事がありすぎて、シエルシにはもう何がなんだか判らなくなっていた。

信じていたものが崩れたような、しかし信じていた結果通りになったような……。反帝国思想の反逆者と、支配者である帝国の騎士……。アンダーグラウンド、そしてそこに広がる謎の古代遺跡……。全てが答えを出すには遠く、しかしシエルシの心を思い悩ませていた。

涙を流すのにも疲れてしまった。蝶を模した髪留めが微かな光を弾き、煌いた。見上げる空の下、金色の美しい髪が靡いている。もう、残された時間は決して多くない。少女は目を瞑り、静かに唇を噛み締めた。

「彼女が一人で無謀にここまでやってきたのは、きっと婚姻の儀が迫っていたからなんだろうね」

その頃、ロゼは自分の部屋からカントイルの町並みを眺めていた。背後にはリフルが立ち、腰から下げたサーベルの柄に手を置いて黙り込んでいる。二人はシエルシが居なくなったとの連絡を受け、しかし何をするでもなくここに居た。シエルシ搜索はうさ子とホクトに任せる……。それが彼の判断だった。

「迷っているのですか？」

リフルの言葉は単刀直入かつ凶星を突いていた。ロゼは振り返る事無く、窓ガラスに映り込んだ自分自身と掌をびたりと合わせた。迷っている。当然かつそしてあつてはならない事であった。

ロゼは反帝国組織の人間として、これまで帝国が行ってきた非道の数々を目撃している。そしてそれを体験し、阻止する為に今日までやってきたのだ。その為の砂の海豚、そしてその団長である。

ロゼは、砂の海豚の発足者にして先代の団長である男の息子である。父から継承したのは、ガルガンチュアや団員、組織だけではない。帝国を倒し、世界から理不尽な悲劇を無くそうという志も継承しているのだ。そんな自分が迷う事は許されるはずもない……わかつていた。しかし、ロゼの気持ちはブレ始めている。

無理の無い事だった。たった十七歳の少年に、組織の長として立派に振舞えという方が間違っているのだ。リフルはそれを強く感じ、だからこそ不安に思い、常に傍にあった。少年の背中を見つめる剣士の視線は普段とは違い、とても優しくしかし悲しげだ。二人の間には大きな壁があった。それは、二人とも承知している事である。

「婚姻の儀が行われれば、ザルヴァトーレはより帝国との関係を強める事になる……。いわば、シエルシは帝国に捧げられたザルヴァトーレの生贄だ」

“婚姻の儀”、とは？ それは、ザルヴァトーレという国の成り立ちに関わってくる事である。そしてそれこそロゼたち反帝国組織が帝国打倒の為に狙うチャンスであり、そしてシエルシを有効利用できる理由なのである。

ふと、ロゼは己の肩に手を当てた。そこには生まれた時に捺される“烙印”が残されている。誰とて同じ事である。烙印は身体のごここに記され、その者の身分、立場、人生の全ての価値を表してい

る。そして同時に、帝国の支配下にあるという証拠でもあるのだ。

ロゼの身体に刻まれている烙印は、第四界層プリミドールのものである。それはロゼが第四界層という、恵まれた世界で生まれた事を意味していた。第四界層に生まれ、しかし反帝国思想に染まった貴族の男が立ち上げたのが砂の海豚であり、そしてザルヴァトーレはロゼの故郷でもあるのだ。

二重の意味での裏切りが帝国との戦いを意味している。ロゼはそれを気にかけて事もなかったし、ザルヴァトーレを故郷などと意識した事もなかった。しかしシエルシという人間と出会い、彼女を見て僅かに迷いが生まれた。彼女もザルヴァトーレも、倒すべき敵だと割り切ってきた。しかし全ては結局帝国の奴隷であり、境遇に差異はあれど本質は一緒なのかもしれない。

「きつと……シエルシは最期の希望をここに求めていたんだろうね」
「……希望は、求める物ではありません。己の胸の内に、宿す物なのです」

リフルの言葉にロゼは漸く振り返った。それから溜息を漏らし、リフルの脇を抜けて部屋から出て行く。その背中を見送り、リフルは静かに目を閉じた……。

ぼんやりと砂の海を眺めるシエルシの背後、いくつかの影が揺らめいた。気づけば彼女の周囲から人気は無くなり、代わりに現れたのは以前彼女を襲った唐傘の男たちだった。シエルシがその襲撃に気づく頃には既に包囲は完全となり、短刀を手にした男たちは棧橋に立つシエルシをじっと見つめている。

「……………私を、殺しに来たのですか……………」

男達は答えない。彼らはずっと砂の海豚の動きを監視していた。いずれは必ず、このオケアノス唯一の都市であるカントイルには戻ってくるのだ。当然彼らとてここで張っているのは当たり前である。シエルシは無謀にも一人になり、こうして暗殺者に囲まれる事となった。しかしそれは、シエルシが望んだ事だったのかもしれない。少女はとても冷静だった。ただ静かに両手を胸に当て、唇を噛み締めている。凜とした視線は彼女の高貴さの現れであり、夜の月明かりにも似た微かな光の中、少女は幻想的に美しく輝いていた。白の装束が風に揺れ、そして少女は静かに目を閉じる。

「私を殺して……………それで、満足ですか……………？　それで……………この世界は、変わるのですか？」

シエルシが婚姻の儀を終えれば、喜ぶ者も居れば困る者も大勢居るのだ。どこの人間が放った刺客かは、大体推測が出来ている。シエルシは子供の頃より常に暗殺の危険に晒されてきた。何となく、直感的に判るのだ。この装束、戦闘スタイル……………自分を狙う、その目的も。

目を開いたシエルシがゆっくりと後退する。じりじりと、追い詰めるように暗殺者たちはシエルシに迫ってくる。棧橋は長くはない。シエルシの退路は直ぐに断たれてしまった。砂の海に落ちれば、砂の圧力とナノマシンによる分解が待っている。そこで漸くシエルシは気づいた。自分は殺され、このまま砂の中に投げ込まれるのだと。証拠の残らない、完全な殺人である。暗殺にこれ以上相応しい場所もないだろう。鼓動が早まるのを感じた。シエルシは静かに暗殺者を見据える。自分がここで死ぬ……………それも一つの結末なのかもしれない。

少女は静かに両腕を広げた。身体が恐怖で震えていた。自暴自棄

になったわけではない。だが、正常とも言えない。シエルシは泣き出しそうな顔で胸を張り、歯を食いしばった。それが彼女に出来る、彼女なりの抵抗だったのだ。

不意の影の一つがゆらりと動いた。刃が光に煌き、闇の中でハッキリとその冷たい存在を露とする。死ぬのも運命。そう考えて諦めようとした。しかし身体は正直に恐怖に震え、シエルシは悲鳴を上げそうになった。その時である。

暗殺者の正面、何かが飛んで来るのが見えた。白い影は一瞬でシエルシの前に立ちふさがり、接近する暗殺者へと襲い掛かる。ホクトに違いない。きつとホクトが助けに来てくれた。何故かそんな事を考えた。しかし、目の前に居たのは予想外の人物であった。

近づく暗殺者を殴り倒し、びしりと拳を構えたのはなんとうさ子であった。鼻息荒く、小刻みにその場でステップを踏んでいる。その構えは見覚えはなかったものの、どこかの拳法のようにも見える。シエルシが目をはちくりさせていると、うさ子はシエルシの手を握り締めて頷いた。

「シエルシちゃん、シエルシちゃん！ さくせんっ！！ いのち、だいじに！」

「へ………？」

「シエルシちゃんはね、大事な大事な“くらいあんと”さんなの！ だからね、うさ子はシエルシちゃんを守るのっ！！ ふんふん！」

両手をぶんぶん振り回すうさ子。啞然とするシエルシであったが、敵は待つてはくれない。暗殺者が三人同時にうさ子へと襲いかかった。しかしうさ子は投擲された刃を全てキャッチし、それを投げ返してみせる。暗殺者達の足に突き刺さった刃は煌き、三人同時に転等させる事に成功したのである。

「え、ええ〜っ!? うさ子、あ、貴方は……!?!」

「ホクト君の見よう見真似でやってみたけど、結構がんばれたのっ」

「え、ええ〜っ!? そ、そういう問題なんですか!?!」

うさ子はシエルシを抱きかかえ、低く屈んだ姿勢から一気に跳躍した。その大跳躍と呼ぶに相応しい挙動は一瞬で暗殺者達の遙か頭上を通り越し、遠く離れた民家の屋根の上に着地する。軽やかな身のこなしで屋根の上へと降り立ったうさ子はシエルシを下ろし、耳をばたばたさせながら拳を握り締めた。

「シエルシちゃん、逃げるのっ!! ガルガンチュアに走って!」

「う、うさ子……でも、私は……」

「ロゼ君はね、いい子なの! リフルちゃんもね、本当は優しい子なの! ホクト君も、シエルシちゃんの事を助けたいって思ってる……。大丈夫、みんなシエルシちゃんを苛めたりしないよ!」

「でも私は、彼らにとつては敵……。私もザルヴァトーレの人間として、彼らと一緒に居る事は出来ない……」

心苦しそうに胸に手を当て、呟くシエルシ。だがうさ子は黙って力強くシエルシの手を握り締める。にっこりと、何も考えていないような底抜けの笑顔がそこにはあった。

「大丈夫、大丈夫っ!」

「な、なにが……？」

「元気出して、一緒に逃げよう！ 立ち止まるのはね、ダメなの。考えすぎるのもね、ダメなの。今はね、おなかいっぱいになって、ねむねむくってすばいいの。そしたら明日はね、シエルシちゃんもここに出来るよ」

うさ子の言葉に嘘偽りは一つとして存在しない。シエルシは何故か頷き、一緒に走り出していた。理由を問われれば当たり前のように答えられない。しかし、それはきつと後悔しない第一歩でもあった。

暗殺者達は二人を追いかけ、暢気に話をしているうちに再び周囲に展開しつつあった。うさ子はそれを見て両手を空に掲げる。まるで闇の中から光を引きずり出すかのように。

両腕に光の紋章が浮かび上がった。呆氣にとられるシエルシを他所に、うさ子は眉間に皺を寄せ一生懸命にそれを手に掴もうと努力した。見よう見まねといえればそれまで。しかし、彼女が真似ているのは並大抵の物ではない。

想像し、創造する。刃を。男は黒き剣を揮い、その凶悪な力を何かを守る事に使っていた。うさ子はシエルシを守りたかった。故に、それは当たり前のように召喚される。彼女の持つ素質、そして経験に基づき構築される。

召喚されたのは、日輪。刃と呼ぶには余りにも奇形。腕に装着されたいくつかの刃のリング、それは既に剣ですらない。うさ子の両腕には輝く装甲で編みこまれたガントレットが装着され、その周囲に鋭利な円形の刃が付随している。

光を帯びた、籠手のような剣。その名は“翔魔剣ミストラル”。彼女が元々持ち、そして忘れていた力であった。うさ子はミストラルを拳を構えた。予想外な魔剣使いの登場に暗殺者達が警戒を示す。勿論、それはうさ子も同じ事であった。

「う、うさ子……貴方、魔剣使いだっただんですか!？」

「なんか、そうだったみたい!」

「そうだったみたいって……ええ〜?」

「シエルシちゃん、シエルシちゃん! 危ないから、まるーくなつててね! うさがね、直ぐにやつつけちゃうからねっ!」

うさ子が一気に走り出す　と、言うよりそれは一呼吸の跳躍であつた。夜の夜景を背景にうさ子は跳んだのだ。限界まで強化された脚力はうさ子の身体を容易に空に舞わせ、そしてうさ子は一息で暗殺者達の中へと飛び込んでいく。

着地と同時に蹴りを放ち、一人を倒す。敵陣の真ん中に潜入したうさ子は両腕を左右に突き出すように構えた。手の甲に装備された円形のリングが変形し、うさ子の手の中に納まる。それをその場で横に回転しつつ、左右へと解き放った。

放たれた円刃は投擲武器として飛翔し、周囲を薙ぎ払う。と、同時に付随した魔力のワイヤーでうさ子の手から一定以上離れる事は無く、再び主の手の中へと引き戻される。キャッチと同時に再び刃を拳へと変形させ、うさ子は後方　シエルシの元へと跳んだ。遅れて暗殺者達がバタバタと倒れ、屋根から落ちていく……。そんな光景にシエルシはただ啞然とし続けるだけであつた。

「す、すごい……。うさ子、貴方……そんなに強かつたんですね……」

……

「えへへ、うさは頑張りました! シエルシちゃんも、頑張ろうねっ?」

「……は、はい」

なんだかうさ子の笑顔を見ていると全てが馬鹿馬鹿しくなってくる。シエルシは口元に手を当て、静かに苦笑を浮かべた。うさ子は満足そうにつこりと微笑み、ごつごつとした武装状態の手でシエルシの頭を撫でた。ごりごりと頭皮が痛かったが、シエルシは冷や汗を流しつつ黙っている事にした。

「ところでシエルシちゃん、あの人たちは誰かな？」

「……………恐らくは、私が婚姻の儀を遂行する事を良しとしない人の差し金でしょう」

「じゅんいんの、ぎょ？」

なにそれおいしいの？ と言わんばかりのうさ子の目にシエルシは軽く目眩がした。記憶喪失ならば知らなくても仕方の無い事だが……………婚姻の儀はとても重要な、世界的なイベントだったのである。

「兎に角、私は……………命を狙われているんです」

「だれに？」

「ですから、その……………。第四界層プリミドールの……………ザルヴァートルと敵対する、もう一つの国にです」

「の、だれ？ その人、悪い子悪い子なの！ うさがね、成敗しちやうのー！」

「む、無理ですよ。止めておいた方がいいです。彼女は……稀代の
大魔術師とも呼ばれた、ククラカンの王女なんですから……」

シエルシがそこまで喋った時であった。うさ子の背後、迫っている影があった。それにうさ子が気づき、ミストラルで攻撃を防ぐ。火花が散り、うさ子はシエルシを片腕で抱えて後方へと跳躍した。襲い掛かってきたのは唐傘の暗殺者ではなかった。白いマントで全身をすっぽりと覆い隠した、謎の男である。男は直ぐにマントを剥ぎ取り、その全身を露にする。男は騎士であった。唐傘の男達とは明らかに意匠の異なる甲冑を身に纏い、手には両刃の剣を携えている。

うさ子はシエルシを背後に控え、庇うように前に出た。しかし男は容赦なく、立ち止まる事無くそのままうさ子へと襲い掛かってくる。二人は同時に駆け出し、刃と拳を何度も打ち合った。火花が散り、うさ子は相手が強敵である事を理解する。

その時である。うさ子の背後、シエルシを追い越して迫ってくる影があった。男は黒い魔剣を騎士目掛けて叩きつけようとした。しかし、騎士は瞬時に剣を投げ捨て、己の魔剣を召喚する。

騎士が召喚したのは純白に輝く、美しい盾であった。その盾からは鋭利な槍のようなパーツが飛び出しており、それが彼の魔剣のデザインであった。盾の部分で攻撃を弾き、騎士は一步後退する。

襲撃と同時に後方に跳んだホクトはシエルシの近くに着地し、その肩を叩いた。遅れて登場してきたホクトにシエルシは何故か怒りたくなかったが、その理由も自分ではいまいち理解出来なかった。

「ホクト君、おそいようっ！」

「お前が早すぎ……。俺の何倍のスピードで走るんだよ……。まったく……！で、こいつはなんだ？」

「くくらかん」って国の、悪い悪い人!!」

うさ子の言葉にシエルシは首を横に振った。なぜならばシエルシは彼の顔に見覚えがあったから。戦いをとめようと思っただが、騎士は止まる事無く襲い掛かってくる。それを迎え撃つようにホクトがガリユウを揮い、白と黒の剣は正面から激突した。

衝撃で屋根が吹き飛び、二人の魔剣がそれぞれの色の火花を散らしながら軋む。騎士と傭兵は至近距離から視線を交えた。ホクトが笑みを作り、騎士はそれを不快そうに睨みつける。二人の男は同時に刃を引き、身体をひねると同時に再び刃をぶつけ合うのだった。

炎魔ノ姫（1）

彼女はまるで、炎のような人だった。

その身に紅蓮を纏い、燃え盛る焰の中で舞い踊る姫。ずらりと並んだ兵士たちの先頭に立ち、彼女はあえて危険にその身を晒すのだ。そうする事だけが、唯一信頼を勝ち得る行いである事を知っているから……。

私に出来る事は、ただ彼女の無事を祈る事くらいである。彼女の眼前、夜の荒野には数え切れない程の影が蠢いている。荒野を行軍する、黒き魔物の群れである。群れが向かっているのは、彼女の背後にある村。人工僅か数十人の、とても小さな。しかし決して彼女が見捨てようとはしなかった村。彼女はそれを守る為、兵を引き連れてここまでやってきた。救いを求める、願いの声に従って。彼女が空に手を伸ばした。そこに、紅い光が集っていく。編みこまれた優雅な剣、しかしそれは剣というには余りにも奇形だった。彼女の持つ魔剣、“炎魔剣ソレイユ”は剣であって剣ではない。その刀身は何かを切断するためではなく、彼女の魔術を強化する為に使われる。

焰の巫女はその剣を揮い、兵達はそれに従う。まるで一つのオーケストラを見ているかのようだった。揮われる紅き刃はまるで指揮者のタクト。演奏が開始されると同時に兵士たちが同時に弓矢を放つ。雨のように降り注ぐ矢は弧を描き、魔物の群れへと襲い掛かった。それが合図であった。

「誰もわらわの前には出るでないぞ。その命惜しくば。ただその瞳に焼きつけよ。これが、大魔道の力よ。！」

彼女は時に、こうよばれる。“大魔術師”、“炎魔姫”。彼

女は……ククラカン第一王女、ミュレイ・ヨシノは。この世界で最強の魔力を持つとまで噂される、絶対無敵の力を持つ魔剣使いなのである。

ミュレイが着物のスリットから長くすらりと伸びた足を広げ、炎魔剣ソレイユを振り下ろす。大地に巨大な紅い魔方陣が浮かび上がり、ミュレイの身体は宙に浮かび上がった。兵士達が放つ矢が一斉に停止し、舞い上がったミュレイを誰もが見上げていた。

踊るように、まるで空中に舞台があるかのように……ミュレイは優雅に舞い続けた。大地に浮かび上がった魔方陣から紅い光が空に立ち上る。光は厚い雲を突き破り、天空の彼方から紅き光の雨となつて降り注ぐのだ。

彼女の周囲を舞い踊る紅い花卉にも似た魔力の光、そしてその美しさに見惚れている間に炎の流星群は戦場へと降り注ぐ。大魔法と呼ぶに相応しい、絶対的な威力と範囲を誇るそれを彼女は何の前動作も無く、あっさりと放つてみせるのである。

魔物に突き刺さるように降り注ぐのは一つ一つが圧倒的な破壊力を秘めた炎の魔法である。大地に落下すると同時に大爆発を巻き起こし、魔物を次々に巻き込んでいく。それでも魔物は止まらない。数が多すぎるのだ。それは三桁単位の大軍団であり、決して一人ではどうにかできるような数ではない。

だが私は迷いもしなかつたし、焦る事も不安に思う事もなかつた。ミュレイは再び剣を揮い、舞い踊る。その鼓舞に引きずり起されるように、大地の魔方陣より巨大な光が浮かび上がった。

空中、光は折り重なって形を成していく。ミュレイはその巨大な影の上に載り、優雅に足を組んで座っていた。出現したのは炎を纏った巨大な龍であつた。ミュレイが口元に手を当て、そして剣を振るうとそれを合図に龍は空に慟哭する。

魔物の全てが怯え、足を止めた。しかし龍は翼を広げ、二本足で走り出す。ミュレイを乗せた左掌を掲げたまま、右腕を振り回し魔物の群れを薙ぎ払っていく。口元に溜め込んだ莫大な魔力を一気に

炎として吐き出し、荒野を更に焼き尽くすような焔の吐息は全てを薙ぎ払っていく……。

炎の龍はミュレイを乗せたまま、わずかばかり残った魔物の群れに吼えた。それだけで魔物たちは尻尾を巻いて逃げ出していく。こうなる事は、誰もが理解していた。しかしそれでも歓声が沸きあがり、賞賛の聲が彼女へと向けられる。

人々の感謝と崇拜の念は割れんばかりに響き渡り、正に嵐のようだった。私はその渦中に身を置き、静かに彼女に視線を向けていた。人々の声に応える気さえもない彼女のつれない態度は、しかし高貴さを振りまくに十分足るものであった。

私がこうして戦場に出てくるのは、既に何回目だったか……。しかし、毎回私達に出番が回ってくる事はない。なぜならばこの国は。ククラカンという国は。彼女、ミュレイ・ヨシノという絶対的な守護者によって守られているのだから……。

この私こと、北条 昴がロクエンティアと呼ばれる世界に召喚され、早くも一ヶ月の時が経とうとしている。私はいつしか、彼女……ミュレイに憧れの念を抱くようになっていた。

炎魔ノ姫（１）

こちらの世界に召喚されてから暫くの間、私はそれはもう引き籠もりに引き籠もった。

元々、活発な性格とは程遠かったし、わけのわからない状況に強く打ちのめされていたという事もある。正真正銘、心の底から私は途方にくれていたのである。

わけのわからない世界。わけのわからない召喚。失われてしまっ

た一部の記憶……。救世主だとか呼ばれてはいるものの、私にはこの世界に救世が必要なようにはとても見えなかった。なぜならばクラカンの首都、ラクヨウはとても明るくい人々の活気に満ちており、今日も昨日も、そして恐らくは明日も平和そのものだったからである。

何もする事のない私は、ただラクヨウにあるラクヨウ城の一室から城下町を見下ろす日々を過ごしていた。食事はウサクが持って来てくれるし、困ったことはなんでもウサクが相談に乗ってくれた。まるで忍者というよりは召使だなあ、なんて事を思っていたが、それはあながち間違いでもないらしい。

ウサクは忍なのだが、ミュレイ専属の忍なのだという。故に通常時はミュレイの面倒を見るのが主な仕事であり、彼女の出す無理難題に必死で応えるのが彼の日常なのである。それに比べれば私の世話はまるで手を焼かないと、彼はニコニコしながら語ってくれた。

そんな平和ボケした毎日が続き、私はすっかり悲しみに暮れていた理由も忘れてしまった。そういえば現実世界でいろいろあったよーな気がするが、もーどうでもいいーっていうか……。考えてもしようがないというか……。だって戻れないのだ。全部台無しになってしまったのだ。もう、私に生きている意味はない。だけどおなかはずくし死ぬのは怖いのだ。だからしょうがない、生き続けるしかないのだ……。

失意に暮れ、ただ部屋の隅で膝を抱えて過ごす日々……。そんな日々が数週間続いたある日の事。久しぶりに私の部屋にやってきたミュレイは、私の前に腰掛けてにっこりと笑みを浮かべていった。

「お主、剣を習ってみぬか？」

「……………は？」

「剣術じゃよ、剣術。お主も救世主なのじゃから、剣術くらいは嗜

んでおかねばのう」

そう語り、ミュレイは片手を軽く掲げ、指を弾いた。すると窓からウサクが現れ、一振りの刀を主へと差し出したのである。ウサクは何かあると直ぐに動けるように、常にミュレイの傍に隠れているらしい……。

ミュレイは受け取った刀をそのまま私へと差し出した。顎でそれを受け取るように指図してくるが、私は正直それが怖くて仕方がなかった。何しろ本物の刀というやつなのである。そんなもの、怖くて持てる気がしない。

おどおどと、ミュレイの顔色を伺いつつたじろぐ私に彼女は笑みを作り、そつと優しく私の手を取って剣の柄を握らせた。それに逆らうことが出来ず、私はただなされるがままに剣を握り締めた。

「つくづく、愛い奴じゃのう……昂は」

「……ミュレイ、あの、私は……その、こういうものは……」

「大丈夫じゃ、まずは挑戦する事が大事なのじゃ！ 昂、お主には沢山の才能がある。それを開花させる為には、己の腕を磨くしかない。才能とは、己の力で目覚めさせる物なのじゃ。まずはその手で何かを掴んで見よ。さすれば、自ずと何をすべきかは見えてこよう」

「……いや、それ以前にミュレイ。私は、救世主として何をすべきなんだ？」

私の質問にミュレイの笑顔が固まった。そう、実のところ今日まで何度もこの質問はミュレイへと投げかけているのである。しかしミュレイは毎回質問の答えをはぐらかしてしまふ。今日こそはと引き下がない覚悟で身を乗り出すと、ミュレイは仕方が無くといい

た様子で溜息交じりに教えてくれた。

「実は、お主が何で召喚されてしまったのか、わらわにもよくわからんのじゃ」

「……はいっ？」

そう、ミュレイは答えをはぐらかしていたのではない。ただ、答えられなかっただけなのである。彼女は元々、私を召喚するつもりなど、微塵もなかったのだ。

彼女は魔術師であると同時に、“式神”と呼ばれる存在を使役する特殊な術者でもあるのだ。式神は代々ククラカンの王族にのみ継承されている秘術であり、“魔物”^{ケリム}と似た存在を己の意のままに操ることが出来る強力な術なのである。

ミュレイはその術を使用する為に必要な、契約と召喚の儀式を行っていた最中、私を誤って召喚してしまった。というのが事の顛末である。その話をしている最中、ミュレイはあっけらかんと笑っていたのだが、私は今にも泣き出しそうであった。

元々、式神とはこの世界に存在するものではなく、外なる世界つまり判りやすく言うと異世界から召喚するものであり、彼女が得意としている式神の召喚というのも全ては異世界から、ということらしい。しかしこれまで人間を召喚してしまった事は一度もなく、そして戻し方も判らなくなってしまうたらしい。

「本来ならば、式神は召喚から一定時間が経過するか、わらわが任意で元の世界に戻す事が出来るはずなのじゃが、お主はどうにもそれが出来んのじゃ、すまぬすまぬ」

「すまぬすまぬって!?!」

「兎に角、お主が何故召喚されてしまったのか、そしてお主が何を成すべきなのか、それはわからんわいのじゃ」

「じゃあ、救世主っていうのは!？」

「それは、ククラカンに伝わる伝承の一つじゃよ」

そう切り出し、彼女が聞かせてくれたのは所謂御伽噺であった。かつて、ククラカンがまだ国として成立するよりも前の時代を舞台とした、文字通りのファンタジーである。

ククラカン王族の先祖は、式神の術式を開発した際、初めて召喚に成功したのが救世主と呼ばれる存在であったという。それは人の形をしており、異世界の知識を人々に与え、ククラカンの発展に大きく貢献した。そしてその後起こった“大破壊”と呼ばれる巨大な災いを退け、人々に安息を齎したとされている。

「ざつくばらんに言えばそういうことだな。人型の式神というのは、代々救世主であるとされていたのじゃ。そして実際に召喚されたのが、お主であったというわけよ」

「……………。じゃあ、私はその御伽噺を信じて救世主なんですか？」

「そついう事じゃな、ふふふ」

いや、ふふふじゃなくて。私は盛大に溜息を漏らし、その場に両手両膝をついた。ミュレイはまるで私の事を深刻に考えてくれている気配が無い…………。そう思ったのだ。彼女の式神とやらになつてしまった以上、彼女が私を元の世界に戻してくれることが唯一の希望であった。しかし、その望みは儚くもあっさりと断られたのである…………。

これはへこたれざるを得ない……。泣きそうになっている私の肩を叩き、そしてミュレイは何を思ったのか私の身体を優しく抱きしめてきたのである。ミュレイの身体からは、優しい花のような香りがした……。はだけたデザインの胸元の白さと押し当てられる感触の柔らかさに思わず赤面してしまう。ミュレイはとても女性的で、かつ魅力的だった。同じ女でも、ドキリとしてしまうほどに。

「まあ、なんでもよいではないか。わらわはお主に逢えて、良かったと思っておる」

「……よかった？」

「お主は可愛いし、話していて楽しい。それだけでわらわは満足なのじゃ」

本当にそうなのだろうか？ 私は、ただ食っちゃ寝の生活を続けているだけで、何一人の役に立つようなことはしていない気がするのだが……。こうしてミュレイに抱きしめられ、撫でられているともう何もかもどうでもよくなってきそうでも怖かった。うう、美味しい食事に綺麗な眺め、何不自由ない生活に更にこんな優しくされたのでは、マトモな生活に戻れなくなりそうだ……。思えば私の現実世界での生活も今とあんまり変わっていないかのような気もする。大きく変わったのは文化とそして大学に通い他人に合わせてヘラヘラするという一日の大半を占めていた愚行が無くなったくらいで、結局向こうでも私は先生や奥さんにベタベタに甘えていたわけで……。

甘え癖がついてしまっているのだとすればそれは由々しき事態である。しかし、ミュレイの撫で方はとても心地よく、中々離れられない気がしない。このまま式神として躡けられてしまうのではないかと考えるとなんだか泣きたくなった……。

「兎に角、その刀はお主にやる。好きに使え」

「……は、はあ」

「ウサク、使い方を教えてやれ」

「拙者がござるか？　しかし拙者、刀の扱いは専門ではござらぬが？」

「だったら自分で何とかしろ。お主の頭は南瓜なのか？　わらわがやれと言っておるのじゃ、なんとかしろ」

「え、ええ〜……？　様様がそう仰るのであれば、まあ拙者も頑張ってみるでござるが……」

「最初からそう忖えんか、ばかもの」

ミュレイは散々ウサクをいじめた後、そのまま退室していった。窓の外に立っていたウサクはノロノロと窓から部屋の中に入り、肩を落として困り果てていた。

「様はいつもあんな感じなのでござるよう」

「……大変なんだ、ウサク」

「大変でござるよ〜……。まあ、命じられてしまったものは仕方が無いのでござる。不肖このウサクが、剣術の稽古をつけて差し上げよう！　ニンニン〜！」

なんだかんだでノリ気だったウサクに連れられ、こうして私の剣術修行が始まった。とはいえ、実は少しばかり師匠に齧らせて貰った事があったので、初めてというわけではなかったのだが。

ふと、剣術の稽古というものをしてしていると師匠たちの事を思い出した。今頃師匠は何をしているだろうか……。私が居なくなったら、あの道場の門下生は一人もいなくなってしまうわけで……。そんな心配をしつつ、ウサクに連れて行かれたのは城の中に行くつか存在する道場の一つであった。広々とした道場の中では、既に何人もの人々が剣の鍛錬を重ねている。竹刀を打ち合わせる音だけが響き渡る落ち着いた雰囲気の中、私は何故か懐かしさを感じていた。

とりあえず邪魔になると悪いので、隅っこの方に移動する。当然行き成り真剣なんて使ったら危なすぎるので、練習用の竹刀を手取る。こうしてウサクによる剣術修行が始まったのだが……。

「まずは簡単なところから伝授するでござるよ」

「よ、よろしく」

「では、まず竹刀を構えるでござるー！」

「うん」

「そしたらまず二人に増えて……」

「ストップストップストップ……！！！！」

大声を出す私の目の前、二人に分身したウサクが同じように目を丸くしていた。

「「どうしたでござるか？」」

なんというセルフステレオ……。じゃなくて、そんなの行き成り素人が　　というか人間が出来るはずがないだろう。私は懸命にそれをウサクに伝えたのだが、彼は困ったように腕を組み、一言。

「これより簡単な術は拙者判らないでござるよ」

なんで剣の稽古をするはずがまず分身なのか全く理解できなかつたが兎に角ウサクに任せていたのではまるで上達出来る気がしなかつた。まあ別に元々上達したいともあまり考えていないのだが、ハイ、分身してね〜といわれてニコニコ分身出来るわけがないだろう。

「ちなみに二人に増えて……その後はどうするんだ？」

「三人に増えるでござる」

「出来るかああああ　　っ！！！！」

竹刀を投げ出すと同時に絶叫した。こんな感じで、私の剣術修行はまだまだ上達には程遠いらしい。毎日暇で暇でしょうがなかつたので、やる事が出来たのは嬉しい事なのかもしれないが……。さて、そんな私の日々の中、もう一つやる事　　というより興味のある事があつた。それは何を隠そう、式神である私の主であり、姫でもあるミュレイ・ヨシノの事である。

彼女は美しく、そして常に凜と、堂々としている。高嶺の花という言葉が似合うような彼女は、このククラカンの第一王女なのだ。ククラカンは代々女性が王になるとのことで、現在はミュレイの母親が女王として君臨しているのだとか。

そんなわけで、ミュレイは姫として悠々自適な生活を送っているのかと思いきや、実際にはそれどころではない。彼女は一日中

慌しく動き回っており、常に公務に追われているのだ。そして彼女が担っているのは、姫としての仕事だけではない。

女王の処理しきれない仕事は彼女が代行し、女王からも国民からも厚い信頼を得ている。彼女は政の世界にも積極的に口を出し、そしてその発言力もとても強い。曰く、彼女はもう一人の女王であり、ククラカンにとって欠かせない存在なのだという。

それだけではない。彼女は魔剣と呼ばれる、こちらの世界にしか存在しない魔力とかいう不思議な力で構築される武器の使い手で、式神の術と魔術、そして魔剣の力を使い、ククラカンの国土で発生する魔物事件、あるいは国民に脅威を与える存在に対処し続けているのだ。

武力、知力、その両方に置いて彼女はこの国で最も優れており、さらに絶世の美女と来ている。その言動は若干子供染みており、理不尽な事を部下に申し付けたりもするが、それは彼女の悪戯心から来るものであり、本当にどうしようもない事は部下に押し付けたりはしない。そのあたりもきちんとわきまえているのだ。

さて、どうしてそんな事を知っているのかという話になるわけだが、私は毎日暇だったので彼女の事ばかりを見ていたし、ウサクはいつも彼女の話ばかりを私に聞かせてくるのである。まあそれは苦勞性の部下の愚痴なのだから止め様もないのかもしれないのだが、兎に角私は毎日毎日寝ているか食べているかミュレイの話の話を聞いているかと言った具合であり、彼女を意識するなというほうが無理な相談であった。

ミュレイは時々私の部屋に来ては、何をするでもなくのびのびとした無防備な素顔を見せ、歳に似合わぬ子供染みた笑顔で私の話を興味深そうに聞いていた。私の住んでいた世界の事は彼女にとっても珍しく、興味深い話だったのだろう。話を聞いている彼女はいつも楽しい物語に胸躍らせる乙女のようにさえあった。

「いつか、お主のいるような平和な世界に……。そんな世界に、こ

の国をしてみたいものじゃのう……」

目を細め、青空を見上げながらミュレイはそう呟いた。彼女のこのしみじみとした呟きの意味が私には理解できなかった。ククラカンは、少なくともこのラクヨウ城から見下ろす分にはとても平和のように見える。商いに活気があり、人々は皆笑顔を浮かべている。だがそれでも何か足りないのだろう、ミュレイはいつも無邪気に笑った後、寂しげな瞳で街を見下ろしていた。

元の世界に戻る事は叶わず、途方に暮れる私。しかし私と話すことを楽しみし、私を必要としてくれる人が此処にはいる……。そう考えると少しだけ気持ちになるような気がした。

夜月を見上げながら私はどこにも通じなくなってしまった携帯電話を取り出し、一日の事をそっと記録した。電池がいつ切れるのかとハラハラしていたが、どうも電池は切れる心配がなかった。理由は……良く判らない。もしかしたら召喚されたものはある一定の状態で停止し続けているのかもしれないなんていう憶測を立ててみたが、その成否は誰にもわからないわけで。

ぼんやりと過ごす日々の先、自分がどうなっていくのかもわからなかった。そしてその数日後、私はミュレイに連れられ、初めてラクヨウの外に出る事になる。そこには、彼女の憂き目の理由と呼べるものが、当たり前のように転がっていたのだった。

炎魔ノ姫（2）

「この世界から争いが消える事は恐らくないのじゃろうな」

夜の闇の中、焚き火を囲む私達の中、ミュレイはそう寂しげに呟いた。大量の魔物を殆ど一人で駆逐した英雄……。彼女は魔物討伐の後、彼女が救った村に一泊していく事になったのだ。

当然、式神でもある私は彼女の傍に居なければならぬわけで、彼女と共に辺境の村に残る事になった。焚き火を囲んでいるのは今の所私とウサク、そしてミュレイだけである。先ほどまでは村の人々のもてなしでどんちゃん騒ぎが続いていたが、今は宴もたけなわと言ったところだろうか。

酒を瓶で一気飲みしてはしゃいでいたとは思えないほど、ミュレイの瞳は憂鬱そうだった。彼女のこんな顔を見るのは、もう何度目だろうか。それは私が彼女と共に戦場に出てきた回数と比例している。

ミュレイは戦いが終わると、いつも悲しそうな顔をしていた。この世界には“魔物”^{クリム}と呼ばれる脅威が存在する。それはどこからともなく現れ人々を襲う。そしてそれは際限なく繰り返され、今までの歴史の中人々は常に魔物と戦い続けてきた。

魔物は誰にも根絶する事が出来ない。一説によれば、魔物の存在は人の業と深い関わりがあるのだという。魔物はただ人を苦しめる試験として存在する。そしてそれを駆逐する為に、人は罪の名を持つ剣で立ち向かうのだと。

勿論、御伽噺の域を出ない空想である。けれどもミュレイはこの煉獄の世界を本当に案じていた。プリミドルは第四界層と呼ばれる比較的安全な世界であり、ククラカンも同じである。しかしそれでも魔物は日々現れ、人を襲うのだ。

この世界に絶対安全な場所など存在しない……。ククラカンは広

く、その全てを守る事はミュレイにも不可能なのだ。彼女は自分の身体がいくつもあるれば、戦いも政も出来るのにと時々ボヤいている。

「何故、魔物は人を襲うのか……。わらわが式神の研究をしているのは、人成らざる者の心を知りたいからなのかもしれないな」

彼女は魔物が行軍していた荒野へと視線を向けた。立ち上がり、その先を指差す。闇の中には荒野、そしてその先には山脈が見えた。

「あの山脈を越えた先に砂漠があり、そのさらに先にはこの世の終わりがある」

「この世の……終わり？」

「プリミドールの限界じゃ。世界は板の上……。そこからはみ出せば奈落へと落とされる。ここは、ククラカンの最果ての村じゃ。ここより奥には魔物と死しか暮らしておらぬ」

といわれても、あまりしっくり来ない。私の世界では世界は丸いものだったわけで……。ミュレイは腰に手を当て、闇へと続く山脈を見つめていた。炎に照らされたその横顔は美しく、思わず見惚れてしまう。

「全てを救いたいと……。守りたいと願うのは、愚かな事じゃろうか」

「え？」

「……この世界は狂っており。人と人が争い、縦の法則が適応され、そして日々魔物の脅威に晒され続けている……。わらわは、そ

んな世界を変えたいのじゃ」

「……………世界を……………変える？」

「突拍子も無い話だと思うか？ わらわは本気じゃ……………。その為に、この国を、世界を守る為に力が欲しい……………」

白く、しなやかな己の手を見つめ、ミュレイは搾り出すようにそう呟いた。それからいつものように人懐こい笑顔を浮かべ、私の肩を叩く。

「わらわは先に休ませてもらうぞ」

そう言っつて宿へ向かうミュレイ。その後を無言でウサクがついていこうとするのだが、ミュレイは足を止めて振り返らずにウサクに言った。

「ウサクも付いて来るな。お主は昴を守れ」

「は？ いやあ、しかし拙者は何時如何なる時も姫様の護衛を……………」

「わらわが良いと言っつておるのじゃ、主の命が聞けぬのか？」

「む、むむう……………。然らば……………御意」

納得は行かない様子だったが、ウサクはしぶしぶ頷いた。そうして宿に向かっていくミュレイを見送り、ウサクは再び焚き火に当たるように傍に腰を下ろした。

「姫様は戦いの後はいつもこうでござるよ……………。昴殿が居てくれる

からこそ、あれくらいで済むでござるが」

「……ミュレイ、どうかしたの？」

「姫様は……その、あまり戦を好ましく思っていないのでござる。元々、姫様はどちらかというところ平和主義なのでござる」

全然そんな風には見えなかった。ミュレイはいつも大雑把で大胆で、ウサクの事もよく殴ったり蹴ったりしているし、もうドSって感じの人なのだが……。戦いも派手で勇壮で、文字通り英雄の如き振る舞いだっと思った。

しかし、ミュレイは私と一緒に居る時はあやうって時々寂しげな表情を見せる事がある。ウサクに言わせるとそれはとても珍しい事らしい。ウサクとミュレイは昔からの付き合いで仲もいいそうだが、部下にそんな姿は見せられないとミュレイは強がっているのかもしれない。

「拙者も、忍になる前はこういう辺境の村で暮らしていたでござるよ。しかし、魔物の襲撃で村は滅んでしまったでござる」

「そ、そうだったんだ」

「途方に暮れていた拙者を拾い、忍として育ててくれたのが姫様でござるよ。故に、拙者は姫様の事をお守りするのが使命なのでござるよ」

「……なんていうか。みんな、大変なんだな」

私は……正直、そういう辛いものはあまり背負っていない。全く背負っていないわけではないけれど、少なくともこちらの世界に縁

はないのだから、魔物に襲われるとか戦うとかそういう事とは程遠い生活を送ってきた。だからミュレイやウサクの気持ちを理解する事は難しいだろう。

ミュレイはきつと、私の何倍も辛い気持ちを抱え込んで生きているに違いない。英雄として彼女は一步も引けないのだ。弱音を吐く事も、倒れる事も、諦める事も許されない……。そんなミュレイの事を思うと、私も何かしてあげたいと思う。だが役立たずの式神に何が出来るというのか。

「それに姫様は婚姻の儀も迫っているから、きつと落ち着かないのでいじめるよ」

「婚姻の……儀？」

初めて耳にする言葉に思わず聞き返してしまう。するとウサクは一瞬ばかんとした後、腕を組んで一人で納得するように頷いた。

「なるほど、昴殿は知らなくとも詮無き事でございます。婚姻の儀というのは……」

ウサクが説明を始めようとしたその時だった。ミュレイが休んでいる宿の方から大きな物音が聞こえてきたのである。壺だか花瓶だかが割れたような音で、それに続いて部屋の中で爆発が起こった。呆気にとられ全く動けない私の隣、ウサクは直ぐに立ち上がり動き出していた。

「姫様！！ 何事でございますかああああっ！！」

「え、あ……ウサク！？」

こんなわけのわからない所に一人で置いていかれたら怖いじゃないか……。というか、流石にミュレイの身に何か起きたのだと考えるべきだろう。私もウサクに続いて走り出すが、ウサクの足は私の何倍も速かった。すぐに突き放され、結局一人で走る事になってしまった。

ミュレイはたまにこうして一人になりたがる。それに姫の癖に普通の旅人が使うような宿で寝泊りしたりするのだ。そういう所がまた彼女らしかつたりもするのだが、やはり一国の姫なのだからそれなりに警戒はすべきだったのだ。

いや、しかし魔物の大群を退けるミュレイである。ちよつとやそつとは何が起きてもケロリとしてのことだろう。彼女の実力を知っているからこそ、ウサクも大人しくついていかずに残ったりするのだ。私はそれを思い出し、すっかり安心しきっていた。

殆ど心配しないまま宿に駆け込むと、部屋の中は爆発の痕跡どころどころに火が残り、壁は黒く焦げ付いていた。ミュレイはベッドの上に腰掛けたまま足を組んでいる。彼女の眼前には何故か鎧を着用した者たちがこげて転がっていた。

「ミュレイ、これは!？」

「おお、昂か。いや、別にどうという事もない。ただ少し鼠が入り込んだだけの事じゃ」

ということとは、襲われたという事なのだろうか。倒れている騎士のような格好をした西洋甲冑の人物たちは手に剣を持っている……と、そこでふと気づく。剣？ 甲冑……？ こんな服装の人間、クラカンにいるのだろうか……？

個人的に、この異世界は全部クラカンのような文化の国だと思っていたのだがどうやら違ったらしい。一人でそんな事を考えていると、背後ではウサクがミュレイの身を案じて身体をぺたぺた触り、

顔面をブン殴られていた。ミュレイ……その細腕の何処にウサクをぶつとばす力があるのだろうか……。

とりあえず、ミュレイに怪我はなかったようだ。それに先ほどの物音で兵士たちも直ぐに集まってくるだろう。そう安堵し、ほっと胸をなでおろした。その時であった。

「動かないで下さい」

背後、何者かの声が聞こえた。それと同時に闇の中から伸びてきた腕が背後から私を拘束し、首元に鈍く光る刃が押し当てられる。何が起きたのか思考が追いつかなかった。身体が利かず、もがいてみるが効果はない。

何者かに襲われたのだと気づいたときには全てが遅かった。ウサクもミュレイも険しい表情で私を見つめている。厳密には私ではなく、私を背後から羽交い絞めをしている何者かを。

「ミュレイ・ヨシノ……貴方を拘束します。彼女の命が惜しければ、魔剣から手を放して下さい」

見ればミュレイはいつの間にか召喚した魔剣ソレイユを握り締めていた。しかし襲撃者はそれを目ざとく発見し、ミュレイにびしゃりと言いつつ。苦虫を噛み潰すような表情でミュレイは魔剣を解除する。私はその瞬間、自分がとんでもない事をしてしまったのだと自覚した。

戦いの素人が、ここまで出張ってきてしかも人質になってミュレイを追い詰めてしまっている……。大人しく城で待っていればこんな事にはならなかった。ウサクなら、こんな風にあっさりと捕まるようなヘマはしなかったのだろう。私は組まれるまで、全く何をされたのかもわからなかった。

ミュレイだけではなく、ウサクも動けない様子で息を呑んでいた。

途端に恐怖で全身から冷や汗が流れ出る。身体は正直に恐怖で震え、熱いはずなのに何故か背筋がぞつとした。目の前に、死を運ぶ物があるのだ。怖くないはずがなかった。

「……お主の言うとおりにしよう。昂を……その子を放してくれ」

「貴方の封印が先です。指先一つで魔術を無詠唱に放てる貴方の事です、一瞬の隙について彼女を助け私も撃退するつもりでしょうが、無駄な事です」

声からして、後ろに居るのは女のようだった。女は私の首筋にナイフを突きつけたまま、片手をミュレイに伸ばす。それに対し、ミュレイは全く抵抗の意思を見せなかった。足を組んだまま、両手をだらんと投げ出している。まさか、私を助ける為に本気で言われる通りにするつもりなのか？ そう思った時、しかしウサクがミュレイを庇うように前に出ていた。

「ウサク！」

怒鳴り声を上げたのは敵ではなくミュレイだった。しかしウサクは退かず、困ったような表情でこちらを見つめている。そうだ、ウサクの使命はミュレイを守る事……。ミュレイと私の命、どちらを優先するのは決まっている事だ。

ついさっきウサクは話してくれたじゃないか。自分の恩人であるミュレイを守る事が自分の使命だと……。ウサクは私を見殺しにするかもしれない。そう考えた時、急に私は怖くなった。今まで怖かったが、もっともつと怖くなった。

心のどこかでミュレイならなんとかかしてくれる、助けてくれると信じている自分がいたのだ。だから身体が震える程度で我慢できた恐怖だったが、今はもう頭がおかしくなりそうなくらいに怖くなっ

ていた。ウサクは、ミュレイを守る為なら私を犠牲にする。そんな考えが浮かんでしまったから。

「そこを退いてください」

「退け、馬鹿者！！」

「し、しかし拙者は……っ」

私はもう泣きたい気分でいっぱいだった。何でこんな目に会うんだろうか。私は別に何か悪い事をしたわけでもないのに……。きつく目を瞑り、恐怖をかき消すように心の中で助けを求め祈り続けたふと、脳裏に大切な人の後姿が思い浮かんだ。彼ならきつと、こんな時には助けに来てくれるのに。

刹那、一瞬の思考の停止。そして私は大きく前に突き飛ばされていた。女の立っていた場所の背後は宿の壁だったはずだ。しかしそこが轟音と共に碎け、女は私と共に吹っ飛ばされたのである。襲撃者の背後から現れたのは巨大な槌を手にした大男だった。まさか壁ごと碎いて背後から襲撃があるとは思って居なかったのか、女は慌てた様子で受身を取り、体勢を整える。しかしそれと同時にミュレイが魔剣を装備し、ウサクが短刀を手に走り出していた。

一瞬に全員が動き出す。そんな中、私の時間だけが止まっていた。吹き飛ばされた勢いで背中を強く打ち、呼吸が苦しくなる。必死で立ち上がり逃げようとするが、足がもつれて上手く動けなかった。女の襲撃者は白いマントで全身をすっぽりと覆っていたが、その下に見えるのは蒼いドレスのようは服装だった。とてもじゃないが戦闘に向いているとは思えない服装。しかし、腕には見覚えのあるものが見える。

それはミュレイの腕にもあった、魔剣使いの紋章だった。女の腕が輝き、空間に剣が構築される。それがどんな形状だったのかはわ

からなかったが わからなかったのは私だけだったらしい。乱入してきた槌を持った兵士、ウサク、ミュレイ 全員がまるで何かを避けるように屈んでみせる。ただ棒立ちしているのは、私だけだった。

「 昂ッー!! 」

「 ……え? 」

ミュレイが絶叫し、一度は回避の姿勢をとったものの私目掛けて飛び込んでくる。ミュレイはまるで私を庇うように身体を抱き、倒れこむ。そして女が構築した魔剣が、ぐるりと周囲を薙ぎ払った。

丁度それは私の胸元があつたあたりの位置を横に一閃、薙ぎ払う。部屋の中にあつた全てが衝撃で吹き飛び、壁が崩れ落ちていく。そして私は見たのだ。私を庇い、飛び込んできたミュレイの背中を魔剣が確かに斬りつけたのを。

大量の血が頭から被せられ、ミュレイが苦悶の表情を浮かべているのが至近距離で確認出来た。認識と遅れて私とミュレイは倒れこみ、彼女は私の無事を確認し……それから一瞬、優しく微笑んだ。

「 ……ミュレイ? 」

ミュレイの身体からこんこんと湧き出る血の中に私が落ちていく。彼女は目を閉じ、そのままもう目覚める事はない。ウサクの叫び声と同時に兵士が敵へと襲い掛かるのが見えた。私はそうして、彼女が自分を庇って死んだ事実を認識するのである。

私を庇って、ミュレイが死んだ……。余りにも唐突すぎる展開だった。正直、ついていけない……。息が上がる。動悸が激しくなる。頭の中がグチャグチャで、そしてあの時の事故の様子が脳裏に再生

された。

ビルから落ちていく彼の姿……そして、大地に広がった彼の死体……。私を守る為に、また誰かが死んでしまう……。震える手でミユレイの身体を抱きしめた。血はとても、暖かった。ぬるりとした感触……死を否応なく、私に協力に突きつけてくる。

カチンと、どこかで何かの音が聞こえた気がした。自分でもわけのわからない言葉にならない叫びを上げた。その瞬間、眩い白い光が世界を包み込んでいくのが見えたのだった。

炎魔ノ姫（2）

一瞬に全員が動き出す。そんな中、私の時間だけが止まっていた。吹き飛ばされた勢いで背中を強く打ち、呼吸が苦しくなる。必死で立ち上がり逃げようとするが、足がもつれて上手く動けなかった。女の襲撃者は白いマントで全身をすっぽりと覆っていたが、その下に見えるのは蒼いドレスのようは服装だった。とてもじゃないが戦闘に向いているとは思えない服装。しかし、腕には見覚えのあるものが見える。

それはミユレイの腕にもあった、魔剣使いの紋章だった。女の腕が輝き、空間に剣が構築される。それがどんな形状だったのかはわからなかったが、わからなかったのは私だけだったらしい。乱入してきた槌を持った兵士、ウサク、ミユレイ。全員がまるで何かを避けるように屈んでみせる。ただ棒立ちしているのは、私だけだった。

「昂ッー!!」

ミュレイの叫ぶような声が聞こえた瞬間、私は逆にミュレイの方に跳んでいた。何故そんなに思い切った事をしたのかはわからない。しかし、それは正しい行動だった。ミュレイの身体を逆に抱きかかえ、私は転がった。その頭上を構築された女の魔剣が薙ぎ払ったのである。

部屋全体の衝撃が広がり、壁が砕け散る。私はミュレイの身体を必死に抱きしめたまま床で丸くなっていた。この戦いが早く終わってくれる事……それを祈る事しか今の私に出来る事はなかったのである。

魔剣を手にした女は私とミュレイの無事を確認し、しかしウサクと槌を持った兵士が同時に襲い掛かってきた事により後退する。既に周囲は兵士によって包囲されていた。襲撃者は引き際だと判断したのか、崩れた壁の上に一度跳躍し、そこを足場に兵士の包囲を飛び越え走り去っていく。

兎に角、襲撃者は居なくなった……。崩れた壁の瓦礫の中、私はその事実は今度こそ胸をなでおろしていた。強く、強くミュレイを抱きしめる。彼女が無事である事を確認したかったのである。そうしてゆっくりと身体を起すと、丁度ウサクが駆け寄ってくるのが見えた。

「姫様、昴殿ッ！！ 無事でござるか!？」

「……ウサク。うん、なんとかミュレイも無事」

ふと、そこで私は違和感を覚えた。確かにミュレイは無事だ。無事なのだが……ふと、抱きしめているミュレイの顔を見つめる。ミュレイは随分とかわいらしい様子で気を失っているようだった。いや、かわいらしい……?」

「……………ひ、姫様？」

「……………ミュレイ……………」

私もウサクも同時に絶句した。なんと、私の腕の中にいたミュレイは。こんなことってあるのだろうか。折角、助けたのに。血の気が引いていくのがハッキリと判った。何がどうなったら、こんな風に。

「姫様が……………ちっちゃくなつたでござる」

「うゝむ……………？ まさか、本当に童に戻ってしまうとはこの……………」

焚き火に当たりながらミュレイらしき子供はそんな事を呟いた。

中々あつけらんとしていたのだが、片やウサクは炎の前で両手足を地面について頂垂れており、私も両手で頭を抱えて沈黙していた。

謎の襲撃者による攻撃から既に数十分が経過している。私達は一先ず焚き火の前に戻つたのだが、とんでもない状況に変わりはない。依然、問題は何一つ解決などしていない……………。

襲撃者が剣を振り回した次の瞬間 厳密にそれが発生したのがいつかは誰も覚えていないが 異常事態が発生したのである。なんと、ミュレイの身体は突然小さくなり、子供のようになつてしまつたのである。外見的には十歳前後くらいだろうか？ 声色も随分と幼くなり、巨大だった胸もすっかりしぼんでしまつた。イヤそれはどうでもいいところなんだが……………。

正直、混乱するなというほうが難しい話である。ミュレイは今も元々着ていた着物の裾を切つたりして小さくして何とか着ているものの、つい先ほどは小さくなつたことが良く判らず裸のまま十二単

から引つ張り出してしまふなどのハプニングがあり、ウサクが奇声をあげたりしていた。

「まあ、全員無事じゃったのだから、よいではないか」

「よく……ないと思う……」

「拙者は……拙者はどうすればよいのでござるかあああっ！！ぬ
おおおおお　　ッ！！」

「うっさいわばかもん！！　少し落ち着かんか！」

「ミュレイが落ち着きすぎだよ……」

「まあ、大方襲ってきた女の魔剣が持つ固有能力が何かじゃろう。
相手を童子の姿にする能力というのがあっても別におかしくはない」

「そんな能力つてあるのかなあ……」

「つてか、誰得……」。

そんな事を考えていると、背後から大きな影が近づいてきた。先ほど、巨大な槌で壁を破壊し背後から私を助けて（？）くれた兵士だった。男はどっかりとウサクの隣に腰掛け、それから腕を組んで小さくなったミュレイを見下ろした。

「ほお……。随分とまあ、小さくなったもんじゃあねえか……姫様
よ」

「“せくしい”ではなくなったが、“ぷりてい”になったじゃろう？
ゲオルク」

ゲオルクと呼ばれた男に私は見覚えがあった。普段から見ているわけではなかったが、剣術の訓練で道場に行ったり城内をぶらぶらしているときたまに見る事があったのだ。かなりの巨体に強面の顔のお陰で強く印象に残っていた。

どうやらゲオルクとミュレイは親しい仲にあるらしい。ゲオルクは倒れて泣いているウサクをひっぱり起し、無理矢理椅子に座らせていた。

「悪いな姫様。襲撃者は取り逃がしちゃった」

「……まあ、そうじゃろうな。並の魔剣使いではなかったようじゃし、深追いは禁物じゃろう。それより襲撃者の正体は判ったか？」

「まあ、大体予想通り……と言った所かねえ」

最後に現れた女は取り逃がしてしまったが、それ以外に襲撃してきた騎士たちからは装備などを押収することに成功したらしい。そこから大体どこの手先なのか判断出来るという。

「まあ、鎧はザルヴァトーレの一般兵がつけているものだった。剣も同じだな」

「ザルヴァ……トーレ？」

「隣国じゃよ。そして、ククラカンとは長らく険悪な関係の国じゃ」

ミュレイはウンザリした様子でそう教えてくれた。ククラカンとザルヴァトーレ、その二つがこの第四界層プリミドルには存在しているのだという。

丁度二つに分かれた国土を持つており、それぞれが太陽の国、月の国とも呼ばれている。ククラカンには昼の時間が多く、ザルヴァトールは夜の時間が長い事に由来している。

そしてこの二つの国家は帝国に続く権力を持つ国で、どちらか帝国の恩恵を最も受けられる国なのか、その国力を争っているのだという。表向きに戦争は起きていないものの、ミュレイは幼い頃からザルヴァトールの暗殺者の脅威に晒されていたのだとか。

「まあ、お陰で強くなったから良かったのじゃがな」

「それじゃあ、そのザルヴァトールっていう国が、ミュレイの命を……？」

「婚姻の儀が迫っている今だからこそ、その可能性は高いな」

ゲオルクが言う婚姻の儀とは……。そういえば、ウサクもさつきそんな話をしていたような気がする。

「何はともあれ、今日のところは警戒を怠らずに休んだ方がいい。見張りは俺とウサクでやる。あんたとそっちの小娘はあつたかくして寝てろ」

立ち上がり、同時にめそめそしているウサクの首根っこを掴んで持ち上げるゲオルク。二人に言われるとおり、私とミュレイは宿の中に入る事にした。

しかし、とてもじゃないが眠れるような心境ではない。暗殺者の襲撃と、小さくされてしまったミュレイ……。私はこれからどうすればいいのだろうか。先の事が不安でどうしようもなかった。

「まあ、なんとかなるだろうよ。そう気を落とすな、昂。お主が無

事で、何よりじゃよ
「よ」

優しく、しかし子供っぽい愛らしい笑みを浮かべるミュレイ。その笑顔が嬉しく、そして心苦しかった。窓の向こう、空に浮かぶ光……。眠りにつけるかどうかは、怪しい所だった。

炎魔ノ姫（3）

「城に、戻らない？」

事件から一晩が明けてもやはりミュレイは小さいままであった。日が昇り、ミュレイの身体が小さくなってしまった事を改めて認識した。彼女はとても愛らしい姿になり、偉そうな口調で喋っているのがまた背伸びをしているようで何となく構いたくなってしまう。が、実際のところは二十代後半の立派な大人であり、ちゃんと偉いのだが……。

そうして宿に集まった私達だったが、ミュレイは一晩の間に大体の行動を既に決定していたらしい。彼女が真つ先に宣言したのはそう、ラクヨウの城には戻らないという事であった。

しかし、それは私としては首をかしげずには居られない選択である。命を狙われている事が判ったのだから、何でもいいから兎に角ラクヨウまで逃げ帰ればいいではないか、と思ったのだ。勿論それをちゃんとミュレイにも言ってみた。しかし帰ってきた答えは同じだった。

「わらわはラクヨウには戻らぬ。このまま、隊とは別行動を取る」

「……しかし姫様、それは危険でござるよ？ 昨夜の刺客が、未だ何処に潜んでいるやも判らぬのでござる」

「そんなものは百も承知じゃばかたれ。じゃが、このままではラクヨウに戻る事は出来ぬ」

「……まあ、それはそうだろうな。問題は大有りだ」

腕を組み、ゲオルクがそう頷いた。彼女がラクヨウにこのまま戻るわけには行かない理由。それは、例の婚姻の儀というものが関わっているらしい。折角なので、ついでにとミュレイが儀式について説明してくれる事になり、私はベッドの上で正座しながらその話を聞いていた。

第三階層ヨツンヘイム、その全土を支配するハロルド帝国というものがあるのは私も既に知っていた事だ。帝国は第四以下のプレートを支配し、全ての人間を自在にする権利を持っているという。帝王であるハロルドなる人物による、絶対王政であると言える。そんな皇帝の誕生百年目を祝う式典が間近に迫っているのだという。

皇帝誕生百年というのがもう既に引つかかるのだが……一体そのハロルド皇帝というやつは何歳なのか。そもそも人類なのか……。しかし私は横槍を居れずに話を最後まで聞く事にした。どうせ聞いても理解出来ないとしても人物なのだろうから。

「式典と同時に開催される婚姻の儀というのは、それぞれの国の王を皇帝が定める儀式でもあるのじゃ。そしてそれは即ち、帝国以下の世界での権利を意味している」

この世界に存在する第三以下の国には、男性の王は居ないらしい。つまり、全てが女王なのである。しかも国と呼べる規模なのはククラカンとザルヴァトーレだけであり、それ以下のプレートに国家の概念は存在せず、それぞれの土地の領主と呼ばれる存在がこの場合は該当する。

つまり、女王と領主、この二つの位を定める重要な儀式であり、そしてこの国々にどれだけの権利を帝国が与えるのが儀式にかかっているのだという。その儀式に出席する予定だったミュレイが、敵対国家であるザルヴァトーレに狙われていたとしてもなんらおかしな事はない。

「そして、ハロルド皇帝は男性であると言われておるが、実際のところは謎じゃ。ハロルドは各国の女王を妻として娶り、皇帝の妻だけが国を治める権利を持つんじゃない」

「……一夫多妻なんだ　って、それじゃあミュレイも？」

「予定では、来月の式典に出席しわらわも皇帝の妻の一人となるはずじゃったのだ」

そこまで話を聞いてやっと状況に理解が追いついてきた。つまり、ザルヴァトーレはわざわざミュレイを殺さなくとも良かったのだ。

この状況で、十分に成功しすぎていると言える。なぜならば、ミュレイは子供の姿では　結婚なんて出来るはずがない。

当然、婚姻の儀の条件としては皇帝の妻として相応しい能力、そして年齢制限というものが存在する。これは多少帝国側のさじ加減によって上下するようだが、娶られる条件イコールある程度成熟した女性の肉体である事は最低条件なのだという。

「見ての通り、こんな身体では子など産める筈もなし……。皇帝には見向きもされんじやろうなあ」

というか、大人の姿のままだったら皇帝と結婚していたのだろうか……。それはそれで複雑な心境だった。ミュレイはそれでいいのだろうか？　それが彼女の望みなのだろうか……。？　しかし、その質問は決して口には出来なかった。それは、気安く訊ねていい事ではないような気がしたから。

「このままでは婚姻の儀に出席出来ないどころか、城に戻っても追いつかれる可能性がある。こんな状況で誰がああミュレイ・ヨシノ

であると信じる？」

「た、確かに……」

ミュレイはとても女性的な、ふくよかな肉体の持ち主だった。背が高くプロポーションがよく、髪は長く衣装も派手だった。それが今や十歳くらいの子供になってしまったのである。アレとコレはどうにも私の頭の中で直結しそうもない。

「まあ、母上ならばわらわの事が認識出来るかもしれないが……どちらにせよこのままではククラカンの為に来る事が何も無い。魔術も大規模なものは使えなくなってしまったようじゃいな」

そう愚痴りながらミュレイが指を弾くと、小さな火花が散って直ぐに消えてしまった。まるで呼吸をするように魔術を扱っていたミュレイだが、流石にこの状態では力にかなりの制限がかかってしまっようだ。

「故に、今から城に戻ったところで仕方が無い。凡そ一月の間に何とかこの呪いを解く方法を探し、式典に間に合わせるしかなかるう」

ベッドの上で足をぶらぶらと投げ出しながら小さなミュレイは溜息混じりにそう呟いた。私達三人はそれに反対する意見を持ち合わせていなかった。私は、基本的に人に意見するようなタイプではないし、ウサクは姫が行く所ならばどこにでも行くのだろう。そしてゲオルクは自らその話を吟味し、姫の行動を肯定したようだった。

「……………ごめんなさい、ミュレイ」

「うぬ？ 何ゆえ謝るのじゃ？」

「あ、いや……。だって、私が居なかったらミュレイはこんな事にはならなかったかな、って……」

私がつつとしっかりしていれば……。せめて足を引つ張りさえしなければ、こんな事にはならなかったかもしれない。私が入質になりさえしなければ、ウサクとミュレイの二人なら刺客を撃退出来たはずなのだ。特にミュレイはあの驚異的戦闘力の持ち主であり……。つまり、こちらが後手に周ってしまった理由は私しか考えられなかった。

肩を落とし、溜息を漏らす。結局刀は持ち歩いているけど、私に出来ることなんて何も無い。刀を抜くという選択肢さえ頭の中に無かった弱虫に、ミュレイを守るはずもないのだ。

「そう思っただったら、強くなりな」

低い声に顔を上げると、ゲオルクが腕を組んで私を険しい顔つきで見下ろしていた。壁に背を預けていたゲオルクは立ち上がると、私の腰から下げられた刀を指差した。

「戦う手段なら持つてるはずだ。自分の無力を嘆くのならば、まずその前に強くなれ。嘆きは敗者には許されない事だ。やる前から諦めて、何もしようとしねえのは性質が悪い」

「……………」

「これ、ゲオルク！　あまりわらわの式神を苛めるな！」

「姫様、悪い事は言わん。この小娘は城に戻すべきだ。こいつはまた必ずあんたの足を引つ張る事になる。次は、首が繋がるとは限ら

ない」

「ゲーオールークー？」

ミュレイが大男を睨みつけ、眉を潜めた。が、流石に子供なのでまるで迫力には欠けていた。しかしゲオルクは肩をすくめ、もといた位置へと戻っていく。

確かに、ゲオルクの言うとおりであった。何も反論は出来ない……。私は、ただ怖がってがたがた震えていただけの臆病者だ。何も出来ない、チキン野郎なのだ。そんなのは言われなくなつてわかつている。あつちの世界に居たときからそうだった。ずっと、そうだったんだから。

「ごめんなさい、ミュレイ……」

「謝らずとも良い、昴……。ほれ、泣くな泣くな」

「な、泣いてないもんっ！」

ミュレイが下から子供の顔で覗き込んでくるので、私は慌てて袖で顔をごしごしと擦った。眼鏡を外してから擦っていたので涙目だったのはもうバレバレなのだが、子供のミュレイに対するプライドのようなものが私をそうさせたのである。

何はともあれ、私は結局足を引く張る事しか出来なかつたのだ。その認識はしっかりと受け止めなければならない。こんなにも優しく、私の存在を許してくれているミュレイに報いる為にも……私は、自分に何が出来なのかを考えねばならないだろう。

「大丈夫じゃ、昴。お主は何も心配せずとも良いのじゃ。わらわが、ずっとお主を守るから……」

「……ミュレイ」

ミュレイは小さいのに、やっぱり私より年上だった。見た目と精神年齢は関係無いのだと、今改めて痛感する。私の手を握り締める小さな彼女の手が、とても暖かく力強かった。しかし何より、私はそれが恥ずかしかった。

他人に甘えてばかりで、自分では何もしようとしない……そうやって生きてきた。嫌な事は先延ばしにして誰かのせいにして、そうやって生きてきた。嫌になる。身体に染み付いた、“逃げ”の習慣。私はまだ、彼女の手のぬくもりに甘え続けていた。

炎魔ノ姫（3）

かくして、私達は本体とは別行動を取る事になった。兵士たちはそのまま城に退却する事になり、城へ状況を説明する役目が与えられた。誰がどれほど信じてくれるかは兎も角、これで女王の耳に少なくともミュレイの不幸が届く事だろう。

現在、私達はプリミドールを横断する列車の席に座っていた。合い向かいの席に、私の隣にはミュレイ、それから正面にウサクとゲオルクが座っている。ここで何故ゲオルクが居るのかというのが私にとっては疑問であると同時に問題なのだが。その辺は、ちょっとウサクに聞いた知識しかない。

ゲオルクは、帝国やザルヴァトーレで言う所の“騎士団”に該当する、“武士団”に所属しているククラカンの軍人だという。見た目で既に判る事だったが、彼は元々この国の人間ではないらしい。

元々どこにいたのかなどはウサクも知らないそうだが、彼はこの国でもかなりの実力者であり、武士団の団長でもあるのだという。

武士団長ともなれば、流石に姫とも交流があるのかもしれないとも考えたが、ゲオルクのミュレイに対する馴れ馴れしさは度を越えている気がする。元々ゲオルクは周囲の顔色をうかがったり気を使ったりタイプとは程遠いような気がするが、ミュレイとは旧知の仲という雰囲気が一番的確な気がする。

本来は彼も城に戻るべきだったが、ミュレイの護衛が少なすぎるとの事で残り、こちらに同行する事になった。となると、この旅路はずっと彼と一緒にという事になる。そう考えただけで気が一気に重くなった。

「俺の顔に何かついてるのか？」

「えっ？ いや、な、なんでもない……」

「そうか」

そうか……じゃなくて怖いんですよ……。うう、男の人は苦手だけど、その中でもこの人は更に苦手なタイプだ。何考えてるのか判らないし怖いしでっかいし……。それに引き換えウサクの可愛い事……。背も小さいし、目とかもクリクリしているし、ドジだしいつもミュレイに怒られてるし……。

「へくしっ！ ん、んん……。拙者、風邪引いたかもでござる……」

そんなウサクはさておき、肝心のミュレイはどうしているのかというところ。先ほどから駅で買ったお菓子や弁当を食べながら、一人悠々とした様子で流れる景色を目で追っていた。その様子はこの厳しい状況にも関わらず、楽しそうに見える。

「……ミュレイ、元気だね」

「うぬ？　せっかく童子の姿になったのじゃ、楽しんでおかねば損ではないか」

「そついう問題なのか……？」

「ほれ、お主も食べるか？　甘くて実に美味じゃ」

そつ言つてミュレイが差し出したのは餡子の入った饅頭だった。

私は無言で饅頭を口に入れながら考えた。これから、自分達がどうなるのか……。

ミュレイは私を守るといつてくれたが、それだけではダメだと思ふ。抱えるようにして今はずっと持ち続けている刀も、このままではただ朽ちていくだけだ。せっかくミュレイが私に送ってくれた気持ちでもあるこれを、無駄にするのはいけない気がする。

しかし、私は一般人なのだ。ウサクのように忍者修行なんてした事もないし、ミュレイのようにすごい血筋も才能もない。ゲオルクのように筋肉むきむきでもないわけで……戦えと言われても、そんなの直ぐに出来るはずがないのだ。

気分は憂鬱としたまま、時間が過ぎていく。ウサクとミュレイはノンビリしたままだし、ゲオルクは相変わらず沈黙を守っていた。仕方が無いので私は周囲を　列車の中を見渡した。

お世辞にも近代的とは言えない、木製の内装はしかし何となく懐かしい感じがして嫌いではない。利用客の数はそれなりに多く、周囲の席も殆ど満席状態だった。今度は視線を窓の外に向ける。

ククラカンの土地は、その殆どが広大な山々に覆われている険しい場所だ。当然、列車もあちこちを蛇行するように進んだり、トンネルを何度も潜ったりしている。昼の草原を抜け、何も無い空間が

行き成り広がり、その向こうの空に目を向ける。そこには巨大な壁があった。

「あれは……？」

「シャフトじゃよ。他の界層に通じておる」

シャフト。一応、話には聞いた事がある。ということは、この列車はこのままシャフトまで。あの壁にしか見えない巨大な縦穴まで続いていくのだろうか。すると、目的地はもしか。

「違う界層に向かうの？」

「うむ。目指すは第五界層、エル・ギルスじゃ」

エル・ギルス。人が住む事が許された大地の中で、最も下層に存在する世界。

第五界層の下に存在する第六界層オケアノスは、いわば巨大なゴミ処理場なのだという。ナノマシンプラントそのものである砂漠だけが広大に広がっているだけで、通常人間が住むことは出来ないらしい。そんな地獄のような世界にも人は住んでいるそうのだが、現実的に見て一般市民が住めるのは第五界層まで……というのが常識らしい。

「まあ、オケアノスにはギルド本部もあり、別の意味でにぎわってはおるのじゃがな。エル・ギルスは欲望の大陸だと言えるじゃろうなあ」

「欲望の大陸……？」

「エル・ギルスは非常に両極端なのじゃ。外見的にも内面的にも……言えることじゃろうな。帝国の支配下において、最も人権が保障されない最底辺の人間の住処であり、それと同時に様々な人間に取つての歓楽街でもある」

「どうしてそんな所に……？」

「知り合いの術の使い手に、わらわの数倍術式に詳しい者が居る。その者が暮らしているのがエル・ギルスなのじゃ」

つまり、ミュレイはその術士の所でこの呪いを解除して貰おうという魂胆らしい。そもそも、このミュレイの子供化の原因も今の所ハッキリしていないのだが……。

昨日、刺客は魔剣を放った。それは輝きでよく見えなかったが、シルエツト敵には非常に凶暴な形だったような気がする。勿論ハッキリ見たわけではないので、これまた曖昧なのだが……。何か巨大な、刃物というよりは鈍器のような……そんな武器だった気がする。その破壊的な魔剣の放った能力が、対象を子供にする。というのもイマイチ関連性が薄いような気がしてならない。が、実際あの攻撃があつた直後にミュレイは小さくなってしまったのだから、敵の呪いだと思えるのが確かに一番しっくりくるのだろう。

そもそも、魔剣とはなんなのか？ 魔剣は固有能力を持ち、身体の一部に 主に腕である事が多い に術式を直接刻み込み、魔力を編みこんで構築される武装。大雑把に言えば魔剣とはそういうものである。正しその形状、用途、能力などは個々によって大きく異なるのだという。

魔剣という呼び名であるにも関わらず、その形状は“剣”である事に拘らない。が、必ずどこかに刃物としての性質を持っているらしい。ミュレイの魔剣ソレイユも、一見刃物とは思えない形状をしているがそれも見方によっては刃に見えない事も無い……のか？

「……………。えーと、じゃあとりあえずその人に会えれば…………？」

「恐らくじゃが、術は解けるじやろうな」

なるほど、ちゃんと解くアテがあるからこうして城に戻らずそのまま移動を開始したのか。そういう事ならばこの行動にも納得が行く。だからといって、気を抜きすぎのような気もするが…………。積み重なったお土産の山を見て私は一人頷いた。

かくして列車の旅は続き、やがてシャフトへと到達する事になった。四人で列車を降りると、シャフト内部に存在するターミナルと呼ばれる交通要所に降り立つ事が出来た。そこからこの界層の各地に列車が向かい、そして他の界層へと移動する為のエレベータが稼動している。

人の多さは流石であったが、それでも他の界層へと移動する客は少ないようだった。殆どの利用者が列車関係のエリアに固まっている。シャフトのエレベータを利用出来るのは本当にごく一部の人間だけらしく、本来ならば上下の界層移動は許されない事なのだという。

ターミナルの内部は外の世界とは打って変わって機械的で、まるでSFの世界に迷い込んだかのような錯覚を覚える。しかし、駅を見張っている甲冑の騎士たちは確かにこの世界のもので、これももしも帝国の技術力なのだとしたらククラカンとは大きな差があるんだろうなあ…………。なんて事を自然と考えてしまう。

ミュレイは早速ターミナル内部でお土産を買いあさっており、ゲオルクとウサクがエレベータ使用の申請書を記入している様子だった。人込みの中、気づけば私は孤立している…………。土産物を買う理由もないし、申請書類など書けるはずもない。やれる事がないと、手持ち無沙汰で寂しくなる…………。

広大なターミナルはシャフトの中に構築されており、シャフトの

巨大さを改めて実感する。広々としたホームをぐるりと眺めていると、ふと一人の人物に視線が釘付けになった。それは　少女だった。見るからに少女だ。しかし、何故か彼女は少女であるようには見えなかった。

自分でも良く判らない感覚だった。首に巻いたマフラーに手をやり、私はそこに顔を埋めた。少女は白い装束を着用していた。それは周囲の人々の服装とはかなりデザインが違い、明らかに浮いている。長い髪の毛は癖が強く、ふわふわと浮いているかのようにも見えた。

少女の外見で最も目を引いたのは、その頭から生えた　なんだろう、あれは。耳……？　そう、うさぎの耳のようなものが……少女の頭から生えていた。物珍しすぎてじっとそれを凝視していると視線に気づいたのか少女はこちらへ首を擡げ、それから笑みと共に軽く手を上げた。それが自分に向けられた物だと気づくと、急にじっと見ていたのが恥ずかしくなってくる。

彼女は行き交う人々の中、停止した彫像のようだった。まるで時の流れの中からはずれてしまったかのような、そんな寂しげな横顔……。そこに時の流れが再来し、私へと歩み寄ってくる。たじろぐ私の目の前にまで近づき、彼女は大人びた笑顔で言った。

「　こんにちは。いい、夜ですね」

「へえ？」

思わず変な声を出してしまった。何しろ今は、真昼なのだ。太陽はまだ出ているし外も明るい。しかし、彼女はいい夜ですねと言った。意味が良く判らなかった。

「貴方は、エル・ギルスに？」

「あ、えつと……はい」

「わたくしもです。ふふ、奇遇ですね」

「そ、そうですね……」

いや、ここはエル・ギルス行き申請を行い、ついでにエレベータを待ったためのホームなのだから別に奇遇ではない気がするのだが……。

少女は周囲を見渡し、それから深く深呼吸を一つ。まるでそれだけで幸せとでも言うように目を細めて笑うから、私もなんだかそれに釣られて周囲を見渡してしまう。

ふと、気づいた時には少女の姿は消えていた。つい先ほどまで目の前に居たはずなのに……。目をごしごしと擦ってみるが、やはりどこにもいない……。

「昂〜！ そろそろ出発じゃぞ〜！」

背後からミュレイの呼び声が聞こえ、振り返った。最後にもう一度彼女の姿を探してみたが……彼女はどこにも見当たらなかった。

「わかった！」

返事だけして、小走りでミュレイに向かっていく。これから目指す場所は欲望の大陸。余計な事を考えている余裕はきつくない。私は思考を切り替え、皆に追いつく事だけを考えるのであった。

破魔ノ剣(1)

上下の世界を繋ぐエレベータは、高速で私達を別の世界へと連れ
て行く。外の景色は一切見えず、気づいた時には既に世界は切り替
わる。エレベータから出た場所には、プリミドルと同じような構
造のターミナルがあった。感覚的には、エレベータに入ってそのま
ま扉を開けて出てきたような気がしたが、実際には別の世界なのだ
から不思議なものだ。

周囲を眺めると、ターミナルの利用客はプリミドルより少ない
様子だった。ミュレイは腕に抱えた饅頭が大量に入った紙袋を揺ら
しながらヨロヨロと歩いている。多分腕力が低下しているのだろう
……。こういう言い方もなんだけど、それ手放してウサクに持たせ
ればいいのでは。

「さあ〜て、さっさと向かうかのう……。遊楽都市“ローティス”
へ」

「遊楽都市……ローティス？」

「プリミドルをはじめとした、上位界層の人間が遊ぶ為に作られ
た下層の楽園……という謳い文句の都市じゃ」

なんでも、このエル・ギルスという世界には上位界層の人間が遊
ぶ為の施設がいっぱいあるらしい。街が丸ごと、そうした人々を迎
え入れるレジャー施設になっているんだとか。

しかし、そんな派手な世界にしては駅に人の姿は少ないし、たま
にすれ違う人もなんだかやつれているような気がする。そんな疑問
を抱えつつ、列車を乗り継ぎ私達のエル・ギルスでの旅が始まった
のである。

再び列車で同じく気まずい空気が流れる事数時間。その間、私は少しだけ目を閉じる事にした。思えば昨晩は口クに眠れなかったし、身体は旅できちんと疲れていたのだろう。直ぐに眠りにつく事が出来たのだが、それがよくなかった。

随分と昔の夢を見てしまった。それは、まだ私が彼と共に居た時間の夢……。彼は、内気で社交性のない私をいつも楽しませてくれた。よく、私の手を引いてあちこちに連れ出してくれた。電車にもよく二人で乗ったものだ。忘れられない、大切な思い出……。

夕焼けの中、冬の世界を二人で眺めていた。彼はその日見た映画の文句ばかりを言っていたけれど、そういう口ぶりには随分と楽しそうに見えた。私は眼鏡を外し、眩い世界の光に目を細めていた。

彼はふと、唐突に私の首に自分が巻いていた紅いマフラーを巻いてくれた。寒そうだからと……。女性の優しくするのは当たり前だと無邪気に笑う彼の横顔が、未だに忘れられずに居る……。

そう、それは既に終わってしまった物語の夢……。彼は死に、もうこの世界の何処にも居ない。私が……。彼を殺してしまったのだから。もしも、もう一度……。もう一度だけ出会えたのならば……。彼に謝る事が出来るだろうか。

夢は唐突に終わりを告げた。気づけば外は夜の闇に染まり、列車は駅に停車している。遊楽都市ローティスに到着したのだと悟り、私は立ち上がった。

四人で一緒に列車を出て、真っ先に見えたのは夜の闇の中に浮かぶ膨大な数のネオンと町中にかかっているわけのわからない音楽だった。その町は非常に両極端だった。身なりのいい男女が楽しそうに道の真ん中を歩いているかと思えば、道端ではみすばらしい格好の人々が倒れていたりする。

笑い声としゃぎ声が響き渡る世界は、私に嫌な事ばかりを思いださせた。首に巻いたマフラーを片手で引き上げ、静かに目を伏せる。ここに……。ミュレイを救う方法があるのだろうか。

「さて、向かうとするかのう……。昴、大丈夫か？」

「え？ うん、大丈夫だけど」

「……………“ほくと”、というのは……………お主の男か？」

「え？」

その名前を聞いた時、時間が止まってしまおうかと思った。何故ミユレイがその名前を知っているのか……。目を真ん丸くしていると、ミユレイは悪戯っぽく微笑み、それから私の小脇を突付いてきた。

「寝言で何度も呼んでいたぞ？ お主も隅に置けぬやつじやのう」

「え……………？ ええっ!？」

「なっはっは〜！ ほれ、先を急ぐぞ！ この街は入り組んでおる、はぐれても知らんぞ」

ミユレイは軽快に笑い飛ばし、先を進んでいく。なんだか……………言動も子供っぽくなってきている気がするのだが、まあ元々こんな性格だったような気がしないでもない。

それにしてもミユレイに聞かれたという事は、ウサクとゲオルクにも聞かれてしまったということだろうか。それは……………かなり恥ずかしい。顔が真っ赤になるのが自分でもわかった。もう……………死にたい。

ミユレイたちに追いつけるように、駆け足で移動を開始した。夜の闇に浮かぶ光の街、ローティス……………。きつと、私は苦手な町だと思った。こんなに眩しかったら……………小さな光はきつと消えてしまう

から。

「そうでしょ……“北斗”」

破魔ノ剣（1）

「……………。あの……ミュレイ？ 本当に、ここが目的地なの？」

「うむ、そうじゃ」

いや、そういわれても。目の前にある巨大な建造物は、どう見てもおピンクなお店にしか見えない……。

ローテイスの中でも、特に歓楽街としての色が濃い町の北部、更にその中でも風俗街としか表現のしようがない、いかかわしいお店ばかりが並ぶエリアに私は立っていた。場違いすぎて色々な意味で逃げ出したかった。さっきからウサクが色っぽい格好のお姉さんに声をかけられまくり、物凄い勢いで憔悴しきっている……。

目の前にある店は“バテンカイトス”という名前の……。何をするお店なのかはあまり考えたくないお店だった。外見的にはお城のようにも見えるが、周囲の店と比べればまだ落ち着いたように見えない事もなく黒塗りの城壁に、ピンクの看板がかかっている。

なんだかもう、立っているのも辛い……。こう……色々な意味で辛い。さっきから男女二人組みとやたらすれ違う意味もあまり考えたくない。何でミュレイはこんな所に来てしまったのだろうか……。当のご本人様は十歳の肉体だというのにまるで戸惑っている様子はない……まあ、ミュレイだしなあ。

「ここに来たって事は、やっぱりあいつか」

「うむ。他に、今の所わらわより術の扱いが上手い者が思いつかぬ」

「……ゲオルクとミュレイは、結構こういふところによく来るの？」

と、質問して気づいたのだがなんだかこれは全く別の意図の質問に聞こえるような気がしてくる。いや、そういう意味じゃない。そういう意味じゃなくて……。

一人であたふたしていると、ゲオルクが溜息を漏らしミュレイは楽しそうに笑っていた。くそう、絶対馬鹿にされている……。ウサクは さっきからずっと念仏を唱えながらあらぬ方向へと視線を向けている。もう、ウサクは駄目だろうな……。

「ほれ、何をキョロキョロしておる？ さっさと店に入るぞ」

「う！？ は、入るのっ！？ こんなえっちなお店に！？」

「えっちとはなんじゃ、えっちとは……。立派な店ではないか」

全くそういう問題ではないというか私は未成年というかいやまあ来年には二十歳になるはずだったんだけど元々こういう場所には縁が無いというかあったとしてもそんなあっけらかんとはしていられないというか……。

悩む私の手を引き、ミュレイはずんずん中に進んでしまう。城の扉を開くと、中は更に城の様相である。西洋風の落ち着いた内装といかにも高級そうな調度品が飾られ、床は一面赤いカーペットで覆われている。エントランスの頭上には巨大なシャンデリアが下がり、それを取り囲むように螺旋階段が上へと続いている……。

この金のかけかた手の込みようは普通ではない気がする……。しかし、やっぱり店内もピンクな雰囲気だ。一刻も早く、ミュレイの呪いを解いてここから出て行きたい。

「いらっしやいませ。当店は完全会員制となっておりますが……」

「久しぶりじゃのう。わらわじゃ、わらわー！」

黒いドレスを着用した、以下にも淑女といった感じの受付嬢に駆け寄り、ミュレイはカウンター前で背伸びして彼女の顔を覗き込んだ。ひらひらと手を振っているが、受付は気づく気配がない。

「むむ……！ この姿では判らんか……。しょうがないのう、どこかに会員証があつたと思うのじゃが……」

「……もしや、ミュレイ様で？」

「おお、そうじゃそうじゃ！ わらわがミュレイじゃ」

「これはまた、随分と愛らしいお姿に……」

何故か普通に話が進んでいるのが逆におかしい気がした。ミュレイはなにやら受け付けさんと話をしていたので、手持ち無沙汰だった私は背後を振り返ってみた。

相変わらず、ゲオルクは腕を組んで黙り込んでいる。彼の顔には大きな傷があり、それが更に強面を強調している……。一方ウサクは目を回しているかのような状態でひたすらに念仏を唱え続けている。可愛そうに……。

「お〜い、話がついたぞ！ こっちじゃ〜」

ミュレイが受付嬢と一緒に手を振っている。私達はそれに続き、共に螺旋階段を上っていった。このしょうか……お店は、七階建ての建造物らしい。階段を上る途中、ちよつと聞きたくなかったカンジの声とかも聞こえてきてドキドキ物だったが、何とか最上階まで上る事が出来た。

最上階といえば偉い人がいそうなものだが、ミュレイは何も言わずに両開きの扉を勢いよく開け放った。ノックくらすればいいのに、なんて事を思いながら中を覗き込んで私は絶句する。そこは、部屋ではなかった。

いや、元々は部屋だったのだろうか、崩れてきた本やら怪しい機材やらで滅茶苦茶に散らかっており、その散らかった学術書のベツドの上に寝転がるようにして一人の女性が本を読んでいたのである。黒いスーツを身に纏った、端正な顔立ちの女性だった。以下にもクールと言った感じの鋭い視線がこちらを捉え、しかしミュレイはあつげらかんと手を振った。

「久しぶりじゃのう、メル」

「……………。ミュレイ？」

「おお！？ 一発で判ってくれたのはお主が初めてじゃ！ 流石我が友じゃな」

「……………また実験失敗？」

「そうではない、ちゃんとした理由があるのじゃ……………つと、紹介しよう。ウサクと昴は初対面じゃろう？ 彼女は、この娼館の経営者にして魔術師でもある、メリーベル・テオドラントじゃ」

「厳密には魔術師ではなく錬金術師」

ぴしゃりとそう訂正し、メリーベルは本を閉じると同時に立ち上がった。ヒールの音を鳴らしながら近づいてくる彼女の体軀は非常にスレンダーで、目つきや口調も相まって若干病的にさえ見える。いかにも伸ばしっぱなしですといわんばかりの長い前髪の合間、綺麗な瞳が私を見ていた。

その目と視線が合った刹那、私の脳裏に何かが蘇ってきた。私と彼女は初対面……確かにそのはずだ。こんな所に来るのは初めてだし、もう二度と来たいとも思わない。だが 何故だろう？ 私は彼女の姿に見覚えがある気がした。

そうだ、忘れてしまった現実世界での記憶……。殆どの事は覚えているのに、何故かこっちに来る前後の記憶が私の中では混線したままだった。片手で頭を押さえ、考えた。何か……何かが引っかかるような気がする。そうだ、確かあの日、大学の花壇の前で。

「それで？ どうして小さくなったの？」

メリーベルの声で私の思考は中断された。するとすっかり頭の中に蘇りかけていた記憶は消え去ってしまう。やはり、気のせいだったのだろうか……。

「うむ、それがまた少々厄介で……。話すと少し長くなるのじやが」

ミュレイはそうして今まで起きた事を語り始めた。その間、メリーベルはまるで顔色を変える事無く、コクコクとひたすらに頷いていた。ちゃんと話を聞いているのかどうか不安だったが、多分聞いているんだろう……。

その間私は暇だったのでその辺に転がっている本を手にとって見

る事にした。やたら難しそうなタイトルに、こちら側の世界の言語で記された文章……。しかし、何故かこっちに着てから文字は不思議と読めるようになっていた。あまり今まで深く意識はしていなかったが、これも結構不思議な現象だ。

「異世界跳躍に必要とされる特殊な環境と条件、その人為的構築についての理論……?」

駄目だ、何の事なのかさっぱりわからない……。若干自分にも関係のありそうな単語が混じっているようにも見えるが……。

そしてやはり、気まずい……。そもそも初対面の人間と仲良く話せるような性格じゃないのは判りきっているんだが、それにしたって気まずい。ゲオルクはだんまりを続けているし、ウサクはさつきから落ち着きなく貧乏ゆすりを続けているし、唯一ストレスなく会話可能なミュレイはメリーベルにとられてしまっている。

何でもいいから早く話が終わって欲しい……。そう祈り続けていると、どうやらようやく二人の会話が終了した様子だった。メリーベルは一人で机の上に放置してあったクツキーを齧りながら何やら本を読みふけている。一体どういう結果になったんだろうか……。

「皆の者聞いてくれ。今後の方針なんじゃが……」

ぞろぞろと集まってくる男二人と私。そして次の瞬間、ミュレイはけろりとした様子で告げるのであった。

「わらわは、暫くバテンカイトスに泊まる事にする」

「はいい?」

無論、こんな所にいたいわけもないのだが……。なんでも、詳し

い事はミュレイの身体を調べてみないとわからないらしい。というわけで、数日の検査入院　入院ではないので検査お泊り……という事になったのである。

私達にも部屋が割り当てられたのだが、どう考えてもアレな部屋でベッドは何故か回るし、部屋の内装は派手だし、正直落ち着いて眠れる気がしなかった。しかしまあ兎に角、これで私の旅はとりあえずの停止……ということになる。

「はあ……っ」

ベッドの上に身体を投げ出し、回転のスイッチを切る。天井にもなんか、鏡とかあって……すごく寝心地が悪い。ベッドもふかふかというか、若干硬めで実用的というか……うーん。いや、何が実用的なのかはあえて明言しないけど。

「ミュレイ、こんな所によく通って何してたんだろ……」

あんまりそこは考えたくなかった……。まあ、あのミュレイの性格から推測するに何をやってても全然おかしい事はないような気がしてしまっただが。いや、何をやってるっていうのはべつに何ってわけじゃなくて。さっきから思考が纏まらない。

「それにしても……メリーベル・テオドランド……か」

携帯電話を取り出し、メモ帳にその名前を記しておく。何となく今後必要になってくるような気がしたからである。折角暇なのだから、私は今日までの出来事、そしてこの世界の事をざっと書き記しておく事にした。

正直、地名や人名やら、世界のルールなんかがつかり把握出来ているのか怪しいところがある。まあ、行き成りこんな所に投げ出

されて全部覚えると言われても無理なわけだが。

それにしてもどうして携帯電話の電池が切れないのだろうか。ずっと電池はマックスのままだ。カチカチとキーを叩く作業が暫く続き、それも終了してしまうと一気に部屋に沈黙が訪れた。隣の部屋からは女性の声が聞こえてくるし、もう踏んだり蹴ったりである。布団の中にもぐりこみ、もう何でもいいから眠ってしまう事にした。ミュレイの検査が終わるまでの辛抱だと自分に何度も言い聞かせながら……。

しかし、私の願いはあっけなく碎かれる事となった。

ミュレイの身体の検査は数日に渡って行われた。ミュレイの身体に何が起きているのか、そして原因が何であり、どうすればそれを元に戻せるのか……。どうやらミュレイが考えていた以上に事態は深刻だったらしく、呪いも強い物だったらしい。

その間私はすることも無かったので、部屋から一步も出ないで引き籠もつていようかと思っただが……。そもいかなかった。部屋にいる私を引っ張り出したミュレイは、そのまま私をバテンカイトスの地下に連れ込んだのである。いや、別にいかがわしい事があったわけではない。バテンカイトス地下の倉庫スペースの二画を借り、私が行っていたのは剣術の訓練であった。

私が足手まといだから、ミュレイはこんな事になってしまったのである。せめて足手まといにならないくらいに強くなりたい……。そんな風に考えたのは数日前の事だ。しかし、私は早くもその言葉を後悔しつつあった……。

「どうした、もうへばったのか？」

「……………」

恨めしげに見上げた所で、剣術の先生は　ゲオルクは手加減などしてくれない。剣術に明るくないというウサクを除けば、暇なのはゲオルクくらいのものである。ミュレイに頼まれ、ゲオルクも嫌とはいえなかったのだろう。こうして私の特訓に付き合ってくれている。

かくして特訓が始まったわけだが……ゲオルクはやはりというか当然というか、私に対しても容赦というものが全く無い。厳しい基礎トレーニングから実戦形式の稽古まで、色々とやってみて思う事はただ物凄くツライという事だけだった。

私は部屋の中に引き籠もって本とか読んでるのが当たり前の根暗な女なのだ。世に多く存在するリア充さんたちがどんなもんかは知らないが、少なくとも私は遊ぶ体力すらないのだ。マジ軍隊の訓練なんてついていけるはずがない……。

「全く、本当に根性も向上心も無いやつだな」

呆れた様子で肩をすくめるゲオルク。しかし、そんな事を言われても……疲れるものは疲れるし、痛いものは痛いのである。いかに木刀だからといって、叩かれて痛くないわけがない。

私の動きに問題があれば、ゲオルクはバシバシ木刀で叩いてくる。全身に数え切れないほどの痣が出来ているのだが、そんなものはほっとけば治るといってゲオルクはまるで取り合ってくれなかった。

ともあれ、強くならねばならないのは事実……。このままでは足を引つ張るばかりで、ミュレイを困らせる事になる。ミュレイはあんなにも、私の悪い所も含めて全てを受け入れてくれている……。だったら、それに応えなければならぬ義務が私にはあるのだ。

立ち上がり、木刀を強く握り締める。やりたくて、やってるわけじゃない。こつちにだって、来たくて来たわけじゃない。この世界に、私が居る意味なんてない……。でも、何もしなくていいわけじ

やないから。それを、言い訳にはいけないから。

「もう一度……！」

剣を構え、ゲオルクを睨む。ゲオルクは軽く肩を回し、それから挑発するかのように指先をくいくいつと引いて見せた。根性や気合でなんとかなるなんて思っていない。でも、それでもないよりはましだから。

大声で喚きながら、私は走り出した。勿論その直後、私が振り下ろした木刀はあっけなく弾かれ宙を舞うことになったのだが。

破魔ノ剣(1)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

体調が戻りません

うさ子「ねえねえ、昴ちゃん昴ちゃん」

昴「え……？ うん、行き成り色々な意味で突っ込みたいけど、何かな？」

うさ子「リア充って、なあに？」

昴「……………」

ホクト「そういやお前、たまにネットスラングとか使うよな。流石引き籠もり」

昴「う、うるさいよ……。いいじゃないか、別に……。それに、大学には行ってたんだから私は引き籠りじゃない……………」

うさ子「そういえば、昴ちゃんって主人公さんなの？ ヒロインさんなの？」

昴「え……？ 主人公じゃないの……………」

うさ子「だってえ、昴ちゃん視点になると、全然戦闘シーンがないんだもん」

ホクト「戦闘がないと、作者が書くの飽きるだろうが」

昴「それって私のせいなのかな……」

うさ子「昴ちゃんが、ヒロインさんだったらあ、それはそれでいっかなあって」

シエルシ「あの……それ、困るんですけど……」

ホクト「いたのか空気姫」

昴「そんな空気嫁みたいに言わなくても……」

シエルシ&うさ子「」 空気嫁？ 「」

昴「あう……っ」

破魔ノ剣（2）

「でやああああっ！！」

「遅い遅い！ 動きをいちいち切るな！ 一連の行動は全て流れだと思え！」

声を上げ、木刀を振り上げゲオルクへと襲い掛かる昴。しかし、いくら攻撃を繰り返した所でゲオルクの身体に傷がつくような気配はなかった。昴は全力で攻撃を仕掛けているのだが、全てゲオルクに先読みされ防がれてしまうのだ。

基礎訓練と実戦訓練、そして休憩時間を挟んでまた基礎訓練と実戦訓練……。昴がバテンカイトスで過ごす日々はその繰り返しだった。しかし、そのお陰もあり昴の動きは素人そのものだった初期と比べ、格段によくなって来ている。

「ほ、やっっておるのう」

倉庫へと降りてきたミュレイは打ち合う木刀の音に嬉しそうに目を細めて微笑んだ。その背後では相変わらず学術書を片手に歩くメリーベルの姿があった。

既に一週間近くの滞在が続いているものの、ミュレイの身体が子供の姿になってしまった理由は判らないままだった。厳密には全く検討もつかないのではなく、メリーベルには一つの仮説があったのだが。

何はともあれ、直ぐに問題の解決へと移れないのであれば判らないのと同じ事である。メリーベルは様々な書物を読みふけり、その間ミュレイは暇だったので訓練の様子をのぞきに来たのである。

「うむ、頑張っておるのう……昴は良い子じゃ」

「センスがあると思う」

「おお！？ お主もそう思うか！？ いやあ、流石はわらわの式神じゃ！」

握りこぶしをぎゅゅと作り、ミュレイは瞳をメラメラと燃やして頷いた。熱血そのものと言えるミュレイの背後、対照的にメリーベルは眠たそうに凝り固まった首をひねっていた。

「彼女、異世界から召喚したんでしょ？」

「うむ。理由は判らぬが……。わらわもこんな事は初めてで戸惑っておる」

「そう……。異世界からの救世主、ね」

パタンと、音を立ててメリーベルは本を閉じた。その横顔はまるで遠い日の記憶を思い起こしているかのように穏やかで、しかしとても遠い目をしている。メリーベルには珍しい感情的な表情にミュレイは何故か少しだけ嬉しくなっていた。

「お主もそんな顔をする事があるのじゃな」

「……。人間だもの、しょうがない」

「ふ……っ。まあ、昴は」

そこで、昴の悲鳴が聞こえ二人は昴とゲオルクへと視線を戻した。昴はゲオルクに気合を込めた一撃を繰り出したのだが、ゲオルクに足払いをかけられてしまいそのまま木箱の山へと突っ込んでしまったのである。派手に物が崩れる音と共に生き埋めになっていく昴を見てミュレイは慌てて走り出した。

「す、昴っ!! 大事ないかつ!？」

「う、うぐう……。へこたれる……」

「ゲオルク! お主、もう少し手加減というものを出来んのか!？
このばかたれがつ! ばーかたれがつ!!!」

「そういわれてもな。今は、そっちの嬢ちゃんが勝手にスツ転んただけだろう」

ミュレイはゲオルクの足を一生懸命踏み付けまくっているのだが、子供の姿のミュレイでは筋肉の塊のようなゲオルクにダメージを与える事は敵わなかった。結局昴はその後、ゲオルクの手によって引っ張り出され、べしやりと床の上に転がる事となった。

「全く……あまり無茶をするなど言っておろうに」

「……………ごめんなさい、ミュレイ」

「謝らずとも良い! ほれ、怪我はないか? 頬が汚れておるぞ」

「あ……」

ミュレイは自分の着物の袖で昴の顔を拭った。その間、昴は眼鏡

を外してレンズをじっと見つめている。先ほどの衝撃の所為か、レンズには輝が入ってしまったのである。

「困ったな……壊れちゃったか」

「昴……眼鏡を外すと更にかわゆいのう」

「ミュ、ミュレイ……？」

「かわゆいのう、かわゆいのう」

昴の胸に飛び込み、ミュレイはごしごしと頬擦りしていた。以前からスキンシップ過剰気味だった二人だが、城の外という体裁を取り繕わなくても良い環境の所為か、より一層スキンシップが過剰になっっているようだった。

ミュレイにべたべたとくっつかれ、昴は外した眼鏡をポケットにしまいこんだ。幼い頃から悪かったが、眼鏡を外せば盲目　というほどではない。目を細め、ぼんやりとした顔つきで昴は立ち上がった。

「眼鏡……って、こっちの世界でも売ってるのかな」

「あるよ」

応えたのはメリーベルだった。それから昴に歩み寄り、至近距離で眼球を覗き込んでくる。余りにも近かった為身を引こうとする昴だったが、腕をがっしりと掴まれてしまい下がるに下がれなかった。

「……眼鏡、直してあげようか？」

「え？ で、出来るの？」

「出来なかつたらそんな事は言わない。それに、錬金術師だから。耳掻きから勇者の剣まで、なんでも作れる」

胸にぽんと手を当て、自慢げにメリーベルはそう語った。どこまで冗談なのかは付き合ひのあるミュレイでもわからなかったが、何はともあれ壊れた眼鏡を修理する事となった。かくして修行は一旦中止となり 部屋に戻って休憩する事になった昴だったのだが……。

「なんでミュレイも一緒に来てるの……？」

「ん？ 良いではないか、別に」

昴が自分に与えられた部屋に戻り、扉を閉めようとした時の事である。締めりかけた扉を開き、ミュレイが強引に部屋に押し入ってきたのである。ずっとニコニコと楽しそうに笑っているミュレイとは対照的に、昴は気まずそうな表情を浮かべている。

部屋に入り、ベッドの上に腰掛ける昴。ミュレイは部屋の中をうろつろと歩き回り、壁に架けられた絵画などを眺めていた。上着を脱ぎ、昴はそれをハンガーにかけて大きく身体を伸ばす。

「ミュレイ、私はシャワー浴びてくるから」

「おお、そうかそうか」

「うん、じゃあ」

「むむ」

備え付けのシャワールームに歩いて向かう昴。その後、ミュレイは相変わらずニコニコしながらぴったりとついてくる。ふと立ち止まり、振り返る昴。その頬を冷や汗が伝い落ちた。

「えと……シャワー浴びてくるよ？」

「何度も言わずともわかっておる」

「じゃあ、なんでついてくるのかな……？」

「そんなもの、一緒に入るからに決まっておるじゃろう？」

昴は一瞬固まり、それから頭を抱えて天を仰ぎ見た。そりゃ、そんな気はしていた。もちろんそんな気はしていた。だが、あっけらかんとそういわれてしまうとまるで間違っているのは自分の方であるかのような気がしてくるのである。

「ミュレイ、あの……」

「ほれほれ、つべこべ言わずにさっさと行くぞ！ どれ、わらわが背中を流してやるぞ」

「いや、だからっ」

ぐいぐいと背中を押され、シャワー室に押し込まれる昴。こうなるともう逆らっても無駄だと悟ったのか、昴は盛大に溜息をつき、身に纏った服へと手をかけたのだった。

破魔ノ剣(2)

“お風呂は心の洗濯よ” というのは、某アニメの台詞である。しかし、“嫌な事ばかり思い出す” というのも同じである。

備え付けのシャワールームには丁度男女二人が一緒に入れるくらいのゆつたりした浴槽も備え付けられている。薔薇の花弁が浮かんだ紅いお湯の中、私はぼんやりと頭上を見上げている。立ち上る湯気を見ていると、なんだか意識が遠くなるような気がした。色々な事も、思い出せる気がした。

ミュレイは私の正面に入り、湯船から上半身をさらけ出し足をぶらぶらと上下させている。掌の上に作った泡を転がし、楽しげにしている様子は見た目通りの子供のようでさえある。眼鏡をかけていない所為か、湯気の所為か彼女の表情まではハッキリと確かめられなかったが。

「ふい〜……。いい湯じゃのう……」

「……そうだね」

「どれ、昴は毎日鍛錬で疲れておる事じゃろつ。わらわがちと足をもんでやるつかの」

「いや、別にいいよ……ひっ!?! く、くすぐりたいからやめてえっ!?!」

勝手に足をもみしだくミュレイ……。その手つきは滑らかで、気持ちいいようなこそばゆいような……。前代未聞の感触だった。思わ

ず暴れてしまったが、ミュレイは顔にお湯を被って眉を潜めていた。「なんじゃ、そんなに嫌がらずとも良いじゃろうに。わらわの指技も衰えたかのう……？」

両手を小刻みにワキワキさせているミュレイ……。こ、子供じゃない！ この子供じゃないわ！

そんな馬鹿な事をしながらも心安らぐひと時だった。昔から、お風呂は好きだった。毎日入らなければ気がすまないし、入っている間は一人きりになる事が出来た。誰からも隔絶された、世界から切り離された世界……。そんな蜃気楼のような場所が、私は大好きだったのだ。

一人で物思いにふける事もあったし、時には涙を流す事もあった。楽しい思い出は不思議と思いだせず、一人でいるといやなことばかりを思い出す……。だが、今日は不思議とそういう事は思い出さなかった。いや、当然なのかもしれない。今の私は、一人ではないのだから……。

ミュレイは紅っぽく輝く長髪を頭の上でぐるぐると丸め、手ぬぐいで括っている。しかしこうしていると本当に以前のミュレイとは別人である。勝気な目や肌の滑らかさ、綺麗な髪なんかはまるで変わらないのだが……。

ふと、ミュレイの背中に視線が行った。先ほどからずっと晒されていたのだが、彼女の背中の違和感に気づいたのはたった今の事である。彼女の背中には なにやら、大きな刺青のようなものがあった。刺青、というよりはもっと別の何か……。不思議に思い触れようと手を伸ばすと、ミュレイはその手をがしりと掴んで言った。

「これ、勝手に乙女の柔肌に触れるでないぞ」

「いや、ミュレイさっき勝手に私の足に触ってたような……」

「式神は別にいいのだ」

「そ、そうなんだ……」

翼　　だろうか？ ミュレイの背中には、翼のような大きな紋章が刻まれていた。紅い、炎のような……そんな光を放つ紋章。淡く、それは気づかなければこの世界から消えてしまうような微かな光だった。私の手を放し、ミュレイは溜息交じりに語り出す。

「それは、ククラカン王族に代々伝わる烙印じゃ」

「烙印……？」

「この世界に生きる人間には、必ず身体どこかに烙印が存在する。それは、その人間の情報全てを凝縮し顕現される」

例えば、第四界層プリミドールの人間にはプリミドールの烙印が。さらに、そのプリミドールの中のどのくらいの家柄の生まれで、どこで暮らしどんな仕事をしているのか……。烙印が記録しているのはそれだけではない。その人物が持つ、記憶の全てがそこにはあるという。

生まれ、そして死ぬまでに経験する全てが脳に記憶されると同時に身体に刻まれた特殊な術式でもある烙印に蓄積されていく。つまり、その烙印を調べればその人間の人生の全てを知る事が出来る。そう言っても過言ではないのだという。

「故に、人は殆どの場合己の烙印を晒す事を嫌がる。仮に晒す事があったとしても、触れられる事は絶対に避けるべきじゃろうな。そこに記録された己の全て……それを知られる事になるかもしれぬの

「じゃから」

「そ、そんなに大事な物だったなんて……。知らなくて……。ごめん」
「いや、謝る事は何も無い。わらわは別に、お主に過去を知られたくないわけではないのじゃ。ただ……。お主は“知らないほうがいい”と、そう思っただけでな」

何故かミュレイはばつの悪い態度でそう話を中断してしまった。

烙印 人の全てを司る物……。それは、全ての人間にあり、強制され、そして支配され続ける……。

烙印がある限り、人は自分自身の真実から逃げられない。そしてその烙印が刻まれた瞬間 この世に命を受けた瞬間、名と共にそれを強制される……。それは、とても理不尽で。とても、寂しい……。どうしようもない、運命にも等しい物……。

ミュレイは……。ミュレイだけではない。この世界の人間はみんな、それを背負って生きているのだろうか。逃げる事もやめる事も許されない、己の全て……。私の身体にそれは刻まれていない。そうして当たり前な事を思った。私は この世界の人間ではないのだな、と……。

「この街に生きる者たちを見たか？」

ふと、彼女はそんな事を私に尋ねた。湯船に浮かんだ薔薇の花束を手の中に救い取り、彼女の節目がちな視線が問いかけてくる。私は勿論 首を縦に降った。

この町はこの世界の縮図のようだった。上位界層の人間たちは楽しげにここで金をばら撒き遊びとおし、この土地に住む人々はそんな彼らを楽しませる以外に生き延びる術を持たない。一生道化を続ける事を定められた人々が そういう烙印を刻まれた人々が、た

だ懸命に生きているだけなのだ。

金を持っていて人間は別に何が出来るわけでも、ここで何をやるわけでもない。そうして道化の輪から外れてしまった人々は生きていく事が出来なくなり、道端で生きているのか死んでいるのか判らない生活を迫られるのだ。

「泡沫の夢のようだと思わぬか……？ 何もかも、建前だけじゃ。こんなにも楽しそうな街なのに、本当の幸せは何処にもない」

「まただ……と思った。彼女はよく、こんな顔をする。やるせないような、やりきれないような……そんな顔だ。全ての人を幸せにしたいと、彼女は言っていた。どうしたらいいのか判らないと、それは愚かなことかも知れないとも言っていた。でも……それでも、ミユレイは 強く美しい。

彼女は理想を持ち、そのためにあらゆる努力を怠らなかつた。力を得、知識を得、そして人々の信頼を得た。姫という、幸せになるのが約束された人間であるにも関わらず、彼女は庶民と常に共にあった。世界を変えたいと、人々を救いたいと……それだけを願っていた。

私には理解できない。どうしてそこまで人の為に生きられるのか……。自分の事だけで精一杯で、周りの足を引っ張る事しか出来ない私とは余りにも違いすぎる。彼女はきつと、ただ美しいのではない。とても心が強いから……より美しいのだ。

「わらわは、ククラカンの王になる。そして、いつかは帝国の王になりたい」

「え……？」

「愚かな望みだと思うか……？ じゃが、わらわは徹底的に帝国に

尽くし、この身全てを捧げ、その代償としてこの世界を変える……。もう二度と、悲しみが世界を覆いつくさぬように……。それが、姫としてわらわに出来るたった一つ、しかし譲ってはならぬ使命なのじゃ」

薔薇の花弁を握りつぶすようにミュレイは強く拳を握り締めた。その強い眼差しはまるで燃え滾る焔のような目は。憧れずには居られない、圧倒的なカリスマを備えているように見えた。人を見る目がない私にだってわかる。彼女は稀代の天才……。そして人々にとっての英雄の資質を兼ね備えた人物なのだ。

逆に、私は自分が恥ずかしくなった。彼女のように強く、そして聡明な人間が居るというのに、一体何をやっているのか……。彼女の夢と希望の第一段階である婚姻の儀の足を引っ張り、今はこうして生活の面倒まで見てもらっている。

私は、ミュレイがいなくなったら本当に一人ぼっちなのだ……。ウサクもゲオルクも、ミュレイに付き従っているだけに過ぎない。私は孤独だ。彼女以外の人間に召喚されていたら、こんな風に暢気に風呂に入っていたら良かったかもわからない。そう考えると、自分がどれだけミュレイに助けられているのかを感じることが出来る。

「ミュレイは……帝国と戦うつもりなの？」

「戦いには、出来ればならぬ方が良いじゃろうな。だが、もしもそうなった時は……。わらわは己が後悔せぬよう、己の力で戦いぬくま

でよ」

「そっか……」

帝国とは、戦って勝てる相手なのだろうか……。ミュレイ一人でどうにか出来るような事なのだろうか……。考えたところで答えは

出なかった。掌で救ったお湯で顔を洗う、なんだか……とても悔しかった。悔しいなんて思った事はそうそうない。私は自分が駄目なヤツだと知っているから。でも、それで、駄目でいいって思っている自分が……。ミュレイと一緒に居る事は、きつとおかしいことだから……。

風呂から出た私はそのままミュレイと分かれ、倉庫へと向かった。握り締めた刀は白く、とても繊細なイメージを感じさせる。氷のような、研ぎ澄まされた“零”の感触……。鞘から抜き取り、私はそれを光に翳した。

彼女が私にくれた刀……。私が持っている、たった一つの力……。木刀よりもずつと重く、人の命を消し去る事が出来てしまうもの。私はそれが恐ろしく、怖がる以外の感情を向けた事はなかった。

けれど、それではいけないと思った。ミュレイが私の手にこれを握らせてくれた意味……。そしてそれで何が出来たのか。ミュレイの足を引つ張りたくない……。訓練は辛いし、何度も逃げ出したくなった。なんでこんな目に合わなきゃいけないんだって、何度も恨めしく思った。でも。

「誰か言われてしょうがなく……。無理矢理、やるより」

「自分の意思で。自分で選んで。自分でそうしようって決めてそれで、やり遂げられたなら。」

「きつと、意味は違うから……」

抜いた太刀を両手で構え、奮う。白刃は美しく刃を弾いて煌き、思わずうつとりしてしまふ程涼やかでひどく冷淡だった。剣はただ剣、思いはただ思い……。余計な事を考えてもきつと仕方が無いんだ。怖いものは怖いけど、でも……ビビってばかりじゃいられない

いから。

「なんだ、もう眼鏡は直ったのか？」

「ゲオルク……」

背後、急に声をかけられたのでびっくりしてしまった。慌てて鞘に刀を戻し、視線を逸らす。しかし彼は私の目の前まで歩み寄りじつと、白い刀を見つめて言った。

「その刀は、ミュレイにとっては大切な物だったはずだ」

「え……？」

「そいつは、あいつの妹が持っていた刀でな。特注で、武器としては最高の性能を持っている。見た目も綺麗だろう？ それに、柄にはククラカンの紋章もある」

言われて柄の裏側を見てみると、そこには確かにミュレイの着物にも施されている紋章が輝いていた。そつと顔を上げる。眼鏡がないので、ゲオルクの表情はうかがい知る事は出来なかった。でも、彼は……寂しそうな顔をしているような気がした。

「それをお前に託したあいつの気持ちを汲んでやれ」

ミュレイはきつと、お前を守りたくてその刀を托したんだからな。彼はそう付け加えた。抱きしめた刀の重さ、冷たさ……ミュレイの気持ちを考えると胸が苦しくなりそうだった。

どうして、彼女は私にそこまでしてくれるのだろう……。ずつと判らなかった。だから迷っていたのかも知れない。でも関係ないん

だ。理由とか意味とか……考えても判らないなら……。私は、自分がやるべき事を決めねばならない……。

「ゲオルク……どうしたらいい？ どうしたら……強くなれる？」

恐る恐る訊ねた。するとゲオルクは大きな手を伸ばし 私の肩をポンと叩いた。叩かれるかと思っていたので身構えていたのだが、拍子抜けして顔を上げた。

「今までやった事全部、今度は“ちゃんと覚えようと思って”やってみる」

「……………バレ、てた？」

「当たり前だ。やらされてるとかしょうがなくとか、そんな生半かな気持ちで強くなかなれるわけないだろうが」

「……………そうだね。そうだよね」

刀を握り締め、それを傍らにおいて訓練を再開する事にした。まずは腹筋、腕立て……。思いつくこと何でもいいからやってみる。眼鏡が戻ってこないと実戦形式の稽古は出来ないけど、でも、待っている時間がもつたいなく思えたから。頑張ろうって改めて思ったから。

乾いて居ない髪を縛り、顔を上げる。私は 望んでここに居るわけじゃない。けれど、せめて望もう。彼女の力になりたいと……。彼女の足を引っ張らず、せめて彼女の願いを叶える為に役に立とうと。気持ちを切り替えるだけで、こんなにもまだ動ける。そんな自分が嬉しく、私はひたすらにトレーニングを続けた。

まあ、だからといって急に身体が動くようになるわけではない。

直ぐに体力は尽き果て、床の上に突っ伏してしまつ。うう、へこたれる……。

「昴殿、ファイトでござるよ！」

「……ウサク？」

顔を上げると、目の前に冷たいドリンクが置いてあるのが見えた。ウサクは……ミユレイの護衛と周囲の監視つてことで暫く姿を見ていなかったような気がするけど、もしかしたらずっと傍にいたのかもしれない。

「どうした、もうダウンか？」

ゲオルクが手を差し伸べてくる。私は……一人ぼっちだと思つていた。でも、もしかしたら違うのかも知れない。私の周りには……こんなに優しい人たちがいる。だから、がんばらなきゃ。そうしなきゃいけない、義務があるから。

しかしそんな生活は長くは続かなかつた。大きな事件と歴史のうねりが私達を飲み込んでいく……。それはその翌日、唐突に私達の元へと知らされた。

破魔ノ剣(3)

太陽の国ククラカン、月の国ザルヴァトーレ。二つの国は、長い間戦乱の歴史の渦中であつた。

帝国による支配が始まる以前の、数百年前のプリミドルではククラカンが天下統一の為に世界中に兵を派遣していたという。ククラカンは各地の勢力を侵略合併し、唯一の抵抗勢力であるザルヴァトーレとの戦いになつた。

ククラカン優勢の戦争は何年も続き、しかし決着がつく事はなかつた。ザルヴァトーレは上位界層である第三階層ヨツン Heim……ハロルド帝国に救援を求めたのである。ヨツン Heim 勢力と結託したザルヴァトーレはククラカンを圧倒。ククラカンはハロルド帝国に屈服したのである。

その動きを契機に、ハロルド帝国は全ての界層を支配に置く動きを見せ始めた。結果、ハロルド皇帝による支配は全世界に及び。絶対的な軍事力を持っていた大国ククラカンはハロルド帝国に与する物となり、世界統一に貢献したザルヴァトーレもそれと対等な立場となつたのである。

かくして二国の争いは一旦の幕引きを見るが、しかしそれで全てが平和になつたわけではない。帝国による支配が行われる一方、ククラカンとザルヴァトーレの戦争は水面下で継続されてきた。国境沿いでは小競り合いが絶えず、どちらの国がより強力な権力を持つかで常に争ってきたというわけだ。

「つまり、二つの国は元々仲が悪かつたのじゃ。国家同士の正面衝突……戦にはならないものの、いつそうなつてもおかしい状況ではなかつた」

帝国は、それぞれの国に対して帝国への忠誠を強制している

が、国同士が争う事は基本的に禁止はしていない。特にハロルド皇帝は俗世の事は興味が薄く、弱肉強食という言葉を己の主義にしている人物だという。強い者が生き残り、敗者は死ねばいい。そんな考えのハロルド皇帝が二国の戦争を仲裁するはずもない。元々、ハロルド皇帝の方針としては世界中で適度に戦争が起こるべきだ、というくらいなのである。そう言われると、随分な狂王っぷりだ。

「きっかけさえあれば、いつでも戦争が勃発するじゃろう。そして、そのきっかけがお互いに出来てしまっている状況にある……」

娼館、バテンカイトスの最上階……。メリーベルの部屋で机を囲み、私達はそこに広げられた地図を見つめていた。こんな会議になる前は私も修行をしていたのだが……その修行に本腰を入れようとした矢先、知らせは飛び込んできたのである。

伝えてくれたのはメリーベルだった。彼女はこのあたりの情報に詳しい人物らしく、配下に情報通を何人も抱えているらしい。確かな筋からの情報によると、現在ザルヴァトーレ軍がククラカンとの国境沿いに展開しつつあるとの事であった。

何故そんな事になってしまっているのか？ それはザルヴァトーレ現女王であるシルヴィア・ルナリア・ザルヴァトーレの性格的な問題だろうと溜息混じりにミュレイは言っていた。二人は幼い頃からのライバルであり、同じく女王を目指す立場として常に競ってきたという。国同士では非常に険悪な関係の二国であったが、ミュレイとシルヴィアはお互いを認め合う関係なんだとか。

そんなミュレイから見たシルヴィア女王の性格は “ 実力行使 ” の一言に尽きるといふ。非常に好戦的で荒々しく、女王という立場にありながら常に最前線で兵を率いて戦う “ 戦乙女 ” ……。そこまで話を聞くと、なんかミュレイと似ているような気がしないでもないが、兎に角シルヴィアは何かあれば直ぐにでも行動を開始する、熱血さんらしい。

ザルヴァトーレの進軍の理由は明白だった。失踪した、ザルヴァトーレ第三王女、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……それがククラカン軍に囚われた、という情報が流れたからである。シエルシ姫はミュレイ同様、婚姻の儀に参加する花嫁候補だった。それが居なくなっただけとなつては国の一大事である。

「そんな……。そのシエルシ姫って言うのは、本当にククラカンに囚われているの？」

「いや、それはないじゃろうな」

ミュレイは本当にあっけらかんと即答する。彼女は国の代表も同義である……。彼女の耳に届かない情報など、あつてはならないのだ。ミュレイは正々堂々とした天下統一を望んでいるのであつて、卑怯な手でザルヴァトーレを陥れるような事は望んでいない。

彼女が望んでいない以上、それはありえない。そう語る彼女は、よほど己の国を信頼しているのだろう。勿論、私だつてククラカンがそんな事をする国だとは思えない。だとすれば、訳の判らない理由をテキトーにふっかけて喧嘩を売ってくるザルヴァトーレが悪いに決まつているとしか思えなかった。

「恐らく、シルヴィアもわらわが本当にそんな事をしたのか、直接聞いたただしなかったのじゃろう……。じゃが、今わらわはこの様子」

「それだつてザルヴァトーレのせいじゃない……？ ミュレイは悪くないよ」

「じゃが、事実としてわらわは結局やつのお談要求を飲むことが出来ない。更に、ラクヨウ城には既に先の作戦で行動を共にした兵士

たちが戻っている」

「あ……。じゃ、じゃあミュレイがザルヴァトーレに呪いを受けたって事も……？」

「恐らく伝わっておるじゃろうな……。互いに事実を否認すれば、ラチをあける為にシルヴィアは単身でも城に突っ込んでくるじゃろうな……。馬鹿じゃからのう、あいつ……」

腕を組みながらミュレイはそう語り、冷や汗を流した。なんといつか……シルヴィア王は随分と荒っぽい性格の王らしい。ミュレイの“馬鹿”という表現もどうかと思うが……。

「でもちよつと待つてよ……！ 悪いのはザルヴァトーレでしょ？ その、シエルシ姫とかいうのが勝手に居なくなったのが悪いんだから……！」

「それを言い出してもキリはないじゃろう。国によってその主張と主義は異なる物じゃからな……。ただ兎に角、今はどうにかして両国の矛を収めるようにせねばならぬ」

それが、国同士の付き合いというものなのだろうか……。私には良く判らなかつた。だつて、悪いのはどう考えたつてザルヴァトーレなのだ。なのに言いがかりをつけて勝手に兵を出兵して……それで、ミュレイを困らせるなんて。

腰から下げた刀の鞘を強く握り締めた。こうなつたのは私の責任でもある。私は自分がしてしまった事がどういふ事だつたのか……ようやくそれを認識した。私のせいで、ミュレイが小さくされ……そして、そのせいで戦争が起こるかもしれない……。

「その、シルヴィア王とか言うのを何とか出来ないのかな？　いく
ら王だからって、単身乗り込んでこれるようなものかな……」

「うーむ、単純な戦闘能力ならばわらわよりも上じゃぞ、やつは」

「ミュレイより上！？　人間なのそれ！？」

「……失礼なやつじゃな……。兎も角、動くならば急がねばならぬ。
シルヴィアに城を落とされては敵わん……。わらわもゲオルクもこ
こに居るとなると、通常兵力での戦闘になるからのう……」

「噂に名高い“破壊王”シルヴィアが相手か……。城は長く持たな
いだろうな」

ラクヨウは元々、商業の街だという。戦闘や防衛に向いているよ
うな地形ではない……。いざ戦闘が開始されてしまうと、主戦力で
あるミュリアを除く戦力では苦戦必死らしい。改めてミュレイがど
れだけ国にとって重大な立場にあったのか、それを認識した。

「何はともあれ、急いでプリミドルに戻らねばならんようじゃな
……」

「送ろうか？」

話を聞いていたメリーベルの申し出。しかしミュレイは首を横に
振り、困ったような笑みを作った。

「そこまでお主に頼るわけには行かぬ。わらわとお主はあくまでも
対等な友。国同士の煩いに巻き込むわけにはいかんじゃろう？」

「……………そう。なら、ターミナルまで」

なんとというか……………ミュレイは本当にサツパリした性格の人物だ。メリーベルとも仲が良さそうだし……………やっぱりミュレイが悪い事をする人だとは思えない。ザルヴァトーレの主張は、やはり間違いなのだろう。言いがかりだと思つと余計に腹が立ってきた。何も出来ない自分に、苛立ちを覚える……………。

こうして私達はミュレイを元に戻す方法はメリーベルに調べて貰うとして、そのままターミナルへ向かい第四界層プリミドルへ帰還、そこから国境沿いを移動する事になった。そして、それが私にとって忘れられない日々の始まりでもあったのだ。

破魔ノ剣(3)

「むむむ……………っ！ 列車に丁度乗り遅れるとは、なんと運のない……………」

シャフトにあるターミナルへと向かう列車を待つ間、ミュレイは苛立った様子で腕を組んで線路を眺めていた。丁度私達がターミナルに向かう途中、列車が出て行ってしまったのである。次の列車が来るまで、余裕で二十分の待ち時間がある。有楽都市ローティスのホームは上位界層の貴族階級で溢れ返り、人でごったがえしているのもミュレイの苛立ちを加速させていたのだろう。

二十分に一本しか列車が来ないのはこの世界では当たり前……………むしろ待ち時間としては短いくらいらしい。ウサクも先ほどから落ち着きなく周囲をキョロキョロしており……………ゲオルクは落ち着いた様

子でどっしりと構えていた。

さて私はというと、やはり気持ちは落ち着かなかった。大変な事が起きてしまいかもしれないというのもあるが、これから向かうのが戦場になるかもしれない場所　というのも緊張を増す要因となっている。刀をしつかりと抱きかかえ、溜息をついた。どうしてこんなことになってしまふのだろう……。

ミュレイは何も悪いことなんてしていない。ただ世界を平和にしたいくて、民を救いたくて戦っているだけだ。なのに彼女には次から次へと問題が降りかかってくる……。余りにも理不尽な世界の仕組み。だが、それが世界というものなのかもしれない。

一人でそんな物思いにふけていた時である。ふと、顔を上げたホームの対岸、そこに見覚えのあるシルエットが見えた。人ごみの中、白い髪の少女がじつとこちらを見つめていたのである。それは、エル・ギルスに来る前にシャフトで出会った少女だった。

白い、雪のように白いふわふわとした髪の毛の合間、優しく向けられた紅い瞳が私を捉えている。何故ここにいるのだろうかと一瞬考えたが、そういえば彼女もエル・ギルスに向かうと聞いていたような気がする。

「あれ？」

一瞬、瞬きをした刹那に彼女の姿は消えてしまっていた。背後の人込みの中にまぎれてしまったのか……それとも何かと見間違えたのか。小首を傾げつつ振り返った　その瞬間、私は絶句した。

「　昂殿ッ！！　危険が危ないでござるー！」

「えっ？」

ビタリ　という効果音が似合うような、そんな一瞬だった。振

り返った私の目の前にはキラリと輝くナイフが停止していた。見れば、ウサクが横から手を伸ばしそれをキャッチ　つまり背後から何者かに投擲された物だったらしい。余りにビックリしてへたりこむ私の隣、駆け寄るミュレイの姿があった。

「…………どうやら意地でも戦争がしたい連中がいるようじゃの」

「ミュ、ミュレイ……？」

気づくと人込みの中、周囲にはぼつかりと空白が完成していた。私達を取り囲んでいるのは　以前、夜襲を仕掛けてきたザルヴァトーレの甲冑を装備した騎士たちであった。全員一斉に剣を抜き、それを私達に向ける。どう考えたって狙いはミュレイだった。

「囲まれたでござる……。姫様、魔法の方は？」

「…………うーむ、駄目じゃ。魔剣ソレイユも出せそうにない。これではマッチよりマシと言ったところかのう……」

指先から小さな火を出し、それを吹いて消して見せるミュレイ。あの驚異的戦闘力のミュレイが子供サイズになってしまい、しかもバツチリ魔法は使えなくなっている……こんなに暗殺に適した状況もないだろう。

今まで暗殺者達が襲ってこなかった理由がなんだったのか考えてみたが、もしかしたらガルガンチュアの中に閉じこもっていたからなのかもしれない。いや、素人の私には何も判らないのだが……。

ミュレイに支えられ、立ち上がる。私達を守るようにクナイを両手に構えたウサクとゲオルクが周囲を睨みつつ、私とミュレイをはさみこむようにして覆う。本物の武器に本物の殺意、本物の暗殺……。考えると駄目だった。やはり、怖い。怖くないわけがない……。

「参ったでござるな……。こんな所では派手に戦う事も出来ぬでござるよ」

「相手がザコだけなら問題はない。やるぞ、ウサク」

「うむむ……。御意に！　しかし、手加減してくださいませよ？　ゲオルク殿」

「そいつは保障できねえな」

そう笑い、ゲオルクは片手を空に翳した。腕に紋章が輝き　これは何度がミュレイがやっているのを見た事がある。“魔剣”の構築　。ゲオルクの手の中に巨大なシルエツトが浮かび上がり、幻想が具現化する……。取り出したのは巨大な槌だった。これも魔剣なのだろうか……。？　ミュレイのもそうだけど、剣つていうほど剣じゃないような……。

ゲオルクは取り出した槌で何故か大地を思い切り叩いた。すると、鋼鉄の足場に亀裂が走り、轟音が鳴り響く。野次馬たちはそれで慌てて逃げて行き　それで、ゲオルクが何故そんなことをしたのかを理解した。

怯まず迫ってくる騎士達の中へとウサクが飛び込んで行く。甲冑を着けていないウサクの動きは驚くほど軽やかで、振り下ろされた刃を左右にかわし、すれ違う一瞬でクナイで切りつけていく。足を切られた騎士たちはばたばたと倒れ、ウサクはそのクナイをミュレイに迫っていた騎士へと投げつけた。

「姫様、もつと後ろへ！」

「昂、こつちじゃ……！」

「う、うん……」

壁際に沿って移動するミュレイに手を引かれ、ウサクとゲオルクが戦うのを後ろから見ていることしか出来なかった。刀をじつと見つめてみる……。確かに訓練はした。扱いは教わっている。でもたった一週間程度の訓練で実戦に通用するわけがないじゃないか。

駄目だ、やっぱり出来ない。私は戦えない……。決意を固めても、いざこうして戦いの中に放り出されたら何も出来ないんだ。そんな自分がひどく情けなく、本当に嫌になった。泣き出しそうになりながら刀を強く抱きしめる……。もっと、私に勇気があればよかったのに……。

ゲオルクが槌を振り回し、騎士たちを吹っ飛ばす。それを見てウサクが後方に跳んで私達の目の前に下りてきた。壁際を移動するよう誘導しつつ、ウサクはゲオルクをその場に残して撤退を開始する。

「ゲオルクはいいの!？」

「彼は武士団団長でござる。あのくらいの腕の敵であれば一人で事足りるのでござるよ」

「そ、そっか……そう、だよね」

それでホットとしている自分がいた。仲間を置き去りにしちゃ駄目だって思いながらも、早くそこから離れたいと……。そう思っている自分がいたのである。しかし、ホームから離れようと移動を開始した私達の前、ウサクに向かって走ってくる人影があった。

白いマントで全身を覆った謎の人影は大きく跳躍し、そのまま空中で魔剣を構築する。その姿に私は見覚えが合った。見たことのある。

る魔剣、動き……。瞬時、何か嫌な記憶が脳裏を過ぎった。

血まみれの誰かの姿を思い出し、それだけはもう勘弁だと思った。ウサクが新手に気づきクナイを投げつけるが、取り出した巨大な魔剣で刺客はそれを弾いてしまう。そのまま飛び込むと同時にウサクを蹴り飛ばし、大地に剣を擦り付け火花を散らしながら前へ！

その時、カキンと。どこかで何かがかみ合うような音が聞こえた。

「のおっ！！！！」

鞘に入れたままの刀を片手で逆手に構え、刺客が放った剣の一撃を防ぐ。いや、防いだつもりはなかった。何故身体が動いたのか、全く検討もつかない……。だけどこんな感覚は、確か二度目だ。以前同じ敵に襲われた時の事……。あの時、こいつが放った強力な一撃に私は成す術なく死ぬはずだった。だけど、何故か私は身体が勝手に動いてミュレイを抱えて跳んでいたのである。

今のは、それと全く同じことだった。自分の身体で自分の意思で、確かに動いている。動かしているはずだ。なのに何故か勝手に、勝手に身体が動いてミュレイを守った。

何故か？ 刀を握り締めている指先の震えはピタリと止まっていた。自分でも驚くほど、思考が纏まっている。次に相手が何をしてくるのか、手に取るように判る。

弾いた一撃。敵の獲物は魔剣とは名ばかりの機械の塊。いわばそれは、チェインソーだ。弾かれた勢いそのままに壁に当たり、鋼鉄の壁をガリガリと抉りながらそのまま回転。倒れているウサクの頭上をすっ飛ぶように、横薙ぎに刃が繰り出される。

「ミュレイ、後ろにッ！！」

「す、昂……！？」

「ミュレイは……！ ミュレイは殺させない！！ 絶対に　ッ！
」

それは、誰の言葉だったのだろうか。私はそんな事を言うつもりはなかった。でも本心ではそう思っていたのかもしれない。繰り出された刃を鞘で受け止める。白く、儂く、とても脆い幻想を顕現したかのような刀の鞘はガリガリと削られ、罅割れて碎け散ってしまった。その破片が散る中、私は相手の蒼く輝く瞳を確かに見た。

足元、倒れたままだったウサクが刺客の足元を蹴り払う。刺客は後方に跳躍し、それを回避……。新たにクナイを構えなおしたウサクは驚いた様子で一瞬こちらを顧みて、それから強く頷いた。

「かたじけない……！ 助かったでござる、昂殿！！」

「え……？ あ、うん……」

きよとんとしたまま頷くと、背後からゲオルクが走ってきてウサクの隣に並んだ。槌を肩に乗せ、ゲオルクは一瞬私の事を見た。しかし、何も言わずに前を向く。

「お前らは下がってな。魔剣使い相手じゃ、手に余るだろ」

「う、うん……」

「嬢ちゃん」

「は、はい……？」

「良くやったな。あとは任せろ」

それが自分に向けられた言葉である事が信じられず、思わず泣きたくなった……。それにしても、この刀……。あんな化け物みたいな威力のチェーンソーで叩かれたのにそれを弾いて無傷……。無傷？あれ、さっき壊れていたような気がしたのだが。

「中々の腕前の敵でござるよ、ゲオルク殿」

「問題ねえ。さつさと片付けるぞ。姫を小さくしてんのがアイツなら、アイツをぶっ殺せばそれで万事解決だ」

「で、ござるな……。いざ、尋常にツ！」

ウサクがいつの間にか両手に無数のクナイを構え、それを一息に投擲する。壁や地面に当たって反射したクナイたちを刺客は踊るようにチェーンソーを振り回して弾き飛ばした。それが、戦闘開始の合図である。

槌を振り上げたゲオルクが思い切りそれを敵へと叩きつける。退路を断つためのクナイの攻撃。敵は防御の一択だ。真上から隕石のような勢いで叩きつけられた槌は刺客の身体ごと大地へと響き渡り、足元に巨大な亀裂が走る。完全にダメージを相殺し切れなかったのか、敵の足元にポタポタと紅い血が零れ落ちた。

「さつさと姫を元に戻しな　ツ！！　死にたくなかったらな！！」

思い切り再び振り上げられた槌。しかし次の瞬間敵は予想外の動きを行った。防御に使用していたチェーンソーはその手の中で変形し、折りたたまれ、大型のガトリング砲になったのである。この世界にガトリング砲というのがあるのかどうかはわからないが、

とにかくそうだとしか思えなかった。

一瞬でゲオルクは攻撃を中断し、槌を構えながら背後にとんだ。敵が片手で構えるガトリングは明らかにミュレイを狙っていたからである。あのまま攻撃が続けられればゲオルクは敵を倒しただろうが、それと同時にミュレイも銃弾で撃ちぬかれていた事になる。

正に捨て身の攻撃だった……しかしそれが状況を好転させる。刺客の手の中、魔剣と呼ばれていたものが火を噴き荒れ狂う銃弾を放ち続ける。龍の咆哮を思わせる尋常ではない連射速度にゲオルクは暫く耐えたものの、耐えた！？ 私達の手を引き、ホームの支柱の裏に隠れたのである。

「つつつ……！ やってくれる、遠距離攻撃とはな……」

「な、なんで銃で撃たれて平気なの！？」

「あゝ、これは魔力障壁というやつで……説明すると長くなるのじやが……」

「バリアって事！？」

「ばりあ？ まあ……そうじゃ」

ミュレイはわかっていない様子だったが……兎に角魔剣を装備していると防御能力が上がるのだろうか。しかしさすがに完全に防げなかったのか、ゲオルクの身体には無数の傷が残されていた。

「あの魔剣、形状変化をするのでござるか……」

「そういう能力らしいな……っと、来るぞ！」

「え？ えっ！？」

何を察知したのか、ゲオルクが私達を抱えて走り出す。背後、先ほどまで身を隠していた柱が行き成り派手に爆発したではないか。砂塵の向こう、更に敵の剣は形状変化し、巨大なバズーカ砲のような状態になっていた。

先ほどのような連射性能はないようだったが、放たれる光の弾丸が大爆発を起すことは想像に難しくない……。あんな常識外れの能力者相手に、どう立ち振る舞えというのか……。

「ていうか、あいつの能力って相手を子供にすることじゃなかったの！？」

「うーむ……どう見てもそうじゃなさそうじゃな」

「ミュレイ、昂！ 列車が来たぞ！！」

見れば列車がホームへと向かってくる途中だった。わけもわからぬまま、私とミュレイを両脇に抱えてゲオルクは列車へと飛び乗る。ウサクもそれに続いて列車に移動。刺客は追跡してきたが、資格がバカスカ砲弾をぶっぱなしているのを見てか、列車は減速はしたものの停車はせずそのままホームを通り過ぎていく。

「間一髪でござる……」

「うっ、こ、こわかった……」

「よしよし、頑張ったのう昂」

ミュレイが頭を撫でてくれる中、私達は列車の上に座ったまま遠

ざかつていくホームを見送っていた。さすがにもう追いつけないと思っただのか、刺客は途中で足を止める。なんとかそこで、ようやく一息つく事が出来た。

「このままシャフトまで向かうかのう……。外にいるのは寒いが、中に入って騒ぎになっても困るしのう……」

「え……マジ？」

高スピードで流れてていく景色を見送りつつ、私はくしゃみを一つ……。列車がシャフトに着くまで、何時間かかるんだっけ……。どうやらこの旅は、非常に辛いものになりそうだった。

それにしても先ほどはどうして攻撃を防ぐ事が出来たのだろう。それに壊れたと思っただ鞘はいつの間にか元に戻っている……。何となく、この刀が不思議な力を私に授けてくれたような気がした。ミユレイの妹が手にしていたという刀……。それが、ミユレイを守ってくれたのだろうか。

どちらにせよ覚悟は決めねばならないだろう。こんなことがこれからも続くなら、ビビってばかりはいられない。ふと、決意を固める私の手をミユレイの小さな手が握り締めてくれた。私は、彼女を守らねばならない。なんとしても……。

恐怖と、己と戦うこと……。それが私に与えられた試練なのかもしれない。まだ遠い夜の荒野の中立ち上がり、風を浴びた。列車の歩みは現実世界のものと比べると随分と遅い。この道がどこまで続いているのか……。風の中、私は見えない未来を案じ続けていた。

破魔ノ剣(3) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

* 昴編のバトル率の低さは異常*

うさ子「メリーベルさん、メリーベルさんっ！」

メリーベル「何？」

うさ子「メリーベルさんは、なんでここにいるの〜？」

メリーベル「……………唐突ね」

ホクト「そうだそうだー！！ おっぱいが無い女キャラはいらないぞー！！ 昴編は廃止しろー！！」

シエルシ「…………貴方、本当に死んだらどうですか？」

メリーベル「まあ、なんているのかは…………秘密」

うさ子「え〜？ なんで？ なんでなんで〜？ うさ子はね、気になって夜も眠れないのですよー！」

メリーベル「それは、物語後半で明かされていく予定」

うさ子「そ、そうだったんだ…………。うさ子はじゃあ、頑張って後半まで待ちます…………！」

昴「そういえば、次からホクト編だけど……この後の展開、考えてあるの?」

ホクト「ない」

昴「……だと思ったよ」

うさ子「でも、うさ子とホクト君が頑張るから大丈夫なの!」

シエルシ「……私は……?」

うさ子「うさ子はね、大人気なの。だからね、そのうちメインヒロインになるの〜!」

メリーベル「……へこたれキャラが人気なのは序盤だけだよ」

シエルシ「そうですね、ツンデレの根強い人気にへこたれキャラは後半空気化していくに決まっています!」

うさ子「そ、そうなの……? うさ子の出番が……うう……ホクト君、なんとかして〜!」

ホクト「そうだな。おっぱいを出せばメインヒロインになれるかもしれない」

シエルシ「だから貴方、早く死ねよ」

魔剣狩り(1)

「ねえねえ、ホクト君ホクト君！ その煙草はなんなの〜!？」

「ん〜……? “ジョニーライデン”」

「煙草の名前を聞いてるんじゃないの〜っ!! ホクト君、煙草くさいの〜っ!!」

両手をぶんぶん振り回し、直訴するうさ子。しかしその正面に座ったホクトは足を組んだままボケーっとな煙草をふかしており、まるでうさ子の話を聞く気配はない。

彼らが乗り込んだ列車は第三階層エル・ギルスの荒野を横断中である。相向かいの席に座ったホクト、うさ子、ロゼ、リフルの四人は先ほどまでずっと静かだったのだが、うさ子が耐えかねて立ち上がったのである。

ホクトの隣にはロゼが、そのロゼの正面にはリフルが座っている。リフルは先ほどから煙草を消す気配がないホクトに苛立っていたが、ロゼは別に気にしていない。が、リフルとしてはロゼに対する副流煙が気になり気が気ではなかった。別に禁煙というわけではなかったが、リフルとうさ子は圧倒的に禁煙派である。

「ホクト君、服もいつつも甘い匂いがしててやなのーっ!! うさ子の嗅覚が、ホクト君に煙草をやめると叫んでるんだよーっ!!」

「えー……。煙草くらいいいじゃんかよ……。つか、お前そんなに臭い気になるのか？」

「気になるのっ！ 気になるのーっ！！」

ホクトは無言で頷き、うさ子を指先でちよいちよいと招いた。目を丸くし、ホクトにうさ子が身を寄せる。次の瞬間ホクトは煙をうさ子目掛けて思い切り吹きかけたのである。

「ぎにゃ あああああっ！？」

「あはははは！ ほーれほれ、うさ子の嫌いな煙草だぞ〜い」

「にゃ あああああっ！！ ぎゃ あああああっ！！」

「煩いんだよ、馬鹿ッ！！」

立ち上がったのはリフルであった。そのままの勢いでホクトの口から煙草を引ったくり、顔面を殴り飛ばす。倒れたホクトの顔を更に二回ぶん殴り、煙草をギュウッと握りつぶして肩を落とす。うさ子は完全に怯え丸くなり、ロゼは啞然として血に染まったりリフルの拳を見つめていた。

「ロゼのお体に何かあったら貴様どうするつもりだ！？」

「お、おいやめろリフル……。人前で恥ずかしいだろ……。っ」

「しかしロゼ……。煙草の副流煙というのは、油断できないもので…

…」

「わ、わかってるから！ お、大人しくしろー……。！ 頼むから！
！」

「ぎにゃー！！ にゃあああつ！！ うさの……うさのお鼻さんが
ああああつ！！」

口から血を流し、ぐったりした様子の中。その正面でうさ子は耳と手をぱたぱた振り回し、リフルの胸に飛び込んでいた。リフルはうさ子の頭を片手で撫でつつ、ロゼの事を心配そうに見ている。この状況になると、大人しいのはロゼくらいのもだった。恐らくはこのメンバーの中で最年少のロゼだったが、面子が面子だけに彼が背負う責任は重い。溜息交じりに夜の車窓からの景色に目を向ける。果てしなく広がる荒野……。これから行う事を考えれば気を引き締めなければならぬのだが、どうにも空気がビシリと締まる気配がない。

迫る婚姻の儀、そして帝国皇帝誕生百周年の記念式典。全世界にとつての一大イベントであることは勿論、あらゆる勢力が動きを見せるこの時期……。ロゼたち砂の海豚も黙っているわけにはいかなかった。

ふと、ロゼは頭上を 第四界層プリミドルを見上げた。今頃プリミドルでは何が起こっているのか。ザルヴァトーレの姫は無事に戻れただろうか……。そんな事を考える。本当はそれを一番気にしているのはホクトなのだろうが、リフルに滅多殴りにされ、ぐったりしてしまっていてその表情はわからない。

なににせよ、やるべき事は変わらない。彼らとシエルシ姫、二つの存在は余りにも交わる事がない存在だったのだ。本来出会うべきではなかった二つは別れ、またあるべき流れの中に身を投じていく。少なくともロゼはそう考えていた。

「いきなり襲い掛かってくるってのは、ちょっとマナーが悪いんじゃないの？ 騎士さんよ」

カントイルの夜景を背にホクトはガリユウを構え、白い甲冑を装備した騎士と対峙していた。打ち合いの直後、二人は同時に背後に吹き飛び、今は体勢を立て直している。

ホクトの背後にはうさ子とシエルシの姿があり、それを庇うように男はガリユウを手に出る。騎士は白い巨大な盾を腕に持ち、それを掲げ、ホクトを睨みつけていた。

魔剣同士の激突により、周囲では騒ぎが起き始めていた。お互い所持しているのが並の魔剣ではないのだから当然の事である。あっけなく帝国騎士団の魔剣使いを破ったガリユウと互角の威力を持つその盾の使い手は紅い髪を風に靡かせ、鋭い眼光でホクトを睨み続けていた。

「……貴様……ククラカンの手の者か……？」

「残念、不正解。俺は記憶喪失の魔剣使い、傭兵ホクト隊長だ。好きなものは女の子とおっぱい」

「戯れるな……。何故、シエルシを狙う？」

「……ん？ 狙ってんのはそっちだろうが。うさ子が言ってたぞ、悪い悪い騎士さんだってな」

「話にならん 死ね」

「だが 断るッ！！」

騎士が掲げた大盾が左右に開き、中央に格納されていたランスが切り離され展開される。聖なる光を放つ盾とランス、それを左右の手に構え、騎士は走り出した。かなりの重武装であるにも関わらずその動きは非常にかろやかで、突進力は嵐のように渦巻き屋根を破壊しつつホクトへと迫る。

手加減しては防げないと判断し、ホクトは魔剣の力を解放する。黒炎が刀身を被い、闇の尾を引きホクトも走り出した。繰り出されるランスの突き、それに大剣を思い切り叩き込み、タイミングを合わせる。

二つの魔剣が激突し、僅かな間力が拮抗した。後、ランスと大剣は同時に上下にそれぞれ弾かれる。槍が大地に減り込み、剣は宙に浮いた。ほぼ同等の攻撃力で相殺するなど、ホクトも騎士も予想はしていなかった。互いの認識を改めるタイミングは同時、しかし次の行動に繋がったのは騎士の方であった。

身体を捻り、大地に突き刺さったランスを放置して盾を構えてホクトに突っ込む。剣の上に弾かれたホクトは身体に盾の一撃を受け次の瞬間光がはじけた。まるで鉄槌でも叩き込まれたかのようにホクトの身体は軽々と宙を舞い、遙か彼方へと吹っ飛んでいく。

「ホクト君っ!?!」

遙か彼方、ギルド本部の看板に減り込むホクト。それを追撃するように騎士はランスを盾に組み込み、盾ごとランスをホクトへ向けて構える。尋常ではない魔力の収束にうさ子が気づき、シエルシを抱きかかえた。

「 穿て、真実の槍よ……! 」

盾の形状が変化し、槍が輝きを増していく。文字通り必殺の一撃

が放たれようとしている事は一目瞭然であった。うさ子がそれを止め様と顔を上げた時 全ての戦闘は中断された。

「イスルギ、もう止めてッ!！」

それはうさ子の声ではなく、ホクトの声でもなかった。しかし騎士は掲げていた武器をそつと降ろし、魔力の猛りは収まっていく。うさ子の腕の中、叫び声を上げたシエルシが腕を解き、前に出た。夜の風の中、シエルシは胸に手を当て騎士を見つめている。

「もう、いいの……イスルギ、彼らは敵ではありません。剣を収めなさい……!！」

シエルシの声は騎士に届き、騎士は黙って魔剣を解除した。消滅した光の盾が魔素の残滓となって漂う中、うさ子は目を丸くしてシエルシと騎士とを交互に見比べていた。背後、ホクトが看板から走って戻ってくるのが見える。頭から血を流すホクトを手招きし、うさ子は耳をしょんぼりとへこたれさせた。

「あ、あれれ？ ホクト君、なんか変だよ……?」

「……俺ダツシユで戻ってきたわけだが」

「う、うん……。ホクト君、頭から血がドバって出てるよ……? 痛くないの……?」

「いや、痛いわけだが……」

額から頬まで伝う血をそのままにホクトは潰れた煙草の箱からやはり潰れた煙草を一本取り出した。見ればシエルシは騎士に駆け寄

り、何かを話している様子だった。どうみても険悪な関係には見え
ず、ホクトは一服してからうさ子の頭を鷲掴みにした。

「うさ子隊員……？」

「！？ な、なんで頭を掴むの……！？」

「お前……あいつ敵だって言わなかったかな……？」

「敵じゃないの……？」

「あれをど〜見たら敵同士に見えるんだ〜？ んん〜？ お前のお
脳がちっこいのは判っていたが、もう少し目えかつぽじってよ〜
く見るよ〜」

うさ子の頭を掴んだまま片手で持ち上げ、左右に激しく揺さぶる
ホクト。うさ子はなにやら悲鳴を上げながらぶるぶる震えていたが、
ホクトはしばらくうさ子を開放しなかった。

ぶるぶるしているうさ子を放置し、ホクトは煙草を片手に二人に
歩み寄る。改めてみると、騎士はどうにもククラカンの暗殺者たち
とは出で立ちが異なっている。白い西洋風の甲冑を纏い、シエルシ
とも親しげである。とくれば、いくら何も知らないホクトにだって
予測はついた。

「ホ、ホクト……大丈夫ですか？ すみません、その……彼は……」

「ザルヴァトーレの騎士、だろ？」

ホクトの言葉に頷き、おずおずと肯定するシエルシ。元はといえ
ば彼女が早く止めに入っていればよかつただけの話なのだが、高位

魔剣使いの戦闘に割ってはいる事の恐怖を考えればホクトは何も言えなかった。

赤毛の騎士は相変わらず冷静な瞳でホクトを見つめている。ホクトは煙草の煙を吐き出し、それから後頭部に手を当てた。看板まで遙か吹っ飛ばされた所為で、後頭部が割れて血が流れっぱなしになっている。下手をすれば死んでいた一撃だった。

「仕事熱心なのはいいけどよ……… ったく、やりすぎだろ」

「事情は姫から聞いた……。確かに私もやり過ぎた……… が、先に仕掛けてきたのはお前の方だと言って置く」

「イ、イスルギ!？」

「まあ別にいいけどよ……… 俺は頑丈だし。で？ ちゃんと事情は説明してくれるんだろうな、シエルシ………?」

「は、はう………」

二人の男に挟まれ、シエルシは困ったように左右を見比べた。一刻も早くこの場から立ち去りたいという気持ちが如実に表情に表れているイスルギと、説明するまで逃がさないという笑みのホクト……。二人は視線でバチバチと火花を散らし、にらみ合いは相変わらず続いている。

「わ、判りました……… 説明します。イスルギ、良いですね?」

「…………… 姫がそう仰るのであれば」

こうして二人は一旦ガルガンチュアへと招待される事となった。

勿論、ロゼとリフルは快くは思っていない様子だったが、さすがにもうなれたのか呆れた様子で話に付き合う事になったのである。

一同はロゼの部屋に集まり、シエルシは椅子の上に座りその傍からイスルギは離れなかった。ホクトはロゼにグルグルと包帯を巻かれ、煙草を口に啜えて机の上に両足を投げ出している。

シエルシは小さく縮こまったまま、自分がアンダーグラウンドへ向かった経緯、そして何故この街にやってくる事になったのか……それをはじめから説明し始めた。全ては彼女がまだザルヴァトーレの城に居た頃……話はそこまで遡る。

ザルヴァトーレの姫、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……。彼女は婚姻の儀により、皇帝の妻の一人となるはずだった。婚姻の儀まで一ヶ月まで迫ったある日、シエルシはUGに連衡された自らの母、先代の女王に一目会いたいと考えていた。

しかし考えるだけならばそれまでも何度もあったことである。が、彼女が思い切って城を飛び出した理由……。それは、シエルシがザルヴァトーレの城内に居た所、ククラカンの刺客によって誘拐されたからなのである。

まさか城内にまで敵の侵入を許すとは思って居なかったシエルシはそのまま拉致され、ザルヴァトーレ国外へと連れ出されそうになった。しかし唯一シエルシ誘拐に気づいた騎士、イスルギの追撃によって一度はシエルシは開放されたのである。

「私は、ある魔剣使いに囚われ、国外に連れ出される所でした……。ですが、そこをイスルギに助けられたんです」

「それが何で、第六界層に？」

イスルギと誘拐犯との戦いは熾烈を極めた。ザルヴァトーレ騎士団の中でも随一の腕前を持つ騎士であるイスルギと互角に渡り合う誘拐犯……。戦闘の最中、イスルギはまずシエルシを逃がす事にし

たのである。

戦場からシエルシを逃がしたイスルギは誘拐犯と戦うが、相討ち。敵に傷を負わせる事に成功したものの、イスルギも負傷してしまったのである。すぐにシエルシを追いかけようとしたイスルギであったが、その頃シエルシは彼の思惑とは全く別の行動を取り始めていた。

「私はそのまま、国には戻らず……UGを目指しました。国に戻ってしまつたら、もう絶対にUGになんて行けないと思つたから……。最後のチャンスなんじゃないかつて、そう思つたんです……」

シエルシはそのままオケアノスへ向かい、そこで罪人達をUGに運ぶ列車に何とか乗せてくれるようにと帝国騎士に頼み込んだのである。本来ならば絶対に連れていく事など有り得ないのだが、こつそりと騎士たちはシエルシを列車に乗せることを承諾した。その本当の目的がなんであったのかは推測するに難しくないが、兎に角そのシエルシが乗り込んだ列車はUGに向かい、しかしその途中で龍の襲撃を受ける事になる。

襲撃の際、シエルシは騎士達と共に脱出……。その後、帝国軍の軍艦に救助され、一旦エル・ギルスへ向かう事になつたが、途中で脱走……。エル・ギルスに向かう帝国騎士の一団から逃れ、シエルシは再びオケアノスに向かつたのである。が、そこで彼女を狙っていたククラカンの暗殺者たちに追いつかれる事となり、シエルシは逃走……。逃げ回っている内に、気づけばカンマイルに居た、というわけである。

「それで、危ない所をホクトに助けられて……後の事は、知っていないはずですよ」

「はわわ……。シエルシちゃんって、結構おてんばなお姫様だった

んだね」

うさ子の感想に口ゼモリフルもホクトも同意であり、三人は同時に縦に三回頷いた。全員同じリアクションだったのでシエルシは顔を真っ赤にして俯いてしまった。何はともあれ経緯はわかった。イスルギは単純にシエルシを助けようと追いかけてきただけであり、ホクトたちをどうにかするつもりもないのだ。

「イスルギが、ホクトを攻撃してしまったのは謝ります……。でも、彼に悪気は無かったです」

「……ふーん。俺は、シエルシを心配して助けに行ってやったってのにそういうんだ」

「あ、あうう……。お、男らしくないですよ、そういう言い方は……」

「まあ良かったじゃねえか、シエルシ」

ホクトは立ち上がり、身体を大きく伸ばした。その表情には優しい笑みがあり、シエルシは少しだけほっとした様子だった。

「イスルギはシエルシを引き取りに来たんだろ？」

「……ああ」

「だったら、シエルシはザルヴァトーレに戻ればいい。イスルギの腕前は自分で味わったから良く判った。こいつが一緒なら、大丈夫だろ」

「えっ？」

何故かシエルシは目を丸くし、ホクトをじっと見つめていた。ホクトはそのまま小首をかしげ、シエルシを見つめ返す。

「ん？ もう契約も終了してるだろ？ UG行って帰ってきたんだし」

「そ、それはそうですが……。私は、ザルヴァトーレの姫で……」

「僕たちは別にもうあんたを拘束したりはしない方針だよ」

医療キットを片付け、ロゼが立ち上がる。リフルもロゼの方針には逆らわないつもりなのか、黙って壁に背を預けていた。

「あんたがザルヴァトーレの姫なのはわかった。でも、僕たちが倒すべきなのはザルヴァトーレじゃない。あくまでも帝国なんだ。あんたを人質にするのは意味があるだろうけど……。でも、そういうやり方は良くない」

「ロゼ……」

「それに、イスルギっていう護衛もいるのに、人質にします何て言ったら即、ここで第二ラウンドだろ……。？ 勘弁してほしいね」

ロゼは自らの椅子に座り、肩をすくめてそう言った。イスルギは置物のようにシエルシの傍でじっとしていたが、ロゼのほうに目を向け、僅かに首を擡げた。

「感謝する」

「と、言うわけだ。シエルシはザルヴァトーレに戻る準備！ うさ子、手伝ってやれ」

「了解です、隊長ーっ！！」

「は、はい……！！」

シエルシとうさ子が部屋を出て行き、残ったイスルギは部屋の外に向かいつつ、振り返って足を止めた。それから部屋に残った三人を見渡し、改めて頭を下げた。

「……反帝国主義者は倒すのが騎士の役目だ。だが……姫を守ってくれた事、その願いを叶えてくれた事……個人的に、感謝する」

「個人的に、ねえ……」

「あくまで私個人の感情だ。次に会う時は、騎士としてお前達を討つ」

「もう二度と会いたくないな」

「……こちらもそれを願っている」

イスルギが部屋から出て行くと、リフルが溜息を漏らした。ロゼはホクトの隣に歩み寄り、頭に巻いた包帯の様子を眺めていた。血が滲む包帯を指先でなぞり、ホクトは煙草を口に啜える。

「これで、厄介ごとが一つ減るよ」

「……ロゼ！」

「うわっ！？ なんだよ！？」

ホクトはロゼの頭をわしわしと撫で回し、それから背中を軽く叩いた。行き成りの事にロゼは飛び退き、乱れた髪形をちまちまと直す。

「シエルシを人質に出来なかった分は俺がバツチり働くから安心しろや」

「言われなくたってそのつもりだよ……。どっち道、騎士にここを知られた以上、他に手は無かったし……」

「これで、シエルシとはお別れだな」

煙草を片手にそう呟くホクト。ロゼは特に何も言わなかったが、窓の向こうを眺めていた。僅かな時間の間だったが、色々な事があつたものだ。その殆どがいい思い出ではないのだが……そこはあえて呑み込もうと思った。

準備を終え、シエルシがガルガンチュアから出て行く。夜の港にホクトたちが並び、シエルシとイスルギ、二人と向かい合っている。シエルシは身体の前で手を組み、名残惜しそうに短い間だけだったが、仲間だった人々を見渡した。

「……皆、ありがとうございました。お陰で、踏ん切りがつかしました……。婚姻の儀を成功させ、私は使命を果たします」

「シエルシちゃん……お国に戻っても、うさ子たちのこと忘れないでね！ うさ子はね、うさ子はね！ シエルシちゃんと、ずっっ〜」

つと友達だよっ！！」

「と、友達……？」

「うんっ！ 離れてても、ずっと友達！ ね、ホクト君？」

「はは、そうだな。シエルシも面倒かもしれないが、うさ子と友達
でいてやってくれ。こいつ友達いねえから」

「……………そうですか。ええ、そうですね……………。忘れません、きつ
と。私も……………」

胸に手を当て、柔らかく微笑むシエルシ。短い間であつたが、シ
エルシは大きく成長した。この街に来たばかりの頃と今の彼女とで
は大きく心境が異なっている。少なくとも、もう儀式から逃げ出す
ような事はないだろう。

顔を上げ、姫は手を振った。うさ子がそれに応え両手をぶんぶん
振り回す。イスルギと共に、シエルシは去っていった。その背中を
見送り、ホクトは煙草の煙を吐き出し静かに空を仰ぎ見る。

「えぐ……………っ！ シエルシちゃんが、シエルシちゃんが行っちゃっ
たよっうっ……………っ！！ ぴええええんっ！！ ホクトくん！！」

「おーよしよし、泣くな泣くな……………」

「これで、砂の海豚の活動を本格的に再開出来る。せいせいしたよ」

「とか言って本当は寂しい口ゼ君なのですた、っ……………」

「誰がだ、誰が……………」

こうして四人は見えなくなったシエルシに背を向け、ガルガンチ
ユアへと戻っていく。それぞれが、己の成すべき道へと戻った。そ
してそれが、彼らの本当の戦い、物語の幕開けでもあったのである。
物語の舞台は第六界層オケアノスから、第五界層エル・ギルスへ
と移る。それは、以前から決まっていた事だった。世界最大のイベ
ント、記念式典は目前にまで迫っていたのだから。

魔剣狩り（2）

「あれ？　ロゼ君ロゼ君、駅がー」

「……………戦闘？」

ロゼとうさ子が身を乗り出し、窓を開いて列車の進行方向を覗き込んだ。それでようやく口元の血を拭い、ホクトは行動不能状態から復帰する。

第五階層エル・ギルス……。ロゼたちが目指していた街、遊楽都市ローティスは既に目と鼻の先まで近づいていた。しかし、駅のホームでは連続して爆発が起こり夜の空を何度も明るく照らし上げていた。

砂の海豚の代表として彼らがローティスに向かっていった理由……それは、迫る帝国の記念式典を阻止する、反帝国勢力による大規模な反乱作戦の為である。ローティスに秘密裏に集結し、そして帝国の式典を攻撃する作戦を練るはずであった。

ローティスには現在、そうした理由で反帝国勢力が集結しているのである。本来は遊楽都市の名が示すように、争いごととは程遠いはずのその町で起きている戦闘に誰もが嫌な想像をせずには居られなかった。

「まずいな……。この列車、減速してる。ローティスまで行かずに引き返すつもりか…………？」

「そりゃ困る。ロゼ、飛び降りるぞ」

「えー？　あ、おいホクト……………！？　ああもう、なんであいつはいつもああなんだ！？　人の話を聞きゃしないっ！…！」

「ロゼ君、急いで急いでっ！　うさも先にいくねっ！！」

ホクトが荷物を纏めて窓を蹴破り、まだ移動を続けている列車から荒野へと飛び降りる。それに続き、ロゼの話を聞かずにうさ子が列車から飛び降りた。二人は既に走り出し、停車しようとしている列車へと追いつこうとしている。

「ああもう、魔剣使いは周りの事考えられないんだな……！　僕は生身なんだぞ！？」

「大丈夫ですロゼ。さ、私の手を取って」

「最初からそうするつもりだよっ！！」

半ばやけくそにリフルの手を取り、頷くロゼ。その身体を抱え、剣士は二人と同じように窓から飛び降りた。列車は案の定停車し、戦闘中のローテイスには近づかないようにする方針らしい。着地したリフルはロゼを降ろし、そんな二人をホクトとうさ子は追い抜いていく。

「先行って様子見てくるわ！　リフルとロゼはちょっと待ってる！」

「あ、おい！？」

「うさとホクト君がね、ちょっと見てくるからねっ！！」

ロゼの話は聞かず、二人は魔剣を装備して一気に加速していく。そうなってしまうと魔剣による身体強化が出来ないロゼは置いてけぼりを食らうしかなかった。リフルは腕を組み、呆れた様子で溜息

を漏らす。

「まあ、二人なら問題ないでしょう。私達はゆっくり追いつきましよう」

「……はあ……。団長の話を聞く気配が全く無いのはどうしてなんでしょうな……」

それは、二人なりにロゼの身を案じているからなのだが……その気持がロゼに伝わる事は当分なさそうである。二人は線路沿いに夜の荒野を走り続け、ローティスのターミナルへと侵入する。すると、そこでは既に大規模な戦闘が開始されていた。

帝国のエンブレムを刻んで金色の甲冑を着用した騎士たちはが駅を包囲しており、一般利用客たちは帝国騎士たちに動きを制限されている状態だった。駅のホームでは騎士たちと戦う数名の人物の姿があり、帝国騎士団対反帝国勢力の様相は一目瞭然である。

駅まで駆け寄り。うさ子はホクトの一步先を行き、帝国騎士たちの包囲を飛び越えてホームへと進入する。それを止める暇もなく、ホクトはただ啞然としたままうさ子の行動を見つめていた。

「何だ貴様は！？ ローティスのターミナルは現在帝国騎士団により封鎖中である！ 即刻立ち去れ！」

「うさたちはローティスに入りたいのっ！ ローティスに入れてください！」

「人の話を聞いていないのか……？ ローティスは封鎖中だ！ 貴様、^{ナンバ}界層は！？」

「なんばー……？ なんばーってなに？」

「烙印を見せると言っている！ 貴様……ちよつとこつちに来い！」
「すいません、ちよつといいッスかねえ……」

よつやくうさ子に追いついたホクトが間に割って入り、へらへらと笑ったままうさ子の頭を掴んで引つ込める。金色の甲冑の騎士たちは腰から提げていた剣を抜き、ホクトに突きつけた。

「貴様ら、魔剣使いか……？ 烙印を見せろ」

「烙印……？ いや、それが何なのか判らんけど、こいつ引き取りますんで……」

「烙印を見せられないだと……？ 貴様、烙印逃れか！？」

「だから、らくい……うおっ！？」

剣を構えた騎士達が一齐にホクトへと襲い掛かり、剣を振り下ろす。瞬間、ホクトはガリユウを片手で揮い、騎士達を一撃で薙ぎ払った。手加減をしたので吹き飛ばされただけであったが、それで騒ぎの中の一員に加わる事となってしまうのであった。

「烙印なんて知らんと言つとるうに……。めんどくさいなお前ら……」

「帝国に対する反逆行為と見なす！ 皇帝陛下の定めた逆徒抹殺の法により、貴様らを処分する！」

騎士たちがぞろぞろと集まる中、ホクトは魔剣を肩にのせ面倒く

さそうに煙草をふかしていた。その背後、うさ子がきよるきよると周囲を見渡しホクトの上着の裾をちよいちよいと引っ張る。

「……ホクト君、ホクト君。うさはね、この人たちが何を言っているのか全く理解出来ないの……」

「俺もわからん……」

「どっしよっ?」

「とりあえずぶつとばすか……」

ホクトがそう気だるそうに呟くとうさ子は拳を構え、両の剣を拳の前で打ち鳴らし、耳をばたばたと上下させた。剣を持った騎士たちが一斉に襲い掛かる中、ホクトは魔剣を大きく振りかぶり、横薙ぎに振り下ろす。魔剣から放たれた黒い衝撃が騎士をばたばたと吹き飛ばし、それを跳び越えうさ子がホームに進入する。

一般利用客たちは間近で戦闘が起きた事に怯え、我先にとホームからの脱出を図っている。ターミナル内はひどい乱戦状態に陥っており、うさ子は人込みにもみくちゃにされながらそのままホームの外へと流されていく……。

「ホ、ホクトくん！ はわわ……な、流されちゃった!?!」

「え……!?!? う、うさ子ーっ！ カムバックー!!」

うさ子の声が遠ざかっていくのを確認し、後を追いかけてホームに潜入するホクト。と、線路からホームに飛び乗った次の瞬間、一般利用客が去っていった方向から走ってくる異形の団が見えた。

金色の甲冑なのは一般の帝国兵と同じのだが、その兜のデザイン

ンが異なっている。剣を装備した騎士の中に大型のライフルを装備した騎士が混じり、それがずらりと隊列を組みホクトを一気に包囲しつつあった。そしてその中、明らかにデザインの異なる色違いの鎧 漆黒を纏った騎士が一人。

「ま、魔剣使い……！？ どうしてこんな辺境に……？ その黒い魔剣使い！ 大人しく武装解除し、投降して下さい！」

「何で？」

「何で、って……！？ 我々は、貴方の命を奪う為に行動しているわけではありません！ 作戦の邪魔さえしなければ、一般の魔剣使いには手厚い保護の用意があります！ 現在このローティスは反帝国勢力の一斉排除の為、“キャバリエ 剣誓隊”が作戦行動中です！ 速やかに武装解除し……」

「キャバ……？ キャバクラ？」

「はいっ！？」

どこかで同じようなやり取りをしたような気がしつつもホクトはそれを自重出来なかった。一人で勝手に苦笑を浮かべ、それから漆黒の魔剣を構える。

「悪いな、キャバクラだかキャンキャンだか知らないが、俺は誰の指図も受けねえ。つか、さっきその帝国兵倒しちゃったんだけど、放置でいいのか？」

「えっ！？ あ……反帝国主義者！？ く……っ！ なんて狡猾な……！ 剣誓隊として、貴方を拘束します！」

騎士たちが一斉にホクトへと襲い掛かる中、ホクトは片手で魔剣を振り回しそれをいなしてしまふ。まるで余力だらけのホクト相手にライフルを構えた兵たちが一斉に銃弾を放つのだが、ガリユウが生み出す魔力結界が弾丸を軽々と弾き飛ばしてしまふ。

一般兵では埒が明かないと判断したのか、黒い甲冑の騎士が剣を抜いて前に出る。他の騎士たちと比べると小柄なその騎士は明らかに女性であり、襲い掛かってくるのを確認したホクトは眉を潜め、攻撃を回避しつつ魔剣を肩に乗せ下がってしまふ。

「この、このおっ!!」

「待て待て! ちょっと待った!」

「なんですか?」

「お前……………女だろ?」

「……………はい、そうですけど?」

騎士は兜を被っている為顔は見えなかった。しかし既に会話のやり取りがあつた為、女性である事は明らかである。すると、つい先ほどまで余裕の様子で騎士たちをいなしていたあのホクトが、冷や汗を流しながらたじろいでいるではないか。

「お前が……………剣誓隊……………だと……………?」

「そうです。剣誓隊第七小隊所属、エレット・ノヴァク少佐……………それが私の名です! 剣誓隊の名に恐れを成しましたか……………!?」

「う、うう……っ!？」

首を横に振り、嫌がるように後退するホクト。しめたと思ったのか、エレット少佐は剣を振り上げホクトへと襲い掛かる。するとホクトは魔剣を何故か手放し、素手で振り下ろされた剣を白刃取りして防いだのである。

「あ、貴方……ブシドーですか!？」

「お、俺は……お前とは戦わない!」

「な、何故ですか……? これほどの力を持ちながら、一体何故……」

「俺はッ!……! 女の子に、剣を向けない主義だからだッ!……!」

一瞬の間……。

ホクトの怒号が響き渡り、戦場下にある遊楽都市ローティスの夕一ミナルは一瞬で静まり返った。騎士達は動きを止め、何が起きたのか理解出来ないという様子でお互いに顔を見合わせている。

一番きよとんとしているのは剣を振り下ろした剣誓隊所属、エレット少佐である。少佐はすっかり固まってしまい、その間にホクトは剣を素手で押し折り、それを奪って放り投げてしまう。

「女がこんなもの持ち歩くな! 危ないだろっ!？」

「……あ、あ、貴方……馬鹿にしているんですかっ!？」

「俺は至って真面目だ……!」

徐にエレット少佐の兜に両手を伸ばし、スポンと引っこ抜いてみせる。するとふわりとエレットの栗毛色の髪があふれ出し、驚愕に打ち震える緑色の瞳がキラキラと輝いていた。

「ごめん……マジ無理……」

「な、な!？」

「女の子を斬ったら、俺は……俺は死ぬ　!」

「はあっ!？」

「なのでかささず当身ッ!」

「はづぐっ!？」

戦場には絶対に似合わない異様な雰囲気の中、ホクトはエレット少佐の首を小突き、気絶させる。ぱったりと倒れるエレットをその場にそっくりと丁重に寝かせ、それから魔剣を再構築して振り返った。

「またつまらぬ物を気絶させてしまった……。さあ、戦闘再開だ!
かかって来いやあっ!」

魔剣を構えてすごむホクトであったが、騎士たちはまだ戸惑ったままである。お互い、攻撃していいのかどうか、そもそもホクトが悪人なのかどうか、踏み切れずにいる様子だった。そんな最中、ホ

クトたちが居るのは向かい側にあるホームから突如として銃声が聞こえてきたのである。

銃弾はホクトへ向けられた物ではなく、戸惑っていた騎士たちに襲い掛かった。倒れていく騎士たちの中、向かいのホームから人影が跳んだ。空中で手にしたライフルを連射しつつ、シルエツトはホクトの隣に着地する。

「ふぎゆう　っ!?!」

その際、足元に転がっていたエレット少佐が踏みつけられてしま
うが、襲撃者は気にする気配も無かった。跳躍してきたのは　エ
レット同様、女性であった。しかもかなり身なりの小さい、少女と
呼べる年代の、である。ホクトは戦場にまた少女が出ている事に憤
慨しつつ、その様子を下から上までじっくりと眺めた。

小さい背に長い黒髪のツインテール、顔は黒いゴーグルで隠され、
身体は漆黒のマントで覆われている。手にしているのはライフルの
ようだったが、通常の騎士達が装備しているライフルとは出で立ち
が異なるように見えた。少女はふと顔を挙げ、ホクトの手を握り締
める。

「こっち!」

「ほい?　こっちって……?」

「いいから、こっち!!　早くしてっ!!」

「お、お……?」

意外な流され体質が露見したホクトは少女に手を引かれ、反対側
のホームに走っていく。騎士たちは銃撃でホクトたちを追撃したが、

銃弾はホクトが魔剣で防いでしまう。

一連の奇妙な流れにより、二人は無事にホームを突破する事に成功する。そのまま少女はホクトの手を引き、夜のローティスの裏路地へと駆け込んでいくのであった……。

魔剣狩り(2)

「ふう……ここまでくれば、もう大丈夫かな……？」

少女が足を止め、周囲を見渡したのはローティスでも滅多に貴族たちは訪れないスラムであった。周囲の人の気配は無く、照明さえもない。暗闇の中、ただ遠い歓楽街の明かりだけが微かに二人を照らしていた。

既に魔剣を解除していたホクトは少女に相変わらず手を取られたまま、ただひたすらに走ってきた。とりあえず敵ではなさそうだという認識だけが頼りだったのだが……。少女は振り返りゴーグルを外し首からそれを掛けたまま、背伸びをしてホクトの顔を覗き込んだ。

「ヴァン……？ ヴァン、だよね……？」

「え……？」

「ヴァン！ ヴァーンツ！！ 会いたかった！ 会いたかったよっ……！」

「ぬおっ!？」

少女に力いっぱい抱きつかれ、ホクトはただ戸惑う事しか出来なかった。少女はホクトの身体に何度も顔を擦り付け、勝気そうな目に涙を溜めてその場で足をばたつかせて喜びを表していた。

「ヴァン! ヴァンのおいだ……っ!! ボク、ずっとヴァンの事探してたんだからね……? どこに行ってたの? ボク、死んじゃったんじゃないかって……!」

「……………見知らぬ少女よ……………」

ホクトは両手でがしりと少女の両肩を掴み、自分の身体から引っぱがした。少女は目を丸くしてホクトを見つめ続けている。なんとなく心苦しかったのだが、ホクトは正直に真実を告げる事にした。

「悪いが俺の名前はヴァンではない。ホクト君だ」

「……………? ヴァン?」

「だから、俺はヴァンじゃない。お前の人違いだ」

「でも、ヴァン……。ヴァンだよ?」

「だから、ヴァンではないのよおいらは……。俺は 砂の海豚所 属、さすらいの傭兵ホクト隊長だ」

「でも、ジヨニーライデン……………」

「それは俺が好きな煙草の名前だが、俺はヴァンではない」

「でも……でも……」

「いや待て、話が全く進まないぞ……。少し落ち着こう」

冷や汗を流しつつ、頭を搔き壁に背を預けるホクト。レンガが敷き詰められた細い路地の中、少女は胸の前で指と指とを突き合わせ、上目遣いにじっとホクトを見つめていた。

「ヴァン……ボクの事……忘れちゃったの……？」

「……いや、だから俺はヴァンじゃない。そういうお前は？」

「……アクティ。アクティ・ノーレッジ」

「アクティ……アクティねえ……。駄目だ、全く記憶にない。それに俺の名前はホクト君であってヴァンではない。つまり、人違いだ」

「でもっ！！ ヴァンはヴァンだよ！！ ねえ……何があったの！？ 剣誓隊に何かされちゃったの！？ それとも、まさか“あいつ”が……」

まるで話が進む気配がないのでヴァン……ではなくホクトは身体を起し、少女を無視して周囲を見渡した。ローティス貧民街に潜入出来たは良いのだが、ロゼたちと合流しなければならぬし、人込みに流されていったうさ子を回収するという役目もある。いつまでもこんなところで油を売っているわけには行かず、ホクトは少女の頭を撫でて歩き出した。

「悪いな、俺は行くぞ」

「ま……っ!? 待ってよ! ねえ待ってたら、ヴァンッ!!
ボクも一緒に行く! 一緒に行くよっつ!!」

「だから俺はヴァンではない……おい、この会話だけで一話終わっ
ちまうだろっが!」

「何が……?」

少女は長く揺れるツインテールをふわふわと上下させ、ホクトの
後を着いてくる。特に害はないので気にしない事にしたホクトであ
ったが、少女はずっとホクトの上着の裾をがっちりと掴み、更に空
いている手でホクトのベルトにも捕まっている。身動きが自由に取
れない中、溜息を漏らしつつホクトは歩き続けた。

そうして移動する事数分、貧民街から出たホクトの前、夜の歓楽
街が姿を現した。毒々しい色のネオンがチカチカと眩く点滅を続け、
酒に酔った人々がふらふらと通りを歩いている。楽しそうな雰囲気
にホクトは目を輝かせ、きよるきよると周囲を見渡した。

「これがローティスかあ……! 若いねーちゃんと酒がいつぱいだ
……っへ、っへへえ……!」

「……ヴァン……? ヴァンが……ヴァンが、変態になっちゃった
……」

「だから俺はヴァンではない。変態というところは否定しないが、
変態は決して悪いことではない。変態は変態だが、俺は変態と言っ
名の紳士なのだ」

「意味わかんない……キモッ」

「……………ちょっとそういう素っばい発言はお兄さん傷つくかもしれんなあ……………」

額に手を当て、頂垂れるホクト。しかし歩みを止める事はない。今は仲間達と一刻も早く合流しなければならぬのである。キリリと表情を引き締めるホクト、しかしそこに女性の甘い声がかげられた。

「ねえ、お兄さん！ ちょっとだけ、寄って行かない…………？」

声をかけてきたのは所謂バニーガール姿の金髪美女であった。店の前で客引きをしていたらしく、やたらとキツイ色合いの看板を持っている。ホクトは足を止め、それから真顔で自分のズボンのポケットに手を突っ込んだ。

「……………ヴァン？ まさかとは思うけど、行かないよね？」

「すごくいきたくっ！っ！ けどお金がないっ！！！」

絶句するアクティ…………。するとホクトにバニーガールが歩み寄り、挑発的に胸元を強調しつつ投げキッスを飛ばす。

「今なら……………特別に、サービス……………し・て・あ・げ・る」

「……………ヴァン、行かないよね…………？」

「……………アクティ、俺は思い出したぞ。どうやら俺は、ヴァンだったらしい……………」

「えっ！？ ホントッ！？ ヴァン……！ 思い出したの！？」

ホクトは振り返り、片膝を突いてアクティに迫った。凜々しい顔つきに輝く瞳、ホクトの真顔にアクティはどきりとしつつ、ホクトに涙を浮かべて近づいた。

「だから……金を貸してくれ」

「ヴァン……はあっ！？」

「お金をっ！！ 貸してくださいさああああいいいいっ！！」

大声で絶叫したホクトの顎にアクティは跳び蹴りを放ち、見事にそれがクリティカルヒットする。一瞬気が遠のき倒れたホクトの襟首を掴み、アクティは無言ですると男を引きずり歩き始めた。

「……なんか、自信なくなってきた……。これ、ほんとにヴァンなのかな……」

項垂れながらもトボトボと歩き続けるアクティ。その背後、レンガ敷きの歩道でガリガリと引きずられながら、ホクトはつわごとのように“おっばい”と繰り返し漏らしていたのであった……。

魔剣狩り(2)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

その頃、メインヒロインは

シエルシ「……………」

うさ子「あれ？ あれれ？ シエルシちゃん、どうしたの？ お膝
なんか抱えちゃって……………」

シエルシ「私……………メインヒロインなんですよね？ ホクト編の……………」

うさ子「うん。作者によると、だけど」

シエルシ「なんで別れちゃうんですか！？ ただでさえ空気とか言
われてるのに、余計に出番が減ってしまうではないですか！」

うさ子「うさーん……………」

シエルシ「なんか、新キャラとかが徐々に増えてくると、私の存在
がどんどん薄く……………。どうして女の子ばかり出てくるんですか…
……………」

うさ子「男も段々増えていく予定なの〜」

シエルシ「うっ……………。私、ヒロインとしてやっていく自信がないで
す……………」

うさ子「だい！ じょう！ ぶっ！……！ うさ子がね、なんとかしてあげるの！……」

シエルシ「うさ子……」

うさ子「だってシエルシちゃんとうさ子は、友達なんだから……」

シエルシ「私、間違っていたのかもしれませんが……。メインヒロインであるかどうかより、大切な事は……。すぐ傍にあったんですね」

うさ子「シエルシちゃん……」

シエルシ「そうですね、メインヒロインじゃなくなったとしても……私は私なりに、一生懸命にやっていけばいいんですよね……」

アクティ「ただの現実逃避じゃない、それ？」

シエルシ「……」

うさ子「大丈夫だよ！ シエルシちゃんには、おっぱいがあるんだもんっ！……」

シエルシ「……」

うさ子「あれ！？ な、なんで落ち込むのー！？ シエルシちゃん！？ シエルシちゃん！……」

魔劍狩り(3)

「エレット君。エレット君、しっかりしなさいね」

「う、うぐぐ……?」

ローティス、ターミナル内……。気絶していたエレット・ノヴァ少佐は上司に揺さぶられ、口からよだれを垂らしながら目を覚ました。周囲では相変わらずの警戒態勢が続いており、金色の甲冑に身を包んだ帝国騎士達が慌しく走り回っている。

エレットは慌てて立ち上がり、彼女の所属する第七小隊の隊長でもある上司に敬礼した。慌てて先ほど遭遇した魔劍使いを探してみるものの、その姿はどこにも見当たらない。

「も、申し訳ありませんシグマール大佐……。反帝国勢力の魔劍使いと遭遇したのですが、取り逃がしてしまいました……。全ては、自分の責任です……」

「まあまあ、エレット君……。そう気張らなくていいから。君、まだ配属初日だよな? おじさんはね、若い子が前線に出るのは良くないと思うんだ、うん。あ、飴ちゃんいるかい?」

エレットの前に立っている、“劍誓隊”第七小隊長であるシグマールは白髪交じりの黒髪をオールバックに固め、無精ひげを生やした冴えない男だった。本気で落ち込んだ様子のエレットの肩を叩き、ポケットに常に忍ばせている飴玉をいくつか取り出してみせる。

「何味がいいかい? 色々あるんだけどねえ」

「はい……。では、黒飴で……」

黒飴を受け取り、それを口に放り込むエレット少佐。ホクトに放り投げられてしまった兜を探しつつ、乱れた髪形を気にしていた。歳相応の選択とは言えないマニアックな黒飴も含め、シグマールは彼女を変わり者だと認識しつつあった。

「いやあ、エレット君も大変だね。実戦配備直後からこんな所に放り込まれちゃって……。反政府勢力一斉排除作戦なんて、今やんなくてもいいのにねえ」

「いえ、自分は一刻も早く帝国の為に反政府勢力を排除したいと思っっています！ そのために、志願した“剣誓隊”ですから！」

「あ、そう？ じゃあまあ、そこそこ気張ってね。あんまり頑張っちゃうと、コロっと死んじゃうから。まあ、魔剣使いなら並の反帝国勢力なんて相手にもならないだろうけどさ」

「はい……。って、そうだ！！ 大佐、先ほどかなり腕の立つ魔剣使いと遭遇しました！！ カテゴリース以上の魔剣使いかと……」

「カテゴリースって、そんなすごいホイホイいないでしょ。見間違いないじゃなくて？」

「いえ、明らかにSでしたっ！！ いかにもSって感じで……！ 剣誓隊の教官でもあそこまでは……。顕在魔力値ですら、私の十倍はありましたし」

「ああ、そうか。君は感知タイプの魔剣使いだったっけね」

「キャバリエ 劍誓隊」とは、帝国最強の騎士団の名である。その所属隊員は全員が魔劍所持者であり、帝国に忠誠を誓うエリート部隊である事は有名な話である。本来の劍誓隊とは、元々魔劍を持つ人間が結成したものであり、シグマールも先天的魔劍所有者の一人である。が、エレット少佐はそうではなかった。

魔劍に対する高い適性を持つ人間を集め、劍誓隊内部で新たに立ち上げられた“プロジェクト 後天的魔劍使い養成計画”エクスカリバー”によって人為的に魔劍を継承させられた能力者の一人であるエレットは、劍誓隊側で定めた能力の魔劍を所持している。エレットの持つ魔劍、“エクスカリバー 清明”は量産型魔劍、エクスカリバーシリーズの一つであり、特に対象の能力探知などの能力に優れているという特徴がある。

劍誓隊の中でもはぐれ者が集まる第七小隊にとって、エレットのような変わり者がやってくるのは別に珍しいことではない。そもそも隊長であるシグマールからしてこの様子なのだから、人の事は言えないといった所だろうか。腕を組み、エクスカリバー 清明の事を思い出してシグマールは改めてエレット少佐を見つめた。

十代後半と思われる出で立ちに、重量装備である劍誓隊の黒き鎧は似合わない。というより、体力的に装備出来ないのか、通常の劍誓隊所属の鎧よりもいくらか軽量化されたデザインの物を装備していた。前髪を気にしつつ、なにやら一人でブツブツ呟いている。こんなのが前線に出てくる時代なのだから、時も流れているものだと実感する。

「エクスカリバーシリーズの中で、清明が一番探知能力に優れています！ 自分が魔力測定を間違える事はないかと！」

「ふーん……。しかし、君の魔力って結構高いんじゃないか？ たかい？ 君くらいでしょ？ エクスカリバーシリーズの第一陣って」

「私のほかに数名だけだと聞いています。一応、魔力数値だけで言

えば養成学校ではトップクラスでした。総合成績も主席です」

「あら、それはすごい……。おじさん、前途有望な若者を部下に持てて嬉しいよ」

「はい！ お褒めに与り恐縮至極です！」

別に本気で褒めたわけではないのだが、本人が喜んでいる様子なので別に何も言わないことにした。シグマールは腕を組み、周囲を見渡す。確かに派手な戦闘の形跡があり、更にここに布陣されていた戦力も抜け目は無かったはずだった。エレットが先陣先駆け独断行動という暴走にも似た行為に出たものの、きちんとエレットには騎士団の護衛をつけたはずである。

ターミナル周辺で他の魔剣使いとの戦闘がなければ、シグマールもターミナル内部制圧に参加出来たのだが……。過ぎた事を言っても仕方のない事である。問題は、この包囲網を意ともせず突破出来るだけの腕利きが敵に混じっているという事である。本当にエレットの十倍の魔力を持つ人間がいるとしたら、確かにそれは間違いなく超危険人物に他ならない。

ふと、思考を中断しエレットに目を向ける。エレットはターミナル内に転がった反帝国勢力たちの無残な死体を見つめ、悲痛な表情を浮かべていた。騎士たちは彼らに対して礼節という言葉で応じる気配は無く、死体はぞんざいに放置されたままである。中には既に死んでいる者を執拗に攻撃したり、命乞いをする相手の首を刎ねたりする騎士も居た。エレットにとって初の戦場であるこの場において、それは過激すぎる光景だったのだ。

「大佐……。何故彼らは、帝国に逆らうのでしょうか？」

「うん？ 何故って……」

「自分には、理解出来ません……。帝国による世界支配だけが、この混沌とした世界を纏め上げる手段ではないのですか？」

「ああ……。君、ヨツンヘイム生まれのヨツンヘイム育ちかな」

「え？ はい……。そうですね」

帝国から出た事が無い人間であれば、そう考えてしまうのも無理はない。帝国内部での教育、そして常識が“そう”なのだから。だが、前線に出ていれば嫌でも現実を目の当たりにする事になる。シグマールは複雑な心境だった。

「まあ、それぞれの立場に主張があり、主義があるって事だねえ……。おじさんにはどうにも出来ない」

「…………… unnecessary 争いを起し、世界の調和を乱すなんて……。これ以上、人が人を殺すような事はあつてはならないと思います。早く、反帝国勢力を一掃しなければ……」

真剣に苦心するエレットであったが、その言葉は明らかに矛盾していた。だがその矛盾は誰もが抱えているのだ。表層にあるものとその奥にあるものがキツチリとかみ合うことはそう多くはない。人は誰しも同じ事だ。男は少女の肩を叩き、歩き出す。

「それで？ ここを突破した魔剣使いの特徴を報告してくれるかな？」

「はいっ！！ 特徴は……。背の高い、細身に筋肉質な男で……。身体には沢山傷跡がありました。髪は黒で、顔は……」

「えーと、魔剣はどんな感じだったかな」

「あ、そうですね。魔剣は……漆黒の大剣でした。黒い魔力を顕現させ、衝撃波を発生させていたようです。それだけで騎士隊が壊滅状態に……大佐？」

エレットの言葉でシグマールは唐突に足を止めた。それから腕を組み、考え込む。どうしてそうなってしまったのか判らず、エレットは困った様子でシグマールの周囲をウロウロし始めた。

「大佐？ どうかありませんか？」

「……漆黒の魔剣……。莫大な魔力量……。嫌な特徴だねえ……」

「はい……？ 隊長、彼をご存知ですか？」

「“魔剣狩り”っていうのがねえ……。いたんだよね、カテゴリーSの……。たった一人で、剣誓隊壊滅させちゃったのが……」

「魔剣狩り……？ 噂には聞いたことがあります。確か、魔剣所有者を片っ端から襲撃していた大量殺戮者にして、反帝国組織の英雄……。名前は、えーと……」

「ヴァンだよ。ヴァン・ノーレッジ……。やだねえ、一年くらい前からピタリと収まって居なくなっ、もう死んだものだと思われてたんだけど」

「あの伝説の魔剣狩りが相手なら、エクスカリバーシリーズの成果を發揮する相手に不足はありませんね！ 自分が必ず、その魔剣狩

りを倒して見せます!!」

「あー……。エレット君、あのね……。って聞いてないのね、もう」

一人で走って行ってしまったエレットを見送り、シグマールは静かに溜息を漏らした。この町は今戦場となっている。魔剣を持つならば、そうそう危険はないと思っていたが……。ヴァン・ノーレツジが出てくるとなれば話は別である。

「まあ、大丈夫でしょう、“白騎士”も動いてるんだし……。エクスカリバーシリーズのお手並み拝見って所かね……」

一人、ポケットから取り出したミルクキャンディを口に放り込み歩き出す。その足取りはのんびりとしたもので、とても危険な戦場に向かうものには見えそうもなかった。

魔剣狩り(3)

「ヴァン……。記憶喪失って、ほんと?」

ローティスの街を歩きながらホクトは片手をポケットに突っ込んだまま、気だるそうに頷いた。折角若い女性とイチャイチャしつつ楽しいお酒が飲めるかと思ったのだが、アクティに阻止されてしまったのは仕方が無い。

確かに現在は街全体で水面下とは言え大規模な戦闘が起きている真っ最中なのである。ノンビリ酒など飲んでるわけにはいかない

のだが、それでもホクトは名残惜しかった。絶対に全部片付けたら戻ってくるに近い、ついでに口ゼにお小遣いを強請る事も誓いつつ、ホクトは自分の境遇をアクティに説明する事にした。

とりあえず、不必要なUGでの事やシエルシとの一件などは伏せておき、自分が記憶喪失で砂の海豚に拾われたという事だけを説明する事にした。しかしアクティにとってはそれで十分すぎる。少女は落ち込んだ様子でホクトの隣をとぼとぼと歩いていた。

「まあ、忘れちまって魔道具とやらでも思い出せなかったからな。本当に記憶喪失なのかどうかもわからないわけだが」

「……烙印は？ ヴァン、烙印見せてよ！」

「だからその烙印ってなんなんだ？ どいつもこいつも烙印みせる烙印みせるって……それで何がわかるってんだよ」

アクティは不満げに頬を膨らませ、それから徐に自らの黒いマントを剥ぎ取って見せた。マントの下、上半身は殆ど水着のような服装をしており、軽装というにも行き過ぎている。その身体の右肩を出し、そこをつんつんと指差して見せた。

「ここ見てよ、ここ。これがエル・ギルスの烙印」

「……………？ へえ、これが烙印……………」

「ちよっ！？ そんな簡単に触らないでよ、えっち！！」

触ろうと手を伸ばしたホクトだったが、アクティに思い切り突き飛ばされてしまう。啞然とした様子でホクトは手をポケットに収め、溜息を漏らした。

「悪いが俺は、おっぱいの小さい子に興味はないんだ……」

「キモ……。烙印っていうのは、その人の個人情報の手帳なんだよ？ おっぱいあるなしじゃなくて、レディー相手だったらそういうのは触っちゃ駄目なの！」

「レディー……？」

「ああもうっ！ 兎に角、ボクの烙印はこれなの！ エル・ギルスの貧民街で生まれ育って、親に捨てられて反帝国組織に入って……！ そういう過去の記憶、ボクが忘れたい事も全部ここに残ってる！ これは……消せない、自分自身の証なんだよ。ここには……ヴァンとの思い出だって、いっぱい……」

そこで言葉が途切れてしまい、アクティは目尻に涙を浮かべて俯いてしまった。肩を落とすし、しょんぼりとしたその様子にホクトは何もしてやる事が出来ない。何しろ見知らぬ少女であり、目の前で泣かれてもどうすることも出来ないのだ。記憶があれば少しはマシだったかもしれないが、少なくとも今のホクトにとって彼女は興味の対象外である。

仕方なく、マントを着せてやりその頭をぐりぐりと撫で回した。アクティは泣きながら顔を挙げ、それからじっとホクトの目を覗き込んだ。と思った直後、身を屈めたホクトの背後に回り、上着を捲って頭をそこに突っ込んだ。

「おい、やめろ！？ いやー！ 公衆の面前でそんな……えっち！」

「何キモいことやってんの……？ ボクはただ、烙印を調べるだけ」

……つて、なにこれ!？」

頭を服から引き抜き、アクティは背後に飛びのいた。ホクトは何がなんだか判らず、腕を組んで首をかしげる。

「どっかしたのか?」

「……ない」

「何が?」

「ないの、烙印! 烙印が、なくなってるの?!?!?! どうして!? なんで!?! そんなの在り得ないよ、だって烙印は ツ!」

「待て、落ち着け……。烙印がなんだか知らないが、俺には関係ない。そんなもんがあってもなくても、俺は俺であり俺以外の何者でもないからだ」

アクティはホクトを見つめ、それから握りこぶしを振り上げたが、おずおずとそれを引っ込めた。アクティ自身、何が起きているのか把握出来ずに戸惑っている状態なのは言うまでも無く。ただ静かに黙り込み、唇を指先でなぞりながらそっぽを向いていた。

漸く静かになった空気の中、ホクトは溜息一つと共に歩き出す。アクティもそれに続き、ゆっくりと歩き始めた。人通りの少ない裏路地の中、外灯も無く二人は遠くのネオンの明かりだけを頼りに進んでいく。

「ねえ、ヴァン……」

「ヴァンではないホクト君だ」

「じゃあホクト……。魔剣、出せるよね？ 魔剣」

「なんだ藪から棒に……。さっき出してたろ、ターミナルで」

「うん、見たよ。魔剣ガリユウ……。ヴァンが使ってた剣……」

「そうなのか？ まあ、そういう事もあるんじゃないか」

「在り得ないんだよ、ガリユウはヴァン以外の人間が持つてるはずないんだもん……。ねえ、ほんとに思い出さない？ ボクのこととか……。組織の事とか……」

「いや、全く。残念ながらそんな簡単に思い出せるほど甘い話じゃないらしい」

「……。はあ……。魔剣狩りとまで呼ばれたヴァンが戻ってきてくれれば、記念式典でハロルドを倒す事だつて夢じゃないと思つたのに……。これじゃあ前途多難もいいところだよ……」

「……。だから、あのなあ」

足を止め、ホクトが振り返る。アクティは泣き出しそんな顔で唇を噛み締め、じつとホクトを見上げていた。そういう顔をされてしまつと……。ホクトはどうにも何も言えなくなってしまう。女の子を泣かせるようなヤツは、基本的に最低なのである。自分自身の正義に法るならば、やるべき事は一つだけだった。

「……。判つたよ、判つた。ハロルド倒すのには手を貸してやるし、

そもそも俺は今でも反帝国勢力の一員なんだ。まあ傭兵だけ……
ついでにハロルドも倒してやるよ」

「……手伝ってくれるの？ ボクの事も、皆の事も覚えてないのに……？」

「その皆つてのがどこの誰かは判らないが……どっちみちハロルドは倒す。ついでだから、お前達にも手を貸してやる。それでいいだろ？」

屈んでアクティの頭を撫でるホクト。ぐりぐりと、乱雑に頭を撫でられアクティの目から涙がこぼれてしまう。ホクトは苦笑を浮かべ、その涙を指先で拭い取った。

「ヴァン……」

「ではない、ホクト君だ」

「ホクト……うん、じゃあホクトって呼ぶよ。ほんとにヴァンだけど」

「……。もうなんでもいい。兎に角ホクトだ」

「わかった、ホクト。ボク、ホクトの事信じるよ」

「ボクとかホクトとかなんかめんどくさいな……ややくしくて」

「な、何が……？」

アクティの背中を軽く叩き、ホクトは先に歩き出す。むっとした

表情を浮かべるアクティであったが、直ぐに照れくさそうに笑みを浮かべホクトの後を追いかけた。そうして二人がターミナルに向かって歩き続けていた時である。

狭い路地の正面、ターミナルを背景に闇の中に白い影が浮かび上がっていた。ホクトが直ぐに異常に気づいて足を止める。急停止したホクトの背中に衝突し、アクティは慌てて前を見た。

「……………？ ホクト？」

白い影は、靴音を立てながら歩み寄ってくる。決してその足取りは速くはなかった。しかし一歩一歩。鎧を鳴らし、近づいてくる。闇の中、ネオンとターミナル周辺を照らし出す灯台の光に時々浮かび上がるシルエット。ホクトは無言でアクティに手を翳す。

「下がってる、アクティ……………」

浮かび上がったのは、白い闇……………。純白の袴の下、鋼鉄の靴がちらほらと除き足音を立てている。両肩から指先まで被う西洋甲冑のデザインは先ほどから何度も見た帝国騎士のものである。被る兜は白くのとおりとしており、機械的な蒼い光が瞳の部分で輝いている。黒い長髪を括り、風に靡かせるその姿は侍を彷彿とさせた。

ホクトは白い侍を睨み、自らも歩き出す。戸惑うアクティも漸く敵に気づいたらしく、目を見開いた。その表情が恐怖一色に染まるのと、白い騎士が魔剣を構築するのとはほぼ同じタイミングであった。

浮かび上がる真紅の紋章。構築されるは蒼白の輝き。その身は限り無く無垢であり、限り無く純粹。刃である以前に一つの芸術品であるとも言えるような、そんな真っ白の、真っ白の太刀……………。

魔剣にしては珍しく鞘に納まった状態で構築されたその白い魔剣

を片手にそれは近づいてくる。そして音も無く前のめりに一歩踏み込み 次の刹那、ホクトの正面に斬撃が襲い掛かっていた。

いつホクトが魔剣を構えたのか、いつ敵が襲い掛かってきたのか、アクティには全く理解出来なかった。ただ甲高い金属音が鳴り響き、そうして二人が鏝迫り合いをしているのを見て、漸くそういう過去があったのだと認識しただけである。

漆黒の大剣と純白の太刀。対の様相を演出する二つの魔剣、そして同じく黒い剣士と白い剣士。まるでそれぞれの対立と意味するかのような、忌み嫌うべき絶対反対。ホクトの目つきが変わり、次の瞬間白い影はまた消えていた。

背後、ホクトの首目掛け刃が襲い掛かる。ホクトは前に倒れこむようにそれを回避し、同時に足で刀を蹴り上げる。が、また白い影は消え まったくの死角、背後から刃を繰り出した。ホクトの手元、魔剣は勝手に動いて白い刃を受け止める。そんな、瞬く間の出来事 連続して繰り出される尋常を超えた攻防。アクティは全くついていけず、しかし呟いていた。

「……………“白騎士”……………」

ホクトの周囲、黒い闇が浮かび上がる。ただでさえ闇に包まれた影の世界の中、黒くうねる刃は視界には捕らえ辛い。魔剣を思い切り振るうその切っ先から放たれた闇の波動は漆黒の中を泳ぎ、白騎士へと襲い掛かった。

後は乱舞、乱舞である。白騎士は全てを見切り、踊るように刃を振り回した。闇一色にしか見えないその世界の中、一見ただけでは白騎士が攻撃を防いでいるようには見えなかつただろう。舞い散る火花は魔剣同士の力の衝突の証。しかしそれがかくも美しく、かくも儂い。

「お前……………まさか……………？」

『見つけたぞ……。生きていたか、魔剣狩り……。逢いたかったぞ……。』

再び刃を激しく打ち合い、鏝迫り合いの形となる。至近距離で顔突き合わせ、二人は互いを見つめ合う。兜の下、くぐもった声が聞こえ、しかしホクトはそれに目を見開いた。

白騎士の持つ魔剣は白い太刀。まるで氷の結晶を切り取ったかのような美しい太刀である。その柄には、日輪を模した紋章が刻まれている。日の国ククラカン。その王家に代々伝わる魔剣であることを示す、紅き日輪が。

「お前……“ミラ”か　ッ!？」

白い魔剣が輝き、ホクトを弾くと同時にその刃を揮う。一瞬で大地が、壁が、空が凍てつき氷の結晶が刃となってホクトを飲み込もうとその牙を剥いた。ホクトはガリユウを大地に突き刺し、その黒い炎で氷の刃を相殺する。二対の魔剣の力が衝突し、冷気と闇の熱気の狭間、ホクトは真っ直ぐに白騎士を見つめていた。

『貴様との因縁……。ここで断ち切る。引導を渡してやろう、漆黒の剣士よ……。』

「……………そういうわけにはいかなえな。俺も、お前を探していた所だったんだ。目的がさっさと果たせて嬉しいぜ……。！　これであいつに……。ミュレイに礼が出来るってもんだ」

刃を引き抜き、ホクトはそれを構える。先ほどまでダラダラとした表情を浮かべていた彼とは違う。これが、本当の魔剣狩りとまで呼ばれた男の戦の顔である。放つ殺気と魔力はキリキリと場を軋ま

せるかのようで、それに絶えかねアクティはその場に膝をついた。

闇の中、更に色濃い闇が浮かび上がる事で知る。本当の意味での闇とは　ただ黒く、暗いのではないのだと。何もかもを飲み込むような、覗き込んだが最後、どこまでも落ちてしまおうような……。そんな、深い失意と絶望を言うのだと。

『もう一度斬り伏せてやろう、死神』

「やってみるよ、死神」

二つのシルエットが同時に動き出す。激突の瞬間、アクティは目を閉じていた。出来れば耳も塞ぎたかった。それは、余りにも凄惨な戦いだった。一対一の決闘……しかし、とてもおぞましい、闇と闇との戦いだったから。

はじける！ ロクエンティア劇場番外編（1）

くはじける！ ロクエンティア劇場番外編く

本編更新じゃないよ

うさ子「こんばんはーっ！ 今日だね、本編更新じゃないのー！！」

ロゼ「ここでは、ロクエンティア二十部くらいまでのお話を纏めつつ、世界観や用語などについて説明していくよ」

うさ子「うさにもわかるかな！？ ロゼ君ロゼ君、うさもわかるかな！？」

ロゼ「うさ脳でも大丈夫、ばっちり解説するよ」

うさ子「わあーい！！」

ロゼ「………………。えー、うさ脳で理解出来るかどうかは不明ですが、本編には関係ないので興味のない人はすっ飛ばしてください。それではスタート」

うさ子「おーっ！！」

くホクトルート第一章、UG編あらすじく

第六界層オケアノスの砂の海を移動する帝国の罪人輸送列車にて目覚めた主人公、ホクト。記憶を全て失っていたホクトだが、列車

から脱出しようとしている少年ロゼと共に行動を開始する。

列車は途中魔物の襲撃を受け、しかしホクトはロゼとの協力により状況を打開。以後、ホクトは砂の海豚と呼ばれる反帝国組織の一つに身を寄せる事になる。

そんなホクトは砂の海豚で団長の少年ロゼや魔剣使いの女リフル、ホクト同様記憶喪失に陥った謎の少女うさ子と出会う。彼らは第六界層に存在する砂上都市、カントイルで活動を開始する。

ギルド組合の一つとして小さな仕事をこなしながら資金を稼ぎ、活動を続ける砂の海豚。ホクトもそれに従いいくつか小さな仕事をこなしていたが、そこで暗殺者に追われる少女、シエルシと出会う。シエルシの目的は地獄と呼ばれ、世俗からかけ離れた場所である地下世界、アンダーグラウンドに向かう事であった。ホクトはシエルシを護衛し、UGを目指す事になる。

UGではシエルシ、そして砂の海豚各々の思惑が交錯し、結果として相反する立場が手を取り、地下世界への道行きを共にする事となった。

地下へと続く縦穴、シャフトを避け一向は砂上に浮かぶ古代文明の遺産、ユエナ遺跡を通過し地下空洞からUGへ向かう。途中魔物の妨害に遭い、しかし無事にUGへと到着した一行を待っていたのは結晶の樹林であった。

異質な世界と広大な空間、そしてここでは帝国が罪人を使い地下の遺跡を発掘していた。ホクトの予想外の行動によりなんとか帝国軍駐留基地に潜入した一行であったが、そこでシエルシは自らの母の死を知る事に。

シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……第四界層プリミドールに存在する月の国、ザルヴァトーレ。その姫君であるシエルシは単独、国には秘密でUGに囚われたという母親に会いに来ていたのである。

少女の目的は頓挫し、そしてその身にも危険が迫った時、ホクトが間一髪で駆けつける。ホクトはその強力な魔剣の力を解放し、シ

エルシを救うのであった。

（用語解説）

【界層世界ロクエンティア】

現実世界とは異なる空間に存在する、縦の世界。シャフトと呼ばれる巨大な縦穴と昇降機を中心に六つの界層が展開している。

界層それぞれが一つの世界とされ、それぞれが一つの名を持ち、一つの番号を与えられる。基本的に上の界層になればなるほど強い権力を持つとされている。

世界全体が第三階層であるヨツンヘイムに支配されている状況にあり、第三階層より上に何があるのかは誰も知らない。

虚空に浮かんだ塔のような外見をしており、塔以外には基本的に何も無い。それぞれの界層は緩やかに回転を続け、世界の輪廻を表している。

【第六界層オケアノス】

ロクエンティア第六の世界。最下層に存在する、砂の海だけが全てを飲み込んだ人が生きていく事が出来ない世界。

国家などが存在せず、人の住む町もない。全てを被う砂の海は魔物の巣窟であり、その砂そのものが超小型のナノマシンで砂に埋もれた物を分解し砂にする効力を持つ。

ナノマシンの海の中に存在している魔物は基本的に非常に丈夫、かつ凶暴。人間が住める大地も存在しない為、死の世界そのものである。

しかし、砂の海の上を移動する大型の船がやがていくつも寄り添

い、カンタイルという移動式の砂上都市を構築している。カンタイルだけがオケアノスに存在する都市であり、同時に全ての法から解き放たれた世界でもある。

カンタイルはギルド組合と呼ばれる、様々な職業の人間が寄り添う労働組合により稼動している。ギルドに所属する人間は基本的に政府の手を離れており、街全体の治安は決してよくない。

また、砂の海には無数の古代文明の遺跡があり、機械部品や高純度な魔石、現在は失われてしまった魔道具などが発掘されている。

【ギルド組合】

カンタイルに存在する総合的な労働組合。が、非常に意味合いは曖昧な部分がある。

元々は単純に反帝国思想の人間を取り纏める組織だったが、現在では各階層に秘密裏に支部が存在し、世界中の人々の依頼を受けこなしている。

砂の海豚もギルドに所属しているが、助け合いの精神でそれぞれの組織がそれぞれ足りない物を補っている様子。

反帝国思想の人間も存在しているが、帝国はそれを黙認している部分がある。帝国騎士団では処理しきれない魔物の処理などをギルドに頼っている面があり、秩序維持の為暗黙の了解としてギルドの活動を容認している。

が、行き過ぎた行動を取る反帝国思想の組織は徹底的に潰される為、ギルドも結局は帝国の顔色を伺いつつ活動している事になる。

【アンダーグラウンド】

本来六つしか存在しないとされる界層とは別に存在する、謎の間。通称UG。

第六界層オケアノスの地下に存在し、シャフトから向かう事が出来る。が、シャフト内とは考えられないほどの巨大さを誇り、さらに結晶樹林など異様な景色が広がっている。

UG内部は現在帝国により管理されており、罪人達が送られ地下の発掘作業に狩り出されている。地下では結晶に埋まった巨大な遺跡が存在しているが、それがなんなのかは謎。

【魔剣】

古来より世界に伝わる特殊術式の一つ。

肉体に刻んだ術式により体内魔力を顕在化させ、刃に似た武装を構築する。その一通りの術式を魔剣と総称するが、構築される武装の形は術式一つ一つに依存する為、必ずしも剣の形をしているとは限らない。

通常、魔剣は所有者から新たな所有者へと継承されるものであり、新たに生み出す事は出来ないとされてきた。その為魔剣使いは界層での戦争などで重宝されてきたが、現在では魔剣使いの数も減り、その殆どが帝国に管理されている為見る事は少なくなった。

現在でも一部反帝国主義者たちの間では魔剣使いの姿が確認されており、猛威を振るっている。帝国は魔剣使いを管理し、その力を利用する為に剣誓隊と呼ばれる特殊部隊を組織。魔剣使いたちを運用し、対魔剣使い用の切り札としている。

魔剣の理屈、その紋章の意味などは実は謎であり、いつからそれが存在するのか、何故存在するのか、誰にもわからない。

うさ子「ふわあ〜……。思うと色々あったねえ〜」

ロゼ「ホクト視点第一章ではUGへの突入、世界観の説明なんかが多くなって普通より長くなっちゃったんだよね」

うさ子「あ、やっぱりそうだったの？ うさもね、長いなあ〜って思ってたの」

ロゼ「ホクト視点はアクション多目バトル多目だからね。反帝国組織として、ホクトや僕たちがどのように立ち回るのかが見物だよ」

うさ子「でも、バトルしてばかりでわけわかんないような気がするねー」

ロゼ「そういえば、うさ子は実は魔剣使いだったりしたね」

うさ子「うん、そうだったみたいなのー」

ロゼ「続いて、昴ルートの解説になります」

うさ子「長いのー……」

〜昴ルート第一章 ククラカン編あらすじ〜

現実世界で暮らしていた女子大生、北条 昴。何らかのきっかけで異世界へと召喚されてしまった昴は、式神として自らの召喚者であるミュレイと共に暮らしていた。

ミュレイは第四界層プリミドルに存在する王国、ククラカンの姫だった。ミュレイは王家に伝わる秘術、式神の召喚により昴を召喚したが、何故昴が出てしまったのかは判らない。

元々現実世界で起きていた何かが原因のだが、昴は召喚前後の記憶が混乱しており、何故自分が召喚される事になったのか思い出

す事が出来ない。元の世界にも戻れず、昴は毎日ラクヨウの城でぼんやりと暮らしていた。

平和なただらとした日々。ミュレイとミュレイに仕える忍、ウサクに生活を保障され、何不自由なく暮らしていた昴。しかしある日、昴はミュレイに一振りの刀を授かる。

戦う手段を覚えようと修行を始める昴であったが、中々修行ははかどらない。一方ミュレイはククラカン国内で頻発する魔物襲撃を阻止する為、各地へ向かい魔剣を使って戦っていた。昴はそんなミュレイの姿を見てその誇り高い生き方に憧れを抱く。

しかしある日、魔物討伐後に敵対国家ザルヴァトーレの刺客と思しき魔剣使いの襲撃に遭い、その際ミュレイの肉体が子供になってしまうというイレギュラーが発生する。一行はミュレイの身体の異常を直す為、第四界層エル・ギルスへと向かう。

エル・ギルスに存在する遊楽都市ローティスの娼館、バテンカイトスの主であり錬金術師でもあるメリーベルの力を借り、ミュレイの身体を治す検査が始まった。昴は自分を庇って呪いを受けたミュレイの為、ミュレイを守る力を求める。

剣術修行を再開した昴であったが、ククラカンとザルヴァトーレの戦争が始まりつつあり、ミュレイ達は国に戻りそれを阻止せねばならない。慌ててターミナルに向かう昴たちだったが、またもや刺客の襲撃を受けてしまう。その時昴は突如戦う意思と力に目覚め、ミュレイの窮地を救うのであった……。

〈用語解説〉

【第四界層プリミッドール】

ロクエンティア第四の世界。第三界層ヨツンヘイム、ハロルド帝国の恩恵を最も受けた世界。

帝国に従う事により、それなりの地位と恩恵を賜っている。界層

全てがその恩恵に与れるわけではないが、全体的に生活レベルは高い水準にある。

太陽の国ククラカン、月の国ザルヴァトーレという二つの国家が丁度界層を二分する領土を持っており、二つの国は長い間戦争状態にあった。帝国による武力介入後、二国は一応の戦争終結を見る。

帝国への貢献度でその地位を確立したザルヴァトーレと、圧倒的武力でその地位を確立したククラカン、二つの国は元々界層の覇者を争い戦争を繰り返していた為、現在でも水面下では闘争が絶えない。

ククラカンはアジア風の文化が特徴で、ザルヴァトーレは西洋風（帝國的文化）なのが特徴。ククラカンの国土は山岳地帯や荒野が多く、ザルヴァトーレ国土は草原や平地が多い。

【第三階層ヨツンヘイム】

ロクエンティア第三の世界にして現在世界を支配するハロルド帝国のある世界。第四から第六までの界層と異なり、ヨツンヘイムにはある程度の身分が無ければ立ち入る事さえ許されていない。

西洋風の文化に機械文明が融合した極めて高度な文明を持ち、他の界層に存在するターミナルや列車をはじめとした様々な機械文明は全てヨツンヘイムにより授けられている物である。

最もその文明の恩恵を受けているザルヴァトーレ国では近年急速に機械文明化が進み、国力を蓄えつつある。

強力な武力を持つ事でも有名で、帝国騎士団を筆頭に自動機械兵等高度な機械文明により編み出された未来的武装、戦車、ロボットなども配備している。

また、それらをも凌ぐ最強の武装組織、通称“剣誓隊”を抱え、圧倒的武力により他界層を支配、長い間頂点に君臨し続けてきた。

皇帝ハロルドは滅多に人々の前に姿を見せず、その正体は長らく謎に包まれてきた。また、ヨツンヘイムより上の界層に向かう事は

禁忌とされ、第二界層より上を知る者はハロルド皇帝しかいない。

【第五界層エル・ギルス】

ロクエンティア第五の世界。第四界層プリミドルとは一つしか界層に差がないが、その生活は天と地ほどの差が存在する。

土地は平地が多く、自然も豊かだが魔物の脅威にほぼ野晒し状態であり、人々は魔物に怯え日々暮らしている。最もギルドがその勢力を拡大している界層でもあり、無法地帯と呼ぶに相応しい状況にある。

一部の都市はヨツン Heim やプリミドルに住む上流階級の人間に依存し、歓楽街を作ったり奴隷市場を作ったり、あくどい商売で生活費を稼いでいる。上流階級に取り付く手段がない人々は、非常に苦しい生活を強いられている。

国家という概念が存在せず、都市ごとに纏まって機能している。そのため都市ごとの格差が極端で紛争も絶えず、治安は悪い。

反帝国思想の人間が多いのも、貧民街などでのひどい暮らしからすれば当然の事と言える。しかし殆どの人間は現在の生活に甘んじており、帝国に逆らおうと考えるのはごく一部である。

【婚姻の儀】

皇帝ハロルドが各地から優秀な女性を集め、娶る儀式の事。数十年に一度ランダムに行われており、その法則性は不明。

ハロルドは各地から集めた女性に子を産ませ、それぞれの都市や国家の次の王としている。よって王族や権力者の中にはハロルドの遺伝子を受け継いでいる人物が非常に多く、シエルシヤミュレイもその一人である。

この婚姻の儀は帝国による支配をより強固にする為のものであると同時に、権力者達が帝国に取り入るチャンスでもある。よって権

力者達は優秀な女性を育成し、ハロルドの妻にすることに余念がない。

現在帝国から最も恩恵を受けているザルヴァトールは、この婚姻の儀でハロルドに最も気に入られている国でもある。ハロルドは妻に順位をつけるため、それがそのまま国家の権力に当て嵌まるのだが、先代女王が反帝国主義を掲げ反旗を翻してしまった為、ザルヴァトールの立場は現在微妙になっており、再び皇帝に忠誠を見せる為ザルヴァトールも色々と苦心しているようだ。

【剣誓隊】

キャバリエと呼ばれる魔剣使いのみで構成された特殊な帝国騎士団。

帝国騎士団とは別の指揮系統により動かされ、その構成員は全員魔剣使いである。元々魔剣が使える魔剣使いたちを帝国が各地からスカウトし、それ相応の地位を代価に部隊とし運用している。

その戦闘能力は数名の部隊でも国家騎士団を凌駕するほどとされ、少数精鋭であることで知られている。魔剣使いに対抗出来るのは魔剣使いだけということもあり、反帝国思想の魔剣使いを倒す為に借り出される事も。

全員が帝国騎士団階級でいうところの少佐以上であり、かなりのエリート部隊である。が、魔剣使いたちはあくが強く、軍隊としての品格は問われる所。

【プロジェクトエクスカリバー】

剣誓隊内部で発足した、魔剣使いを人為的に生み出す計画。

本来魔剣使いとは先代魔剣使いから継承した魔剣のみで、新たに増やす事は出来ないとされてきた。しかし近年ヨツンヘイムの高度な文明でその技術が解明されつつあり、コピータイプとは言え魔剣

が人為的に製造されつつある。

高い魔剣適性を持つ人間を迎え入れ、訓練学校で教育……。そして魔剣使いを生み出し、実戦に配備する。それがプロジェクトエクスカリバーの全様である。

現在その第一陣である数名が剣誓隊として実戦配備されており、エクスカリバーシリーズの成果が発揮されつつある。

なお、エクスカリバーシリーズはコピー魔剣であり、オリジナルは皇帝の持つ剣であるというのが実しやかに噂されている。

ロゼ「疲れた……」

うさ子「いっぱい、いっぱいだったね……」

ロゼ「視点や立場がごっちゃになるから、理解するのが大変だよね」

うさ子「うさもね、頭がこんがらがっちゃうの……。ねえねえ、どうしたら簡単に覚えられるかなあ？」

ロゼ「そうだな……。ホクトは反帝国勢力、そしてザルヴァトーレ寄り。昴は帝国勢力、そしてククラカン寄りだね」

うさ子「ほわ……。見事に敵対してるの……。これからどうなっちゃうのかなあ？」

ロゼ「うーん、それはどうだろうね。これからも二つの話が絡み合っつて、物語が進んでいく予定だから……。また暫く進んだら、こっつやって紹介するかもね」

うさ子「はい！ ロゼ先生ロゼ先生、ありがとーなのっ！！」

ロゼ「では、ロゼ先生の授業は今日はここまで……って、だから先生じゃないて」

シエルシ「出番が……」

ミュレイ「ないのじ……」

仲間（1）

戦いを止める事は出来なかった。アクティの目の前、二つの死神が互いの刃を振り翳し死を運ぶ者でさえその命を奪おうと唸りを上げる。

ターミナルの中央に浮かぶ時計台を背景に黒白は激突する。まるでそれは予定調和のように仕組まれた決闘。片や、獣を象ったかのような漆黒の魔剣。片や、祈りを結晶化させたかのような、純白の魔剣。どちらも同等、遙か化け物……。並の魔剣使いが踏み込める領域はとうに踏破している。

それは、黒き死神。魔剣を狩る者。数百の魔剣をたった一人で刈り取り続けてきた死の王である。剣誓隊百名を斬り殺し、魔物を斬り殺し、王でさえ神でさえその刃の前には恐れるに足らず。それは反逆者の理想。掲げられた血の凱歌。ホクトは歩む。その足取りは軽く、今までの彼の物とは比べ物にならないほど軽く、早く、そして前へ。攻撃的な、獰猛な、理性さえ吹き飛ばすような行軍である。

魔剣狩りは空に吼えた。それは、人間の声ではなかった。魔剣に紅い紋章が浮かび上がり、無数の瞳が同時に見開き獲物を捉えた。魔剣から伸びた黒い影は所有者である男の腕をも飲み込み、そこに結晶化して鎧を構築する。片腕を魔剣と同化させ、ホクトはそれを敵へと叩き込んだ。

それは、白き騎士。魔剣を狩り続ける悪魔を追いかけここまでやってきた狩人の狩人。白と黒が繰り出すのはこれが初手ではない。これまでも幾度となく邂逅を果たし、幾度となく刃を交え、幾度となく死線を乗り越えてきた。白き騎士は鞘を構え、それを黒き死に合わせ叩き込む。純白の波動は光を弾き、魔剣ガリユウをいとも容易くはじいてしまう。

瞬きの刹那、騎士は消滅する。ホクトは動揺しない。白騎士の能力について彼ほど詳しい者もないだろう。ガリユウは牙を向き、

ホクトの身体を漆黒で被う。影の盾は側面にいつの間にか存在していた白騎士の刃を弾き、爆ぜるような鳴き声と共に騎士ごと剣を弾いてしまう。

『……やはり、斬れないか』

判りきっていた事である。追跡してくる黒い影の腕、それはまるで蛇のように白騎士へと纏わりつく。騎士は太刀を片手に、そして逆手に構え、踊るようにその場で廻る。切っ先の軌跡をなぞるかのように、空間が停止する音が聞こえた。カチンと、歯車が噛みあうような、そんな音が世界に欺瞞をぶちまける。

黒き刃の群れは氷の結晶に包まれ、停止した。白騎士は上空へと跳躍し、ホクトはガリユウに引きずられるように駆け出し、壁を蹴って空を舞う。ネオンの光を背に二人は空中で刃を交え、落下しながら互いに体勢を入れ替え、連続で攻防を繰り広げた。

「白騎士……！ ってことは、やっぱりホクトはヴァンなんだ……！
！ まだ命を狙ってるって、どこまでしつこいんだか……！」

殆どそれは呻き声だった。ギリギリの緊張感の中、吐き出すように呟いた独り言は自分を鼓舞する為。今、ここでアクティがなさねばならない事はたった一つ。ホクトを援護し、白騎士を撃退する事に他ならない。

ライフルを構え、落下してくる影を狙う。しかし、引き金を引く指は鉛のように重かった。攻撃すれば白騎士はアクティを敵と見なし、攻撃を繰り出して来るだろう。一瞬先の未来を夢想し、アクティの背筋に悪寒が走る。白騎士は目で追えない程の高スピードでの移動を繰り出してくる。それは、ほぼ瞬間移動と同義だ。攻撃したが最後、次の瞬間アクティの首が吹っ飛んでいても全くおかしい事はない。むしろそれが自然なのだと感じる。

攻撃すれば殺される。アクティの身を迷いと怖じが支配していた。今、集中を欠いた状態で狙撃すればホクトに当たってしまう可能性も消し去りきれない。だが、またここで。少女が以前そうしたように、魔剣狩りの男を見捨てる事だけはあってはならない。そう、彼女は理解していた。

迷っている間に二つは落ちてくる。落下と同時に黒い炎が空を焦がす程に燃え上がり、次の刹那氷の結晶がその全てを被いつくした。狭い通路は既に闇の炎と白き氷河に被いつくされ、アクティが近づけるような領域ではなくなりつつあった。少女は諦め、銃を下ろす。諦めたわけではない。諦めたかったわけではない。だが、余りにも、目の前の戦いはレベルが違いすぎる。

『腕が落ちたか、魔剣狩り……。動きがぎこちないな』

「ち……ッ！」

着地した二人は刃を交えつつ、移動を繰り返していた。氷の結晶の上に飛び乗った白騎士へと大剣を叩き込み、氷が砕け舞い散る。次の瞬間白騎士は一瞬六人に増え、上下左右から同時にホクトへと襲い掛かった。黒い魔剣はそれに反応し、唸り声を上げ炎と腕を撒き散らす。気づけばガリユウはその姿を変え、剣は牙を持ち、そして腕を持ちつつあった。大剣はそのまま龍のような姿に変わり、ホクトの腕を侵食している。それは既に胴体に及び、ホクトは見るも恐ろしい異形に変わりつつあった。

『ガリユウがコントロール出来ないのか……？ 哀れ 堕ちたものだな、ヴァン』

「オオオオオオオオオオオッ……！」

応えたのはホクトだったか、ガリユウであったか……。交じり合う地の底から響き渡るような唸り声は氷を全て砕き、怪物と成り果てつつある魔剣はその巨大な瞳で白騎士を睨み、涎を垂らしながら口をパツクリと開いた。空中に魔方阵が浮かび上がり、黒き魔剣の喉奥より放たれたのは煉獄の炎であった。

漆黒の閃光は刹那、世界から音と光を一切合財奪いつくした。民家が遅れて連続で蒸発し、地鳴りと甲高い魔力により世界が焼け付く音が響き渡った。白騎士の一步真横、その大地は抉れ全てが消滅し、ガリユウによる攻撃の激しさを物語っている。が、惜しくも攻撃は命中しなかった。白騎士は太刀を鞘に収め、居合いの構えを取る。

「~~~~つ!? み、耳が……」

両耳を押さえ、倒れこむアクティ。戦いの激しさは加速し続け、さすがに剣誓隊や騎士団もそれに気づきつつあった。周囲を取り囲み、包囲網を完成させようとしている騎士たちがしかし戦闘に介入しないのは、単純にホクトの戦闘力が余りにも高すぎる所為であった。

今この場に割り込む事が出来る者など帝国騎士団の中には存在しなかった。魔剣狩りと呼ばれた化け物と、白騎士と呼ばれる化け物……。魔剣使いと呼ばれる者たちの中でも頂点に最も近い場所に君臨する二人が戦っているのだ。そこに割って入る事は決して容易な事ではない。

『これで全ての運命にケリをつける……。来い、魔剣狩り！』

居合いの構えから白騎士は一息に駆け出した。跳躍とも駆け足とも異なる、地面スレスレを滑空するかのような高速移動。ガリユウはそれに刃を合わせようと動き。しかし、二つの衝突は完了

されなかった。

真上、丁度頭上から落下してくるかのように影が一つ。それは真つ直ぐに白騎士へと向かい、襲い掛かった。刹那、白騎士の指がゆっくりと動いた。高速移動の最中、戦闘の最中だというのにそれはまるでスローモーシヨンのように誰もが認識する事が出来た。時が遠のいていく。そんな奇妙な感覚の後、音速をも超える驚異的スピードで反応し、繰り出された一撃必殺の居合い斬り！乱入者の影を両断し、白騎士は氷の余韻と共に停止する。

「ふ、ふわあああああつ!? うさの……うさの魔剣があゝ!?」

手元でくるりと回転させた魔剣を鞘に戻し、白騎士が振り返るその視線の先。乱入者であるうさ子は無事であった。手ごたえは確かにあった。しかし、白き魔剣が切り裂いたのはうさ子の持っていた魔剣だけであった。

すっぱりと、まるでバターでも斬るかのように魔剣を両断した必殺の一撃。当然、あれは万全の状態ではなかった。意図したもとのとは違うタイミング、不意打ちに反応して放っただけである。威力はそれと思えば繰り出したものの半分にも及ばなかっただろう。それでも強固な魔剣を両断し、転がすに十分すぎる威力を持っていたのだ。

「ま、魔剣は壊れてもまた出せるのっ!! うさは……うさは諦めないのっ!!」

両手に再び剣を構築し、うさ子は走り出した。連続で拳を繰り出し、白騎士へと襲い掛かる。しかしそれらの攻撃は鞘に収められた魔剣によって完全に防がれてしまっている。

「このこの、このっ!! うりやりやりや!! うりやーっ!!」

当たれなのーっ!！」

『……………ステラ』

「ほえ？ はうぐっ!？」

白騎士の呟いた言葉にうさ子は停止してしまう。理由は？
考える意識は持たなかった。鳩尾に鈍い痛み、それは白騎士が放った鞘に収められた刃が減り込んだという証だった。前のめりに倒れるうさ子の頭上し白騎士は袴ごとダイナミックに足を振り上げ、それをふらついたらうさ子の頭に叩き込む。

大地へと蹴落とされたうさ子は地面を砕き、頭部をレンガの山の中に陥没させ、ぐったりとした様子でピクリとも動かなくなってしまった。一瞬。仮にも魔剣使いであるうさ子が瞬殺である。白騎士が取り乱したのはほんの泡沫の間のみ、既に冷静さを取り戻しゆっくりと顔を挙げつつあった。

「うさ子……………ッ!？」

『邪魔が入ったか……………』

言葉に続き、彼方より魔法攻撃が飛来する。それを鞘で軽くないし、白騎士は背後を見据えた。直後、何の前触れも無く白騎士の身体が吹き飛び、続いて甲高い、弦楽器から奏でられるかのような音が鳴り響いた。

「ホクト！ うさ子!！」

走ってきたのはリフルであった。リフルは片手で陥没したうさ子の襟首を掴み、引っ張り上げる。それと同時にホクトの手を引き走

り出した。完成しかけた包囲網が閉じかけ、しかしそこにアクティによる援護が入る。ここに来て漸く動く事を可能としたアクティは逃走開始したリフルとホクトを援護し、共に走り始めた。

「逃げて！ 白騎士には勝てないよッ！！」

「そつらしいな……！ 一応、直撃させたはずだったが……！！」

忌々しげに呟くりフルの背後、吹き飛び壁に減り込んだ白騎士は既に復帰を果たしていた。並の魔剣使いならば即死の威力の攻撃だった。それが即頭部に直撃したというのに、傷一つ負っていない。リフルの判断は素早く、そして確実だった。勝ち目は見えない圧倒的不利な状況。出来る事と言えば、逃げる事くらいである。三人は走り、逃げていく。それを白騎士は追いかけてようとしかかった。魔剣を消し去り、マントに全身を包み込み遠ざかっていく影を見送る。そして溜息混じりに、小さくその名を呼ぶのであった。

『……………どうして君がここに……………？ 生きていたのか、ステラ……………』

仲間（１）

「リフル！ ホクトッ！！ うさ子も……………無事だった！？」

駆け寄ってきたのは口ゼであった。屋根の上を走り、詰まっていた木製のコンテナを一度踏み台に地上へと降りてくる。よろけながら仲間達に駆け寄り、その無事を確認し胸に手を当てほっと一息。

それから苛立った様子で腕を組み、背後を確認した。

「まさか、白騎士が出てくるとはね……。実物を見るのは僕も初めてだ」

「は、はうう……。ロゼ君ロゼ君、うさは無事じゃないの……。頭をこっちんこされたの……。いたい……。おでこがひりひりしてるの……。はううー！」

「お前は別にいいよ死ぬわけじゃあるまいし……。それよりホクト、それ……。大丈夫なの？」

ホクトの片腕は未だに魔剣ガリュウに侵食された状態にあった。

黒い腕を見つめ、ホクトは困ったように眉を潜める。いつになく真剣なその表情に仲間達は声をかけるタイミングを見失っていた。

先ほどからずっと、魔剣を解除しようと試みているのである。が、ホクトの意思に反してガリュウは侵食を止め様としない。何とか腕までの侵食で阻止しているが、ガリュウの暴走状態は未だに続いている。レンガの地面に剣を突き刺し、腕を組んで黙り込んでいる。うさ子は心配そうに耳をぱたぱたと上下させ、ホクトに歩み寄った。

「ホクト君、大丈夫……。？ 白騎士さんにボコボコにされてたけど……。それに、魔剣が……」

「大丈夫だ……。どうやら、俺自身がまだ魔剣に認められてないっただけでな……。それより、今の俺にはあんまり近づくな。ガリュウが何をするか俺にも判らない」

突き放すようにそう呟き、ホクトはうさ子をにらみつけた。鋭い視線にたじろぎ、すっかりへこたれてしまった耳を指先で弄りなが

らうさ子は退却する。

しかしそれに逆らい、リフルはホクトの侵食された腕をがっちり
と掴み上げた。二人は至近距離でにらみ合い、リフルはその異常と
しか言い様のない状態に思わず我が目を疑った。魔剣が人間を侵食
する事など本来在り得ない事である。魔剣はただ、体内魔力を外
部に武装として顕在化させただけの物であり、肉体に影響を及ぼす
うな事はないはずだった。

「……………貴様……………」

「リフルちゃん、あんまりホクト君をいじめないであげて！ うさ
からお願いなの〜っ！！」

「……………」

無言でリフルは腕を放し、ホクトは魔剣を地面から引き抜いて肩
にかけた。そんなホクトの様子に一瞬思索し、それからリフルは振
り返りうさ子の肩を叩く。

「……………ホクトは少し休んでおけ。その魔剣、使いすぎなければ落ち
着くだろう。ロゼ、バックアップを頼みます。うさ子と私で血路を
開く」

「りょうかいつ！！ ホクト君、もう少し頑張ってね！ うさがね、
ホクト君をぜーったい助けてあげるからねっ！！」

「いや、別に俺も普通に戦えるが……………」

「止めておけ。無理をすればまた魔剣が暴走する……………。いい迷惑だ」

リフルはその手の中に魔剣グラシアを構築し、装備する。うさ子とリフルが前に出ると、背後から騎士たちが追撃してくるのが見えた。うさ子がシャドーボクシングを繰り返し、やる気を見せる中アクティは疲れた様子でライフルを肩に乗せ、ホクトの腕を見つめていた。

「そつえば、あんた誰だ……？」

ロゼの質問にアクティは答えなかった。白騎士の存在とホクトの魔剣の暴走……。考えられる可能性はいくつもある。アクティはライフルを構え、それからホクトに歩み寄り耳打ちした。

「……ホクト、白騎士の事覚えてるの？」

「さあな」

「……。ねえ、皆聞いて！　ボクが安全な場所に誘導するから、敵はお願いしていいかな！？」

「だから、あんたなんなんだよ……。僕たちにとって信用出来る人間なのか？」

「そんなのはわかんないけど、今は走らなきゃでしょ？　ホクトがどうなってもいいの？」

「うさはね、ホクト君のお友達は信じてもいいと思うの。うさはね、ホクト君のお友達なの。だからね、ホクト君のお友達は、うさのお友達なの」

「……。しょうがない、どっちにしろ追われている状況は同じ

なんだし……。リフル、うさ子！ 追撃は任せる！ 早く案内してくれ！」

三人は同時に頷き、アクティはホクトの手を引いて走り出した。ロゼとアクティが先に進んでいくのを見てリフルは魔剣を構えて背後へと振り返る。

「うさ子、無理はしなくていいぞ」

「うさはホクト君とロゼ君を守るのーっ！ うさだって、砂のくじらの一員なのー！」

「……………海豚だ」

迫ってくる帝国騎士たちへと二人が同時に襲い掛かり、その第一陣を蹴散らしていく。うさ子は騎士を鎧ごと貫くように拳を打ち込み、リフルは両手の形の異なる剣を巧みに操り騎士を切り払っている。ある程度第一陣を蹴散らした後、うさ子はリフルの手を引いて猛スピードで走り出す。アクティたちに追いつくのはうさ子にとっては何の問題もない事であった。

殆どうさ子に引つ張られる形で追いつくりフルであったが、アクティたちの行く道を塞ぐように騎士たちが展開している事に気づき、両足を踏ん張りリフルは停止。直進通路を駆け抜けたうさ子の勢いそのままに手を繋いだまま己を軸として回転し、うさ子を放り投げる。投げられたうさ子はくるくると回転しながらアクティたちを追い抜き、道を塞いでいた騎士たちをボーリングのピンのように吹っ飛ばした。

「リ、リフルちゃんなんで投げるの……………」

「……………すまん」

「全然謝ってる気配がないの……………」

「見つけました、魔剣狩りッ!!」

声は上から聞こえてきた。民家の上を走り、空中で魔剣を構築したエレット少佐がホクト目掛けて襲い掛かってくる。ホクトがガリユウを使うより前にロゼが前に出て片手をエレット少佐へと翳した。ロゼの周囲に魔方陣が浮かび上がり、近づくエレット目掛けて炎の弾丸が射出される。エクスカリバー清明でそれを切り払ったエレットはそのままロゼに襲い掛かるが、斬撃はアクティのライフルで阻止されてしまった。

「お前は……………ターミナルで会ったキャバクラねーちゃん!」

「違いますキャバリエですッ!! ふざけた事を……………! 貴方はここで滅ぶべきです、魔剣狩り!!」

アクティを押し切り、ホクトへと襲い掛かるエレット。しかしその刃はうさ子によって阻止されていた。片手で刃を掴んで止めたうさ子はそのまま身体を捻り、蹴りを放つ。それはエレットの胴体部の鎧を粉々にし、更に吹き飛ばして民家へと叩きつけるに十分な威力である。エレットはエクスカリバーを片手に身を起し、血を吐きながらうさ子をにらみつけた。

「そんな……………。エクスカリバーが……………そんなに簡単に……………?」

「白騎士さんに比べたらよわよわなの……………!! うさは、ホクト君を守るの! だから、手加減はしてあげないのっ!!」

倒れたアクティを口ゼが助け起し、ホクトと共にその場を去っていく。それを見送りうさ子は拳を構え、エレットを迎え撃つ姿勢を取った。リフルは騎士を蹴散らしつつうさ子の背後を通り抜け、口ゼとアクティを追いかけていく。

「うさ子、時間稼ぎを頼めるか!？」

「大丈夫だよ! うさの速さならすぐ追いつけるからっ!! リフルちゃんは、先に行ってて〜!!」

立ち上がったエレットがマントを脱ぎ去り、エクスカリバー清明を構える。うさ子は迫ってくる騎士達を横目に後退するようにしてリフルたちに続きつつ、にらみ合いを続ける。

「貴方も反帝国勢力の魔剣使いですか……!？」

「うさは、うさのお友達を助ける為にここにいるの! 反帝国とかそういうのは関係ないのっ!!」

「今更そんな理屈が通りますか!？ 貴方達にしている事は、この世界に不安を撒き散らす行為なんです! してはいけないんですよ、そういうことはっ!!」

「う、うう……。難しい事を言われると、うさはわかんないよう……。でも、大事な事はわかるよ。大事なのは、本当に大事な事は! だから、うさは戦うの! お友達を、家族を守る為に!!」

「戯言を!! 帝国騎士団“キャバリエ剣誓隊”の名の元に貴方を斬殺します

!! 覚悟ッ!!!!!!」

走り出したエレットはエクスカリバーを力任せにうさ子へと叩き込む。清明は元々戦闘能力において優れた剣ではなく、しかしその元となった魔剣はパワータイプである。エクスカリバーシリーズは全て平均的に高い戦闘力を持っている。

連続で繰り出される両手剣をうさ子は両手の拳でいなし、後退していく。やるべき事は時間稼ぎであり、エレットを倒す事ではない。うさ子は攻撃を防ぎつつ後退する事を最優先とし、エレットに反撃しようとはしなかった。

「エレット君、大丈夫かね？」

「シグマール隊長！！ 魔剣狩りたちは奥に！！」

「ありやま……。あのねえ、あんまり深追いしちゃ駄目ですよ。あれは白騎士に任せとくのが得策なんだから……」

「シグマール隊長……大佐っ！！ はあはあ、手伝って下さい、観てないでっ！！」

「いやあ……おじさんはもう疲れちゃってね。エレット君、もう白騎士に任せて帰ったほうがいいよ」

「そついうわけには……きやあっ!？」

うさ子が繰り出した足払いを受け、エレットは盛大に転倒する。それを観てうさ子は一気に走り出し、一瞬で視界から遠ざかっていく。早すぎる移動速度にエレットが目を丸くしている傍ら、シグマールは腕を組み髭を弄りながら考え込んでいた。

「さっきの魔剣使い……。ありゃ、どういふ事なんだい？」

「は？ どういふ事と申しますと……？」

「だってありゃ、白騎士の……。いや、まあいいんだけどね。おじさんの思い違いかもしれないし」

「……………」

遠ざかっていく影を見送り、それから立ち上がったエレットは両手でエクスカリバー清明を構え目を閉じた。清明が持つ能力の中に自分が一度戦った相手はその能力を後に把握する事が出来る、というものがある。それが清明のような魔剣が前線に送り込まれる最大の目的でもあるのだ。

戦闘力は高くない清明だったが、その能力は量産型には非常に強力だった。刃を交えさえすれば、その能力、魔力数値などを正確に把握する事が可能であり、だからこそ力任せにうさ子へと切りかかっていたのである。

そうして意識を集中し、エレットは驚愕した。うさ子の持つ魔剣の能力、そしてその魔力数値……。頭在数値は決して高くはなかった。しかし、体内に宿しているその魔力数値は。

「どうしたね、エレット君？」

「……………。清明は、未完成な魔剣だったようです……。私も、少し自惚れていました」

「へ？ どうしたね、急に……………」

「清明が壊れてるんです！ こんな魔力数値在り得ない……。だっ

て、十倍ですよ？ 馬鹿馬鹿しすぎます」

呆れたようにそう漏らし、とぼとぼ歩いていくエレット。その周囲で騎士たちが動き出し、エレットとシグマールを残しうさ子たちの追跡に向かう。そうして誰も居なくなり、シグマールはこっそりエレットに訊ねた。

「何が十倍だったんだい？ また、君の十倍かね？ 魔剣使いみたいに」

「違いますよ……。その十倍です」

「うん？」

「だから、あの女の子……。内在魔力数値が、魔剣狩りの十倍です」

「……………それ、壊れてるよね？」

「ですよね……………」

二人は同時に肩を落とし、歩き出した。ローティスの夜はまだ長く、夜明けは遠い。うさ子は猛スピードで街中を走りぬけながら、追撃してくる騎士達へと視線を向け、魔剣を備えた拳を構えるのだった。

仲間（2）

「ここまでくれば、もう大丈夫だよ……。相手が帝国でも、ここに気づく事は出来ないから」

「大丈夫って……。ここ、ただの娼館じゃないか」

周囲を見渡し、ロゼは半ば呆れるようにそう呟いた。ローティスの歓楽街にあるバテンカイトスの館の中、暖色系に包み込まれた華やかなエントランスで一行は足を止めていた。アクティが案内したのがここだったのだからここに来るのは当然のだが、何も聞かずに信じてついてきたロゼはここに来てアクティを疑わしく感じていた。

猜疑心丸出しの目でアクティを見つめるロゼだったが、視線の先でアクティは肩で息をして苦しんでいるホクトを気遣い、傍らでその表情を覗き込んでいた。こうしてみると、ホクトとアクティはまるで家族のようである。そうした意味においては、アクティは信用出来るのかもしれない。

ロゼにとってそれよりも驚きだったのは、あの常に飄々とした様子のホクトが苦しそうにしている事であった。ロゼは実際にホクトが圧倒的な力を持つ魔剣使いである事を知っては居たが、ガリユウの能力や性質に明るいわけではない。実際、ホクトは仲間にも話そうとはしていなかったのだから。

「ロゼ君、みんなっ！！大丈夫だったっ！？」

「うそっ子……。もうまいてきたのか？」

「うん、なんとか……。ふう、うさも頑張ったからちょっとだけ疲れちゃったの……。汗かいちゃった……。」

うさを外から引つ張り込んできたリフルは周囲に人影がない事を確認し、扉を閉めて中に入ってくる。リフルが腕を組み、ロゼと同じくアクティを見つめる。が、リフルが言葉を発するより早く螺旋階段を下りてくる人影があった。

ダークスーツに身を包んだこの館の主であり、錬金術師であるメリーベルである。メリーベルはアクティの傍により、それからホクトの腕を見て眉を潜めた。

「あ……。メリーベル!!! ごめん、少し匿って!!!」

「それは構わないけど……。これ、何? どういう事なの、ヴァン?」

「だから、俺は……。ヴァンじゃなくて……。ホクト君、だ……」

「事情は後で話すから! 白騎士に追われているの!」

「……。先に地下に。お仲間も一緒に」

「ありがとつ!! ほら、何突っ立ってるんだよ! 早く走って! こっちこっち!」

アクティとうさがホクトを支えながら地下へ向かい、ロゼも階段を駆け下りていく。そんな中、一人遅れて残ったリフルはメリーベルへと歩み寄り、ふと優しく笑顔を浮かべた。

「……お久しぶりです、メリーベル」

「久しぶり。元気そうで何より」

「貴方は相変わらずですね……。まさかこうしてまた貴方の世話になるとは思いもせませんでした。いえ、貴方以外にこの街で帝国に逆らえる人間もいないのでしょうか……」

メリーベルは腕を組んだまま静かに目を閉じ、小首をかしげた。ゆっくりと開く睫の長いその瞼から除く瞳は妖艶で、その微笑は言葉が無くとも訴えるものがあつた。リフルは一礼し、そのままロゼたちの後を追い走り出す。

地下には物資を保管する倉庫があり、アクティはその更に奥へと進んでいく。それから木箱をいくつか退かし、床に掠れて浮かんでいる魔法陣に手を合わせ、合言葉を唱えた。

「へこたれへこたれ、へこたれ勇者！」

合言葉に反応し、隠された術式が発動する。地下へと続く転送魔法陣が発動し、アクティたちはそれを利用して更に隠された奥地へと進んでいく。眩い光の転移の後、目を開いたロゼたちの前に現れたのは地下に存在する巨大な空間であつた。

まるでホテルのフロントのようなエリアには様々な人が行き交い、その人の多さにロゼは完全に思考が停止してしまつていた。啞然とするロゼの背後、遅れてやってきたリフルが肩を叩く。

「大丈夫ですか、ロゼ？」

「あ……。ありえないだろ、なんだこの馬鹿広い空間はっ!? 完全に術式による限度を超えてるぞッ!? つーかこんな広さの場所この町のどこに……ッ!？」

「……キミさあ、なんにもしらないんだね」

馬鹿にするような、呆れたような口調でアクティが漏らす。ロゼは眉を吊り上げ、歪んだ笑みを浮かべながら前に出た。

「だったらあなたは知ってるっていつのかよ！」

「知ってるもなにも……。ここに住んでるんだけど。キミたちホントに反帝国勢力？ ギルドに参加してる？」

「してるに決まってるだろ!？」

「あつそ。じゃ〜信用ないんだね」

「なにいいいいっ!? あんたなあ、さっきから言わせておけばズケズケと……ッ!！」

「落ち着いてくださいロゼ……」

いきり立つロゼを羽交い絞めにしつつリフルは冷や汗を流す。こんな事をしている場合ではないのだが、ここまで来てしまえば安全なのも事実である。とりあえずホクトを何とかしななければならないと思うのだが、既にロゼはそれをすっかり失念している様子だった。

「ここは、反帝国勢力が拠点としている架空のエリア……。通称、バテンカイトス“鯨の腹”だよ。ボクは、ここに所属してる反帝国ギルド、“サーペントヴァイト”の一人」

「バテン……カイトス……? き、聞いた事ないぞ……」

思い悩むロゼの背後、リフルは前に出てバテンカイトスのエントランスを眺めていた。アクティはホクトを奥へと連れて行き、ロゼも仕方が無く後に続く事にした。

エントランスから伸びている無数のエレベータにて移動し、気づけば既にサーペントヴァイトの本部である。そこは砂の海豚の何倍も巨大であり、豪勢であり、設備も充実した文字通りの基地であった。その規模の違いにロゼは眼鏡を光で曇らせたまま完全に思考停止している。

「ようこそ、サーペントヴァイト本部へ。それより早くホクトを部屋に運びたいから、手伝ってくれる?」

「………………。リフル、手伝ってやれ…………。」

「は、はい…………。うさ子、左を持ってくれ」

「うさ、ずっと左持ってるの…………。ホクト君、お、重いのおおおお…………。」

会話に参加してこないと思っていたらずっとうさ子はホクトを支え、踏ん張っていた様子である。顔が真っ赤になり、うさ子は目を見開いて泣き出しそうになっていた。ホクトは既に意識が途切れそうなのか、うつらうつらした様子で立っているのもままならない。

リフルが右側を支えると、一気にホクトの身体が浮かびうさ子はそれに耐え切れず転びそうになってしまう。小柄なアクティでは背の高いホクトは支えられないので、仕方が無く道を案内する事くらいしか出来なかった。

そうして進んでいく仲間達を見送り、ロゼは一人で前髪を掻き揚げ忌々しげに床を見つめていた。が、実際に見つめていたのは当た

り前だが床ではない。思い起こす、過去の記憶を睨んでいたのである。

少年はゆっくりと、思い足取りで仲間たちを追いかけ始めた。バテンカイトスの灯りは、夜も昼も関係なく。過去も未来も関係なく。ただ、少年の行く先を照らし続けていた。

仲間（２）

「ヴァン……じゃなかった、ホクト……大丈夫かな……」

アクティの部屋へと運び込まれたホクトは、そのままベッドに寝かされている。今は遅れてやってきたメリーベルが容態を見ている所だったが、その間邪魔だからと他のメンバーは追い出されてしまったのである。

廊下に出ているアクティは落ち着かないのか、扉の前を左右にウロウロし続けている。リフルは壁に背を預け、目を瞑り休んでいる様子だった。うさ子はアクティが左右に動き、ツインテールが揺れるのを首を振って楽しげに見つめ、ロゼはそんな仲間達とは少し離れた場所でズボンのポケットに両手をつまみぼんやりとしていた。

「ねえねえアクティちゃん？ ああ、メリーベルさんっていうのは、お医者さんなの？」

「……医者じゃないけど、医術にも詳しいんだって。錬金術は、何でも出来ないと駄目だって言ってたし……。なんか、色々研究して

るみたい」

「そうなんだ〜！　すごい人なんだねえ〜！」

「メリーベルはすごいよ。バテンカイトスもあの人が作ったらしいし……。錬金術師って名乗ってるけど、帝国も手出しが出来ないくらい物凄い人らしいよ」

「すごい、すごいね〜！」

「とりあえず、ボクは無事に戻ってきた事……。それから、街に居た組織がいくつか潰されちゃったことをボスに報告に行かなきゃ。皆も一緒に来て。状況を説明しなきゃいけないから」

「そうだな……。付き合おう。ロゼ、行きましよう」

「ん？　ああ……」

いつになくぼんやりした様子でロゼは頷いて歩き出した。シャキっとしないロゼを見つめ、うさ子は目をぱちくりさせる。

「リフルちゃんリフルちゃん、ロゼ君はどうしてへこたれさんなのかな〜？」

「大方、バテンカイトスの巨大さにビビっちゃったんでしょ〜？　田舎の貧弱組織の構成員みたいだし」

「いや、ロゼは……」

「それより早くしてよ！　報告急がなきゃいけないんだから！　ヴ

アンが戻ってきたって聞いたら、きつと皆喜ぶからっ!！」

リフルとうさ子の手を引いてアクティは走り出した。そうして仲間達が移動を開始する頃、部屋の中でホクトはベッドの上から天井を見つめていた。上半身裸になったホクトの腕をメリーベルは眼鏡をかけ、白衣姿で調べている。

「……………いつから?」

「ん……………?」

「いつから我慢してたの? これ、相当辛かったはず」

「……………さて、どうかね」

「信じていないのね……………仲間達を」

メリーベルはホクトの腕に手を翳し、術式を発動する。ホクトは病に侵されたわけでも負傷しているわけでもない。ただ魔剣という術式の暴走により衰弱しているだけなのである。医術にも長けているメリーベルではあったが、最も得意とする分野は術式の開発、改良、そしてメンテナンスである。幸か不幸か、ガリユウを黙らせるのに彼女以上の適任はいない。

術式調整の間、ホクトは疲れた様子で痛みを堪えていた。メリーベルの言うとおり、痛み出すのはこれが初めてではない。魔剣を使えば使うほど、ホクトの身体は魔剣に侵食されていく。そしてそれは解除状態でもホクトの身体を蝕み、痛覚は掻き乱され意識が朦朧とするほどの激痛にまで発展してしまったのである。

徐々に痛みが和らぎ、久方ぶりに心が安らいで行くのを感じた。どうしようもないと思っていた痛みが消え去り、ホクトは冷や汗を

拭いメリーベルへと目を向けた。

「あんたすごいんだな。まさか、俺以外の人間にガリュウがメンテ出来るとは思わなかったよ」

「何言ってるんだか……。ガリュウのメンテナンスは、いつも私がしていたでしょう？」

「悪いが記憶喪失で……。あんたの事も、覚えてない」

「……。そう。兎に角、すぐに良くなるわ」

「そりゃあ、ありがたいねえ……。こんな美人の先生に治してもらえるなら、痛みを堪えた甲斐があったってものだ。またぶつ倒れようかね」

「……。少し、変わったわねヴァン。行方不明になったって聞いて心配はしてたけど、記憶喪失になってるとはね……。はい、大體終わり。無理はしないで、少し休んでいれば良くなるわ」

身体を起し、腕を見つめるホクト。身体から神経を剥離されるかのようなひどい痛みは消え去り、体が以前より数倍自由に動く気がした。拳を何度か握り締め、それからシャツを着て立ち上がった。

「悪いな、助かった」

「じゃ、どこに行くの……？ まさか、白騎士のところに戻るつもり？」

「……………」

「記憶喪失なのに、覚えてるのね。ミラの事だけは」

「ミラ……。ミラ、か。いや、覚えてるわけじゃない。ただ……。その名前だけふつと思いついただけだ」

「……。そう。兎に角、今は休んでいなさい。大人しくしないなら、力ずくでも寝かせるわ」

肩を落とし、ホクトは仕方なくベッドに座り込んだ。しかし気持ちは落ち着く気配がない。遭遇した白騎士。まるで自分の意思とは関係なく口から飛び出たミラという名前。何故か、白騎士にもう一度会わねばならないという強い焦燥感に駆られていた。戻ればどうなるのかは判っている。ホクトは見た目以上に冷静かつ計算高い男であり、命を投げ捨てるような行いをするような馬鹿ではない。だが、今はその馬鹿をやらねばならないような、そんな気がしていた。

メリーベルは白衣のポケットに手を突っ込んだまま、眼鏡越しにホクトを見下ろしている。彼女がホクトに向ける感情はヴァンと呼ばれた人間へ向けるべきものだが、それは彼女にとっては同じ事だった。アクティがヴァンと同じようにホクトを扱うのも、仕方のない事だと言えた。なぜならば彼は、彼以外の人間にとってはヴァンそのものなのだから。

「あなたは、俺の知り合いだったんだろ？ ミラってヤツの事を教えてくれないか？」

「……はあ。まさか、忘れるなんてね」

「もったいぶるねえ……。別にあんた以外から聞いたって構わな

いんだぜ。どうせ、アクティが知ってるだろうしな」

「別に、教えないとは言っていない。でも、忘れるのは可愛そう。ミラは……貴方の恋人だったんだから」

ホクトの隣に腰掛け、眼鏡を外してメリーベルはホクトの足に手を置いた。落ち着かない様子のホクトだったが、片手を額に当て俯いてしまう。メリーベルの言葉は少なかったが、ホクトの気持ちを思いやっているのは確かに感じる事が出来たから。

「ミラ……。ミラ・ヨシノ。彼女は、ククラカンの第二王女だったわ。とても気が弱くて、でも優しくて真っ直ぐな子だった。帝国に支配されたこの世界を変えたいと、そういつも子供みたいに無邪気に語っていたわ」

「……………理想的すぎるな。帝国を壊す事は生半可な事じゃないぜ？」

「貴方はいつもそう言ってミラを泣かせてた……。今までどうしていたの？ 仲間にも連絡しないで……。アクティ、いつも貴方の事探してたのよ」

「だから、記憶喪失だったんだからしょうがねえだろ……。しかし、俺はモテモテだな。まあアクティは小さすぎて攻略対象外だが……。あんたはばっちり攻略したいけどな」

メリーベルの手を握り締め、抱き寄せるホクト。しかしメリーベルは呆れた様子でその手を払ってしまう。当然ホクトもこのまま色っぽい方向には流れると思っではいなかった。ただ、疲れを紛らす為の冗談である。

「あまり、嘘をつきすぎない方がいいわ」

突然のメリーベルの言葉にホクトは眉を潜めた。ベッドに横たわり、目を瞑る。話を聞いているのか、聞いていないのか……。それは聞きたくないというホクトの意思表示とも取れた。しかしメリーベルは話を続けた。

「もっと、仲間を信じてあげて。貴方を想い、貴方と共にあるうとする人を」

「………………。仲間は見捨てないさ。俺はもう、仲間をやらせない」

「そうやってずっと、永遠に仲間を騙し続けていくつもり？ そんな虚勢はいつまでも持たないわ。貴方は自分の矛盾にいつか耐え切れなくなる。誰にも理解されない、茨の道よ」

「自分が選んで歩いてきた道は全て正しかったと信じてる。俺は、俺が想ったとおりにしかない……。メリーベル、あんたが俺のなんなのかは知らないが、説教もらう歳でもないんだよ」

「あら、子供の癖によく言う。でも……。そうね。人の事は、言えないか」

肩をすくめ、メリーベルは退室してしまう。ホクトはアクティ用の若干小さいベッドの上、溜息混じりに天井を見上げた。勿論自分でもわかっている。嘘をつき続ける事はきつと出来ない。だが、それをもしも貫き通せたなら……。それは少なくとも世界にとっての真実になる。ならばそれで別に構わない。たとえ、誰一人として理解してくれなかったとしても。自分が望み、選んだ道ならば。

「ボス！ ボースーツ！！ ヴァンが！ ヴァンが戻ってきたよ！
」

バテンカイトス内、サーペントヴァイト本部の最奥地にある団長室に飛び込み、アクティは開口一番そう叫んだ。執務机の前で紅茶を入れていた団長、ブラッドは振り返り、アクティを見つめて目を丸くしていた。

「ちょっと、入る時はノックしてって言うてるじゃない……。って
いうか、ヴァンが戻ってきたって、貴方何しに外に出たのよ？ 偵
察に行ったんじゃないかったかしら？」

という口調で喋るブラッドであったが、その外見は長身の男である。白いスーツに身を包み、ピンクの長髪を指先でかきあげながらジト目でアクティを見下ろしている。その背後、客人が居る事に気づいて紅茶を机に置き、アクティの頭を小突いた。

「やだわもう、お客さんがいるなら早く言ってよね〜！ サーペン
トヴァイトにいらっしやい……。って、アラアーツ！？ リフルじ
やない、どうしたのよ！？」

「お久しぶりです、ブラッド」

「やだやだ、やだもおー！！ 超懐かしいわ〜〜〜ツ！！！！
んーもう、相変わらず無愛想な顔しちゃって……。もっと女の子は
ね、ニコニコしてなきや駄目よ〜！！」

「ふあい……。あの、ほつぺたをひっぱりあげるのは、やめふえくれまふえん……。ふあ」

リフルの顔をもみくちやにしながら腰をくねらせるブラッド。その奇妙な様子にうさ子も一緒になってリフルの顔をぐにぐにし始めるが、リフルは無言でうさ子の耳を鷲掴みにしてそれを阻止した。

「あーっ!! 耳はやなのーっ!! あああーっ!! あー!ー!ー
っ!!」

「それで、どうしたのかしら? なんでまた、アクティと一緒に?」

「ボス、知り合いだったの?」

「ボスじゃなくてお姉様とお呼びなさい! 彼女とは、古い知り合いなのよ。アクティ紅茶を入れて頂戴。それからクッキー出していいわよ」

「クッキー? やたっ ボスのお菓子美味しいんだもん」

アクティは慌ててもてなしの用意を始めるが、うさ子は床に転がってしくしくと泣き続けていた。それを無視してリフルから手を離れたブラッドは改めてリフルを上から下までじっくりと眺める。

「随分女らしくなっちゃったわねえ〜! もう結婚したの?」

「……。いえ、私は……」

「もう二十六くらいじゃなかったっけ? も〜婚期逃すわよっ!
! もう少し男漁りに必死にならなきゃダメよっ!!」

「……………お、男漁り……………」

顔を赤らめ沈黙するリフルだったが、何を想像したのかは謎である。とりあえず一同はソファの上に座り、アクティが出してくれた紅茶とお菓子を囲む事になった。

「それで、こっちの可愛い坊やは？　まさか、リフル貴方の子供とかじゃないわよね？」

「違いますよ……………。彼は、砂の海豚の団長、ロゼ・ヴァンシュタール様です」

「ロゼ・ヴァンシュタール…………？　そう、そういうこと…………。はじめまして、ロゼ。私はブラッド…………この組織のリーダーよ。貴方のお父様、先代砂の海豚団長とは懇意にさせてもらっていたわ」

「父上と…………？」

「言われてみると、目元とかがそっくりねえ…………。お父様の不幸は聞いているわ。力になってあげられなくてごめんなさい。こっちも組織の立ち上げやら何やらで、色々と立て込んでた時期だったから」

「いや、それは…………。それより、父と知り合いだったってというのは…………？」

それに、リフルが親しげにしているのも気になった。ロゼは物心ついた時から一日も欠かさずリフルと共に行動してきたつもりだった。しかし、そのリフルが普段自分には見せないような一面を見せ

ている……それがやけに引つかかっていた。

「私も、元々は砂の海豚でお世話になったのよ。色々あって今はこうして組織を取り纏めてるけど、組織の立ち上げにだってお父様の力を随分と借りた物よ。その恩返しってわけじゃないけど、貴方達の面倒はいくらでも見るからゆっくりしていきなさい」

「……………」

ロゼは何も言わず、小さく頷くだけだった。それから少しの間お茶会が続いたが、終始ロゼは考え事をしているようで無言だった。疲れたので先に部屋に行きたいと言い出したので、ロゼは組織の人間が部屋へと案内する事になり、リフルの付き添いも断ってしまった。

「ちょっと気難しい子みたいね」

「……………私が、育て方を間違えてしまったんでしょうか」

「あら、そんな事はないでしょ？ それより、貴方がずっと一人身である理由がわかったわ。貴方、あの子の母親にでもなったつもり？ 二十六のくせに」

「そういつつもりは……。ただ、私は先代にロゼを任せましたから……………」

「そうやって自分に素直になれないと、辛くなるのは貴方の方よ……？ 兎に角、ゆっくり休みなさい。あの子に本当のこと、話してないんでしょ？ ちゃんと休んで考えて、そして気持ちが落ち着いたら教えてあげなさい」

「しかし……」

「強制はしないわ。でも、嘘をついている限り仲間を本当の意味で守る事は出来ないの。貴方も本心では理解しているはずよ……？」

リフルは何も言い返すことが出来なかった。彼女とて、その嘘の重さは理解している。だがすべてはロゼを守る為だと思い、だからこそ騙し続けてきたのだ。

何故砂の海豚はバテンカイトスを知らなかったのか。何故、小さな活動しかしてこなかったのか……。リフルは唇を噛み締め、珍しく不安そうな様子だった。ブラッドはそんなリフルの頭を撫で、優しく微笑む。

「困ったら相談に来なさい……。いつでも待ってるわ」

「……ありがとう、ブラッド」

「まあそれはそれとして、反乱作戦はバテンカイトス連合の主導で行われるわ。作戦会議までまだ日があるから、少しリラククスして休みなさい。久しぶりでしょう？ バテンカイトスは」

「ええ。ロゼと見て周りたいたいと思っています。あの子、珍しい物とか最新のテクノロジーとかが好きなんです。きっと、喜んでくれる」

「………………。なるほどねえ。まあ、色々厄介だわ」

きよとんとするリフルはまだ気づいていない。自分がロゼの話をしている時、まるで少女のように華奢な笑顔を浮かべている事に。ブラッドと別れ、ロゼの様子を見に行ったりリフル。残されたのはア

クティとうさ子だけだったが、二人は一生懸命クツキーを口に放り込み、幸せそうにゆるゆるとした笑顔を浮かべていた。

「それで、どういうことなのかしら？ どうして貴方が彼らと一緒に？」

「はう？ うさがどうかしたの？」

「どうかしたじゃないわよ……。まあいいけど、貴方の行動に口を挟む積りはないし。でもその変な喋り方は何とかしたら……？」

「へ、変な喋り方……。うさは、うさは深く傷ついたので……。うわーん、アクティちゃん！！ ブラットちゃんがいじめるのーっ！！！」

「よーしよし、一緒にお風呂入って、お店周って、おいしい物いっぱい食べようね」

「アクティちゃん……。好きなのっ！！！」

ひしと抱き合う二人だったが、ブラッドは困ったような様子で二人を見つめていた。こうして様々な立場と思惑と嘘が重なり、バテンカイトスでの短い日々が始まったのである。

仲間(3)

「でも、うさ子お金持ってるの……？ さっきからすごい勢いで食べてるけど……」

「はむはむはむはむ……っ！ー！」

バテンカイトス内には様々な店舗が展開している。その中には当然、戦士達御用達の飲食店も数多い。レストランの中の一つ、アクティの行きつけの店でうさ子はひたすらにご馳走を食べ続けていた。それはもう、見ているアクティが心配するくらいにうさ子は容赦なく食べ続けた。既にカラッポになった皿が何枚も積み重なり山を構築している。口の周りをベッタベタに汚しながらうさ子は顔を拳げ、ナプキンで口元をこしこし擦って頷いた。

「大丈夫なのっ！ お金ならちゃんとあるの！ じゃじゃじゃじゃ〜ん！！ ホクト君のお財布〜」

「って、ホクトのなの！？ 勝手に使ったら怒られるよ……？」

「ふふん、うさはそんなにお馬鹿さんじゃないのです！ うさは、最近とっても頑張っているのです。シエルシちゃんも助けたし、もぐもぐ……あと、ホクト君を白騎士さんから助けてあげたし、もぐもぐ……。帝国騎士団もやっつけたし……そろそろホクト君は、うさにボーナスをくれるはずなのっ」

「……………。そ、そうなの？ そんな約束したの？」

「……してないよ？」

「……。ホクト、普段から苦労してるんだ」

呆れたように溜息をつき、アクティはチョコレートパフェを一口ぱくりと口に運んだ。うさ子はそんなアクティの憂鬱そうな様子を見て目をぱちくりさせながら首をかしげる。

「アクティちゃん、ホクト君のお友達だったの？」

「友達……じゃ、ないよ。ヴァン……ホクトは、サーペントヴァイトのメンバーだったの。だから、仲間で……でも、ボクにとってはそれ以上の存在だったんだ」

「それ以上？」

「家族っていうのかな……。ヴァンは、孤児だったボクを拾って育ててくれた人なんだ。サーペントヴァイトに入ったのだった。本当はボクの為で、ヴァンは……えと、ホクトはいつも一人で居たがってた。誰かと一緒に居ると、その人を傷つけるからって」

「ホクト君は、ヴァン君でえ……。ヴァン君は、ホクト君でえ……。サーペントヴァイトだけど、砂の海豚なの。とつても不思議さんだね？」

「ほんと、わけわかんないよね……。笑っちゃおうよ」

そう語るアクティの表情は悲しげで、決して笑ってなどは居なかった。むしろ今にも泣き出しそうなその表情にうさ子は耳をぱたんとしならせ、手を伸ばしてアクティの頭を撫でるのであった。

「アクティちゃんは、ホクト君の事が大好き大好きなんだね……
よしよし」

言わずもがな、アクティの方がうさ子より年下である。年下どころか、アクティはまだ十代前半の少女なのだ。辛い体験を潜り抜け、持ち前の明るさでなんとかやってきたものの、本当は家族が恋しかったはず。

うさ子はそんなアクティの寂しさやホクトと再会出来たと言う喜び、そしてホクトが記憶喪失だと知った時の二度目の悲しみ……。それらを感じ取り、ただ優しく気持ちを込めて頭を撫でた。アクティはスプーンを咥えたまま、片目を閉じて俯いていた。

「お兄ちゃんが記憶喪失になっちゃったんだもんね……。寂しいよね……。悲しかったよね……」

「……………これも全部、白騎士の所為なんだ……。あいつさえ居なければ、ヴァンは記憶喪失になんかならなかったのに……」

アクティは全ての原因となった戦いを思い出す。それは一年ほど前、サーペントヴァイトの作戦行動中に起きた戦いだった。事件と呼ぶに相応しい一連の出来事はアクティにとって容易には忘れられない記憶であり、そしてそれは彼女が乗り越えねばならない壁だった。

涙を拭い、顔を上げる。今こうして再びヴァンの傍に居る事が出来る……。ヴァンが、生きていてくれた。それだけでいいじゃないかと自分に言い聞かせた。今度こそ、家族を守ろうと誓う。ヴァンが何も言わずに背中ですう語ってくれたように……。自分もまた、その背中に応えねばならないのだから。

「そう……記憶喪失ねえ。あんた、とことん不幸体質なのねえ」

アクティとうさ子がレストランで食事をしている頃、ホクトは腕と胴体に術式を刻んだ包帯を巻き、肩から上着をかけてサーペントヴァイトの本部の中をうろついていた。見覚えのない施設ばかりだったが、武器庫に貯蔵されている武装や魔道具の数々は興味を引くだけの価値があった。背後、団長であるブラッドは唇に手を当てそんなホクトの後姿を見つめていた。

「アクティにはちゃんと説明したの？ あの子、あんたの事ずっと探してたのよ？」

「その話はもうメリーベルからも聞いたよ……。しょうがないだろう？ 記憶を失ってたんだから」

「ま、そういつちゃえばそれまでだけど……。あの子にとってあんたはたった一人の家族なのよ？ もう少し優しくしてあげなさい。

それがあの子の命を助けた貴方の義務なんだから」

やれやれと言った様子でホクトは振り返り、包帯まみれの腕を見つめた。ガリユウさえ暴走していなければ、もう少し家族らしい嘘をつけたのだろうか……。心に余裕がなくなってくれば、うさ子にそうしたように自分に近づいてくる者に対して厳しい言葉を向けてしまうかもしれない。ホクトは常に冷静であり、無感情であり、そして同時に残酷だ。彼は彼の周囲の人間が思っている以上に非道であり、優しさとは程遠い所に居る。

これまでも命乞いをする相手を容赦なく斬り殺し、村を滅ぼし野を駆け巡り魔性を狩り人族を狩り、血と呼ばれるあらゆる赤で己の両手を穢して来た。誰かと共に歩めるほどその罪は軽くはなく、そして誰かに触れる事が出来る程綺麗ではない。

嘘をつき続ける事は難しく、しかしそれは安らかでもある。ホクトは確かに仲間の手を伸ばす時、何か心に暖かい物を感じていた。これまではそうして自分の気持ちに正直に戦ってきた。だが、白騎士との戦いが彼に新しい感情を抱かせつつあった。

「確かにあなたの言うとおり、俺は不幸体質らしい。白騎士は俺を死神と呼んだ……。実際、俺は人殺しを生業にする化け物だ」

肩を竦め、それから目を瞑った。魔剣を見ると、ガリユウが疼くのだ。全ての魔剣使いを殺せと唸るのだ。その感覚は日に日に近づいてきている。堪えられなくなりつつある。そうなれば、仲間にとて刃を向けるかもしれない。

以前の自分は一体どうやってガリユウを制御していたのか、まるで見当もつかない。あるいは元々制御など出来て居なかったのかもしれない。ガリユウは非常に危険な魔剣だ。一度暴れ出したら手の施しようがなくなってしまうほどに。

「……やっぱりあなた、変わらないわね。あなたはいつもそうやって、誰も傷つけない為に誰にだって嘘をついていた。誰も心に踏み込ませようとしなかった……。記憶を失っても、そういう所は変わらないのね」

「自分で選んで自分で決めた事だ……。俺はもう、仲間を……」

傷つけない。そう続けようとして、はっとする。以前、誰を傷つけたというのだろうか……。？ アクティだったか、ブラッドだったか……。或いはメリーベルかもしれない。記憶は定かではなく、しかしこの手が覚えている。決して斬ってはならないものでさえ、力はいとも容易く引き裂いてしまうという事を。

「力はセーブして使えば問題ない。それでも俺は十分すぎる程に強いしな。並の剣誓隊クラスなら楽勝楽勝」

「まあ、カテゴリース以上の魔剣使いが相手じゃなければね。あんなに敵う魔剣使いなんて、多分白騎士くらいのもものなんじゃないかしら?」

それは逆に白騎士を追うとなれば、またいつガリユウが暴走してもおかしくないという事を意味している。今までは本気で戦う必要のある敵などいなかったし、これからもそのはずだった。だがホクトは身に染みて理解したのだ。ガリユウは仲間を傷つける要素となり、そして白騎士とやりあうのはもう避けられないのだと。

「……………。白騎士と、戦うつもり?」

「決着はつけなきゃなんねーだろ…………? それにどうしても、あいつと戦いたいって煩いんだよ　こいつがな」

片手を翳し、ホクトは煙草を口に咥えた。ジヨニーライデンの甘い煙を楽しみながらホクトは背後を見やる。武器庫に保管された無数の剣、その全てに持ち主がいて、きつと全てに血の歴史があるのだろう。

「心配せずとも暫くは大人しくしてるさ。今の俺は、砂の海豚のホクト君だからな」

「…………そう。でも、忘れないほうがいいわ。貴方のその矛盾した優しさは、いつか誰かをどうしようもなく傷つけるんだって事を」

「……………それも、言われたよ。メリーベルに…………嫌って程、な」

壁に背を預け腕を組んだブラッドの傍らを抜け、ホクトは去っていく。その背中を見送りブラッドは静かに溜息を漏らした。不器用なのだ　いつだって。記憶がなくとも、心がなくとも……彼は。

「可愛そうね……アクティも、あの子も……。これだから自分勝手な男ってやつは……」

そうぼやく彼自身も男なのだが、それはこの際関係のない話である。ブラッドもまた、己の成すべき事を成すためにゆっくりと歩き始めるのであった。

仲間（3）

「ロゼ、一緒にバテンカイトスを周りませんか？　色々、今後為になる事もあると思いますよ」

「ああ……」

割り当てられた部屋の中、ロゼはベッドの上に寝転がって天井を見上げていた。リフルはその傍らに立ち先ほどからずっとここに居るのだが、ロゼはリフルに何も言う気配がなかった。普段ならばあれをしるこれをしると煩いくらいだったのだが、仕方がなくリフルが声をかけるくらいに場は沈黙に支配されていた。

リフルとロゼの付き合いはとても長く、ロゼがまだ幼い少年だった頃からの付き合いである。その頃はまだリフルも少女であり、リ

フルは常にロゼの父に言われて彼の傍に居た。その所為で甘え癖がついてしまったといえればそれまでだが、それでもロゼは常にリフルと共にあり、そしてそれが永遠に続くのだと考えていた。

「なあ、リフル……」

ふと、ロゼは思いきったように体を起こした。眼鏡を外したその瞳はじっとリフルを見つめている。嫌な予感なら　もうずっとしていた。リフルは覚悟を決めるように一息つき、それからベッドに腰掛けた。

「バテンカイトスの事、ですな……？」

「……ああ。どうして僕に黙っていたんだ……？　父上は、バテンカイトスの事も知ってたんだろ？」

そう、リフルはこの場所の事をずっと只管にロゼに隠し続けてきた。バテンカイトスは反帝国勢力の一大拠点であり、最前線であるとも言える場所……。リフルはそこに、ロゼを近づけたくなかった。ただそれだけである。

だがそれは、ロゼにとってはリフルの裏切りを意味している。ロゼは今日まで、子供として至らずとも必死に何とか砂の海豚を盛り立てて来た積りだった。ギルドの一部として資金を調達し、小さな作戦とは言え帝国に逆らい、困っている人たちを助けてきた。それが不必要だったとも、無意味だったとも言つつもりはない。そのくらいは理解している。だが……バテンカイトスで活動する事が出来れば、もっと大規模な作戦とて可能だったはずなのだ。

「僕は砂の海豚の団長だ……！　リフル、お前は砂の海豚をなんだと思ってるんだ……？」

「……ロゼ」

「ブラッドが力を貸してくれるっていうなら、もっと早くそうすれば良かったんだ！ 父上だって元々ここにいたなら、ガルガンチュアは！？ 今居るクルーの殆どが、バテンカイトスから移住したって事じゃないか！ 皆してグルになって僕を騙してたのか……！？」

何も言い返すことは出来なかった。何故ならロゼの指摘は全てが大正解だったからである。そしてその理由も頭の切れるロゼは気づいてしまったのだ。判っているのだ。だからこそ、こんなにも憤慨している。それは文字通りの裏切り行為……。リフルは故に、何も言い返せなかった。

「僕が子供だから……。団長として相応しくないから、お前はこの事を黙っていたんだろう！？」

「いえ、そうではないのです、ロゼ……。これは、先代の意思で……。」

「そんなの関係あるかよっ！？ だったらお前は、自分の意思じゃここに居ないっていうのか！？ 砂の海豚じゃないっていうのか！？ 全部父上の所為にして、自分は悪くありませんってのはどうなんだよ！？」

「ロゼ……。」

「僕は……！ 僕はそりゃ、勇気だつてないし、力だつてない……。背も小さいし、魔剣だつて持ってないし、出来る事と言えば魔術くらのただの子供だ……。でも、それでも今日まで皆の事を想つて

頑張ってきたんだ！ 父上を殺した帝国を……砂の海豚の皆の家族を奪った帝国を倒す為に！！ なのに、じゃあ誰も僕が団長だって認めてなかったって事か！？」

「……………ロゼ……………落ち着いてください」

「落ち着いてなんていられるかっ！！！！」

ロゼは立ち上がり、リフルの襟首を掴み上げた。その瞳は怒りに囚われているというよりは、むしろ悲しみに満ちていた。当然のことである。ロゼがどれだけ努力し、どれだけ家族の為に頑張ってきたのか……それは傍で見ていたリフルが一番理解している事なのだから。

彼は幼くして父を亡くし、父を失った組織を纏め上げようと必死で努力してきた。子供らしい事をしている暇は無く、魔術の研究とガルガンチュアとギルド運用の勉強だけを只管にしてきたのだ。それも全ては家族である砂の海豚のメンバーを路頭に迷わせない為、そして彼らの思いを無駄にしまわぬ為に……。

リフルは常にロゼの傍に居て、ロゼに様々な事を教えてきた。だが彼女はいつだってロゼが戦う事に否定的で、砂の海豚が活動する事にさえ大きな制限をかけ続けてきた。危ない事はするな。そのリフルの態度はずっと気に入らなかった。自分を団長として認めていないのだと、男として、戦士として認めていないのだと暗に言われている気がしたから。

罪人をUGに移送する列車を襲撃し、それを開放する作戦を考え、た時モリフルは反対していた。だがロゼは初めてそれを押し切り、普段より大きな作戦を一人で遂行したのである。途中でホクトの力を借りはしたものの、世界を変えるほどの効果はなかったものの、それはロゼにとってリフルが自分を認めてくれた初めての作戦だったのだ。

「そもそもどうして父上はお前にロシアを継承したんだ!? 僕ではなく、お前に……っ!! それだって本当は、僕の事を認めていない証拠じゃないか!!」

「それは違います、ロゼ……! 先代は、貴方の為を想って!」

「何が僕の為なんだよ!? お前はいつつもそう言っ僕を縛り付ける……! そんなのただお前の為じゃないか!! お前が傷つきたくないだけだろっ!？」

リフルを突き飛ばし、ロゼは額に手を当てて背を向けてしまった。その背中はいつともより小さく、そして寂しげに見える。打ちひしがれるロゼにかけられる言葉は……何一つ、思いつかなかった。リフルは自分の無力さを呪いながら、しかしどうしようもない言葉しか口にする事は出来ない。

「……申し訳ありません、ロゼ……」

「……何で謝るんだよ。確かに、お前は……お前達は正しいよ。僕は、いざ実戦になったらビビって後ろで見てるしかないただの子供だ……。列車潜入作戦の時だって、本当は怖くて仕方がなかったんだ。ホクトがいなかったらきつと、ビビってそのままUGまで行っちゃってたさ……」

「……………」

何も言えず、視線を落とすリフル。ロゼは眼鏡をかけ、それから部屋を後にする。扉に手をかけ、最後に振り返って言い放った。

「だったらもう、お前が団長やればいいだろ……！ 僕はもう、お前の事なんか知らない……。ほっといてくれ！」

「ロゼツ！？」

ボタンと、音を立てて扉が閉まる。リフルは慌てて立ち上がり、しかし追いかける事は出来なかった。追いかけたところで、一体何が言えるというのだろうか？ 全てはロゼの言うとおり、それがただ真実であり、事実なのだ。

その場に膝を着き、リフルは頂垂れていた。ロゼはなんだかんだと口悪くとも、それだけは。団長を辞めるとだけは絶対に口にしなかった。リフルを責める事があっても、お前の事なんか知らないなんて一言も言ったことはなかった。いつでも家族として、仲間として、リフルを気にかけていたのだ。子供なりに、未熟なりに……無力なりに。

だが、ロゼはもう行ってしまった。追いかけていけないうことは判っていても身体は動かなかった。これ以上何を言えるというのだろうか……？ 剣士はただ俯き、己の無力を拳に込めて床に叩きつけることしか出来なかった。

「で？ 俺の財布はスツカラカンになった、と……」

「ご、ごめんなの……。そんなにね、お金がかかるとは思ってなかったの……。はううう……。はうううーっ！」

食事を終えたうさ子とアクティの前、ホクトは腕を組んで睨みを効かせていた。うさ子が自分の財布を持ち出し、勝手にたらふくご馳走を食い荒らした事を知ったのはつい先ほどの事である。うさ子

は往来の真ん中で正座し、耳をへこたれさせて上目遣いにぶるぶると震えながらホクトの顔をちらほらと見上げている。アクティはその隣に立ち、冷や汗を流しつつ周囲を気にしていた。

「でも、うさはね……うさは、最近頑張って働いてたの……。ホクト君はね、そろそろうさにポーナスを出してくれるかなあって思ったの……」

「……………ほお……………?」

「はうう!?! う、うさはね、ホクト君のお金を全部使っちゃう積りはなかったの?! ただね、とってもおいしいレストランさんでねっ!」

「で……………?」

「はうう?!?! はうううううう!! 怖いの……! 怖いのっ!?! うさはね、うさはね……うわああああんっ!?!?!?! ごーめーんーなーさーいーっ!?! ああああーん! わーんわーんっ!?!」

子供のように泣きじゃくりながらぺこぺこ頭を下げるうさ子。流石に周囲の目が集まってきて気になるのか、アクティは顔を紅くして腕を組んでそっぽを向いていた。まるで他人のフリである。

「わーんわーん!?! もうしないのー! もうしないのーっ!?! ホクト君、ごめんなさいなのーっ!?! ごめんなさい!?! うわあああんっ!?!」

「反省したか……………?」

「したの！ 反省したのーっ！！ ホクト君怖い、怖いのーっ！！
もう勝手にご飯食べないのーっ！！ おかわりも、一回で我慢
するからあああ！」

「お前がした事はな……泥棒だ、泥棒！！ お前は犯罪者になつた
んだー！！」

「　　ッ！？ うさは………うさは、そういつつもりじゃな
かったの……。ボーナス………」

「そのボーナスって言葉はどこで覚えてきたのか知らんが、時間外
手当とボーナスは期待出来ねえんだよ、砂の海豚はよお………」

がっしりとうさ子の頭を掴み、ギリギリと締め付けるホクト。う
さは魚のように口をパクパクと開け閉めしながら必死でそれから
逃れようともがいた。

「次やったらなあ………？ お前………ダンボール箱に詰め込んでその
辺に転がして“親切な方拾ってください”って放置すつぞコラアッ
！！！！！！」

「わああああんっ！！ わああああああんっ！！ やだー
っ！！ やだあああっ！！ ホクト君、ごめんなさいなのーっ！
！ごめんなさいなのおおっ！！！！！！」

「時間外手当とボーナスは………？」

「き、期待出来ないのー……。うえーん………うええええん………」

ぱつと手を離し、うさ子は頭を抱えて地面の上でまるくなつてしくしくと泣き続けていた。余りにも号泣しているので流石に哀れになつてきたのか、アクティはホクトの足を軽く蹴っ飛ばして抗議した。

「あんまり苛めたら可愛そうでしょ……？ そのへんにしといてあげなよ……」

「あのなあ……？ これからローティスで若いおねーちゃんと一緒に美味しいお酒が飲めるところだったんだぞ……！？ それがこの馬鹿の所為で、当分お預けだつ……！！！」

「……。そんな理由？ じゃあ別にいいじゃん、馬鹿馬鹿し……」

「なんだと！？ 俺はなあっ！！ 若いおねーちゃんといチャイチャすることだけを楽しみにこの辛い人生を生きてんだぞ……！」

「キモ……。ほら、うさ子しっかりして。元氣出して〜」

「……アクティちゃん……やさしいの……っ！ うさは……うさは……！！ アクティちゃんっ……！！」

うさ子は涙を流しながらアクティにひしと抱きついた。アクティは自分より一回り大きな身長のうちうさ子の頭をなでなでしつつ、ジト目でホクトに抗議した。

「つか、どっちみち金の大切さはいつかこいつに教えにやならんかったろうに。うさ子、もう判ったな？ 勝手に人の金を使わない事」

「うん、わかったの……。うさは……。うさはもう、悪い事はしないの……」

「そうか。じゃあこれ」

ホクトはズボンから徐にオレンジ色の財布を取り出した。そうして懐から封筒を取り出し、そこにペンできゅっきゅとそのまま書き加える。そこには“うさ子の給料”と記されていた。

「こいつは俺からのプレゼント。それからこれはお前の小遣いだ」

「!?!? ホ、ホクト君……。い、いいの……。?」

「ああ。お前も自分の財布欲しかったらうなと思つてさっき買つていてやったんだよ。金も、全部財布に入れてるわけじゃねえし、魔剣狩りやってた頃の俺の口座がブラッドから帰ってきたからまあ金はないわけではないんだ。だからこれはお前の給料な」

封筒からお札を取り出し、うさ子は目をキラキラと輝かせた。財布にそれをしまい、まるで財宝でも発見した探検家のように財布を高々と両手で掲げたのであった。

「うさ、お給料初めてもらったの~~~~っ!!!! うれしいのーっ!!!!」

「お前は俺が養つてる状態だったから、金の管理は俺がしてたしな。丁度いいから金の使い方くらいはきちんと覚えろ、馬鹿うさ子」

「頑張つてお勉強するのっ!! ホクト君、ありがとうなの! ありがとうなのーっ!! 大好き、大好き、大好きっ!!」

ホクトに抱きつき、すりすりと同擦りするうさ子。ホクトは苦笑しつつその頭を撫でていた。ちょっとだけそれを羨ましく思いつつ、アクティはうさ子の笑顔に釣られて笑みを浮かべるのであった。

「アクティちゃん、うさ子の財布なの！ うさのお財布なのーっ！ オレンジでかわいいの〜 はうっ……はうっ……っ」

「そんなに振り回してたら失くしちゃうよ……？」

大喜びしているうさ子を眺め、ホクトは優しく微笑んでいた。その瞳は歳の離れた妹を可愛がる兄のようで、アクティとしては複雑な心境だ。本来ならそれは、自分に向けられるべき視線なのである。焼餅を焼かないといえば、嘘になってしまっだろう。だが、それ以上にアクティはうさ子が好きだった。だから何ともいえない気持ちのままホクトの靴を踏みつけるのであった。

「ボクにはないの？ プレゼント」

「ん？ あ〜……。いや、一緒にいるとは思ってなかったからな。また今度な」

「期待しないで待ってるよ、もう！」

おおはしゃぎを続けているうさ子の傍ら、アクティはホクトの手をぎゅっと握り締めて視線を逸らした。それはそれで、いいのかもしれない。失ってしまった物は多くとも。また、一緒に記憶は紡いで行けるのだから。

Stella (1)

世の中には、どうしようもない事っていうのが確かにあるのだと思う。それは自分の力ではどうしようもない、変えようの無い現実……。

例えば、こうして目の前に広がる大平原とか……。そこに展開する大量の騎士団とか……。そこへ向かって全力疾走しなきゃいけないこの状況とか……。私はただ、ごく普通の一般人だったはず。それがどうして、戦場に立たなければならぬのか。

勿論、それを嘆いているわけではない。私が今ここにいるのは、ミュレイを守る為だ。ミュレイを守る為にここに居る……。そう思えば全てはどうでも良くなる。理由なんて関係ない、私は私の意志でここに来た……。そう思ったかった。だが現実として、この状況で私に何が出来るのだろうか。

左側にはククラカンの軍勢が集結し、右側にはザルヴァトーレの軍勢……。無事にエル・ギルスから戻ってここまで来て見れば戦争状態に突入する一歩手前……。私達は夜の草原を只管に走り続ける。何故こんな事になってしまったのか……。いや、始まる前に間に合っただけよかったと思うべきなのか……。

「まずいのう……。！ 急がねば……。！ 皆の者、こっちじゃ！」

ミュレイを背中に乗せたゲオルクに続き、私達も走り続ける。もう正直体力が尽き果てそうだったが、止まったら置いていかれてしまっただろう。流石にそれだけは勘弁なのである……。私達は国境沿いを左に逸れ、ククラカン本陣を目指す。兎に角、戦争を止めさせなければならぬ。

クラカン武士団の隊列の中を抜け、辿り着いたのは本陣のある矢倉だった。元々国境沿いに面して設置されていた物を現在本陣とし

て利用しているらしい。矢倉に辿り着き、ぜえはあと肩で息をする私を置いてミュレイはゲオルクから飛び降り、とことこと歩いていく。

「タケル！ タケルはおるか！？」

小さなミュレイが大声を上げると、周囲の武士たちが小首をかしげていた。ゲオルクが状況を説明しているようだが、流石に小さいミュレイを見ただけで一発である大魔術師だとわかる者はいなかったらしい。

「なんだい姉上……そんなに大きな声を上げずとも、僕には聞こえているよ」

しかし、そんな中でたった一人だけ彼女の存在を理解する者がいた。ミュレイと同じ赤髪に、豪華な着物を着た一人の少年である。姉上……という事はどうやらミュレイの弟らしい。まだ十代前半の少年に見えるが、今となってはミュレイのほうがよく小さい。

「おお、タケル！ 状況はどうなっておる！？ シルヴィアは！？」

「シルヴィア王なら、もう少しミュレイが来るのを待つって言うって向こうの本陣にいるよ。それより姉上……本当に小さくなってしまったんだね。可愛いなあ……」

こんな状況だというのに、タケル王子は全然焦っている様子も危機感もない。小さくなった姉の頭を撫でながら、ニコニコと一人微笑んでいる。そんな悠長な事を言っている場合ではないと思うのだが……ミュレイも私と同じ考えだったのか、その場で地団太踏んで弟に抗議している。

「今すぐ兵を引くのじゃ！ このままでは婚姻の儀以前に国同士の争いになるぞ！？」

「それは出来ないよ、姉上。だって先に兵を展開してきたのはザルヴァートルレなんだ。シルヴィア王の乱暴さは、姉上だって重々承知の事でしょう？」

「わらわがこれからシルヴィアと直接話をつけてくる！ 兎に角、これ以上の兵の展開はわらわの名において許可せぬ！！」

「ふふ……っ！ 嫌だなあ、姉上……。そんな小さな童子の姿の姉上の命令なんて、誰も聞きはしないよ」

相変わらずタケルはニコニコと笑っている。この二人にパワーバランスというのが私には理解できないのだが、どうもミュレイの話をタケルは聞いている気配が無い。ゲオルクが見かね、武士隊を数名引き連れて二人の間に入った。

「お言葉ですがタケル殿……。このまま戦争に発展すれば、帝国による武力介入を許し、更なる支配を強要されることになりかねません」

「……。まあ、確かにゲオルクのいう事も一理あるね。でも姉上、あっちがあれだけの戦力を展開しているのにこちらは兵を引けというのかい？ 僕は、ククラカンの王子として兵を引くわけにはいかない。姉上ならわかるでしょう？」

「だから、あちらに話をつけに行くと言っているのじゃ……！」

「姉上、忘れたの？ 姉上はザルヴァトーレの刺客にそんな姿にされてしまったんじゃないか。今行けば飛んで火に入る夏の虫……。今の姉上は無能なんだから、大人しく僕にしたがつてよ。ね？」

「む、むのうつ！？ うぐぐ……っ！？」

弟の物言いは気に入らなかったが、ミュレイは何も言い返せなかった。そりゃまあ、実際魔法も使えないしちっちゃいしゲオルクに背負って貰わないと走れないくらい体力もないし、まあ本当に今のミュレイは何も出来ないわけなのだが……。

それにしても、あの弟……タケルとか言っただろうか。国の一大事なのにどうしてあんなに冷静なんだろうか……。王族という人は、ミュレイも含め変わり者が多いのかもしれない。

「ねえウサク、どうすればいいのかな……？」

「拙者たちは、正直姫様に従うしかないでござるよ。ただ、このまま拮抗状態が続けばシルヴィア王は单身でも突っ込んでくる気がするでござる」

「……。ねえ、それって本当に女王なの……？ 話だけ聞いてるとさっきから化け物にしか思えないんだけど……」

ザルヴァトーレの女王、シルヴィア・ルナリア・ザルヴァトーレ……。急速に国力を増強し、帝国に継ぐ軍事力と文明を持ちつつある国、ザルヴァトーレの女王であり、ミュレイよりも強いと噂の人だが、これだけ戦力を展開してくるなんて私に言わせたら正直異常だ。そんなに戦争がしたいのだろうか……。

ミュレイは戦争をしないように、出来るだけ人々が平和に暮らせるようにと尽力しているっていうのに、どうしてそう自分勝手な考

え方の人間がいるのだろうか。何で手を取り合って、平和の為に戦おうと思わないのだろうか。それが歯痒く、そして悔しかった。こんな世界だから……ミュレイは孤独に戦い続けるしかないんだ。

私が、彼女を支えてあげなければならぬのだと思う。私やゲオルク、ウサクだけはミュレイの理解者で居てあげなければ……。私がかここに居る意味、それはきつと彼女と運命を共にする事にあるのだろうから。

戦うのは怖いし痛いのは嫌だけど、でもそれでもミュレイを守る為だっと思えばきつと耐えられる。ううん、耐えなきゃいけない……。彼女が語った理想を、私もこの目で見てみたいから……。

「……仕方ないね。姉上がそこまで言うのなら、行って来るといい。僕はこっちでそちらの動きを見て指揮を執るよ。それで構わないね?」

「うむ……! 軍隊引き連れていくのは話にならんからのう……ゲオルク、腕の立つ者を三人見繕ってくれ。ウサク! それから昂!」

「は、はい!?!」

「ウサクと昂はここに残れ。ウサクはタケルの護衛、昂はここで待っているといい」

「え……? でも、ミュレイ……私……」

「……お主はもう、危ない事に関わる必要はない。これはわらわの戦い……わらわの役目じゃ」

ミュレイは私の手を握り締め、優しくそう微笑んだ。そんなに優

しく……寂しげに言われてしまったら、何も言えなくなってしまう。確かに私は素人だし、一緒に居ない方がいいのかもしれない……。でも、ミュレイの傍で何か力になりたいのに……。

「いいじゃないか、姉上。彼女も連れて行ってあげなよ」

ふと、背後から予想外の声が聞こえてきた。腕を組み、タケルがニコニコと笑っている。タケルは私の肩を叩き、それからミュレイを見下ろした。

「彼女だけ仲間はずれにすることはないよ。それにウサクも姉上の護衛につけたほうがいい。有事の際、何かあったら困るからね」

「しかしのう……」

「それに、素人を本陣に置かれてもこっちも迷惑だし」

笑っているが、こいつなんか性格歪んでる気がする……。ずっとこっち見てるし……。作り物みたいに綺麗な顔してるけど、なんか逆に人形みたいで怖いっていうか……。

そんな事を考えているうちに話は纏まったのか、出発の準備と説明が足早に行われる事になった。その間私は手持ち無沙汰だったので腕を組んで待っていると、タケルが声をかけてきた。

「君が姉上が召喚したっていう救世主だね？」

「え？ ああ……はい、そうですけど」

「特に、敬語を使う必要はないよ。君はどうやら育ちが悪いみたいだから、僕に合わせていると疲れるだろう？」

「……………そりゃどうも」

「姉上は君に色々と期待しているみたいだし、僕も君をサポートしたいと考えている。困った事があつたら、いつでも力を貸すよ。ただし、姉上に関わる事なら……………だけどね」

「……………ありがとう、タケル」

なんだろう、こいつ。悪いやつではないのだろうか？ まあ、嫌味つたらしい口の利き方をしてくるっただけで、逆に裏表が無くていいってことなのか？ 良く判らない……………。我ながら人を見る目というやつは全くないので、正確な判断は期待出来そうにもない。

そんなこんなで準備を済ませ、私達はシルヴィア王の元へ向かう事になった。ゲオルクも団長だけあつてびしばし働いているし、なんだか私はやっぱり浮いているような気がする……………。とはいえ、じつとしても仕方が無い。ザルヴァトーレの本陣に向かうというミュレイたちにつき、私もいざ敵陣に乗り込む事にするのであった……………。

Stellia (1)

昴達がククラカン本陣から出発した頃、反対側に存在するザルヴァトーレの本陣では混乱が起こりつつあった。

ザルヴァトーレ本陣、幕で覆われた移動型の玉座の上、女王シルヴィアの姿がある。高圧的に足を組み、露出の高い純白のドレスを纏い金髪を夜風に靡かせるその姿は戦場には異質であった。美しく、

そして気高い……。彼女は本来ならば姫と呼ばれるべき人間であり、女王と呼ぶには相応しくない年代である。が、その威風堂々とした態度は王足り得る物であり、穢れる事の無いその幻想的な姿は国内外において高いカリスマを維持していた。

そんな女王、シルヴィアの足元には一人の男が立っている。漆黒の鎧を身に纏い、手には同じく闇の魔剣を装備した長身の男である。男の背後には切り刻まれ、無残にも引き裂かれたザルヴァトーレ騎士たちの姿がある。それはたった今、彼が彼らの命を奪った証拠であった。

「……………。無礼な。貴様、ここがどこだか理解しているのか？」

シルヴィアの高圧的な声が響き渡った。王は立ち上がり、腰に片手を当て剣士を見下ろす。黒い剣士は闇に包まれ静かに顔を上げた。表情は漆黒のバイザーで覆われ、うかがい知る事は出来ない。

本陣に突如現れた魔剣士の存在に、騎士たちは当然ながら気づき包囲を固めつつあった。シルヴィアは髪を掻き揚げ、玉座から地上へと続く階段を中腹ほどまで御り、そこに静かに座して足を組んだ。

「貴様はシルヴィア王の前に居るのだぞ…………？ 図が高いんだよ、愚民が…………！」

「相変わらずだな、シルヴィア。そんな顔で良く言う」

「黙れ生ゴミ。貴様に用はないのだ、とっとと私の視界から消え去れ “魔剣狩り”」

魔剣狩り。その男はかつてよりそう呼ばれてきた。シルヴィアと対峙するのもこれで何度目か判らない。漆黒の魔剣、ガリユウを肩に乗せ魔剣狩りは静かに笑みを作る。周囲は既に騎士が囲み、

いつでも攻撃に移れる準備が完了していた。後はシルヴィアが合図を出すだけで魔剣狩りは一斉に攻撃される事になるだろう。

だが、それをシルヴィアがしなかったのは魔剣狩り相手に生半可な戦力では話にならないと冷静に理解していたからである。そもそも彼女はここに話し合いをしに来たのであり、魔剣狩りは厄介な相手だがここで派手に戦うつもりは毛頭無かった。闇の剣士もシルヴィアがそれを理解していると知って、余裕の笑みを浮かべている。

「俺の目的はあんたも知っているはずだ、シルヴィア。それに、あんたには訊きたい事もある」

「こつちはないんだよ馬鹿が。話が理解出来ないのか馬鹿が。とつとと失せると言っているんだよ馬鹿が。貴様と遊んでいる暇はないんだよ、馬鹿が」

「相変わらずひどい口の利き方だな……。俺も育ちはよくないが、あんたほどじゃないぞ」

「……。貴様と話していると私まで穢れる。何度も言わせるな、馬鹿が。さつさと失せろ。お前と遊んでいる暇はない。何回言えば理解出来る？ その腐った脳味噌をフル回転させて理解しよう」と勤める阿呆。貴様は王の前に居るのだぞ」

魔剣狩りは溜息を漏らし、ガリユウを軽く片手で揮った。衝撃波は周囲の騎士の包囲を一瞬で崩し、直後剣士の姿は消える。ゆっくりと立ち上がったシルヴィアがその手の中に美しく輝く半透明の大剣を召喚し、それを真正面に思い切り振り下ろした。

遅れて出現した魔剣狩りの持つガリユウとシルヴィアの魔剣が正面衝突し、激しい衝撃が広がっていく。二人はぎりぎりどつどつと合意をしつつ、顔をつき合わせて笑い合った。

「帝国の言いなりになっているには過ぎた力だな、シルヴィア」

「黙れ、力を持って余したただ破滅させる事にしか使用できない愚か者が……。死にたくなければとつとと失せる。貴様とやりあっている場合ではないと言っている」

「そういうわけにはいかなくてな。まあ……少し付き合えよ」

魔剣狩りがシルヴィアから離れ、空中に舞い上がる。黒い魔剣から黒く輝く衝撃波を連続して繰り出し、シルヴィアへそれが降り注いだ。女王は結晶の剣を下段に構え、力いっぱい斬り上げる。闇の力をかき消し、女王は風でまくれるスカートもそのままに階段を駆け下りていく。

着地した魔剣狩りへと襲い掛かり、刃が激突。力においてシルヴィアは魔剣狩りをも上回っている。女性の、しかも姫の細腕で繰り出される一撃は岩石が衝突したよりも重く、魔剣狩りの身体はピンボールのように吹っ飛ばされてしまう。

本陣を取り囲むヴェールを突きぬけ、魔剣狩りは夜の草原に着地した。シルヴィアはそんな魔剣狩りを追いかけて草原へと身を晒し、剣を大地に突き刺し髪を掻き上げた。

「どうした魔剣狩り……その程度か。単身挑んで来た割りにはみみつちいな、ええ？」

「……。やれやれ、相変わらずの馬鹿力だな。俺じゃなかったら死んでたぞ」

「残念だ。貴様も殺すつもりだったんだがな」

再び魔剣使いが動き出し、ガリユウを片手にシルヴィアへと迫っていく。繰り出された斬撃　しかしシルヴィアは片目を瞑ったまま、防御の姿勢すら取る事がなかった。シルヴィアへと繰り出された刃、それはしかし女王の首を刎ねるには及ばない。女王の目前には槌を構えたゲオルクの姿があった。ガリユウの高い攻撃力も、同じく攻撃力に特化したゲオルクに阻止されてしまう。

ゲオルクは魔剣狩りを弾き飛ばし、シルヴィアを守るように前に出た。遅れて走ってきたミュレイがシルヴィアに駆け寄り、ウサクがその傍に控える。そうして昴はわけのわからない状況にただ只管首をかしげるのであった。

「な、何がどうなってるんだ……？　あれがシルヴィア王……別に普通のお姫様に見えるけど……」

手元にある剣と派手に露出した巨大な胸元さえなければ……と、そんな言葉を付け加えようとしたのだが、昴の視線は魔剣狩りに釘付けになってしまいそれどころではなかった。見た瞬間、昴の脳裏に何かの景色が過ぎる。それはメリーベルを見た時にも感じた、既視感にも似た不思議な衝動……。魔剣狩りはバイザーを外し、首からかけて静かに体勢を立て直した。鋭く闇を射抜く瞳が月夜の中で獣のように輝いている。

「シルヴィア、無事か!？」

「……ミュレイ、か？　随分と小さくなったものだな……フツ！　愛らしいじゃあないか」

「そんなこと言ってる場合かお主……？　ヴァン、止める！　シルヴィアを殺した所でお主の目的は果たされる事はないっ……!」

「ミュレイか？　国外に行ったと聞いていたが……戻ってきたのか」

魔剣狩り、ヴァン。ククラカン王女、ミュレイ。ザルヴァトーレ女王、シルヴィア。三人は互いに視線を交錯させる。そこには言葉に出来ない重苦しい緊張感があった。先に動いたのはミュレイで、小さなその身でヴァンへと歩み寄っていく。

「どうした、それもいつもの召喚実験の副産物か？」

「違うわ馬鹿者……。お主、いつまでこんな事を続けるつもりじゃ……。？」

「……この世界に存在する、全ての魔剣使いを倒すまでだ。あんたも知っているはずだ。それに、あんたのソレイユだって例外じゃない」

ヴァンは魔剣を構え、ミュレイへその切っ先を突きつけた。しかしミュレイは怖じる事無く更に一歩前に進んでみせる。流石に危険だと判断したウサクが走り出そうとしたが、ミュレイは無言で片手で動きを制するのであった。

「ミラの事は、お主にも申し訳なく思っておる……！　じゃが、こんな事を続けても、ミラが喜ぶ事は無い……！」

「判ったような口を利くな、ミュレイ。あんたが殺したようなものだろう、ミラは……？　そっちの女は、ミラの代わりか？」

ヴァンの鋭利な刃のような視線は、刀を抱きしめて固まっている鼻へと向けられていた。ミュレイは鼻を庇うように移動し、両手を

広げる。魔法も魔剣も使えない今のミュレイにとって、それは最大限の擁護であり抵抗であった。

「昴は関係ない……！」

「……人間を道具のようにしか扱わないあんたの事だ、あの女もミラののように使い捨てる気だろうか？」

「違うッ……！ わらわは……わらわは、ミラの事とて……本意では……っ」

「同じ事だ。救える物を救わず、目先の物を犠牲にしてあんたが語る理想にどれだけの価値がある……。お喋りは終了だ。そこを退けでなければ殺す」

「ヴァンツ……！」

ミュレイの叫びはヴァンには届かない。振り上げられた魔剣に込められた殺気は本物だった。昴もウサクもゲオルクも、すぐに反応して動き出す。兎に角ミュレイを助けなければならない。しかし、ミュレイは動かずそれに応じた。ただ真っ直ぐにヴァンを見つめ、振り下ろされる刃を静かに見つめていたのである。

「ミュレイ……！！ だめだ、避けてえっ……！」

昴の悲鳴にも似た叫び声が響き渡る。その時、ミュレイの足元に魔方阵が輝き、ガリユウはその動きを止めていた。雷光。夜の戦場を照らし上げた眩い光の後、そこには一つの人影が残されていた。

ガリユウを受け止めた装甲に覆われた腕……。白い、白い装束……

…。女は白い雪のような髪を靡かせ、静かに目を開いた。紅い、鮮血のような瞳が魔劍狩りを見つめている。誰もが動きを停止していた。その停止した時の最中、ヴァンだけがその名前を読んだ。

「……………ステラ」

昴は彼女に見覚えがあった。エル・ギルスへと向かうターミナルで出会い、わずかばかりの言葉を交わした。ただそれだけの関係…。しかし、昴は何故かとても懐かしいような気持ちを感じていた。白い影が動き、ヴァンを蹴り飛ばす。黒い甲冑を纏った魔劍狩りの身体が浮かび、そこに思い切り拳が叩き込まれた。鎧は砕け、魔劍狩りは血を吐き出しながら思い切り吹っ飛んでいく。草原の上を何度かバウンドし、遙か彼方に存在する矢倉の一つに衝突した。

地鳴りが響き渡る中、白い少女は静かに目を閉じ、ミュレイの無事を省みた。そうして一瞬昴へと視線を向け　ミュレイとシルヴィアに告げる。

「ハロルドの命により、ククラカン国とザルヴァトーレ国との武力衝突の予兆を確認。闘争レベル3以上の戦闘行動の感知により、これより武力介入を開始します」

訳がわからないといった顔をしている昴の周囲、ミュレイとシルヴィアは少女の言葉を大人しく聞き、何も言わずに後退する。昴は慌ててミュレイに歩み寄り、その身体にすがりついた。

「大丈夫だった、ミュレイ!？」

「うむ……。じゃが、ヴァンが……」

「え？　ヴァン?」

白い少女は両腕を広げ、全身に光を纏って行く。迸る電撃は少女の背後に巨大な背光を模した剣を構築し、体を鎧で被っていく……。白い鎧を装着した少女はふわりと浮かび上がり、急加速し遙か彼方のヴァンへと突っ込んでいく。

ヴァンは起き上がり、ガリユウの力を解放していく。漆黒の光に覆われた魔剣狩りは飛来する少女へあわせて剣を振り下ろした。叩き込まれる闇の一撃　それを少女は拳をあわせて応じる。二つの衝撃がぶつかり合い　しかし次の瞬間ガリユウは真つ二つに折れ、砕けてしまうのであった。

衝撃で吹き飛ばされるヴァンを追い越し、少女は草原の大地を捲り上げながら急停止、ヴァンを空中でキャッチし更に上空へと舞い上がっていく。遙か彼方まで舞い上がり、そこから電撃を帯びつつ一気に大地へと加速し落下していく。

「カテゴリースの反乱分子、ヴァン・ノーレッジ……。貴方を武力により排除します」

大地に叩きつけられた直後、世界が大きく揺れた。地鳴りに続き雷光が迸り、ヴァンの身体は黒焦げになって意識は完全に途切れてしまう。ノックダウンされたヴァンの頭を掴んだまま少女は舞い上がり、ミュレイたちの下へと降り立った。

「戦闘行動終了……。ミュレイ・ヨシノ、彼の身柄を拘束してください」

「……やりすぎではないか？ ステラ……」

「彼に関してやりすぎという事はありませんので。可及的速やかに彼の自由を奪い、投獄してください。後日、こちらから指示を出し

ます」

「……………やむを得ぬ、か」

ミュレイは指示を出し、武士たちがヴァンを連れ去っていく。それを見届け、ステラと呼ばれた少女は武装を解除した。機械的なデザインの鎧が消え去り、残ったのは白いうさぎの耳を風にはためかせる少女の姿だけである。

呆然と戦闘を眺めていた昴へと歩み寄り、ステラは静かにその瞳を覗き込んだ。それから直ぐにミュレイとシルヴィアへ視線を向け、規律したまま規則正しく読み上げるかのように言葉を続けた。

「これ以上の軍事行為は帝国との協定違反と見なし、レベル3以上の戦闘行為発生を合図に強制武力介入を開始します。両国の賢明な判断を祈ります」

ステラの足元に再び魔方陣が浮かび上がり、その姿は再び眩い姿と共に消え去ってしまう。残されたのは焼け焦げた戦場と、そして完全に混乱してしまつた状況だけであつた。

わけもわからず、昴はきよんとした様子でミュレイへと視線を向ける。焰の姫は一人、憂鬱そうに俯いていた。その瞳が何を意味し、この戦いが何を意味したのか……それを昴が知るのは、まだ先の事である。

Stellia(1)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

どついつことなの？

うさ子「ほへえ……？」

昴「えつと……あれ？　なんか、色々矛盾してるような……」

うさ子「ホクト君はヴァン君でえ、ヴァン君はホクト君でえ、でもホクト君はバテンカイトスにいて……ヴァン君はプリミドルにいるの？　あれれ？」

昴「よくわかんないけど……もしかしてヴァンとホクトって別人なんじゃ……」

ホクト「カンのいい人はもう気づきそうなもんだけどな」

昴「え？　なにが？」

ホクト「神宮寺飛鳥的な流れでいけば、ホラ……なっ？」

うさ子「………？　ぜんぜん意味わかんないの。ホクト君、だいたいどうぶ？」

ホクト「………」

昴「まあ、何が起きてても驚かないかな、私は……」

うさ子「色々な意味でねっ!!」

ホクト「まあ、俺も驚かないだろうな」

三人とも「」だってそれが神宮寺クオリティ」」

シエルシ「それより、出番……。出番は、まだですか……」

ミュレイ「お主ほんっと出番ないのっ……」

Stella (2)

「ろくでもない邪魔が入ったが、これで漸く腰を落ち着けて話が出る……。そうだろう、ミュレイ？」

ザルヴァトーレ本陣に乗り込んだ私達の前で繰り広げられた、わけのわからない戦い……。その全てに私は疑問しか抱かなかつたけれども、同時にその全てに意味があつたのだ。

そんな大切な事に気づくのはずっと後の事で、私は二つの事だけを考えていた。襲い掛かってきた黒甲冑の騎士、通称“魔剣狩り”

ヴァン・ノーレツジ。はつきりとこの目で見たわけではないし、ヴァンはなんだか機械的なバイザーを装備していて、顔をちゃんと見る事も出来なかつた。しかし、彼はどこかで見た事があるような、そんな気がしたのである。

記憶の混乱が収まりつつあるような、更に混乱が加速しているような、どっちともいえない気持ちだった。頭の中、彼が私の前に現れたような、そんなイメージが浮かび上がる。何故だろう、決して嫌なイメージではなかつた。

ラクヨウ城に連行されたヴァンの事も気になつたが、そのヴァンを唐突に現れて理不尽に倒してしまつた白い少女、ステラ……。なんだか良く判らないけど、ロボットアーマーみたいなものを装備して突然ヴァンを伸してしまつた。そしてまた直ぐに消える……。一体何がどうなっているのか。

あの子も、確かに一度会つた事がある。これら全て何かの偶然なのだろうか……。？ 考え込んでしまうのも仕方ない事だったが、今はそんな状況でもない。ミュレイとシルヴィアは向かい合い、互いに視線をぶつけ合つていた。決して険悪なムードではなく……。いや、むしろ二人の間には友好的な空気さえ感じ取れる。

玉座の階段に座つたままのシルヴィア王と、腕を組んでそれを見

上げるミュレイ。ミュレイ曰く、“シルヴィアと煙は高い所が好きだ。それで、彼女はいつも高い所に居たがるらしい。しかしこれだけみているとミュレイが子供の姿なので、なんともいえない状況だぞ……”

「フツ、別段それでも構わないが……。私はいつでも戦争をする準備があるからな」

「そういう事を言っていると、またステラが来る事になるぞ？」

「……………。 “神の使徒” 気取りの機械人形か。あんなもの、我が剣で叩き斬ってやるぞ」

噂に違わずシルヴィア王はアクティブな王様だった。なんだか話の趣旨がずれてきている気がするが、ミュレイはその猪突猛進なシルヴィアを上手くコントロールして話を前に進めている。

「しかし、お主らしくもないのう。こんなに急ごしらえの軍隊を展開してくるとは」

「当然だ。最初から戦争などする積りはないからな。だが」

そこでシルヴィアは一旦言葉を詰まらせた。表情の曇りは直ぐに払われ、王は指先で自らの膝の上を叩きながら、静かに目を細めた。

「…………敵は何もククラカンだけではないのだ。貴様とて同じ事だろ」

私にはその意味はさっぱりだったが、ミュレイは意味が判つたらしい。眉を潜め、なにやら気難しそうな顔をしている。さて、私が馬鹿なのか、それともこの二人が阿吽の呼吸なのか……。

「成る程……。であれば、この騎士団の展開も納得じゃな。お主も中々に苦勞していると見える」

「单身、出かける事もままならぬのだ。ふん、下らぬ時勢になったものだ……。時にミュレイ、貴様には質問したい事がある」

「わらわもじゃ」

「貴様……うちの馬鹿姫を拉致したか？」

「お主こそ、わらわを暗殺しようとしておるのか？」

二人は同時に睨みあう。流石にこれは険悪かと思いきや。ウサクはニヤニヤしているし、ゲオルクも何故か呆れたように目を閉じて黙っている。なんとというか、さつきシルヴィアの戦闘力は見たけれどこのままほつといたら危ないのでは……。

しかしそんな私の懸念は杞憂に終わった。二人は同時に疲れたように溜息を漏らし、それからシルヴィアは紅いマントをはためかせ立ち上がった。

「となれば、誰がこんな事を仕組んだのか……徹底的に洗わねばならんな」

「じゃのう……。まあ、大方誰の仕業かは検討もつくが……」

「真実さえ判ればもうここに用はない。ザルヴァトーレ軍は撤収す

る。お互い、健闘を祈る」

「うむ。わらわも出来る事はやってみよう。シルヴィア、手間をかけたな」

「気にするな。私と貴様はライバル……そして、生涯の友だからな」

シルヴィア王はそのままスタスタと歩いて去って行ってしまった。シルヴィアが居なくなると同時に本陣撤収の準備が開始され、私達はミュレイに駆け寄った。

「えっと、何がどうなったの？」

「………………。どうやら、女王であるあやつは今回の件に関与していないようじゃな」

「今回の件って、ミュレイの暗殺……？ でもザルヴァトーレの刺客だったんじゃないの？」

「確かに、シルヴィアは気性が荒く考え無しの鉄砲玉で、王にしておくより騎士団にでも入れておいた方がまだマシというくらい荒っぽい女じゃ。しかし一本筋の通った、えらく気持ちのいいやつなのじゃよ。暗殺するくらいなら、自分で殺しに来るじゃろう」

それはつまり、ミュレイ暗殺はシルヴィアが計画したものではない…………。つまり、ザルヴァトーレは関与していない、という事になるのだろうか？ でもミュレイだって姫の拉致なんて仕組んでいないというし、じゃあ何がどうなっているのか…………。

話についていけないのはどうやら私だけらしく、ゲオルクはウサクと兵を数名残して本陣に戻ってしまった。なんでも撤収やらなに

やらやる事があるらしい。ミュレイは考え事をしているのか、近くにあった岩の上にちょこんと座り、夜空を見上げていた。なお、この間も周囲ではザルヴァトーレ軍の撤収が続いている……。

「私はこの状況についていけなくなりつつあるんだけど……。ミュレイ、これからどうするの？」

「うーむ……。今ちょっと考え中じゃ。どうしたもんかのう……」

考え込みながら足をばたばたさせているミュレイ。その隣に立ち、暇だったので私はあちこちへと視線をめぐらせていた。すると、こちらに向かつて走ってくる二つの人影が。

片方はもう見慣れてしまったザルヴァトーレの甲冑を装備し、もう一人は白いドレスを身にまとっている。ドレスのデザインと顔つき、綺麗な金髪で私でも直ぐにわかった。あれは。

「って、マジで!?! ミュレイ、あれ!」

振り返ったミュレイは驚き、岩の上から飛び降りた。こちらに駆け寄ってきた少女は肩で息をし、白い肌に汗を浮かべながらミュレイをじっと見つめた。傍らの騎士は何も言わず、自らの主の言葉を待っている。

「失礼……! シルヴィア王は何処へ!?!」

「シルヴィアならついさっきこの本陣から撤退したぞ、シエルシ」

「……………え? どうして、私の名前を…………?」

「わらわじゃわらわ。ほれ、よく見てみよこの顔」

シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……。行方不明になっていた、ククラカンに拉致されたと言われていたザルヴァトーレの第三王女だ。近くで見ると、シルヴィアによく似ている……。シルヴィアよりもかなり華奢で儂い印象だが、女の子ならこのくらいで別に丁度いいのだろう。むしろ、お姫様って普通こっぴょういもんだ。大剣とか振り回したりしない。

姫はミュレイに近づき、その顔をじっと覗き込んだ。それから暫く考え込み　慌てて一歩身を引く。どうやら誰だか判つたらしくミュレイは満足げに腕を組み頷いた。

「久しいの、シエルシ」

「ミュレイ、ヨシノ……！？　どうして貴方が、ここに……！？」

「待て、少し落ち着け。単刀直入に言うが、お主を拉致したのはわらわではない」

「え？　ど、どういう事なんですか……？」

シルヴィアはともかく、実際に誘拐されたシエルシまでもがククラカンに誘拐されたのだと思っただけで、こうなると話とはかなりややこしい。シエルシがそう判断するには必ず理由があったはずだ。そこでミュレイはシエルシを引きとめ、話を聞くことにした。

彼女が拉致されたのは一ヶ月ほど前の事で、ザルヴァトーレにある城の中で拉致されたのだという。そのまま国外に連れ出されそうになっている時、この傍にいるイスルギという騎士が助けたそうなのだ。

その後、彼女がどこでどうしていたのかは特にミュレイは言及し

なかったが、結果として彼女は無事にこうして戻ってきた。そして今国境沿いで大変な事になっていると聞いてあわてて駆けつけた、ということらしい。

「そうじゃったか……。難儀じゃったのう」

「ミュレイ様、これは一体……」

「判らぬが、兎に角その話をシルヴィアにも聞かせてやってほしい。今ならまだ追いつけるはずじゃ」

「は、はいっ！ それでは失礼します、ミュレイ様！ 詳しい話は後日、正式な会議の場で……！」

シエルシはぺこりと頭を下げ、走り去っていく。流石に周囲のザルヴァトーレ兵が気づいているのか、彼女をさりげなく護衛するよくな動きが見られた。ふと、残された彼女の騎士はミュレイを見下ろしていた。黒髪の、物静かな雰囲気男性だった。

ミュレイはおもむろに溜息を漏らし、それから騎士に歩み寄る。二人は二言三言交わし、騎士は主を追って走り始めた。二人が何を言っていたのかはわからないが、ミュレイの横顔は何故かとても寂しそうだった。

首をかしげる私の肩をウサクが叩き、首を横に振った。どうも、色々と訳アリらしい……。何はともあれそんな感じで、今回の一件は無事に完了したのである。両軍の撤退を以って、戦争の危機ミュレイとシルヴィアにそんなつもりはなかったらしいが、は去ったのである。

そして、私達は一度ラクヨウ城に戻る事になり、再び束の間の休息が訪れようとしていた。

ラクヨウに戻ってきた私達は、そのまま城に暫く滞在する事になった。まだ数週間しか離れていなかったラクヨウだったのだが、久しぶりに平和な街を見て私は思いつきり懐かしくなってしまう、なんだか泣きそうになってしまった。

まあ、言うまでも無く私は結構涙脆い……。ちょっとしたことで泣きたくなるし、ちょっと嬉しいと泣きたくなるのだ。でも考えてみれば当たり前だ。ここに来てから色々ありすぎてずっと緊張の連続、やっとほっと一息つけたのだから……。

さて、その後例の戦争騒動はきっちり決着し、数日後にきちんとした二国会議は開かれる事となった。今後の予定はそれから決めるという事になり、私も必然それまでは待機という形になる。

一体全体何がどうなってあんなことになってしまったのか、正直私には謎だ。シルヴィア王は確かに悪い人には見えなかったし……シエルシ姫もものすごく可愛い女の子だった。あれくらい可愛ければ人生楽しいんだろうな……というくらい可愛かった。そして、別に腹黒そうにも見えなかったし嘘もついているようには見えなかった。

じゃあそれこそもうなんだったんだって話になるのだが、話を聞いているとやっぱりシエルシを襲ったのはどうもククラカンの人間らしいのだ。ククラカンの忍隊が装備している唐傘や合羽が見つかったとかで、身のこなしも明らかにククラカンの忍隊だったらしい。というのは、イスルギという彼女の騎士の話なのだが、それをミュレイは丸々信じているようだ。

何を信じて何を疑えばいいのかわからないが、こっちだって敵は

ザルヴァトーレの甲冑を装備した騎士だったっていう確かな情報がある。やはり信じるべきは自分なのか、それともあの少女の真っ直ぐな目を信じるべきなのか……。

「おい、もっと集中しろ」

「へ？ あいつたつ！？」

気づいた時には既に遅し……。ゲオルクの放った竹刀の一撃が私の頭を直撃していた。激痛に膝を着き、もがく私……。そう、私は現在絶賛修行中だったのである。

時間があるのならば修行、というのは既に私の日課になりつつあった。ゲオルクは嫌な顔一つせずそんな私に毎日付き合ってくれるいや、いつも嫌そうな顔してるから判らないだけなのかもしれないが……。

ラクヨウ城内にある修練城でこうして稽古をつけてもらうのはもう何度目かもわからない。それが生活の一部になってから、数を数える事は無くなったからだ。頭を撫でながら立ち上がり、私はゲオルクを見上げた。

「そんなに思いつきり叩かないでよ……」

「訓練中にボーっとしているからだ、阿呆……。もっとシャキッとしろ、シャキッと」

そんな事を言われても、私はシャキットした女の子とはほど遠いわけだが……。

「余計な雑念は捨てると毎日言っているだろう。ちゃんと人の話は聞け」

「それは聞いてるけど……。ねえ、ゲオルク？ 私達、これでよかつたのかな？」

「……なんだ、偉く唐突だな。どうした？」

「いや……うん、そうだね。唐突だった」

気を取り直し、竹刀を構える。今度は集中を高め、ゲオルクの動きに対応しなければならぬ。私は思い切りゲオルクへと踏み込んだのだが、集中していてもやはりまだ天と地ほどの実力差がある。一生それが縮まる事はないような気がしたが、兎に角どっちみちゲオルクの竹刀は私の頭をぶっ叩くのであった……。

まるで勝てる気がしないので、私は基礎訓練をするふりをして考え事をする事にした。ゲオルクは他の仕事もあるので、一日の中で修行に付き合ってくれる時間は限られている。残った時間は大体一人でトレーニングというのが私の常である。ウサクも最近忙しいのか、ミュレイにつきつきりだし、ミュレイはミュレイで不在時の仕事やら、今後の方針の決定やらで忙殺されているらしい。冷静に考えてみたらミュレイはいつも元々忙しそうだったし、あんなにのびのび旅なんかしてたのが不思議なくらいだ。

こうなつてくると折角仲間になれたと思つた皆とも離れ離れになり、仕事が無い私は余計訓練に専念するしかなかった。城下町をラニングで一周し、城内に戻って筋力トレーニングを続ける。あんまりムキムキにはなりたくなかったが、心配せずともムキムキにはなれそうもなかった……。

手ぬぐいで汗を拭き、結んだ髪を解く。なんだか長髪はめんどくさいので止めたいのだが、この街に髪の毛が切れる人間っているのだろうか……。今度駄目もとでミュレイに頼んでみようか。彼女何でも出来そうだし……。

というか、なんかこの修練場にいると、他の武士たちからの視線が痛い……。武士の中に女性が全く居ないのは、ククラカンでは男が戦うのが当たり前であり、女は家にいるもの……という風習があるかららしい。そんな女である私がここにいるのが気に入らないのか、それとも他の要因があるのか……。まあ、屈強な男達に囲まれているのはあんまりいい気分じゃない。

修練場から抜け出し、井戸から水を汲んで桶に頭を突っ込む。ああ、気持ちいい……。ていうかなんでこの国の水はこんなに綺麗なんだろうか。私の世界の水道水とは余りにも違いすぎる……。

「何をしているんだい、君？ それは君の世界の風習が何か？」

「ぶはあっ!？」

背後から突然声をかけられ、慌てて桶の中から復帰する。背後には何故か、タケル王子が立っていた。何でタケル王子……？ ミュレイと同じく忙しすぎるはずの彼が、なんでこんなところでフラフラしているんだろうか。

「……こんにちは、王子」

「タケルでいいよ、救世主」

「えーと、どうしてこんな所に？」

「最近、修練城に女の子がいるっていうんでうわさになってるからね。様子を見に来たのさ。君、居づらくないのあそこ？ みんなじろじろ君の身体、見てるでしょ？」

言っている意味がわからなかった。首をかしげていると、タケル

は口元に手を当てて無邪気に笑う。こうしていると本当にただの美少年なのだが……。口が悪くなければなあ……。

「それって面白半分でふらついてるって事か？」

「そうなるね。まあ、いいのさ。仕事は姉上がやったほうが僕の何倍も捗るんだ。それより気になる事もあってね」

彼は周囲をきよろきよろと見渡し、人が居ないのを確認すると私の手首を握り、ぐつと身を寄せてきた。あんまり人と距離を近づけることの無い私からしてみると、それだけでもうびっくりしてしまっただけ……。それでは飽き足らず、彼は私の耳元に顔を寄せてきた。

「……今、この城には魔剣狩りが収容されているのは知っているかい？」

「え？ それは、うん……まあ」

この間の一件でステラにぶちのめされた魔剣狩りは完全にノックダウンされ、血を吐いて白目剥いて気絶してたような気がする……。そのままこの城に監禁されているというのは話だけは聞いていたけれども、あんな物騒なのがあるわりには城が平和なので特に気にしていなかった。

「魔剣狩りは、地下牢にいるんだ」

「そうなんだ」

「それで、君が彼に会いたいかと思ってね」

「……………ふーん……………って、何で？」

「色々、あるだろう？ 僕と一緒に行って上げるから、彼と話をしてみるといい。面白い事が判るかも知れないよ」

怪しすぎる……………。ここまで露骨にうさんくさい笑顔というものは私も始めてみたわけだが…………。まあ、確かに魔剣狩りには興味があった。彼はどうやらミュレイの過去を知っているみたいだったし、それに魔剣狩りにあってもう一度ちゃんと顔を見れば、忘れて居る事を何か思い出すかもしれない。

確かに提案としてはとても魅力的だ。普通に素直についていってもいいのだが、そうできずに踏みとどまる理由は単に彼のうさんくささにある。なんで王子がここに？ 何で私に？ 何で一緒に？ 疑問は尽きない。しかしそんな私の心境を察するように、彼はにこりと微笑んだ。

「僕も、彼には色々訊きたい事もあるんだ。だから、ついでだよ」

「……………ついで」

「それに、姉上に見つかつたら怒られるから今しかチャンスがないんだよ。ふふ、ちょっとわくわくしないかい？」

こいつ…………。まあ確かに子供なのだが、そんな下らないことでニコニコしているのか…………。まあ、特に悪意無く子供の悪戯に付き合えというのであれば逆にじっくりくる。私だって小さい頃は特に何か意味がなくなるとも、ワクワクするような事には何でもチャレンジしていたものだ。

怒られると判っているのに、兄さんのお菓子を食べてみたり…………。

兄さんの玩具を隠してみたり……。兄さんのおねしよをバラしてみたり……。兄さんが入ったトイレの鍵をかけてみたり……。

「……。何やってたんだ、私は」

「何がだい？」

「いや、なんでもない……。えーと、地下牢だっけ？ 別に暇だから、付き合ってもいいけど」

「本当？ 良かった、一人じゃ少し心細かったんだ。ありがとう、
昂」

そう言っただけは私の手をぎゅっと握り締め、にこりと微笑んだ。天使のような無垢な笑顔……。のはずなのになんでこんなに胡散臭いんだろう。まあ、頼りにされるのは実はそんなに嫌いではない。最近はお荷物になってばかりだったしね。

「地下牢の鍵は持ってきたから、このまま直ぐに向かおう。さあ、急ぐよ昂」

「あ、うん……。？ え？ 手を繋いだままいくの……。？」

仕方が無く、私は彼に続いて歩き始めた。そうして地下牢に潜入する事になったわけだが……。まさか地下牢であんな大変な事になるうとは、まだその時の私は何も知らなかったのである……。

Stella (2) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

昴ちゃんは眼鏡っ子

シエルシ「やっと出番がありました！ ちょっとだけでしたけど……」

ミュレイ「まあ、そんなに落ち込む事も無い。これからお主の時代が来る……かもしれぬし」

シエルシ「……………」

ミュレイ「時に昴、お主は眼鏡っ子なわけじゃが」

昴「えっ！？ ミュレイ、急にどうしたの……」

ミュレイ「いや、お主が眼鏡ついたり外したりする描写がないな！
と思つてのう」

昴「そりゃ、眼鏡は頻繁に着け外しするもんじゃないでしょ。基本的に一日中かけてるもんだよ」

ミュレイ「まあそれもそうなんじゃが、修行中とかほれ今回あった桶に顔ドボンとか、眼鏡かけてたら大変じゃろう？」

昴「そりゃ大変だよ……。修行中は眼鏡外してるからね。あとお風呂の時とか……当たり前だけど」

ミュレイ「そんな状態で修行が出来るのか……?」

昴「メリーベルにコンタクトレンズも作ってもらったし、眼鏡も修理してもらったからね。それに両方ともなんか凄く頑丈になったみたい」

シエルシ「……。うう、私だけまだメリーベルに会ってないです……」

昴「……………」

ミュレイ「……………。ホクト編でも出てきてるのにな」

シエルシ「うわーん!! メインヒロインになりたいですーっ!!」

昴「今のところうさ子が、まあ百歩譲ってアクティだね」

シエルシ「……………。私はどうして生まれてきたんでしょうか」

ミュレイ「ま、まあそんなに落ち込むな! 昴編メンバーなんか全体的に出番少ないんじゃないかな!」

昴「私は別に、出番なくてもいいけど」

シエルシ「主人公の余裕ですか、それはっ!??」

ミュレイ「(とか言っていると、アンケートの時に主人公は人気なかったりするわけじゃが……………」

地下牢へ続く道は忍隊によって管理されていたわけだが、それはタケルが何とか言いくるめたいらしい。忍隊もこんな王子にちよろちよろされては堪ったものではないのだろうが、まあ今回は少し多目に見てもらおう事にする。

ラクヨウ城の地下には武器庫や倉庫、或いは温泉なんかがあるわけだが、それらとは一線を画した場所に地下牢は存在した。地下よりさらに地下に階段を使って降りていくと、そこは壁などに呪文のような文字が刻まれ、常にそれらが輝く奇妙な空間だった。牢獄はさらにその奥にあるらしく、タケルはどんどん奥へと進んでいく。

「地下牢に入るのは初めてかい？」

「え？ あー……そりゃね」

「ここは、壁そのものに特殊な術式を施してあるんだ。この壁に囲まれた中……まあつまりこの牢獄の中では魔法も魔剣も使えないというわけ。だから安心して歩いていいよ」

「そ、そう……」

まあ、牢屋の中をリラックスして歩けたらそれはそれでどうなのかと思う……。結局私は居心地の悪さを拭い去れないまま、奥へ奥へと進んでいく。魔剣狩りが拘束されているのは独房で、他の牢屋よりも更に嚴重に術式封印が施された場所だった。

一見すると座敷牢のようになっていたのだが、魔剣狩りは全身に封印が施された帯を巻かれ、両腕は嚴重に鎖で拘束されている。こ

ここまでする必要があるのかと思うほど、彼の扱いは慎重だった。猛獣……人間というより、獣を扱っているかのように。

「……………。お前は、あの時の女か」

私達が近づいてくるのが見えたのか、ヴァンは静かに顔を上げた。敵意丸出しの、実に鋭い目つきだった。こんなに目つき悪いと何もしてなくても怖い……。若干怯える私だったが、ヴァンはそれ以上何をしてもなくただ私を見つめ続けていた。

傍により、恐る恐るその顔を見してみる。その顔は　　当たり前だが、全く見覚えのない顔だった。見れば何かを思い出すかと期待していたのだが、それも直ぐに裏切られる事になった。あの時は……何かを確かに感じたような気がしたのだけれど。

じつとヴァンを見つめていると、ヴァンは眉を潜めて私を睨み返してきた。まあ、行き成りやってきてジロジロみていたら流石に不審だろう。私は咳払いし、改めてヴァンを見つめる。体中、傷だらけだった。鎧は外されたのか、今はどこにも置いてない。この人は一体今までどれだけ戦いの中に身をおいてきたのだろうか……。師匠の身体もそういえばこんな感じに傷だらけだったような気がする。

「どうした。俺に何か用か？」

「あ、いや……そういうわけじゃないんだけど……」

「……………はあ。ハッキリしない女だな……。お前、どうしてミュレイの傍に置かれてるんだ？　ミュレイの気が知れないぜ」

まあそりゃそうなんだが、そこまでハッキリ言われるとこっちもちょっとむっとしてしまふ。そりゃ……。私は無能だ。頭がこれといつていいわけでもないし、戦闘能力だってない。こっちの世界の常

識にも疎い、一人じゃ生きていけないような駄作な式神だ。でも、これでもミュレイを助けたいという気持ちだけは持っているつもりだ。

「……そういえば、ヴァンはミュレイと知り合いみたいだったけど……」

「そんな事を聞いてどうする」

「……いや、えっと……」

「俺の言った事が気になってるのか？ 敵の言葉に一々惑わされるようじゃ先が思いやられる……。真実はお前が自分で判断する事だ。他人を頼るな」

まるで私の心を見透かしているかのようにヴァンは語る。確かに……ヴァンの言っていた事が気になっているのも事実だ。ミラがどうとか……。ミュレイがどうとか……。ちょっとただけけど、なにやらぶつぶつ言っていた。それを気にしているというのは認めたくないけれど、でも丁度いいからついでに知るのもいいのかもしれない。

勿論、ミュレイの事は信じている。でも、何も知らないまま……ここで生きていく事はきつと出来ないんだ。心のどこかでミュレイが私に優しくしてくれる事に、理由を求めていたのかもしれない。無償の愛なんて、そんなものは絶対に在り得ないから。

「判断しようにも、何も知らなきゃ出来ない」

「……。普通、敵に訊きに来るか？ ミュレイに聞くのが早いだろう」

「教えてくれないよ、きつと……。ミュレイは、私には何も言ってくれないから」

ここに戻ってきて、そして旅をしてわかった事がある。ミュレイはやっぱり一国を支える重要な人物であり、その生い立ちには様々な苦悩があったはずなのだ。今だって色々と苦労している。でも私は、ミュレイが愚痴を聞いた事がない。ミュレイが他人を悪く言う所を、世の中を嘆く所を見たことがない。彼女は常に冷静で、楽観的に笑っている。まるで悪ふざけを続ける子供のように振舞うその態度は確かに私達にとっては安心できる。でも、ミュレイはきつと色々な物を抱え込んでいるはずなのだ。

私は、いつもミュレイに頼りっぱなしだった。彼女を助けたいと思ってもこの通り何も出来ない人間だ。だからせめて、彼女の心を少しでも楽にしてあげたいと思っている。でも、ミュレイはそれを許さない。自分に敵しすぎるのがミュレイの悪い所なのだ。彼女はきつと、私に頼る事を許さないだろう。

「だから、あんたに訊くしかないんだ……」

「……………」

ヴァンはしばらく黙り込み、しかし出て行けとも煩いとも言わなかった。それは私に対する肯定だったのかもしれない。思い切った話を続ける。

「ヴァンはどうして魔剣狩りなんてやってるの？」

「……………全ての世界に存在する、全ての魔剣を手に入れる為だ」

「全ての魔剣……？」

「ロクエンティア最強の武器、それが魔剣だ。この全ての世界の中で魔剣は本来ある目的の為に存在していた。俺はその目的を果たす為……いや、今のところそんな大義名分はどうでもよくなりつつあるが」

ロクエンティアに点在する術式武装、“魔剣^{シン}”。それらは人の身体に宿り、人間の力を覚醒させ体内に眠る潜在魔力を剣の形に放出する事を可能にする。身体能力強化、特殊能力の付加、様々な魔剣そのものの力……。人間は魔剣を手にした時圧倒的な力を得る。それはミュレイが単身魔物の群れを薙ぎ払うように、この魔剣狩りや、例の刺客や、ゲオルクやシルヴィア王、皆がそうして戦うのを見て理解している。魔剣は恐ろしい……。この世界には魔力という概念があり、それが人の力となる。でも、魔剣のあるなしはそれこそ雲泥の差だ。

しかしその魔剣がそもそもどんなもので、何の為にあり、どうして人の間に伝わっているのか……。それを私は知らない。魔剣狩りの目的が魔剣の本来の使い道を意味しているのならば、それはそれで興味がそそられるテーマでもある。

「俺は、全ての魔剣を集める事を目的とし旅をしてきた。その途中、ミュレイとも知り合う機会があっただけだ」

「全ての魔剣を集める為、か……。それって途方の無い事じゃないか？」

「そうでもないさ。魔剣使ってのは、大体固まっているもんだからな。騎士団なんかの軍事組織、それから王族や貴族……。この世界の大多数である貧民の所には魔剣なんてもんはありゃしないのさ。

持っているとするれば、反帝国組織の人間くらいか」

まあ確かに、そうであれば集めるのはそんなに難しくはないのかもしれない。ある程度的が絞れば……って、そもそもこの世界全体が恐ろしく広いんだからそういうわけにもいかないだろう。誰が持っているのかを見分ける方法だってないわけだし……。

「そっか、ミュレイも魔剣を持ってた……しかもかなり強そうなのを」

「あいつの魔剣は、帝国でいうところのカテゴリースだからな。まあ確かに、炎魔剣ソレイユが欲しいというのはある。だが、俺はソレイユを奪えない理由があった」

「理由……？」

「この国には、ミラという姫がいた。まあ、少し昔話をしてやる。お前にも関係ありそうな事だ。それに　騙されているなら、目を覚まさせたほうがいいだろうしな」

ミラ・ヨシノ。ミュレイとは、少し歳の離れた妹だった彼女は、とても平和的でおっとりした性格の姫だったらしい。そのくせに無謀にアクティブで、人々の戦乱を収める為に様々な努力を惜しまなかった。

今から数年前にも、ククラカンとザルヴァトーレは戦争状態に陥りそうになった事があるらしい。ヴァンに言わせればこの二国は本当にいつ戦争になってもおかしくなくらいだそうだが、ミラはその時戦争を止め様としてある事件に巻き込まれ、命を落とす事になった。

彼女はククラカンとザルヴァトーレの和平の為、格差社会を何と

かする為に常に各地を旅していた。ヴァンと出会ったのもその旅の途中で、ヴァンはミラの護衛役として旅を一時期共にしていた事もあったという。

「間抜けな女だった。他人を疑うという事を知らないというか……。とにかく俺がほつつておいたら、あいつは騙されて身売りに出される所だった。結局変なのを助けちゃったと思いつつ、俺は彼女を護る旅をする事になった」

「……………。ヴァンって、結構お節介焼きなの…………？」

「……………話を続けるぞ」

もしかしたらヴァンはそんなに悪い人ではないのかもしれない。というか、もう悪い人には思えなかった。彼はミラと旅をし、そこで様々な場所で他人助けをしたという。所謂世直しの旅だ。その途中、ヴァンは魔剣を集める事も同時に行っていたのだが、彼はまだ当時は魔剣狩りなどと呼ばれるような人間ではなかった。

ただの傭兵と、そして一人の姫……。二人が親密な関係になるのにそれほど時間は必要なかった。ミラはヴァンを愛し、ヴァンはそれに応えていた。二人はお互い愛情を言葉にすることはなかったが、それでも常に思いは通じ合っていたという。

「……………恥ずかしい話だね」

「お子様だな。まあ、この話には色々続きがあるんだよ」

当時のククラカンは、まだ武力主体の体勢から変わりきれず、国も荒れていた時代だった。ミラは単身、国同士の和平を紡ごうとしていた。だがその最大の障害となったのが、彼女の姉でありこの国

で最も強い魔術師であるミュレイだったのである。

Stella (3)

ミラ・ヨシノが命を落としたのは、今からまだ三年前の事……。ミュレイにとつても忘れられないその事を今でも彼女は時々夢の中で思い出す。

当時、ミュレイは武力により民衆を支配し、敵国を支配し、行く行くは帝国をも支配しようと考えていた。それも全ては民の為、格差を失くす為ではあった。帝国の支配体制が続く限りこの世界に自由はない。ならばその時まで理想を掲げ、徹底した武力と圧政により民衆を纏め上げ一丸としようと考えたのである。その思想を理解する人間は決して多くはなかった。だが、妹のミラは常にそんな姉のやり方を理解し、そして同時に反発もしていた。

普段から平和に、穏便にと物事を済ませようとするミラの態度は自分への無理解へつながり、ミュレイはミラを見る度に苛立つようになっていた。ミラが国を飛び出し、あちこちで人助けの旅をしていると聞いたときは何を無意味な事かと思っただし、あるところかどこの馬の骨とも知れない傭兵風情と結婚したいなどと言い出した時にはそれこそ腸が煮えくり返るような思いだった。

「お主はいつまで夢の中で生きているつもりじゃ」

久方ぶりに城へと戻った妹に、ミュレイはそう言葉を投げかけた。二人きり、ミュレイの部屋の中ミラは座布団の上に座り込んでいた。ミュレイも美しい姫であったが、ミラもまた美しかった。燃え盛る

焰のような妖しさを持つミュレイと比べ、ミラは暖かい陽だまりのように可憐な少女だった。真紅の瞳、真紅の髪……。二人は似ているようで、しかし対照的であった。それは二人の思想が大きく異なっていたからに他ならない。

「今、ククラカンは大事な時期……。三年後に迫った婚姻の儀に合わせ、帝国に反旗を翻す為に重要な準備期間なのじゃ。それはお主も理解しているはず」

「……………姉さん、謀反は良くないとあれほどお話しているのに……。姉さんはどうしても武力による解決を望んでいるんですね」

「当然じゃ！ 話して聞き入れるような相手ならば、とっくにそうしておる。帝国は我々下層の民の事など、道具程度にしか考えておらぬ」

「しかし姉さん。姉さんの方こそ、帝国に感化されすぎているのではないですか？」

妹の言葉にミュレイは眉を潜めた。ミラは立ち上がり、窓辺から街を見下ろす。活気無く、戦の準備に疲れ果てた民が暮らす城下町を……………。

「姉さんのやり方、言葉は全て帝国と同じ事です。姉さん、どうしてもそんなに変わってしまったの……？ 姉さんは、あんなに優しくったのに……………」

「それが姫の使命だからじゃ。ミラ、お主もいつまでもふらふらしていないで城に戻れ。お主にもやってもらわねばならぬ事は山ほどあるのじゃ」

「……………。姉さんにとっては、私も政治駆け引きの道具なんですね……………」

実際、ミラはミュレイに比べ下々の人間からも支持を受けている姫であった。政治手腕や戦闘能力においてミラはミュレイに遠く及ばなかったものの、ミラは人々に愛され受け入れられる才を持っていた。彼女の純粹さ、そして真っ直ぐな目は時にミュレイを苦しめた。視線をそらし、背中を向ける。ミュレイはもうミラに何も言わなかった。

「姉さん……………。どうしても、判ってくれないんですね……………」

それはミュレイも同じ気持ちだった。結局二人は理解しあう事が出来ないまま……………お互いにすれ違い道を往く事になった。そしてそれが、ミュレイとミラ、姉妹が交わした最期の言葉となる……………。

城を出たミラはそのままもう城に戻る事はなかった。旅の途中、草原の中でミラは焚き火を囲んでいた。炎の向かい側ではヴァンが座り、炎をじつと見つめている。二人の逃亡生活にも似た世直しは続き、しかし終わりは見えなかった。ミラは姉と理解しあえない事を苦心し、常にそれをどうにかしたいと思い悩んでいた。ヴァンもその相談に大分乗ったのだが、結局たかが傭兵に国や政の事は判らない。ましてやこれは姉妹の問題、ヴァンに出来ることなど何も無い。

「……………ヴァン、私はどうしたらいいのでしょうか……………。どうしたら、姉さんとまた共に歩む事が出来るのでしょうか……………」

「無理なんじゃないか？ お前は十分彼女に言葉をかけてきた。だが、ミュレイは理解しようとし……………。勝算もないのに帝国に挑

む積りなんだかねえ」

「姉さんには、式神の力があります……。この世界の常識を超えた存在を召喚すれば、或いは……」

「………………。どちらにせよ、諦めた方がいい。やるだけ無駄だ」

「どうしてヴァンは、そうやって意地悪ばかり言うのですか……？
姉さんは……。姉さんは、本当はとても心優しく、暖かい人なんです。ヴァンは姉さんのこと、何にもわかってないんですっ」

怒り出し、泣きそうになりながら膝を抱えるミラ。ヴァンは困ったように肩をすくめ、風に靡く草原を見つめた。世界は広く、常に闇と光は表裏一体である。ミュレイもミラも、どうしようもない事はある。正義もあれば悪もあり、主義主張は交じり合わない事もある。だが、闇も光も世界には必要な事柄なのだ。

ミラは旅の最中、ヴァンと共に様々な物を見てきた。圧政に苦しめられる人々……。命を、物を、奪い合い傷つけあう人々……。差別、格差、矛盾した人々の善悪と渴望……。闇と呼んでなんら差し支えないその世界を見てなお、それでもミラは真っ直ぐだった。穢れなかった。理想を抱き続けた。だからこそ、ヴァンはここにいる。

「よお、ミラ。そんなにへこたれんなって」

「…………。もう、ヴァンなんて知りません」

「そうつれない事言うなよ。まだ三年……三年もあるんだ。心配するな、きつと何とかなる。俺がなんとかしてみせるさ」

何の保障もない、ぺらぺらに薄い紙のような言葉だった。風が吹けば飛ぶような、火が当たれば燃えるような……。弱弱しく、頼りない言葉だ。それでもミラは顔を挙げ、涙を拭って立ち上がる。

ヴァンの腕の中に飛び込み、姫は静かに涙を流していた。傭兵は姫を優しく、そして力強く抱きしめる。ミラは純粹に、無垢に、世界を変えようと努力してきた。だからこそ、その努力に報いる為に……。理想を叶える為に、自分は存在するのだと。傭兵は傭兵でしかなく、けっして高尚なものではなかった。それでも、一端の騎士であるかのように、姫に確かな忠誠を誓っていたのである。

二人の若者にとって世界は余りにも醜く、無慈悲で、しかし希望は手放せないものだった。たとえもうたった三年しか時が残されて居なかったとしても……。それでも、二人は最期まで運命に抗いたいと、そう願っていた。

「……………ヴァン。私、貴方とずっと一緒に居たい……。それは……どうしても許されない、罪なのでしょうか……………」

ヴァンには何も言えなかった。ミラには、役目があった。婚姻の儀。三年後に行われる、次期女王の選定と同時に皇帝の妻を決める儀式。指名されていたのはミュレイではなく……。妹のミラであった。

三年の月日が流れれば、確定した別れの時が訪れる。そうでなくてもククラカンはいよいよミラを連れ戻そうと必死になるだろう。ヴァンはミラの意味に従い、彼女を護り逃がす使命があった。それが自分の、運命なのだと思っていた。

「ミラが死んだのは、間もなくしての事だった。俺は結局ミラを護れなかったし、世界をどうにかする事も出来なかった。一緒に死ん

でやる事も出来ずに、こうしてまだ生きながらえてる」

「……………」

なんとというか、まるでファンタジーだ……。傭兵と姫、結ばれない恋……。か。乙女チックなのはいいのだが、私には無縁な話だ。いや、無縁でもないのか。絶対に叶わない悲恋というやつなら、少しは身に覚えもある。

地下牢でこんな血の通った話をしているのもどうかと思うが、私は既に看守用の椅子を持ってきて格子越しにヴァンと近づいていた。ヴァンも手を伸ばせば私に届くだろう。私も手を伸ばせばヴァンに届いた。でも何も起こらなかった。起こる気はしなかった。ヴァンは……。ヴァンは、悪い人間ではない。そんな風に考えてしまった自分がいたから。

「ミラと俺は、戦争に発展しそうになったククラカンとザルヴァトールを仲裁する為に戦場に向かった。だがそこで、ミラは殺されてしまった。姉であるミュレイを庇って、な……。まあ、話の大筋はそんな感じだ。話を聞いて判るように、俺はミュレイが嫌いだ。殺したいくらいにな」

「………………。でも、ミュレイは……。！ミュレイは今、世界を平和にしようとして……」

「それは、ミラの真似事をしていただけだ。ミラが死んで次の花嫁はあいつになったからな。まあ、国としてもふらふらして色恋沙汰にかまけてるようなミラより、しっかりしたミュレイが女王になってくれたほうが良かったんだろうし……。ラッキーだろ」

「そんな、言い方……」

「ミュレイは、何でも利用する女だ」

疲れたように呟き、ヴァンはそれから一呼吸を置いた。次の言葉を口にすべきかどうか迷ったように見えたのは私の思い込みかもしれない。ヴァンはそのまま、目を閉じて私に告げる。

「ミュレイは救世主というお前の立場を利用してしようとしているのかもしれない」

「え……………?」

「戦争にシンボルは必要なんだよ。お前という 救世主というシンボルを掲げ、帝国に反旗を翻す事……………それがミュレイの目的なのかもな。お前はかつて世界を救ったといわれる救世主の伝説に近い存在だ。本物じゃなかったとしても、民衆はこの御伽噺はよくよく知ってるからな」

何も言えず、私は黙り込んでいた。ミュレイの優しさ……………それが全部幻であったような気がしてしまったのだ。一瞬だけでもそんな風に思ってしまう自分がどうにも悲しく、そして腹が立った。

ミュレイは……………私を利用していいのかもしれない。私を都合よく使うつもりで飼い馴らしているだけなのかもしれない。でもミュレイの事を信じたい。私はヴァンの話を聞いても、ミュレイに対する気持ちは揺るがなかった。むしろ、少しだけ良かったと感じている。

「ミュレイの事が、ちょっとだけ判ったよ……………。ありがとう、ヴァン」

「……………。おめでたいな、お前の脳味噌は」

「……………私は結局、ミラの事は何もいえないけど……………。でも、ミユレイの言うとおりだよ。シルヴィアやミュレイを殺したって、ヴァンの気持ちはきつと晴れないよ」

ヴァンは私の言葉を黙って聞いていた。多分……………そんな事は言わなくたってわかってるんだと思う。でも、言っておけたかった。ヴァンだって悪くなかったんだ。ただ、皆の気持ちがすれ違ってしまっただけ。そうしなければならぬような世界だったってだけ……………。椅子を戻し、私はヴァンに背を向けた。これ以上ここに居たら……………泣いてしまいそうだったから。ヴァンやミラ、ミュレイの気持ちを考えたらいたたまれなくなってしまったのである。そんな私にヴァンは背後から、最後に忠告を付け加えてくれた。

「ステラには気をつける」

「え？ ステラって……………あのロボ子……………？」

「ロボ子……………？ まあそれだ。あいつは、帝国が下層世界に派遣している治安維持を目的とした存在で、戦闘力は見ても通りだ。一定以上の戦闘行為、或いは帝国に対する武力運動、法に触れる重罪を探知した時自動的に現れ、何でもぶっ殺す化け物だ。お前は……………気をつけるよ」

「……………。案外優しいんだね、ヴァン」

「……………ミラは ステラに殺されたんだよ」

それで何となく、彼が何を言いたいのかは判ってしまった。振り返る事はしなかった。彼は優しい、そして悲しい戦士なんだ。どう

したら救えるかなんてわからない。でも……こんな世界をどうにかしたいって、本当に思えたから。

私は牢獄を出て、そこでいつの間にか離れていたタケルと合流した。あっけらかんとした表情で“込み入った話みたいだったから離れてたんだよ”とかぬかすタケルと一緒に外へ出る。ほんの少しの間だけ遮断していただけの太陽の光が、今は何故かとても眩く感じられるのだった。

王者、降臨（1）

「しっかし、皇帝襲撃なんてよく考えるよな……」

溜息混じりに呟くホクトの傍ら、そこには煙草を啜えたブラッドの姿がある。二人が立つバテンカイトスの広場では、各ギルドごとに協議が行われており、迫る記念式典、そして婚姻の儀に乗じて皇帝ハロルドを討つ準備が進められていた。

作戦参加ギルド数三十二、魔剣使い総数二十五名の大規模攻撃作戦である。ここまで大きな動きをすれば今後ギルド全体が帝国の標的となる事は避けられないだろう。そうした意味もあり、ギルド組合内部ではこの作戦は賛否両論そのものであった。

ギルドに与しているからと言ってイコール反帝国思想と結び付けられるわけではない。現在各地の魔物討伐、治安維持、物資流通に技術支援……ギルドがまかっているこの世界の安全、必需性の割合は決して低くはない。むしろ下層の人間にとって、ギルド組合は無くしてはならないものだ。

だが反帝国ギルドが一斉に反旗を翻せば、これまで通り仮初とは言え平和が続く事はなくなるだろう。この世界全体が大変な戦の時代に突入するのである。バテンカイトスも今までは見逃されてきたが、作戦が始まれば放置というわけにはいかなくなる。

全てが変わる節目と呼べる瞬間が目前にまで迫っている……。ホクトは煙草を片手にその人々のざわめきを眺めていた。止めると言っただけのものではないし、では止めれば平和になるのかと言われればそれも違う。結局、本当に正しいことなど何一つなかった。

「ブラッド、あんたはどうするつもりだ？」

「そうねえ……。まあ、様子見かしら。少なくともサーペントヴァ

イトそのものは参加しない事に決定しているわ」

「反帝国組織なのに、か？」

「うーん、やり方がスマートじゃないっていうか……。そりゃ、ハロルドが第三界層から降りてくるのは珍しいし、千載一遇のチャンスなのは判るわよ？ でも勝算って言ったならそれだけ……。実際にどうやってハロルドを倒すっていうのかしらね」

ブラッドは反帝国思想の人間ではあったが、部下を無闇に死に追いやるような決断をするつもりはなかった。それに実際問題として、ハロルドを倒すのにはいくつもの生涯が存在する。

当然、帝国側も馬鹿ではないのだ。ククラカン、ザルヴァトーレを中心とした混成の護衛部隊を配備し、当然身の回りは帝国騎士団、そして剣誓隊によって固めている事だろう。十分な準備期間があるのはあちらも同じであり、世界中からハロルドを護る為の戦力が結集するのである。

ハロルドに辿り着く前に騎士団、剣誓隊の魔剣使い、そして更には治安維持の名目で武力介入を繰り返すステラという存在までいるのである。戦いになればステラの介入は避けられないだろう。考えれば考えるほど障害は多いのだ。

広場で演説やら何やらを繰り返す各ギルドの団長も、そのことは理解しているはずだ。勿論彼らも戦闘経験は並の帝国騎士よりも優れているし、より過酷な状況を生き抜いてきたという自信はある。反帝国組織が持ち得る腕利きの魔剣使いたちも出し惜しみ無くつき込むのだ。勝ち目は全くのゼロではない。だが勝算はどちらかといえば薄く、そして敗北は色濃いものである。

「ここで倒せなければギルドにはないわね……。帝国も今まで放置してきたギルドの動きを制限……。最悪、全面戦争になるかもしれない

ない」

「あんだだっ腕利きの魔剣使いなんだろ？ 手伝ってやりやいいのよ」

「うーん、そういうわけにも行かないのよねえ……。まあ、止めるって言って止まる連中じゃないし。組合なんて言ってるけどそれは名ばかりで、皆自分勝手なもの、ギルドって。まともに相手をするんじゃ疲れちゃっわ」

肩を竦め、笑うブラッド。ホクトは煙草を踏み消し喧騒をじっと眺めていた。そんな二人にアクティが駆け寄ってくる。ツインテールを揺らし、ブラッドの前に立ったアクティは怒った様子でブラッドに言い放つ。

「ボス！ どうしてサーペントヴァイトは参加しないのっ！？ みんなあんなに帝国をやっつけようって盛り上がってるじゃんっ！！」

「……………。あのね、アクティ。これはお祭りじゃないのよ？」

「そんなの判ってるよ！ ボクだって遊びでこんなところにいるわけじゃない！ 帝国を倒さなきゃ、エル・ギルスはいつまでも解き放たれないままなんだ……………」

拳を強く握り締め、アクティは視線を落とした。それから顔を拳げ、ホクトに駆け寄る。その手を握り締めてアクティは懇願した。

「ホクトは…………ホクトは、参加するよね？」

「あ？ ああ、そりゃな」

「ほんとっ！？ 嘘じゃないよねっ！？」

「ああ。そりゃ、俺はその為にここまで来たんだからな」

「ボス、ホクトだつてこう言ってるんだよっ！！」

しかしブラッドの表情は険しい。直ぐに呆れたように溜息を漏らし、アクティへと歩み寄る。少女の額を小突き、ブラッドは首を横に振った。

「あんたが行つてどうするつてのよ？ 魔剣も使えないくせに」

「ボクだつて戦士だよ！！ 銃だつて使える！」

「あのねえ、そんなに甘くないわよ剣誓隊は……？ 白騎士みたいなのがうじゃうじゃいるんだから」

その言葉にげんなりしたのはむしろホクトの方であつた。眉を潜め、黙つて次の煙草に火を点けている。アクティはむくれた様子でホクトの腕にすがりついた。もう意地でも離れないといったその様子に冷や汗を流すホクト。どちらにせよ少女の決意もやはり固かつた。

「まあ……じゃあ、アクティの面倒は俺たちで見るつてのはどうだ？」

「ヴァン……本気かしら？」

「ヴァンじゃないホクト君だ。まあ、どうせうちも大した戦力はな

いからな。後方支援がいい所だろうし……。アクティも無茶しないよな?」

「するよっ!! ハロルドを殺さなきゃ、この世界は良くなならない!!」

「そこは嘘でも大人しくしてるって言えよ……。ったく……。まあ兎に角、ほっといたってアクティは一人でも参加しちまうんだろうし……。俺と一緒にの方が安心だろ?」

「……………そうねえ。ま、貴方がいいっていうならいいんだけど」

溜息まじりに折れたブラッドを見てアクティはホクトに縋り付き、バタバタと足を振り回して喜びを表現した。猫のようににはしゃぐアクティの頭を掴んでひっぺがし、ホクトは煙草の灰を落として首を捻る。

「まあ、実際うちも参加するか怪しくなってきたんだけどな」

「えっ!? なんでっ!?!」

「うちの団長がやる気なくしちまったみたいだから……。アクティもよければ励ましてやってくれよ。でなきゃ参加出来ないし」

「も〜っ!! ほんっと迷惑! 判ったよ、ボクが何とかしてみる! ボス、もうボクは参加するって決めたからね! 止めたって無駄だからっ!!」

元気良く走り去っていくアクティを見送りブラッドは長い前髪を指先でくるくるとねじり、溜息を一つ。ホクトも同じように溜息を

漏らしアクティが去っていった人込みを見つめた。

「ありゃあ随分とおてんばだな」

「そうねえ……。まあ、あの子の世界を平和にしたいっていう気持ちは判らないでもないから、なんとも言えないわ。そりゃ、安全にしているほしいけど、大人の都合で子供を縛り付けるのもどうかと思っし」

「まるで親みたいなた台詞だな、ブラッド」

「あら、そんなようなものよ？ 私のかわいいかわいい娘だもの。まあ、後はロゼとリフル次第って所かしら」

二人の関係が複雑である事をブラッドは理解している。だがこれしきの事を乗り越えられないようならば、このまま離れ離れになったほうがいいのかもしれない……。とも考えていた。どちらにせよこれからはもう生半可な気持ちでは戦えない時代になる。この決断が吉と出るか、凶と出るか……。それは誰にも判らない。

問題といえば、ホクトもそうである。何にせよ様々な問題が密集しているのだ。特にホクトの周辺には……。ホクト自身、その答えは出ていないのかもしれない。だが時は止まらない。待つてはくれないのだ。人は急かされ、決断を焦らされる。結局は迫り来るその瞬間にどれだけ後悔しない道を選ぶかどうか……。ただその一点につかっているのだろう。

決して完全なる正解もなければ絶対の正義も存在しない。ならばここで憂うだけ全てが無意味なのだろう。行動し、前に進み、戦った人間の後ろにのみ結果は生まれる。今はその出でる存在が希望なのか絶望なのか、座して待つくらいのことしか出来ない。

「さてと……。俺はうさ子を拾って部屋に戻るとするか」

「そついえばあの子、最近見てないわね？　どうかしたの？」

「……いや、ここの飲食店で二週間くらいバイトしてたんだよ。小遣い稼ぎにもならないだろうに」

「というか、よくあの子を雇ってくれるところがあったわね……」

「それは俺も仰天だが、まあほっておけば美少女だからな、あれも……」

二人して深く考えないように気をつけつつ、その場を後にする。
決戦の日は既に、三日後にまで迫りつつあった。

王者、降臨（１）

「ホクト君、ホクト君」　こっち、こっちなーっ」

数々のショップが並ぶ商店街エリアの一角、うさ子が両手をぶんぶん振り回してホクトを呼んでいた。バテンカイトス内部はいくつかのエリアに分かれており、この商店エリアは明るく不思議な照明で照らされた、文字通り魔法の町である。黄色い壁、黄色いレンガの町……。イメージ的にはローティスと似ていたが、そこを利用する人種が決定的に異なる。

「うーっす。真面目に働いてるか、バイト君」

「真面目に働いたの！ うさはね、がんばったのっ！！ お金の大切さもね、よくわかりましたっ！！」

「そりやめでたい。で、何で俺は呼び出されたんだ？ お前バイト今日までだったんだろ？」

うさ子がバイトをしたいと言い出した背景にはホクトの金を使い込み、こっぴどく叱られた件があるのは間違いない。うさ子はそこでお金の大切さ、お金を稼ぐ大変さを勉強する為……そしてホクト君からもらったお財布をいっばいにする為に働く事を決意したのである。

バイトしていたのは飲食店で、若干通常の飲食店とは異なる飲食店であった。店員は全員可愛い女性であり、来客は“ご主人様”とか“お嬢様”呼ばわりされる店である。ホクトは客としてそこに入りたがっていたが、うさ子がそれを拒否し続けていた為中がどうなっているのかは未だに不明である。

何はともあれ、うさ子は本日給料日であった。封筒を取り出し、そこからお金を引つ張り出す。当然たかがバイト、しかも二週間だけなので金額は大したことない……と思いきや、意外と入っただけその理由が逆にホクトは怖かった。

「お前、何させられたんだこの金額……」

「えっ？ ちょっとね、えっちな服を着て歌って踊ったり、おじさんやお兄さんとおしゃべりしたり……」

「そのお話後日詳しく聞かせてください是非」

「う？ 別にいいけど……ホクト君、そんなことはどーでもいいのっ！ うさはね、ホクト君の為に何かを買ってあげたいの！！」

「……………また偉く唐突だな。まあ大体理由は想像つくが、一応説明してみる」

「ホクト君はね、出会ってからずーっとうさの面倒を見てくれてね、一緒のお部屋で生活して、身の回りのお世話もしてくれて、ご飯も食べさせてくれたの！ でも全部ホクト君は自分のお金でうさを養ってくれてたの。でも安心してください！ うさは、これからはいいうさになりますっ！！ うさはホクト君のお荷物ではなく、働けるうさになるのですっ！！」

両手をぶんぶん振り回し、うさは目をきらきらさせて語った。その途中給料が入った封筒を投げつけてしまったが、予測していたホクトが即座にキャッチしてうさ子の服の中にそれを捻じ込んだ。

「つまり、いつものお礼って事か？」

「そうなの！ ホクト君ホクト君、何がほしいの？ うさがね、買ってあげるのっ」

「いや、別に何もいらんし」

手をぱたぱたと横にふりながらキツパリと断言するホクト。うさ子は打ちひしがれた表情を浮かべ、それからホクトにすがりついた。

「な、なんでなのっ！？ うさ、泥棒してないよ？ ちゃんと自分で稼いだのっ！ うさはもう、いいうさになったのですっ！！」

「そりゃ判つてるけどな、お前そもそもそんなに金持つてないだろ？ そのお金は自分で使えよ。ほら、その食堂のアルティメットジャンボパフェとか自分へのご褒美に食べばいいんじゃないかねえのか？」

「あるていめつと……っ！？ じゃんぼ……ごくり……っ」

生唾を飲み込み、口から涎をダラダラ垂れ流すうさ子。しかしそれを予測していたホクトがハンカチを押し当て涎が落ちるのを阻止する。うさ子は直ぐに首を横にふり、目をつぶってホクトにすがりついた。

「だめだめ、だめなの……！ 今日ホクト君にお礼をする日なの……っ！」

「何ッ！？ うさ子が食欲に耐えるとは……成長したな、うさ子……」

しかしうさ子のおなかは物凄い勢いで鳴っていた。正直、心の中ではアルティメットジャンボとありがとうホクト君が激しくせめぎあっていたのである。唸るアルティメットジャンボパフェの威光に心の中でホクト君が小さくなっていく……。うさは泣きそうになりながら自分の頭をポカポカと何度も叩いていた。

「はづっ！！ 消える煩惱なのっ！！ はづ！ はづはづっ！！」

「……………そこまで食いたいなら食べばいいんじゃないかねえのか……？」

「駄目なのっ！ 駄目なの駄目なのっ！！ うさは……ごくりっ！
うさは、ホクト君に……っ！！ はづっっっ！！ はづっっっっっっっ
っ……………」

見かねたホクトが溜息混じりにうさ子の耳を鷲掴み、強制的に話を聞かせる。ホクトはうさ子に何かを買ってもらい、代わりにホクトはお礼としてアルティメットジャンボパフェを驕ると、そういう事になった。一瞬うさ子は何がどうなっているのかわからないという顔をしたが、ホクトのゴリ押しで一先ず納得するのであった。

「それで、ホクト君は何がほしいの？」

「そうだなあ……。俺はあんまり物持たないし、愛着も持たないタイプだから……。服でもいいが、しょっちゅうボロボロになるからすぐ捨てるぞ」

「そ、それはなんかちよつと切ないの……。出来ればホクト君がいつも使ってるもので……。あっ！！ ホクト君、ライター買って上げるのっ！！」

「あゝ、ライターか。そりゃ確かにありがたい」

「ほんとっ？ じゃあ、うさはライター買って上げます！ えへへ、ホクト君、早く早く買いにいくのーっ」

うさ子に連れられ、ホクトはあちこちの店を見て周った。正直ただ火が出ればどうでもいいのがライターというものだったが、うさ子は選ぶのに慎重である。ホクトに似合っているかどうかとか、ホクトが長く使ってくれそうかとか、荒っぽい扱い方のホクトが壊さないようにとか、様々な事を気にしていた。目の前でそうしてプレゼントを選ばれるのも複雑な心境だったが、ホクトは黙って見守る事にした。

一つ一つ手にとってはホクトへと振り返り、にっこりと微笑んで

それを見せる。ホクトは一つ一つ別にそれでいいと言うのだが、うさ子は中々気に入らなかつた。中々きわどいデザインのものもあり、流石にそれはホクトは首を横に振つた。

たかが買物一つで時間をかける事は本来ホクトにとってはありえないことだ。彼は買物には目当ての物は即購入し、一発で帰ってしまうタイプである。うさ子は楽しそうにホクトと共にあちこち駆けずり回り、ようやく一つ定める頃には何時間も経過しているのであつた。

「決めたの！ ホクト君、これを買ってあげるの〜っ」

「ああ、それでいいって」

「じゃあ買ってくるの！ 待っててなの〜っ」

リボンをつけてもらい、うさ子はお金を支払う。その際これはちやんと自分で稼いだお金ですと宣言したのだが、逆にそんな事を言うとは胡散臭く見えてくる……。何はともあれうさ子は嬉しそうにライターを持って駆け寄ってくるのだが、途中で盛大にすっ転びライターのホクトの手に飛び込んで来た。

それは金色のジッポライターだつた。側面にはうさぎを模したデザインがあらわれており、何となくうさ子を彷彿とさせた。ホクトは早速それで煙草に火をつけ、煙を吐き出す。別に味に変わりはないが、それは少しくらいは大事にしてやろうと思うのであつた。

「ホクト君、いつもいつも、ありがとうなの〜。これからね、うさはホクト君とずうっと一緒なのっ」

「……お前、記憶が戻ったらどうするつもりだそれ」

「別に戻らなくてもいいの。うさはね、今の生活が楽しくて幸せなの。ロゼ君にリフルちゃんに、ホクト君……アクティちゃんも大好き大好きなのっ！ このままずっと、みんな一緒に楽しくしていられたらそれでいいの」

「なるほどね。ま、ありがたくもらっておくぜ。うさ子隊員、ミッションコンプリートだ！」

「えへへっ！ らじゃ〜なのっ」

その後くりりとターンし、急にあれもこれもと購入し始めるうさ子。冷や汗を流しながら何をしているのかと訊いてみると、うさ子は言った。“これはロゼ君の分。これはリフルちゃんの分。これはアクティちゃんの分……。あと、後で渡すシエルシちゃんの分”。案の定金は足りなくなり、ホクトは無言で自分の財布から金を取り出し、足してやるのであった……。

両手いっぱいプレゼントを抱え、うさ子は意気揚々と帰り道を歩いていた。ホクトは半分持つてやると言ったのだが、うさ子は自分で皆に渡したいからとそれを断った。二人は肩を並べ、とことくと商店を歩いていく。

「ホクト君にはね、いっぱいいっぱい感謝してるの」

「そうかい。そりゃよかった」

「ホクト君は……うさたちと会えて、良かったかな……？」

突然の質問だった。ホクトは紫煙を吐き出しうさ子へと視線を向ける。うさ子は真ん丸い目でじーっとホクトを見上げていた。その

頭を撫で、ホクトは微笑む。

「当たり前だろ。こんなにスリリングな生活はそうそう味わえないぜ？」

「ほんと？ ホクト君、聞いたの……。ホクト君の魔剣、使うと痛い痛いってなるんでしょ……？」

思わず黙り込んでしまう。誰にも言っていないはずだったが……知っているとすればメリーベルくらいか。口の軽いメリーベルを忌々しく思いつつ、ホクトは足を止めて溜息を一つ。

「うさ、全然気づかなかったの……。ホクト君、いつつも痛くて苦しくって、でもにこにこしてくれてたんだよね……」

「気にするような事じゃねえさ。それにメリーベルのお陰で大分楽になったしな」

「……。ホクト君、今度はうさが一生懸命ホクト君の事助けるからねっ！ ホクト君が辛いのも我慢していると、うさは悲しいです……。うさは……。うさはーっ！ー！」

急に泣き出しそうになるうさ子に慌てるホクト。そのまま道の端まで連れて行き、頭を撫でてあやす。なんだかもう小さい子供を相手にしている気分だったが、実際問題大差ない。

「うさは、やだよ……。ホクト君がね、苦しいの辛いのも我慢してるとね、うさはとつてもとつても悲しくて……」

「ああ、わかったわかった……。頼むから泣くなっ！ 俺が泣か

してるみたいだろ……っ」

「ホクト君……ごめんなさいなの……。これからは、うさがもっとしっかりするの……」

それで、バイトを始めたりに急にプレゼントなんて言い出したのだろうか……。ふとそう考えホクトも少々申し訳ない気持ちになった。戦っているのはうさ子の為でも誰の為でもない、自分の為である。他人に同情されるような謂れは無い。だが、ここまで純粹に心配されてしまうとどうにもばつが悪かった。

「ありがとうな、うさ子。隊長もそろそろ歳じゃからのっ……。うさ子隊員にそろそろお任せするかのっ」

「えへへ、ホクト君……おもしろいのっ」

「……。ほれ、持ってやるから早く帰ろう。そんで、アルティメットジャンボパフェ食いに来ような」

片方荷物を受け取り、ホクトは空いている手をうさ子に差し伸べた。うさ子は満面の笑みでその手を強く握り締め、二人は歩いていく。束の間の平和、そして家族としての関係の中を。三日後には消えてしまっ、優しい時間の中を……。

王者、降臨(1)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

アンケート開始しました

ホクト「というわけで、俺が今の所一位だ」

昴「……なんで？ 男でしょ？」

ホクト「まあ、毎回アンケート上位はヒロインというのがお決まりなんだけどな……。不思議と人気だ」

シエルシ「……まだ、始まったばかりですよ。一日目ですからね……」

ミュレイ「そうじゃそうじゃ！ まだ何が起こるかわからんぞ！！」

うさ子「うさはね、二番なのーっ！！ うれしいのーっ！！」

シエルシ「ふ、ふふふ……。大丈夫です、まだ私は戦えますよ……メインヒロインですから……」

ホクト「俺別に人気なくていいんだけどな」

ミュレイ「この男の発言は時々マジにイラっとくるのっ……」

昴「だね……」

ホクト「そんなわけで、アンケート投票よろしくおねがいます」

うき子「なのーっ!!」

王者、降臨（2）

「嫁入り衣装の出来栄はどうだ、シエルシ」

ザルヴァトーレ首都、ルーンリウム。草原の中に存在する、強固な城壁により囲まれた城塞都市であるその町の中央、シエルシが暮らすルーンリウム城は聳え立っていた。

城の中、自室から見下ろす景色は果てしなく、夜の月明かりの中で草原は静かに輝きを波打たせている。窓辺に立ち、シエルシはじつと街を見下ろしていた。部屋に入ってきた姉であり女王であるシルヴィアには目もくれる事も無く……。

婚姻の儀が三日後にまで迫り、シエルシの気持ちはどんよりと落ち込んでいた。マリツジブルーというのはまた違う、なんともいえない不安と焦燥感……。これから皇帝ハロルドの妻の一人となり、そして行く行くは女王となって国を治める。ハロルドの子を生まみ、そしてその子をまたハロルドの妻にする為に教育する。そんな生活を想像してみても、未来は一步先さえも闇のままだ。

夜風が入り込む部屋の中、シエルシの為にシルヴィアが容易した特注のドレスが揺れていた。シエルシはそのドレスから視線をそらす為に外を見ているようにも見える。シルヴィアは妹へと歩み寄り、腕を組んで声をかけた。

「まだあの女の事を考えているのか？」

「……………そういうわけでは、ありません。お母様との事は、もう区切りをつけてきましたから」

「そうか。そうでなくては困るがな。お前はこの国の将来を決定付ける、重要な犠牲だ。そのお前が暗殺の危険の中アンダーグラウン

ドまで行ってきたというのだから、それなりに意味を持ってもらわねば」

漸く振り返り、シエルシはじつと姉を見つめた。姉は文字通り、鋼鉄の乙女だ。色恋沙汰にかまけている事など有り得なかったし、常に戦場に喜んで身を置いて来た。王である以前に誇り高き騎士であり、自分自身の人生など二の次……。それでいてまるでなんら迷いさえ持たない。シルヴィアは良くも悪くもシエルシにとって手本のような女だった。

「姉上……。私……。これでよかったですか」

「嫌になったか？ 結婚したくないというのならば、逃げてもいいんだぞ。あの女のようにな」

天蓋のついたベッドの上に腰掛け、シルヴィアは片目を瞑ってそう呟いた。シルヴィアの言うあの女とは、彼女達の母親の事である。先代女王でもある。シャナク・ルナリア・ザルヴァトーレ……。女王であり、ハロルドの妻でありながら帝国に反旗を翻した反逆者……。シルヴィアは現状、帝国に支配されたままのこの国を良くは思っていない。だがそれ以上にそんな帝国にあっさりとは敗北した母親を良しとしていなかった。

シルヴィアは親に対する甘えを一切排除し、常に王座に立ち続けるための努力を怠らなかつた。母親を無くしてシエルシが部屋に籠って泣いている間、シルヴィアは騎士たちの中に混じって剣の稽古をしていた。シエルシが何もせず、一步も前に進まなかつた時、シルヴィアは王座に着く為の勉強を怠らなかつた。

シエルシとシルヴィア、二人の姉妹は非常に対照的だった。内向的で、悲観的で、勇気のないシエルシとその正反対に位置するシルヴィア……。反帝国の反骨精神を隠そうともせず、いつでも喉元に

噛み付こうという獣のような目をしたシルヴィアを飼い馴らすのはハロルドも苦勞していた。出来るだけ従順、かつ優れた血を残す為に皇帝がシエルシを妻に選ぶのは別段不思議な事ではなく、シルヴィアもシエルシも承知の事のはずであった。

逃げてもいいと姉が言った時、妹は一瞬ほつとしていた。しかし、逃げていたところで結局はどうにもならないのだ。世界を旅し、シエルシは短い間に様々な事を学んだ。帝国の圧政、治安のままならない下層世界。そこで生き抜く人々……。命を狙われたり、ひどい遺跡を歩かされたり、魔物に襲われたり牢屋に入れられたり、それでもシエルシはここにいる。こうして無事に居る。それは全て、彼女を導いてくれた人がいたからである。

城に戻っても思い出すのは彼らの事ばかりだった。一瞬だけ、本当に夢のような時間だった。嘘と偽りの上にしか成り立たなかった関係……。それでも嬉しかった。初めて出来た友達、仲間、そして頼れる人。その楽しすぎる記憶が、これから全ての自由が奪われている未来に対する怯えとなっている。怯えた所で、どうにもならないというのに。

世界は巨大でそこに張り巡らされた数え切れない目には見えない法則はシエルシには変えようも無く。力もなく、何も出来ない自分の無力さを改めて噛み締めた。もう、出来る事といえばハロルドの妻になり、国をよりよくする事くらい……。シエルシはそう、ずっと自分に言い聞かせ続けてきた。

「私はそもそも、ハロルドの事は気に入らない。婚姻の儀というの馬鹿馬鹿しくて気に入らん。だが、そうする事でこの国が良くなるというのならばやるだけだ。他の国や下層のことなどどうでもいい。我が国の国力さえあがり、民が苦しむ事がなくなればそれでいいのだ」

「姉上……」

「全てを救おうなど、偽善もいいところだ。誰かが笑えばその陰で誰かが泣いているのは世の常……。森羅万象司る神でもなければ救世など出来るはずも無い。あの女は理想だけ語り、結局その夢に食い殺された」

立ち上がり、シルヴィアはシエルシの隣に立つ。共に街を見下ろし、月明かりを見上げた。ザルヴァトーレは静寂と月明かりが象徴する国である。二人とも、幼い頃からこの景色を瞳に宿してきた。

「私は他人に無理強いをするのは嫌いでな……。お前が望み、お前が選べ。他人に強いられた決定などなんの意味も持たぬ。そんなものは唾棄されて然るべき逃避だからな」

「……………」

「だが、国はお前が逃げる事を許さぬだろう。逃げるのであれば、誰にも見つからないように……。静かに私の視界から消え去れ。でなければ私は王としてお前を斬らねばならん」

「……………大丈夫、です。私は……。その為に……。皇帝陛下の妻となり、この国をよくする為にここにいますから……………」

頷きながら、シエルシは小さく微笑んだ。それをじっと見つめ、シルヴィアはマントを翻し去っていく。扉が閉じる音が響き、シエルシは小さく溜息を漏らした。美しい純白のドレス……。夢にまで見た、花嫁衣裳。しかしそれがどうしてだろう、まるで嬉しくない。そもそも、シエルシはまともに誰かと恋をした事もなければ、結婚なんて考えた事もなかった。姫などという立場なのだからこういう事もあるかもしれないとは思っていたが、同時にいつかは理想の王

子様が迎えに来てくれるのでは……そんな幼い夢も捨てきれずに居たのだ。

思えば昔から助けを待ち続ける人生だった。母親が死んだ時……姫としての生活が辛かった時……。いつでもシエルシは心の中で助けを求めていた。しかしもう、いい加減にそれが幻想なのだと気づくべきだと自分でもわかっている。もう、助けなんて求めても仕方が無いのだ。世界は磐石、揺るがず惑わされる事もなければ情けも無い。シエルシ一人の為に、そんな役割の希望を作ってはくれないのだから。

それでもまだ全てを捨てきれないのは、きっと自分を助けてくれた彼の存在があったから。想像していた王子様とはまるで違う、品もない、綺麗でもない、頭もよくない……。それでも、いつでも必ず助けに来てくれると、そう信じられるような男。勿論別にそれ以上を期待しているわけではない。でも何故だろう、その背中が今でも強く思い出されるのだ。

「花嫁、か……」

シルクの生地に触れ、シエルシは目を細める。あつた事もない皇帝の妻になり、皇帝の為に尽くし、皇帝の子を産む……。そんなのが好きだという人間はいないだろう。本音を言えば当たり前のように嫌に決まっていた。だが、それ以外に国の為に出来る事はなかった。

自分が姫として生まれた以上、何かをなさねばならないという思いはあった。けれども今までシルヴィアにその役割は全て奪われてきた。それでいいと思っていた。でももう、そういうわけにはいかないから。自分で決めて、歩かなければいけないから。シエルシは目を閉じ、胸に手を当てる。様々な思いを、封じてしまう為に。

「姫様、失礼します」

ノックの後、扉が開く。入ってきたのは甲冑姿のイスルギであった。シエルシはドレスに手を伸ばしたまま、イスルギには目もくれなかった。騎士は黙って傍に歩み寄り、共にドレスを見つめた。

「……最高の生地を使い、ルーンリウム一腕の立つ者に作らせたドレスです。お気に召しましたか？」

「綺麗なドレスだと思います。とても……」

「……………。女王陛下とはどのようなお話を？」

「逃げたければ逃げると、そう言われました。あの人らしい言い草ですね」

「シルヴィアはシルヴィアなりに、貴方の事を思っているのですよ」

「どうでしょうね……。それよりイスルギ、貴方こそいいの？ クラカンの姫……私と同じ日に……」

「今の私は、ザルヴァトーレの騎士……。私の使命は貴方を全力でお守りする事。それ以外の事は、瑣末な事です」

イスルギは冷静に、淡々とそう答えた。シエルシはそんな騎士に向かい合い、その手を握り締める。

「……これまで、貴方だけがずっと私の味方でした。ありがとう、イスルギ……。ずっと、ご苦労でした」

「私の任務はまだ終わっては居ません。貴方が帝国に行くというのであれば、私もお供しましょう」

「いいえ、もう大丈夫です。私はもう、一人で生きていかなければならないから。もう、いつまでも……子供のままではいられない」

振り返り、シエルシは窓の向こうへと目を向けた。騎士は胸に手を当て、静かに跪く。月明かりの下、姫はとても儂く、そして美しかった。出来る事ならばその姿を守り続けたかった……。しかしそれは、叶わない願いとなりつつある。

世界は移り変わっていく。当たり前のように、全てが消えていく。変わっていく事を恐れては何も出来ないのだろう。だがしかし、護りたいものを、譲れない物を譲り、その先に願った未来はあるのだろうか。シエルシはそっと、光に願い続ける。人の安寧、そして己の行く末を……。

王者、降臨（２）

「ミュレイ、ちょっと……いいかな？」

ラクヨウの城から夜月を見上げるミュレイにとって、昴の来訪は予期せぬ物であった。しかし特に慌てるような事でもない。月明かりが差し込む部屋の中、ミュレイは扇子を片手に昴を見つめている。少女は姫の傍らに立ち、握り締める太刀に込めた力をわずかばかり強くした。

「どうした、昴？ 寝付けぬのか？」

「……………うん、ちょっと。隣、座っていいかな？」

何も言わずミュレイは隣をぽんぽんと小さな手で叩いた。二人は並んで腰掛け、月を見上げる。昴はそうしてそこに様々な思いを描いていた。

結局ミュレイが小さくなってしまった理由は判らず、治すことも出来なかった。時は無情にも過ぎ去り、婚姻の儀は三日後に迫っている。ミュレイは既に婚姻の儀には参加出来ない事が決定しており、それに纏わりククラカン国内では様々な意見や批判が飛び交った。その一応の抑制の為にここ数日ミュレイはずっと各方面を駆けずり回り、こうして部屋に戻ってこられたのは久々の事であった。

ミュレイが大人の姿に戻れないという事は、結局は刺客による襲撃は成功したという事を意味している。何者の意図かは判らないが、ミュレイはまんまとその者の意思に嵌められた事になるのだ。メリーベルが研究を続けているものの、治す為の方法を見つけるのにはまだ時間がかかる……………。ミュレイが願っていた、婚姻の儀により帝国から恩恵を承るという事は、既に難しくなりつつあった。

どんな事情があれ、婚姻の儀に出席出来ないという事は帝国に対する裏切り行為である。その代償、処罰は必ず追って求められる事になるだろう。今はミュレイもこうしてここに座っていられるが、この後どうなってしまうのかは判らない。だが仮にその命が奪われる事があっても良いようにと、ミュレイはこれまで身の回りのことを必死にこなしてきた。おかげで昴と会うのも久しぶりで、ミュレイは彼女が部屋を訪ねてきてくれた事が嬉しかった。

「ミュレイ……………ごめん」

「唐突にどうしたのじゃ？」

「私、ミュレイの為に何もしてあげられなかった……。このままじゃミュレイも、ククラカンも……」

「……。仕方が無いと言ってそれで済まされる事ではないじゃろつな。然るべき処置は下される事となるじゃろつ。今は婚姻の儀を目前に控え、帝国も慌しい時期じゃからろつ……。執行猶予期間、という事かの」

「……………ミュレイ」

「こればかりは、わらわにはどうしようもないのじゃ」

「でも、だって！ 悪いのは、ザルヴァトーレなんじゃ……………！」

「かもしれぬし、そうではないかもしれぬ。誰が悪しきで誰が善きで、それは見方によって変わるものじゃ。わらわにも当然責はある。刺客が原因だったとしても、それを処置し切れなかったのは紛れも無くわらわの落ち度……。仕方のない事じゃよ」

「納得できないよ、そんなの……。ミュレイは……。ミュレイは、この世界をよくしようって頑張ってるのに……。誰かの所為で、足を引っ張られて……」

何より悔しいのは、そんなミュレイを助けられない自分自身であった。それどころか足をひっぱり、ミュレイに迷惑ばかりかけ、何も恩返しは出来ない……。やりきれない気持ちの昂が握り締める拳、それにミュレイは小さな手をそつと重ねた。

「……………もしかしたら、わらわは死ぬかもしれぬ。じゃから、そ

の前に……昂、おぬしに謝りたい事がある」

「え……？」

月明かりの中、ミュレイは優しく……そして寂しげに微笑んでいた。重ねた手は柔らかく、そして暖かい。昂はその手を握り返し、ミュレイの横顔をじっと見つめた。

「わらわは、お主に妹の面影を重ねておった……。ヴァンの言った通り、わらわは卑怯で臆病で……。昂には、申し訳の無い事をしてしまった」

「妹って……ミラの事？」

「……。全く、どこで聞いてきたのか……。まあ、その通りじや。ミラはわらわを庇って死んだ。わらわがもっとミラの事を理解してやれば、あんな事にはならなかった……。わらわが殺したようなものじや」

「ミュレイ……。でも、ミュレイは後悔してるんでしょ……？ これから妹さんの分まで頑張ろうって、今日までやってきたんでしょ？」

「償いはし続けるつもりじゃった。じゃが、そうも出来なくなる……。昂、お主が来てくれてからの毎日は、本当に楽しかった。お主は確かに間抜けで、臆病で、自分に自信がなくて……。こっちの世界の事は何も判らず、何の力も持っていなかった。だが、わらわにとっては本当に救いじゃった。神様が、わらわにもう一度チャンスを与えたような気がしたのじや。今度こそ、大切な物を護って見せよと……」

昴の外見は、ミラに似ているわけではない。性格も、ミラとは違っている。だがその行動に、言葉の端に。ミラと似た部分を見つけ、悲しい気持ちになっていく自分がいた。ミラの代用品として、ミラを愛せなかった分、護れなかった分だけ昴にそれを注いだ。だがそれが何の意味も無い、八つ当たりにも等しい行為である事は自負している。だがそれでも 夢のような時間には変わりなかった。昴が可愛くて仕方が無かった。本当はずっと、こうしていたかった。ミラとも。昴とも……。

「わらわが居なくなり、ククラカンが滅んだとしても……お主は何とか護ってみせる。ウサクやゲオルクがきつとそうしてくれよう。元の世界に帰してやれなかった事が悔やまれるが、そこはメリーベルを頼ってみてほしい。きつと力を貸してくれるはずじゃ」

「ちよつと……ちよつと待ってよ。ミュレイ、どうしてそんな遺言みたいな事……」

「みたいな、ではなく遺言じゃよ。わらわはやはり、ミラのように生きられぬらしい。罪人は罪人らしく、道理に反して散るのも良かるつ」

「ミュレイ！！ そんな事言わないでよっ！！」

昴は両手でミュレイの小さな手を握り締め、詰め寄った。悲しげな瞳に昴の必死な顔が映りこむ。二人は月の光を背景にじつと近くで見詰めあった。

「死んでそれで解決なんてしないよ……。死ぬって事は、死なれるって事は……。 “完了” しないんだ……。終わってくれないんだよ、

ミュレイ。判るでしょ……？」

「昴……」

「私もずっと、死んじやった人の事を想ってるから判るんだ……。死なれるのは、辛いんだよ……。自分の所為だっと思って思うと、死にたくなるくらい辛かった。どうしてこんな事になって何度も思った……」

現実世界の昴は、ずっとそうして後悔だけを繰り返して生きていた。いや、死んでいたのかもれない。心はずっと凍ったままで、昴は部屋から一步も出ない引き籠もりとして数年間を過ごした。彼女が人間らしい気持ちを取り戻す事が出来たのは、親戚である本城の家に預けられてからである。

それまでは何も出来ず、言葉も失い、毎日生きているのか死んでいるのか判らないような日々が続いていた。後悔の念だけが日々募り、心は押しつぶされ、何も手につかないほどに憔悴しきっていた。

「だから、判るよ……ミュレイの気持ち。ミュレイはすごいよ……。私なんか、黙ってじっとしてる事しか出来なかった。でもミュレイは、妹さんの気持ちを汲んで、その後を継いで頑張ってた……。すごいよ。ミュレイはすごく、頑張ってたんだ……」

「……………」

「こっちの世界に来て、最初は嫌だったし絶望もしたよ……。でも、ミュレイやウサク、ゲオルクが居てくれたからそれでも生きてられた……。ミュレイが優しくしてくれなかったら、きっと生きていられなかった。嬉しかったんだ……。すごい」

涙を流し、頂垂れる昴。その手を握ったまま、空いている手でミ

ユレイは昴の頬に手を伸ばした。熱い涙が指先に触れ、直ぐに冷えてしまう。姫は苦笑し、そっと少女を抱き寄せた。

「ありがとう、昴……」

「ミュレイ……死んだら嫌だ……！私、ミラの代わりになってあげるよ……。これからミュレイの傍で……！」

「……もう、良いのじゃ。馬鹿じゃのう、昴……。わらわなんその為に涙など流して……。良いか、昴？女の涙は、男を落とす時までとっておくものじゃ」

「いいよ……どうせ、根暗女だし……。男の人と喋るの苦手だし……」

眼鏡を外し、昴は涙を拭った。ミュレイは小さな身体で昴を抱きしめる。それは昴に抱きついていているようにしか見えなかったが、昴はミュレイに触れて確かに感じていた。彼女の優しさ、思いやる気持ち全てを。

「私……諦めたくない……。ミュレイを助ける方法、最後まで探し続けるよ……。もう、嫌なんだ……大切な人が居なくなるなんて。だからミュレイは、私が助ける　！この、ミラの刀に誓って……！」

白い太刀を握り締め、昴は跪く。ミュレイはそんな少女を見つめ、優しく微笑んでいた。もう、十分だった。助からなくとも構わない。どうなっても良い。もう、昴がこうして一生懸命に自分を思ってくれるだけで満足だった。いつ死んでも構わない……そう思うくらいに、嬉しかったから。

ミラとは分かり合えず、衝突を繰り返した。結局分かり合えなかった事をずっと後悔してきた。それが救われる事は永遠にないのだろう。積年の思いは、決して消え去る事はないのだろう。だが、それでも……まだやるべき事がある。せめてこの少女だけは、護つてあげねばならない。彼女を呼び出した人間として。彼女を重ねた人間として。

「強くなるよ……ミユレイを護れるくらいに。だから……死なないで、ミユレイ……。お願いだから……生きて」

昴の搾り出すような声にミユレイは何も応えられなかった。ただ夜月を見上げ、心を頑なにしよう。決してこの少女を巻き込まないように。姫として、魔剣使いとして、そして一人の姉として……。出来る事全て、彼女の為に。

王者、降臨（2）（後書き）

くはじける！ ロクエンティア劇場く

ホクト“君”

うさ子「ねえねえ、ホクト君ホクト君っ！..」

ホクト「.....。うーむ、なんだかなあ」

ロゼ「どうかしたの？」

ホクト「いや、俺の事をホクト君と呼ぶのはうさ子だけなわけだ。だが、ホクト君で俺のイメージは定着しつつある」

ロゼ「作者もホクト君って呼んでるしね」

ホクト「俺、二十三歳なんだが」

ロゼ「そんなこと言ったらリフルだってリフルちゃんって呼ばれてるよ。ブラッドでさえそうだし」

ホクト「まあ、そうなんだが.....。リフルのことは読者だってリフルちゃんとは呼ばないだろ？ 年齢的に無理があるし.....」

リフル「.....何か言ったか.....？」

ロゼ「いや、なんでもない.....。でも確かにどうしてホクト君で定着しちゃったんだろうね」

ホクト「うさ子がホクト君って連呼するからだよ、どう考えても」

うさ子「はっはっ……なんで皆無視するの〜……。寂しいの〜……っ」

王者、降臨（3）

ロクエンティアと呼ばれた世界は、全てが縦に出来ている。六つの界層が重なり、生み出された縦社会。しかしその日、たった一日だけその法則に揺らぎが生じる。

“婚姻の儀”と重なり開かれる皇帝生誕百周年の宴……。その日、第三界層ヨツンヘイムはその姿を変える。大地でもあり、世界の壁でもある界層は上下にずれ込み、開かれた大地からは皇帝の居城が姿を現すのだ。

数十年に一度だけ、儀式のときのみ下層に姿を現す皇帝の居城にして超怒級飛行要塞、“インフェル・ノア”。王都そのものが一つの巨大な要塞であり、他の界層とは圧倒的に異なる科学文明力によりそれは容易に空を舞う。蒼い光を放ち、魔方阵を纏い居城は舞う。その姿をプリミドールの住民達はただ見上げる事しか出来ない。

インフェル・ノアはその日だけ姿を現す、本来ならば下層の人間には縁の無い代物である。巨大な城。しかしプリミドール以下とは大きく文明が異なる為、デザインもまた異質である。まるで巨大な結晶の箱のようなその都市は、ククラカン国の首都、ラクヨウの真上に停止し、そこから無数の光の楔を地上へと放つ。それは大地に根ざし、インフェル・ノアを固定すると同時に地上との架け橋の役目を持つのである。

ラクヨウの城から昇はインフェル・ノアを見上げていた。この世の神にも等しい存在が住まう、王者の居城。圧倒的過ぎる巨大さ、そして文明力……。スケールの違いに思わず冷や汗が流れた。これが、第三階層の力。これが、帝国の力。

「インフェル・ノアはこれが見納めかもしれないな」

隣に立っていたのはゲオルクであった。男は筋肉の塊のような腕をがっしりと組み、昴同様空を見上げている。いつのまにそこに立っていたのか昴は気づかなかった。しかし、そんな事は今は些細な事だ。

「大きい……。あれが、皇帝の住んでいる街……。聞いた時は信じられなかったけど、実際見ても信じられない……。あんな巨大な都市が空に浮くなんて……」

「帝国とそれ以下の世界とではそもそも文明力が違いすぎるからな……」

「ミュレイは……大丈夫かな」

心配げに呟く昴。二人の真上をゆっくりとインフェル・ノアが動き、影を残していく。町が闇に包み込まれる中、ゲオルクは小さく溜息を漏らした。たった今、城の中ではミュレイと帝国の使者が明日に控えた式典の段取りを打ち合わせしている所なのである。その場に居合わせる事が出来るのはミュレイ含めた王族のみであり、護衛も一切中に入る事は禁じられている。昴は最後までミュレイの傍に居る事を願ったが、それは容易く叶わなかった。

「直ぐに首を落とされるような事はないだろう。今回の式典、地上の警備はククラカン主導で行われる。その指導者であるミュレイが居なくなっただけでは連中も困るだろう」

「昴殿ーっ！ ゲオルク殿ー！！」

背後、呼び声に振り返る。ウサクは素早く二人の元に駆け寄り、

困った様子で唸りを上げた。二人は顔を見合わせ、それからウサクの話を促す。

「実は、我々の配置が決定したのでござる。配置されるのは……ククラカン城周辺……。任務はその警備でござる」

「そんな！？ 私達はインフェル・ノアまでいけないって事！？ ミュレイはどうなるの！？」

「姫様は、インフェル・ノアに出頭でござる……。このままでは、この国もどうなってしまおうか……」

ミュレイは婚姻の儀には参加出来ない。それは皇帝の命令を無視した、という事を意味している。理由はどうあれ結果としてそれが叶わなかったのだから、その責任は何らかの方法で果たさねばならない。

宴に浮かれるククラカンの国民達は誰もミュレイが小さくなってしまった事を知らない。知らせない方が今はいい……。それが国全体の考えであり、ミュレイはそれに逆らう事は出来なかった。本当ならば国民に説明する義務を持つのだが、ミュレイにはそれを果たす自由さえも残されていない。

「お偉方はさつさと国外逃亡するか、帝国に着いていく準備でもしてるんだらう。滅ぶ国に残されるのは浮かれた国民だけということだ」

「……………。そんなのって……。ウサクもゲオルクも、それでいいの！？ そんなのでこの国が終わっちゃっていいのっ！？」

「昴殿、声が大きいでござるよ……。拙者たちは、与えられた命令

には逆らえないでござる。それが拙者たちの掟でござるから」

「掟って……。そんな……」

「兎に角、後はハロルドの気まぐれとミュレイの意思の問題だ。俺たちが口出しするようなことじゃない」

拳を握り締め、昂は齒軋りした。二人のいう事も判っている。ミュレイはもう大人であり、子供の自分が口出しするような状況ではない事もわかつている。姫とは、王族とは、それなりの責任を持つものなのだ。彼女は既に一人の立派な人格を持つ人間であり、その意志は尊重されて然るべき……。しかし納得できないと思う気持ち強いのも確かだった。

なんとかしてミュレイを助ける方法を考えた。しかし、一体あの空に浮かぶ城に何を出来るというのだろうか。傍にいても出来ないのならば、護ってあげる事さえも出来ないだろう。悔しさと胸がいっぱいになった。護ると決めたのに、自分はこんなにも無力だと……。

「どうにか、インフェル・ノアに入れないかな……？」

「そ、それは流石に……。インフェル・ノアは、八本の魔法連絡通路で地上と繋がっているでござる。その全てのゲートに帝国側は厳重な警備を敷いているでござる。何しろそこさえ護りきれば、インフェル・ノアは磐石でござる故に」

インフェル・ノアが地上に打ち込んだ八本の楔はそのまま魔法連絡通路となっており、地上とインフェル・ノアを結び、一瞬で移動する事が出来る転送魔法にもなっている。インフェル・ノアの高度まで飛行するような技術はプリミドール以下には存在しない上に、

インフェル・ノアが持つ全世界最高峰の魔力結界はあらゆる魔法攻撃を無力化してしまう。故に、連絡通路のみがインフェル・ノアに近づく方法なのである。

「そこは剣誓隊の配置場所でございます。乗り込むつもりならば、剣誓隊を相手にする事になるでござるよ」

「剣誓隊か……。うーん……。強行突破出来るような相手じゃないよね……」

「当たり前だ……。相手は全員魔剣使い、それも腕利きだぞ？ お前みたいな未熟者になにが出来る……」

流石に正面突破は無理がありすぎる。それは昴も理解していた。

しかし空を見上げる昴の横顔には何故か迷いも諦めの色も無かった。ただ真っ直ぐに、風の中静かに待っている。まるでもっと大きな風が吹き、それが自分を空に押し上げてくれる事を知っているかのよう。翼を畳み、今はそれを休めているかのよう。

ゲオルクもウサクもその冷静さが不思議で仕方がなかった。今までの昴ならば、ここはオドオドしたりウジウジしたりするところだろう。視線の気づいたのか、昴は二人に視線を向け小首をかしげた。

「どうかした？」

「いや、昴殿……。何か策でもあるのでござるか？」

「無いよ……？」

「にしちゃあ余裕があるな」

「うーん……余裕はないけど、でも決めたんだ。この刀をミュレイが私に託してくれた意味……自分で考えて、自分で選ぶ事。大事な事は沢山教わったから。だからこれからは、自分の意思でそれを成し遂げる」

刀を握り締め、それをじっと見つめる昴。そう、護ると決めただ。ミュレイに恩を返すと……。だから諦めるはずがない。諦めるなど論外。ならばもう、前に歩むのみ。例え時が鳴り止まらずとも、諦めない限り全ては終わらないから。

「で、ロゼは説得出来たのか？」

バテンカイトス内部、ロゼの部屋の前でホクトは壁を背にリフルを待っていた。リフルは黙って首を横に振る。その様子からは普段の覇気の欠片も見当たらない。

この世界の命運を賭けた決戦が目の前に控えているというのに、ロゼは相変わらず参加の意欲を見せないままだった。黙って歩き出すリフルに並び、ホクトも歩き出す。うさ子にもらったライターを取り出し、煙草に火をつけながら……。

「ロゼが嫌がつてる理由は何なんだ？ あいつ、ここに来るまでやる気満々だったろ」

「貴様には関係の無い事だ……」

「そういうわけには行かないだろ。俺の雇い主はロゼであり、俺はロゼの命令で此処に居る。どうするのかハッキリしてもらわなきゃな」

足を止め、リフルは長い前髪で片目を隠しつつホクトを見つめた。それは見つめるといふよりは睨み付けると言った表現の方が正しいが、その目に力はなく、持つ意味はただ見つめる程度に収まっている。

ホクトは煙草を片手にリフルを見つめ返す。ホクトの発言は正しい。あらゆる意味において正しいのだ。もう、うだうだしている猶豫はない。今すぐに準備を始めても不十分なのである。こんな状況にまで追い詰められてしまったのは、自分の所為だとリフルは判っていた。視線を反らすリフル、しかしホクトはその肩を掴んで歩みを阻止した。

「離せ……」

「お前達がどうしようが、俺は正直どうでもいい。興味もない。俺は最初から言われなくてもハロルドを討つつもりだったからな」

振り返るリフルの視線の先、ホクトは普段とは違う一面を見せていた。鋭く鋭利な視線、そして傭兵として一級品の立ち振る舞い……。リフルはずっとホクトを信用しないでここまでやってきた。そして信用しなかったのは正解である。ホクトは、砂の海豚への忠誠などという物では決して動かない人種なのだから。

「ロゼがもう止めたいというなら、止めさせてやれ。どうせ子供には無理な戦いだっただ。引き際には丁度いい」

「何だと……！？ 貴様にロゼの何が判るっ！！」

拳を振り上げ、ホクトの顔面にそれを叩き込む。しかしホクトは

ピクリとも揺るがず、逆にリフルの腕を掴んで壁に押し付けた。凄まじい力で身動きが取れないリフルは冷や汗を流しながらホクトを見上げる。吐息がかかる程の至近距離の中、照明を背にホクトの目はぎらぎらと輝いている。

「確かに俺にロゼの事は何も判らない。だけどな、だったらあんたは判ってるのか？」

「……………判ってるさ……………」

「だったら、ちゃんと判ってるようにしてやれ……………。ロゼの事を判つてやれるのはお前だけだ。俺もうさ子も、どうせ付き合いは短いんだからな」

手を離し、普段通りの笑顔を浮かべ煙草を口に啜えるホクト。リフルは壁に背を預けたまま、ただ頂垂れて黙り続けていた。ホクトはその隣に立ち、同じように壁に背を預ける。

「本当にもう駄目なら、ロゼは引き返した方がいい。皇帝は、俺が討つ。心配しなくても仕事はするさ」

「……………。私は……………ロゼの気持ちを……………。本当に、判っていたのだろうか……………」

「そりゃ、誰にも判らない事だろ。だがハッキリしている事が一つだけある。もう、これからの戦いは成り行きやプライドだけでやっていけるほど甘くはないって事だ。命の責任を負わせる意味でも、ロゼには自分で決めさせるべきだと思うがね」

自分の手を見つめ、リフルはその言葉の意味を考えていた。そう、

そもそも。そもそも、全ての理由はロゼを思うからこそである。リフルもホクトも、これまでに人を殺してきた。理想や主義を掲げ、敵対するというだけの理由で敵を殺し、罪を重ねてきた。血は洗い流せても、罪は漱げない……。だからこそ、リフルはロゼに戦って欲しくなかった。

結果的のロゼがその気持ちをとどのように受け止めるかどうかは口ゼ次第であり、その事が全ての言い訳になるわけではない。だがリフルもロゼを思っていたのは確かなのだ。だが……確かにそう。もう、誰かの言葉で。誰かの意思で。行動を決定するような歳でもない。本当に組織のリーダーとして生きるならば、きちんと知らせ、そして知った上で選択させるべきだったのだ。例えばそれがどれだけの危険を孕んでいたとしても……。

「作戦は明日だ。それまでに自分の気持ちくらいは固めて置けよ。でなきゃあんた　死ぬぜ」

肩を叩き、ホクトはその場を去っていく。その後姿を見つめ、リフルはずっと考えていた。これまでの自分の行いの意味、そしてこれから自分が選ぶべき道の意味を。

王者、降臨（3）

「いよいよ始まるのですね、隊長……！　皇帝陛下誕生、百周年の記念式典が！」

「うん、そうだねえ……。いや、皇帝は長生きだよ」

空中に停泊するインフェル・ノアの装甲外壁、地上と通じるゲートの一つの前に立ち、眼科に広がる世界を見下ろすエレット少佐とシグマール大佐の姿があった。剣誓隊として現場に配備された二人の眼下、降り注ぐ太陽の光の下、無数の花火が惜しげもなく空へと打ち上げられている。

宴の熱は順調に盛り上がり、軽快な音楽と同時に地上では皇帝の誕生日を祝うパレードが行われている。各地からこの日の為に集まった貴族や権力者達で町は埋め尽くされ、見渡す限り巨大なククラカの城下町が埋まってしまいう程、想像を絶する人がここに集まりつつあった。

「いやあ、まるで人がゴミのようだ」

「なんですかそれは……？」

「おじさんの個人的なお話ね、うん。それにしても 帝国の支持者がこれだけ地上にも集まるとはねえ」

「ヨツンヘイムの参加者は最初からインフェル・ノアの市街地に集まっていますから、下に居るのは下層の人間ですね。流石陛下、下層の人間からもこれだけの支持を受けていらっしやるとは！」

嬉しそうに語るエレットの傍ら、シグマールは複雑そうな表情を浮かべていた。インフェル・ノアに集められたのはヨツンヘイムでもごく一部の権力者の中の権力者たちである。皇帝の傍で直に式典を謁見する権利があるのは、本当にごく一部だけなのである。

地上に集まった数万人の人々は全員インフェル・ノアから照射される空中スクリーンで進行を把握するしかない。まるで滑稽な宴だった。最初からヨツンヘイムの人間とそれ以外とでは待遇が圧倒的

に違いすぎるのだ。割れんばかりの歓声をあげ、皇帝を祝福する下層の人間達。誰もが皇帝に媚び諂い、その慈悲を承りたいと願っている。だがその願いのどれだけが叶えられるというのだろうか？ こうして見下ろす人々の目に、下層の人々の願いなど文字通り小さなゴミ粒のようにしか見えないというのに……。

「さて、そろそろ婚姻の儀が始まる。我々も地上に降りて警備をするよ」

「了解です！ 我々が死守するのは、八番ゲートですね？」

「そういうこと。さて、そろそろ連中も動き出すだろうしね……。面倒だけどね、気合を入れていかなきゃあねえ……」

剣誓隊が地上での警備を厚く固め始めた頃。花嫁衣裳に身を包んだシエルシはククラカン城からゲートまで敷かれたレッドカーペットの上を歩き始めていた。純白のドレスの裾を左右でメイドが支え、姫は歩いていく。一步一步、その足取りを確かめ、踏み固めるように。

シエルシの移動にあわせるように、周囲ではザルヴァトーレの騎士たちが足音をそろえて行軍する。高らかに掲げられた国旗に囲まれ、シエルシは花束を手に歩いていく。これは婚姻の儀であると同時に、皇帝の誕生を祝う祭りでもあるのだ。己の身と国の忠誠を献上し、祝いの言葉を述べる為に前に進んでいく。遙か頭上に構えた王者の居城まで……。

姫の傍らには彼女の側近であったイスルギの姿もあった。イスルギは何度もシエルシの表情を横から覗き込んでいたが、シエルシは浮かない表情のまま前へと歩んでいく。巨大で重苦しい豪華なドレスは彼女の存在そのものを表現しているかのようにだった。全身に編みこまれた鈴を鳴らし、前へ。前へ……。その身と明日が滅び、そ

して国を救うその刹那まで。

街の各地で同じ動きが始まっていた。ハロルドに嫁入りする権力者の娘達が各々ドレスを纏い、各々の騎士に守られて進んでいく。姫は憂いを秘めた悲しげな瞳で空を見上げる。思い起こすのは、束の間の自由……。友達と、仲間と、そう呼んでくれた人々の事。

そう、ミュレイが思い返すのは仲間の事、そして昴の事であった。天空に聳えるインフェル・ノア、その頂点に存在する儀式用の祭壇に今正に皇帝は座している。だがミュレイはそこまで辿り着く事が出来ない。進入は許されておらず、式典用の礼装に着替え、参加者達の中にまぎれてズラリと並んだ椅子の一つに座っていた。

一件すると自由のようにも見えるが、彼女の目の前に紅いカーペットが敷かれており、そこは花嫁達が通る通路の一つである。当然警備は厳重……。しかもミュレイは参加が一応許されているものの、本来ならばこのカーペットを見守る側ではなく、そこを歩く立場のほうである。この式典が終わった時、どうなってしまうのかは判らない。その不安を煽るように彼女の背後には常に帝国の騎士が数名うろつき、監視を怠らなかった。

「……………昴」

自分が死に、国が減れば昴はどうなってしまうのだろうか……？
彼女だけは、どうかせめて無事で居てほしいと願う。その理由はあまり考えなくなかったし、考えたところで意味のないことだ。妹の影を重ねているからなのか、それとも召喚してしまった人間としての罪悪感か……。はたまた彼女自身を気に入っているのか。理由はどうであれ、ただ願う。どうか、一人の少女を救って欲しいと。

祈りの先、地上では昴がパレードの流れから少し離れた場所に立っていた。傍らにはウサクの姿もあり、二人はカーペットの方をじっと見つめている。特に昴は今すぐにも飛び出したい気持ちを必死に押し殺していた。ウサクも当然、ミュレイを助けたいと考えている。だが天空の城は遙か彼方遠く、そしてそこまでは容易には辿り着けない。時間だけが経過し、焦りが心を支配していく。祈るような気持ちで刀を握り締めた。どうか、その奇跡の瞬間が訪れますようにと。

その時である。一発の銃声がラクヨウの街に響き渡り、シエルシは空を見上げた。建造物の屋根の上に留まっていた鳥達が一斉に空へと舞い上がる。振り返り、その視線の彼方に想いを込める。歩みを止める事は許されなかった。また一步、前へ。そのリズムに合わせるように再び銃声が鳴り響いた。ざわめく観衆の中、シエルシは目を閉じる。そして今度は迷い無い瞳で顔を挙げ、また一步前へ。

「ホクト、もうちょっと安全に運転してよっ!!」

「んなこと言われても、この辺は整備されてない荒野だからなあ…」

荒野を突っ走る、一台のバイク。またがる黒衣の男は荒野を疾走しつつ、ラクヨウ周辺に布陣されたククラカン武士団とザルヴアトーレ騎士団の混成部隊を見据えた。当然、襲撃は想定されている。当たり前のようなその邂逅に騎士たちは驚く気配もなく、戦闘形態へと移行していく。

戦場支配は圧倒的に敵軍優勢。しかしそれでも男は笑みを作

り、あるうことが加速を強めていく。砂煙を巻き上げながら、真っ直ぐに。見据えているのは広がる膨大な数の軍隊ではなく、その先にあるラクヨウでもない。ただ、目指すもの。それは、天空に君臨する王座のみ。

サイドカーの上に座り、大型の狙撃用カノンを構えるアクティがその引き金を引く。三度目の砲撃。しかしインフェル・ノアに届くどころか、それ以前にラクヨウの防衛結界に攻撃は防がれてしまう。ゴーグルを装備したままのアクティはマントを激しくはためかせながら腰のベルトに括った次の弾丸を取り出し装填する。

「駄目、全然通じてないっ!!」

「まあそりゃな……。これくらいは想定済みだろ……。つーか、なんで俺らが第一陣なんだ？」

「何!? 風でぜんっぜん聞こえないよーっ!!」

ホクトは諦めて黙り込んだ。そんな二人の背後、馬の蹄の音が。バイクのエンジンの音が。同時に平行し並び、猛然と突撃する列車の音が聞こえてくる。二人が乗ったバイクを追い抜き、ギルド連合軍が乗った列車と混成部隊がラクヨウへと一斉に向かっっていく。二人はそれを見送り、あわせるようにエンジンを高らかに唸らせる。

防衛部隊が一斉に魔法攻撃による迎撃を行う。それに反撃の魔法をギルド連合が放ち、戦闘開始の合図となった。都市の外で巨大な振動が起こり、ラクヨウの中までも揺れは響いてくる。

「姫様、お急ぎください」

「判ってるわ、イスルギ。判っています、ちゃんと……」

ハイヒールを鳴らし、一步前へ。振動が聞こえてくる。彼らはそこで、戦っているだろうか？ 彼らはそこで、未来を諦めずにいるのだろうか？

少しだけ勇気がわいてくるような気がした。現実はきつと変わらない。運命はどうしようもなく続いているけれど。それでもせめて毅然として、ザルヴァトーレの姫として……。一步、前へ！

「この音……！？ 反帝国軍の襲撃……っ！！」

「あつ！？ 昴殿、持ち場を離れてどこにっ！？」

轟音に導かれるように刀を手に昴は走り出していた。混乱する町の中、見上げる頭上の要塞。慌てて着いてくるウサクと共に、二人は目指す。天へと続く閉鎖されし門を。

インフェル・ノアをはさみ反対側ではホクトがバイクによりラクヨウ目指し突撃を仕掛けていた。アクティが連続して砲撃を仕掛け、ホクトは降り注ぐ魔法の雨の中を掻い潜り突っ切っていく。戦乱の中へ突入し、その手の中にガリユウを構築する。バイクごと回転しながら大剣を滅茶苦茶に振り回し、敵陣を真っ先に切開いていく。嵐のような音と光と熱の中、魔剣狩りは動き出す。

「待ってる、ハロルド……！」

「待っていて、ミュレイ……！」

「今直ぐ、そこまで辿り着く

ッ！！！！！！」

戦禍の声と同時に、姫の歩みと鈴の音が鳴り響く。全ての決戦の時が今、幕を開けようとしていた。

The truth (1)

「……………さて、バイクがぶっ壊れたわけだが……………」

戦線を突破し、魔剣を片手にホクトは壊れたバイクを見つめてそう呟いた。背後、ホクトが斬り倒した数十人の騎士たちが倒れている……………。ガリュウの圧倒的過ぎる戦闘能力を目の当たりにしたアクティはにはわかには信じられないと言った様子でホクトを見つめていた。

「まあ、ヴァンがでたらめに強いのは知ってたけど……………。ガリュウの能力、健在って感じ……………」

「メリーベルにいじってもらったら滅茶苦茶調子いいんだよね……………。今なら白騎士にも多分負けないな」

「そ、そんなに!? まあ兎に角、早い所潜入しないと。ボクたちの担当は五番ゲートだよ」

巨大なカノン砲をバイクの傍に投げ捨て、アクティは愛用のライフルを装備する。ホクトが切開いた道を次々に反帝国軍が突き進み、今や市街地にまで戦域は広がりがつつあった。ホクトの役割はこの混乱に乗じてゲートの一つを落とす事にある。アクティが戦闘準備を終えると同時に背後からうさ子が走ってきて二人の合流する。戦域の中でもみくちやにされたのか、うさ子は肩で息をし、全身ボロボロになっていた。

「あ、うさ子が来た」

「アクティちゃん……ホクト君……ひどいの……っ！　なんでうさのこと、置いてくのっ！？　うさ、途中から一人で走ってきたの……怖かったの……っ」

「よく無事だったな……。リフルとロゼは？」

「本隊に合流して動くらしいから、えっと……」

「あつちは一番ゲートだね。本隊の行動をサポートする為にも、こちに戦力をひきつけなきゃ！　ホクト、うさ子、期待してるからね？」

ホクトがガリリュウを揮い、うさ子がミストラルを構え、シャドーボクシングを繰り返す。二人ともやる気は十分であった。魔法と銃弾と矢が飛び交い、戦乱という名の破滅が広がっていく。その渦中を見据え、ホクトは歩き出した。

「とりあえず俺が道を切り開く。うさ子は俺のサポート、アクティは後方支援だ。うさ子、アクティを護ってやれよ？」

「わかってるの！　アクティちゃんの事は任せてなのっ！！」

「別に護って貰わなくても自分の事は自分で出来るっつてば」

「アクティちゃんはお友達なのっ！　だからね、うさは一生懸命護りますっ！！」

「　　良い子だ。よし、行くぞッ！！　いっちょあの城まで、ハロルドの顔を拝みにな　ッ！！！」

ホクトたち三人の部隊が都市へと突入した頃、昴は混乱の中足を止めていた。襲撃に怯え避難し始めた市民の流れに逆らい、道を塞ぐ影が一つ……。ローブを纏った、黒衣の刺客……。それは三度目の邂逅、ミュレイの命を狙い続けてきた敵との再会であった。

昴は息を呑み、太刀を構える。構えるその手は振るえ、切っ先はブレている。襲撃者はそれを知ってか知らずか、最初から容赦なく愛用の魔剣を召喚して見せた。唸るエンジン音を隠そうともせず凶悪な刃の羅列を回転させ、チェインソーを両手で構えるのだ。それだけで昴の心は押しつぶされそうだった。訓練など、ろくに出来たわけではない。基礎の基礎を学んだ程度の付け焼刃。それでも引き下がれない理由がある。

「あんたの……目的はなんなんだ……！？ ミュレイを殺す事じゃないのか!？」

刺客は答えない。何故、ミュレイではなく昴を狙うのか？

理由は判らなかつた。考えてもわかりそうもなかつた。だから昴は覚悟を決める。もう、逃げられないのだから……。

「そこをどけよっ!! 私……ミュレイを助けるんだああああっ!!」

震える声で叫び、同じく震える足で走り出す。雄叫びと共に刺客へと襲い掛かるが、刃は回転するチェインの火花にはじかれてしまう。そんな昴の背後、クナイが同時に三つ放たれた。刺客はそれを弾き、一歩後退する。

「昴殿ッ!! 無茶でござる! 彼奴は相当な使い手……! 昴殿ではどうにもっ!!」

「ウサク……。でも、だからって……引き下がれないよッ！ 逃げちゃ駄目なんだ……！ 逃げちゃ駄目なんだあッ！！」

「昴殿……！ 然らば……拙者も ツー！！」

ウサクが小刀を抜き、昴の隣に並ぶ。二人の姿を前に刺客は自らの姿を覆い隠していたマントを片手で剥ぎ取った。現れた素顔は二人を仰天させ、威圧するに十分すぎる効果を持っていた。現れた刺客、“彼女”は蒼いドレスを身に纏い、そしてその顔は無機質なる鋼鉄。光の下に浮かび上がったその顔は、まるで機械のカメラだった。そう、それは比喻ではなく現実。頭部にカメラそう装備した、“首なし”の刺客。息を呑む昴の傍ら、ウサクが呟いた。

「オートマントン “自動人形” ……！？」

ドレスの異形は蒼い光をはためかせ、チェーンソーを振りかざし襲い掛かってくる。ウサクは素早くそこにクナイを連続して投げ込んだ。駆動部に挟まったクナイの所為で回転する刃が一瞬停止し、ウサクはその隙を見て走り出した。地を這うような動きで懐に潜り込み、顔面を下から肘で打ち抜く。しかし相手の頭部は機械のパーツであり、ダメージを与えられているような気はしなかった。

「か、硬いでござる……！？」

「ウサク、どいてっ！！ このおおおおっ！！」

駆け寄った昴が放った一撃は頭部を捉えていた。しかし鋼鉄の頭は切り裂く事が出来ず、昴はふらりと身体を揺らした。そもそも何故頭には攻撃が訊かない気がしているのに頭を狙ってしまったのか

……。或いはそこが、“人間ではなく機械だったから”かもしれない。ぶれた昴に反撃の刃が繰り出されるが、ウサクが昴を抱えて跳躍しそれは回避される。

刺客は魔剣を機関銃に形状変化させ、両手でそれを構えた。昴は転びそうになりながらも走り出し、無人になりつつある広場に走っていく。道路はまだ人で溢れているのだ。あんな場所で機関銃など撃たれたらどんな事になってしまうのか、想像もしたくない。

背後から連射される弾丸の雨から逃れるように昴とウサクは慌てて噴水の影へと飛び込んだ。水面に水しぶきを上げ、白亜の銅像を砕き弾丸は暴れ狂う。頭を抱え、座り込む昴の隣ウサクは背後へ手榴弾を放つ。爆発が起き、ウサクは昴の手を引いて移動。兎に角留まることだけは避けなければならなかった。

「やはり、でたらめでござるな……！」

「こんなんじゃないついてもミュレイのところにいけないよ……！
！何とかしなきゃ……何とか……！」

「焦ったところで手が打てないのでは仕方ないでござるよ……。せめて拙者も魔剣が使えればよかったのでござるが……」

「魔剣……魔剣……か」

手の中、白い刀が存在感を放っている。それは一度は砕け、しかし確かに再生した。幻か、はたまた泡沫の夢だったのか……。だが、昴はその刀に大きな力と可能性を感じていた。今はただ、力が欲しい……。この場を切り抜けられない程度でミュレイを助けるなど夢のまた夢である。

走りながら握り締めた刀に願う。もしも死んでしまったミラが今、この世界を見下ろしているのだとしたら……。貴方の事を思い、後

悔し、罪を背負って生きているあの人をどうか助けてほしいと。全部任せたりはしないから。自分で出来る事ならなんでもするから。だからその力を、貸してほしいと。

「……姉上。姉上、聞こえるかい？」

インフェル・ノアの通路の一つ。そこに腰掛けていたミュレイに背後から声が聞こえてきた。振り返る事はしなかったが、そこに立っているのが誰なのかは明らかであった。声だけで判断できるほど、ミュレイにとって彼は親しい間柄だったのだから。

「タケルか……！？ どうしてここに……？」

「それは、僕も王族だからね。当然出席してるさ……。地上で、騒ぎがあつたらしい。恐らく魔剣狩りが乗り込んでくるよ」

「馬鹿な……。自殺行為じゃ……」

齒軋りするミュレイの背後、タケルは正装で微笑んでいた。姉の紅い髪に触れ、その香りを楽しむように顔を近づける。戦乱の足音はぐんぐん迫ってきている。タケルは姉の手にそっと触れ、小さな紙切れを手渡した。

「脱出ルートが書いてある……。姉さん、ちゃんと無事に逃げるんだよ……？」

「タケル……？ お主、どうするつもりじゃ……！？」

「それは 秘密。また後でね、姉さん……」

背後からタケルの気配が消え、ミュレイは小さく舌打ちした。タケルが何をしようとしているのかは判らないが、それが危険な事に変わりない。タケルの事も不安だったが、地上の事も気にかかる。身動きの取れない我が身を呪いつつ、ミュレイは祈るように目を瞑るのであった。

The truth (1)

「ホクト君ホクト君、あれあれっ!!」

市街地を走り抜けるホクトの手を引つ張り、うさ子が叫んだ。遠く、五番ゲートへと進んで行くシエルシの姿を見つけたからである。ゲートへと進む道は剣誓隊により包囲されており、ホクトは今まさにそれを突破しようと向かう所であった。

黄金の甲冑を身にまとった騎士たちの背後、シエルシは白い甲冑の騎士たちと共に歩いていく。美しい純白のドレスに包まれたシエルシを遠巻きに見つめ、アクティは小さく舌打ちする。

「全く、こんな時に暢気だよね……」

「シエルシちゃんっ!! シエルシちゃん、こっちこっちなのーっ!!」

「ちょ……おま……。そういうことしちゃうかね現場で……」

両手をぶんぶん振り回し、大声でシエルシに呼びかけるうさ子。

それが届いたのか否かは判らなかったが、シエルシは一瞬ホクトたちの方へと目を向けた。しかし直ぐに歩みを進め、転送魔法陣からインフェル・ノアへと転移してしまう。

「あう……行っちゃったの……」

「しかし剣誓隊には思い切り気づかれたな……」

「ああもうつ!? うさ子の所為だからねっ!! 馬鹿!!」

「い、ごめんなさいなの……?」

駆け寄ってくる剣誓隊の前にホクトはガリユウを揮い、目を瞑る。収束した魔力は体内から、対外から同時に練り上げた力で魔剣に秘められた力を呼び覚ましていく。

「うさ子、アクティ……しっかりついて来いよ」

「わ、わかった!」

「ガリユウ、封印術式開放……! さあ、パーティーの始まりだ!」

黒い陽炎を纏い、ホクトが一気に走り出す。圧倒的な初動にうさ子とアクティがその姿を見失った瞬間、ホクトは剣誓隊の魔剣使い五人の前に立っていた。飛び込むと同時に回転し、ガリユウを揮う。一撃で魔剣使い三人を倒し、後続から飛んで来る魔法攻撃を剣で弾く。踊るように前に進み、黒い魔剣を大地へと突き刺した。魔法陣が大地に浮かび上がり、それは見る見る騎士団を飲み込んでいく。

魔法陣から次々に飛び出したのは無数の刃であった。一つ一つが

別の形状をした魔剣、それらが一斉に波打つように出現したのである。刃の津波は帝国騎士団を飲み込み、剣誓隊をも一撃で一掃していく。剣を引き抜いたホクトはガリユウを肩に乗せ、そのまま生き残った魔剣使いへと襲い掛かる。

「アクティ、転送魔法陣を動かせ!!」

「す、す……。こっちは任せて!!」

援護する必要すらなく、ホクトは単身で無数の魔剣使いと渡り合っている。まるで近づく事も出来ず、ばたばたと倒されていく騎士たちを横目にアクティは転送魔法陣を起動させる為に術式に干渉する。背後、うさ子はじつと真上にあるインフェル・ノアを見上げていた。

「なんだかここ、見覚えがあるの……。うさ、前にもここに来た事があるような気が……」

「ホクト、転送魔法陣動いたよ!!」

「あいよお　ッ!!」

ガリユウを振り回し、漆黒の波動で周囲の敵を全て吹き飛ばす。あっけなく防衛戦力を壊滅させたホクトは余裕の足取りでアクティまで歩み寄り、魔法陣の術式を覗き込んだ。

「よし、これでインフェル・ノアに突入出来るな。後続部隊の連中に連絡しといてやれ」

「うさ、なんにもすることがないの……はうう」

「ホクトが強すぎだよ……。普通魔剣使い相手にそんなに圧倒的なのかなあ……」

「流石ホクト君なのっ！ はっっ！ はっはっっ！！」

両手を振り回し、ホクトを褒め称えるうさ子。魔法陣を起動し、インフェル・ノアへと向かおうとするホクトであったが、その背後に立ちふさがる影があった。白い甲冑に身を包み、その手には巨大な盾を模した魔剣を装備している。二人が対峙するのはこれで二度目であり。 “二度目は無い”と、そう誓った間柄であった。

「シエルシちゃんの、騎士さんなの……！！」

「やば、あいつも魔剣使い……？」

ザルヴァトーレの騎士、イスルギ。守るべき姫であるシエルシを送り届け、既に彼の役割の殆どは果たされたといっても過言ではない。騎士は魔剣を手に白いマントをはためかせ前が出る。ホクトたちがインフェル・ノアへと向かおうとしているのは明らかであり、そして彼にはそれを阻止する義務があった。

シエルシは……彼の護るべき姫は、覚悟を決めて己を犠牲にして歩き出したのだ。国の為にと、己に出来る事を成そうとしている。ならばそれを全力で支えるのが騎士として彼がやるべきことであり、彼の責務そのものなのだ。

「先日は、姫が世話になったな。だが確かに言っただはずだ。次はない……と」

「……。あんだ、シエルシの事を護りたくてカントイルまで追

っかけてきたわりには、アツサリとシエルシを嫁に出したんだな」

「姫ご自身が決めた事だ。騎士である私が口出しする事ではない」

「成る程ね……。でもお前、本当はシエルシを嫁入りなんてさせた
くないはずだ。それも、望まない結婚なんてな」

イスルギは無言で盾を構えそこから槍を引き抜き構える。ホクトはそれに応じてガリユウを片手で構えた。イスルギはもう、ホクトの言葉に応えるつもりはないようだ。確かにお互い、ここで喋っている場合ではないのも事実である。

今にも戦いが始まりそうな一触即発の空気の中、ホクトの前に出たのはうさ子だった。うさ子はミストラルを装備した拳を構え、ホクトを庇うように腕を伸ばす。ホクトは黙って剣を引き、ガリユウを肩に乗せてうさ子を見やった。

「ホクト君、ここはうさが引き受けるの」

「……大丈夫か？ そいつ、かなり出来るぞ」

「大丈夫なのっ！ ホクト君の為にうさも戦うの！ うさはね、ホクト君を助けたいの……！ うさがホクト君を助けて、だからホクト君はシエルシちゃんを助けてあげてっ！！」

うさ子とホクトの会話終了を待たず、イスルギは槍と盾を構えて突っ込んでくる。繰り出される突きをミストラルで受け流し、うさ子はそれを掴んで蹴りを放つ。カウンターは盾で防がれてしまったが丁度拮抗状態が作られ、うさ子はホクトに叫んだ。

「早く！！ ホクト君、お願いなのっ！！ きつとシエルシちゃん

も、本当は結婚なんかしたくないはずなのっ！ だからホクト君、助けてあげてっ！！」

「………………。アクティ、うさ子の援護を頼む」

「え！？ 一人で行くつもり！？」

「時間がねえ。それにここをこじ開けないとどっち道どん詰まりだろ？ 後は任せる」

「あ、ちよつと！！ ホクト ……！？ ああもう、しょうがないなあ…………っ！！」

アクティがライフルを構え、うさ子とイスルギが互いに身を離す。ホクトはうさ子に護られ転送魔法を発動し、インフェル・ノアへと向かった。その道を塞ぐようにうさ子は拳を握り締め、構えを取った。

「退け…………。無闇に命を奪いたくはない」

「うさは退きません！ うさは、ホクト君の背中をお守りします！ アクティちゃん、一緒に頑張ろうなのっ！ はうはう！」

「うっ…………しょうがないなあ、もう…………。まあ、ホクトを行かせるのがこの場合正解だよ…………。やってやる…………！！」

槍を振り回し、それを大地に突き刺しイスルギは顔を上げた。壁と成っているのは少女 ……しかも二人とも、である。余り倒して気分のいい相手ではないが……………選り好み出来るほど身分は高くないし、状況も余裕がない。イスルギは静かに呼吸を整え、戦う覚悟を

命を奪う覚悟を決めた。

「ザルヴァトーレ騎士団団長、イスルギ……！ いざ、参るッ……！」

「かかってこいなのおおおおっ！！ はっはっはっはっはっ！！！！」

イスルギが繰り出す槍とうさ子の拳が激突する頃。放たれる弾丸の雨から逃れ、昴は物陰に隠れていた。困り果てた様子ノウサクの隣、昴は刀をじっと見つめ続けている。やがてそれを強く握り締め、前へ。無謀としか言い様のない暴走にも似た突撃であった。飛び出した昴は弾丸の雨の中を突き進んでいく。刀を片手に、真っ直ぐに。

「昴殿ッ！？」

痛いのは、嫌だった。死ぬのはもつと嫌だ。死んだら何も出来なくなる。死んだら後悔する事さえも出来なくなってしまう。

少女が己の罪に対し、たった一つだけ決してしてはならないと定めた法則……。それは、己の命を失う事。永遠に罪を後悔し続ける事こそ、自分に課せられた使命にして償いの形。ならばどうしても、この身一つだけは手放せない。

叫びながら昴は突き進んでいく。走馬灯のように脳裏には様々な景色が蘇っていた。ビルの上から落下するイメージ……。死が近づき、時が限界まで引き伸ばされ限り無く永遠に近づいていく。昴は見開いた瞳に様々な物を宿したそして。確かに前へ。命を落とす事無く。一步、前へ。

ほんの僅か一秒未満の足取りだった。しかしそれは奇跡の一步である。何百、何千と放たれる弾丸の中を昴は掻い潜り一步を踏み出したのである。二歩目。一步目ならばまぐれですむ。だがこれ

をかわして前に進んだ時、それは偶然ではなくなるのだ。

二歩目。歯を食いしばり、視線を反らさずに前へ。ミユレイは月夜、寂しげに微笑んでいた。ヴァンは牢獄の中、悲しげに語っていた。そういう気持ちを知って、この世界で生きて、たとえ無力でもそれでも生きて戦うと決めたのならば。

責務の二歩目。決して死ねないという責任が背中を押した。三歩目を繰り出せば奇跡は当たり前に成り下がる。前に跳躍し、鞘に収めたままの刀へと手を伸ばす。今度こそ、命を落とすかもしれない。弾丸を吐き出す機関銃は獣のように吼え続けている。普通ならば考えられない、命を失って当たり前の状況。あと何メートル進めば敵を切れる？ 距離が果てしなく遠い。時間が果てしなく遠い。もっと早く、動けたらよかったのに。動けないならせめて。目を閉じ、前を見る。瞬きと呼ばれるその刹那さえ、永久に等しく感じられた。

肉体と感覚の限界の壁を己の歩みで踏破する。決意の四歩目が決まった時、少女は確かに人間として何か大きな壁を乗り越えたのだ。放たれる弾丸の中、足取りは軽やかに進んでいく。至近距離まで歩み寄り、繰り出す斬撃！ ドレスの刺客はそれを銃を使って防御するしかなかった。

「昴殿……！？ よ、よけ……！？ どうやって……？」

ウサクが啞然とするのも無理はなかった。昴は今、放たれるガトリングの放火の中を生身でただ走りぬけたのである。少女は小さく息をつき、防がれた刃を返して繰り出す。

「お願い、ミラ……。力を貸して！」

白い刀身が瞬き、魔力が通されていく。昴の中に眠っていた何か

が剣を通じて引き出されていく。繰り出される二撃目はやはりまぐ

れなどではなく。今度こそ、一撃は重く刺客を弾き飛ばした。片手で刃をくるりと回し、鞘へ収める昴。崩れた広場の中、少女は静かに顔を上げる。その横顔は既に数秒前とはまるで別人。思い出すように。歌うように。ただ高らかに。少女は決意を吐いて紡ぐ。

「行こう、ミラ。目を覚ませ……破魔の刃よ……ッ！」

すらりと、太刀を抜き去った次の瞬間、ひんやりと冷たい風が吹きぬけていた。風の中、昴は紙とシャツを靡かせ美しい拳動で太刀を引き抜いてみせる。主を失い、彷徨っていた太刀はようやく新たな主と出会った。目覚めた力が昴の腕に刻まれ、それは魔剣として本来の力を取り戻していく。

隙を見つけ、刺客は弾丸を放った。しかし昴は一切の無駄の無い計算しつくされた機械のような足取りでそれを掻い潜っていく。否少女にはただ、弾丸が全て見えていただけの事である。その瞳は全ての物体の動きを見切り、思考は冷やされ少女の身体を誤差無く動かしていく。剣から放たれる白い光を揮い、繰り出した一撃。大地を氷結させ、蜂起する無数の氷牙が刺客へと襲い掛かる。結晶の壁の中、昴は小さく呟いた。

「……………破魔剣、ユウガ。それが、君の名前……………」

自らが生み出した氷の壁越しに刃を降りぬく昴。手先でくるりと太刀を鞘へと収め、目を閉じ背を向けた。少女の背後、氷の壁は碎け散り衝撃で弾き飛ばされた刺客は意識を失ったのか、壁に激突したまま動かなくなっていた。

「す、昴殿……………!? 何がどうなっているのござるか!? それ
は、ミラ殿の技でござるよ……………!?」

「……………多分、この剣にミラの気持ちが残ってるんだと想う。ミラも、ミュレイを助けたがってるんだよ……………」

静かに太刀を握り締め、昴は真上を睨む。インフェル・ノア。彼女の思い人はそこで待っている。急がなければならぬ。この気持を嘘にしまわぬ為にも。まだ後悔し続けている、彼女の為にも。

昴はウサクを置き去りに転送魔法陣へと走り出した。慌てて後を追いかけていくウサク……………。見上げる空の上、インフェル・ノアではホクトが転送を完了し、外壁に辿り着いていた。周囲を取り囲む剣誓隊を見回し、男は剣を構え片手で招く。一斉に魔剣使いが動き出し、ホクトはその渦中へと飛び込んでいくのであった……………。

The truth (2)

“魔剣狩り”、ヴァン・ノーレッジという男についてミュレイが知っている情報は所詮他人から聞いた事に過ぎない。

だがそれでもミュレイは知っていた。ヴァンがどれほどの男で、どんな性格の男なのか。ミラはヴァンの事をとても楽しそうに話した。その話を聞く事を忌々しく思いながらもミュレイはそんな妹の話忘れられず、ヴァンという男のイメージを構成していたのである。

彼は剣誓隊を相手に一人で大立ち回りを繰り返し、倒した魔剣使いの数は百を悠々と超えている。それは、この世界に生きる魔剣使いの何割を意味しているのだろうか？　ククラカンに所属している魔剣使いはたった十名足らずである。それを思えばヴァンがその魔剣使いの中でどれだけの腕前の者なのか、自ずとミュレイにも判断する事が出来た。

男の人生は戦場で始まり戦場のみで埋め尽くされている。数え切れない命を斬り捨て、ただ己の為だけに生きてきた死神。最早修羅と呼ぶに相応しい領域にまで達したその男が、生涯たった一人だけ護りたいと、愛したいと願った女……それが妹のミラだったのである。

ミラから聞く話は、故に真実とは程遠いのもかもしれない。少なくともヴァンという恐るべき男の存在を、彼女は笑って語るのだからインフェル・ノアの混乱が激しくなる中、ミュレイは混乱に乗じて走り出していた。理由は当然　外壁で見えている一つの戦闘である。

近づく騎士を右から左まで片っ端から薙ぎ払い、障害を障害ともせず突き進んでいく黒衣の剣士の存在にミュレイは驚愕していた。下のラクヨウで戦闘が起きているのは判っている。だが、そんな混

乱の中とは言え単身王を討とうと突っ込んでくる馬鹿が一匹。しかもその無謀も無茶も、当たり前前のようにこなしたただの過去としてしまふ。こんなふざけた存在があつて良いのか。ミュレイは、ヴァンを過小評価していた。

男はあつさりとステラの攻撃で気を失つてラクヨウに幽閉された。しかしそれがヴァンの真の実力などではなかったのだ。ヴァンは術式をも無力化する特殊能力を持っている。地下牢から脱出する事もまるで難しい事ではない。この地で婚姻の儀が催される事を知っていたとしたら、あれほど効率的にこの国に侵入する手段もなかっただろう。

「あれが魔剣狩りの男か……！ ヴァン・ノーレッジ……ッ！？」

人々が避難を開始し、要塞都市インフェル・ノアに次から次へと警備用の機動兵器が投入される。装甲版の上、魔剣狩りだけではなく襲い掛かる小型戦闘機や自立戦闘戦車などを相手に更にそれを魔剣一本で突き進む魔剣狩り。ミュレイは眉を潜め、現場へと向かつていく。

「婚姻の儀が潰される……！ これ以上の失態は、ククラカンの失脚を確実にする、か……。否、今こそ皇帝打倒のチャンス、か……？ ええい、迷っていても仕方ないっ！！」

弟から手渡された指示書を握り締め、ミュレイは現場へと向かつていく。インフェル・ノア外壁で連続して爆発が巻き起こり、走るミュレイの心を焦らせた……。

「姫様、ここは危険です！ どうか避難を！」

カーペットの上を歩き続けるシエルシは騎士たちの声に足を止めて振り返った。自らが歩いてきた外壁の坂道は今、ホクトが駆け抜ける戦場となっている。空中から自立戦闘機による爆撃　しかし無傷。放たれる騎士団の銃弾の雨　しかし無傷。襲い掛かる剣誓隊　しかし一蹴。ホクトは歩みを止めず真つ直ぐに進んでくる。風が吹きぬける外壁の上、シエルシは髪を靡かせその姿を見下ろしていた。

「……いいえ、私は先に進みます。貴方達はもう、下がちなさい。絶対に彼に挑んでは駄目ですよ？」

「え？　は、しかし……？」

「これはザルヴァトーレの姫としての最後の命令です……。私は、ここに居ます。ここに居る事で、ここで歩む事で、私は私の意味を成してみせる……」

シエルシはドレスの裾を破き、ケープを脱ぎ捨てる。風に吹き飛ばされていく白い布を背に、少女は勢い良く走り出した。他のゲートからも、花嫁候補たちが今この坂道を登っているのだ。頂点に辿り着けねば意味がない。シエルシはしっかりと前を見据え、走り出す。そんな少女の上空、自立型戦闘機が一機再びホクトの元へ向かっていた。その上には一人の人影があり、その影は猛スピードで前進する戦闘機の上から飛び降り、空中で魔剣を構築しホクトへと襲い掛かった。

魔剣使いは周囲に居る騎士をガリユウで薙ぎ払い、空中から襲い掛かる“白騎士”を迎え撃つ。風の中、長髪を靡かせ襲いかかる白騎士。二つの魔剣は何度目か判らない激突を果たし、白騎士は空中へと再び舞い上がり、ホクトの前へと降り立った。

莊嚴なる純白の鎧の下、白銀の袴が風に靡く。白騎士は右手に太刀を、左手に鞘を構えてホクトを仰ぎ見る。魔剣狩りは剣を肩に乗せ、余裕の笑みでそれに応じた。

「よお、白騎士……。どうせ出てくるだろうとは思ってたが、派手な登場だな」

『貴様程ではないさ、魔剣狩り……。必ず現れると思っていたよ。現れてくれてありがとう』

「俺にも礼を言わせてくれ。必ず現れると思ってたぜ……。？ 現れてくれてありがとうよ」

白騎士は剣を下げ、小さく肩を揺らして笑った。それが意外でホクトは冷や汗を流す。白い仮面の下、どんな顔をしているのかが気になったというもあるが。

そもそも白騎士は女である。女であり、そして持っているはずのないミラの刀、破魔剣ユウガを手に行っている。故にホクトは彼女がミラのだと、そう誤解してしまったのである。そのミラに対する反応はホクトの失われた記憶が発生させた誤作動にも似たものだったが、今ならばはっきりとわかる。

「てめえ、ミラじゃねえな　？」

当たり前である。ミラはとっくに死んでいるのだから。ならばこの目の前にいる女は一体何者で、何故ミラの刀を持っているのか……。いや、ミラではないと言い切れる自信もホクトにはなかった。ミラの拳動、ミラの声、ミラの技……。彼女はミラそのものだったのである。風の中見つめあう二人を騎士たちは遠巻きに取り囲んだ。白騎士が現れた場合、その場は全て白騎士に預けよというのは皇帝

ハロルド自らの命令でもあった。彼らはそれに従うしかなかったし、どちらにせよホクトは強すぎて近づく事すら出来ない。

『貴様こそ、いつまでそんな演技を続けているつもりだ？』

「だから俺はヴァンじゃないホクト君だ」

『そんな事は知っている』

白騎士が、あっさりとその答える。ホクトは今までに無い反応に思わず目を丸くした。そして白騎士は刀を鞘に納め、静かにそれを居合いの構えに移した。

『だからこそ、もう一度問う……。貴様……。何故魔剣狩りを名乗る？ 何故ガリユウを扱う？ 答える、貴様は 何者だ？』

そう、ホクトはヴァンなどではなかった。それは今まで何度も何度も、何度も繰り返して主張してきた事である。しかしそれを聞き入れてくれる者はいなかった。仲間には信じてもらえなかったのに、まさか宿敵に信じてもらえるとは……。なんとも複雑な心境のまま、男は魔剣を大地に叩きつける。轟音と共にガリユウが目覚め、その刀身に無数の瞳が浮かび上がる。瞳はぎよろりと白騎士を睨み、獲物を寄せと黒いオーラを立ち上らせた。

「俺がヴァンじゃないっていう証拠はどこにある？」

『貴様がヴァンであるはずがない。何故ならヴァンは、私が殺したからだ』

「ほ……。興味深いな。もう少し詳しく聞かせてもらいたいね」

『貴様と悠長に話している時間はない。私とて貴様を許したわけではないのだ。知りたければ、死合の中で確かめて見る。闇の継承者よ……』

もう、質問する事はしなかった。ホクトは魔剣の力を引き絞り、そして開放していく。術式が腕を、身体を、全身を支配する……。だがその侵食を己の意思で封じ込め、黒き龍を従えるのだ。炎が舞い上がり、ホクトの身体を焦がす。その激しい熱の中、ガリユウは空に吼えた。

メリーベルにより調整を施された今のガリユウならば、本来の姿を開放する事になんの問題も無い。体は、体のままに。意識は、意識のままに。暴走ではなく、それは冷静な覚醒。風が吹きぬけ、闇を晴らしていく。姿を現したのは、黒衣の鎧を身に纏った一人の騎士。彼女を白騎士と称するのならば、この男は正に黒騎士と呼ばれるに相応しい。ガリユウは形状を変化させ、方向性の定まらなかつた生き物のような形状から剣としてしっかりと形を構成しつつある。それを頭上で回転させ、騎士は静かに構えを取る。

『そうだ、それでこそ……。倒し甲斐があるというもの。行くぞ魔剣狩り！ 貴様の命、今度こそ貰い受けるッ！！』

ホクトは何も答えなかった。黒い甲冑の騎士が走り出し、白騎士は居合いの構えでそれを迎え撃つ。世界最高峰のカテゴリS魔剣使い、その二人が今、王座の真下で決闘を開始するのであった。

「す、昴殿……！？ 本当に行くのでござるかっ！？」

「当たり前でしょ……！ ミュレイを助けに行く！」

魔剣狩りが戦闘を行う五番ゲートとは反対に存在する二番ゲートへと昴は向かっていた。混乱の余波はまだ二番ゲートには及んでおらず、敵の本隊がなだれ込んでいる一番ゲートに人を割いている所をかそこは比較的静かだった。昴は駆け寄りながらユウガを構え、警備の騎士を二名同時に斬り倒す。見違えるような昴の動きも驚きであったが、昴が迷い無く人間を斬った事もウサクは驚きであった。

「ウサクはここで待ってて。反逆者になるのは私だけで十分だ」

「いや、そういうわけには行かないでござるよ。拙者の使命は今や昴殿を護ることとござる。それに……姫様を助けたいの、拙者と同じ事でござる……」

「ウサク……。いいの……？」

「拙者武士ではござらんが、一言はないでござるよ。さあ、転送魔法陣を発動するでござる！ 急がれよ、昴殿！」

昴は頷き、魔法陣の中へ入り込む。ウサクが魔法陣を発動し、慌てて中に入ってきたウサクと昴は空中に浮かぶ城へと転送されていた。った。

一方その頃、ミュレイは外部装甲へと飛び出し、式典用に展開されていた展望通路へと進んでいた。避難が既に完了しているのか、周囲に人の気配は無い。だが魔剣狩りが居る場所へ向かうのはそう

苦勞するような事ではない。騒乱が起きている場所を目指し、走っていくだけの事だ。

そうして走り続けるミュレイの正面、突然光の魔法陣が浮かび上がった。そこに現れたのは白い装甲を身にまとった少女、ステラであった。

「ステラ……!?!」

「ミュレイ・ヨシノ……。どこへ向かうつもりですか？ 貴方の配置場所は展望通路ではないはずですが」

「皇帝陛下の所に魔剣狩りが向かっておる……! 今直ぐ守りを固めねばならん!」

「それは貴方のやるべき事ではありません。ミュレイ、ハロルドは貴方の有能さを高く評価しています。出来る限り、穩便に事を進めて欲しいのです」

「このままでは皇帝が討たれるぞ!? そんな悠長に話している場合かッ!」

「ハロルドならば問題ありません。彼は魔剣狩り程度に敗北する事はあり得ませんから。それより……?」

突然、会話の途中でステラが停止する。それからくるりと振り返り、ミュレイに視線を合わせずに告げる。

「一番ゲートが破られたようです。ミュレイ、兎に角貴方は直ぐにインフェル・ノアから退避してください。それでは」

直ぐにまた消えてしまうステラ。ミュレイは暫く考え込み、額の汗を拭つて下の街を見下ろした。ステラになんといわれてもここで立ち止まるわけにはいかない。皇帝を討つチャンスと汚名を返上するチャンスが同時にやってきたのだ。今直ぐに行動を開始せねば、動きに乗り遅れる事になる。

迷いながらも再び走り出すステラ。姫が突き進むその方向は五番ゲート、魔剣狩りが大立ち回りを繰り返している戦場である。

「この……っ!!」

地上、うさ子はイスルギとの戦闘を継続していた。しかしイスルギは魔剣使いの中でもかなりの腕前であり、そのカテゴリーはAに区分される。生まれ持つ才能と騎士として生きてきたその過去は彼にとって大きな力となり、付け焼刃のうさ子の魔剣で太刀打ち出来るような相手ではない事は確かだった。

それはうさ子もわかっていた。実力に差があるのは承知の上である。それでもホクトを行かせたのは、彼の為でもあり自分の為でもあった。それが最良だと思つたし、自分もここでホクトの背中を護れないようではここにいない意味がないと思つた。鋼の拳を連打し、イスルギへと襲い掛かる。しかしイスルギの魔剣、“貴魔剣アルテツツア”は非常に頑丈であり、盾はうさ子の拳では碎けなかった。体の殆どを被つような巨大な盾に、2メートルを超える巨大な槍……。化け物退治専用としか思えないようなその武装でしかしイスルギは器用に立ち回る。うさ子とは年季が違うのだ。男は流れるような無駄の無い動作でうさ子の猛攻を防いでいた。

「無駄だ……。貴様では私は倒せない」

「や、やってみなきゃわかんないのっ！ はうっつー！！」

イスルギは溜息を漏らし、うさ子へと盾を思い切り叩きつける。身体ごと突っ込むような一撃はうさ子に直撃し、その身体は遙か彼方の民家に吹っ飛んで消えていく……。道が開き、ホクトの後を追いかけてようと魔法陣へと向かうイスルギであったが。その動きはアクティの射撃によって阻止されていた。

遠距離から放たれた銃弾を盾で防ぎ、イスルギはアクティを睨みつける。しかし少女は怯まずにライフルを連射する。だが如何せん相性が悪すぎる。イスルギは強固な守りを得意とする魔剣の使い手である。盾もそうなのだが、身体の周囲に展開されている魔力障壁も相当な強度を誇る。不意打ちは盾で防いだが、意識すれば障壁で弾丸ははじかれてしまう。

「うそっ！？ 対魔剣使い用の大型ライフルなのに……！？」

「魔剣使いに放つなら、術式でも施した魔弾を持ってくるべきだったな」

無言で槍を構えるイスルギ。冷や汗を流し、アクティが退避の姿勢を取ったその時である。叫びと共に猛然とうさ子がイスルギに駆け寄り、飛び蹴りを放った。それは盾で防がれてしまったが、うさ子の方も深手は負っていない。額から血を流し、しかしアクティを庇い前に着地する。

「うさ子！？」

「アクティちゃんは痛い目にはあわせないの……っ！！ うさだつて……うさだつてやればできるのーっ！！」

両腕の円刃を切り離し、左右同時に射出する。撃ち出され回転しながら迫るチャクラム、それを盾で防ぐイスルギ。しかしチャクラムとは別方向に回り込んでいたうさ子がその側面から蹴りを放った。盾でチャクラムを防ぎ、蹴りは槍で防ぐ。しかしその足先から更にチャクラムが顔面目掛けて放たれ、イスルギは巨大な武装を抱えたまま身を屈めてそれを回避した。

「このおおおっ!!」

更に槍を蹴り、身体を空中で捻ってイスルギの頭部を蹴りつける。激しい威力に大地が軋み、イスルギの意識は一瞬途切れる。が、直ぐに復帰して槍でうさ子の脇腹を殴り飛ばした。腕でガードするものの、威力は圧倒的にイスルギの一撃のほうが勝っている。

よろけながらも戻ってきたチャクラムを左右の腕に装備し、口から血を流しながら攻撃を仕掛ける。反撃を繰り出すとするイスルギの動きに合わせ、遠距離からアクティが銃弾を連射する。それらは魔力障壁で叩き落すものの、そちらに意識を集中するというと盾のガードが甘くなる。

うさ子が放った拳の一撃が盾に食い込み、イスルギの巨体を弾き飛ばした。うさ子は後方に跳び追撃を避ける。身体はよろけ、今にも膝をついてしまいそうだった。

「………………。少し、甘く見すぎたか…………」

イスルギは認識を改める。うさ子もアクティも子供であり、そして女性だった。故に命まで奪うつもりはなく手加減をしていたのだが、どうやらそう甘い認識で勝利出来るほど弱い相手でもなかったらしい。

槍を盾に収め、その形状を変化させる。両足を広げ、槍を装填した盾をまるで砲台のように固定し構えた。何がどうなればそんな形

になるのかわからず、一瞬きよんとするうさ子。しかしアクティにはそれが何を意味しているのか理解出来た。

「うさ子、避けてっ！！」

しかし時既に遅し。槍に収束した莫大な魔力は光を帯び、うさ子に“照準”が合わされる。尋常ではない魔力の猛り、そして殺気にうさ子は慌てて両腕でガードを固めた。

「
射抜け、アルテツア……！
バスターモード
砲撃形態……！
シュート
射出ッ

！！」

轟音の正体は音速を超える巨大な物体が放たれた証拠。激しい衝撃は大地を砕き、民家を吹き飛ばし、猛る魔力の槍は眩い光と共にうさ子目掛けて飛んで行く。盾に装填した槍を放つという、砲撃形態。アルテツアが持つ防御とは正反対に位置する、攻撃特化の能力……。

音速を超えて放たれた一撃をうさ子は見抜き、それを腕のミスラルで防いだ。その反応は賞賛。しかし、一撃でガードが解かれてしまう。放たれた弾丸は拘束で回転しており、うさ子の腕は左右共に血を噴出してねじれ曲がる。

それでも防御成功には変わりなかった。衝撃でぐらつく身体でうさ子は体勢を整えようとして目を見開いた。既に、次の弾丸が。槍が、盾に装填されていたのである。それが何を意味するのか、うさ子は考える間も無かった。

放たれる二度目の槍。防御の姿勢も取れないうさ子の身体を槍は貫通し、その背後にあった民家を全て片っ端からぶち抜いてラクヨウからすっ飛んでいく。大量の血が吹き出し、胸に大穴を空けたうさ子は力無くその場に膝を着いた。

「うさ子……うさ子……!？」

離れていても衝撃でアクティは吹き飛ばされるほどだったのである。直撃して原型を保っているだけうさ子の展開していた魔力障壁は強力だったという事が判る。イスルギは背を向け、転送魔法を發動してインフェル・ノアへと姿を消した。そこへアクティは駆け寄り、血の池の中に座っているうさ子の肩を揺らした。

「うさ子！ うさ子、しっかりしてっ!!」

「……………。アクティちゃん……………。うさ…………。駄目な、うさだったね…………。」

「ちょっと…………。冗談だよね…………？ なんなのあいつ、強すぎる…………!! うさ子、早く…………。早く手当てしないとっ!!」

前のめりに倒れこんだうさ子の身体を転がし、アクティは口を押さえた。うさ子の胸には大穴が開き、転がっているのに既に下の大地が見えていた。呼吸もままならないのか、先ほどから空気が抜けるような音だけを吐き出しうさ子の目は虚ろだった。アクティはそんなうさ子に縋り付き、悔しさに涙を零した。

「うさ子…………。しっかりしてよ…………!! うさ子！ うさ子っ!! ヲ
アン、助けてよっ!! うさ子が…………。うさ子が死んじゃうよおおお
おお ツ…………!!」

アクティの叫びが響き渡る五番ゲートからは離れた一番ゲート、そこを走るリフルの姿があった。ゲートの突破は完了し、今正にリ

フルはインフェル・ノアへと乗り込むはずの瞬間であった。女は足を止め、振り返る。そこには剣誓隊の黒い甲冑を装備した帝国騎士が一人、リフルを見つめて立っていた。

「いやあ〜……。こんなところで再会するとはおじさん思っただけだったよ　リフル」

「……………！？　貴様……………シグマール……………ッ！？　貴様、何故ここに……………！？」

「何故も何も、おじさんは剣誓隊だからねえ……。君の方こそどうしてここに？　まだ反帝国勢力に所属していたのか」

シグマールがそう言い切ると同時にリフルは走り出し、シグマールへ魔剣で襲い掛かった。シグマールもまた魔剣を取り出しそれに応じる。二人は正面から刃を交え、リフルは殺意を湛えた眼光で男を射抜く。

「よくもおめおめと私の前に姿を現せたな……………！　覚悟は出来ていないんだろっとな、シグマール！！」

「覚悟、ねえ……。そんなものはおじさん、出来てないけどねえ……………。でもリフル君、君だって出来てないんじゃないの　？」

脳裏をちらつく少年の姿にリフルは齒軋りし、後退する。二対の魔剣を重ね合わせ、目を瞑る。精神を集中し、その力の本当の使い方を知り放つ。

シグマールはその魔剣の能力を知っていた。故に先制……。無言で駆け寄り、剣を振り上げる。しかしそれよりもずっと早く、リフルの能力が発動する。シグマールの身体は衝撃を叩き込まれ、空中

をあっけなく舞うのであった。

The truth (3)

白騎士のスピードは、実はそんなに速いわけではないという事に既にヴァンは気づいていた。

一瞬一瞬、白騎士は猛スピード……否、知覚出来ないほどの速度で動く。所謂瞬間移動というヤツである。が、そんな速度で動く為には必ず何かの仕掛けがある事は判っていた。そしてその仕掛けが今、何となく判り始めていたのである。

白騎士が意識を超えた超速でホクトに攻撃を仕掛けても、ホクトの鎧 ガリユウが自動認識でそれを防御する。つまりホクトには認識出来ずとも、ガリユウには認識出来るという何らかの仕組みがあるのだ。四方八方から残像を残し襲い掛かる白騎士の刃にホクトはガリユウで応じていく。二人の戦いは加速し、最早一般騎士からは何が起きているのか判らないような戦いに突入しつつあった。

『厄介な剣だな、ガリユウ』

「……瞬間移動……じゃないな。お前 時間操作系能力者が……？」

『流石だな。ご名答 褒めてやろう』

次の瞬間、ホクトの動きが完全に停止する。瞬きさえも、呼吸さえも、心臓の音でさえも止まっている。それだけではない、白騎士を除く全ての存在が完全に停止しているのである。時の停止。それは本人の体感時間からして僅か一秒にも満たない世界の侵食である。だが、その一秒未満の時間だけでも“ホクトは目で追っていない”の気配を一度見失う”のである。これは相手の防御を極限まで困難にする、白騎士の特殊な歩法の一つであった。しかし時が停

止した世界の中でもガリユウの目だけは常に白騎士を捉えている。魔剣の力で作り出したこの現象を、同じく魔剣であるガリユウは受け付けなかったのだ。

故に、時が動き出した刹那の瞬間ガリユウは猛然と襲い掛かる。白騎士をまだ見失っている主よりも早く、それを迎撃する。仮に相手がホクトではなかったとしたら、この瞬間移動による連撃だけで大抵の魔剣使いは何が起きたのかわからずに倒れている事だろう。改めて白騎士の恐ろしさを認識し、ホクトは剣を握り締める。

「瞬間移動じゃないとわかればそんなに怖くはないさ。速力は変わってないんだからな」

それでも時間を操作する能力を持つ魔剣というものは、恐らくこの世にそう多く存在していないだろう。ホクトが収集した魔剣の中にさえ、時間操作の剣は混じっていなかった。そう、ユウガはこの世で非常に貴重な能力を持つ、“停止”の属性を持つ魔剣である。能力において貴重なホクトのガリユウと肩を並べられる、カテゴリスの力。

ネタがばれてしまい、白騎士はそれでも太刀を構える。当然それだけが白騎士の力というわけではなく、そのたかが一秒未満時間を止めるという行動がどれだけのアドバンテージを白騎士に与えているのか、それをホクトはきちんと理解している。ガリユウがなかったら既に首が飛んでいて当然の状況なのだから。

「しょうがねえな……。先を急いでるから 今日特別だ」

溜息を漏らし、ホクトはガリユウを装甲版の上に突き刺し両手を開ける。そうして術式の刻まれた鎧の腕を掲げ、静かに視線を伏せる。

「手加減は出来ないから、そのつもりでな……？ ガリユウ、捕食^{インスタ}情報より能力検索……！ これより限定戦闘時間内の封印術式を開放する……！」

ホクトの足元に漆黒の魔法陣が浮かび上がり、突き刺されたガリユウから莫大な魔力が一斉にあふれ出す。それは暴風となつて周囲の騎士団を弾き飛ばすが、白騎士はその風の中を一人走り出した。連続で時を止め、左右に身体を振り猛然と突き進む騎士。しかし術式の封印は解き放たれ、ホクトの周囲の足場を黒い影が飲み込んでいく。影により作られた領域の中、白騎士はホクトの首を狙い斬撃を繰り出した。しかし、それが黒騎士に届く事はない。ホクトの首元には、小さな剣を模した盾が浮かび攻撃を防いでいたのである。

「どうして俺が、“魔剣狩り”と呼ばれているか……知ってるか？」
首をかしげるホクト。その足元から突然槍が三本、同時に出現し白騎士へと襲い掛かった。慌てて回避し、後方に跳ぶ白騎士。ホクトは足元から生えた槍を引き抜き両手で回転させ二対構える。

「“魔剣狩り”ってのは、俺の能力名だ。まあ、見れば判るだろ？ 倒した相手の魔剣が使えるようになるっつー、わりとシヨボい能力なだけだよ……。つまり、元々ガリユウが持つてる能力は一つもないんだよなあ」

低く笑い、ホクトは槍を投げつける。それを太刀と鞘で左右弾き飛ばし、白騎士は前進する。ホクトは影の大地から同じく太刀を取り出し、白騎士の数倍のスピードで前へ。明らかな速力強化の能力に白騎士は戸惑いつつ、時間停止を駆使してそれを受け止める。そう、魔剣狩りとはホクトの力を文字通り表現した通り名である。

ガリユウはカテゴリーSと呼ばれているが、その魔剣そのものの能力は最低ランクのDと同等……。決してそれは最強ではない。むしろそれとは程遠い能力の剣である。だが、男はこれまで戦ってきた。何故戦ってきたのか？ 単純な話である。“ガリユウを強くする為”である。

ホクトは最初から強かったわけではない。最初は弱い、カテゴリーDの魔剣使いと戦った。その力を取り込んでカテゴリーCの魔剣使いを倒した。同じ手順でB、Aと登りつめ、そして剣誓隊を百人斬り倒し 世界各地を渡り、世直しと称して悪の魔剣を喰らい続けてきた。

そう、その剣は悪の力に染まっている。悪の力を奪い、喰らい、そして全てを自分の物にしてきた 人造なるカテゴリーSの魔剣。本来魔剣が生まれ持ち、そして絶対に変わらないカテゴリーに反逆した魔剣。それが蝕魔剣ガリユウなのである。

ガリユウの攻撃力は高くない。だから、攻撃力の高い魔剣のデータを使って攻撃力を強化する。ガリユウの防御力は高くない。だから、防御力の高い魔剣のデータを使って防御力を強化する。ガリユウに時間を止める能力がないのは、別段悲観的になるような事ではない。むしろ僥倖。それが足りないというのであれば、最強と呼ばれるものでないのであれば。

「お前の魔剣、俺がもらってやるよ」

黒い魔力を帯び、魔剣狩りは腕を翳す。振り払うようなその動きに従い、飛び出した魔剣のその数実に百。ずらりと、ぎっしりと、一列にならぶ魔剣の障壁。男の周囲三百六十度を囲み、周囲目掛けて容赦なく放出される。降り注ぐ、魔法をも越える魔剣の雨。包囲していた帝国騎士団は全身を魔剣で串刺しにされ、そして死体は広がった大地の影に喰らわれていく。ガリユウは消費魔力さえ、外部から捕食する事で補う事が出来る。更に光と力を増し、

ホクトの身体から放たれるオーラは加速していく。

『おぞましい剣だ、ガリユウ……。実に、凶悪極まる』

しかし、その剣の雨の中でたった一人白騎士だけは無傷で佇んでいた。死んで当然、当たり前という名の絶望が降り注いだその戦場の中、彼女の存在は尚も無垢である。騎士は刃を鞘に収め、再び構えを取った。

『だが　その邪悪尽く討ち払おう。我は神をも切り裂く一振りの刃　。邪神ならば僥倖、我が剣本領を發揮するに不足無し』

「………………。やっぱ、時間停止だけじゃねえな…………その剣」

『貴様のやり方に倣い、教えてやろう。我が剣の持つ能力は三つ　。 “停止”、 “氷結”、そして三つ目は　 “破魔”、だ』

答えを最後まで聞く前にホクトは魔剣を再びいつつ闇から引きずり出し、それを射出する。突っ込んでくる死の剣の前に白騎士は実に優雅、刃を一振り横に一閃　。すれ違う瞬間、ホクトが構築した魔剣は木っ端微塵に砕け散る。いや、それは砕け散るといふよりは　そう。存在を否定され、消滅したかのような　。

『もつと判りやすく説明してやろうか…………？　我が剣ユウガは、“魔”と呼ばれる存在を一刀両断する。“魔物”、“魔法”、“魔剣”　。同じ事だ。尽く闇は闇に、光は光に…………。触れる全ての一撃必殺、それが我が剣の力　。運が無かったな、魔剣狩り。何度でも繰り返し貴様に告げよう』

白刃を煌かせ、騎士は舞うように前へ。そして刃を真っ直ぐにホ

クトへと突きつける。白き光の剣士と黒き闇の剣士。二人の様相は、能力は、正に対極。

『貴様との縁、ここで断ち切る……！行くぞ“魔剣狩り”……！
剣の“禍被い”がお相手致す　ッ！！』

「……………。人には言われ慣れてるが、自分で言うのは初めてだ。
“反則”だよ、お前」

対極が動き出す。闇の刃の嵐の中へ、光を片手に騎士が飛び込んでいく。光と闇の決戦、それは今二人の騎士の手の中に。

The truth (3)

「俺に何かあった時は、ロゼを頼むぞ」

ある日、砂の海豚の団長である男……ロイ・ヴァンシユタールはリフルに言った。それはまだ、息子であるロゼが十三歳の時の事である。

当時の砂の海豚は反帝国組織の中でも中心的な組織の一つであり、特に団長のロイは指導者としても魔剣使いとしても一流であり、反帝国組織の中で高いカリスマを誇っていた。

当時、まだバテンカイトスが存在しなかった時代、拠点は当然カントイルの町であった。故にリフルはロイと共にカントイルで暮らし、そしてそこが彼女の第二の故郷となった。

元々リフルにとって故郷など存在しないも同然。彼女は戦災

孤児であり、そしてそれからずっと貧民街で人には決して言えないような悪事をしでかして何とか生きてきたのである。その日の糧を得る事だけを目的とし、獣のような生活を繰り返した。そんな幼い少女だったリフルを拾い、剣士にしてくれたのがロイだったのである。

親の居ないリフルにとって、ロイはたった一人の家族になった。そして気づけば砂の海豚の仲間たちは皆家族となった。彼らは殆どが戦災孤児であり、ロイは巨大なファミリーの父親でもあったのだ。そんなロイに憧れ、リフルはいつも強くなろうと努力してきた。賢くなろうと尽力してきた。ロイの役に立つ事、それが彼女の生き甲斐だった。

そんなロイには一人の息子が居た。リフルが組織に入ったばかりの頃、息子はまだ赤ん坊だった。リフルはその子供の世話を多忙なロイに変わり、幼いながらに一生懸命補佐していた。

子供は見る見る大きくなり、リフルの身体も大きくなった。子供だったリフルが大人になり、そして赤ん坊は少年になり、リフルの仕事も増えていった。戦場での剣士としての仕事、そして息子……ロゼの面倒を見る仕事。

ロイに妻はいなかった。妻はロゼを産んだ時に死んでしまったという。リフルは親の居ない寂しさと悲しさを知っていた。だからロゼにはそんな思いを味わわせてはいけないと、出来る限り彼のいう事をなんでも聞き、なんでも従い、彼の自由にさせる事にした。しかし、それはもしかしたら間違いだっただのかもしれない。

未熟な人間なりに彼女はロゼを護り、愛そうとした。だが父親であるロイは戦場で散る事となる。作戦行動中、帝国騎士団の襲撃に遭ったのである。それだけならばロイは倒される事はなかっただろう。だが 砂の海豚には、裏切り者が居たのだ。

背後から剣を刺され、倒れるロイの姿をリフルは大人になった今でも夢の中で繰り返し見る。血を流し倒れる愛しい人の姿……。だからこそ、それを覚えているからこそ、忘れてはいけない事が二つ。

“仇を討つ事”、そして“ロゼを護る事”。

その二つはそして今、果たされようとしている。砂の海豚を裏切った魔剣使い。ロイの親友だった男。組織のナンバー2……シグマール・ヴァンシユタール。ヴァンシユタールとは、元々はロイのファミリネームである。ロイはそれを苗字を持たない、家族を持たない仲間たちに分け与えた。故に砂の海豚の構成員は全員がヴァンシユタールなのである。そしてこのシグマールという男も、その名を受け入れ名乗った男……。

「相変わらず、乱暴だねえ……」

弾き飛ばされたシグマールはゆっくりと起き上がった。リフルは殺意を湛えた瞳でシグマールを見つめている。彼女にとってシグマールは全ての元凶。そして、ロゼを苦しめる事になった原因たちの根源なのだ。

この男が裏切りさえしなければ、ロゼは組織のリーダーになどなる必要はなかった。この男が裏切りさえしなければ、ロゼは父親を失わなかった。この男さえ、この男さえいなければ。

「シグマアアアアルツ!!!!!!」

響魔剣グロシアを両手に対に構え、雄叫びと共にリフルは駆け出す。それに応え、シグマールもまた構築した魔剣を構えた。“透魔剣センチア”それがシグマールの魔剣の名前である。大きな所謂両手剣と呼ばれる物で、そのデザインはかなり奇抜でこつこつしている。のだが、それをリフルは知らない。なぜならば彼女はそれを見た事が一度もなかったから。

グロシアで襲い掛かるリフルをシグマールはセンチアで迎撃する。だが、男の手の中に魔剣など影も形も存在しない。しかし切り上げる一撃からは重みのある風斬り音が伴い、リフルへと襲い掛か

る。リフルは慌てて防御を行い、後方に弾き飛ばされた。

そう、センチアの能力　それは“不可視”である。手にしているシグマールでさえ、センチアがどんな形なのか目で見た事は一度もない。何故ならその剣は絶対に目には見えないのである。シグマールは生まれ持ったこの剣の形状を把握する為に、毎日毎日それに手で触れて確認する事を余儀なくされた。それほど全く目に見えず、しかも魔力で感じられない剣　それがセンチアである。

「おじさんの能力を忘れたわけじゃないんだろう、リフル？　迂闊に飛び込むのは感心しないな……減点だ」

「責様……ッ」

「懐かしいねえ。思い出さないかい？　君に剣の稽古をつけてあげていた頃を……」

「黙れ　ッ！ー！」

そう、リフルは子供の頃シグマールに剣の稽古をつけてもらっていた。“一度も見た事が無い剣”と、何度も戦ってきた。何度も打ち合ってきた。シグマールの言葉でその事実を思い出したのだ。焦る事は無い。剣は絶対に形状を変えない。ならば、あの頃を思い出せば。

二人は同時に刃を揮う。目には見えない剣、それをリフルは確かに感じていた。子供の頃との感覚のズレでセンチアの刃の突起がリフルの頬を切り裂く。だが、それでまた正確になる。把握している。

二撃、三撃　。打ち合いの中でリフルは学習する。心を冷静にしてい。そう、激情型のリフルは直ぐに熱くなり、冷静さを失ってしまう。だが一度心を穏やかにすれば、その状況把握能力は一級

の魔剣使いをも凌ぐのである。

繰り出される見えない剣の攻撃、それを遂にリフルは完全に把握し回避する。轟音が首の真横をすり抜ける。しかし掻い潜り、恐れる事無く前へ。繰り出す斬撃、それはシグマールの鋼鉄の鎧を薙いだ。

「ほう、大分成長したね……リフル」

「貴様の言葉は右から左だ。黙っていた方がお互いの為だぞ」

「つれないねえ」

「私はお前を殺す……。そして　ロゼが安心して生きていける世界を作る。ただ、それだけだ」

そう、例え嫌われようとも。ここまで貫いてきた。ロゼを騙し通してきた。回りがとやかく言う事の意味も判っている。自分が間違っているということもわかっている。

それでも、ロゼが大事だから。絶対に絶対に、今度こそ手放したく無いから。あの子だけはと、どうにか守り抜きたくて。だからもう、危険な全ては遠ざけ切り払うのみ。それが嘘と偽りで塗りたくられた、邪道だったとしても。

ロゼを護り、ロゼと共に生きる……。彼がどんなに自分を恨んでも、それでも構わない。自分に彼の父がしてくれたように。愛を施してくれたように。それ以上の愛で決意に応えよう。彼女は剣士であり、そして一人の子である。ロイの意思は、絶対に貫き通すそれが彼女の信念である。

「奏でろ、響魔剣グラシア。シグマール、貴様にも聞かせてやろう。死のレクイエムという奴をな……！」

二対の魔剣、それが同時に形状変化していく。そう、元々それは剣ではない。剣として有効な形はしていないのだ。変化したグラシアを手先でくるりと回し、それをリフルは異様な構えで迎え入れた。肩に乗せ、耳を傾けるようなその仕草……。そう、まるで弦楽器。

手にした細い剣を並んだ刃へを合わせ、音色を奏でる。目を瞑り、音を感じる。視覚は邪魔にしかない。グラシアから流れ込んでくる環境情報を、全て音として捉えるのだ。そして触れた剣と剣は美しい音色を奏で、それは離れた場所にいるシグマールへと襲い掛かる。

何の防御も出来ず、吹っ飛ぶシグマール。当然である。攻撃は“音”に乗っているのだ。空気の中を廻り、振動し、そして息つく間も無く標的に襲い掛かる。民家の壁に叩きつけられるシグマール……。その音を聞き、演奏は加速していく。

連続して衝撃がシグマールを襲い、民家を叩き壊した。その瓦礫の中から飛び出したシグマールは見えない剣を引きずり真っ直ぐにグラシアでの演奏を続けるリフルへと襲い掛かる。しかしその動きは全て目には見えずとも感じ取れている。近づいてくるシグマールを迎撃するように次々に音の弾丸を射出する。座標を認識し、照準を固定し、その領域で音を爆ぜさせるのだ。連続して起こる爆発の中、シグマールは左右にそれを回避しながら猛然と突き進んでいく。繰り返される無色の切っ先。しかしそれをリフルは目を閉じたまま屈んで回避していた。カウンターで衝撃がシグマールの顎を打ち上げる。屈んだ姿勢から立ち上がりながら衝撃を三発シグマールの胴体に叩き込み、起き上がると同時に飛び上がり、回転しながら騎士を蹴り飛ばす。目には見えずとも、リフルには全てが感じられている。この能力こそ響魔剣グラシアが反帝国組織の中で英雄視されていた由来。踊るように戦い、謳う様に奏でる。勇壮かつ荘厳なる美しき剣士の楽曲。蹴りでよるめいたシグマール目

掛け、演奏の音色が放たれる。今度は先ほどとは違うメロディライン、文字通りのフィニッシュアップロー……！

「ぐっ！？」

巨大な空気の弾丸を受け、シグマールは派手に吹っ飛んでいく。鎧が砕け、血を流しながら男は慌てて立ち上がった。演奏は続いているのだ。その間はいくらでも攻撃が跳んでくる。止まったら殺される、それがロシアを相手にする時の心構えである。

「シグマール隊長　　ッ！！　ご無事ですかっ！？」

「エ、エレット君……！？　なんでここに……ぐおっ！？」

エレットに視線を向けている間に追撃をもらい、倒れるシグマール。目の前で何故かぶっ倒れたシグマールを見てエレットは仰天、戦場に鳴り響いている戦には不釣り合いな高らかな音色に目を向けた。

「なんですかこの音楽……？　そ、それより大佐！　急に持ち場を離れて走り出したと思ったら倒れてるなんて……大佐、しっかりしてください！！」

「いやエレット君、おじさんいま戦って……おふうっ！？　リフル君、待った！　今ちよっと取り込んでるから！！」

「私が貴様を殺すのに躊躇するとても思っつか……？」

「思わないけど……。ええい、エレット君撤退だ！　戦略的撤退！！」

「はっ!? はい、了解です!! 覚えていなさい、その魔剣使い! 次に会う時は必ず……ふぎゅっ!?」

顔面を音の衝撃が襲い、エレットはぱたりと倒れてしまう。何が起こったのかもまったく判らず、予想していなかった攻撃にただ頭の中が疑問で支配される。リフルは当然逃がすつもりはないし、次に会う時は……なんて悠長な話をするつもりはない。猛然と駆け寄りながら二人を見つめ、鋭い殺気を放っている。

「隊長、あの人なんかすごいですけどっ!?!」

「逃げるエレット君! 建造物の陰に隠れながら移動すれば攻撃は受けないはずだ!」

「りよ、了解ですっ!! 次に会う時は必ず……きゃああっ!?!」

「エレット君早く走りなさい!!」

再び追撃を受けたエレットの手を引いて走り出すシグマール。リフルはその後を追いかける為グラシアを演奏モードから刀剣モードに切り替える。そして二人が逃げ込んだインフェル・ノアへと自らも転移するのであった……。

The truth(3)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

ヴァンではないホクト君だ

うさ子「ホクト君、ホクト君！」

ホクト「おう？」

ミュレイ「ヴァン！」

ホクト「ヴァンではないホクト君だ」

ロゼ「ホクト」

ホクト「おう？」

アクティ「ヴァン！ ヴァンったら！」

ホクト「ヴァンではないホクト君だ……」

ブラッド「ヴァンったら……」

ホクト「だから俺はヴァンではないホクト君だ」

リフル「ホクト」

ホクト「なんだ？」

うさ子「ホクト君、ホクト君ホクト君ホクト君っ！」

ホクト「うるせえな……なんだ？」

アクティ「ヴァー……ン!!」

ホクト「俺はヴァンではないホクト君だ」

白騎士『見つけたぞ、魔剣狩り……』

ホクト「魔剣狩りだ」

昴「ヴァン……」

ホクト「ヴァンではないホクト君だっつの」

ウサク「ヴァン殿！」

ホクト「ヴァン殿!? 新しいがホクト君だ」

イスルギ「ヴァン……」

ホクト「ヴァンではないホクト君だ」

シエルシ「ホクト！」

ホクト「ああ、ホクト君だ」

ゲオルク「魔剣狩り……」

ホクト「魔剣狩りだ」

うさ子「ヴァン君ヴァン君！！」

ホクト「ああ……ああ？」

ロゼ「ホクト」

ホクト「おう」

アクティ「ホクト！！」

ホクト「だから俺はホクトではないヴァン君だ……？」

うさ子「ヴァン君！ ヴァン君！」

ホクト「ヴァン君ではないホクトだ」

アクティ「ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！！」

ホクト「だから、俺はホクトではないヴァン君だ………んっ！？」

全員「………じい………」

ホクト「……いや、何が……？」

The truth (4)

「うさ子、しつかり……っ！ 直ぐ、ホクトの所に連れてくから……っ！」

インフェル・ノア外壁。 戦場と化した王の居城の中、風に強く煽られながらアクティは進んでいた。隣を歩くうさ子に肩を貸し、二人は一步一步ゆつくりと進んでいく。うさ子の白い服は血で真っ赤に染まり、息も絶え絶えである。それもそのはず、むしろこうして歩いている事が奇跡以外の何物でもない。いや、奇跡などという言葉でそれを了承してもいいものだろうか？ 胸に大穴を空けられ呼吸はままならず、心臓さえも抉り取られている。だというのにうさ子は一步、また一步と前進を繰り返す。

何故うさ子が死なないのか、アクティにとっては大きな疑問でありしかしそれはどうでもいい事柄だった。うさ子は言ったのだ。ホクト君に会いたい、と。ならば連れて行く。そこまで連れて行く。それが自分がうさ子にしてあげられるたった一つの事だと信じて。

お互い血にまみれ、白い甲板を歩いていく。項垂れるうさ子の隣、アクティは暖かい血が冷えていくのを感じながら震えていた。うさ子とは出会ってまだ間もないが、それでも共に戦う仲間なのだ。死んでいいわけがない。死んでほしいわけがない。

「ホクト……どこにいるの……！？ ホクト……！！！」

次の瞬間、道の彼方で爆発が起こった。それが魔力の衝突による物と知り、アクティは歯を食いしばり歩き出す。そこにホクトがいるのなら。うさ子の願いを叶えてあげる為に、向かわねばならない。なんとしても、彼の元へ。

ホクトと白騎士が争う甲板の上、そこは既に誰も近づく事の出来ない激戦区となっている。二人だけしか戦っていないはずなのに無数の魔剣が飛び交い、闇の中を白い剣士が舞い踊る。アクティたちよりも大分先に現場に到着していたイスルギは壁沿いに跳躍し、複雑な起伏を持つインフェル・ノアの外壁を飛び移っていく。ホクトと白騎士の戦いに巻き込まれては恐らく無事では済まないし時間もかかりすぎる。彼の目的は打倒ホクトではなく、姫の護衛なのだ。ならばそこは白騎士に任せてしまおうのが賢い選択と言うもの。

戦いの装甲板を飛び越え、空中から一気に祭壇へと近づいていくイスルギ。その眼下、坂道を駆け上がっていくシエルシの姿があった。姫は流れる汗もそのままに長い長い坂道を駆け上がっていく。やがて辿り着いたインフェル・ノアの頂上。そこにはズラリと剣誓隊の腕利きが並び、その最奥には巨大な玉座があった。姫は歩み寄り、そして見上げる。そこに座している者こそ、この世を統べる者。この世を支配する、王者。

「おや、もう頂に辿り着く者がいるとは……。陛下、彼女は随分と優秀ですよ。この戦場の中、真っ先に駆けつけたのですからね」

声を上げたのは玉座の前に立つ一人の男だった。紫色の長髪を風に靡かせ、眼鏡を中指で押し上げて笑う。シエルシはただ、汗を流して王を見上げていた。そう。王は見上げる存在だった。それは比喩でもなんでもない。王は、兎に角巨大だったのである。

その玉座は既に塔のようであり、その前に座る巨軀の男。皇帝ハオルドは足を組み、玉座で頬杖をついてシエルシを見下ろしていた。皇帝ハオルド。その全長は兜の装飾を含めれば実に4メートル近く、その全身は機械的な黄金の鎧によって覆われている。炎のように赤いマントを背負い、玉座の傍らには巨大な。あまりにも巨大すぎる大剣が突き刺さっていた。

皇帝ハオルド……王はその瞳でシエルシを宿し、見下ろしている。

ハロルドの姿をシエルシは見た事がなかったし、恐らく殆どの人間がそうであろう。だがそれを見て誰もが思う事は一つ　ハロルドは　“人間ではない”……。

「しかし、随分な格好ですねえ……。花嫁とはとても思えませんよ、ザルヴァトーレの姫」

「え……？　あ、はい……えっ？　あ、は……！　これは、大変な無礼を……！」

慌てて跪くシエルシ。そうして手にしていた花束をそっと差し出した。色々というべき事は考えながら走ってきたはずだったが、それが何なのかまったく理解できず頭の中は完全に漂白されてしまっていた。何も考えられない。何がどうなっているのかわからない。ただただ自分の激しい鼓動の音にだけ耳を傾けていた。そんなシエルシを鼻で笑い、側近は呟く。

「おやおや、手が震えていますよ……？」

『ケルヴィー、良い……。下がっておれ』

眼鏡の男、ケルヴィーは王の一言で後方に控えた。王の声は重苦しくしわがれた男の声だった。王はゆっくりと玉座より立ち上がる。そうして一步步を進める毎に大地に大きな振動を生みつつ、シエルシへと近づいていく。

『シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレよ……。貴様が一番だ』

「は……っ？」

『この異常事態の連続の中、貴様だけが迷わず余の元まで辿り着いたのだ。未熟ながらもその気概や実に良し……！ 褒めて遣わす……！』

「あ………ありがたき、お言葉………」

『………だが、この程度の混乱で足が止まるようでは他の姫は話にならぬな。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ………貴様は優秀だが、その他は“落第”か………』

腕を組み、そう呟くハロルド。その足元に跪き、巨大すぎる身体にシエルシの身体がぶるぶると震えていた。威圧的な荘厳な雰囲気もそうだが、兎に角いくらなんでも巨大すぎる。人間ではないことは確かだ。考えてみれば別に不思議でもなんでもない事である。これは、皇帝生誕百周年の式典。百年も生きられる化け物が、この世のどこにいるというのか。

何かの見間違えではないかと、おずおずと顔を上げ上目遣いにハロルドを見上げるシエルシ、王は目を細め、そんなシエルシを見て小さく笑った。

『そう怯えるな、人族の姫よ。何もとって食ったりはせぬわ………』

「は、はいっ」

『貴様のような優秀な人間が、今後の世界を統治する王となりそして優秀な血族を産む……。実に良い。若すぎるのが少々気にかかるが、お主は余の子供達を産むに相応しい。その身、大事に扱ふ事だ』

色々な意味で突っ込みどころが満載でシエルシの頭はオーバーヒートしそうだった。余の子供達を産むといわれても、一体どうやっ

て子作りをするのか……そんな下らない事を考えてしまう。しかしシエルシ的には大きな問題である。どう考えてもこんな巨大すぎる化け物の妻になどなれる気はしなかった。

そうして頂垂れたまま考え込んでいると、ハロルドは紅いマントを風にはためかせながら戦場を見下ろした。遠くに居たホクトが皇帝の巨体に気づき、一瞬隙を見せ白騎士に蹴り飛ばされる。吹っ飛んでいくホクトを見下ろし、皇帝は顎に手を当て低く笑った。

『随分と調子のいい者が紛れ込んでおるわ……』

「陛下、ここは危険です。どうかお下がりを……」

『良い……。あの男、興味がある……。ここに座して待とうではないか。なあ、ザルヴァトーレの姫よ』

「え……？」

片手でシエルシを掴み上げ、持ち上げたままハロルドは玉座へと戻る。そしてシエルシを玉座の上にちよこんと乗せ、風を避けるようにマントでシエルシの風上を被った。

『さあ、追って来い闇の剣士よ……。人族の憎悪と悪意の力、余に見せてみよ』

鋼鉄の兜の下で笑うハロルド。王が待つ黒き剣士はその頃下の装甲版の上で落下しそうになりながら必死に食いしばっていた。壁に魔剣を突き刺し、何とか命からがら落下を免れたものの、先ほど白騎士に蹴り飛ばされたのは大分効いている。

「オイッ!? 皇帝でかすぎねえか……!?!? 遠近法かアレ!?!」

『ヴァン・ノーレッツジイイイイイッ！！！！』

自らも壁を飛び降り、落下してくる白騎士。その雄叫びと気迫にぞつとしつつ、ホクトは連続して魔剣を生み出し、壁に突き刺しそれを上つていく。空中でいくつかの魔剣を召喚し、それを白騎士に投擲する。しかし白騎士の持つ魔剣ユウガの一閃で魔剣は消失させられてしまう。

ユウガの刃は弱い魔剣ならば触れるだけでの一撃必殺　文字通り一発で消滅させてしまう。強い魔剣でも数回打ち合えば即瓦解させられてしまうのだ。そんな化け物相手に一体どう立ち振る舞えと
うのか。今のホクトに皇帝の巨大さに驚いている余裕はなかった。

「お前　落ちて死ぬつもりか!？」

『そんなへまはしないさ……！　責様じゃあるまいにッ！！』

大剣を構築し、落下してくる白騎士と激突する。しかしユウガはまるでバターでも斬るかのようにするりと大剣を両断し、ホクトの首へと刃が迫る。男はそれを白刃取りし、身体を捻って空中で白騎士を蹴り飛ばした。

「てめえ、人のコレクションをバシバシ壊してんじゃねえよっ！！」

蹴り飛ばした白騎士目掛け、落下しながら連続して魔法を放つ。ホクトの腕に纏った甲冑に浮かび上がる術式刻印は姿を変え、魔法を発射する状態に対応する。ガリュウが取り込んで扱えるものは何も魔剣だけではない。術式により発動する現象ならばすべて、ホクトはその手で喰らい己の物とする事が出来る。

召喚した鎖の魔法を壁に撃ちつけ、ぶら下がりながら魔法を連射する。放たれる火炎の弾丸は吹き飛んでいく白騎士の身体に衝突し、しかしダメージには程遠い。白騎士の装甲もホクトと同じく魔剣の能力で構築しているもの 故に魔法攻撃をキャンセルする力を備えているのである。

白騎士は足元に氷塊を作り、落下するそれを繋げてインフェル・ノアの壁に足場を作った。ホクトは鎖を手放し、新しい鎖を白騎士へと投げつける。氷の足場に突き刺さったそれを手繰り寄せ、黒い騎士は身軽に白騎士へと迫っていく。

「貴様、サルか……！」

「人間なんてのはサルと殆どかわんねんだ……よッ……！」

白騎士の顔面を蹴り飛ばす。そのまま空中で魔剣を構築しそれを頭に叩きつけるが、触れた瞬間魔剣の方が消失してしまう。強度が足りなかったのだと思いきる前に白騎士は手にしていた鞘でホクトの脇腹を打ちつけた。

白刃取りし、そのまま街にホクトが投げ捨ててしまった魔剣ユウガは再び白騎士の手の中で再構成される。繰り出される斬魔の一撃。ホクトはそれを片手を翳して防御する。牢獄で奪った、術式を無力化する術式を独自に組み替えて展開したのである。破魔の能力もキャンセル同士で打ち合い、激しく火花を散らすだけで刃の進みは鈍い。その隙を見てホクトは術式を纏った片手でユウガを掴み、それを壁に押し付ける。

「捕まえたぜえ……！ 白騎士 ツ……！」

刃に触れているホクトの片手は焼きつくような激痛に苛まれていたが、それはホクトにとって堪える内に入らない痛みだった。ガリ

ユウを背負った時点で痛みなど克服してしまっている……。空いている片手を振り上げ、ホクトは思い切り白騎士の仮面を殴りつけた。悪役面で何度も白騎士の顔を殴るホクトであったが、白騎士も負けてはいない。仮面ごと頭を振りかぶり、ホクトに頭突きしたのである。一瞬気が遠のきよるめくホクト、その影で白騎士は己の顔を両手で押さえ、頂垂れていた。

『ク……ッ!? 仮面が……!』

「頭に来た……。てめえ、このままガリュウの一部にして」

『いやあっ!』

それは実に、実に可愛らしい声だった。壁に押し付け、血を流しながら息を荒らげているホクトであったが冷静に考えてみると白騎士は女なのである。それをこうして一歩足を踏み外せば落下して死んでしまう氷の上でねじ伏せているというのはなんともいえない状況である。

「いやあつて……おま……マジかよ……」

『私を、見るな……! 私の顔を、見るなあああああつ!』

泣き叫ぶ白騎士の声にホクトはたじろぎ、舌打ちを残してインフエル・ノアの壁を魔剣を突き刺し駆け上がった……。その場に残された白騎士は砕けた仮面の代わりに自分の顔を両手で抑え、震えながらゆっくりと立ち上がる。

「魔剣、狩り……。待て……。待って……っ」

片手で顔を抑え、片手でホクトへと手を伸ばす白騎士。その足場が崩れ、氷と共に落ちていく。落下していく白騎士を見下ろし、ホクトは後味悪く通路へと復帰していた。既に障害は無く、一本道の坂道の向こう、巨大な影が待ち構えている。

手の中にガリユウを再構成し、それを肩に乗せ歩き出す。この世の地獄を歩いてきた男、孤高の魔剣狩り。その歩みの一つ一つを、皇帝ハロルドはその静かで強い眼差しで見つめていた。

The truth (4)

「ミュレイ!! ミュレイ、どこにいるんだ ツ!!」

装甲版の上を走りながら叫ぶ昴。二人は戦場と思しき場所へと向かっていく。そこにはまるで化け物か何かが通過したかのような凄惨な光景が広がっていた。倒れる帝国騎士 玉座のある頂点の丘を目指す坂道の中、その男は一人風の中で佇んでいた。黒衣の鎧を纏い、その右手には漆黒の刃。振り返る横顔は仮面の所為で顔まではわからなかった。しかしその男が何物なのか、昴には直ぐに理解出来た。

「ヴァン……」

「……………よくここまであがってこられたな」

振り返るヴァン。昴は無言で歩み寄る……。傍らに立つウサクが止めたところで昴は聞きはしなかった。首に巻いた兄にもらったマ

フラーが風に靡き、昴は眼鏡越しにじつと魔剣狩りを見つめる。彼はこのまま王の元へ向かい、そして戦いを挑むのだろう。それは婚姻の儀、そして式典の完全なる失敗を意味している。

昴は無言でユウガを抜き、それを構えた。その構えに迷いはなく、自然と呼吸も目つきも戦闘に合わせて変わって行く。驚いたのは昴もそうであったが、ヴァンはそれ以上だった。なぜならば死んだと思っていた自分の愛した女の剣を持ち、そして瓜二つな挙動をしている女が目の前に現れたのだから。

「お前……何だ？ どうしてミラにそこまで似ている……？」

「私は……ミュレイにこの剣、ユウガを托された……」

「……ユウガの術式、か……。確かに俺は喰えなかつたからな。ミュレイが持っていたとしてもおかしくはない。が　そこまで何もかも同じなのは目障りだな」

ヴァンの放つ怒気はそのまま魔力の風となって昴へ吹き付ける。しかしそれに負ける事も退く事も無く、少女は一步前へ。決意と行動が彼女を変えたというのは勿論そうだろう。しかしここまで人が変わったかのように剣術を扱えるようになるのは異常としか言い様がない。昴もそれは判っていた。だが、今はこの力はミュレイを助ける事に使えるのだからそれで十分……。そう考える事にしたのだ。

「ヴァン、もう止めてよ……！　このままじゃククラカンが滅茶苦茶になっちゃっつー！！　ミラもそんなの望んでないよ……！」

「知ったような口を聞いてんじゃねえ……！　お前にミラの何が判るッー？　この国を愛し、世界を愛し、そして結局裏切られて死ん

だミラの気持ちがお前に判るかッ!?」

叫びと同時にヴァンの足元には闇が広がり、そこからは無数の魔剣が姿を現す。圧倒的な威圧感を前に昴は冷や汗を流し、一步後退。ヴァンは一步、また一步と昴に歩み寄る。その瞳は血走り、言葉には出来ないほどの激しい憎悪と敵意が満ち満ちていた。

「俺は、ミラを傷つけ裏切った全てを許さねえ……。この国も、この世界も、この世界に生きるすべての命も　！」

「そんな……。ククラカンはミラの故郷なのに……。ミラは、この世界を平和にしたがっていたのに……」

「その理想論の結果がこの様なんだよ。あいつが助けた弱者の何人があいつを助けたッ!? あいつが倒した悪人の何人が改心したッ!? あいつの傍であいつを守らねばならなかった人間の何人があいつを護った……!? 人は裏切り、この世は偽りの平和と欺瞞の支配に満ち溢れている　」

歩み寄るヴァンはその背後に数え切れないほどの闇の剣を浮かべ、その両手を大きく広げた。紅いマントが風に瞬き、ヴァンは声高らかに晒す。

「俺を見る……。俺は“魔王”だ!! この世の悪の全てを背負ってきた。この世の絶望全てを連れて来た!! 死にたくなければ去れ……。女。俺はこの世界の全てを壊す。そして、真の意味での自由を取り戻してみせる……」

「す、昴殿……。これはいくらなんでも拙いでござる……。魔力のケタが違いすぎるでござるよ! 昴殿っ!!」

背後から昴の肩を掴むウサク。昴は後退しつつ、それでも悔しげに歯を食いしばっていた。何故、こんな事になってしまうのだろうか？ どうして人は、失ってしまった物にこうも囚われてしまうのだろうか？

少女の脳裏を過ぎる、優しい一人の青年の声。光の中で手を指し伸ばしてくれていた、優しい兄の声……。失ってしまったら、もう戻らないって判っていたのに。失ってしまったら、その痛みが心を支配してしまうと知っていたのに。

がんじがらめに縛られて何も考えられず、ただ目的と手段が入れ違ったままで間違いを繰り返し続ける……。誰も助けてくれなくて、誰も護ってくれない。そんな暗闇の中を生きる辛さを、昴は知っていたから。

両目から流れる涙を拭い、昴は後退する事を止めた。相手は魔王成る程、実に相応しい。闇の刃を百纏い、死神はその瞳を輝かせている。勝利の確率は一体どれほどだろうか。それは握り締められてしまうような小さな小さな物かもしれない。それでも少女は前へ。靴音を鳴らし、また前へ。

「す、昴……殿……？」

「ごめん、ウサク……。私、逃げられない……」

「なんと!？」

「お願いだよ、ヴァン……。もう、止めようよ……。そんなに……。そんなに自分を追い詰めなくたっていいのに……。！ そんなに……。失った人の事を想わなくたっていいのに……。っ!」

改めて、刃の柄へと手を伸ばす。昴は居合いの構えでヴァンを見

据える。その逆らい、絶対に諦めず、敵の為に涙を流す少女。実に良く似ていた。まるで仕組まれた運命であるかのように。ヴァンにはそれが許せなかった。ミラと同じ言葉で。ミラと同じ目で。ミラと同じ想いをぶつけてくる……。己を否定する存在。それは絶対に、否定しなければならぬ。

「死ぬぞ？」

「昴殿……！！ ええい、拙者も覚悟を決めるでござるよ……！！」

「うっん、ウサクはミュレイを探しに行って……。ここは私が引き受けるから……」

「し、しかしっ!？」

「判ってるよ……。判ってる。レベル1のへこたれ勇者じゃ……。カンストの魔王はきつと倒せない。でも だって、やらなきゃ……。やらなきゃ私、どうしてここに居るのか判らないよ……。ほっとけないよ、だって……。同じだもん……」

泣きながら微笑む昴の横顔は確かにウサクの胸に響くものがあった。昴の発言は正直ウサクには良く判らなかつたが、それでもしっかりと思いは伝わった。そう、今はミュレイを探し出すべき時。ここでヴァンの足止めをするのは本来ならば間違つた選択だ。だがそれを無視出来なくなつてしまったから。逃げるわけにはいかないから。

「だから、行って……。ミュレイを……。お願い」

ウサクは無言で頷き、その場を走り去っていく。その足音が遠ざ

かつていくのを合図に昴は滅茶苦茶に声をあげ、叫びながら前へと走り出した。ヴァンは片手をあげ、それを振り下ろす。号令と同時に降り注ぐ魔剣の雨あられ。その中、昴は瞳を見開いて拳動を把握する。

時は、容易に停止するのだ。ユウガの持つ時間操作の能力が発動し、降り注ぐ魔剣がスローモーションになる。避けきれない攻撃は時を止めて回避し、氷の壁を作って防ぎ、ユウガで切り払って前進する。ヴァンの目にはそれが異常にしか見えなかった。が、昴が何をしているのかは直ぐにわかった。その魔剣は、かつて自分の相棒だったものなのだから。

「時間停止と空間凍結か……！ やってくれる！」

「ヴァン……ノレツジイイイイイイツ！！！！」

ヴァンは大剣の一つを手に取り、自ら昴へと襲い掛かる。繰り出される大剣の一撃は強烈で、昴はあっさりと弾き飛ばされてしまう。無様に転がり、手からはユウガが零れ落ちた。弾かれたユウガを探し、昴は懸命に地をはいつくばって剣に手を伸ばす。しかしヴァンはユウガを踏みつけ、大剣を倒れた昴に突きつけた。

「あっけない幕切れだったな、女。無謀すぎる己の身を呪えよ」

「……ヴァン……」

「………俺の名前を呼ぶな」

「もう止めてよ、ヴァン！！ そんな事したって、ヴァンが苦しただけだよ ツー……」

次の瞬間、魔剣狩りは振り上げた大剣を凄まじい勢いで昂目掛けて振り下ろしていた。死を覚悟し、目を閉じる昂。しかし 昂に刃が届く事はなかった。その代わりに熱い命の雫が頭から降り注ぎ、少女はそつと顔を上げる。伸ばされた腕が昂の身体を抱きかかえ、そうして少女は漸く理解した。

遠くでウサクが叫んでいる声が聞こえた。ヴァンは気づいていたが、途中で止める事が出来なかった。昂は気づいていなかった。声を上げる事も出来なかった。

腕の中、小さな少女が自分を突き飛ばし、そして背後から巨大すぎる剣に叩ききられていた。肩口から袈裟に入った刃は胴体を殆ど両断しており、下半身と上半身はかるうじて皮一枚繋がっているような状態だった。見る見る溢れる血の中、昂は両手を真つ赤に染めて震えながら少女を見やる。

真つ赤な、血よりも更に真つ赤な髪が解け、昂の手の中にある。自分が捜し求め、護ろうとした人 ミュレイ・ヨシノ。それが今、昂の腕の中で血まみれになっている。

思考が追いつかなかった。魔剣狩りは再び剣を振り上げる。昂はミュレイの身体を強く抱きしめて叫んだ。何故こんな事になってしまったのだろう……？ 何度目か判らない己への問いかけ。ただ、これだけを強く願う。“こんなの嫌だ”。“こんなの認めない”。

「止まれよおおおおおおおおおおおッ！！！！」

空に絶叫が響き渡り、巨大な魔法陣が浮かび上がる。光と力が全てを飲み込んでいく……。その中心の中、昂は剣を手に取り立ち上がっていた。その刃ごと体当たりするように、止まっている魔剣狩りへと刃を深々と突き刺す。光の中、昂は泣きながら何度も何度もヴァンを斬り付けた。まるでその罪の感触を、己の手に焼き付ける

かのしん

。

The truth (5)

「よお、てっぺんからの眺めはさぞかし気持ちいいもんだろうなあ、ハロルド」

第四界層プリミドール、その世界の中に浮かぶ異質なる城……。インフェル・ノアの頂、そこに存在する玉座の前に一人の男が辿り着いていた。ずらりと並ぶ剣誓隊の腕利きたちが侵入者に各々の剣を向ける。その奥、ホクトの見知った顔がホクトを見つめていた。純白の美しいドレスを風に靡かせ、シエルシはじつとホクトを見つめている。

二人は互いに理解した。しかしさて、ここは声をかけていいものだろうか……。？ ホクトは悩んだ。自分はどうみても大逆の犯罪人である。その犯罪者が皇帝の花嫁になろうという人物に声をかけるというのもしかたがあるのか……。ホクト自身はまるで問題ないが、シエルシにしてみたら迷惑かもしれない。ホクトは一人頷き、言葉を控えた。

『良くぞ辿り着いた、反逆の徒よ……。その力、実に素晴らしい。恐らくこの世界に貴様より強い人間はおらぬのだろうな』

「お褒めに預かり光栄ですってな。あの皇帝のお墨付きじゃ俺も胸を張って人類最強を名乗れるぜ」

ホクトは笑い、そして両手に魔剣を構築する。そして一步、また一步と紅いカーペットの上を歩いていく。カーペットの両脇に並ぶ剣誓隊の騎士たちは皇帝の指示を待ち、いつでもホクトに襲いかかれるように準備しつつ事の成り行きを見守っている。

男は遂に玉座の前に到達し、そしてその刃を皇帝へと向ける。巨大なる王、人ならざる王、そしてこの世界の法則そのもの……。皇帝ハロルド　ついに魔剣狩りはその男の下まで辿り着いたのである。

「その人類最強が、あんたのパーティーをぶつ潰しに来たぜ……？
その結婚式、待った！！　そしてハッピーバースデー……ハロルド！！！」

ホクトが動いた瞬間、耐え切れず剣誓隊が一斉にホクトを取り囲む。それを足元から出現させた文字通りの魔剣の剣山で弾き飛ばし、大きく跳躍しハロルドの首へと刃を向ける。しかし繰り出された刃はハロルドの片腕によって防御されていた。

勿論、相手の防御を完全無視する一撃必殺の　白騎士のような能力をホクトは持っていない。だが剣で斬りつけられたというのにハロルドはまるで無傷であった。金属を弾くような妙な音が鳴り、ホクトは首をかしげる。玉座の上に御り、至近距離で皇帝を見つめる。改めて見てもやはり、それは人間には見えなかった。

「そこのお姫様！　さっさと逃げた方が身の為だぜ……！」

「わ……私は……っ」

ホクトには何故シエルシが迷っているのが判らなかつた。まあ確かに、どう考えてもこの状況下……ホクトが不利なのは目に見えている。だがシエルシが皇帝の横に居れば、不利は更に加速してしまう。ホクトは舌打ちし、一度後方に跳躍した。空中をくるりと回転し、着地と同時にガリユウを構築する。

「まったく、どうなっても知らねえぞ……！　おら、さっさとかかっ

て来いよ！ リアル百人斬りつてやつを見せてやるッ！！」

ホクトを取り囲む大量の魔剣使いたち……。しかもここに集められているのは全員が剣誓隊のエリートである。下の町に配備されていた剣誓隊や途中に居た者たちとは格が違う。結局ハロルドはあえてここ以外の警備は甘くする事で、人間をふるいにかけていたのだ。そう、あの状況を潜り抜けここに辿り着いた人間こそ 選ばれるに相応しい、と。

右手にガリユウを、左手には別の大剣を構築する。ホクトを中心にぐるりと円陣が生まれ、男を囲んでいく……。状況は圧倒的に不利だった。しかしホクトにしてみれば倒す相手が山ほど居るといのはむしろ好都合である。怪我をしようが魔力を消費しようが、一人倒して喰らって回復すればいい。そんな事を脳裏で考える中、戦場に声が響き渡った。

「止めて下さい、ホクト ！」

声はシエルシの物であった。姫はハロルドの玉座から何とか降り、ホクトに向かっていた。ハロルドは黙ってその一部始終を眺めているだけで、特にシエルシに何か言うような事はない。

シエルシは包囲の中を剣誓隊を押しつけホクトまで辿り着いた。そうして傷だらけのホクトを目にして、胸に手を当て首を横に振った。

「止めて下さい、ホクト……。もう、止めて下さい……」

「……………」

「無理です……こんな状況ではいくら貴方でも殺されてしまいます！ お願いです、もう止めて……！！」

「……………ここまで来ておいて、言う事はそれか……………」

呆れた様子でホクトは剣を降ろした。両手に持っていた魔剣を手放し、額に手を当てる。低く声を上げて笑うホクトの普段とは違う様子にシエルシは驚き、怪訝な表情を浮かべ一歩後退する。

「お前こそ、どっちの味方なんだ？ 皇帝か？ 俺か？ 何の為にそんな格好でここにいるんだ。折角声をかけないで居てやったのに」

「……………わ、私は……………。私は、ザルヴァトーレの姫として……………果たすべき使命を……………」

「お前、何にも判ってねえな。お前の言ってる事は全部逃げなんだよ。全部奇麗事なんだよ。ほれ、さっさと退きなさい」

「ホ、ホクト！！ 駄目、殺されてしまう！！」

歩き出すホクトの腕を掴み、叫ぶシエルシ、しかしホクトはそんなシエルシの顔に手を伸ばし、自分の顔を近づけて告げた。

「俺だつて命懸けなんだよ。てめえの価値観押し付けて、人の夢を邪魔してんじゃねえぞ……………」

手を離し、ホクトはいつも通りの表情に戻る。そうして再び魔剣を手にし、歩き出した。シエルシはその場にへたり込んだまま、黙ってそれを見送る事しか出来ない。

そうだ、考えてみればホクトがなんだというのだ。こんな無礼極まりない男、ほっとけば別にいいじゃないか。死のうが生きようが関係なんかない。そう思っていたはず。なのにこのままでは皇帝

に勝てずにホクトが死んでしまうと、本気で心配している自分がいるのも事実だった。

ホクトの言うとおりだ。自分は何がしたいのだろう。使命だとか役目だとか、そんな理由でここまで来てしまった。ホクトは命懸けで戦ってここまでやってきたというのに……。なんだかそれがとても失礼な気がして急に恥ずかしくなった。自分は、やはり理想論だけしか語っていなかった……と。

同時にホクトも考えていた。何故シエルシの言動をあんなに強く突っぱねてしまったのか……。頭の奥、忘れ去ったはずの記憶がジリジリと焦げ付くように痛むのだ。誰かの姿がシエルシにダブリ、感情のコントロールが出来なくなった……。としか言い様がない。どちらにせよ、全てがこれで終わる。魔剣狩りは改めて皇帝を見上げた。黄金なる王　ハロルド。決着をつけるべき時が迫っていた……。

The truth (5)

頂まで辿り着いたイスルギが見たのは、ホクトが大量の魔剣使いと戦っている姿であった。シエルシは戦乱から少し離れたところで事の成り行きをじっと見守っている。壁を跳躍し、イスルギは姫の隣に着地した。隣に突然やってきたのがイスルギだとわかり、シエルシは驚いた様子で一步身を引く。

「び、びっくりしました……。イスルギ、どうしてここに……？」

「ここは危険です姫、早く避難を」

はあ……っ！ くそっ……！」

血まみれになり、ふらふらとした足取りでホクトは毒づいた。まだ下らない事を言えるだけ余裕があるという事である。震える手でガリユウを握り締め、それを構える。ハロルドは実に楽しそうにその様子を見つめていた。

『いつの世も、修羅の戦というのは目を見張る物があるな……。なあ、ケルヴィー』

「左様で御座いますね」

「ったく、俺たちは見世物って事かよ……。まあ、こんな高い高い所に住んでたら、そうもなっちまうんだろっなあ……」

ホクトは溜息を漏らし、顔を上げる。ここに来るまでに見てきた物……。帝国が作った歪。闇。裏切り……。法則と呼ばれる罪が世界を縛り、この圧倒的な縦社会は世界に様々な間違いを産んでしまっている。

記憶がなくとも判る。見てきた物は確か。出来る事は一つ。ならばやろうとここまで辿り着いた。だがこの戦いの先に何があるのかは判らない。魔剣狩りだとか、ヴァン・ノーレッジだとか、そんな事はホクトにとってはどうでもいい事だ。だが、何をなさねばならないのか……。それくらいの事は判っている。

「てめえも、地をはいつくばって生きてみりゃわかる……。皆生きる為に必死で……。一生懸命で……。なあ、努力したヤツが報われなのは正しいのか……。？ 生まれが違うだけで人の一生が決まるのは正しいのか……。？ くだらねえんだよ、全部……。だから、全部ぶっ壊しに来た……」

「全く、見苦しい男ですね……。皇帝陛下の素晴らしい法の意味にも気づかないとは……」

「だったら説明してみる……。ここで！ 全世界の人間に！ “お前達が死ぬ理由” ってやつを、説明してみるッ！！！！」

激しい怒気にケルヴィーは怯み、一步後退する。一方ハロルドは楽しげに低く声を上げて笑い、じつとホクトを見つめた。

『実に気に入ったぞ、魔剣狩り。貴様……剣誓隊に入らぬか？』

「だが断る」

笑うホクト。それに釣られてハロルドは大声を上げて笑った。まさか皇帝がこんなに笑うとは思って居なかったケルヴィーをはじめとした側近たちは大慌てである。しかし当の本人であるハロルドはゆっくりと王座から腰を上げ、自らの大剣を片手にゆっくりと歩き出す。

『良い、良い！ 貴様、余が直々に相手をしてやるうではないか……！』

「へ、陛下!？」

『良いケルヴィー、これも一興……。人類最強の剣士、その力を見てみたくなつたわ』

剣誓隊が退き、ハロルドが前に出る。巨大すぎる剣を大地に叩きつけるとインフェル・ノアそのものが激しく揺れた。尋常ではない

力　そしてハロルドは大剣を片手で構え、ホクトを見下ろす。

『さあ、貴様の力を見てやるうではないか、魔剣狩り……！　余の生み出した世界の中、孤独に抗う反逆者よ……！』

「……………ああ、見せてやるよ。その代わり、鑑賞料は高くつくぜ……………！？」

『　是非も無しッ！！』

二人は同時に動き出したハロルドの動きはその巨体に似合わず素早く、繰り出される一撃は大地を砕くほど重い。単純にハロルドの持つ剣の重量は通常の剣の何十倍もあるのだから、威力も当然それに見合った物である。ホクトはそれを命からがら回避し、皇帝の胴体へと斬りかかる。ガリユウというカテゴリーSの魔剣で攻撃しているというのに、ハロルドの鎧には傷一つつく事がなかった。

連続して攻撃をしかけ、巨体の胴体を蹴って空中へ舞い上がる。そこで魔法陣を展開し、空から一斉に魔剣を降り注がせる。無数の剣が降り注ぐのを見上げ、しかしハロルドはあろうことが両腕を広げそれを受け止めてみせる。

『ぬうううううんッ！！』

「オイ　ッ！？　ノーガードでノーダメかよ……………ッ！？」

『小賢しい真似をするな、魔剣狩りよ……………！　貴様の真の実力、その程度か！？』

空中に浮かんだホクトへハロルドは近づき、その剣を叩き込んだ、魔力障壁を同時に三枚展開し、更にガリユウの防御を高めてのガ―

ド……。しかしホクトに直撃した攻撃は遙か彼方までホクトを吹き飛ばしていく。このままではラクヨウからも飛び出してしまうと見てホクトは慌ててインフェル・ノアに鎖を打ち込んだ。

「化け物が……!？」

その反動を使い、一気にインフェル・ノアの側面を跳んで頂上へと舞い戻る。鎖を解除し、空中から魔力全開でハロルドへと襲い掛かった。皇帝はそれを己の剣で防ぎ、しかし攻撃力は同等。互いに弾かれた剣にホクトはハロルドに剣を放ち、更にそれを鎧の上から蹴りつける。鎧を貫いて突き刺さる魔剣。しかしダメージは微々たる物であった。振り下ろされたのはハロルドの平手。それがホクトの身体に命中し、大地に叩きつけられる。

声も上げられないほどの重量の一撃にホクトの鎧は碎け、鋼鉄のインフェル・ノアの装甲版に一気に亀裂が走った。常人なら即死どころか滅茶苦茶に潰されていて当然の一撃。しかしホクトは生きながらえていた。

『ふむ、やはり強いな……が、所詮人間か』

「……………て……………め……………っ! くそつたれ……………!」

『ほう!? まだ立つか……………実に素晴らしい。さあ、かかってくるが良い魔剣狩り……………! まだ奥の手はあるのだろうか……………!?!』

雄叫びと共に全身の骨が碎け筋肉が軋むような痛みを耐え、ホクトは立ち上がった。全身は紅く血で塗りたいくらい、黒い鎧は変色してしまっている。意識も薄弱、ホクトは肩で息をしながら皇帝を睨む。

「俺はまだ、負けてねえ……。俺はまだ、死んでねえぞ……。！ハ
ロルド……。！ うおおおおおおおッ！！！！」

魔力を振り絞り、男は空に吼えた。全身を黒い闇の装甲が被い尽くし、ガリユウが再び龍のような姿に変化していく……。しかし次の瞬間、ハロルドはその龍のように形状変化したガリユウ目掛け己の巨大な剣を叩きつけていた。ガリユウに亀裂が走り、次の瞬間ホクトは頭を抱えて悲鳴を上げた。

魔剣が解除され、ホクトは両手で頭を抱えてのた打ち回る。その壮絶な様子に剣誓隊もシエルシモイスルギも啞然としていたが、ハロルドだけは意味がわかっているのか納得したように目を細めていた。

『ケルヴィー』

「は、はい？」

『この男、捕らえよ……。プロジェクトエクスカリバーの研究室に運んでおけ』

「は？」

『二度言わせるな』

「は、はい！！ おいお前達、捕獲だ！ 捕獲しろ！！」

周囲の剣誓隊が動き出し、ホクトに近づいた時であった。放たれた銃弾が剣誓隊の一人を襲ったのである。視線の先、坂道を登りきった所にはライフルを構えたアクティと死にかけているうさ子の姿があった。

「ホクト！！　ホクト、しっかりしてよっ！！　うさ子が……うさ子がホクトに会いたがってるよ！！」

アクティの絶叫でホクトは一瞬動きを止めた。しかし同時にアクティに視線が集中してしまう。ハロルドは少女を見下ろし、そしてその隣にいる人物に注目した。

『ケルヴィー』

「はい、すぐに侵入者を排除します」

『そうではない。ステラだ』

「は……っ？　な……！？　ステラ！？　どうして貴方がここに……？　確か一年前、失踪したはずでは……？」

二人の視線の先、アクティが肩を貸しているうさ子の姿がある。ケルヴィーは慌ててうさ子に駆け寄り、呆然としているアクティからうさ子を奪い、床に寝かせて見せる。

「ああ、ステラ……こんなに激しく損傷して……。自己修復機能が働いていないんですね……。大丈夫、すぐに僕が治しますからね……」

「う、うさ子にさわるなっ！！　ホクト、うさ子が……　うさ子がああっ！！」

暴れるアクティを剣誓隊が押さえつけ、ねじ伏せる。ケルヴィーはうさ子の身体に手を当て、魔法陣を浮かべた。術式によりうさ子

の身体に干渉している事はアクティにも判ったが、具体的に何をしているのかはわからなかった。しかし結果としてうさ子は苦しもうに呻き、しかしうさ子の胸に空いていた大穴は修復され始めたのである。

「え……えっ!? なに、どうなってるの……? うさ子……?」

「その、うさ子という間抜けな名前は止めていただけませんか? 彼女の名前はステラ……。古代文明の技術により復元された、この世界のガーディアンシステムなのでから」

「ガーदैいあん……しすてむ……?」

アクティにはまるで意味が判らない様子だった。そんなアクティを見下ろし、ケルヴィーは笑う。

「まあ、貴方達のような低俗な人間には理解出来ないかもしれませんがね……。彼女はハロルドの側近、この世界での闘争を抑制する役割を持つ……」

その時、うさ子の身体がぴくりと動いた。突然むくりと起き上がり、眠たそうに目を擦ってケルヴィーを見やる。ケルヴィーは慌ててうさ子に駆け寄り、その手を握り締めた。

「ステラ!! ああ、ステラ……よかった。僕の最高傑作、ステラ……。大丈夫かい? 痛いところはないかい?」

「……。だれ? さっぱりわかんないの……」

ぼかーんと口をあけて首をかしげるうさ子。それによりケルヴィー

ーはうさ子の手を握り締めたまま真っ白になり、完全に思考停止してしまった。固まっているケルヴィーから逃れ、うさ子は立ち上がる。状況は理解できなかったが、その視線の先　皇帝の前で倒れているホクトが見えた。

「ホクト君！！　ホクト君、大丈夫なのーっ！？　アクティちゃん……も捕まってるの！？　とりゃああああっ！！」

ミストラルを装備し、アクティをねじ伏せている剣誓隊を蹴り飛ばす。解放されたアクティはライフルを握り締め、頂垂れて泣いているケルヴィーを一瞬気の毒に思いながらもホクトへ向かい走り出した。

「ホクト！！　ホクト　　ッ！！！！」

「ホクト君、今助けるのっ！！　待っててなのーっ！！」

しかし、そんな二人の前にイスルギが立ちふさがる。一度は敗北した相手の出現にアクティもうさ子も足が止まった。シエルシはその間にホクトに駆け寄り、倒れているホクトの肩を抱いて様子を見る。ホクトは頭から血を流し、呻き声を上げながら苦しんでいた。

「貴様達、ここから去れ……」

「またこいつ……！　ホクト、早く逃げて！！」

「シエルシちゃんお願いなのっ！！　ホクト君をつれて、早く逃げてなのーっ！！」

「う、うさ子……。わ、私は……」

混沌とした状況の中、再び戦いが始まるうとしていた。正にその時である。シエルシがついていたホクトが突然声をあげ立ち上がり、魔剣を握り締めてその力を解放したのである。周囲に立っていた剣誓隊は全員吹き飛び、シエルシも弾かれて坂道を転がっていく。イスルギは慌ててシエルシへと駆けつけ、インフェル・ノアから落下しそうになるシエルシの手を握り締めた。

「な、何事ですか!？」

「ステラ……。ステラ、思い出したぞ……。ステラアアツ!!」

ホクトは血走った目で叫び、魔剣を引きずりながら猛然と走り出した。その先は、あるうことが仲間であるうさ子である。うさ子目掛けて跳躍し、空中を回転しながらガリユウを叩きつけるホクト。ミストラルでそれを受けるものの、圧倒的な攻撃力にうさ子は弾き飛ばされてしまう。

「あつっ!？ ホクト君、痛い……。っ! ど、どうして……。?」

「……………ミラを、殺しやがって……。よくも……。よくもミラを……………」

「う、うさ子逃げて!! なんか様子がおかしいっ!!」

「あ、あつっ……。っ! あつっっ!!」

「早く走って逃げて!! 殺されちゃうよっ!!……!!」

アクティが叫びながらうさ子の背中を押し、殆ど突き飛ばされる

ようにしてうさ子は走り出した。背後からは魔剣を引きずり黒い獣が追いかけてくる。それを阻止しようとして近づいた剣誓隊を一撃で薙ぎ払い、腕を伸ばして捕獲しようとしたハオルドの手さえもざつくりと切り裂いてしまう。

『なんと!?!』

明らかに先ほどまでより力が上がっている。結局誰もホクトを止める事が出来ず、ホクトはうさ子を追いかけ続ける。うさ子は猛スピードで逃げているのだが、ホクトはそれ以上の速さで猛追してくるのだ。

「ホクト君……どうして……? どうして、うさの事叩くの……? うさが……うさが、悪いうさだから……!?!」

「どうして……ミラを殺した!? 答えるッ!!!!!!」

魔剣をうさ子に叩きつけ、うさ子は吹っ飛んでいく。転がり、血を流しながらもミストラルを手に立ち上がる。黒き魔王と化した男は足元から無数の剣を召喚し、それをうさ子に射出する。うさ子はそれを防ぎきれず、体中に剣が突き刺さる事となった。

倒れるうさ子に歩み寄り、ホクトはその髪を掴んで壁に叩きつける。うさ子は泣きながらじっとホクトを見つめていた。ホクトの目は血走り、口元には笑みが浮かんでいる……。まるで何かに取り憑かれたかのようなその形相にうさ子は嗚咽を堪え、懸命に震える唇を噛み締めて耐えていた。

「ホクト君、怖い……。怖い、怖い……。どうして、うさの事いじめるの……? ごめんなさい、ごめんなさい……っ」

「謝って……それで済むのか……？ 殺し殺されて……それでも憎しみは消えないのに……」

「うさは……うさはね、ホクト君の足を引っ張ってばかりのね、悪いうさだったの……。でもね、これから……これからはいいうさになって……ホクト君と、一緒に……」

言葉を遮るかのようにホクトは再びうさ子の頭を壁に叩きつける。血が流れ、あまりの痛みにもうさ子は口をぱくぱくと開け閉めし、呻き声さえも上げられなかった。それでもそっと、血に塗れた手をホクトに差し伸べる。

同じ記憶喪失で、記憶喪失として出会ってしまったからこそこうなる運命だった。そして記憶喪失でなければ、二人はあんなふうに笑い合うことの出来ない関係だった。大切な人を殺した女……復讐の対象。ずっと探していた、この世界のシステムの一つ。けれどもうさ子は……それでもうさ子は幸せだった。

ホクトと一緒に冒険をし、一緒にご飯を食べ、一緒に寝泊りした。楽しい話が沢山合って、一緒に買い物をして、プレゼントを交換した……。ホクトの事が好きだった。大好きで大好きで、本当に大好きだった。だから……。

「ごめんね、ホクト君……。うさは……ミラちゃんの代わりにはなれなかったの」

振り下ろされた刃がうさ子の身体を袈裟に切り裂く。血を流し倒れるうさ子は自分の身体から何かが落ちるのを見て、慌ててそれに手を伸ばした。止めを刺すように倒れたうさ子の身体をガリユウが装甲版ごと深々と貫き、うさ子はそっと手を伸ばすのを諦める。

「……きいろくて……。おさいふ……。ほくとくんが、くれた……」

…。かわいい……………の……………」

うさ子の目から光が消え、伸ばしかけた手から力が抜け落ちる。床に転がった黄色い財布。それはうさ子の血を浴び、紅く変色してしまっていた……………。

殺したうさ子の身体に何度も何度もガリユウを突き刺すホクトの姿を背後から見てしまったのはアクティだった。尋常ではないその様子に悲鳴をあげ、思わずその場に尻餅をつく。悲鳴に気づいたホクトが血塗れで振り返った時、アクティは完全に怯えていた。ホクトの手からガリユウが落ち、音が鳴り響く。男はゆっくりとアクティに近づき始めた。

「アク……………ティ……………」

「ひ……………っ!? いやだ、こないでっ!! こんなのホクトじゃない……………。こんなのヴァンじゃない……………!!」

「アクティ……………俺、だ……………」

「来るな……………!! うさ子を返してよ!! うさ子を返してよおおおおおっ……………!!」

アクティは震える手でライフルを連射する。しかしそれは完全に照準がぶれており、ホクトには命中しなかった。悲鳴をあげ、やけくそにライフルを投げつけるアクティ。それががしゃんと音を立てホクトの頭に当たる。逃げ出すアクティとすれ違うように駆け寄ってきたイスルギは魔剣アルテツァを片手にホクトへと襲い掛かった。

「貴様、仲間を手にかけるとは……………」

ホクトは叫びながら両手に魔剣を構築し、イスルギへと襲い掛かる。それを盾で受け止めるが、猛攻は止まらない。ホクトの攻撃力は今までの何倍にも引き上げられており、イスルギー一人で手に負えるような状態にはなくなっていた。しかし次の瞬間、ホクトは手を止める事になる。

男の身体、胸を背後から剣が突き刺していた。背後に立っていた少女……それは、ホクトのよく知っている少女であった。ウエディングドレスを風にはためかせ、花嫁は剣を手にホクトの背に身体を預けていた。

何故そんな事をしたのか、シエルシにもわからなかった。だがそうしなければいけないような気がしたのだ。突き刺した剣を振るえる手で抜き去り、花嫁は後退する。ホクトはよろめき、シエルシに手を伸ばした。

「ミ……ラ……？」

「え　？」

次の瞬間イスルギがよろけたホクトを思い切り蹴り飛ばす。男はインフェル・ノアの大地からはじき出され、堕ちて行く。遙か彼方に展開するラクヨウの街へと。

ホクトが消えていくラクヨウの街を見下ろし、シエルシは慌てて限界まで駆け寄った。そんな姫を背後から押さえ、イスルギは首を横に振る。ホクトは堕ちて行く。どこまでもどこまでも。

シエルシが声をあげ、彼の名前を叫んだ。しかし時は止まらず、そして決して戻る事はない。泣きじゃくるシエルシの背後、イスルギはその肩を抱いて黙り込んでいた。戦場に残されたもの、それは悲鳴と絶望、そして彼を想う涙の音だけだった。

君の物語（1）

昔から、私は逃げる人生ばかりを送ってきた。

子供の頃から何かに立ち向かうのが苦手で、いつも言いたい事も言えなかった。人に気持ちを伝える事が出来なくて、いつも誰かに勘違いされていた。でも別にそれでいいと思ってた。人間はきつと、誰とも判り合う事は出来ないから……。

変わった子だと、色々な大人に言われてきた。この世界の中で自分が浮いた存在であるという自覚は幼い頃からあったし、実際変わっているのだと思った。私は驚くほど人を信じられなかった。実際の両親ですら、その薄ら寒い人としての欺瞞を抱えた態度に私は嫌気が差していたし、ころりころりと毎日のように変わる人の心も信じられるはずがなかった。人は嘘をつき、人は己を正当化し、人は見たい物だけを見て、見たくない物からは平然と目をそらす。生き易いように生き、そして生き易くするためならばどんなに汚い事でも平然と行う事が出来る。人という存在は生まれながらにして矛盾した性質を持つ……。そんな物は信じられないと、私は全てを突っぱねてきた。

思えば病的だった。他人と関わる事で裏切られ、傷つく事を恐れた。そして同時に自分自身がその穢れた人間と交わる事で汚れてしまふかのような気がしていたのだ。世界には矛盾が満ちている……。生きているのが、とても苦しかった。

「昂……！　　おーい、昂やーい。どこいったー」

気分が悪くなった時、私はいつも実家の裏にある物置の中に一人で隠れて膝を抱えていた。そうすると、世界から隔絶された気がしてとても清々しい気分になれたからだ。大人になってから思い返す

ととんでもなくアレな子供だったわけだが、それでも当時は純粹で真っ直ぐな気持ちでこの世界の穢れを嫌っていた。そんな私にだって、一人くらい信頼出来る人は居たのだ。

「またここか……。おい昴、こんな真冬に一人でどういう荒行だこれは」

私には歳の離れた兄が一人居た。兄はいつも明るくて優しく、そして表裏の無い態度で私を癒してくれた。兄は嘘をつかなかった。兄は一度も私との約束を破ったためしがなかった。彼は歳の離れた子供である私に対して誠実に接し、常に一人の人間として扱ってくれた。そんな兄はいつも私がいなくなるとどこからともなく現れ、暗闇の中に光を誘い込む。

物置の扉が開き、兄が光を背に姿を現した。彼は私に歩み寄り、そうして自分が首からかけていた紅いマフラーを私の首に巻き、小さな私の頭をぐりぐりと撫でた。

「よう、昴。また親父に苛められたのか？」

「……………お兄ちゃん」

「おう、兄ちゃんだぞつと……………どっこいしょ。はあ、高校まで自転車通学というのはな、疲れるんだよ昴君」

私の隣に腰を下ろし、兄はそう言って笑った。二人して夕暮れの景色を眺めた。光が差し込み、私は眩しくて目を細める。兄はその光の中に手を伸ばし、いつものように微笑んでいた。余裕があつて、暖かくて、いつでも優しくかった兄……………。汚い大人たちよりずっと大人で、ずっとかっこよくて……………。だから、いつも憧れていた。彼のようにになりたかった。出来れば彼と、ずっと一緒に居たかった。

兄の手を握り締め、私は肩を寄せる。彼は私の肩を抱き、頭を撫でながら笑っていた。彼の奏でる鼻歌は当時流行っていたドラマの主題歌で、それは心地よく私の耳にしみこんでいく。心が潤うような感触……兄だけが私にとっての救いだった。

「お父さんがね、また昴の事頭がおかしい子だって言ったの……」

「まあそりゃおかしいからしょうがないだろ？」

「……………うー……………」

「ま、そんな落ち込むような事じゃあねえさ。自分自身がどうなのか、そりゃ周囲と比べ相対的に判断する以外に確かめる術はない。ただどな、自分がどんなもののかっていうのは基本的には不変なんだ。いいじゃねえか、頭おかしくて。それはそれで大事な自分の一つだ」

「でも……………」

「大事なものは、駄目な自分と向き合ってそいつに胸を張れるかどうかで事だ。まあ、昴にはまだわかんねえかもしれないけどな」

「……………すぐそりゃって子供扱いするんだもん……………」

「悔しかったら大人になるこつた」

「そしたら、お兄ちゃんとずっと一緒にいられるかな……………？」

兄は難しい顔をして、それは恐らく無理だろうと言った。とても悲しかったので泣きそうになる私の前に立ち、兄は背を向けて空を

見上げながら言った。

「人は、ずっと一緒には居られない。別れは決まってるんだ。ただ早いか遅いかってだけでな。お前もお前で、いつかは自分一人で歩かなきゃいけない時が来る。ずっと一緒に居られりゃそれがいいけど、でもお前は兄ちゃんの身体の一部じゃないんだから、自分で歩かなきゃならない」

「……………」

「まあ、これも難しい話かもなあ……。けどな、だからこそ人間は前に進めるんだ」

立ち上がり、兄の手を握り締めて前に進む。二人一緒に、物置の外へ。夕焼けの赤い光が降り注ぎ、眩さに目を細めた。カラスが空を舞い、電線が作る影模様の中、私達は確かに生きていた……。

「よし、それじゃあ帰るか。俺がクソ親父をとつちめてやるからよ」

「……………うんっ」

その後、兄は父の書齋に飛び込み、部屋の外では二人が言い争ったり殴りあう音が聞こえてきたりしたものだ。でもそれは兄が私の為に頑張ってくれている証拠であり、怖くて心配だけれどとても嬉しかった。ばたばたと騒ぎが起ると母が慌てて走ってくる。それは確かに少しだけ変わっていたけれど、まだ私の世界が平和だった頃の記憶。まだ心の中に、彼が生きていた頃の記憶。

君の物語（1）

「結論から言う。貴方を元の世界に戻す事は、今直ぐにでも可能」

メリーベルがそう切り出した時、私は何の反応もすることは出来なかった。ただ、その言葉の意味を考え……噛み締め……やはり何も言葉は浮かばなかった。“ああ、そうなのか……”。その程度の話である。

婚姻の儀が終了し、ククラカンを出た私はミュレイの言いつけを護り、メリーベルを頼ってバテンカイトスへとやってきていた。私の隣に居るのはウサクだけであり、ゲオルクもミュレイも、その姿はどこにもない。

あの日、ミュレイは魔剣狩り　ヴァン・ノーレッジに殺されてしまった。私の所為だ……。ヴァンの攻撃から私を庇い、魔剣狩りの一撃を背中に受けてしまったのだから。

それからの事は、正直よく覚えていない。けれども残されていたのはズタズタに引き裂かれ、そして巨大な氷の結晶の中に閉じ込められたヴァンの姿だった。私はミュレイを抱いてラクヨウの城に向かった。けどその時には既にミュレイは息をしていなかった。城に運び込んで、手当てをしてもらった。でもミュレイは目を覚まさなかった……。

逃げるように私はそこから離れ、それから暫くラクヨウから離れた荒野を一人で彷徨った。何がどうなったのかわからないままただ時間だけが過ぎ、後悔だけを繰り返し死にたい気持ちのままずっとウロウロするだけだった。そんな私を見つけ出し、ここまでつれてきてくれたのがウサクだった。

ウサクは私を元の世界に戻す事をミュレイから命じられており、そのためメリーベルを頼るように言い聞かせた。ゲオルクも来たがっていたが、あの騒動の後クラカンは色々大変な事になっており、それどころではないという。ウサクに手を引かれここまでやってきたものの、しかし私にはもうそんな事はどうでもよかった。

また護れなかった……。目の前で大切な人が死んでしまうところを黙ってみている事しか出来なかった。もうあんな事にはならないようにしなきゃって思ったのに。もう無力のままじゃいけないだつて誓ったのに。一人で歩けるようになったつもりだつたのに……。

力も、思いも、全然足りなかった。足りなすぎて、だからミュレイは死んだ。全部私の所為なのだ。判っている。後悔してもミュレイは喜ばないと。彼女は死に際、私に笑顔を見せてくれた。生きていて良かったと、そんな安堵した笑顔だった。思い返すと頭の中が真っ白になり、何も考えられなくなる。もう、思い出さたくない……。

バテンカイトスに来てから何をしたらだろう。ウサクが事情を説明し、その間私はずっと黙っていた。何か喋るのも億劫だった。荒野を彷徨い続け、一言も口を利いていなかったから声の出し方を身体が忘れたのかもしれないとそんな下らない事を考えた。どうでもいい……。

「今直ぐって……まことでござるかっ!？」

「別に、私にとって世界軸移動はそんなに難しい事じゃないから。その研究はもう何年も前に完成してる」

「……メリーベル殿……一体何者なんでござるか……」

「しがない、旅する錬金術師……。さて、昴？ 貴方は元の世界に戻りたい？」

私は黙っていた。メリーベルが自分に話しかけていると気づいたのは少し経ってからだ。顔を上げると、彼女は眉を潜めて私に歩み寄った。

「しつかりして。ちゃんと何か食べてる？ お風呂に入ってる？」

「……………いや……………」

「そのままじゃ貴方も死んじゃうわよ。それでミュレイが喜ぶと思ってるの？」

その名前を聞いて身体は正直に反応した。耳を両手で塞ぐけど、メリーベルの声は聞こえてくる。震えが止まらなかった。怖かった。考える事が怖かった。私がそれを認めてしまったら。私がミュレイの を認めてしまったら……………。それが、現実になってしまう気がして。でも、メリーベルは告げるのだ。無慈悲に、残酷に。

「ミュレイは貴方の所為で死んだの」

「……………うっ……………」

「だから、貴方には生きる義務がある。大切な人に生かされた命ならば、その目的を果たす義務があるの。それは誰にでも言える事」

彼女は私の隣に座り、手を握り締めた。震える私の肩を抱き、そうして優しく語りかけてくる。

「貴方は頑張った……………そうでしょう？ ただ、力が足りなかっただけ……………。それは仕方の無い事。異世界に召喚された人間が、最初か

ら魔力フルパワーで鬼のように強かったらそれはチートなんだから」

まるで見てきたような言葉だったが、私はあえて言及しなかった。そつと顔を上げるとメリーベルは本当に穏やかに微笑んでいた。ミユレイという友が死んだ原因である私を前に、彼女は私を責めなかった。急にとても苦しくなり、涙が止まらなくなる。両手で顔を押しさえ、泣いた。メリーベルは私が落ち着くまでずっと髪を撫でてくれた。

やがて少しずつ気持ちが落ち着くと、物事を少しはマトモに考えられるようになってくる。苦しみは消えず、ずっと胸の中は焼け付くように苦しかった。でも知っていたのだ。それは焼け付く痛みではなく、冷たさが心の中で燻る熱なのだ。

「元に戻る方法は簡単……。ミユレイがそうしたように、異世界転移魔法を使って貴方を元の世界に戻すだけ」

「……………そんな事、出来るの…………？」

「出来る。というか、出来た。だからここにいる」

意味は良く判らなかったが、兎に角異世界転移魔法というものは実在し、そしてメリーベルはその使い手らしい。一体何者なのかほとんどんわからなくなってきたが、でも兎に角元の世界に戻るのだ。しかし私は全然嬉しくなかった。ちつとも良かったとは思わなかった。

そりゃあ、こっちの世界に来てもあちこち連れまわされて何回も命を落としかけて、戦争とかわけのわからない儀式とかに巻き込まれてきた。でも、ミユレイやウサクやゲオルクと出会って……。生きてたんだ。元の世界で、中身の無いカラッポの生活をしてきたときよりも、ずっと。ずっとずっと、生きてたんだ。

ミュレイを助けたかった。ミュレイを護りたかった。どうしてこの世界の人々は皆幸せになれないんだろう？ 皆少しずつすれ違って、少しずつ許せなくて……。少しずつの間違いが、大きな歪を生んでしまう。そしてそれは大きな反動を伴い、跳ね返ってくるのだ。

「貴方には今、二つの選択肢があるわ。一つは元の世界に帰り、全てを忘れて生きる事……。私はこつちをおすすめする。昂、貴方は元々戦いに向いてないから。貴方の心は繊細すぎる……。とても」

「……………。もう一つの……選択、は……？」

問いかけると、メリーベルは一瞬心苦しそうな顔をした。腕を組んで立ち上がり、それから首を横に振る。

「二つと言ったけど、こつちは絶対にオススメできない。だから大人しく素直に元の世界に戻って、全部忘れた方がいい」

「……………無理だよ、そんなの……………」

忘れられるわけがない……。こんなにも心の中に残ってるんだ。ミュレイと一緒に過ごしたこと。こつちの世界であった様々な出来事……。つらい事もあったけど、でも楽しかった。満たされていた。願っていた。護りたかった。傍にいたかった。こんなにも、こんなにも後悔している。忘れられるはずがない。忘れてしまっていないはずがない。

「まだ、何かあるなら……教えてよ……。どうしたらいいの……？ どうしたら償えるの！？ 教えてよ、メリーベル！！」

「……………。私はあくまでも当事者ではなく、錬金術師として客観

的な判断の上に見解を述べてる。その上で、貴方には教えないほうがいいと思ってる。それでも知りたい……？」

「うん……知りたい。何でもいいんだ……。何でもいいから、どうにかしたいんだ……」

「そう、わかった。じゃあ教える。その代わりに、覚悟して」

あっさりと折れてくれたメリーベルの言葉に私は怯えながら頷いた。そうして彼女は自分が研究の中で知った事をいくつか教えてくれた。それはミュレイ・ヨシノの身体が小さくなってしまった事にも関係している。

まず、魔剣狩りヴァンは死んでは居ないとの事。物理的に彼を殺す方法は基本的には存在しないと、わけのわからない事を説明してくれた。それじゃまるでアンデッドじゃないか……。しかし、私の時を止める能力により、ヴァンは完全に停止している状態にあるという。氷の塊はその停止領域を現し、その内側では時が流れない状況が続いていると言う。

二つ目は、破魔剣ユウガの事。ユウガは本来術式として継承される魔剣とは異なり、それそのものが何らかの形で停滞し、この世界に残っていたのだという。それはやはりユウガそのものが持つ、限定的状況を凍結させる能力によるもので、ユウガは魔剣として構築されたまま、主であるミラが死んだ時の状態のまま残っていたのだと言う。そして私自身に術式を移植し、新たな宿主とした……。まるで己の意思を持っているかのような話だったが、ユウガには損傷しても状況を巻き戻し再生する能力や、先述した対象の時を止めるといった常識的に魔剣の能力の領域を遥かに超える力を発揮する事が出来る。どう考えても普通の魔剣ではなく、そこは流石カテゴリISの魔剣という事なのだろうか。

それらの事からも判るように、ユウガは明らかにこの世界の魔剣

としてはイレギュラーな存在だということ……。そしてユウガの存在はこの世界の法則さえもゆがめてしまう可能性を秘めている。

「ミュレイの身体が小さくなってしまった原因も、恐らくはユウガだと思う」

「え……！？」

「“巻き戻した”の。恐らくユウガは貴方が現実を拒絶する強い意志を見せた事により、一度事象を巻き戻した。しかしその際最も変化が大きく、そして同じくカテゴリーSの魔剣能力者であるミュレイは正常に事象巻き戻しが発動出来なかった。結果、ミュレイの身体は巻き戻りすぎた状態で固定されてしまった、ということ」

「そん、な……」

「貴方がミュレイを助けようとその力を使えば使うほど、この世界の歪は大きくなっていく……。私の言っている事の意味がわかる……？」

それはつまり、私がミュレイから力を奪い。結果的にミュレイが死ぬ運命を作り。ククラカンを滅びに導き……。この世界の全てをゆがめてしまったという事。

たった一つ、ミュレイが小さくなるという事実だけでどれだけの変革がおきてしまったのか……。考えてみれば直ぐにわかる事だ。もしミュレイが大人のままだったら……。あんなことには絶対にならなかつたのに。

「そんな……！！ そんなっ！！ そんなあああっ！！！！！！」

「す、昴殿……落ち着いて！」

「私がつ!? 私が殺したつて言うのかよっ!! ミュレイは……
っ!! ククラカンはあっ!!」

「昴殿……っ！」

「辛いかもしれないけど、それが現実……。言っただでしょ、覚悟してつて。貴方はこの世界にとつて大きすぎるイレギュラーなの……。このままでは、どんな変化が起きてしまうのか私にも判らない。変化する事が悪いわけじゃない。ただ、貴方はその責任を背負えるほど大人じゃない」

メリーベルの言葉に愕然とし、その場に膝を着いた。私を支えるウサクの隣、悔しくて唇を噛み締めた。私が、ミュレイを子供にして。ミュレイの力を奪つて。この世界に変化を与え。彼女の命を奪い。国を滅ぼした……。それが真実、そしてたつた一つの現実……。そんな私を護ろうとしてミュレイは死んだ。

「あんまりじゃないかよう……っ」

涙が止まらなかつた。ミュレイは、どんな気持ちで私を護つたのだろう……。きっと、晴れやかな気持ちで死んで行つたのだろう。護れなかつた妹を護つたかのような気持ちで。自分を庇つて死んでしまつたミラを、助ける事が出来たような気持ちで。

でも違つたんだ。私は悪魔だつたんだ。私が居なければミュレイは死ぬことなんてなかつたんだ。せめてあの時魔剣狩りに立ち向かうなんて馬鹿すぎる事をしなければ……。それだけでも未来は違つたかもしれないのに。

「ミュレイ、ごめん……。ごめんよ……。っ！ 馬鹿で……。無力で……。私なんかがいたから……。ミュレイ……。！ ミュレイ ツ！！」

私はユウガを両手に握り締め、それを掲げた。白い刀は何も言わない。何も語らない。当たり前だ、喋るわけがない。だって剣なんだから。でも言わずにはいらなかった。

「お願いだよ、時間を巻き戻して……。！ 一回出来たんでしょ！？ だったら戻してよっ！！ ミュレイが生きてた頃に……。ねえ、ユウガ！！ ミラッ！！！！！」

何度も剣を振るけれど。何度もそれに祈るけれど。ミラは何も応えてくれない。私は剣を床に叩きつけ、頭を抱えて叫んだ。

「何で戻してくれないんだよおおおおっ！！！！ 戻れ、戻れ戻れ……。！ 戻れ戻れ戻れ、もどれもどれもどれもどれもどれもどれもどれもどれ……。っ！！！」

「…………… 昴殿……………」

「まだ終われないんだよ……。！ 償わなきゃいけないんだよっ！！ ねえ、戻してよ！！ 時間を戻してよ！！ メリーベル、知ってるんでしょ！？ 戻す方法を教えてよ！！！」

メリーベルにすがりつくけれど、彼女は首を縦には振らなかった。ただ黙って私の身体を強く抱きしめる。でもそんな優しくしてほしいわけじゃない。

「戻してよ……。ねえ、メリーベル……。 たすけて……。 ミュレイを

たすけて……。お願いだよう……。っ」

「……知ってしまったら、貴方がそう言い出す事は判ってた。だから、言わないで置きたかった。けど、言ってしまったからには私の責任……。ごめんなさい、昴……」

「もどつて……。もどつてよ……。うああ……。っ！ ミュレイ
……。ミュレイ　　ッ！！！！　わあああああ……。っ！
「！」

暴れる私を抱きとめ、メリーベルはそつと背中を撫でてくれた。とても優しく、暖かくて……。ひどく、残酷だった。

何の為に私はここにいるのだろう。何の為に彼女に出会ったのだろう。何も出来ないまま傷つけて、助けて貰って……。恩返しも出来ないなんて。悲しくて悔しくて、辛くて切なくて……。ずつとメリーベルの腕の中で泣きじゃくっていた。

心の中、こんなにもミュレイの優しい気持ちが残ってる……。ゲオルクとウサクと、ミュレイ。そこに私に加わって、四人で一緒にいたんだよ……。初めての仲間、初めての旅だった。優しくあつたかい、仲間だった……。

どうしたら心の闇を止める事が出来るのだろう。全てを望むのは、愚かな事なのだろうか。私の言葉にも疑問にも何一つ応えてくれない、白銀の剣……。ミラは黙して、ただ私を嘲笑うかのように輝いていた。

君の物語（2）

「昴殿、元気を出すでござるよ！へこたれていても、いい事はないでござる」

メリーベルに貸し与えられた部屋の中、私はソファの上に座って膝を抱えていた。そんな私の隣に座り、ウサクは声をかけてくれる。メリーベルは私を元の世界に戻す準備をする為に席を外し、私はその間こうして待つ事になった。

一頻り泣いて喚いて、それでも気持ちは落ち着かなかった。でも、落ち着かないじゃ済まないから……。この世界を壊してしまった人間として、私はもうこの世界に居ない事だけが償いなのかもしれない。ユウガは何も応えてくれないし、ミラは何も言ってくれない。ミラは……。どんな気持ちでミュレイを庇って死んで行ったのだろうか。ふとそんな事を考えた。

世界を平和に導こうと旅した姫、ミラ・ヨシノ……。その護衛として傍に居た黒き闇の剣士、ヴァン・ノーレッジ。その二人を中心に世界の余波は広がり、ミュレイへ、そしてザルヴァトーレへ……。世界全体へ。変革は確かに伝わっていく。そしてその結果、世界は動いている。

何の為に私はここに召喚され、そして何の為に帰るのだろうか。意味などなかったのかもしれない。せめて一つくらい、心の中に留めておきたかったけれど。でも、全部忘れた方が……。メリーベルの言うとおり、いいのかもしれない。

「拙者も、姫様を失ったのは悲しいでござる。ククラカンがこれからどうなってしまうのかわからなくて、不安でござる。しかし昴殿、落ち込んでいても……。なんにもならないでござるよ」

「……………うん」

「姫様は、昴殿にそんな顔をしてほしくて昴殿を助けたわけではないのでござる。姫様は、あんまり普段笑わない昴殿の笑顔が好きだと言っていたでござる。拙者も、昴殿には笑っていてほしいのでござる」

ウサクへと視線を向ける。ウサクは徐にいつも顔半分を隠している布を指先で降ろし、私に頷いた。励ますような明るいその笑顔と意味の良く判らないガツポーズがやけに悲しかった。ウサクだつて、きつと私の何倍も悲しいはずなのに……………。

「ウサクは……………強いね」

「……………忍などという仕事をしていると、仲間がどんどん死んでいくのでござるよ。別れに慣れすぎて、少々鈍感になってしまっているのやもしれぬでござるなあ……………」

「私は……………ウサクから主を奪った女なんだよ。それなのに優しくしてくれるなんて、ウサクが強いつて事だよ。誰かを許せるのは、強さだと思うから……………」

「……………いやあ、拙者あまりそういう事はわからないでござるが……………なはは。何せ拙者、頭は良くないでござるよー!」

何故それを自信満々に堂々と言うのか……………。ウサクは握りこぶしをぎゅっつと作り、目をきらきらさせていた。そんな馬鹿なウサクの姿を見ていたら何となくこっちまで楽しい気持ちになってくる。ウサクには多分、そういう才能があるのだと思う。

「拙者は、短い間でござったが昴殿と行動を共に出来て楽しかったでござる。姫様もきつと、あの旅の間はそう感じてくれていたと思っでござるよ」

「そうかな……」

「姫様はいつも、そのお役目で城に縛られ、戦いに縛られ、矢面に立って指揮を執るお方でござった。特に、ミラ殿がお亡くなりになってからは……いつも辛そうで見えいられなかったでござるよ。しかし昴殿がやってきてからは姫様に笑顔が戻ったのでござる。拙者は、感謝してもしきれない」

「……………」

「…………… 姫様はきつと、昴殿を許すと思うのでござるよ。拙者の願いは、昴殿が幸せになってくれる事でござる。そして出来れば、姫様の事を…… 忘れないでいてやってほしいでござるよ。時々でいいから思い出してあげて欲しいでござる。それだけで、きつと姫様は……………」

「ウサク……………」

寂しげに微笑み、ウサクは一人で頷いていた。そうして立ち上がり、部屋を去っていく。私は立ち上がり、背後からその手を握り締めていた。ウサクは驚いた様子で振り返り、明らかに拳動不審にどもりながら顔を紅くしていた。

「やや！？ まだ何かあったでござるか！？ もしや拙者、何か女子に対する粗相を……………！！？」

「いや、そうじゃなくて……。ねえウサク……。その……」

これと言ってしまつていいのだろうか、一瞬自問自答する。けれども答えは判りきつていた。白刃は何も答えてくれない。それは、自分で考えて答えを出せとミラが言っているようにも思えた。ミュレイは死に、私は生き残った。私が訪れ、世界は変わってしまった。ならば 忘れることなんて出来るはずがない。正さねばならない。ぎゅっと拳を握り締め、祈る。どうか、前に踏み出す勇気を。

「私……。やっぱり、ミュレイを助けない」

私の言葉にウサクは目を丸くした。それから暫くして、頭を掻きながら首をかしげる。

「いやしかし昴殿、一体どうやって……?」

「メリーベルなら絶対何か知ってるはずなんだよ……。私、それを教えてもらえるまで帰らない……!」

「なんと!? 昴殿、それは拙いでございます……。姫様はそんな事望んでないでございます」

「判ってるよ……。だからこれはもう、全部私の我侷」

力を手にした代償で、私は過ちをまた繰り返した。だからもう、同じ過ちを繰り返さない。代償でまた何かを失うとしても、欠けた物を取り戻す為にまた何かを砕くとしても。それでも私は、簡単に諦めたりしたくない。

そうだ、諦めることだけはいつだって出来なかった。諦められないからウダウダズルズル引きずってきたんだ。だったらもういつそ、

絶対に諦めなければいい。例えこの身が砕けようが。例え大逆の徒となるうが。例えこの世界全てを壊してしまおうが。構わない。

その罪を背負い、業を背負い、己の願いの為に全てを犠牲にしよう。たった一つを取り戻す為に百を犠牲にしよう。それでこそ、尊き者へと手が届く。正義でなくなっただけいい。諦めない事。それを自分の正義に掲げる。

「ミラに出来なかった事は……。ミュレイに出来なかった事は……。今度は私がやり遂げてみせる。その力があるのなら、使わないなんて道。選べないよ」

「……昴殿……」

「もう、元の世界に戻れなくなっただけいい……。こつちの世界で死んでも構わない……。！ 何も出来ないまま、心の底から願う事一つ叶えられないで生きながらえて何になるっていうんだ……。！ 戦うよ、もう……。逃げないで」

目をきつく閉じ、決意と共にそれを開く。ウサクはそんな私をじっと見下ろしていた。それから彼も考え込み、しばらくして答えを出す。

「………判ったでござる。然らば、拙者は昴殿と共にそれを叶えるでござるよ」

私の手を握り返し、ウサクは力強く頷く。それがとても心強くて、思わずまた泣きそうになったけどそれはなんとか堪えた。ウサクは優しく、そして真っ直ぐだった。嘘も偽りも存在しない……。だから、信頼出来る。

「強くならなきゃ……。魔王だって倒せるくらいの、無敵の勇者に……」

「何の話でござるか？」

「勇者が魔王を倒すのに必要な事、なんだと思う？」

私は走って魔剣ユウガを手にして戻ってくる。そうしてウサクの手を引き、部屋から飛び出した。お姫様を助ける為にもう一度ゼロから始めるのだ。行き詰ったセーブデータなら、何回でも“はじめから”でいい。私はあの魔王を倒せる勇者になる。絶対にもう、負けるわけには行かないから。

「レベルアップと、装備の強化だよ！　ウサク、手伝って！　ヴァン・ノーレッジを……魔剣狩りを倒せるくらいに、強くなるからっ」

「……………特訓でござるか？　応でござる！　拙者、昴殿の為になんでもやるでござるよー！」

階段を駆け上がり、メリーベルの元へ。もう逃げない。諦めない。私は勇者になってみせる。この世界が狂ってしまおうとも……構わない。壊してしまっても構わない。一緒に壊れてしまおう。この世界の、運命の中で。

さあ、“ゲームスタート”だ。

君の物語（2）

第三階層、ヨツンヘイム。その世界は科学技術と魔道技術の融和により、非常に高度な文明が築かれた世界である。

通常、三階層よりも下に住む人間が目にする事は出来ないヨツンヘイムの世界はその全てが機械で埋め尽くされている。どこまでが街で、どこまでがプレートなのか……。その全てに人が住んでいるわけではない。だが、生活圏でない場所も全てが街となっており、世界を飲み込むように機械の街は日々自動的に増殖を繰り返している。

ヨツンヘイムは機械が意思を持つのが当たり前の世界である。誰が何をするでもなく、機械は自動的に自分の仲間を増やし、ヨツンヘイムを護る。魔物は一匹たりとも存在せず、あらゆる場所の治安は万全、機械により統率されたユートピア。否、その強力な支配体制は人工的に生み出されたディストピアと呼ぶべきだろうか。

人間は機械により支配され、生まれた瞬間にすべての運命を決定付けられる。どんな勉強をしてどんな仕事に就き、どんな人と結婚するのか……。子供は何人作り、その子供はまたどんな生活を送るのか……。何もかもが皇帝ハロルドと、そのハロルドが生み出した政治指導システム、“ミレニウム”と呼ばれる人工知能により決定付けられている。

人々に自由はないが、しかしその人々にはすべて安定した裕福な暮らしとそれぞれの持つ欲望を叶えさせる仕組みが確立されており、ヨツンヘイムのディストピアに文句を言う人間は誰もいなかった。当然である、辛い事はすべて下層の人間に押し付けているのだから。人々は自分達の幸せとミレニアムのシステムに信頼を置き、そして

この世界の仕組みに疑問を唱える事はない。

故に。街はディストピアに近い体制を敷かれているにも関わらず、驚くほどの活気に満ちている。インフェル・ノアの周囲に展開する都市、帝都レコンキスタ。そこは空中を飛空艇が飛び交い、立体映像や巨大な街頭モニターが煌く魔法と機械の街である。インフェル・ノアからその街を見下ろし、シエルシは空いた口がふさがらなかった。煌びやか、そして圧倒的に進んだ文明……。何よりも殺伐としていていると思っていた帝国領土が、こんなにも自由と祝福に満ち溢れている事。驚きはやまず、シエルシは完全に棒立ち状態になってしまっていた。

インフェル・ノアは非常に巨大な建造物だが、それは別に都市ではない。いわば一つの城であり、様々な部署や様々な研究室、訓練施設、当然ながら居住区、そしてインフェル・ノアという要塞を飛ばす上で必要な飛行機関や更には搭載している戦闘艦、戦闘機、自立戦闘兵器などなど、あらゆる物をひっくるめて詰め込んである。まさにこれ一つで帝国の主力戦力となりえる、恐ろしい怪物要塞。それがインフェル・ノアなのだ。そして帝都レコンキスタは、インフェル・ノアの十倍以上の規模を誇る超巨大都市である。スケールが違いすぎてシエルシが固まってしまうのも無理は無い事であった。

「どうしました、シエルシ様？ そんな所にボサッと突っ立って居られては困ります」

「へ？ あ、はい！ ご、ごめんなさい……」

インフェル・ノア外周部連絡通路……。ガラス張りの壁の向こうに広がるレコンキスタの街並を眺め、足を止めるシエルシ。そんなシエルシに声をかけたのは同行していたケルヴィーであった。ケルヴィーは眼鏡を中指で押し上げつつ、シエルシのところまで戻って

くる。

「スケジュールが押しに押ししているのですから、少し急いでください」

「はい……」

帝国の紋章が刻まれたドレスに着替えたシエルシは只管インフェル・ノアの中を案内されていた。しかし先ほどからもう殆ど頭に入つてこない。覚える事が余りにも多すぎて、正直一人で歩き回ることさえ出来なかった。

婚姻の儀が滅茶苦茶になり、しかしシエルシは花嫁として認められそのままインフェル・ノアに乗せられたままヨツン Heim へとやってくる事となったのだが……。指導係となった剣誓隊プロジェクトエクカリバー主任であり、同時に皇帝の側近の一人でもあるケルヴィーが常にくつき、シエルシにあれこれ注文をつけてくるのである。シエルシはケルヴィーにネチネチといじめられつつ、何とかあちこちを廻っていた。

「まずはインフェル・ノアに慣れていただかなければ困りますからねえ……。これもすべてはシエルシ様が快適に城内でお過ごしになられる為の措置ですから」

「はう……。わ、わかりました……。ところであの、ケルヴィーさん……？」

「ケルヴィー……と、お呼びください。なんでしょうか？ 時間が押しているので歩きながら構いませんね？」

「は、はい！ あの……結婚という事になって、それでこれから具

体的に何をすれば……？ 結婚式とか……？」

「そんなものありませんよ？ まあ、言ってしまうえば婚姻の儀がそれに該当しますが…… 由緒正しい儀式はどこぞの刺客によって踏みじられてしまいましたからねえ。それと、シエルシ様にはこれから帝王学を学んでいただき、それから魔剣取得の儀式、剣術訓練を主に行っていたいただき、立派な王に相応しい人物に成って頂きます」

「王、ですか……？」

「貴方様は皇帝の花嫁であると同時に従順な配下でなければなりません。貴方はこれから履修期間に入り、下層を収める人間として相応しい知識と力と品格を身に着けていただきます。まあそれと平行して子作りもしていただくのですか」

「へっ!？」

「何を今更ビツクリしてるんですか貴方は……。あ、そっちは右ですよ。こちらです」

ケルヴィーに案内され、長い長い外周連絡通路を歩きながらシエルシは顔を真っ赤にしていた。子作り……。何をするのは一応、勉強はしている。が、所詮ルーンリウムの城で教えられた程度の事である。シエルシは頭の中を真っ白にしつつ、その頃の事を思い出していた。

ザルヴァトーレ首都、ルーンリウム……。城の中、幼い頃のシエルシはシルヴィアと二人きりで自室に居た。シルヴィアは黒板を用意させ、チョークを片手に、そしてもう片方の手は自分の腰に当て妹を見下ろす。

「いいかシエルシ、お前が何度説明しても子作りというものを理解しようとしないとメイドから泣きつかれたので、今日は私が直々に子作りを教えてやる。感謝しろ」

「うん、お姉様っ」

「では説明しよう。まず子作りとはなにか？ まあ皇帝と一発ヤッチまえば子供なんて出来るんだろうが、まあその説明だけでは子供のお前には不十分だろう。というわけで、子作りというものの原理から説明していく。まずは男女のまぐわいからだ」

シルヴィアは黒板につらつらとマンガを書いていく。何故マンガなのか……それは子供のシエルシにも理解しやすいようにとの事だった。そうしてシルヴィアは四時間かけて男女のまぐわいについて熱くかたつたのである。いたって本人は真顔、そして真面目である。真剣そのもののシルヴィアは腰をくねくねさせながら妹に説明し続けた。

「いやーん、マイクつたらこんな中に……。子供が出来ちゃうじゃないのー。ハッハッハ、すまないキャサリン、君があんまりにも良かったからなあ……とまあこんな具合で」

その間シエルシは一生懸命メモを取りつつ、目を真ん丸くしていた。最早魔法の世界であった。シルヴィアは黒板にバシバシ専門用語を書きながっていく。いつのまにか男を効率的に誘うには？ など下らない話題が展開され、シルヴィアは真顔で抗議を続ける。

「女ならば、嫁入り修行の一つや二つはするべきだ。お前も八口ルドの嫁になるなら、家事くらい出来なければな。これは東方より伝わる“はだかえぶろん”というもので、家事をしながら子作りにま

で持ち込めるといふ非常に画期的かつ合理的な手法で……」

シエルシは何度も話の途中、泣き出しそうになったり逃げ出そうとした。が、シルヴィアがその度に捕獲してしまい、シエルシは逃げる事が出来なかった。それからシルヴィアの子作り講座は十二時間に及び続けられ、全てを語り終えるとシルヴィアは黒板を片付け、完全に小さくなりきった何本目かのチョークを片手で握りつぶした。

「まあ、ざっとこんなものか……。後は男にでも開拓してもらえ。判ったか？」

「はうっ……。はうっ……。怖いですうっ！ おねーさま、怖いですうっ！！ おしりは……。おしりはちがうとおもっんですうっ！！」

「まだお前に尻は早い……。と、確か花嫁になる条件の中に処女というのがあった気がするな……。まあいい、変な男にたぶらかされないように護衛でもつけておけ。よし、あとはメイドに訊くがいい。私は仕事があるので帰る。ではな」

言いたいことだけ言ってシルヴィアはそのまま立ち去っていった……。シエルシはその後、暫くの間ベッドの隅で丸くなり、がくがくと震える日々を過ごした……。という壮絶な過去を脳裏にフラッシュバックさせ、シエルシはがくぷるしながらよろよろ歩いている。

「どうかしましたか？」

「わわわ、私……。その、処女なんですがっ！？」

「はあ……。まあそりゃそうでしょうけど……。それがどうかしたんですか？」

「子作りって……痛いんでしょうか……!?!」

「ええ、まあ……最初は痛いのでは？ 僕は男なんで判りませんが……」

「はづつ……っ」

泣き出しそうになるシエルシを見て引きつつも冷や汗を流し足を止めるケルヴィー。腕を組み、暫く考えた後シエルシの肩を叩いた。

「まあ……慣れば良い物と言いますし。そう気を落とさなくても良いのでは？」

「慣れるまでが怖いんじゃないですか?!?!?!」

「……そりゃそうなんですが……貴方何しにこの城に来たんですか」

二人がコントをしている間にも時間は流れて行く。溜息を漏らし、ケルヴィーはシエルシの背中を押し強制的に前に進ませた。

「まあ兎に角、まずは城の中を案内しますから……元氣を出してください。仕事に支障をきたしますから」

「……うう……。うううう……っ」

その後も二人はあちこちを周回　そうしているうちに段々とシエルシの気持ちも落ち着いてきた。そうしてようやく、色々な事について考える余裕が生まれたのである。

ククラカンはその後どうなったのか……。あの戦いの場に居た人々がその後どうなったのか……。判らない事が余りにも多すぎる。しかし、それはもう自分が考えるべきことではないのかもしれない。もう自分は今までとは違うのだ。これからはザルヴァトーレの姫でもなく、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレでもなく、皇帝八口ルドの妻として生きる事になるのだから。

シエルシは自ら、落ちていた剣を拾ってホクトの後を追いかけた。どうしてあの時ホクトを刺したのだろう。仲間であるはずのうさを殺したホクトの事が許せなかったのかもしれない。それも確かに理由の一つだ。けれど……。本当の理由はもつと単純な物だろう。ただ、見ていられなくなった……。あんなにも優しく、強く、暖かかったホクト……。彼が仲間を殺し、血まみれになって暴走する姿をあれ以上見ていられなくなったのだ。ホクトは、インフェル・ノアから落下した……。死んでしまったのだろうか。いや、無事であるはずがない。あの高さから落下して、無事で居られるはずがないのだから。

それでも、ホクトを刺した感触が手から消えることはなかった。彼の事を想う気持ちが消える事もなかった。顔を挙げ、ケルヴィーを見やる。我慢できず、シエルシは口を開いていた。

「ケルヴィー、あの……」

「はい？」

「その後、魔剣狩りは……」

そこで、言葉を止める。聞いたところでどうなるというのか。どうにもならない。全ては終わってしまった事なのだから。しかしケルヴィーは何かを汲み取ったように頷き、振り返る。

「ああ……。もしかしてステラの事ですか？」

「え？」

「ステラの件でしたら、あとで案内しますよ。貴方にとっても無関係ではないことですから」

何故か楽しそうに語り、ケルヴィーは先に進んでいく。シエルシは小さく頷き、歩き出した。心の中につつかえている、小さな感情を見つめぬフリするかのよう……。。

君の物語（3）

「目が覚めましたか？ 僕が誰だか判りますか、ステラ……？」

インフェル・ノア内部にあるケルヴィーの研究室。そこは、アンダーグラウンドなどで発掘された古代文明技術の研究所でもある。ケルヴィーは帝国の中で最も優れた科学者と言われ、古代文明の兵器転用、魔剣の量産計画やコピー計画などに携わり、様々な成果を残してきた男である。それ故に皇帝からの信頼も厚く、インフェル・ノアの施設を皇帝の許可無くほどこでも動かす事が出来るほどの権限を持っている。

無数のコンピュータが乱立し、ケーブルが複雑に床を埋め尽くす部屋……それがケルヴィーの落ち着ける場所であった。壁際に並んだ水槽の中には生き物の部品と思われる物体が浮かび、血に染まった手術台の上でステラは目を覚ます。それも何度目かわからない、繰り返された目覚めであった。

銀色の髪を揺らし、ステラは身体を起す。そうして自分の手を握り締めているケルヴィーを見つめ、部屋の中を見渡した。当然、判らないはずが無い。帰ってきたのだ、故郷に。生まれた場所へ……。

「……ケルヴィー」

「おおっ！？ 良かった、本当に良かった！ 一時期は本当にどうなることかと思いましたよ……。貴方の自己修復機能ですら復活できないほどに肉体が損傷していましたからねえ……」

「この私が、そこまで追い詰められたのですか……」

「ええ、例の魔剣狩りですよ。全く、本当にくそ忌々しい……。まあ、ボディは他のステラからパーツをもらって復元しました。それと人格面に多大なエラーが見られたので、一度メモリーもすべて初期化させていただきました。まあ、一年前貴方が失踪する直前のバックアップデータをインストールしておいたので、任務に大きな支障はないはずですが」

頷き、ステラはゆっくりと手術台から立ち上がる。身体に異常がないか確認し、それから鏡に映った自分へと歩み寄った。手を伸ばし、それに触れてみる。ステラ……。帝国のガーディアンシステムと呼ばれる治安維持機能。それが彼女の名前。“うさ子”と呼ばれていた少女の名前……。

「感謝します、ケルヴィー。肉体に異常ありません。すべて正常です」

「それはよかった。それで、早速で申し訳ないのですが、貴方に一つ頼みがあるのです」

頷き、ステラはケルヴィーに歩み寄る。二人は隣の部屋に移動し、ケルヴィーはビーカーにコーヒーを作りながらテーブルについた。ステラは棒立ちのままその傍らに留まり、話が始まるのを待っていた。

ケルヴィーの依頼は一つだけ。新たな花嫁として迎え入れられたシエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレの身边護衛、そしてその見張りである。シエルシにはその経歴に色々と不審な部分もあり、ケルヴィーはそこを警戒していた。更に言えば先日婚姻の儀では侵入者がインフェル・ノアに紛れ込むと言う事件もあった為、一応念の為に強力な護衛をつけたいという考えがあった。

ステラの持つ魔剣、翔魔剣ミストラルはカテゴリーSと呼ばれる

魔剣の一つである。それはケルヴィーの見解によれば、このロクエ
ンティアと呼ばれる世界の中に七つしか存在していないのだ。そん
な化け物染みた能力を持った魔剣を持つステラだからこそ、シエル
シの護衛を安心して頼めるのである。

「とうわけで、これからは暫くシエルシ様のところについてい
てあげてください」

「エマーゼンシーコールは？」

「無視で構いませんよ。最大の障害であつた魔剣狩りは既に倒れた
のですから、まあ下の世界ももう安全でしょう。それに近々反帝国
組織の一斉排除作戦が始まりますから、こっちは暇になると思いま
すし」

「そうですね。ところでケルヴィー、私は一年間何をしていたので
すか？」

「それは私も訊きたいですよ……。貴方が一年前、エマーゼンシ
ーコールで下層に向かったとき戻ってこなかった時は……。僕はもう
心配で心配で……。食事も喉を通らなかつたんですよ？ ま、点滴
を打ってましたから全く平気でしたけどね」

「では、ケルヴィーも答えは持ち合わせていないのですね」

「ええ。まあ、貴方は一度“死に”ましたから、その前の貴方の破
損したメモリーを解析しようかと思っっているんですが……。まああま
り期待しないでください。僕もエクスカリバーの開発で忙しいです
し」

「理解しました。それではケルヴィー、私はザルヴァトーレの姫の護衛に向かいます。修理と再生、感謝します」

一礼し、ステラはそのまま部屋を去っていく。その後姿を見送りケルヴィーは眼鏡を中指で押し上げ、ほっと胸を撫で下ろした。先日見た時ステラはうさ子などというふざけた名前で呼ばれ、それが似合うほどお馬鹿な感じの女の子になってしまっていた。あの時はそれこそ死ぬかと思ったものだが、大事な大事な兵器が無事に戻ってきてくれて今は一安心と言った所である。

部屋を出たステラはそのままの足で真っ直ぐにシエルシの部屋へ向かった。新しい情報は既に眠っている間にインプットされているので道に迷う事はなかった。インフェル・ノアを歩くステラとすれ違う騎士やメイドたちは皆ステラを見つけると慌てて道を開き、怯えるような目をした。ステラは帝国の中でも異質な存在である。皇帝に気に入られているとは言え、元々は古代文明の遺産。人工生命体である。化け物染みたその戦闘力は敵からも味方からも恐れられ、彼女にまともに接触しようとする人間はケルヴィーしかいなかった。

しかし今のステラにその事を憂うような機能は存在していない。当たり前のように人々に避けられ、道を行く。辿り着いたシエルシの部屋、その扉に認証コードを打ち込み開き、少女は姫の部屋へと足を踏み入れた。

シエルシはベッドの上に座り込み、憂鬱そうな顔をしていた。多忙を極めるシエルシもこの夜だけは何とか休む時間をもらっているのだが、こんな異世界のような場所では眠るにも眠れない。落ち着かない夜はこうして一人で座り込むしか時間を潰す方法が知らなかった。

現れたステラの姿にシエルシは大層驚き、そして駆け寄った。ステラの顔に触れ、そして手に触れ、温もりを確かめる。安心したようにシエルシは微笑み、ステラの身体を抱きしめた。

「うさ子……よかった！ 無事だったのですね……」

「シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ。私の名前はうさ子ではありません」

ぐいっとシエルシの肩を掴み、引き剥がすステラ。しかしシエルシにしてみればうさ子はうさ子なのである。何をワケの判らないことを言い出したのかと目を丸くするシエルシ。それにうさ子は自らの胸に手を当て説明した。

「私はケルヴィー博士によって復元された古代の自立戦闘兵器、現在でのコードネームは“ステラ”です。うさ子、などという名前ではありません」

「え……？ うさ子、ど、どうしてしまったんですか……？ そんな難しい言葉を話せるなんて……」

「シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……私はステラです。何度も言わずとも理解してください」

繰り返し名乗るステラ。シエルシは一步後退し、肩を落とした。

うさ子は……あの日、ズタズタに引き裂かれて死んでしまったのだ。ホクトの手によって……。あの恐ろしい力を持った魔剣ガリュウがうさ子の身体を引き裂くのを見た。死んでしまったと思っていた。けれど、うさ子は生きていた。

うさ子はもううさ子ではなくなっていて、死んでしまったうさ子はもう戻らない……。そんな気がした。ほんわかした様子で笑ったり歌ったり、絵を描いたり……。おいしそうにいつもなんでも食べて、元気よく誰にでも愛されたうさ子……。生まれて初めて、自分を友

達だと言ってくれたうさ子。そのうさ子が今、目の前で別人になっ
てしまっている。それはシエルシにとって受け入れがたい、とても
辛い現実だった。

もう一度前に歩み、シエルシはうさ子の身体を抱きしめる。人工
生命……でも、暖かかった。うさ子は暖かい、いつだってそうだっ
た。友達だと言って泣きながら手を振ってくれたうさ子……。その
うさ子はもう、笑う事も涙を流す事も出来ないのか。そう考えると、
こみ上げる熱い気持ちを止められなかった。

「……………？ 何故、泣いているのですか？」

「うさ子……。可愛そうなうさ子……」

「……………シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ。私の名前はステ
ラです」

「……………ステラ。私の事も、シエルシで構わないから。ごめんね……
泣いたりして……」

「いえ、理解してくれれば問題ありませんシエルシ。これから私は
貴方の護衛として行動を共にする事になります。以後、そのように
認識を」

シエルシは涙を拭い、ステラの手をぎゅっと握り締めた。何故か
そうされると不思議な気持ちになり、ステラは戸惑いながらもその
手をそつと握り返した。柔らかくて暖かくて、懐かしい感触……。
シエルシはステラの頭を何度も撫で、そうしてまた抱きしめた。そ
うされる間、ステラはただじつと立ち尽くしていた。ざわざわと、
忘れた気持ちが頭の中で思考を掻き乱すノイズとなる。目を瞑り、
そしてそれを処理する。感情を抑える事はステラにとっては難しい

事でもなんでもない。呼吸するかのように、彼女は自我を消失出来る。

「シエルシ、何故私にさわるのですか？」

「………………。友達だから…………。かな」

「友達ではありません。私はシエルシの護衛です」

「判ってるよ。でも、判ってるけど…………。それでも、嬉しかったから…………。貴方の事、忘れられないから…………。」

背を向け、シエルシはまた項垂れて泣いていた。ステラはどうしたらいいのか判らず、そつと己の掌を見つめる。それをシエルシに伸ばし、しかし手が姫の背に届く事はなかった。理解の出来ない感覚に戸惑いながらもステラは目を閉じる。何も考えなくて済むように。

「明日も早くからスケジュールが詰まっています。シエルシ、早く就寝して下さい」

「…………。はい。ステラも、お休みなさい…………。」

「お休みなさい、シエルシ。また明日」

泣きながらも笑顔を作るシエルシ。ステラは頷き部屋を出た。部屋の外に立ち、これからは二十四時間シエルシを護衛しなければならぬ。索敵モードを発動し、周囲の魔力数値を計測しつつ目を伏せた。伸ばしかけた手…………。自分の身体が掴もうとした何か。それがなんだったのか、ステラには理解出来なかった。出来るはずも無い。

失われた心はもう、取り戻せないのだから。

君の物語（3）

「……………後悔しても、知らないわよ」

私の決意を聞いてメリーベルが放った第一声がそれである。私は当然迷い無く頷いた。メリーベルは、“どうせそんなこったろうと思っただから”と言い、準備していた異世界転送魔法陣を使って私を過去へ送る方法を説明してくれた。それは想像を絶する話だった。

まず、ユウガの持っている時間操作の能力は私が意図的に発動出来るようになってくるとの事。正しく時間を巻き戻したり時間を止めるといふ事は大量の魔力を消費し、そして消費できるだけの魔力を私は持っていないらしい。元々魔法が使える世界の人間とは異なり、私はただの一般人である。ユウガの本来の持ち主ミラはミレイの妹ということもあり、それはもう凄まじい魔力の持ち主だったという。そんなミラと違い、私にはユウガの力を完全に使いこなすだけの素質がないのだという。

故に、ユウガ単体での時空跳躍は不可能。それがメリーベルの結論だった。だが、時空跳躍ではなく“異世界への跳躍”であればメリーベルの術で行えるという。そこにユウガの能力を掛け合わせ、特殊な“逆召喚”を行えば、ある程度まで確実に時間を遡る事が出来るのだと言うのだ。

「逆召喚、できざるか？」

「……まあ、“召喚される”と考えて。まず昴、貴方は異世界からミュレイの手で魔法を使って召喚された……そうね？」

「う、うん」

「つまりこの世界には元々、“ミュレイが異世界から貴方を召喚する”という運命が備わっているの。これを上手く利用すれば世界の法則に大きく影響を与えず、自然に過去に跳躍が出来るはずよ。当然リスクは伴うんだけど」

まず、メリーベルが用意した異世界転送魔法陣というものを起動する。その際私はユウガの能力を発動し、一瞬だけでいいのでユウガをオーバードライブ状態と呼ばれるものにまで引っ張り上げる。時間を跳躍すると同時に空間の壁を魔法陣でぶち抜き移動。そして、ユウガを本来持っているべき人間の所に時空、空間を固定する……らしい。もうわけがわからなかったが、メリーベルに言わせればこれなら自然に戻るとの事である。

「時間の跳躍の目安になるのは、ユウガをミュレイが持っていた時期。空間跳躍の目安は、ミュレイが貴方を召喚した瞬間……。つまり、貴方はもう一度ミュレイに召喚されなおせばいいって事」

「つまり、ミュレイが私を召喚した、という事実に合わせて時間跳躍をするって事……？」

「そう。そうすればかなり確実性のある跳躍が可能になるわ。世界全体が無限ループしてるのなら兎も角、法則を捻じ曲げて逆流させるのは凄く難しいし不安定なの。でも、ミュレイが異世界から貴方を召喚するという事実は元々あったものだから、そこに辻褄を合わせちゃえば可能だと思う。当然保障はないけど」

「……………。つまり、元々の私ではなく、今ここにいる私をミュレイに再召喚させる……………。それをここから手を加えるのが逆召喚って事？」

「ん、おおむね正解」

「む、むちゃくちゃでござる……………。メリーベル殿、本当に何者なのでござるか……………」

「でもまだ問題は残ってる。昴、今の貴方の能力じゃ時空跳躍に耐えられないし、そもそもそれを起せるほどユウガの力を引き出せないから」

そう、問題は結局山積みなのだ。しかしその殆どはメリーベルが解決出来るという。マジでお前なんなんだと言いたくなかったが、出来るというのならばして貰うまでである。

なんでも、彼女は以前にも力のない救世主の相手をした事があつたらしく、その為に必要な事は一通り記憶していたらしい。まず彼女は私の身体に直接ユウガを取り込む術式を施すと言い出した。そうすることで私の魔力量は急激に上昇するが、肉体に強い負荷がかかり、下手をしたら死ぬかもしれないといわれた。しかし私はそれを受け入れた。

二人きりの部屋の中、はだけた背中^に彼女はユウガを分解して融合させる。彼女がどんな事をしているのかはわからなかったが、それが正常な魔剣継承の儀式なのだという。背中に術式が刻まれた時余りの激痛で気を失ってしまい、そのまま三日間私は気を失っていた。目覚めたら直ぐにベッドから飛び出し、再びメリーベルの元へ向かった。

今度は身体に異世界跳躍に耐えられるように特殊な術式を刻む。

両腕に同じように術を刻み、また痛みで気を失った。体力が衰えていた所為もあり今度は一週間目を覚まさなかった。目が覚めた時またベッドから飛び出したが、今度は身体がいう事を聞かずに倒れてしまった。

「昴殿、いくらなんでも無茶すぎでござるよ!? 拙者見てられな
いでござる……!」

「大丈夫だって、これくらい……。ミラはこれに耐えたんでしょ?
だったら私もやらなきゃ……!」

ウサクに肩を貸してもらい、またメリーベルの元へ。そこでユウガを構築し、能力を引き出すコツを学んだ。途中何度も気絶したが、またベッドから飛び出して彼女のところに向かう。

まるで無限ループだった。何度も何度もウサクに支えられ、ユウガの扱いを、コントロールを学んでいく。両腕に刻んだ術式のお陰でユウガのコントロールは容易くなり、集中して毎日取り組む事によって自分でも驚くほどのスピードで魔剣の能力を習得する事が出来た。

「……貴方、才能あるのかもね」

というのはメリーベルの言葉である。何度もぶっ倒れて気絶している間に彼女は彼女で準備を進めておいてくれたお陰で、二十回目くらいに目を覚ました時、彼女の部屋には今までなかったものが飾られていた。

「名づけて 特殊戦闘術式武装、
“白神装武”^{はくしんそうぶ}」

「……鎧と 仮面?」

「以前、他の救世主の為に作った武装を全身化して昴に合うように強化したものだ。これだけあれば殆どの術式攻撃を無力化し、貴方を守ってくれると思う。それにこれを装備していれば時空跳躍の衝撃にも耐えられるし、ユウガの暴走を抑えてくれる」

「そんなすごい鎧なのこれ……もらっちゃっていいの、ほんとに……?」

「別にいい。今回は本当にいい仕事が出来たから満足してるし」

メリーベルの価値観はよくわからない……。兎に角、私はその白神装部と呼ばれる鎧を受け取る事にした。それから転送の術をメリーベルが完成させるまでの間、私は毎日ウサクと手合わせをした。何度も何度も本気の戦いを繰り返し、力を、術式を、魔剣を理解していく。

ウサクは強かったから、訓練相手には丁度良かった。最初はウサクに手も足も出なかった。それが少しずつウサクの動きについていけるようになり、彼を打ち負かすほどに強くなっていった時、私はいつの間にかユウガの力を使いこなせるようになっていた。

すべての工程を終了するまでにかかった時間は一ヶ月足らず。肩で息をしながらウサクに突きつけた刃を退ける。ウサクは目を丸くして私を見上げていた。彼を助け起し、二人で手を握り合う。ウサクはもう何も教える事はないでござるよ、と笑ってくれた。

「それにしても昴殿、本当に尋常ではない成長でござるな……。まあ、毎日寝る間も惜しんで戦いだけをしてきただけはあるでござるよ」

「まだまだだよ……。魔剣狩りの力はこんなもんじゃなかった……」

もつともつと強くならねばならぬだろう。だが一刻も早くミュレイを助け出さねばならない。私のするべき事は判りきっている。このユウガの力で、あの日襲ってきた刺客を倒し、魔剣狩りを倒し、ミュレイが殺される要素全てを倒し、この世界がもういやだと悲鳴を上げるまですべて倒し続ける事。幸いにもこの剣は森羅万象全てを切り裂く力を持っている。魔剣狩りの使う魔剣だって切り裂く事が出来るだろう。勝ち目は無いわけではない。いや、むしろあの魔剣狩りを殺す事が出来る唯一の力なのかもしれない。

「……時を遡ったら、拙者は昴殿の事を忘れていたのでござるか……。なんだか、少し寂しいでござるよ」

「……そうだね。でも、あつちでもまたウサクには出会えるから」

「……そうでござるな。ただ、拙者は今日まで昴殿が懸命に努力する姿をすべて見てきたでござるよ。その拙者が昴殿の事を忘れてしまったら、昴殿がかわいそうでござる」

落ち込んだ様子でそう呟くウサク。私は首を横に振り、ウサクの手を強く握り締めた。

「ウサクとメリーベルがいなかったら、私はのたれ死んでいたかもしれない。感謝してるよ、ウサク……。傍に居てくれて、助けてくれてありがとう」

「昴殿……」

ウサクは頷き、私の手を両手で握り締めた。それから両目からど

ばーっと涙を滝のように流し、首をぶんぶん縦に振りまくった。

「拙者、向こうの世界でもきつと昴殿を護るでござるよう!! 今度こそ……今度こそ共に、姫様を……っ!!」

「ああ。約束するよ。あっちのウサクを私は頼る。ウサクは誰より私にとって頼れる……大事な仲間だから」

そうだ、絶対に私は忘れない。大切な人を護れなかった悔しさも、無力さも……。共に戦ってくれた仲間が居た事も。沢山の人の思いを穢し、壊し、それでも私は生き延びた。だから今度こそ もう間違えない為に。

白い鎧は私を私ではない存在へと変えてくれる。術式から、世界から、痛みから私を切り離して装甲は強制的に私を前に進ませるだろう。鎧の下にウサクからもらった袴を着て、今度こそ。ヨシノの家紋を背負い、メリーベルがくれた鎧を着て、ミラとミュレイが私に託した剣を手に。私は私を変えていく。もう、弱い私に戻ってしまわないように。

巨大な仮面を両手に私はそっと目を伏せた。目の前ではメリーベルが作った巨大な魔法陣が浮かんでいる。見守るウサクとメリーベルの前、私は仮面をつけて前に出る。鋼鉄の指よ、今度こそあの人を護り救い給え。白神の徒となり、今度こそ。

『メリーベル、今日までありがとう。ウサクも……お元気で』

「昴殿……。向こうについたら、直ぐに拙者を頼るでござるよ!! 拙者馬鹿だから!! 昴殿のこと、きつとすぐ信じるでござるよっ!!」

「私のところにも顔を出して。その鎧を見せてくれれば、間違いな

「一発で信じるから」

『ああ、判った。本当に今まで色々ありがとう……。今度こそ、姫を救って来る』

二人に背を向け魔法陣へ。設定した跳躍先は、物語の始まりの前。出来るだけ、遡りたかった。もしかしたら、すべての運命を変えられるかもしれないから。もしかしたら、ミラが殺されるといふ運命すら。曲げられるかもしれないから。

呼吸をし、静かに心を研ぎ澄ます。教わった事をやるだけ。そう思うけれど緊張してしまう。だから私は私を変えるのだ。私は北条昴という弱虫な女の子ではなく、魔剣狩りを殺す女。歴史を変える大逆の犯罪者。だから名乗ろう。心を変える為に。

『我が名は“白騎士”。メリーベル、頼む。やってくれ』

「……………了解。行ってらっしゃい、“白騎士”」

魔法陣が光を放ち、私の身体を時の狭間に追いやっていく。握り締めたユウガ。その力を限界まで引き出し、すべての壁をぶち破る。

時を、場所を。この世の法則全てを斬り裂き、我を連れて行け。時の彼方へ。あり得なかった未来の過去へ。彼女が私を護らなくてもいい、私が彼女を護れる世界へ。

光が全てを飲み込んでいく。ここから何もかももう一度始めよう。そう、これが私の物語。闇の魔王を打ち倒す、白い勇者の物語。その、幕開けなのだ。

『今行くよ、ミュレイ』

剣創のロクエンティア

「……………“白騎士”……………」

ホクトの周囲、黒い闇が浮かび上がる。ただでさえ闇に包まれた影の世界の中、黒くうねる刃は視界には捕らえ辛い。魔剣を思い切り振るうその切っ先から放たれた闇の波動は漆黒の中を泳ぎ、白騎士へと襲い掛かった。

後は乱舞、乱舞である。白騎士は全てを見切り、踊るように刃を振り回した。闇一色にしか見えないその世界の中、一見しただけでは白騎士が攻撃を防いでいるようには見えなかつただろう。舞い散る火花は魔剣同士の力の衝突の証。しかしそれがかくも美しく、かくも儂い。

「お前……………まさか……………？」

『見つけたぞ……………。生きていたか、魔剣狩り……………。逢いたかつたぞ……………』

再び刃を激しく打ち合い、鏝迫り合いの形となる。至近距離で顔突き合わせ、二人は互いを見つめ合う。兜の下、くぐもつた声が聞こえ、しかしホクトはそれに目を見開いた。

白騎士の持つ魔剣は白い太刀。まるで氷の結晶を切り取つたかのような美しい太刀である。その柄には、日輪を模した紋章が刻まれ

ている。日の国ククラカン　その王家に代々伝わる魔剣であること
を示す、紅き日輪が。

「お前……“ミラ”か　ッ!?」

白い魔剣が輝き、ホクトを弾くと同時にその刃を揮う。一瞬で大地が、壁が、空が凍てつき氷の結晶が刃となってホクトを飲み込もうとその牙を剥いた。ホクトはガリュウを大地に突き刺し、その黒い炎で氷の刃を相殺する。二対の魔剣の力が衝突し、冷気と闇の熱気の狭間、ホクトは真っ直ぐに白騎士を見つめていた。

『貴様との因縁……ここで断ち切る。引導を渡してやろう、漆黒の
剣士よ……』

「……………そういうわけにはいかなえな。俺も、お前を探していた
所だったんだ。目的がさっさと果たせて嬉しいぜ……！　これであ
いつに……ミュレイに礼が出来るってもんだ」

刃を引き抜き、ホクトはそれを構える。先ほどまでダラダラとした表情を浮かべていた彼とは違う。これが、本当の魔剣狩りとまで呼ばれた男の戦の顔である。放つ殺気と魔力はキリキリと場を軋ませるかのようで、それに絶えかねアクティはその場に膝をついた。

闇の中、更に色濃い闇が浮かび上がる事で知る。本当の意味での闇とは　ただ黒く、暗いのではないのだと。何もかもを飲み込むような、覗き込んだが最後、どこまでも落ちてしまうような……。そんな、深い失意と絶望を言うのだと。

『もう一度斬り伏せてやろう、死神』

「やってみるよ、死神」

二つの刃がぶつかり合う。それは仕組まれていた運命。少女
が望んだもう一つの未来。そして物語の本当の始まりは、二つ
の影がぶつかり合う以前。とある荒野での戦いであった。

君の物語(3)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

そういつわけで

白騎士『魔剣狩り……』

ホクト「白騎士！」

昴「ではなく、私だったんです」

ホクト「なんだってえええっ!?!」

シエルシ「……この作品一番のネタバレですが、大体の読者が予想していたのでは？」

ホクト「まあ、そうだな」

昴「だと思ったよ。鎧とか仮面とかつけて一生懸命がんばってたんだけどね」

シエルシ「それにしても、この一話だけで物語の全容がほとんど理解できてしまうという恐ろしいネタバレ回ですよ」

昴「そうだね」

ホクト「ま、いいんじゃないの？ 昴もようやく主人公っぽくなってきたわけだし」

昴「……シエルシモヒロインになってきたしね」

シエルシ「……ふふ、ふふふふ……」

ホクト「アンケート結果にどう響くかな……」

はじける！ ロクエンティア劇場番外編（2）

くはじける！ ロクエンティア劇場番外編く

もう四十部か……早いもんだぜ……

シエルシ「というわけで、ロクエンティアも無事四十部を超えましたので、ここらで一つまとめ編です」

昴「暗黙のレギュラーであるうさ子がステラ化しているので、今回は私たちが仕切らせてもらうよ」

シエルシ「今回は未紹介だったキャラクター、ネタバレのあったキヤラや魔剣を中心にピックアップしていきますよ」

昴「それでは特になんのネタも入らずごく普通にスタートです」

くキャラクター編く

ホクト（ヴァン・ノーレッジ）

【年齢】：23 【性別】：男 【出身】：不明 【シン】：蝕魔
剣ガリユウ

ホクト編主人公、漆黒の魔剣ガリユウを操る“魔剣狩り”と呼ばれる伝説の魔剣使い。

かつて単身で剣誓隊を壊滅にまで追いやり、“百人斬り”と呼ばれる偉業を達成した男。世界に七つしか存在しない大いなる魔剣、カ

テゴリースの一つの所有者である。

ククラカンの姫、ミラ・ヨシノと恋仲にあり、世界中を世直しの旅をしていたがとある闘争によりミラを失い、その後彼自身も記憶を失い彷徨う事になる。

記憶喪失状態のホクトを拾ってくれたロゼ・ヴァンシユタールの所属する砂の海豚に所属するが、元々はサーペントヴァイトというギルドの一員であった。

非常にノリの軽い性格で、女好きのヘビースモーカーで何事もめんどくさがり真面目に取り組まない三枚目。しかし子供の扱いには手馴れたものがある。

この世界に存在するすべての魔剣を収集し、絶対的な存在となる事を目的としていたようだが……。

北条 昴（白騎士）

【年齢】：19 【性別】：女 【出身】：異世界（日本） 【シ

ン】：破魔剣ユウガ

昴編主人公。白い刀身と柄を持つ日本刀風の魔剣、ユウガを操る救世主。白い装甲、白神装武を纏ったその姿は“白騎士”の異名を持つ。

ミュレイ・ヨシノに式神として召喚され行動を共にするが、コントロール出来ないユウガの能力によりミュレイを子供にしてしまったり、拳句自分を庇ってミュレイが死んでしまうなどの事件を経て戦い償う事を決意する。

世界に七つしか存在しないカテゴリース魔剣、ユウガを継承した剣士であり、ミュレイを護る為に時空跳躍により“二週目”に挑む。

基本的には泣き虫で臆病で体力も無く、対人関係が苦手な現実世界では引き籠もりがちだったどうしようもない駄目人間だが、仮面を

被ることで意図的に己の人格を切り替え、白騎士として立ち振る舞う時の戦闘力は桁外れに強化されている。

かつて兄である“北斗”を失い、その事がトラウマとなり自分を護る人が死ぬ事を何よりも恐れている。半ば精神崩壊と暴走の果て、ミュレイを護る為に殺戮兵器となる事を選択した。

ミュレイが死ぬ直接の原因となったホクトの命を狙っており、ホクトの記憶喪失の原因に深い関わりがあるらしい。

ロゼ・ヴァンシュタール

【年齢】：17 【性別】：男 【出身】：第四界層プリミドール

【シン】：なし

反帝国組織、“砂の海豚”団長。

シンを持たない人間だが、術式をくみ上げる能力に長けている所謂魔術師である。戦闘能力は決して高くはないが、術式構築に高いセンスを発揮する。

先代の団長の息子であり、幼い頃から反帝国主義に傾倒した思考を持つ。偉大な父親に早く追いつこうと焦る日々が続いている。

特殊な術式を構築した武装、スペルシリンダーを扱うが、戦闘能力に関しては魔剣使いには及ばない。

冷静さを保つ事が出来れば非常に鋭い洞察力と思考の早さ、持ち前の術式改竄の能力で状況をつかむ事が出来るが、いかんせん未熟故に感情に流され実力を発揮できないことが多い。

小さい頃からずっと面倒を見てくれていたリフルを姉のように感じていると同時に召使のように扱っており、リフルに対してはとてもワガママである。

リフル・ヴァンシユタール

【年齢】：24 【性別】：女 【出身】：第五界層エル・ギルス

【シン】：響魔剣グラシア

反帝国組織、“砂の海豚”に所属する魔剣士。

団長のロゼとは幼馴染であると同時に世話役であり、先代の団長が健在の時から常にロゼの面倒を見てきた。

元々先代の団長に孤児だった幼少時代に拾われ、反帝国組織の一員として腕を磨いてきた。それゆえにロゼの面倒から戦闘まで何でもこなせるエキスパートである。

特に砂の海豚の最大戦力として名を馳せており、先代の団長から継承した響魔剣グラシアは彼女の代名詞となっている。

本来は息子のロゼに継承されるべきグラシアを継承しているのには理由があり、それを知らないロゼはその事実に苛立っている。

表面上は非常に冷静、口数の少ない真面目な女性だがロゼに対してはアマアマな一面を持つ。

ステラ（うさ子）

【年齢】：設定年齢は二十歳 【性別】：女 【出身】：第二界層
ジハード 【シン】：翔魔剣ミストラル

帝国が誇る治安維持用の完全自立型ガーディアンシステム、ステラシリーズのうちの一体にしてオリジナル。

人間の女性の外見をしている（何故か頭の悪そうなロリ巨乳）が、翔魔剣ミストラルの展開によりサイバーチックな武装を纏いロボっ子となる。

ハロルドの片腕と言われる程の戦闘力と信頼を得ており、单身世界

中を駆け巡り反帝国の大きな動きを砕きまくる毎日を送っていた。帝国最大の敵と呼ばれた魔剣狩りの男、ヴァン・ノーレッジとはライバルのような関係にあり、ヴァンとは何度も戦いを繰り広げてきた。ヴァンの恋人ミラを殺したのもステラであり、そのことからヴァンはステラをひどく憎んでいた。

が、何らかの理由で記憶喪失となり、砂の海豚ではうさ子などというわけのわからないほのぼのした名前を与えられ、お脳も実際ほのぼのしてしまっていた。

ホクト君になついていた理由が罪滅ぼしだったのか、或いは人間的な好意だったのか……それは全てを失った今となつては謎である。直、世界に七つしか存在しないS魔剣の所有者の一人である。

ミュレイ・ヨシノ

【年齢】：26 【性別】：女 【出身】：第四階層プリミドル

【シン】：炎魔剣ソレイユ

第四階層に存在する二つの国、“太陽の国”ことククラカン国の第一王女。

様々な異名を持つ炎の大魔術士であり、ククラカン最強の戦闘力を持つ女。その実力は世界に七つしか存在しないカテゴリーSの魔剣、ソレイユを持つ事からも明らかである。

魔力数値だけであれば魔剣狩りさえも超圧倒するほどであり、作中力が封印されてさえ居なければ相当な戦闘力を持つ。異世界より力を引き出す式神の召喚は彼女の持つ魔剣の最大の特徴。

昴を異世界から召喚してしまった張本人だが、その原因は不明。昴がその因子を二週目に引き継ぐ際に彼女と結びつけたが、どちらが先だったのかは卵が先か鶏が先か、というレベルの話。

かつては強力な軍事主義者であったが、妹ミラの死後その遺志を引

き継ぎ平和的に世界を変えようと尽力する。また、ミラに似ている昴を妹のように愛し、護ろうと努力していた。

ウサク

【年齢】：16 【性別】：男 【出身】：第四界層プリミドール

【シン】：なし

ククラカン王女、ミュレイに仕える忍見習い。子供の頃、戦場でミュレイに命を救われて以来ミュレイに仕えている。

しかし実際のところ、ミュレイにこきつかわれる雑用のような位置で、忍としての正しい実力を発揮する事は殆どない。

ククラカンでも既に使われていない謎のござる言葉を使用するが、それがあっているのかどうかは誰にもわからない。

若干とぼけた性格をしており、一言で表現すると天然。女性に免疫がなく、ミュレイによくからかわれている。

魔剣を持たない一般人だが、忍術やら忍の体術やらを使いこなし高い戦闘力を誇る。

昴が召喚されてからは、昴の面倒も見ている苦勞人である。

ゲオルク

【年齢】：31 【性別】：男 【出身】：第四界層プリミドール

【シン】：墜魔剣バサラ

ククラカン武士団団長を務める魔剣使い。かなりの巨漢でムツキムキである。一見すると顔に傷があったりとかなりおっかないが、根は面倒見が良く気のいい男。

ミュレイとは古くからとある理由で親しく、ミュレイは自分の事を呼び捨てにする事を許可している程。一見すると熱血系だが、実は冷静で戦場において非常に合理的に動く事が出来る。

昴の師匠のような立場でもあり、色々と魔剣や戦いについて教え込んでいた。彼もまた年下の面倒を見るのになれており、昴の事は手のかかる妹のように感じているようだ。

巨大な槌の魔剣を扱い、その戦闘力はククラカン武士団随一である。しかし任務に忠実である事から、その力が思う存分揮われる事は滅多に無い（ミュレイが平和主義の為）。

趣味は読書とガーデニング。巨大な手でちまちまやるのが意外と器用である。

シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ

【年齢】：19 【性別】：女 【出身】：第四界層プリミドル

【シン】：なし

第四界層に存在する二つの国、“月の国”ことザルヴァトーレ国の第三王女。通称“空気姫”。メインヒロイン（笑）

ククラカンの暗殺者に襲われ、その後UGに囚われた母に会いに行くも母は死んでおり、その後もトラブル続きの兎に角薄幸な少女。

非常に気の強い姉たちに囲まれ、いつも一人膝を抱えていたからか性格は優柔不断でイマイチはつきりと意思表示が出来ない。自分が何をしたくて何を望んでいるのか、それさえもわからない。

結局言われるがまま婚姻の儀に参加するが、戦乱の中それでも役割だけは果たそうと前に進み出し少しだけ成長したかもしれない。が、相変わらずの不人気である。

しゃきつとしない性格である所為か、いまいちキャラも立たず危ない事や目立つ事はしないので余計に微妙な位置取りになる。しかし

初めての友達であるうさ子や自分を助けてくれた仲間であるホクトたちの事は大切に思っているようだ。

イスルギ

【年齢】：26 【性別】：男 【出身】：第四界層プリミドール

【シン】：貴魔剣アルテツァ

ザルヴァトーレ第三王女シエルシ専属の護衛騎士にして魔剣の使い手。同時にザルヴァトーレ騎士団団長でもある。

非常に生真面目な性格で、常にシエルシの事を第一に考えている模範的な騎士。それはむしろ行き過ぎた部分もあり、他人と衝突する原因にもなり得る。

シエルシが唯一心を許している男性でもあり、結婚するなら彼のように紳士的な騎士がいいとシエルシは夢見ているほど。が、実際は非常に鈍くクールというよりは若干天然ボケ。

騎士団長という肩書きを持っているが、実際戦場において騎士団長としての動きはすべてシルヴィア王が行ってしまうので、彼の出番は決して多くない。どちらかというとしエルシの護衛という面が強く、周囲の認識もそれに近い。

普段の服装は実は和装。ひとたび鎧を脱げば文化は基本的に東側よりである。

タケル・ヨシノ

【年齢】：15 【性別】：男 【出身】：第四界層プリミドール

【シン】：なし

ククラカンの第二王子。ミュレイの弟に当たるが、実際には血は繋がっていない。

何かと笑顔で毒を吐く少年だが、性格は意外とフランクでよくも悪くも何事にも動じない。姉であるミュレイを慕っているのだが、子供ミュレイを無能呼ばわりしたりもする。

政治面、戦闘面、あらゆる意味においてずば抜けた敏腕姫様であるミュレイの影に隠れて目立たないが、国の運営に一役買っている重要なポストの王子。ミュレイの片腕と呼ばれば判りやすいだろうか。何を考えているのか判らない腹黒い笑顔にはミュレイも色々と気を許していないようだが、実際国の為になる事を率先して行っているので悪い子ではない模様。

シルヴィア・ルナリア・ザルヴァトーレ

【年齢】：26 【性別】：女 【出身】：第四界層プリミドル

【シン】：永魔剣エリシオン

ザルヴァトーレの女王にしてシエルシの姉。世界に七つしか存在しないカテゴリース魔剣の所有者の一人。

先代女王である母が謀反でUG送りになり、間に合わせとして女王に急遽即位した為婚姻の儀を経験しておらず、王としては異例だがハロルドの妻ではない。

よって子供もおらず、未だに前線で剣を振り回している。ミュレイとは古くからのライバルであり、お互いを意識し切磋琢磨しあう友人と認識している。

ミュレイが平和主義に傾倒しているのならばシルヴィアは武力主義であり、国を良くするためならば他の国も世界もどうなるかが構わないという考え方を持っている。それは国王として国民を幸福に導くのは義務だと考えているから。

どんな残酷な事も真つ直ぐに行うその姿はむしろ潔く、ミュレイもそうした意味では認めているようだ。どちらかという政治手腕よりは剣術の方が得意な様子。
常に冷静で堂々としているがどこかズレた部分があり、シエルシにとっては恐ろしい姉としてトラウマを数多く抱えられている。

シグマール・ヴァンシュタール

【年齢】：46 【性別】：男 【出身】：第五階層エル・ギルス

【シン】：透魔剣センチア

帝国騎士団剣誓隊所属。階級は大佐。

へらへらとした不真面目な態度とは裏腹に非常に優秀な魔剣使いであり、今まで数多くの帝国反乱分子を抹殺してきた男。

本来の性格として争いは望まないタイプだが、ある理由から私情を殺して任務に従事している。が、基本的にどうしてもやらなければいけない任務以外は人任せにする為、彼の真の実力を知る者は少ない。

かつては砂の海豚の団長であったロイと共に組織を立ち上げたメンバーの一人であり、リフルやロゼとも面識があったのだがロイを裏切り一度は砂の海豚を壊滅させた裏切り者である。

殆どその頃の事を覚えていないロゼは兎も角、リフルは彼の事を強く恨んでおり、いつか必ず殺してやると心に固く誓っている。

エレット・ノヴァク

【年齢】：18 【性別】：女 【出身】：第三階層ヨツンハイム

【シン】：エクスカリバー清明

帝国騎士団剣誓隊所属。階級は少佐。

非常に生真面目な軍人だが、若干おとぼけで普段からシグマールの世話になっている。プロジェクトエクスカリバーと呼ばれる魔剣の量産計画により見出された次世代魔剣使いの一人であり、探知系能力に優れたエクスカリバー、タイプ“清明”を扱う。

戦闘能力は決して高くはないが、相手の能力を瞬時に見抜く力を持っており、その力は剣誓隊の中でもトップクラスである。が、戦力は通常の騎士とどっこいと言ったところであり、彼女一人だけでは役に立つことはない。逆に言えばベテランと組ませる事が出来ればいかに彼女の戦闘力が低くとも十分役に立つという事でもある。ヨツンヘイム生まれの為、民衆支配システムであるミレニアムの教育を骨の髄まで受けており、帝国至上主義に染まっている。皇帝の為に役立つ事を夢見て今日も精進するのであった。

直、非常にかわいいもの好きでファンシーグッズ集めが趣味である。

ブラッド

【年齢】：35 【性別】：男 【出身】：第五階層エル・ギルス

【シン】：蛇魔剣ヴィヴィオ

ギルド、サーペントヴァイトの団長。通称ボス。しかしお姉様と呼ばないと怒られる。

派手な服装の美男子だが、オネエ口調であり性格もそっち系である。だが黙っていれば美男子である。黙っていれば。

サーペントヴァイトという巨大な反帝国ギルドのボスであり、かつてはヴァン・ノーレッジとも関わりが深かった男。アクティを引き取り、ギルドの一員として鍛えたのも彼である。

かつては砂の海豚のメンバーの一人であったが、シグマールの反乱

より前にロイの支援を受けてギルドを独自に設立した。そのためリフルとは顔なじみである。

非常に面倒見が良く、見た目は落ち着いていないが内面は落ち着いた大人であり、若者達を導く発言をする事もしばしば。そして彼自身も腕利きの魔剣使いである。

メリーベル・テオドランド

【年齢】：30くらい？ 【性別】：女 【出身】：不明 【シン】：なし

ギルドを抱えた総本山であるバテンカイトスを運営する女主人。表の顔は娼館の運営者だが、その実ギルド組合をある意味牛耳るほどの権力者である。

その正体は異世界より独自に渡ってきた旅する錬金術師。かつて一人の勇者を異世界に送り飛ばすという術式を編み出し、それに改良を加え自分をどこにでも飛ばせるようにした、という前人未到の領域へ飛び込みつつある。

直外見は変化していないが、彼女の研究目的である“不老不死”の術の影響であり、自分を実験台にし続けている様子。そのため外見よりも年齢は行っているようだ。

異世界を渡り歩いているのはかつて彼女の死んだ兄が完成させられなかった不老不死の研究を完成させるためだが、それは名目に過ぎずあちこち旅するのが好きなだけなのかもしれない。

神をも殺した救世主の武器を造っただけあり、彼女の作った白神装武は非常に強力な防具である。白騎士の実力の殆どは彼女のお陰とも言える。

かつてはロイとも面識があり、リフルとも仲良し。ヴァンの魔剣ガリリュウの調整を行う一方、ミュレイとは研究仲間と異常に顔が広い。

別名“バテンカイトスの魔女”。

ハロルド

【年齢】：100 【性別】：男？ 【出身】：第二階層ジハード

【シン】：帝魔剣ネイキッド

第三階層ヨツン Heim、そこに君臨するハロルド帝国の黄金皇帝。下層の世界全てを支配し、法を編み、無法さえも己の掌の上に掌握する。その頭脳は最強の演算システムでもある“ミレニウム”と直結され、世界最強の魔剣と呼ばれるネイキッドはあらゆる反乱分子を許さない。

その身体は巨大な機械の装甲に覆われ、文字通りロボットである。声などから中身はオッサンだと思われるのだが、実際の所中身があるのか、そもそも人間なのかどうか不明。今年で百歳になった。全長兜の角含め4メートルという化け物で、ホクトでさえ手も足も出なかつたほど頑丈+超パワーを持つ機械の王。その正体は謎に包まれているが、話して見ると意外と会話は可能な事がわかる。世界全てを見渡すというミレニウムシステムにより世界を統治する王だが、様々な恨みを買う一方神として崇拜されてもいる。ぬううん！

ケルヴィー

【年齢】：30 【性別】：男 【出身】：第三階層ヨツン Heim

【シン】：なし

ヨツン Heim の博士。兵器開発から魔剣開発、古代文明技術の転用、

研究など幅広く活躍する天才である。

ハロルドから信頼が厚く、色々な事を一手に任されているが彼自身がハロルド崇拜者の一人なので別に苦難でもなんでもなく、仕事を押し付けられるのを喜んでいる節がある。

ステラの素体を発掘し、ステラに人格を持たせた張本人。ステラにとっては父親のような存在であり、唯一の家族でもある。ステラを最高傑作と呼び溺愛しているが、基本的に女性としてのステラを愛しているのではなく機械としてのステラを愛している。

女性に興味は持たず、無論男性にもない。機械に愛情を持つという異様な性癖の持ち主なので、ハロルドを崇拜している理由はあまり考えたくない。

真、鬼畜眼鏡である。

シエルシ「滅茶苦茶長くなってビックリしたんだけど……」

昴「こ、こんなにキャラいたんだね……」

シエルシ「まあまだ説明してないのもいるけど、それは追々やるとして……えっと、次は魔剣の紹介ですっ」

昴「(……シエルシ、頑張ってるなあ。本編で目立たないから……)」

〈 蝕魔剣ガリユウ〉

【LV】…???

【所有者】…ホクト(ヴァン・ノーレッジ)

【属性】：闇

謎に包まれたホクトの魔剣。黒い刀身の大剣。片刃。カテゴリS魔剣の一つ。

ホクトの意識とは無関係に勝手に活動するなど、自立性を持つ事が最大の特徴。また基本形状は大剣だが、刀身部分は炎のように揺らいで変形する。

魔力を通す事で刀身を黒い炎が包み込み、更に魔剣の力を解放する事で魔剣そのものの自立性を引き上げ、魔物のような特徴を持たせる事が出来る。

能力的にはパワータイプの系統にあると思われるが、対ハイゼットで見せた速力など、全体的な能力が非常に高く、しかしホクトはそれを仲間に隠したがっている節がある。

魔力強化状態になると、刀身に紅い紋章が浮かび上がる。

魔剣狩りと呼ばれていたヴァン・ノーレッジの剣であり、様々な特殊能力と秘められた力を持つ。それはまだ本編でもすべて明らかにされていない様子。

【術式喰らい】：術式を喰らい、自分自身の能力として扱う能力。その詳細は不明だが、魔剣そのものが構築されていなくともホクトは能力を使用出来る。

【黒炎強化】：黒い炎を纏い、刀身の攻撃力を数倍に一気に引き上げる能力。というより、こちらが本来のガリユウの切れ味と思われる。厳密には炎ではなく影らしい。

【魔剣狩り：放出】：異名と同名の能力。対象の魔剣を奪い、それを自在に出し入れする事が出来る。魔剣を影から射出したり、空から降り注がせたりする。

【黒式武装】：ガリユウの刃を変質させて纏い、黒い鎧とする能力。防御力と身体能力が飛躍的に上昇する。

く翔魔剣ミストラルく

【LV】：120

【所有者】：ステラ

【属性】：雷

記憶喪失へこたれ娘、うさ子の魔剣。剣と言うよりはナツクル。手の甲部分に円形の刃が装備されている。

非常に強度が高い刃が特徴。魔剣による物理攻撃や魔法攻撃も刃で防ぎ、拳で貫く事が出来る。また刃は射出が可能で、魔力で構築されたワイヤーにより任意操作が可能。

また、魔力強化状態で脚部にも同様のリングブレードを装填可能。魔法的な効果は殆ど無いが、スピードとパワーに優れる。特に速さはホクトをも上回るほど。

リング部分は手に持って刃とする事も出来るし、投げたり射出したり蹴ったり、色々と使い道がある。おばかなっていたうさ子とは違い、ステラはその能力を限界まで引き出す事が出来る。

【リングシューター】：ブレード部分を射出する攻撃。そのまま切り離したり、ワイヤーで引いて戻したりとトリッキーな操作が可能。
【ドライブナツクル】：高速回転するブレードごと敵に殴りかかる所謂ドリルナツクル。

【デストロイモード】：ミストラルを全身に纏い、鎧とする能力。すべての能力が飛躍的に上昇し、飛行能力を得る。

【エグゼキューター】：電撃を纏った攻撃を行う能力。魔力の電撃は触れる全てを接触した瞬間消滅させる。

く爪魔剣ハイゼットく

【LV】：58

【所有者】：グラン中佐

【属性】：風

アンダーグラウンドにある帝国騎士団基地の管理者だったグラン中佐の魔剣。ホクトにあっさりやられたのでそうは見えないが、実は中々強い魔剣。

両手の指先に装着された細長い刃が特徴の魔剣。シザーハンズ的な見た目。

これといって複雑な能力は一切存在しないが、非常に速力が上昇する。身体能力強化においては並の魔剣を遙かに上回るほど。

【速度強化】：自身の速度を強化する。が、特に強化していないホクトに敗れた。

く響魔剣グラシアく

【LV】：72

【所有者】：リフル

【属性】：風

砂の海豚唯一の魔剣使いリフルの魔剣。二対の刃からなる剣で、非常に独特な形状をしているのが特徴。

片方の剣は非常に細長く、もう片方の剣は無数の剣が並んだような形をしている。二刀流として扱うシーンがあったが、それが本来の使い方ではないらしい。

元砂の海豚団長でありロゼの父親が使っていた魔剣で、反帝国主義者の中では有名な風の魔剣の一つ。

変形後、楽曲武装として扱うのが正しい戦い方という非常に変わった魔剣である。

【波動】：楽器を奏でる事により、特定のエリアに衝撃を発生させる。

【音波探知】：音を聞き分ける能力が急上昇し、音や空気の反射などで対象の位置や形、何をしようとしているのかを理解する事が出来る。

【鼓舞】：音楽を聞かせる事により、味方の魔力数値を上昇させたり傷を癒したりする、一風変わった特殊能力。

↓炎魔剣ソレイユ↓

【LV】：86

【所有者】：ミュレイ

【属性】：炎

ククラカン王女、ミュレイが持つ魔剣。一見すると短めの剣だが、展開することで扇のように変化する。

単純な物理攻撃に使用するだけならば下位魔剣にも劣る能力だが、魔法を使用する際その発動と能力を強力にサポートする、杖としての力を持つ。

また、王家に代々伝わる剣でもあり、この剣の力によってミュレイは式神と呼ばれる存在を異世界より召喚することが出来る。詳しい仕組みはミュレイも実はわかっていない。

ただ杖としての能力だけではなく、仰ぐことで魔法攻撃を無力化したり、ミュレイ本人を浮かせたりと不思議な事も色々と出来るらしい。

【式神召喚】：契約済の式神を召喚し、一時的にその力を借りる。
【炎魔障壁】：魔法攻撃を炎の結果でキャンセルする。
【マジックブースター】：通常魔法攻撃の威力を強化し、その発動を高速化する。更に消費魔力を極限まで軽減する。

く破魔剣ユウガく

【LV】：88

【所有者】：昴（白騎士）

【属性】：光

ククラカン王女であったミラが持っていた魔剣。魔剣の中では珍しく、鞘に納まった状態で出現するという特徴を持つ。

形状は刀で、その切れ味は全魔剣中最強……というのも、その破魔と呼ばれる能力に依存した切れ味だからであるが。

様々な能力を持ち、魔剣としては最強ランクに君臨する。普段の昴では使いこなす事は出来ないが、白騎士状態でのみ能力をある程度開放する事が出来る。

鞘の方には攻撃を防ぐ盾としての能力が存在し、攻撃に特化した刀側の破魔の力とは異なり防御に特化した破魔の力を持ち合わせている。

【破魔】：魔力により構成される全てを一撃で消失させる。が、対象のレベルにより即死確率は依存する。

【停止】：時間の流れを停止する能力。止められるのはせいぜい秒単位が限度。

【加速】：停止にりよどんだ時の流れに弾かれるように一瞬急加速する能力。これらを駆使し、瞬間移動のように移動する事も可能。

【凍結】：氷を発生させる能力。厳密には停止の能力で固まってし

まった空間であり、氷のように視覚化されているだけである。

〈貴魔剣アルテツァ〉

【LV】：67

【所有者】：イスルギ

【属性】：光

ザルヴァトーレの騎士、イスルギの魔剣。剣ではなく形状は巨大な盾であるが、そこから分離したランスユニットを武装として扱う。ランスも盾も非常に巨大だが火力は高く、対魔物戦闘や防衛戦闘において本領を発揮する。素早く動くのは明らかに無理そうだが、意外とイスルギは器用に立ち回る事が出来る。魔剣としては優秀な類に入るが、イスルギ自身が魔剣の扱いに優れている為かその戦闘力は非常に高い。

【加護】：魔法攻撃や魔力攻撃のダメージを盾で相殺する。また、ダメージを対象に反射する事が出来る。判定は対象の魔力依存。

【ランスパージ】：ランスユニットを分離し持ち変える能力。ランスは同時に一つしか分離出来ないが、いくらでも再生可能。

【真実の槍】：ランスユニットを盾から射出する攻撃。槍、というよりは既に砲撃に近い。一見小回りがきかないように見えるが、物凄い勢いで連射が可能である。

〈墜魔剣バサラ〉

【LV】：70

【所有者】：ゲオルク

【属性】：地

ククラカンの武士、ゲオルクの魔剣。既に剣のほうが珍しいが、剣ではなく槌の形状をしている。

非常に巨大で無骨な外見をしており、性能もまさに見たままという感じである。特殊な能力は備わっておらず、魔剣そのものの質は決して高くはない。

しかし独特の変形機能を持ち、様々な状況において戦闘可能なのが大きな強み。またそもそも単純にゲオルクの筋力と合わせ、破壊力は計り知れない。

【ガードブレイク】：対象の魔力防御を貫通する効果を持つ。

【ブーストストライク】：槌の裏側についているロケットブースターで加速し、威力を上昇させる。

【チェーンギミック】：槌の部分が切り離され、鎖に繋がれ振り回す事が出来る。

↳透魔剣センチア↳

【LV】：60

【所有者】：シグマール

【属性】：氷

剣誓隊のシグマール大佐の魔剣。形状は不明だが、大剣らしいことはわかっている。

目には見えず魔力でも感じ取れない魔剣で、それはシグマール本人にも理解できないものらしい。彼は長年その剣と付き合い、その能力を極めている。

持ち主の気配を消す事も可能であり、主にそれは暗殺において役立

つ。その能力により先代砂の海豚団長、ロイの暗殺に成功したのだ。これといって強力な能力は存在しないが、シグマール自身の技量によって強力な剣と成り得る。

【不可視】：目には見えず、感じる事も出来ない剣。

【視界無視】：所有者の姿、気配をセンチア同様完全に感じ取れなくする能力。が、こちらは時間制限つきである。

↳エクスカリバー 清明↳

【LV】：30

【所有者】：エレット

【属性】：雷

剣誓隊のエレット少佐の魔剣。形状は両手剣。

戦闘能力皆無の情報収集専用の剣だが、情報収集だけならばあらゆる魔剣の中でトップクラスの能力を持つ。

魔剣量産計画により産み落とされた、皇帝の魔剣であるネイキッドをオリジナルとしていたエクスカリバーシリーズの一つ。

【魔力測定】：対象の魔力を推し量る能力。

【能力断定】：一度剣を交えた相手の能力を把握する能力。が、成功率は対象の魔力に依存する。

シエルシ「……と、まあこんな感じで……」

昴「ま、まさか本編更新より時間がかかるとは思わなかったけどね

……」

シエルシ「えーと、えーと……」

昴「作者がもう寝ないとまずいから、今日はここまで」

シエルシ「え？ まだ私全然喋ってないですけど……」

昴「それじゃあまた本編で」

シエルシ「………うわーん」

白騎士(1)

「これはまた……ずいぶんごついのを召喚してしまったのう……」

とても懐かしい声が聞こえた。なんだかとても長い間、その声を聞いていなかったような気がする。そういえばそうか、彼女はすぐ小さくなってしまったから、こんな大人びた声で喋る事はなかったっけ。

光を潜り抜けた先、私はあの始まりの場所に立っていた。ミュレイが式神の召喚を行っている部屋である。ミュレイの自室の隣にあるその部屋の中、私は光を背に彼女を見つめている。ミュレイ・ヨシノ……。私を護って死んだ彼女が今、私の目の前に五体満足で立っていた。

それが本物なのか確かめたくて私はミュレイに手を伸ばした。ミュレイは確かに生きていた……。私を見て怪訝そうに眉を潜めている。そりゃあそうか、今の私は……なるほど、なんとも式神らしい外見だ。

『ミュレイ・ヨシノ……』

「まだわらわは名乗っておらぬはずじゃが……。勝手に名前を知っていると言つ事は結構高位な式神なんじゃろうか。お主、名はなんという?」

『……………』

周囲をきよるきよると見渡した。いや待て、そもそもここはいつの時間軸なんだ? わからない……。ミュレイが大人に戻っているという事は、私がこの世界にやってくるタイミングと同じかそれよ

り前になるはずだが……。

ミュレイの言葉は無視して窓辺に立つ。懐かしいラクヨウの街の姿がそこにはあった。暫く腕を組んで考え込んだ。さていざ時空跳躍をした方がいいが、何から始めるべきか……。振り返り再びミュレイを見やる。ミュレイは私の姿をまじまじと見つめ、首をかしげていた。

「お主……なんなんじゃ？　なんでヨシノの家紋を背負っておる……？　なんだか普通の式神とは随分違うのう……。手順でも間違えたか……？」

『確かに私は普通の式神とは異なるが、その召喚の責は貴方には無い。すべては私が望み、選んだ事だ』

「はっ？」

『……いや、何でも無い。それよりミュレイ、婚姻の儀は……？』

「ぬ？　お主……本当にどういう式神なんじゃ？　まあ、婚姻の儀はまだ一年後じゃが……」

ということは大体十ヶ月ちよつとは時空跳躍に成功した、ということか。想定していたよりもずつとしょぼくて悲しいが、まあ仕方ない。出来ればミラの死んだ瞬間まで戻りたかったのだが……。念のため、確認する。

『ミラ・ヨシノは？』

「……………」

その一言でミュレイの顔つきが変わった。流石に不審すぎたかと思っただが、ミュレイは呆れるように溜息を漏らして首を横に振った。なるほど、既にミラは死んだ後、という事か……。となればやる事は決まってくる。彼女を護り、そして彼女が死ぬ要因となったと考えられる要素はすべて退けるのみ。

ミュレイの前まで歩み寄り、そこで私は跪いた。胸に手を当て、彼女の為に目を閉じ願う。ミュレイ・ヨシノ。私のもとても大切な人。本当の姉のような、私の心を癒してくれる人……。今度こそ護らねばならない。だからここに誓いを立てよう。

『ミュレイ・ヨシノ……。私は貴方を守る為に召喚された救世主。貴方に忠誠を誓い、我が身は貴方の盾となり剣となり、あらゆる困難から貴方を救うと誓おう』

「救世主……。？ 自称……。というだけの事はあるみたいじゃのう。物凄い魔力を感じるし……。これは本当に強い式神を引き当てたか。して、名は？」

『白騎士』

「白騎士……。？ ところでお主、さっきから戻そうとしておるのじやが戻せないのは何でじゃ？」

『私は通常の式神とは異なり、貴方の意思では出し入れが出来ない。説明すると長くなるが……。』

「……。本当に特異な式神のようじゃな……。まあ、良い。なんだかよくわからぬが、わらわの事は既に知っておるようじゃし……。これからよろしく頼むぞ、白騎士」

立ち上がり、彼女の手を取る。優しく、暖かく、美しいミュレイの手……。もうこの手が血に染まる所は見たくない。何としても彼女を護り、そしてこの世界を変えてみせる。救世主と呼ばれるに相応しい存在として、君臨してみせる。

『早速で申し訳ないが、行動に移りたい。時間は余り残されていないからな……』

「行動？ 何をするつもりじゃ？」

『魔剣狩り、ヴァン・ノーレッジを倒す』

きつぱりと断言すると彼女は目を丸くして頭上にクエスチョンマークを乱立させた。まあ、わけがわからないだろう。だがミュレイに全部説明してやるつもりはない。彼女が何もわかっていなくとも、私一人でどうにかすればいいだけのことだ。颯爽と歩き出し、ミュレイの部屋を出る。やるべき事は山積みだ。その全てを、効率的に片付けねばならない。

白騎士（１）

時は遡り、一年前。過去の世界に戻った昴が真っ先に行ったのは情報収集であった。忍であるウサクを頼り、更には自らの足で各地を練り歩き情報を収集した。

ミュレイが死んだのは婚姻の儀である。逆に言えば、それまではある程度の猶予があると考えられた。何しろ昴がこちらの世界にや

つてきたのが彼女の死という因果を引き寄せたのだとすれば、昴が本来やつてくるべき地点までこの世界の因果は彼女を死に導かないはずだからである。

当然それらは昴の憶測に過ぎなかったが、実際この時期ミュレイの周囲に危険は無く、彼女が行く魔物討伐でもミュレイの身に危険が及ぶ事はなかった。昴はミュレイに変わって戦場に向かい、そこで魔物を討伐し続けた。

そうして戦の渦中に身を置く事こそ最も効率的に情報を得る手段だと彼女は考えていた。戦乱ある所に魔剣狩りの姿あり　　というくらいである。当時のヴァン・ノーレッジは最も暴れていて手がつけられない時期であり、街から街へ片っ端から魔剣使いを倒しながら渡り歩いていた。そんな魔剣狩りと昴が接触するのはそう難しい話ではなく、二人の戦いの機会は直ぐにやってきた。

戦場はククラカン国内にあるとある山岳地帯の村　　。その付近の荒野で二人は刃を交えていた。白騎士としての昴、そして魔剣狩りとしてのヴァン・ノーレッジ……二人の最初の邂逅であった。

次々に魔剣を繰り出し昴へと襲い掛かるヴァンであったが、昴はその攻撃を尽くユウガを使って無力化してしまう。そう、昴はヴァンの能力を知っているがヴァンは昴の能力を知らない　　。初戦では昴に圧倒的なアドバンテージがある。昴は長期戦に持ち込むつもりも、婚姻の儀まで戦いを長引かせるつもりもなかった。

メリーベルの作った鎧は魔剣狩りヴァンに対抗するだけの力を昴に与え、二人は対等に刃を交える事に成功した。何度と無く繰り広げられる剣と剣のぶつかり合い……。荒野に衝撃が轟き、刃の音が響き渡る。状況は昴に有利　　だがしかし、そこで予想し得なかった横槍を彼女は受ける事となった。

天に浮かび上がった魔法陣から出現したのは、機械の装甲を身にまとったステラであった。ステラは二人が剣をぶつけ合うその間に割って入り、同時に二つの魔剣の攻撃を受け止めてしまったのである。

「チ　ッ！？　またお前か……ステラ」

「魔剣狩り、ヴァン・ノーレッジ……。やはり貴方でしたか。ところで、貴方は……？」

『そこを退け、ステラ……。私の邪魔をするな』

ヴァンと昴は同時に刃を構えたまま蹴りを放つ。しかしそれをステラは剣から手を離し、両手で受け止める。そのまま手の甲で二人を打ちつけると、大気が軋むような衝撃が走り白と黒の影は左右に大きく吹き飛ばされた。意識が吹っ飛ぶような打撃に昴は舌打ちし、頭を振って剣を構えなおす。そう、彼女の予想外の問題　それは、下層で起こる戦闘に武力介入するこの治安維持システムガーディアン、通称ステラであった。

ステラは全身に電撃を纏い、黄金に輝きながらヴァンと昴をにらみつけた。それから二人を交互に見やり、静かに溜息を漏らす。

「例え貴方達が二人同時に挑んできたとしても、私に勝利する事は不可能です。ヴァン・ノーレッジ、貴方の持つ魔剣ガリユウはカテゴリース……。ハロルドの計画に必要な物です。暴れないで下さい、私は貴方を殺せないのでですから」

「そいつは無理な相談だ……。ケンカを吹っかけてきたのはそっちの白いのだからな」

『私も同感、それは無理な話だ。私はヴァンを殺す為にここに存在している』

「……貴方の魔剣もカテゴリースですか。困りました　。以前カ

テゴリースの魔剣使いを誤認で殺してから、私は嚴重注意を受けています。Sの魔剣使いは殺してはならないと……。どうか手を引いてはもらえませんか？」

それがミラの事を言っているのだというのは昴もヴァンも直ぐに理解出来た。そう、元はといえばこいつがミラを殺したからこんな取り返しのつかない事に。恨みを抱えるヴァンだけではなく昴もやりきれない気持ちになっていた。自然と昴とホクトの刃は同じ方向へと向けられる。

「あくまで私とやり合いますか」

「いずれ必ず殺そうとは思っていた。それが遅いか早いか……。それだけの話だ」

『邪魔をするなら斬る。 。 相手が誰であろうと、な』

「そうですか。残念です。知っていますか？ 人間は手足の一本二本ちぎれたところで生存し続ける事が出来るという事を」

空から雷撃が降り注ぎ、昴がそれをユウガで無力化する。その影からヴァンが飛び出し、ステラへとガリユウを振り下ろした。ステラは片腕でそれを受け止め、反撃に蹴りを放つ。高々と跳ね飛ばされたヴァンが頭上から魔剣を降り注がせるが、それごとステラは片手で雷撃を放ち、ヴァンの身体は黒焦げになり魔剣は一瞬で消滅してしまう。

魔力の量がそもそも違いすぎるのだ。カテゴリースと呼ばれる世界最強クラスの魔剣使いが二人手を組んで立ち向かってもらえる相手にならない。再び連続して放たれる天空からの落雷を昴は鞘で受け弾く。魔法系の攻撃ならばすべて無力化出来るのが昴の剣の

強みである。鞘に収めた状態のままユウガを構えて跳躍し、空中から時を止めて居合いを放つ。

首を一発で跳ね飛ばすような一撃のはずだった。しかし気づけばステラは昴の真後ろに浮いている。何が起きたのか。理解するよりも早く、ステラの蹴りを昴を大地へと減り込ませていた。真実は簡単である。昴は停止した時間の中を動く事が出来るが、超スピードで動けるわけではない。ステラは時を止められはしないが、意識の中に空白が出来たとしてもそれを冷静に処理する思考能力、そして咄嗟に“瞬間移動”する事が出来るというだけの話である。

「無駄な事です。貴方の能力　ミラ・ヨシノの剣のデータはすべて認識しています。大人しく諦めてください」

『く……っ』

大地に減り込んだ昴の頭を踏みつけ、ぎりぎりど圧力をかけるステラ。その背後、龍のような形状に変化したガリュウを構えるヴァンの姿があった。倒れている昴ごと吹き飛ばすように龍の顎から放たれた魔力の炎は一瞬で二つの影を飲み込んだが、ステラは一瞬で消え、ホクトの背後に立っている。そのまま首を掴んでヴァンの巨体を振り上げ、細腕一つで大地へと叩き付けた。一気に大地に亀裂が走り、

炎を浴び、全身に黒い炎を纏いながらも昴はゆっくりと身体を起す。鎧のお陰で魔法攻撃のダメージはたいした事は無かったが、自分ごと攻撃を放ったヴァンを忌々しげに睨み付けた。そうして剣を揮い、大地を凍りつかせながらヴァンごと攻撃を放つ。一気に凍結する大地に巻き込まれたのはやはりヴァンだけで、ステラは余裕の様子で冰山の上に佇んでいた。

『化け物が……！』

「……………。貴方達、真面目に戦うつもりはあるんですか？ さっきから足を引つ張り合ってますが」

「余計なお世話だ……………」

『元々別に協力しているわけではない』

「敵の敵は味方、では？」

「『そんなわけねえだろ』」

二人が同時に睨みあいながら唸った。それを見てステラは頷き、納得した様子である。冰山からふわりと浮き上がり、大地に着地する。ヴァンが氷の中を突き進み、再びガリュウを構える。昴も同様、大地の亀裂を飛び越えてユウガを片手に着地。二人は再びステラへと対峙した。

「…………意地でも戦い続けるつもりですか。理解に苦しみますね」

「生憎、意地だけで生き延びてるようなもんでね」

『貴様はやはり危険だ。私にとっても、私の主にとっても』

「そうですね。では、続きと行きましょう。私も少々面倒になってきましたので、それなりに本気を出させてもらいますが」

ステラが黄金に輝きを増し、一気に攻撃を仕掛けた。昴とヴァンは必死にステラへと立ち向かった…………のだが。

「で……。結局、やられて帰ってきた、と」

ラクヨウ城、城内ミュレイの部屋。ぼろぼろの姿で現れた白騎士は疲れた様子で一部始終を語り、ミュレイの傍に座り込んでいた。あれからヴァンと共にステラに挑み続けたが、結局傷一つつける事も出来ず二人とも撃退されてしまったのである。そのどさくさでヴァンには逃げられ、結局何もかもが無駄足になってしまった。次にヴァンを捉えられるのはいつかと考えると非常に頭が痛い。

そんな落ち込んだ様子の昴にミュレイは歩み寄り、その肩を叩く。差し出されたお茶を手に昴は仮面をずらし、それを口にして溜息を漏らした。

「まあ、そう落ち込むな。お主の目的がヴァンなのはわかっておるが、いくらなんでも焦りすぎじゃ」

『……そうだろうか』

「というか、どうしてお主そんなにヴァンを目の仇にしておるのじゃ……？」

『……それは』

流石に言えるわけがない。“貴方はこれからヴァンに殺されるから”などとは……。まだその可能性があるだけであり、自分が護ればいいだけの事なのかもしれない。だが全てを確実に済ませる為には、不安要素はすべて排除しなければならぬと昴は考えていた。ポロポロの姿のまま、お茶を飲んで一服……。ミュレイは困ったように笑い、昴の頭を撫でた。

「全く、変な式神と契約してしまったもんじゃ」

頭を撫でられている間、白騎士は大人しく座布団の上で正座していた。客観的に見るとすごい光景であるが、元々昴にしてみれば当たり前前の景色である。ふとそこに突然窓からウサクが飛び込んできて、巻物を片手に白騎士を呼びつけた。

「白騎士殿〜！ 新しい情報が入ったでござるよ〜！ って何をしてるのでござるか？」

「な、なんでもない……」

昴は立ち上がり、直ぐに腕を組んで堂々とした態度をとる。つい先ほどまではミュレイに甘えていたのだが、流石にそれをウサクに悟られては大問題である。ミュレイは口に手を当てて笑っていたが、昴は無視して窓から出て城の中庭へと飛び降りた。ウサクも同じようにかるやかに着地し、巻物を昴に手渡す。

「しかし毎回思っていたんだが……巻物って読みにくくないか……？」

「やや!? 白騎士殿、巻物が苦手でござるか!?!」

「そんな寿司みたいな言い方しなくても……。まあ、別に私は読めれば何でも構わないが」

しづしづ巻物を左右に開き、中身を読み進める。ヴァン・ノーレツジのその後の行動と思しき各地での戦闘履歴や帝国、ザルヴァトールの動きなど、様々な事が事細かに記されていた。昴としてはウサクをこきつかってあちこちに行かせるのは心苦しかったのだが、実際の所ミュレイの小間使いのような扱いを受けているよりは全然

生き生きと仕事をしているのは言うまでも無い。

『……………それにしても、各地での帝国の横暴な態度は目に余るな。国境沿いはいつ戦争になってもおかしくない緊張感でピリピリしているし、反帝国組織の無謀な戦闘行為は無関係な下層都市を巻き込んでいるし、一向に治安がよくなる気配もない……………』

昴が時を巻き戻し、世界を冷静に見直した結果わかった事がある。それはこの世界は数え切れない問題を抱え、その全てが相互作用してそれぞれに悪影響を与えているという事である。悪循環は延々と繰り返され、そこから脱する事は誰にとっても容易ではない。

そもそもすべての立場の人間にはそれぞれの立場があり、主張があり、理由がある……………。それを一概に善悪で片付ける事は不可能だし、長い間続いてきたその循環の輪から抜け出すのは容易ではない。巻物を閉じ、それをウサクに返して昴は空を見上げた。

この街だけを知り、この国だけを想い、ただミュレイの傍に居る事だけを考えていた昔とは違う。今はこの世界全体の動きを見て考え、そして行動しなければならぬ。ヴァンの行くところには横暴な帝国軍があり、悪人のギルドがあり、それらを叩き潰しヴァンは活動していた。そうやってヴァンの事を知れば知るほど、少しずつ心苦しい気持ち湧き上がってくるのだ。

ヴァンを倒す事ですべてが解決するわけではない。だがヴァンは深く憎しみに囚われ、既に他人の言葉に耳を貸すような状態ではないのだ。だからこそあの日、説得に失敗してヴァンはミュレイを殺す事となった。武力でしか止める事が出来ないのならばそうする事になんの迷いもない。だが、本当に戦う以外に道はないのだろうか……………。

『いつもすまない、ウサク。感謝している』

「いやあ、拙者どうせ暇な忍なので問題ないでござるよ。姫様は拙者に忍の仕事なんて全然させてくれないでござるし……」

『それは、ウサクに危険な事をやらせたくないからだろう。ミュレイが君を大事に想っている証拠だ』

当たり前のように口から出たその言葉にウサクは驚いていたし、私も驚いていた。そうだ、ミュレイは何でも自分で抱え込み、失う事を恐れている。私と彼女は良く似ているのかもしれない。ふとそんな事を考えた。

「白騎士殿は、姫様の事をよく見ているのでござる」

『そうだろうか……？』

「白騎士殿の行動からは、姫様に対する思いやりが強く感じ取れるのでござるよ。だからこそ、拙者もこうして手を貸しているのでござる」

ウサクは胸に手を当てそう語った。一瞬かつて彼と共に過ごした頃の事を思い出した。ウサクは過去の世界に行ったら自分を頼れと言っていたのだが、昴は事情を語ることはしなかった。ウサクには当然手を貸してもらっているが、この歪んだ事情に巻き込んでしまふのは気が引けたのである。

何はともあれ、また振り出しに戻ってしまった。溜息を漏らし、肩を落とす昴。鎧を着て仮面をつけていれば気持ちを強く持てるのだが、それでも落ち込むときは落ち込んでしまう。ミュレイの言うとおり、焦りすぎなのだろうか……そんな考えが脳裏を過ぎった。

ククラカンの国土は雄大で、荒野は果てしなく山々は雄雄しく聳え立つ。空は青く、その頭上には上の界層が彼方に見えている。

この上には帝国 第三階層ヨツンヘイムがあり、それが本当の意味での空を消してしまっているのだ。それがなんだか、とてももつたないことのような気がした。

世界は美しく、そして残酷だ。良くも悪くもこの世は移ろい続けている。甲冑に包まれたその手をじっと見つめ、昴は目を細めた。自分出来る事……それを考えねばならない。闘う事だけがすべてだとは、やはり考えたくはなかったから。

「そういえば白騎士殿は、その仮面は普段外さないのをござるか？」

『え？ いや、これは……外すと色々と問題があるからな』

「そ、そうなのでござるか……。何となく見ていて食事の時なんか不便そうだったのでちょっと気になったただけでござるが」

『確かに不便だな……。うーん……。まあ、いいか、別に』

一人で納得した様子で頷き、昴は徐に仮面を外した、黒髪を振り、久しぶりに息苦しさから開放される。長く伸びた前髪の向こう、除く優しく凜とした瞳がウサクを見つめていた。

「ぬおおっ！？ 白騎士殿、女性だったのでござるか！？」

「……。いや、声でわかるだろ流石に……」

仮面そのものに視力矯正の能力がついている為仮面をつけているときは不便しないのだが、それを外すと視界がぼやける。昴は徐に眼鏡を取り出し、それをかけてウサクをもう一度見つめた。

「なんだか久しぶりにウサクの顔を見た気がするな……」

「了解する？」

「いや、こつちの話　つと、とりあえず暇な間は少しでも腕を上げないと……。ゲオルクに組み手を頼みに行くか……」

腕を組んで今後の予定を考える昴。ふとウサクを見やると、少年は顔を紅くしてまじまじと昴を見つめていた。小首をかしげ、昴は振り返る。

「どうかした？」

「い、いや……。まさかあの仮面の中身がこんなお美しいお方だとは思わなかったので、拙者ビックリしてござるよ……」

「お美しいって……ウサクそんな事一言も言ってなかったぞ……」

「？」

「いや、なんでもない……。まあ、城内くらいでは仮面は外してようかな……。これ息苦しいし、ウサクの言つとおり食事の時不便だし。それじゃ、またよろしくね」

「了解で了解する……」

何故か敬礼するウサク。昴は苦笑し、中庭を歩いていく。風の中、黒髪を靡かせふと桜の木へと目を向ける昴。その美しい様子にウサクは見惚れ、暫くの間立ち尽くしていた。それから自分の頭を壁に叩きつけ、血を流しながら拳を握り締める。

「心頭滅却でござる！　ぬおおおつ！！！！！」

何故か絶叫しているウサクを窓辺に座り、ミュレイは見下ろしていた。仮面の下が少女である事はミュレイは気づいていたのだが……その横顔を見て思う事があった。強く気高く、しかし寂しげな瞳。その理由を気にするなというほうが難しい話だろう。姫は一人扇子を片手に桜の咲き誇る中庭を見下ろす。空は今日も、雄大に広がっている。彼方をふさがれ、最果てを有したままで……。

白騎士(1)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

いや、マジでごめんね………

アクティ「ばかあーっ!!」

ホクト「おつふ!? なんで殴られたんだ俺は……」

アクティ「キャラ紹介の所見てよ!! なんかおかしくない!？」

ホクト「……キャラ紹介だあ? そんなもん読み飛ばしたが……」

シエルシ「……どうしようもないですね。えーと、おかしい所ですか? 私の紹介がおかしいですけど……ふふ、ふふふふふっ」

昴「あ……判った」

ホクト「何だ?」

昴「アクティの紹介、なくない?」

全員「……あ」「」

アクティ「なんでボクだけないの!? おかしくないっ!？」

昴「作者が忘れたんでしょ、素で……」

ホクト「皇帝とかいらんものを紹介しているからだろ……」

ハロルド『いらんものとは失礼な……。この小説の貴重な口ボ要素であるぞ』

ホクト「お前……言っとくけどここに登場するようになったら急に本編でのシリアスさ激減すっからな……」

アクティ「皇帝なんかどーでもいいよっ!! どういうことなのこれ! どういうことなのこれっ!!」

シエルシ「(完全に忘れ去られているよりは大分マシでしょうか……)」

アクティ「うわーん、最悪だよーっ!! 次のキャラ紹介までまた二十部くらいあるんじゃないのっ!?!」

ホクト「……。まあ、気にするなよアクティ。世の中大事なものは紹介されてるかどうかわからない。覚えて貰えるかどうかだ」

アクティ「……だから、忘れられてんじゃないっ!?!」

昴「というわけで、作者が本気で忘れていたのです。あれ? と思っただ方々……すみませんでした」

アクティ「今から追加すればいいだけなんじゃないの……?」

ホクト「ははは、そんなめんどくせえこと今更すると思っか?」

アクティ「最悪だよおおおおっ!! あああああっ!!」

白騎士(2)

『剣誓隊の魔剣狩り討伐ミッション……？』

「そう、魔剣狩り。君は確か、魔剣狩りに執着していただろう？
丁度いい機会だと思うけど」

魔剣狩り、ヴァン・ノーレッジに帝国が手を焼いている理由は明らか……。それは、ヴァンを殺す事が出来ないからである。

元々ヴァンを殺すだけならばステラ一人でも事足りるだろう。それに剣誓隊にはカテゴリースではなくとも、歴戦の魔剣使いたちが揃っている。そこらのチンピラ同然の魔剣使いならば兎も角、剣誓隊に見初められた一部のエリートたちはヴァン相手だとしても善戦するだろう。それが何人もいるのだから、ヴァンを倒すのは不可能な事ではない。

では何故帝国はそれを放置しているのか？ 答えはヴァンを殺せないから……。カテゴリースと呼ばれる魔剣使いは、この世界に七人しか存在しない。その中の一人であるヴァンは絶対に帝国にとつて殺せない人材なのである。

炎魔剣ソレイユを持つミュレイ。永魔剣エリシオンのシルヴィア。皇帝ハロルドの持つ帝魔剣ネイキッド、ステラの翔魔剣ミストラル……。そして昴の破魔剣ユウガ、ヴァンの蝕魔剣ガリュウ。今のところこの六名がカテゴリースとして活動している。七人目がどんな人物なのかは兎も角、今はこの六名の保護が最優先事項なのである。

かつて、過去にステラは魔剣回収に失敗し、ミラ・ヨシノを誤って殺害している。それにより究極の魔剣の一つ、ユウガは消滅の危機にあつたのだ。それは偶然能力により形として残り昴に継承され

だが、同じような事があつては困るのである。特にヴァンのガリユウはレアリテイの高い存在……。帝国としては絶対に失いたくない魔剣の一つである。

「彼の魔剣は他の魔剣を収集する能力がある。逆に言えば、あの魔剣さえ手に入つてしまえばすべての魔剣を一つに纏めるのは容易……。つまり、他のカテゴリーSから魔剣を奪う事も可能になる」

『逆に言えば、ガリユウを失う事は彼が取り込んでいる数え切れない魔剣すべての消失、そして今後の活動の難しさを意味しているわけか』

「だから帝国は、特にガリユウの扱いについては慎重にならざるを得ない。しかも厄介な事に彼はミラの一件で帝国を強力に敵対視しているわけで……」

『……………。成る程、大暴れして手がつけられなくなると殺す事も出来ないし止める事も出来ない、厄介な存在になるわけだ』

先日のステラとの戦い、そしてその後の不自然なステラの撤退とヴァンの見逃し。そういう理由ならば納得できる。なんだかんだでヴァンは帝国の檻の中、虎視眈々と命を狙われる存在なのだ。ステラはその気になればヴァンを殺せるだろう。だが、そうすることは出来ない……。

『しかし、帝国は魔剣を集めてどうするつもりなんだ？ 剣誓隊はただの治安維持の為の組織じゃなかったのか？』

仮面をつけた白騎士、昴の前にはククラカンの王子タケルの姿があった。今回の話を持ち込んだのはタケルであり、王子は自室の椅

子の上に座って白騎士に微笑みかけている。

帝国からの要請があつたのはつい先日のものである。ミラの継承者を発見したステラがそれを帝国に報告しないはずもなく、白騎士の存在は帝国に知れ渡る事となった。そして白騎士とヴァンが敵対している事をいい事に、帝国側は白騎士にヴァン討伐の協力を依頼してきたのである。

当然見返りは数多く、それは引き受けるに値するほどのものだった。白騎士本人にとっては得な事はなかったが、国に対する技術支援や物資補給の追加など、それだけでククラカンは一気に潤う事が予想される。その信頼を勝ち取る為にヴァンを討てというのなら、妥当な取引と言えるだろう。

問題は剣誓隊が何故ヴァンを倒したがつているのか、その理由である。そもそも具体的にどうやってヴァンを倒すのか……。疑問はつきなかつたが、その中の答えの一つをタケルは持ち合わせていた。立ち上がり、窓辺に移動して微笑む。

「帝国が剣誓隊を組織したのは、有力な魔剣使いを自分達の手に置いて管理する為だよ」

『魔剣使いを、管理……？』

「帝国は魔剣を集めたがつてる。理由は判らないけどね。まあつまり、剣誓隊の最終目的はすべてのカテゴリーS魔剣の収集にあるって事さ。ヴァンの魔剣はその為に非常に役に立つ」

『……………。ヴァン討伐に手を貸せば、私も放置されなくなるか』

それは当然の事である。現在S魔剣の所有者であるミュレイヤシルヴィアは、その戦闘力もあるが国として高いポジションにあるのが回収にとっての問題なのだ。王やら姫やらとなれば、それは国家

間戦争にさえ発展する恐れがある。王家に代々伝わる魔剣を寄こせ
というのだから、それなりの反応は覚悟するべきだろう。

国同士の衝突になった場合、そして世界同士の戦争になった場合
……。この世界の被害はどれほどのものになるのか見当もつかない。
その最中、ミュレイもシルヴィアも命を奪われるかもしれないのだ。
ガリユウはそう出来る力を持ち、そしてガリユウは帝国支配の象徴
とも成り得る剣なのだ。

魔剣使いは国の権力、そして闘争の抑止力になる。それを無限に
収集出来る怪物が帝国に渡ってしまったら、帝国支配による世界構
造は磐石となるだろう。昴は迷っていた。ヴァンを倒す事……。それ
は本当に平和に繋がるのだろうか。

勿論、ヴァンを倒す事は必要だと考えている。彼はミュレイを恨
んでも居るし、シルヴィアも殺すかもしれない。世界のトップポジ
ションにいる人間をあつさり殺されては堪った物ではないが、彼な
らやりかねないので冗談どころでは済まない。何よりミュレイを護
る上でヴァンの存在は危険すぎるのだ。

だがそれでヴァンを殺せば、帝国は確実に動くだろう。ヴァンは
良くも悪くもこの世界にとっての拮抗を保つわずらわしい要素なの
だ。それが排除されれば、歴史そのものが動く。未来に何が起
こるかは判らないが、それでまた新しい要素が加わりミュレイに死
が迫るのでは？ 考えれば考えるほど恐ろしく、身体が動かなくな
る。

昴の介入により運命が捻じ曲がり、ミュレイは死んだ。ヴァンは
手をかけた張本人だが、元を正せば昴の介入がミュレイを殺したの
である。これ以上世界に干渉すべきなのか……。迷う白騎士に歩み
寄り、タケルは微笑んだ。

「まあ、これは君の自由だからね。姉上と良く相談して決めるとい
よ」

『……………ああ。タケル、ありがとう。少し検討してみるよ』

「期限は三日らしいから急いでね。それじゃ、僕はまだ仕事があるから」

タケルはそのまま部屋を後にし、昴だけがその場に残された。騎士は静かに溜息を漏らし、腕を組んで考え込む。自分がどうする事が最も正しく……………いや、正しい事に近いのか。そして、迷わず一步を踏み出した。迷っていた所で、状況が進展する事など有り得ないのだから。

白騎士（2）

プリミドールの中心部に存在するシャフト内部、昇降用大型エレベータ……………。その内部に立ち、壁に背を預け腕を組む白騎士の姿があった。無言で顔を反らし、透明な壁の向こうに広がる荒野と草原を見下ろす。

結局昴はミュレイには何も告げず、一人でそのミッションを引き受ける事にした。ウサクにはこっそりと話をつけ、自分の代わりにミュレイを護るようにと頼んである。それが現実ではないにせよ、これでヴァン・ノーレッジの討伐、そして剣誓隊とのパイプが出来るかもしれない。それはこの世界を変える上で昴にとって大切な物だ。

突然、エレベータの中にステラがふわりと舞い降りた。纏う転送の魔法陣が消失し、ステラは足音を立てて着地する。武装状態を解除し、白いつさぎの耳をばたばたと上下させながら白騎士へと歩み

寄った。感情の籠らない無機質な瞳……。昴は好きになれそうもなかった。

「ようこそ、白騎士。貴方の協力に感謝します」

『……ヴァンを倒す為だ。それ以上でも以下でもない』

「そうですか。理由はどうでもいい事です、特に問わずとの指示ですから」

ステラは昴と同じように壁際に立つ。エレベータ内部の壁は殆どが透明な素材で構築されているため、まるで空に浮いているかのような錯覚を覚えた。高い所は苦手だった昴は仮面の下でぎゅゅと目をつぶっていたのだが、それがステラにわかるはずもない。

「それにしても、いくつか疑問が残るのですが、質問しても良いですか？」

『何だ……手短に頼む』

「手短？ まだ、ヨツン Heim まで時間は結構ありますよ」

『マジ……？ じゃない、本当か……？ まあいい、なんだ？』

「貴方の持つ魔剣ユウガは確かミラ・ヨシノが死亡した時に消失したはず。貴方はもしか、ミラ・ヨシノですか？」

『残念ながら私はミラではない。ミラの遺志を継いだだけだ』

「……。良く判りませんが、ミラと同一人物ではないという事

だけ理解しました」

そう呟くステラの横顔は何故か寂しそうだ。普段の感情を一切表に出さない彼女の表情とは異なり、まるで人間のようだが、繰り返すが昴は高い所が苦手である。必死に目をつぶっている。その様子はわからなかった。

ほぼ無言のまま時間が過ぎ、エレベータが停止する振動で昴は背筋を震わせ目を開いた。周囲の景色はすっかり切り替わり、ターミナルの見慣れた景色が広がっている。基本的にターミナルの構造はどの界層でも同じなので、迷わず出る事が出来た。

ターミナルの外には巨大な機械の都市が広がっていた。第三階層ヨツンヘイムは全てが精密なる構造に支配された都市である。界層の大陸全土が機械によって埋め尽くされ、その様相は三階層以下とは大きく異なっている。異様な景色に足を止める昴……しかしステラは地上から僅かに浮いたまま、ふわふわと先に行く。

「案内します。こちらです」

『あ、ああ』

エレベータの中に居た時からずっと思っていたことなのだが、転移魔法でどこにでも行けるのなら自分もそれで連れて行って欲しかった。しかしそんな昴の願いとは裏腹に、ステラはふわふわと先を進んでいく。

仕方なく歩き出す昴。帝都レコンキスタ内部は無数の転送魔法装置によって縦横無尽に繋がっており、インフェル・ノアへもその魔法陣を使って移動する。いくつかのポイントを経由し、ターミナルから遙か彼方に見えたインフェル・ノアへとあつという間に到着し、昴は驚いた様子で周囲を見渡した。

「ぼーっとしていないでついてきてください」

『……判ってる』

相変わらず愛想のないステラに少々苛立ちつつも後に続く。城内は帝国騎士が闊歩し、掃除用のロボットが床を綺麗にしていた。四界層から来た昴が驚かないはずがなかったのだ。第三界層は、その文明レベルがあまりにも違いすぎる。

案内されたのはインフェル・ノア内に存在する剣誓隊に与えられたエリアで、居住区であると同時に訓練施設や研究施設が併設された場所だった。その巨大な作戦会議室には既に昴以外の剣誓隊が揃っており、魔剣使いたちがずらりと整列していた。その彼らを取り囲むように中心に存在しているのは円卓で、そこには更に剣誓隊の中でも腕利きの上位階級の騎士たちが座っている。

「ケルヴィー、白騎士を連れて来ました」

「すみませんねえ、こんなお使いさせちゃって……。でもステラ以外にカテゴリースを安全にここまで誘導出来る人っていませんからしょうがないんですよ」

「気にしないで下さい」

「流石は僕の最高傑作、いい子ですなえ〜！！　つと、それはさておき……貴方が噂の白騎士ですか」

隊列が開き、白騎士は円卓の前に出る。一人だけ白衣を羽織った姿で立っているケルヴィーが眼鏡を輝かせ、パチパチと手を叩く。それが拍手だと気づくのに白騎士は少し時間がかかった。

「いやあ、君の存在は実に我々にとって好都合ですよ。ククラカンに報酬はきっちり支払いますから、是非活躍してくださいねえ」

白騎士は無言だった。ただ腕を組み、ケルヴィーを見やる。余りにもあからさまなうさんくささに話をする気も起きなかった。しかしケルヴィーも別にそんな白騎士の態度を気にはしなかった。価値観のずれている彼にとって、白騎士に無視される事は別に興味の無いことである。

「それじゃあ一応剣誓隊のメンバーを紹介しましょうか。こちらにいる四名が、一応剣誓隊の中でも上位の階級となります」

円卓を囲んでいる四人。ざっと眺めてみる。巨体……というよりは口ポットにしか見えない騎士。どう見ても小さい子供にしかみえない少女。優しく微笑んでいる優男……。そして真面目そうな顔つきの、通常とは異なる鎧の騎士。なんだかなんともいえない組み合わせだった。特に小さい女の子は明らかに浮いてしまっている。

「ざつと紹介しましょう。あの機械鎧の男がビックホーン中将。こちらの少女はルキア少将。あちらでオドオドしているのはジェミニ少将。で、奥のが剣誓隊の元締め、団長オデッセイ大将です」

「……四天王かよ」

ボソッと呟く昴。しかしその声は誰にも届かなかった。それから昴も円卓に着き、漸く作戦会議が始まる。見知らぬ人々に囲まれ若干寂しい昴ではあったが、贅沢は言っていられない。

魔剣狩りヴァンを倒す作戦、その中核を担うのが自分だと知った時昴は驚いた。だが説明を聞けば聞くほど何故帝国がヴァンを倒せなかったのか、そしてヴァンを倒す役目が自分に与えられたのかを

理解する。

「えー、単刀直入に説明しますと……。ヴァン・ノーレッジは不死身です」

『はっ？』

思わず素っ頓狂な声を上げてしまう昴。しかし他の剣誓隊にとっては当たり前の情報なのか、まるで微動だにする事はなかった。

ヴァン・ノーレッジが不死身である理由。それは彼が既にガリユウと一体化を果たしてしまっているという点にある。通常魔剣とは身体に刻んだ術式を経由し、内在魔力を顕現化する事で召喚される。だが彼の場合はその仕組みが通常とは異なるのである。

ガリユウは無差別に命と剣を取り込む化け物染みた剣である。その暴力性は魔剣の中で追隨を許さない。ガリユウはしかも取り込んだ情報を再現したり改変したりする能力を備えている。それが何を意味するのかと言えば、ガリユウは取り込んだ物を内部に保存しておく事が出来るという事である。

「この事実が彼を不死身にしているのです。まあ、実際殺す気になれば殺せるのですが……」

ヴァン・ノーレッジの体内には、無数の命の情報が保存されているのだ。ヴァンは人間を丸々一人再構成する事さえも容易い。彼は肉体が損失したとしても、そこに保存している命をあてがう事で一瞬で再生する事が出来る。つまり、殺した数だけ死なくなるのである。

他人の肉体の構成をガリユウは書き換え、主が死ぬ事を絶対に許さない。例えば脳が飛び散ろうとも心臓が消滅しようとも、ヴァン・ノーレッジという肉体のデータを記録しているガリユウが全自動で

ヴァンを蘇生するのである。理論上、ヴァンを殺す事は絶対に不可能。なにせ全く身体のすべてが完全に消滅した所で、ガリユウがゼロから主を再現するからである。

『 そんなふざけた事があるのか……ッ!?! 』

思わず立ち上がり、前のめりになる昴。そうなるのも無理の無い話であった。だがしかしそうでなければ彼が伝説的な反帝国思想の魔剣使いとして語り継がれる事はないだろう。ミラは死んでもヴァンは生きていくという事の意味。昴は仮面の下、瞳を揺らしていた。

「厄介なのは、それがヴァンの意識が無くともガリユウが勝手にやると言う所にあります。つまり、ヴァンの脳をふつとばし思考不能な状態にしても、魔剣がオートで蘇生するのです」

『 記憶はどうなる!? 意識は再生するのか!?! 』

「それは若干宗教的な話になってきますが……我々は一つの仮説を立てています。ヴァン・ノーレッジの記憶、そして存在のすべては彼本人が記録しているのではなく、彼の観測者であるガリユウが記録しているのではないか、という事です」

つまり、ホクトが見聞きした事、体験した事はすべてガリユウが記憶しており、ガリユウはホクトという人間の情報全てを把握している。故に寸分の狂いも無く人間を再生する事が出来るのではないか、という事である。その再生能力を以ってこそ、彼は化け物であり最強なのである。

「つまりヴァンを倒す為には、ヴァンを倒した状態でなおかつガリ

ユウを封じる必要があるのです。そこで役立つのが貴方の持つ剣です」

破魔と凍結の能力を持つユウガは正にガリユウを倒す為だけに存在するかのような特化型の魔剣である。その刃で切り裂けばヴァンの肉体と同時にその構成情報を断ち切り、再生を遅らせる事が出来る。そして凍結を発動し術式そのものを凍りつかせてしまえばガリユウさえも停止させる事が出来るかもしれない。

勿論、ユウガとガリユウがそうして戦った事は一度もないので保障はなにもない。だが、最もガリユウを止められる可能性が高いのが昴のユウガなのである。そう考えれば彼らが昴を招待した理由も明白だ。

「しかも今回、我々は何とかガリユウを回収したいと考えています。故に貴方にはユウガでヴァン・ノーレッジという人間の構成情報のみを斬り殺して欲しいのですよ」

『……………随分と滅茶苦茶な依頼だな』

「ですがそれでガリユウは沈黙するはずですよ。なんだかんだ言ってもガリユウの主はヴァン・ノーレッジ一人ですからね」

確かに　ユウガならばそれが可能かもしれない。術式だけを斬る　そんな器用な事も可能だろう。しかしヴァン・ノーレッジの情報だけを殺すとすると、一体どうするのか……………。

「簡単ですよ。恐らくガリユウはヴァンの再生に“烙印”を使っているのです」

『烙印　？』

烙印とは、ミレニアムにより提唱された人間の記録監視の為のシステムの一つである。生まれたばかりの赤ん坊の身体の一部に監視用の術式を仕込むのである。烙印は身体を通して脳と直結しており、本来脳が記憶するすべての情報を最適化処理を行い、ある程度編纂して記録する事が出来る。

つまり、烙印にはその人間が経験してきた情報の殆どがわかりやすく、そして簡潔に記録されているのである。烙印は生きた年数に応じて徐々に巨大化していくが、それは烙印が生きた術式であり徐々に保存領域を増やしているという証拠でもあるのだ。

ヴァンという人間の記憶、情報をガリユウは直接取り込む事は出来ないだろう。既に喰らって情報化してしまったほかの術式や命とは違い、ヴァンはまだ生きていて物理的に肉体も存在しているからだ。つまりガリユウは何かを仲介してヴァンの状態を保存しているという事になる。となれば、最も考えられる可能性として有力なのが烙印を経由してヴァンを理解しているという可能性である。

「つまり、記憶装置そのものである烙印とガリユウは繋がっていて、烙印システムを応用して彼は不死身になっているのではないか、ということですね」

『……………。あるのか……………そんなふざけた話……………』

「あるんでしょうね……………。非常に興味深いです。そして烙印は基本的に絶対に消せません。烙印が浮かんでいる部分の肉を削ぎ落としたりしても別のところに必ず現れます」

『つまり、烙印を物理的に破壊する事は不可能……………』

「そこで貴方の術式殺しの能力ですよ。貴方のユウガならば、一瞬

で烙印を破壊　　！　　そうすればヴァンは不死身ではなくなるので
す」

『あとはステラなり剣誓隊なりでもどうとでもなる、ということか
……』

「理解が早くて助かります。というわけで、引き受けていただけま
すね？」

疲れた様子でふらふらと昴は椅子の上に腰を下ろした。自分がど
れだけ化け物染みた相手を倒そうとしていたのかを痛感する。恐ら
くこの話を聞かなかつたら永遠にヴァンと戦い続けていたことだろ
う。もう迷ったりしている暇がないのは明らかだった。これは確実
にヴァンをしとめる、恐らく最初で最後のチャンス。

『……判った。引き受けよう……』

唸るようなその声にケルヴィーは微笑み眼鏡を輝かせた。仮面の
下、昴は完全に動揺していた。否、それは戦慄か。ヴァン・ノ
ーレッジ……魔剣狩り。まともに倒せるような相手ではなかった。
ならば、自分出来る事をすべて出し切るのみ……。

仲間とは呼べずとも帝国を利用するまで。だが、同時にこれはヴ
ァンの消滅を意味している。この世界がどう動くのか、それは昴に
は判らない。だがいくらなんでもヴァンは危険すぎる。最早人間で
すらない。情報化された、魔力の怪物なのだから……。

作戦の詳しい段取りの説明が始まっても昴は中々それに集中する
事が出来なかった。牢屋の中、ヴァンと話したことを今でも覚えて
いる。あのインフェル・ノアの装甲版の上で戦った時の事を覚えて
いる。彼は一体何故そんな風になってしまったのだろうか。何故そ
んなにも、身体を化け物に変えてまで戦い続けるのだろうか。消し

去ったはずの迷いにも似た思考のノイズ……。それが胸の中で燻っている事を、彼女は認めたくなかった。

白騎士(3)

「ヴァンと直接対決するのは、私と貴方の二名になります。他の剣誓隊は周囲の包囲と援護が主な任務です」

『あの四天王……將軍たちは戦わないのか？』

「貴方と私でヴァンの再生能力を無力化した後、四名投入で彼を抹殺します」

第四界層プリミドル上空、ステラと白騎士を乗せた飛空艇が空を待っていた。荒野に移りこんだその影を見下ろし、昴は仮面の下ですつと冷や汗を流し続けていた。昴は過去の出来事がトラウマとなり、高所からの景色が本当に苦手だったのである。しかしステラはそんな事に気づく心配すらない。

ステラは既に戦闘形態^{デストロイモード}を展開し、機械の翼と鎧を纏っている。一方隣で白騎士は必死に格納庫の手すりにしがみ付いていた。怪訝そうに首をかしげるステラを恨めしく思いながらも昴は心を落ち着かせようと必死に声も無く祈り続けていた。

魔剣狩り討伐作戦が開始されたのは昴がインフェル・ノアに入ってから数日後の事である。ヴァンは相変わらずプリミドル内を移動していたのだが、その情報をキャッチし剣誓隊は昨日から既に包囲と攻撃を続けており、廃村が一つ戦場となっていた。上空からステラはそれを見下ろし、静かに目を細める。昴は泣き出しそうになりながらステラにすがり付いてそつと下を見下ろした。

『転送魔法であそこまで行けないのか……？』

「いけないことはないですが、私以外は登録されていないので不可

能です。先行しましょうか？」

『いや、居てくれここにっ！！』

「はあ……。ところで何故先ほどから私にくっついていてののでしょうか」

『……細かい事は気にするな。それでこれからどうするんだ？』

「ここから降下し、魔剣狩りを襲撃します。準備はいいですか？」

『へっ。』

きよとんと聞き返す昴の背後、ハッチが開き暴風がなだれ込んでくる。風の中髪を靡かせ昴は青い顔をして微笑んでいた。もう何がどうなっているのかわからない。

「ではお先に」

一人、先に飛空艇から飛び降りるステラ。それを見送り昴は眼下に広がる荒野を見つめた。高所恐怖症　だがそんな事は言っていない。ごくりと生唾を飲み込み、その手の中にユウガを召喚する。

己に言い聞かせる。今の自分は北条昴ではない。ミュレイを護る為にだけ存在する白騎士なのだ。荒く呼吸を繰り返して、その三度目の吐息の後に騎士は空へと踏み出した。長い髪が風で舞い上がる中、足場を失い直撃する重力の中にさらされ、昴は回転し、鞘に、柄に、手を伸ばし握り締める。高鳴る鼓動の音は風を切る音に紛らせてしまえばいい。深く息を着き、音にならない声で咳く。

今は亡き一人の姫の願いを背負い、紅き焔の魂を継承する。
白き甲冑は光を弾いて眩く輝く。堕ちて行く　光の中で。荒野は
見る見る近づいてくる。その最中、戦っている男の姿が一つ。黒い
剣士は空を見やり、猛スピードで落下している昴に反応した。
闇の騎士は足元の影より魔剣を無数に召喚　。まるでミサイル
を迎撃するかのように一斉に射出する。空中から飛来する白騎士は
刃を抜き、次々と突っ込んでくる魔剣を切り裂いて堕ちて行く。足
場に氷の道を尽くり、ブーツの先を安定させる。氷の道は見る見る
内に構築され、その上をぐんぐん加速しながら白騎士は突っ込んで
いく。

『ヴァン・ノーレッジ……ッ!』

強風の中、氷のレーンを滑り跳ね、空中を猛スピードで吹っ飛び
ながら刃を揮う。ヴァンと交差したその刹那、二人は互いの魔剣を
衝突させた。そのまま吹っ飛んでいく昴は空中で制動し、荒野の上
に靴を擦り付け着地する。猛然と突っ込んできた昴の一撃でヴァン
の持っていた剣は砕け、男はそれを放り捨てて振り返る。

「……またお前か。登場が派手すぎだろ」

『それは私の意志ではない……ッ！　不可抗力だ!』

「そ、そうか……。で？　ケリをつけにきたってわけか？　すつか
り帝国の一員じゃねえか」

ヴァンは両手に剣を構築し、二対の刃を打ち鳴らし構えた。白騎
士は刀を鞘に収め、静かに呼吸を正す。魔剣狩りヴァン　。不死
身の男、百人斬り、黒騎士、人類最強　。あらゆる無敵の称号を
掌握する人の形をした怪物。それを前に昴は精神を研ぎ澄ます。

今回は昴一人で挑むわけではない。当然それを卑怯だと考えない事もない。だが目的はすべての手段を凌駕する。鞆に収めたままのユウガに魔力を込める。ヴァンを挟んで昴の反対側、そこには武装状態のステラが待機していた。

「二対一、か……。まあいい、多勢に無勢は普段通り。いつも俺は一人だからな。一人で十分だ」

「魔剣狩りヴァン・ノーレッジ……貴方の存在を抹殺します」

「……これで最後だ、魔剣狩り。我が剣に誓って貴様を討つ！」

左右から同時に白いシルエットが襲い掛かる。ヴァンは一瞬で全身をガリユウの影で包み込み、鎧を構築して完全武装化する。ステラの蹴りがヴァンの持つ魔剣と衝突し、ヴァンはそれを防御すると同時にその場で横回転。ステラの脇腹を打ったのはヴァンの腰から伸びている剣で出来た尻尾であった。それがステラの身体に減り込み、脇腹を切り裂いている。

吹っ飛ばされたステラを追い魔剣が影から剣山のように無数に出現する。それを全身から放出する魔力のバーストで弾き飛ばし、ステラは両手のミストラルを回転させる。指先一つで落雷を起し、その雷の雨の中ヴァンは大地に魔法陣を浮かべて防御の姿勢を取った。

「無駄だ。魔法攻撃で俺に勝てると思わないほうがいい」

片腕を空に翳すと雷全てがそこに収束していく。否、吸い込まれているのである。奪った落雷のデータを再構成し、そのまま反対側の掌から漆黒の波動として再放出する。穿たれた雷の嵐は何十倍もの威力に増幅され束ねられている。ステラは直感的に危険を感じ、瞬間移動でそれを回避した。背後、荒野を貫き山岳地帯に直

撃した黒雷は山々を吹き飛ばし、荒野全てを真っ白に染め上げてしまふ。

尋常ではない威力の攻撃に荒野に砂塵が吹き抜けた。ステラは近距離戦闘に思考を切り替え、ヴァンへと襲い掛かる。放たれる高速の手足。それはヴァンの意識を完全に凌駕している。だがガリユウは全身の各所から剣を出現させ、その猛攻に対応していた。攻め切れず一瞬間を開くステラ。その足元から黒い鎖が無数に出現し、ステラの身体を大地に括りつけた。

魔力封じの結界。更に先ほど使った黒い雷を放つ為片手を翳す。ステラが目を見開き、耐え切れない大きなダメージを覚悟した時である。割って間に入った昴が鞘から居合いで抜いたユウガが眩く輝き、黒い雷を真っ二つに両断した。

『 魔を断て禍祓い……！ 抜刀 奥義ッ！！ 』

それは昴が学んだ事でも考えた事でもない。それでも腕から伝わってくる“彼女”の力がそれを可能にする。幻想を現実へすり替えていく。死者の技を生者に伝える。それは、ククラカン王家に伝わる魔剣の力。

祓った雷が白く染め上げられ、ユウガの刀身に憑依する。居合い抜きから更にその剣を振り上げ、身体を捻って虚空に剣を放つ。空間に音が響き渡り、美しい硝子のような音色と共にそれは弾き返された。

『 祓え、“鳴神”ッ！！ 』

魔法攻撃を無力化し、その威力を刃に乗せて放つカウンター技……“鳴神”。当然元々の持ち主であったミラと親しかったヴァンはそれを知っていた。だからこそ、動きが一瞬固まってしまふ。遅れた防御の犠牲は構えた魔剣の消失。そして破魔の波動はヴァンの

鎧も一撃で粉碎し、男の身体をずたずたに引き裂いた。

荒野を駆け抜ける白い衝撃。巨大な亀裂の前、昂は静かに刃を手に風を纏っていた。白騎士に護られたステラは鎖を引きちぎり、頭を振って前に出る。

「すみません、助けられました」

『……………。それより…………。あれか』

「ええ、あれが　ヴァン・ノーレッジの恐ろしさです」

破魔の力で砕かれた鎧。防御も貫き、ヴァンの身体は高熱の中にさらされたはずだった。当然その身体は黒く焦げ付き、肉は削げ落ち両腕が？げ、首からは既に原型をとどめていなかった。既に死んでいると表現して何の問題もないその死体の足元に黒い魔法陣が浮かび上がり、悲鳴のような音と共にその肉体が復活していく。まるで逆再生の映像を見ているかのように、ヴァンの身体は元通りに修復され、身体だけではなく服装までがきつちりと元に戻っていた。

「……………。死んだか」

そんな風にあっけなくヴァンは呟き、それから殺意の籠った瞳で昂を射抜いた。“死んだか”　？　人の終焉である死をまるで日常茶飯事であるかのように吐き捨てるヴァン。昂の背筋を悪寒が駆け抜けた。やはり相手は遙か怪物。

「気圧されないで下さい。貴方は別に彼を倒さなくとも良いのです。ただ、術式を破壊する事だけが私たちの仕事です」

『判っている……!』

二人は気を取り直し、武器を構えなおす。走り出した白騎士の背後、両腕を広げステラは目を閉じる。

「ミストラル、封印解除。デストロイモード、発動……!」

円の刃は陰と共に分裂していく。構築された雷の天輪その数十二つ。分裂した刃を一斉に放つと、それはまるで自立した思考を持つかのように物理法則を無視した奇妙な軌道でヴァンへと迫っていく。昴は自分を追い越していく刃の群れを見つめ、駆けていく。風を切つて。刃を握り締めて。

何故、ヴァンはこんな風になってしまったのだろうか。何故、自分達はこうして戦っているのだろうか。何故ミラは死なねばならなかったのだろうか。何故ミュレイは……。何故、何故……。疑問が心の中に疼いていた。これで世界は本当に平和になるのだろうか？　だが、すべては昴には理解出来ない事だった。大きな運命という名のうねりは二人の戦いを絶対に避けてはくれないだろう。

ヴァンの悲しみも苦悩も、大切な人を護れなかった絶望も理解出来る。だが倒さねばならない。なぜならば敵だから。殺されたから殺していいなんて言い訳になるはずがない。でも、それでも。

じりじりと脳裏を焦がすような記憶がまだ燃えているのだ。ミュレイの血が、この両手を染めていたのだ。殺してやりたいと、殺さなければならないと、心の奥底から願ったのだ。そして全てをかなぐり捨てて戻ってきた。

『おおおおおおおッ!』

ミストラルが十二方向から同時にヴァンへと襲い掛かる。同時に頭上に転移してきたステラが蹴りを放った。しかしヴァンの身体からは無数の剣が突き出し、ステラの腹を刺す。血を流すステラ。しかし腹に刺さったままの剣を更に深々と押し込み、ヴァンの頭を片手で掴む。

至近距離からの高圧電流放出。ステラの腕が黄金に輝き、一瞬目が眩む程の大規模な雷撃が放たれた。吹き飛ぶヴァンの首から上。肉のこげる臭いの中へ突っ込んでいく昴。首のない魔剣狩りはその片腕を伸ばし、そこにガリユウを構築した。頭がないのに反応する。それがどれだけ不気味な事なのか昴は理解した。首のない男はガリユウの口を大きく開き、近づくと昴を丸呑みしようと腕を繰り出す、慌てて停止しようとする昴の前、ガリユウの顎を手足で引き上げ固定するステラの姿があった。

「構いません、斬りなさい白騎士!!」

『ステラ　!?!』

「大丈夫です、私は死にませんから……。さあ、早くっ!!」

迷っている暇は無かった。ステラの手足に食い込んだガリユウは今もぎりぎりとしてステラの肉を侵しているのだ。昴は歯軋りし、刃を構えた。鞘を投げ捨て、太刀を下段に構える。

脳裏に描くイメージ。術式だけを破壊し、人を傷つけない破魔の刃。実体は無い。物理的威力も無い。だが明確に意識した魔だけを切り裂く、そんな刃の力。

何もかもを切り裂くのでは刃としては不十分。本当に願う力は斬りたい物だけを切り裂く力。放つ刃は白く幻想的に輝き、ステラの身体へと食い込んでいく。時が停止し、そして全てが加速する。

下段からの斬撃　それはステラごと魔剣狩りの身体を切り裂いた。“しん”と静まり返った世界の中、昴の揮った刃の音さえも世界には響かない。冷たい沈黙の中、魔剣狩りの身体に浮かんでいた術式が停止する。

『　　終わりだ』

魔剣狩りの烙印がスパークと同時に消滅した。ガリユウは大きく空に吼え、男の身体の全身を食い破るように内側から魔剣という魔剣が溢れ返った。既にヴァンの肉体は原型を留めておらず、魔剣で編みこまれたそれはぶくぶくと膨れ上がり、どこまでも肥大化していく。

空を見上げる昴　。その眼前、刃で構築された巨大な龍が座していた。何が起きたのか全く判らなかった。言われたとおり、ホクトの烙印を破壊した　ソレだけのはずだったのに。

闇の龍は吼え、翼を広げた。その巨体の下に構築される同じく巨大な影の全てが魔剣　。剣の化身　。愕然とする白騎士の身体を魔剣の群れが襲った。吹き飛ばされ巻き込まれ、引き裂かれていく。黒き闇の泥沼の中、昴は悲鳴を上げた。そしてそれが恐らくは、すべての悲劇の始まりだったのだ　。

白騎士（3）

長い……。長い、夢を見ていたような気がした。そう、私がこの世界に関わるようになってからの夢……。

ミュレイと出会い、様々な戦いを超えてきた。嫌な事もあれば楽

しい事もあつたつけ……。ああ、どうしてこんな事思い出してるんだ？　もしかして私……死んだのだろうか？

そうだ。魔剣狩り……。ヴァンとまた戦ったんだ。ヴァン……。皇帝の前で戦って……。インフェル・ノアから……。落ちた。それでそれでもまだ私は考えていられる。どうしてだろうか？　身体を動かす。激しい痛みが全身を駆け巡った。

「まだ無理はするな。あんな所から落ちて無事じゃったのは本当に奇跡じゃぞ」

「……………う……………」

「今回復魔法をかけておる。少しゆっくりしておれ。お主は焦りすぎじゃ」

優しい声が聞こえた。とても懐かしい声だった。嬉しくて嬉しくて、何故だか泣きたくなった。声が震える。体が震える。私は心底思っているんだ。生きていてよかったって。

二度目のインフェル・ノアでの戦い……。繰り返した婚姻の儀。白騎士として戦った私は、再びヴァンを倒す事が出来なかった。インフェル・ノアから落ちて……。それで、死んだと思ってた。でも、この鎧がきつと私を護ってくれたんだ。

そつと目を開くと、光を背に微笑むミュレイの姿があつた。子供なんかじゃない、ちゃんとした本来の姿のミュレイ……。花嫁衣裳のミュレイ。そう、二度目のミュレイ……。彼女は婚姻の儀をちゃんと受けたはずだったのに。なのにどうして……。

「お主が戦っているのを見て、ここまで駆けつけたのじゃよ。感謝するが良い……………」

「ミュ、レイ……。どう、して……」

「……。お主が落ちていくのを見て、居てもたつても居られずに引き返してしまった。結局、婚姻の儀でいいところは全部シエルシにとられてしまったな」

冗談交じりに笑うミュレイ。その笑顔がとても眩しかった。また、負けたんだ……。そう考えると全身から言葉に出来ない悔しさと悲しさが湧き上がってきた。また、負けた……。私は勝てなかったのだ。

震える手で血に染まったユウガを見つめる。それだけは手放してはいけないと、ぎゅっと握り締めていた私の最後の権利……。刀は優しく輝きを放っている。まるでミラが自分に微笑みかけてくれているのではないかと思う程に……。

身体に力を込め、必死で起き上がる。肩で息をする私を支え、ミュレイは抱きしめてくれた。遠くに仮面が落ちているのが見える。砕けたそれは、もう私を白騎士に戻してはくれない。

「もう、良い……。お主は良く頑張った。もう、戦わずとも良いのじゃ」

「ミュレイ……」

太陽のような、優しいミュレイのにおい……。その腕の中で私は目を閉じた。どうして負けたんだろう。わかんないよ、ミュレイ……。私、ずっと戦ってきたのに……。強くなるうって、必死にやってきたのに……。

ヴァンに勝てなかった。婚姻の儀は邪魔されてしまった。なんでミュレイはここに来ちゃうんだよ。ミュレイは幸せにならなきゃダメじゃないか。ミュレイは皇帝の妻になって、世界を変えたいって

言ってたじゃないか。なのに引き返してくるなんて……。馬鹿だ。大馬鹿だ。

「まだ、上で馬鹿が戦っておる……。今の内にここから離れよう。さあ、白騎士」

「離してよっ！！ 私は……ッ！！ 私はまだ、負けてないいいいっ」

歯を食いしばり、立ち上がる。まだ間に合う。まだ婚姻の儀は終わってない。まだミュレイの夢だつて終わってない。まだ私の戦いも終わってない。まだミラの願いも終わってない。早くヴァンを倒さなきゃいけない。早くヴァンを。早くあいつを。

身体から力が抜け、ミュレイの胸に飛び込んでしまう。彼女は私を強く抱きしめた。どこにも逃がさないとでも言うかのように……。血に染まった手で彼女の衣装を穢す。嘘と欺瞞に満ちた身体で彼女の優しさを穢す。どうして私は 結局何も護れないんだろう。

「嫌だ……。こんな嫌だよう……っ」

「……………もう、良い……。行くな、白騎士……………」

「ミュレイ……ッ！ う……くそお……っ！ くそおおっ！！！！
！ うわあああああああああああああ つ！！！！！！」

叫んでも身体は動かなかった。冗談じゃない。なんでこんななんだよ。ここまでやってきて やつとあいつを見つけたのに殺せなかった。また、また同じ事を繰り返した……。

ちくしょう……。ちくしょう。心の中で何度も叫んだ。涙が溢れて止まらなかった。ヴァンに勝てなかった。ミュレイの夢をか

なえてあげられなかった。なのになんで。一番腹が立つこと、それは。

「ミュレイ……ごめんね……。ごめん……。生きててくれて……。ありがとう……」

彼女がまだ生きてる。一度目ではヴァンに殺されてしまったミュレイ……。でもミュレイはちゃんとここに居る。私の手の届く所に居る。皇帝の所にもいかなかった。ちゃんと私のところに居る。それが心の底から嬉しくて。思い切り安心してしまっていて。この優しいにおいの中で甘えていたくて。そんな自分が何より嫌いだった。なのはどうしてこんなにも彼女の傍に居られる事が嬉しいのか。幸せと感ずるのか……。私は未来を変えられなかったのだろうか。それとも変えられた……。？ 判らない。ただ、戦いはまだ続いている。そしてしかし、私の戦いの一つがここで終わったのだ。

「ご苦労じゃったな、白騎士……。ありがとう……。わらわの為に頑張ってくれて……」

「うづ……っ！ うわああっ！ ミュレイ、ミュレイ……。っ！」

「おお、よしよし……。なんじゃお主、甘えん坊じゃなあ……。ふふふ」

「うわああんっ！ わーん！！ わあああんっ！……！！」

そうして暫く私は彼女の温もりを感じていた。身体中で記憶したかったんだ、彼女の事を。今はただそれだけで満たされている。今はただそれだけで……。立ち上がる事が出来る。

頭上のインフェル・ノアではまだヴァンが戦っているのだろうか。

私は直ぐにそこに戻らなければならないのに。身体は動かなかつた。ずつとこつしたかつたから。我慢していただけ、いいよね……ミユレイ。もう少しだけ……貴方の傍にいても。

歴史の鐘が鳴る音が聞こえる。砕けた仮面を踏みにじり、私はミユレイの背に強く指を伸ばした。それが私の本当の、物語の始まりの合図だった。

白騎士(3)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

まあ……そういう小説だから

ホクト「お前ばっかりずるいぞっ！！」

昴「急にどうしたの？」

ホクト「お前ばかりお姉さんキャラたちの胸にうずもれやがって！！俺がそのポジたる常識的に考えてっ！！！！！」

昴「……………。あんたがやったら気持ち悪くないか…………？」

ホクト「あーあーまったくなくなにもきこえない！」

昴「でもまあ、確かに…………。だっこしすぎかもしれない…………っつ…………これでもいいのか私は…………」

奥さん「順調に百合の道歩んでいるようね」

ホクト「急に忘れられた頃に出てくるの止めてくれないか読者がみんな混乱するから…………」

奥さん「大丈夫よ昴ちゃん！百合は正義よ」

昴「全然意味わかんないですけど…………」

奥さん「私にも昔、ゲルトちゃんというメインヒロインがいて……」

ホクト「その話長くなりますか？」

姫とつさぎの大冒険(1)

“ どうせなら、最初から独りきりで……そして最期まで独りきりだったら良かったのに” 。 ヴァン・ノーレッジはそう願っていた。続けた。

動乱の世に生まれ、孤児として生きた彼の少年時代は過酷極まりない物だった。沢山の命を奪い、犯罪に手を染め、他人に嫌われながら生きてきた。そうする以外に生きていく方法がなかったから。

今日を生き延びる為に誰かが何年もかけて培ってきた幸せを壊し、そしてまた明日もそれを繰り返していく。そんな人生にどんな価値があったというのだろうか。生きていくだけでも誰かの幸せを壊してしまうのなら、いつそのこと……。しかしそんなヴァンを死から遠ざけていたのは、彼の圧倒的な憎悪であった。

世の中に対する。人間に対する。帝国も国も世界も何もかもが大嫌いだった。だから人を殺し、意地でも生き延びてやろうと考えたのだ。何度も何度も死にかけ、しかし彼は死ななかった。運命が自分を生かしているのだと思った。自分は世界に好まれ、悪としてこの世に存在しているとまで思い至った。

幸運だった彼は不幸の中でしかし生きながらえ、年月を重ねる度に強くなった。独りているのは気楽だった。自分の事だけを考えていればよかったから。他人の事を考えては生きていけない世界だったから。

表通りを歩く、高級なスーツやドレスで煌びやかに着飾った貴族たちが楽しそうに笑う陰でヴァンはその貴族達を殺そうと血に塗れた剣を片手に薄汚れたパンをかじっていた。目は血走り、考えるのは獲物を如何に狩るかという事だけだった。

人目のない一瞬を縫うように貴族達を殺し、金目の物を奪い、食料を得た。時には騎士に見つかり、殺されそうにもなった。そんな

少年時代を経て青年となり、彼は帝国にたった一人で反逆する逆徒となっていた。

別に帝国が相手でなくとも構わなかったのだが、とりあえず帝国が一番悪そうな気がしたから標的にした。どれでもよかったのである。ただ“目的”が欲しかった。帝国に関わる人間を片っ端から斬り殺し、強くなった。独りで戦い続けるのは楽だった。どんなに辛くとも、自分の為だから耐えられた。自分の為だから全てを許せた。そう、何もかも。

「貴方がそうやって寂しそうな目をしていると、何故だか私までとても寂しい気持ちになるんですよ、ヴァン」

旅の途中で立ち寄ったとある街、寝泊りだけ出来ればいいという程度の安宿のベッドの上、ミラ・ヨシノはそう呟いた。時々ヴァンは遠くを眺め、ぼんやりと虚ろな表情を浮かべていた。そんな彼の横顔はいつもとても寂しげで、見ているだけで心がどんよりしそうなくらいだった。

白いシーツ一枚を素肌の上に重ねてミラは解けた髪を揺らし、首をかしげた。上半身裸の状態からシャツに袖を通したヴァンは振り返り、ベッドの上に腰を下ろす。月明かりが差し込む窓から空を見上げ、男は煙草に手を伸ばした。ミラはそれを防ぐかのように煙草に伸ばしたヴァンの手に己の手を重ねた。

「今日から私の周囲は禁煙になりました」

「………………。だったら外で吸ってくる」

「それはダメです。ご覧の通り、今の私はとつても無防備ですから。護衛は手の届く距離にいてくれなければ困ってしまいます」

「煙草くらいいいだろうに、別によ……はあ」

溜息を漏らし、煙草に伸ばした手を変わりにミラの手に絡める。指と指を重ね、ヴァンは困ったように　しかし優しく微笑んだ。ミラの紅い髪に手を伸ばすと女は幸せそうに目を閉じ、ヴァンの指が自分の髪に触れるのを感じていた。

旅は　勿論、辛い事もあった。しかしミラというところでもないお転婆姫に引っ張りまわされあちこちを練り歩くのは楽しい想い出も多く作ってくれた。どうしようもないような下らない話や、悪党を倒して村を救ったなんていうちよつとした英雄譚まで……。ミラは何でも楽しむ達人だったと思う。どんなに些細な事も、ミラと一緒に何故かキラキラと輝いて見えた。今まで希望の一欠片も落ちては居なかった裏路地や、飢えた目をした人々が座り込んだ寂しい街も、ミラが通れば華やかになった。

ミラは自分のものでもなんでも、誰にだって分け与えた。当たり前のように誰でも手を差し伸べ、あとで自分が困っていた。自分の食べるものも着るものも気にせず、ミラはなんでも人に与えた。ヴァンはそれを無謀だと、愚行だと嗜めた。しかしミラは笑顔で首を横に振るのだ。“こっしたいからこっしている。それは自分の勝手だから”、と。

気づけばそんなミラを護る事が生き甲斐になっていた。ミラと共に居るだけで、どんな事でも乗り越えられる気がした。物語の中の、姫を護る勇敢な騎士にだってなれる……。本当はただの手を血で染めた殺戮者だったとしても。彼女の優しさはその血糊でさえ落としてくれる気がしたから。

触れるだけで穢してしまうのならば触れないで居たかった。ミラはまるで宝石のようで、そして硝子細工のようでもあった。きらきら眩くて、でも触れたらきつと壊れてしまう。だからヴァンはいつもミラに触れる時、その指はとても優しくかった。壊れ物を扱うようなその手を握り締め、ミラは優しく笑う。

「前々から思っていたのですが、ヴァンは女性の扱いが上手ですね」

「そうか……？」

「ふふふ、そうですねえ……。私としては、若干嫉妬してしまう部分もあります」

「はあ……そうなのか。そういうつもりはないんだけどな」

「もっと私の事を乱暴に扱っても大丈夫ですよ。貴方は一々、私に遠慮しすぎです」

「遠慮もするさ。相手はお姫様だぞ？ 粗相があつては申し訳ない」

「あら、それを言つては貴方は粗相の塊のような人ではないですか？」

笑うミラの頭を小突き、そのままベッドに倒れこむヴァン。二人は並んでベッドの上に横たわり、天井を見上げた。そっと目を閉じ、ヴァンは額に手を当てる。

「……いつまで続けるつもりだ？ こんな旅を……。ただの現実逃避だつて事は判つてるんだろう？」

「ようか
そうですね。貴方が付き合ってくれなくなったら、でし

「なんじゃそりゃ」

「別に、現実逃避でもないでしょう？ むしろとっても現実的ですよ。これからも貴方が私を守ってくれるのなら……。帝国の剣誓隊が来ようが、姉さんが襲ってこようが大丈夫ですから」

「ミュレイは勘弁してくれ。本当に殺される」

「前に挨拶に言ったら燃やされましたね」

「トラウマになるぞ、あれは……。普通初対面の人間燃やすか？」

苦笑を浮かべ、隣を見やる。うつ伏せになったミラは枕を抱いてじっとヴァンを見つめていた。とても近くて優しい距離……。くすぐったくてヴァンは目をそらした。

いつからか、こうしてミラと一緒に居る事が当たり前になってしまった。ずっとこれが続けばいいと思ってしまった。独りきりでは判らなかつた事が判るようになった。独りきりでは出来なかつた事が出来るようになった。一人では世界は失意に包まれていた。でも二人ならその中から希望だって見つけられる。

ミラは歩く希望だつた。ヴァンにとつて生きる意味だつた。独りきりで居ればよかつた。やはりそう思う。大事になつてしまったら。愛してしまつたら。手放したくなくなつてしまつたら……。別れが辛くなるから。失つた時歩けなくなるから。だからずっと独りで居たというのに。気づけばミラはそこにいた。

ヴァンが張り巡らせた心の壁を、ひよいひよいと飛び跳ねて超えてしまうのだ。当たり前のように、笑顔で手を差し伸べてくるのだ。拒絶しても拒絶しても、泣きながらもひつついてくるのだ。そうやって抱きしめて離さないのだ。そんなミラだからこそ、護りたいと思つた。そこまでしてくれる人には何かを返したいと思つのが人として当然の思考だろう。だからそれを異常だとは思わない。だが

やはり正しいとも思えなかつた。

「ねえ、ヴァン……？ このままどこかへ、逃げてしまいませんか……？」

「は？ 本気で言ってるのか」

「私はいつでも本気ですよ」

「……だな。だが逃げるったってどこに？」

「さあ……。どこでもいいですよ。貴方と一緒に……」

身を寄せ、ミラは顔を近づける。ヴァンは天井を見上げながらそこに未来を思い描いてみた。ミラがいて、自分が居る未来……。ミラも同じ事を考えていたように、言葉を続ける。

「どこか、人里離れたところはどうでしょうか？ 二人で質素に生活するだけなら可能じゃないですか？」

「お前……城育ちの癖に結構大胆な事言うな。言うほど簡単じゃないぞ。世話係の居ない家で生活出来るのか？」

「む……！ それは失礼ですよ、ヴァン！ 私だって家事くらいできます！」

「じゃあ今度から料理当番はお前だな。毎回俺に作らせやがって……」

「り、料理はヴァンにお任せします。ヴァンも一つくらい仕事が無くては可愛そうですし」

「俺は毎回剣ぶんまわして戦ってるっつ。何もしてないのはお前だろがっ」

「それはさておき……子供は三人がいいですね。男の子二人、女の子一人がいいです」

「はあっ!?! いくらなんでも気が早すぎだろ……」

「……………。責任持てないのに、一緒に寝たんですか貴方……?」

「いや待て、責任とかそういう問題じゃなくまず子供三人ってそもそもどうやって産むんだよ。まず、お前出産ってどうやるのか知ってるか?」

「え? 呼べば鳥が運んでくるのでは?」

「はあ!?! そんなわけあるかボケ……!?! 通販じゃあるまいし……っつて、おまつ!! じゃあさっき何したのか理解してないのか!?!」

目を丸くしてきよとんとするミラ。頭を抱えるヴァンに擦り寄ってミラは目を閉じた。

「夢を思い描く権利は、誰にだってあるはずですよ。私にだって、貴方にだって……」

ヴァンは無言だった。ミラの温もりを腕の中で感じながら、ただ黙っていた。本当に そうだろっか? 夢なんて見ないほうがいいに決まっている……。少なくともこの世界に、夢なんてあるはず

がない。

見てきたのだ。地獄と等しい世界を。歩いてきたのだ。血と肉片の山の上を。そうして見渡したではないか。怨嗟が繋がるこの世の大地を……。だが、それでも 思い描かずには居られなかった。居られないくらい、永遠を欲していた。

だから最初から独りだったら良かったのに……。そう思う。独りだったら失う悲しみを知る事もなかった。独りだったらずっと最強で居られた。独りだったら……。独りだったら。

雨が降りしきる荒野の中、血に染まり動かなくなったミラを抱いていた。彼女は最期に優しく微笑み、ヴァンの頬を撫でた。唇が言葉を紡ぎ、しかしそれは雨音にかき消されてしまった。だったら全部壊れてしまえばいいのにと、切実に願った。全部消えてしまえばいいのに。死んでしまえばいいのに……。憎悪の渦が剣へを集まってい。ヴァン・ノーレツジと呼ばれた男が、魔剣狩りと呼ばれる化け物になる。それは、とても自然な現象だった。まるで最初から仕組まれていた、運命か何かであったかのように。

姫とつさぎの大冒険（1）

「ステラは……。どうして帝国に？」

インフェル・ノア内部、シエルシに与えられた部屋の中で姫はステラにそう尋ねた。今は食事の時間 数少ないシエルシが自由に行動できる時間であった。

食事と就寝の時間以外は基本的にやる事成す事全てが厳しく制限されており、ステラと話が出来るのも食事の時くらいのものであ

た。本来は食事も相応の場所で行うべきなのだが、無理を言っ
て自室で食べさせて貰っているのである。

テーブルを挟み、もぐもぐとニンジンを丸齧りしているステラは顔を挙げ、耳を上下させた。本来はステラと一緒に食事をするような関係でもないのだが、これも無理を言っ
てステラに頼んだのである。ステラは基本的にシエルシの護衛と監視が任務であり、それ以外の部分は独自に判断して行動している。一応念のためケルヴィーに確認してみたのだが、別に一緒に食事するくらいいいのではないかという事になり、こうしてニンジンを齧っているのである。

「どうして、というのは？」

「だから、えーと……。帝国に入る前は何をしてたのか、という事です」

「……………？ 判りません。私はここで目を覚まし、ここでステラと名づけられました。それ以前の話はケルヴィーから聞いただけになります。……もぐもぐ」

ステラは元々、ケルヴィーによって発掘された古代兵器の一つである。ステラシリーズと名づけられている人型の人工生命体は無数に発見されているが、その中で“心”を宿しているのはステラただ一人であった。

全く同じ外見をしたステラたちの中、このステラだけが目を覚ましたのである。彼女達は人工生命体ではあるが、機械で出来たアンドロイドというわけではなかった。むしろ、人造人間　ケルヴィーはホムンクルスと呼んでいた　に近い存在なのである。

その肉体は術式によりコントロールされており、基本的に意識や魂も術式に依存する。故にステラは素体が変わっても意識さえ移植すればまた復活する事が出来るのだ。ステラシリーズのボディは無

数に発見されており、ステラもこの肉体が何体目なのかは詳しく知らない。

「私は先日の戦いで一度肉体を完全に破壊されたようですが、スペアボディに意識を移し変えこうして蘇ったのです……もぐもぐ」

「そ、そうだったの……？　でも、私が知っている頃の貴方とは随分違うような気が……」

「思考や意識、記憶に大きなクラックがあったようです……もぐもぐ。貴方とは、その頃に出会ったようですね。残念ながらその頃の記憶データは、前のボディが破壊された時に破損してしまっただけです」

「そう……。それで、えーと……？　貴方、ニンジン丸齧りして美味しいですか……？」

恐る恐る訊ねるシエルシ。ステラはこくりと頷き、ニンジンをボリボリと咀嚼して飲み込んだ。ステラの前にはニンジンが生のまま山積みになっており、只管ニンジンを齧り続けている。その姿は無表情ながらも幸せそうであり、なんとなくステラはうさ子と同一人物なのだと認識出来た。

そうだ、別にその心が完全に変わってしまったわけではない。記憶が無くなってしまったとしても、うさ子はうさ子……。シエルシはじっとステラを見つめた。只管にニンジンを齧りながら、ぼりぼりと音を立てシエルシを見つめ返すステラ。何故じっと見られているのか判らず、ステラは小首をかしげた。

「シエルシは何故、私と食事を？」

「え？」

「私は貴方の見張りです。一緒に食事をする理由が……ごっくん。見当たらないのですが……はむ」

「えーと……。それはその……。私と貴方が、友達だからというか……」

「ともだち？」

おずおずと頷くシエルシ。今のステラと友達などという関係が築けるのかと問われれば、恐らくその答えはNOだろう。だがシエルシは諦め切れなかった。彼女がうさ子と呼ばれていた頃のように人懐こく笑ってくれる……そんな日がまた訪れてくれる事を。何より今のシエルシにとって、気を許せるのはステラだけだったのである。一人ぼっちが寂しいなら、友達を何とかして作るしかない。

元々シエルシは友達を作るといふ事が異常に苦手であった。というよりうさ子に言われるまで友達など一人もいなかったのだ。姫という立場もあつたし、婚姻の儀に参加するということもあつたし、人付き合いが苦手ということもあつた。兎に角今のシエルシにとつて、勇気を出して友達になれるのはステラしかないなかつたのである。ステラは無慈悲で残忍で、機械的に命令をこなすだけの存在だ。それは判っている。ステラについての説明はもう何度も繰り返し聞いた。だがステラを……うさ子を諦める事は出来そうにもなかつた。なぜならシエルシは知っていたから。いつもにこにこ笑っていた、彼女の明るい姿を……。

「中々おかしい事を言うのですね、シエルシ」

「だめ……ですか？」

「いえ、貴方が勝手にそう思うのは貴方の自由ですから」

「そうですか……？　じゃあ、これからも食事に付き合っ
てね、うさ子」

「……ステラです。うさ子ってなんなんですか？」

「え？　だって、耳が……」

「これは魔力センサーの二つであって耳ではありません」

「そ、そうだったんだ……」

そんな会話をしながら食事をしていると、食事時間終了と同時にキツカリ扉が開き、ケルヴィーが姿を現した。背後から現れたメイドたちが一気に食事を片付けていく。ぽかーんとしているシエルシの目の前で食べかけの料理が排除され、ステラは二ンジンをいくつか抱えてまだそれを齧り続けていた。

「さあシエルシ様、午後の予定を開始しますよ」

「……はう……。私、まだ食べてたんですけど……」

「時間はキツチリ守ってください。これから地下の施設のご案内します。まあ地下というか、生活エリアの下にあるというだけなんです……」

シエルシは涙目になりながらケルヴィーに押し出されるようにして部屋を出た。ずんずん先に進んでしまうケルヴィーに続き、小走

りでシエルシは移動していく。その後、ステラはニンジン齧りながら追いかけていた。奇妙な三人は縦に並びつつ、地下へ向かうエレベータへと乗り込む。

「これから向かうのは、貴方の魔剣適性をチェックするための設備です」

「魔剣適性……？」

「貴方がザルヴァトーレの次期女王となるわけですから、当然現在のシルヴィア王から魔剣を継承せねばなりません。そしてその際使えないとしないということがないように、ここで魔剣適性のチェックとその引き上げを行います」

一気に説明され、まだ食事休憩のゆるんだ頭から復帰できないシエルシはとりあえずこくこくと頷いておいた。地下へ三人を乗せたエレベータが到着し開かれた扉の向こうに広がっていたのは巨大な研究エリアだった。

研究所、というよりは工場のようなイメージを持つその景色の中、様々な機械が稼働し続け鉄のような油のような臭いが充満していた。それが血でも油でもない別のものの臭いだと気づくのはまだ先の話であり、ところどころに設置されている水槽の中で魔剣らしきものが浮かんでいるのを物珍しげに眺めるシエルシ。ケルヴィーは足を止め、両手を広げて言った。

「ようこそ、プロジェクトエクスカリバーの研究室へ」

「……………プロジェクトエクスカリバー……………。えーと……………人造魔剣計画の……………？」

「そうですね、よく覚えていましたね。さて、これから貴方の魔剣適性をチェックする為の準備をしてきますので、呼ぶまでここで待っていてくださいね。下手に動き回ると迷子になってしまいますから」

「そ、そんなに入り組んでるんですか……？」

「増築と改築を繰り返してたら大変な事になってしまいましたねえ……。では、少々お待ちを」

去っていくケルヴィーの後姿を見送り、シエルシは緊張感に背筋を伸ばした。これから魔剣適性をチェックするというのだが、一体何をどうするのか……。痛い事がなければいいなとそんな事を考えつつ、しっかりとしなければと気合を入れる。その背後、ステラはすべてのニンジンを食べ終え、ごっくんと飲み干していた。あんまりなテンションの差にシエルシは肩を落とす、振り返ってステラを見る。

「貴方は……ステラになってもマイペースですね……」

「……？」

「はあ、私はすごく緊張してきました……って、ステラ？ どこに行くんですか？」

ステラはシエルシを無視してふらふらとどこかへ歩いていってしまふ。背後から呼び止めるシエルシの声も無視し、歩いていくのは別の部屋へ繋がる通路であった。ここで待っているといわれたのにどこかに言ってしまうステラ……。それを止め様とシエルシは走り出した。

「うさ子!! もう、どこに行くんですか? 勝手に移動したらケルヴィーに怒られてしまいますよ!!」

「……………感じる。こっちに……………強い力が……………」

「え…………? あ、ちょっと! ステラ! うさ子!! もう、待ってください! と、止まって~~~~っ!」

ステラの腕を掴むのだが、ステラはまるで意にも介さず凄まじい力でずんずん歩いていく。引きずられる形になったシエルシは踏ん張って抵抗してみたものの、途中で力尽きて転んでしまう。そのままステラにずるずると引きずられ、隣の部屋へと連れて行かれてしまふのであつた。

「ス、ステラ!!? ちょっと……………引きずってる! 引きずってます……………いたっ!?!」

しかしステラは一向に振り返る気配もない。シエルシは泣きそうになりながら足をばたばたさせ、ステラに引きずられ続ける。そうして二人の姿が見えなくなる頃、自動ドアが静かに閉じた。シエルシの泣き声はケルヴィーには届かず……………そしてシエルシは目撃した。奥の部屋の更に奥、巨大な封印装置の中に拘束された一人の男が眠っていた。全身に無数の封印術式を施され、がんじがらめに縛られた男。死んだと思っていた人物の発見にシエルシは慌てて立ち上がり、足を止めたステラと一緒にそれを見上げた。

世界最強と呼ばれた、絶対的な力を持つ魔剣使い……………。黒き刃の魔剣狩り、ヴァン・ノーレッジ……………またの名をホクト。巨大な魔法陣に囲まれ、その男は眠り続けていた。シエルシとステラの見上げる、その直ぐ傍で……………。

姫とつさぎの大冒険(2)

「これは……ホクト……？ あの時、落ちて死んだのでは……」

ステラに引きずられ、汚れたドレスを叩きながらシエルシは顔を上げた。光輝く魔法陣の中に拘束されたホクトの意識は無く、両腕を光で拘束され吊るし上げられていた。周囲に配置された封印装置、その数七十三。ホクトの前には魔剣ガリユウが浮かんでおり、その脅威の怪物を封じる為の措置であった。

まるで最初からホクトを封印する為だけに作られたようなその部屋の中、ステラは遠い目でホクトを見つめていた。隣に並び、シエルシはその視線を追う。光に照らされ、魔力の波動でステラの前髪は揺れていた。その瞳がどこか寂しげに見えたのは、シエルシの勘違いだったのだろうか……。

「こら！ 勝手にこんな所に入られては困ります！」

「あ……ケルヴィー。す、すみません……ステラが勝手に歩き出して……」

自動ドアを潜り飛び込んできたケルヴィーは直ぐにステラに目を向けた。ステラの表情は虚ろであり、まるで夢の中を歩いているかのような足取りでゆっくりとホクトに近づいていく。その不可解な行動を前にケルヴィーは直ぐに表情を変え、シエルシに駆け寄った。

「彼女が勝手に、ですか？」

「はい……。えーっと、一応止め様とはしましたけど……」

「貴方程式に止められるはずがないのは当然ですよ。彼女は帝国が誇る無敵の魔剣使いですからね……。それよりこの状況、中々興味深いですねえ……」

既にシエルシの検査のことは頭からすっかり抜け落ちてしまったのか、ケルヴィーはステラを興味深く観察していた。額に手を当てたステラは苦しそうに眉を潜め、前のめりに倒れかけながら震え始めた。流石に様子がおかしいと駆け寄った二人の目の前、ステラはぱったりと倒れこんでしまう。

「ステラッ!？」

「大丈夫です、ただ意識を失っているだけです。恐らく思考処理に多大な負荷がかかった為フリーズしてしまったでしょう」

ステラを抱き起こし、ケルヴィーはその様子を伺う。その間シエルシは不安げにステラの顔を覗き込んでいたのだが、ケルヴィーが邪魔そうにしていたのでおずおずと引つ込む事にした。残す所目を向けるべき物といえば彼くらいしかなく、シエルシはホクトをじつと見上げた。

「生かして捕らえていたんですね……」

「当然でしょう？ 彼はプロジェクトエクスカリバーが目指す到達点ですから。自由自在に魔剣を構築し、複製し再現する……。彼の魔剣ガリユウを調べればいくらかでも貴重な情報が得られるでしょうね。っと。どうやらステラは完全にダウンしてしまっているようです。今日は申し訳ないのですが一旦お開きという事で」

「あ……はい。ステラは大丈夫なんですよね……?」

「少し休ませれば直ぐに目を覚ますでしょう。それより今の彼女の思考データを探査したいので……」

急いでステラを抱えて立ち去っていくケルヴィー。研究者でありステラを復活させた張本人としては、今はステラの事が最優先である。研究熱心さと親心で飛び出して言ったのだが、シエルシをそこに残している事をすっかり忘れていた。施錠さえもされなかった為、シエルシはホクトに歩み寄りいくらでもその様子を伺う事が出来た。あの日、仲間を手にかけたホクトを背後から刺したのはシエルシであった。そんな事を何故しようと思ったのか……。恐らくは、あんなホクトの姿を見る事に耐え切れなくなったから……。身勝手な理由である。だが、心からの本心だった。

ホクトは初対面のシエルシを助け、そうしてガルガンチュアへと連れて行ってくれた。刺客に襲われてもまるで気にせず倒してしまふ……。白馬の王子様が現れたのかと思った。結局彼はそれとは程遠いものだったけれども。それでも優しく強く、いつでもシエルシを護っていた。

婚姻の儀を受ける勇気をくれたのもホクトであり、国に無事に戻れたのもホクトのお陰だった。ホクトはそう、何かをしてやったつもりはないのだろう。だが彼が当たり前のようにした数々の事が、シエルシにとっては初めての事で、貴重な事で、そして幸せな事だった。強くなれと背中を押してもらった気がした。あの時、UGの帝国基地でホクトは泣きじゃくるシエルシを抱きしめ、全てを任せると言ってくれた。その時の頼れる背中を今でもはつきりと覚えている。

まだたった数ヶ月前の事だというのに、あの出来事の全てが夢か幻かのように感じられた。今はこんなにも近く、けれどもとても遠い。ホクトはきっと笑ってシエルシを許すだろう。その背を貫き、自らを殺そうとした姫を。

彼が最期、呼んだ女の名前……。その声を聞いた時、その落ちていく寂しげな目を見た時、もう全てを忘れたと思った。それはきつと、ホクトの事が余りにも気になりすぎていたから。どうせ得られないなら、もう再会出来ないなら、忘れてしまった方がいい……。当たり前のようにそう思っていた。

けれども彼は生きていた。生きてまた目の前に現れてしまった。心の中に押し込めていた罪悪感がどつとあふれ出し、泣き出しそうな気持ちを唇を噛み締めて堪えた。そう、彼は許すだろう。“仕方なかったさ”と笑うだろう。けれどそうやって許されてしまうであろう自分が何よりも許せなかった。

「ホクト……」

ヴァン・ノーレッジと呼ばれた、記憶喪失の男。シエルシは知っている。彼が本当は女好きで煙草好きの酒好きで、どうしようもなくだらしが無くて変態で、それでも優しく頼れる男だという事を。魔剣狩りだとかそんな事関係ない。彼は一人の人間であり。シエルシにとっては“ホクト”だった。

何故こうも人は立場や運命に縛られているのだろう。もしもあの頃のまま、ステラもホクトも記憶喪失で……。シエルシも自分の身を隠していられたのならば……。きつと幸せな毎日が続いたのだろう。ちよつとだけ退屈で、それでも毎日大変で。小さなことで大騒ぎをして。笑ったり、泣いたり、怒ったり……。それがどれだけ楽しかったか。幸せだったか。

「私は……貴方をここに縛り付けてしまった……」

自由に生きる風のような彼は、もう見る事が出来ない。

「私は何故……。ねえ、ホクト……？ 私は何故……。ここにいるの

でしょうか……？」

伸ばした指先は絶対に届かないと知っていた。それでも伸ばさずには居られなかった。彼はきつと答えないと知っていた。それでも呼びかけずには居られなかった。

幻影を追いかける砂の海の上のように。姫はただ一人、切ない気持ちを抱き押し殺す。忘れる事はきつと出来ない。彼は何よりも、自由だったのだから。

姫とうさぎの大冒険（2）

『とりあずミュレイが生き延びた……それだけでも良しとしなければ 　　なんだけど……』

婚姻の儀後　。ククラカンの立場は明らかにザルヴァトーレより衰えていた。

物資の流通は滞り、配布される資金も技術支援も明らかに後退している。当然の事だろう、ミュレイ・ヨシノは婚姻の儀に参加はしたものの、王の下へは辿り着けなかったのだから。それは白騎士　　昴を助ける為だったのだが、そんなものは言い訳にはならない。結果としてククラカンは帝国の信頼を失ってしまったのだ。当然、シエルシの活躍が大きく目立つ事になる。

ククラカン内部は今や混乱が肥大化し、役目を遂げられなかったミュレイは貴族や国民から非難を向けられる対象となっていた。当然の事である。ミュレイもそれは覚悟の上であった。だが現実問題として、国を立て直す為にやらねばならない事は数多い。

「ザルヴァトーレは帝国に次ぐ二番手の権力を得た……となれば当然、ククラカンを占領しようとして攻め込んでくるだろうね。それも時間の問題。まあ、あっちも今は婚姻の儀が終わって帝国と新しい調停なんかでごたごたしているんだらうけど」

ラクヨウ城内部、会議室。円卓を囲み並んでいるのは貴族達ではなくミュレイ、昴、そしてミュレイの弟であるタケルであった。タケルは淡々と状況を語り、そしてそれは実際一つもいい方向に転がりそうもない。

「ククラカンの国民も浮き足立ってるし、貴族連中は亡命を希望してあちこちに逃げ始めてる。どうするんだい、姉上？ このままだとククラカンは滅ぶけど」

「そんな事にはさせぬさ。腐ってもわらわはこの国の姫。国はなんとしても立て直してみせる。何も無策ですっぽかしたわけではない。一応、わらわにも考えはあるからな」

現在ククラカンは帝国の恩恵を失い、衰退の一途を辿っている。ライフラインさえも帝国に依存したククラカンは、たった一ヶ月も持たずに滅び初めてしまったのである。恐らくザルヴァトーレのシルヴィア王はそう待たずにまずは話し合いでククラカンを取り戻そうと動き始めるだろう。それを突っぱねれば即、開戦となる。後は帝国の後ろ盾のあるザルヴァトーレが圧勝すると、そんなシナリオが決まっているだろう。

だが、実際そうしてザルヴァトーレが攻め込んでこないのには色々事情が重なっている。まず、婚姻の儀に成功したのはザルヴァトーレのみであるということ。即ちそれは、帝国の信頼を裏切ったのはククラカンだけではなく、他の都市や界層も同じという事

なのである。その中でククラカンだけを真っ先に攻撃してくるとい
うのは考えづらい。いざククラカンを攻撃すれば、どのような動き
になってくるのかは自ずと推測出来るからだ。

「ククラカンに攻め入ってくれば、我らも当然抗戦する。さすれば
婚姻の儀に失敗した他の都市も当然帝国の攻撃を恐れる事になるじ
やろう。世界の混乱は肥大化し、ザルヴァトーレがすんなり第四界
層を収めるのも難しくなる」

だからこそ万全の用意をしてから というのが帝国の考えなの
だろう。でなければあの短気なシルヴィアの事だ、問答無用で既に
攻め込んできているはずだろう。

攻め込めない理由はもう一つ。帝国とギルド組合の抗争の表
面化である。もともと帝国はギルドを暗黙で了解していたのだが、
先日のギルド組合の反乱によって完全に無視は出来ない状態になっ
てしまった。ギルドをそのまま残す事になるとしても、恐らくは一
度組織を解体し反帝国組織を殲滅、その後帝国主導の新ギルド組合
を組織しなおす必要があるだろう。

仮にククラカンとザルヴァトーレが戦争を始めれば、他の都市が
頼れるのはギルドだけなのである。いくら帝国でも都市全てがギル
ドと結託してしまつては色々と手間がかかつてしまう。何よりこの
世界全てが戦争状態になってしまうのでは、下層の人間を働かせる
事によつて維持されているヨツンヘイムにも問題が生じてしまうだ
ろう。

「つまり、連中はまず逃げ道を断つじやろう。ギルド組合への攻撃
。となれば、戦場になるのは第五、第六界層……。エル・ギル
スを主戦場に、恐らく外部から戦闘艦などで直接カンタイトルに乗り
込んでくるつもりじやろう」

「その後はじつくりと逃げ場のないククラカンを攻め落とすってわけだね」

肩を竦めて笑うタケル。実際ミュレイの読みはほぼ完全に正解である。今正に世界は運命の分かれ道を迎えようとしているのだ。この分岐、そして選択こそすべての世界の大きな変化へと繋がっていくだろう。

椅子の上に座り、話を聞いていた白騎士は話を聞きながらバテンカイトスのメリーベルの事を思い出していた。元々、バテンカイトスが反帝国組織の拠点でもあるという事は知らなかった昴だが、“今回”は事前調査でしっかりとそれも把握している。剣誓隊に一時身を置いていただけあり、帝国の動きや戦力もある程度推測出来た。ミュレイの読みに同意した昴は立ち上がり、窓辺に立つ。城から見下ろす街の活気はどこか薄れ、町全体は人々の不安に包まれているかのようだった。

『結局、帝国とはいずれやりあう事になった……。それが遅いか早いかというだけの事だ』

「……………白騎士」

『ミュレイ、ここは私に任せて欲しい。状況を打開するのは困難だが、やるべき事は決まっている。ギルド組合ど同盟を結べばいい』

つまり、退路を断たれてしまうより先にククラカンがギルドと組んでしまえばいいのだ。そうすればククラカンもギルドも潰されにくくなり、戦力は僅かながらも拮抗に向かうだろう。

問題はギルド組合がククラカンを認めるのか、という事である。反帝国組織の人間にとって第四界層プリミドールの間人達は帝国に飼い馴らされ媚び諂っているようにしか見えないし、一部の反帝国

組織はククラカンもザルヴァトーレも攻撃目標に設定している所さえもある。帝国に見捨てられたからといって掌を返すような国を、ギルドが信頼するかどうか……そこが問題である。

『私がエル・ギルスに向かい話をつけてくる。メリーベルには用もあるしな……』

「待て、わらわも向かう。国の代表者　は、女王である母上だが……一応、事の発端はわらわだからな。責任者として筋を通さねばなるまい」

『そういえば、この女王は今どうしてるんだ？　女王とも相談して決めるべきではないか？』

昴の質問にミュレイは歯切れ悪くそっぽを向いた。タケルは相変わらず微笑んでいたが、どうにも返事をしてくれる気配が無い。首をかしげる昴……それを見かねてウサクがおずおずと手を上げた。

「女王陛下は……実は今、病に臥せているのでござるよ……」

『病？』

「もう暫く目を覚ましていないのでござる。故に実質この国を取り仕切っているのは、姫様というわけなのでござるよ……」

そのミュレイが婚姻の儀を終え、帝国に認められた立派な女王となってくれることを国民は誰もが心から望んでいただろう。そうすれば今とは違った未来が……明るい未来がきつと待っていたはずなのだ。そう考えると昴の胸はずきりと痛んだ。

「自分で言うのもアレじゃが、過ぎてしまった事でクヨクヨしても意味はない。ザルヴァトーレとの戦も避けられぬのならば、直ぐに行動すべきじゃな」

扇子を閉じ、ミュレイはすらりと伸びた素足を組みなおして目を細めた。“前回”とは大きく異なり、ミュレイが元々の姿であるという事は昴にとっては多大なアドバンテージでもある。それを認識できるのは昴だけだったが、今のミュレイはとても頼もしい。カテゴリース魔剣の所有者の一人、炎の大魔道　ミュレイ・ヨシノ。彼女が守ってくれたこの命で、今度こそその行いに報いねばならない。

『判った。ミュレイも共に行こう』

「まあそうと決まれば早い方がいいのじゃが、色々と引継ぎとかもあるからのう……もう数日かかってしまいそうじゃ。タケル、その間に戦の準備と民の亡命先を一応考慮しておいてくれ」

「判ったよ。それじゃあ白騎士、姉上の事をよろしくね」

『……承知』

部屋を出て行くタケルを見送り、昴はそつと仮面を外した。世界の状況は変わりつつある。そしてまだ見ぬ未来へと歴史は動き出したのだ。全てを昴が知っているのはここまで……。ここから先は前人未到、未開の歴史である。それが恐ろしくないといえは嘘になるだろう。だが昴はしっかりと希望も抱いていた。

昴の傍には、こうして五体満足のミュレイが生きているのだ。今はこの世界がどうなるかよりも、ミュレイを護る為にどうすべきかだけを考える。そうする以外、きっと彼女を守り抜く方法はない

のだから。

「……今度こそ護るよ、ミュレイ」

座ったままのミュレイへと手を伸ばし、甲冑を纏った指でそつと髪を梳く。ミュレイは片目を閉じて優しく微笑み、鼻のその手を握り締めていた。戦いの時が迫っている　だが恐ろしくはない。これは、護る為の戦い……。死という運命に逆らう為の、戦いなのだから。

「　シエルシちゃん、シエルシちゃんっ！　起きて、起きてなの
っっ！」

「う、うーん……」

「シエルシちゃん……もー、寝てる場合じゃないのっ！！　はむっ
！！」

「い、いたっ！？　痛い！？　痛いです、うさ子……　止めてくださ
ー！？　う、うさ子！？」

それは、真夜中の訪問であつた。ベッドの中ですやすやと眠つていたシエルシの目の前、真っ暗な闇の中に浮かぶうさ子の姿があつた。白い耳をばたばたと上下させ、相変わらずゆるゆるとした笑顔を浮かべている。夢の中かと思つたのだが、うさ子がもう一度シエルシの頭にかじりついたその痛みで現実だと思ひ知らされた。

ネグリジェのまま飛び起きたシエルシはうさ子の顔をぺたぺたと触ってみる。相変わらずふにゃふにゃと柔らかい、うさ子の顔があ

った。ステラと呼ばれたあの冷酷な少女の顔はもうどこにもない。一体何がどうなっているのか　頭上でクエスチョンマークが踊るシエルシとは対照的にうさ子は両手を振りながら言った。

「早く、ここから逃げるのーっ」

「に、逃げる……？　逃げるって、どういつ……？」

「あのね、うさはホクト君を助けたいの……。シエルシちゃん、お願いだから手伝ってほしいの……」

「え……ええっ！？　ホ、ホクトを……ですか!？」

確かに昼間、ホクトが囚われている場所は把握していた。しかしステラはなぜこうしてうさ子に戻ってしまったのだろうか……。一度気絶し、そのままケルヴィーが研究室に連れ帰り……。それから見ないと思ったら夜中にふっと現れた。うさ子はシエルシの手を引っ張りベッドから立たせ、巨大なクローゼットの中からドレスを引っ張り出してくる。

「早く、早く着替えてほしいのっ!」

「待つてください……。ホクトを助けるって……正気ですか？　帝国が何故彼をあそこに捕らえているのか、貴方だって判らないわけではないのでしょうか？」

シエルシの真剣な言葉にうさ子はドレスを下ろし、耳をぺったんこにさせて項垂れてしまった。それから眉を潜め、泣きそうな顔でじっとシエルシを上目遣いに見つめる。

「うさは……。うさは、“すてら”っていう怖い怖い人だったの……。うさはね、ホクト君のもともともっても大事な人を殺しちゃったの……。うさは、とってもとっても、悪いうさだったの……」

「……………うさ子」

「ホクト君はね、わーんわーんって泣いてたの……。うさ、よく覚えてないけど、それだけは覚えてるの。ホクト君がね、うわーんうわーんって泣いてたの……。すっごくすっごくかわいそうだったの……」

少女の脳裏に浮かぶ記憶は定かではない。だが、一人の剣士が姫の亡骸を胸に泣いていたことだけは鮮明に覚えている。すべての記憶が戻ったわけではなく、ステラであった時の記憶が共有出来ているわけでもない。ただそれでも、そんな彼の悲しい姿だけは思い出したのである。

「ホクト君がね、うさになんてだーって剣を刺したの……。うさ、すっごく悲しかったの……。うさね、痛くて痛くて……。でもホクト君の方が……。何倍も何倍も、いたいいたいって泣いてたの……。うぐっ」

涙を堪え、目をうるうるさせながらうさ子は呟くように語った。

「ごしごしと涙を拭い、ドレスをシエルシに掲げる。そうしてしっかりとした目つきで、もう一度願った。

「どうしてもね、助けたいの……。ホクト君はきつと、うさの事許してくれないけど……。でも、悪いうさだったから……。もう、いいうさにはなれないから……。せめて、ホクト君はロゼ君たちのごころに返してあげたい……」

「……………そんな事をしたら、貴方が……………」

「時間がないのっ！！！！　うさは、またすぐ嫌なうさに戻っちゃ
う……………。そうしたらもう……………もう、助けられない……………！　お願いな
の、シエルちゃんっ！！　お願いなの！！　うさ、なんでもする
からっ！　ホクト君を助けて！　助けてほしいのっ！！！」

深々と頭を下げるうさ子。その切実な姿にシエルシも胸が詰まり
そうだった。そう、誰もあんな悲劇を望んでいたわけではなかった
のだ。色々事情があった。すれ違う想いがあった。変えられない
使命が　そして憎しみがあった。

ふと思うのだ。何故こうもすれ違ってしまうのだろうか、と…………。
うさ子の肩を抱き、シエルシは悲しげに目を閉じた。うさ子の願い
を叶えてあげるということは、シエルシがザルヴァトーレを裏切る
事を意味している。そうなれば帝国はザルヴァトーレを突き放すだ
ろう。シエルシも無事では済まない…………。きっと、殺されてしまう。
ホクトは帝国にとって最大の敵なのだ。それを救うという事は帝
国の宿敵を解き放つという事に他ならない。この世界にはまた混沌
が溢れ、戦乱が満ち満ちていく事だろう。容易に決断出来る事では
なかった。だが　。

「……………わかったよ。わかったから……………うさ子」

そつと顔を上げるうさ子。その頭を撫で、シエルシは優しく微笑
んだ。そうだ、自分だってまだ納得していない。彼の事をもっと知
りたいし、謝りたい事だってある。物語をまだ終わりにしてしま
たくはない…………それは正直な気持ちだった。

「一緒に考えよう、ホクトを助け出す方法を……………」

「シエルシちゃん……。うつつ！　うわああああん、ありがとうなのおおっ！！　うわーん！　わああんっ！！」

「……………よしよし、うさ子……………おかえり。生きていてくれて、ありがとう……………」

「うわーん！　シエルシちゃんっ！！！！！」

うさ子を強く抱きしめ、シエルシは目を閉じて感じていた。うさ子の温もり、悲しみ、そして願い……。混沌を再び解き放せば世界がどうなってしまうかわからない。でもこのままできて納得して生きて行けるはずもない。愚かな決断であることは百も承知、しかしまだ万策尽きたわけでもないのだ。考えもしないやりもしないで何もかも諦めるのは早すぎる　そう教わったから。

ザルヴァトーレを護り、うさ子を護り、そしてホクトを救う……………そんな奇跡のような方法。考え付くのはきっと容易ではない。だが諦めたくなかった。必死に姫は考える。それが彼女の物語の始まりでもあった。世界に改変を齎す運命の時　。それはすぐ目の前で、迫りつつあった……………。

姫とうさぎの大冒険(2) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

* 毎日更新？ *

うさ子「わーいっ！ 久しぶりに出番があつたの〜っ」

ホクト「そりゃよかったな……俺は台詞なかったけど」

シエルシ「なんだか最近、私の出番が多くて嬉しいですっ！ やつとメインヒロインのターン……ですか!?!」

ロゼ「うさ子とシエルシでへこたれコンビなのにね」

うさ子「わーい!」

シエルシ「なんで喜ぶんですか……」

ホクト「しっかし、もう四十七部だぞ……はえーなオイ……」

ロゼ「そりゃ、毎日更新してればそつもなるよ。単純に考えて一月三十話くらい上がるわけでしょ?」

ホクト「ま、確かにな。しかし全然終わる気配ねーけどいつ終わるんだこれ」

シエルシ「ノープランですな」

うさ子「じゃあ、ディアノイアの倍くらい連載するのっ」

「同」「」だが断る」「」

シエルシ「ディアノイアの倍は二百部超えますよ……」

ロゼ「冗談はさておき、百部行かないくらいで何とか纏めたいよね」

ホクト「元々大したことしてる小説じゃねえしな」

シエルシ「あー、世界の危機とか……そういうのはないんでしょ
うか？」

ホクト「あるかもしれないし、ないかもしれないなあ」

ロゼ「ラスボスはどうせ神とかなんでしょ、また」

ホクト「そう言われると完全に答えに詰まるわけだが……」

シエルシ「なんでもいいですよ、出番さえあれば……出番さえ……
フフッ」

ロゼ「ねえ、最近シエルシおかしくなってきたくない」

ホクト「神宮寺飛鳥ではよくあること」

うさ子「なのっ!?!」

姫とうさぎの大冒険(3)

「あ……あれっ？　これは、一体どういう……？」

ドレスに着替え、真夜中のインフェル・ノアへと飛び出したシエルシが目にしたのは停電により灯りが落とされ、暗闇に包まれてしまった皇帝の城の姿であった。広がるレコンキスタの町並みの中、停電しているのはインフェル・ノアだけであり展望通路を歩くと街の明るさを確認する事が出来た。

二人がホクトを救出する為に考えた作戦はこうだ。まず、ホクトを捕らえている魔道封印装置の動力をカットし、ホクトを封印装置の中から連れ出す事……それが必要最低限の条件となる。動力部に向かい、そこで研究エリアの動力を落としホクトを救出する……そんな段取りとその後の行動まで検討していたのだが、いざ部屋から出てみればインフェル・ノアすべての動力が落とされていた。混乱するシエルシは振り返り、うさ子を見やる。

「これはうさ子がやったんですか？」

「うさ、まだなんもしてないの。だってまだシエルシちゃんの部屋にいたし……」

「え……？　じゃあ、ただの停電……？　そ、そんなことってあるんでしょうか……」

まさかこれから停電させようと思っていたのに、既に停電しているとは……。幸運なのかそれとも不運だったのか、兎に角動力部まで向かう必要性は消失してしまった。このままホクトを救出する為に二人は研究室へと走り出した。

うさ子がうさ子のままで居られる時間は恐らく残り少ない。うさ子の人格が乖離しているのかどうかはシエルシには判らなかつたが、似たような状況にあるのだろうと推測する。つまり今うさ子の身体の中にはステラとうさ子、二つの人格が同居しているような状態にあるのではないかと……と。

自由自在にうさ子が現れる事が出来ず、自然に目覚めるのがステラなのだとすれば主人格がステラということになる。ならばうさ子があとどれくらいの間顕在化していられるのかは全くなんの保障もない。言ってしまうえば今この瞬間ステラに戻ってしまったもおかしな事は何も無いのだ。

何よりそれで最大の問題なのが、ステラに戻ったら彼女は確実にホクトを連れ戻そうとするだろう、という事である。いくら救出してもステラに戻ってしまったては意味がない……。うさ子の言うとおり、時間はもう殆ど残されていなかった。

「本当に、それでいいんですか……!？」

「なにがっ!？」

「貴方が動力をカットし、私はホクトを連れて転送魔法陣で街の外に逃げる……そういう計画でしたよね!？」

「だって、うさが一緒に行ったら……いつホクト君をまた攻撃するかわかんないから……。うさだったら、もし動力を落としてしまったとしても“ステラの異常”で済むでしょ？ シエルシちゃん、脱出する際にホクト君が攫った事にすればいいのっ」

「……でも、それではうさ子が……」

「しょうがないの、もう他に手段がないから……! 何でか停電し

てるから……今は、ホクト君を助けてシエルシちゃんと一緒にレコンキスタから出してあげるのっ！ 大丈夫、ステラの力と記憶はうさにも少し伝わってるから……っ」

走りながら跳躍と共に空中でデストロイモードを起動し、機械の装甲をまとってふわりと浮かび上がるうさ子。走っているシエルシを抱きかかえ、そのまま一気に加速して通路を駆け抜けていく。

「シエルシちゃん……無理をさせちゃってごめんね……」

「いえ。私も、これでいいのかなって迷っていたんです。大丈夫、きつと何とかなりますよ。私もホクトを助きたい……。ホクトに誘拐されたって事にすれば、きつと罪には問われませんよ」

勿論それも希望的観測に過ぎない。実際、帝国はみすみす失敗したシエルシを許しはしないだろう……。そうわかっている。だが、それでも……。シエルシにとってホクトは助けるに値する。助けねばならないと、思ってしまったから……。

いくつかの自動ドアを電撃で突き破りながらうさ子は地下へと向かっていく。研究エリアに飛び込み、それでも直まだ電力は復旧していない。流石におかしいと思い始めた二人だったが、立ち止まる余裕はなかった。封印部屋に飛び込み、うさ子は両足を地面にこすり付けて急ブレーキをかける。ふわりと停止したうさ子の腕から離れ、シエルシは封印装置へと近づいた。封印装置の動力はやはり力ツトされていたが、肝心のホクトはまだ眠ったままである。近づいて端末を操作しようとしたのだが、それで漸くミスに気づく。

「うさ子、端末も電源が落ちていて操作出来ません！！」

「大丈夫なの！ もとから こうするつもりだったっ！！！！」

指先を弾き、電撃を起すうさ子。その指先が示す方向にはホクトを取り囲む封印装置がある。動力が落ちている封印装置は一撃で破壊され、ホクトはあっけなく床の上に倒れこんだ。シエルシは慌てて硝子越しに隔離されていた封印装置の中へと入り、ずるずるとホクトを引きずり出した。ホクトの身体はシエルシの細腕には余りにも重すぎたが、うさ子にも手伝って貰い何とか救出する事に成功した。

「ホクト！ ホクト、しっかりしてくださいっ！！ ホクト……お願い、目を覚まして……」

「シエルシちゃん、これっ」

隣の部屋からホクトの所持品を持ってきたうさ子は鞆に詰めてシエルシに投げ渡した。シエルシは鞆を肩にかけ、上着をホクトに着せる。相変わらず目を覚ます様子のないホクトを二人は左右から抱え、部屋から何とか脱出する事に成功した。

「転送魔法陣のある部屋まで行けば、もう大丈夫なの……っ！！
シエルシちゃん、がんばって！ がんばってなのっ」

「は、はい……っ！」

部屋を抜け出し、研究ブロックを通過する。街への転送装置はあちこちに配置されているが、最寄の場所までもホクトを背負ってでは遠かった。二人がそうして焦りながらも急いで脱出している途中、突然電力が復旧すると同時に強烈な音量のアラートが鳴り響いた。二人は自分達の行動が知れ渡ってしまったのだと悟り、足取りを速めた。

「うさ子……も、もう……っ」

「がんばってシエルシちゃん、がんばってなのうっ！！　もう少しだから……もう少しで……っ！！」

しかし、二人の前にはぞろぞろと壁から現れるガーディアンマシンが立ちはだかった。二人の事は兎も角、背負っている人物は明らかに危険人物である。一斉に銃が突きつけられ、退路も防がれてしまふ。うさ子はホクトを降ろし、両腕に魔力を収束し始めた。

「シエルシちゃん、ここからは一人で行って……！！」

「う、うさ子……でも、わ、私一人じゃなにも……」

「お願いっ！！　ホクト君を、助けて……！！　追っ手は全部うさが何とかするから……！！　急いで　ッ……！！」

うさ子の気迫は凄まじいものがあつた。弱気になつていた心に叫びは響き渡り、なぜかシエルシは諦めながらも立ち上がる事が出来た。なりふり構わずホクトの腕を掴み、ずるずると引きずっていく。男の身体などシエルシが一人で背負えるはずもなかった。移動速度も圧倒的に遅くなつた。それでもまだ　うさ子は諦めていないから。

両腕を翳し、電撃を放出するうさ子。そうして一斉に放たれる弾丸の雨をあえて避けず、シエルシたちの壁となって立ちふさがる

。戦闘が始まり、アラートの劈くような音の中シエルシは自分の鼓動の音さえも見失いかけていた。何故、こんなにも一生懸命ホクトを助けようとしているのか……。そんな事してもいい事なんて何も無いというのに……。

歯を食いしばり、重い物など一度も持ったことがないような細腕でホクトを引きずっていく。ハイヒールの靴は邪魔になり、脱ぎ捨てた。ドレスも邪魔でスカートは破ってしまった。なりふり構わず今はホクトだけを助ける。この、気を失った帝国の敵を……。

「ホクト……！ ホクト……ッ！ 貴方を、ここから……連れ出すつて……決めたから……うっっ」

うさ子が戦っている。うさ子は次々にガーディアンマシンを破壊しているが、この調子で行けば騎士たちも集まってくるだろう。そうなれば騒ぎは大きくなり、“ステラの暴走”では済まなくなる。いや、最初から判りきっていた事だ。楽観的な未来に甘えて現実から逃避するのは止めよう。たった今、二人は帝国に反旗を翻したのだ。最強の障害を解き放ち、そしてまた世界に混乱を齎そうとしているのだ。自分のしている事は大罪。だが、それでも……。

「お願い、目を覚まして……っ！ ホクト……うさ子が……！ 貴方を助けたいってッ！！ 一生懸命作ってくれたチャンスだから……！ だからお願い……起きて下さい……！ 起きなさい ヴァン・ノーレッツジッ……！！」

「………………。ごちゃごちゃうるせえな 耳元で騒ぐなよ、シエルシ……………」

その声を耳にした瞬間、シエルシの足はピタリと止まっていた。背後、男はゆっくりと身体を起してシエルシの腕を振り払い立ち上がった。シエルシはなぜか呆然とその後姿を眺めている。そう、最初からこうするために助けたというのに。何故だろう。本当はとも怖くて、心細くて仕方がなかった。

もう、彼は目を覚まさないのではないかと。もう、自分の知るホ

クトではなくなっているのではないかと。助けても無駄なのではないかと。もう、脱出も無理なのではないかと……。しかし、その姿を見てしまったら何もかもが杞憂だったのだと気づいてしまった。そう、些細なミスなど問題ない。すべては“大成功”。失敗さえも彼は成功にしてくれる。頭を振り、首をこきりと鳴らしてホクトは振り返り、シエルシの頭をぽんと撫でた。

「それと、俺はヴァンじゃない。ホクト君だっつってんだろが」

「……………ホクト……………うう……………っ！　ううううっ！　！！！！」

思わず涙が溢れた。嬉しかったのだ。心の底から安心したのだ。きつと彼さえ目覚めればあとは何もかも全てが上手く行く。そんな予感がした。項垂れて涙を流すシエルシの肩を叩き、ホクトは姫が肩からかけていた鞆から煙草を一本取り出し、指先から魔術で火を起して煙草に火をつける。紫煙を吐き出し、そうして振り返った。背後にはうさ子を突破したガーディアンマシンがぞろぞろと迫ってきていた。

「さてと……………こりやどついう状況だか良く判らんが……………。ここはインフェル・ノアの中か」

「は、はい……………。それである、うさ子が……………」

と、行っている傍からホクトは片腕を翳し、空中にずらりと魔剣を構築して並べてみせる。指を鳴らし、それらが一斉にガーディアンマシンに突き刺さっていく……………。爆発が起こり、ホクトは呆気に取られるシエルシを抱きかかえて走り出した。

「ホ、ホクト!？」

「インフェル・ノアには何度か来た事が在るから構造はバッチリだ。大体どこも似たような作りのエリアになってるしな」

「そ、そうではなくて……っ」

「話は後だ。とりあえず脱出するぜ」

颯爽と駆け抜け、近づく敵は片手で薙ぎ払っていく魔剣狩り。その強さは絶対的で、そしてやはり思うのだ。彼を助けて心からよかったと思う自分がある。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレの心の奥底に残っていた小さなわだかまり……それを取り除く事が出来そうだと。

背後、うさ子はどうなったのかが気になった。だがうさ子は普通にしていれば誰にも負ける事がない、無敵のステラなのである。恐らくはそのうちステラの人格に切り替わってしまうのだろう。今なら戻れば助けられる……そうも考えた。だが、それは怖くて出来なかった。ホクトは　また、うさ子を殺すだろうか？　そんな風に考えてしまったらもう、何も言えなくなってしまう。

帝国の中枢、闇を纏った剣士が駆け抜けていく。シエルシは心の中に小さな嘘を残したまま、ホクトに抱えられて共に進んでいく。そう、大切な友との約束を護る為に。

「ステラ！ 大丈夫ですか、ステラッ！？」

外周通路へと辿り着いたケルヴィーは倒れていたステラを抱き起こし、その身体を揺さぶった。現場には破壊されたガーディアンマシンがごろごろ転がっており、ステラが戦って破壊した事は明らかであった。状況が理解出来ずケルヴィーは首をかしげる。倒れているうさ子の上に片手を翳し、術式を発動してステラの自己修復機能とエラーチェックを発動する。するとステラは呻きながらも意識を取り戻し、ゆっくりと身体を起した。

「ステラ！ 無事ですか！？」

「……………。ケルヴィー、ここは…………？ 私は一体何を…………」

「良かった…………。どうやら暴走してしまっていたようですね。今回の停電、まさか貴方が原因ですか？」

「…………可能性はありますが…………。すみません、何故ここに居るのかも全く記憶がないのです。ケルヴィー、精神の最適化とチェックをお願いしたいのですが…………」

「それは勿論。兎に角あとは剣誓隊に任せて撤退しましょう。さあ、こちらですよ」

ケルヴィーの肩を借り、ステラはゆっくりと歩き出す。そんな二人とすれ違い、現場に駆けつけた二つの人影があった。エレット少佐、そしてシグマル大佐である。ガーディアンマシンが片っ端から破壊されている惨状にエレットは驚き眉を潜めた。

「大佐、これは一体…………？」

「うーん、良く判らないけどね。魔剣狩りが脱走したって話だよ」

「魔剣狩りが!? 一刻も早く連れ戻さなければ……!! 大佐、こうしては居られません! はやく捜索隊を組織し、レコンキスタの探索に向かいますよ!」

「まあ、そうなるだろうね。でも現状、あの魔剣狩りを止められるのは將軍クラスだけじゃないかな……。とりあえずおじさんたちは様子を見よう」

「そんな悠長な事を言っている場合では……た、大佐っ! 襟首を引っ張らないでください……っ!!」

ずるずるとシグマールに引きずられていくエレット。帝国は既に動き出し、脱出したホクトを追っている。一方その追われる魔剣狩りはレコンキスタの街に降り立ち、裏通りで煙草を啜っていた。

帝都レコンキスタは大地全てを巨大な建造物が入り組むようにして被いつくしている都市である。その街には様々な死角があり、逃げ場、隠れ場にはまるで困らなかった。追っ手をやり過ごし、ホクトは一息ついて振り返る。一緒に脱出してきたシエルシは薄暗い裏路地に座り込み、膝を抱えていた。

「この街すげえな。こんな誰も来ないような裏路地でも、ちゃんと清掃用のロボットが巡回してるから綺麗なんだぜ。エル・ギルスとは大違いだ」

あえて冗談交じりの明るい口調で喋りながらホクトはシエルシの隣に座り込んだ。脱出する時は泣いて喜んでいたシエルシだったが、レコンキスタに降り立つとこの様子である。女心は判らない……そ

んな風に考えつつホクトは姫の顔を覗き込んだ。

「後悔してんのか？」

「……………そういっわけでは」

「ま、今なら俺に拉致られたっただけで済む。ここでインフェル・ノアに戻る事だって出来る」

そう語るホクトにシエルシは目を向け、それから真剣な様子で立ち上がった。詰め寄るシエルシを前にたじろぐホクト……………。姫はホクトの身体に触れ、悲しげに眉を潜めた。

「……………ホクト……………」

「は、はい……………？」

「本当に……………ごめんなさい」

「は　？　何が？」

「私はあの時、貴方を背後から……………その、剣で……………」

悲しげにそう呟く。あの時の事は恐らくもう一生忘れられないだろう。手に残った嫌な感触はきつとシエルシをこれから永遠に苦しめ続ける……………。ホクトにはその事が良く判った。何人も何人も殺してきた彼とて同じ事だ。最初の殺人だけは　何故だろう。何度も罪を重ねても、きつと忘れられないから。

「その事なら気にする必要はないぜ。俺はもう気にしてないからな。

背後から刺されるなんて初めてじゃないし、それに剣で刺されたくらいじゃ俺は死なないしなあ……」

「え？」

「いや、まあこっちの話だ。兎に角お前は俺を助けてくれたんだろ？ 感謝してる」

「……………ホクト……………」

シエルシは目をうるうるすると涙ぐませながらこくこくと何度も頷いた。それから周囲を見渡し、魔法と光が溢れるレコンキスタの街を眺める。裏路地の狭いシャッターフレームの向こう、眠らない街は今日も賑やかに輝いていた。

「ホクト、うさ子の事ですが……………」

その話が持ち出されると、ホクトは自ずと表情を変えた。振り返ったその視線は悲しげにシエルシを射抜いている。思わず気圧されそうになったが、そこをぐっとこらえシエルシは一步前に出た。

「貴方を助けようと計画したのはうさ子です。私は彼女を助けただけ……………。貴方を本当に助けたのは、うさ子だったんです」

「……………。そうか」

「彼女はずっと後悔していました……………。貴方に謝りたいって言うてました。でも、一緒に行ったら“ステラ”として貴方を倒さなきゃいけないからって……………城に一人で残ったんです」

「当たり前だろうな。あいつが俺を捕獲するのは当然だ。一緒に居たら戦いになる……それが当たり前だった。顔を合わせりゃ剣を交えてきた。今日まで何度も……な」

寂しげに、しかし固い決意と共にホクトは言葉を吐き出した。紫煙は小さく空に昇り、やがて見えなくなって消えてしまっただろう。シエルシはホクトの手を掴み、正面に回りこんで必死に訴えかけた。

「貴方の力なら、ステラをずっとうさ子のままで居させる事も出来るんじゃないですか!？」

「俺は神様じゃない。そんななんでも出来るわけじゃないさ。それに俺は兎も角、“ヴァンは”きつとあいつを許さないだろうしな……」

ホクトの口調には何か引つかかる面があった。しかしシエルシはそれを気にする余裕がなかったし、引き下がってはいけないという決意があった。うさ子は友達……友達なのだ。たった一人、この世界において自分を友達を呼んでくれた少女……。その願いは絶対にかなえてあげたかったから。

「ホクト……! うさ子だって、きつと何か理由があつて……!」

「理由は色々ある。けどなシエルシ、結果として俺はうさ子を殺したし、うさ子はミラを殺したんだ。それ以外に何かある……? 何もねえよ、何もな」

「ホクトッ……!」

「　　はあ。こんな事、恩人に言いかないけどな……。お前にはきつとわかんねえだろうよ、こういう気持ちは。お前は何も知らない、世間知らずなお姫様だ。世界に、国に、人に……。護られてきた」

シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレの存在はホクトの言う通りであつた。今日まで敷かれたレールの上を丁寧に歩き、何もかも人に護られ、支えられ、幸福な人生を送つてきた。結果としてここに居る事にはなつて居るが、シエルシはホクトともうさ子とも違う。余りにも違いすぎる。

二人はそれぞれの“理由”を振りかざし、それで人を殺め続けてきた。理由がその免罪符となるだろうか？　ならない……。そう、ならないのだ。罪は罪、そして憎しみは憎しみだ。決して理由如きで消せるほど人の思いは柔ではない。思いは果たされねば積もり積もつて固まつていく。そしてそれは時として人と重く、強く縛り付けるのだ。見るに耐えぬほど、痛々しいほどに……。

「うさ子はステラ……。帝国のガーディアンシステムだ。俺はその帝国と戦う魔剣狩りと呼ばれる反逆者……。記憶喪失になつてなきや、お互い相容れなかつた」

「でもっ！　記憶さえなければ、貴方達はあんなにも仲が良かったじゃないですかっ！！　しがらみさえなければ……。一人一人、個人としてであれば！　恨みも憎しみも、使命も無ければっ！！　絶対に分かり合えるのにつっ！！」

「それが出来りや苦勞しないんだよ、お姫様……。ッ！！」

叫ぶシエルシの腕を掴み、ホクトは前髪で表情を隠しながら身を寄せた。ぎりぎりとは肩を掴む男の手に力が籠り、痛みでシエルシは

表情をゆがめた。ホクトはそれに気づき、手を離す。

「……………俺とあいつが一緒にいていい事は何も無い。それはお前も同じだ」

「え…………？」

「お前とはここで別れた。別に一緒に連れて行くって拉致ってきたわけじゃねえ。ただ一言礼を言いたかっただけだ。俺と一緒に来ても何もいい事はない。お前の人生が狂っちまうだけだ」

「ホクト…………」

「何かを得るからそれを失った時、取り返せない痛みを背負う事になる…………。お前には判らないんだよ、世間知らず。奇麗事ばかり口にしていても」

脳裏を、一人の姫の笑顔が過ぎった。ノイズ交じりの景色…………優しい世界。微笑んでいた美しい少女。綺麗な世界を思い描いていた。しかし、その結末は 血と雨と荒野の景色。死の“おい”が世界を包み込む…………失意の闇。

「死んじまったら意味がねえ。変えられなきゃ無意味だ」

「……………」

「兎に角、俺が勝手に脱出してお前らは脅されてたって事にしな。大事なお姫様を連中も無下には扱わんだろうし…………。じゃあな、シエルシ。助けてくれた礼は言っとくぜ。ありがとうな」

シエルシの肩を叩き、ホクトは背を向けて歩き出す。その背中が遠ざかり、足音が闇に消えていく。シエルシはその間ずっと項垂れ、考えていた。ぎゅっと拳を握り締め、顔を上げる。

「待ちなさいっ!!」

そして言葉にしてみる事にした。今までずっと、やりたい事も言いたい事も何もかも我慢してきた。自分はザルヴァトーレの姫であり、皇帝の妻になる存在だったから。そう、周囲に言われて生きてきたから。

従う事が間違いだったとは今でも思わない。そうする事で護れるものもあつたはずだから。しかし、シエルシは知つたのだ。この世界の闇も、友達という存在の暖かさも、仲間の頼れる姿も、そして世界と一人で戦う男の背中も……。

駆け寄り、振り返るホクトの手を掴み、両腕でがっしりとすがりついた。一瞬何をされているのかわからなかったホクトはシエルシの胸の感触を味わいつつ、小首をかしげる。シエルシは真っ直ぐに顔を挙げ、震える声で言つた。

「貴方は……貴方はさっきから、自分の言いたいことばかりっ！私だつて……私だつて、色々あつたんですっ!! 私だつて……考えるし、迷つたり不安になつたり……! これでも、頑張つてたんです……。なのに貴方は、お前には判らないとか世間知らずだとかっ」

「事実だろうに。そのままているのが幸せだ」

「そんな風に言われて、黙って引き下がりがりたくないっ! だったら教えてください……! 私に! この世界の事も……世間知らず”って言われなくて済む方法も……!」

ホクトは振り返り、煙草を投げ捨ててシエルシを見つめる。目に涙をいっばいに溜め込み、もう絶対に離さないという勢いでホクトにくっついていてる。ふと、その必死な姿が誰かの姿と被った。それは誰だったろうか？　今はもう会うことの出来ない姫？　それとも。

「私、貴方と一緒にいきます……っ！　貴方に好き勝手言われたまま、このまま帰るなんて出来ない！」

「はあ……？　あのなあ……もう頭が痛くなってきたぞ……。そんなに簡単に決めていい問題じゃない。お前はザルヴァトーレの姫で、皇帝の妻なんだから……」

「　貴方もそうやって、私を先入観で括ってるだけじゃないですか」

以前にも同じ事を言った人が居た。そう、旅の始まりは同じ言葉だった。ミラ・ヨシノはホクトの手を握り、不満気に言ったのだ。それはもう取り戻せない懐かしい記憶。きらきらと輝いていた……失ってしまった景色。

炎のように紅い、美しい髪を靡かせてミラは笑ったのだ。血まみれの、泥まみれの、罪に汚れた剣士の手を握り締め……言ったのだ。“貴方を知りたい”と。“私を決め付けるな”と。

「私、人形じゃない！　私だって自分で考えられるっ！！　姫だとか、そんなの……そんなの、私のすべてじゃない……っ！　私を何もかも判ったみたいなのを利かないで！！」

「……………。そりゃ悪かった。けど一緒に来てどうする？　お前に

とって何のメリットがある？ 冷静になれ、シエルシ。お前はそれでも人の上に立つ人間なんだ」

「判ってます、そんな事……言われなくても判ってる。でも、だって……納得出来ない！ 貴方に負けたまま、貴方に世間知らずとかなんだとか、子供扱いされたまま……！ うさ子の事も判つてくれないまま、このまま別れて……。今放したらもう、貴方とは二度と会えない気がするから……」

「まあ、そりゃそうなるだろうな……捕まるわけにはいかないし」「だから、一緒に行きます……っ！ 貴方が、うさ子と仲直りするって言うまで、絶対放しませんからっ！！」

意地になってぎゅうつとしがみ付くシエルシ。その少々間抜けな姿を見下ろし、ホクトは深々と溜息を漏らした。それから強引にシエルシを引っぺがし、その頭を撫でる。

「しょうがねえなあ……。どうなっても俺は知らないからな」
そうして黙ってその場に跪き、頭を下げる。姫は目の前に差し出された男の手におずおずと自らの手を重ね、そしてそれを握り締めた。

「 それでは、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ姫……。ここから先は一方通行、戻る事の出来ない舞台で御座います。不肖、この私……魔剣狩りのホクト君が、貴方を“誘拐”させて頂きますよう」

芝居がかった言葉で語り、そして立ち上がる。シエルシへと冗談

つぼく笑いかけ、ホクトは背を向けた。シエルシは握り締めた掌の感触に顔を赤らめながらもホクトへと駆け寄り、その背中と共に歩いていく。

「ちゃんと……困って下さいねっ」

「どんなDM発言だそれは……。まあいい、お前にも世の中の現実ってヤツを教えてやるよ。それが判ったらさっさと城に帰れ」

「む……っ！ 私、言っておきますけど帰りませんからっ！-！」

「それじゃ困るのお前じゃねえのか……」

「あ……。え、つと、でも……。あっ！！ 私はうさ子を元に戻す方法を見つけるまで帰りません！」

「なんだその取ってつけたような理由は……。っーかうさ子がどうしたんだ？」

「ああ、そこから説明しなければなりませんね、実は」

悠々と歩いていくホクトと、その背後についてちよこちよここと小走りにホクトを追いかけるシエルシ。二人はゆっくりと歩き出した。運命の分かれ道を分岐し、更にその先へ。その選択が何を意味するのかはまだ誰にも判らない。だが確かにそれは、二人が歩み出した最初の一步。この世界の物語を語る上で避けられない、とても大きくて大切な一步であった。

「……………さて、とりあえずこのままヨツンヘイムに居てもいい事は何も無いわけだが」

腕を組み、空を見上げてホクトは呟く。彼としてはこのまま戻って皇帝ともう一度やりあうと言うのも手ではあったが、“現状では”あの皇帝を一人で倒すのは難しいという気持ちもあった。魔剣ガリユウの調子はメリーベルの調整のお陰でよくなってはいたが、いまだ万全とは言い難い。もし本当に皇帝を倒すつもりがあるのなら、ガリユウの力を完全に解き放たねばならない。それが出来るのは高位の魔術師と錬金術師……つまり、メリーベルとミュレイくらい物なのだ。出来ればその二人がそろってホクトに力を貸してくれるのが望ましいのだが、特にミュレイとは仲違いもいい所なので目下そこが悩みの種である。

とはいえ、焦る事はない。恐らくこの世界の情勢は大きく動き始めているし、世界は動乱の時代に入ろうとしている。となれば、慌てずとも皇帝を討つチャンスはこれからいくらでもあるだろう。ホクトが解き放たれた時点で帝国にとっては大きなプレッシャーなのだ。ここは時を見て、それから行動を開始する方が得策だろう。

そんな事をほんの数秒で思考し、紫煙を吐き出した。何にせよ今はシエルシというとんでもないお荷物と一緒にいるのだ。命を投げ打つような戦に望むというの是在り得ない。色々と考えた結果、一先ずヨツンヘイムから脱出する事が先決　という結論に辿り着いたのだが。

「シエルシ、ちょっといいか？」

「はい、なんですか？」

「お前……いつまでそのボロボロのドレスなんだ？　つか、裸足ってお前……」

ふと見やるその視線の先、シエルシは脱出時の格好そのままでもたべたと歩いてきた。足元は確かにクリーニングロボットによつて清潔に掃除されているものの、流石にいつまでも裸足というわけにも行かない。というか何故今まで特に何も言わなかったのかホクトにしてみれば疑問だったのだが、単純にシエルシがはだしである事を自分で忘れていたというだけの話であった。

「そ、そういえば……地面が鉄だから冷たいですね」

「今更か……？　まあ、とりあえずはお前の服だな。そのまま歩き回つてたら、“お姫様はここですよ”って宣伝して歩いてるみたいなもんだ。お前の背中には、ザルヴァトーレの刻印もあるんだしな」

シエルシの背中が大きくはだけたドレスから覗く白い肌には背部ほぼ全面に渡つて刻まれた巨大な術式の姿がある。それはミュレイも同じ事なのだが、ザルヴァトーレとククラカンの姫には代々継承される術式なのである。しかもこれほどまでに大規模な術式は本来在り得ない為、非常に特徴的で見える者が見れば一発で身元がわかつてしまうのである。

それをあえて晒すデザインの服ばかり着ていたのは、彼女がザルヴァトーレの正当な王位継承者である事を歩いて示す為であったが、今は状況が違っている。広告は出来れば隠したほうがいい……いや、それくらいは隠して当然である。シエルシの背後に回り、じつとホクトは姫の背中を見詰める。恥ずかしそうに身をよじり、ホクトを突き飛ばすシエルシ。やましい意味ではなかったのだが、そうされ

るとなんだか変態のように見えなくもなかった。

「そ、そんなにじろじろ見ないで下さい……。この服結構恥ずかしいんですから……」

「………………。ま、兎に角服だな……。俺もこのままってワケにはいかねえし」

ホクトの情報も既に街の各所に伝達されている事だろう。今頃騎士団が血眼になってホクトを探しているはずだし、魔力波長は研究されているはずなので、それでロボットも探知してくる事だろう。状況は予想以上に切羽詰っているのだが、ホクトは相変わらず余裕の様子である。少々めんどくさそうに溜息を一つ残し、シエルシと共に歩き出す。

「とりあえず、まずはヨツン Heim からの脱出だな……。レコンキスタのターミナルまで行くわけだが、その前に装備を整えないとな」

「装備……ですか？」

「そうび、やぶけたどれす　じゃあ心許ないわけよ。俺も、少し変装した方がいいしな……。ちよつとシエルシ、あつちを向いててくれ」

「え？　はあ……。まあ、いいですけど……。へ、変な事はしないでくださいね？」

「しねえって……信用ねえなあ……。っ！　ほれ、兎に角あつち向いた！」

ぐいぐいと壁際に押し込まれ、シエルシは無言で目を閉じた。そうして数秒後、背後から肩を叩かれ振り返ると　そこには見えず知らずの女性の姿があった。

漆黒の長い髪を揺らし、豊満なボディを見せ付けるかのような挑発的な格好である。全身タイツといわれても仕方が無いようなその格好はレコンキスタではありがちなファッションなのだが、シエルシにとっては奇抜な服装のように見えた。が、そういえばうさ子もそんな服だったと思いなおす　というより、そもそもこの女は誰なのか……。とても嫌な予感がした。

「さて、じゃあお前の服を調達しに行きますかねえ」

「ちょ　　と待ってください！？　貴方、ホクトですか！？」

「当たり前だろう。他に誰に見えるっていつんだ？」

「いやっ！？　誰ですかっ！！」

ホクトと思しき女性は腰に手を当て低く笑ってみせる。何がどうなっているのかさっぱりわからずクエスチョンマークを浮かべるシエルシ。とはいえ、ホクトにしてみればそれは別段珍しい事でもなんでもなかった。

「ガリユウの中に取り込んである人間のデータをちよいとじって再現してるだけだ。元々喰らったデータと俺の肉体は同義だからな。後はそれをモニタージユ感覚で繋ぎ合わせたんだよ」

「ま、幻ですか？」

「いや、実体はあるし戦闘力もそのままだから幻とはちょっと違うな。まあ俺流の変装だと思ってくれ」

とは言え、声まですっかり変わってしまいもう完全にその様子は別人である。唯一名残である煙草を啜えたままスタスタと先に進んでいくホクト……。シエルシは慌ててその後を追った。

帝都レコンキスタは機械によって統率された巨大な群体である。帝国全土を支配する統率システム、“ミレニウム”によって全てが監視、管理されているのだ。それは所謂ディストピアと呼ばれる物であったが、基本的にミレニウムは重要な部分以外は人間を縛る事はせず、その為レコンキスタの住人は昼も夜も関係なく町中を練り歩いている。今も深夜だというのに、二人の前には沢山の人が行き買い様々なネオンが輝いていた。

「な、なんだかまだ納得が行かないのですが……」

「はいはい……。っと、そこで買っていきこう。剣誓隊御用達らしいぞ？　少しは動きやすい服が売ってればいいんだけどな」

すたすたと店に入ってしまうホクト。冷静に我が身を振り返ってみると、シエルシは顔が赤くなってしまう。なんて格好をして歩いていたのだろうか……。緊急事態だったとは言え、姫にあるまじき格好である。そそくさとホクトの影に隠れるように店の中に入ると店内に広がる無数の立体映像が目についた。店内は無人であり、コンソールを操作して服装を立体映像でフィッティング出来るシステムである。気に入れば購入し、実物を得る事が出来る。ホクトは手馴れた様子でコンソールを操作し、シエルシに立体映像を重ねていく。

「す、すごいですね……。流石は帝国の技術力というか……」

「さて、どういう服にしたもんか……。つなぎとかどうだ？ 動きやすいし汚れても大丈夫。冒険初心者の貴方にオススメ」

「もう少しお洒落なのはないんですか」

「ばっかお前！ お客さん困りますよ……。冒険初心者のくせに行き成りお洒落な装備ですか？ ちょっと敷居高いですよ。初心者はやっぱり“布の服”だろ」

「……………貴方が何を言っているのか時々真面目にわかりません」

「まあ冗談はさておき。動きやすく丈夫でお洒落な装備な……。結構注文が多いな。っと」

シエルシの身体に立体映像が重ねられ、その姿が変わっていく。カットソーの上にジャケット、下半身にはミニスカートにソックス、ブーツと次々にデザインが重なり、ホクトが購入ボタンを押した直後その服装がそのままシエルシの身体に実物として装備される。初めて味わう奇妙な感触に戸惑いながらもシエルシは新しい服をじっと見つめた。

「ま、真っ黒ですけど……。？」

「日陰者なんだから地味な色にしとけよ。後は作業用のグローブと……。ナイフだろ、ナイフ。ナイフだけあれば結構なんでも出来るし……」

ぶつぶつと独り言を漏らしつつ、ホクトは次々に装備品を購入していく。その間シエルシは一応変装という事でザルヴァトーレの国

旗にも描かれている月のエンブレムを模した髪飾りを外し、長い金髪を纏め上げていた。ホクトに色々ごちゃごちゃ装備品を渡され、それを大人しくいそいそと装備する。完成したシエルシの服を見つめ、ホクトはびしりと指差した。

「さあ、勇者シエルシよ！ 冒険の旅の始まりだ！！ 今ならもれなく、この白の勇者御用達アーマークロークがついてきます」

「……………。そんな重い服、着られないです……………」

「装備レベルが足りないんだな　　っと、破けたネグリジエは処分しちまおう。無人のシヨップなら足も付きにくいしな」

着替えを終えたシエルシはホクトと共に店を出て周囲を見渡す。それから何度かブーツを鳴らしてみたり、身体を伸ばしてみたり……。流石に最新テクノロジーであわせただけありサイズはぴったりで、とても動きやすい。くるくるとその場で回転し、それから嬉しそうになっこりとホクトに微笑みかけた。

「こんな庶民的な服装をしたのは初めてですっ！　中々良いものですね、ホクト！」

「さすが世間知らずなお姫様は言う事が違いますねえ」

「むー…………っ！　それよりホクト、このスカート……………丈がおかしくありませんか？　あんまりにも短すぎるような……………。これでは動きすぎたら下着が見えてしまうのでは？」

「うむ、その点は全く問題ない。どんなにヤバいポーズを取ってもギリギリで見えないという修正がかかるミニスカだからな。下か

「覗き込んでも無駄だぜ？」

「……下から覗き込んだらいくらなんでも見えてしまうのでは？」

若干空回りな会話が続き、二人は一緒に歩き出す。相変わらず変装したホクトには違和感があったが、シエルシはその後に素直についていく。歩幅の大きなホクトの後ろ、ちょこちょこことついていく姿はまるで子犬か何かのようだった。振り返るとホクトの視線の先、シエルシは嬉しそうに微笑んでいる。何となく言葉に出来ない思いで溜息を漏らし、それを誤魔化すかのように紫煙を吐き出した。煙は夜の街に立ち上り、吐息をかき消すかのようにゆっくりと淡く消え去っていく。そんな空を見上げ、ホクトは過去へ思いを馳せていた。

T h a n s h e (1)

帝国による包囲網は完成していたが、シャフトエレベータに紛れ込むのは簡単だった。そこで気づいた事が一つ。帝国が探しているのはホクトだけであり、シエルシに関してはまだ何の情報も出回っていないという事だった。その理由は色々と考えられたが、兎に角今が好機である。ホクトは完全に見た目がそもそも性別からして変わってしまったので発見されるはずも無く、二人はあっさりプリミドルまで降りる事が出来た。

プリミドルのターミナルに到着し、二人はそこで食事を済ませる事にした。真夜中の人気の少ないターミナルの中、売店で購入し

たパンを齧る。シエルシは一気に緊張が解けたのか深く溜息をついて余り美味しくないパンをじっと見つめていた。ホクトは一片手でパンを齧りつつ、もう片方の手で地図を広げてそこを眺めていた。

「無事に脱出出来て良かったですね……。まさかこんなにあっさり抜け出せるなんて」

「お前、今まで俺がどうやって逃げ回ってたと思ってたんだ？ 剣誓隊がどんなに探し回っても見つからない自信があるぞ」

「それにしても、貴方の噂は方々に響いていましたけどね。魔剣狩りのヴァン・ノーレッジさん」

悪戯っぽく笑いかけるシエルシの視線に目を向け、その額を小突く。元々大暴れして帝国を威嚇する為にわざわざ各地で戦っていたようなものであり、必要とあらばしっかり身は隠してきた。そこは万能魔剣ガリユウ様様なのだが……。兎に角今は次の目的地を決める事が先決だった。出来ればあまり大きくない街がいいだろう。帝国も今はシエルシを探していないとしても、直ぐに探し始めるに違いない。ターミナルや第四界層あたりはまだ帝国側の支配力は強く、安心して街を歩く事は出来ない。

「となると やっぱりカンタイルあたりが安全か」

「オケアノスまで戻るんですか？」

「ま、それが無難だろうな……。あそこはお尋ね者とかも普通に暮らしてる街だ、俺たちを売るようなヤツもいないだろうしな」

「成る程……そうですね」

納得した様子で小さく千切ったパンを口に放り込み、なんとも言えない顔をするシエルシ。宮殿で出る食事で舌が肥えてしまった彼女にとってターミナルでちよつと置いてあるようなパンはご馳走とは程遠い。ホクトは無言でパンを飲み込み、地図を片手に歩き出す。シエルシも慌ててその後につき、パンを一生懸命処理しながら走り出した。

再びターミナル内の昇降機で下の界層に降りる。プリミドールからエル・ギルスへ。ここで一度、ローテイスに寄ってメリーベルにガリユウの調子を見てもらいたかったのだが、それは後回しにする事にした。とりあえず拠点を確保しなければならぬという事と、それからシエルシの意見も汲み取った結果である。うさ子はホクトをまたあの楽しかった日々に戻したいといていた。だからシエルシはカンマイルに戻り、ガルガンチュアで待っているはずの仲間たちの所にホクトを連れて行きたかったのである。

それにシエルシに丸々説明する事はなかったが、今の状況はきつとあまり良くない。ローテイスにはバテンカイトスというギルドの総本山があり、帝国側も恐らくはそこに攻め込む準備を進めている事だろう。暫くは身を隠し、有効的なチャンスを待つ……。そんな方針を据えた以上、それに乗っ取って行動しなければならぬ。

エル・ギルスからオケアノスへ。オケアノスのターミナルからは、UG行きの列車が一本出ているだけである。カンマイルは砂上を移動する島なので、そこへ向かうにはギルドの協力がある。ターミナルから出ているギルドの船と交渉し、乗せてもらう事でカンマイルへと移動した。

相変わらず夜しかないような世界の中、乾いた砂の海の景色を眺めてシエルシは遠い目をしていた。潜水艦の甲板の上、まだ砂の残る手すりを掴んで風を受ける。その背後、歩きながら影を纏い、元の姿に戻るホクトが居た。男は姫の隣に立ち、砂の世界を同じように見渡す。

「なんだか……とても懐かしいです。またこうしてオケアノスの海が見られるなんて」

「って言っても、ここを離れてからまだたった数ヶ月だろ？ 元々住み慣れたプリミドールの景色の方が懐かしいんじゃないか？」

「そうかもしれませんがね。でも、私は……ここで初めて、自分の意思で何かをしようと思ったんです。貴方達に無謀と言われたり、無理だって言われたり……。でも、楽しかった。皆と一緒に居てくれたから……」

この世界で、この世界の最果ての地で。姫は一人で歩き始めた。ただ母に会いたくて……その為だけに自らの両足で歩き出したのだ。それは簡単な事ではなかった。苦難に溢れていたし、知りたくなかった現実、事実、突きつけられる無力さ……。様々な事があった。ホクトの言うとおり、ここを離れてまだ間もなく、そしてこの地で過ごした時はわずか。それでも……何故だかとても懐かしい。

「ホクト……貴方のお陰です」

「んっ？ 藪から棒になんだ？」

「この街に来て、ククラカンの暗殺者に追われている私を助けてくれた……。UG行きに一人賛成してくれた。護ると言ってくれた。一緒に歩いてくれた。共に戦ってくれた。そんな貴方だからこそ……貴方達と出会えたからこそ、私は婚姻の儀を受ける覚悟が出来たのです」

本当は 嫌で嫌で仕方がなかった。誰かの為に犠牲になる事も、

国の為に結婚することも……。それで結局母は居なくなつた。子供の頃は、あんなに夢を見ていたのに。大人になるにつれ、それは消えていく。消え去つてしまふ。あれほど強かつた願いさえ、何もかもが消えてしまふのだ。

「子供の頃は……。母のように、帝国と戦うのが夢でした。彼女のように、この世界皆が笑つて暮らせる世界を作る事を目的とし、思い描いていました。子供なりに、こつそり訓練もしたんですよ？ 魔術も齧つたし、剣も少し習いました。イスルギにですけど」

小さな頃、母は正しい事をして死んだ。居なくなつた。泣きじゃくり、泣き疲れ、起きた時には剣を手にしていた。小さな姫には絶対に振り回せないような大きな剣をよろよると掲げ、この世界を救うと一人で誓つたのだ。

イスルギはそんなシエルシに色々な事を教えてくれた。勿論彼が帝国に逆らう術を教えているのではなかつたのだと今のシエルシには判る。彼は夢を護ろうとしてくれたのだ。シエルシの心の中に輝いていた、あの頃の夢を……。シエルシは毎日イスルギと剣の訓練をした。魔法の特訓をした。失敗しても、何度でも挑戦した。諦めるなんて言葉を知らなかつた。それが、とても強い願いだつたから。「でも、どうしてなんでしようね……。段々と、忘れてしまつたんです。姉上や貴族たちや、城に使える給仕たちは私を帝国への供物としてしか見ていなくなつたから……。そうやって生きるしかないんだつて、でも諦め切れなくて……」

納得は出来ない。でもそれに従わねばならない日々。明日の事さえも自暴自棄で、気づいたら剣も魔法も投げてしまつていた。イスルギはそんなシエルシに何も言わなかつたし、シエルシもイスルギに稽古を強請る事はなくなつていた。今思い返してみても、強く思う。

あれは無意味な、人形のような日々だったと。

それでもこの街に来て、自分で何かをやってみようと思えたのだ。自分の意思で、婚姻の儀に立ち向かおうと思えたのだ。そこから逃げる事は出来なかったけれど。剣も魔法も使えなかったけれど。それでも、そこに立ち向かう勇氣だけは得る事が出来たから……。

シエルシは胸に手を当て、祈るように目を閉じた。それから優しくホクトに微笑みかける。この世界で最も美しく、尊い姫の笑顔……それはホクトも心惹かれる物があった。剣士も笑顔を返し、それから煙草を口に啜える。うさ子にもらったライターは今も現役で、それを手にした瞬間少しかだけ思い出してしまう。あの少女に剣を突き立てた時の事を……。

「ホクト。貴方はどうして……戦い続けるのですか？」

姫の真剣な投げかけ。剣士は煙草に火をつけながら空を見上げる。雲の彼方、空に浮かぶエル・ギルス……。理由。理由など考えても意味はない。なぜならホクトは 記憶喪失なのだから。

「あんまり外に居ると風邪引くぞ。そんな薄着でよくやるぜ」

「………………。貴方はいつもそうやって、私が真剣に話しているのに はぐらかすんですね」

「真面目に話すキャラに見えますかって問題だ」

「私は 貴方に会えて良かったと思っています。そして出来れば もう、戦いは止めて欲しいとも思っている……」

真剣な目で話すシエルシ。ホクトは無視して煙草をふかしていたのだが、横から伸びたシエルシの手が煙草を取り上げてしまう。そ

うしてぽいっと砂の海の中にそれが投げ捨てられ、ホクトは目を真ん丸くして啞然とした。

「おま……ポイ捨て姫……」

「オケアノスの海はナノマシンの海なんですから、これくらい大丈夫です。私だって馬鹿じゃないんですから」

「世間知らずだけだな」

「ホクト!!」

正面に回りこみ、シエルシはじつとホクトを見上げてくる。困ったように苦笑し、剣士は姫の頭をぐりぐりと撫でた。それから遠くを眺め、風の中でライターを握り締める。

「理由なんてもんは、いつだって曖昧だ。人はいつだって理由を求めるけど、でもそれだけがすべてじゃない。意味も理由も無くたって、やらなきゃならねえ事もある」

「……………ミラ・ヨシノの為……………ですか？」

恐る恐るそう訊ねるシエルシ。なぜだか泣き出しそうなその表情にホクトも困ってしまう。別にそういうつもりは無い。最初から、自分で。この手で選んで歩いてきた道だ。それが間違いだっただなんて思わない。

「徹夜で疲れてるだろ？ 部屋に戻って、カンタイルに着くまで休もうぜ。話の続きは……………また聞いてやるよ」

「……………むー……。判りました、ただしその約束は護って貰いますからねっ」

「へいへい」

片手をひらひらと振りながら去っていくホクト。その背中を見送り、シエルシは胸に手を当てため息を漏らした。彼は……………とても遠い気がした。でも、きつといつかは分かり合える……………そう信じたい。人の誰もがそうであるように。何にも囚われさえしなければ。ただ、分かり合う事も出来るのだと……………。

後を追い、走り出す。立ち止まる時間がもつたいなく感じられたから。止まっていた世界が動いているのを感じる。今この世界の中、自分は人形ではないのだと。そう感じる事が出来るような気がしたから。

Th a n s h e (2)

「なんつーか、ここに来るのも久しぶりの気がするな」

立ち止まるホクトの前、停泊したガルガンチュアの姿があった。数ヶ月ぶりに訪れるカントイルの街は以前とまるで変わっておらず、ホクトとイスルギがやりあったせいで破壊されたギルド本部の時計も壊れたままであった。シエルシは内心街の人々に申し訳なく思いつつ、けろりとした様子のホクトと一緒にここまでやってきた。

ガルガンチュアの扉を開こうとしてみるのだが、扉はロックされていて開かなかった。ホクトとシエルシは顔を見合わせ、それから首をかしげる。ノックしたりもしてみたが、中に人の気配は感じられない。

「留守なんでしょうか？」

「上から行ってみるかなっ」と

その場で跳躍し、一度壁を蹴って大きく舞い装甲板が上がっていきホクト。その姿が消えてしまい、シエルシは慌てて壁を登ろうとしてみたのだが、つるつるした材質の為必死にしがみ付いてもずると落ちてしまう。置いて行かれたのかと思い、がくぶるするシエルシの目の前で扉が内側から開かれた。

「ラウンジが空いてたぞ……つと、何をぶるぶるしてるんだ？」

「な、なんでもないです……」

「あ、ああ……そう？ まあ兎に角入ってみよう」

二人はガルガンチュア内部を歩いてみて……そして直ぐに気づいた。ガルガンチュアの中には砂の海豚の構成員が一人たりともいなかったのだ。以前ここに二人が居た時は、数十名の構成員が居たはずである。しんと静まり返った艦内の中、まさか本当に留守だったのだろうかとしエルシが心配し始めた頃。

「まあ、留守なら留守で勝手に使わせてもらおう」

と、ホクトがあっけらかんと言った。しかしそういうわけにもいかない。いくらなんでも不法侵入もいいところである。しかし他に行き場もないのが事実……。姫がそうして困り果ててしまっていた頃、二人はようやくロゼの部屋の前に到着した。ホクトは何となくその扉に手をかけ、そして鍵がかかっていなかったので一気にそれを開け放った。

部屋の中は几帳面な性格のロゼの部屋とは思えぬほど散らかっていた。主に床を埋め尽くしているのは書物であり、魔道具なんかも中には混じっている。何がどうなっただろうか、二人がきよとんとしている中。部屋の主は机の上に腰掛けたまま、寝不足な目を擦りつつ顔を上げた。

「……ホクト？」

「よお、ロゼ先生。勤勉なのはいいがこりゃひどいぜ」

「生きてたんだ……？ アクティが、ホクトは死んだって言ったから死んだのかと思ってたけど……」

「あ……まあ確かにあれは死んだっぽくも見えたが、二部に入る

為に必要な演出だったわけよ」

「あんた相変わらずたまにわけわかんない事言うよね……っと、そっちは？」

「ロゼ、私です。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレです」

「……………アレ？ あんたも帝国に行つたんじゃ……………？」

「待て、話はもう少し状況を纏めてからにしよう。色々説明する事もあるしな」

実際説明すべき事は山ほどあった。うさ子がステラと呼ばれる存在であった事。あの日、婚姻の儀での戦いの行方。ホクトが捕らえられ、それをシエルシとうさ子が救出した事。そしてここまで脱出してきた経緯……。その話をロゼは眠そうな顔で聞いていた。実際のところ彼が聞いていたのは半分程度だったが、ステラがうさ子でシエルシがホクトを助けて二人は逃げてきたという要点だけ抑えておけば別に問題ないだろうという判断である。

そうして話す間にホクトは会話をしながらてきぱきと足回りの本を片付け、埋まっていた応接用のソファを発掘し、その上に腰掛けた。シエルシはあちこちに転がっている本から魔道書を拾い上げ、本の山の上に座って興味深そうにそれを読みふけていた。ロゼは話を聞き終わると溜息を漏らし、それから机の上であぐらをかいたまま本を閉じた。

「まあ、シエルシが馬鹿だって事だけわかったよ」

「ああ、あいつは馬鹿だ」

「ば……っ！？ 馬鹿馬鹿言わないでください！！」

「ていうか馬鹿でしょ？ 普通魔剣狩りを救出とかするかなあ……。ま、それは兎も角二人とも不法侵入だよな？ 鍵はかけたはずだけだ」

「ラウンジが空いてたぜ。それよりギルドの連中はどうしたんだよ？ リフルは一緒じゃないのか？」

「……………まあ、それも話すと長くなるよ」

時は婚姻の儀の数日後にまで遡る。ギルドは皇帝の襲撃に失敗し、その時の戦闘で主戦力である魔剣使いたちの殆どを捕らえられ、殺されるという窮地に立たされていた。反帝国組織の勢いは一気に衰え、既に体勢を立て直す事が不可能な段階にまで追いやられてしまっていたのである。

当然、婚姻の儀襲撃作戦はほぼ捨て身の作戦であったのだから、この結果は当然とも言えた。反帝国組織の殆どの戦力をかき集めてのインフェル・ノア攻略作戦であったが、結局ハロルドのところまで辿り着けたのはホクトだけであった。

ホクトとハロルドの戦いの最中、他の場所では剣誓隊が出動し、反帝国組織の殲滅が行われていた。帝国側は婚姻の儀の一部として襲撃を計算しており、結果帝国に高い忠誠心を持つと同時に遺志を貫く力を持った姫を選抜する事に成功した。インフェル・ノアの内部に閉じ込める事で、徹底的に反帝国組織の人間を殲滅するのも簡単な事だった。要するに、ザルの警備も含めて全てが計算づくだったのである。

結局現場から生きて帰れたのはアクティとそれを発見したリフルの二人だけであった。リフルはアクティをつれてかろうじてインフェル・ノアを脱出。その後バテンカイトスへと戻ったのだが、帝国

が攻め込んでくるのは時間の問題であった。今のバテンカイトスには剣誓隊の襲撃に耐え切れるほどの戦力が残っていないのは明白だ。結果として、ギルド全体が纏まって襲撃に備えねばならないという事実だけが残ったのだが、そう簡単に事は終わらなかつた。反帝国組織のギルドだけがギルド組合に所属しているわけではない。反帝国組織の強行作戦のせいでまき沿いを食らった形になるそれ以外のギルドはバテンカイトスからの撤退を開始。中には帝国に降伏しようという声まであがることになった。

ギルドは内部分裂を起し、現在反帝国組織は非常に立場が危うくなっている。リフルはサーペントヴァイトと合流し、この問題を治めギルドを立て直す為にバテンカイトスに残った。そして砂の海豚のメンバーも全員バテンカイトスへと向かったのである。

「それでロゼ先生は一人でここに残ってる」と

「まあ、そういう事になるね……」

「良いんですか？　ロゼは砂の海豚の団長では……？」

「団長なら、リフルに譲ったよ。僕は砂の海豚の団長は引退した」

「えっ？」

何がどうなればそうなってしまうのか、過程を知らないシエルシはただ驚く事しか出来なかつた。しかしホクトは神妙な様子で腕を組みロゼを見つめている。

「ギルド的なものは全部リフルに引き継いだけど、ガルガンチュアは父上の遺産だからね。ガルガンチュアだけ僕に残ったってわけ。まあお陰で済む所には困ってないよ。一人じゃこんなデカブツ動か

せないけどね」

「そうだったんですか……」

「それで？ 団長引退してお前は何かやってたんだ？」

「……………過去の事をちょっと、ね」

机の上から飛び降り、本を放り投げるロゼ。それをシエルシがあわててキャッチしようとして額に直撃し、本の中に倒れこむ。

「ただ団長を辞めてゴロゴロしてたってわけじゃないらしいな」

「まあね……。やる事が無くなったから、色々と今まで出来なかった事に手を出してみたっただけけど……。それで？ 悪いけど、戻ってきててもホクトにやってもらおう仕事はないよ。今の団長はリフルだしね」

「んー……。まあ、確かにそうだけどな。俺に手伝える事は無いかな？ 少しここに居させてもらいたいんだが、その為なら働かせ？ 一人きりじゃ色々不便だろうしな」

片手を腰に当て、ロゼは少々思案する。確かにこの巨大なガルガンチュアの全てを一人で管理するのは難しい。実際、殆どのエリアの動力が落とされてしまっている状態だ。とりあえずガルガンチュアを使う予定は今のところないのだが、身の回りの事などはリフルが居なくなつて困っていた。

「ま、部屋ならいくらでも余ってるから好きにして構わないけど。特に今のところ手伝わってもらわなきゃいけないほど切羽詰ってる事

はないけど……そうだな。ホクト、後で一緒に行ってもらいたいところがあるんだけど」

「ん？ どこだ？」

「アンダーグラウンド」

流石に意味がわからず、ホクトもシエルシも首をかしげる。しかしロゼは冗談でもなんでもなく真面目な表情で言葉を続けた。

「そこに、ボクの父上が研究していた遺跡があるんだ」

「遺跡……？」

「ボクの父上は 。ロイ・ヴァンシユタールは……。元々は、帝国の技術者だったんだよ」

寂しげに、どこか遠いところを眺めながらロゼはそう告白した。彼が握り締めた一冊の本……それは、父であるロイが研究した術式について記されている所謂魔道書である。眼鏡を外し、少年は深く溜息を漏らした。ホクトと出会った事も、運命だったのかもしれない。今ならばそう思う事が出来る。

「とりあえずは飯にするか。シエルシもはらぺこだろ？ すっかり長旅になっちまったしな」

「ホクト、食事の用意が出来るんですか？」

「当たり前だろ……？ それよりシエルシも手伝ってくれ。ロゼは完成したら呼びに来るから、ここで待ってていいぞ」

「悪いね。じゃあ、お言葉に甘えさせて貰うよ」

こうして三人による再びの共同生活が始まった。部屋から出て行く二人の姿を見送り、ロゼは目を瞑る。様々な過去に、思いを馳せながら。

T h a n s h e (2)

「……………で、なんでシエルシはメイド服なの…………？」

食堂に呼ばれたロゼは、部屋までやってきたシエルシの格好を見て冷や汗を流した。なぜかシエルシはメイド服姿に着替えており、いざ食堂に着てみればホクトもエプロンをつけて頭にコック帽を乗せていた。

テーブルの上にはいくつもの料理が並び、三人で食べるには多すぎるくらいであった。シエルシはメイド服のまま、堂々とした様子で席についている。ホクトはテーブルに料理を並べ終わると帽子を脱ぎ、パンを手に取りながら答えた。

「ロゼ君、判ってないな…………。シエルシは今日からお姫様じゃなくてただのメイド！ そう、一人の使用人なのだ！」

「え？ そうだったんですか！？ 私、そんな事聞いてないですけど！？」

「じゃあなんでメイド服着たの……？」

「かわいいじゃないですか？」

「……………」

無言でスパゲティを取り分けるロゼ。なぜ黙ってしまったのかが判らずシエルシは小首をかしげていた。ホクトは立ち上がり、椅子の上に立ってそんな姫を指差した。

「シエルシ……お前の旅の資金は誰が出している!？」

「え？ ホクトですけど？」

「ホクトですけど？ じゃねえッ!!!! つまり、お前は今俺に養われているわけだ!！」

「そうですね」

「つまり、お前は俺に護られて生活もさせてもらっている代わりに何かをしなければならぬわけだ。世の中等価交換だからな」

「はあ」

「というわけで、お前は今日からメイドなのだ。メイドプリンセスシエルシなのだ」

「よく意味がわかりませんが、わかりました」

「あんた達の会話聞いてると頭が痛くなってくるよ……………」

そんな前口上が終わり、三人同時に“いただきます”をする。同時にそれぞれ料理を口に運ぶのだが、シエルシとロゼは驚いてホクトへと目を向けていた。

「お、おいしいです……」

「美味い……。ホクト、料理上手だったんだ……」

「これくらい旅人なら誰でも出来ると思うぞ。まあいつから旅しても料理出来ないやつもいたけどな……」

能天気な笑顔を浮かべ、料理作りを命令していた姫の事を思い出す。焚き火の前でナイフとフォークを握り締め、肉が焼けるのを今か今かと涎をたらして待ち構えていた……。それと比べれば、シエルシは大分品がいいような気もする。

「そうだロゼ、私もホクトと一緒に料理というものをしてみたんです！是非食べてください」

満面の笑顔でシエルシが掲げた皿には何か黒っぽいものがこんもりと盛られていた。予想通り過ぎて全く驚く気配も無いロゼであったが、一応お約束なので質問してみる。

「シエルシってさ……料理した事ある？」

「ありませんが、挑戦してみました。何でもやる前から諦めていてはいけないと、ホクトから学びましたから」

遠くを眺め、目をキラキラと輝かせるシエルシ。対照的にロゼは

ホクトを睨みつけていた。別に何も悪い事をしたわけではないのにうらまれるホクトは視線を反らし、自分が作ったスパゲティを啜る。

「まあ……食べてみるよ。意外と美味しいっていうのも在り得るし……。ところでこれ、何？」

「はい、なんでしょう？」

「………………。なんでしょうかじゃなくて、名前は？ 料理名は？」

「わかりません。ホクトが料理している隣で見よう見真似でやってみましたから。でも、とっても楽しかったのできつと美味しいはずですよ」

何故楽しい！美味しいなのか全く理解出来なかったが、先ほどから一向に視線を合わせる気配の無いホクトの様子から大体中身は想像出来る。ロゼは無言でそれを皿ごと受け取り、てくてくと歩いて危険物のダストシュートに放り込んだ。

「あああああああ ツ！？ な、なんて事をするんですかあっ!?!？」

「君が何しちやってんの……？ 人の潜水艦の厨房で未確認物体生産しないでくれるかな」

「う、うう……っ！ 私、頑張ったのに……。やっぱり私は駄目な姫なんですわ……」

「流石冒険初心者、やる事が違っぜ」

「いや、冒険に関しては上級者でしょ、明らかに……。悪い方向で、
だけど」

そんなうまい事を言いつつ、ロゼは食事を進める。涙目になって
いるシエルシだったが、ホクトの料理が美味しかったので直ぐに機
嫌はよくなった。食事も終わりに差し掛かった頃、丁寧に口の周り
をナプキンで拭うシエルの傍らホクトは話を切り出した。

「んで？ UGにある遺跡とか行ってたがそりやどついう事なんだ
？」

「UGに潜入した時、遺跡があつたでしょ？ 発掘途中だつたやつ」

シエルシもそれは覚えていた。結晶樹林の奥地に在つた巨大な空
洞、そこに埋まっていた巨大な遺跡……。正体不明だつたので完全
に今まで記憶の外に放られて居たが、確かにとつてもないインパク
トのある存在だつた。

「あれの名前は、“フラタニティ”つて言つらしい。古代遺跡の一
つなんだけど、帝国はその存在を昔から重視していたんだ。で、そ
の研究主任がボクの父上であるロイ・ヴァンシュタールだつた」

「そついえば、どうして帝国軍は遺跡を発掘していたんでしょつか
？」

「出ましたよメイドプリンセスの世間知らず発言……。古代遺跡つ
てのは、失われたロストテクノロジーの宝庫なんだよ」

現在最も文明が進んでいる世界は第三階層ヨツン Heim である
それは明らかだ。しかしオケアノスに点在する古代遺跡には、そ

のヨツンヘイムの技術力をも遙かに上回る失われた技術が回収される事がある。というより、ヨツンヘイムの発展はそうした古代技術の再現によって支えられているのである。

それ故に一攫千金目当てで遺跡を探索する冒険者などが後を絶たず、実際それによって様々な技術が発掘される事となった。大型の遺跡であればあるほど貴重な資源や技術が回収される可能性は高いとあり、帝国もオケアノスの管理には力を入れている。冒険者はそうした帝国の目を掻い潜らねばならないという事もあり、一攫千金と言ふには割に合わない仕事でもある。

「つまりそのフラタニティという遺跡には何か重要なテクノロジーが眠っていると……？」

「そう考えるのが無難だろうね。まあ、でも今直ぐフラタニティに行きたいわけじゃないんだ。準備もあるしね」

「実際、あそこの警備も頑丈になってると思うぞ。あれだけ前回派手にやっちまったからな……ははは」

過去の事を思い出し、シエルシはなんともいえない表情を浮かべた。そんな姫に気を遣ってか、ロゼはあえて話題を切り替える。

「それで、そっちはこれからどうするつもりなの？ シエルシだっ
ていつまでもこのままってわけにはいかないでしょ」

「……それは、判っています。とりあえず、うさ子を元に戻す方法が無いが、少し調べてみたいんです」

「元に戻すっていうかステラが元なんじゃないの？ うさ子っていうのはステラがおかしくなった状態なんだし……」

「う……っ！　そ、それもそうなんです……」

「ま、地道にじっくりやってくさ。な、シエルシ？」

ホクトに言われ、おずおずと頷くシエルシ。実際ノープランなのは今更である。とりあえず今は出来る事を考えていくしかない。

そんなわけで一旦会話はお開きとなり、ロゼは部屋に戻りシエルシとホクトは後片付けをする事になった。手際良く食器を洗っていくホクトの隣に立ち、シエルシはその動きを眺めながら真似するように皿を手に取る。

「……………ホクトは、何でも出来るんですね」

「ホクト君は万能だからな……。そういう姫は皿洗い一つ出来ないのか」

「むう……っ！　私だって皿洗いくらい出来ますっ！」

直後、皿が手の中から零れ落ちパリンと音を立てて碎ける。シエルシは目をうるうるさせながら困った様子でホクトをじっと見つめた。仕方が無いので割れた破片を拾い集めると、シエルシは落ち込んだ様子でメイド服のスカートを両手で握り締めて頂垂れていた。

「城を出てから……なんでも楽しくて、新鮮で……でも、何も出来ない自分を思い知らされるんです」

「そりゃ、城の中でへらへらしてた姫様には出来るはずもねえさ」

「っ……っ」

「でもま、これからやって覚えていけばいいだけの事だろ。そんなにしょげるなって」

ぐりぐりと頭を撫でるホクト。シエルシはそっぽを向いてしまう。皿洗いを再開したホクトの隣、今度は邪魔しないようにシエルシはじっとその手元を見て皿を洗う練習をしていた。

「私も……一人で歩いていく事が出来るようになるんでしょうか」

「そりゃ、立場にもよるけどな。一人で何でも出来なきゃいけないから出来るようになったってだけだよ」

「………………。私は恵まれていたんですね」

「何を今更」

「私は　ひとりぼっちではありませんでしたから」

寂しそうにそう呟くシエルシ。それが自分の為の言葉であると気づき、それでもホクトは手を止めなかった。シエルシは黙り込み、無言で皿を洗う練習をしている。練習などする必要もなく誰でも出来るような事……それでもシエルシにとっては初めての事。自分の意思で決め手、そしてやろうと思った事。

綺麗に皿を洗い、シエルシは少しだけ嬉しそうに微笑んだ。ドレスの裾をまくり、白く綺麗な指先が冷たい水に打たれるのも気にせず懸命に洗い物に挑んでいた。ホクトは何も言わず、ただ作業を続ける。二人は肩を並べ、同じ事をする。当たり前な事を一つずつ出来るようになって行く。それが今はなんだか、少しだけ楽しく幸せに感じられるような気がした。

「ホクト、お願いがあるんですが」

「ん？」

「私に剣と……それから、魔法を教えてください」

「何でだ？」

「一人で決めて、一人で生きていけるように……。私も強くなりたいんです」

一度は諦めてしまった。投げ捨ててしまった。忘れようと、心の奥底にしまいこんだ夢……。でも、今ならそれを自由に願える気がした。彼は決して否定もしないし、馬鹿にもしない。ただ事實は事實、現実には現実として自分と対等に話してくれる。だから、笑われてもいい。きっと彼はそれでも、期待に応えてくれるから。

「じゃあ、今日からは師匠と呼びな」

あっさりと、冗談交じりにそう語る。ならばそれに対する答えは一つだ。シエルシは嬉しそうに頷き、それから彼の名前を口にした。

Thank she (3)

『やはり、列車移動は車内の方がいいな……』

白騎士の呟きにミュレイは目を丸くした。それ以外にどうすればいいのかと言う考えを持つのも当然だったが、過去に白騎士は屋根の上にしがみ付いて移動するという貴重な経験を得て居るのだ。

プリミドールからエル・ギルスへと向かう為にターミナルを指す列車の中、流れていく景色を前に白騎士は連結部に立ち髪を靡かせていた。様子を見てやってきたミュレイはその隣に立ち、閉じた扇子で白騎士の肩を叩く。騎士は振り返り、それから仮面に手をかけた。

「ミュレイ……？ どうしたの？」

「いや……。お主がわらわのところに来てから、今日まで色々な事があつたと……一人で思い返していたところじゃ」

「もう、一年以上になるからね」

長く伸びた髪を揺らし、昴は凜とした瞳で世界を眺めている。もしも……白騎士としてではない、北条昴としての彼女と出会ったミュレイが生きていたとして。そして異世界で強くなった彼女を見てどんな事を思うだろう？ 在り得ない仮想……しかし、昴は何となく思う。今ならミュレイとも、堂々と胸を張って話が出るのではないかと。今なら、ミュレイを……ちゃんと護る事が出来るのではないかと。

「お主には、色々と助けられたな……。わらわの知らない所で色々

と働いてくれたのじゃろう?」

「自分で選んで、自分で決めてここに居る……。だから、大丈夫。辛いと思っただ事なんて一度も無い」

「ほお……。随分と献身的じゃな」

「……まあね。こう見えても、どうやら尽くすタイプだったらしい」

「冗談交じりに笑い、肩を竦めてみせる昴。壁に背を預け、騎士は優しく微笑んでみせる。彼女の胸の内に渦巻く様々な感情……。しかし、それは決定的に以前とは異なっている。

闇の魔王を倒そうと、勇者になろうと必死に強くなってきた。けれども結局魔王には勝てず、そしてミュレイは彼女の傍を離れなかった。力だけを求めても何も解決しないのだと、何となくわかったような気がしたのだ。この世界を変える為に、たった一人の姫を救う為に必要な事……。それは、本当に戦いだっただろうか、と。

かつて、他人の顔色を伺ってびくびくと生きていた少女は今や自分で考え、己の意思で戦う事が出来る戦士になった。勇気力で時を遡り、法則を捻じ曲げてここに居る……。存在そのものが大罪、しかしそれは了解の上である。勿論全ての事は、ミュレイには語るつもりはない。ただ……。彼女の傍で、彼女を護りたい……。そのために全てをかなぐり捨てた。己の未来さえも……。

「お主は、ばかじゃなあ……」

「え……?」

ミュレイはそんな白騎士を見ているのが辛かった。かつて白騎士

の姿は、確かにミュレイの理想に近い。己の役割の為に全てを賭し、自由を捨て、冷静にただ目的だけを達成する……。それは確かに正しい事なのだろう。一度は彼女が、彼女の妹に強いた事だ。しかし……実際に白騎士と触れ合って、今は違う思いを抱いていた。

「お主の人生、お主の自由に生きよ。何かに囚われて生きるのは、お主には似合わぬ」

「……………ミュレイ」

「お主は美しい。お主は強く、気高い。お主は脆く、硝子細工のように繊細じゃ。戦いなど向かぬ……………ただの女子ではないか」

「それでも、私は貴方を護りたい。私を護ってくれた、貴方の為に戦いたい」

「……………。お主、前から思っておったがかなり頑固じゃのう……………」

「お褒めに預かり光栄です、姫様」

「ほーめーとーらーんーわー……………！ まあ、良い。そんなにお主が傍に居たいというのなら、勝手にしろ」

「お言葉の通りに」

仮面を装着し、白騎士は風の中で背を向ける。ヨシノの家紋が光を浴びて輝き、その力強い後姿が遠ざかっていく。ミュレイはそれを寂しげに見送り、扇子で口元を隠した。

元々、昴は自分の意思でこの世界にやってきたわけではなかった。彼女には彼女の生活があったし、夢も希望もあった。だがその全て

をなげうつてまで望むこの世界の戦いの先、輝かしい未来はあるのだろうか。

「異世界からの……救世主？」

一方、ガルガンチュアの自室の中、ロゼは一人で声を上げていた。父の手記を読みふけっていると、その単語が何度か出現したのである。最初は古来から存在する伝承の一つとして重視せず読み流していたのだが、余りにも何度もその言葉が続いて紡がれているので少年も流石におかしいと思い始めていた。

古代遺跡、“フラタニティ”。そして救世主の存在。父親の研究していた事はロゼには難解すぎて理解することさえも難しかった。だがその二つに深い結びつきがあり、そして帝国の成り立ちとも関わっているのだと知った時、ロゼの中で燻っていた気持ちはずいぶん燃え上がり始めていた。

今までは忙しく、団長業務のせいで父の生前の記録を漁る事は愚か、殆ど子供らしい事は何もしてくる事が出来なかったロゼ。今、実際に団長を引退して自由に動いてみて初めて判る事……。父と帝国の関係。そして父親が何故殺されたのか。砂の海豚とはなんだっただのか……。

何日もろくに眠っておらず、ロゼの顔色は酷かった。しかしやる気に満ち溢れ、手は止まる様子もない。次々にページをめくるロゼであったが、その時扉をノックする音が響いた。入ってきたのは相変わらずメイド服姿で、なぜかおでこにはんそうこうを貼り付けたシエルシだった。ぐずぐずと子供のように泣きながらロゼに紙切れを突きつけた。

「今日の、こんだてですっ」

「………………。何泣いてんの…………？」

「だって、ホクトが……ぐすっ！ ホクトが、剣の稽古つけてやる
っていつて、私の頭思いつきり叩いたんですっ！！！」

「………………。あのさ、稽古なら普通じゃない…………？」

「開始直後、行き成りばしーんって叩いたんですよっ」

ロゼは何となく想像した。その後、ホクトがへらへら笑いながら
シエルシの攻撃をいなす姿を……。シエルシは泣きながらムキにな
って襲い掛かるのだが、そんな初心者 of 攻撃をあほホクトが防げな
いはずも無い。恐らくシエルシは額を叩かれたのが痛くて泣いてい
るのではなく、ホクトに手も足も出なかったのが悔しくて泣いてい
るのだ。

「ま、とりあえず判ったよ。ボクはまだ調べ物があるから、ホクト
にリベンジしてくれば？」

「そうしますっ！！！！ では、私はこれでっ！！！」

走り去っていくシエルシを見送りロゼは溜息を漏らした。ホクト
とシエルシがやってきてから毎日が少々騒がしくなり、急にリフル
や仲間達の事を思い出した。その記憶をかき消すように目を瞑り、
深く息を吸う。時間は有り余っている。だが、世界の流れはそれを
待っていてはくれないかもしれない。

「しかし、伝承と遺跡…………… どういう関係があるんだ…………？」

と、呟いたところでシエルシの叫び声とホクトの爆笑する声が響
き渡ってきた。眼鏡を外し、額を押さえるロゼ。やはり少々、彼の

日常は騒がしくなりすぎているようだった。

Than she (3)

「ほー……。これはまた、随分と派手な事になっておるのう……」

エル・ギルスの大陸を移動する列車は停止し、ミュレイはその線路の先に続くローティスの街を眺めた。街の上空には帝国の戦闘空母が三隻浮かび、そこから断続的に市街への砲撃が続いている。空中では連続して爆発が起こり、市街地は燃え上がりまさにその様子は戦場そのものであった。

「予想以上に帝国の動きが早い……。奴ら、ローティスごと攻撃してバテンカイトスからギルドの連中を引き出すつもりかの」

『帝国の戦闘空母が三隻……。勝ち目は薄いな』

「しかし、まだ市街地には一般人が残っているはずでござるよ！
これでは無差別攻撃でござるっ！！」

いきり立った様子で叫ぶウサク。その背後、ゲオルクも不快感を露に空を見上げていた。昴とてこんな横暴が許されて良いとは思わない。だが、冷静に動かねばならないのも事実だった。

昴たちの旅の目的はギルドと手を組み、帝国の動きを牽制する事にある。つまりここでギルドが滅んでしまえば次はククラカンの番になってしまおうし、余計な横槍を入れてククラカン最強の戦力であ

る白騎士やミュレイが共倒れになるような事があれば本末転倒だ。結果、白騎士は一人で歩き出した。その肩を掴み動きを制するミュレイであったが。白騎士はその手を優しく払いのけて頷いた。

『私が先に行つて安全を確保してくる。ゲオルクとウサクはミュレイと一緒に来てくれ』

「白騎士殿一人ではいくらなんでも危険でござるよ！」

『いや……私の推測が正しければ、ギルドもただで潰れるとは思えないしな……』

この白神装武と呼ばれる防具を生み出し、異世界を渡る“魔女”がバテンカイトスには控えているのだ。彼女が黙つてやられるとは思えないが、完全に安全と言えるわけでもない。兎に角ミュレイと一緒に行くのは危険すぎる……そう判断した。しかし姫は溜息混じりに白騎士に歩み寄り、その顔を扇子で叩いた。

「生意気を言うでないわ、阿呆。わらわを誰だと思つておる……？ お主は少々、わらわに大して過保護すぎるわ」

ミュレイはそう呟き、腕に刻まれた炎の魔剣の術式を開放する。浮かび上がる空中の魔法陣からその赤き剣を取り出し、炎を纏つた剣を片手に携えた。それはゆっくりと展開し、美しいヨシノの家紋が刻まれた扇へと変化する。

「大魔道、ミュレイ・ヨシノとはわらわの事。あんな空母くらいどうということはないわ」

『ミュレイ、しかし』

「ま、そういうこつた。白騎士、お前は先行してバテンカイトスの様子を見て来い。俺とミュレイは空母に攻撃を仕掛ける」

『ゲオルク！』

「大丈夫だ。こいつは普段は姫なんかやってるが、お前の思っている以上に“えげつない”からな」

「なんじゃその言い草は……。まあ良い、兎に角空母三隻ならわらわ一人で落とせる。お主は市街地の方を頼むぞ、白騎士。ウサクは白騎士のサポートを頼む」

『……………。判った。正し、無理だけはしないでくれよ』

「たわけ、誰に物を言ってる？ お主程度、まだまだ未熟

！ 一騎当千の魔剣使いの力というものを見せてやろうではないかっ！！ のう、“ヴェルファイア” ツ！！」

高々と空に掲げる扇。ミュレイの足元に炎の魔法陣が渦巻き、それが花開くように見る見る広がっていく。炎が大地から溢れ出し、空に舞い上がったミュレイを支えるように大地から巨大な腕が飛び出してきた。姫を抱くようにして現れた巨大な二足歩行の龍、“ヴェルファイア”は巨大な翼を広げ夜の空に吼えた。ミュレイは優雅に足を組み、その掌の中で扇を閉じて剣へと変形させ、足元の白騎士を見下ろして笑った。

「ゲオルク、仕掛けるぞ。久方ぶりに暴れられそうじゃ」

啞然とする白騎士。しかし、冷静に考えてみればこれで当然なの

である。ミュレイ・ヨシノは世界屈指の大魔道。その実力は昴も知っていた。だが……強くなってみて。自分もまた魔剣使いになつてみて実感する。ミュレイの実力。ミュレイの放つ力の大きさ。その何もかもを飲み込み広がっていく炎のような、力強い意思。歴然とした差を感じた。付け焼刃ではない、各個たる歴史と実力に裏打ちされたその力……。昴とは比べ物にならない魔力。否、こんなに強い力の持ち主は。今まで一人としてみたことがなかった。その力はあるの魔剣狩りも、ステラさえも凌駕している。

ヴェルファイアへと飛び移ったゲオルクを確認し、龍は空へと舞い上がる。全長20メートルの怪物の上、ミュレイは昴へと叫んだ。

「そつちは任せるぞ！ 空はわらわに任せよ！ “頼る”ぞ 白騎士―！」

「。ああ、判つたよ……判つた。こつちは任せてよ、“相棒”」

龍が空母へと突き進んでいく。それを見送り、昴は走り出した。傍らを追走するウサク……。二人の頭上、龍の上でミュレイは少しだけ二人を案じるように目を伏せた。しかし直ぐに気持ちを切り替え、空に浮かんだ帝国の空母を見据える。

「しつかり捕まっておれ。突撃するぞ……！」

「お手柔らかに」

ヴェルファイアが咆哮と同時に炎のブレスを放出する。熱線は空母へと直進し、途中に浮かんでいた自立機動平気を薙ぎ払っていく。空母の周辺に展開されている魔力障壁へと直撃した攻撃は一発で障壁を貫き、外郭を爆破する。龍は全身から炎の弾丸を一斉に放出し、

近づく機動兵器を迎撃しながら空母へと突っ込んでいった。

障壁を貫かれたその一瞬の隙についてカタパルトの上に着陸し、ヴェルファイアは両腕を振り回して付近にあった機動兵器を片っ端から叩き潰していく。その最中ゲオルクとミュレイはその場から飛び降り、風が吹き荒れる甲板の上で周囲を見渡した。

「一度取り付いてしまえば他の空母も攻撃出来まい。ふん、容易いのう」

「さて……動力を破壊すれば落ちるか……？」

「中途半端に壊すと市街地に落下する恐れがある。出来れば面倒じやがコントロールルームに行つて乗っ取りたいところじゃな。後々使えそうじゃし」

「じゃあ俺とミュレイはコントロールルームに……」

「ヴェルファイアは他の空母を攻撃してもらうかの。おい、そういうわけじゃからここはもついいぞ。向こうを頼む」

返事をするように龍は吼え、大空に再び舞い上がった。わらわらとカタパルトに沸いてくる機動兵器たちが一斉にミュレイに銃口を突きつけるが、姫が魔剣を振るつた瞬間その足元が同時に盛大に爆発し、カタパルトは崩壊。機動兵器だったものはすべて残骸へと成り果てていた。

「フ……容赦ないな」

「機械相手に情けは無用。往くぞ、ゲオルク。久方ぶりの戦場じゃ……楽しみながら、な」

「了解した、炎魔の姫よ」

ゲオルクが魔剣を展開し、それを肩に乗せて構える。ミュレイはふわりと浮かび上がり、舞うようにして移動を開始する。二人の前に再び大量の機動兵器が溢れ返るのだが、どちらも気にする気配はない。ミュレイは口元に優しく笑みを作り、再び呪詛の言葉を紡ぎ出した。

空に浮かぶ空母の一つで大爆発が起こった頃、昴とウサクは市街地への突入を果たしていた。街のあちこちで帝国騎士団による攻撃が行われており、それはただの一般市民をも巻き込む戦争へと発展していた。

たまたま街に滞在していた旅人だろうが商売人だろうが、一切合切区別無く騎士団は皆殺しにして行く。過去何度か戦場になった事のあるローテイスの街だったが、ここまで無差別な攻撃が行われる事は今まで無かった。ターミナルへと逃げ込んできた幼い少女へと帝国騎士が剣を振り上げた時、白騎士はその剣を振り上げた騎士の腕を魔剣で切り飛ばしていた。

悲鳴が上がる中、無言で時を停止し斬撃を放つ。瞬く間にその場に居合わせた騎士たちが全員スタスタに切り裂かれ、何が起きたのかわからないうちに倒れていく。騎士の返り血を全身に浴び、白騎士は少女へと振り返った。

「……………知っていたさ、そんな世界だった事は」

少女は何も言わず、震えながら白騎士を見つめていた。ウサクが少女をターミナルの奥へと逃がし、白騎士に駆け寄る。市街地は燃え上がり、砲撃で建造物は崩れ、騎士団による無差別殺戮が繰り広げられている……。各地で反帝国ギルドが抵抗しているものの、戦力差は圧倒的。状況は絶望的だった。

『行くぞ、ウサク。余計な物には手を出さず、バテンカイトスを目指す……』

「……承知したでござるよ」

二人がバテンカイトスを目指し移動を開始した頃。表の顔である、娼館バテンカイトスのエントランスでは激しい銃撃戦が繰り広げられていた。反帝国組織はそこにバリケードを作り、銃撃で騎士たちに応じている。その中にはライフルに弾丸を装填し、疲れた様子で作業を繰り返すアクティの姿もあった。

すべては予告無く、突然行われた。なんでもない平日であるはずのこの夜の中、突然帝国の空母からの砲撃が降り注いだのである。街はパニック状態に陥り、一斉に機動兵器が投入されてきた。続けて帝国騎士団がどっと押し寄せ、あっという間にローティスは戦場と化してしまった。たまたまバテンカイトスの中に居たから良かったものの、外に居たら自分もどうなっていたか判らない……。そう思うと胸が張り裂けそうな思いだった。

少女はライフルを構え、それを連射する。机とテーブルを組み合わせた簡易バリケードはいつまで持つかわからない。対魔剣使い用に開発された特殊弾頭ならば、機動兵器にも十分効果がある。アクティは後方からそつと狙撃を行い、入口から入ってくる機動兵器を破壊し続けていた。

一体もうどれだけの数を破壊したのかわからない。どれだけの間戦っているのかも判らない。だがここを突破されたらこの街は終わる。その気持ちに少女の片隅にあり、絶対に引くことは出来なかった。

バテンカイトスそのものは異空間に存在している為、娼館としてのバテンカイトスを破壊したところで別段ギルドは痛くも痒くもない。しかしこのバテンカイトスを帝国が攻撃しているのにはきちん

と意味があるのだ。

町全体の無差別攻撃も含め、帝国は示している。“ギルドに加担する街は容赦なく破壊する”という意思を。ギルド側はそれに対し、抵抗する意思をみせなければならぬ。街を護らねばならぬ。そうしなければ世論はギルドの正義を肯定しないし、ギルドに誰も関わりようとは思わなくなってしまう。帝国が強攻策に出た時点でギルドの対応は詰んでいるも同然だった。しかしそれでも、抵抗し人を救わねばならない。それこそ反帝国ギルドが……少なくともアクティ・ノーレッジという少女が望んだギルドの形なのだから。

だが空しくもバテンカイトス内部では話が纏まらず、このままローティスを放置するという意見が過半数を超えていた。ローティスを護るという事は、要するに死に行くという事と同義である。無差別攻撃は確かだったが、それにより帝国の目論見通りギルド組合は瓦解、そしてバテンカイトスから戦力を引きずり出す事に成功したのである。

ここで戦っても仕方が無いと、勝ち目がないと……そんなことはわかっている。だが目の前で殺される人をどうして見過ごせるだろう？ 戦う仲間をどうして見捨てられるだろう？ アクティは出来なかった。ライフルを握り締め、ただそれだけの力で戦う。もう、これ以上仲間を失うのはうんざりだったから。

「ヴァンがいてくれたら……こんな時、どうしたかな……」

過ぎてしまった事を、ぽつりと呟いた。ヴァン・ノーレッジは死んだ……。生きていたとしても、あれは最早少女の知るヴァンではない。もう、あれほど頼りになった兄貴分はいなくなってしまったのだ。ギルドの瓦解には魔剣狩りが討たれた事も十分理由として響いているだろう。アクティは彼が抜けた分、その穴を補わねばならない。そう、あの日彼を救えず、連れ戻せなかった罰として……。

あんなに明るく元気だったうさ子を刺し殺し、闇と殺意に吞まれ

たヴァン……。元々憎しみを抱えてはいたものの、あそこまで凶悪な人間ではなかった。孤児だったアクティを助け、育てるくらい優しい男だったのだ。

どうしてこうなってしまったのだろう……。どこか遠い目線で自分自身を眺めていた。疲れた。そう眩きたくなつた。ライフルを握る手に力が入らない。もう、どれだけ仲間が残っているのかも判らない。

バリケードへと機動兵器が砲弾を撃ち込み、その衝撃でアクティは派手に吹っ飛んだ。螺旋階段へと頭をぶつけ、その痛みに悶える。既に入り口は突破され、仲間たちの肉片とバリケードの破片が無残に飛び散っていた。最後列で狙撃だけしていたアクティは偶然助かっただけ。次々に沸く機動兵器の銃口が少女を捉える。もう、死んでしまった方が楽かもしれない。そう考えた時であった。

「アクティ、下がりなさいっ!!」

聞きなれた声が響き渡り、背後から人影が二つ。既に魔剣を装備したブラッドとリフルであった。リフルは二対の剣を組み合わせ、楽器へと形を変えてそれを構える。ブラッドは細長い形状をした剣を片手に機動兵器へと突っ込み、魔剣を振り上げた。

襲い掛かるブラッドに当然銃撃による迎撃が繰り出された。しかしリフルがメロディを奏でると同時にブラッドの身体の周囲には結界が浮かび上がり、弾丸を弾き返してしまふ。ブラッドはその隙を衝いて次々に機動兵器を切り裂き、前線を押し戻していた。

直後、その攻撃している機動兵器を切り裂きながら白騎士が飛び込んでくる。ブラッドと白騎士は互いに視線を合わせ、敵同士であることを認識し。しかし互いの背後に隠れていた敵を切り払った。二人は背中合わせに剣を構え、白騎士は静かに呟いた。

『助太刀する』

「……アラ？ 剣誓隊の白騎士さんが、どうしてかしら？」

『理由は後だ。空母はミュレイが攻撃している。もう少し、持ち堪えてくれ』

「……………そういうことね。なら、お言葉に甘えて ツー！」

二人が同時に魔剣を振るう。奇妙な共同戦線が展開される中、起き上がったアクティは前髪で隠れた瞳でじつと白騎士を見つめていた。構えるライフルの銃口 それは白騎士を捕らえている。

「白騎士……………！」

少女の頬を涙が一筋伝った。震える指先を引き金にかける。そう、すべては白騎士の所為。あれが襲ってこなければ、ヴァンは……。ヴァンは、あんなことにはならなかった。

悲痛な思いはリフルが気づくよりも早く放たれる。弾丸がまさか背後から放たれるとは思って居なかった白騎士は振り返りつつ、その顔に銃弾を命中させた。紅く血が弾け、騎士の身体が揺らぐ。駆け寄るウサクがその名を叫び、戦場にまた一つの悲劇が響き渡ろうとしていた。

Thank she (3) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

もう50部ですよ

ホクト「早いよなあ~~~~~!!」

昴「こんなペースで連載していつ終わるんだろうこの話」

ホクト「三月には終わるだろ、多分」

ミュレイ「まあ、半分以上は進んでおるじゃろうしのう」

ホクト「あれだけノープランでテキトーに始めたわりにはよくやっ
てるぜ」

昴「そろそろ、ホクトの記憶喪失の謎とかが明らかになりそうだね」

ミュレイ「ひっぱりすぎじゃろ……」

ホクト「しかし……すげえダラダラした小説だけだよ、もうちょっ
とメリハリつけられなかったもんかと今更ながらに思う」

ミュレイ「本当に今更じゃな」

昴「まあ、アルティールが結構良く纏まってたから尚更ね」

ホクト「んー、ザルヴァトーレ戦まで行けばそこそこ盛り上がるか

「？」

「ミュレイ」盛り上がったても止めになるじゃあが、いっも

北斗（1）

放たれた弾丸は、白騎士の偽りの仮面を砕く。爆ぜた白い仮面の破片が舞い、同時に血飛沫が零れた。顔を片手で抑えながらぐらついた白騎士はそれでも踏ん張りを利かせ、動きを止めずに剣を振るう。ブラッドが慌てて残りの機動兵器を片付けると、白騎士はユウガを握り締めたまま片膝を着いた。

「アクティ！！ 貴方……ッ！！」

狙撃を行った張本人であるアクティは震える指からライフルを零し、瓦礫の破片が散らばったエントランスに音は空しく響き渡った。ウサクが慌てて白騎士に駆け寄り、その身を案じる。白騎士の顔、右半分は鮮血で真っ赤に染まり、負傷したのか目からは血の涙が流れていた。

騎士はそっと、顔を上げる。恐怖に震えるアクティへと向けられる視線……それは、怒りや憎しみなどではなく。寂しさや戸惑いやそれでも他人を許すかのような、優しい眼差しだった。仮面の下に隠された、消し去れない人間らしさ。拭い去れない、罪悪感……。それらが彼女の瞳には如実に現れていた。寂しげな眼差しは少女を射抜く。それは、決してアクティが予想していた姿ではなかった。

白騎士は敵……ずっとそう考えていた。実際彼女さえ居なければ、ヴァン・ノーレッジは記憶喪失になる事もなく。ホクトはきつと、彼女の元から居なくなる事はなかっただろう。ずっと恨んできた。憎んできた。剣誓隊に与した、白い仮面の悪魔。けれど、想像していなかった。予想もしていなかった。その中身がまだあどけなさを残した少女であり……。そして、その目はとても悲しげである事も。

言葉を失い、アクティは一步あとずさった。痛み表情を歪め、白騎士は涙を流しながら目を閉じた。駆け寄ったウサクが何かを叫び、ブラッドが白騎士を連れて奥へ後退していく。入り口に残ったウサクは遅れて到着したギルドの増援と共に入り口から飛び出し、外で再び戦闘が始まった。断続的に聞こえる銃声と悲鳴の中、アクティは首を横に振りながら耳を塞ぐ。黙り込む少女の前、リフルは剣を降ろして険しい表情を浮かべていた。

「……………気は晴れたか？」

「……………」

「気が晴れたなら、銃を拾え。君にはまだ出来る事があるはずだ」

「無理だよ…………。ボク、一人じゃ何も出来ない…………。戦ったって、もうヴァンは…………」

「………… それでも、戦えと言うのは酷な事かも知れない。それでも言うさ…………。戦った方がいい、アクティ」

落ちたライフルを拾い上げ、アクティの手にそっと握らせる。リフルは強く真っ直ぐな眼差しで頷き、そして颯爽と振り返った。

「何かを傷つけたその数の倍、人を助けよう…………。奪ったその何倍の数も、命を救おう。そうする以外、この世界と折り合いをつけていく方法はないんだ」

剣士は一人、戦場へと向かっていく。アクティは震える手できゅっと銃を握り締める。リフルは責めなかった。戦場では、何があってもおかしくないから。誰かを憎み、誰かを殺し、そしていつかは

殺される。そんな渦中の中に在る以上、誰が何をしようとそれはその場に身を置く己の責任だから。

判っていた。白騎士を倒しても、ヴァンは戻っては来ないのだと。それでも……辛くて悲しい気持ちを消す事は出来ないから。護るって言ったって、何を護ればいいのかわからないから。

声をあげ、銃を握り締めて戦場へと走り出す。銃弾と魔法が飛び交う嵐の中、それでも戦うと決めたのはいつの事だったか。ヴァンはかつて、銃を握り締めて廃墟と死体の中にぼつんと一人で立っていたアクティに手を差し伸べてくれた。そうして“一緒に来るか”と聞いてくれたのだ。

手を握り締めて泣いたあの日の事も……。それから帝国と戦ってきた事も……。全部納得なんて出来ない。出来るはずもない。世界は狂っていて、当たり前前の悲劇が誰の上にも降り注ぐのだ。そんな明日を壊したくて、人の上にはもう何も立たせたくなくて、だから武器を握り締めた、でも。

何の為に戦っているのだろうか？理由を忘れてしまった。ただ、憎いから憎んだ。死にたくないから殺した。それはきつと悪では無いのだ。けれども目指した正義でもない……。故に少女は答えを求めて走り出す。リフルは一瞬振り返り、戦場の中で微笑んだ。アクティはそれにも気づかない。今は涙を拭き、ただ前へと走る。

「メリーベル！ 白騎士が！」

「………………。ごめん、ちょっといい？」

バテンカイトスの奥へと進んだブラッドは肩を貸していた白騎士をそつと倉庫の片隅に下ろした。既にギルド本部としてのバテンカイトスとの連結は断ち切られている。それは、彼らがもうここに取り残されてしまっている事を意味していた。ギルド組合は体勢を立て直す為にこの街を捨てたのだ。それが、組織の決定……。それで

もブラッドもリフルも、砂の海豚のメンバーもこの街に残った。無関係な人々を戦いから護る為に。

そんな負け戦にメリーベルが付き合ったのは、何となくこんな事になるような気がしていたからである。空の上でミュレイが戦っているのを見た時から白騎士がここに来る事を何となく把握していた。最も、まさか負傷して運び込まれるとは思ってもみなかったのだが。木製のコンテナを背中当て、軽く横にならせる。昴の顔からは血が流れ続けており、弾丸は側面から右目付近を深く傷つけてしまっていた。血が止まらず、汗びっしょりになった白騎士……昴は意識朦朧とした様子で、目の前にメリーベルがいる事も気づいていない様子だった。

「……………威力の高い対魔剣使い用の弾頭を食らったのね。仮面にも防御能力はあるはずなのに……………これ、なんか一回砕けてるみたいで効果がなくなってる」

「じゃあ、どうやってくつつけてたのかしら……………」

「……………のり？」

一瞬二人は目を合わせて冷や汗を流した。そんな物を何故強引に装備していたのかは兎も角、昴が危険な状態である事は確かだった。メリーベルはベルトポシエットから応急処置用の器具を取り出し、そつと昴の肩を叩いた。

「……………。昴、ごめんなさい。貴方の右目、悪いけどくりぬかせて貰っわ」

「えっ！？ ちょっと、メリーベル……………本気！？」

「義眼なら、別に私の技術で作れるし……。それにもう眼球自体が挟れてて使い物にならないわよ。ほっといても悪化するだけだから。昴が暴れないように背中を押さえてて」

「昴ってこの子の事……！？ そんな……まだこんなに若い女の子なのに……」

「それだけ因果が深くまとわりついてるって事。それじゃあ行くわよ。一応、麻酔はかけるけど……モタモタしてる場合じゃないし」

ビニールの手袋にきゅっと指を通したメリーベルは鉄の器具を取り出し、更に片手を昴の顔に翳して術式を発動する。意識朦朧とした昴の目が麻酔にかけられさらにとろんと虚ろになっていく。それを確認し、メリーベルは目を細めた。

血まみれの顔から髪を上げ、少々強引に施術に入る。眼球に器具が当てられる感触に昴は悲鳴を上げて暴れたが、背後からがっかりとブラッドに固定されており動く事もままならない。悲痛な声を上げる昴の様子をメリーベルは冷静に見つめ、施術を続けた。ブラッドは耐え切れずに目を瞑ってしまう。無理もない事だった。あの白騎士が。今、こんなひどい目に遭っているのは。

瞳を抜かれる痛みの中、朦朧とした意識で昴は何故か遠い昔の事を思い出していた。時を巻き戻すかのように景色は流れ。ミユレイの死も、この世界への召喚も超え。時は、あの運命の夜へと遡っていく……。

「私、昔は実の兄が好きだったんですよ」

「ぶほっ！」

ある日の夕食時　本城邸、居間。味噌汁を飲んでいた昴の前、彼女の師匠である本城夏流は盛大にお茶を噴出した。何故そうなったのか理解出来ない昴は目を白黒させていたのだが、彼の妻は何故か黒い笑顔を浮かべていた。

昴がまだ、本城邸で世話になるようになって間もない頃の事である。貴方の話を聞かせてほしいと言った本城の妻、リリアに答えとして呟いたのが上記の発言であった。咽返っている本城の背中をさすりつつ、リリアは小首を傾げた。

「お兄さん？　えーと、お名前は？」

「北条……北斗です。私とは結構歳が離れて……。一言で表現すると、破天荒な男でした」

「そのお兄さんは、今……？」

「死にました。三年くらい前に……」

「ぶほっ！？」

今度は味噌汁を噴出す本城師匠。咳をしながら退席し、そのまま台所に向かっってしまう。何をドタバタしているのかと目を丸くする昴の隣、リリアは少し困ったように微笑んでいた。

「まあ、あの人の事は気にしないでね。過去の事を振り切れない

駄目な大人だから」

「は、はあ……？」

「そっか……。昴ちゃんの事は、貴方のご両親から少し聞いてはいたんだけど……。そういう理由があったのね」

昴は昔から、少し変わった子供として周囲に認識されていた。彼女が大きくなってからもその認識は変わらず、彼女の味方は兄である北斗ただ一人であった。

学校にも馴染めず、大人たちにも馴染めず、昴はいつもどこか他人から距離を置いて生きていた。そんな彼女と世界を結び付けていたのが兄北斗であり、その兄が死んだ日から彼女の中で世界の時計は止まったままだったのだ。

リリアは心を閉ざしてやってきた昴に精一杯の愛情を注いだ。彼女の為に様々な事をして、そして自分で考えさせた。すると、人には絶対に懐かなかった昴もあっさりとしりリアには心を開き始めた。だからこそ。彼女は自分をバカにしないで話を聞いてくれると信じているからこそ。昴ものこの話をする事が出来たのである。

「私は……兄が居なくなつて、自分がどうやって生きていけばいいのかも判らなくなつて……」

「それで、引き籠もっちゃったのね……。うんうん、判らないでもないなあ、その気持ち。前に進みたくて焦ってるばかりで、足踏みしちゃう気持ち」

コタツに入ったまま、リリアは優しく微笑んだ。それから人懐こく緩んだ口元にたくあんを放り込み、ぽりぽりと齧りながら話を続

けた。

「こんな事を訊くのは辛いかもしれないけど、お兄さんはどうして……？」

「………………。事故…………。だったんです。表向きは…………」

目を閉じ、思い返す。決して忘れられないあの日の夜の事を。その日昴は学校で友達に苛められ、家に帰ったら今度は両親に成績が下がったとこっぴどく叱られていた。成績が下がるも何も、昴は毎日学校で馴染めず他の生徒からネチネチと苛められていたし、教科書も隠されてしまつてどこにいったか判らない始末で、勉強など手につくはずもなかった。その時、兄は丁度外出していてその場に居合わせず、昴は親に叱られて泣きながら街へと飛び出してしまつた。

考えてみれば馬鹿な話だ。もっと言いたい事を言つて、もっと抵抗して…………。それで全部済んだのかもしれない。でも昴には怖くてそれが出来なかった。勇気がなかった。だから結果として逃げる事しか彼女には残されていなかったのだ。一人、この世界の中で孤独になつてしまつたような気がしていた。長い間降り積もっていた鬱屈とした気持ちが爆発し、昴はそのままの足でとある廃ビルの屋上へと向かつていた。

飛び降りて、自殺をするつもりだった。死んでそれで全部楽になれたら、今度は明るくて活発で、誰からも愛されるような子になリたかつた…………。目を閉じ、願いと共に飛び降りようとした。だがそれが本当の悲劇の幕開けだったのだ。

落ちていく昴の視界の中、屋上へと駆け込んできた兄の姿が見えた。兄は既に落下を始めている昴の身体を抱き、放り投げるようにして屋上へと引き戻したのである。彼がそうやって動けたのは奇跡のようなものだった。もう絶対に助からない状況にあつた少女を助

け、しかしその反動で北斗は空中へと投げ出されてしまった。

そこは、二人の秘密の場所だった。時々昴はここに逃げ込み、そして北斗はそうして隠れている彼女を見つけて慰めた。いつかはきっと強くなつてやると誓ったその場所で、昴は叫びながら手を伸ばしていた。夜景の町はキラキラと輝いていて綺麗で、北斗は最後まで笑っていた。

落ちていく兄を見下ろした。ビルの上から、豆粒みたいに小さくなった兄がアスファルトに叩きつけられ跳ねるのを見ている事しか出来なかった。すべては自分の責任。甘ったれた考えと軽率な行動が。またそれを救おうとした彼の軽率な救済が。より状況を最悪へと近づけていく。

兄、北条北斗は死んだ。何故彼があ場に間に合ってしまったのかも、何故最後まで笑っていたのかも、何もかも謎のままだった。それでも現実には彼の死を突きつける。昴はそれからもう誰とも会いたくなくなり、誰とも話したくなくなり。

「……………逃げていたんですよ、北斗の死から……………」

「……………そうだったの」

「私が殺したようなものです……………。でも、ここに来て思いなおしたんです。兄が、私を生かしてくれたんだから……………。だから、兄がいなくても、一人で立派に生きていかなきゃ、って……………」

大学に入り、友達も作るように努力した。なれない人付き合いに苦労しながらも、なんとか着いていけるように悪戦苦闘している。親元を離れ、こうして親戚の家で厄介になるのだって彼女にしてみれば大冒険である。それは彼女が引き籠もって考えた末、何とか導き出した一つの答えだった。

「お前は立派だよ、昴」

食卓に戻ってきた本城はコタツに入り、ぼりぼりとたくあんを食べている妻を見て冷や汗を流した。それから昴を見つめ、腕を組んで頷いた。

「そういう事なら、俺たちも協力するさ。まあそうじゃなかったってお前はもううちの家族みたいなもんだけどな」

「そうそう、大丈夫よ昴ちゃん。つらい事を話してくれて、どうもありがとうね」

「い、いえ……。なんか、変な話しちゃってすいません……」

「もー、そんな遠慮なんかしないでいいの！ 昴ちゃんは、何でも私たちに相談していいんだから。ね、夏流さん？」

「………………。何でも……か？ いや、何でも……お、おう。何でも相談しろ、ハハハ……」

「まあこの人はあんまり当てにならないから、私を頼ってね昴ちゃん」

この人が頼りないのは、恐らく貴方の前だけです。とは口が裂けても言えなかった。言葉の代わりに乾いた笑い声が漏れる昴の前、ばつの悪そうな表情で本城も苦笑していた。

そうだ、色々とあったが、それでもまた何とか歩き出そうとしていたのだ。それなのに何故……またこんな目に遭っているのだろうか。時が加速し、あの日へと向かう。昴はその日、大学の中庭で花壇に囲まれていた。そこには白衣の女性が如雨露を片手に立ってお

り、花に水を与えているのがわかった。

女性はゆっくりと振り返り、背後に立つ昴を見つめた。長く黒い髪が揺れ、どこか浮世離れたような幻想的な眼差しが輝く。成る程 そんな風に思っていた。とんでもない美人の教授がやってきたと聞いて呼び出されてみれば。そこには納得の美女が佇んでいたのだ。

教授は靴音を鳴らし、昴へと歩み寄る。そうして如雨露を手にしていないあいている手で昴に握手を求めた。それが何を求められているのかさっぱりわからず、昴が握手に応えられたのは数十秒後の事であった。

「初めまして」

「は、初めまして……？ あの、ここに私の友達が居ませんでしたか……？」

「さっき、ランチに行くって学食に行っただけ」

また友達に置いてけぼりを食らってしまった。周囲の友人達はあまり昴に興味がないらしい。困った様子で溜息を漏らす昴。そんな少女に微笑みかけ、女は己の名を名乗った。

「私の名前は　　メリーベル。メリーベル・テオドランド……。
貴方は？」

「……？ えっと、北条……北条昴、です」

「そう。それじゃあ昴、また」

優雅に歩き、立ち去っていくメリーベル……。その後姿を眺め、

昴は呆然としていた。明らかに外国人である。いや、大学にはほかにも外国人の教授は居たのだが……。彼女からは他の人間からは感じない、独特の存在感があった。どこか、この世界からはぐれていくかのような感触……。強いて言うならば、それは本城夫妻と良く似た雰囲気だった。

そしてこの昴の違和感は数時間後、現実の物となる。断片的な記憶の中、昴はあのビルの階段を駆け上がった。既に人が立ち入る事の無い、兄北斗が死んだビル。あの日以来近づく事はなかった場所。以前に自殺者が出たというのに相変わらず鍵がかかっていなかったのは幸運だったのか、それとも不運だったのか。あるいは破壊された鍵に昴が気づけば、何かが変わったのかもしれない。

屋上に立ち、強い風の中昴は街を見下ろしていた。その背後、そと忍び寄る人影があった。彼女はそとと、昴をの背中へ手を伸ばす。突き飛ばされた少女はあっさりとその身体を宙に舞わせ。落ちながら、己を殺した人物の顔を覗き見た。

そこに立っていたのは 昼間、花に水を上げていた教授。優しく微笑み、夜の風の中昴を見下ろす影。メリーベル・テオドラント。世界を渡る錬金術師は、その日北条昴をビルから突き落とす笑っていたのであった。

「目が覚めた？」

バテンカイトスの地下倉庫、そこで昴は目を覚ました。目の前にあったのが夢の中で見た顔と同じである事に気づき、すかさず跳びかかる。メリーベルの襟首を掴み上げ、そのまま壁際まで歩いて叩き付けた。驚く様子もなく冷静なメリーベルの瞳を覗き込み。そうして気づく。自分の視界が半分になっている事。そして激しい熱のような痛みが右顔面を断続的に襲い続けているという事。

顔に触れ、昴は己の顔に包帯が巻かれている事に漸く気づいた。当然手当てはメリーベルがしてくれたのだろう。だが……思い出し、てしまったからには彼女を信用する事は出来なくなっていた。冷や汗を流す昴を見下ろし、メリーベルは自分を掴み上げている昴の首を握った。

「私は敵じゃないわ。落ち着いて」

「敵じゃない……！？ くそ……ッ」

理不尽な状況に仕方なく手を離す。メリーベルはまるで何も知らないかのように昴の様子を心配そうに伺っている。記憶をもう一度思い返す。確かにあの日、自分を突き落としたのはメリーベルだったのだ。だが何故……どうして？ 理由がまるでわからない。そもそもあれはどうしてだったのか？ 何故あんな場所に向かったのか……？

だが、考えるより早く昴は魔剣を片手に歩き出していた。その後からメリーベルは肩を掴み、少々強引に振り返らせる。血が滲む包帯を片手で押さえ、昴は振り返った。

「まだ応急処置しか済んでいないわ」

「………ありがとう、礼を言うよ。でもまだ、ミュレイが戦っている。行かないきゃ……」

「改めて言うのも何だけど、貴方は重傷よ。ちゃんと手当てすれば直ぐによくなるんだから、じっとしてて」

「そついうわけには行かないよ　メリーベル」

手を振り払い、騎士は甲冑を鳴らしながら振り返った。べつとりと血で汚れた己の手をまじまじと見つめる。そうだ……行かなければならない。他の事は全てが二の次だ。もう、その程度で揺らいでいるわけにはかないから。

自分を頼ると言った姫がまだ戦っている。外で皆が戦っている。生きる為に、護る為に……。己の成すべき事を思い出せ。自分は戦う為にここに来た。この程度の痛み、ユウガを継承する激痛に比べればたいした事は無い。いくらでも前進出来る。前に進める。だからまた一歩前へ。

そんな昴をもうメリーベルは止め様としなかった。ただその隣に付いて歩き、共に地下から脱出する。崩れかけたバテンカイトスのエントランス、昴はユウガをきつく握り締めた。

「ついてくるつもり？」

「一応、主治医なので」

「そう……。他人を護っていられるほど余裕はないけど……」

「大丈夫。こう見えても、戦いも少しは齧ってるから」

「好きにして」

昴は館から飛び出し、戦場へと突き進んでいく。夜の街を白騎士が駆ける。過去の事はすべて過ぎ去った事だ。与えられた命で己に出来るだけの事をしよう。護ってくれた彼女を護る為に。己の罪を、裁く為に。煉獄の炎に包まれた街こそ自分には相応しい。少女は己を押し殺し、滴る血と共に剣を揮い続ける。

北斗(1)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

どうしてこうなった

アクティ「おかしいでしょー！ーッ！ー！！！」

ホクト「何となく、お前の叫びから始まると安心するな」

昴「わかるわかる」

アクティ「じゃ、なくってっ！！！！ 白騎士……本編だけならずこっちでも喧嘩を売ってくるとはーっ！！！」

昴「私別に喧嘩は売ってないんだけど……むしろ撃たれたっていうか」

アクティ「ホクトが一番、夏流が二番……。はい、これなんのことでしょう？」

ホクト「戦闘力か？」

ロゼ「アンケート投票の結果でしょ？」

アクティ「はい、ロゼ正解！！ なにこれ！ どういうことなのーっ！！！！」

ホクト「まあ待て。アンケートの事は良く判らんが、別に俺は主人

公だからいいだろ」

シエルシ「それにしたって貴方……票を全体的にかっさらいすぎですよ……」

ミュレイ「まあ……ホクトが一位なのは百歩譲って許すとしても……。二位が本城夏流というのはどういう事なんじゃ」

夏流「俺何かしたか……？　ただ居るだけのようない気がするんだが」

メリーベル「いるだけで票を持っていくなんて……なんというNET」

夏流「やめろ！！　俺の前でその言葉を使っなっ！！」

ロゼ「（ていうか、ディアノイア読んでない人は本当にちんぷんかんぷんだろうなあ……）」

うさ子「うさはね、三番目なのーっ！！　はっはっっ！！　はっはっっ！！」

シエルシ「それ、前から気になってたんですが　鳴き声なんですか　？」

アクティ「四番目はリフル、昴、それからリアさんが並んでるね」

リフル「わ、私か？　照れるな……」

昴「ホクトと同じ主人公のはずなんだけどなあ……出番の割合のせいかな」

リリア「わーい　全くメインでもなんでもない作品になっても投票してくれる人が居るって事は、リリア・ライトフィールドの気は確固たる物なのね」

夏流「……いや、それはどうなんだ……？　というか、それだけ口クエンティアがディアノイアより人気がないって事だろ」

ホクト「あ、そういう事言っちゃうんだ」

昴「師匠！！　空気読んでくださいよ！！」

夏流「す、すまん。そういうえはうさ子、お前はステラでも票が入ってるからそれもあわせれば俺を抜くんじやないか？」

うさ子「！？　そ、そうだったの……！？」

ロゼ「無意味に票を割るからそういうことになるんだよ」

うさ子「ねえねえ、ホクト君ホクト君？　うさが一番になったら、何かもらえるのかなあ？」

ホクト「アルティメットジャンボパフェ贈呈」

うさ子「うさ、人気の為ならなんでもするのっ！！」

リリア「だったら私と組むのが一番よ、うさ子ちゃん……ふふふふ」

夏流「やめろ！　闇リリアと組んだら大変な事になるぞ！！　北斗！！」

ホクト「ああ　って、漢字で呼ばないでくれます!?　新旧主人
公　!!!　必殺!!!」

夏流「神討つ一枝のなんとか　!」

ホクト「剣いっぱい出す攻撃　!!!」

リリア「あらあらまあまあ、駄目ですよそんな乱暴しちゃあ」

ロゼ「……………あしらわれてるぞ」

うさ子「というわけで、アンケート継続中のっ　うさにいっぱ
い投票してほしいのっ!　はうはうっ!!!」

シエルシ「なんだかふと思ったんですけど、劇場でも空気ですよね
……………私」

ミュレイ「まあ、わらわも五十歩百歩じゃがな　」

北斗(2)

「久しぶり、白騎士……」

ローティスの大通りの中、無残に朽ちた機動兵器の残骸の中に白騎士は立っていた。炎に包まれた背景の中、小さな影が浮かび上がる。立っていたのは巨大な剣抱きかかえた桃色の髪の少女である。白騎士は傷を負った顔で振り返り、少女を見つめた。

二人が出会うのはこれが初めてというわけではない。白騎士は彼女と面識がある。そう、何度も一緒にミッションに参加した仲だ。彼女がまだ、剣誓隊と呼ばれる組織の一員として活動していた頃……。まだ、ヴァン・ノーレッジを倒そうと各地を奔走していた頃の話である。

少女　ルキア少将はハイヒールのブーツを鳴らし、ゆっくりと近づいてくる。抱きかかえた剣にそつと頬を寄せ、冷たい感情を廃した瞳で白騎士を見据える。騎士はユウガを揮い、それを鞘に収めた。

「ルキア……。まさか、將軍クラスが前線に出てくるとは」

「……今回の作戦はそれだけ本気……という事。でも、意外……。貴方が……。ギルドの味方をするなんて」

状況を見ればそれは歴然としている。白騎士が切り倒した機動兵器と帝国騎士の数を見れば明らかだ。それは白騎士が帝国に反旗を翻した事を意味している。白騎士の背後、メリーベルが動いた。しかしその動きを制するように白騎士は鞘を振るう。

「メリーベルはバテンカイトスの方をお願い」

「……………でも、今の貴方じゃ」

「大丈夫、私は死なない。このくらいで死んでなんか居られない。だから　お願い、行ってメリーベル」

「……………。判った。護りは固めておくから……………攻めは任せる。それと辛くなったらさつき渡した薬を」

白騎士が頷き、メリーベルはそのまま走り去っていく。深く息を着き、白騎士はルキアへと歩み寄った。帝国騎士団剣誓隊、最強戦力の一角である少将ルキア……………。その小柄すぎる外見とは裏腹にその戦闘力はトップ4に君臨するのだ。そして恐らく、魔剣の扱いについては付け焼刃の白騎士よりも上である。

所詮、白騎士　北条昴の戦闘力は、白神装武という鎧に支えられた物に過ぎない。それがなければ彼女は魔剣の扱いに関しては初心者なのだ。そして肝心の白神装武は今、度重なる魔剣狩りとの戦いでガタが来てしまっている。結果、仮面は碎け銃弾は彼女の瞳を抉ったのだから。

状況は劣勢である。だが、昴はゆっくりと振り返っていた。背後、建造物の上からもう一つの陰が飛び降りてくるのが見えた。黄金の甲冑を纏った騎士　。優しい笑顔を浮かべ、騎士は昴へと歩み寄った。

「気づいていて、仲間を行かせたのかい？　白騎士」

「……………まあ、そういう事になるかな。久しぶり、大将……………。オ
デッセイ」

オデッセイ大将。剣誓隊最強戦力であり、剣誓隊を指揮する男……。金色の髪を靡かせ、男は敵意の欠片も見せず、昂へと歩み寄っていく。しかしそれを警戒で応じ、昂は刀に手を伸ばした。

「やれやれ。まさか君が裏切るとは思ってもみなかつたよ。魔剣狩りの方はもういいのかい？ あれだけ必死に探していたというのに」

「それはそれ、これはこれ……って事です。あいつはいつかは殺さなきゃならないけど、でも今は……貴方達と戦う事が先決、かな」

「そんな負傷した身で、剣誓隊の実力者二名を倒せるとでも……？ ふふ、まあ私は君のそういうところはそんなに嫌いじゃないよ。それにしても仮面の下はそうなっていたのかい？ まさか可憐な乙女だったとはね……なあ、ルキア？」

笑いながらそう問いかけるオデッセイだったが、ルキアはまるでノリアクションである。少しだけ寂しげに肩をすくめ、それからオデッセイはマントを翻し前に出た。

「白騎士、君はまだ聞いていないかもしれないけれど、ハロルド陛下は君をインフェル・ノアに連れて来いと私に命令した。これからククラカンに迎えにいこうと思っていた所なんだよ」

「ハロルドが……？」

「君の力が必要だという事さ。どうだい？ 無駄な戦いは止めて、また剣誓隊に協力するというのは。君の実力は折り紙つきだし、陛下も認めている。今度はバイトじゃなくて剣誓隊に永久就職するというのも悪い話ではないと思うんだけど」

「生憎、お断りします。私は元々、貴方達の仲間になった覚えはないし」

「……………。君は、仮面が無いと口調まで変わるんだね。いや、心苦しいよ。仕方ない、君を倒してそれからインフェル・ノアに連れて行く事にするよ」

オデッセイが片手を空に翳すとそこに虹色の幻影が浮かび上がる。やがて虚像は形を結び、手の中には美しいロングソードが召喚された。背後ではルキアが動き出し、剣を抱いたままとことと接近してきている。前後から挟まれ、鼻は深く息を吐き出した。

どこまでやれるのかは判らない。仮面がないと、気持ちが悪くなる。できなかった。仮面を突ける事で気持ちを切り替え、“白騎士”になりきっていたから。しかし今は仮面もなく、支えてくれる仲間もいない。鎧はボロボロで、両手は血にまみれている。右目の痛みが意識を遠ざけ、それを決して手放してしまわぬようにと剣を強く握り締めた。

心を切り離す。今までも、そうやって戦ってきた。北条昂という弱い人間は心の中から追いやってしまおう。目を閉じ一秒未満スウィッチを切り替える。最強にして正義の使者。運命を破壊する、白い甲冑の死神。剣を抜き、すらりと美しく振り返る刃に己を映し込む。

「我が名は白騎士　！　いざ、参るッ！…」

「うーん、困ったね。気合が入っているようだ。ルキア、きちんと手加減してくれよ？　あれだ。殺してしまっただけ。陛下に怒らせてしまうからね」

「わかってる。殺さない。殺さないで　いたぶるだけ」

「こらルキア、そういう事は思っても口にはいけないよ？　それから、彼女だって本気だからね。気をつけなければ」

二人の視界から途端に昴が姿を消し、オデッセイの背後に現れる。放たれる斬撃　それをオデッセイは驚異的な反射能力で防いでいた。淡い光を纏った魔剣が昴のユウガを受け、二つの魔剣は火花を散らす。

「　彼女は強いからね。うっかりやられてしまつては、剣誓隊の名折れだよ」

「……………流石に不意打ちじゃ倒せないか」

二人は同時に刃を繰り出し、打ち合ったと同時に背後へと跳んだ。後方へ移動する白騎士の右側　。死角となる場所から飛来するルキアの魔剣の姿があった。ぐるぐると横に回転しながら猛スピードで突っ込んでくる　それは、既に飛翔と呼んで相違ない。突っ込んでくる剣の殺気に気づき、鞘でそれを受けて弾く。しかし弾かれた剣は空中でピタリと静止し、再び襲い掛かってきたのである。

ルキアの剣を再び鞘で討ち払う直後、オデッセイは魔剣を振り上げ昴の背後に立っていた。振り下ろされた一撃は防御が間に合わず、白騎士の肩口に袈裟に直撃する。轟音が鳴り響き、しかし白騎士は直ぐに反転して反撃を繰り出した。

「偉く頑丈な鎧だね。まさか貫通出来なかったとは」

「……………オデッセイ、手加減しすぎてるから」

「そのようだね。もう少しペースを上げようか」

空中をグルグルと回転した魔剣は主であるルキアの足元に突き刺さり、ふわりと浮かび上がった。勝手に動き回る魔剣に手を伸ばし、ルキアは踊るように前に出る。そんな少女の周囲を剣が続けて踊り出す。昂は肩の痛みを堪えながら再び剣を構えた。手に力が上手く入らず、体力が低下している事を強く実感させられる。長期戦になれば、圧倒的に不利。

「……………さあ、歌い踊り死に狂え…………。貴方を痛みで満たしてあげる。貴方の事、嫌いだから…………。ね　白騎士」

「……………趣味が悪いな、その台詞回し」

魔力を解き放ち、白く輝くユウガを構える。ルキアとオデッセイ、二人も同時に魔力を放出し、それを魔剣に練りこんでいく。三つの影が同時に動き、ローティスでの最後の戦いへと突入していくのであった。

北斗（２）

「うーむ、しかし……………もう少し歯ごたえのある敵はいなかったんじゃないだろうか…………」

帝国戦闘空母のコントロールルームの中、倒れる帝国騎士たちを背にミュレイは退屈そうに呟いた。既に三つの空母のうち二つを占

領、一つはローティスの外に撃墜してしまった。状況がすべて完了し、ミュレイはソレイユを片手に眼下の街を見下ろしていた。

状況は既に取り返しのつかない段階にまで悪化していたが、空母を抑えた事で何とか街そのものの被害は留める事が出来た。後は市街地での戦闘がどうなるかだが、肝心の空母に配備されている敵の程度を見ればまさか地上で白騎士が將軍と戦っているようには思えず。

「ゲオルク、この船は任せる。わらわは地上に降りて、白騎士の手助けをしてくる」

「人使いが荒いな……。というか、俺は結構テキトーにこの空母動かしてるんだが」

「別に町の外なら墜落して爆発しても構わんぞ？」

「俺は構うんだが……」

冗談交じりに笑うミュレイの正面、突然落雷が起こり目の前に転送魔法陣が浮かび上がった。それが何を意味しているのかミュレイは知っていた。だからその場でソレイユを広げ、魔力を剣に収束する。

若干遅れ、そこには銀髪の少女が送り込まれてきた。のだが、直後放たれたミュレイの魔法が大爆発し、転送されてきたステラをコントロールルームの半分以上と同時に吹き飛ばした。何が起きたのか判らなかつたゲオルクが振り返ると、暴風に晒されながらミュレイが扇を開いて佇んでいた。

「な、何してるんだミュレイ……」

「いや、ステラが来そうだったのでぶっ飛ばしただけじゃ」

「はあ？」

首をかしげるゲオルクだったが、直ぐにミュレイの言っていた言葉の意味を思い知る。吹き飛ばされた装甲の向こうから、黒焦げになったステラが武装状態で戻ってきたからである。装甲を装備する前に吹き飛ばされた為ダメージは大きいらしく、ノーダメージの装甲とは裏腹にその中身はぼろぼろだった。

「………………。転送を呼んで魔法を撃ってきたのは恐らく貴方が最初で最後です、ミュレイ・ヨシノ」

「阿呆……。目の前に出てくるのがわかっていれば、普通は誰だつて先手を打つわ」

「しかし、それをやらないのが人間なのではないですか？ まあ、貴方に常識的な思考を求めるだけ……！？」

会話の途中だというのに、ミュレイが再び放った魔法がステラに直撃していた。装甲でダメージを軽減してはいるものの、ミュレイの膨大な魔力を練りこんで放たれる火炎は想像を絶する威力である。それが魔剣ソレイユによって何倍にも威力を高められているのだから、いくらステラと言えども受ければノーダメージでは済まない。

「話の途中だというのに、貴方は……………！！」

「話すことなどないわ……！！」

加速し、猛然と突っ込んでいくステラ。その拳がミュレイに当た

りそうになったその時、ステラの足元から火柱が吹き上がった。それはステラを巻き込んだままコントロールームの天井を貫き、カタパルトまでステラを吹き飛ばす。風が吹き荒れるカタパルトの上に着地したステラの前、空いた穴からふわりと舞い上がってくるミユレイの姿があった。

「あんな所で戦って、船が墜落したらどうするつもりじゃ阿呆」

「……………。それは私の任務の中には含まれて居ない事項です。ミユレイ・ヨシノ…………。貴方を倒せという命令は出ていませんが、カテゴリースの魔剣はすべて回収しろとの命令です。この場に居合わせたのを目撃した以上、放置は出来ません」

「ほお、ついに化けの皮が剥がれたようじゃな。魔剣を集めてどうするつもりじゃ？ この世界を完全に支配でもするつもりなのか？」

「目的は私には関係ありませんし、知る必要のない事ですから。私はただの手段…………。貴方の炎魔剣ソレイユ、回収させて頂きます」

「言うは容易いぞ、小娘…………？ やってみよ。我が紅蓮の炎がお相手致す」

頭上、ステラ目掛けて落下してくる炎龍ヴェルファイアの姿があった。落ちてくる龍はまるで流星のように猛スピードで襲い掛かり、その巨大な拳を少女へと叩きつける。それを片手で相殺したステラは指先で雷撃を起し、ヴェルファイアではなくミユレイを狙う。式神は倒してもミユレイにとっては魔力が消耗されるだけであり、高位の式神はいくらステラとて倒すには時間がかかる。時間を与えてしまえばミユレイは魔法を容赦なく放ってくるだろう。それ故の速攻。しかし、判断は間違いであった。

放たれた雷撃をミュレイは扇状に展開したソレイユで薙ぎ払う。するとまるで風に吹かれたかのように雷撃はぐにやりと捻じ曲がり、あるう事かステラ本人へと弾き返されたのである。しかもその威力も巨大さも、ステラが放った物の数倍に増幅。避けなければ危険だと判断は出来たが、式神に潰されていて回避が出来ない。

直撃した雷撃は空母の後ろ半分を薙ぎ払い、空母はバランスを崩して墜落を始めた。コントロールルームでゲオルクが大慌てだったのだが、ミュレイにとってそんな事は知った事ではない。ヴェルフアイアが舞い上がる後、そこには黒焦げになったステラの姿があった。

「ほー。まだ原型が残っておったか」

「……………く……………っ！ 帝国が……………ククラカンに、容易に手出し出来ない理由が、わかった気がしま ……!?」

再び、ステラを爆風が吹き飛ばした。喋る余裕があるのならば、まだ戦闘不能とは呼べない。ミュレイは紅く輝く瞳で冷たく獲物を見つめていた。扇を振り回し、その場で舞う。その度ステラを爆風が襲い、強固なアーマーを貫いてダメージを徐々に蓄積させていく。踊っているのはミュレイの方だというのに、あちこちで起こる爆発に弾かれよろめくステラの姿もまた、踊りの最中にあるように見えた。

ふらつきながらも何とか踏ん張り、動き出すステラ。しかしミュレイは容赦なく、既に構築を終えていた次の術を発動させる。ステラの足元に巨大な魔法陣が浮かび上がり、そこから連続して火柱が吹き上がった。更にミュレイは扇を揮い、その火柱を嵐のように渦巻かせていく。空に舞い上がる紅蓮の炎。ステラはその渦中、全く身動きも取れずにただ苦しみ続けていた。

魔術師が相手。その先入観を持っていたステラが甘かったので

ある。ミュレイは魔術を発動する際、詠唱というものを全くしない。術を構築するのも無言でただ扇を揮うだけで完成させる。それこそがソレイユがカテゴリーSとランク付けされる理由。ミュレイは弾丸無制限、リロード制限無し of 巨大な重火器のようなものなのである。近づく事も出来ず、身を晒せば吹き飛ばされるのみ。

「一つ、良い事を教えてやろう。戦の最中、べらべらと長台詞を言うのは。 “勝利” が確定した時のみじゃ」

扇を閉じ、目も閉じるミュレイ。直後炎は中心に収束し、炸裂する。完全に甲冑を砕かれたステラはその場に膝を着き、どさりと前のめりに倒れこんだ。目を開いたまま、口を開いたまま、全くピクリとも動かなくなる。その様子にミュレイは腕を組み、ふわりと浮かび上がって足を重ねた。

「今日は一つ賢くなって良かったのう？ まあ、目覚めた時覚えておればの話じゃが……ぬおっ!？」

余裕の表情を浮かべていたミュレイだったが、彼女が乗っている空母は既に猛スピードで墜落を開始していたのである。カタパルトまで上がってきたゲオルクが両手でx印を作ってみせる。ミュレイは冷や汗を流し、それから慌ててヴェルファイアを呼び戻した。

墜落する空母から飛び降り、ミュレイは空中でゲオルクと合流する。ヴェルファイアに回収してもらい、何とか落下を免れつつそのまま市街地へ。町のはずれでは空母が墜落し、爆発する光で夜が明るく照らされつつあった。その光の中、ヴェルファイアが通過した大通りの一つで白騎士は戦っていた。

同時に襲い掛かってくる剣誓隊二人に何とかついていくのがやっと。否、既についていけず何度も斬り付けられている。鎧で護られているからまだ動けるが、加減されていなければ既に死んで

いただろう。息が上がり、先ほどから汗と血が止まらない。意識がグラグラと揺らぎ、思わず膝を着いてしまう。そんな昴の前に立ち、ルキアはブーツで白騎士の手を踏みつけていた。

「……………白騎士、弱い」

「二対一だし、仕方が無いさ。それに剣誓隊で長年戦ってきた私たちと比べるのは、少々酷というものだろう」

「く……………っ！ まだ……………終わってない……………！」

立ち上がろうとする昴の背後、後頭部をルキアの剣が強く打ちつけていた。刃ではなく刀身で叩かれただけだというのに血が吹き出し、意識が吹っ飛びそうになる。前のめりに倒れる昴の身体を抱きとめ、ルキアはその頬に流れる血をぺろりと舐めて笑った。

「もう、終わってる」

「ルキア、白騎士を回収後、君はそのまま帝国に帰還してくれ。私はこのまま反乱分子を徹底的に排除して行く事にする」

「……………えー……………？ ルキア、もっと白騎士と遊びたい……………」

血まみれの昴の頭を抱きしめ、すりすりとした頬を寄せるルキア。そうして先ほど傷つけられたばかりの後頭部の傷口に白い指を突っ込み、目を細めて笑う。痛みで吹き飛びそうだった意識が痛みで戻ってきた昴は悲鳴を上げながらルキアを突き飛ばし、落ちていた剣を拾い上げて立ち上がった。

「ルキア！ わざわざ気付けしてどうする…！」

「だって、もつと遊びたいんだもん……。白騎士……。いつも一生懸命で、ぞくぞくするの。すごく……。いじめたい」

「ふざけた……。事を……。っ！！」

「オデッセイ、ルキアはもう少し白騎士と遊んでてもいいでしょ……？　ちゃんと、この子は連れて行くから……」

「ふざけるなっ！！」

剣を手に昴が走り出す。目の前に居るルキアは無防備で、防御する様子も驚く様子もない。そんなルキアの目の前に魔剣が落下してきて昴の斬撃を防ぎ、ルキアが片手を翳すと白騎士の足元から無数の黒い鎖があふれ出し、それがぐるぐると騎士の身体へと巻きついていく。

完全に動きを奪われた昴の目の前、ルキアは浮いている剣の上に座って無邪気に笑っていた。背筋がぞくりと寒くなり　次の瞬間、昴の全身に巻きついていく鎖が恐ろしい力で締め付け始めた。甲冑が一齐に崩れかけ、余りの苦しさで昴は悲鳴を上げる事すら出来ない。それが緩められたり、またきつくなったり……。拷問のような攻撃が断続的に続く。呼吸も出来なくなり、酸素を求めて口をぱくぱくと開け閉めする。最早剣を握り締める事も出来ず、美しい白き刀はカランと空しく音を立てて床に転がった。

「あ……。ぐ……。っ」

「そのまま殺さずちゃんと連れ帰るんだよ、ルキア」

「わかってるから、邪魔しないで……。ねえ白騎士、苦しい？　痛

い……？」

「う……っ」

「ずっと痛くて苦しいとね、段々何も考えられなくなってくるの……。そうするとね、段々きもちよくなってくるからね。うふ、うふふふふっ」

「……悪趣味だな、君は」

呆れた様子でそっぽを向くオデッセイ。その視界に一人の少女の姿が映り込んだ。オデッセイは走り出し、拷問に夢中になっているルキアの傍で剣を構える。飛来したのは弾丸。それを剣で弾き、ロングソードを降ろした。

銃撃で漸く異常に気づき、ルキアは苛立った様子で振り返った。不満げなその瞳の向こう。息を荒らげ、震える手でライフルを握り締めたアクティの姿があった。少女は再びライフルを構える。勿論、明らかに勝ち目はなかった。不意打ちしたのに気づかれて、しかも片手であっさり弾かれてしまったのだから。

それでも。それでも後には引けなかった。どうして白騎士の様子が気になって追いかけて来てしまったのか、それは判らない。ヴァンの仇だから……。それもあるだろう。傷つけてしまったから……。それもあるだろう。敵の将軍がそこにいるから……。恐らく全てが正解だろう。だが、全てが完全に正解ではない。

アクティにもそれは理解出来ない行動だった。ただ、苦しんでいる白騎士の姿をみたら居ても立っても居られなくなってしまった。勝てないとわかっていて、応援を呼ぶしか何も出来ないとわかっていて、でも手を出してしまった。指も、腕も、足も、肩も、声も、全てが震えていた。怖くて仕方が無かった。なのに。どうしてだろう。

「し……白騎士を放せよ、変態っ！！！！」

大声で叫んで居た。何故だかは判らない。傷だらけの白騎士はアクティへと虚ろな視線を向けていた。あの、寂しげで……悲しげで行き場を失って彷徨う亡霊のような目。

知っている。同じ目をした人を。あの時は、助けて貰ったから。だから乗り切れた。でも、もしも。もしも本当に戦う以外に何もなくて。ただそれしかなくて。それだけを極めていたのならきつと “自分も”。

引き金を引き、弾丸が放たれる。それはオデッセイに弾かれ、代わりにルキアが放つ魔術攻撃が跳んできた。影から飛来する、漆黒の弾丸。アクティはそれを見切る事はできた。しかし身体が固まって動かなかった。死ぬしかない。そう思えた。

ぎゅっと目を瞑る。どうしてこんな事になってしまったのだろうか……？ 理由はいつだって曖昧で単純だ。だけど今こうして思う事は一つ。もし。もしも。彼が傍に居てくれたら。彼が、ここに居てくれたら。

「よお、アクティ。弱いくせに頑張ったじゃねえか」

そんな風に 声をかけてくれたなら。そしたらきつと、目を開いて。今度はちゃんと、彼を見つめて。

「……………どう、して…………？」

嘘でも偽りでも構わない。もしかしたらもう死んでいて、今見ているのは幻影か何かなのかもしれない。死後の世界があるのなら、きつと彼だってそこに居る。でもそれは嘘でも幻でもない。列記とした事実。

黒い、その剣は大きく。剣を握り締める手も大きく。いつも眺めてきたその背中も大きかった。男は黒髪を靡かせ、肩に剣を乗せて笑う。大きな手でアクティの頭を乱暴に撫でながら。

「白騎士があんなにボコられてるのは初めて見たな……。おい、聞こえるかよ死神！ 助けに来てやったぜ ヒロインさんよ」

闇の魔剣を片手に、男は一步前が出る。最強と呼ばれた魔剣使い。全ての魔剣を狩る男。口に啜えた煙草を放り捨て、ガリユウを構える。

「アクティ、どうして……。？ はねえだろ？ いいか、いい事教えてやるよ。ヒーローってのはな、毎回ちよつと遅れてやって来るのがミソなのよん」

ふざけた態度にオデッセイもルキアも顔色を変えた。魔剣狩り、ヴァン・ノーレッジ。彼らが最も倒さねばならない男は、何故かその場所に立っていた。まるで本当に、ヒロインを救う為に駆けつけたヒーローの如く……。

北斗(3)

誰かが悪かったわけではないのだと、そんな事はとっくの昔に理解していた。

ロゼ・ヴァンシユタールには力が無い。知識も無い。それは彼が学ぶべき事を学べる時期、それを自由に過ごす事が出来なかったから……。彼の責任ではない。彼が悪かったわけではない。だがそれでも、彼はその立場に立たねばならなかった。

父親の遙かな背中を追いかけて、そのただけに年月を費やしてきた。時間をすべてそのためだけに費やしてきた。ふと、思い出すのは常に共に居たりフルの事である。魔術の訓練をし、組織の運営に苦心するロゼ。その傍らには常にその剣士の姿があった。

顔に傷を負い、それを眼帯で隠したりフルの横顔は一見すると気難しく、近寄りがたく見える。しかし彼は知っていた。彼女が本当はとても優しい人間で、自分の為になんでもしてくれる人なのだ。子供ながらに魔術を学ぼうとするロゼに、リフルはいつも笑いかけていた。言葉には出来ない、複雑な眼差しで。寂しげな、切なそうな、そんな目で。

全てを失って漸く気づいた事がある。リフルや仲間達が何の為に自分を隔離してきたのか。真実は常に自分にとって良い物だとは限らない。知ってしまったえばその結果、信じてきたもの全てが壊れてしまう可能性もある。何もかもを理解する事が正しいわけではない。それでも少年は、己の意思で真実へと手を伸ばした。

「いいのか？ 行かなくて」

本の山に囲まれ、横になるロゼ。部屋に入ってきた男は腰に手を当てて問いかけた。その言葉が意味する事はロゼにも十分理解出来

る事だ。

婚姻の儀襲撃作戦の失敗、そしてその後続く帝国の対応は打倒であり、十分予測出来た事である。それでもロゼがバテンカイトスに向かったのは、帝国を倒す事こそ全ての正義だと信じていたから自分の父親が遣り残した事なのだと信じていたからだ。

しかし今は違う。それが何を意味するのか、そして自分が何をすべきなのか……。判らなくなったからこそ判る事もある。黒い剣士は隣に座り、煙草に火を付けた。甘ったるいにおいが部屋の中に充満するにつれ、ロゼは深く息を着く。

「僕が行った所で、状況は何も変わらないよ。それはホクトだってわかってるだろ」

そう、ロゼには力がない。魔剣を持たず。魔術も人並み……。他人より優れている事など、何一つない。平凡な能力。理解している。自分で判っている。特別ななんかじゃない。だからこそ、退いたのだから。

砂の海豚というギルドを率いていく自信も、父の意思を継いでいるのだという確証も、何もかもがあっけなく揺らいでしまった。否、それはずっと少年の心の中でわだかまっていた闇である。“これでよかったのだろうか”？ 人間ならば誰もが内面で衝突し、処理すべき葛藤。それを無視してきた大きなツケだったのかもしれない。

無気力なわけではない。むしろ、やるべき事が見えてきたただからこそ何かをしなければいけないと思う。けれども自分に何が出来なのか、何をすべきなのか、それが判らなかつた。モヤモヤとした気持ちは日に日に募るだけで、それが吹き飛ぶような気配は未だ見えない。

だが、男は一笑と共にそれらを吹き飛ばすのだ。まるで煙草の煙を吹き消すかのよう。少年の肩を叩き、男は本の山の上にとっか

りと座り込む。馴れ馴れしい態度に眉を潜めはしたものの、その手を払いのける事はしなかった。

「俺は 。正直、何をどうやって生きていけばいいのか、判らないんだ」

「え……？」

「俺は何の為にここに居るのか。どうしてこの場所に存在しているのか……。考えれば考えるほどキリがねえ。判らないことばかりで、やりきれない気持ちばかり募っていく。でもな、ロゼ？ それでも俺たちは生きていかなきゃいけないんだ」

そんな事は言われずとも判っていた。だが馬鹿正直に大人しくその話を聞いていたのは、ホクトの口からまさかそんな言葉が飛び出すとは思って居なかったからなのかもしれない。常に強気で楽観的で、無理を強引に通してしまう力任せな生き方のホクトが、それに迷いを覚えていたとは思っていなかったから。

「だから、出来る事を一つずつ片付けてくしかねえんだ。別に俺は言うほど帝国が憎いわけでもない。でも戦う力があって、それで戦う事で少しでも何かが変わればそれでいいと思ってる」

「………………。そりゃ、僕だって。でも…………」

「お前の親父さんがどんな事をしていたのかも、砂の海豚が何なのかも、あの地下の遺跡がなんなのかも俺にはさっぱり検討もつかねえ。だけどなロゼ、お前はお前で親父さんは親父さんだろ」

くしゃくしゃとロゼの頭を撫で回し、それからホクトは立ち上が

った。彼の目に映る物はなんなのだろうか？ ふと、それが気になった。自分とは違う場所を見ている気がした。同じ景色を見ているはずなのに。そこに宿る意味は大きく異なっている。

自由に、世界をありのままに見つめる事が出来たらどれだけよかっただろう？ それはきつと一朝一夕で出来るような事ではないのだろう。だが……きつと、努力しなければ永遠に到達する事も出来ない。

「……………リフルの事が心配なんだろう？ リフルの事だけじゃない、他のギルドの連中もよ」

「……………」

「自分に素直になれよ。お前は難しく考えすぎなんだよ。いいか？ お前はもう団長じゃないんだろ。だったらもう 自分の好きな事を思うようにやってみるよ」

「思うように……………」

「もうお前に責任はない。だからお前はガキらしく、ガキつぼくがむしゃらになんでもやってみりゃいいんだ。ギルド、砂の海豚団長としてではなく。ただのロゼ・ヴァンシユタールとして……………。好きな女くらい、助けられないで何が男だ」

「ぼ、僕は別にリフルの事が好きなのじゃ……………」

顔を真っ赤にして立ち上がるロゼ。その表情をニヤニヤしながらホクトは眺めていた。急に恥ずかしくなり、そつぽを向きながら座り込む。ホクトは煙草を携帯灰皿に押し付け、それから靴音を鳴らしながら踵を返した。

「俺は、ローティスに行くぜ。なんせ暇だしな。それにあそこがなくなるよ、若いおねーちゃんと遊べなくなるし」

「そんな理由かよ……」

「ガリユウの調子も見てもらわないといけないしな。ま、兎に角俺は行くぜ。少年。お前はとうする？」

背中を向けたまま、ホクトは問いかける。ロゼはまだ迷っていた。いや、恐らくその答えは永遠に見つかからないのだ。この部屋の中で本に囲まれ、何をするでもなくじっとしている限り。

そう、一歩歩き出さない限り決断の結果を知る事も意味を理解する事も無い。元々どうなるのかなんて判らない。でもまだ、リフルには話したいことがあった。訊きたい事があった。全てをうやむやにしたまま。全部終わっていいなんて思っていない。

「どうやってローティスに行くつもりだよ」

歩き出した男の背後、少年はやれやれと言った様子で立ち上がっていた。椅子にかけてあったローブを引たくり、ホクトに駆け寄る。少年は男を見上げ、目を細めた。

「まさか、今から昇降機で行くつもりだったわけ？」

「他にいい手がないからな」

「手ならあるよ。バテンカイトスは元々砂の海豚にとっても拠点だったんだ。だから、ガルガンチュアにはバテンカイトスへの転送装置がある。そこからローティスに経由して向かえば直ぐに到達出来る」

る」

「そりやすげえ。で、それは俺一人でも行けるのか？」

わざとらしいリアクションだった。しかしロゼはあえて何も言わない。突っ込むだけ無駄だと、知っていたから。だから当たり前のように頷いてみせる。何となく　そう出来る気がしたから。

「勿論、僕の承認がなきゃ動かない。あんた一人じゃやるだけ無駄だよ」

あれだけ、ずっと思い悩んでいたのに。何故だろうか、彼と一緒になら……悩むことさえも馬鹿馬鹿しくなってくる。確かに言うとおりにだ。いや、答えは出ていた。ただホクトはその背中を後押ししただけなのだ。

ロゼだってこのままでいいなんて思ってた居なかった。確かに、ギルドを継承する人間としては相応しくなかったかもしれない。でもうやむやにされていた理由くらいはリフルに聞いただけだった。それに　やはり、こうしてじっとしているのは性に合わないから。

何も解決なんてしてない。何も答えなんて出ていない。それなのに歩き出す事は愚かなのだろうか？　きっとその答えも、その解決策さえも見つからない。だからとりあえず歩き出すのだ。どんなに自分が無力でも。今出来る精一杯で、結果を出してみせるから。

幼い頃からずっと力が欲しかった。でも何も出来なかった。今出来る一生懸命で向き合ってきた。そんな自分の傍だからこそ、リフルは居てくれたのだと思う。そんなリフルだからこそ、本当のことを話してくれなかったのが悔しくて仕方が無かった。悔しさはきつと消えないだろう。それを拭い去るのは容易ではないから。だから今は、出来る事を出来る限りの力で　それを払拭出来るまで。

「脱走した魔剣狩りが、まさか自分から顔を出してくれるとはね。これは幸運と呼ぶべきかな、ヴァン・ノーレッジ」

石畳の上を歩くホクトは口元を吊り上げるようにして笑う。両手をズボンのポケットに突っ込んだままの無防備な姿勢で剣誓隊ナンバー1の男、オデッセイへと歩み寄る。ヴァン・ノーレッジ……ホクトの乱入により、戦況は異様な緊迫感の中にあつた。この地獄のような戦場の中、男一人だけが“浮いている”のだ。痛めつけられた白騎士も、それを縛り付けたルキアも……。剣を片手に構えるオデッセイも、震えながら膝を付いているアクティも。誰もがただただ啞然と見つめるその姿は闇一色。何故だろう？ まるで幻影を見ているかのようなその感覚は言葉に出来ない。

敵には絶望を、味方には希望を。その怪物と相對して“幸運”と称するのは余りにも無謀かつ無理解だろう。故に男は剣を手中に構築し、髪を靡かせて晒う。当たり前前の言葉と共に。

「お前馬鹿だろ？ “魔剣狩り”を相手にするって事の意味が全然判ってねえのな……」

ゆっくりと前進するホクトの拳動にはまるで緊迫感がない。だといふのに異様な威圧感にルキアもオデッセイも動きを封じられていた。ルキアが白騎士の拘束を解除し、迎撃に全力を出せるようにと身構える。しかしそれをオデッセイは片手で制し、前に出た。

「ルキア、君は下がっているといい。彼は君では相手に
？」

急加速したホクトはガリユウを振り上げ、それを思い切りオデッセイへと叩きつけていた。魔剣でそれを防いだオデッセイだったが、

強烈な威力の一撃に足場が大きく陥没する。叩き付けた反動で振り上げた剣を解除し、ホクトは両手にダガーを二対装備して猛然と襲い掛かった。左右から交互に繰り出される予測不能な攻撃をオデッセイは片手でいなしていく。ホクトは確かに凄まじい強さを持った魔剣使いだが、オデッセイとてそう容易く倒されるほど弱いわけではない。

しかし、魔剣狩りの繰り出す攻撃はどれも予測出来ない程、見切れない程のバリエーションを持っている。手にする武器は剣に限らず、その剣の形状も無限大である。オデッセイにはすぐにわかった。ホクトが本気で戦っていない事が。そして今ここでホクトと本気でやりあつたところで勝ち目が薄いという事も。

後方に跳躍し、炎に包まれた街を背景にオデッセイは剣を降ろした。それを見つめ、ホクトは空に手を翳す。大地の影から。建造物の影から。夜の闇という名のこの世界の空全ての影から。数百、数戦の魔剣がずらりと並ぶ。それらは指先一つでいつでもオデッセイへと襲い掛かり、その身体を八つ裂きにするだろう。

「まだやるか、大将？」

「……………いや、遠慮をしておくよ。今回は見逃してくれないかい、魔剣狩り」

「オデッセイ……………！？」

「無理だルキア、一旦立て直さないとこっちが全滅する。あの男……………恐らく本当に途方も無く強い。二人がかりでは殺しきれないね」

「……………退屈」

二人が同時に後退し、走り去っていく。しかし変わりに飛び込ん

できたのはユウガを手にした白騎士であった。ホクトは地面から突き出した魔剣の一つを手に取り、その攻撃を防ぐ。一撃で魔剣を破壊出来る破魔の力は働かず、白騎士がひどく消耗しているのは明らかだった。

「おいおい、助けてやったのにそりゃないだろ」

「魔剣、狩り……ッ！！ ヴァン・ノーレッジ……！！」

「だから、俺はヴァンじゃないホクト君だ」

「関係、ない！ お前は、私が……たお……す……」

そのままホクトの身体にもたれかかり、ずるずると力が抜けて倒れていく昴。少女の身体を抱きとめ、ホクトは傷だらけの騎士の血にまみれた身体をじっと見つめていた。遅れて背後からアクティが駆け寄り、ホクトの傍に立った。

「ヴァン……じゃなかった、ホクト……生きてたんだ」

「俺が死ぬわけないだろ？ 俺は殺されても死なないんだよ。そういう身体だからな」

「よく、わかんないけど……ホクト……。生きてたんだ……。うっ……っ！ ボク、ホクトが死んじゃったかと……。もう、会えないかと……。あうっ！？」

突然アクティの頭を小突くと、ホクトは片手で白騎士をひよいと担いで振り返った。最早周囲に倒すべき敵はいない。殆どの侵入者は白騎士が倒してしまっただし、空母はミュレイが落としてしまった。

ここに来る途中の戦場は全部ホクトが片付けてしまったし、もうこの町での戦闘はとりあえず終了したのだ。

「早いとこメリーベルに合流するぞ。あいつはもう治療の準備を進めてるはずだからな」

「う、うん……。ホクト……。ボクの事、怒らないの……？」

「は？　なんでだ？」

まるであの日あった悲劇の全てが嘘であったかのように……。ホクトはいつも通りだった。それがとても嬉しくて、涙が止まらなかつた。泣きじゃくるアクティの頭を撫で、その手で少女の手を握る。男は優しく微笑み、それから唐突に走り出した。

「おら、急ぐぞ！　ダッシュだ！！」

「う……うんっ！　うんっ！！」

走り出すアクティ。白騎士はグッタリした様子で血を流しつつ気絶していた。ホクトはその横顔を眺め、何故かとても寂しそうに微笑むのであった。

北斗（3）

「ロゼ……。その、どっして……。……」

娼館バテンカイトスの一室、ロゼとリフルは二人で向かい合っていた。突然現れたロゼの様子に戸惑いを隠せないリフル。それとは対照的にロゼは意外にも落ち着いた様子だった。

「リフル……その……」

「は、はい……」

「今まで……悪かった」

何故、謝るのか？ 全くワケがわからず目を丸くするリフル。しかしロゼは落ち着いた眼差しでリフルを見つめ、言葉を続ける。

「今までずっと、僕の為に黙っていてくれたんだろう？」

「……ロゼ……？」

「もう、いいんだ。自分で調べたんだよ。父上が……ロイ・ヴァンシュタールが、一体何をしていたのか……」

「ロゼ、それは……っ！」

「皆が、僕の為に黙っていてくれたのは判ってる。でも、それでも、僕はやっぱり話して欲しかった。本当のことを……。皆の仲間として……家族として」

顔を挙げ、ロゼはリフルへと歩み寄りその手をそっと両手で握り締めた。ずっと子供だと思っていたロゼはいつの間にか大人びた眼差しでリフルを見つめられる少年になっていた。ずっとずっと傍に

居たはずなのに、知らなかったロゼの強さ……。リフルはそれに目を細め、涙が滲みそうになるのを必死に堪えていた。

そう、すべてはロゼのためだった。ロゼが知るには辛すぎる現実が、余りにも多く存在していた。だからこそ黙っていた。けれどももう、それにも必要ないのかもしれない。ロゼは強い。少なくともリフルが思っていたより、ずっとずっと強い。少年はもう、現実と向き合える。向き合って、歩いていける強さを見につけていたから。

「どこまで……本当の事を？」

「あいつが元帝国所属の研究魔術師で、プロジェクトエクスカリバーに参加していたって事……。古代遺跡、“フラタニティ”を発掘していたって事……。その為に、UGに奴隷を集めて……。砂の海豚も元々は、集めた孤児で人体実験をする為にあつたって事……」

「……………ロゼ」

「父上がそんな事してたなんて信じたくなかったよ。でも……でも、父上はそれでも帝国と戦ったんだよね？ 父上は……悪行をしたかもしれない。でも、ちゃんとそれに向き合って、罪滅ぼししようとしたんだよね……？」

リフルはロゼと視線を合わせる為に腰を下ろし、それから強くロゼを抱きしめた。護りたいと思つた少年。そして、護ってくれとあの人から頼まれた少年。ロゼは、とても悲しい使命を背負っている。だからこそ護ってあげたかった。あらゆる全ての脅威から。

でも、それは間違いだったのかもしれない。彼は戦う道を選んだのだ。真実を知り、それと向かい合っていく……。だからここにいて。それが出来るからここに来た。ロゼの成長がとても嬉しかった。そしてとても申し訳がなかった。自分は何を見ていたのかと、自分

自身を殴りたい気持ちになった。ロゼは　　こんなにも真っ直ぐなのに。

「ロイは……。ロイは、最後まで反帝国の英雄でした……。貴方の父上は、確かに間違えた。間違えたけれど……。それを取り戻そうと必死になって戦ったのです」

「……………リフル」

「ごめんなさい、ロゼ……。貴方に全てを伝える勇気がなくて……。貴方の思い出を、穢してしまいたくなくて……。だから、貴方を拒絶してしまった。貴方を手放してしまった。でももう、放したくない……………」

「お、大げさだなお前……。それと、あんまりべたべたひつつくんだよ……………」

「……………抱きしめられるのは、お嫌いですか？」

悪戯つぼく、そして優しく囁くリフル。ロゼは照れくさそうに顔を赤らめながらもリフルの身体を抱き返す事で答えとした。二人はしばらくそうして抱き合い、互いの感触を確かめあった。長い年月存在していた溝を埋めるかのように……………。

身体を離れた時、ロゼはとても大人っぽい微笑を浮かべていた。リフルは目尻の涙を拭い、それから立ち上がる。二人の間にあったわだかまりはきつとまだ消えたわけではないのだろう。けれどもこれが第一歩だ。お互いを理解しあう為に必要な、とても大切なプロセス。ここからまた始める事が出来る。どんな関係でも、どんな戦いでも。

「まあでも、団長には復帰しないけどな」

「えー!?　口、口ゼ!?!」

「自分でも判ってるよ。団長に相応しくないとってことは。だから砂の海豚の事はもう少しリフルに預けたいと思ってる」

「……………しかし」

「そんな簡単に僕が妥協すると思ったら大間違いだよ。僕は……もつと強くなる。色々な物を見て、皆を護れる人間になる。だからそれまでは……ホクトにでも付いていく事にするよ」

「よりによつてあの馬鹿野郎ですか?」

「お前……なんかホクトに対しては全く容赦がないよな……。あいつは何より強いし、あいつの周りにはトラブルだらけだ。あえて荒波の中にもまれてみるのも青春かな、とか思ったりしてる」

「冗談交じりな口ゼの様子からは余裕と前向きさを感じることが出来た。だから少しだけ安心する。勿論、全てをホクトに預ける事は出来ない。だからリフルは少々険しい目つきで口ゼを見下ろした。」

「くれぐれも、あの馬鹿から要らない部分まで学習しないようにしてください。あれは恐ろしく強いですが　胡散臭いので」

「あいつにも色々あるんだろ?　嘘やごまかしなら、僕らにだってあるさ。人の事は言えない」

「……………」

「皆によるしく伝えておいてよ。僕は、僕なりに父の後を継ぐ道を模索してみる。強くなる……。だからリフル、それまでギルドをよろしく頼む」

剣士は頷き、少年の前に跪く。その手を取り、目を閉じながら誓う。それはもうずっと前から誓い続けてきた事。今更言葉にする必要すらない事。それでもまた、もう一度言葉にしてみる。二人の間にある確かな絆を感じられるように。ささやかな別れの間、それが途切れてしまう事がないように。

「それで？　どういう心変わりじゃ？　我らを助けるとは……」

バテンカイトスの螺旋階段の途中、腰掛けて煙草を啜えたホクトにミュレイは問いかけた。昂をメリーベルのところへと運んだ後、ホクトは階段に座つてだらだらとしていた。周りは復旧作業や生存者の治療で慌てている所だが、ホクトはまるでそれらとは無関係であるかのように悠々と紫煙を吐き出している。

ミュレイの言葉には様々な意味があつた。勿論昂を助けてくれた事に対する感謝の気持ちもある。だがしかし、ホクトは自分を恨んでいたはず。白騎士とは敵対していたはず。それが急に現れ、急に手助けするなど疑うなという方が難しい話だ。

「……………別に他意はねえよ。なんだかなあ、人助けしてやってんの周囲のこの反応……………傷つくぜえ」

「お主、何者じゃ……………？　ヴァン・ノーレッジ……………お主のような男

ではなかったと思うが」

「当たり前だろ。何度も何度も何度も言ってる事だが、俺はヴァン・ノーレッジじゃねえからな」

煙草をもみ消し、それから振り返って階段の上に立つミュレイを見上げる。ホクトはそれから深く息を着き、周囲を眺めた。崩れたエントランス、ふっとんだ出入り口、血と残骸の痕。それでも、この世界は続いていく。

「俺は別にミュレイを恨んじやいないし、白騎士だって別にどうでもいい。それに……俺がアイツを助けるのは別に当たり前前の事だからな」

「……？ どういう意味じゃ？」

「俺はヴァン・ノーレッジじゃない。それが全部の答えだよ、ミュレイ」

歩み寄り、赤毛の姫と同じ段に立つ。ホクトはミュレイの手を取り、それから優しく微笑んだ。ミュレイは不審気に目を細め、扇子を広げて口元を隠した。ホクトは目を瞑り、少しだけ考え込む。そうして手にした姫の手を握り、真剣な表情を浮かべた。

「……ミュレイには、礼を言わなきゃな。白騎士の面倒を見てもらっただけだから」

ホクトとミュレイが至近距離で見詰め合うその足元、螺旋階段を見上げるシエルシの姿があった。ロゼとホクトについてきたのだが、結局することが無くてエントランスの作業を手伝っていたのだが、

ふと気づくと頭上にホクトとミュレイの姿があったのである。

何をしているのかと首をかしげていたのだが、ホクトがミュレイの手を取り、顔を近づけるのを見て慌てて階段をこつそりと上りだす。話し声が聞こえるくらいまでそーっと様子を見に行くと、ホクトはミュレイの耳元で何かを囁いていた。その言葉にミュレイは驚き 思わず後ずさる。

「……………今、何を……………？」

「判って貰えたか？ 俺は別にあんたを恨んじやないし、白騎士を殺そうとも思っていない。俺は、ヴァン・ノーレッジじゃないから

」

階段を上がるシエルシ。二人の言葉に耳を傾ける。ホクトは階段の手すりに体重を預け、それからもう一度同じ言葉を繰り返した。

「俺は、ヴァン・ノーレッジじゃない。何度も何度も言ってるけどな。俺の名前はホクト。 “北条北斗”、だよ。俺はこの世界の人間じゃない。こことは遠い世界からやってきた。もうとつくの昔に死んでる救世主なのさ」

意味の判らない言葉の連続に思わずシエルシは階段から足を踏み外し、すってんころりんとその場に転んでしまう。その物音でミュレイとホクトが振り返る。昴はその二人の視線を戸惑いの視線で見つめ返していた。

プリズム（1）

「異世界からやってきた救世主……？ ホクトが……？」

「おっ」

「でも記憶喪失って……」

「ありや嘘だ。すまん！」

「…… はあああああ……ッ!? 「……」

大事な話があるという事でホクトに集められた一同はそこで衝撃的な事実を聞かされる事となった。バテンカイトス最上階、メリーベルの私室……。ホクトは腕を組み、あっけらかんと嘘を吐露する。啞然とするロゼ、苦笑いを浮かべつつ、剣に手を伸ばすリフル。メリーベルは沈黙、ミュレイは腕を組み何かを考えている。アクティは目を丸くして状況についていけないという様子で、シエルシは瞳を反らして上の空……。そんな中、ブラッドが前に出てホクトを見やる。そうして首をかしげた。

「とは言うけど……貴方、どこからどう見てもヴァン・ノーレツジよっ」

「ああ。だから、外見はヴァン・ノーレツジなんだよ。というか記憶喪失が嘘というのは厳密じゃないんだが……。兎に角、俺はどうやら昴の兄貴らしい」

「らしいって……自分の事でしょ貴方……。それにしてもまさか、

あの白騎士と貴方が兄妹だなんてねえ……。不思議な縁もあったものだけわ」

「ちょ、ちょっと待ってよ！！　じゃあヴァンは！？　ヴァンはどうなったの！？」

戸惑いを隠せずホクトに駆け寄るアクティ。ホクトはそんなアクティの前に屈み、真剣な眼差しで応えた。

「ヴァンは……ここにいます」

ホクトが見せたのは術式がびっしりと刻み込まれた腕であった。そうして少し距離を置き、空中にガリユウを召喚してみせる。そうして魔剣を机の上に置くと剣はぎよりと目を剥きアクティを捉えた。

「肉体は俺……北条北斗が預かってる。じゃあヴァン・ノーレッジ本来の意識がどこにあるのかというと……“ここ”だ」

ガリユウの刀身をこつんと叩くホクト。アクティは信じられない現実に思わずその場に膝を付いた。愕然とする。するなという方が無理だろう。目の前にある巨大な剣、それがまさかあのヴァン・ノーレッジだなんて。そう言われてはいそうですかと納得できるはずがない。

「お主の言っている事は事実なのか？　わらわにはイマイチ理解が追いつかぬのじゃが」

「元々ヴァン・ノーレッジの肉体は取り込んだ無数の命……“死者の魂”で構築されている群像だ。外見的にはヴァン・ノーレッジの

形を保つては居たが、ここ数年のヴァンは最早ヴァンなのか、それとも違う何かなのかその区別は難しい段階にまで悪化していた」

ヴァンの持つ力、蝕魔剣ガリユウ。それは肉体をも取り込み、“平らげて”存在を死と重ね合わせる。一つの命としてではなく。魂を情報へと変換しそれを取り込む力を持つガリユウを宿す人間は、等しくその力の代償として己の魂と肉体を囚われる事になる。例外なく、ヴァン・ノーレッジもまたその力に取りこまれてしまった。ガリユウは、この世界の“死”と繋がる剣である。死の群れの中に紛れ、ヴァンと呼ばれる存在の意識は希薄になっていく。戦闘すればするほど、その死の力を使えば使うほど、魂は喰われ、穴だらけになり、肉体の内側でゆっくりと崩壊していく。

「魂を取り込みすぎたヴァン・ノーレッジは、ガリユウという形をした“死”に飲み込まれた。肉体は“死”の総意であり滅ぶ事はないが、ヴァンという人間の人格はとっくの昔に穴だらけになってたんだよ」

「そんな……。じゃあ、ヴァンは……？　ヴァンはもう、死んじやっただって事なの……？」

「そうとも言い切れない。例えばアクティ……お前は俺を見てヴァンを感じないか？」

顔を挙げ、ホクトを見つめるアクティ。これまでであった出来事それらから思う事がある。記憶喪失になったとしても、ヴァンはヴァン……。そう思えたのは、ホクトの言動の節々にヴァン・ノーレッジ“らしさ”を感じる事が出来たからに他ならない。

そう、ヴァンはまだ生きている。ガリユウという死の渦に飲み込まれても直、自意識を保っているのだ。それは人間としての精度で

言えば、ただ本能と記憶の残滓が漂っているだけの状態なのかもしれない。それでもヴァンはその戦闘本能と記憶の一部をまだ保ち、その技術は魔剣ガリユウとして……。そして記憶と感情の一部はホクトの中へと残しているのだ。

「……………じゃあ、あんたの魔剣が勝手に動くのは……………」

「ヴァン　　だけ、ってわけじゃないんだろうけどな。だが死者の……………魔剣狩りの本能がまだ剣に残っている証拠だろ」

成る程と納得し、ロゼは前に出る。ガリユウを見つめ、唇を噛み締めているアクティの肩を叩き、そつと身を引かせた。ホクトはガリユウを解除し、メリーベルの執務机の上に腰を下ろした。煙草を取り出し、そこにうさ子からもらったライターで火をつける。

「実際、俺は記憶喪失でな。元々の俺の人格……………北条北斗としての記憶は殆ど残ってない。だけどもあ、それも最近は徐々に思い出し始めてるんだ。で、ヴァン・ノーレッジの記憶も剣を通じて流れてきている……………つまりそついう事だ」

記憶喪失というのは嘘ではない。だがホクトの人格がヴァンのもとは全くの別物であるというのも事実である。そして二人は一つの肉体を共有し、そしてガリユウという死の渦に囚われている虜囚なのだ。

「……………興味深いのう……………。つまりお主は本当に死者の意識の一つであり、たまたまヴァンの器の中に入っているだけ、ということか？」

「理由は俺にも良く判らないが、まあそんな所だ。死んで、気づい

たらここに居た……そんな感じだな。といっても、それを思い出したのもつい最近なんだが……」

ホクトの告白に場は完全に沈黙していた。彼の発言には様々な意味があった。ヴァン・ノーレツジの死……。魔剣ガリユウの持つ危険性。ホクトとヴァンが別人であるという事。魔剣狩りと呼ばれた最強の剣士は既に存在しないという事。そして　ヴァンがそうであったように。ホクトもまた。その意識をガリユウに侵食されているという事　。

誰も何も言えず、重苦しい空気が押し掛かった。ホクトは少しだけ寂しげに微笑み、それから紫煙を吐き出した。こうなることは判っていた。それでも語っておくべきだと思ったのには色々と理由がある。ここに関わりのある人物が集まっていた、というのもその一つだろう。だがロゼが前に進もうと歩き出し、アクティはヴァンを失った事に悲しみを覚え、そして白騎士は　。

元々、惰性で生きてきた。ホクトと呼ばれる人格には別段ヴァン・ノーレツジと同じように振舞う必要性はなかったから。彼の意識や記憶はあったが、それに従う積りも別に無かった。だからその日暮らし　。誰とも深く関わらず、誰とも絆など結ばなければいいのだと思っていた。

けれどももう、そんな悠長な事は言っていられないのだ。どうやらヴァンの残した因果はホクトを開放する積りも無く、これからもずっと付きまとうらしい。ならばいつその事　という思いもある。今まで何となく、本当に何となく、理由もないのに戦ってきた。この世界を滅ぼすほどの巨大な力を持ちながら　。

「というわけで、俺はお前らの期待するヴァン・ノーレツジじゃなかったとき。めでたしめでたし、だ」

「ふざけるなっ!!」

肩を竦めるヴァンに怒号が浴びせられた。開いた出入り口の向こう、包帯まみれになった昴がウサクに支えられて立っていたのである。甲冑を脱ぎ去り、華奢な少女としての姿を取り戻した昴は震える瞳でホクトを見つめている。

ミュレイは昴に駆け寄りうつとして、しかしウサクにそれを止められていた。絶対安静のはずである昴がここに来たのは、すべて昴の意思であった。ウサクは友として、仲間として、そんな彼女の意思を尊重したかった。

「何なんだよ、その話は……っ！！ 出任せもいい加減にしろっ！！」

「す、昴殿……もう少し落ち着いて……」

「ウサク……これが落ち着いていられるか！？ あいつはっ！！ お前は、ミュレイを殺したんだぞ！？」

昴の発言には誰もが首をかしげずには居られなかった。一番驚いたのはミュレイ本人で、鳩が豆鉄砲を食らったような という顔である。まさかそこで自分の名が拳がるとは思って居なかったミュレイの脇を抜け、ふらつく足取りで昴はホクトへと歩み寄る。

その襟首を掴み上げ、机へと強く押し倒した。ぎゅっつと握り締めるホクトのシャツが伸び、昴は包帯だらけの顔から鋭く視線で男を射抜いている。確かに それもそうだろう。昴にとってこんなにふざけた話はなかった。これ以上無い……複数の意味での侮辱である。

「北条北斗は死んだ……あっちの世界で死んだんだ！ おかしいだろ！？」 なんてこんな所にその北斗がいるわけがあるんだよっ！！

ヴァンがもう死んで、剣になってるとか……なんだそれっ!!
ふざけてないで真面目に話せよ!!」

「俺は真面目に、事実だけを話している。少し落ち着けよ、昴」

「……っ!! 私の名前を、判ったように呼ぶなあっ!!」

振り上げた拳はしかし振り下ろされる事は無かった。北斗はただじっと、至近距離で昴を見つめている。わかってしまう。わかってしまった。そんなに真っ直ぐに見られては。ごまかしているのは自分の方なのだと 理解出来てしまう。

「私は、認めない……。私は……っ!!」

「昴殿、大丈夫でござるか!? 無茶しすぎでござる!」

「お前を、倒せば……終わるって! お前さえ居なくなれば……それで平和になるって! そんな風に馬鹿みたいに考えてたわけじゃないよ、でもっ!!」

倒れ掛かった昴を背後からウサクが支える。昴は涙を零しながら両手を広げ、叫んだ。それ以外にどうする事も出来なかった。高ぶる感情を押さえ込むその手段を、まだ少女は持ち合わせていなかったから。

「でも……こんなのってないよ……っ!! お前が北斗なわけないだろ、ばかっ!!!! なんで今更!! 今更兄さんの名前を出してくるんだよっ!!!! やつと……やつと乗り切ったのに! 忘れようとしてたのに、お前ええええっ!!」

「昴殿！」

「認めない……絶対に認めない……！ 私は……お前、なんか……」

ホクトを睨み、指差しながら昴は前のめりに気を失ってしまふ。ほっと一息ついた様子のウサクが昴を担いで部屋に戻っていく中、ミュレイはホクトの隣に立ち、視線を合わせずに呟いた。

「……すまぬな。昴にはもう少し、時間が必要じゃ」

「だ、ろうな……。まあ今更兄貴面するつもりもねえし……。あの様子じゃ、あいつはあいつなりにシャキッと頑張ってるみたいだな」

「どこまで記憶にあるのじゃ？ その……昴の事は」

ミュレイの質問をホクトは笑って濁した。そうして一旦話はお開きとなり、それぞれが思い思いに部屋を出て行く。残されたホクトの隣、メリーベルは同じように机に腰掛けた。

「良かったの？ これで」

「………………。恐ろしいねえ。あんた、俺と再会した時には気づいてたんだろ？」

「まあ」

「嘘をつき続ければ、取り返しの付かない事になる。あんたの言うとおりだったな。ま、今更そんな事を言ってもしょうがねえが」

立ち上がり、ホクトは去っていく。その後姿を見つめ、メリーベルは問いを投げかけた。

「これからどうするの？ ホクト」

「これから考えるさ」

扉が閉ざされ、沈黙が再び降り注ぐ。メリーベルは腕を組み、静かに目を閉じた。壊れかけた街の上、消えない月の光が平等に降り注ぐ。誰も彼も、その思いに対しても分け隔てなく。

プリズム（1）

「その、ホクト……。この世界の人間ではないというのは、どういう意味なのでしょう？」

夜のローテイスを歩くホクトの隣、何故か付いてきたシエルシの姿があった。煙草の煙を吐き出しながら歩くホクトの周囲、街は戦闘の傷跡が大きく残り、あちこちで焼け落ちた建造物や機動兵器の残骸が見えた。ギルドの関係者もそうでない人も無差別に行われた帝国の攻撃。それが残したのは目を覆いたくなるような惨状だった。

血と肉がこげる臭いの中、ホクトはただ黙って歩き続ける。シエルシは寂しそうに目を伏せて歩いていたが、ホクトは急に思い出したかのようにシエルシへと目を向ける。

「お前、まだくっついてきてたのか」

「へっ?」

「いや……。あんな話の後だしな。もうくっついてこねえかと思っ
てたぜ」

足を止め、振り返るホクト。シエルシは不満げに拳を握り締め、
ホクトに詰め寄った。まさかのガン無視に抗議したくもなるだろう
が、それをぐつと堪えてシエルシは改めて質問を投げかける。

「貴方はこの世界の人間ではないのですか」

「ああ、そうらしいな」

「……それは、その……どういう意味なのでしょう?」

「文字通りの意味だ。ヨツン Heim でもプリミドルでも、エル・
ギルスでもオケアノスでもない。この世界には存在しないどこかか
らやってきた」

「では、貴方は……ヴァン・ノーレッジでは……?」

「ないな。だからもうずっと皆に言ってきたんだけど……。ヴァ
ンじゃねえって」

「では、貴方は……。貴方は、どこの誰なのですか?」

真っ直ぐに見上げるシエルシの目。それを見ていると、何故

か時々悲しくなる。ホクトは自分の感情を表に出す事は殆どなかった。これからもそれはないはずだった。しかしそれでも 思い出すのだ。自分が護りたいと思った人達の事を。薄暗い物置の中で膝を抱えていた少女……。自分を愛していると笑ってくれた姫の事。それら全ては今のホクトにとっては過去であり、同時に幻でもある。問いかけられたところで答える事は恐らく不可能だろう。彼はヴァンでもなく、恐らくは北条北斗ですらない。闇より出でた存在……。ガリユウの偏在意識の一つなのだから。

「シエルシ、まあそこに座れ」

「はい？ 判りました」

二人は道端に転がっていた木製の樽の上に座った。ホクトはぼんやりと空を見上げながら煙草をふかし、シエルシはそれを見習って空を見上げた。

この世界の月は、決して遠い場所にあるわけではない。この虚無の海に浮かぶ世界の周りをぐるぐると、文字通り回っているのだ。淡く光を放つその存在に思いを馳せる。いつだったか、誰かと共に見つめたその世界を……。

「正直俺は、今まで何となく成り行きで戦ってきた。自分自身が何なのかも今のところわからねえしな」

「では、成り行きで帝国と……？」

「まあ……そういう事になる。とりあえずなんかやってりや答えは見つかるかと信じてたし、今もそう信じてる。立ち止まっているよりは千倍マシだし……それに、じっとしてるのは性に合わないからな」

何となく、その場その場で自分の気持ちに正直に対応してきた。困っている女の子は助けてきたし、期待されれば応えてきた。だがそれで本当に前進できているのか。それはホクトには判断しようがないのだ。これからもこれからも、彼は虚無の記憶の中を生きていく。自分でありながら他人であるの身体と意識で、生きていくしかない。そうする他にないのだ。

「わかつたる？ お前にはお前のやるべき事があり、そしてそれは幸せな事なんだよ」

「………………。ホクト…………。いえ、師匠。師匠はこれからどうするつもりですか？」

「うむ、それはこれから考える。基本考えなしだからな。天運にすべて任せるつても中々楽しい」

「言っている事が矛盾しているような気がします…………。でも、私はそれでいいと思います」

樽から飛び降り、シエルシは背後で手を組んで振り返った。そうして優しく微笑み。ホクトへと手を差し伸べた。開かれた手が男を誘うように導き、ホクトはそれに手を伸ばす。

「きっと本当に正しい事なんてこの世界にはないんです。その時その時、出来る事を信じていくしかないんですよ？」

「…………。かもな。よし、そんな弟子にはこいつをプレゼントしてやる」

ホクトがシャツの中に手を突っ込み、引っ張り出したのは首から

提げられたパズルだった。記憶喪失になったホクトがずっと持ち歩いてきたお守り。それをシエルシの手の中に落としてみせる。

「これは……？」

「俺の幸運のお守りって所か。パズルになってるんだが、いくらやつても俺にゃ解けなかった。お前は頭良さそうだし、頑張れば何とかなるんじゃないか？」

手の中でそれを何度か回転させ、シエルシは眉を潜めた。一見しただけで直ぐにわかる難易度に思わず唖ってしまふ。そんなシエルシの様子に満足したのか、ホクトは笑いながらシエルシの肩を叩いた。

「ま、精進したまえよ。はっはっは！」

「……………むー。師匠、それより稽古をつけてください」

「いや、なにもこんな時にやらんでもいいだろ……………」

「こんな時だからこそ、です」

シエルシの目に、崩れたローティスの街はどのように映ったのだろうか？ 姫はずっと誰かの言いなりになって生きてきた。帝国に尽くす人生を生きてきた。だが、時々思うのだ。それはふと、まるで運命の悪戯のように訪れる。こうやって誰かが悲しんでいる世界……………それは本当に正しいのだろうか？

何をするにも力は必要になる。何かを変えたいと願うのならば。何かを護りたいと願うのならば。その力の使い道はまだ判らない。それでもシエルシは求めた。何かを変える、何かを護る、そんな力

を。

「師匠は どうして今、本当の事を話したんですか？」

ホクトが取り出した魔剣の一つをシエルシに投げ渡す。姫はそれを握り締め、構えを取りながら問いかけた。ホクトは剣を片手に首をかしげる。理由はきつと彼にも判らない。でも。

「話したくなつたんだ。いや……離したくなつたのかもな」

「え？」

「ほれ、さつさとかかって来い。前回のおさらいからだ。行くぞ、メイドプリンセス！」

「メイドじゃ ありませんっ……！」

走り出したシエルシが振り下ろした刃がホクトの刃とぶつかり音を鳴らす。真剣な表情で取り組むシエルシを見つめ、ホクトは何故か楽しい気持ちになっていた。

とりあえず、これからどうなっていくのかは判らない。それでも恐らくきつと、自分の成すべき事は変わらないのだろう。すつてんころりんと転んでみせるシエルシに手を伸ばし、助け起す。それが今の自分の。ヴァン・ノーレッジの。北条北斗の役割だとでも言うかのよう。当たり前前に、優しく。

「……………ねえ、師匠」

姫は寂しげに微笑み、その手を握り締めて立ち上がった。そうして目を閉じ、間をおいて紡ぐ。

「貴方はきつと……本当の事を話して、それで正しかったのだと思います。だから……悲しまないで下さいね」

「……………。俺のどこが悲しんでいるように見えるんだ？ 生意気言つのは俺にボコボコにされなくなつてからだ」

「ふふふ……………。じゃあ、メイドプリンセスの本気を見せてあげましよう」

「望むところだ！」

再びシエルシが剣を放つ。血を吸い、命を吸い、死を刻む力。今だけはそれがまるで兎戯の如く、軽やかに楽しげに刃音を立てていた。

プリズム(1) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

リクエストされたら基本的になんでもやっちゃうけどさ……

ホクト「……皇帝のアレ」

シエルシ「びくっ!？」

ホクト「皇帝の大きさに考えて……」

シエルシ「かくぶるかくぶる……」

ホクト「いやあ、でかいよなあっ！ あんなのやられたら俺だつて流石に一発でいっちゃうぜ」

シエルシ「ええええええええええっ!？」

ホクト「すごいよなあ、皇帝の剣」

シエルシ「……ぼかーん」

ホクト「どうした？ 何を想像してたんだ？ ん？」

シエルシ「い、いえ……なんでもないです……」

ホクト「ダメだぞくやらしいことを想像しちゃく！ 仮にもお姫様なんだからな！」

シエルシ「や、やらしいことなんて考えてませんっ！！ 考えてま
せんーっ！ー！！」

ホクト「そうなのか？ じゃあお前皇帝のアレどう思うよ？」

シエルシ「うーん……。凄く大きいと思います。そもそも私、皇帝
の上に乗れるくらいですから……。その皇帝の剣ですから、もうもの
すごいですよ。近くで見たらうわあ〜って感じでしたね」

ホクト「ほうほう」

シエルシ「それにホクトと皇帝が並んだ時思ってたんですけど、ホク
トのより何倍も大きいんですよ。ホクトのアレもかなり大きくて黒
いと思うんですけど、皇帝のはその数倍のサイズでぴかぴかでした
からね」

ホクト「……………」

シエルシ「私実は、昔から大きいアレってかっこいいなあって思っ
てて……。イスルギのも大きいんですよ、すごく。前に触らせても
らったんですけど、がちがちで 初めて触ったからちよっとドキ
ドキしちゃいました」

ホクト「……………」

ミュレイ「ん？ 部屋の中で二人は何の話をしておるのじゃ？」

アクティ「さ、さあ……………」

ウサク「は、鼻血が……っ」

(後日談)

ホクト「なあメリーベル、俺の魔剣もつとでかくなんねえかな……」

メリーベル「なんで……?」

ホクト「なんか、皇帝に負けた気がするから」

メリーベル「は?」

プリズム(2)

「異世界の人間、かあ……」

ぼつりと呟くアクティはバテンカイトス二階の廊下からエントラ
ンズを見下ろしていた。現在バテンカイトスは負傷者の為の緊急避
難場所となっており、ギルド関係者、非関係者問わず様々な怪我人
が担ぎこまれていた。

先ほどまでアクティもその手当ての手伝いをしていたのだが、戦
闘からこっちずつと動き詰めだったアクティを気遣い、ブラッドが
休むように促したのである。とは言えこんな状況でどう休めばいい
のか。身体を動かしていれば考えずに済んだ様々な事が脳裏を
過ぎる。少女の表情は、いかにも憂鬱だった。

そんな少女の背後。パンを齧りながら歩くロゼの姿があった。ラ
ンチボックスを片手に階段を下りようとしたりロゼは手すりの上で頬
杖を付いているアクティを発見し、背後から歩み寄る。その肩を叩
くと少女はびくりと背中を震わせ、慌てて振り返った。

「な、なにっ!?!」

「いや……。君も腹減ったろ？ パン食べるかなと思って」

「……………はあ……………。なんだ、そんなことが……………」

「そんなこと、じゃないだろ？ 食べなきゃ動けなくなるし……………ホ
ラ」

手渡されたサンドウィッチを一口齧り、アクティは再び階下を見

下ろした。口の中に野菜とハムの味がじわりと広がると、ようやく自分が腹ペコである事に気づいた。もぐもぐと直ぐに一つを平らげ、指先を舐めながらロゼを見やる。少年はパンを齧りながらも落ち着いた様子で人々を眺めていた。

「……………。そういえば、砂の海豚の団長辞めたって聞いたけど、どうしてここにいるの？」

「個人的に色々確かめたい事があってね。そうそう、さっきメリーベルに色々話を聞いたんだけど、あの人は天才だね。暫くここで僕も修行でもしようかな」

「意外と楽しそうじゃん。てっきり落ち込んでるかと思ってたけど……………」

「まあね。実際落ち込んでたよ。でもホクトとシエルシがやってきて、それどころじゃなくなっただっていうか…………。まあ色々」

「ふうん…………？」

以前ここにやってきた時、ロゼは部屋に引き籠もって悩んでいた。アクティはホクトに頼まれて部屋から引つ張り出そうと何度か試みたりもしたのだが…………。結果は判り切っている。あの頃の姿を知っているだけにアクティには今のロゼの様子が意外だった。尤も、彼も全てを割り切れたわけではないのだが。

「ロゼは…………。ホクトが異世界人だって知ってたの？」

「いや。流石に全くの想定外だった、かな？ まあ普通じゃないとは思ってたけどさ……………」

「ホクトが生きててくれたのは、素直に嬉しいんだ。でもさ、ヴァンは……。ヴァンはもう居ないって思うと……。ホクトとヴァンが一つ何だったのも判るけどさ。こう、対応に困るっていうかさ……」

ぼつぼつと愚痴を零すアクティ。ふと顔を上げると、ロゼはそんなアクティを優しく見つめていた。何となく急激に恥ずかしくなり、少女は視線を反らす。そもそもどうしてロゼにそんな話をしているのか……。自分でも良く判らなかつた。

「どうなっちゃうのかな、これから……。そういえばブラッドとメリーベルは？ 一緒だったんじゃないの？」

「二人なら、バテンカイトスでのギルド会議に向かったよ。もう結構前だから……。今頃会議の真っ最中、かな？ ククラカンとギルドの同盟が結ばれれば、一応帝国に対抗する戦力が集結する事になるし……。まあ、説得は難しいだろうけど」

今回のローティス襲撃により、殆どのギルドは反帝国活動に尻込みしている。元々反帝国のギルド殆どが先日の婚姻の儀の際に壊滅している事もあり、ギルド側に残されている戦力は決して多くない。バテンカイトスと呼ばれる空間が異次元に存在するから何とかやっているものの、まともにやりあえば帝国にあっけなく潰されてしまうのがオチなのだから。

その前提事実に加え、今回の帝国の攻撃が続き現在ギルド組合は全体が帝国に服従すべきだという考えに傾きつつある。元々ギルドの全てが反帝国というわけでもなく、このまま完全に潰されるくらいならばと考える反帝国ギルドも少なくない。結局ククラカンがギルドと手を結んだところで、大幅な戦力増強は望めはしないのだ。

「リフルとブラッドはこのまま帝国と戦う姿勢を維持する方向で固まってるみたいだけど、砂の海豚とサーペントヴァイトの二つだけじゃどうにもね……」

「こうなる事を予見して、ボスは反対してたのかな……。婚姻の儀の襲撃作戦」

実際、あの大騒ぎが無ければ今もまだ帝国に逆らうだけの戦力が温存されていただろう。甘い見通しで倒せるような敵ではないのだから、機が熟するまで待つべきだったのかもしれない。だが時既に遅し 過ぎた事を後悔しても仕方が無い。今出来る最善を……。それを考えるべきだ。

「何とか反撃に手段を講じる必要があるだろうね……。そういえば、白騎士にはもう会ってきた？」

「う……っ！？ いや、え」と……。ま、まだ……」

「彼女が大怪我した原因は君にあるんだから、見舞いくらい行っって置いたほうがいいんじゃない？ 白騎士が味方についてくれれば、こっちの戦力は大幅に強化されるけど……。どうするんだよ、もし協力しないとかが言い出したら」

白騎士に限ってそんな事はないのだが、二人は白騎士 昴の性格をよく理解していない。故にアクティは顔色悪く視線を反らすしかなかった。あの魔剣狩り、ヴァン・ノーレッジと互角に戦い上げるあの実力は是が非でも今は必要である。それがもし自分の所為で……。そうなったらアクティは仲間達に合わせる顔がない。

頭を抱えて思い悩むアクティの背後、部屋から出てふらふらと歩

く昴の姿があった。最近ずっとかけていなかった眼鏡をかけ、包帯まみれの身体で吹き抜けの下、手当てを施されている人々を見下ろす。寂しげな眼差しの昴の存在に気づいたロゼは、アクティの肩を叩いて昴を指差す。

「ほら、重傷患者が出歩いてるよ」

「え!?! いや……ボ、ボクは……」

「謝っておいた方がいいって。ほら、行こう」

アクティの手を取り、ロゼは強引に走り出す。駆け寄る二人の姿に気づき、昴は身体をそちらに向けた。傷だらけの顔が痛々しく、憂いを秘めた優しい眼差しが二人を見つめていた。アクティはロゼに突き飛ばされ昴の前に立ち、おずおずと顔を上げた。

「君は……確か……ヴァンと一緒に居た……」

「……………え、っと……。ボク、アクティ……。アクティ・ノーレツジ……です」

「……………。初めまして、アクティ。私は昴……北条昴。白騎士って言った方が早い、かな」

苦笑を浮かべ、それから昴は通路の手すりへと手をかける。白い包帯が袖から覗き、アクティの胸はちくりと痛んだ。見れば見るほど良く判らなくなっていく。白騎士と呼ばれたあの恐ろしい魔剣使いが、この寂しげな少女だという事実……。どこか冴えない、ぼんやりした。優しそうで、気弱そうな眼差し。それなのに全てを仮面で覆い隠して、彼女は返り血を浴びて戦ったのだ。

本当の彼女がどちらで、どちらが偽りなのか……それは考えるだけ無駄なのだろう。どちらの正解であり、どちらも不正解だ。昴は己の意思を押し殺し、目的の為に修羅になり切る。その結果何が起ころうとも、至上目的の為にはすべてを割り切るつもりだった。その、覚悟があつた。

仮面が外れた時、彼女が見せた悲しげな眼差し。それがアクテイの中に深く刻み付けられている。誰も、誰だって、きっと本当は争いなんて望んでいないのだ。けれども仕方が無くて。そうしなければ護れなくて。だから、戦っている……。アクテイとて、それは同じ事だ。

自分と相手が同じだとわかってしまえば、引き金は果てしなく重くなるのだろう。もう、アクテイには白騎士を討つ勇氣はなかった。それでも……やはり、憎しみは簡単には消えない。ヴァンが居なくなったのは、白騎士の所為。その考えはすぐには払拭出来ないだろう。それでも。

「……………あんまり、出歩いてちゃ駄目だよ。あんなにボコボコにされてたんだから」

「どうも、そうみたいだね……。体中あちこち痛いよ……………」

「目……………ごめんね？ 痛いよね……………」

「心配してくれてありがとう、アクテイ。それじゃあ私は部屋に戻ろうかな……………」

振り返った昴の足がぐらつき、倒れそうになる。その時アクテイは昴の身体を支え、手を取って居た。驚く昴と驚くアクテイ……。互いにびっくりした後、それからアクテイは一步前に出た。

「部屋まで、送ったげる……。目、見えないんでしょう？」

「いいの？」

「いいよ、ボクの所為だもん。メリーベルが目を治してくれるまで、ボクが昴の目になってあげる」

少し照れくさそうに、それでも譲らないといった様子で頷くアクティ。昴は微笑み、目尻に涙を浮かべながらその手をぎゅっと握り締めた。

「ありがとう、アクティ……」

「な、なんで泣くの！？ 大人でしょ、しっかりしてよ！！」

「う、うん……ごめん……」

「ほら、こっち！ 階段上がるから、気をつけてね！」

二人が手を取り合って螺旋階段が上がっていくのをロゼは遠くから見送っていた。その背後に突然ウサクが現れ、ロゼの持っていたパンを一つ手に取りマスクをずらした。

「かたじけない、ロゼ殿。お陰で二人が少し仲直り出来た様子でござるよ」

「うわあっ！？ び、びっくりした……。なんで背後に音もなく現れるんだ……？」

「拙者、忍でござるから」

「そ、そういう問題か……？　っていうか、居るなら居るって言うてよ……」

胸に手を当て、苦笑するロゼ。ウサクは軽快に笑い飛ばし、それから本題に入った。

「会議が終了したので、皆を集めてくれと姫様から頼まれたのでござるよ。ロゼ殿もメリーベル殿の部屋に向かってくたされ」

「あ、そうなんだ。了解……。ホクトとシエルシなら、さつき外に出てったよ」

「既に位置は把握しているでござるよ。然らば、御免！」

吹き抜けに飛び込み、そのまま去っていくウサク。忍者らしい行動に安心しつつも、若干それはそれで非常識で何とも言えない。ロゼは無言で暫く考え込み、それから階段を上がり始めるのであった。

プリズム(2)

「結論から言うと、ギルド全体は帝国に降伏するという方向で決まった」

ミュレイの一言から始まった作戦会議は当然重苦しいムードに支配されていた。砂の海豚、サーペントヴァイト、そしてククラカン

……。更に加えて何故か魔劍狩りと皇帝の妻という異様な混成がずらりと並ぶ中、ミュレイは机の上に地図を広げながら報告を続けた。

「現状、ギルドには既に帝国に逆らうだけの戦力が残っておらぬ。帝国のギルドに対する攻撃姿勢は本物 恐らく降伏したところで無駄じゃろうが、むざむざ殺されに行くよりはマシというのがギルドの総意じゃな」

「……………まあ、そうなるだろうとは思ってたけどな」

肩を竦めるホクトを昂は椅子の上に座ったままぎろりと睨みつける。その表情は先ほどアクティと話していた時とは百八十度違う。

。射抜くような憎悪の視線に気づいてはいたが、ホクトはこっそりとシエルシの裏に隠れてそれをやり過ごした。

「では改めて帝国側の動きとギルド、ククラカンの今後の行動をおさらいするぞ」

ミュレイは畳んだ扇子で机の上の地図を開いた。全ての始まりは婚姻の儀襲撃事件。ギルドが徒党を組んでそこに乱入し、皇帝ハロルドの命を奪おうとした謀反から始まった。

襲撃に参加した反帝国ギルドはその殆どが剣誓隊により壊滅させられたが、反帝国ではないギルドは健在である。が、彼らは帝国からの攻撃に対して怯え、無条件降伏というのが結論である。帝国側が今までギルドを見逃してきたのは暗黙の了解であり、帝国にとってもギルドが有用な物だったからである。だが今回のように力を持ちすぎたギルドを放置するのは良くないと帝国は考えたのだらう。

となれば、反帝国思想ではないギルドは帝国の管理下に入り生き残れる可能性がある。実際帝国は既に降伏勧告をしており、それがまたギルド内部での混乱を加速させる要因となっていた。

ギルド内部ではそれぞれのギルドマスターによる協議が行われたが、結果としては砂の海豚、サーペントヴァイトを除く全てのギルドが帝国に降伏するという方向性で決定した。つまりこれで事実上、ギルド組合は崩壊したことになる。

「ギルドは既に帝国に反抗する力と意思を失っており。まあこれ以上説得した所で恐怖には勝てぬじやろうから、わらわも一先ずは手を引く事にした」

そのミュレイ率いるククラカンは現在着々と戦の準備を進めているザルヴァトーレと近々正面衝突となるだろう。ザルヴァトーレの王、シルヴィア・ルナリア・ザルヴァトーレは第四界層プリミドールを平定し、帝国はシルヴィアの手によって強固に統括されたプリミドールで新たな利益を得る……というサイクルである。そう言った政治、資産的な目的の他にも帝国にはSランク魔剣の回収という目的も存在している。

Sランク魔剣の所有者は七人と言われており、その中でも最高魔力の剣、炎魔剣ソレイユを奪う事こそがククラカン侵略の最大目的なのだろう。ならばソレイユを手放せばそれで済むのかといえばそうではなく、どちらにせよ国は攻められる運命……。むしろソレイユこそが逆境を乗り越える為に必須の策なのである。

ククラカンにはミュレイのソレイユの他、ミラ・ヨシノが所持していたS魔剣、破魔剣ユウガが存在する。それは現在持ち主を変えつつも結局はククラカン所属であり、ククラカンを落とす事で二つもS魔剣が手に入るという事になる。ザルヴァトーレは念願であった第四界層の統一、帝国はその手助けでS魔剣を入手……そう思った思惑があり、これからの戦いが繰り広げられるだろう。

「実際ククラカンとザルヴァトーレの戦力差は圧倒的じゃ。パトロクが桁外れじゃからのう。婚姻の儀に成功したのがククラカンだっ

たのならばまた状況も違ったのじゃろうが、まあ今や世界は　そこの姫を中心に回っておるからな」

ミュレイが微笑みかけるその先にはまるで無関係のような顔をしているシエルシの姿があった。が、実際世界の動きのすべては彼女が皇帝の妻となったあの時から始まったのだ。彼女こそ、この世界のパワーバランスを崩壊させた張本人なのである。

尤もそれをどうこう言うのはお門違いであり、ミュレイとてそれは理解している。今大事なのはいかにしてククラカンを護り、ザルヴァトーレを倒すか……。ギルドを護り、人々を護るか。故にこの話の中で、大きく矛盾する前提が生まれてしまう。

「シエルシ、おぬしはどうするつもりじゃ？」

「え………？」

「ホクトについてまわっておるのは構わぬが、それでザルヴァトーレに混乱が起これると思わぬのか？　それに我らはこれからザルヴァトーレと戦う為の会議を行う……。もしおぬしが皇帝の下に戻るのであれば、それを放置するわけにも行かぬ」

忘れていたが、ここはシエルシにとっては敵地なのである。忘れていた。もちろん判ってはいた。だが。周囲の人々からの視線は素直に困惑である。そう、シエルシはこの場に余りにも場違いだった。

「まあそんなにシエルシをいじめてやるなって。こいつは俺が責任持って帝国に戻すし、邪魔はさせねえから」

「そういうおぬしもどうするつもりじゃ、魔剣狩り？　おぬしの話

が事実であれば、帝国と戦う理由はないと思うが」

「まあ……ないと言えば確かにはないな。だが 俺にも色々思う事はある」

ちらりと昴を見やるホクト。そう、それにもう全くの無関係というわけでもない。なんだかんだ言いながらも共に戦ってきた仲間たちの危機なのだ。それを無視する事は出来ない。

「ならばおぬしの力、戦力としてアテにさせて貰うぞ。構わぬな？」

「ああ、どうぞどうぞ。まあ俺とは共闘したくねえってやつもちらほらいそうだが……？」

「おぬしの戦闘能力はかけがえのない物じゃ。その為なら多少は……わらわも我慢するわ」

腕を組み、溜息を漏らすミュレイ。そう、ミュレイにとってもホクトはあまり好き好んで見たい顔ではない。だが現状は人材を選び好み出来るほど良好ではないし、ホクトの戦闘力は絶大だ。手放すには余りにも惜しい。

「現在……まあ仮に反帝国連合、とでも名づけようか。我々反帝国連合軍の戦力はククラカン武士団とサーペントヴァイト、そして砂の海豚のみじゃ。これだけで見ると、ザルヴァトーレとの戦力比は恐らく一対五くらいじゃろうな。それに付け加え、向こうには魔剣使いのイスルギ団長、それからあのシルヴィアが控えておる。更には剣誓隊も介入してくると想定すると、かなり不利なのは言うまでも無い。じゃが、こちらにも一応希望がないわけでもない」

魔剣狩りと呼ばれ、剣誓隊百人斬りの伝説を持つヴァン・ノーレツジ……ホクトが味方に居るのだ。それに付け加え式神の召喚が可能なミュレイ、対魔剣使い戦闘において絶対的な力を誇る破魔の昴と、七人存在するカテゴリースの内三人もが集まっているのだ。この戦いに勝利出来るかどうかはこの三人を如何に効率よく運用するか、そこにかかっていると見える。

「ま、皇帝が出てこない限り俺一人でも相当蹴散らせるだろうな。ミュレイも多勢に無勢は慣れっこだろ？ 問題はステラだな」

「ステラならわらは恐らく相性の問題で撃退出来るじやろうが、完全に倒しきるのは不可能じゃな。そこは昴の破魔が頼りじゃが……」

昴は現在負傷しており、実力を完全に発揮できるかどうかは怪しい。結局彼女の回復を待つ間、そのほかの準備もあるので作戦開始までは少々間を見る必要があるだろう。インファイトで絶大な戦闘力を発揮するステラはホクトとだと力と力の殴り合いになってしまうが、昴であればステラのデストロイモード装甲を貫く事が出来るし、ミュレイならば反撃されずに一方的に遠距離から攻撃が可能である。となれば相手をするべきなのはやはり昴かミュレイだろう。

「ステラが押さえ込めれば大分勝率は上がるぜ。残す問題は向こうの王様がどれくらい強いのだが」

「あのおつ！ すみません 少し、いいですか？」

突然手を上げるシエルシ。全員がぐるりと振り返る中、シエルシは前に出てミュレイをじっと見つめた。ミュレイは鋭く紅い眼光でシエルシを見つめ返し、それから扇子を開いた。

「どうした、シエルシ？」

「はい……。あの……ザルヴァトーレとの戦い、どうにかして回避は出来ないんでしょうか……？」

「それは難しいじやろうな。まあシルヴィアが止めると言い出せば何とかならない事もないじやろうが……。あやつの性格上、一度決めた事はまずひっくり返さんじやろうし」

「でも……。こんな戦争、きっと誰も望んでいません……。姉上も、話せば判ってくれると思うんです。私……。姉上と直接話をしてみます」

「正気か？」

「皇帝も、説得出来るかもしれない……。仮にも私は皇帝ハロルドの妻……。皇帝だって、少しは話を」

「止めとけて。余計な事はするな」

そんなシエルシの言葉を遮り、ホクトはシエルシの肩を掴んで振り返らせた。その目は冷たく、そして敵意にも似た鋭さを湛えている。思わずぞつとするシエルシであったが、おおむね周囲の反応は同じであった。それもそのはず……。そしてそれは、シエルシの為に思っている事でもある。

「ハロルドはお前の話になんか耳を傾けねえよ。シルヴィアにも説得なんかしたところで無駄だ。お前が一番良く判ってるんじゃないかねえのか？」

「で、でも……」

「こうなったのは別に誰の所為でもねえ。ククラカンもギルドも俺たちも、結局はこの戦いに参加する運命だったんだ。けどなシエルシ、お前は違う。お前はハロルドの所に戻るべきだ」

「ホクト……」

「皆だつてな、お前にそんな風に人生無駄にしてもらいたくねえんだよ。ハロルドに楯突いたが最後、お前の扱いは地に落ちる……。余計な事をするなら即刻ヨツンヘイムに戻って貰う」

厳しい口調のホクトに叱られ、シエルシは落ち込んだ様子で頂垂れてしまった。そのシエルシの手を引いて部屋の端に移動し、ホクトはひらひらと手を振った。

「悪いなミュレイ、馬鹿の話はほつといて続けてくれ」

「……。では、具体的にこれからどうしていくのか策を講じる事としよう。正直全くの無策じゃからな、それぞれ意見を出し合つて行くとしてよう」

ミュレイの仕切りで作戦会議が始まる中、シエルシはとほとほと部屋から音もなく出て行った。ホクトはそれに気づきつつ、後を追いかける事はしなかった。少々厳しく、辛く当たるようだが全てが事実でありシエルシの為である。そんな中、会議に参加せずに部屋の隅で煙草を口にしたホクトの肩を叩き、メリーベルが隣に立った。メリーベルはホクトの啜えた煙草をひつたくると、その背中を押す。

「何ぼーっとしてるの？ 追いかけてあげたら？」

「……………。あんまり甘やかすのは良くねえぞ？ 俺はパスだ」

「……………はあ。まあ、いいけど……………。変わりに様子を見てくるから、貴方はちゃんと会議に参加して」

「あんたも物好きだな」

「自分に素直なだけよ」

皮肉染みた言葉を残し、メリーベルは部屋を去っていく。ホクトは改めて口に啜えた煙草を そのまま無言で箱に戻し、舌打ちをしてミュレイに歩み寄っていく。そうして会議が行われる部屋の外とぼとぼ歩くシエルシの背後からメリーベルはその肩を叩いて声をかけた。

「シエルシ、ちょっといい？」

「はい…………？」

メリーベルに手を引かれ、シエルシは慌てて歩き出す。二人が向かう先は地下。階段を下りていくメリーベルの背中を不思議そうに眺め、シエルシもその後が続いていくのであった。

プリズム(3)

皇帝ハロルドが座する玉座。それは巨大、そして余りにも禍々しい。

インフェル・ノアの中枢近いその場所は壁を、床を、生々しく脈動するケーブルで多い尽くした森である。ハロルドはその全身の至る箇所にケーブルを接続し、魔素の光を纏いながら椅子の上にとっしりと構えている。

ハロルドの前にはケーブルの合間を縫うようにしてケルヴィー、オデッセイ、そしてステラの姿があった。先のギルド殲滅作戦の作戦結果報告がオデッセイの口から語られていたのだが、その間ハロルドはじつと目を閉じたまま腕を組んで聞き入っていた。

『成る程……。やはり生きていたか……魔剣狩り、ヴァン・ノーレツジ……』

「オデッセイ、貴方でも手に負えないような相手だったのですか？ 魔剣狩りのデータは確かに私の方でも把握していますが……。彼の身体能力、魔剣適性、魔力数値は貴方よりは低かったような」

「戦場では数字だけがすべてではない。陛下の言う通り、彼には何か隠された力があると思います。正直まともにやりあって生きて帰ってこられる自信がありませんでした。ご期待に沿えず、申し訳御座いません」

『いや、構わぬ……。余も実際に手合わせしたが、あれは少々この世の物とは異なるのだ』

「^{メサイア}救世主”、ですか？」

オデッセイの言葉にケルヴィーは眉を潜めた。“救世主” その存在をケルヴィーは信じていなかったからだ。この世界を変え、救い、絶対的な法を生み出したといわれる救世主……つまり、異世界からやってきた人間である。まずケルヴィーは異世界の存在を信じていなかったし、その異世界人が大きな力を持っているというのも眉唾だった。勿論最初から疑ってかかっているわけではなく、彼には彼なりに理論を否定する理由があった。

救世主伝説というのはこのロクエンティア各地に残っており、それらは様々な形に姿を変えて今も伝えられている。一貫しているのはその救世主という存在が異世界からやってきた“神”に等しい存在であるという事、そしてその力 “剣創”と呼ばれる能力でこの世界の法を築き上げたという事である。

その救世主が行った偉業は、例えば土地を豊かにしたとか、魔物を倒したとか、小さなことから大きなことまで存在している。ケルヴィーはその剣創伝説に一時期のめり込み、各地から資料を掻き集めて調べた事があった。彼が辿り着いた救世主最大の偉業というのがこの世界の構築。つまり世の創造である。剣創の力とはそれに近い物であるのではないかという持論を展開していたのだが、結局救世主が実在したという証拠はどこにも見つからなかった。

そんな過去の研究成果もあり、オデッセイの口から軽々しく出たその言葉が気に入らないのは当然だった。しかしハロルドは腕を組み、片手を顎にやりながらゆっくりと頷いたのである。

『恐らくはそうであろう。あれは最早人の域を超えておる。扱いは慎重にならねば』

「お言葉ですが陛下、救世主など……。メサイア信仰は愚民が描いた架空の希望。妄想の産物です。所詮、あれもただの魔剣使い

ですよ。データ化すればすべて解明出来るはずですよ」

『その研究データを盗まれてしまったのでは仕様がなかな』

ハロルドの一言でケルヴィーはがらりと顔色を変えた。怒りに震え、拳を強く握り締める。親指の爪をガチガチと前歯で噛みながら、奪われた研究データの事を思い出していた。

事件はあの日、ホクトが脱走した日に起こった。謎の動力システムトラブルにより各地の動力が落とされ、インフェル・ノアの警備システムに穴が空いた時の事である。ホクトの脱走も大事件であったが、あの時インフェル・ノアではそれ以上のトラブルが発生していたのである。

侵入者と思しき人物に奪われたのは、解析中だったホクトの魔剣、ガリュウの術式データである。膨大なデータを吸い出し解析するだけでも莫大な時間がかかったのだが、侵入者は中途半端に引き出されたガリュウの構成データを奪い、インフェル・ノアから脱出したのである。ガリュウの解析はホクトの力を解明する事につながり、そして最終的にはプロジェクトエクスカリバーにおいて重要な成果となるはずであった。仮にガリュウの力を量産化することが出来れば、帝国軍力は絶対的な物となる……そのはずだった。

「忌々しい盗人め……！ この僕が昼夜問わず必死で解析したデータを横から掻っ攫うなんて……絶対に許せない……ッ」

「そちらのほうも剣誓隊で調査していますが、消息はつかめていません。恐らくステラと同じ、空間跳躍システムを使って脱出したのではないかと」

「空間跳躍システムの発動にはインフェル・ノアの“ミレニウム”の承認が必須ですよ？ ステラの跳躍時のエネルギー、座標設定、

時間軸統合など、強力な演算力を持つシステムサポートが必須ですからね」

ステラの頭脳は帝国のマザーシステムであるミレニウムと繋がっており、ステラはミレニウムを通じて各地の戦闘の状況を知ることのできる。その際ミレニウムによって座標設定、そしてそれに必要なエネルギーをまかなっているのだ。

「ミレニウム以外にそれが可能な演算システムもエネルギー生産装置もないと思うんですけどねえ……」

「剣誓隊の見落としという可能性も完全には抹消出来ないが、探知型の魔剣でも見つからなかったんだ。どちらにせよ、脅威である事には違いない」

「そちらもミレニアムの筋書きに存在しない者だ。是が非でも捕らえたい……。とは言え、放っておいても動きを見せるだろうか……」

……

「ではオデッセイ？ 貴方には魔剣狩りの捕獲、侵入者の搜索、それと平行してククラカン国攻略を行って貰うわけですが……。やはり、優先順位として高いのは魔剣狩りですかねえ？」

「確かにこのままやつに好き勝手動かれてはこちらも手を出しにくい……。ククラカン攻略は恐らくシルヴィア王が上手くやるでしょうから、私はこのまま魔剣狩りの捕獲を主に行います。よろしいですね、陛下？」

『それで良いだろう。が、魔剣狩りに関しては余でなければ倒せぬかも知れぬな。やはり直々に戦地に赴く必要があるか』

「お、お言葉ですが陛下！！ インフェル・ノアから離れる事は、お体に障ります！！」

慌てた様子で駆け寄るケルヴィー。ハロルドは静かに息を着き、それから全身に纏わり付くケーブルを忌々しく見下ろした。

皇帝ハロルドの肉体、寿命の維持にはミレニウムから供給されている膨大な量の魔力が必要なのだ。故にハロルドはこのインフェル・ノアから離れる事が出来ず、有事の際以外は一日の全てをこの椅子の上で過ごす。食べる事も眠る事もなく、彼は王としてミレニウムとシンクロし続けているのだ。

ハロルドが下層に姿を現さないのはただ尊く扱われているというだけではなく、インフェル・ノアごと移動するのにもそうした理由があった。事実上ハロルドがこの椅子から離れて活動できるのはせいぜい数時間がいいところであり、ちょこまかと動き回るホクトを倒しに行くのは無謀だと言える。

「確かにやつは化け物染みた力を持っていますが、倒せないわけではありません。実際一度は倒しているわけですから。剣誓隊の腕力を頭数そろえれば恐らく戦いになるでしょう。それに正々堂々戦うだけが戦争ではありませんので」

『……手段は貴様に任せるぞ、オデッセイ。必要な物があれば何なりとケルヴィーに要求するが良い』

「はっ。ありがたき幸せ」

『ケルヴィー……。ククラカン攻略、或いは手間取るかも知れぬ。ミレニアムの計算に8%のノイズが存在する。事象が揺らぐ前兆であるう……。対応策として、完成しているエクスカリバーシリーズ

の実戦投入を許可する』

「おお！！ いやいよ私の実験成果が試されるんですねえ！！
これは、今日から張り切ってますよ、私はっ！！」

その場で嬉しそうにステップを踏むケルヴィー。一方ステラとオ
デッセイの表情は冷静だった。エクスカリバーシリーズの実戦投入
……明らかに予定よりも早い。だがそれが皇帝の選択だというであ
れば、それだけの価値があるのだろう。そして同時に、それだけの
危険も……。

「……ケルヴィー、エクスカリバーシリーズは……」

「ああ、大丈夫ですよステラ。装備者の精神安定には手を打ってあ
りますから」

エクスカリバーシリーズの装備者には決定的な欠陥が生じてしま
う。それが強引に生み出した魔剣を移植された人間の宿命であっ
た。それは最初は記憶の欠落などに始まり、感情の薄弱化、欠陥、
最終的には己で思考する事が不能となり、ミレニウムから指示を受
けるだけの存在となる。

その支配システムが完成に近づき、いやいよエクスカリバーシリ
ーズの実戦形式の実験が始まるのである。今日までその日を夢見て
きたケルヴィーにとつてそれはとても喜ばしい事であった。しかし
ステラはどこか胸の内、わだかまる気持ちを抑え切れなかった。

「それでは陛下！ 私はエクスカリバーの最終調整に入りますので、
失礼します！！」

『つむ……』

「では私も失礼します。陛下、御機嫌よう」

ケルヴィーが部屋から走り去っていき、オデッセイも後に続く。残されたステラはハロルドの前に立ち、聳え立つ巨体を見上げた。二つの同じ色の瞳が混じりあい、部屋の中には奇妙な空気が流れている。

「カテゴリーSの魔剣を収集する事……それが私たちの使命だった。ハロルド、それは貴方にとって何を意味しているのですか？ この世界の再生？ それとも、完全なる支配……？」

『知れた事……。』ロクエンティア “剣創”の復活こそが我らの悲願……与えられた運命。役割を演じよ、ステラ。貴様にそれ以外の生き方は存在し得ぬ。すべては幻……余とて同じ事よ』

頷き、ステラは背を向ける。部屋の出口へと向かっていき、それから一度だけ振り返った。

「ハロルド」

『ん……？』

「私は……それでも、己の“剣”シンと向き合いたい……」

言葉を残し、ステラは去って行った。沈黙だけが残された部屋の中、ハロルドは腕を組み目を閉じる。ミレニウムへのアクセス。事象ノイズの数值は依然として8%のまま。全体から見ればほんの僅かな差異であるこの8%の重さ……それをステラの言葉の節々に感じ取る事が出来るような気がした。

ステラとハロルド、それは元来同じ存在である。一つであるはずのものが二つに別たれ、そして王とは別に白き執行者は己の意思を持ち始めた。それがミレニアムにとってどのような影響を及ぼすのか、そしてこの世界をどう変えていくのか……。それはまだ、ハロルドにも判らない事だ。

プリズム（3）

「しかし、面白い話だよな。たったこれだけの人数で戦争仕掛けようってんだから」

ローティスのターミナル、停泊する列車に乗り込むホクトたちの姿があった。いつ戦争が開始するかもわからない状況下、ローティスに留まる理由は既にある。列車に乗り込んだのはミュレイとその護衛、ウサクとゲオルク……。そして砂の海豚代表リフル、サーペントヴァイト代表ブラッド、その部下であるアクティ、そしてホクトとシエルシ、ロゼである。それ以外のメンバーは後発隊となり、昴は治療の為メリーベルと共にこの地に一時期滞在する事となった。

ターミナルには腕を組んで立つメリーベルの姿があり、ホクトは彼女と顔をあわせていた。他のメンバーは既に搭乗終了し、現在は物資の積み込みが行われている最中である。それが終了すればローティスを発ち、プリミドールのククラカン首都、ラクヨウへ向かう事になる。

「しかし……シャフトを通してもらえるかねえ？ 流石に警備が厳しいと思うが」

「そこを突破する為の少数精鋭でしょ？ 現地に着いたらミュレイに教えた転送魔法陣のゲートを作ってもらってから、そしたらバテンカイトスから直接向かう事にするから」

「立体的に戦場を構築出来るのはかなり有利だな。にしてもミュレイにせよあなたにせよ、そうホイホイあっちこっち跳びまわれるような術をよく作れるよ」

「私はその研究を長年してだし、ミュレイには魔術のセンスがあるから。それよりホクト……本当にいいの？ これで」

メリーベルの問いかけの意味は何となく判っていた。だがとりあえず今は他にやる事も考えられない。どうせ帝国とは戦わねばならないのだ。それがSランクの魔剣を持つ彼の宿命である。

「ヴァン・ノーレッジが果たしたがってた夢ってやつを叶えてみるのも一つの手かな、とも思うわけだが？」

「……………そう。貴方はつくづく素直じゃないわね」

ホクトは煙草を啜え、肩を竦める。二人が別れ、ホクトが列車に入ってくるその姿をシエルシは車内から窓越しにじっと見つめていた。その傍らにはロゼが座り、相向かいにはリフルが座っている。

「それにしても、まさかまたこうしてこのメンバーで行動する事になろうとはな」

「……………リフルにも、またお世話になってしまいますね」

「私自身は構わないが……。お前は本当にこれで良かったのか？
今更だが、帝国に戻った方が国の為だろう。これから戦争する私
たちが言うのもなんだが……」

「……………いえ、もう決めた事ですから……。それよりよかったです
すね、リフル。ロゼと仲直り出来て」

シエルシの屈託の無い笑顔に対し、リフルは顔を真っ赤にして拳
動不審に目をそらしていた。何故そうなっているのかが判らずきよ
とんとするシエルシ。渦中のロゼはメリーベルから借りた魔道書を
早速読みふけており、会話に参加する気配はなかった。

「そ、その話はちょっと今後控えてもらえないか……」

「え？ どうしてですか？」

「い、いや……………なんでもない……………」

咳払いし、黙り込むリフルとやはり目を丸くしてぼけーっとして
いるシエルシ。そんな二人の間にやってきたのはウサクであり、困
った様子で手を合わせて言った。

「申し訳ござらぬ！ ……この空いている席に座らせてください！」

「……………。ああ、どうぞ」

「かたじけない！ いや、参ったでござるよ……………。姫様の所には
ブラッド殿とアクティ殿がいて、拙者座るところがなかったでござ
る」

本来ならばリフルの隣、そこがアクティの席である。そのアクティがウサクの席を奪っているということは、ここ以外に彼が座るところが無いという事でもある。リフルの隣に腰掛けると、ウサクは落ち着かない様子で周囲をきよるきよる眺めた。

「なんだか冷静に考えてみたら、この席は拙者にとっては刺激が強すぎるような……」

「刺激……ですか？」

「いやあっ！？ 正面には、美しいシエルシ姫……。隣にはやはりお美しいリフル殿……。拙者、あんまり女性とお話した事がないのでござる故に……」

リフルとシエルシは同時に顔を見合わせ、それから笑った。何故笑われているのか判らずにウサクは困った様子であっちこつちに視線を向けている。そんな四人才脇を通り、ホクトはミュレイの席へ向かった。丁度ミュレイはメリーベルから教わった転送の術を学んでいる所であり、ホクトは唐突に背後からミュレイの巨大な胸を掴んで見せた。

「………………。念の為訊くが……。お主……何をしておるのか？」

「いや……。すんげえでかかったから、一度もんでみたかったんだ……………」

無言でミュレイが立ち上がり。ホクトの顔面に張り手を当てる。そのまま往復し四回攻撃を加え、よろけたホクトの鳩尾に蹴りを叩き込んだ。悶絶し、倒れる北斗の前でミュレイはふくよかなその胸を揺らし、着物のずれを直しながら席に着いた。

「アホか……！ 問答無用で背後から突然揉むやつがあるか……！」

「いや、すまん……。ちょっとリラックスさせてやるうかと思って
だな……」

「あれでリラックス出来るヤツはそうそうおらぬと思うが……。ま
あ気持ちだけありがたく受け取っておこう」

「俺は物理ダメージもらつたんだが……」

「それは自業自得じゃ。それより、まさかわらわにパイタッチする
ためだけによつてきたわけではあるまい？」

「ああ、勿論。まあ俺なりにけじめをつけとこうかと思ってな。悪
いなブラッド、少しミュレイ借りるぜ」

ホクトの突然の胸揉み攻撃を間近で目撃してしまったアクティは
両手で両目を抑えて黙り込んでいた。ブラッドは呆れた様子でひら
ひらと手を振り、ゲオルクは護衛として若干不安そうな顔であった。
ホクトはミュレイを連れ、連結部付近に連れて行くと周囲に人氣が
無い事を確認して口火を切った。

「それで？ 話とはなんじゃ？ けじめ……とか言っていたが」

「ああ。あんたの妹……ミラの事だ」

その名前が拳がると流石に二人とも表情が真面目になる。先ほど
までの冗談交じりの様子からは一変し、二人とも張り詰めるような
空気を漂わせていた。

「ミラの事……悪かった。悪かったなんて言葉じゃ済まないが……」

「……………。お主、案外律儀な男なんじゃな。それはお主ではなく、ヴァンがした事であろう?」

「俺だってヴァンさ。まあヴァンでありヴァンではないんだが……。兎に角、ミラを連れ回して拳句の果て護れなかったのはヴァン・ノールレツジ……俺の責任だ。多分ヴァンも、ずっとあんたに謝りたかったんじゃないかな……」

どこか他人行儀に己の事を語り、ホクトは窓の向こうを眺めて呟いた。心の中、記憶の中に存在するミラへの罪悪感、そしてミラを護れなかった己への怒り……。ヴァンはきつと、ミラの事に関しては何とて熱い男だったのだ。それがホクトにはよくわかった。だから、ミラの事に関してだけはとても真面目だった。いつかはちゃんとミュレイにも認めて欲しかったに違いない。

「あんたの妹は、俺が殺したも同然だ……。だから……。すまなかった。この通りだ」

深々と頭を下げるホクト。それに対しミュレイは腕を組み、それ以上に深く溜息を吐いた。ホクトの肩を叩き、強引に顔を上げさせる。それからその頬に触れ、ミュレイは首を横に振った。

「わらわの方こそ、お主には謝らねばならぬ事が沢山あるのじゃ……。ミラを失って、自分がどれだけ頑なだったか漸く気づけた。おかしな話じゃのう……。人はいつでも、失って初めて理解を得るのじゃから」

壁を背に、ミュレイはそう呟いた。二人ともそれから暫くの間無言で時を過ごした。お互い、同時にミラの事を想っていたのだ。過去の記憶を呼び覚まし、一人の姫の事を想う……。それは二人にとっては共通した、確かな弔いだった。

「まあ、一先ず我らの戦いは中断……という事で手を打たぬか？」

「………………。そうだな。そうしてくれると助かるよ」

優しく、無邪気に微笑むミュレイ。そうして紅の姫はホクトに歩み寄り、その手を差し伸べた。優しく伸びる手を握り返す勇氣……。それを振り絞り、ホクトはぎゅっとミュレイの手を握り締めた。和平成立。戦争を前にして、今ひとつの戦争が休戦となった。

「しかし、中断ってことはいつかまた始めるつもりなわけだ」

「それはお主次第じゃのう？ まあ、お互いまだ完全に打ち解けられたわけではあるまい？ 言いたい事も、割り切れない事もある」

「けど、一緒に生きていく事は出来る。この世界の大地の上で……進む道が違っててもな」

二人は微笑み合い、それからミュレイはホクトにそつと顔を寄せた。服から漂う甘い香り……。染み付いた煙草のにおい。それをきくと、ミラも感じていたのだろう。そう考えると少しだけ寂しく、切ない気持ちになった。

「今は、あなたたちと一緒に戦うよ。それが俺の罪滅ぼしだから」

「………………。やれやれ、なんだかんだいいつもお主は結構子供っ

「ぼいのじゃな」

「少年の心を忘れたら男は死ぬんだぜ？」

「ああ言えばこう言うのう……。まあ、良い。ホクト、少々屈んでくれ。お主は背が高すぎじゃ」

「ん？ ああ、こうか？」

前に屈んだホクトの頭を抱くようにしてミュレイは正面から堂々とホクトの唇を奪った。最初こそ驚いたホクトであったが、彼からもミュレイの背中に手を回し、何度かのキスを繰り返した。そつとどちらからともなく身を離すとミュレイはしたり顔で言う。

「これで妹のファーストキスは返してもらった事にしようかのう」

「ありやりや……。結構なお手前で……」

「はっはっは！ 経験豊富な女を舐めるでないぞ！ まあ、今は長年目の仇にしてきた事への詫びじゃ。お互い、これで一先ず過去の事は水に流そうではないか」

「ん……。もう一回してくれたら忘れるかもな……。いててっ!？」

無言で足をぐりぐりと踏みつけるミュレイ。その恐ろしい笑顔にホクトは無言で後退した。

「さて、わらわはまだ転送魔法の習得があるからな。現地に到着するまでに済ませておかねばならぬ。お主もそうやってふらふらしておらず、もう少し落ち着いたらどうじゃ？」

肩をすくめて苦笑するホクト。ミュレイはそのまま立ち去っていき、残されたホクトは重ねた唇の余韻を思い出すように指先でそつとなぞった。その感触は遠い日のミラを思い起こさせる。心の中でざわつく過去への思いに目を瞑り、窓ガラスに映り込んだ自分の虚像に手を伸ばした。

「なあ、ヴァン……。これでよかつたんだろ……。？」

虚像は何も語らない。ホクトは目を瞑り、己とは似ても似つかない自分の姿を視界から抹消する。振り返り、歩き出した。彼には彼の、男には男の贖罪の仕方がある。

列車が動き出し、それぞれの運命を乗せて荒野を駆けていく。いざ、それぞれの戦場へ。無数の思惑が交差する運命の地、プリミドール。大いなる戦いの火蓋が切って落とされようとしていた……。

愚者の行軍（１）

「　　まだ、ホクトの事が許せない？」

メリーベルの部屋のベッドの上、横になった昴に投げかけられた言葉　。ダメージが回復しきらず、後発となってしまった昴は一人ずつと考え込んでいた。答えは未だ出ておらず、そして出る気配もない。メリーベルは迷う少女の横たわるベッドに座り、その顔を覗き込んだ。

「許せない……。ううん、許せるとか許さないとか、そういう事じゃないのかも……。正直、自分でも良く判らない……」

「会いたかったんでしょ？　彼に」

「でも……。見た目がまるで別人である以上、信じられないよ……」

「ちゃんと話して見れば？　彼にしか判らないこと、貴方にしか判らない事……。あるはずでしょう？」

「……だから、だよ」

目を閉じ、昴は記憶の中の兄の姿を思い浮かべた。自分の所為で死んでしまった　最後まで笑っていた彼の姿を。もしもホクトと語り、本当の事が判ってしまったら。真実が白日の下に晒されたとしたら　。その時、自分がどうなってしまうのかが判らないからだからそれが恐ろしく、そして躊躇せざるを得ないのだ。

昴は戦いなど好む性格ではなかったし、気弱で人見知りで行動力のない、内気な少女だった。それが何故仮面を被り、鎧を纏って刀

を振り回してきたのか……。すべては復讐、そして贖罪の為である。弱い自分と決別したかった。だから口調を変え、思考を変え、役割を演じる事に徹しようとしてきた。その為の“白騎士”である。

しかしもしもホクトが兄だとはつきりと認識してしまった時、果たして今まで通りの強い白騎士で居られるだろうか？ また、弱い少女に戻ってしまうのではないか……。そう考えた。それが不安で、そして悲しかった。少し、前に進めた気になっていた。やっと変わったと思った。なのに、今になって。

「気持ちは判らなくもないわ。本当の事は、いつだって良い事だとは限らないもの。だからこそ、前に進む事が怖くなる……。私も、兄とはなかなか折り合いをつけられなかったわ」

「……メリーベルにも、お兄さんが居たんだ？」

「もう十年以上前に死んだけどね」

「……そ、それはごめん……」

「だからこそ、貴方には素直になってもらいたいの。もしも素直に真実を向き合う事が出来たら……。きっと、戦う以外の道を選べていたなら。それはそれで違う道があったんだろうなって、今は思うから。勿論、貴方くらいの年頃の子には難しいんだろうけど。でも、選択の一つとして頭の片隅にでも残しておいて」

昂の頭を撫で、メリーベルは立ち上がる。去っていく背中を見送り、それから少女はそっと身体を起した。体中の痛みは薬のお陰で和らいでいて今は殆ど感じる事がない。どちらにせよ義眼の準備と壊れた白神装武の修理が終わるまで戦闘は出来ないのだ。諦めるようにして再びベッドに倒れこむとゆっくりと瞼を閉じる。

そう、真実はきつと良い事だけを切り取ってあるわけではないだろう。だからこそそれを恐れ、そしてだからこそそれと向き合わねばならないのだ。真実とは良くも悪くもそういうものであり、痛みと共に未来の希望を運んでくるものなのだから。

一方、ホクト達は無事にエル・ギルスからプリミドールへの移動を終え、ククラカン領土に入りラクヨウへと向かっていた。途中で戦闘が発生するかと思いきや、エル・ギルスの帝国軍はどうやらすべて撤退しているらしく、警備に引かかる事もなくあっさりとプリミドールへ入る事が出来た。

界層移動後も列車での移動が続き、丸一日近い移動時間を経て漸く旅の終わりが見えてきた頃、シエルシは一人食堂車の窓から荒野を眺めていた。もうじき朝を迎えようという時間帯、食堂車を利用しているのはシエルシ一人だけであった。そこに現れたのはミュレイであり、ククラカンの姫はもう一人の姫の正面の席に座った。

「ミュレイさん……？ 朝早いんですね」

「もうじき到着じゃからな。そういうお主は眠れなかったようじゃが」

「………………。ミュレイさん、私……………」

「まあ、お主としては複雑じゃろうな…………。無理にククラカンにまで来る必要はないのじゃぞ？ こういう言い方もアレじゃが、お主は追われる身…………そしてククラカンにとっては絶好の人質じゃからな」

「判ってます…………。判ってるから、考えていたんです。あの、ミュレイさん…………？」

思いつめた様子で頂垂れるシエルシ。思えば何故敵国の姫とこうして話をしているのかもよくわからなかったが、真剣に悩んでいる少女の告白を無下にするのも無粋……。ミュレイは頷き、言葉を促した。

「戦いを、止めたって思うのは……やっぱり、愚かな事なんですよ。どうか……？」

そして放たれた言葉があまりにも妹に似ていたから……。何も言えなくなる。同じ問いかけを、何度もミラはミュレイにしていた。だからこそ思うのだ。そして直ぐに出せる答えではなく。それを貫くのは決して容易ではないことも、判ってしまふ。

「帝国のしている事は、とても恐ろしい事です……。人の命を命とも思わない非道な行いを許せないという気持ちは確かに理解出来ません。私だって同じです。でもだからって、ククラカンとザルヴァトーレが戦わねばならない理由にはならないと思うんです……」

「……。じゃが、事実としてザルヴァトーレは攻め込んでくるぞ？ その現実をどうするつもりなのじゃ？ 理想を語るだけでは現実是不変ならない……。大層な事を言うのは構わぬが、夢を見ていると足元を掬われるぞ？」

「それも、判ってます。何もしなきゃ現実是不変らないって事も、良く判ってます……。皆変えたくて足掻いてて、護りたくて足掻いてて……。判ります。判るけど……。でも、それ以外の方法を探す事を諦めて良い理由にはならないと思うから……」

かつてミラはその理想を体現する為に戦った。白い破魔の剣を掲げ、平和の為に戦ったのだ。だが結局現実は何も変わらず、人々の

心に宿りかけた希望は逆に絶望へと変貌してしまった。残されたのは悲しみと、そして暴れ狂う復讐鬼……魔剣狩りだけであった。

願う事も、祈る事も、戦う事も……。世の中のすべてには表と裏があり、痛みと同時に希望がある。得れば幸福を、そして失えばその倍の絶望を与えるだろう。甘い言葉に惑わされれば出来るはずの事を見失い、失意の渦中にいてもまた同じである。故に正解など絶対に存在しない。だからこそ、各々のエゴで人は戦うのだ。

「私……ミユレイさんの事、好きです！ ミユレイさんは……話してみれば判るんです！ 悪い人じゃないって！ いい人なんだって……」

「なら、悪いのはシルヴィアか？」

「それも違います。姉上は国を護る為に戦っているんです。ただその手段を違えてしまっているだけ……。それに帝国に与していなければ、逆にザルヴァトーレがククラカンに支配される立場になっていたのは明白ですから」

「ほう、それくらいのこととは判るか」

「悪いのは、この世界を支配する帝国というシステムです。でも私は帝国の全てが悪だとは思っていません。勿論、良い人も居れば悪い人も居ると思います。でも帝国というシステムの中には十分有効に作用している事があるんです」

例えば帝国騎士団による魔物の討伐。民衆の管理による、理不尽ではあるものの安定したそれぞれの生活……。元々この世界の限られた大地、限られた世界、限られた人々の全てが幸せになる事は絶対に出来ないのだ。ほうっっておけば魔物の脅威と人間同士の争い

で、世界は瞬く間に滅んでしまっただろう。

帝国は強力な支配により、ある意味では人を護っているのだ。この世界のシステムとなり、この世界の安定を確立している……。シエルシから見ても、特にザルヴァトーレに住んでいれば思うのだ。帝国の与える技術が世界に浸透していけば、文明はより発達するだろう。帝国の技術は、支配は、ある意味においては素晴らしいのだ。問題なのはその割り振り方である。

勿論、その帝国の技術を以ってしても全ての人を救う事は出来ず、全ての大地を楽園には出来ないだろう。徹底的に割り切った人間の管理、そして見捨てる心と見捨てない心……。その厳しさの中にハロルドの王としての資質とカリスマを確かにシエルシは感じていた。帝国に入り、帝国の行いを知り、世界を旅して己で感じた事である。

「ハロルド王の作ったこのシステムは、ある側面において人を傷つけ、しかしある側面において人を確かに救い得るのです。だからこそ、私は妄想でも空想でもなく、理想とも違う現実的結論として戦争を止めさせたい……」

「……………戦争を止める、か。そしてどうするつもりじゃ？ 戦争を止めても何も変わらない。またどこかでそれが始まるだけじゃ」

「だからこそ……私は帝国に入っただけです。ハロルドの妻という立場で何がどこまで出来るのかは判りません。でも、やってみたいんです。この世界を、争いの力以外で変えるっていう事を……」

少女なりに悩み、世間知らずなりに知ろうとし、臆病なりに冒険して得た結論である。それは確かにつたない思想だったが、それでも尊い物だ。ミュレイは頷き、それから立ち上がった。やがて夜が明け朝日が差し込めば、世界はまた動き出すだろう。そうすればこの二人きりの時間は終わりを告げるのだ。

「考えなしに、というわけではないのじゃな。正義や悪などという安っぽいものではなく、現実の成果として考える……。そういうのは嫌いではないのう」

「……ミュレイさん」

「まあ、せいぜい好きにやってみるといい。誰かの許可など要らぬのだからな。お主の意思で、お主の思うようにやってみるといい」

「……………はいっ！」

ぱあっと、心が晴れていくのを感じさせるようなシエルシの笑顔にミュレイは妹の姿を重ねていた。彼女にも、こうして背中を押しあける事が出来たならば……。また、何かが違うのだろうか？
こんな風に、笑ってくれたのだろうか？

答えは永遠の闇の中……。それでもミュレイは確かに姫の背中を押しただのだ。その手に責任を感じている。それでも 彼女を見守ってあげよう。戦う以外に護る術はないなんて、そんな悲しい事を信じたくはないから……。

「ほんの少しだけでも休んでおけ。ラクヨウについたら、また忙しくなるぞ」

「あ、そうですね……。ありがとうございます、ミュレイさん」

とことこ、小走りに去っていくシエルシ。それを見送りミュレイは深々と溜息をついた。色々な意味で やりにくい戦争。そんな言葉が脳裏を過ぎり、目眩にも似た苦い感触が深く胸の内にとだまっていた。

愚者の行軍（１）

「姉上、お帰りなさい。そしてようこそ、ラクヨウへ」

ラクヨウ城の入り口、やってきたホクトたちをタケルはそう言っ
て出迎えた。既に戦争が開始される事は明らかであり、ラクヨウの
住民には避難命令が出ている。殆どの人間が避難を終えたラクヨウ
の街は早朝という事もありまるで眠っているかのようだった。朝日
が差し込む霧が包んだ街を背景に、ホクトは腕を組んで周囲の様子
を眺める。

「すまぬなタケル、留守番をありがとう。何か変わった事はなかつ
たか？」

「こっちは既に住人の避難を終了、武士団の出撃準備中……。ザル
ヴァトーレの方の動きも調べてあるよ。姉上は先に作戦会議室の方
に」

「うむ、判った。皆、早速会議を始めよう。朝早くて申し訳ないが、
そもそもあまり時間もないのでな」

ミュレイの言葉に従い、そろそろと仲間達は入場していく。そん
な中残っていたタケルは振り返り、ホクトに片手を振った。なぜか
は判らなかったが、タケルは親しげにホクトへと歩み寄り微笑みか
けたのだ。

「やあヴァン・ノーレッジ。久しぶりだね」

「……？ん、ああ……」

「……。もしかして、記憶喪失が治ってない？」

「そりゃそうだろう……って、良くそれ知ってたな？お前と会うのは、俺になってからは初対面のような気がするが……」

「ああ、そうかもね。まあ姉上やウサクから話は聞いていたし……。今回の助力、感謝するよ。君が居てくれればこちらも百人力さ」

タケルは頷き、それから城に入って行く。ホクトは少しの間思索した後、城を見上げてぼんやりとしているシエルシの肩を叩いて歩き出した。

「置いてかれるぞーい」

「あ……は、はいっ」

流石に一晩寝ていなかった所為か、シエルシは眠たそうだったがそれ以上にこの緊迫した空気に当てられたかのようにがちがちに緊張していたのである。一行は城の内部にある巨大な会議室へと通された。現在は作戦会議室、指令本部となっているその部屋ではククラカン所属の通信士たちが慌しく開戦の準備を行っている。

豪華な装飾が施された円卓の上に付くと、早速会議が始まった。最後にやってきたのはホクトで、その着席を確認したケルが口火を切る。ククラカン側の置かれた状況、それは決して生易しい物ではない。

「まず、現在ザルヴァトーレ側が展開しつつある戦力について、ある程度の情報が入っているからそれを念頭に話を進めよう。敵は大きく分類して三つのルートに別れてる。一点突破が好みのシルヴィア王らしからぬ展開だから、これは間違いなく帝国の入れ知恵があると見ていいだろうね」

ザルヴァトーレの右翼陣形に位置するのは、主にククラカンへの侵略ではなくククラカンの反撃を行わせないように配置された部隊である。帝国側が貸し与えている戦闘母艦、バルタザールを中心に構成される航空自立兵器を主軸とした部隊で、場合によっては機動力を生かし各地の戦場へ応援に向かってくる可能性もある。配備されているのはザルヴァトーレ騎士団ではなく、帝国騎士団の部隊である。

左翼陣形を陣取るのは帝国騎士団を中心に編成される部隊で、帝国側が設置した小型のトランスポート装置を防衛するように配備されている。物資、兵器、人員などを輸送する拠点となっている場所で、ザルヴァトーレが持つリブレス砦の後方に位置する。

最後が中心からククラカン攻略を目指し進軍してくるザルヴァトーレ騎士団本隊。騎士団長イスルギ率いる部隊を全面に帝国側から与えられた機動兵器、輸送用地上母艦を配備。女王シルヴィアも当然前線に出てくると予想されている。

「それとは別に、更に帝国側は高速強襲空母を配置してるって噂がある。配備戦力は不明……まあこんな所かな」

「剣誓隊の動きはどうなってる？」

「今のところ介入はないみたいだけど、旗色が悪くなればトランスポートから現れる可能性があるね。強襲空母に配備されているのが

剣誓隊である可能性もあると思う。まだ動きを掴みきれたわけではないし、出てこないと考えるのは早計だろうね。それと気になる情報が一つ」

「気になる情報？」

「エル・ギルスとプリミドール……二つの界層から帝国騎士団が次々に撤退しているらしいよ。何かの動きの前兆だと思うけど……一応、念の為頭の片隅に覚えておいてほしい。僕からの報告は以上だ」

報告を終え、タケルが席に付く。さて、ではこの進軍に対してどのように迎え撃つのか……それが問題である。戦力的には敵の方が明らかに上であり、ともに正面衝突しても勝ち目は薄い。そもそも何を以ってして“勝利”とするのか明白ではない戦いなのだ。どう動き、何を指すのか……それを考えねばならない。

「ふうむ……。ホクト、お主ならどうする？」

「ん？ 俺ならそうだな……。正面突破する」

「よし、お主が馬鹿だって事はよおしく判った」

「いや、待て待て……。正面突破するのは俺だけだ。現状、最大の問題は帝国側の介入だ。それ以前の二国の戦力はおよそだいたい拮抗していたからこそ戦争が起きなかった。そうだろう？」

婚姻の儀にて勢力を増したザルヴァトーレには帝国側からの恩恵がよりいっそう強まり、ククラカンに対する技術、物資、戦力の支援はなくなった。これにより二国のバランスが崩壊し戦争となり、結果ククラカンが不利……。故に最大の問題は帝国の介入、その

一点なのである。

「だが配置を見て判るように、帝国側は出来るだけ干渉せず、ザルヴァトーレの力でククラカンを討たせたいように見える」

「うむ、その通りじゃな」

「だが、あちらさんがヤバくなったら当然介入してくる……。だからこそ、連中の攻略と同時に帝国の援軍を絶つ必要がある。となれば、ポータルが配置されているリブレス砦の攻略と、敵本隊への攻撃は同時でなくちゃならねえ。というより……。本隊を足止めしている間にリブレス砦を攻略、ポータルを破壊後足止め部隊に合流して敵本隊を挟み撃ち……。まあそんな所か」

意外とまともな作戦案に誰もが黙りこくっていた。魔剣狩りヴァンと言えば帝国に反旗を翻し長年戦ってきた“無謀な男”である。これまでの戦い方を見ても判るように、ホクトはいかにも力任せな戦闘を好む傾向にあるように見える。そんなホクトの提案だからこそ、皆驚いていたのである。

「問題は連中の高速強襲空母がどう動くかだな。だがまあ作戦の大筋に変更はないだろう……。多分。戦力不足なのはわかりきってるんだ、そこはゴリ押しで突破するしかねえ」

「ふうむ……。じゃが、それならば本隊の動きはわらわと武士団に任せてくれ。むしろ魔剣狩り……。お主はポータルの方を攻め落とす役割の方が良かろう。ゲリラ的な行動は慣れっこであろう？」

「まあ確かに、本隊にミュレイがないんじゃないや向こうも首かしげるだろうしな……。俺がこっちに参戦してるって情報は恐らくまだシ

ルヴィアの耳には入っていないはずだし、奇襲という意味でもいいかもしれない。ただ本隊を抑えきれるか？ ザルヴァトーレの戦力、なかなかの物だぞ？」

ちらりとホクトはシエルシを見やった。シエルシは昔からザルヴァトーレ騎士団の動きを見てきたが、率直に考えてククラカンはザルヴァトーレよりも弱い、という印象がある。そもそも軍備縮小の方向でここ数年動いてきたククラカんと、常に訓練と兵器開発を絶やさなかったザルヴァトーレの間に大きな隔たりがあるのは当然の事である。また能力不明のSランク魔剣を所有するシルヴィアが敵に居る事も踏まえると、ここで足止めに失敗すれば本隊はそのままラクヨウへとなだれ込む事になる可能性がある。

だからこそ、ホクトは自分がシルヴィアの相手をする事も含めて先ほどのように見積もったのだが、確かにこちらの本隊にミュレイがないと不自然なのは明らか。大事なのはミュレイを中心とした編成でシルヴィアを抑える事……その一点である。

「ほんじゃま、ポータル攻略は俺が任されるとしよう。ポータルを落とした後は、シルヴィアの裏側から回りこんで敵陣を荒らす……そんな感じでいいだろ」

「本隊撃退に成功すれば、後は事を少しは丸く収められるかもしれないな。まあそれでもシルヴィアが戦争を止める気がなければ……戦場はザルヴァトーレ王都、ルーンリウムとなるじゃろう……」

二人の話をシエルシは真剣な表情で聞いていた。ルーンリウムは高い城壁と壕で護られた都で、無数の水路が張り巡らされる美しい街だ。戦争とは程遠いあの緑と水の都が戦場となる……それはシエルシにとっては耐え難い苦痛だった。

ルーンリウムに思いいれがあるのは何もシエルシだけではないは

ず……。あの街は先代女王であるシャナク・ルナリア・ザルヴァト
ーレが愛した街である。優しかった母が護りたいと語った街が、戦
乱に巻き込まれる……。シエルシは目を瞑り、唇を噛み締めた。

「しかし流石にホクト一人で攻略は難しいのではないか？ ホクト
以外にも人を付けた方が良からう」

「いや、生半可な兵じゃ足手纏いになる。そうだな……ポータル
の破壊がメインだから、破壊工作が出来るのが居るといいかもしれ
ね。足が速いやつで」

「では、拙者が同行するというのはどうでござろう？」

手を上げたのはウサクだった。ウサクは忍という事もあり、機動
力が高く、隠密行動にも慣れている。ホクトと共に奇襲を仕掛ける
には持つて来いの相手である。立ち上がったホクトはウサクの背後
に回り、後ろから肩を組んで頭をわしわしと撫で回した。

「よし、いつちよやってみつか！ 頼むぜ、ござる君？」

「わ、わわ……。っ！？ こ、こちらこそ……！ 拙者、全力でやら
せて頂くでござるよ……！」

「私たちサーペントヴァイトはククラカン本隊を援護するわ。砂の
海豚も同じ動きで構わないわね？」

「ああ。最も厄介なのは、敵本隊だろうからな」

ブラッドの提案にリフルが乗り、おおよその作戦配置が徐々に決
まってくる。シエルシが黙り込んでいる間にどんどん話は進み、口

ゼも立ち上がりホクトとウサクの隣に並んだ。

「ポータル攻略には僕も同行するよ」

「ロゼ殿も、でござるか？」

「こう見えても魔術には詳しいから、ポータルなんかから情報を得られるかもしれないしね。続く帝国との戦いに向けて役立つ物も見つけておきたいし……。それに後衛不足でしょ？」

「魔術師、忍者、魔剣使いか……。まあ悪くない編成だな。こっちのパーティは男三人で決まりだ」

「では、わらわ達本隊は残りのメンバーという事になるな……。ウサク、ホクトがしつかり働くようにきちんと思張っておくのじゃぞ」

こうして大まかな作戦配置が決定し、それぞれが準備に動き出した。その間ずっと黙っていたシエルシは部屋から仲間達が去っていくのを見送り、それから深々と溜息を漏らした。戦いを止めるなどと気軽に言ってはみたものの、具体的にどうすればいいのかはまるでわからない。そうしてただ立ち尽くすシエルシの背後、肩を叩くタケルの手があった。

「ところで、姫はどうしてここに？」

「あ、タケル君……。その、私は……」

「詳しい事は良く判らないけど、相手はザルヴァトーレになる。君の動き方一つで、これからの戦いがどうなってくるのかが決まると言っても過言ではないんだ。君はどうするんだい？」

「私は……………」

シエルシは視線を反らし、窓の向こうを眺める。蒼い空を……。ぎゅっと掌を握り締め、それから頷いた。

「私、行ってきます！」

走り出したシエルシをタケルは黙って見送っていた。それから少年もまた歩き出し、作戦室は無人になる。誰もいなくなった作戦室の窓、音もなく進入してくる影があった。白いマントで全身を被った刺客。それぞれの思惑が交錯する戦争が今、開戦しようとしていた。

愚者の行軍(1)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場

うさ子分を補給

うさ子「はづづ……最近出番が全くないの……。序盤はあんなに出たのに……」

シエルシ「うさ子も人気とか出番とか気にするんですね」

うさ子「出番がないと、ごはん食べるシーンもないの……。人気がないとね、ごはんももらえないのっ」

シエルシ「……。そうなんですか……」

うさ子「そういえばね、ばれんたいんでーって知ってる？ あのね、チョコがもらえる日なのっ！！ シエルシちゃんシエルシちゃん、チョコくれるよね？」

シエルシ「え……。いえ、普通は女性から男性に送るものですよ。あとこの世界にバレンタインデーってないですけど」

うさ子「！？ なん……だと……」

シエルシ「まあでも友チョコというものもありまして、女の子同士で渡しあったりもするようですよ」

うさ子「シエルシちゃん、じゃあチョコくれるのっ？」

シエルシ「うーん、そこまで言われると渡さないわけにも行かないですし……。好きな人にチョコをあげる日ですからね。私、うさ子の事好きですよ」

うさ子「！？ 好きな人にチョコをあげる日だったのっ！？ じゃあ、ホクト君とかからももらえるかな！？」

シエルシ「え……いや、それはどうでしょうか……。それにもらいすぎるのも大変ですよ。あとでお返しをしなくてはなりませんから」

うさ子「！？ じゃあ、うさがシエルシちゃんにチョコあげたら、お返しくれるの？」

シエルシ「……。ええ、まあ……」

うさ子「うさ、チョコつくるのーっ！！！！ それでね、それでねっ！ み〜〜〜んなにチョコあげるのーっ！！ はっはっはっ！！」

シエルシ「……。お返し目当てですか……」

うさ子「それもそうだけど、うさは皆大好きなのっ！ シエルシちゃんの事もだいです……。はっはっ……。っ！？ お、おなかすいたの……っ」

シエルシ「そんなにお菓子のことばかり考えてるからですよ。といつかうさ子は野菜以外も食べられるんですか？」

うさ子「？ なんて？ 何でも食べるよっ」

シエルシ「肉とかは……?」

うき子「お肉大好きだよ?」

シエルシ「アレ?」

うき子「うっ」

シエルシ「うきぎ……あね?」

うき子「うきぎなの」

シエルシ「アレ?」

愚者の行軍(2)

「さてと……。これで暫く俺は出撃になるわけだが。シエルシ、お前は どうするつもりだ？」

「私は私で考えがあります。ホクトとは一緒に行きません。足手まといになるのはわかっていきますから」

やけに聞き分けのいいシエルシの反応にホクトは軽く困惑していた。戦の準備で浮き足立った城内の中、二人は見詰め合う。ホクトは既に出撃準備を完了し、支給された新しい戦闘服に着替えていた。袴姿に似た和風デザインなその服にはククラカン王家、ヨシノの家紋が刻まれている。服装のデザインは意図的に白騎士と似通った物となっていたが、ミュレイのその意図にホクトはあえて気づかないフリをした。余計なお世話もいところだったが、一応兄妹で仲良くしなさいという事なのだろう。

ホクトの準備と言えば服装を着替えたくらいで他には何も無い。移動用のバイクの準備はククラカンのメカニックがしているのでむしろ暇なくらいであった。そんなわけでへこたれ姫の様子を見に来てみればこの様子である。以前のシエルシのしつこさからすれば、少々不気味でさえある。

「考えて……。お前まさかまだ変な事考えてるんじゃないだろうな？」

「む……。っ！ 変な事ってなんですか？ 平和的解決を望むのがそんなにおかしいですか？」

「そういう事じゃねえだろ……。って、何で若干ご機嫌斜めなんだ？」

すねたような様子で腕を組み、そつぽを向くシエルシ。頭上にク
エスチョンマークを浮かべまくるホクトであったが、シエルシの不
機嫌の理由はホクトには判らなかつた。そう、判る筈もない。それ
はまだ彼らがバテンカイトスに居た時の話……。メリーベルとの会
話が原因だつたのだから。

ホクトが過剰なまでに平和的解決を求めようとするシエルシを戒
める理由、それがミラ・ヨシノの存在である事は明らかである。彼
はまるでヴァンとは別人であると語り、この世界の事も、この世界
に生きる人間の事も、まるでどうでもいいと言つた様子である。実
際の行動には脈絡がなく、一貫性も無い。“気まぐれ”だけで生
きているように、そんな風にも見えるだろう。

だが、結局のところホクトの行動は目先の人間全てを救いたいと
考える理想から成っている。困っている人は放つておけない。人の
願いは叶えてあげたい……。そんな気持ちがある根本的な部分にあり、
善悪や可能性の是非は無関係に彼はそれを遂行しようとしている。
だからこそ、まるでふらふらとしているように見えるのだ。

囚われているのは、今とて同じ事。彼は過去に失つたミラの痛み
をまだ抱え、彼女がやるうとした事を一人で続けているのだ。そう
した意味においてホクトはシエルシよりもずっと平和主義なのであ
る。それでもホクトが口をすっぱくしてシエルシに余計な事はする
など注意するのは、それだけシエルシを心配しているから……。そ
して、シエルシをミラと重ねてみているからなのだ。

メリーベルはその話を念頭にシエルシの肩を叩き言った。“貴方
が貴方として成すべき事を成し、願う事を叶える。それが結局ホク
トの呪縛を解き放つきっかけになる”と。

「おゝい、へこたれメイドプリンセス……？ お兄さんの話、聞いて
ますか？」

考え込むシエルシの目の前、ホクトは片手をひらひらとシエルシの顔の前で振っていた。それに気づいたシエルシがはっとした様子で顔を挙げ、一步後退する。

「き、聞いてますっ」

「ほお………？　じゃあなんて言ってたか教えてくれよ、シエルシちゃん」

「う……。えーと………そ、そんな事はどうでもいいじゃないですか。貴方は出撃準備で忙しいんでしょう？」

「いや、ところがどっこい暇なんだぜ！　この戦場の空気の中、シエルシが一人で寂しがってんじゃねえかと思って相手しに来てやったわけだよ。俺って優しいだろ？」

確かに、この独特の緊張感の中特にする事もなくフラフラしているのは疎外感があつて寂しくはあつた。しかしそれを素直に認めるのが悔しくてシエルシはまるでそんな事はなかったという素振りをする。

「と、兎に角！　私は私で勝手にやらせてもらいますから！」

「どうしたんだ、そんなに張り切つて？　お姫様なんだからもうちょいおしとやかにしとけよ」

「……………むーっ！！　どうせ私はミラ・ヨシノのようにおしとやかなお姫様じゃありませんからっ！！」

そう叫び、思い切りホクトの足をハイヒールのブーツで踏みつけ

るシエルシ。ごりごりとヒールが爪先に食い込み、ホクトは声にならない悲鳴を上げた。シエルシはそれで少し満足したのか、颯爽と振り返って歩いていく。

「おい、ちょっと待てよー？　なんでそこでミラの名前が出てくるんだ？　つか、せつかく新調した靴なのに……踏むかな普通」

「貴方の靴の心配なんて知りません。勝手に穴でもあけて行軍してください」

「おいコラー！　てめー、人がさつきから優しくしてやってんのになんじゃその態度はっ！？　教育がなつてねえんじゃねえのかオイッ！ー！」

「むーっ！？　なんですって！？　貴方みたいな育ちの悪い人間に言われたくありません！！　節操無しに誰にでも声をかけるわ、ミユレイさんの胸を揉むわ……っ！！　貴方人として少し最低ですよっ！？」

「少し最低ってなんだそれ何語だお前！？　はっはっは、わかったわかった……。さてはお前、“やきもち”焼いてるわけだ。そんなに揉んで欲しいならもっと早く言ってくれば良かったのにな」

「違いッ！　ますッ！　からッ！！」

腰から下げた訓練用のサーベルを抜き、ホクトへと斬りかかるシエルシ。しかしホクトは両手を頭の後ろで組んだままひよいひよいとそれを回避してしまう。それを見たシエルシがなんだか変な具合に笑みを浮かべ、物凄い勢いでサーベルを振り回し始めた。

「甘い甘い、お前の剣なんて目を閉じてても避けられるぜ」

「死になさい悪逆非道っ！！ 貴方なんか！ 貴方なんかっ！！
むっっ！！」

「はっはっは！ 見える……私にも敵が見えるぞ！」

そうしてシエルシに追い回されるホクト。二人はそのまま暫くの間格闘を続けていたのだが、それを遠巻きに眺め口ゼは冷や汗を流していた。隣では整備を終えたバイクを押してくるウサクの姿もある。

「あの二人、とっても仲が良いのでござるなあ」

「仲いいのかな、あれは……。一応シエルシが振ってるの真剣じゃない……？」

「喧嘩するほど仲が良いと申すでござるよ。シエルシ殿、自国との戦争で落ち込んでいた様子だったのでよかったですでござる」

しかし見ていると、ホクトが指先でシエルシの剣を受け止めてしまい。サーベルはぽいつと投げ捨てられてしまった。シエルシはがむしゃらに両手を振り回しながらホクトに突っ込んでいくのだが、体格に差がありすぎた。ホクトが片腕でシエルシの頭をがっしりと押さえると、シエルシは涙目になりながら手をブンブン振り回してそれに抵抗している。

「……。アレ、いじめられてんじゃないの？」

「……喧嘩するほど、仲が良いと……」

「うわあああん！　うあああああんっ！！」

「本当にシエルシはへこたれプリンセスだなあ。全く攻撃が当たってないぞ」

「わああああんっ！！　ホクトの……ホクトのばかあーっ！！」

二人は同時に視線を反らし、それから遠くの空を眺めた。今日もいい天気……戦争などなければ丁度いい日和だろう。鳥達が囀る声もいずれ聞こえなくなる。深く溜息を漏らし、それから二人はホクトとシエルシの所へと歩き始めた。

愚者の行軍（2）

「わざわざ前線からご足労ありがとうございます、シルヴィア王」

ザルヴァトーレ首都、ルーンリウム……。前線で開戦の準備を進めていたシルヴィアは城内の会議室に足を踏み入れていた。部屋の中には既に帝国の騎士が何人が待機しており、その奥にはケルヴィーと将軍たちの姿もある。

シルヴィアは腕を組み、少々不機嫌そうに席に着き足を組んだ。彼女が前線からわざわざここまで戻ってきたのは当然彼らの呼びつけを受けたからである。しかし開戦前のこのデリケートな時期、指揮官であるにも関わらず呼び戻されシルヴィアとしては面白くない状況だ。

「して、何用か？ ケルヴィー殿。我々は開戦準備で猫の手も借りたい状態……長話は遠慮願いたい」

「ええ、ええ。大丈夫ですよ。そんなに長くはなりませんから。今回の開戦ですが、少々厄介な事になっているようです」

「厄介……と？」

「例の“魔剣狩り”……どうやらククラカン側についているようなのです」

「魔剣狩り　ヴァン・ノーレッジか。インフェル・ノア脱出からこちら音沙汰なしかと思いきや、そう動いてきたわけだ」

「というわけで、こちらもただ見ているというわけには行かなくなりましてねえ。もしヴァン・ノーレッジを発見したら、こちらの剣誓隊が対処しますので。それぞれの拠点に將軍クラスを配置させていただきたいのですが」

シルヴィアとしてはその内容に大きな不服はない。戦力が増強されるのであればそれに越した事はないし、実際にヴァン・ノーレッジが大暴れしてくるとなると、戦況は一気に混乱する可能性がある。シルヴィア本人の主義としては余り他人の力を借りるというのは好みではないが、ここは王としての選択で四の五の言うわけにも行かない。

「それは承知……むしろこちらも助かる。話はそれだけで？」

「それともう一件……。実は、先日完成した剣誓隊のエクスカリバ

「隊を実戦配備させてもらいたいです。まあ、兵器実験だと思っ
ていただければ……」

「我々の戦場で新兵器のテスト、か……」

当然それもシルヴィアとしては面白くない。だがすべては民の為
国の為である。出来る限り騎士たちを死なせたくはないし、帝国に
逆らって心象を悪くする必要もないだろう。

「……了解した」

「では、詳しい配備位置や運用などは細かく決定してから追って連
絡差し上げましょう。ああ、そうそう……。シエルシ様の件ですが、
何か情報は入っていませんか？」

シエルシの失踪は当然シルヴィアにも伝えられている。シエルシ
はホクトに連れ去られた、というのが帝国側の見識となっており、
その後シエルシがどこへ行ったのかは帝国も当然追っていたのだ。
しかしその探し方はお世辞にも真面目とは言えず、半ば投げやり……
。大雑把な捜査しかしていなかった。それより大事な物が失われ
たのだから、当然だとも言えるのだが。

「いや……こちらにもまだ何も。愚昧がご迷惑をおかけして申し訳
ない」

「いえ、インフェル・ノアの警備システムにも問題があったので……
。相手がヴァン・ノーレッジだとすれば、シエルシ様も同行して
いる可能性があります。魔剣狩りを捕らえれば必然、シエルシ様の
居所もつかめるでしょう」

「こちららも魔剣狩り捕獲には協力させていただく。シエルシの事を頼みます。あんな愚昧でも……妹だからな」

話が終わり、ケルヴィーと將軍たちは部屋から出て行った。一人残ったシルヴィアは腕を組み、目を瞑って少しの間考え込んでいた。当然思考の矢先は妹の安否である。彼女自身の事もそうだが、彼女には今後のザルヴァトーレの命運がかかっているのだ。この戦争、そういった意味でも負ける事は決して許されない。

一人で考え込むシルヴィアの背後、扉が開いた。現れたのは黒いドレスを身に纏った姫である。美しく長い黒髪　シエルシやシルヴィアとは異なる目の色、髪の色、顔立ちのその姫は王の傍に立ち、その顔色を伺っていた。

「お姉様、何のお話をしていたの？」

「……ネーヴェエか。いや、帝国側が脱走した魔剣狩りの捕獲と兵器実験に協力してくれと言って来ただけだ」

立ち上がり、シルヴィアは振り返った。ネーヴェエ・ルナリア・ザルヴァトーレ……。ザルヴァトーレの第二王女であり、シルヴィアの妹にしてシエルシの姉である。王であり騎士でもある姉シルヴィアや婚姻の儀の花嫁であるシエルシとは異なり、ごく普通の姫なので話題に上がる事もなく、彼女は常に二人を影から見守ってきた。そんなネーヴェエも此度の開戦では大人しくしているわけにも行かず、シルヴィアの片腕として各地を奔走している。

「魔剣狩り……ヴァン・ノーレッジですか？　確か、帝国から脱走したと……。シエルシを連れ去ったとか」

「そうらしい。全くあの馬鹿は何をサラッと拉致されているのか…

…実に腹立たしいわ！」

「まあお姉様、そう仰らずに……。あの子にはあの子なりに事情があったに違いありませんわ。わたくしたちに出来る事は、あの子の無事を祈る事……。そして今は国を護り戦う事ですわ」

「確かにその通りだな……。良い。ネーヴェ、前線へ戻るぞ。それと宣戦布告の用意を」

「そちらの方は滞り無く」

シルヴィアは頷き、部屋を後にする。ネーヴェはにっこりと優しく笑顔を作り、シルヴィアの半歩後ろを歩き出した。髪を束ねシルヴィアは心境を新たにす。これより始まるのは血も涙もない戦争。無慈悲な悪逆非道が繰り返される地獄の創造である。その覚悟と重責、それを背負わねばならない。王として。人の命を預かる者として。絶対に負ける事は出来ない、戦いを前に。

「ザルヴァトールより宣戦布告の合図あり！！ 敵本隊、ラクヨウに向けて進軍開始されました！！」

ラクヨウ城の司令本部、通達を受けた通信士が声を上げた。その声を聞き届け、タケルはゆっくりと目を細める。戦争が始まった。それは、たった一つの合図で幕を開ける。なんとシンプルでなんと罪深い……。王子は片手を揮い、通信士たちに命じる。

「各部隊に伝達！ 戦闘開始準備！ 姉上……。どうぞ、ご無事で」

ラクヨウの街の外、荒野にエンジンを唸らせるバイクが一台停まっていた。その上に跨ったホクトは左右のサイドカーに乗った口ゼとウサクを見やり、それからゴーグルを装着する。

「さて、俺らは敵陣付近までこいつで突っ走って、あとは徒歩で潜入だ。段取りはオツケーだな？」

「了解でござるよ！」

「てかこれ、バイクじゃなくてもう三輪車……」

「つべこべ言ってるとは余裕があるな……」

グリップを握り締め、ホクトは荒野の果てを見渡す。街を取り囲むように展開した防衛部隊から飛び出したその場所で男は戦いの足音を確かに感じていた。

既にミュレイたち本隊は敵の進軍を抑える為に出動している。あとはホクトたちがポータル破壊工作の為に向かうだけである。全てが上手く行くかどうかは判らないが……兎に角今はやるしかない。

「さて、ほんじゃまいつちよ……やってみますかねえ」

バイクが発進し、荒野に砂と埃を巻き上げながら疾走していく。それを見送り、背後でシエルシは一人借りた馬の上に跨っていた。ホクトのようにバイクは運転出来ないが、乗馬ならば子供の頃から嗜んでいる。城に残っているとホクトに言い訳したのも束の間、シエルシは既に前線に出る気満々であった。

サーベルを腰のベルトに差し、白馬を走らせるその姿は姫というよりは剣士そのものである。ホクトとは別方向、本隊をも追い越す

ように迂回しシエルシが目指すのはザルヴァトーレ本陣。そう、姉シルヴィアのところである。

戦争を中断させるという理想を叶える為に行動しなければならぬ事……判っている。無謀だといわれようがなんだろうが、人は自分が正しいと思ったことしか出来ないから。心に素直に正直に……ならば自ずと向かうべき場所は限られてくる。

風を切り、自由自在に荒野を駆ける。こんな瞬間にずっと憧れていた。でももう憧れているだけではいられないから。一人の姫として、人間として……。他の誰かと比べてではなく、自分自身として。願いを叶える為に、手は伸ばさねばならない。

「……………ごめんなさい、ホクト。でも私は……それでも自分の信じた道を往きます」

その結果、結局どうにもならなくて失敗したとして……。そうだった時、ホクトはどんな顔をするだろうか？ そう考えると少しだけ胸が痛んだ。ミラを失った悲しみを再び彼に味わわせないために、シエルシは死ぬわけには行かなかった。生きて……。そう、生きて。この世界を、変えなければ成らなかった。

「……………。出来れば夢であって欲しいものだな。戦争など……………」

シエルシが荒野を駆ける頃、前線では武士団を背後にミュレイが荒野の先を見つめていた。戦争が始まり、丁度敵軍が見える位置に陣取っていたミュレイたちも動かねばなくなった。敵軍がゆっくりと迫っているのが見える。ミュレイは深く溜息を漏らし、それから顔を上げた。

「攻められたのならば、護らねばならぬ……。ミラよ……お主が生きていたなら、わらわを笑うか……………」

誰にも届かない、小さな小さな呟き。それからミュレイは気持ち
を切り替え、振り返って魔剣ソレイユを空に掲げた。背後にはクク
ラカン武士団とサーペントヴァイト、そして砂の海豚の混成部隊が
控えている。

「皆の者、良いか!? これは愚かなる歴史の一步である!! 我
らは争い、争う以外では何も護れぬ愚かな弱き存在じゃ!! 故に
戦うしかなく、戦う以外を選べない! しかしそれ故に なさね
ばならぬ事も自ずと一つ!!」

振り返り、扇を広げて迫り来るザルヴァトーレの軍団を指し示す。
シルヴィアは。生涯の友は、どんな気持ちで今この戦いの音色
を刻んでいるのだろうか。

「ミュレイ・ヨシノの名において汝らに命じる! 我が国を、汝ら
の国を護り給え! 太陽の守護者よ!! 誇り高き剣士たちよ!!
日々の鍛錬の成果を存分に発揮し、そして。そして……仲間
を。友を。家族を。故郷を……。己の命を護り給え!!」

戦場にミュレイの声は静かに響き渡った。もう、後戻りは出来な
い……。高鳴る鼓動の音に耳を向ける。そして息を合わせ、声高ら
かに。

「全員、抜刀許可! 白兵戦闘用意ッ!! 往くぞ ツ!!」

ミュレイが掲げた魔剣を合図に武士たちが一斉に刀を装備する。
荒野には無数の魔法陣が浮かび上がり、そこからミュレイの召喚に
応じて何体かの巨大な龍が姿を表した。ミュレイはそのうちの一体
であるヴェルファイアの肩の上に乗る、扇にて敵陣を指し示す。一

斉に武士たちが移動を開始し、それに伴い龍たちも前線へと移動していく。

ザルヴァトーレ側は帝国により与えられた小型の高機動ヴィークルに搭乗した騎士たちが先陣を切り、それに続いて騎士たちと小型機動兵器が進軍していく。戦力差はやはり圧倒的である。ミュレイは空の上から眼下、敵陣のシルヴィアを見据えた。遠く離れた距離で見詰め合う事など出来るはずもない。だが二人は互いに互いの存在を感じ取っていた。

「……………行くぞ、ミュレイ。長年の決着　我らの代で清算しようではないか……………！」

シルヴィアが魔剣を装備し、立ち上がる。騎士と武士、二国の勢力が激突する。先陣を進む騎士と武士とが刃を交え、その音を以ってして愚かな戦争の火蓋が斬って落とされたのであった。

愚者の行軍(3)

「そんな……!? もう、始まってしまっている……!」

白馬を走らせるシエルシの視界の奥、翼竜の上に立つミュレイとそれを迎え撃つシルヴィアの姿があった。そこに続く道はすべて兵たちの乱戦により閉ざされ、とても近づけるような状況ではない。

正面から本隊同士が激突した事により戦況は五分五分、熾烈を極めていく。数で劣っているククラカン勢力ではあったが、魔剣使いであるブラッドヤリフルを中心としたギルドの混成部隊が上手く戦況を拮抗させており、どちらも一歩も引かぬ激戦が繰り広げられていた。

一旦馬を止め、シエルシはルートを思案する。この状況になって漸く戦争を止めるということが如何に無謀で馬鹿げた事なのかを実感する。魔剣狩りや白騎士のような力があれば、この中を抜けていく事も出来るのだろう。だが理想を叶える為に必要な力……。悲しくも、姫には持ち合わせられてはいなかった。

それでも諦めず、馬を再び走らせる。戦場を迂回し、裏側へ回りこむ為に……。前線で戦っているシルヴィアと直接話をするのは難しいだろう。だが後方には第二王女にして彼女の片腕、ネーヴェエが控えているはずなのだ。

「ネーヴェエ姉様なら、話を聞いてくれるかもしれない……! 急いで回り込まなきゃ……ッ!？」

そうして馬を進ませるシエルシの前、次々に空から放たれた矢が突き刺さる。それに驚き停止した馬から跳ね飛ばされ、シエルシは荒野の上に転がり落ちた。慌てて立ち上がり、サーベルを抜いて周

困を見渡す。当然迂回をザルヴァトーレ騎士団が許すはずも無く、騎士が数名駆け寄ってきているのが見えた。

「時間がないと言うのに……！」

次々に放たれる矢から逃れるように後退し、走り出す。立ち止まる事は出来ない。全力で駆け抜けるしかないのだ。ここまで来たらもう引き返すことは出来ない。己の信念を曲げない為に。己の理想を曲げない為に。ならば真つ直ぐ、前進あるのみである。

騎士たちはまさか相手がシエルシ姫であるとは思ってもよらず、追撃の手を緩める様子もない。当然の事である。彼らにはまだ、シエルシがインフェル・ノアから拉致されたという情報は伝達されていないのだ。それは国の威信に、そして騎士たちの士気に関わる。王として当然の判断であった。

「……………いつまでも、逃げては居られない……………か……………っ！！！」

意を決し、シエルシは振り返って剣を構えた。軽く扱いやすい、ミドルリーチのサーベルを手先で器用に回し、ザルヴァトーレの騎士よろしく構えてみせる。緊張もあつたし恐怖もあつた。だが、今日まで独自に学んできた事がある。

幼い頃は剣の鍛錬を欠かさなかつた。魔術の学習を欠かさなかつた。寝ても覚めても思い描いていた、あの戦う勇者の姿。ホクトには手も足も出なかつたけれど。それでも彼の弟子ならば。世界を壊す“魔剣狩り”に戦いを教わつたのならば。

「私は、先へ進みます！絶対にこの戦いを止めてみせる……………！それが、姫としての……………いいえ。私が私として、やらねばならない事だから……………！！！」

シエルシが剣を片手に走り出した頃、互いの将であるミュレイとシルヴィアは熾烈な激闘を繰り広げていた。翼竜ベルファイアが放つ炎の球弾をシルヴィアは取り出した巨大な魔剣で両断、弾き飛ばしてみせる。王が持つ剣はSランクの魔剣。その名も“永魔剣 エリシオン”。全ての魔剣の中で最も誇り高く、そして最も頑丈な剣である。美しく白銀に煌くその刃を揮い、王は己の身を包み込んでいた紅いマントを放り投げる。銀色の甲冑で全身を包んだシルヴィアは一息に跳躍し、上空のヴェルファイアへと襲い掛かった。繰り出される魔剣の一撃を龍はその拳で受け止める。巨大な怪物相手に全く物怖じしないシルヴィアはその死線の中で笑みを浮かべていた。高揚する魂。否が応も無く、それは定められていた運命であるかのように。月の王と太陽の王、その二つは絶対に交じり合う事は無かった。片方が動けば片方は遠ざかる、永遠に等しい距離を保ち続ける光。国という世界を導く天に瞬くその光が今、お互いに手の届く距離で刃を交えている。

ヴェルファイアの口から炎の吐息が放たれ、シルヴィアを包み込んだ。しかしそれをも上回る莫大な量の魔力が放たれ、炎はすべて吹き飛ばされてしまう。シルヴィアは大地へと落下し、着地。それに続いてヴェルファイアとミュレイも着地してみせる。

「どうしたミュレイ！ 手加減ならば無用……！ 存分に長年の因縁を果たそうではないか、王よ……！」

「相変わらず馬鹿げた魔力総量じゃな……。お主、剣を振り回すよ。魔法を使った方が向いているのではないか？」

「そういうわけにも行かぬ。私にはこれが向いている。これが合っているのだ。肉と肉、骨と骨、血と血で争う文字通り骨肉の戦いよ

……！」

「蛮族か、お主は……」

「上等ではないか！ 蛮勇も貫き通せば英雄譚となるう！！ はー
っはっはー！！」

「全く、厄介な相手じゃ……っ！！」

ミュレイがソレイユを広げ、それを大きく仰いでみせる。猛然と
駆け寄ってくるシルヴィアの足元から火柱が吹き上がり、しかし王
は足を止めることはない。次々にミュレイは魔法を連発するが、シ
ルヴィアは魔剣エリシオンを両手で構えたまま止まらず突っ込んで
くる。溜まらず後退しながらヴェルファイアと同時に炎を連射し、
両手を空に翳して魔力を収束、天に巨大な術式を浮かび上がらせる。

「大魔法か……面白い！」

「アグニッシュユプレス天地を焦がせ龍の息吹”……ッ！！ 放てっ！！」

ミュレイの術式を受けたヴェルファイアがその口から巨大な熱線
を放つ。強大な熱量の上級魔術の直撃に、流石のシルヴィアも足を
止めざるを得ない。その場に両足で踏ん張り、放たれる閃光をエリ
シオンの切っ先で受け止める。拡散した淡い炎の光は触れるすべて
を焼き尽くし、草木一本も存在しない空虚な大地を更に焼き尽くし
て余りある。

シルヴィアの全身、鎧が熱量に焦げ、溶け始めていた。王のその
肌も焦がし、髪さえも燃やす紅き閃光の中、それでも王は笑みを絶
やさなかった。魔剣エリシオンに魔力を込め、蒼い閃光が眩く瞬い
た。炎の渦を突破し、シルヴィアは直突き進んでくる。ミュレイは
舌打ちし、ヴェルファイアの巨大な拳が振り上げられた。

「おおおおおおおお　　ッ！！！！！」

「この、化け物かお主は　　！！　ヴェルファイアッ！！」

龍の放つ巨大な拳　。それを足を止めたシルヴィアは思い切り振り上げた魔剣で応じた。衝突の瞬間、シルヴィアの足場は一気に陥没し、荒野に巨大な亀裂が走る。それでも王は龍の拳を弾き、身体を捻って追撃を放つ　。

「その腕貫つたぞ、炎龍　　ッ！！」

放たれた斬撃は衝撃を伴いあっさりと凶太いヴェルファイアの手首を両断して見せる。腕を片方失った龍は怯み、後退　。しかしシルヴィアは足を止めず、そのままミュレイ目掛けて突っ込んでいく。

「ヴェルファイア、戻れ！！　く……っ！？」

ヴェルファイアの召喚を解除する事で止めの一撃を回避したミュレイであったが、今度はミュレイ自身がシルヴィアの標的となってしまう。護衛の巨龍を失ったミュレイはソレイユを広げ、連続して魔法を放つ。それを無視して強引に突っ込んでくるシルヴィアの剣を魔力で編み上げた障壁で防御した。

ミュレイはが構築する、不可視の魔力の結界　。それは魔剣と衝突し、激しく光を散らしていた。眉を潜め、障壁を固めるミュレイの目の前、剣を両手で構えたシルヴィアはそれを震わせながら更に一步前へ　。その様相は正に恐れを知らぬ屈強な王そのものである。

二人は同時に魔力を最大限まで引き絞り、炸裂させる。特に何かの術式を介したわけではなくとも、大量の魔力は魔術を上回る。物

理的な威力を持つて爆ぜた衝撃でミュレイは空へと舞い上がり、シルヴィアは後方へと吹き飛ばされた。ブレーキングの為に大地に突き刺した剣の軌跡を残しながらシルヴィアは顔を上げる。

「ふん、やはりこんなものか、ミュレイ・ヨシノ……！ 興奮めだな」

「………………。何を心外な事を口走っておる、シルヴィア。わらわはまだ本気などこれっぽっちも見せておらぬぞ」

「ふん、それは私も同じ事だ。ならばお互い遠慮は無しにやりあうとしようではないか」

ふわりと大地に降り立ったミュレイは広げた扇を片手に携え、シルヴィアは大地から引き抜いた巨大な剣を構える。二人の王が睨み合い、緊張感と共に威圧的な力が広がっていく。誰もそこに近づく事は出来ない。最強の七剣同士の激突に、首を突っ込めるはずも無い……。戦場の真ん中で、二人の魔剣使いが動き出す。長い間止まっていた歴史の針を、強引に押し進めるかのように。

愚者の行軍（3）

「さてさて、現場に無事到着したわけだが……？」

リブレス砦を見下ろす岩山の上、腹這いになって双眼鏡を構える北斗の姿があった。その左右には同じように物陰に隠れた口ゼとウ

サクの姿もある。三人の目的はリブレス砦内部に存在する、帝国と通じているポータル破壊である。それが成功するかどうかによってこの戦いの勝率は大きく変わってくるだろう。

しかし、三人はなかなか動けずに居た。というのも理由は簡単で、リブレス砦には帝国の高速強襲空母が停泊しており、その警備も尋常ではない。ずらりと並んで帝国兵と自立兵器の数々……。何故強襲空母がここにあるのかは判らなかったが、兎に角想定よりも遙かに強固な守りである。迂闊に近づく事は愚か、潜入などもってのほかだろう。

「ウサク、忍者なんだからあれくらい何とかなるでしょ」

「ロゼ殿それはいくらなんでも無茶ぶりもいいところでごぞるよ！！？」

「いや、いけるいける。いけるって。アレだろ。消えたり出来るんだろ？ 忍者ならいけるって。流石忍者汚い」

「何でホクト殿まで……！？ というかそれは何の話でござるか！？」

「まあ、ウサクをいじめるのはこれくらいにして……。どうするホクト？ 流石にあれじゃ潜入する余裕はなさそうだよ」

しれっとしたロゼの発言にショックを受けるウサク。忍者が一人落ち込んでいる間にホクトは顔を上げ、少しの間考え込んだ。それからひよっこりと立ち上がり、両手を広げて体を伸ばす。

「うーむ……。めんどくせえから正面から行くか……」

「正気でござるか!？」

「まあ、あれくらいの戦力なら俺一人でも何とかなるだろう」

「ホクト殿……そ、そんなに強いのでござるか……？ 余り命を投げ出すような事はしないほうが良いでござるよ……」

「いや、いけるいける。いけるって。俺魔剣狩りとか呼ばれちゃってるし。てか俺普通に戦ってるだけじゃ絶対死なないから」

何の事だか二人とも判らなかつたが、どちらにせよそれ以外に方法がないのも事実である。ロゼは頷き、それからウサクの手を引いて下がった。

「じゃあ、囷になつてもらっている間に潜入するよ。それでいい？」

「それが出来れば上出来だ。さて、そんじゃまあ俺はちよつくら暴れてくるか……。派手にやるからちゃんと離れていけよ」

ホクトがガリユウを構築し、それを片手に構える。ロゼは後退し、ウサクも心配そうにホクトを見つめながら下がっていった。二人が離れたのを確認し、ホクトは一気に魔力を放出して空に叫ぶ。

「がおおおお　　っ!!　　魔剣狩りじゃ　　っ!!　　悪い子はいねえがあ　　っ!!……!!」

男の叫びは青空に響き渡つた。当然その魔力と声に反応し、皆の騎士たちはホクトを捉える。それを確認し、男は一気に崖を駆け下りていく。大きく一息に跳躍し、荒野へと着地。それから剣に黒い炎を纏わせ、真つ直ぐに敵軍へと特攻していく。

次々に集まってくる帝国騎士へと飛び込むように身体を捻り、黒い魔剣を大きく薙ぎ払った。闇の炎が爆ぜ、騎士たちを一気に吹き飛ばす。ホクトはそのまま砦周辺をうろろしつつ、集まってくる騎士たちを斬り倒していた。

余りにも派手すぎるホクトの様相に若干ツッコみたかった二人だったが、ホクトたちの騒ぎを迂回するようにして砦に近づいていく。流石に魔剣狩りの存在は騎士たちも知っていたのか、軽視するわけにも行かず戦力はすべてホクトの方へ向かってしまい、砦の入り口はがら空きだった。そこからコツソリと二人が潜入を果たし、とりあえず作戦の第一段階が成功する。一方その頃、リブレス砦の内部では……。

「オデッセイ様、報告します！！ 表に、魔剣狩りが表れました！！」

リブレス砦の会議室では、今正に剣誓隊が動き始めようとしている所であった。会議中に突然飛び込んできた敵襲の報告に流石のオデッセイも目を丸くする。それも聞けば敵は単身。たった一人で砦に突っ込んできているというではないか。呆れたように笑い、それからオデッセイは仲間の意見を仰ぐように視線を向けた。

「さて、来客のようだ。どうしようか、ケルヴィー？」

「いや……恐らく相手は物凄く頭が悪いですねえ……。とりあえず実戦データを取るいい機会でしょう。エクスカリバーチームの第一陣を出動させましょう」

「ルキアたちは……？」

「一応、様子見ということ……。しかし大事な実験体をあっさり

瞬殺されては悲しいので、出来れば援護をお願いしたいのですが……」

「それじゃアルキアとビッグホーンに出てもらおう。二人とも、エクスカリバーチームには特に思い入れがあるだろうしね」

黒い、専用のドレスのような制服を着用したルキアともう一人、全身を黄金の甲冑で多い尽くした巨漢、ビッグホーン……。二人の将軍が立ち上がり、部屋の外へと歩いていく。ビッグホーンは終始無言であり、そのまま部屋を去っていく。それを見送りルキアは不機嫌そうにオデッセイへと振り返った。

「……あれと一緒に行くの？ ルキア、あいつよくわかんないしつままない……」

「別に、協力しなければいけないってわけじゃないさ。ルキアはルキアの好きにすればいい。魔剣狩りを倒したら、君の自由に出来るんだからね」

オデッセイのその一言でルキアの顔に微笑みが戻り、少女はうき気分でスキップしながら部屋から出て行った。それを見送りケルヴィーは眼鏡を光らせ、静かに笑う。

「中々面白いチョイスですねえ、オデッセイ……。ルキアとビッグホーン、ですか」

「二人ともエクスカリバー隊とは因縁があるだろう？ 特にビッグホーンは、それを清算出来るといいんだけどね」

「そういうわけにも行かないでしょう。それに相手は魔剣狩り……」。

あまり余計な策をめぐらせている余裕はないでしょうね、きつと」

オデッセイはティーカップに紅茶を注ぎ、その香りを楽しむように軽くグラスを揺らして見せる。暖かい湯気が立ち上る落ち着いた時間の中、二人は特に慌てる様子も無く自然体に構えていた。

リブレス砦前、ホクトは既に近場にいた騎士たちをすべて倒してしまい、黒い魔剣を肩に乗せて近づいてくる騎士たちを蹴り飛ばしていた。全く戦闘力が違いすぎて手も足も出ない騎士たちは迂闊に近寄る事も出来ず、剣と盾を構えてつかず離れずの距離で陣を組んでいる。それもホクトがその気になれば一蹴されてしまうのだろうが、ホクトの目的は時間稼ぎと囿であり、わざわざそれを突破する気はさらさらなかった。

「もうちょい強いのがいるかと思っただが……一般兵じゃまあこんなもんか」

トントンと肩を剣で叩きながらホクトは啜えた煙草に火をつける。周囲の騎士たちは近づいてくる様子も無く、このまま行けば何の苦労もせず作戦成功か……そんな風に考え始めた時であった。砦の門が開き、騎士たちが散っていく。砦内部から現れた奇妙な一団それにホクトも眉を潜めずにはいられなかった。

帝国騎士団の標準装備である金色の鎧とも、剣誓隊の象徴である黒ベースの制服とも違う奇妙なデザインの服。強いて言えばそれはステラが着用している衣装に似ている。漆黒の戦闘服に、誰もが同じバイザーを装備している。そして全員が全員、全く同形状の魔剣を手に行っているのだ。

魔剣使いたちはそろそろと足並みをそろえて行軍してくる。その数はざっと五十人程度だろうか？ 魔剣使いが五十人も揃えばそれは驚異的な事であり、非現実的な事である。いわば悪夢とも言えるその異常事態が今、ホクトの目の前で最悪な事に実現されようとし

ていた。

「あれが噂の、人工魔剣使い……。エクスカリバーか。しかしなんだってんだ、ありや……。？ 全員同じような背丈、同じような髪色……。ってというかあれ全部同じ人間じゃねえのか……。？」

ホクトの言うとおり、並んでいるのは全員が同世代の、同じような体格の、同じような外見の、同じような能力を持った少年少女である。そう、相手は子供。ロゼと同じくらいだろうか、なんて事をふと考える。ずらりと並んだその隊列を前に帝国騎士たちが撤退して行き、ホクトは火をつけたばかりの煙草を放り捨てて魔剣を構えた。

「エクスカリバー隊ってのは、こつもわけわかんねえ物なのかね……」

エクスカリバー使い達が全員一斉に剣を構え、それから前列から順番にホクトへと襲い掛かってくる。跳びかかってきたエクスカリバー隊の一人の攻撃を剣で受け止めるホクト。その力は大了ことは無く。カウンターで放った蹴りで少年は吹っ飛んでいく。しかし問題なのはその数である。どつと津波のように押し寄せてくるエクスカリバー隊は次々にホクトへと襲いかかり、振りほどこうが叩きのめそうが関係なく休み無く襲い掛かってくる。

ホクトは後退しつつ、ガリユウを振り回して周囲から襲ってくる剣士たちをすべていなしていた。まだ一人もその少年たちを斬り殺してはいない。なんだか嫌な予感がして、そしてそれは恐らく当たっている。敵を殺さないように戦うのは、殺してしまう何倍も難しい。ましてやこの数、流石の魔剣狩りと言えども容易に相手が出る状況ではない。

「こいつら……帝国側の洗脳兵か……ッ!?」

ガリユウの纏った黒炎を放出し、周囲の剣士たちを一齐に弾き飛ばす。それから後方に大きく跳躍し、着地と同時にガリユウを大地に突き刺し、両手で編んだ術式を発動する。ホクトの目の前、巨大な目には見えない闇の結界が結ばれ、エクスカリバー隊は一齐にそれに剣を突き立て停止した。

「エクスカリバーを扱うには、人間の自我が邪魔になる……。無数の魔剣をその身に宿しているのならわかるでしょ？ 魔剣狩り……」

エクスカリバー隊を結界で押さえ込むホクトの背後、浮かんだ魔剣の上に腰掛けたルキアが足をぶらぶらと投げ出しながら微笑んでいる。片手で結界を維持しつつ、ホクトは振り返った。ルキアと、それから巨体の騎士、ビッグホーン……。二人の將軍クラスと五十名の魔剣使いの間に挟まれ、男は冷や汗を流した。

「“魔剣”とは、人の意識に根差す物……。魂の渴望、感情の形……。受け継がれる意識の結晶。魔剣とは、本来それそのものが人の“罪”を現す物……。罪悪の権化。貴方は知っているんでしょう？ 魔剣の正体……」

「全然わからねえしわかりたいとも思わないねえ……。全く、最近のガキはどいつもこいつも偉そうだなオイ？ 危ないからとっとママんところに帰りな、“お嬢ちゃん”」

まるで馬鹿にするようなホクトの口調にルキアは眉を潜め、不快感を露にする。腰掛けていた魔剣から飛び降りると、魔剣はまるで意思を持つかのようにくるりとルキアの周囲を一周してみせた。

「ママなら“ここ”にいるもん。それに、ルキアはガキじゃない…」

「ガキじゃないって言う奴はガキなんだよ……ったく。悪いが俺は女は斬らない主義だ。お前みたいなお子ちゃまは特にな」

「……………。むかつく……………」

「で？ こいつらは全員、魔剣を移植する為に自我を飛ばされてるってわけか……？ エクスカリバーだかなんだか知らないが、呪いの剣だな。文字通りの魔剣だぜ」

「そいつらは全部傀儡……。だから、死ぬまで目的と戦い続ける。さつきから殺さないようにしているみたいだけど、追い詰められるだけだから止めておけば……？ これからルキアも……貴方を殺すんだし」

しかしホクトは笑みを作り、低く声を上げて笑って見せる。結果を解除するとどつとなだれ込んでくるエクスカリバー隊の前、手を翳して指を弾いた。大地からは無数の魔剣が出現し、剣山はエクスカリバー隊の足を完全に止めてしまう。

「ヒントどうもありがとうよ。確かにすごいな、エクスカリバー隊ってのは。正し、俺以外の人間に相手をさせるには……だけどな」

「……………？ 強がりばかり……。軽口叩く男って、むかつく……」

「生憎俺が興味のある女は胸がでかいおねーちゃんだけだ。お前み

たいなお子ちゃまには興味ないんでね……。っっていうか後ろの奴、少しは喋れよ」

『……………』

ビッグホーンは全く身じろぎもせず、当たり前のように一言も口を利かなかった。ルキアは溜息を漏らし、そんなビッグホーンの鎧を蹴っ飛ばしてみせる。

「無駄でしょ……。こいつ、木偶だから。喋ったところなんか、一度も見た事ないし」

「……………それはすげえな」

「さあ、お喋りは御終い……。これから貴方を半殺しにして、いじめていじめて、身体中を切り刻んでからインフェル・ノアに連れて行くから……。簡単に死なないんでしょ？ だったらいくら切り刻んだっていいよね……？」

ルキアが浮かぶ剣を抱き寄せ、それを手にしてよろよろと前進する。その動きにあわせるようにビッグホーンも空中から巨大な戦斧を取り出し、それを大地に叩き付けた。戦闘開始ムードが漂う中、ホクトは小さく笑ってみせる。

「行くぜガリュウ、食事の時間だ」

エクスカリバー隊は全員、洗脳されている兵士……。そしてそれは、エクスカリバーに支配されているという事を意味している。エクスカリバーが存在する限り、彼らは永遠に戦い続ける人形なのだ。だが幸か不幸か、この男の前でその秘密を口にしてしまった以上、

戦況はまた一変してしまふ。

この世に存在する数多の力の持ち主の中、たった一人だけ彼はエクスカリバー計画にとつての大きなイレギュラーである。彼の剣は、剣を喰らい剣を殺し、全てを己に取り込む力。ならば答えは簡単、そしてそれこそたった一つの解決方法である。

「ガリユウ、封印術式開放。今回はちょっとばかり数が多い……。調整がまだだが、ちよびつとだけ本気で行くぜ……！」

剣を空に掲げる。黒き刃には紅い術式の刻印が浮かび上がり、開かれた瞳からは血の涙が溢れ出す。剣はまるで獣のように空に吼え、大地は漆黒の影に飲み込まれていく。あれだけ晴れ渡っていたはずの青空が影に侵食され、まるでこの一箇所だけ世界の中から切り離されたかのように全てが闇に染め上げられていく……。

エクスカリバーシリーズも、ルキアもビッグホーンもその尋常ならざる様子に戸惑いを隠せなかった。ホクトは天に掲げた闇の剣の力を解放し、渦巻く力の中心部で目を閉じる。

「限定時間内のみ、全能力を開放。コード、“ロクエンティア剣創” 発動
ッ……！」

黒い光が眩く放たれ、まるで黒い太陽であるかのように輝き全てを飲み込んでいく。光が止んだ時、そこには黒い甲冑を纏った一人の騎士の姿があった。無数の剣を身体の周囲に浮かべ、それを翼のように纏めて広げて見せる。長い漆黒の髪を靡かせ、黒騎士は静かにガリユウを構えた。

「さて、時間制限つきだから速攻ケリをつけるぞ、ヴァン……！
おら、ちっこいのもお嬢ちゃんもエクスカリバーもでかいのも全部纏めてかかって来いやあッ……！」

黒き闇の騎士が吼え、猛然と走り出す。その片手を揮い、空中に出現した数え切れない無数の漆黒の魔剣が一斉にエクスカリバー隊へと襲い掛かる。その全てが正確に彼らの持つエクスカリバーだけを射抜き、砕き、喰らい、侵食していく。ホクトの意図に気づいたルキアとビッグホーンが同時に背後から襲い掛かり、吼える黒き獣はそれに応じるように剣を振り上げ、膨大な魔力を練り上げた黒い炎で大地ごと襲撃者を薙ぎ払うのであった。

愚者の行軍(4)

「この子が、ノーレッジ博士の……?」

それは、この物語が始まるずっと前の物語。廃墟と貸したその街の中心部、少年は一人空を仰ぎ見ていた。瞬きする度に夜空から降り注ぐ月光が少年の瞳へと吸い込まれていく。それはまるで幻のように、そしてまやかしのように……。傍に立っていたのは白いドレスの女性だった。数名の騎士に囲まれた女は少年の隣に腰を降ろし、それからその手を取った。

「……………可愛そうに。この子も……………ガリユウの犠牲者なのね」

「シャナク様、危険です！ いくら子供とは言え、Sランク魔剣の……………ガリユウの所有者に迂闊に近づいては……………！ この街も、恐らくはその少年が……………」

「だとしても……………それはきっとこの子が望んだ事ではないのですよ、ロイ」

女は立ち上がり、それから月明かりを背に少年に優しく微笑みかけた。そこで漸く存在に気づいたかのように少年は顔を上げる。まるで月のような人と、少年は子供心に思った。王は己の身を包んでいたヴェールで少年を包み込み、それからそっと煤だらけのその顔をハンカチで拭った。

「自分の事が判りますか？ もう、大丈夫……………。私たちと一緒に行きましょう？ ここは一人で居るには、余りにも寒すぎるから……………」

美しい、黄金の髪。靡く光の波の向こう、少年は夜の月を見上げていた。白く、儂く、それは美しく輝き続ける夜月。それは、当たり前前のようにあった運命の物語。

「これはまずい」

リブレス砦の外から放たれた異常としか感じられない魔力の波長にオデッセイは直ぐに気づいた。ケルヴィーと共に窓辺に向かうと、既に外は夜の様相である。天はまるで光を遮る事を望むかのように闇に包み込まれ、漆黒の絨毯は大地に混沌を映し出している。その渦中、闇の鎧を纏った魔剣狩りの姿がある。オデッセイは身を乗り出し、それから直ぐに走り出した。

「オデッセイ、どこへ!？」

「高速強襲艦の主砲の準備を！ 私も加勢に向かう！」

「主砲ですか!?! し、しかしそんなものを使っては砦が……ちょっと、オデッセイ!?!」

話も聞かず、廊下に飛び出したオデッセイは窓から飛び出して砦を駆け下りて行く。戦場の中、それと同時に魔剣狩りも動き出した。猛然と接近する怪物を前にルキアは目を見開き、怯えながらも剣を振るう。

「“プリメーラ”ッ!！」

しかしその剣が振るわれる事は背後から伸びたビッグホーンの手

が阻止していた。代わりに前に出たビッグホーンが構えた斧へとガリユウが口を空けて喰らいつき、むしゃりとその刃を食いちぎる。接触しただけで大將の剣を食いちぎるガリユウと正面から遣り合っていたなら、今頃ルキアの魔剣“プリメーラ”は消滅していた事だろう。

「……………ビッグホーン……………!?!」

『下がっている、ルキア。あれはお前の手には余る』

「えっ!?!」

急に喋りだしたビッグホーンは既に原型を留めていない斧を放り投げ、そして虚空から新たに大剣を取り出して駆け出した。ルキアは驚きの連続についていけず、思わずぽかんとしてしまふ。ビッグホーンは魔剣を破壊されたのに、その直後別の魔剣を当たり前のように召喚した。そしてまるでガリユウの力を理解していたかのようにルキアを庇い、ついでに初めて喋ったのである。

巨大な角兜を前に突き出し、騎士は真っ直ぐに魔剣狩りへと突っ込んでいく。その刃を大地へと叩きつけ、巨大な力で岩盤を捲り上げてそれをホクトへと叩きつける。だが接触した瞬間には黒い霧のような物質に分解され、岩盤はガリユウの口へと吸い込まれていく。

「なんなの、あれ……………!?! 触ったらアウトって事……………? なんて反則……………!?!」

カウンターで繰り出されたガリユウは刀身を伸ばし、まるで蛇のようにうねりながらビッグホーンへと迫る。それを何とか屈んで交わした騎士の兜、その角が一瞬で分解され蒸発される。ホクトは大地から無数の剣を召喚し、それを一斉にエクスカリバー隊へと放つ

た。

降り注ぐ剣それぞれに大地から伸びた黒い触手が巻きつき、それぞれのエクスカリバーを破壊していく。瞬く間に五十人いたエクスカリバー隊の全員が剣を失い、その支配から逃れて気を失った。その頃ビッグホーンと合流したオデッセイは放心状態に陥っているルキアを担ぎ、急いでその場から撤退する。

「ビッグホーン、よくルキアを護ってくれた」

『……………』

「この子にとって、魔剣は絶対に破壊されてはならないものだからね……………」

將軍三人が後退し始めた頃、停泊していた空母が動き出す。浮かび上がった空母はその全身から機銃は砲塔を出現させ、移動しながら一斉にホクトへと攻撃を開始した。しかし全身を黒い鎧で被っているホクトにその攻撃は通用しない。弾丸も砲弾も爆風も、接触すれば鎧は分解してガリユウに食わせてしまうのだから。

黒騎士がゆっくりと動き出す。それに合わせ、空母は前方下部に内蔵した巨大な魔道主砲を準備する。空母一つを動かす巨大な魔力ジェネレータの出力をすべて主砲へ回し、夜さえも昼に変えてしまふような眩い光が放たれた。たった一人の人間相手に放つには余りにも度を過ぎた威力の代物であったが、ホクトに命中した傍から光は分解されてしまう。

「なんなんですか、あれはっ！？ おかしいでしょう、常識的に考えてっ……………」

砦の中、ケルヴィーが机を叩いて叫んだ。直後、ホクトは大地に

手を当てる。闇の海より出現したのは、超超巨大な魔剣であった。否、それは最早本来存在し得る魔剣ではない。ホクトが剣の海より改良し生み出し、召喚した剣。その全長は100メートルを超える。地鳴りと共に現れたそれを片手でゆつくりと持ち上げるホクトを見て、帝国騎士団の誰もが目を丸くした。

「お、おい……」

「まさか……」

「……………」

「冗談ですよ？」

しかし、願い空しくそれは冗談ではなかった。紅い紋章を浮かべた、漆黒の巨大な魔剣。ホクトはそれを助走をつけ、一気に投擲した。衝撃が荒野の大地を砕き、疾風は遙か彼方まで広がる。巨大すぎる剣は猛然と空中の空母へと迫り、あっさりとそれに突き刺さった。

余りにも日現実的、余りにも馬鹿馬鹿し過ぎて全員笑うしかなかった。それからとたんに悲鳴が上がり、空母から次々に騎士たちが脱出していく。漆黒の剣に貫かれた巨大空母は爆炎を何度も巻き上げながらゆつくりと墜落し、大地に落ちるよりも前に空中で爆発する。

「撤退！！ 撤退 ツ！！」

ケルヴィーの叫び声に皆から次々に帝国兵が逃げ出していく。將軍達も半ば呆れた様子でそのまま皆を後にした。轟沈する空母から巻き上がる黒煙を見上げ、ホクトはガリユウを再封印しながら腰を

下ろした。

「流石に、未調整で使うのは辛いな……。まだ持って数分ってところだな……。まあ、あつちはそんな事わかんねえだろうし、かなりのプレッシャーになっただろ、うん」

肩で息をしながら撤退していく帝国軍を見送り。それから荒野の大地の上にはばったりと倒れこむ。それを合図に大地も空も元通りの色を取り戻し、まるですべては夢か幻であったかのように綺麗さっぱりと消滅してしまった。魔力を消耗しすぎてそのまま気を失うように眠ってしまったホクト……。その頭上に差し掛かる人影があった。あれだけ派手に戦ったのだ、他の人間に全く見つからない方がおかしな話なのだが……。

しかし立っていたのは意外な事にククラカンの王子、タケルであった。タケルは腕を組み、ホクトの様子を覗き込んでいる。それから倒れているホクトの服を掴み、ずるずると引きずって移動を開始するのであった。

一方その頃、砦内部に既に潜入していたロゼとウサクは転送装置の前に隠れていた。無数の端末やコンソールが轟くそのエリアには先ほどまで帝国兵が見張りに立っており、倒さねばならないかと考え込んでいた矢先に先ほどの騒動である。見張りも慌てて脱出してしまったので砦内部はから空きである。二人は堂々と歩いてトランスポーターまで近づき、ロゼはその操作盤へと歩み寄った。

「外で物凄い音がしたでござるが、ホクト殿は無事でござろうか……」

「無事だから誰も居なくなっただんじやない？ まあ、こんだけ無用心に成るって普通ないと思うけど……」

「では早速、爆薬を設置して破壊するでござるよ！」

「ちょっと待って。ただ破壊するより色々やったほうがいいから」

ウサクを止めると、ロゼは操作盤を素早くいじりはじめた。次々と浮かんで消える立体モニターについていけるポカーンとしているウサク……。ロゼは手荷物の中から記憶媒体であるディスクを取り出し、それをコンピュータの中にセットする。

「帝国側の座標情報とか、端末とのセッション記録とか……色々ダウンロードして……。っと。それから転送座標を変えてやる」

「この、転送先の座標Xというのはどこでござるか？」

「座標Xっていうのは、まだこの世界では未開のエリアって事。平たく言うと、まあ魔物の群れとかが暮らしている山岳地帯の奥地とか……。そもそも大陸が途切れているその先、何も無いエリアとかね」

「……。もしかして、ここに転送しようとするところに行ってしまうのでござるか……？」

「そういう事。まあ向こうも直ぐに気づくだろっけどね。それまでの間、戦力を足止めることが出来ると思う。ただ壊したんじゃ連中もただ壊れたと思うだけだろうから」

「な、なんだかちょっとかわいそうでござる……。いきなり何も無いところに転送されたら流石に悲しいでござるよ……」

「はいはい……。ほら、爆薬を設置してよ。僕はその間に出来るだけ情報を収集しておくから。ちなみにここに誰かが転送してきたら

連動して爆発するようにしたいんだけど、できるかな？」

「トランスポートが動くとも魔力反応が出るでござるから、特定の転送に対して爆発するように設定する事は可能でござるよ……しかし本当に上げつないでござる」

気が進まない様子のウサクの背中を蹴飛ばし、ロゼはその間に帝国側が持ち込んだ端末から情報を探索していた。ウサクはトランスポーターの周囲に爆薬を設置し、溜息を漏らす。

「これで大体は完了、かな……。ホクトと合流して援護してあげよう。まあ向こうは片付いてるかもしれないけどさ」

「急いで戻るでござるよ！」

二人が頷き合い、転送装置の部屋から飛び出していく。一方その頃、プリミドールの遙か彼方の森林地帯……。一人でうろつくと彷徨うステラの姿があった。

「………………。魔剣狩りが出たと聞いて来てみれば…………どこですか、ここは。ケルヴィー、通信機が使えません。ケルヴィー…………！」

うつそうと生い茂った木々の中、何か魔物の声のようなものが聞こえて思わずステラはびくりと身を縮こまらせた。寂しそうな顔で通信機のボタンを連打しつつ、うさぎは今日も彷徨い続ける…………。

「う、ひゃあっ!?!」

ザルヴァトーレの騎士が放った弓矢をシエルシは悲鳴を上げながら走って避けるしかない。どたばたと逃げ回りながらシエルシは尻に涙を浮かべ、唇を噛み締めて必死に恐怖と戦っていた。

襲い掛かってくる騎士たちは全身鎧の所為で動きは鈍いが、振り下ろされる剣の威力は本物である。矢だつて当たれば人間は死んでしまうのだ、当然逃げるのも必死になるだろう。しかしここを突破出来なければ戦争を止めるなど夢のまた夢である。

「こ、こわくない……こわくない……こわくない……っ」

ぶるぶると震えながらそんな事を口走るシエルシ。握り締める剣も当たり前のように切っ先がぶれていた。唇を強く噛み締め、考える。こんな時、どんな風に立ち振る舞えば良いのか。恐怖に押しつぶされそうな胸の内、ふとホクトの戦う姿が思い浮かんだ。

今更ながらに痛感する。屈強な騎士でさえあっさりと蹴散らしてしまうホクトの強さを。魔剣狩りと呼ばれた男は伊達ではないのだ。こんな時、ホクトならどうするだろうか? ふと、シエルシは以前ホクトに聞いた事を思い返していた。

それは二人がガルガンチュアのデッキで剣の訓練をしていた時の話である。剣をじっと見つめながら困ったような顔をしているシエルシの肩を叩き、ホクトは言った。

「お前、なんでそんなよわっちいんだ……?」

「へっ……っ!? よ、よわっちくありません! よわっちくありませんー!」

「いや、かなりザコいदार……。変だよなあ……。あの人の……。シャ
ナクの娘なのに」

シエルシの隣に座り込み、それからホクトは煙草に火をつける。
そう、考えてみればおかしな話である。シエルシの母シャナクは帝
国に対して反旗を翻した、大逆の魔剣使い。永魔剣エリシオン
を狩り、各地で剣誓隊と壮絶な戦いを繰り広げた。その娘であるシ
ルヴィアは才能を十分に受け継ぎ、驚異的な魔力量とセンスを持っ
ている。それもそのはず、本来魔力やその才能というのは血の繋が
りに強力に依存するのである。

親から子へ魔剣が継承されていくように、親から子へと力も受け
継がれていく。親の持つ属性を子は引継ぎ、親の持つ特性をも引き
継いでいく。シャナクは世界で最も高い魔力総量を持つ魔剣使いで
あり、魔術の達人でもあった。そのシャナクの娘であるシエルシが
魔術も使えない、剣も使えないというのは妙な話であった。

「お前剣の鍛錬とかしてたんだろ？ その成果はどうしたんだよ？」
「う、うーん……。どうしてしまったんでしょか……。最近やって
なかったから、なまってしまったのでしょうか……」

「というより、お前あんまり真面目に戦ってねえだろ？」

「そ、そんな事は……」

「いや、そうに違いない。ていうかお前……。ビビってるな？」

ホクトはずいっと顔を近づけ、シエルシの肩をがっしりと掴んで
近づいてくる。逃れられない状況にシエルシはただだと冷や汗を

流した。

「お前……自分の事はどうなってもいいけど、他人を傷つける事は極端に恐れている……そうだろうか？」

母の為に、地獄と呼ばれた場所にまで単身乗り込もうとした。ホクトを救う為に逆徒の汚名を被る危険がありながらもうさ子に力を貸した。自分がどうなるのかもわからないのに帝国にその身を捧げた……。 “献身” そう呼べば聞こえは良いが、まるでそれは自分の命を安売りしているようにも見える。

「だって……。痛いのも悲しいのも辛いのも、私が我慢するだけで誰かがそれから救われるなら、それでいいじゃないですか」

「そういう問題じゃねえだろ？ よお、姫様。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレさんよ。俺の弟子になるなら、一つだけ覚えておけ」

ホクトはシエルシの肩に腕を回し、それからガリユウを召喚して見せた。黒く禍々しく、そして何よりも美しい剣。それは数多の人々の命を奪い、数え切れない物語を終わらせてきた。

「護る為には戦わないといけない。悪は倒さなきゃならない。わかるだろ？ 正義の味方は、悪党に容赦なんかしたりしねえんだ」

「でも、相手を悪だと断ずる事は……きっと出来ないのだと思います。そりゃ、UGで見たあの変態大尉くらい悪党だったらわかりませんけど……」

「あれくらい変態だったら流石に殺しても良いと俺も思うが……まあ実際食べちゃったし……」

「何か言いましたか？」

「いや、兎に角だ……。お前のその何でも許しちまう性格は良くねえ。本当は魔剣狩りの俺と一緒にいるのだからマズいんだからな」

「……………そんな……………」

「まあ、兎に角いざって時はちゃんと戦えるだけの勇気を持って。傷つけられる痛みにも立ち向かう勇気じゃねえ。誰かを傷つける痛みにも立ち向かう勇気が必要なんだ。なあシエルシ、お前が求める戦いつてのは何だ？」

「戦わずに居られればそれに越した事はないと思います！」

「どうどうと目を輝かせて宣言するシエルシ。その頭をホクトは小突き、それから両手で頭を掴んでぶんぶんと振り回した。

「あつっ！？ な、なんですか！？ 何をしているのですか、ホクトー!?」

「お前馬鹿かッ！？ 戦わなきゃいけない時もあんのー!!」

「でも、出来れば戦わないほうがいいですよね？」

「だーかーらっ！！ 話が進まねええええっ！！」

「なぜ！ あたまを！ ふるんですかっ！？」

シエルシもここぞとばかりに反撃し、ホクトの頭を掴んでみせる。

二人はそのまま暫くもみくちやになつて喧嘩していたのだが、ロゼが投入したことにより仲裁される事となつた。

結局髪の毛をめちやめちやにされ、シエルシは涙目でとぼとぼ歩いていて。そんなシエルシの背中にホクトが言った言葉　それが彼女の心の中で一つの答えとなつたのだ。

「そんなに相手を傷つけるのが嫌なら　傷つけない戦い方だけしてろ、馬鹿　！」

相手を傷つけない戦い　そんなものがあるのだろうか？　だがシエルシは知っていた。相手を傷つけずに戦う方法を。姉のシルヴィアは、“それ”を選ばなかった。それでも知っていた。シエルシは姉が投げ捨てたその本を、宝物のように抱きしめて育つたのだから。

「……………こわくない、こわくない……………。もう、恐れない　！」

意識を戻し、シエルシは後方に跳躍しながら剣を構えなおした。何度でも深呼吸を繰り返そう。落ち着いてやれば出来ないはずはない。だってそれはそう　子供の頃から。ずっとずっと。思い憧れてきた、母の姿なのだから。

放たれた矢を見切り、シエルシはサーベルでそれを切り払う。近づいてくる騎士が振り下ろす刃、それをやはりサーベルでいなし、身体を捻つてその鎧に回し蹴りを叩き込んでいた。放たれた攻撃によるダメージはほぼゼロ……………しかし騎士は交代する。何故かその身体には、剣の形をした白い楔が打ち込まれていたから。

ぼんやりと浮かぶ剣の杭の幻影に騎士は驚きを隠せない　。シエルシは何も握っていなかったはずの手を握り締め、思い切り引っ手繰る。すると剣を打ち込まれた騎士はばたりと倒れこみ、そのまま動けなくなつてしまった。深く息を着き、シエルシは目を見開く。

蒼い姫の瞳が輝き、今は一人の戦士の目にならなっていた。

“封印魔術”。母シャナクが愛用していた、“相手を傷つけず戦闘力だけを奪い去る魔術”である。シャナクはその第一人者であり、永魔剣エリシオンと肩を並べるほどその力は強力で有名だった。しかしシャナクが倒れてからは使い手が居なくなり、今となってはすっかり廃れてしまった分野であった。

それもそのはず、封印魔術は相手の動きや戦闘力を奪うだけで決して致命傷を与える事は出来ない。大型の魔物の足止めや魔剣使いを封じるくらいしか使い道はないのである。仮に封じたとしても長時間封印するには多大な魔力を消費する為、ハイリスクローリターの魔術と長年言われてきた。それをあえて選んだシャナク、そしてそれを継承した娘のシエルシ。二人の面影は重なり合い、今になって騎士たちもその正体に気づきつつあった。

動きの止まった騎士へとシエルシは猛然と走り出した。その足取りに先ほどまでの恐怖は感じられない。振り下ろされる剣からも目をそらさないのは、彼女が己の命を投げ打つ覚悟があるから。

“献身”。そして“自己犠牲”。それは人間が選り好みで選ぶ辛く、己の命を顧みないシエルシだからこそ剣の中へと飛び込み、そのしなやかな指先で騎士の甲冑へと魔術を叩き込む。

放たれた封印の剣が幻想の像を結び、騎士の屈強な鎧を貫く。痛みは無く、しかし全身から力が抜けていく。倒れこむ騎士の身体にもう一本剣を突き刺し、大地に釘付けにしてシエルシは再び走り出した。目指すは三人目。弓矢を構えた騎士である。

先ほどまでとはまるで別人のように走り出したシエルシに騎士は驚きつつも矢を放つ。近づく矢に対してシエルシは何をするでも無く、ただ魔力を放出して見せた。物理的な衝撃波となって霧散したその魔力は、元々彼女が持ち合わせる素質である。そう、世界最大級の魔力を持っていた母から受け継いだ、選ばれた人間にだけ眠る巨大な力の片鱗。

脳裏、ホクトの戦うイメージが思い浮かんだ。彼は剣を踊るよう

に纏わせ、手足のように操って見せた。戦う魔剣狩りの背中を見てきたからこそ、シエルシには出来る事がある。その全身から、大地から、出現させる幻影は白い剣。魔剣狩りを真似て編み出した、彼女なりの答え。それを一斉に騎士へと解き放つ。

剣の嵐が全身に突き刺さり、しかしやはりなんの傷も負う事はない。騎士はただばかりとしたまま全身の力を失って倒れこんだ。シエルシはそれを最後まで見届け、漸く息を着く。緊張の余り全身からはびっしょりと汗をかき、息は完全に上がっていた。それでも止まらず、再び走り出す。

「ごめんなさい！ その魔法はもう少ししたら直ぐに消えますからっ！！ 本当にごめんなさいっ！！」

あれだけの事をしておいて、シエルシはぺこぺこ頭を下げながら申し訳なさそうに走り去っていく。それを見届け、騎士たちは大地の上に転がったまま呆然としていた。

戦場の中、命を気にもかけずに駆け抜けていく黒衣の姫。前に立ちふさがる騎士たち前に、もう足を止める事はなかった。母からもらった力で、彼から教わった技で、今度は自分の足で、世界を変えてみせる。全身に白い剣を纏い、蒼眼の姫は戦場の中で踊り続ける。愚者の、行軍を。

愚者の行軍(4)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

目立ってる

シエルシ「ここにこ、ここにこ」

うさ子「あれ？ シエルシちゃんどしたの？ いつもホクト君に泣かされてるのに、今日はここにこしてるの」

シエルシ「今日初めて私、物語的にも活躍したんですよ！！ すごくないですか!？」

うさ子「……うさ、出番がないの……はづつ……っ」

シエルシ「大丈夫ですよ！ 今は出番がなくても、そのうち出番が周ってきますから!」

うさ子「はづつ……そうかなあ……」

シエルシ「そうですよ!」

昴「ちょっと出番があったくらいであの代わり様……まあ、無邪気でいいと思うけど」

ホクト「……なぐんかああいうの見てるとイジメたくなるよなあ……」

昴「……ホクト、ドSだからね……。そして多分シエルシはドMだから」

シエルシ「あ、ホクト！ 見ましたか、私の活躍！！ 私、最近ちゃんと本編でもメインヒロインしてるんですよーっ！！」

ホクト「ふんっ！ー！」

シエルシ「はうぐっ！？ な、なんで叩くんですかあ……。！ ひっく……。酷いです……。酷いですーっ！ー！」

ホクト「ホントだ、なんか落ち着く」

昴「……。まあ、別にいいけどね、なんでも……」

シエルシ「せっかく、出番が……。えぐ……。出来たのにい……。っ！ なんて劇場スペースで苛められなきゃいけないんですかーっ！ー！」

ホクト「うーん……。なんでだろうな……」

昴「まあ、目立ったヒロインは死亡フラグだけどね」

シエルシ「え？」

愚者の行軍（5）

「こういふ出会い方でなければ、気が合っただらうにな」

残念そうに呟くゲオルクの正面、貴魔剣アルテツアで武装したイスルギの姿がある。二人はお互いの王を護る為に魔剣を構築し、戦場の中でこうして相対する事となった。

お互いに向かう先が同じである以上避けて通る事は出来ないだらう。そして刃を交える事も避ける事は出来ない。白き甲冑の騎士は盾を降ろし、何故か敵であるはずのゲオルクへと視線を向ける。二人の間にあるもの、それは不思議と敵意とは異なる感情だった。

「出来れば、貴様とはこうして戦場で出会いたくはなかったものだが……ゲオルク」

「それは俺も同じだ。同じく王を護り、同じ立場にある俺とお前……。お互い、国の古き因習に囚われた哀れな道化だ」

「………………。貴様には、私を殴る権利がある。私はシエルシを守り通す事が出来なかった。シエルシは結局、ハロルドの所に連れて行かれてしまった。彼女を護る事……それが私の役割だったというのに」

「責めるつもりはないさ。例え俺でも同じ事を選択しただらうからな……。それに、彼女は　いや、お喋りはこのくらいにしておくか」

ゲオルクが墜魔剣バサラを構え、イスルギも槍と盾を手に頷いた。課目な戦士の僅かばかりのやりとり……その中に込め切れなかった

思いは、すべて刃に乗せるのみ。

二人の団長が走り出し、互いの武器をぶつけ合う。その背後、ミュレイとシルヴィアは壮絶な死闘を続けていた。炎の魔術師が放つ爆炎と騎士の王が放つ斬撃、互いに一步も引かぬ世界最強クラスの魔剣使いの戦い……。決着はつかず、互いに後は精神力だけの戦いとなりつつあった。

そう、力は完全に拮抗している。しかし僅かにミュレイの方が魔力の消耗が激しい。一方シルヴィアはあれだけ贅沢に魔力を放出し、攻防を動かしているというのにいつまでもスタミナを切らす気配が無い。元々動く事には慣れていないミュレイはシルヴィアの夕フさに一步リードを奪われていた。

「どうしたミュレイ！ 疲れが見えるぞッ!？」

「く……ッ!？ この、体力馬鹿が……!!」

魔法の炎を受けながらも障壁を張り、強引に突っ込んでくるシルヴィア。その潔い突撃からはこれでケリをつけるといふ強い意志と迫力が感じられた。ミュレイは汗を迸らせながら大魔法を詠唱するが、放たれた炎の龍をも掻い潜りシルヴィアは大剣を振り上げる。

「終わりだ、ミュレイ　ッ!!」

振り下ろされる刃。直接攻撃を防ぐ手段、ミュレイは魔力障壁しか持っていない。だが強力な威力にさらに魔力を上乗せしたこの物理攻撃は明らかに許容量を超えてしまっている。防御しきれない、そう判断し背筋に死の予感が走った……。その時である。炎の姫の背後から飛び出し、白い刃で大剣を受ける騎士の姿があった。白い甲冑。一度は砕けた仮面。それらは調整を加えられ、メリーベルの手で再び生まれ変わった。紅い袴を柵引かせ、騎士は

シルヴィアを蹴り飛ばす。距離を置いたシルヴィアは大剣を肩に乗せ、それから眉を潜めた。

『遅くなつてすまない、ミュレイ……。怪我はないか？』

「……………昂……………！？ お主、もう怪我は良いのか！？」

『メリーベルの腕は本物だよ。もう痛くも何ともない……。心配をかけてごめんね』

仮面をつけた騎士は自らの主へと手を差し伸べ、そつと立ち上がるのを手助けした。それからミュレイに顔を寄せ、怪我がない事を確認する。白く輝く魔剣、ユウガを手に前へ。鞘から解き放たれた美しき氷魔の剣 反りに光を弾き、白騎士は身構える。

『シルヴィア王……。私が相手になろう』

「Sランク魔剣、ユウガか……。貴様……。ミラ・ヨシノ……。ではないらしいな」

『………………。今の私の前でその名前を出すのは止める。私はミラ・ヨシノではない。白騎士 北条昂だ』

「ほお、貴様が噂の白騎士……。帝国の犬が何故ミュレイの味方をする？」

『私が仕えるべき主にして恩人……。そして護りたい人だからだ。王よ、悪いが今の私は機嫌が悪い……。死にたくなければさつさと失せろ』

昂は全身から魔力を一気に解放し、ユウガを片手に突っ込んでいく。シルヴィアもそれに応じて剣を振るったのだが、切り払ったのは昂の影だけである。一瞬の時間の停止と再生の間にある“認識のズレ”を猛スピードで移動する昂にシルヴィアは追いつく事が出来なかった。

繰り出される鞘の突攻撃。それが脇腹に直撃し、反撃で繰り出す大剣よりも早くユウガが刃を返し煌いた。肩から袈裟に切り込まれたシルヴィアだったが、直前に身を引いて直撃を避ける。後方に跳躍しつつ、強引に身体を捻り繰り出した横薙ぎの一撃。それを昂は鞘で受け止める。破魔の力を持つユウガの刃は鎧も障壁も関係なく、相手に防御不能の攻撃を繰り出す。そしてその鞘はやはり全ての魔力動作に関係なく、物理的に攻撃を防ぐ。

巨大な剣であるかと、ユウガの鞘ならば受け止める事は容易である。相性の悪さを咄嗟に感じ取ったシルヴィアは後退し、肩から流れる血を忌々しく睨んだ。白騎士は刀を鞘に収め、居合いの構えでそれに応じる。

「大人しく降伏しろ、王よ。寄らば斬る！」

「……成る程、流石に相性が悪い、か……。だが生憎ここで退くわけにも行かないのでな。私は王。決して敗北も撤退も許されぬ」

流れる血もそのままに、シルヴィアは再び剣を構えてみせる。昂もそれに応じ、前に出ようとしたその時である。シルヴィアの背後、突然浮かび上がった魔法陣からネーヴェエが姿を現し、シルヴィアの肩を掴んだ。

「姉上、これ以上は危険です。それにリブレス砦が魔剣狩りによって落とされたという情報が入っています」

「……………チツ。偉そうな事を言っておいてこの様か、帝国め……。だがネーヴェエ、悪いがここで退くわけには行かぬ。因縁の対決なのだぞ」

「戦いならば命があれば何度でも出来ますわ。それより、これ以上兵たちに負担をかけるわけには……。増援が見込めない以上、このまま一気にラクヨウになだれ込むのは不可能です」

ネーヴェエの言葉を加味し、シルヴィアは改めて考え直す。それから剣を収め、ミュレイと昴を交互に見やった。

「悪いがこの勝負、預ける。決着は我が居城にてつけるとしよう。追って来るがいい、ミュレイ！ ふははははっ！！」

「姉上、敵を挑発してどうするんですか……。それでは、これにて失礼します」

ネーヴェエが魔術を発動し、二人が同時に姿を消す。それを見届け昴も剣を収める。振り返った昴は仮面を外し、慌ててミュレイへと駆け寄った。ミュレイは疲れた様子で土の上に座り込み、胡坐をかいていた。

「ミュレイ！ 大丈夫だった……！？」

「うむ……。いや、正直言つと結構やばかったが……。それより昴お主の方こそ大丈夫なのか？」

「うん、眼はご覧の通り……。かなり精密な義眼を移植してもらったから。それよりミュレイ、前線に出るなんてどういっつもりなの？ 危ないでしょ、もう！」

「ははは、すまぬすまぬ……。やれやれ、全く……。お主には敵わぬ」
ミュレイを助け起し、昴は優しく微笑んだ。ミュレイはそんな昴の頭をなでなでするのだが、周囲ではまだ戦いが続いており撤退するザルヴァトーレ軍をククラカン軍が追撃している所であった。

「今の話から察するにホクトの方はうまくやったようじゃの。やれやれ……。昴、一度引くぞ。皆の者、深追いはするな！ 逃げるといふのならば放っておけ！！」

指示を飛ばすミュレイとは離れたザルヴァトーレ軍前線の最後尾本陣、シルヴィアとネーヴェは撤退し戻ってきた。その二人が転送されてくると本陣へシエルシが駆け込むタイミングは完全に同時であり、三人は互いの顔を見合わせて驚愕した。

「あら、シエルシ……？」

「愚妹！？ 貴様、こんな所で何をしている！！」

「姉上……！ 大事な……！ 大事な話があつて、来ましたッ！！」

「馬鹿が、今更どの面下げて戻ってきた！？ 貴様のような愚妹と話すことは何もないっ！！」

「と、シルヴィア王は仰っておられるけれど、今は兎に角ルーンリウムまで戻りましょう？」

「う、うん……っ」

「はなせネーヴェ！ この軟弱者を今ここで叩き斬ってやる！！」

「はいはい、撤退しましょうね〜お姉様」

ザルヴァトーレ軍が撤退していくのを昴とミュレイは荒野に立って見送っていた。とりあえず一つの戦いが終わり、しかしまだ戦争は終わらない。先の長い戦のシナリオにミュレイは頭が痛くなる思っていた。

愚者の行軍（5）

ザルヴァトーレとククラカンの戦い……。その最初の衝突はククラカン側の優位で幕を閉じた。

ククラカンの姫、ミュレイ・ヨシノ率いるククラカン、ギルド連合の同盟軍は戦力的にはザルヴァトーレに大きく劣っていた物の、ギルドの魔剣使いリフル、ブラッド、そしてもう一人のSランク魔剣使いである昴の参入により、状況は予想以上にククラカン側へと傾く。

対集団戦闘において絶対的な戦闘力を誇るミュレイをシルヴィアが仕留めそこなった事が最大の要因となったのだが、そのほかにも帝国軍がザルヴァトーレを援護出来なかったという要因が絡む。帝国が駐留していたリブレス砦は魔剣狩り、ホクトたちによる襲撃で機能停止。帝国軍戦力運用の要であった空母が撃墜された事により帝国の機動力は一気に激減する。

転送装置を奪われた帝国は、一旦ザルヴァトーレ王都であるルーリウムへと撤退……。それに伴い、前線は大きくその旗色を変え

る。ククラカン側はかつてザルヴァトーレ軍が陣取っていた領土に本陣を置き、国境線を越えて一步身を乗り出した布陣を敷く。出鼻をくじかれたザルヴァトーレ軍はククラカンの進行を阻止するため中央ルートに戦力を集中させ、リブレス砦は放置。帝国軍は増援を要請し、インフェル・ノアより後続の部隊が次々と戦場に投入された。

これを受けククラカンはリブレス砦と前線本陣の二点を重点的に防衛。その間に和平交渉を行うも、それは決裂する。帝国側の空母と自立兵器が次々に戦線に投入され、布陣こそ変わったもののはやはり状況は大差なく、ククラカン側にとっては厳しい状況が続いていた。

「さて、敵の直接攻撃を防ぐ事が出来たのは良いが……こつちも戦況が拮抗してしまつてはな」

ザルヴァトーレより奪取したリブレス砦の会議室、ミュレイたちは再び顔をそろえていた。今日までそれぞれが各地で応戦を行っていたが、ザルヴァトーレ側に帝国の増援がそろいつつある今、打開策を講じなければならぬ時期がやってきたのである。

円卓を囲み、ミュレイは地図を睨んで腕を組む。やはり戦力差は圧倒的で、初動こそ上手く行ったもののそれで回避出来たのは圧倒的敗北のみ……。このまま戦いが続けばジリ貧となり、結局は押し切られてしまうだろう。何しろ相手には帝国という巨大なパトロンがあり、ほぼ無尽蔵に増援が送られてくるのだから。

「人材も物資も兵器も不足している以上、長丁場を設定すると負ける事になる。こちらの手は一点突破による戦争の早期終結くらいかの……」

「魔剣使い一人一人の戦闘力なら、こつちの方が上みたいね。まあ

剣誓隊がまだ本格的に投入されていないってだけなのかもしれないけど……」

ブラッドの言うとおり、現在の状況ではブラッド、リフル、ホクト、昴、ミュレイ、ゲオルクと魔剣使いたちの質ではこちらの方が上手である。だがそれも剣誓隊が本格投入されてくるまでの間のみの事である。

「ところでござる君、あの馬鹿姫の行方はまだわからねえのか？」

「拙者たち忍部隊も探しているのでござるが、シエルシ殿の行方は判らないままでござるよ……」

そして結局シエルシは戻ってきていない。シエルシがいなくなった事に気づいたのも先日の戦いが終わった後であり、その時はホクトも暫く責を失っていた事もあり直ぐに搜索に乗り出す事が出来なかった。あの様子ではもしかしたら敵本陣に一人で乗り込んだのかもしれないという最悪の可能性も思い浮かんだものの、出来ればそんな事は想定したくもない。

「あの馬鹿……まさか本気でシルヴィア王に直訴しに行ったんじゃないだろうな……」

「……………シエルシの事も気になる。俺たちも早めに動いたほうがいい」

ゲオルクの言葉に誰もが頷いた。ミュレイは地図を広げ、敵軍の拠点であるルーンリウム周辺をペンで丸く括った。

「さて、ここからが正念場じゃな。ザルヴァトーレの本拠地、王都

ルーンリウムは巨大な城壁に護られた街じゃ。すでにこの時点で攻めづらいのは言うまでもないのう。仮に正攻法でルーンリウムを落とすととなると、かなりの戦力と時間が必要になるじゃろう」

しかしそうなればルーンリウム攻略により双方が大きく疲弊してしまうだけではなく、ルーンリウム城下町の住民を戦に大きく巻き込む事になる。両国が疲れ果ててしまえば、そこで得をするのは上で構える帝国である。両国が力を失えばその支配は容易になり、帝国の思う壺というものだろう。

「シルヴィアもそれはわかっているはずなのじゃが……。性格的に折れるのは無理そうじゃな……」

「しょうがねえ、俺がルーンリウムを攻略しようか……？ 正面突破でも行けると思うが」

「そう焦るな。なんじゃお主、そんなにシエルシが心配なのか？」

「そうじゃねえが、このままじゃどっちもボロボロになっちまう。早いとこケリつけてやらねえとな」

まるでどうでも良さそうに顔色一つ変えずに冷静に語るホクトであったが、彼がシエルシを心配して焦っているのは明白である。ミユレイが溜息を漏らしホクトを見つめる……。と、部屋に入ってきたロゼが両手に抱えた資料を一気に机の上に降ろし、蒼い表情で言った。

「みんな注目……。とりあえず色々嫌な事が判ったから発表するよ……」

「なんじゃ、嫌な事って……」

「とりあえず追々……。帝国軍がエル・ギルス以下の界層から撤退してるのもう知ってるよね？ プリミドールも戦争中だったっていうのに帝国側の戦力は本投入されてない……。そうだよな？」

ミュレイが頷くと、ロゼは溜息をついて説明を開始した。それから聞かされたのは帝国の最悪な制圧作戦であった……。

リプレス砦のデータベースからロゼが入手した情報に寄ると、帝国側は大規模な“浄化作戦”というものを予定しており、その前段階として部隊の撤退を行っている。その浄化作戦の内容に関しては詳しい情報がなかったのだが、トランスポートの転送記録や通信記録などを洗ったところ、その大まかな全様が見えてきたのである。

「僕たちはどうやら、帝国の浄化作戦とルーンリウム攻略……。同時にやらなくちゃいけないらしいよ」

「して、その浄化作戦とはどのようなものでござるか？」

「帝国の浄化作戦っていうのは……。まあ早い話が界層ごと破壊する作戦っていうか……。界層はそれぞれがシャフトに接続されている巨大な板のツギハギみたいなものだっっていうのは皆も知ってるよね？」

世界には巨大なシャフトと呼ばれる柱が存在し、そこを中心に周囲にプレート……。界層が存在している。界層と呼ばれる大地はすべてシャフトにくっついていてだけの板であり、それらは実は非常に絶妙なバランスで維持されているのである。

ロクエンティアと呼ばれる世界全体の動力は支柱であるシャフトからプレートへと流れ込んでおり、その流れ込むプレートにより重

力制御、大気、大地の制御が行われている。つまり支柱からの動力がそのまま界層のライフラインとなっているのである。

「……なんか、そこまで聞いたら大体嫌な予感が当たりそうな気がしてきたんだけど」

「まあ……そういう事だね。帝国の浄化作戦。それは、プレートを支柱から切り離し、落下させて破壊するっていう……そういう作戦の事なんだよね」

苦笑交じりにそう告げるロゼ。会議室全体に重苦しい沈黙が流れ、ロゼの苦笑だけがやけに浮いて響いていた。

「そんな下らない戯言を聞かせる為に、お前は国を裏切ったのか？」

そんな一蹴と共にシエルシの願いはあっさりと砕かれてしまった。シルヴィアはシエルシを地下牢に投獄するように命じ、それから一度もシエルシの言葉に耳を傾けようとはしなかった。冷たく暗い牢屋の中、軋むベッドの上に座り込み、少女は完全に途方にくれていた。

冷静に考えればこうなる事は明らかだったのだ。あのシルヴィア王が、まさか自分の話をまともに取り合ってくれるなどと考えてはいなかった。でも、何かをしなければ変えられないと。そう思ったから。やっと踏み出した大きな一步の先、そこにあったのは落とし穴だった……そんな気分である。手を手を組み、少女は深く息をついた。まさか自分が生まれ育った城の地下牢に放り込まれようと

は 数奇な運命である。

牢屋に連れて行かれる間、シエルシは何度も叫んだ。戦いを止めて欲しいと。誰もそんな事は望んでいないのだと。しかしシルヴィアは一度も振り返る事もなければ返事をする事もなかった。シエルシは悔しさの余りに叫んだ。泣きながら手を伸ばした。しかし……現実は無情である。

「戦争を止める事……そんなに……そんなに、無謀だったのかな……」

何故。何故、争うのだろうか？ 人はこの地獄のような世界に生まれ、まるで望むように、弄ばれるように、戦火の中へと身を投げ出していく。

生まれ持つて決まったルールが人の人生を左右し、自由を奪い、格差を生み、差別を生み、そこで人々は当たり前のような上下関係の中で喘ぎ苦しんでいる。血が流れ、命が踏み潰され、尊厳が奪われ、それで当然の世界。まるで連なる煉獄の世である。

そつと、顔を上げる。格子の着いた窓からは僅かに光が入り込んでいる。高く、高く。まるで自由を遠ざけるようなその光へと手を伸ばした。何故、どうして……。悲しみの連鎖は止まらないのだろうか……？

自由を求めて戦った母。平和を作ろうと、世界のルールに挑んだ女王……。傷つけられ、虐げられた歴史。親を失いシルヴィアは強くなるしかなかった。だからこそ、あの性格に落ち着いたのである。シエルシは姉が苦しんできた事を良く知っている。甘やかされて育ったシエルシの見えないところで、彼女が苦しんでいた事も……。ヴァン・ノーレツジは帝国に逆らい、魔剣使いを倒して生きた。

漸くめぐり合う事が出来た愛する人、ミラ・ヨシノは戦いの中で死に、復讐に生きる怪物を生み出した。ギルドと帝国の抗争はお互いに沢山の血を流し、悲劇を次々に連鎖させていく。あたりまえのよ

うに起こる悲しい出来事……。そして自分もまた、その渦中に居る。堪えなければならぬ涙をぐつと押し殺し、シエルシは拳を握り締めた。眼を閉じれば鮮烈に思い出す事が出来る。ホクトが。彼が。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレの世界に現れた時。何にも囚われず。どこまでも自由で。強く、そして世界のルールを壊してしまうようなそんな力にとて惹かれた。あんな風になりたかった。あんな風に、いつかはなれたらいいと思っていた。しかし現実はどうだ？ 何を変えられた？ 何を護れた？ 争いは一つとして止まらず、悲しみは一つとして晴れず、恨みと呪いの連鎖が血を流し続けている。余りにも巨大な無力の二文字の前、少女はただ膝を着くことしかできないのだ。

「シエルシ、大丈夫ですか？」

声がして、シエルシは振り返った。そこには黒髪を揺らして歩み寄る姉ネーヴェの姿があった。ネーヴェは食事を格子の下からシエルシに渡すと、冷たい格子の中へと手を差し伸べた。シエルシはたまたまその手にすがり、泣き出しそうな顔で姉を見上げた。

「ごめんなさいね、シエルシ……。シルヴィア王にも悪気があるわけじゃないのよ。ただ貴方が心配だから、檻に閉じ込めておきたかっただけなのだと思うから」

「……。ネーヴェ姉様……。戦いは……。戦いはどうしても、止められないのでしょうか……？」

「可愛そうなシエルシ……。貴方はお母様に良く似ていますね……。優しく慈愛に満ちたその瞳も、儂く折れてしまいそうなその身体も……。勇敢にも世界の法則に立ち向かう、その勇気も……」

格子越しにシエルシを抱きしめ、ネーヴェエは微笑んだ。シエルシは目をうるうるさせながら唇を噛み締めている。姉妹の抱擁は僅かに続き、ネーヴェエは首を横に振りながら下がった。

「ごめんなさい。貴方をここから出してあげる事は出来ないの……。戦いは、きつと直ぐに終わるわ……。そうしたら貴方が無事に帝国に戻るように、なんとか手を捜してみるから……」

「ネーヴェエ姉様……」

「……。もう少しだけ、いい子にしている……。私たちの、可愛いシエルシ……」

ネーヴェエは名残惜しそうに身を離し、地下牢から出て行く。シエルシはその影を見送り、渡された食事に目を向けた。暖かいスープを一口飲むと、堪え切れなかった涙が寂しさと一緒にどっと溢れてきた。何も出来なかった自分が悔しかった。ただ助けられてばかりの自分が情けなかった。

ふと、黒い魔剣を扱う一人の男の背中が思い浮かんだ。何故だかすごく、とても……。今は彼に会いたかった。ごめんなさいと謝りたかった。何も出来ない自分を叱って欲しかった。

「……。何、やってるんでしょうね……。私は……」

涙を拭い、シエルシは頂垂れた。光は遠く、翼を持たない姫には余りにも眩し過ぎた。大きな戦いの運命が動き、その中で彼女は無力だった。そしてその無力さがまた新たな悲劇を生み出し血を流すのだという事に、彼女はまだ気づく事が出来ないのだ。

愚者の行軍(5)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

はむはむ！

うさ子「はむはむはむっ」

ロゼ「あれ？ うさ子、何食べてるの？」

うさ子「はむはむ……。んっとな、チョコなのーっ！！」

ロゼ「うっ！？ これは……某所でプレゼントされた力カオ99・9%チョコレート……！？」

うさ子「はむはむ……」

ロゼ「な、泣きながらチョコを食べている……だと……！？」

うさ子「だってえ、誰もチョコくれなかったのおおおおっ！！
わああああんっ！！ ひどいの、ひどいのーっ！！ ホクト君
もシエルシちゃんも、全然くれなかったのーっ！！ わーんわーん
っ！……！！」

ロゼ「だからって捨てられてたチョコ拾って食べなくても……」

うさ子「最近出番もないし……はむはむ……なんだかとっても寂しいの……はむはむ……っ」

シエルシ「うさ子、どうしたんですか？」

うさ子「シエルシちゃん……」

シエルシ「うさ子、遅くなりましたが約束のチョコレートですよ」

うさ子「なん……だと……」

シエルシ「いやあ、作るのにまさかこんなに時間がかかるとは思い
ませんでした チョコレート作りなんて初めてだったけど多分美
味しいと思うので是非味わってくださいね」

うさ子「ありがとつなのーっ！！ シエルシちゃん、好きなのっ！
はむぐっ」

ロゼ「うわッ！？ 食べちゃったよ……」

うさ子「………………。ぴええええええええええええんっ！！
まずいのおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

ロゼ「(超ストレートだ……)」

シエルシ「なななっ！？ そんなはずはっ！？」

うさ子「まずすぎて死んじゃいそ……おふっ！？」

ロゼ「わーっ！？ 吐くなー！！ 吐くなーっ！！」

シエルシ「おかしいなあ……？ ちゃんと美味しくなるように色々
いれてみたのに……」

ロゼ「チヨコは普通色々入れないんだよ!？」

うさ子「だ、だめなの……。もう、無理……」

ロゼ「ひっ!？」

シエルシ「きゃあああああああああああああつ!？」

うさ子「

……」

ロゼ「うわあああああああああああ!!!」

シエルシ「え、ええええええええ!？ えええええええええええええええええええつ!？」

螺旋ノ刻（1）

「世の中にはどうしようもない、変えられない悲劇という物も確かに存在するのです。大切なのはその悲劇に飲み込まれ、他の大切な事までも見失ってしまった事……。貴方なら判るでしょう、ヴァン？ 力はただ力……。貴方の持つその闇と死の力でさえ、それはきつと何かを護る力になるのだから……」

そう語り、少年だったヴァンに魔剣の使い方を教えた人は笑っていた。それはヴァン・ノーレッジの、他人の記憶……。ホクトにとってはどうでもいい記憶だ。しかしそれでも忘れる事は出来ない。きつとこの身体の中に、心の中に、刻まれている限り……。忘れることなど出来ないのだ。

紫煙を吐き出し、ホクトは丘の上から遠くルーンリウムの城壁を眺めていた。傍にはブラッド、アクテイ、ゲオルク、ウサクの姿がある。ルーンリウム攻略隊に選抜された彼らはいよいよ決戦の前にホクトを先頭に敵陣の様子を伺っていたのである。

「しかし、完全に戦力を分断されちまったな……。ミュレイと昂だけで向こうつても無理な話だから、まあこれでよかったんだろうが」

「ま、こっちはこっちで何とかするしかないわねえ……。期待してるわよ、ホクト」

ブラッドが背後から肩を叩き擦り寄ってくるのを見てホクトは無言で煙草をぼろりと口から落とした。青ざめた表情を浮かべるホクトの隣、ゲオルクは双眼鏡を片手に慎重に様子を伺っている。

「やはり、攻略は一筋縄ではいかないらしいな……。だが守りが堅いのは城の外までで、中に入ってしまえば何とか成るだろう」

「判るのか？」

「元々ルーンリウム城は貴族か王族しか立ち入る事の出来ない聖域だ。兵の配備もかなりずさんだろうな。まあ、奴さんの騎士団長は出てくるだろうが……」

「馬鹿に詳しいな、おっさん……。？ まるで見えてきた事があるみたいな言い方だな」

そもそも、今回の攻略作戦はゲオルクの案を採用している部分が大い。これといって攻め口を見つけられずに居たメンバーに、城内まで通じる隠し通路の存在を暴露したのが彼なのである。

ホクトたちルーンリウム城攻略メンバーはルーンリウムの東に存在する坑道から隠し通路へと入り、そこから場内に潜入。一気にシルヴィア王を打倒し、城を占領するのが仕事である。尤もその隠し通路の存在は未だかつて誰も知らなかった事であり、情報収集能力に長けた忍部隊でも調べられなかった情報である。実際に行ってみるまでは半信半疑だと考えていたのだが、ゲオルクのやたらと詳しい様子からホクトの考えも変わりつつあった。

「おっさんか……。うーむ、まだこう見えても三十一歳なんだがな……」

「えっ！？ ゲオルク、三十一だったんだ……。すっごくふけて見えるけど……」

「アクティ殿、それは失礼でござるよ……。せめて大人びているとか、落ち着いてるとかいった方がいいでござる……」

「……。まあ、あんまり気にしないでくれ。ふけてるのは自覚があるんだ」

頭をわしわしと掻きながらゲオルクは溜息を漏らした。アクティとウサク、子供組が苦笑を浮かべる中ホクトはゲオルクから奪った双眼鏡で城を覗き込む。当たり前だがシエルシの姿が見つかるはずも無く、そして城周辺の警備は厳しい。

「まあおっさんがふけてるかどうかは兎も角、その情報まで枯れてんじゃねえだろうな？」

「連絡通路がまだ防がれていなければ、の話だ。俺がそこを通ったのはもう十年以上前の話だから……。確証はない」

「ねえウサク、ゲオルクって何なの？ 単騎特攻でもしたことがあるの？」

「いや……。ゲオルク殿の過去なんて今まで考えた事もなかったでござるよ……」

子供二人が興味津々に見つめてくる視線を背中に感じながらゲオルクは腕を組み、冷や汗を流していた。ブラッドとホクトはその様子に苦笑し、それから一気に丘を下っていく。

「さーて、ほんじゃま通路が閉ざされてない事を祈りつつ、ついでにミュレイたちの無事も祈ってやろうぜ。作戦開始だ！ おら、行くぜー！」

ホクトを先頭に一行が移動を開始した頃。界層の彼方、空に浮かぶ“太陽”。その内部に立つ昴たちの姿があった。

この世界に存在する太陽と月、その二つは永久機関によって動き続ける巨大な人工衛星である。虚空の海の中を漂い続け、定期的に光とエネルギーを世界中に供給しているのだ。

そしてその空に浮かぶ太陽。通称、ホルスジェネレータと呼ばれる場所に昴たちは足を踏み入れていた。それも全ては帝国のプレートパージ作戦を阻止する為である。

「てか、ここ……室温高くない？」

愚痴りながらロゼはシャツの胸元を緩める。ホルスジェネレータ内部は外部の超高熱から高精度の断熱材と魔力障壁で護られているのだが、それでも本来人間が長居出来るような温度の世界ではない。こちらの攻略メンバーは昴、ミュレイ、ロゼ、そしてリフルの四人である。

古代遺跡によく使われている特殊な機械材質により作られた迷宮にもいた要塞、それが太陽の実態である。無数に張り巡らされた動力パイプとあちこちから吹き出る高温の蒸気、紅いライトで染まった熱の世界……。流石にこれは辛いのか、リフルもミュレイは茹だる様な表情を浮かべている。極め付きは昴で、全身に鎧をつけて仮面までつけているので暑くて仕方が無いのか、顎からぼたぼたと汗を垂らし続けていた。

「……暑くないのか、昴？」

「……………暑い」

「じゃあそれ外せばいいじゃん……………」

『いや、あえてこのまま行かせてくれ……。多分、仮面を外したら
気持ちが悪くてへこたれそうだ……。』

「あ、そうなの……」

呆れたように呟くロゼ。しかし一番堪え性がないのはミュレイで、
殆ど胸元を完全にはだけさせた状態でセンスで風を仰ぎ入っていた。

「あーもう、あづい……っ！ なんじゃこの気温は！？ このまま
じゃリアルに死んでまうわっ！！」

「水分補給だけは気をつけた方がいいな……。これから行って、帰
る事も考えるとペース配分もキツそうだ」

リフルは全員に水筒を配るのだが、ミュレイはその場でほぼ全部
飲み干してしまう。余りにも子供染みだその行動に誰もが啞然とし
ていたが、顰蹙な視線にミュレイは堂々と頷いて見せた。

「わらわは炎魔の姫……。！ その気になれば熱など大したことはな
いわー！」

「うっそだ今暑いって言ってたじゃん！？」

『心頭滅却すれば、火もまた涼し……。』というわけにはいかないか…
…』

四人はそれでも前に進むしかない。プレートの切り離し作業とは、
この世界のシャフトおよびプレートの管理を行っている第三階層ヨ
ツン Heim が中枢、インフェル・ノアのマザーコンピューターであ

る“ミレニアム”によって完遂される。よってそれを阻止する方法はミレニアムに直接乗り込み、操作を行うしかないのだが……。ミレニアムどころかヨツンヘイムに上がることすら困難なこの状況、当然そんな悠長な事が出来るはずもない。

よって打開策として彼女達を選んだのがこのホルスジエネレータ奥に存在するミレニアムと同等の機能を持つ管理システム、“スパイラル”である。元々プレートと管理は“ミレニアム”、“スパイラル”、“デステイニー”と呼ばれる三つのシステムによって行われており、特に第四界層以下の界層の管理はスパイラルとデステイニーの管轄なのである。

つまり帝国側がプレートを破壊する為にはミレニアムからデステイニー或いはスパイラルへと接続、そこを経由してコントロールを行わねばならない。故にミレニアムへと直接乗り込んでそれを阻止するよりも、スパイラルへとアクセスしてミレニアムとの接続を解除するのが良作なのである。

「しかし、この世界は本当に何でもかんでもわけのわからない機械をアテにしてるんだね……」

『界層の管理もそうだが、気象と魔素の管理までホルスジエネレータが行っているとはな……』

「上位システムであるミレニアムを制御している帝国がこの世界の覇者だっていうのも頷けるよ。それにしても、最初からこういう手に出てこなかっただけでもしかしてハロルドって甘いヤツなのかな」

「ロゼ、そんな次々にプレートを破壊したら困るのは帝国ですよ……」

「お主ら結構余裕あるな!? わらわなんか今直ぐにでも死ぬるぞ

っ!？」

汗だくで叫ぶミュレイ。そのミュレイが途中で倒れてしまつては大問題なのである。そもそも、このホルスジエネレータは本来簡単に足を踏み入れることの出来ない聖域なのだ。当然だがここを管理するという事は四界層以下の界層全てを管理するという事に直結する。この太陽の力を得た瞬間、その人物は界層の神となるのだ。

故にこの場所へは足を踏み入れる事も、そしてスパイラルシステムへも干渉する事は硬く禁じられ、そしてそれは強固なセキュリティによつて護られてきた。上位システムの管理者であるハオルドでさえ、スパイラルを完全に制御する事は出来ないのである。

「それにしても、伝承は本当だつたんだね。太陽の姫と月の姫……。ククラカンとザルヴァトーレの姫は、それぞれ太陽……。ホルスジエネレータと、それから月……。ディアナドライバの管理者だつたなんて」

それこそこの二つの国が互いに均衡を護り続け、そしてプリミordialという世界に二つの王族が存在する理由なのである。ミュレイたちヨシノの一族は太陽……。ホルスジエネレータを管理する役割と力を持つ管理者であり、同じくシルヴィアたちルナリアの一族は月……。ディアナドライバを管理する一族なのである。

二つの王族はこの世界が産み落とされた時より長らく太陽と月……。人工衛星を管理し続けてきた。かつての時代その二つの王族は一つの国を共に統治していたのだが、やがてその均衡は破られ、国は二つに分断されたと言われている。

このホルスジエネレータを管理する事が出来るのは、現状ミュレイとその母ミザロだけである。帝国側もミレニラムの力を借りずしてはこの太陽に干渉する事は出来ない。ラクヨウ城からここまで直結する転送装置を持っていたのも、この封印された人工衛星に立ち

入る事が出来たのも全てはミュレイのお陰なのである。そしてミュレイだけが、帝国の浄化作戦を阻止する力を持っているのだ。

「まあ、ここに来るのは大分久しぶりじゃからのう……。生まれたばかりの頃、一度母上につれてきてもらっただけじゃ」

『さっき入り口のところで認証出来たんだから、ミュレイはやっぱりククラカンの姫なんだな……』

「なんじゃ、わらわが普段は姫っぽくないと言いたいのか？」

『そ、そうじゃないけど……。さあ、とりあえず今は早く先に進もう。ミュレイが倒れてしまわないうちにね……。それで、スパイラルはどの辺りにあるんだ？』

「うーむ、全く判らんが……。一応どこかの通路に全体の見取り図があったはずじゃ。とりあえずはそれを探すでしょう」

昴たちも先を急ぎ、移動を開始する。それぞれの場所でのそれぞれの戦い……。世界を護り、変える為の第一歩が踏み出されようとしていた。

螺旋ノ刻（1）

「戦争の中止……。恒久の平和、か……」

静まり返るルーンリウム城内、シルヴィアは玉座に一人座り目を閉じていた。思い起こすのは妹の悲痛な叫びである。思えば妹は……シエルシはいつも泣いてばかりだった。母親であるシャナクが連れて行かれた時も、自分がハロルドの妻にならねばならないのだと言われた時も……。泣きじゃくり、お姉様、お姉様と泣いていた。そんなシエルシの顔を見ているのが辛くて目をそらし、背を向けたのはほかならぬ自分なのだ。シルヴィアは理解している。

そうだ、最初から自分も逃げていた。きっと他にも道はあったのだろう。だがこれこそが唯一つの生きる道なのだ。信じ、迷いを廃して突き進んできた。それがひいては国の為、民の為、そしてシエルシの為だと思っていたのだ。

帝国に反旗を翻したザルヴァトーレ……。首謀者であるシャナクはUGへと送り込まれ、そしてシルヴィアは齡十六で女王へと即位した。本来ならば反逆者は皆殺しにする帝国がシルヴィアを見逃した理由……。それは彼女たちルナリアの血筋を絶やしてしまえば月ディアナドライバの管理者が居なくなってしまうからに他ならない。そうでなければとつくの昔に一族はおろか、民まで虐殺されていってしまうべき国なのである。

シルヴィアはまだ少女だった時に母の剣、エリシオンを継承させられた。強引な継承の儀式は何日にも及び、シルヴィアの身体は無理な術式継承によりあちこちに異常が出てしまっている。その苦痛を堪え、王として……。そして民を護る戦士として。あらゆる痛みからこの国を護ろうと努力したのがシルヴィアのここ十年の人生であった。

シエルシにだけは、そんな思いはさせたくない……。だから手を汚す事もしたし、帝国に頭を下げた。機嫌を取り、民には馬鹿にされ、貴族たちには笑われた。屈辱の日々を超え、王は王足りえたのである。その頃のシルヴィアには、シエルシに触れてあげるだけの余裕はなかったのだ。

この血と汗だけを刻み、美しく輝く鋼鉄により護られた手が一体

何をつかめるといふのだろうか。得ようなどとは思わない。この世は残酷で冷酷だ。当たり前のように幸福が奪われていく。奪われたくなければ、奪う側に立つしかない。そうやって、勝ち続けるしかないのだ。

敗北は死、滅亡　勝利は新たな罪の始まり。その罪悪の全てを背負い、そしてシエルシには背負わせない……。それが彼女の矜持だった。だが　己の意思で戦いを避ける道を選び、成長した妹の姿に思わず胸が苦しくなる。

「シエルシ……。馬鹿な愚妹の分際で……。いつのまにか、でかくなりやがって……」

自分の所為でシエルシの顔から笑顔が消えてしまった。涙も消えてしまった。シエルシはこの城から出るまでずっと人形のままだった。それでも帝国に行つて、ハロルドの傍に居ればいい暮らしが出来て、ここよりはまだ自由に生きられる……。そう考えていた。今でもそう考えている。結局の所ヨツン Heim で暮らすことこそ、この世界における至上の幸福なのだから。

ぎゅっと握り締めた拳を見つめる。だがそれでも……。シエルシはそれでも、運命に抗おうとしている。それはとても辛い選択だ。己を顧みない選択だ。だからこそ、強い意志が居る。成長しているのだ、彼女は。いつまでも人形のままでもないし、子供のままでもない。

「もっと……。優しくしてやれば、良かったな……」

後悔の言葉は空しく響き渡る。誰にも届かず、誰にも聞こえない。玉座へと続く紅い絨毯の端、支柱の影に隠れたネーヴェ以外には。

「で……。なんとか坑道まで到着したわけだが……。こりゃ、古代遺跡か何かなのか？」

ザルヴァトーレ領土、東に存在する坑道 “アンファイエナ遺跡”。かつてはザルヴァトーレによって積極的にサルベージ作業が行われていたその遺跡も、今は殆どの資源を採掘し終えて無人の廃墟となっている。

大地にぼつかりと開いた巨大な縦穴を下りていくと、無数のこまごまとした分岐通路が見えてくる。ゲオルクはその中の一つを迷い無くすたすと進んでいくのだが、続くホクトたちは道があつているのかどうか不安で仕方が無かった。

「アンファイエナはザルヴァトーレの採掘資源の要所だった場所だ。古代技術のサルベージもここでよく行われていた」

「結構有名な遺跡の一つよねえ、アンファイエナって。ここ数年は殆ど枯れちゃってるって話だけだ」

「ほ……。俺そついうの全然興味ねえからな」

「何言ってるのよ？ あんた、昔は古代遺跡を廻ってたじゃないの」

「そ、そうなのか？ いや、それは俺じゃなくてヴァンだろ……？ 覚えてねえよ」

そんな雑談をしながら進んでいると、一行は行き止まりへと当たってしまった。どう見てもただの岩の壁にしか見えないその様子にアクティは眉を潜める。

「もしかして、迷子になった……?」

「いや、ここで合っている。少し待ってくれ」

ゲオルクは一步前になると、岩の壁に片手を差し伸べた。すると岩に光が走り、魔術でカモフラージュされていた鋼鉄の扉が姿を現した。ゲオルクはその認証端末に片手を触れ、ロックを解除して扉を開けてみせる。

「ゲオルク殿、本当に何者なんでござるか!？」

「俺の事はいいだろ……あんまり騒がれるのは好きじゃないんだ。

それよりこれでルーンリウムの地下水路に直行出来るはずだ。仮にシエルシが捕まってるとしたら地下だろうからな、丁度いいだろう」

「あら、じゃあお姫様の救出作戦でもあるってわけね　頑張りなさいよ、ホクト?」

「へいへい……。くだらねえ事ダべってないで先進むぞ……」

両手をズボンのポケットに突っ込んだまま歩いていくホクト。その背中を追うようにブラッドたちも先に進んでいく。最後尾、一人残ったゲオルクは懐かしむように目を細め、自らが開いた扉を見上げていた。やがて気持ちを切り替え、再び歩き出す。目指す場所は既に直ぐそこにあつた。

ルーンリウムは複雑な水路が入り組むようにして構築されている街である。その水脈ラインは主に地下に集中しており、その構造は既にルーンリウムの住人ですら把握できないほど複雑怪奇になっている。ゲオルクは一行の先を進み、その毛細血管のような水脈パイ

プの中を掻き分けて進んでいく。

「あなた、本当に道に詳しいな」

「昔は、この辺で良く探検したもんだからな……つと、見えたぞ。
このマンホールから地下牢に抜けられるはずだ」

水脈パイプを足場にして片足を引つ掛け、天井のマンホールを開くゲオルク。巨体からは考えられぬ軽快な身のこなしで上がっていくゲオルクに続き、ホクトたちもマンホールから脱出した。

広がっていたのは無数の牢獄。特に見張りの姿も無く、投獄されている人間の姿も無い。周囲をきよろきよろと見渡してシエルシを探して見るが、その姿は見当たらなかった。

「シエルシ、いないね？」

「地下牢はいくつかのエリアに分かれている。東西南北に四つ存在するから、シエルシがいるのはことは限らない。それより警備が手薄とは言えあまりノンビリしている暇もないぞ」

「ああ、判ってる。シエルシの探索は後回しだ。シルヴィアさえ倒しちまえば、シエルシを探すのは簡単だしな」

「えー……それまでほつとくつもりなの……？　それはちょっと可愛そうじゃない……？」

「あら、じゃあアクティが探してあげなさいよ。貴方魔剣も使えないんだし、丁度いいでしょ？　シルヴィア王は私たち三人で十分だし」

「では、拙者も一緒にシエルシ殿を捜索するでござるよ。それで良いでござるか？」

とりあえず話が纏まり、シエルシ捜索の為にウサクとアクティが移動を開始する。二人とも隠密行動には長けているので問題ないと思うが、ホクトは少々不安げにその背中を見送っていた。

「大丈夫か、あのお子様チームで……」

「ウサクは優秀な忍者だ。問題ないだろう」

「さして、こっちはこっちで頑張るわよーっ　ささ、行きましょー！」

「だあーッ！！　キメエ！？　腕を取るんじゃねえ！？」

「ち、近い……」

ホクトとゲオルクが青ざめながら移動を開始する頃。ホルスジエネレータ内部のシエルシたちもパイラルシステムのある場所へと辿り着いていた。複雑に入り組んでいる道もあるのだが、基本的にパイラルまでは入り口から一本道である事がわかり、後は真っ直ぐ進むだけで直ぐに到達する事が出来たのである。

スパイラルは巨大な螺旋状の光を纏った円柱型の機械で、その周囲には無数の動力パイプが繋がられている。放熱を続けている為か他のエリアよりも更に温度が高く、熱風は嵐のように渦巻いている。

『こ、これはきついな……』

「早い所片付けて撤退しよう……。ミュレイ、いけるか？」

「そう急かすな……。えーと、この端末がこうで……。こっちのがこうで……。？」

「違うでしょ……。てかまず室温なんとかしようよ。室温は多分あつちのスイッチで……。」

「後ろからごちゃごちゃ言われたらワケわからなくなるじゃろうがつ！？」

頭を抱えて絶叫するミュレイ。ロゼは呆れた様子で黙り込み、振り返った。その時突然コントロールルーム内に警報が鳴り響き、四人は同時に顔をあげる。空中に浮かび上がったいくつかの映像の中、そこにはこの太陽の中へ乗り込んでくる剣誓隊の姿があった。

『剣誓隊……！？ どうやってここに！？』

「出入り口のロックはさつきミュレイが開放しちゃったし……連中はミレニアムの転送装置が使えるからね。まあ、ここになだれ込んできてもおかしくはないけど……。」

「昴、防衛に出るぞ！ ロゼはここでミュレイと一緒に！」

「ちょっとまって、隔壁が降ろせないか弄ってみる！」

「待て、お主ら後ろでごちゃごちゃするな！？ わらわはただでさえ機械弄りは苦手だというのに、ええい……ッ」

ミュレイとロゼがもみくちゃになりながら端末を操作しているの

を見つめ、昴とリフルは無言で部屋を出た。心配せずともどうせここまでの道は一本なのだ。敵に裏をかかれる事もない。守るべきはこの幅5メートル程度の直進通路のみ。昴とリフルは同時に魔剣を装備し、歩き出した。

「さて……。あの二人が隔壁を降ろしてくれる事を期待しようか。水は飲んで置けよ、昴」

『あ、ああ……。しかしこんな環境での戦いか……。つくづく私は……戦況に運がない……』

正面、彼方から押し寄せてくる剣誓隊の姿がある。それを捉え、二人は同時に走り出した。ここが防衛の要所、そして界層を護る運命の場所である。負けるわけにはいかない。その覚悟と共に、二人は魔剣を振るうのであった。

螺旋ノ刻（2）

「さーで、まあ普通に考えてこのままシルヴィアの所まで行けるとは思っっちゃいないんだが……」

ルーンリウム城、玉座へと続く回廊。ステンドグラスから無数の光が差し込む長い長い一本道。その道を阻むかのように中央に立つイスルギの姿があった。

イスルギの傍らにはネーヴェの姿もあり、完全にホクトたちの動きは読まれていた様子である。というのも、ネーヴェはこの城の中に敵の侵入を察知する術式を施しており、その当然の警備の結果であった。しかしそれを周囲に知らせなかったのにはそれなりに理由があった。

「来てしまいましたか……兄さん」

心苦しそうなネーヴェの表情にホクトはしばし思索する。それから振り返り、ブラッドの顔を見やった。ブラッドは首を横に振る。すると二人同時に消去法として最後の一人へと視線を向ける事になった。二人の間に挟まれたゲオルクは冷や汗を流しながら黙り込んでいる。

「兄さんって……あんたの事じゃねえのか、おっさん？」

「……………ああ、まあな……………」

「まあなって……ええっ！？ あれってザルヴァトーレのお姫様かなんかなんじゃないかしら……………？」

腕を組み、黙り込むゲオルク。その煮え切らない態度にネーヴェは不満そうに目を細め、前に出た。虚空から杖を取り出し、それを片手で構えて見せる。

「貴方達は何も判らずに彼と同行していたのですか……？ 彼の名は……ゲオルク・ルナリア・ザルヴァトーレ……。ザルヴァトーレの第一王子なのですよ」

「おおっ！？ おっさん、王子だったのかッ！？」

「……王子って柄じゃないわね……」

「う、うるさいな……。だから言いたくなかったんだ。それにその名前は既に捨てた名だ。そのククラカンの王子と同じでな」

ゲオルクが視線を向ける先、甲冑に身を包んだイスルギが佇んでいる。ホクトとブラッドは再び顔を見合わせ、それからイスルギを指差した。

「「あっちのイケメンはまあ、王子でも許せるな」」

「「どういう意味だ？」」

「「っっていうか待て、どういうこっちゃ？ なんでククラカンの王子がザルヴァトーレにいて、ザルヴァトーレの王子がククラカンにいるんだ？」」

「「そっいう古いしきたりがあったんだよ」」

嫌々、ゲオルクは自分達の境遇を語りだした。ゲオルク・ルナリ

ア・ザルヴァトーレはザルヴァトーレの第一王子。そしてイスルギ・ヨシノとはククラカンの第一王子である。二つの国には古くから王子として生まれた男子を入れ替えて育てるといふ風習があり、それは現代でもひそかに継続されてきた儀式の一つなのだ。

遙か古の時代、二人の王は一つの国を治めていた。“管理者”としての資質を持つのは女性のみであり、故に必然的に王は女……女王となる。王位につくことの出来ない王子は、女王となるべき姫をその身を挺して護る事を義務付けられており、それに伴い王子は常に武に長けていなければならなかった。

そんな王子を二国の間で入れ替えるのは、それぞれの国の人質という事であり、そして視察役でもあった。二つの勢力の拮抗を護る為に必要な使者　それが王子の役割だったのである。イスルギとゲオルクはそれぞれが互いに敵国に預けられ、そこで姫を護る騎士として育った。そうする事が王子の義務であり、誇りであるが故に……。

「だからおっさん、この城にやたら詳しくったのか」

「俺がこの城を離れる時使ったのがあの通路だからな……」

「その王家に纏わる秘密の通路を教え、侵入を進んで導くとは……。兄さんにはもうザルヴァトーレの王子として、国を護ろうという自覚はないのですか……?」

「そうではない、ネーヴェエ。俺は俺なりに色々と考えた結果だ。勿論今の主であるミュレイの為に全力を尽くすのは当然の事、ザルヴァトーレにも良い方向に進んで貰いたいと願っている。そっちの王子なら俺の気持ちも判って貰えるだろう」

ゲオルクの発言にイスルギは手を腰に当て、黙って目を閉じてい

た。当然、その気持ちは判らないはずがない。二人は今日まで私情を押し殺し、役割に徹してきたのだから。当然祖国を思う気持ちはある。だが 二人には互いに護るべき姫が居た。

姉からも見捨てられ、一人で部屋に閉じこもっていたシエルシ……。彼女を護り、笑顔にする為にイスルギは今日まで戦ってきた。単に彼女の為……。彼女の幸せの為に。古き因習の所為で大切な祖国から引き離された王子が見つけた、敵国の一輪の花。国よりも己よりも、ただ彼女を護る事こそ神託なのだと思じた。

今日まで戦ってきた事に後悔などない。そしてかつての祖国を相手に戦う事にも迷いなどありはしない。ゲオルクもそれは同じ事である。今は立場が違っている。だからこそ、やらねばならない事がある。

かつて何もする事がなく自墮落に生活していたゲオルクに懐き、あれこれと忙しく世話を焼かせてきたミュレイ。だがその忙しさが彼を虚無の気持ちから救ってくれたのだ。ゲオルクとイスルギ、二人は互いに護るべき姫を違えたのだ。だが今はそれが正解であり、それこそ唯一無二。是非もない。

「余計なお喋りは無意味だ、ネーヴェ。私はザルヴァトーレ騎士団長として、奴らを討つ……。それだけだ」

魔剣アルテツアを装備するイスルギ。それに対応し、ゲオルクも魔剣を構える。二人の王子の睨み合いをネーヴェは見つめ、悲しげに唇を噛み締めている。ホクトはぼりぼりと頭を掻き、その脇をこっそり抜けようと歩き出した。

「どこへ行く、魔剣狩り」

「……だって俺ら蚊帳の外だもん、別にいいだろ？ おーい、おっさん！ 俺こいつ苦手だからあんたに預けるわ！」

「おい……いくらなんでもお前……テキトーすぎるだろう」

「私とホクトでシルヴィア王は何とかしておくから、あんたはあんなでそいつをなんとかしといて頂戴」

ブラッドまでホクトと一緒にこそそと移動を開始し、二人は一気にその場を駆け抜けていく。それを背後から追撃しようと槍を構えるイスルギへ、ゲオルクのハンマーが振り下ろされていた。叩きつけられる衝撃を盾で防ぎ、イスルギは振り返る。二人の王子は互いの獲物をぶつけ合い、一步引いて互いに構えなおした。

「どうやらここが俺の持ち場らしい。お互い色々と言いたい事もあるだろうが、預けてもらおうか」

「……。ネーヴェ、奴らを追え。ここは俺が引き受ける」

「し、しかし……」

「シルヴィア王の安全が最優先だ。それともお前はまだ、この男に對して未練でもあるのか？」

イスルギの言葉でようやく決意が固まったのか、ネーヴェは振り返って走り出す。その姿が見えなくなり、足音も聞こえなくなった頃……。互いに懐かしい記憶が混ざり合う回廊の中、二人の王子は魔剣を掲げた。

「どうやら妹が迷惑をかけているようだな」

「……………それはこちらこそ、だ」

「フ、まあそういう事か……。さて、いい加減お互いにこの国同士のいさかいで人生を左右されるのもウンザリしている頃だろう？ 決着という奴をつけようぜ」

「……………国にも己にも興味はない。私はただ、姫を護る盾であり剣……。だが、今だけは私自身の命を賭して応えよう。往くぞ、ゲオルク・ルナリア・ザルヴァトーレ……。イスルギ・ヨシノ……。いざ、参る！」

「正々堂々　　ってやつか」

盾から切り離れたランスを片手にイスルギが走り出す。それに応えるようにゲオルクもまた槌を振り上げ、二人の王子は正面から全力で得物を敵へと叩き込む。

螺旋ノ刻（2）

「う、うーむ……。ここが、こうで……。だめじゃ、魔術と違って何がどうなってるのかさっぱりわからん……………」

「おいおい、勘弁してよ……。ミュレイが何とかしてくれないともうどどっしよつもないんだよ？」

“太陽”、ホルスジェネレータ、コントロールルーム……。端末とにらめっこするミュレイは室温のせいであらだと滝のよつに汗

を流しながら戸惑いつつ人差し指一本で立体キーボードを操作していた。隣からロゼがその操作をサポートしているのだが、如何せんミュレイが機械オンチすぎて作業はなかなかはかどりそうもない。

「急いでよミュレイ……。リフルたちがどれくらい持ち堪えられるかだってわかんないんだしさ……」

「わ、わかっておる！　そう急かすな！！　ええい、あつちい
ッ！！！！！」

汗を迸らせ絶叫するミュレイ。そのコントロールルームの外では昴とリフルが防衛戦を繰り広げていた。リフルの構えた響魔剣グラシアがメロディを奏で、衝撃が次々に剣誓隊を弾き飛ばしていく。崩れた陣営に昴が切り込み、次々に敵の武装を破壊して持ち堪えていた。

『流石に数が多いな』

「だがこの直進通路ならば持ち堪えられるだろう。尤も、敵もこのまま引き下がるとは思えんが……」

リフルの眩きの通り、剣誓隊もこれで全力というわけではない。前線で倒れていた魔剣使いたちを抜け、最前に出てくる魔剣使いの姿があった。昴は一度煮え湯を吞まされたルキア。そしてエクスカリバーシリーズの一つを持つエレット少佐である。昴はユウガを鞘に収め、滴る汗を拭いながらルキアをにらみつけた。

「また会ったね、白騎士……」

『ルキアか……。今日は一人だけか？』

「さあ、それはどうかなあ……？ ふふふっ」

不気味に笑ってみせるルキア。昴は鞘に収めたままのユウガを握り、居合いの構えでそれに応じる。すると飛び出したのはルキアではなく、その傍らに立っていたエレット少佐であった。

「先日は良くもエクスカリバー隊をいじめてくれましたね！ エクスカリバーシリーズを持つ者として許しません！！」

『……………』

「なんだ、あれは……。知り合いか？」

『いや……。しかも弱そうだ。どうしてルキアはあれと一緒に……』

二人がひそひそと話し合う最中もエレットはなにやら喚いていたが、二人とも暑さと疲労もあってあまりまともに聞いてはいなかった。エレットはエクスカリバーを構え、滝のように汗を流しながら肩で息をしている。

「帝国の浄化作戦を邪魔する人間は誰一人として容赦しません！！ さあ、どこからでもかかってきなさい！！」

「じゃあ遠慮なく」

「わぶっ！？」

リフルが音響の弾丸を放つと、エレットはそれを顔面にまともに食らってばったりと倒れこんだ。リフルと昴が驚愕の余り完全に停

止しているとルキアが咳払いし、再び緊張感が仕切りなおされた。

「兎に角、これ以上スパイラルへアクセスされるわけにはいかないから……。通らせてもらおうね」

「誰が通すと言った？」

「ルキアが通るって言ったなら通るの。行くよプリメーラ……。封印術式開放　！」

浮かび上がる巨大な剣　その刀身に術式の紋章が浮かび上がり、光と共にそれが姿を変えていく。空中にばら撒かれた紅い光は血の色をした薔薇の花弁　。剣はその姿を異形へと変化させる。全長2メートル程度の怪物……。人の形をし、拘束具の上から鉄のドレスを着用した女性……。剣から異形への極端な変化に昂もリフルも驚きを隠せなかった。

ルキアはプリメーラの伸ばす長く巨大な腕にすがりつき、すりすり頬を寄せて笑う。プリメーラはまるで我が子に触れるかのような優しい手つきでルキアの頭を撫でると、それから包帯まみれの顔をぐるりと昂たちへ向けた。

「人魔剣プリメーラ……。これがルキアの魔剣の本当の姿にして能力……。プリメーラはルキアのママなの。ママはルキアが願う事なんでもしてくれるのよ……」

「あれが將軍クラスの魔剣か……。異常、だな……」

「魔力の大きさだけならSランクに匹敵する、か　。手は抜けそうにないな」

昴が剣を構え、ルキアへと走り出す。それに反応するかのよう
にプリメーラはその両腕を広げ、ぎこちなく何度か身体を揺らして前
進する。昴が放つ斬撃に対し、プリメーラはその場に立ったまま上
半身だけを高速で回転させ、その長い腕を昴の身体へ叩き込む。想
像以上の物理攻撃に昴の身体は吹き飛ばされ、壁に激突しても止ま
らずそのままリフルの遙か後方まで弾かれていく。

「昴!？」

プリメーラは上半身を高速回転させ、通路の左右の壁をガリガリ
と削りながらリフルへと迫る。リフルはロシアの音響攻撃でそれ
を迎撃するのだが、並大抵のダメージでは圧倒的な火力の前にかき
消され、音の衝撃も弾かれてしまう。

直進通路故に回り込むことも出来ず、逃げ場も無い。迫った
攻撃にリフルは後退し、壁に叩きつけられて立ち上がった昴の隣に
立った。仮面を吹き飛ばされた昴は額から血を流しながら再び冷静
に剣を取る。

「つ……ッ！　なんだ、あの馬鹿力……ッ」

「流石に“魔剣”だな。硬度も物理攻撃力もそれそのものだ」

「ほーら、早く逃げないと挽肉になっちゃうよ……」

ルキアは轟音と共に前進するプリメーラの背後から楽しげに声を
上げた。リフルと昴はその能天気な様子に舌打ちし、互いに握り締
めた剣を手に再び怪物と見える。

「居たーっ！ シエルシ、大丈夫!?」

「アクティ……それにウサク？ ど、どうしてここに……?」

牢屋の中、膝を抱えていたシエルシが顔を上げるとそこにはウサクとアクティの姿があった。静まり返った牢獄の中、ウサクが腰に差した小刀を抜き、素早く格子を切断してみせる。漸く窮屈な牢屋から外に出る事が出来たシエルシはほっと胸を撫で下ろし、それから二人を交互に見やった。

「助けてくれてありがとうございます。それより、二人は……?」

「あんまりノンビリ説明してる暇はないんだけど、ホクトたちと一緒に……!?」

そこで言葉が途切れたのは、遠く 玉座へと向かう通路から轟音が鳴り響いたからである。凄まじい衝撃と物音に三人とも目を丸くしたが、シエルシはそれで大体状況を把握した。

「戦っているんですね、ホクトたちが……」

「そのようござるな……。然らば、シエルシ殿も早くここから脱出を……」

「いえ、私はシルヴィア王の所へ向かいます!」

拳を握り締め、シエルシは真っ直ぐな目で宣言した。困った様子のウサクの隣、アクティがむすつとした表情でシエルシに迫る。

「あのね……。あんまりこんな事言いたくないけどさ、シエルシが

捕まった所為で色々そこちだつて困つてたんだよ？ ホクトは焦つてるし、シエルシを探しにわざわざ別行動まで取つたんだからさ。また捕まっちゃったらホクトたちの足を引つ張る事になるよ」

「う……。そ、それはそうなんですけど……。でも、ホクトが姉上と戦っているのならば余計に黙つては居られません！ 私には二人の戦いを止める義務があるんです！」

「と、申されましても……。うむむ、さてどうしたものか……」

ウサクが腕を組み考え込み始めた時、静まり返つた牢獄の中に足音が鳴り響いた。一步も動いていない三人の物ではないことは明らかであり、当然同時に振り返る事になる。差し込む遠い日の光の中へと足を踏み入れた第四の登場人物はゆっくりと顔を上げ その真紅の瞳を輝かせた。

「つて……。あ、あれは……。！？」

「ウサク、見覚えがあるの？」

「見覚えがあるものにも……。奴は、姫様を執拗に狙つてきた暗殺者でござるよ！」

白いマントを纏つた、機械の頭部を持つ暗殺者。紅く輝く力メラで三人を捕らえ、巨大なチェーンソー型の魔剣を片手に迫る異様な姿は一度見たら忘れられそうにもない。唸るエンジンを高鳴らせ、刺客はじりじりと三人に迫ってくる。

「ザルヴァトーレの魔剣使いつて事？ シエルシ、知ってるの？」

「え……？ ザルヴァトーレに魔剣使いは、イスルギと王族しか居なかったような……。それにあの装備、明らかにザルヴァトーレのものじゃないです」

「そ、そうだったんでござるか！？ じゃああれ、一体何者で……！？」

三人がそんなやり取りをしている間に刺客はチェインソーを片手に引きずりながら猛然と駆け寄ってくる。それをアクティがライフルを構え、引き金を引いて応戦する。ウサクは両手に小刀を対に構え、シエルシの背中を押した。

「ここは引き受けるでござるよ！ シエルシ殿は早くホクト殿の所へ……！」

「で、でも……」

「ホクトはシエルシの事を心配してたんだよっ！ ホクトの所まで行けば、あとはホクトが何とかしてくれる！ ここはボクたちで何とかするから、早くっ……！」

刺客は弾丸をチェインソーで弾き、ウサクへと襲い掛かる。防御に使った小刀が一撃で押し折られ、しかしウサクは体勢を崩しつつもクナイを投げて応戦する。クナイに結ばれた鋼糸はチェインソーの刃へと絡みつき、その動きを止めた。

すかさず二人に分身したウサクが左右から遅いかかり、同時に刺客を蹴り飛ばす。シエルシはその戦いを見て後ろ髪を引かれつつ、慌てて地下牢から走り出した。背後でガトリング砲の発砲音が聞こえ一度足を止めたが、今は二人を信じるしかない走り出した。

目指す王の居場所まで、道は完全に覚えている。長い金髪をはた

めかせ、シエルシは走る。轟音と衝撃が響くその渦中こそ、戦乱の中心……そして大切な人が待つ場所なのだから。

シエルシが目指す玉座、そこでホクトと剣を交えるシルヴィアの姿があつた。ホクトのガリユウとシルヴィアのエリシオン、二つの大剣は激しく火花を散らし、派手に打ち合い戦いを繰り広げる。シルヴィアもホクトも、ただ刃を収めて全てが終わるとは思っていない。戦わねばならない事もあり、そして今こそその時なのだ。

最強と呼ばれる七人の魔剣使い、その一角がこうして正面から衝突する事が歴史上何度あつただろうか？ 数えるほどしかなかった死闘。二人は刃を打ち合わせ、鏢迫り合いをしながら顔を近づける。

ステンドグラスからは七色の光が降り注ぎ、太陽と月の伝承をモチーフにした壁画に二人の影が伸びる。シルヴィアは笑い、そしてホクトも笑っていた。二人は同時に身を離し、後方に着地する。

「ふん、腕は落ちていないようだな……魔剣狩り」

「強がるね？ 俺の能力は大体わかってるんだろ？ 一人で俺を殺しきれると思うのか？」

「そんな事は私も考えていない。だからこそ、応援を読んである」

二人の間、大地に魔法陣が浮かび上がる。それだけで既にげんなりした表情のホクトの目の前、転移されてきたステラが既に武装状態で立っていた。何故行き成り武装状態なのかホクトにはわからなかったが、一応彼女なりに不意打ちに気をつけた結果であつた。

「出やがったな、うさ子……」

「うさ子ではありません、ステラです。ここで会ったが百年目です

ね、ヴァン・ノーレッジ」

「ヴァンじゃねえホクト君だ……。ったく。おーい、ブラッド！ 手え貸してくれ！！ 流石にこれ相手で一人は辛い！」

「しょうがないわねえ……。まあ、一応これで最終決戦なんだし、手を貸してあげるわよ」

ブラッドが細長い魔剣を召喚し、それを片手にホクトの隣に並ぶ。ステラは一度背後を顧みてシルヴィアの無事を確認すると、それからホクトへと片手を差し伸べた。

「魔剣狩り、ヴァン・ノーレッジ……。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレはどこですか？ 貴方の所為で私の思考プログラムには大きな支障が出ています。私は早くその異常をこの手で正したい」

「シエルシの居所なんて俺が知るかボケ……。つーか、やっぱりお前はステラであってうさ子ではないんだな」

「当然です。そのうさ子という間抜け極まりない名前は不快でしかありません」

バイザー越しにステラが睨みを効かせる。ホクトは溜息を漏らし、肩を竦め……。それから目を閉じた。うさ子。共に暮らし、共に戦ったかつての仲間……。記憶喪失でなければ絶対に笑いあうことの出来なかった敵。だがそれでもシエルシは彼女を信じようとしていた。

ホクトとて、うさ子の事が嫌いなのではない。ただ身体中に眠るヴァン・ノーレッジとしての魂がそれを破壊しようと叫ぶのだ。今も構えたガリユウが疼き、その瞳はステラを捕食しようと狙いを定

めている。所詮、互いに争うしかない定め……。ステラはこれがあ
るべき姿なのだ。あの子供のように無邪気に笑い、はしゃいでいた
うさ子の姿が異常だったというだけの話。

寂しくないと言えば嘘になるだろう。だが、それはそうなるべく
してなった事……。うさ子と過ごした僅かな日々も、その前の殺し
合いの日々も……。こうして戻ってきた敵としてのステラも。全て
はそう在るべくして在るもの。

ふと、脳裏にシエルシの寂しげな顔が思い浮かんだ。戦わないで
と彼女は言った。うさ子は自分を助けようと、インフェル・ノアか
ら脱出させてくれたのだと。だが、結局うさ子の意識は消え、ここ
に残っているのはステラだけである。

目を開き、その時には既にホクトの瞳から迷いは消えていた。ホ
クトとしての軽い冗談交じりの眼差しはそこにはなく、在るのはた
だ魔剣狩り、ヴァン・ノーレツジとしての破壊の眼差しだけである。
ホクトは両手で改めてガリユウを上段に構え、ステラを見据えた。

「俺はシエルシと違って甘くはないぞ、ステラ。お前とは色々
あったが……。その因縁もそろそろお終いにしようや」

「望むところです。貴方を駆逐し、私は私を正常化する。かか
つてきなさい、魔剣狩り。天駆ける雷神の御手にて貴方を裁き、そ
の罪を清算しましょう」

「やれるもんならやってみな、ロクエンティア“番犬”。ガリユウ、封印術式
開放。コード“ロクエンティア剣創”……はつど……ッ!？」

ガリユウの力を解放しようとして、漸く気づく。ガリユウの魔力
が制御不能に陥っている事に。所謂暴走状態……。制御しきれな
いガリユウの内側から溢れてくる憎悪の感情にホクトは目を細めた。
冷や汗がぼたりと零れ落ち、それを合図としたかのようにどつとガ

リユウの口から数え切れない魔剣が溢れかえった。

それは最早怪物。突然の事に驚く一同の前、ホクトは完全にガリユウに飲み込まれつつあった。ぎらぎらと輝く視線でステラを睨み、異常に肥大化したガリユウと一体化した腕を向ける。

「 Sランク魔剣ガリユウ、回収します」

「あら、流石にちょっとはいそうですね。すかってワケにはいかないのよね……！　しっかりしなさい、ホクト！」

「判ってる！！　ステラとシルヴィア、二人をこの状態で相手にすんのか……。やっぱちゃんと調整してくるんだった……！」

「人の城で勝手にごちゃごちゃと何をしている？　かかってこないのならばこっちから行かせてもらうぞ、下郎　ッ！！」

四人の魔剣使いが同時に動き出した。黒い魔龍が魔剣を吐き出し、ステラはその中を掻い潜っていく。ブラッドが斬撃を放ち、シルヴィアは剣の雨を魔力障壁で弾きながら前に出る。ザルヴァトーレとククラカン、そして様々な因縁を乗せた運命の戦い……それが今、始まるうとしていた。

螺旋ノ刻（3）

“求める物”とは、それぞれによつて異なる物……。そしてまた得られ、到達する答えもまた人によつて大きく異なるのだ。

回廊を走り続けるシエルシ。その靴音が奏でるリズムも彼女の吐息の音も、彼女が選んで彼女が歩いた道を踏み固める一歩……。柱と柱の影の向こうへと駆け抜け、ただ願いを思い描く。戦いを。悲しみの連鎖を打ち砕く為に。

何故こんなにも人は悲しみを繰り返すのか。少しずつズレてしまった何か大切な物がお互いを傷つける事を強制する。血が、叫びが、魂が。時に自分自身さえも否定し、その手を争いの道具へと伸ばしてしまふ。

力があれば、その力が生み出す余波に巻き込まれずには居られないのだ。大きな渦の中心へと巻き込まれるように、人は時に無力に争い続ける。その先にどんな答えが待っているのかも知らずに……。だからこそ、諦めず前に進まなければいけないと思つた。迷う事は、己を殺す事だと思つた。それさえもまた、誰かの選択肢を奪い去っている現実だという事に誰もが気づかないままで。

玉座が衝撃で吹き飛ばされ、白い電脳の鎧を纏つた少女が舞う。その腕に、その足に、高圧の電流を帯び。踊るように髪を靡かせ。指先から放たれた雷撃を受け、ホクトはその身体を焦がし血を吐きながらも食いしばっていた。その動きは明らかに鈍く、ガリユウの暴走は彼に大きなハンディキャップを与えている様子だった。

大地へと着地し、ステラは低い姿勢から一気にホクトへと駆け寄つていく。下段から身を丸めるような屈伸による回避、そして放たれる蹴り。ホクトの顎に踵が減り込み、男は遙か空中へと打ち上げられる。ステラは全身に装備された円刃を一斉に放ち、ホクト目掛けて射出した。

ステラの脳裏に浮かぶ、ざわつくイメージ……。それはホクトと対峙してからより一層強くなり始めていた。目を閉じ、魔力を収束すれば思う。彼女は自分が戦う理由を思い出す。そう、振り切りたい過去を。

「これが、ステラがした事の全様ですよ」

プリミドル開戦前、ステラはケルヴィーの部屋で監視カメラの映像を見つめていた。その瞳には珍しく動揺の色が浮かんでいた。画面に映し出されている映像はシエルシと共にホクトを奪還した時の様子であり、そこには帝国の追っ手と一人で戦うステラの姿が録画されていたのだ。

にわかには信じられない。しかし、“やはりか”と思う。そうとしか思えない手ごたえは確かに残っていた。それに、他に魔剣狩りが脱出出来た理由も考えられない。ぎゅっと握り締めた拳を見つめ、ステラは振り切れない迷い胸に切なく唇を噛み締めていた。

「この事は、他の人には黙って置きましたから」

「え……？　そ、それは……」

明らかな反逆行為。ケルヴィーはハロルドに絶対の忠誠を誓っているし、彼は帝国の為にあらゆる努力を惜しまなかった科学者だ。そのケルヴィーの意外な一言にステラは驚きを隠せなかった。

「過ぎてしまった事をネチネチと言っても、仕方が無いですからねえ……。それよりステラ、貴方はどうして魔剣狩りを助けたんでしょうねえ？」

「魔剣狩りを助けた……理由……？」

「僕としては、その辺りが気になりますねえ……あ、別に責めてるわけじゃないんですよ？　僕がどうやっても貴方が手に入れる事の出来なかった“ゆらぎ”を生み出した彼の存在に興味が沸いてきただけですから」

両手をじつと見つめ、ステラは目をきつく瞑った。それから胸に手を当て、ケルヴィーを見つめた。言葉に出来ない様々な思い……。それを言葉にする事を今までしてこなかったから。ステラは異常なまでに自分の気持ちを他人に伝える事が苦手だった。ケルヴィーはそれが判っているからそつと歩み寄り、優しく肩を叩くのだ。

「落ち着いて、ゆっくりと考えて見ましよう？　それがきつと、僕の研究の為にもなりますからねえ」

勿論、魔剣狩り　ヴァン・ノーレッジはステラにとって特別な人間だった。彼女が与えられた任務の中で、彼だけが何度戦ってもしぶとくしぶとく生き延びた。同じSランクの魔剣使いだったという事もある。気づけばステラの仕事の殆どはヴァンを追いかける事になっており、ステラはあちこちでヴァンと戦った。

ヴァンはいつもミラと一緒に居た。ミラはヴァンへと襲い掛かるステラに食事をご馳走したり、手当てを施したりもした。ステラはミラの事が嫌いではなかった。ミラの事は殺せとは命令されていないかったし、ヴァンもいつもステラを殺そうとはしなかった。ステラがヴァンを追いかければヴァンは必ずステラの相手をしてくれた。そしてミラはそんな二人の桁外れな喧嘩を、いつも優しく見守っていたのだ。

そんな日常が永遠に続くと思っていた。けれどそれは敵わなかった。今日こそはと決着をつけようと意気込んで戦ったステラは翔魔剣ミストラルを制御しきれず、全方位に放たれた攻撃は近くにいた

ミラをも巻き込んだのだ。ヴァンはミラを庇おうとしたが、間に合
わず……ヴァンもまた攻撃を受け、倒れる事となった。雨が降りし
きる寂しい日の事だった。ヴァンはミラを抱き、泣きながら慟哭し
た。捕獲する事は、恐らく容易だったのだ。だが　ステラはそう
せず逃げ帰った。

彼女は自分が何をしたのかが良く判らなかつた。元々人間らしい
感情など設定されていなかったし、手加減も出来るタイプではな
かつた。でもヴァンは全力を出してもきつと全力で応えてくれるから
手加減など要らないのだと勘違いしてしまったのだ。武装もしてい
ないミラに放った狂刃　。その代償は彼女の心の中に大きく楔を
打ち込んだ。

何とか、何とか過去をやり直したくなつた。そんなステラがステ
ラなりに考え、そして魔剣狩りヴァンと共に記憶を失って出会つた
事……それは恐らくは無意味ではなかつたのだろう。そう、きつと
理由ならあつたのだ。あのうさ子と呼ばれていた少女がホクトと共
に在ろうとした事も。いつも笑顔で居ようとした事も。ホクトを笑
顔にしてあげたいと思つた事も　。

インフェル・ノアの外部装甲、人の近寄る事のないその場所で落
とし物を探すステラの姿があつた。彼に剣で貫かれた時、手を伸ば
しても届かなかつた大切な物……。もう戻らない、あの楽しかつた
日々……。風に吹かれ、ステラは初めて涙を流した。それは言葉に
出来ない感情を発露させるかのように、さめざめと彼女の頬を伝い
続けた。

どうしてこうなつてしまったのだろう？　どうしてこうするしか
なかつたのだろうか……？　考えたところで答えはきつと出ないのだ。
答えが出せるほどステラは長く生きては居ないし人生も経験してい
ない。人間らしい生活もしてこなかつた。でもこの心のどこかにま
だ残っているのだ。楽しかつた、ほんの僅かな一時の事……。ステ
ラがヴァンに、うさ子がホクトに、何かをしてあげたいと思つた事
……。

「確かめるしかないんですよ、ステラ」

風を受け白衣を靡かせながらケルヴィーは言った。

「確かめていくしかないのです。研究も実験も同じ事ですよ。判らない事は、確かめてみるしかない。そうしなければ確実にはならないから。判らないから。だから確かめてみなさい、ステラ。そして自分の思うように……やってみるといい」

「ケルヴィー……」

「貴方は僕の生涯の研究成果ですからねえ……。事實方に関しては、僕は応援し続けますよ。それこそ父親のように……ね」

頷き、ステラは振り返る。ケルヴィーの手を握り締め、ステラは初めて優しく微笑んだ。その美しい笑顔にケルヴィーは頷き、それからそつと差し出すのだ。あの日、ステラが手を伸ばして届かなかった物。黄色くて可愛い、小さな小さなプレゼントを。

ケルヴィーは自分を肯定してくれた。だからステラは自分の意思でこの戦場に居る。役割という後押しを受けて。それでも己の両足で舞台へあがったのだ。演目は殺戮者でも、それでも何かを掴んでみせる。心の中でわだかまっているこの思いを確かめて見せる。きつとそつ、彼なら。自分の全力を受け止めて、それでも彼なら。

「ホクト……ッ！ 貴方を倒し、私は私を認識してみせる……ッ
！！」

「じぢゃじぢゃ……うるっせえんだよ、ウサギがッ！！」

空中から襲い掛かる無数の刃の流星。体中を刻まれながらもホクトはガリユウを何とかギリギリの部分で制御し、黒い刀へと落ち着かせる。空中で構えたそれを振り下ろし、ステラへと叩き付けた。迸る白と黒の光。少女はうさぎの耳を棚引かせ、雷の拳で闇を打つ。ホクトは大剣を解除し、全身に闇を纏ってステラの拳を片手で受け止めた。

「流石、最速の魔剣だな……。剣じゃ追いつけねえが、拳ならどうだ？」

「インファイトの応酬ですか　　実に面白い」

「私は面白くないんだがなッ！」

二人纏めて吹き飛ばすようにシルヴィアが魔剣を大地へと叩きつける。吹き飛ばされたホクトが後退し、ステラはその場で転んで見せる。瓦礫に頭を突っ込んだステラが抗議するような目でシルヴィアを睨むが、王はまるで気にする様子もない。

「ふん、なんなら二人纏めてかかってきても良いんだぞ、雑魚どもが」

「ホクト、少し落ち着きなさい！　ガリユウの衝動に吞まれて戦ってたら持たないわよ！」

「わーってるよ、ったく……。めんどくせえことになったぜ……！」

ホクトとブラッドが体勢を立て直し、再び剣を構える。それに応じるようにステラとシルヴィアが走り出し、四つの影は再び激突す

る。その激しい攻防の彼方、玉座の間へと続く扉を開くシエルシの姿があつた。汗を流し、息を切らし、シエルシは足を止めず駆け寄つていく。嵐のように渦巻く、四人の魔力の中心へと。

螺旋ノ刻（3）

プリメーラが放つ回転攻撃。それは確かに物理的な威力は高く、決してホクトの一撃にも引けを取らないだろう。しかし相手は二人であり、そして片方はSランク魔剣使いである。昴は剣を居合いのように構え、精神を集中する。リフルは魔剣でメロディを奏で、昴の剣へと周囲の魔力を掻き集めていく。

収束した力は光となって鞘から溢れ、眩く熱の世界を照らし出した。直進してくるプリメーラの刃を受けた瞬間、昴はその全てを一刀に乗せ、一気に振りぬく。カウンターで放たれる技、“鳴神”。文字通り、結晶の音色を響かせながら斬撃は大きく放たれた。その威力は本来昴の持つ斬撃威力に敵の攻撃力を足した物。それがリフルの援護もあり、尋常ならざる威力を発揮していた。一瞬で通路ごとざっくりと刻み、真っ直ぐに進んでいたはずの連絡通路はずるりと落ちるようにズレ込んでいた。当然プリメーラの胴体は両断され、腰から上がどさりと落ちる事となる。

「い、一撃……！？」

「……………この間は借りを作つたが、二対一ではこんなものだ……………諦める、ルキア。お前の負けだ」

膝を着いたルキアの前、昴はユウガを突きつけて目を細める。
だがしかし、ルキアの表情に焦りのようなものは見えなかった。むしろ達成感のようなものさえ感じ取る事が出来る。違和感を拭う為に周囲を警戒しようとしたその時、ルキアを庇うように前に出るエレットの姿があった。先ほどまで気絶していたくせに、堂々とした様子でルキアを護らんとエクスカリバーを構える。

「そ、そこまでです白騎士！ これ以上少将をいじめさせるわけにはいきません！！」

「………………。さっきあっさり蹴散らされたくせによく庇えるな…………。まあ 悪いが死にたくなかったら避けてくれ。私もいい加減、体力的に限界だからな」

ユウガを振り上げる昴。その瞳が冷酷さを彩りながらも輝いたその時である。ルキアがエレットの影で小さく笑い、通路の何処かでカツンと、何かを引きずるような音が響いた。それに反応出来たのは音を使う魔剣の主であるリフルだけ。リフルは慌てて走り出し、昴へと手を伸ばした。

「避ける、昴ッ！！」

「え？」

音を立て、火花を立て、何か大きな“得物”が大地を薙ぎながら斬り上げる。昴の真横には何故か、いつの間にか。理由は判らなかつたが突然現れたビッグホーンが振り上げる剣が昴へと迫っていた。当然反応など出来るはずもない。つい先ほどまではその存在の欠片さえも感じ取る事はなかつたのだから。

伸ばされた指が昴を突き飛ばす。昴の足をビッグホーンの剣

が切り上げ、しかし致命傷には至らない、代わりに昴を突き飛ばしたりリフルの脇腹から刃は胴体へと深く食い込み、しかし寸前の所でリフルは剣を受け止めて胴体の両断だけは避けていた。しかしそれでもビッグホーンの巨体から繰り出される斬撃は重く、深く、激痛と共にリフルの身体を蝕んでいく。夥しい量の出血を伴いながらもリフルは戦意を失わず、ビッグホーンを睨んで見せた。

「……………き、さま……………ッ!? その、剣……………!?」

『……………』

ビッグホーンが剣を引き抜くと、リフルはよろめきながら後退する。壁に背中をぶつけ、そのまま力なくずると倒れていく。足を斬られた昴が倒れたまま身体を起し、血の海に沈むリフルを見つめ瞳を揺らした。

「リフルッ!!!! くそ……………なんで気づかなかったんだ……………!?!」

リフル! しっかりしろ、リフルッ!!」

「無駄でしょ……………? 死んだよ、そいつ……………」

ルキアが突き放すようにそう呟いた。昴の中で何かが音を立てて千切れ、少女は絶叫と共に立ち上がった。斬り付けられた足からは血が流れ続けている。痛みは激しく脳に警鐘を鳴らしている。だがそんな事はどうでもよかった。アドレナリンが沸騰するかのようになり、彼女の心の中から痛み感覚は全てが吹き飛んでいた。片手を翳し、リフルの全身を凍結させる。それは温度を奪う凍結ではなく、時間を止める凍結。 勿論長時間は魔力が持たない。だがこれなら、リフルを助ける事が出来るかもしれない。

一歩も動けない足を引きずり、昴は前進する。血塗れた剣を片手

に、鬼気迫る様子で戦いを止めようとはしない。一度目はミュレイを助けられなかった。二度目は他の全部を護りたいと思った。しかし実際やってみればこの様で。仲間一人、助けられない。

「いい加減、ウンザリなんだよ……」

歯が折れるほど、噛み締めて。昂は無事な両手でしっかりとユウガを掴む。ここから先に行かせればまた仲間が傷つく事になる。だからもう、一步も退けない。ここを一步だつて、通してはならない。

瞳に宿るのは失意でも絶望でもなく、確固たる意思だった。リフルを救い、自分も生き延び、そしてミュレイも護ってみせる。そんな無理難題を己に課した、戦士の顔である。その迫力にルキアは思わず後退し、ビッグホーンは武器を構えて拮抗する。

そう、退くわけにはいかないのだ。それは最初から同じ事。相手が誰だろうがなんだろうが。抗ってみせる。例えこの身が砕け散ろうとも。

例えこの身が砕け散ろうとも。願いをかなえる為にする努力の全てが無駄ではなかったのだと、そう信じていた。

「戦いを 止めてくださいッ!!」

シエルシの叫び声。それで手が止まったのはホクトだけだった。ホクト以外には彼女の声は届かなかったのだ。振り返った男は駆け寄ってくるシエルシを見つめ、それから舌打ちして叫んだ。

「来るなシエルシッ!!!!」

ホクトの怒号、しかしシエルシは止まらない。目の前では剣を振り上げたシルヴィアと雷撃を放つ直前のステラの姿がある。汗を进らせるホクトの視界、時が止まったかのように記憶が思い起こされる。駆け寄ってくるシエルシ。そう、あの時も来るなと言ったのに。

雨の中、駆け寄ってくるミラの姿を思い出した。それは魔剣^{ヴァン}が抱いたもう一つの記憶。雨の中、助けられなかった命。何故、無謀にも飛び込んでくるのだろうか。ホクトの苛立ちは一気に限界を突破した。シエルシはこの戦いがどれだけ過酷なのかわかっていないのだ。判っていないから、あんな無防備に駆け寄ってくる事が出来る。

いや、そうだろう。しかしそうでもないのだ。彼女は危険だとわかっていてもその身を晒すのだろう。戦いを止める為に。その為ならば何も厭わない。己の命さえも……。判っている。だからミラは。だから彼女は。雨の中に血を混ぜながらも微笑んで逝ったのだ。

シルヴィアもステラも、戦いに集中していて気づいていない。当然だ、わざわざ戦闘中に精神を削るほど集中して刃を振るっている間に、他の事など気づくはずもない。ホクトが気づけたのは奇跡か、あるいは“二度目”だからか。

人の気も知らず、シエルシは走ってくる。ホクトは歯軋りし、それからガリユウを投げ捨てた。放り出した力、そして何も持たないありのままの自分で戦いに背を向けた。ホクトは両手を広げ、シエルシへと振り返る。そしてその華奢な背中を抱き、大きくその場から跳んだ。

衝撃が爆ぜ、王の間に光が迸った。大理石の床が砕け散り、残骸と砂埃が飛び散る。そうして漸くその場に居た全員がシエルシが飛び込んできた事に気づき、愕然とした。その当の本人は。ホクトに片腕で強く抱かれ、きつく目を瞑っていた。死んだかと思

った　いや、死ぬつもりだったのかもしれない。けれども目を開けば、そこにはホクトの横顔があった。背を向けながらも片手でシルヴィアの剣を受け、ホクトはぼろぼろになりながらも立っていた。背中ではステラの電撃で焼け焦げ、服は弾け飛んでいる。片手で張った魔力障壁では防ぎ切れなかったシルヴィアの剣の威力がホクトの身体中を切り刻み、刀身を受け止めた片手は刃を深く受けて血を噴出していった。

ホクトはボロボロだった。シエルシの頬に血が零れ、それが直ぐにわかった。震える姫を片腕で抱きしめ、ホクトは口の端から血を流しながらも優しい眼差しでシエルシを見つめていた。急に悪い事をしたような気がしてシエルシは涙ぐみ、じっとホクトを見上げている。

「……………馬鹿が。それで戦いが止まるとでも思ったのかよ……………」

「……………ホクト……………!？」

「いいから、ちょっと黙ってる……………。直ぐに、片付けっからよ……………」

エリシオンを押し返し、ホクトは振り返る。手の中にガリュウを再召喚し、傷だらけの姿で男はしっかりと剣を構えていた。シルヴィアもステラも、その堂々とした様子に思わず言葉を失う。彼のしたことは矛盾している。だがそれでも　貫き通す姿勢だけは伝わってくるのだ。

「シエルシを庇ったか、ヴァン・ノーレッジ……………。愚かな事を。戦場に飛び込んでくるなど愚の骨頂……………そのまま我が剣で斬り伏せてやったものを」

「……………。あんまりそう、意地悪ばかり言うなよシルヴィア……………」

…。それに、斬るのは勘弁してやってくれ。俺の女に 手を
出すな」

優しく微笑み、冗談交じりにそう笑った。ガリユウから憎しみの
念は消え去り、今は純粹な気持ちで力を扱う事が出来そうだった。
ホクトは改めて剣を掲げ、それから魔力を大きく解き放つ。

「コードロクエンティア“ 剣創” …… 発動」

しかし次の瞬間、戦闘は完全に中断されていた。ホクトの封印術
式の解除も中断され、その場に居た全員が周囲を見渡した。激しい
地鳴り。尋常ではない揺れがルーニウムを襲っていた。

「こ、これは…！？ “ 浄化作戦” ……？」

ステラの一言で全員が状況を飲み込んだ。帝国の浄化作戦。
プレートを切り離し、落とすという史上最悪の作戦である。しかし、
これでは話がおかしい。切り離すのは敵国であるククラカン……そ
れが当たり前の事である。ステラもザルヴァトーレを切り離すなど
と、そんな話は全く聞いていなかった。

地鳴りは一気に激しさを増し、いよいよ立っている事も出来なく
なる。ホクトはシエルシを片腕で抱きしめたまま、空を仰ぎ見た。
ゆっくりと……そして確かに、世界がズレ始めている。第四界層プ
リミドール……その西側の大陸が、徐々に下へと沈み出していたの
である。

結合部分の大地が爆ぜ、爆発と火花が大地を奔る。やがてそ
れが両端を繋いだ時、ザルヴァトーレの終焉が始まった。堕ちて行
くプレート……逃げ場など何処にもない。シルヴィアはステラの胸
倉を掴み上げ、怒号を上げた。

「どづいつことだ!? 帝国は一体何をしている!？」

「こ、これは……帝国の作戦ではありません……。別の何者かが、デアナドライバのデステイニーに干渉しているとしたか……」

「別の何者かって、どこの誰よ!？」

「ホ、ホクト……ッ!？」

怯え、ホクトにすがりつくシエルシ。何故だろう、さっきまで死ぬ事は怖くもなんともなかったのに、ホクトの寂しげな笑顔を見てしまった瞬間から急に死が恐ろしい物になってしまった。否、きつと恐ろしいのは自分の死ではないのだ。この人が……大切な人が死んでしまう事が……。そして自分が死に、彼が苦しむ事が……。姫はたまらなく恐ろしいのだ。だから泣きそうな顔でホクトを見上げる。男は姫を抱きしめ、優しく耳元で囁きかけた。

「大丈夫だ、俺にしっかり捕まってる。ただ落っこちるだけだ。何とかしてみるさ」

「……何とか……ですか……?」

「何せ俺は不死身の魔剣狩り　ホクト君だからな　」

悪戯つぼくホクトが笑った直後、轟音と共にプレートは落下を開始した。ついに維持が出来ず、次々に街が瓦解し瓦礫の塊となって散らばっていく。それはルーンリウムも例外ではなく、城はホクトたちも含めたまま、丸ごと切り離され虚空へと落ちていく。絶叫と悲鳴の中、ホクトは空中でガリユウを掲げた。黒い剣は巨大な魔法陣を浮かべ、その中心でホクトはありったけの力を込めて空にその

力を解き放った。

絆（1）

北条北斗の物語。それは北条昴の物語を語る上で欠かせないストーリーである。そしてその二つが辿り着く場所。ひとつの到達点。それは物語が始まる数年前に、既に“観測者”の手により、この世界に復活を遂げようとしていた。

暗闇の中、結晶の樹林。世界の最下層の更に下。アンダーグラウンドと呼ばれたその場所は、常に結晶によって閉ざされてきた。その死と停滞の象徴である結晶の森の奥地、その遺跡は眠っている。

古代遺跡フラタニティ。その奥地の更に地下。百を超える封印隔壁の更に奥地、それはあった。シャフトと呼ばれた世界の中心部、その更に内側に続く光の道。天空より降り注ぐ光を浴び、それは静かに佇んでいる。結晶。否、剣の森の中で眠る少女……。神々しく輝く光と剣を見上げ、白衣の女は目を細めた。

「貴方がわざわざ異世界から探しに来たものは、彼女なのでしょう？　メリーベル・テオドランド」

白いドレスを揺らし、シャナクは振り返る。その笑顔の先、メリーベルは複雑な表情を浮かべていた、それはそのまま彼女の心境を如実に表している。そう、確かにこれを見つけ出す為にここにやってきたも同然……。だが、出来る事ならば見つからない方が良かったのかもしれない。

彼女、メリーベル・テオドランドは異世界からやって来た来訪者である。彼女の住んでいた世界は、昴やホクトの住んでいた世界とも異なる。彼女の世界には創世の神が君臨し、その神の同行に人々はその世界を左右されてきた。世界というシステムを前に、全

ての生命は仕組まれた命である。それは正しくあり、そして大きな過ちでもある。一つの間違いが。神の一つの過ちが。世界全てを狂わせてしまう事もある。

メリーベルは一度、神と呼ばれる存在と戦った英雄である。その物語は彼女の中でまだ鮮明に色づいている。白き剣の勇者と、その勇者と共に世界を救った救世主。歪んだ世界を正し、秩序と意思を人の手に取り返した彼女だからこそ、この世界の異常さに眉を潜めずには居られなかった。

世界を支配するシステム、それは人が生み出した機械によって成り立っている。人間は機械の言いなりになり、この世界の真実さえ知らされる事もない。溜息混じりに白衣のポケットに手を伸ばす。忍ばせていたのは煙草の小さな箱で、彼女はそれを口に咥えて指を弾いて火をつけた。

「……………最悪」

たまにしか吸わない煙草は気持ち切り替える為に必要な彼女なりの技術だった。煙を深く吐き出し、忌々しく神を見上げる。結晶の剣によって護られた、この世界に君臨する“罪悪”の守護者。異世界を駆逐する者。 “アニマの導”……………。長年彼女がこの世界で捜し求め、そして漸く見つけてしまった異形の神。溜息を漏らさずにはいられなかった。指先で煙草を押し折り、それをぎゅつと握りつぶす。

「アニマの導……………。その代行者、 “創魔剣ロクエンティア”……………。間違いなく、今も彼女は生きている。この世界の罪を夢見ながら……………」

「罪を夢見て贖う神、か……………。ロマンティックも度が過ぎるとどうしたものか」

「帝国はアニマの導を隠匿する隠れ蓑なのかもしれませんね。貴方の睨んだとおり、ここは世界の闇の中枢……。剣とは死と停滞の象徴……。我々は皆、アニマの導によって生み出された罪悪の羊……。伝承にあつた事は真実。これで私も行動に移る事が出来そうです」

「帝国と戦うつもり？ ハロルドはミレニアムの意思を忠実に遂行する。いくら貴方が古代文明に明るい学者だろうと、ザルヴァトーレの女王だろうと、容赦なく彼は貴方の国を潰すわ」

「それでも誰かが立ち上がらねばならないのです。例え勝利できずとも、この世界のどこかに革命の息吹を起せばいい……。そして願わくば、七つの大罪を以ってして、神の悪夢に終止符を……。それが、貴方のシナリオでもあるでしょう？」

シャナクは優しく微笑み、それからメリーベルの隣に並んだ。二人で共に世界の中枢を仰ぎ見る。相変わらず神は無垢に眠り、そして目覚める気配はない。シャナクが立ち去っていく足音を聞きながらメリーベルは目を閉じ、もう一度過去の事を思い起こしていた。遙か遠くに消えた、想い出の世界……。これから、この世界はどう変わっていくのか。そして自分は動くべきなのか。

立ち去るシャナクの向かう先、一人の少年が女王を待っていた。闇と死を象徴する剣を宿された、アニマの導により選ばれた七つの大罪、その一人である。少年は黒髪を靡かせ、神の座を仰ぎ見る。彼には何となくわかったのだ。いつかまた、もう一度この場所に戻ってくるのだと。そしていつか、この場所で自分は朽ち果てるのだと。そうした定めを受けて生まれてきた以上、避けられないのだ。身体に刻み込まれた剣の紋章。それから逃れる事は出来ない。運命に反逆する事など、出来はしないのだと。

「……………う……………」

気がつけば、私は見慣れた天井の下に横たわっていた。ククラカ
ン王都、ラクヨウ城。ミュレイの部屋に敷かれた布団の中、私
は寝汗で全身をぐっしょりと濡らしながら目を見開いていた。

身体を起し、全身の様子を確認する。足には包帯が巻かれている
が、特に重傷というわけでもなく、傷は既にふさがりつつあるよう
だった。立ち上がり、街を見下ろす。ラクヨウの街は壊れては
いなかったし、パージもされていなかった。ほっと胸を撫で下ろし、
それからその場に座り込む。一体何がどうなってここにいるのか…
…。そのあたり、記憶は不鮮明だ。

額に片手を当て、何とか思い出そうと努力してみる。確か……帝
国の浄化作戦を阻止しようとして乗り込んだホルスジェネレータ内部で、
剣誓隊とやりあう事になって……。そうだ、あれからどうなったの
だろう？ 慌てて立ち上がり、部屋を飛び出した。城内には以前と
同じ活気が戻っており、まるで戦争は終了してしまったかのようだ
がある。まさか時間が巻き戻ったのか……。そんな悪寒が駆け抜けたが、
どうやらそうでは無かったらしい。ミュレイが私の姿を見つけ、廊
下を歩いてくるのが見えた。私は自分からミュレイに駆け寄り、そ
の身体をぺたぺたと触って無事を確かめた。

「ミュレイ！ よかった、無事だったんだ……………！」

「お主の方こそ……………。全く、一人で無茶して戦いおって……………。魔力
の消耗が激しすぎて今日までずっと寝込んでおったのじゃぞ？」

「今日まで……………って、私は何日寝てたの？」

「大体三日じゃ。腹も減っておるじゃろう？　まずは落ち着いて食事でも……」

「それどころじゃないでしょ！？　パージはどうなったの！？　戦争は！？」

ミュレイの両肩を掴み、顔を寄せて叫んだ。彼女は何故か困ったような表情を浮かべ、それから私の手を握り締める。

「昴、その事なんじゃが……」

何となく、ミュレイの表情を見て聞きたくない話である事は想像出来た。案の定、この戦争の決着はお世辞にも綺麗な物とは言えず、そして状況は私が思っていたよりもずっと悪く、ずっと残酷だった。

帝国軍はホルスジエネレータを諦め撤退……。というのも、帝国側が意図しない異常事態が発生したらしく、剣誓隊も慌てて撤収していったらしい。その異常事態というものの結果……ザルヴァトーレ王都、ルーンリウムを含む第四界層プリミドールの東半分側が浄化作戦　プレートパージの犠牲になったらしい。そもそも何故、支配下にあるはずのザルヴァトーレがパージされたのか……。何もかもわけがわからない。けれども何より今は、ルーンリウムがプレートごと切り離されたという事実が重要である。ラクヨウ城の天守閣から見下ろす景色の先。遙か彼方まで続いていたはずの大地。それは、丁度シャフトの向こう側だけが綺麗に切り離され、虚無の世界が広がっていた。

「そ、そんな……。それじゃあ、みんなは……」

「……。無事を祈るしかないが……。戻ってくる保障もない。何

しろ、大地が丸ごと崩落したのじゃ。無事で居られるか……」

風の中、ミュレイは心苦しそうにそう呟いた。私は手すりに拳を叩きつけ、強く歯を食いしばった。これが帝国のやり方だというのならば、一体何が狙いで何を成す為にそんな事をしたというのだろうか。一体どれだけの数の人間が死に、どれだけの悲しみが世界にばら撒かれたのだろうか。

ウサクもゲオルクも……。アクティもブラッドも、あの憎たらしいホクトも……。プレートンの崩落に飲み込まれ、闇に消えた。それが現実だ。私たちはククラカンを護った。でも、ザルヴァトーレはどうだ？ 確かにそれは敵だった。敵だったけどでも、その国に住む人間全てが死ねばいいなんて一度も思っちゃいなかった。

「戦ってれば、仲間が死ぬかもしれないって！ そんな事は判つてたけど……でも……！ 誰かを殺すかも知れないって、それくらいの覚悟は決めてたよ！ でも……っ！！ 何だよ、それ……。何なんだよ、これ……っ」

「昂……」

「ハロルドは何がしたいんだよ！？ なんてそんなにこの世界を滅茶苦茶にするんだ！？ 皆本当は戦いたくなんかないのにつ……！」

ミュレイに言ったところでしょうがない言葉……。それが次から次に吐き出された。それはきつと私が彼女に甘えているからなのだろう。でも涙を止める事も、言葉を止める事も、今の私には出来そうも無かった。

「………………。そうだ……リフルは？ リフルはどうなったの！？」

「落ち着け、昴……」

「落ち着いてなんか居られないよ！！　ねえ、リフルは？　彼女は酷い重傷だったんだ。魔力が切れる限界まで時間を止めてたけど……ミユレイの回復魔術なら、彼女を救えたでしょ！？　間に合ったんだよね！？」

何故か、ミユレイは何も言わなかった。ミユレイがすごい魔術師だっていう事は知ってるし、実際私の足もミユレイが治してくれたのだろう。なのにどうして、ミユレイは黙っているのだろうか。どうして悲しげな目をしているのだろうか。何となくわかっていった。理由も……現実も。今の自分がどれだけ滑稽なのかも。戦えば、仲間が死ぬかもしれない、誰かを殺すかもしれない、そんな事は判っていた。判っていたからやり直したんだ。私は世界の法則を捻じ曲げてまでそれを変えたかった。でも　その結果、私にどんな事が出来たというのだろうか。

「……………助けられなかった」

それ以上聞きたくなかった。でも　ミユレイは言葉を続けるから。

「リフルは……手遅れじゃった。彼女は……助けられなかったよ……」

風が強く吹きぬけ、私たちの髪を靡かせる。また、護れなかった……そんな事を考えた。死んでしまう誰かを救いたくて、護りたくて、せつかく力を手に入れても……ほら、やっぱり何も出来ない。私は酷く……酷く、無力だ。

何故か笑いがこみ上げた。泣きたいくらい悲しいのに、どうして

だろう？ 笑うことしか出来なかった。その場に崩れ、私は空を仰ぎ見る。愚かな私を見下し嘲笑するかのように、皮肉にも空は真っ青だ。とても澄んだ……夜明けの青空。眩しすぎるその景色に私はそっと瞼を閉じた。

絆（１）

目を覚まして最初に見た景色。その悲惨すぎる光景にシエルシはただただ呆然と立ち尽くす事しか出来なかった……。

崩れ果てたかつての水の都、積み重なった瓦礫とプレートの残骸……。シエルシはただただ立ち尽くす。全身に付着した砂も埃も気にはならなかった。煤けた頬を涙が伝い、その跡をはっきりと記す。姫は両膝を付き、かつて己が暮らした美しい都だったものを前に風に吹かれていた。

「……………。姉上…………？ ステラ…………？」

はっとして立ち上がる。何故。何故自分は生きているのだろうか。周囲を見渡しても、生きている者など誰も居ない。ただ一人だけ生き残った……そんな考えが脳裏を霞め、酷く胸が苦しくなった。あんなにも止めたかった戦い……護りたかった国、命。全てはまるで泡沫の夢のように消え去った。残酷な現実には打ちのめされ、もう一歩も動けそうになかった。それでも何故か、また足を踏み出す。

歩いて歩いて、生きている人を探した。どこにも、誰も、そこにはいなかった。瓦礫をひっくり返すと、ルーンリウムの住人の死体

が隠れていた。涙を堪え、シエルシは懸命に歩いた。幼い頃何度も通ったあの丘も、嫌な思い出も素敵な思い出も一緒に詰まった城も、高い城壁もあの教会の鐘も。全ては崩れ去り、跡形も無く崩れ去っていた。頭を抱え、声にならない悲鳴を上げる。頭がおかしくなりそうだった。過酷な目の前の景色は、少女の思考の許容量を大きく超えていた。誰がこんな事になる事を予想しただろう？ 水のはらは消え去り、残ったのは死の大地。何も見たくなくて、何も聞きたくなくて、目も耳も塞ぎたかった。だというのに何故かまた歩き出す。記憶の中、かすかに残っている。落下の最中、ホクトが傍に居てくれた事。彼の剣が輝きを放ち、闇の閃光が青空をすべて飲み込んだ事。ツギハギだらけの思考の中、捜し求めるのはホクトの姿だった。だからまた、歩き出す。

「ホクトーッ！！ いるんでしょう！？ 生きて、いるんでしょうっ！？ どこですか……？ どこにいますか！？ ホクト！
ホクト ツー！！」

乾いてへばりつく喉から懸命に声を放った。何の返事も聞こえない死の世界に少女の叫びがこだまする……。涙を拭い、シエルシはまた歩き出した。両手も両足も傷だらけだった。爪が割れ、血が滲んでも歩き続けた。ホクトを……彼を求めて。

やがてその願いは叶えられた。ホクトはシエルシの視界に現れ、教会の鐘の傍にうつ伏せに倒れていた。慌てて駆け寄ろうとしたシエルシは二度転倒し、それでもはいつくばって近づいていく。ホクトの背中が黒く焦げ、服は燃え、体中が切り刻まれていた。それが自分を庇った傷なのだと理解した時、言葉に出来ない切なさが全身を駆け巡るのを感じた。

傷だらけの男をひっくり返し、抱きかかえる。ホクトはまるで死んでしまったかのようにぴくりとも動かず、呼吸も完全に止まっていた。シエルシは無我夢中でホクトの胸に両手を当て、心臓マッサ

ージを繰り返す。躊躇も無く唇を重ね合わせ、人工呼吸も行つた。それでもホクトは目覚めない。最悪の悪寒が脳裏を過ぎり、シエルシはわけもわからずホクトの顔を叩いた。

「ホクト……ホクトツッ！　お願い……お願いだから、目を開けて……。お願いです……。ホクト、貴方は大丈夫だって……だいじよぶだって、ゆつたじゃないですかあ……っ」

胸にすぎり、堪えきれなくなった涙をぼろぼろと零しながら姫は動かない剣士の手を握り締めた。きつくきつく、出来る事ならば己の命を分け与えたいと願う。ホクトにずっと会いたかった。彼の声が聞きたかった。彼が自分を護ってくれた時、心の底から安心出来た。あんなに絶望的な状況だったのに、“大丈夫”の一言で全ての不安が吹き飛んだ。

「貴方が……貴方が居なくなったら私……っ！　ねえホクト、もう一度私を叱って……？　また剣の稽古をつけて下さい……。下らない事で言い争ったり、一緒に食事したり……。私、やっと判ったんです。貴方に聞いて欲しいんです。私、貴方が居なくなったら……きつと、生きていけないくらい、貴方の事が……っ」

じつと、ホクトの顔を覗き込む。もう死んでしまったのだろうか。もう悪態をついてもくれず、優しく頭を撫でてもくれないのだろうか……。悲しくて苦しくて、言葉に出来ない絶望が全身を駆け抜けた。止まらない涙……。しかしその雫がホクトの手に零れ落ちた時、男はそつと目を開いたのだ。

「……。よう……。無事か……。メイド……。プリンセス」

「ホクト！？　あ、貴方……。心臓がっ！」

「止まつてる、らしい、な……。やば、い……。これは……。死ぬかもわからん……」

「冗談を言ってる場合じゃないんですよ!? 早く手当てをしないと……!」

「シエルシ、冗談じゃないんだ。よく、聞いてくれ……。俺は……多分、身体はもう、死んでる……」

ホクト ヴァン・ノーレッジの肉体は既に生死という概念を超えて存在している。その身体が損傷しようとする機能が停止しようと、ガリユウに捕食された“魂”のストックが肉体を再生し、仮に意識が消え去ったとしてもその代わりに何者かの意識を宿し、再び肉体を活動させるのだ。

故にホクトは絶対に消滅しない。だがその身体は確かに死に至るし、意識も永遠ではない。ホクトの身体は本来ならば即座に修復が開始され、今頃平然としているはずだった。しかしプレート崩壊時、仲間を助ける為に自分で封じていた力の全てを解放してしまったのだ。

その代償として、ホクトは己の中に宿っていた魂のストックを多く消費し、そしてガリユウを扱う肉体の魔力も底を尽きてしまっているのである。生命力であると同時に魔剣、魔術の源でもある魔力が枯渇している事により、ガリユウの復元能力が働かず再生も追いつかないのである。

「魔力の枯渇……!? じゃあ、それを何とかすればホクトは助かるんですね!？」

「……気軽に、言うな……。魔力を回復なんて、そんな簡単に……」

出来ねえよ……」

「いいえ、出来ます。ガリユウに魔力を与える……それだけでいいのなら」

シエルシは涙を拭い、強く微笑んだ。そうしてホクトの握り締めていたガリユウを持ち上げ、自らの両手をホクトの手に重ねる。見ればシエルシはじつとりと汗をかき、肩で深く呼吸を繰り返していた。シエルシが何をしようとしているのか判らないホクトの目の前、姫は凶行に走る。

姫は抱きかかえるようにしてガリユウを己の身体に突き刺し、苦痛に顔をゆがめたのである。少女の小柄な身体に対し、その剣は余りにも凶悪で巨大すぎた……。血が止まらず、シエルシは口から大量の血を流しながらホクトに微笑みかけた。

「お……いつ!? 馬鹿野郎、何してやがる!？」

「ガリユウは、人の命を喰らう剣……。なら、私の命を貴方に……」

「ふざけるな!! 冗談じゃねえ、てめえ……ッ!? 今直ぐ止めるッ!!」

「やめません……」

「止めるって言うてるんだッ!!!!!!」

「やめません　ッ!!　貴方が死んでしまっくらいなら私……ここで死んだ方がマシです!!」

シエルシが叫ぶと同時にガリユウに魔力の光が戻り、剣が目覚め

るようにして目を開いた。ガリユウの刃を抱くようにしてシエルシは微笑み、それから目を閉じる。

「さあガリユウ……。貴方の、主を……。貴方の力で、癒して……」

元来持つシエルシの純度が高く膨大な量の魔力を浴び、ガリユウは見る見る力を取り戻していく。魔力を吸い取られる度にシエルシの全身に激痛とも快感とも取れるような異常な感触が駆け抜け、うめき声が漏れる。それとは対照的にホクトの身体は徐々に回復し始めていた。

「シエルシッ!? くそ、ガリユウ……。止める!!! ヴァン!!! てめえ……。ッ!!! 止まれっつってんだろがアッ!!!」

徐々に身体が動くようになり、ホクトは身体を震わせながらもゆっくりと起した。そうしてガリユウの柄を改めて握り締め、シエルシに顔を寄せる。二人の命は今剣を伝って一つに繋がっており、互いの命の力がまるで自分の事のように感じる事が出来た。

「落ち着け、シエルシ……。! ガリユウをコントロールして、お前の体の“修理”も同時に行う……。! ちっとばかり障害が残るかもしれないねえが、文句は後で聞くぞ……。ッ」

「判りました……。貴方に、任せます……」

そこでついに耐え切れなくなったのか、シエルシは目を閉じてふらりとホクトに倒れこんだ。その身体を抱き留め、ホクトは剣に意識を集中する。自分以外の物を治すなんて事は試した事もなかったが、ガリユウによって侵食したシエルシの肉体を一度ガリユウの一部として術式化。それを魂のストックで修復すれば、或いは

。思考すると同時に作業を行い、ホクトが常人ならざる集中力でシエルシを癒していく。

「頼むぜ、相棒……？　こんな所で死なれちゃ困るのは、お前だつて同じだろ……！　シャナクと約束したんだ……娘を護るって。ミラと約束したんだ……！　もう、こんな事は起きないって……！　後悔してるなら、なんとかしてえなら、気合でどうにかしろよヴァン……！！　俺の命　テエメに預ける　ッ……！」

ガリユウが目を見開き、大地に黒い魔法陣が浮かび上がる。光の中でホクトは強くシエルシを抱きしめていた。お互いの存在を確かめ合うかのように。彼女の存在を、心に刻み付けるかのように。人の気も知らず、シエルシは安心しきった様子で寝息を立てている。それがホクトには少々憎たらしく　そしてとても心強かった。信じてもらえるのならば、きつとミスはしない。力は何倍も発揮できる。それをガリユウは　ヴァン・ノーレッジは、知っているから。

闇の光が姫の身体を包み込み、瓦礫の世界の中に光が立ち上った。優しい力の中、シエルシは確かに見た気がした。ホクトが懸命に自分を治すその向こう　。微笑んでいる、紅い髪の姫の姿を　。

絆(2)

「俺のやり方が甘っちょろいって、あんたは思うか？」

瓦礫の山の中、ホクトは一人立ち尽くしていた。身体は既に十分に動くようになり、術式により肉体は再構成され復活を遂げた。傷を修復した身体を眺め、ホクトは萎びた煙草を一本口に啜える。彼の背後には上着をかけられ、すやすやと眠るシエルシの姿が。そしてホクトの足元には突き刺さった一振りの大剣がある。

かつて魔剣狩りと呼ばれた怪物にして、今はその魔剣狩りそのものとなった男　ヴァン・ノーレッジ。魔剣に飲み込まれた哀れな剣士はホクトの言葉に応えるはずもなく、ただ静かに佇んでいる。ホクトは片手をズボンのポケットに突っ込み、死の世界を化した大地を見渡した。

「実際、俺は甘っちょろいんだろうな。憎みきる事も、殺しきる事も出来ない……。中途半端で情けない男だ。たった一人の妹の笑顔さえ護ってやれなかった、どうしようもない男さ。だけどなヴァン……。最近俺も、こんなでもいいんじゃないかねえかと……。そう思ったりするわけだ」

紫煙を吐き出し、ホクトはガリユウの傍らに腰を下ろした。黒く鈍く輝く剣。その刀身を覗き込み、ホクトは笑みを作った。そう、何もかもが中途半端。この世界において、目的も無く。まさに彷徨う幽鬼が如く、彼はただ力だけを片手に旅をして来た。何かを護るでもなく、何かを殺すでもなく。ただ本当の己を捜し求めるかのように、道に迷った子供のように……。歩き続けてきた。たった一人で。

最初はそれでもよかった。何も見つからずとも、得られる物が無

くとも、それでも別段構わなかった。しかし旅の途中で様々な人と出合い、仲間を作り、手を取り合って戦った。この世界において絶対的な正義がなんなのか、そんなものがそもそも存在するのか、それは彼には判らない。善悪とは主義主張、立場によって逆転するものだ。全てにおいての正解、万能なる救いなど存在せず、恒久の平和も在り得ない。彼はロマンチストではあったが、同時にリアリストでもある。ありのままの世界を受け入れ、その流れに逆らわずに生きる……。風頼な生活も、確かに悪くはなかった。

「俺にはこの世界で戦う理由はなかった。ただ生きていたから……。この身体を与えられていたから、俺はここに居た。でもな、ヴァン……？　こんな俺でも、また何かを護る為に戦えるのかね」

呟くように漏らす言葉。決して他人には弱さを見せない男が投げかけた、虚空への言葉。剣は何を思い、何を応えるのだろうか……。どんなに待ってみた所で、どんなに想像してみたところで、返事など返ってくるはずもない。だがホクトには判るのだ。ガリユウの考えている事が。ガリユウの中に眠るヴァンと、ヴァンより以前にこの剣を持っていた者達の声が。だから剣を握り、それを引き抜いてじっと見つめる。応えは無くとも、答えなら最初から決まっていた。

「正直、この世界の事はどうでもいい。けどな、妹は……。昴は何とか帰してやりてえし、仲間が傷つくのは我慢ならねえ。だから俺はテメエ勝手な理由であんたをぶん回して、右往左往の障害全てを斬り伏せるぜ？　あんたは下らない理由で戦うなって言うかもしれないねえが、どうやら俺は生まれつきからくだらねえものに命を投げ出す性分らしい」

ヴァン・ノーレッジが守ろうとしたもの。彼が愛そうとした

世界。目で見た物、耳で聞いた事、身体中のあらゆる感覚で感じた世界のすべて。ホクトはヴァン・ノーレッジにはなれない。同じ肉体を持ち合わせる存在だとしても、彼の気持ちの全てを感じることは出来ない。けれども思うのだ。所詮この黒き魔剣は命を喰らい屠る化け物……。だがきつと、この剣が願っている事はそんなことではないのだと。

力はただ力。使い方次第、使う者次第でどんな形にも色にも変わる……。かつて師でもある女王は彼にそう教えた。その教えを今はホクトも受け継いでいる。自分がここにいる理由、この世界のすべて……。些細な事だ。だがその渦の中で生きていく。剣の実体化を解除し、その身体に宿して男は煙草をぎゅっと握りつぶす。煙と共に、心の中の靄も吐き出すように大きく息を吸い、吐き出した。空に上る軌跡。ホクトは目を細めてそれを見送り、踵を返す。

「まあ、せいぜい笑えよ“傍観者”。いつかてめえを、ぶっ飛ばしに行く」

ホクトが見上げる視線の先、誰かが密かに笑みを浮かべた気がした。男は風の中、大きく髪を靡かせながら立ち尽くす。その後、人の気配を感じて振り返った。そこにはホクト同様ボロボロの姿で立つ、帝国の番犬ステラの姿があった。

「よう、無事だったか」

「あの程度で私が死ぬはずがありません。まあ、肉体の四割が破損した為現在も再生しきっていないのは事実ですが」

血の滲んだ脇腹に手を当て、ステラは冷や汗を垂らす。ホクトがガリユウを構えるより早く、ステラはミストラルを手に走り出していた。世界最速の魔剣使いの加速にホクトが剣を合わせて放とうと

したその時である。ステラは爪先を瓦礫の塊に引っ掛け、そのまま盛大に前転しながら転等した。スピードの所為で止まる事が出来ず、コロコロ転がってホクトの足元にばったりと倒れこんだ。

立ち上がる余力が残っていないのか、地面に着いた手を小刻みに震わせているステラの様子にホクトは黙って剣を収め、代わりのその手を差し伸べた。宿敵から差し出された右手にステラは戸惑い、しかしそれにおずおずと己の手を重ねた。助け起されたステラの足元はやはり覚束無いもので、ホクトは苦笑を浮かべて敵の身体を支えた。

「おいおい、お前は生まれたばかりの子鹿か……？ ヨタヨタじゃねえか」

「……余剰魔力を、ほぼ使い切ってしまったようです……。今なら私も、恐らく貴方の攻撃には耐え切れません」

何故かステラは寂しげに、しかし真つ直ぐにホクトを見上げた。少女が何を望み、何を言わんとしているのかホクトには判ってしまつた。眉を潜め、それから舌打ちする。自分勝手に生きると思つたばかりだが、“殺してくれ”と懇願する女を手にかけるほど、暴虐無人にはなれそうもない。ステラの身体を支え、そつと足元に座らせる。完全に弱りきっている今のステラはあの恐ろしい帝国の尖兵とは思えぬほど脆く、文字通り軽く締めるだけで命を奪えそうだった。

「今なら貴方の攻撃で止めを刺せるでしょう……。何故、躊躇うのですか？」

「女は斬らねえ主義だ」

「しかし、敵は殺さねばならない」

「だったら一時休戦ってことで一つ手を打たねえか？ 俺も今回の件で、お前に訊きたい事は色々あるんだ」

「一時、休戦　？　そんなものが……あるのですか？」

ステラはその初めて耳にする言葉に驚きを隠せなかった。戦いを休む　言葉の意味は理解出来た。だが少女にとって戦いとは三百六十五日継続するものであり、それが途中で止まるなどという発想は頭の片隅にすらなかった。啞然とするステラを見下ろし、ホクトはその頭をぐりぐりと撫でて頷いた。

「兎に角、俺はお前を殺さねえ。お前がそれを望んだとしても、だ。他人の願いを叶えてやる義理なんかねえよ」

「……………そうですか。では、一時休戦……………を、しましょう」

「そうしてくれ。前から言いたかったが、お前は何でもいいから俺に特攻するのはやめろ」

「……………そうですね。ヴァン……………いえ、ホクト」

ステラはちょこんと岩の上に座ったまま顔を上げ、表情を一つも変えずに呟いた。

「ありがとうございます」

ホクトの脳裏、笑顔のうさ子が過ぎり何とも言えない気分が去来する。そっぽを向くホクトの横顔、それをステラはじっと眺めてい

た。それから周囲の状況を確認しようと唐突にうさぎの耳のような形をした索敵センサーをピーンと真っ直ぐに立て、急に力み始めた。ステラの奇行に一瞬戸惑い、しかしホクトは隣に屈んで耳を観察してみる。

「な、何してんだ？」

「索敵です。周囲にまだ生存者が埋まっている可能性もあります」

「お前……助けるつもりか？」

「それが何か？」

「いや……。お前意外と普通に人助けとかするんだな……とと思って」

「ホクト、わかりました」

「何がだ？」

「近くにシエルシがいます」

「ああ……。そこにいるわけだが」

「シエルシッ!？」

ホクトが指を差すと、ステラは慌てて立ち上がった。それからシエルシに駆け寄る途中で盛大にすっころび、またごろごろと転がっていく。結果的にシエルシの傍に辿り着いたステラは眠っている姫のほっぺたを指先でつつんつつんしながら青ざめていた。

「これは……死んでいるのでしょうか……？」

「いや、生きてるだろ」

「そうですか。ではシエルシ、起きてください」

「ひんぬうッ!？」

眠っていたシエルシの脇腹を強く突っつき、ステラは問答無用でシエルシを起した。ついさっきまで剣が刺さっていただけにその痛みは身体の内側からじんわりと響くように残った。シエルシは慌てて立ち上がり、目の前のステラを見て涙目に笑った。

「ステラ……! 無事だったんですね!？」

「はい、なんとか。貴方の方こそ、無事で良かった」

「良かった……? ステラ、私の事を心配してくれたんですか?」

「はい、友達ですから。何か、おかしな事を言いましたか?」

相変わらずステラは無表情で、大きくて丸い目をぱちくりさせていた。しかしシエルシは心の内からこみ上げる感動を抑えきれず、徐にステラを抱きしめた。正座のまま首をかしげるステラを抱き寄せ、シエルシは温もりを確かめるように目を閉じている。ホクトはそんな二人の抱擁を背後から眺め、その間に入りたいなあと考えていた。

「さて……これからどうしたもんかねえ。とりあえずシエルシ、具合は大丈夫か?」

「え、はい……？ 私は何ともありませんよ？」

「そうか……。まあそれはそれで問題なんだが……」

ホクトのぼやきはシエルシには聞こえなかった。とりあえず、どちらにせよ三人ともダメージが大きすぎる。何をどう動くにせよ、まずは休息が必要だろう。崩落に巻き込まれた他の面子も気がかりである。ホクトは落ちていた木材に魔術で火をつけ、てきぱきとベースキャンプを固めていく。シエルシも手伝おうとしたのだが、サバイバル的な技術も知識もない姫など役に立つはずもなく、途中でホクトに戦力外通知を出されてしまう。ステラは充電が終わっていないので大人しく正座して待っていた。

「さーて、とりあえず俺は寝る……。お前らも適当に休んで置けよ……。ちよつと休んだら行動開始だ。んじゃおやすみ」

一方的に告げるとホクトはごろりと岩で作ったスペースの上で眠り始めてしまった。焚き火に当たりながらシエルシは寒そうに身体を震わせ、ステラは荒廃した世界を見渡した。これが、戦いの末路。 “休戦だ”と言ったホクトの顔が脳裏を呼び覚ます。戦いを続けてきた。戦い続けるのだと、これからも……。そう思っていた。けれども戦わなくていい事があった。そして戦いの果てにある破滅の中に居る。少女は風の中で立ち上がった。何を願い、何を望み、何の為に戦うのか。理由もない空虚な身体に、世界の闇は余りに大きくなだれ込む。迷う魂。その行き着く先はまだ、誰にも見えな
いのだ……。

「ああ、昴……？ 良かった、目が覚めたんだね」

ラクヨウ城内に設置されたバテンカイトスへと通じる転移装置。それを經由し、昴はエル・ギルスにやってきていた。娼館バテンカイトス。主であるメリーベルの部屋、そこにロゼは居た。至つて普段どおりのロゼの様子に昴は何も言えず、駆けつけた所為であがつた息を整え、ロゼの前で立ち尽くしていた。机の上には眼鏡をかけたメリーベルの姿もあり、二人は何事かと昴を見つめている。

「ごめん、ロゼ……。私は……リフルを助けられなかったから……」

「ああ、その事が……。いいんだよ、もう」

「え……っ？」

リフルとロゼは親しかったはずだった。なのにロゼは親しい人間が死んだというのに泣きもしなければ喚きもしなかった。仲間を守れなかった昴を前にしても取りも出す事も無く冷静で、真っ直ぐに彼女の目を見つめている。昴はここに謝りに駆けつけたのだ。助けられなくてごめんなさいと、頭を下げるつもりで来た。だがロゼの意外な反応にその先の言葉が続かない。

「い、いいつて……。いいつて、どういう……？」

「リフルとの別れは、僕なりに済ませたんだ。だからもう、その事

「はいんだ」

「……済ませた、って……!?」

動揺する昴、その肩を叩いたのはメリーベルだった。彼女は黙って昴を部屋から連れ出し、螺旋階段を下りる途中で足を止めた。何がなんだか判らない昴は目を丸くするばかりで、メリーベルはその様子に溜息を漏らした。

「メリーベル、どういう事なの!? ロゼはどうしちゃったの!?」

「彼は今、自分の中で大切な人との別れを乗り越えようと必死なんだと思う。彼がこれから先強く生きていけるかどうかの節目だから、今はそつとしておいたほうがいい」

「そ、そういうわけにはいかないでしょ!? 大切な人が死ぬのは……凄く辛くて……! 悲しくて一歩も前に歩けなくなるくらい、苦しむものだから……!」

「その気持ちはわかるよ。でもね、そうやってもがくだけが人の歩みじゃない。時には自分の弱さと向き合い、それを乗り越えていく事も必要になるから」

かつて昴は兄との別れを経験した。そして生きていくのが嫌になるほど塞ぎこみ、その心の傷は今も消えずに残っているほどだ。だからこそ他人事ではなく駆けつけたのだが、ロゼはロゼなりに自分のやり方で痛みを乗り越えようとしていた。メリーベルとて彼を心配しなかったわけではない。彼女もまた、大切な人との別れは経験してきたのだから。

実際、ロゼはリフルとの別れを目の前で体験してしまったのだ。

自分の目の前で大切な人が斬られ、死ぬのを黙ってみている事しか出来なかった……その苦悩は察するに余る。彼は己の意思でリフルの遺体を運び、第六界層オケアノスの砂の海に流した。砂の海豚だけではなく、様々なギルドの人間が立ち会う大規模な葬儀となった。ロゼはその葬儀の最中も一度も涙を流さず、強く凜とした眼差しで大切な人の死を受け止めていた。その眼差しはリフルが彼に与えた物であり、そして彼が背負った大きな十字架でもある。

それから直ぐにロゼはメリーベルの元を訪れ、寝ずに錬金術の書物を読み漁っていた。少年が纏う空気は以前よりも刺々しさを失い、柔らかくなつた。しかしそれは諸刃の剣を思わせる。彼は確かに失意の中に居るのだ。だが彼が意思が、そのまま悲しみに溺れる事を許さなかつた。

大切な人を護れなかつた自分の弱さを悔やみ、彼もまたこの世界の中で強くなる事を選んだのだ。かつて昴がそうしたように、己の身さえも投げ打って力を求めた。ロゼはもう、昴のようにやり直す事は出来ない。例えもう取り戻せなかつたとしても、彼はそれを乗り越えて進むのだろう。それが決定的に昴とは異なる点である。

「ロゼは強くなるうとしてる。リフルの遺志を継ごうとしてる。だから今、きつと悲しんでいる暇がないんだと思う」

「……………ロゼ……………」

「昴、貴方は大切な物を失った時……………それを取り戻す事しか考えられないかもしれない。でもロゼは違った。乗り越えて、それを受け継ぐ事を選んだ」

メリーベルの言葉はぐさりと昴の胸に突き刺さつた。そう、そんな事は言われずとも判っていた。昴のしている事は、昴の持つ強さは……。結局は悲しくて、その悲しみにぶち当たつた時それに耐え

切れず、何とかしたいと逃げの一手で得た力、手段である。昴がやってきた事……それはただ悲しみから逃れようともがき続ける事だけだったのかもしれない。

拳を握り締め、それからふっと視線を反らした。悔しさはあった。しかし言い返すことは出来ない。わかっている。自分の弱さも無力さも。でも、だったらどうすればよかったというのか。白騎士という偽りの存在に化ける以外、昴には何の手段も無かったのだ。少なくとも。彼女はそう考えていた。だが、本当にこれでよかったのだろうか……。昴はそのこみ上げる迷いを振り切れず、目をきつく閉じた。

「ごめん、メリーベル……。メリーベルの言ってる事が正しいんだってわかるけど……。ッ！！ わかるけど……。私、そんなの認めたくないよ……。！」

「昴……」

「私のすること……。馬鹿だって笑うかもしれない。でも……。今はそれ以外に思いつかないんだ。だって私……。馬鹿だからさ……」

弾かれるように走り出し、来た道に戻っていく昴。メリーベルはそれをあえて留めようとはしなかった。昴のしようとしていることは判った。だが、それが彼女の存在の矛盾でもあり、弱さの根本でもある。ロゼがそれに対してどんな答えを導き出すのかは判らない。だが。今は信じてみたかった。まだ迷いの中で苦しみ続けている彼らが出す、彼らなりの自由な答えを。どちらにせよ、他人様に説教できる程メリーベルとて潔白ではない。弱さ故に過つ未熟さを、どうして責める事が出来ようか。

階段を駆け上がり、再び部屋へと飛び込んだ昴。昴は破魔剣ユウガを片手にロゼへと駆け寄り、その肩を強く掴んだ。一体どうした

のか判らないロゼは驚いた様子だったが、昴の第一声にいよいよ言葉を失った。

「時間を　！　私は時間を戻せる！　ロゼ……リフルが死ぬ前の時間に行こう！！　リフルを助けるんだ！！」

懸命に訴える昴。だが、そんな事が果たして実現可能なのだろうか？　昴にもそれは判らなかった。しかもロゼと一緒に時空跳躍など、そんな事出来るかどうか……。難しい事は明らかだし、それは昴も判っていた。でも、言わずには居られなかった。誰かの力に成りたかった。その苦しみが痛いほど判って、だから無視は出来なかったのだ。仮にこの世界では有り触れた絶望だとしても　その闇を抜いたかった。しかしロゼは無言で昴の手の上から重ねるようにしてユウガの鞘を掴み、首を横に振る。

「ありがとう昴……。でも、もういいんだ」

「いって……。そんな……。嘘じゃないんだ、本当に出来るんだよ？　だって私だって、一度護れなかった物を護ろうとして時空を超えて……」

「それで今、昴は満足してるの？」

ロゼの言葉に昴の表情は完全に固まった。ズキリと、心の中で痛みが蘇ってくる。兄　北斗はビルの屋上から落下しながら微笑んでいた。そしてミュレイもまた、昴の腕の中で血まみれになりながらも微笑んでいた。二人の笑顔を思い出し、ずきずきと痛む胸……。気づけば昴の瞳からは涙が溢れ、頬を伝っていた。

「もし、やり直せるなら……。確かに僕もそう思うよ。でも、自分

の弱さも……今の現実も。全部自分の歩いてきた過去の結果なんだ。だから僕は……今のままで構わない」

「……………」

「リフルが……リフルが死んだのは、僕だって悲しいよ。助けられなかった……護れなかったんだ。悔しくて死にたいくらいだ。でも、そうだったのは誰かの所為じゃない。自分の所為なんだ。僕は……リフルがくれたこの悲しみを背負って生きて行く……。それが、彼女が望んだ事だから」

ゆっくりと、言い聞かせるような口調だった。ロゼの方が年下だというのに、昴はまるで彼の前で子供のようだった。気に入らない現実を何とかしたいと駄々をこね、過去へと跳んだ。それが正しかったとは思わない。でも、間違いだっただとも思わなかった。しかし急に何もかもが判らなくなっていく。今あるミュレイの笑顔が急に霞んで見えた。それはきつと自分が嘘をつき、無理に生きながらえさせたのだという罪の意識があつたから。ミュレイはあんなにも純粋なのに、その傍に居る自分は穢れた存在のように思えた。何もかもが怖くなり、足がすくむのがわかった。

「昴の言っている事が本当だとしたら……あなたはもう、その力を使っちゃいけないんだと思う。失った物を取り戻せたらいいと思うよ……？ でも、そうする事によってあつたはずの絆さえも否定する事になるんだ」

「絆……？」

「あなたはその全てを無かった事にしてもいいと思うのか？僕はそうは思わないよ……。良かった事も悪かった事も、僕は全てを受

け入れたい。真っ直ぐな自分で、胸を張って生きて行きたい……。だから、逃げない。逃げずに戦うと、そう決めた」

「……ロゼ」

「……。申し出は、ありがたく思うよ。でもまあ、そんな御伽噺みたいな事はナシって事で」

そうして笑うロゼからは悲しみなど感じることはなかった。彼は彼なりに別れを済ませ、そして乗り越えようとしている。彼が彼の人生で育んできた絆は消えない。ロゼの笑顔は、まるでホクトのようにあっけらかんとしていた。苦しみも痛みも物ともしない、強い男の笑顔だった。昴は涙をぼろぼろと零しながら、その笑顔に頷いた。

「ごめん、ロゼ……。ごめんね……。私……。リフルをまもれなかったよう……」

「……いいんだ。もう、いいんだよ」

「今度は、ロゼを護るよ……。皆を、護る……。もう誰も傷つけさせないって約束する……。強く……。強く、なるよ……！」

ロゼの手を握り締め、昴は泣き続けた。それに釣られてかロゼも堪えていた涙が溢れてしまう。笑いながら涙を拭うロゼの姿に耐え切れず、昴はその小さな身体を抱きしめた。もう元には戻らないものがある。いや、この森羅万象全てがそうなのだ。巻き戻し、やり直すなど愚の骨頂。だがそれを超え、彼女はここにいる。

ならばせめてこれから起こる全てから甘さを廃し、強くなるうと思つた。心のどこかで、“またやり直せばいい”という気持ちがあ

ったのは事実だ。けれどもそれを超え、その悪魔の誘惑を蹴り飛ばし、生きて……。そうやって真つ直ぐでいることが出来るのなら。出来ればそれを成し遂げたいと思う。強くなりたいと思う。戦う力だけではない。弱さを乗り越えていく強さ……。それが今は何よりも欲しかった。

「私に出来る事があつたら、何でも言つて……。私、なんでもするよう……」

「あ、ああ……。判つたからそろそろ泣くの止めるよ……。すごい事になつてるぞ……」

「がんばる、ようっっ」

「わ、わかつた……。わかつたから……」

そんな二人の様子をこつそりと覗き見ながらメリーベルは苦笑を浮かべていた。それから小さく胸を撫で下ろすように息を着き、音を立てぬようにそつと扉を閉める。迷いの中で進んでいく……。そしてそこで生まれる大切な仲間との絆。何となく過去の自分の戦いに想いを馳せつつ、メリーベルは静かに階段を下るのであった。

絆(2)(後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

ステラ＝うさ子？

ホクト「ところでステラ、いくつかお前に質問したい事があるんだが」

ステラ「何でしょうか。せっかくの一時休戦なので、何でも答えましょう」

ホクト「じゃあお言葉に甘えて……。まず、うさ子の口調についてだが……」

ステラ「何故、彼女の事を私に訊くのですか……？」

ホクト「お前以外に誰がうさ子の事をわかっていうんだ」

ステラ「勘違いしないで下さい。私はステラであってうさ子ではありません。貴方とてホクトであってヴァンではないのでしょうか。それと同じ事です」

ホクト「じゃあ意見を聞いていると思って答えてくれよ」

ステラ「……。うさ子の口調……というのと、“はづ！”と、“なの！”ですか？」

ホクト「お前としてはどうしてああなるんだと思う？ 記憶喪失で

もああはならないだろ」

ステラ「……。どうしてでしょうか……」

ホクト「つーか、うさ子の一人称である“うさ”ってのはなんなんだ？」

ステラ「うさはね……というやつですか。あれは恐らく、うさぎのうさではないでしょうか？」

ホクト「それは判りきってるんだが、そもそもそれはうさみみではないんだろっ？」

ステラ「広域レーダー装備だと考えてください。耳は通常の間と同じ位置にきちんと存在し、聴覚もこの部分が担っています」

ホクト「なるほどな……。で、お前はなんで一人称が“ステラ”じゃないんだ？」

ステラ「は？」

ホクト「別人格だとしても、お前も一人称は“ステラ”であるべきじゃないのか？ ためしにやってみるよ」

ステラ「……。ステラはステラです。うさ子と一緒にしないでください」

ホクト「ほうほう」

ステラ「ステラは……シエルシの友達です」

ホクト「何か……あれだな……。ちょっとロボっぽい……？」

ステラ「ステラはロボですが……。ホクト、もう良いですか？
んだか顔が熱いです」

ホクト「ああ、悪い悪い。じゃあ最後に……ていつー！」

ステラ「ん……ッ！？　そ、そこをつかまないでください……。ら
らめえ……っ」

ホクト「うさみみを掴んだ時の反応は一緒か……」

絆(3)

「昴……こんな所におったか」

城を慌てて飛び出していった昴を追いかけ、ミュレイがやって来たバテンカイトス……。昴は一人、その外に出てストリートの片隅に立っていた。街はまだ復興できず、戦いの痛みは消えない。昴はそれらをじつと見つめ、静かに溜息をついていた。

ミュレイが隣に立ち、その肩を叩くと昴は目を細め静かに振り返った。それから一緒になって街を眺める。戦いに巻き込まれ傷ついた人々、そして壊れた街……。世界で最も栄えた歓楽街の華やかさはそこには既に無く、あるのは嘆きと悲しみが続く壊れた現実だけである。その現実もまた世界の一つ、そしてそれを見て昴が思う事も世界の一つなのだ。

「ミュレイ、私……この世界を変えたい」

「ん？ ああ、そうじゃな」

「今までは……正直、こんな世界どうでもいいって思ってたんだと思う。そういうつもりはなかったけど……でも、きつとそうだったんだ。私にとって大切な事は……ミュレイだけだったから」

まるで愛の告白のような言葉だった。ミュレイはそれを驚いた様子で受け取る。それもそのはず、今ここにいるミュレイは 昴が想いを向けるミュレイと同じであり、しかし全くの別人なのだから。昴が経験してきたミュレイとの時間、ミュレイの死 それは彼女だけのものに他ならない。

考えてみれば当然の、しかし考えたくは無かった現実。今、目の前に居るミュレイは昴が護りたかったミュレイとは全くの別人なのだということ。仮に時を巻き戻しても、一度決まってしまった未来を避けられたとしても、それはただ“避けて” “逃げて” いるだけだったのだ。

ミュレイの紅い髪、紅い瞳……。抜けるように白い肌、指先、朱に染まった唇。全てが同じに見えて、その優しい眼差しさえも偽り……。それでも護った気になっていた。護れた気になっていた。仮面を被り自分を偽ったのは、きつと自分の弱さから逃げる為ではない。自分の弱さ……。それを認識しようとする自分から逃げていたのだ。

そつと手を伸ばすと、ミュレイはその手を握り返してくれる。さざんさん泣いた後だというのに、まだ涙が溢れて来そうだった。ミュレイはこんなにも優しくしてくれるのに、自分はずつと嘘をついていた。嘘をつき続けて、それでも構わないと甘えていた。大切な人に不誠実である事。それがどれだけ愚かしい事か。どれだけ自分を苦しめる事か。知ってしまったなら、もう 避けられない。

「ミュレイ、ごめん……。私、ミュレイにずっと黙っていた事があるんだ……」

「いやじゃ」

せつかくこれから勇気を出して告白しようという時に限って、まるでミュレイは子供ののように悪戯な笑顔を浮かべてみせる。それから昴の頭を何度か撫で、そうして首を横に振る。

「それは昴……お主の心の内に留めて置けば良い」

「ミュレイ……？ で、でも……」

「わらわは、どんな昴でも受け入れる……。お主にどんな過去がありどんな秘密があったとしても構わぬ。今、自分で感じる自分の全てを信じて生きている。わらわはもう、些事などには傾倒しないと決めたのじゃ」

扇子を閉じ、清しい表情で一歩前に出る。空を仰ぎ見れば夜空の星。そこに思い描く事……。ミュレイの人生とて、甘い事ばかりではなかった。苦々しい記憶も数多く、そしてそれは今の彼女を苦しめる。これからも、苦しめ続けるだろう。

だがそのすべてに後悔無く生きていく事が出来るのならばどれだけ素晴らしいだろうか？ 失った数々、取り戻せない幸せ……。どうにもならない事ばかりが横行するこの世界の中で、それでもその時本当に大切な選択を迷い無く出来たのなら、滅びの時は笑顔で迎える事が出来る。きっと出来ると、そう信じている。振り返ると昴はまだ不安そうな表情を浮かべていた。そんな少女にも……。出来ればわかつて欲しい。

「人は、己の中に嘘を抱えて生きている。偽り、矛盾……。目を向けるも反らすも気分次第じゃ。じゃが人は、その己と向かい合う事が出来る。のう、昴……。お主には見えたのじゃろう？ 自分が本当に願う、自分の姿というものが」

じつと、自分の手を見つめて思う事がある。今までの自分も、これからの自分も……。思い描く事は出来るだろう。強い風が吹き、昴の髪を揺らした。それは迷いの霧されも吹き飛ばすかのようで、昴の心には素直な気持ちがあがってくる。

戦いに対する恐怖や迷い……。大切な物を護らなければならぬという義務感と、それを果たせない後悔……。でも、違うのだ。きっと違った。思い描いていた自分は……。冷酷無比な白騎士などでは

なかった。夕焼けを背に、ぼろぼろで格好悪くても誰かにそつと手を差し伸べられる、そんなあの人のような姿。 。 何かに追われるわけでも、何かを追いかけるわけでもない。それでも兎に角今は一歩前へ……踏み出す事を恐れない心。吸い込んだ呼吸を吐き出せばそれはもう自分の物になっている。生きることを止めなければ前に進むだろう。

「苦しみを……。この世界で、苦しんでいる人を……。助けたい。消したい……。何もかも。間違っていると思う事、全部……」

「 なら、助ければ良い」

「出来るかな……。私なんか……」

「世の理は“成せば成る”のじゃ。成さねば成らぬのと同じように、な」

肩を叩くミュレイの手……。それはとても優しくかった。思わずまた泣き出しそうになったが、それはぐつと堪える。今は涙を流す時ではない。彼のように。かつて少女が憧れた兄のように。苦しい時でも、笑うべきなのだ。今こそ笑う時なのだ。そうすればそこから先は 成せば成るのだろう。

思い描く笑みは少女の強さへと変わっていくだろう。手にした白騎士の仮面 それをミュレイの目の前で一刀の元に切り払う。もう、“白騎士”には頼らない。これからは自分の両目で全てを見定め、自分の耳で声を聞こう。成りたい自分には化けるのではなく、これから成って行けばいい。出来ない事はきつと何も無い。そう思えたから……。

「強くなるよ、ミュレイ……。ミュレイだけじゃない、この世界の

全部を護れるくらい強くなるよ。だから……その時は、聞いてほしい。貴方に聞いて欲しい物語があるんだ」

「では、約束じゃな。わらわとお主だけの……大切な約束じゃ」

差し出された小指に己の小指を絡める。二人はそうして大切な物と一緒に約束を契つたのだ。昴の心の根本にあった罪悪感から来る闘争への義務……そこにあったものが摩り替わった瞬間だった。償う為ではなく、変える為に……果たす為に生きていこう。こんな悲しい世界の中でも、もう他人事じゃない現実があるから。だからそこで戦い、そこで死んでも構わない。もう 迷っている自分には逢いたくないから。

ミュレイはいつも姉のように、母のように、昴の全てをありのまま受け入れてくれた。それが嬉しくて嬉しくて仕方が無かった。自分の傍に居る、自分を受け入れてくれる人……。彼女を姫として護り、自分は騎士として生きる……。これがどれだけ有意義な事だろうか？ ミュレイの顔をじっと見つめ、それからその胸の中に飛び込んだ。ミュレイは驚きながらも昴の身体を包み込むようにそっと背中に腕を回した。

「大好きだよ、ミュレイ……。ありがとう……。傍に居てくれて。ありがとう……。護らせてくれて」

「……………どうした？ 今日随分甘えるのう」

「私は、たまにはこうしてなきゃ死んじゃうんだよ」

「ふふ、そうか。では仕方ないな。いつでも、好きな時に……。身を寄せるが良い。わらわは、そなたの居場所なのじゃからな」

優しく、しかししっかりと昴を抱きしめるミュレイ。その胸に頬を寄せ、昴はとても満たされた気持ちの中で幸せを噛み締めていた。こんな気持ちを味わう視覚など、自分にはないのかもしれない。けれどもだからこそ戦える。だからこそ生きていける。心新たに、もう一度歩き出すのだ。この、己の居場所を護る為に……。

絆(3)

瓦礫の荒野を歩くその両足は重く、それでも立ち止まる事は許さない。どれだけ眠った所で体のたるさが取れる事はなかったが、それも仕方の無い事だろう。一度は完全に枯渴した魔力が体内で完全に再生するまでは、命を削り続けているようなものなのだから。

額の汗を拭い、ホクトは夜空を見上げた。ステラとシエルシを眠らせている間に自分はこっそりと寢床を抜け出し、周囲で仲間を探していた。確かにあの崩落の間際、現場に居た人間は全員助けたはずだった。しかしその力は結局途中で維持が出来なくなり、ホクトはそのまま落下。仲間たちも、戦いの途中だったシルヴィア王もどこへ行ったのかは検討も着かない。

結局闇雲に探した所でどうしようもないと気づき、深く溜息をつきながら近くの瓦礫の上に腰を下ろした。煙草を口に啜えて火をつけると、煙が周ると同時に疲れが少し癒されるような気がした。甘い香りに酔いしれるかのようにぼんやりを空を見上げていると、背後に人の気配を感じた。

「誰だ……って、お前か……ステラ」

自分の後ろに居たのがステラだと気づき、ホクトは頭を掻きながら再び座り込んだ。ステラは瓦礫の塊から塊へと何度か身軽に移動を繰り返して、最終的にはホクトの隣に収まった。ホクトの吸っている煙草をじつと見つめ、それを指先でむんずと掴み。

「おい、なんだ……？」

「くさいです」

「ああ……。そういえばお前らは煙草嫌いなんだったな……。って、だったら離れていればいいだろ？ 今の俺の唯一の娯楽だぞこれ」

「話があるのです。色々、貴方には訊きたい事も」

ステラは煙に目を細め、目尻に涙を浮かべながらそう訴えた。仕方が無く煙草を踏み消し、瓦礫の中に放置する。そうして岩盤の上に身体を投げ出し、夜空を見上げながら言った。

「で？ 話つてのはなんだ？ お前だって休んでおかないと明日体力が持たないぞ？」

「体内で魔力が生成されれば、時間経過に伴い肉体の損傷も完全回復します。心配には及びません。そういう貴方の方こそ、休むべきではないのですか？」

「あ……。いや、俺は別に休まなくてもいい人間なんだよね……。で、話つてのはなんだ？」

「……………それは」

ステラは行儀良く岩の上に座ったまま、じつと夜空を見上げていた。ホクトはその横顔を見つめ続けている。暫く待っても昴は何の反応も示さないで、段々と沈黙が重くなってくる。そうしてホクトが自分から話したすことさえも躊躇するくらいに沈黙が続いた後、ステラは小さく息をついて言った。

「私は……何がしたいのでしょうか」

「はいっ？」

「判らないのです……何も。私は……何故、ここにいるのでしょうか……」

「って俺に言われてもなあ……。まあお前の事はお前にしか判らないんじゃないか？」

当然、ステラの気持ちなどホクトに判るはずもない。だがステラは自分の気持ちの意味を考える事も、それを言葉にする事も出来なかった。もつと自由に、自分自身の事を表現できたらいいのに……何となく悔しくなり、唇を噛み締めた。

「ま、いいや。とりあえず先に俺の質問から済ませよう。ステラもそれでいいだろ？」

「………………。はい。質問とは、浄化作戦の件ですね？」

「ああ。あの崩落　何もかもが不自然すぎる」

そもそも浄化作戦の目的とは　？　それは恐らく勢力を肥大化させたギルド等の反帝国勢力の牽制である。ククラカンそのものを

切り落としてしまえば、大きな戦争による正面衝突を避けるという意味も生まれるだろう。大事なのは帝国側がそれを一度成す事により、今後絶対に帝国に逆らおうなどと考える者が出ないようにする事……。抑止的な効果である。そしてその実行に必要なのが、“管理者”と呼ばれる二人の姫である。

ザルヴァトーレとククラカンにそれぞれ存在する太陽と月の姫。その二人だけが月と太陽に干渉し、第四以下の界層を操作する事が出来る。しかし例外としてヨツンヘイムに存在する第三の塔管理システムであるミレニウムを使用し、帝国のハロルドが干渉可能なのである。となれば必然的に今回の件を巻き起こしたのはハロルドという事になるのだが、そう考えるには余りにも矛盾が多い。

まず、支配下であり、そして帝国軍や剣誓隊まで出張っていたザルヴァトーレをパージしたところで出るのは被害だけでうまみは何一つ存在しないし、牽制としての効果もない。むしろ失敗したら帝国は支配下国でも斬り捨てる冷酷な国……。そんな悪印象を与えただろう。これによる今までは帝国に支配されていれば安全だと考えていた者たちも戦うしかないと立ち上がる可能性が高くなってくる。

最終的にはこの世界の下層とハロルド帝国が全面戦争へと突入してしまう……。まるで自分に不利にしかならないパージを、わざわざハロルド本人が行うだろうか？ ホクトの推測は概ね的を射ており、ステラもそれには同意だった。

「パージするのはあくまでククラカン……。それもごく一部の地域だったはずです。ラクヨウのような大都市を崩落させては、帝国に対する反感も高まりますし、占領後の使い道ありませんから」

「だよなあ……。ハロルドの側近であるお前が知らないって事は、まさか本当にハロルド以外のヤツの仕業か……」

「しかし、ディアナドライバもホルスジェネレーターも、干渉出来る

のは王家の血筋だけのはずですが」

「そこが良く判らん……。まあ、この件に関してはお前も探るつもりなんだろ？」

「当然です。帝国もこのような無駄な大量虐殺など望んではいません」

そう返すステラの表情は心苦しそうだ。ホクトはそれに少しだけ安心するような、迷いが生まれるような複雑な心境だった。そんな気持ちを隠すかのように話題を変え、話をとめどなく続ける事にした。

「そついやお前……つさ子はどくなってるんだ？」

「……………つさ子、ですか？」

その名前が出るとステラは少し拗ねたような顔になった。意味が良く判らないホクトは気のせいかと思いつつもそのまま話を続けるが、ステラの機嫌は段々悪くなっているようだった。

「いや、つさ子には色々と酷い事しちゃったし、謝れるなら謝ってきてえし……って、なんで不機嫌なんだお前？」

「……………私の事は斬っても謝らないくせに」

「は？ そりゃ、敵だからしょうがないだろ……………」

「女性は斬らないと言いました」

「んー……。いや、お前はミラの仇らしいからな。俺は良く判らんが、ガリユウが気に入らないんだとよ」

実体化していたならばガリユウは今もステラへ襲い掛かったとしてもおかしくはないだろう。それほどまでにガリユウが抱えているステラへの憎しみは深く大きく、そしてそれは時にホクトの意識さえも侵食、支配してしまうほどののだ。

勿論、その因果をステラは理解している。だが 何となく納得はいかなかった。座ったまま指先で石を拾い上げ、それを指先で粉々に砕く。この気持ちは何を意味しているのかはわからない。しかし少女にとってそれは未知で、そして不快な感情だった。

「おーい、何ふてくされてんだよ？」

「別にふてくされてはいませんが、シエルシも貴方もうさ子うさ子と、あれのどこがいいのですか？」

「………………。良く食べる所…………？」

「それなら私も良く食べます。それに、彼女の事なんて私には判りませんから」

徐に立ち上がり、腕を組んで背を向けるステラ。その様子にホクトは立ち上がり、背後からその頭をわしわしと撫で回した。ステラは何とも言えない表情で驚き、唇を噛み締めながら身体を震わせていた。言語化も思考化も不可能な感情に思考が停止寸前だったが、何とかホクトの手から逃れる事で正常な状態に近づいていく。

「な、何をするだあーっ！」

「まあ、何があつたか知らないがそんなにへこたれんなつて。これからこの廢墟から脱出しなきゃいけないだし、色々とやる事は山積みなんだ。もう休んでおけよ」

ひらひらと手を振りながらキャンプへと戻っていくホクト。その背中をじつと見つめ、ステラは気づいたら走り出していた。ホクトの背中目掛けて猛然と駆け寄り、その身体に強く飛びついた。攻撃されたのかと思つたホクトは怯み、しかし驚いた様子で振り返る。そこにいたのは顔を真つ赤にしてホクトに抱きつくステラの姿だつた。

「お前……………何してらっしゃるんですか？」

「……………な、なんででしょう……………」

「……………わかつた、わかつた。少し落ち着け。なつ？ 話せば判る」

「……………何がですか？」

二人はそのまま暫く固まっていた。顔を寄せるとホクトの服に染み付いた煙草の匂いがした。触れると体中に傷があり、それでも暖かい事が判つた。実際に行動してみなければ判らない事もある。心臓が破裂しそうなくらいにドキドキしているその意味も、脳が溶けてしまいそうなくらいに痺れているこの混乱の意味も、行動したところではつきりとは判らない。けれども……………何となく、判つた気がした。うさ子と呼ばれた少女が彼の傍に居た意味。いつも笑つていられた理由……………。それを思えば切なくなる。苦しくなる。涙を流せない心を宿されなかつた魂が思い描く願い……………。ホクトはそれを何も言わずに受け止めていた。

「大丈夫か？」

「……………はい。もう大丈夫です。すみませんでした」

身体を離れたステラは既にいつものステラに戻っていた。ホクトは肩を竦め、それからステラの頭を軽く小突いた。何故だか嬉しそうなステラに若干薄気味悪さを覚えながら、ホクトは苦笑を浮かべる。

「ホクト……………。その、うさ子の事ですが」

「ん？」

「恐らく、この場に出す事が出来ると思います」

ステラの申し出はホクトにとっては全くの予想外だった。任務に忠実なステラがあんなゆるゆるとした人格を表に。しかも敵の前で出すとは思えなかった。しかしステラにとって現在は絶賛一時休戦中である。戦闘の必要性がないのならは何の問題もない。それに。

「……………シエルシモ、きつとうさ子に会いたがっているでしょうから」

「……………まあそりゃそうだが、いいのか？ うさ子が出てくるって事は、お前は……………」

「構いません。私の人格を一時的にシャットダウンし、しかし私の人格もセーフモードで起動させておきます。恐らくうさ子が危機に瀕した時には反応出来るかと」

「お前、帝国に戻らなくていいのか？」

「戻りますが、それより今回の件の真相を確かめる方が先です。恐らく戻った所でハロルドは同じ命令を下すでしょうし……。貴方は今回の件を探るのでしょうか？ 私がうさ子の人格のままなら貴方達と行動を共にする事が可能であり、情報収集も効率的になります」

「そう言われると確かにちょっと納得だが……」

「では、早速そうしましょう。切り替え中は意識が途切れるので……ホクト、私の身体を押さえておいてください」

「あ、ああ。了解だ」

歩み寄り、ホクトはステラの身体をしっかりと両腕で押さえた。ステラは目を閉じ、己の意識を自覚的に閉ざしていく。まるで心が暗闇に落ちていくようなその錯覚の中、ホクトが傍に居る事を強く感じた。戦い、殺さねばならないはずの敵……。しかし答えはそれだけではないのだろう。ケルヴィーが探してみなさいといったその言葉の意味が、今ならば少しだけわかる気がした。

「……。ど、どうなったんだ？ おい、ステラ！ 大丈夫か！？」

「……………」

ぱちくりと目を見開いた少女は耳をぱたぱたと上下させ、ホクトの顔をじーっと覗き込んだ。それからあの頃と変わらないゆるゆるとした笑顔を満面に作り、ホクトの体へと飛びついたのである。

「ホクト君なのーっ！！　なんだかとっても久しぶりなのーっ」

「うおっ！？　おお、うさ子か……ややこしいな……。ステラはどうしたんだ？」

「すてら？」

「あ、いや……なんでもない。まあいいや、とりあえず久しぶりだなうさ子。色々積もる話もあると思うが……シエルシのところに戻ってからにしよう」

「ホクト君、うさの事怒ってないの……？」

「なんでだ？」

まるで当たり前のように首をかしげるホクト。そんなホクトが大好きで、そんな彼と一緒にいられる事はとても幸せな事だった。うさぎの少女は目をきらきらと輝かせ、もう一度ホクトへと飛びついた。背後からくっつかれて歩きづらそうにしながらもホクトはよたよたと進んでいく。

「ホクト君、好きなのっ」

「ああ……。歩きづらいんすけど……」

「ホクト君、ホクト君っ！！　うさはねえ、ホクト君と一緒にいられて幸せさんなのーっ！！」

「そりゃよかったな。うさ子隊員、ご帰還ご苦労さん」

「なのーっ」

すりすりと頬擦りしてくるうさ子。その柔らかい感触をくすぐったく感じつつ、ホクトは歩いていく。白いうさぎの耳をぱたぱたと上下させ、少女は喜びを一杯に表現する。そんな風に、きつと“彼女”もしたかったのだろう。だからこそ“彼女”はここにいるのだ。

「ところでうさはおなががぺこぺこなの……。なんだか何日も何も食べてなかったような……」

「……………食べてなかったんじゃねえの？ 暫く気絶してたはずだし」

「!？ た、食べなかった分もどこかで食べれるよね!？ じゃないと損しちゃうよ!？」

「それはどうかね」

「は、はうう……………っ!？ ねえねえホクト君、ごはんは？ ごはんはまだなの？」

「まだです」

鬱陶しく背後で跳ね回るうさ子とそれを無視して進んでいくホクト。二人は瓦礫の山を歩いていく。希望のない死の世界 しかしそこにも星の輝きは降り注ぐ。どんな闇にも、終わりがあると囁くかのようだ。

千夜一夜(1)

この世界は確実に革命の瞬間へと動き出した。今や反帝国のシンボルとなったミュレイを筆頭に、全ての下層世界の人々が手を取り合い帝国へと戦いを挑もうとしている。それがどれだけ無謀な事なのかは皆わかっているんだろう。しかしもう、限界なのだ。

プレートを落とされた事は、あらゆる人々に大きな衝撃を与えた。もう帝国の支配下にいれば安全という定義も存在しない。戦い、勝ち取らねば幸せは訪れない。そう誰もが悟ったのだ。戦いは怖い。死は恐ろしい。それでも彼らが立ち上がったように私もまた、歩き出さねばならないのだろう。

流れは変わっていく。私の心もその流れの中に交えて、そのまま溶かしてしまおうか……？ そんな風に考える事もある。でも今は、ちゃんと自分の両足で歩いていきたい。歩いて、生きて……そして、答えを見つけないんだ。

私がこの世界に召喚された意味とか、ミュレイを救えなかった自分の甘さとか、罪を背負ってやりなおしたこの旅の終わりとか……考える事は色々ある。でもその全てが暗い部屋の片隅で膝を抱えているだけでは判らないことだから。自分の目で見て、考えよう……。今私に出来る事、自分がやらねばならない事を。

「仮面を外すっていうから、ついでに修理と一緒に強化もしておいたから」

そう言っただけでメリーベルが見せてくれたのは新しい白神装武だった。甲冑は以前よりも軽く、動きやすく……そして何故か華やかなデザインに変更されていた。メリーベル曰く、このデザインにはミュレイが関わっているらしい。まあ、ミュレイはいいよね。いつも胸と

かはだけてても、恥ずかしくないサイズだからさ……。

新しい甲冑を装備し、私は生まれ変わったような気持ちを楽しんでいた。空気を深く吸い、肺の中から魂を入れ替えていく。白騎士の仮面は消え、私は白騎士ではなく北条昂として戦う事を決めた。目を瞑り、大気を感じる。人々の嘆きを感じる。それをつれて、一緒に飛べるだろうか……？ 拳を強く握り締めた。ぎゅっと、痛いぐらいに。もう迷わない。迷えない。メリーベルへと目を向けると彼女は何か少しだけ嬉しそうに笑っていた。理由がわからず首をかしげると、彼女は私の肩を叩いて言う。

「少しはふっきれたみたいね」

「……………うん。弱い自分をすべて消す事はやっぱり出来ないと思う。でも、それを背負って進む事にしたよ」

「そう。今の貴方だったら、きっと白神装武レヴァテインの力を使いこなせると思う。だから色々調整しておいたから、期待していいわよ」

「ありがとうメリーベル……。それで、ホクトたちの事はどうなってるの？」

「色々探してはいるんだけど……人手が圧倒的に足りないわ。それに、範囲も尋常じゃないから」

それもそのはず、大陸の半分が一瞬にして全て廃墟になってしまったのだ。エル・ギルスの半分がプリミドールのプレートによって破壊され、今は滅茶苦茶な荒地が続いている……。その中から生きた人間を、それも特定の人物を発見するというのは遥かに難しい事だ。だから私は彼らを助けない。いや、それは少し意味が違ってくるか。助ける必要はない……そう思う。思いたいんだ。

あの崩落に巻き込まれて生きていると思う方が馬鹿げているだろう。しかし、もしも死んでいるのだとすれば彼らは探して欲しいななどとは思わないだろう。私だったらそうだ。そんな事をしている暇があれば今この大事な時期に戦えと叫ぶだろう。逆に生きているのならば……いや、生きていると信じているからこそ。彼らはきっと自力で戻ってくると、そう思うから。

「メリーベル、もしも彼らが見つかったら伝えてくれないか？ “一足先に行く、追いついて来い”……ってね」

「……了解。昴、気をつけて」

「うん、ありがとう。それじゃ……行くね」

私の言葉に頷くメリーベル。彼女の瞳を見つめ、それから私は踵を返した。部屋を後にしようと思いき出し……そして背後からの言葉で足を止めた。

「戻ってきたら……話したい事があるの。だから……きつと無事で」

私は何も言わなかった。けれどきつと彼女には届いたと思う。部屋を後にし、歩き出した。ククラカンへ、ラクヨウへ……。戻ってそこでミュレイと合流し、いよいよ帝国攻略作戦が始まる。バテンカイトスの廊下を歩きながら気合を入れなおしていると、背後からロゼが駆け寄ってくるのが見えた。一緒に並んで歩きながらラクヨウへ通じる転送魔法陣を目指す。

「昴、新しい装備が完成したんだね」

「何とか間に合ったよ。メリーベルにはいくらお礼を言っても足り

ないかな」

「いよいよ、帝国との戦いか……。あんな非道な作戦、これ以上続けさせられないからね」

「……………ああ。今度こそ、ハロルドを倒す。いや、彼らが作るこの世界のシステムを……。悲劇の連鎖の根本を断ち切る。この、沢山の人の願いを受け継いだ剣で」

ミラ・ヨシノからミュレイへ、そして私へと受け継がれた刀……。それにはきつと沢山の物語が続いているのだろう。それを今ここで彼女たちの願いをこれから私が、果たさねばならない。果たさずしてなんとするか。強く、想いを固める。そんな私の隣、口ゼは何故か楽しげに私を見つめていた。

「な、なに？」

「いや……。少しはマシな顔になったなって」

「……………かもね」

二人して笑いあいながら転送装置を潜る。これを抜ければもう、後戻りは出来ない。帝国へ　ヨツンヘイムの、王者の居城インフエル・ノアへ。私はもう、立ち止まらない。追いついてくるって、きつと信じているから。仲間の事も……。自分の事も。後はもう、成すだけなのだから……。

『下層の人間の反逆……。これは流石にミレニウムによる予定調和

の一部……とは言い切れぬのだろうな』

『どう始末をつけるつもりだ、ハロルド？ 貴様に与えられた任とは下層世界の人間の管理と繁栄……。下層世界の人間の始末をつけるのは、貴様の役目よ』

『なんにせよ、下層の人間を上層に上げる事だけはあってはならないでしょう。罪多き者を“エデンの園”に立ち入らせるわけには行きませんからね』

『何としても、第三階層ヨツンヘイムにて愚者の行軍を阻止せよ。間違っても第二階層ハイドへの侵入を許す事はあってはならない』

『この世界はまだ、罪の浄化を終わっていないのです』

『贖罪の時間が終わるまで、まだ永久に等しい年月が必要なのだ』

『であるならば、我々はその間罪受けし子羊を生かし、育て、学ばせ、罪を償わせ続けなければなりません』

『この世の煉獄を維持する事……。そして我らが“極楽浄土”を護り続ける事……。お前に与えられた役目は大きいぞ、ハロルド』

インフェル・ノアの王座。ハロルドはそこに腰掛けたまま周囲から聞こえる声に耳を傾けていた。閉じていた目を開き、周囲を見やる。そこには光の翼を持つ異形の影が浮かび上がっている。白く神々しいそれらは見方によっては天使のようでさえあるだろう。だがしかしその異様な姿は見る者によっては恐怖と嫌悪感を与えかねない。

おぞましい怪物の中心におかれハロルドはあまり上機嫌とは言え

ない様子である。“お小言”の最中なのだからそれも当然の事であったが、彼がこうして彼以外の人間の言葉を受けて動いているという事は部下達も誰一人知ることのない事実である。

『最悪、ジハードへの介入が行われそうになれば我“監視者”も動かざるを得ません。それに独自行動を続けているイレギュラーも気にかかります』

『“天叢雲”か……。忌々しきか、異世界の英雄め……。流石に捨て置くのも限界か』

『下層の人間に我々の存在を悟らせるような行為はあってはありませんが。天叢雲に関しても行動は慎重に慎重を重ねなければ』

『今は下層の人間を黙らせるのが最優先だ。ハロルドよ、その為に存在する“大罪”が一つ……。その事をくれぐれも忘れるなよ』

浮かび上がっていた無数の異形の幻影が消え去るとハロルドは目を閉じ、顎を指先で撫でながら首を鳴らした。小言を言うのは簡単だが、状況は既に机上の空論でどうにかなるほど容易ではない。攻め入ってくる人間達との全面戦争になれば、双方に甚大な被害が出るだろう。最悪この世界の終焉を齎してしまうかもしれない。

『この世の終わり、か……。容易いものよな、ゼダン……』

ハロルドは目を瞑る。夢を見ない男が想いを馳せる、過去の記憶がある。膨大な年月を過ごした彼だからこそ思う事がある。判る事がある。全ての始まりはそう、きつと些細な事だった。全ての罪のすれ違いもそう……。きつと始まりは、些細な事だったのだ。

千夜一夜(1)

「うさ子……!? 本当にうさ子なんですか!？」

「シエルシちゃんーっ!! 会いたかったのーっ」

「うさ子……うさ子!!」

二人がひしと抱き合うのをホクトは遠い目で眺めていた。思えばこの二人も最初はいまいち反りが合わない様子だったが、気づけばいつの間にか仲良くなっている。いや、それはきつとシエルシが変わったからなのだろう。出会った頃と比べ、シエルシはずっと接しやすくなった。最もあの当時の状況を考えれば、彼女が周囲に疑心暗鬼になるのも無理はないのだが。

星空の下、ホクトは夜明けを待ちながら最後の一本 煙草に火をつけた。うさ子とシエルシは暫く抱きあってはしゃいでいたが、感動も収まってきたのか二人は仲良く隣に座りながらにこにここと微笑んでいる。一応区切りがついたのを見計らい、ホクトは話を切り出した。

「んで、今後の俺たちの行動だが……。とりあえず、界層ごと落下したからここがエル・ギルスだってことは判ってるな？」

「……………はい」

「ステラにも確認したが、どうやらこれからやるべき事は色々とお

るらしい」

ホクトはシエルシにもステラと話した事をかいつまんで説明した。第三者の意思がこの戦いに関与しているという事、そしてそれは無視出来ないほどの悲劇を巻き起こした事、それを放置し続ける事は出来ないという事……。それらを踏まえたとえでまず行動しなければならぬ事、それはこの廃墟からの脱出であろう。

ホクトは勿論、ステラ　うさ子もまだ能力が万全ではない。あれだけの事があつたのだから直ぐに行動出来るはずもないのだが、彼ら全員が長い間気を失っていた事を考えると、行動開始は出来るだけ早いほうがいい。きつちりと休む事が出来た今、何とかここからの脱出を図らねばならない。

「とりあえずはシャフトを目指して移動するぞ。そこからどうするかは、状況によるだろう。この騒ぎだと恐らく界層全体で反帝国運動が活発化しているはずだし……。それにガリュウの調整が上手くいってねえから、メリーベルに見てもらわないと連戦は難しい。そういう俺の事情もあるな」

「では、まずはローティス……ですね」

「そうなると思うが……うさ子、お前ばかに大人しいな？」

「うん？　うさはねえ、もうさっぱりなんにもわからないので、じつとしてる事にしたのっ」

「そっすか……」

にこにここと笑い続けているうさ子……。しかしまったく状況を理解していないのは明らかである。まあ、恐らく話はステラに通じてい

るのだろうから、うさ子はうさ子でボケーつとさせておけばいい……それがホクトの考えだった。こうして三人は早速生き残りを探しながら移動を開始したのだが……。

「……まさか、ルーンリウムがこんな事になっってしまうなんて……」

シエルシは自分の故郷がもう既に存在しない事を思い出した。忘れていたのはそれだけ彼女がホクトを救うこと、そしてうさ子と再会した事で心動かしていたからだろう。だが気持ちが落ち着いてくるとほの暗い感情が密かに蘇ってくる。絶望、失意……。もしも傍に誰もいてくれなかったならば、悲しさのあまり途方に暮れていただろう。今は気楽そうに歩いているうさ子、そして迷う様子もないホクトが共にいるから耐えられる。思い足を引きずり、シエルシは瓦礫の山を進み続ける。

「他の連中も心配だが、どっかでひょっこり生き延びてる事を信じるしかねえな」

「……生きているのでしょうか？　そもそもあの大崩落から、どうやって……」

「あ……。覚えてねえのか？　まあ確かにあの時は皆パニックだったからな……」

助けたのは勿論ホクトなのだが、その方法とその後が記憶からすっぽり抜け落ちていた。ホクトはそれをあえて説明する事は無く、シエルシも問いただすことはなかった。二人がそんなやり取りをしている間にうさ子は身軽に岩から岩へと飛び移り、二人より先に進んで岩の上で空を見上げていた。そんなうさ子を見やり、微笑むシエルシ……。先はまだ流そうだったが、希望がないわけでもない。

「そうだ、シエルシ……。お前、言い忘れてたがあんな事はもう二度とするなよ？俺が何とか自制出来たから良かったものの、下手したらガリユウに丸呑みされてたぞ」

ホクトが言うのは数時間前のやり取りの事である。行動不能に陥ったホクトを救う為にシエルシが行った自虐的な救済措置。それはホクトにとって到底受け入れられるものではなかった。シエルシから流れた血の一滴さえも許せず、ホクトの体の後味の悪さを残している。しかしシエルシはまるで気にもしていない様子で、けろりと笑ってみせるのだ。それがまたホクトの苛立ちを加速させた。

「でも、二人とも結局助かったんだから良いじゃないですか」

「良くないつつの……。俺はもう、俺の所為で誰かが死ぬのはゴメンだ。そんなの背負いたくねえんだよ」

「それは違います。私は私の我侷で貴方に生きてほしいと思った……。だからそれは貴方が背負うべき咎ではないのです」

「だから、そういう問題じゃねえだろ」

「兎に角、この話はいくら続けても平行線ですよ？私は貴方に死んでもらいたくないんです。例えそれで、私の命が朽ち果てたとしても」

「俺はお前に死なれちゃ困るんだよ」

「では、護ってください。ちゃんと護って……。貴方も死なないで。生きて……。そうして護ってください。それなら貴方も私も、何も困

らない。問題は何一つなくなるじゃないですか」

笑顔でシエルシの放つ言葉にホクトは呆れたように肩を竦める。実際これは呆れを通り越し、最早笑うしかない。シエルシはもう一歩も譲る積りは無いのだろう。思えば随分とまあ、変わったものだ。

「ホクト君ホクト君！！ こっちーっ！！ 向こうに、誰かいるのーっ！！」

高台からうさ子の声が響き、ホクトは慌てて走り出した。シエルシもそれに続くのだが、足場が悪い所為で移動が覚束無い。身軽に移動していくホクトは降りてきたうさ子と一緒にその場所へ向かう。少し開けた荒地の中、そこには直前まで対立していたシルヴィア王の姿があった。

シルヴィアもうさ子の声に気づいていたので、二人が現れた事に驚くことはなかった。互いに無言で見詰め合うホクトとシルヴィア……。遅れてやってきたシエルシは驚いた様子で嬉しそうにシルヴィアへと駆け寄っていく。

「姉上っ！！ 無事だったんですね！！」

「近づくな、この裏切り者め！！」

しかしそれはシルヴィアが握り締めた剣によって阻害されていた。足を止め、戸惑いながらも悲しげにシルヴィアを見つめるシエルシ。王の瞳からは何か大切なものが抜け落ちてしまったかのよう。光もなく虚ろなものが宿っていた。それもそのはずである。彼女が愛し、彼女が守る為にすべてを犠牲にしてきた“国”はもう、この世界のどこにも存在しないのだから……。

「ザルヴァトーレは……終わった……。どうしてこうなったのか……私には理解出来ない。だがこれだけはわかる……。もう、私の存在意義は……なくなっただよ、シエルシ……」

王の手から剣が零れ落ち、瓦礫の上に音を立てた。光となって消えていく魔剣　シルヴィアは身体を震わせ歯軋りしながら頬に一筋の涙を見せた。その苦悩、嘆き……。全てがシエルシには理解出来た。だからこそ　来るなど言われても進まないわけにはいかなかった。

「来るな、シエルシ……」

「姉さん……」

「もう、消えたんだ……。何百万人もの、ザルヴァトーレ領土の国民と共に……。私たちが戦う理由、護るべきすべて……。滑稽なものだ……。そうだろう？　国を護るべき王だけが、こうしてノコノコ生き残ってしまった……。っ」

シルヴィアは瓦礫の上に座り込み、項垂れた。ホクトは何も言わずにただそんなシルヴィアを見つめている。うさ子は寂しげにホクトの隣にくつつき、そのシャツの裾をぎゅっと握り締めていた。悲しみに暮れる王……。当然のことだろう。彼女が厳格であった理由、彼女がすべてを支払って得ようとした幸せ……。何もかも、あらゆるものは国の為だった。せめてこの国の中だけでは、悲劇など起こらぬようにと。

妹を護りたかった姉……。国を護りたかった王……。だがその両方が最早意味を失った。この果てしなく続く荒野は彼女の絶望によく似ている。終わりも見えず、灰色の……。何もかもが夜の闇に冷

たく浮かび上がる、夢が跡である。

「帝国は……私たちを見捨てたのか……？ それとも、私たちは……最初から帝国に騙されていたのか……」

「……………」

「私を笑え、シエルシ……。何も……何も出来なかったよ。何が王だ……。何がザルヴァトーレの血筋だ……！ これでは、あの人の事は笑えないな……」

自虐的な笑みを浮かべるシルヴィア。その前に立ち、シエルシはそつと腰を下ろした。姉であり王であるシルヴィアの手を握り、首を横に振る。彼女は決して笑ったりはしない。決して蔑んだりはしない。“仕方が無かった”なんて、甘い言葉をかけることもしないけれども……傍に居る。当たり前のように。姉と、妹として……あるべき形であるかのように。

「それでも……生きましよう？ 私は、姉さんが生きていてくれて嬉しいから……。姉さんは……生きて？ 生きて……きっと、いつか……………」

「……………。シエルシ……………」

シルヴィアはシエルシの手を握り返し、それから唇を噛み締めた。しかし彼女はそれでも王。そつと立ち上がり、ホクトと向き合った。シルヴィアは片手でシエルシの肩を叩き、それから歩き出す。戦うつもりはない。だが、つけねばならないケリというものがある。

「……………シエルシが世話になったようだな、魔剣狩り」

「ああ」

「……………礼を言おう。私の事も、好きにするが良い。この戦、完全な我が国の敗北だ。国そのものがなくなったのだ……………戦う理由も意味もない。殺すなら一思いにやってくれ」

「それは断る。シエルシが言っただろ？ 生きろつてよ。あんたにはまだ出来る事があるはずだ。こんな世界の果てでも、な」

「許すというのか？」

「許さないさ。でもな、許さなくとも……………共に生きていく事は出来る。許せるように、努力する事が出来る……………。今はそれで十分だと思っぜ」

ホクトに同意するかのように、傍らでうさ子がこくこくと頷いた。シルヴィアは腕を組み、それから苦笑を一つ。背後から駆け寄る妹を見やり、その手を繋いだ。

「……………。何もかも失った……………。だが、シエルシ……………お前が生きていてくれただけでも、私にとっても救いだ」

「姉さん……………」

「また、やり直せるだろうか……………？ この国を……………この世界を……………。私たちが好きだった、あの頃のように……………」

思い描くのは二人が共に見た水の都である。その想い出に漸く帰

る事が出来るのだろうか……？ 王が見せた、安らぎの笑顔……。シエルシはそれを懐かしく、そして新鮮な感覚で受け止めていた。ぎゅっと手を握り締める。

「きつと、やり直せますよ……。だから……」

「……………ああ。ありがとう、シエルシ。これからは、魔剣狩り……お前とも」

その時、何か嫌な感触がしてシエルシは目を瞑った。上から何かがかかってきたのである。顔一杯にべっとりついたそれが気になり手を触れてみると、指先には紅い液体が大量に付着していた。よく意味がわからず顔を上げるシエルシ。その視線の先、姫は完全に固まっていた。

一瞬の出来事だった。嬉しくて恥ずかしくて、シエルシが笑いながら視線を反らしたその瞬間である。姉であるシルヴィアの、首から上が なくなっていた。意味がわからずもう一度少女は頭の中でその言葉を反芻する。“シルヴィアの首がない”。そして気づくのだ。自分の足元に、かつて姉の頭だったものが転がっている事に。

ぐらりと、まるで動力が切れてしまったかのようにシルヴィアの体が倒れる。シエルシはその身体を抱き止め、噴出す血を浴びながら震えていた。ホクトが何かを叫んでいるのが聞こえたような気がしたが、まるで反応できなかった。目の前でシルヴィア・ルナリア・ザルヴァトーレが死んでいる。その事実を飲み込めなかったから。

「やっと回収できたよ。大罪の一つ、永魔剣エリシオン……。しかし、まさか五体満足でピンピンしているとは思って居なかったけどね」

声が聞こえた。まだあどけなさを残した少年の声。シエルシが振り返るより早く武装したホクトとうさ子がシエルシを庇うように前に出ていた。背後、夜空の月を背に一つの影が浮かび上がっている。赤い衣装をはためかせ、少年は闇に笑う。

「貴方は……。どう、して……？」

「やあ、お姫様。こういう形で再会するのは僕も望んではいなかったんだけどね……。始末をつけに来たよ、魔剣狩り」

「こいつは一体どういう事だ……？ 答えろよ タケル！」

ホクトの怒号にも怯まず、少年 タケル・ヨシノは物腰柔らかかに微笑んでいた。少年が握り締めた剣 それはホクトもシエルシもよく知る物だった。闇を払い、闇を喰らう剣……。全ての魔剣の頂点に立つ七つが一つ、“大罪”と呼ばれし剣 蝕魔剣ガリュウ。それが何故かホクトの手の中に一つ、そしてタケルの手の中に一つあった。

睨みあう二人の魔剣使い。シエルシはそうして改めて認識するのだ。背後からの攻撃で、シルヴィアの首は刎ね飛ばされた。当然この状態で生きていくはずがない。つまり、姉は死んだ。シエルシの両目から涙が零れ落ちる。それは止め処なく、滝のように流れ続ける。

これからだったのだ。これから分かり合って、一緒にやり直そうと そうした矢先の出来事である。納得できるだろうか？ 出来るはずがない。当然のようにシエルシは叫んだ。何もかもを台無しにした敵がそこに居る。悲しみの慟哭と共に、少女は魔術を発動する。猛々しく荒れ狂う魔力を前に、少年は笑みを共に口元を歪ませて刻んだ。

「行こうか、ガリユウ。コード“ロクエンティア 剣創”……起動」

闇の光が溢れ返っていく。そうしてシエルシが放った魔術は全てが分解し、その悪魔の口へと吸い込まれていった。現れたのは小さな少年ではなかった。先ほどまで彼が立っていた場所に居たのは、黒き闇の衣装を身に纏った青年。ガリユウを手にしたその男は笑みを作り、そうしてホクトを見下ろした。

「もらいに来たよ、君のガリユウを」

「……………興味深いな。やってみろよ、クソガキ」

「では、遠慮なく」

二つの影が同時に動き出す。無力なシエルシを他所に 戦いは始まった。黒き死の魔剣が二対 同時に放たれる。重なる刃は激しく音を立て、火花を鳴らす。その渦中においてシエルシは呆然と放心状態に陥っていた。もう、何も戻らない。美しかった故郷も、優しく微笑んでいた姉も。もう何も戻らないと そう知ったから。

千夜一夜(2)

「私はね、シエルシ。この壁の向こうの世界が、時々無性に怖くなるんだ」

それはまだ、水の都が美しさを保っていた時代。シエルシの心の原風景、夕焼けに照らされる純白の白と水路の輝きを反した光。街を見下ろす丘の上、彼女の隣にはもう一人の姫の姿があった。まだ、シルヴィア王と呼ばれた女がただの姫であった頃。鎧も剣も必要ない、ただの乙女でいられた頃の記憶……。

シルヴィアは、世界を囲う城壁へと手を伸ばし、そつと目を伏せた。ぬいぐるみを抱きしめたシエルシはそんな姉の言葉がまだ理解出来ず、ただ目をぱちくりさせる。妹の怪訝そうな顔にシルヴィアは苦笑し、それからその頭を優しく撫でた。

「この壁の向こうには、無法なる理不尽が溢れ返っていると聞く……。帝国による支配が続く限り、それは変わらないだろう。母上はそれを変えると仰った。私たちが、これから生きる者達が、その理不尽に潰されてしまわないように」

「お母様は、悪い人と戦ってるんですよね？」

「ああ、そうだ。母上は立派な人だ。大きな力に立ち向かう事は、容易なことではない……。常人ならば屈してしまうその影に、母上は立ち向かおうと旗を掲げたのだ。とても立派な行いだよ」

「私も、大きくなったらお母様のお手伝いをしますっ！ 悪い人と戦って、かわいそうな人を無くすんです！」

無邪気に目を輝かせる妹に姉は首を横に振った。そうして腰を落とし、夕焼けの光を浴びて微笑む。妹の頬を、髪を、そつと優しく撫でた。愛しい存在……。母は言った。もしも自分に何かあった時は、シエルシを頼むと。

「お前は、何とも戦わなくていい。この国を脅かす物……。お前を怖がらせるすべて。私は剣となり盾となって、それからお前を護る。それが、母上との約束だから」

「……………？　ねえさま、泣いてるの……………？」

シルヴィアの頬を伝う熱い涙、一筋……。姫であった少女は、王にならねばならなかった。英雄の姿に憧れ、そして碎かれた理想を知った。国を護る為に、シエルシを護る為……。約束したから。だから誰に何と言われようとも、それだけは護ろうと誓った。

「きつと……………お前だけは護ってみせる。これからどんな苦難が待ち受けたとしても　私は」

姉はその日から笑わなくなったし、泣く事もなくなった。以前のようにならなくなった。シエルシに接する事もなくなったし、言葉を交わす機会すら減ってしまった。シエルシはそれを、自分が姉に嫌われてしまったのだと思っていた。だがそれは違う。違ったのだ。そんな事に、今になって気づくなんて。

ぶつきらばうな彼女の言葉や態度の節々に、シエルシへの愛があった。妹を護りたかったのだ。家族を助けたかった。母が戦いの中で消えていった。だから約束を胸にシルヴィアは敬愛する母を、あえて“敵”だと主張したのである。裏切り者と……………そんな事はあつてはならないと。

従いたくないものに従い、言いたくない事を主張した。道化となつて、ならばシエルシにも嫌われたほうがいいと思つていた。いつかは自分も戦の中で死のう。それが、母に対して出来る唯一の楔である、彼女はそう考えていた。戦いに身を置き、母を愚弄しながらも彼女は母と同じやり方を選んだのだ。他者に何かを押し付けるのではなく、自分の手で何かを護る為に戦おうとした。

シエルシはいつも見ていたのだ。静まり返つた深夜の宮殿の中、疲れた様子で座り込むシルヴィアの姿を。一人で毎日遅くまで勉強をし、剣の鍛錬を怠らず、貴族や国民に負けない権力を得ようとした。帝国に媚び諂い、プライドをズタズタにしても護ろうとした。誰を？ 決まっている。彼女だつてきつとどうせ、“この世界なんてどうでもよかつた”のだ。護りたかつたもの、それは。

「シエルシ……。もう、母上は……帰つてこないよ」

泣きながら彼女はそう笑つたのだ。シエルシは意味が良く判らなかつたけれど、今ならばはつきりと判る。彼女の気持ち、想い。やつと、これからだったのに。どうしてわかつてあげられなかつたんだらうか。どうして目をそらしてしまつたんだらうか。自分こそ、彼女の傍で……。彼女を支え、彼女を護つてあげねばならなかつたのに。

「あ……。っ！ あああ……。っ！」

廃墟の上に転がった姉の頭を拾い上げ、血に沈んでいたそれを強く抱きしめた。涙は止まらなかつた。悲しみなどという言葉では表現できない混沌としたどす黒い感情がシエルシの中で渦巻いていた。シルヴィアは 王は死んだ。国は滅び。王は死んだ。何度でも再認識しよう。終わったのだ。終わってしまった。何もかもがもう。意味を無くした。

「シエルシちゃん、逃げてっ！早くここから逃げてっ！！うさの言ってる事、わかる？シエルシちゃん、危ないから！逃げてなのっ！！」

「姉さん……姉さん……っ！！どうして……はは……はははは……っ」

「シエルシちゃんっ！！」

うさ子がシエルシの肩を掴み、激しく揺さぶったがシエルシは反応しなかった。焦るうさ子の視線の先、空中で剣を交える二つの影があった。ぶつかり合う最強の魔剣と最強の魔剣。激しく黒い魔力を迸らせながら、二対のシルエットは刃を何度も叩き合わせた。ここはもう危ない。シエルシを引きずってでも、逃げ出さねばならない。うさ子の中にある何かがそう叫んでいた。シエルシの腕を掴んで強引に立たせると、うさ子は無理矢理に歩き出した。

「シエルシちゃん、急いで！ここにいたらシエルシちゃんまで死んじゃうよー！」

「……………うさ、子……………」

「うん、うさだよっ！シエルシちゃん……悲しいよね。辛いよね。でも、歩いて。今は歩いて！さあ、早くなのっ！！」

シエルシは一步を踏み出しつつも背後を振り返った。そこにはタケルの攻撃で吹き飛ばされ、瓦礫の山に突っ込んで巨大な砂煙を巻き上げているホクトの姿があった。シエルシは我が目を疑う。ホクトが……あの最強と呼んでいい男が。一方的に叩きのめされる

情景がそこにあつたからだ。

黒き衣を風に揺らし、黒剣を握り締めた男は黒い炎で全身を包み込み、ふわりと空中に浮かび上がっていた。瓦礫の山から復帰したホクトは雄叫びと共にタケルに斬りかかるが、その一撃はタケルのガリユウで防御され、反撃の蹴りがホクトの顔面に減り込んだ。

「遅いな魔剣狩り……？ 無力だよ、君は！ 能力開放すら出来ないのかい？ そんな状態じゃいくらやつても僕には敵わないよ」

「ぐお……ッ!?」

よるめいたホクトの身体にガリユウを叩き込む。肩に減り込んだ刃 血飛沫が上がる。しかしタケルは手を休める事はなく、そのまま連続でホクトの体をガリユウで切り刻んでいく。

「ほら、ほら。ほらほらほら。早く反撃しないと死んじゃうよ」

「があああああつ!?」

「………………。退屈なんだよめえッ!! 何が最強の魔剣狩りだよケエッ!! 雑魚が! 雑魚が雑魚が雑魚が……雑魚がああああッ!!」

勢いを増していく斬撃でホクトは次々に攻撃を受けていく。その瞬間にはダメージを回復しようとしているのだが、攻撃によるダメージと追撃があまりにも早すぎて回復が追いつかない。ズタズタに引き裂かれた体から腕が刎ね、足が妙な形にねじれる。そうしてホクトの胴体に大剣を突き刺し、タケルは片手に術式を構築する。

「魔力不足か……!? 馬鹿が、自分だけ助かるようにしてりゃあ

そんなフラフラにならなかったのによ……！」

放たれる闇の炎。爆発はホクトの身体を再び吹き飛ばし、男は何度も身体を大地に叩きつけながら廃墟に転がった。ピクリとも動かないその様子にステラもシエルシも呼吸をする事さえも忘れていた。あの、どんな敵にも絶対的な力で立ち向かってきたホクトが……いとも容易く、倒されたのである。

それに何より彼の持つ剣。それはどう見ても魔剣狩りの象徴、Sランクの一つである蝕魔剣ガリユウである。ガリユウが二つその時点で既に意味が判らない。更にタケルだったはずの少年は、何故か成長した姿の美青年となっている。口元に邪悪な笑みを浮かべたその様子からはどうにも性格の良さを感じることは出来なかったが。

理解を超越した状況。啞然とする女子二人。それを上空から見下ろしていたタケルは笑みを作り、目の前に下りてくる。そうして口元を歪に引きつらせながらシエルシへと手を伸ばしたのである。

「シエルシちゃ　ぎゃうツ!？」

シエルシを護ろうと動いたうさ子の体にタケルの膝が減り込んでいた。そのままよろけたうさ子の頭を掴み、大地へと叩きつける。それを三回繰り返し返した後、放り投げてまるでバットでボールを打つかのようにうさ子の頭身体にガリユウを叩き込んだ。派手に吹っ飛んでいったうさ子は遠くの廃墟に埋もれ、そのまま戻ってくる事はなかった。

「あ……。やあ、お姫様。なんだか良く判らないけど、君たちは君たちで色々大変だったみたいだね」

「ひ……ひいっ」

「あゝ……そんなリアルにドン引きされるとオレも傷つくっていうか……。イラつとくるぜ、ええおい？」

シエルシの髪を掴み、タケルは強引に引つ張り上げる。恐怖で体が竦んで動かないシエルシを見下ろし、タケルは楽しそうに無邪気に笑ってみせる。それから女の身体を引きずりながらタケルは廃墟の中を歩き出した。

「おい、ホクト？ 早く戻ってこないとあなたのお姫様に酷い事しちゃうよ？ あ、もうしてるか……。ぎゃはははははっ！！」

「い、ひぐ……。っ！ どう、して……」

「あ？」

「どうして、貴方が……。こんなこと、を……？」

「どうして？ どうして貴方がこんな事を……？」

タケルは一瞬真面目な表情に戻り、それから少し考え込んだ。そうして唐突にシエルシの脇腹を蹴りつけ、悲鳴も上げられないシエルシを続けて何度も暴行した。

「下らない質問で時間とらせてんじゃねえぞボケ。とっとクビつちやいたいのには山々なんだが、お前は色々使い道があるから……。ほら、さっさと立ち上がれよホクトオ！！ それともお姫様の悲鳴が必要かい！？」

「ダメ……。！ ホクト、立ち上がらないでっ！！」

彼の狙いがホクトの持つ魔剣だと気づいたシエルシは突然息を吹き返した。先ほどまで放心状態だったはずの姫はタケルの腕を掴み、身体を起して叫ぶのだ。

「ホクト、逃げてえっ！！ 貴方だけでもいい……ここから逃げて、生きて、脱出してえっ！！」

「ってお姫様は言ってますけど……どうしますか？」

「ホクトッ！！！！」

「てかあんたうっさいわマジで。そういうのイライラすっからやめてくんねえかな……」

唐突にシエルシの胸元を掴んだタケルは服を強引に引きちぎる。肌蹴た身体を隠すようにシエルシは両腕で胸元を覆うが、タケルはその様子に楽しそうに声を上げた。

「人間の分際で結構な上玉だな、シエルシ姫……？ 買ったコじゃ高く売れますよ。ホクト君、この子もアレと同じ目にあわせちゃおうかな。ほら、なんつつたかな……。ザルヴァトーレ元女王の

「

次の瞬間、瓦礫の山を吹き飛ばしホクトが猛然と襲い掛かってきた。繰り出される拳をタケルは片手で受け止めながら後退する。瞬間的に開放されたシエルシだったが、ホクトはタケルの反撃により再び胴体にガリユウを突き刺される事となった。

「はい、残念……。不意打ちするならもうちよい地味に襲ってこな

いとね。ちゅどーん！ とか言いながら吹っ飛んでくるんじゃ意味ないでしょ」

「タケル……てめえ……！？」

「あはっ！ いいね、いいよその感じ……。憎悪……。殺意……。！
憎しみの力がオレにとっては大好物なのさ、わかるだろ？ わかるよな？ わかれって、おいッ！！」

剣を引き抜き、ホクトの身体を更に横に斬り付ける。よろめき、倒れたホクトの身体を踏みつけ、タケルは白い歯を見せて笑い続ける。

「苦労したんだぜ、テメエに奪われたガリユウを奪回するのにどれだけ手間あ必要としたと思ってる……？ わざわざテメエの捕まってるインフェル・ノアから研究途中だったテメエのガリユウのデータを奪い、テメエを逃がしてやった……。それだけじゃないぜ？ これまでだって何度もテメエらを助けてやったんだよ。オレの投資を考えれば、当然の報酬だと思わないか？ なあ、魔剣狩り」

「ぐあああ……ッ！？」

深々と付けられた傷口にタケルの革靴の踵が減り込む。その激痛に耐えかねて叫んだホクトを見下ろし、タケルは楽しそうに笑っていた。漸く身体を起したシエルシが見たのは、わけのわからない存在に最強であるはずのホクトが叩きのめされる景色……。最早ホクトは片腕もなく、足は捻じ曲がり、体中を切りつけられ肉は削げ落ち、骨が見えている。それでも彼はまだ生きています。戦おうとしていた。

「おい、人の話はちゃんと聞けよ、なあ？ あのクソ女……シヤナクさえいなきやもつと早く奪い返せたんだ。何年もガキの姿で人間風情の為に働いていた俺の苦勞がお前にわかるか？ 簡単には死なせねえよ……。地獄の苦しみを与えて、もう殺してくださいって懇願するまではなあっ！！」

倒れたホクトの身体に再びガリユウが突き立てられる。ホクトは片腕でその剣を押さえ込むが、タケルの力には敵わない。何度も身体に剣を突き刺され、ホクトは既に声も上げられなかった。タケルは楽しそうに暴行を続けるが、そんな彼の足にシエルシがすがりついた事で一時に停止が訪れた。

「や、やめてください……！ お願いします、もう止めて！！ ホクトが……ホクトが死んじゃうよおっ！！」

「……………んー……………いや、死なないだろ？ てかこいつの肉体は術式により再構成されているだけのただの架空情報だろ？ 死んだところでガリユウがあればまた別に再生出来るし」

「そういう事じゃないんです！ 彼は……ホクトは、この世界にたった一人しかいない！」

「でも幻だ」

「違うツッ……！！ 彼は……この世界に生きて……私たちと同じです……！！」

泣きながらも歯を食いしばり、真っ直ぐにタケルを見上げるシエルシ。その反抗的な折れない眼差しにタケルは眉を潜め、それからシエルシの下着に指を引つ掛けてそれを軽く剥ぎ取った。顔を赤ら

めるシエルシ、しかし彼女は両腕を広げてホクトを庇うように立ち上がった。タケルの眉が潜められ、さらに眉間に皺がよる。

「そこはキャア〜って叫んで泣き喚くところだが」

「……………。負けません。貴方なんか……………。屈しない！！」

「……………。イラつくぜ、クソ女……………！ 誰に向かって物を言っている？」

「私は ……！！ シヤナク・ルナリア・ザルヴァトーレの娘！ 革命を引き継ぐ者……………！ 私はシルヴィア・ルナリア・ザルヴァトーレの妹……………！！ 誇り高く、理想を貫き通す者……………！！ 貴方などに、屈しない！ 私はもう 何にも屈したりしないッ！！」

“あの時”は、ホクトに助けを求める事しか出来なかった。でも今は違う 多くのことを経験し、強い心を持たたと思う。悲しみも苦悩も背負い、真っ直ぐ歩いていく……………。不器用だとか愚かだとか、馬鹿なんて言葉で表現されてもいい。それでも 曲げたくない。自分の理念だけは、理想だけは、絶対に曲げたくない !

「……………。めんどくせえな。じゃあ死ね」

「く……………ッ!？」

タケルが溜息混じりに放った剣の一撃 それを立ち上がったホクトが片腕で受け止めていた。黒く燃え上がる炎 ホクトの瞳が真紅に輝き、放たれた魔力の波動がタケルを吹き飛ばした。よろめくシエルシを片腕で抱きとめ、それから自分の上着を脱いで姫の肩にかけた。

「ホクト……！？ 貴方……」

「ゴチャゴチャうるせえぞ、お前ら……。まあお陰で回復する時間が稼げた。ありがとうな、シエルシ……。よく、頑張ったな」

肩をぽんと叩き、片腕しかない男は歩いていく。シエルシはその背中を見守る事しか出来なかった。今ほど思ったことはない。どうか、あの人の事を護ってほしいと神に願った。どうか、あの人を支える力がほしいと切実に祈った。あの孤独で、孤高で、何もかもを背負い歩く男の背中を……。護りたいと、そう願ったのだ。

千夜一夜（2）

「反帝国軍による反逆の主軸、それは昴の手にかかっていると言っても過言ではない。」

帝国側は当然のようにシャフトを中心に防衛網を敷き詰めている。既に戦闘は始まっており、シャフトでヨツンヘイムへと上がっていた兵力は交戦状態にあるだろう。戦争は既に始まっているのだ。だというのに昴はまだバテンカイトスの中に居た。

バテンカイトスの一室、特殊な転送魔法陣の準備が着々と進められていた。その円陣の中心に立つ昴は深く息を着き、この作戦の趣旨を思い出す。この戦いの肝となる部分、それを昴が担っているのだ。

そもそも帝国を倒したところで全てが好転するわけではない。それは承知の事だ。問題なのは帝国が下層の全てを支配している

いうこと、そしてその支配の象徴であるミレニウムが存在し続けている事なのだ。

ミレニウム。スーパーコンピュータだといわれているその存在は、常にハロルドの傍にあるという。ハロルドを倒したところで第二第三のハロルドが現れるだけだろう。王や指導者なら、代替品などいくらでもある。だが唯一無二の存在。下層支配の主軸である、ミレニウムを破壊すれば……どうなるか？

帝国は壊滅的な打撃を受け、転送魔法も使用不能になり、機動兵器もすべて動かなくなるだろう。そうなれば一気に反撃のチャンスが生まれてくる。正面衝突ならば勝ち目など絶対はないのだ。だから、なんとしても破壊工作でミレニウムを壊す事が必要となる。そこでようやく勝率は五分五分に持ち込めるのだから。

「他のみんなは……もう、シャフトでヨツン Heim に向かったんだよね」

「ええ。きつと今頃、レコンキスタでの戦いになっていると思う」

部屋にいるのはメリーベルと、それから昴の二人だけである。メリーベルは術式を細かく調整し、昴の転送位置を割り出していた。その間昴は待機……ロゼもミュレイも、生き残った戦士達は全員シャフトからレコンキスタへと向かった。つまりそれは、大規模なおとり”だ。

ロゼが皆で回収してきた転送情報、それからホルスジェネレータから解析出来たミレニアムの一部のデータ……。そして実際に一期インフェル・ノアに滞在していた昴の内部知識……それらから場所を割り出すしかない。昴とて、実際にミレニアムを見た事はない。だがどこにあるのか、おおよその察しはつく。

ミレニアムがある場所、それはハロルド王の部屋の中だろう。彼は部屋から基本的に一步も出ず、常にそこに滞在している。そして

そこはインフェル・ノアの中心部……。あるとすればそこしかない。いや、そこにある……。確信めいたものが昴にはあった。

だが、それを行うという事はつまりハロルドと一騎打ちをする事に他ならない。だが隙さえ見つける事が出来れば昴の剣ならがまさに一刀両断。一撃必殺の破魔の力でミレニウムを破壊できるかもしれない。それにハロルドの頑丈すぎるあの鎧にも、昴の剣ならば有効かもしれない。

いや、最早理由などどうでもいい事だった。確かなのはこの作戦に志願したのは昴本人の意思であり、決着を付けようと願うのは彼女本人という事である。それを汲み、仲間達はこの重要な仕事を彼女に預けたのだ。囹の戦いも、長くは持たないだろう。剣誓隊に大型機動兵器……脅威となる戦力はいくらでもある。それらを止める事が出来るか、彼らを救うことが出来るか、それは昴にかかっているのだ。

「準備はいい？」

「勿論」

「心の準備は？」

「当然」

「なら、ざっと説明するわ。場所は大体打ち合わせ通り……。恐らくはハロルドとの一騎打ちになると思うけど、やれるわね？」

「うん」

「ミレニウムを破壊したら、帝国側の転送ポータルは使えなくなるから……。敵の輸送機を奪うとか何とかして、脱出。レコンキスタ

の本隊に合流後、反転して敵を叩く……」

「わかってる」

だが、昴はわざわざ脱出のことまでは考えていなかった。例え命を落とすことになったとしても、悪魔^{ミレリアム}だけは破壊してみせる。この世界に渦巻く因果　その中枢。いよいよそこに喧嘩を吹っかける時が来たのだ。刃を突き立てる時が来たのだ。こんな瞬間を、ミラは望んでいたのだろうか？　刃を握り締める手……しかし昴はもう迷わない。

「成すべき事を成す……それだけだよ」

「……判った。では、作戦を開始する。行くよ、昴」

足元の魔法陣から光が溢れ、昴の身体を包み込んでいく。体が重
力から解き放たれ、物質としての束縛さえも失っていくような感触
は。
。 転送の光の中、少女は目を瞑る。次に目を開けると、そこ

「
コード、^{ロクエンティア} “ 剣創 ” ……起動ッ!!」

ホクトの叫びと同時にガリュウが目を覚ます。しかしそれは完全ではない。ホクトの魔力は枯渇寸前であり、本来の実力の何割も発揮出来はしない。切り落とされた腕は復元できず、体中がおかしな事になっている。だが、それでも引き下がるわけにはいかない。身体を寄りガリュウ側へ……化け物の方向へ引つ張り寄せる。それでも、負けない。これは負けられない戦いなのだから。気合を入れる

と自分に言い聞かせる。構築したガリユウを手に、もう一人を魔王を見据えて。

「コード剣創……！ うーん、でも無駄でしょう。今のテメエにそれは使いこなせねえよ。戦っても無駄だぜ？ ま、オレはテメエをボコせればなんでもいいんだけどな」

「……………シエルシの……………」

「あ？」

「シエルシのおっぱいは、俺が最初に見ようと思ってたんだけどなあ……………」

ぼそつと、呟くような言葉。喉が潰されまともに声も出せなかった。しかしそれでも口から出た血と冗談。それはタケルを苛立たせるのに十分すぎる挑発だった。タケルは剣を掲げ、それから切っ先をホクトへと突きつける。

「ヤマトタケル天叢雲”の名において命じる……………！ とつとくたばれ、クソ野郎 ツ！！！」

「だが 断るぜ？」

「テメエの意見は聞いてねえんだよ、クソがああああああッ！！！」

雄叫びと共に動き出したタケル。それに合わせるようにホクトは黒い炎を纏いながら、ガリユウを大きく振り上げるのだった。

千夜一夜(3)

かつん、かつんと靴音が鳴り響く。闇の回廊の中、白き剣の騎士は王座を前に仰ぎ見る……。インフェル・ノアの中心部。全ての中枢にして善悪の根源、この世のルールを産み落とす場所……。玉座、ミレニウム。その上に座り皇帝ハロルドは侵入者を静かに見つめていた。

黄金なる甲冑を纏いし巨人と、白銀なる甲冑を纏いし勇者。髪を揺らし、昴は一步一步と前に歩む。王との体格差は圧倒的であり、ハロルドの前では昴など小人のようであった。王は椅子の上に座ったまま顎を撫で、しわがれた声で語りかける。

『ここまで辿り着いたか、救世主よ』

「……………ハロルド……………」

『安心しろ。この場所には何人たりとも立ち入る事は許さぬ……。ここに居るのは余と、そして貴様のみよ。他者を呼び込むつもりも、逃げも隠れもせぬ。余は貴様を待っていたのだ。救世主よ』

「待っていた……………?」

怪訝そうな表情を浮かべる昴。当然の事である。ハロルドは待っていたと言った。それにここに来るまでの間、全く迎撃を受けなかった時点で既に異常なのである。囷が上手く行っていると言えばそれまでだが、この場所に歩いてくるまでの間昴は一切の妨害を受けず、それどころかまるで導かれるようにしてここまで辿り着いたのだ。言葉では表現できない、直感的な誘致……。当然のように少女は眉を潜める。

「私はお前を倒しに来た……。それは判っているんでしょ？」

『当然の事よ。全ては承知の事……。余も勿論、相手をしよう。全力で、な……』

ハロルドがゆっくりと立ち上がる。巨大すぎる身体を支える足元の一步はずしりと部屋を揺らすかのように衝撃を纏った。聳え立つ黄金なる王。手に巨大な鉄板のような剣を握り、王は紅き布をはためかせる。黄金の魔力が揺らぎ、それに対応するかのように昂はユウガを構えた。

『ふん……。破魔剣ユウガ、か。ミラ・ヨシノの剣……。それがよもや貴様に渡ろうとはな。流石に余も予想はしていなかった』

「ミラ・ヨシノを知っているのか」

『当然だな。あの女も七つの大罪を持つ者……。救世主よ、戦いの前に知りたくはないか？ ミレニウムとはなんなのか……。魔剣とは……。帝国とはなんなのか』

そう言つて目を細めるハロルドは、昴の目に笑っているように見えた。何故戦いを前に、敵を前にしてこんなにも悠長なのか……。だが興味が無いと言えば嘘になる。こんな事を唐突に語り始めたハロルドの考えも含めて。

『見せてやろう、救世主よ。この世の人間ただ一人として到達し得なかった、ミレニアムの姿を……』

ハロルドがその片手をゆっくりと掲げる。するとそれを合図とし

たよりに暗闇に覆われていた部屋全体の壁が、床が、あらゆる場所が魔法陣を浮かべ、ゆっくりと稼動を開始する。ミレニウムそれはハオルドが繋がっている玉座そのもの。ミレニウムそれは、彼が生存し続ける為に必要なシステム。

開く隔壁、解き放たれた光。巨大な魔法陣の上、昴は眩い光に目を細めながら立っていた。周囲を見渡し、そして息を呑んだ。部屋の壁の中にあつたもの。それは、巨大な水槽だった。黄金の光を放つ水槽の中にはズラリと並ぶ人間の姿がある。そう、人間

人間である。ヒトの形をした者……それが水槽の中にずらりと沈んでいた。数え切れない人間達の骸、骸、骸……。そのおぞましさに昴は冷や汗が止まらなかった。

ミレニウムとは、人間を内蔵した“夢見るシステム”である。決してミレニウムは独断で何かを判断しているわけではない。沈められた、取り込まれた人間の総意によって、世界のルールを制定する……。そして人間達によって議論が行われ、計算が行われ、尋常ならざる事を実現しているのである。ハオルドの玉座が動き、それが競り上がって行く。現れたのは人が一人入れる程度の水槽だった。その中には小さな少女が膝を抱え、光の中にぶかぶかと浮かんでいる。

『……………見よ、これがミレニウム……。千年の時を支配し、予知し、議論し、“ゆらぎ”と“柔軟さ”を持ち合わせた機械……。神が己を模造して産み落とした、神なる知識の中枢……………』

「ミレニウム……………これが……………!？」

『必要な事だった。人間を護り、人間を繁栄させ、罪を償わせる為には』

「罪……………?」

『魔剣があるから争いが起きる。魔剣がある限り人は争いを止められぬ。魔剣などなければいいのに　そう考えた事はないか？』

魔剣　。 “魔^シ剣” 。それは、この世界の中に存在する規格外の力。人の身を化け物にまで昇華させる力。過ぎた力は人に悪影響を及ぼすだろう。死、混沌、欲……。ばら撒かれた魔剣の数だけ憎しみが生まれ、悲劇が連鎖する。魔剣などなくなればいい……。確かにそういえるのかもしれない。だがそれが一体なんだというのか？

『余は答えを欲した……。この百年、答えを欲し続けた。貴様は余に答えを与えてくれるのか、救世主よ……。？』

「………………。そんな事は関係ない。私は私の成すべき事を成す。ミレニアムシステムを破壊し、その作られた境界線をブチ壊すまで」
『良からう。ならば貴様が導き出したその答え　神の力にどこまで抗えるか試してみるが良い！』

ハロルドの全身からエネルギー供給パイプが切り離され、床の上に転がっていく。背中から蒸気を吐き出しながらハロルドは瞳を輝かせ、巨大な剣を高々と掲げた。昂はそれに応じるように鞘から剣を抜き、その鋭い切っ先を黄金の王へと向ける。ハロルドは　何故か楽しそうだった。いや、嬉しそうだったのかもしれない。己を殺しに来た異世界の救世主を前に、王が望み、願う事……。常人には理解し得ないその笑顔を前にしかし昂は迷わなかった。王は笑っているのだろうか？　確かめる術はない。だが、確かめる必要もない。

『我が肉体はミレニアムから切り離されては生きていけぬ……。全

力戦闘が維持出来るのは、せいぜい十分といった所か』

「……弱点だらけだな」

『時間切れを待つか？』

「いや 必要ない。十分も待たずとも、ケリは着く。そうだろう、ハロルド王？」

昂も笑ってみせる。暗く、冷たい闇の海の中で……。絶望的な戦いを前にしても。悲しい状況を踏みしめても。それでも笑って剣を取ろう。それが彼女の強さに繋がるのだから。

『正々堂々！ 感謝するぞ、救世主！ 心置きなく、かかってくるが良い!!』

「言われずともそうするさ、ハロルド王。これで……。これで、本当に最後だ ツ!!」

目を閉じ、精神をすべて力に集中させる。昂の全身から白銀の光が放たれ、それは光の柱となって部屋全体を照らしていく。心臓の音を感じる。ハロルドの猛る魔力を感じる。力量差はどれほどかわからない。あのホクトが勝てなかった相手である。だが、負けるつもりはない。負ける気はしない。どんなに圧倒的劣勢だとしても 心だけは折れない。屈しない。負けない。

「往くぞ、ハロルド……！ 救世主、北条昂……参るツ!!」

白き鎧の騎士が走り出す。王はそれを迎撃するかのように巨大な剣を叩き付けた。インフェル・ノア全体に響き渡る衝撃の渦……。

世界の命運を別つ一戦が今、始まるうとしていた。

千夜一夜(3)

「おいおい、本気を出してこんなもんか……？　弱い……弱すぎんぞ、テメエッ……！」

「ガキ相手に……大人は本気出さないんだよ」

「ぬかせしてろ、この　野郎ッ……！」

タケルの放つ斬撃に耐え切れず、弾き飛ぶホクト。しかし黒い炎を背後で瞬かせ、ブレイキングを行う。身体を捻り、大剣を地面に擦らせ炎を巻き上げながら突撃。繰り出す一撃はタケルの持つガリユウと衝突し、爆発を巻き起こした。

激しい戦いを前にシエルシはただ見ていることしか出来ない。吹き荒れる嵐のような二人の魔力を前に、祈るように胸の前で手を組んだ。そこにふらつきながら戻ってきたうさ子が並び、シエルシの肩を掴む。血まみれのうさ子を見やり、シエルシは悲しげに目を細めた。

「シエルシ、ちゃん……。あぶない、の……」

「うさ子……。ごめんなさい、でも……逃げたくないの……」

「シエルシちゃん……？」

足元を見やる。疲れた、汚れた姫の足……。これを後ろに一步引いてしまう事はとても簡単だ。今直ぐにだつて出来る。考えなくても出来る。けれども前へ……前へと進む事は、その何倍も何十倍も難しい。とても難しいのだ。

今の彼女に前へ進む資格などありはしない。彼女は力を持たず、ホクトを助ける事もできないのだから。しかしならばせめて……。せめて、ここから一步も引きたくなかった。逃げたくなかった。目の前の現実から……。戦いから。だから悲しくとも目を凝らして見つめるのだ。あの男が、命を燃やして夜の中で瞬くのを。

シエルシの気持ちを理解したのか、うさ子は頷いて血塗れた手でシエルシの手を優しく握り締めた。二人が見守る先、ホクトは圧倒的な劣勢に立たされていた。剣創の力を解き放つたとしても、魔力不足は明らか。負傷の度合いも決して軽くはない。黒炎を纏い、男は空を駆ける。闇の中を駆ける。確固たる敵を目指して……。

「そんなズタボロの状態でよく頑張るよ、全く……。オレ様惚れちゃいそう〜！　かつこいいねえ……。ええおいつ!？」

「生憎男にや興味がなくなつてな……。！」

「冗談だよ冗談！　お前も判つてんだろ？　なあ？　なあ!？　なあッ!？」

空中に浮かび上がった炎の剣、それがホクトへと降り注ぐ。対応するようにホクトも剣を編み出すが、その速さは明らかにタケルが上である。そして構築された剣は相殺する事もままならず、一方的にタケルの剣に砕かれてしまった。やはり力そのものも、残されている力も圧倒的に違いすぎる。ホクトの顔に余裕はなく、軽口を叩いているのは自分を誤魔化そうとしているかのようだ。

「“剣創”の力は、この世界の“神”にアクセスして力を引きずり出す力だ……。テメエにはもう領域に踏み込むだけの余力が残ってねえんだよ、魔剣狩り」

「……………そういってお前は、随分と余裕そうだな」

「当たり前だろ？ オレは元々、このタケルとかいうガキの身体に組み込まれちゃいるが、存在そのものは“領域”に直通しているんだからな……。！ テメエ、オレが何年化け物やってると思ってる……。？ 千年だよ、千年！！ せーんねん？ ひやははははははっ！！」

そう、男は千年間存在し続けていた。ガリユウという剣に限って、それは外見も中身も、生死さえも関係がない。ホクトが見た目をいくらかでも捏造できるように。そしてホクトという自意識が消えたところでガリユウから別の自意識が表層化されるように。この男もまた同じ……。ガリユウを持つからには不死身、そして無敵、磐石なる最強。

「まさか……。お前、タケルじゃないのか……。！？」

「タケルだよ、タケル。まあ……。意識までタケルかつつーと微妙な所だけだな。オレとタケルは……。テメエとヴァン・ノーレッジみたいな関係だよ。一つの肉体の同居人……。オレが……。ガリユウだ」

歪な笑顔を浮かべるタケル。己の胸をトントンと指先で叩き、それから悦に入ったように両手を広げてみせる。黒き炎の渦が男を包み込み、尋常ではない魔力が迸る。

「ガリユウは元々オレ様の物なんだよ……。それをテムエは勝手に使いやがって。苦労したんだぜ？ 気絶してるテムエに気づかれないようにガリユウの力を奪い返すのはよ」

「……まさか、俺がインフェル・ノアに捕まってた時に……」

「ぴんぽんぴんぽん！ だ〜いせ〜いか〜い！！ お前らさあ、俺が脱出させてやった事にも気づかないで……バツカだよなあ！！ 帝国の連中も、ガリユウのデータを切り離して使おうなんて馬鹿なこと考えるからオレに搔っ攫われるんだよ。ま、自業自得ってやつ？」

「てめえ……一体何者だ……！？」

ガリユウを両手で構え、ホクトが緊迫した様子で問いかける。彼も悟ったのだ。冗談で存在している化け物ではないのだと。これは

確実に千年という時を悪意を持って過ごしてきている。異形も異形、怪物も怪物……。ならば問わねばならない。その男の存在を。

「何度も言わせんじゃねえよ。オレがガリユウだ。蝕魔剣、ガリユウ……！ 七つの大罪って知ってるか？ 知らねえよな。知らねえだろ？ まあいいんだよ。兎に角オレはその一つ……世界で最悪のバケモンってわけだ。あ、まあ正確には違うんだけどな。色々あんのよオレにも事情ってもんが。語るのはムズいぜ？ 何せ千年分の野望だ」

「とりあえずてめえがヤバいって事、それからここで殺した方が良さそうだって事だけはわかった」

「あ〜……………。ダメだそりゃ。てめーには無理だつて。ホクトちやあ〜ん!? 力も弱まっちゃって…………ククツ!! “剣創”の加護も受けられないでめえに何が出来るのよ!?”

「魔剣の性能が絶対的な勝敗に直結すると思うなよ…………? お前は…………シエルシを苛めたな。うさ子をぶつとばした。いいか、耳かっぼじってよく聞けよ変態野郎…………! シエルシを苛めていいのは! うさ子をひっぱたいていいのは! この…………俺だけだつ!!!”

「そんな話誰もしてねえんだよ屑がああああああッ!!!」

負けられない戦いがある。だから、例えどんなに勝ち目がなくとも立ち向かうのだ。ホクトも。そして昴も。二人は戦っていた。それぞれの場所で。それぞれの役割を持って…………。

ハロルドが振り下ろす剣の一撃。それを昴は鞘で受け止める。しかし絶対相殺を誇るはずのユウガの鞘を持ってしてもそのダメージは防ぎきれない。ハロルドは巨体に似合わず素早く、繰り出す斬撃はまるで旋風。攻撃を受けた昴は派手に吹き飛び、部屋の中から端まで弾き飛ばされ、水槽に激突した。その衝撃にも水槽はびくともせず、それがどれだけ強固な護りに固められているのかわかる。

もしも白神装武と呼ばれる鎧を装備していなかったなら、彼女の身体は砕けていただろう。ハロルドの持つ力はそれほどまでに圧倒的なのだ。昴は背中を強く打ち、咽ながらも身体を起す。既に追撃で猛進してきたハロルドが目の前に居たのである。昴は素早く鞘に収めた剣を引き抜きながら、ハロルドの振り下ろす剣と脇を抜けて斬り付ける。一瞬の出来事であった。刃はハロルドの強固な鎧へと確かに徹った。しかし、王は倒れるどころかダメージを受けている様子すらない。

『どうした救世主、その程度か……？ そんな剣では何万回斬った所で余は倒れぬぞ……！？』

「ハロル……ドツ！？」

繰り出された剣をまともに受け、昴の全身が悲鳴を上げた。先ほどまで無傷だった少女の体中に亀裂が走り、呼吸がままならなくなる。意識が吹っ飛びそうな衝撃……。口から大量の血を吹き出し、昴はぬめる口の中で舌を巻いた。強い やはり、尋常ではなく、強い。

吹き飛ばされた昴はまるでピンボールの球のようであった。天井に激突し、更に吹っ飛んで床に叩きつけられる。更にバウンド……。そこで漸く着地する事に成功する。昴は両足でしっかり踏ん張り、勢いを殺した。それからもう一度血を吐き、泣き出したくなるほどの激痛をぐつと堪えて前を見据えた。

余計な情報はいらぬ。そう切に願う。ハロルドを……遥か格上の相手を倒す為に必要な事。それは、無駄を廃する事だと悟った。己の命の維持など二の次。昴は深く、そして短く呼吸を繰り返しながら視野を狭めていく。余計なものは遮断する。この部屋の事も、ミレニウムシステムの事もどうでもいい。今はあの化け物を倒す。この世界の歪を正す。ただそれだけである。

「あ……ああああああッ！！」

叫びだった。それは人間の声というよりは獣の咆哮に近い。銀色の魔力が迸り、一気に膨れ上がっていく。体がそれに耐え切れず軋み、血が噴出してもやめる事はない。少女は決めたのだ。命をかけると。護ると。戦うと。迷わないと。

「ハアロオルウドオオオオオオオオオオッ！！」

『それでこそ　　！　　来い、救世主ッ！！』

銀色の稲妻が迸る。　　。　　昂の暴走にも近い魔力の放出に反応するかのように鎧全身に術式の光が浮かび上がった。走り出した昂はまるで光にも近い速さで急加速する。時が　　止まったように見えた。昂は己の時間を加速させ、そして術式によって物理的にも加速し、知覚不可能なほどの早さに到達したのである。全く何も見えなかったハロルドの体を剣が刻み、王は振り返る。昂は部屋の中を猛然と走り続けている。が　　音が聞こえるだけで。魔力を感じるだけで……。

『……………全く、見えぬ……………』

耳を劈くような音が部屋の中に響き渡り、気づけば昂がハロルドに襲い掛かっていた。胸を切り裂かれる。今度は背後　　知覚が追いつかない。ミレニアムの処理速度を持ってしても、それは予測不可能だった。ハロルドはミレニアムの恩恵を遮断し、己の直感に全てを委ねる。

『そこだ！！』

振り返り、虚空に剣を振るった。何拍か遅れ、切り裂かれた昂の肉体が現れた。しかし次の瞬間それは氷の結晶となって砕け散る

。　　気づけば部屋の中には無数の昂の姿があった。氷によって生み出された虚像……幻影。そしてその幻影を切り裂いたハロルドの剣は重い時の呪縛に囚われていた。土壇場で昂が投入した、新しい能力の使い方。　　連続でハロルドの身体に衝撃が走り、その身体が氷に飲み込まれていく。

『ぐ、おおお……ッ!?』

恐ろしい腕力を持つハロルドも、時の停止には敵わない。それが維持出来るのは数秒。しかし、それでも今の昴には十分過ぎる。

稲妻を纏った昴は気づけばハロルドの目の前に立っていた。そしてまるで閃光が瞬くように、一撃。二撃。次々と繰り出される剣の乱舞。それは加速し、次々にあらゆる方向からハロルドを切り裂いていく。昴の腕から先はまるで消えてしまったかと思うほど高速で動き、王の身体を滅多切りにし続ける。

「万回斬っても通じないと言ったな？ ならば私は……億！兆！！ 無限の時の中で貴様を斬り続けるのみだッ！！ 朽ち果てる、ハロルド……！！ ユウガアアアアアアアアッ！！」

更に前に跳び、ハロルドの身体を蹴り飛ばす。空中に放り出されたハロルドの氷の呪縛が解かれ、しかし昴の連続攻撃は止まらない。知覚認識不可能な降り注ぐ剣の雨。ハロルドは反撃も出来ず、成されるがままに空中で踊るしかない。

「おおおおおおおおおおおおお　　ッ！！」

『ぐ……!? 音よりも光よりも、早い剣……か……!? 見事だ……救世主……』

ハロルドの隣をすり抜け、電撃を纏ったまま昴は着地する。その足元は黒く焦げ付き、昴の服も身体も酷くぼろぼろになっていた。在り得ない速度で動かしていた腕の服も鎧も完全に砕け散り、残っているのは血まみれの生身だけである。口から血を流し、膝を着く昴……。その背後、ハロルドは轟音と共に沈むのであった。

千夜一夜(4)

“ 負けないで ” そう強く願っていた。 “ 諦めないで ” …… “
どうか勝利を ”。けれども現実には残酷に、成す為に足りない物は何かを差し引いていく。

打ち合い、そして吹き飛ばされたホクト。瓦礫の中に埋もれ、それでも歯を食いしばって立ち上がる。口の中が血でいっぱいになるうとも、その腕が無くなるうとも。男にとっては関係ない。負けたくない…。負けられない。背負うと決めたから。これからは己の我侭を貫き通すと決めたから。決めたばかりで死んでいるわけにはいかない。だから 何百回でも立ち上がる。巨大な世界の憎悪に立ち向かえる。

「 弱エ！ 弱すぎんぜ、ホクトちゃんよオツ！！ 何が魔剣狩りだ…。ああ？ そんなんじゃ何も護れねえ！ 救えねえエエ！！ もつとだ…。もつとかがつてこいよ！！ もつと力を出して見せる！！ 証明しろ、テメエの罪をツ！！ 」

「 ごちゃごちゃ、うるせえ…。な…。ツ！！ んなこたあ判ってんだよ、俺だつてな ツ！！ 」

砕けた剣ならもう一度構成しよう。傷はふさがらずともまた前に進もう。男は魂で戦っているのだ。肉の器など、どうなるうと知った事ではない。死と消滅の淵に立たされ、漸く思い出す事がある。ガリユウが ヴァン・ノーレッジが。彼の中にいるもう一人の男が。恐れていた。思い出していた。そして抗おうとしていた。黒きもう一つのガリユウ 真の暴虐の王に。何故だろう、何となくわかる。わかってしまう。

「てめえは……俺が倒さなきゃならねえ敵だ」

「そうだ！ オレ様はテムエの敵だ！！」

「ならどうする……！？」

「決まってるよなあッ！！」

「「 ああ、決まってる ツ！！ 」」

目を閉じ、ホクトはその身にヴァン・ノーレッジの意識を取り戻していく。世界最強の魔剣狩り。その男の全てを。ガリユウがその目を輝かせ、赤黒く燃える炎の魔力を放出する。それはガリユウが己の意思で、持ち主であるホクトに協力しようとする姿勢だった。魔力はもう残されていない。それでも彼に力を与える物……。ならば何を差し引いていくのか。命か？ 或いは 記憶か。

それでもホクトは揺るがない。一步たりとも退くつもりはない。雄叫びと共に、全身に闇の装甲を纏って行く。握り締めた黒き刃。今は心を重ねて一つにする。そう長くは持たない、判っていた。だから馬鹿正直に 真っ直ぐに。正面から “敵” へと襲いかかる。

『かつてこの世界には、神の姿があった……』

“ 負けないで ” そう願っていた。力を使い果たし、膝を着く。昂。その背後で倒したはずのハロルドが起き上がるのが見えた。黄金の王はその全身の傷を修復しつつ、更に鎧を刺々しく、雄雄しく、変化させていく。いや、それは強化。そして回帰。王の甲冑は更に輝きを増し、黄金の光は昂の光をかき消してしまいそんな程荒々

しく、莊嚴に満ちていく。

『しかし神は最早居ない。人間の願いは神をも殺す……。救世主よ、余は知りたいのだ。この世界の本当に在るべき姿……。そして、人間とは何なのかを』

「……………くッ!!」

振り返り、剣を構える昴。ハロルドは背中に巨大なブースターを構築し、轟音と共に光を発しながら猛スピードで突っ込んでくる。防御もままならず、その力任せの一撃は昴の身体に叩き込まれた。吹き飛ばされる昴……。それに追いつき、ハロルドは巨大な手で昴の身体を握り締めた。

『知りたいのだ! この世界の可能性を……………!! 示して見せよ、異世界の勇者よ!! 人の業……………罪の夢をッ!!』

「ぐううううう……………ッ!?!」

巨大な手に包み込まれ、昴は激しく締め付けられていた。体中が軋み、骨が折れる音が連続して響いた。血を吐き、それでもまだ少女は諦めていたなかった。ハロルドは絶大な力を持っている。勝ち目は薄い。そんなことは最初から判っていた。そう、判っていたのだ。

それでも戦うと決めた。反逆すると決めたのだ。己の運命、この世界の法則、絶対なる力。それがどうしたというのか。もう迷わない。護るという事は。戦うという事は。そう、あの男のように絶対に退かない事なのだから。

「じゅんじゅん……………何を、わけのわからない事を……………言っている

ッ！！」

ありつたけの力を使い、昂はその拘束に抗った。両腕で、両足で、強引に手を開いていく。血が流れようが折れた骨が皮膚を突き破ろうが、そんな事は関係ない。些細な事だ。そう、彼女も同じ事。彼と同じように退けないものがある。護りたいものがあるのだから。

絶叫に近い声が響き渡り、救世主は王の手から逃れた。着地と同時にその手の中に再び剣を構築するが、それよりも早くハロルドの拳が振ってくる。回避したにも関わらず掠っただけで昂の身体は弾かれた。よろめきながら後退し、しかし一步踏ん張って足を止める。身体を支えるのはこの両足、状況を打開するのはこの両手、諦めなのはこの心、勝利に導くのはこの目である。血を吐き、笑ってみせる。白き剣を片手に 救世主は笑う。

「ハロルド……貴様の話なんかどうでもいい。どうでもいいんだよ。そんな話は誰も興味ないし、私も興味ないし、どうでもいい。そんなナメた態度で私を殺せると思うなよ……慢心するな、王ッ！！」

勝利する為に必要な犠牲の全てを支払ってみせる。限界を超え、それより先にある限界さえも超えていく。魔力を振り絞り、傷だらけの腕で握り締めた刀……。美しく反り返る刃に映り込む王と救世主、その二つを別つかのように光は瞬いた。

「私が貴様の敵だ。貴様が私の敵だ。今は私を倒す事に全力を出せ、ハロルド！！ 口先ばかりでごちゃごちゃと……。目に物を見せてやる。かかってこい。来いよッ！！」

「あくまで退かぬか……。良い。良いぞ、救世主。それでこそだ。抗う力、遺志……。運命の流れなど必要ない。歩いたその後には道は出来る！」

「私が歩く道こそが正義　！」

『ならば悪と呼ばれる物で貴様を試してやろう！　我が霸道という名の悪で！』

「私は世界を救いたい　！」

『ならば戦え！』

「言われなくてもそうするさ……ッ！！　力を貸してくれ、ミラ……。お願いだ、私の命の全部を燃やし尽くしたっていい　ッ！！　勝たせてくれ……。勝ちたいんだよ……。だから　お願いだ！　一緒に行こう。一緒に戦ろう　ッ！！」

目を閉じ、穏やかな心で魔剣に語りかける。ずっと向き合うことをしなかった自分の力……。罪の根源。一度はミュレイを苦しめ、ミュレイを殺し、そして昴の両肩に大きな荷物を背負わせた力　破魔剣ユウガ。しかしそれがあつたからこそ彼女はここにいる。正義を示すには、己の理念を示すには、絶対的に力が必要なのだ。そう、あらゆる悪を許さず処断できるだけの正義の力……。己が抱きしめる、真実の力。

ミラ・ヨシノはどんな思いで死んで行ったのだろうか？　きっとこんな戦いなど望んでは居なかったのだろう。しかしそれでも関係ない。魔剣が嫌だと言っても関係ない。力を貸してくれなくなつて関係ない。だったら一人でやるまでだ。でも　もしもそんな我俣に付き合ってくれるなら　。

銀色の光が昴の全身を包み込んでいく。砕けた白神装武が修復し、同時に昴の髪が真紅に染まって行った。見開く瞳は朱　。表層はクールに、しかし心の中では炎を滾らせる。守りを捨て、ユウガを

攻めに特化させる。鞘を消滅させ、その分刀身を伸ばし、太くし、巨大な魔を抜く為の斬馬刀へと変質させる。燃え上がる銀色の炎。それを両手でできつく握り締める。世界という名の運命に逆らうにはまだまだ足りない。だが、それでも。

「第二ラウンドだ、ハロルド……！ 私が死ぬのが早いかな！」

「余が止まるのが早いかな……！」

「『正々堂々、勝負ッ！！』」

命を燃やし、銀色の炎を振りかざして救世主が黄金の王へと襲い掛かる。二つの巨大な力が正面から激突し、インフェル・ノアに衝撃が走った。昴の脳裏に様々な記憶が過ぎっていく。幼少時、手を差し伸べてくれた兄の事……。優しく自分を受け入れてくれた本城夫妻の事。こちらの世界に来て面倒を見てくれたミュレイ、ウサク、ゲオルク……。共に帝国と戦った仲間達。そして、あの男の背中を思い出す。

考えるだけでもイライラする。見た目は全然似てもないのに、兄に似たあの男が。真っ直ぐで、不器用で、優しくそして何より強く。迷いなんて言葉を知らないみたいに何もかも乗り越えていく。だから、大嫌いだった。

何度も刃を交えた。敵だと決め付けてその命を狙った。何度も、何度も、何度も繰り返して刃を交えた。絶対に二つの道は交わらないのだと思っていた。だが今はあの男が生きているのだと信じている自分がいる。もしももう一度会うことが出来たなら、その時は一発思い切りぶん殴ってやりたい。そしてそれから謝ろう。交わらない道を歩く二人……。それでも、だからってその通りに生きてやる必要などどこにもない。

決められたレールの上など歩かない。自分が正義と信じたその場

所こそが自分の居場所、進むべき場所……。力が足りないなら、それで何かが護れないなら……。もっと強くなればいい。それでも力が足りないなら、自分の中の何だつて犠牲にしてやる。命だろつがなんだろうが関係ない。だから何もかも燃やし尽くして全てを力に変えられる。悲しみや迷い、苦悩だつたとしても。

「はあああッ！！」

「なんとッ！？ 力で余の剣を上回るとは……！？」

「上回つたのは力じゃない……！ 意思だッ！！」

弾いた剣をそのままに昂は踏み込んでいく。繰り返されるハロルドの蹴り。それを小さく跳躍して回避する。爪先に乗つた昂はユウガを下段に構え、脇を抜けながらその身体を切り裂いていく。更に足を止めず反転し、加速。その瞳に映るのはハロルドを倒す為に必要なビジョン。未来を予測し、全ての攻撃を正確無比に実行する。

目にも留まらぬスピードで駆け抜けながらハロルドを切り裂く白き刃。ハロルドは感覚ではそれに追いつけているが、身体がどうにも追いつかない。ズタズタに切り裂かれ、王は苦し紛れに周囲全てを力任せに薙ぎ払つた。並の人間ならミンチになってしまうような猛々しい魔力の衝撃。それを昂は回避して上空に着く。落下しながらハロルドの頭に刃を深々とつきたて、叫びと共にそれを切り払つた。頭部を射抜かれたハロルドは数歩後退し、そして巨大な身体で膝を着く。血を流しつつ、しかし王はそれでも健在だつた。

「……………成る程、これが人間の力か」

「……………倒れない、か……。クソ……。なら、もう一度……。ッ！？」

しかし昴の身体は意思に逆らい両膝を大地に付けていた。口から血が溢れ返り、それが中々止まらない。剣も気づけば消滅してしまい、昴には何も残されていなかった。使いすぎた力の代償　死という文字が脳裏に過ぎる。ハロルドは傷を負いながら未だ健在。勝敗は明らかだった。

『よくぞここまで戦った。褒めるぞ、救世主』

「……………」

『胸を張るが良い。貴様はこの世界に一定の力を示して見せた。涙を流すような敗北ではない』

そう言われ、昴は初めて自分が泣いている事に気づいた。だがそれが余計に彼女の戦意に拍車をかける。震える両足で、力の入らない、言う事を聞かないその足で必死に立ち上がる。血を流しながらも歯を食いしばり、顔を上げる。

「勝手に終わらるんじゃないやねえよ……………！　まだ、私はやれる……………！　諦めたり……………しない！」

一歩前進　それだけで気が遠くなるような激痛が全身を襲った。呼吸も上手く出来ない。もう死んでしまっていて当然の状態なのだ。生きているのは奇跡　いや、強固な意志の恩恵に他ならない。ハロルドは一歩一歩近づいてくる昴をじっと見つめ、剣を降ろして待ち構えていた。

「決めたんだ……………。退かない……………。絶対に……………勝つって。この、腐った世界のルールを……………。皆を、苦しめる法則を……………！　ぶっ壊し

て、やるって……っ」

『何故そこまで出来る？ 貴様にとってこの世界の事など遠い事情のほずだ。何がそこまで貴様を駆り立てる？』

「判ったように言っなよ……。こつちの世界に来るまで、どうせ私は死んでたようなものだったんだ……」

死んだような生活。動かさない心。緩く、穏やかで。停滞した時の中で生きていた。過去を振り切れず、未来に怯え、今をやり過ごすだけで精一杯の日々……。でも、ここに来てからは違う。本当に心振るわせる物に出会った。本当に護りたいと思う者が出来た。だから。

「そこから、動くなよ……。今から貴様を……処断、しに行く……ッ！」

指差す昴。ハロルドはそれを受け、静かに目を細めた。あえて言うとおりにした。わかっていたとしても。彼女が踏み出す次の一歩で、倒れるということが 判っていたとしても。あえてそれを受けた。見届けた。昴の目が虚ろに光を失い、足が止まる。それでも背後には倒れなかった。あくまで前のめりに ぱったりと。少女は血の中に沈んだ。もう、ぴくりとも動かずに。

『……………。見事なり、救世主』

ハロルドは剣を納め、強化装甲も解除した。そうして昴へと歩み寄り、うつ伏せに倒れている昴の身体を持ち上げる。昴は目を開けたまま、口から血を流したまま、涙を瞳いっぱい溜めて動かなくなっていた。その骸を慈しむように、ハロルドはそっと抱き上げる。

静か過ぎる争いの後、王は一人救世主の少女へ敬意の念を送っていた。

千夜一夜（4）

「“天叢雲”が動き出した……。となると、もう誰にも止められない、か」

最下層、オケアノスの海よりも下に沈む結晶樹林。忘れ去られた遺跡の最深部、一人で靴音を鳴らして歩くメリーベルの姿があった。崩れかけた遺跡の中、彼女の正面に見えるのは剣の結界に囲まれて眠る一人の少女である。この世界に神、そしてメリーベルが異世界へと渡ってきた理由……。歩み寄り、そして見上げる。神々しく輝き続けている夢見る神……。目覚めの時はまだ遠く、しかしそれは確実に迫っている。

「時間がない。一刻も早く、七つの大罪を……。最悪、私が介入するしかないか……。いや、させられているのか。私も昴やホクトと同じように……」

片手で前髪を掻き上げ、メリーベルは重苦しく息をついた。眉を潜めるのは悩ましい現実が目の前に残っているから。そして自分がこれからなさねばならない事の大きさに足が鈍るから。

昔は良かった。何をするにも全力で居られたし、迷う事も鈍る事もなかった。時を経て今、漸くあの頃戦っていた自分の本当の姿を知る。そして思うのだ。救世主として異世界にやってくる事の責任

の重さ、そしてその難しさ……。

「無理を……していたんだね。夏流も……」

ぼやき、そつと神へと手を伸ばす。すると指先は光の衝撃に弾かれ、メリーベルは身体ごと後退した。手は黒く焦げ付いており、特殊な装備を身に付けていなければそれだけで死に至っていたかもしれない。やはり、触れる事が出来るのは。少女の夢を覚ます事が出来るのは。彼ら、二人しかないのだ。

壊れたグローブを放り投げるメリーベルの背後、浮かび上がる影があった。白いローブで全身をすっぽりと被い、目深にフードを被った人影。背中には対となるべき翼が生えているが、片方が契り取られている。異形の存在に気づいたメリーベルは振り返り、それと正面から対峙した。おぞましい力を感じるが、しかしそれでもメリーベルは怯まない。この程度の状況、すでにいくつもクリアしてきたのだから。

「神聖な聖域で何をしている……？ 異世界の救世主よ」

「その呼び方はあんまり好きじゃないな。心配せずともこれには干渉出来ない。ここを見回ってるだけ無駄だよ、ゼダン」

「我らの存在にも気づく、か……。忌々しき来訪者め。何が目的だ」

「……私は別に、善悪の観念とかに囚われて生きているわけじゃない。ことそういった事に関しては無頓着なの。ずっと昔からね」

「ならば何故」

「この世界の正義や悪は関係ない。でも、私の大切な人を脅かすも

のがあるのならばいくらでも戦う。理由なんてない、それはただの自衛行為よ。故に揺ぎ無い」

「退去願おうか。貴様は危険すぎる」

問答無用で突き出すゼダンの手。それは真つ白で、獣のように爪が長い。掌にはぎよろりと瞳が浮かび、それがメリーベルを捉えた。足元には魔法陣が浮かび上がり、メリーベルに強力な術式が襲い掛かる。しかし錬金術師はそれを指先一つ鳴らすだけで打ち破って見せた。

崩壊する術式の光は美しく散る。破片となった光を前にゼダンは一歩後退した。ハイヒールを鳴らし、メリーベルは歩いてくる。その余裕さからは絶対的な能力に裏打ちされた自信を感じるた。そう、彼女には余裕があった。今ここで、ゼダンとやりあえる位の余裕が。

「手品じゃ私は殺せない。そんな中途半端な術式、崩す事くらい本当に簡単」

「貴様……神に逆らうつもりか？」

「神と戦うのはこれで二度目だから」

「………………。干涉出来ない存在がこの世界をうろついている事は避けねばならない。いずれ相応の戦力を以ってして貴様を排除させてもらおう……。次元の魔女め…………。」

メリーベルは口元に笑みを浮かべ、目を閉じる。ゼダンは足元に術式を浮かべ、次の瞬間には音もなく消え去っていた。独りきりに戻った静寂の中、メリーベルは背後の神へと視線を向ける。やらね

ばならない事……それはまだ何も成されては居ない。何の為にここに居るのか、その理由を思い出す。

「……………もう、戦いには巻き込みたくなかったけど……………。力を借りなきゃかな、夏流」

突き刺された剣の痛みは確かに残っていた。命がもう、残っていない事を知る。タケルがホクトの胸に深々と突き刺したガリユウは笑うように蠢き、主の悪意を顕現する。

「大分楽しめたが、そろそろ終わりにしようや……………？ ガリユウでテメエの命を全部喰らいつくし、それで用件は終わりだ」

「……………」

「何も出来ずに死ぬ気分はどうだ？ 無力さを噛み締めて死んでいく気分はどうだ？ てめえが護ろうとした姫も、仲間も、国も、世界も、全部ぶっ壊れていく……………！！ 世界に見放されて消えていく気分はどうだい、救世主よ？」

「……………る、せえぞ……………」

歯軋りし、ホクトは動かない身体で 　しかし血反吐を吐きつける。顔にそれを受けたタケルは眉を潜め、何度もホクトの顔面を殴り飛ばした。滅茶苦茶に腫れ上がった顔で、それでもホクトは笑う。

「何笑ってやがる……………」

「てめえには、わかんねーだろうな……。やれよ。俺が居なくなっても、シエルシは……。この世界は、強く生きていくんだぜ？ 残された人間ってのは、そういうもんだ」

「ああ、そうかいッ！！ 喰らいつくせ、ガリユウ　ッ！！」

黒い炎が燃え上がり、ホクトの身体を焼いていく。ホクトの全身に刻まれたガリユウの術式がタケルに奪われていく。この肉体は、ホクトという存在は、ガリユウによって再構成されている幻である。ガリユウから全てを奪われたなら、ホクトにはもう何も残らない。それは彼の消滅を意味していた。

「ホクト！？　うさ子、ホクトがあっ！！」

「シエルシちゃん、だめ……。だめ、だめなのっ！　だめ！　だめ、だめ、だめっ！！」

「どうしてえっ！！　ホクトが……。ホクトが殺されちゃうよおッ！！」

「だめなの、だめなの、だめなのっ！　シエルシちゃん、逃げて……。もうだめ、だめなの！　うさが……。うさが一生懸命時間を稼ぐから！　ありっただけ走って……。走って逃げて……。！」

「嫌ですッ！！」

「嫌とか、そうじゃないの！　わかるけど！　わかるけど、ダメだよ……。！　シエルシちゃんが死んじゃったら、ホクト君が悲しむから……。！　だから、逃げて　！！」

ホクトの元に駆けつけようと暴れるシエルシを羽交い絞めにし、うさ子は泣きそうな顔で叫ぶ……。シエルシはまた思い知るのだ。結局、自分は何も出来ないのだと。力なく膝を着く姫を置き去りに、うさ子は走り出す。猛然と加速しながら、空中で翼を広げて。

「デストロイモード、起動　！」

装甲を纏い、うさ子がタケルへと突っ込んでいく。しかしその雷撃を纏った一撃はタケルが片手で構築する防御障壁にあっさりと防がれていた。Sランク魔剣、その全力の一撃を受けてタケルは怯みもしない。反撃で出現した剣山が一瞬でうさ子の全身を串刺しにし、装甲を破壊していく。無数の剣に貫かれて動かなくなるうさ子……それを背後で見ていたシエルシは居ても立っても居られず走り出していた。

瓦礫の山の中を、死の渦の中を、ホクトへ……。うさ子へ……。何より二人を苦しめている“敵”へ。使える魔術は、ただの封印魔法。それを精一杯に練り上げ、タケルに放つ。しかしタケルにはどんな魔術も通用しない。反撃で放たれた剣の雨。それに無様に吹き飛ばされ、顔を泥だらけにしながらもシエルシは立ち上がった。片足が切り裂け、血が流れている。それでも痛みなど感じないほどに強く願っていた。ホクトを助けたいと。うさ子を、助けたいと。

「チ……。ッ！　雑魚の分際で、一々うざってえ……」

「……。……。おい、余所見してる場合か？」

その声は既に瀕死であるはずのホクトから聞こえた。零距离で放たれたガリユウの一撃。二人の魔剣狩りは互いの刃を互いの胸に突き立てる形となった。二人の男が睨みあう。その視線の狭間。

ホクトの奇策を受けガリユウが蠢きはじめる。

「な、なんだ……！？ てめえ、何しやがった！？」

「そんなにガリユウの力が欲しけりゃ、くれてやるよ……ッ！
ただし……俺の意思、記憶、魂……全部喰らいつくせると思っ
てんのか？」

「まさか……！？」

「そのまさかだよ、クソツタレ！！ ありったけの力……！ ど
ちのガリユウが上か！ どっちの意志力が勝つか！！ 試してみよ
うぜ　　ッ！！」

二人の身体を炎が包み込み、同時に魔力が究極まで搾り出され、
衝撃が迸る。うさ子が倒れ、シエルシはまるで紙くずのように吹き
飛ばされていく。それは彼の狙い通りだった。二人が十分に離れた
のを確認し、まるで息を吹き返すかのように目を見開きタケルの額
に己の額を叩きつける。所謂頭突きであった。

「よお……俺も不完全なガリユウにやきもきしてたんだ。てめえに
は力じゃ及ばないかも……。だが、俺もガリユウの一部となつて
てめえを呪い続けてやるぜ……？」

「このッ！！　ふざっけんじゃねえ、雑魚が！　離れやがれッ！！」

「何ビビってんだよ……！　一緒に吹っ飛ばうぜ、タケル　　ッ！
……！！」

「「　おおおおおおおおおッ！？　「「

二人の男が同時に叫びを上げた。本来存在するはずのない、二つのガリユウが同時に光を放つ。意識と魂が混在し、しかし決してそれは交じり合わない。世界に両立してしまった矛盾すべき存在……それをこの世の法則そのものが嫌うかのように、二人の周囲には巨大な力が満ち満ちていく。

「ホクトツツ!?!」

倒れたうさ子を抱き上げながらシエルシが叫んだ。その視線の先、ホクトはそれでも笑っていた。そうして片手を軽く掲げ、人差し指をシエルシに向ける。無邪気な笑顔で 出会った頃と変わらない笑顔で。何故だろう、それはいつでも少女の心を救ってきたというのに……今は違う。張り裂けそうなくらいに苦しくて、不安に押しつぶされそうになっている。声が出ない。足が動かない。肝心な時にまた、助けられる。

「……………大人しく、そこで見てろよ。それから、うさ子を頼むぜ……………」

「ホクト……………」

「仲間だから……………。お前を信じてるから、頼めるんだ……………。わかるだろ? わかんねえか……………。わかんねえよな。悪いな……………。すまねえ。だが 絶対また戻ってくるから」

それが別れの言葉だと気づき、走り出そうとする。しかしそれよりも早く光は爆ぜ、中心部に居る二人は闇の力に飲み込まれていく。

「テメエエエエエエエエエエエツ!? 俺を道連れにこの世界

から弾かれるつもりかッ!？」

「残念だったな! てめーの野望は成就しねえよッ!! 正義は必ず勝つ……ってなアッ!!!!!」

「ふざけんじゃねえ!! 千年だぞ!? 千年待って……こんな才子認められるかアッ!!!!! 止める! 止めるってんだよ、クソツタレエエエツ!!」

鬼の形相で叫ぶタケル。それに対してホクトは舌を出し、きらきらと輝く子供のような笑顔で言う。突き立てた親指を、ひっくり返し。まるで冗談のように。

「絶対に嫌だね。とつとと失せる……この世界から。俺もお前もな」

「……ヴァン・ノーレッジイイイイイイッ!!!!!」

「じゃねえよ。ホクト君……だッ!!!」

消え去る直前、ホクトはありつたけの力を込めてタケルの顔面を殴り飛ばした。直後、光の柱が立ち上り二人はそれに飲み込まれていく。闇の光は縦に伸び、下層も上層も貫いて光はロクエンティアそのものを射抜いた。

シエルシはそれをただ見ていることしか出来なかった。やがて光が静まっていき、ようやく足が動く。ぼろぼろの姿で辿り着いた、彼が立っていたはずの場所……。そこには何も残ってはいなかった。彼の姿も、剣も、何もかも……。

「……ホクト?」

荒野に再び静寂が戻り、風が吹きぬける。シエルシは膝を付き、彼の姿を探した。どこにもそれは残っていないかった。涙の雫が乾いた大地に吸い込まれていく。少女は大地に手を突き、涙を流した。何故、また失ってしまったのだろう。大切だと思えた先から消えていく。夢も、理想も、何もかも。

強い風の中、シエルシの慟哭が響き渡った。それに呼応するように地下で眠る神は苦痛に表情を歪め、それから静かに目を開く。メリーベルはそれと向かい合い、眉を潜めた。この世界に眠る、真実の扉。それが今、音を立てて開かれようとしていた。

I need you (1)

『第一、第二、第三エンジン始動。次元艦フラタニティ、起動します』

『コード“剣創”正常に作動。魔力循環開始』

かつて、その世界には一人の神が存在した。世界を生み出し、そしてその世界に森羅万象を創造した神である。神話の時代、神は一つの世界を作った。そこは極楽浄土の名に恥じぬ、楽園に限り無く近い場所だった。

しかし世界は無垢な者の存続を許さなかった。彼女が世界に産み落とした数多の罪……。それは今も直この世界を苦しめ、汚染し、奈落へと貶めている。ハロルドの目的……。そして彼の願い。それはこの煉獄からの脱出。そして人類の手による、真の革命……。だった。

『ミレニアム、スパイラル、デステイニー……。三基の起動を確認すべて正常。フラタニティによる次元探査開始』

『架空第七次元への干渉を開始。時間軸、平行軸、共に安定……。デイトシステム正常作動。剣創、発動します』

世界に産み落とされた一人の神は、己の孤独を埋める為に最大の罪を犯してしまった。この世界に産み落とされた偽りの神……。平穏を維持する為だけに続く煉獄の世界。当たり障りなく、しかしそれは確実に世界を蝕んでいく。フラタニティの動力炉に直結された“神”の前に立ち、ハロルドは静かに目を細める。伸ばす黄金の腕……。それ硬く冷たく、かつて彼女に触れようとした時とは大きく異なっている。

時代が変わった事をはつきりと実感し、ハロルドは己の手を見つめた。魔力の消費を抑えなければ、数刻足らずで消滅してしまう脆いこの身体を今ほど呪わしく思う事もない。もしも彼女の傍にずっと居られたのならば。そう、ハロルドがまだ、“この異世界に召喚された時のまま”だったら。こんな無様な姿を晒す事もなかっただろう。護りたいと願った、彼女の前に。

『貴方が生み出した、七つの大罪……。もう直ぐ揃える事が出来るかもしれない。我が百年の夜の夢……。漸く終わりの兆しが見えたのだ。貴方が私に託したこの世界の理……。その意味を、今度こそ……。見守っていてください。ハロルド様』

むかし、むかしの物語。それはまだこの世界に、たった一つしか世界がなかった頃の物語。

何もない世界、一つしかない世界……。世界には誰も居ませんでした。草木もなく、獣も鳥も、虫も人も居なかった世界……。何もない、虚無の世界。そんな世界にも、願いと祈りがありました。

世界には“産まれたい”と願う心があったのです。世界は生きたくっていました。誰も存在しない無の世界の中、ただ何の法則もなく続く世界……。そこで、世界は己を観測する存在を求めました。そして願わくば、共に世界を創造する存在を……。仲間を。家族を。求めていたのです。

真っ白な世界に、一つの命が生まれました。それは世界の意思によって導かれた存在。彼女は名前も無く、初めは形もありませんでした。白い世界の中に生まれた透明な影……。影はしかし、沢山の思い出を持っていました。影は徐々に世界の真ん中で己の姿を思い出します。そして、世界の姿を。

平行線の上に、瞬く間に世界が広がりました。世界に生まれた緑、

生き物、そして彼女が夢見る世界。 “世界” は彼女の正体を知りませんでした。しかし徐々に理解するのです。 “世界” は一つだけではなく、無限に連なるものなのだ。

生まれたばかりの “世界” のほかにも無数の世界があり、彼女はそのどこかからやってきた事を知ります。眠り続ける影から記憶を吸い取り、世界は己の姿を確かめていきます。次々に生れ落ちる世界 景色。それは最初はただ彼女が夢見た物だったのかもしれない。しかし気づけばそこには立派な世界があり、影は目を覚ましました。

影は神と呼ばれる存在となり、白い力を以って世界を生み出し続けます。彼女の願い、記憶、夢の中の全てを “世界” は汲み取って己を構築していきます。やがて沢山の命が生まれ、世界がそれ単体でも自立して循環するようになった頃。既に何億年もの時が流れ、ふと神は思いました。 “どうして、この世界には私しかないの？” と。

世界に、人間が生まれる事はありませんでした。人間と呼ばれる形をしていたのは、神ただ一人だけ。急に思い返して寂しさがこみ上げた彼女は、何とかして世界に人を産み落とそうとしました。しかしそれが全ての悲劇の始まりだったのです。

彼女が人を作ろうとして夢見たのは、黒く黒く、真っ黒な闇でした。彼女の心の中にあつた人の記憶は、彼女の中に眠る悪意をそのまま汲み上げてしまったのです。彼女の元々居た世界にも、きつと人間は沢山いたのでしょうか。しかし記憶を失った彼女の心の中、悪意だけは。罪だけは、しっかりと刻み込まれていたのです。

神は世界が滅ぶ夢を見ました。そしてその通り、世界は滅びの道を辿ったのです。億単位の世界の歴史はすべて虚無になりました。神はまた眠りについたので。今度こそ、正しい世界を……罪のない世界を産み落とそうと。

“世界” はそんな彼女の事が哀れでなりませんでした。何度、何度もそうして世界を作り直しても、彼女は一人ぼっちのままでした。

やがて“世界”は思いつきます。無から人を生み出すのではなく、彼女をそうしたように。 “別の世界から、人間を持ってくればいいんだ”と。

夢見る神とは関係なく、世界の意思が動き出しました。世界は“欲”という形を覚え、七つの翼を広げて歩き出しました。その胎内に眠り続ける神を残して……。

とある世界に、その悪魔は訪れました。他の世界を喰らい、そしてそれを取り込もうと侵略してきたのです。世界は勿論、それが悪い事だなんて夢にも思いませんでした。ただ、神を一人ぼっちにしておくことがかわいそうだと思っただけなのです。しかしその黒い翼は他の世界を次々に飲み込んでいくのです。

戦争が始まるうとしていました。唐突に現れた異世界の怪物を倒そうと、六つの世界が手を取り合いそれに立ち向かったのです。絶大なる力を誇る異形を前に、六つの世界は勇敢に戦いました。そして長い長い戦いの末に、ついに暴れ狂う“世界”を鎮める事に成功したのです。

六つの世界に一人ずつ存在した、それぞれの世界の英雄。彼らは救世主と呼ばれ、それぞれの世界の平和を象徴する存在となりました。救世主は異世界より出向き、自らの意思で暴れ狂う世界の意思に根付く事を決めます。そうしてついに、一人ぼっちで眠り続けた神は対面するのです。自分以外の人間 異世界の救世主と。

孤独という心を埋めた神は目覚め、そしてもう二度とこのような事がないようにとこの世界の罪 異形の七つの翼を結晶にして封印しました。そしてその七つの力をそれぞれの世界の救世主に一つずつ託しました。その力が永久の平和の為になるようにと。もしももう一度世界が過ちを侵した時は、その力で荒神を阻むようにと。

七つの大罪と呼ばれた力はそれぞれが剣として持ち、六英雄は長らく世界を見守りました。そうしてこの世界にはロクエンティアという名が与えられ、神は幸せな眠りの中で安らかな世界を創造し続

けるのでした。めでたし、めでたし……………。

砂に包まれた大地、第六界層オケアノス。その海の上を駆け抜ける一つの列車の姿があった。その車体の各所は派手に損壊し、既に車両そのものがコントロールを失い暴走している状態にある。各所から火の手が上がり、その中に閉じ込められた人々は皆それぞれが迫り来る死に恐怖し、祈りを捧げていた。砂中から突如現れたのは全身を強固な銀色の鱗で被った砂龍である。雄叫びを上げながら猛然と追尾してくるそれを、窓にかじりつくようにして見つめる一人の少年の姿があった。

少年は龍を睨み、そしてぎゅつと唇を噛み締めた。何故こんな事になってしまったのだらう。そんな事を思う。車内の人々は誰もが疲れきっており、既に状況を絶望視して諦めている者も多い。しかし少年は諦めていなかった。否。諦めたくても諦め切れなかったのだ。こんな理不尽な世界に飲み込まれて、むざむざと死んでいく…………。そんなのはどうしたってごめんだった。

半年前、横暴な帝国を倒そうと世界全体が立ち上がり戦った事件があった。しかしその結果、反乱軍は結局帝国軍により鎮圧されその後は泥沼のゲリラ戦が続いたのである。半年間そうして帝国と下層プレート上の住民との戦いは続き、その結果村や町は次々に焼かれ、激しく燃え上がる戦火は無関係な住民達も容赦なく追い詰めて言った。

少年達一行も、そうした村や街を追われた難民たちである。このオケアノスの海のどこかに、そうした難民達が集まって寄り添うように暮らしている町があるというアテにもならない噂を聞き、それだけを頼りにここまでやって来たのである。かつて帝国で使用されていた砂上列車に乗り込み、かすかな希望を求めて旅に出た…………。その矢先、この化け物に襲われてしまったのだ。ここで車両が砕か

れば、あとはただ砂の中に沈んで死んでしまっただろう。この中に居る、誰一人残す事無く。

そんなのは嫌だった。死にたくない。そう強く願った。体が震える。目前の恐怖に堪えきれはるはずもない。誰もが死を予感していた。しかし、これからだったのに。やっと苦しい旅を終わらせ、この海にまで辿り着いたというのに。諦めきれはるはずがない。しかし龍は容赦なく車両へと迫ってくる。

巨体をくねらせ、車体に側面から体当たりを行う龍。全体に激しい振動が起こり、無数の悲鳴と絶叫が連なつた。後部に続いていた車両の連結が破壊され、列車と共に仲間達が砂の中に落ちていく……。龍の巨大な顎で噛み砕かれて死んでいく人々を見つめ、少年はただ震える事しか出来なかつた。

半年前の戦争の開始から、世界には極端に魔物が増え始めていた。次々に人々を襲う魔物の群れ……。しかしそれから人間を護る力は残つていなくなつた。帝国との戦いに革命家達が熱を上げている間に還るべき場所は滅ぼされ、帝国もまた戦争の中で資源や人材を次々に失つていった。誰も得する事のない戦乱。もう、ウンザリだった。

「くそ……！　こんなところで……皆死ぬのかよ……っ」

声は震えていた。涙が零れ落ちるのも止められない。誰もが啜り泣き、呪いの言葉を口にしていた。龍はいつまでもしつこく列車を追い続けている。長年この海に暮らすものですら異常だと思つほど、魔物は興奮状態にあつた。目をギラギラと血走らせながら追跡してくる龍。それが再び攻撃を開始しようとした時、彼らは誰もが目を瞑り死を覚悟した。しかしその中でただ一人、少年だけは見ていたのだ。空を翔る一つの影。黒い人影が舞っていた。それは砂上を高速で疾走するサンドバイク……。砂漠の高低差を利用して列車をまたいで跳んだそれは、空中から真っ直ぐに龍へと落

ちていく。

「危ない……!?!」

思わずそう呟いた少年の言葉通り、バイクは空中で龍の尾を叩き込まれ爆発してしまったのである。しかし砂上に影はまだ一つ。黒いマントを纏ったその人影は、空中を舞うようにして移動しながら全身に光を纏わせていく。

龍は咄嗟にそちらの方が重要だと判断し、直ぐに迎撃の姿勢を取った。生えた巨大な角で刺し殺す為に、頭から一気に影へと突っ込んでいく。影は空中で体位を入れ替え、角を交わして靴底で見事に龍の背中に着地して見せた。火花を散らしながら靴底は鱗で摩擦し、削られていく。影がもう一度跳ね　その時少年は見たのだ。

黒いマントの下から現れたのは、金色の髪を靡かせる美しい女性だった。黒衣に黒装、そしてその両腕には魔剣の術式が刻まれたグローブが嵌められている。蒼い瞳が光を吸い込んで輝き、そしてそれは幻のように空中を駆けていく。

「……人間が……戦ってる……!?!」

龍の背中の上から跳ねた陰は空中を舞い、その両手に巨大な剣を構築してみせる。それは重さを感じさせないような軽やかさで女の手の中に納まり、白い羽にも似た光をばら撒いた。まるで天使のような姿　けれどもその姿は黒く、美しくも悲壮を感じる。影は再び龍の背中の上に収まると、その二対の刃で龍の背を激しく斬りつけた。

それは猛々しい　しかしとても無駄のない、美しい剣撃だった。龍はそれで悲鳴を上げたが、少年は解せなかった。何故か斬りつけられたはずの龍の背中からは血の一滴も零れず、傷一つついていなかったのである。しかし龍は激しく悶え、苦しんでいた。女は両手

の剣を龍に突き刺し、次々にその手の中に剣を産み落としながら龍の背を駆け抜けていく。

次から次へと身体に剣を突き刺され、龍は悲鳴を上げた。女はそのまま一気に頭まで駆け上がり、頭部に一際巨大な剣を突き刺し空中へと舞い上がる。龍が悲鳴と共に倒れるのを背後に女は在るう事が移動している砂上列車の上へと着地し、窓から中へと飛び込んできたのである。偶然にもそれは少年の目の前。龍は先ほどまでとは打って変わった穏やかな様子で、砂の中に平然と戻っていく。

「……良かった。あの子を傷つけないで済んで」

そう優しく呟いた女は身体についた砂を払い、それから金色の髪を風に靡かせ目を細めた。単純に、美しいと。そう思った。口を開けっ放しで呆然と立ち尽くす少年へと視線を向け、女はその手を差し伸べる。頭を撫でられ、少年はようやく思考が正常に戻ってくるのを感じた。

「……お、お姉ちゃん……魔剣使い……？」

少年も本物の魔剣使いを見たことなど無かった。だからそれは勘……。しかし、単身で魔物を。その中でも上位種である龍種を撃退するなどという芸当が魔剣使い以外に出来るとも思えなかった。しかし女は首を横に振る。そう、彼女は魔剣使いなどではない。ただほんの少し他人よりも恵まれた魔力と才能を持つ、ただの魔術師である。

「だったらお姉ちゃん……なんなの？」

それは最早興味から来る質問だった。そんな少年の問いかけに女は口元を緩ませ、悪戯っぽく笑う。それから自らの胸に手を当て、

光の中でこう宣言した。

「私は、“魔剣狩り” 。悪い魔剣使いをやっつける、正義の味方です」

「魔剣狩り……?」

「はい、そうですよ。そしてまたの名を、メイドプリンセス」

「はっ?」

それが彼女の冗談だという事に彼が気づくまでにはかなりの時間を要した。光の中で女は胸元に手を伸ばす。そこには大切な人から預かったパズルがあった。伸ばしていた髪を短く切ったメイドプリンセス シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ。彼女は今もまだ、この世界で一人戦いを続けていた。

I need you (1)

「はあ、やっと着きました……。こうして無事に辿り着いたと思うと、中々感慨深い……」

列車から降りたシエルシは大きく身体を伸ばしながら久しぶりに訪れるカントイルの街を眺めていた。半年前、例の事件があつてからオケアノスを訪れていなかったシエルシにとっては懐かしい景色である。

一日の殆どを夜が占めるその町で、思えば色々な事があったものだと思う。ホクトや仲間達と出会い、様々な経験をした。あの頃からは何も変わっていないようで、何もかもが違っている。ぼんやりと感傷に浸っているシエルシのおなかが空腹を訴えて鳴き、姫は顔を紅くしながら歩き出した。そういえばここ暫く口々に食事も摂っていなかった。

かつてギルドの本部があった場所には大きなレストランが出来ており、そこにシエルシは一人が入った。柄の悪い男達の中をスイスイと進み、席に着く。メニューにはろくなものがなかったが、それでも何も無いよりはマシというもの。ここに来るまで食べられそうな野草を食べたり、賞味期限が危険な缶詰や獣を狩って食べてきたシエルシには涙が出るほどのご馳走である。

「宮殿で美味しい料理を食べていた時代が懐かしい……」

しかしそれも当然の事。彼女はもう既に姫でもなんでもないのである。ザルヴァトーレは滅び、ハロルドの所には戻らないと決めたのである以上、彼女はザルヴァトーレの第三王女でも、ハロルド王の妻の一人でもない。ただのシエルシ……。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレなのだから。

出される水は不味かったが、それでも喉が潤えばなんでもよかった。グラスに映りこんだ自分の姿は以前とは大きく異なっている。

。清楚な姫のような服装とは異なり、今では好むのはスカートではなくズボン、ドレスではなくジャケットである。かつてホクトが着ていた服装に良く似たそれは彼女なりの決意を意味しているのかもしれない。ちらちらと切っているわけにも行かず、長く綺麗に伸ばしていた髪も肩口でぱつぱつと切ってしまった。それが自慢でもなんでもなく、ただ邪魔なものでしかなくなってしまったのも彼女の心境の変化が産むことなのだろう。

シエルシはあれから半年間、あちこちを旅しながら自分を鍛えて

きた。途中で何度も死にそうになったりもしたが、何とかこうして健康にやっている。帝国の魔剣使いと戦ったり、人々を襲う魔物と戦ったり、やる事は色々多かった。運ばれてきた肉をもぐもぐと噛み締め、思わずじんわりと目尻に涙が浮かぶ。砂漠の中をサンドバイクで放浪していた時はどうなることかと思ったが、結果的に人助けをして良かった。サンドバイクの燃料は尽きかけていたが、何とか列車に便乗させてもらいここまで辿り着けたのだから。

そんなシエルシの背後、いかにもちんぴら風ないかつい男たちが集まりつつあった。この町では見慣れない、若くて美しい女が席に座っているのである。口説く積りだったのかもしれないし、脅すつもりだったのかもしれない。しかしシエルシの背中に手を伸ばすより早く、シエルシはいつの間にか立ち上がりその全身に白い剣を纏っていた。

「何か……もぐもぐ……。御用ですか？」

片手で骨付きの肉を頬張りながらシエルシは振り返った。何のモーションも詠唱もなく発動されたのは、剣の形をした封印魔法である。しかしそれを良く知らない人間からみれば、それは無数の魔剣を展開させているようにしか見えない。尋常ではないものを感じ取り、男のくせに悲鳴を上げて逃げ去っていく。それを見てしまったらもう誰もシエルシに声をかけようなんて気にはならなかった。

「食事中に人の後ろに立つなんて、なんて野蛮な人たちなんですよか……もぐもぐ」

片手で肉を食べながらシエルシは空いている手で首から提げたパズルをいじっていた。こうして指先でこれを回すのは既に癖になっており、こうしているとなんとなく気持ちが悪く落ち着く気がした。

ホクトが居なくなっただけから、彼女は彼女なりに前に進んできたつ

もりだった。ホクトの姿を探しつつ、各地を転々として“世直し”に興じる日々……。それが果たして前進なのか後退なのかはわからなかったが、少なくとも力のなかった姫の魔術は飛躍的に、そして驚異的に上達した。今ならば並の魔剣使いでは相手にもならないほどの力を揮える事だろう。

食事を終えたシエルシは夜の街に繰り出した。彼女がここまでやって来た目的は一つ。しかし目当てのものはそこにはなかった。立ち尽くす、潜水艦が無数に並ぶ埠頭。以前はそこにあつたはずの潜水艦、ガルガンチュアは既に姿を消した後だった。

あれから、仲間達には誰一人会っていない。色々と事情はあつたが、会っている余裕もないのが実情だった。しかし今シエルシは一つの明白な目的を持って行動を開始したのだ。そのためには口ゼの力を借りたかったのだが……。

「いないのでは、仕方ありませんね」

カチリと、音を立ててパズルが回転する。円柱型のパズルはくると回り、シエルシの心の焦りや苛立ちを表現する。どうすれば正解で、どうすればこのパズルが解けるのか……。それはシエルシにもわからなかった。しかしホクトがくれたものだから、肌身離さず持ち歩いてきた。そう、これがある限りもう一度彼に出会えると信じて。

必ず戻ると言って笑った男は、もう半年も彼女をほったらかしにしていた。会いたい……。素直にそう思う。もう一度会って、今度こそ。空に手を伸ばす。星空は遠く、しかしとても近く見えた。闇に包まれた時代の中、それでもシエルシは生きている。失った何かを求めて。己の成すべき事を、求めて。

I need you (1) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

そして超展開へ

シエルシ「どうも、主人公になったシエルシです」

うさ子「……………え？」

シエルシ「はい？」

うさ子「あれ？ えっ？」

シエルシ「はい。それは兎も角、そろそろアンケートが締め切りです。今日の深夜くらいまでで」

うさ子「アンケート上位三名には、どっかで番外編やるのっ！」

シエルシ「お楽しみに」

うさ子「……………。それで、えっと、どっか番外編やるのっ？」

シエルシ「はい？」

うさ子「だから、えっと……………。アレ？」

I need you (2)

「こんな所に居ましたか、姫」

「その呼び方は止めてください。今の私はただのシエルシなので
から。そうでしょう、イスルギ？」

カンタイルの街の中心にある広場、そこに近づく二つの影があつた。片方はかつては栄華を誇った西方の王国の姫。そしてもう片方はその姫を護る為に存在した騎士団長である。イスルギ・ヨシノ……。ククラカンの王子でもある男はかつての主君に歩み寄り、それから腕を組んで微笑んだ。

「そうでしたね。ザルヴァトーレが滅んで既に半年……。時が流れるのは早いものです」

「敬語も使わなくて結構です！ 私はもう、ただのシエルシなんですから。貴方の方が年上ですし、戦闘力だって上ですよ？」

「………………。しかしこれは癖のようなものです。あえて意図して変える必要もないでしょう。私にとっては今でも貴方は世話の焼ける姫ですし」

「む…………。まあ、それはさておき…………。イスルギ、こうして無事に再会出来て良かった。久しぶりですね」

シエルシが笑顔を作り、握手を求めたイスルギはそれに応じてシエルシの手を握り締める。亡国の騎士は甲冑を脱ぎ去り、黒いタキシード姿で微笑んでいた。二人が再会し、そして分かれてから数ヶ

月……。長いようで短かったそれぞれの時間、そして二人は今こうしてまた同じ目的の為に歩き出した。

あのザルヴァトーレの崩壊の際、イスルギもゲオルクも、あの城に居た誰もがホクトの手によって命を救われていた。当然誰もが無傷というわけには行かず、イスルギの全身には今でも深い傷跡が残っている。彼がまともに動けるようになるまでにこれだけの時間がかかった事を考えれば、どれだけの悲劇だったのかが伺える。

崩落した世界の中、シエルシもイスルギもメリーベルの捜索隊によって発見されたのである。シエルシも緊張の連続と疲労で暫くの間寝込んでいたが、物理的な外傷は殆ど無かった為直ぐに行動する事が出来た。イスルギとはその時バテンカイトスで再会したのだが、他の仲間達はそれぞれどこかへ向かってしまった後だった。

シエルシは彼らを追いかける事はしなかったし、しようとも思わなかった。この危機的状况の中、自分が成すべき事を探さねばならないと思ったのだ。既に旗色が悪く、帝国の反撃により世界は巨大な混沌に包まれつつあった。シエルシはそんな世界を一人で歩き、沢山の物を己の目で見て耳で聞いて、そして強さを手に入れた。ただ力だけではない、それらと向き合う強さである。そして今、彼女は再び立ち上がったのだ。いや、立ち上がらざるを得なくなった。

「身体はもう大丈夫ですか？」

「ええ。身体は無事に治りましたし、リハビリも済んでいます。前線から離れた時間が長いので、腕が落ちていないか不安ではありませんが」

「本当なら半年で復帰できるような傷ではなかったと聞きましたが……。あまり無理はしないで下さいね？」

「もつたいないお言葉……いや、わかってますよ。ありがとうございます、シエルシ」

あまり仰々しい言葉を使われるのは不満なのか、シエルシはじつとりとした視線でイスルギを見つめていた。流石に堪えきれずに騎士は対応する。このあたり、シエルシの気持ちを感じ取る事に関しては彼はプロである。

「それで、ガルガンチュアの方は？」

「確認してみました、既に街を離れた後のようでした。あの後、ロゼも砂の海豚もどうなったのか……」

「リフルの不幸は聞いていますが……ロゼは半年前の反乱作戦には参加していたようです。その後の混乱で、どうなったかはわかりませんが」

事の大筋はメリーベルの口から聞いている。昴単騎によるミレニウム破壊作戦。そして帝国との戦争。しかし、作戦は失敗に終わった。ミレニウム破壊に向かった昴は戻らず、彼女はその後姿を見せていない。彼女がその後どうなったのかは考えたくない事実であり、だがしかし今こうして戦いが続いている事は紛れも無い現実なのだ。

次々に仲間達、そして優秀な魔剣使いを失い、反帝国勢力は圧倒的劣勢に立たされていた。それぞれが下層によりゲリラ的に戦いを繰り返していたが、根強い戦いもそろそろ限界を迎えようとしている何より反帝国勢力を引っ張ってきたリーダーである、ミュレイ・ヨシノ……。彼女に起きた不幸が状況を悪化させ続けている。

「では、砂の海豚の力は借りられない……か。余計に困難になりま

したね。ミュレイ・ヨシノの救出計画は」

そう、ミュレイ・ヨシノは先日帝国軍により捕らえられたのである。反帝国の筆頭であったSランク魔剣使いは剣誓隊によりついに拿捕された。象徴であったミュレイを失い、反帝国組織はその勢いの芽を完全に摘まれようとしていた。ミュレイの死。それは太陽が沈むかのようにこの世界に真の闇を齎すだろう。それだけは何としても避けねばならない。

シエルシはミュレイを救出する為に動き出したのである。これまでは色々と“調べもの”に拘ってきたが、今はそんな事を言っていない状況ではない。ミュレイを救出し、そして再び状況を打開せねばならない。その為にはかつて共に戦った仲間たちの力が必要だったのだが……。

「居ないのならば仕方ありません。ここで同士を募り、装備を補給してバテンカイトスへ向かきましょう。メリーベルなら、知恵を貸してくれるかもしれません。それに彼女が言っていた事が気になるんです」

「……七つの大罪、ですか？」

それはかつてシエルシも聞かされた、御伽噺の中に登場する単語である。かつて全ての世界を飲み込もうと暴れ狂う怪物がその背に宿したという滅びの翼。七つの大罪。その単語が何故今更出てくるのかはわからない。しかしシエルシはかつてシャナクによりその御伽噺を何度も聞かされた為、何も見ずとも思い出す事が出来た。

「七つの大罪……それは確か、六英雄の手によって剣の姿に変えられたと言われています。この世界に存在する、Sランク魔剣の数も七つ……。メリーベルはその魔剣こそが七つの大罪なのだと言って

いました」

「そしてそのうちの殆どが今や、帝国の手の中にある……というわけか」

皇帝ハロルドの持つ、“帝魔剣ネイキッド”。かつて昴が持っていた“破魔剣ユウガ”、そしてミュレイの“炎魔剣ソレイユ”の二つは既に帝国の手中にあると見て間違いないだろう。七つのうち三つは帝国に、そして魔剣狩りの剣“蝕魔剣ガリュウ”とシルヴィア王が持っていた“永魔剣エリシオン”はタケルの手の中にある。六つ目の魔剣である“翔魔剣ミストラル”の所有者であるうさ子ことステラは現在行方不明だが、勢力的には帝国に属すると考えて良いだろう。

「帝国に四つ、あの変態のところを二つ……。状況はどう考えても芳しくないですね。でも、この剣を集めるとなったらどうだろうか……？」

「それも御伽噺に出てくる事が関係するのでは？ シェルシ、その剣について他に何か記憶はないか？」

「そうですね……。七つの大罪は剣の形にされて、世界を守護する力になったような……」

「……。それをどうして帝国が欲しがるんだ？」

「さ、さあ……」

二人して少しの間考えてみたが、考えたところでわかるはずもない。しかしシェルシにはこの物語が世界と無関係だとは思えなかつ

た。“調べもの”の途中、そう思えるような事実関係にいくつか直面したからである。

兎に角この状況は良くない。大罪の事は兎も角、ミュレイを助けなければならぬのは明白なのだから。シエルシは一人納得したように頷き、それから先に歩き出した。

「まずは宿を取りましょう！ イスルギ、お金は持っていますか？」

「ええ、まあ……」

「では、宿代をお願いします。私は今無一文なので」

「はっ？」

「こつこつ場合は男性がリードするものだと思いますよ？」

「……………はは、そうですね」

肩をすくめて呆れたように男は笑う。シエルシは以前とは少し変わったようだ。だがその変化を彼は嬉しく思う。ただ人の言われるがまま、人形のように生きていたシエルシはもういないのだ。今の彼女は生きる喜びと意思に満ち溢れている……。ならば、その行く末を見守ろうと思う。歩き出したイスルギの隣、シエルシは上着のポケットに両手をつっ込んで街を眺めている。その横顔を頼もしく思うのは 彼の勘違いだろうか？

「絶対にミュレイさんを助けましょうね、イスルギ」

「ええ、当然です。あれでも 私のたった一人の妹ですからね」

「双子……なんでしたっけ？」

「はい」

「色々複雑なんですね」

「それはもう。ですが、彼女に比べればまだ貴方は容易い。あれは誰にも御せない、じゃじゃ馬ですよ」

冗談交じりにそう笑うイスルギ。シエルシは笑みを作り、それからイスルギの背中を叩いた。物語は留まる事無く動き続けている。そう、主人公を失ったあの日から、ずっとずっと。

I need you (2)

「夏流さん、夏流さんっ！ 大変です！」

「どうした、リリア？」

「道端に、血まみれの男の子がっ！！」

「ほっ？」

そんなやり取りから始まった奇妙な彼らの現実。かつて昴が暮らしていた本城の家の玄関口、そこには妻リリアがずるずると引きずってきた死に掛けの男の姿があった。グッタリした様子なのだ

が、リリアが引きずってきた所為か余計にグツタリしているように見えた。とりあえず本城は目を瞑り、腕を組んで少しの間考え込む。それから妻に一言。

「変な物拾ってくるな……。そんなのうちでは飼えません……」

「そついう問題なのかしら……？」

「じゃなかった。リリア、救急車を呼べ！ 救急車だ！！」

「は、はいっ！ 救急車、救急車……！」

ばたばたと走り回るリリア。その間本城は男の様子を見ていたのだが、どうにもそれは異様だった。勿論この平和な日本世間で血まみれで道端に転がっている時点で十分物騒すぎて異様なのだが、男の服装、傷の具合、それらがどう見てもまともではなかったのである。

何はともあれ男は救急車にて病院に搬送された。本城とその妻は付き添いという事で病院にまで一緒に向かい、その後男が巻き起す一連の事件に巻き込まれていく事になったのである。

男は数日間気を失っていたものの、医者も驚愕するスピードで回復し、気づけば死にそうになっていた身体はすっかり元通りに修復していた。そこで目を覚ました男の傍に居た本城夫妻は、彼の第一声を聞く事になったのである。

「……………ここ、ここは……………」

「病院ですよ。大丈夫ですか？ お医者様もびっくりするほど物凄い勢いで回復したみたいですけど……………」

「……………俺は……………」

「はい？」

「俺は……………誰だ……………？」

目を丸くするリリア、その背後で本城は頭を抱えていた。色々と面倒に巻き込まれてきた本城であったが、ここ数年はそれでも平和でまともな日々が続いていたのである。それがまさか、こんな形でおかしくなつていこうとは。

結局身元不明のその男は本城夫妻が引き取る事になり、彼は本城の家で暮らす事になった。昴が行方不明になり数ヶ月。まさか、それに引き続きこんな異常事態が発生するなど誰が想像しただろうか？ 少なくとも本城は予想もしていなかった。昴のことだけでも手一杯だというのに、また身元不明の怪しい男……………。しかしそれに対して妻のリリアは、

「一杯ごはんも食べてくれるし、イケメンだし 私はそれなりに楽しんでますよ？」

「……………そ、そういう問題かあっ!？」

悲鳴染みた声を上げる本城の前、ポロポロだった服は既に放棄されリリアが買ってきた服に着替えた男は無言で食事に舌鼓を打っていた。それからへらへらとした笑いを浮かべ、湯飲みを片手に言う。

「いや〜！ 奥さんの料理はいつ食つてもうまい！ 旦那は幸せだなあ……………。美人だし、家庭的だし……………。うん、いい奥さんだ」

「やだもう、ホクト君ったら 褒めたつておかわりしか出ないよ

「

「ゴチっす」

そう、男は全ての記憶を失っていた。しかし彼はたった一つ、己の名前だけは覚えていたのである。その名前がホクト……。苗字はわからなかったが、兎に角ホクトである。他に呼び方も思いつかなかった。ので夫妻は彼の事をホクトと呼んだ。軽いノリの、いかにも三枚目なその男が本城家の日常に溶け込んで早半年。今日もホクトは図々しく何杯もごはんをおかわりしていた。

「それにしても……お前、まだ何も思い出さないのか？」

「残念ながらさっぱり……。旦那と奥さんには感謝してるんすよ。身元不明の俺を居候させてくれて、拳句に仕事まで紹介してくれたんすから」

現在彼は本城の知人の紹介でホストとして働いていた。得られた給料は殆ど本城家の家計につき込んでいたので、むしろ彼が居て助かっているくらいである。しかし本城はいまだにイマイチ納得が行かなかった。そもそもこいつは何者なのか、そしてこいつを発見した時の妙な胸のざわつきはなんだったのか。そういった事に関して本城より詳しいはずのリリアも昴が居なくなつて寂しかった時にやってきたこの居候が大層気に入っているのか、なかなか細かい詮索をする気配がなかった。

「ホクト君さえよければ、ずーっと居てもいいのよ」

「まあそりゃ構わないが……。家族とか、心配してるだろ？ 早い所記憶を回復しないと……。リリア、お前何とかできないのか？」

「貴方……そんな万能じゃないですよ、私だって。それにこっちの世界には魔力が殆どないから、魔法は使えないし……」

「……二人して何コソコソ話してんスか？」

「い、いやあつ！ こっちの話だ！！」

相変わらずもぐもぐと焼き魚を口に突っ込んでいるホクト。リリアと本城は腕を組み、それから同時に溜息を漏らした。昴が居なくなつた事だけでも大騒ぎだというのに、今度はこの居候……。いよいよ状況は悪化してきている。

「そついや旦那、仕事は見つかったのか？」

「……………。おま……余計な事を言うな。今は自分の心配だけしてろ」

「とは言え、こんな状態じゃ本城家を離れられねーッスよ。奥さんが苦労して……。綺麗な手がこんな荒れちゃつて」

リリアの両手を取り、ホクトは白い歯を見せて微笑んでいる。リリアが顔を緩めながら、“年下も悪くないかも……！”なんて不謹慎な事を考えていると二人の間に本城が割って入り、それから無表情に片手でホクトの腕を捻り上げた。

「いいいいいいいいッ！？ 旦那……うで、うでもげるッ！！もげちゃうつうつッ！？」

「人の妻を夫が見てる前で口説くな阿呆……」

「夏流さん、それはもしかしてヤキモチですか？ ホクト君がイケメンだからって、もう」

「違うわッ！ 単純に世間体が悪いだけだッ！ ホクト、道場に来い……！ いっちょその緩んだ精神を引き締めてやる」

「うお、マジで勘弁！ あんた強さが尋常じゃないんだよッ！ 素手じゃ絶対に勝てる気しねえッ！」

「武器使っていいから」

「いやいや、全然意味わかんねえから」

首根っこをつかまれ、ずるずると引きずられていくホクト。冷や汗を流しながら呆然としているホクトをリリアは手を振り優しく見送った。数分後、道場の方から爆発音のようなものが聞こえてきた。リリアは気にせず昼ドラを見ながらお茶を啜り、せんべいを齧るのであった。

「しかし、へマをしたものじゃ……。まさか、このわらわが捕まるとはな……」

第三階層、ヨツンヘイム。インフェル・ノアの牢獄の中でミユレイは一人愚痴を溢していた。強固な魔術結界を無数に張り巡らせた牢獄の中、魔剣も封じられたミュレイに出来る事は愚痴をこぼすくらいしかない。光の結界の周囲を見渡し、ミュレイは一人目を細め、過去を回想していた。

昂が帝国に向かい、そして戻らなかった。それは彼女の中では大きな傷となり、そして今でもそれは胸を痛め続けている。自分が異世界から召喚してしまった少女。救世主としての役割を背負わせてしまった。そして多くの罪を、苦悩を、味わわせる結果となってしまった。その全てがミュレイにとってこれで良かったのかという後悔の念になり、今でも心を蝕み続けている。

彼女が死んだなどと、ミュレイは思っただけでなかった。だからそれからもずっと戦ってきたし、帝国に屈しなかった。昂が帰ってこられる場所を護りたかったのだ。だが今彼女はこうして囚われの身となり、近い内には公開処刑も催されるだろう。今や哀れな道化……。人々に失意を撒き散らす為のただの材料となってしまうている。これまで剣誓隊が相手だろうが、彼女が負ける事はなかった。彼女が居たからこそ反帝国勢力は戦い続ける事が出来たも同然である。そんな彼女が帝国の囚われの身となったにはある理由があった。そう、彼女がこの世界全てを犠牲にしても良いと思える程の理由があった。

インフェル・ノアの廊下、そこを歩く一つの影があった。黄金の甲冑を身に纏い、黄金の仮面をつけた騎士。黒いマントをはためかせて歩くその人物の背後、小さな影が進んでくるのが見えた。少女　ルキア少将は背後からその騎士へ声を投げかけた。

「これから仕事……？」

騎士は足を止め、それから振り返る。仮面へと片手を伸ばし、それを外して美しい顔を晒した。傷だらけの顔　黒い眼帯で片目を被い、女は微笑んでいた。胸に手を当て、ルキアに頭を下げる。以前の彼女からは考えられないその行動は、しかし当然であると言えた。

「は……っ。これより反帝国勢力を殲滅しに向かいます、ルキア少

将

「……………。ご苦労様。最近出撃しっぱなしだけど」

「何も、問題はありません。私は帝国騎士団剣誓隊、エクスカリバープロジェクト被検体ですから。ヨツンヘイムの繁栄の為に、下層の家畜を律するのが役目」

騎士は仮面を再び装備し、冷たい口調で答えた。その様子にルキアは目を細め、それから首を振る。正直、ルキアにしてみれば面白みもなにもありはしなかった。あれだけ強く、感情的だった彼女……。それが今や、帝国の人形に成り下がっているなどと。

「もういいわ。ご苦労様、昂」

「はい、失礼します少将」

踵を返し、歩いていく昂。姿形は似通っていても、今の彼女は全くの別人だった。外側は残っていても、中はとつくに死んでしまっている。だが、ミュレイはそうだと判っていても諦められなかった。だからこそ、あえて囚われここにいる。彼女を。昂と、もう一度話をする為に。

すれ違ふそれぞれの運命の中、昂は黄金の偽りを纏って進んでいく。数え切れない命を屠ったその剣を握り締め。靴音を高らかに鳴らし、怯える人々を殺戮する為だけに行軍する哀れな幽鬼。ミュレイの祈りはそこには届かず、そして声さえも届かない。世界は再び、闇の中に沈もうとしていた。

I need you (3)

「気に入らない……。実に気に入らないっ!!」

テーブルを叩く一人の男。彼の名は、ジェミニ少将……。剣誓隊の四本指に数えられるほどの実力者でありながら、重要な仕事を尽く任されない男。

容姿端麗、そしてAランク魔剣の使い手である。ハロルドへの忠誠心も高く、将軍クラスの名に恥じない剣誓隊の顔だと本人は自負している。しかし熱く燃え上がる本人の熱意とは対照的にテーブルの向こうに座るルキアとビッグホーンは沈黙を保っていた。

インフェル・ノア内部。剣誓隊に与えられたカフェエリアの一角でジェミニは拳をわなわなと震わせていた。ルキアは呆れた様子で内心“またか”と思い、ビッグホーンは相変わらず一言も口を効かない。しかし放っておくと際限なく自家発電し続けるので、ルキアは一応訊いて見る事にした。

「何が気に入らないの……?」

「ここ最近の、俺の扱いだよっ!! ずっとやる事が無くて暇なんだ! 俺はこんなにも戦いを渴望しているというのにッ!!」

両の拳を握り締め、男は叫んだ。ルキアにつばが跳び、ビッグホーンが無言でハンカチを差し出す。ルキアは顔をごしごし擦りながら眉を潜めていた。

確かに、ジェミニの出番はここずっとなかったと言える。ザルヴアトーレでの戦いでも後方待機だったし、ホルスジェネレータの戦いでもお留守番……。そしてようやく帝国の反撃が始まった今でも、

出番は“白騎士”に取られてしまっている。

「そもそもなんなんだよ、あいつーっ！ 途中から入ってきたくせに行き成り將軍クラスと同等の扱いで！！ 仕事もみんな奴が自発的にやっっちゃうじゃないかっ！！」

「ラクでいいと思う……けど」

「ルキア……。俺は思うんだ。剣誓隊の魔剣使いの力とは、前線で戦う事によって発揮される！ そうっ！！ 要するに俺はもっと思いたいんだっ！！」

テーブルの上に立ち、汗を流らせながら両手を広げるジェミニ。その汗がまたルキアの顔にかかり、ビッグホーンがハンカチを差し出す。顔を拭きながらルキアは眉を潜め、それから視線を反らして溜息をついた。

ジェミニ少将。強力な魔剣使いであり、ヨツンヘイムの貴族でありながら出番の無い男……。それは彼が変わり者ぞろいの剣誓隊の中でも更に変わっているからに他ならない。重要な仕事の局面で暴走されては困るのだから、自然と彼の出番は地味になる。

そんな彼もようやく目立てるかと思っていた矢先、白騎士こと昴の参戦である。將軍クラスには彼女が何故寝返ったのか、詳細は一切伝えられていない。そんな状況で納得しろというほうが無理な話だろう。実際ジェミニだけではなく、ルキアやビッグホーンにもこの状況には疑問があった。

「なあルキア、今度からお前に渡される仕事は全部俺に回さないか？ この重力を操る魔剣使い、ジェミニに」

「能力名バラさないほうがいいと思うけど……」

「戦う前には毎回名乗ってたぞ？」

「それ、相手にインパクトないと思う……」

「なにいいいいいいッ！？ そ、そうだったのか！？ 俺としたことノブリスオプリージュが…… “正々堂々” に拘るあまり、印象を薄くするような事を……。これでは目立ってないではないか……ッ」

「元々目立ってないけど」

ルキアの一言でジェミニは遠い目をした。それからテーブルの上から降りて、唐突にルキアに土下座する。何事かと周囲の剣誓隊の視線が集中する中、ルキアは無言でその頭を踏みつけた。

「よ、幼女のハイヒールで踏まれるというのもこれはこれで目立ってそうだが、頭を差し出したら即踏むというのはどうなんだルキア」

「……え？ 踏んで欲しいのかと思って……」

「結構そういう隊員がいるのか……」

「我々の業界ではご褒美です”……とか言ってたけど」

「………………。そいつらの事はあえて干渉したくはないが、兎に角ルキア……！ 俺を目立たせる為に……！ 俺を男にしてくれっ……！」

土下座するジェミニ。その大声の発言に周囲の剣誓隊員が目を丸くする。ルキアは暫く考えた後、無言でジェミニの顔を蹴り飛ばした。

「なんでそうなるのかわかんないけど……。兎に角、重要な仕事をジエミニに任せて、失敗したらルキアの責任になっちゃうでしょ……」

「大丈夫だ、俺は失敗しない！」

「その根拠は？」

「無い！　だが失敗はしない！」

ルキアがジエミニの足を思い切り踏みつけ、よろけたところで顔を思い切りビンタする。吹っ飛んだジエミニが派手に倒れると、少女は溜息を一つ残して席に戻った。

「はあ……。あいつの相手、すごく疲れる……」

そんなルキアをねぎらうように大きな手でビッグホーンがその肩を叩いた。二人がそんなやり取りをしているとカフエ内に大将であるオデッセイが入ってくる。オデッセイは派手に倒れているジエミニを見て腕を組み、それから一案。

「ジエミニ、また仕事がないと嘆いているのかい？」

「団長ッ！！　何故自分には仕事が行ってこないんでしょうかッ！？」

「……うーん、そうだね……。君の能力は強力すぎる……といつか、派手すぎるんだ。敵も味方もお構いなしだからね。集団先頭には向いていないし、貴重なホルスジェネレータなどの施設での戦

闘はもつてのほかだ。君は周囲に容赦など出来ないだろう?」

「た、確かにその通りだ……。俺が戦った場所は、すべて荒野になる……。団長! そこまで考えて……。!」

勝手に感動して涙を流すジェミニ。オデッセイは優しい笑顔で頷き、ジェミニの肩を叩いた。彼の扱いに関しては右に出るものは居ない……。ルキアはオデッセイに尊敬の念を送った。

「というわけでジェミニ、君に仕事を与えよう」

「ほ、本当ですか!?!」

「ああ。君の今回の任務は、生き残っていると思われるザルヴァトールレ残党の排除……。目標は、彼女だ」

オデッセイが手渡した書類には、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトールレの顔写真が載っていた。それから彼女についての詳細、扱う魔術の種類や性格などを分析したデータが乗っている。ジェミニはその顔をよく目に焼きつけ、それから頷いた。

「単身突撃による破壊なら君は非常に優秀だ。今回のミッションは街の被害なども特に考えなくていい。思い切り暴れてくるといい」

「派手にやっていいんですね!?!」

「勿論だよ。それから探知系の魔剣使いを一人つけるから、そちらと協力するように。君は失せ物を探すには向いていないからね」

「了解しましたッ!!! このジェミニ、何がなんでもこの小娘を派

手に抹殺してきますッ！！ ルキア！！ 仕事をもらったぞおおお
おおッ！！」

涙を流しながら再びテーブルの上に昇り、書類を高々と掲げるジ
エミニ。何故かカフェ内には感動的なムードが広がり、各地で拍手
が起こった。ルキアはそんな馬鹿げた組織の中で頭を抱え、最早何
度目か判らない溜息をついたのであった。

I need you (3)

「というわけで、貴方を迎えに来たの……ホクト」

「……………はあ……………」

本城家、食卓。そこには家主である本城、その妻リア、そ
して居候ホクトの姿がある。だが今日はその三人だけではなかった
のだ。黒髪の美女が一人、流し目でホクトを見ている。彼女の名前
はメリーベル・テオドラント。異世界の住人にして、本城家と
は縁のある女性である。

彼女がここにやってきたのは当然ホクトを回収する為なのだが、
まさか異次元に吹き飛ばされたホクトがこんな所にきているとはメ
リーベルも思っていないかった。しかしつい先日、唐突にリアか
ら連絡が入り、ここにホクトが飛ばされてきている事、そして記憶
喪失になっている事を知ったのだ。

しかしいざ駆けつけてみれば、ホクトはすっかりこの本城家での
生活に馴染んでしまっている。今も気の抜けた様子で湯飲みを傾け

ている……。メリーベルは溜息を一つ、それからホクトの手を掴んで強引に立ち上がる。

「……これ、少し借りるから」

「メルちゃん、痛いことはしちゃ駄目だよ?」

「わかってる」

リリアはひらひらと手を振り、本城は何も言わなかった。強引に外に連れ出されたホクトはボケーっとした表情を浮かべていたのだが、そこに思い切り振り上げたメリーベルの右拳が叩き込まれ、ホクトは思い切り2メートルくらい吹き飛ばされた。

「いつてえええええッ!? 痛いことしてんじゃねえか思いっきり!」

「………………。治らなかつたか」

「そんなんで治るもんじゃねえだろ、記憶喪失って!?!」

頬に手を当てて立ち上がるホクトにメリーベルは困った様子だった。彼がこうなってしまう理由は、大よそ想像もつく。彼にとつて記憶とは所詮彼自身を構成する情報……究極的な話、魔力そのものなのだ。それは本来ならば消耗されるようなものではないのだが、彼がそれさえも燃やし尽くしてしまうほどに力を使ったとすれば……十分に在り得る事。

あの日、世界全体に影響を及ぼすほどの莫大な魔力が放たれたのをメリーベルは観測している。その原因が彼以外に思いつかず、故に彼はどこかで吹き飛ばされたのだらうとアタリはつけていたのだ

が……。

「まったく、初対面でぶん殴るとは恐ろしい女だな……。美人だから許すけど」

青空の下、ホクトは両手をズボンのポケットに突っ込みながらメリーベルを見つめていた。メリーベルもまた、そんなホクトを見つめている。まさかこうしてここにまた来る事になるうとは……。否、だとすれば。彼女の推測が正しかったとすれば。恐らく、本当に必要だった“救世主”というのは。

「記憶喪失は兎も角、私と一緒に来ればそれも回復する手段があるかもしれない。この世界には魔力という概念がそもそも希薄なの。私の術もここでは殆ど効果を発揮出来ない」

「……うーむ、術……魔力……。わりとすんなり受け入れられているところを見ると、俺が異世界の住人だっというのは事実らしいな。それにしちゃあ本城夫妻の反応に驚きが一切無くて不気味だが……」

「あの二人は、そういう事に関しては色々と経験済みだから……。リリアも夏流も理解してくれと思う。早くここから離れないと、色々と問題が山積みなの」

「……。そうねえ……。でもな、あんたには悪いけど俺はこっちに仕事もあるし、本城夫妻との生活がそれなりに気に入ってんだ。行き成りそんな事言われても困るぜ」

日本庭園を背景に、ホクトは考えた。記憶喪失という事の意味。異世界の存在……。メリーベルという、その壁を越える者……。信

じがたい事は多く、しかしその全てをすんなりと受け入れられる自分がいる。記憶喪失になった所で、結局彼自身の存在まで変える事は出来ないのだ。

「私には、貴方を連れて帰る責任がある……。貴方の力が必要な、ホクト。貴方が居ないと、悲しむ人が大勢居るわ」

「……………」

ホクトは難しい表情を浮かべ、それから空を見上げた。必要と言われたところで、空は青くそして彼には実感がわかない。何か大切な事をしていったような気もすれば、何もしていなかったような気もする。穏やかで平和で、少しだけ賑やかな日常……。それがこの世界にはあるのだ。じつと、自分の掌を見つめて見た。癖のように繰り返したその行為。結果は今までとは違ったのだろうか。

「あなたの言い分はわかった。あなたの役割もわかった。でも、それにYESと首を縦には振れねえ。振りたくねえ」

「どうして…………？」

「何も覚えてねーし、何も感じねえ……。今の俺を見てあなたはどう思ったか知らないが、俺はもう今何もしたくない気分なんだ。俺は……。あなたのいう、戦いの世界なんて、全然好きじゃない。そんなの望みもしない。俺はただ……家族と一緒に、平和に暮らしたかっただけなんだ」

片手を額に当て、男は苦しげな表情を見せた。記憶はもう残っていない。でも、心の中に何故だか苦しさだけが残っている。家族と共に在りたかった。護りたい人が居た。しかし戦いは全てを奪

い去っていく。何もかも、無慈悲に……残酷に。滑稽なくらい、その中で踊って。踊り続けて死んでいく……。そんな自分の姿を思い描き、恐怖とも失意とも言えない暗い感情がわきあがってきた。

そうだ、何が戦いの世界か。必要だと言われても、今のホクトに必要なのは優しい家庭、そして受け入れてくれる人々の気持ちなのだ。やっと生活も落ち着いてきたというのに、今になって戻って来いと言う。

「そりゃ……ご都合主義だろ、なあ？」

「……………ホクト」

「あんた、何か勘違いしてんだろ……？俺は別に、しがないその辺に転がってるような路傍の石だよ。何も護れない、何も救えない……。だからもう嫌だったんだ。でも、やっと居場所を見つけた……。見つけたんだよ」

ホクトはメリーベルへと歩み寄り、その胸倉を掴み上げた。メリーベルは、何も言い返せない。残酷な事を押し付けているのは判っている。彼が例え、七つの大罪の持ち主だとしても……。そんなものは自分の理屈だ。メリーベルが言っている事は、全部自分、そして他人の理屈なのだ。それはすべてホクトには関係ない。彼はただ、巻き込まれただけの被害者なのだから。

ヴァン・ノーレッジと呼ばれた人間の身体の中に取り込まれ、剣として再構成され、彼は何故か戦いの渦中に放り込まれてしまった。何故自分がそこにいるのかもわからないまま、右も左もわからずただ戦い続ける日々……。常に笑顔を浮かべ、余裕の表情で、困難を打ち破ってきたホクト。しかしその胸の内にどんな想いを抱えていたのだろうか？

それを理解しようとも思わなかった時点で、彼女に言い返す言葉

などなにもないのだ。少なくとも彼女自身はそう思っている。至近距離で見詰め合う二人……。ホクトは手を離し、それからメリーベルの肩を叩いた。

「……………。なんてな。冗談だ。戻るよ、戻る。戻って、なんだかよくわかんねえけど戦う……。それでいいんだろ？」

「ホクト……………」

「ただ、色々後片付けだけさせてくれ。挨拶しなきゃいけない人も居る……。それが全部済んだら……。おしまいだ」

寂しげな笑みを残し、ホクトは去っていく。遠ざかっていく背中を見送り、メリーベルは何とも後味の悪い気持ちを抱いていた。再び彼を戦いに巻き込む事……。それがどんな事なのかは判っている。深々と溜息を漏らし、それから空を見上げた。何故だろう、こんなにも蒼いのに……。吹けば飛んでしまいそうに見える。

「メルちゃん……。どうしても、ホクト君を連れて行くんだね」

背後、玄関から出てきたリリアの姿があった。かつての仲間であり、友人でもあるリリア……。メリーベルは視線を向け、それから寂しげに大地へと移した。

「ねえ、どうして私たちに相談してくれなかったの……？ 私たち、貴方が異世界でそんな事をしているなんて全然知らなかった。不老不死の法を探す……。今はそれだけじゃないんでしょう？」

「……………リリアは鋭いわね。相変わらず」

「もう長い間ずっと友達だもの……判るよ。ねえ、何か力に成れないかな……？ それとも、私たちじゃ役不足……？」

「……………。これは、私の問題。私が片付けなきゃならない事だから」

「その結果、ホクト君を巻き込んでしまうの？」

「………………。キツイ言い方だ」

「でも、貴方のためだよ」

リリアは悲しげな瞳でメリーベルを見つめていた。二人の間に風が吹き、メリーベルは憂いを払うかのように首を激しく振ってみせる。それから気合を入れるように頷き、リリアへと手を伸ばした。

「追いかけてくる」

「…………うんっ！ 頑張ってね、メルちゃん」

二人は手と手を結び、それから笑いあった。まるで子供の頃と変わらないその様子に縁側に座った夏流は苦笑を浮かべる。ホクトが異常な存在だという事は気づいていたが、まさかこんな不思議な縁に巻き込まれるとは思っても居なかった。

「お前も……巻き込まれたのか？ 昂…………」

記憶の中、様々な景色が蘇る。メリーベルが一人で何をしようとしているのかはわからない。しかし友人として かつて共に戦った仲間として。放っておくわけにはいかないだろう。彼女がそれを、

望まなくても。彼がそう、望むのならば。

「では、最近噂になっている白騎士というのは……」

「恐らく、北条昴本人でしょう」

カンタイルの中でも格安な、一見すると寝泊りが可能なのかが胡散臭くなるほどの安宿に部屋を取ったシエルシとイスルギ。二人はベッドの上に座ったまま、互いの持ち寄った情報を交換していた。

中でも最も気になっていたのが、帝国側に現れた強力な魔剣使いの噂である。その外見、能力から正体不明の敵は白騎士という呼び名を付けられていた。実際白騎士　北条昴は一時期帝国剣誓隊に所属していた事もあり、それが噂を広めるのに一役買ったようである。一度は落ち着いた白騎士の噂が再燃した、というのが正しいのだろうか。

その白騎士の正体が、死んだと思われていた北条昴本人であると聞いた時、シエルシの脳裏に事の真相が見え始めていた。何故ミュレイ・ヨシノともあるう人が帝国に捕まったのか……。仮に推測が正しければ、状況はただミュレイを助ければ済むという事でもないらしい。

「困りましたね……。仮に相手があのお白騎士なら、話をしなければなりませんか……」

「まともなやりあってどうにか出来るような相手でもない……。彼女がSランクの魔剣使いだからな」

二人して腕を組み、思い悩む……。この無理難題をどのように解決すればいいのか。考えたところで答えは見つからない。しかしシエルシは微塵も諦めてはいなかった。まるで諦めという言葉をごに置き去りにしてきてしまったかのように。当たり前のようにそれを何とか出来ると信じていた。

「……仮に相手が北条昴なら、私にはちょっとした考えがあります。とりあえず今はミュレイさんの救出ですね」

「公開処刑まで、まだ僅かだが時間がある。まずは侵入経路と段取り……。か。それにしても……。見違えましたよ、シエルシ」

「はい？」

「貴方は随分と、強くなったようだ。これも全てはあの男の……。ホクトのお陰ですか」

面と向かってそういわれたシエルシは固まっていたが、暫くすると見る見る顔が真っ赤になっていく。やがて限界を突破したかのように首を横にぶんぶん振り、それから立ち上がった。

「なんだか妙な誤解が発生していませんか!? まだホクトとはそこまでの関係では……!」

「は？」

「……あ、いえなんでもないです……。確かにホクトが私を変えたのは事実です。でも、それだけじゃない……。これまであった出来事全てが、私にとっては貴重な経験でしたから」

ベッドの上に座り込み、シエルシは優しく微笑んだ。そうして彼女が笑ってくれるのはイスルギにとっても在り難い。異国に連れて行かれた彼が唯一心の寄る辺とし、そして護りたいと願った華がそこにあるのだから。

安宿の中で二人がそうして話を続けている頃。宿の外に、魔剣を片手にあるく少女の姿があつた。剣で宿を指し示し、彼女はエレット・ノヴァクは頷いた。

「少将、あそこです！ 私のエクスカリバー清明の探知に間違いはありません！」

「あそこって……あんなボロ宿？ お姫様を探せって言われていたような気がするんだけど、俺の気のせいかな……？」

「いえ、気の所為ではありません！ ですが敵はあそこに居ます！」

剣を降ろしたエレットを押しつけ。ジェミニが前に出る。改めて今回のミッションのターゲット、そして内容を確認する為に書類を取り出したが、面倒くさくなってそれは投げ捨ててしまった。

夜の砂漠に浮かぶ街でジェミニはマントを剥ぎ取り、手の中に二対の魔剣を構築する。昂ぶって行く力。それにエレットが慌てて首を横に振った。

「少将、行き成り魔剣ですか!？」

「そうだ、行き成り魔剣だ！ 段取りとか色々面倒くさい……！ 宿ごとぶっ潰してやる！」

「な、なんでですか？」

「その方が派手だからだ　よッ!!」

クロスさせた二対の剣の切っ先から摩擦して弾くようにして黒い弾丸が放たれた。それは見る見る巨大化しながら宿の二階へと直撃する。派手な爆発が起こり、安宿の木材があちこちに飛び散った。荒事には慣れっこなこの街の住人も、流石に爆発の規模が大きすぎて逃げ去っていく。

剣を降ろしたジエミニはニヤリと笑ったが、巻き上がる白煙の向こうからは雄雄しい光が現れた。巨大な盾　それを構えた男が一人、姫の前に立ちふさがっていた。紅い髪を靡かせ、鋭く眼光を向けてくる。上着を脱ぎ捨てた男は巨大な盾を変形させ、槍を装備して崩落する宿から飛び降りてきた。

「なんだ、あれ？」

「……さあ……。恐らく護衛かと」

「姫だからな……。いいぜ、そのほうが派手だ！　俺の名前はジエミニ少将　ッ!!　重力の能力を持つ男、帝国剣誓隊ナンバー4　ッ!!　いざ、尋常に勝負だあああッ!!」

「ええーっ!?　能力ばらしちゃうんですか、少将!？」

「あ。　。　し、しまった!?　ルキアにはらさない方がいいって教えてもらったばかりなのに　!？」

と、二人が慌てていると正面にイスルギが迫っていた。巨大な槍と盾を片手に、男は軽々と跳躍する。空中から繰り出された槍は石畳に突き刺さり、二人を派手に吹き飛ばした。その一撃でエレット

少佐は壁に激突、気を失ってしまふ。

「きゅっ……」

「エレット少佐ア　　ッ！！　お前の事は……忘れない！！」

「いつまで続けるつもりだ、そのコント」

「俺はバカ正直な男だ！　クソ真面目な男だ！　故に　　コントなどではないっ！！」

イスルギの放つ槍を剣で弾き、ジエミニは素早い動きで突っ込んでいく。盾で一撃を防ぐが、その盾を蹴って空中に上がったジエミニは放つ重力でイスルギの周辺全てに一気に圧力をかける。大地が軋み、イスルギの全身に耐え難い負荷がかかった。しかしイスルギは振り返り、背後からの攻撃に盾をあわせた。

「馬鹿正直なら俺も同じようなものだ。俺にはこれしかない。これしか出来ん。この魔剣が俺の人生全てだ」

「そういう判りやすい奴は嫌いじゃないぜ……！！」

「俺は嫌いだ。貴様のような、頭の悪そうな男はな　　」

二人が同時に武器を交差させる。激しく散る火花　　。笑うジエミニ、無言で眉を潜めるイスルギ……。夜の砂漠の街で、再びそれぞれの戦いが始まるうとしていた。

S a u d a d e (1)

元々、言われずともそれ以外に自分の歩く道など無いのだと、そう信じていた。

若くして敵国に送り込まれた王子。護るべき妹を護れず、代わりに敵の姫を護らねばならない現実。当然苦悩はあった。迷いもあった。それでも彼は今日まで真つ直ぐ、揺ぎ無く歩いてきた。

それは、彼が彼なりに自分で選んだ道を歩いたからだと言える。姫であるシエルシを護り、王であるシルヴィアを護った。その行いは結果的に褒められる事ばかりではなかったかもしれない。だが、それも全ては大切な物を護る為。

当然、役割として。必然、避ける事も出来ず。しかし純然、それは彼が願った己の道である。かつて幼い少女だったシエルシの笑顔に彼が何度心救われただろうか。彼女を護る事を己の誇りとし、そして彼女が幸せになる時まで見守り続ける……それが彼の夢であり、願いでもあった。

かつて、彼女の母親は言った。大切な故郷から引き離された王子に、そつと優しく語りかけたのだ。敵国の王子に騎士団を任せたのは、ただしきたりであったからだけではない。彼女は彼の忠誠心、そしてこの世界全体を護ろうとする気持ちを信じていたのだ。彼ならば、娘を護ってくれろと。そう信じていたのだ。

信頼には信頼で、誇りには誇りで、矜持には矜持で。真つ直ぐにただやりあう事しか知らない不器用な男が出会った一輪の華……。その華は今、正に己の意思で咲き誇ろうとしている。華とは儂く、夜の夢に散り行くが運命……。しかし、せめて願わくばそれは彼女の意思で。散るからこそ美しいその光を、しかしせめて願う場所……。その為に戦うと誓った。全ての制約を失った今、それでも男は魔剣を握る。それこそが彼が誇る、たった一つのプライドであるかのよつに。

「無名の魔剣使いにしてはやるな……。名を聞いておこうか！」

「………………。名乗る程の者ではない。私はただの槍であり、ただの盾だ。一つだけ覚えておけ、魔剣使い。力とは 他人に知らしめる為にあるのではない。誇示ではなく、維持する為に。力とは、秘めて置くべきものだ」

「そいつは俺の主義とは反するな。力は使わなきゃ意味がない！
目立たなくっちゃな！」

二対の魔剣、“重魔剣イクリプス”を交差させ、ジェミニは走り出す。無骨な形状の円月刀を左右交互に繰り出し、身軽な動きでイスルギへと襲い掛かる。イスルギはそれを盾で防ぐと同時に強引に踏み込み、盾で思い切りジェミニを弾き飛ばした。

単純な腕力ならば、イスルギは相当な能力を持っている。彼の魔剣はパワー特化型……。他の全てを犠牲にしている代わりにその豪腕は彼の線の細い肉体とは裏腹に強力である。弾き飛ばしたジェミニへと槍を繰り出すイスルギ。その一撃の衝撃は大地を砕き、烈風を巻き起こす。

「やるな！ だが、そうでなければ面白くない！ すぐにケリがついてしまつては、盛り上がらないッ！！ そうだろ、イクリプスッ
！！」

刃に紫の光がぼんやりと宿り、ジェミニは身体を回転させてその波動を撒き散らす。吹き荒れる圧力 それにカンタイルの街は破壊され、イスルギも吹き飛ばされる。盾を構え、大地に槍を突き刺して堪えたものの、その破壊力は並の魔剣とは比べ物にならない。そう、彼もまたAランクの魔剣使い……。どちらの能力が勝ってい

るわけでもなく、劣っているわけでもない。

「イスルギ、無事ですか!？」

衝撃で吹き飛ばされて転んだシエルシが慌てて走ってくる。その気配を背後に感じながらイスルギは構えを解き、改めてジェミニを見据えた。敵は明らかに剣誓隊、しかもかなりの実力者である。狙いはどうやらシエルシ……。となれば、やるべき事は一つだけだ。

「シエルシ、ヤツの狙いは貴方です。あまり前に出ず下がっててください」

「だが断ります!」

拳を握り締め、シエルシは目をキラキラさせながら断言した。思わず転びそうになるイスルギ……。その言い草はまるであの軽薄な魔剣使いのようである。

「……恐らくホクトならそう言うはずです。イスルギ、私も一緒に戦います」

「しかし、敵は剣誓隊の魔剣使い……。かなりの腕です」

「それがどうしたというんですか、イスルギ。私は一步も退きません。私は戦います。もう、護られているだけは嫌なんです。だから私は自分の手で未来を勝ち取ってみせる」

シエルシは両腕を広げると大地に術式の紋章が広がっていく。空に浮かんだ無数の白い刃の幻影。それを一斉にジェミニへと放った。ジェミニは魔剣でそれを相殺しようとして、とっさに身を

屈めて回避した。

「……………っと!? やばかったな……………封印魔術ってやつか? 魔劍の動きを封じるんだらう、それは!」

ニヤリと笑うジェミニ。そう、彼にはシエルシの資料が渡されていたのである。あまりそうしたものに目を向けるタイプではないジエミニだったが、エレットが探査をしている間ずっと暇だったので昇降機の中でも列車の中でも、どこでもそれに目を通していたのである。結果彼女の能力の危険性に気づき、防御ではなく回避を選んだ……………。それは大きな差である。

「当たれば一撃必殺だな、確かに。魔劍使いが相手なら尚更だ。だが、そんな姑息な魔術では俺は止められない! 俺はもつと目立ちたいからだ!」

「シエルシ、読まれています。相手の方が素早い場合、真正面から魔術を放つのでは勝率は低い」

「……………。ですね。では、どうすれば?」

「万物には機というものがあり、戦には流れというものがあるので。当たらないのであれば、当てられるようにするしかないでしょう」

ジェミニは再び魔力を刃に通し、猛然と接近してくる。刃を十時に重ね、放つ一撃。今度は盾で受けるものの、先ほどまでとは重みがまるで違う。二対の剣にかかった圧力がイスルギの強固な盾を軽々と押しつけ、衝撃は騎士に迫った。それを庇うかのように姫はその手を伸ばし、封印魔術により障壁を発生。魔力により発生す

「な、なんですかあれ……！？ 無差別攻撃にも程があります！ 街を沈めるつもりですか！？」

「一見すると恐ろしい馬鹿ですが……やはり恐ろしい馬鹿のようです。早めに仕留めなければ、この街全体に被害が及びます」

「しかし、あんな近づく事も出来ない力場の中心に居る相手をどうやって……」

イスルギは頷き、それから盾を變形させその中心に槍を取り込んだ。光を帯びる巨大な槍を、ジェミニ目掛けて照準を合わせる。盾をカタパルトにし、槍を射出する貴魔劍アルテツアの能力。両足を広げ、しっかりと踏ん張りを利かせて衝撃に備える。その一撃は通常に放つ槍の数十倍の威力を持ち、そしてそれならばあの力の渦の中でも効果を十分に発揮出来るはず。

何をしようとしているのかを理解し、シエルシは慌てて後退した。構えた槍に魔力を込め、盾が青白い光を帯びて射出の準備を終える。イスルギが一息に光の槍を放つと、それは回転しながら猛スピードで大地すれすれを疾走して行く。まるで己の意思を持つかのように正確にジェミニへと向かっていく……のだが。

ジェミニの周囲に近づいた瞬間、槍の動きはまるでブレーキをかけられるかのように遅くなっていく。最終的にはジェミニまであと数センチというところで空中で静止してしまふ。更にそれはあろうことが、時間を巻き戻すかのような勢いで跳ね返され、一直線にイスルギ目掛けて吹き飛んできたのである。

姫を護る為、騎士は慌てて盾を構える。予想よりも遙かに強力だった力によって跳ね返された槍はイスルギの盾に直撃し、男はそのまま遙か彼方へと吹き飛んでいく。衝撃の轟音にシエルシは片耳を塞ぎつつ、イスルギへと振り返った。

「イスルギ ツ！」

彼方に弾き飛ばされたイスルギは民家に突っ込み、瓦礫と一緒に転がっていた。シエルシの声で身体を起し、額から流れる血をそのままに立ち上がる。改めて魔剣を召喚し、再び前へ。これ以上街の被害を増やすわけにもいかない。最悪この街が沈むようなことになればどれだけの被害が出るのか……。戦うべきは敵だけではない。時間もまた、彼を背後から駆り立て続けていた。

S a u d a d e (1)

“記憶”とはなんだろう？ ふとそんな事を考える瞬間があった。

記憶……。それは、覚えているという事。記憶……。それは思い出。記憶、記憶、記憶。記憶が無くなってしまうえば、それはもう別の存在になってしまふのだろうか？ 記憶、記憶、記憶。記憶とは何か。何を意味し、何を定義し、何の為に存在する？

それは、人が人である為に。自分自身を確信する為に。他人と繋がり続ける為に。何かを心の中に維持し続ける為に。人は常に記憶に左右され、記憶に制限され、記憶に肯定されて生きている。記憶があるからこそ人は人で居られる。記憶があるからこそ、人は誰かと繋がっていられる。では、記憶がなくなってしまうたらどうすればいい？ 何度紡ぎなおしても、それを失ってしまうのならどうすればいい？

無駄だ。無駄なのだ。何もかもが無駄なのだ。積み上げる事が出来ないのならば三途の川と同じなのだ。それは無慈悲な罪の重荷：

…。彼に課せられた物、それが罰以外の何物であるというのか。男は一人、夕焼けの中を彷徨っていた。山沿いの坂道を下りながらふと思う。心の中に去来する、この虚無感は一体なんなのかと。

判っている。自分が異質なものであることは。もうこの世界にも、あの世界にも、どの世界にも属せ無い。居場所も無くうろつく。ただの死の影……。それが彼の正体なのだ。メリーベルが現れた時、彼は安心した。そして同時に恐れたのだ。得る事も失う事も怖いのであれば、何をどうすればいいのだろうか。

だからこそ、我武者羅に走ってきた。只管に前に進んできた。善悪だとか生死だとかそんな事は関係なく主義も主張も無くただ力を揮った。そうすることで道は開けてきた……。はずだったのに。

何もかも失って、何も覚えていないはずの身体が覚えている。魔剣狩りと呼ばれた男が追い求め、捜し求め続けていた物……。ホクトと呼ばれた男が、心の奥底ですつと求めていたもの。勿論それは今となっては意味のないことだ。今更それを思った所でどうにもならない。だからホクトは決めたのだ。とりあえず前に進むと。

「だから……。やるしかねえ、行くしかねえ、進むしかねえ。そうだと……。？ それしかないんだ。それだけが、俺の……。俺が俺である為に必要な要素なんだからな」

ズボンのポケットに両手を突っ込み、ホクトは深く息をついた。感傷的になつたところで状況は進展しない。それを彼はわかつている。本能的に前向きなのだ。だからこれもいい機会だったのだろう。穏やかな日常……。半年だけだったがそれを経験出来た。それだけでも十分、幸せだったというものだろう。

「ホクト！」

そんな男の背後、駆け寄るメリーベルの姿があった。坂道を駆け

下りてきた女は肩で息をしながら顔を上げる。ホクトは目を丸くし、それからニヤリと笑った。

「そんなに俺に会いたかったのか？」

「………………。そうじゃないけど………………。さっきはごめん。ちょっとうちの理屈を押し付け過ぎた。反省してる」

「別に俺はそんなに気にしじゃないぜ？ 黙ってたって記憶は戻らねえ。じつとしてたって前には進まねえ。だから歩くさ。進むんだ。そういう生き方が俺には合ってる」

「そう…………。でも、判って。本当に貴方の力が必要だから…………。それに、これ以上ここにいと危ないの」

「危ない…………？」

「貴方が異世界に飛ばされても、私と同じように世界を行き来できる存在は居る。貴方がその魔剣の…………大罪の力を持っている以上、安全な場所は…………」

と、そこでメリーベルは口を紡いだ。何事かと小首をかしげるホクトだったが、彼女の視線を追って振り返れば自然とそれに目が向いてしまった。ダークスーツに身を包んだ一人の男がゆっくりと坂道を上がってくるのが見える。一目見れば判るほど、それはあからさまだった。目をギラギラと輝かせ、引きつるような笑みを浮かべる人影。ホクトの脳裏、様々な景色が過ぎった。そう、その男は…………。

「よう…………探したぜ、魔剣狩り…………。 “魔女” も一緒とは都合がい…………」

い

「……………タケル……………」

メリーベルの呟きでホクトは眉を潜めていた。名前は知らない。知っているはずもない。だが、覚えている。体が記憶している。それは敵だと、魂が叫んでいるのだ。だから身構える。当たり前のように。

「よくも俺様を異次元にぶっ飛ばしてくれたな……………。戻ってくるのに半年もかかっちゃまったじゃねえか。どうしてくれるんだてめえ……………ああ？」

「千年の努力に比べれば、半年くらい軽いもんだろ？」

と、自分で言い返してホクトは驚いた。その皮肉はどこから漏れ出すのか…………。そう、頭で考えているからいけなかったのだ。どうせ記憶は最初からカラッポ…………。刻んでるのは魂に、この心に、意思に。北条北斗はいつ如何なる状況でも同じ思考をし、同じ行動を選び、同じ答えをたたき出すだろう。“今までだって何回も記憶が無くなっている”のだ。だが、それでも普段通りでいられた。誰もそれに気づく事はなかった。それは 彼がブレないから。彼が揺らぎ無いから。彼がどんな状況でも、必ず昨日の彼と、一昨日の彼と、一週間前、一ヶ月前、一年前…………。どんなに時を遡っても、彼は同じだから。連続性は保たれている。明日の記憶が続かなかったとしても。彼という存在は連続しているのであれば、それは“記憶”なのかもしれない。

「メリーベル……………あれは敵なんだろ」

「……ええ」

「あれが来るから、こっから離れなきゃならなかったんだろ。だから急いでたんだろ？」

「……………」

「そつだよな。他に考えられねえ。あんたは巻き込みたくなかったんだ、本城夫妻を……。ならそれは正しいぜ。間違ってるのは俺とテメエだ」

笑顔と共にびしりと指差すその先でタケルは楽しそうに声を上げて笑っていた。二人の男の浮かべる余裕……。それが余計に状況を緊迫させている。二人の男は同時に歩き出し、そうして丁度互いの真ん中で額と額とをぶつけ合った。文字通りの目と鼻の先　二人は睨みあう。火花を散らす。そうして笑いあうのだ。

「ガリユウの絞りカスの分際で、よくも俺様をあれだけコケにしてくれたな……。あぁッ!？」

「見下すんじゃないよ、クズが……。そうやって何もかも下に見てるから足を取られるんだよ」

次の瞬間、タケルは拳を振り上げ、それをホクトの顔面に叩き込んでいた。しかし男は倒れず、反撃の拳を繰り出す。二人はそうして何度か交互に殴りあった後、同時に拳を顔面に叩きこんで仰け反った。

所謂クロスカウンターの状態から男二人は仰け反り、よろけて下がっていく。タケルはその手の中に魔剣を構築するが、ホクトはそれが出来ない。この世界にはそもそも魔力という力が希薄であり、

その身にガリユウの力の殆どを宿しつつあるタケルは兎も角、文字通りの絞りカスとなったホクトにこちらの世界で剣を出せるほどの余力はない。結果、一方的に振り上げたタケルの剣が大地を叩き壊し、アスファルトを粉碎して蜂起させる。碎ける坂道……走って逃げながらホクトはメリーベルの手を握り締めた。

「何ボサっとしてんだ!! 逃げるぞ!!」

「え、ええ」

「あの野郎、異世界だったのに容赦なしか……! 人が暮らしてた街を平然とぶっ壊しやがってッ!! どうすればいい、メリーベル!?!」

「あつちの世界に逃げ込むのが早いと思うけど……あいつをどうにかしないと……。こうなる前に戻りたかったけど、こうなった以上仕方が無い。ホクト、夏流とリリアのところへ。そこに彼らが使ってる異世界への転送魔法陣がある」

「……………って、あの人たちも……!?!」

そこで背後から放たれてきた無数の魔剣が二人の行く先を塞ぐように次々に突き刺さった。振り返ったホクト目掛けて猛然と突っ込んでくるタケル。その攻撃から庇うようにメリーベルはホクトを突き飛ばし、自分もまた倒れるようにして逃げ込む。

「どうした!? 魔剣が出せないとそんなもんかよ……? ヤバいよなあ、大ピンチだ! でも誰も助けになんかこねえよ!!」

「ホクト!!」

ホクトへと繰り出された攻撃を防ぐようにメリーベルが割って入り、両手を翳して防御障壁を展開する。しかし障壁は術式で編まれている以上ガリユウには通用せず、そしてそもそも魔力の絶対量が明らかに不足している。結果メリーベルへと刃は食い込み、身を引いたものの彼女の身体は鋭く斬り付けられてしまった。

「メリーベルッ!!」

叫ぶホクトの目の前でメリーベルは血を流し倒れる。その身体をぎりぎりで抱き留め、冷や汗を流しながらホクトは顔を上げた。目の前には大剣を振り上げたタケルの姿。流石に成す術なく、せめてメリーベルだけでも護ろうと背中を向けた、その時。

刃は確かに振り下ろされていた。衝撃は確かに迸った。しかし、痛みはいつまで経っても襲ってこない。血も流れていないし、まるで平穩無事だった。ホクトが振り返るその先、夕焼けに照らされる一人の男の姿があった。振り下ろされた大剣を、片手で受け止める男の。彼が居候していた、北条昂が居候していた、本城家の家主。本城夏流。男はガリユウの一撃を受け止め、それを軽く突き放して振り返った。

「全く……どいつもこいつも自分だけで事情を抱えすぎだ。若い内はな、どうしてもダメな時は誰かを頼っていいんだ。逃げたついで、助けを求めたっていい。それを理解しろよ　ホクト」

「……………だ、旦那……？　あんた今、素手で魔剣を……………」

目を真ん丸くしてホクトが苦笑を浮かべながら問いかけると、本城は特に気にする様子も無く頷いた。そんな彼らの背後、妻であるリリアが駆け寄ってきて旦那へとアタツシユケースを投げ渡した。

「夏流さん、これ使って！」

それを受け取り、男はケースを開いてみせる。中に納まっていたのは黄金の手甲。それを徐に両手に装備し、ホクトとメリーベルを庇うように前に出た。その間にリリアが二人に駆け寄り、リリアは負傷したメリーベルの傷に手を当てる。淡い光がその傷を瞬時に癒すのを見て、彼女もまた異世界の関係者である事を理解する。

「お、奥さん……？ あれ……？ ど、どどういう事ツスか？」

「えーとねえ……黙っててごめんね。でも、話して信じてもらえることじゃないから……」

困ったように舌を出して可愛らしく笑うリリア。その視線の先では黒き刃を纏った敵と対峙する男の姿がある。ホクトはリリアの肩を叩き、それから本城を指差した。

「いやっ！ 無理だつてあれ！！ あの人NEETだぞ！？ 普段から奥さんに頭も上がらないようなヘタレなのに、大罪相手は無理だろ！！」

「そんな事ないわよ。ああ見えてもあの方は、本当はとっても頼りになるんだから。ね、メルちゃん？」

メリーベルは無言で溜息をついた。しかしその様子は呆れているだけであり、不安げには全く見えない。しかしホクトにはどうにも想像出来なかった。普段から妻の尻にしかれている彼が、こんなにも二人から信頼されている事が。

「なんだ、テメエ……？ こつちの世界の人間か」

「ああ」

「それが、どうして俺の剣を止められた……？」

「さて、どうしてだろうな」

「……………。ナメてんじゃねえぞ、クソ野郎がああああッ！！
喰らい尽くせ、ガリユウ ツー！！」

黒き魔剣が吼え、本城へと襲い掛かる。猛る魔力が思い切り叩き込まれ　しかし本城はその攻撃を片腕で受け止めていた。余りにも容易かった為威力が周囲には伝わりづらかったが、タケルにはわかる。それは会心の一撃だったはず。と、次の瞬間一瞬を気を緩めた刹那に本城の蹴りがタケルの脇腹に減り込んでいた。鈍い音と共に骨が砕け、一撃で内臓が潰れるのを感じる。予想斜め上のダメージ　直後、勢いを相殺しきれずタケルは激しく吹っ飛んでいった。

「がはあッ！？　お…………！？　なん、だ…………テメエッ！？」

「お前こそなんだ、人の家の近くで大暴れしやがって…………。その道が使えなくなったら最寄のスーパーまで遠回りになるだろうが。現地住民の気持ちを考えろ、阿呆」

「なんなんだって聞いてんだよッ！？」

喚くタケルへと一瞬で駆け寄り、男は拳を振り上げる。電撃を纏った、黄金の拳。男は溜息混じりにウンザリした様子で告げる。

「……………名乗るのもおこがましいが…………。しがない引退したただの救世主だよ」

繰り出される拳。それが電撃と共にタケルのボディに直撃し、雷鳴が轟いた。吹き飛んだタケルは大地の上に転がってピクリとも動かない。それを見届け、本城は疲れた様子で背を向けるのであった。

Saudade (1) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場アンケートランキング特別編

それにしたって関係ない。いわば彼はアンケートでいうところの貴志真夕くらいのネタだったはずなのに

うさ子「なのっ　今回は、アンケートで三番人気だった本城夏流君をご招待したのっ!!」

シエルシ「……………。なんでこの人が第三位なんですか…………？」

本城「俺に言われても困る…………。これといって目立ってないはずなんだが…………。なにもしてないし」

シエルシ「票は全体の9.3%集まりました。これはかなり全体的に票が割れた結果ですね…………」

うさ子「というわけで、おじさん向けのコメントを紹介しちゃうのっ」

本城「おじさんて…………。最近なんか若い子に縁があるなあ…………。ライダーとか…………」

【コメント抜粋/キャラコメント】

前の主人公がおっさんになるとか最高でしょう。

本城「……………。まあ、おっさんだな。おっさんだ」

…師匠。活躍の機会はあるんだろうか

本城「特に活躍はしなかったが、サウダーデの（1）はちょっとだけ出番があったな。ファンサービスということだ」

つまりは 邪魔だ！

本城「……………。そんな事俺言っただけ…………？」

なぜかニート

本城「ニートである理由は、これからわかってもらえると嬉しい……………」

シエルシ「何気に奥さんにも票が入ってるんですね」

リリア「な〜っ〜る〜さ〜ん…………？ 一人で女の子に囲まれて何三位になってるんですか…………？」

本城「待てリリア、これには深いわけが……………」

うさ子「なんだか大変そうなの……………」

シエルシ「…………ですね。というわけで、ここからは彼の日常風景を少し切り取った番外編です。投票、ありがとうございました！」

うさ子「なのーっ!!」

俺の名前は本城夏流。若い頃は救世主なんかやっていた時期もあったが、今はしがないNEETである。

と、誰に対するものかわからない自己紹介を脳内でしながら俺は道場の雑巾がけを続ける。師匠からこの道場を譲って貰ってからもう大分経つのだが、師匠が帰ってくる気配は無い。師匠は外国に旅立ち、世界中で格闘技を極めて……俺に再戦するのが夢らしい。

まあ、色々あって師匠より軽く強くなってしまう俺はそれから道場の看板を預かる事になったのだが……この道場というのがいかにも流行らない。そもそも俺は愛想も良くないし、これといって人間的に魅力的なわけでもない。肝心な武術についても詳しいわけではなく、俺の手法は決して一般人に教えたところでわかってもらえない。

気……とかいう単語をたまに聞くが、俺の力は正にそれに近い。得体の知れないエネルギーを拳にのせて放つのである。これが誰かに理解して貰えるほうがおかしい。雑巾を絞り、額の汗を拭う。俺に出来る事 それは掃除くらいのものだ。というのも全てはちょっと変わった嫁さんをもらってしまった事に起因する。俺は腕を組み、道場を眺めながら彼女が嫁に来た時の事を回想するのであった。

受難、本城夏流の場合

「久しぶり。へこたれ勇者様」

彼女が微笑む。小さな口で言葉を紡ぐ。耳を澄ませ、その一字一句を聞き逃さないように俺は目を閉じた。

リリア・ライトフィールド。勇者で魔王でお姫様で……ついでに妹で神様で。泣き虫でへこたれで誰よりも頑張り屋さんな白い勇者の少女に、俺は確かに出会った。

「久しぶり、夏流さんっ！」

リリアが満面の笑みで言う。俺は彼女頭をくしゃくしゃに撫で、それからやたらと背の伸びたりリリアを強く抱きしめた……。そんな奇麗事で物が片付けば誰も苦労はしなかったのだ……。

俺の嫁こと本城リリア（実際には籍を入れていないので彼女の苗字は本城ではないが）は、栗毛色の髪に翠の目という明らかに日本人離れした風貌で、その美しさも折り紙付きだ。まるで西洋人形のような端正な顔立ちと一緒に並んでいると嫌になるくらいの超美人だ。昔はちっこくて犬みたいだったが、大人になれば流石は元プリンセスというわけで……。

再会を果たした時、リリアは既に大人になっていた。その時からほぼ外見が変わらないままなのは、恐らくこちら側と向こう側とで時間の流れが異なっているからなのだろうが、そもそも彼女は歳をとるのか不明である。事実上、寿命など存在しないのではないだろうか。

というかそもそも彼女が何物なのかという説明からしなければならぬのだが、そもそも彼女はなんというか……そう、こういうと馬鹿げているのだが、この世界とは違う世界からやってきた女なのである。所謂異世界人というやつだ。俺も縁があつてそこで暫く滞在したりして、リリアとはその流れの中で知り合った。

ちなみにこのリリアというのが俺の妹であり既に他界している本城冬香にソックリで、というかほぼ同一人物的なもので、そしてリリアは異世界では勇者だとか魔王だとか神だとか言われ、結局俺の嫁で収まった。もうわけがわからない。冷静に思い返してみるとあの頃はよくあんな非常識な事を平然と受け入れたなとばかり思う。まあ兎に角、リリアがこつちの世界に来てしまつてから俺の平凡な日常はあっさりと崩壊した。あれは確かまだ俺が大学生だった頃の話だ。

「……………。えーと…………つまり、この子は貴方の彼女さんの……………」

「の、ようなものというか、そうであるというかそうじゃないというか……………」

「エッ!? そうじゃないんですか!? リリア、ずっと夏流さんに会いたくて会いたくて頑張ってきたのにそうなんですか!?」

「いや、俺もそうだったけどさ……………恥ずかしい事を親の前で言うな……………」

「だって、夏流さんだってあの日最後に好きだってゆったじゃないですかあっ!!」

「だからッ!! 親の前でそんな事を堂々と宣言するな馬鹿ッ!! お前は全然変わってねえな!!」

「夏流さんこそ、相変わらずシャキッとしないヘタレですねえ……………」

二人で取っ組み合いになってぎこちない笑顔を浮かべる本城の実家……………。俺はとりあえず行き場の無いリリアを実家に連れて行ったというのも、どうやら元の世界に戻るにはナナシ……………ああ、俺の飼ってる人型のうさぎ……………だけどこの説明じゃ全く意味不明……………の力が必要らしかつたからだ。ナナシは実家にいるので当然実家に行くしかない。そこには俺の母親も丁度同席していたというわけである。リリアは明らかに外国人、しかも何故か日本語ペラッペラで、服装はアーマーククロークという非常に物騒極まりない。流石に持って

た剣はあの場所においてきたが、それでも母の視線は相当困惑していた。二人して粗相に気づき椅子の上に座る。リリアは相変わらぬ愛らしい、ほにゃっとした笑顔を浮かべていた。

「まあ兎に角、夏流のガールフレンドだっていうことはわかったわ……。でも、お父さん許してくれるかしら……」

「俺の親父は物凄く古風なんだよ……。つまり、外国人のお前と付き合つのを納得しない可能性がある。しかもあいつは俺の嫁になる人間はお見合いで自分が決めると昔から宣言している」

「……………？ おみあいつてなんですか？」

まずはそこからですか。とにかくそんなわけで、リリアに俺の家族関係を説明するだけでやたらと時間がかかった。というかそんなことも知らないかったのかこいつはとか思ったわけだが俺も説明しなかったのが悪い。兎に角俺の家の中で俺の境遇はあまりよくないのだ。

うちの親父は某企業のお偉いさんだ。ユニフォームとかいう新型ケータイを売ってるのだが、使用可能エリアが限られているらしく俺は使った事がない。まあそんな親父のお陰でこの家は盛大豪華なわけだが、リリアとしては城とかで暮らしてたから別にそうでもないんだろうなあ……。で、説明したのだがリリアは話を聞いていたのか聞いていなかったのか、立ち上がり拳を握り固めて言ったわけだ。

「リリア、夏流さんのお嫁さんにしてくださいってお父さんに頼んできます！」

「マジか！？ 二つの意味で！」

「リリアは夏流さんに会いたくて、故郷さえも捨ててきたんですよ……？ それなのに夏流さんは……ううっ！ うう………」

「……夏流、このお嬢さんに何をしたの？ ちゃんと責任はとりなさい……？」

「まだなんもしてねえよっ！！！！！」

「じゃあこれからしてくれるんですね？」

「いや……っ！ そういふ問題か！？」

「兎に角リリア、お父さんに会ってきます。大丈夫ですよ、どんな人だって話せば判りますから。夏流さんのお父さんとなら、リリア仲良くなりたいです」

そう微笑むリリアの説得力の深さといったら凄まじい。まあ確かにこいつは背負ってる過去が二十代前半にしてドぎついからな……。そんなわけでとりあえずリリアはうちの台所でちよつとした料理を作り、お茶と一緒にそれを親父の書齋に持っていく事になった。俺と母とうさぎは三人でそろそろとその後につき、親父の書齋へ向かった。

「おとうさーん、入りますねー」

「ちょ、おま………」

気安すぎるリリアに既にツッコみたかったが、そこからが問題だった。ドアを開いた親父にリリアは歩み寄ろうとしたのだが、ドアの段差に足を引っ掛けて盛大に転んだのである。宙を舞うお茶……。

そしてお料理の数々。それが親父の堅物そうな顔と薄くなってきた頭の上に直撃する。後方待機の三人は同時に青ざめ、それから慌てて駆け寄った。

「リ、リリ……リリアアアアア！ 何やっとなんじゃああああっ
！！」

「へう……。へ、へこたれそうですう……」

「リリアちゃん、大丈夫！？」

「いや……リリアより親父の心配をしたほうが……」

恐る恐る振り返る俺たち……の視線の先、親父が仁王立ちしていた。それから物凄い勢いで説教を受け、俺とリリアは家を締め出されてしまったのである……。

「ごめんなさいねえ、リリアちゃん……。あの人頑固だから……」

「へううううう……。リリア、帰るところもないのですよう……」

「それに関してはワタクシの方で何とかしておきましょう。お二人はその間どこかで旦那様のお怒りが収まるまで身を隠されては？」

「……そうするか」

こうして俺とリリアは二人暮らしをする事になったのだが……。この後が大変だった。

こちらの世界の事を何も知らない非常識なリリアに振り回され俺は酷い目に逢いまくった。何度か死にそうにもなった。だがそのエ

ピソードを全部やるとまるで時間が足りないのですそれはあえて抜粋する。この間に秋斗とも再会を果たし、リリアはこちらの世界の生活に慣れ始めていた。

まあそんなこんなで俺も大学を卒業して就職する事になったのだが、親父が絶対に自分の会社に入れと煩く、待遇も良かったし特に他に夢もなかったそこで働く事になった。しかし、リリアは…。

「夏流さん、会社行っちゃだあああ……っ」

「………………。リリアさん？ 何をしてらっしゃるんですか？」

「やだやだ、やだーっ！ 夏流さんもつとぎゅーってしてーっ！！」

というのが朝の光景………………。リリアさんはフォーマルな姿で鞆片手に出勤しようとする旦那の足に背後から縋り付き、目をうるうるさせながら言うのである。冷や汗を流す俺………………。せめて服をちゃんと着て欲しい。

「だって、夏流さんが行っちゃうとリリア孤独なんですよう………………。だーれもお友達もいないし…………。テレビでタモさん見るくらいしか楽しみがないんですよっ」

「タモさんで我慢しろよ………………。というか秋斗はどうした？」

「秋斗君はねえ、なんか会社起すってどっかにいってからそれっきりでしょ？ 親友なのに忘れたの…………？」

「いや…………。そうだったな。ナナシは？」

「うさぎさんは、夜のお仕事だからって昼は寝てるの！！ 寂しい
よう、寂しいようっ！ わああんっ！！」

「いや、我慢しろよ……。夜には戻るんだし」

そんなわけで犬をひっpegし会社に行くのだが…… 実際俺もあんなリリアの事が心配で仕方が無かった。こつちの世界の事は右も左もわからないのだ、不安にもなるだろう。それでも帰りたいとは一言も言わずに頑張ってくれているのだ。何かお土産に、今日は買って帰ろうか……。そんな事を考えるのだが。

「夏流さーん」

「おぶふうッ」

会社にリリアは勝手にやってくる。たまにやってくる。そしてお昼のお弁当を盛大に作ってくるのだ。俺はそれが恥ずかしくてたまらなかった。“はい、あーん”じゃねえよ。じゃねえんだよ。

そしてリリアは会社でも大人気で、俺は会社の先輩達からあれこれ詮索されるのであった……。ひどい生活だ。だがこれが暫く続いたのが悪かった。ある日、親父の耳にまでリリアが会社でダラダラしている事が知られてしまい……。

「クビになったあっ！？ な、なんでっ！？」

「お前のせいじゃあああああっ！！！！！！」

別に女を囲ってるくらいならいいんだろうが、リリアはあの親父にお茶ぶっかけた張本人だから……。あれから俺は見合い話も断っているし、リリアと縁を切らないとお前は会社に来させないとま

で言い出したのである。そこまでするか普通……と思ったが、まあ親父も意地なんだろうな……。で、それを聞いたリリアは翌日の朝には、置手紙を残して消えていた……。

さてこれでどうなるかっていうと、俺は消えたリリアを探してあちこちに行かねばならなくなった。フォーマルスーツのまま走る俺！ そのままナシと共に異世界へ……。これで向こうの世界に行つてリリアを探し出すまでにまたひと悶着あつたのだが、まあそれでなんとか無事に連れ戻し……。

「夏流さ〜ん」

「ん……？」

「あのね、子供が出来ちゃった」

「え……？」

フリーター生活をしていた俺にリリアは笑顔でそう告げた。嬉しいような、なんかちょっとそうじゃねえだろって言うような……。でまあ兎に角子供が生まれ、で、そしてリリアはその子供をつれてまた異世界に行つてしまったのである。

「なんでやねんツ！？」

と、絶叫したのは言うまでも無い。なんでも向こうの世界で遣り残した事があるからだとかいっていたがそんな俺は知らん。流石に愛想も尽きたと思つてそれから暫くリリアの事はほっといたのだが今度は仕事の手が付かない。なんだかんだでリリアが一緒に居ないと自分はダメなんだと実感した頃には俺はフリーターどころかN E E Tになっていた。

それから死んだような生活が続き、もう意地はつてないでリリアに会いに行こうかと思いいじめたある日。突然現れたリリアは大きくなった娘を連れて来たのである。名前はユリア……俺がつけたんじゃない、誰かが勝手につけた。なんだそりゃ!!

「パパ……逢いたかった……っ」

と、抱きつかれてもこんな大きい娘いたっけか……？ やはり時間の流れが違うのか、娘の成長もすごく速かった。まあその頃には既に俺もおっさんになっていたわけだが……。それからリリアも無事に戻ってくる事になり（何を遣り残したのかは教えてくれなかった）、ユリアは向こうの世界の仲間と一緒に魔物と戦っているらしい。危ない事はやめなさい！ とは言えないのは自分も危ない事をしていた過去があるからか……。

そんなわけでリリアが再び俺の元に戻ってきてからはや数年。それなりに平穏な人生を送っていると思ったら今度は昴という親戚の子を預かる事になったり、私立探偵をやっている知り合いの手伝いで荒事に参加する事になったりと今でもトラブルは耐えない。で、極めつけがこれである……。

「昴が異世界に……ねえ……」

ホクトとかいう若者がうちに転がり込んできたときに既に何かもう嫌な予感がしたただよなあ……。まあ、別にこういうのは慣れっこだからいいんだが。雑巾を絞り、道場に背を向ける。ここを本格的に開けるようになるのは、どうやらまだまだ先の話のようだ。

「夏流さん、メルちゃんが呼んでますよ」

と、入り口から顔を覗かせた嫁が言う。可愛くトラブルメーカー

な、この阿呆な愛しき嫁よ……。俺の人生は多分、これからもずっとこんなカンジなんだろうな。

「ああ、今行くよ」

S a u d a d e (2)

「それじゃあ、昴ちゃんも異世界に……」

一部始終を聞いたリリアはそう呟き、それから意見を求めるようにホクトへと目を向けた。ホクトは黙り込み、壁に背を預けたままじっとメリーベルの言葉に耳を傾けていた。

倒したタケルは一刻も早く元の世界に戻さねばならない。故に時に猶予は無く、安全の保障もない。現在ホクトたちは本城家の居間、ロープでがんじがらめに縛り付けたタケルを囲んで話をしていった。本城に叩きのめされたタケルは未だ目を覚ます気配も無く、ぐったりとした様子である。

兎に角今は元の世界に戻る事が先決……。だがしかしホクトには他に気になる事が多すぎた。本城夏流のあの不可解なまでの戦闘能力、魔術を使いこなす嫁……。そしてそんな二人とメリーベルの関係。そして記憶の中に薄っすらと浮かぶ、昴という少女の事。考えれば考えるだけ答えは遠のくような、そんな謎……。男は溜息を漏らし、頭を振って思考を閉ざした。

「兎に角、元の世界に戻りゃいいんだろ？ これ以上奥さんと旦那に迷惑かけられねえよ」

「もう、ホクト君だったら……。そんな事何も気にしなくていいのに。それにこれくらいなら夏流さんと私でどうにでも出来るよ」

そう微笑むリリア。その笑顔の意味を知るのが恐ろしく、ホクトは黙り込んだ。だがどちらにせよこんな化け物をこちらの世界に放置するわけにも行かないだろう。いや、そもそも。

「こいつを生かしておく必要はあるのか？　ここでぶっ殺しといったほうが後々ラクじゃねえか」

ホクトの意見が尤もである事は確かめるまでもない。この男は邪悪で凶悪、正に文字通りの悪役なのだ。殺してしまったところで何の問題もないような気はする。が、なんとなくそうしない理由はホクトも感じていた。いや、そう“出来ない”理由は。

「ホクトは判つてると思うけど、彼はガリユウの力を取り込んでいるの。つまり、物理的攻撃で殺しきる事はほぼ不可能なの」

ガリユウを構成するのは複数の魂である。それも二つ三つではなく、千、万、億という桁外れの数である。その回数殺す事が出来るのならばまだしも、限られた時間内でそれをクリアするのは困難である。昴のユウガなど、対術式破壊に特化した特殊武装でなければ当然ガリユウを殺しきる事は出来ないのだ。それは元々ガリユウの持ち主だったホクトが最も理解する所である。

「じゃあ、リインフォースならどうかな？」

「………………。それ、レプレキアにあげちゃったんでしょ？」

「あ、そうだった…………えへへ」

「何の話かわからんが、兎に角こいつごと元の世界に戻らなにならんということか」

「今は私の術で封じ込めてるけど、それもこつちの世界に魔力が薄い所為でそう長くは持たないと思う。だから急いで元の世界に戻っ

て、きちんとした環境下での再封印が必要な。昴の力は直ぐには借りられないと思うし」

向こうの事情をすべて説明するのは流石に時間がないので端折ったが、昴がどのような状態にあるのかはメリーベルも理解する所である。兎に角、直ぐにガリユウを殺しきる手段がない以上、現状では手の内ようもない。それに。

「奪われたホクトの力を取り返さないで殺しちゃっていいの？」

「………………。まあ、それもそうだな。でも剣自体は出せるんだろ？」

「問題なのは魂のストックを大幅に奪われてるって事。今のホクトじゃ、物理攻撃だつて或いは“殺しきられる”かもしれない。それにガリユウ自体の能力も落ちちゃってると思う」

「ほ…………。まあ、その辺は俺は専門外だからあんたに任せるよ」

投げやりなホクトのテキトーな態度に肩を竦め、メリーベルは部屋を出て行った。残されたホクトとリリアの二人は暫くの間黙っていたが、リリアが徐にコタツの上野みかんを手に取り、それを剥いて言った。

「ホクト君、みかん食べる？」

それが余りにも間の抜けたほんわかとした口調だった為ホクトは思わず笑ってしまった。封印されている怪物が転がっている居間でコタツに入り、ホクトはミカンを口に放り込んだ。甘酸っぱい、向こうの世界では馴染みの無い果物の味をしっかりと味わう。

「ホクト君、色々大変だけど頑張ってるね。私、応援してるからね」

「ははは……。まあ、やるだけやってみますわ」

「全部終わって、それでもまだ帰るところが無かったらね……。いつでも戻ってきていいから。昴ちゃんと、ホクト君。それから私と夏流さん……。四人で暮らせばいいから」

リリアは優しく、そして真摯な言葉でそう言った。ホクトはなんだか言葉に出来ない感情が自分の中にわきあがるのを感じ、実に何とも言えない表情を浮かべた。嬉しいような、寂しいような……。そんなホクトの大きな手を握り、リリアはにっこりと笑う。それは全ての不安を吹き飛ばしてくれるような、女神のような笑顔だった。

「今日までお世話になりました。今度来る時は、気を利かせて土産物でも買ってきますよ」

「出来れば食べ物がいいなあ……。そうだ、みかん持ってく？ダンボールにつめてあげようか？」

「お、おかまいなく……」

こうして着々とホクトとメリーベルが元の世界に戻る為の準備が進められた。それ自体は簡単なもので、ものの数時間で準備は完了する。本城家の庭にある道場の中、その中心にメリーベルが立ち、異世界へ転移する魔法陣を動かそうとしていた。

メリーベルの力で床に浮かび上がる魔法陣……。倒れたタケルを足元に転がし、ホクトは振り返った。そこには見送りに来ている本城とリリアの姿がある。ホクトは本城へと歩み寄り、ズボンで拭いた右手を差し出した。

「そんじゃ、もう行きます。お世話になったッス」

「……………ああ。ホクト、お前に頼みがある」

「なんスか？」

「お前の妹を……………。昴を護ってやってくれ。お前にならきつとそれが出来る。俺はそう信じている」

本城の目つきはしつかりと、口調は諭すように、しかしそれは優しい願いだつた。かつて彼が護れなかつた者、彼が逃げ出してしまつた物…………。ホクトならばきつと向き合えると、そう思つたのだ。彼は真つ直ぐな男だ。どんな時でも、例えそこが絶望や悲しみの渦中だとしても、前進する事しか知らない愚かなまでに純粋な男だ。ヒネた態度や皮肉な喋り、ふざけた行動の中に見える炎にも似た“熱意”。そこに本城は彼の魅力を感じていた。

握手を交わし、そしてホクトは頷いた。やれやれという、いかにも面倒くさそうな…………。しかし、決して破る事はないだろう約束。本城はホクトの肩を強く叩き、それからリリアを片腕で抱き寄せて頷く。

「お前達は…………。俺たちの家族だ。だから、いつでも帰つて来い。ダメだつた時は俺を頼れ。面倒ごとに巻き込まれるのは、こつ見えても馴れてるからな」

「生憎、誰かの手を借りて何かをするのは好きじゃないんだよ。俺は、俺の生きる道を俺自身の手で切り開く…………。心配しなくても昴は助けますよ。何せ、妹ですからね。たった一人の」

「それでいい。正し、絶対に護れよ。絶対にだ。大事なものだけは妥協するな。絶対に手放すな。護れ。守り通せ。それが男つてもんだ」

二人の男が見詰め合う。そこには確かな誓いがあつた。何となくホクトはくすぐつたい気持ちを感じる。家族、護るべき者、そして帰る場所……。記憶も無く、行き場も無く、ただ彷徨うだけだった自分。そんな自分を受け入れてくれる場所がある。必要としてくれる人も居る。護らせてくれる人がいる。どんなに幸せか。それ以上を求める必要などないくらい、それが幸せだと感じる。だから。戦えるだろう。どんなものが敵だとしても。彼は、男なのだから。

「ホクト、そろそろ」

「ああ。そんじゃ、北条北斗……行つて来ます」

「ホクト君、いつてらっしやい！ 昴ちゃんをよろしくね！ メルちゃんも……無理しすぎないでね」

「……判つてる。また、会いに来るから。その時は……お茶でも」

「はい」

リリアが本城の腕に自らの腕を絡めながら、ひらひらと手を振る。メリーベルが術式を発動すると魔法陣が起動し、ホクトとメリーベル、そして倒れたタケルの姿が光に包まれていく。その眩い光に手を翳しながら本城とリリアは最後までその姿を見送っていた。

やがて一陣の風と共に彼らの姿は消えてなくなり、二人の姿だけが道場に残った。リリアは寂しげに唇を噛み締め、目尻に涙を浮かべる。本城は目を瞑り、それから二人の家族の安全を願った。

「きつと……帰ってきてくれますよね……?」

「ああ……。あいつはやる奴だよ。根性と気合がある。俺たちの時とは違うさ。きつと悲劇にはならない。ならないさ」

「……………ホクト君……………。昂ちゃん……………。どうか……………どうか、無事で……………」

光の中、二人の願いは届くのだろうか。ホクトは虚無の空間の中、流れに身を任せて漂っていた。光の中に両手を広げ、静かに落ちていく。世界と呼ばれる膨大な記憶、情報……。数え切れないほどの命の螺旋。そして、忘れ去られた太古の記憶の中へと。突き抜ければ、そこには未来が広がっているだろう。残酷で、闇に覆われた、それでも彼が生きるべき世界が。

S a u d a d e (2)

「許さん……………許さんぞお!! エレット少佐の仇討ち……………果たさせてもらうッ!!」

重力の渦が収まった時、ジェミニの両手に収まった二対の魔剣は膨大な力を宿し、紫に発光していた。自分自身を剣の力で圧力で射出し、猛スピードでイスルギへと突っ込んでくる。繰り返される一撃を防ぐだけでも精一杯で、重く堅い盾でさえたかが円月刀を防ぐ事が出来ない。

イスルギの額から汗が迸り、歯を食いしばってシエルシを護る。
。シエルシはイスルギを援護して剣を飛ばすが、ジエミニはそれを奇妙なまでの機動力で回避する。彼の能力は重力　厳密には力場の発生。下方向に向かう力が重力であるならば、彼の能力はそれとは異なる。左右前後あらゆる方向に力をかける事により、ジエミニの身体は重力から“解き放たれる”のである。それを重力操作の能力と呼ぶのならば、正にそれは彼を指し示す言葉だろう。

浮遊するかの如く、ふわりと無軌道に舞い上がってみせる。そして空中から急加速し、負荷を加えた斬撃を繰り出すのだ。彼の単調な性格とは裏腹にその能力まさに変幻自在　。イスルギはその読めない動きに翻弄され、苦戦を強いられていた。槍の動きは重力の鎖で縛られ鈍り、反対にジエミニは加速を続けている。防御が追いつかなくなるのは時間の問題で、ジエミニの放つ一撃が彼を再び吹き飛ばしたのは当然の流れだった。

「シエルシ、下がってください！　この男　やはり強いッ！！」

「これで剣誓隊四番目って……本当なんですか！？」

「剣誓隊四番目の男……というのは、周囲の呼び名だ！　俺は戦闘力だけなら、オデッセイ大将に続くと思っているッ！！」

「なら、“おつむ”の方も鍛えるといい　ッ！！」

イスルギが槍を盾に収め、空いた手に術式を浮かべる。発動した魔術は閃光　目晦ましである。一瞬怯んだジエミニの胴体に槍を突きつけ、零距离からの砲撃　。放たれた一撃は瞬き、槍に押し退けられるようにジエミニは吹き飛んでいく。

「シエルシ、こちらへ！　真正面からやりあうのは不利です！」

「しかし、街に逃げ込んで被害が広がります！　ここで食い止めなくちゃ……っ！」

「奴の狙いは貴方ですッ！！　ここで殺されては元も子もありませんよー！」

「でも　それでも。私は引き下がりがたくない。私は逃げたくない！　だからここであの敵を倒します！」

一見すると話を聞かない我侭な娘、しかしイスルギにはわかる。彼女は伊達や酔狂、甘い考えでそれを口に行っているわけではないのだ。そう、彼女は死をも恐れず、しかし死を避ける為に戦っている。安易な死は最早必要ないのだ。今はただ、彼に　自分を変えたあの男に邂逅する為に。

踏み込む足は前へ　前へ。前を見据えるその凜とした瞳のなんと美しい事か……。誰もが逃げ去ったこの戦いの場の中で、それでも彼女は逃げ去ろうとはしないのだ。一見、愚か。やはりその実愚か。しかし“気持ちのいい”、“後悔しない”、“熱いやり方”である。イスルギはそれが嬉しかった。彼女は確実に前に進んでいるならば　騎士のやるべきことは決まっている。

「……………では、考えましょう。共に戦いましょう。“勝つ方法”を　見出さねばなりません」

「それについてですが、私に考えがあります。やった事はまだないので、どうなるのかは判りませんが……私に賭けて下さい、イスルギ。貴方の命を」

笑う姫が手を差し伸べ、それを騎士は頷いて握り締めた。二人が

そうして前を向くのを瓦礫に突っ込んだジェミニが立ち上がり睨む。零距離での攻撃を受けて無傷というわけには行かず、ダメージを相殺したもののその身体はよろけ、腹からは血が流れていた。口元から垂れる血を拭い、ジェミニは眉を潜める。

「……なんだ、あれは？」

盾を砲撃の状態で構えるイスルギの隣、その手を握り締めるシエルシの姿があった。シエルシはそうしてイスルギを支えるようにして盾に手を触れる。二人の足元には魔法陣が浮かび上がり、シエルシの腕が輝いて術式が発動した。

何かが来る　直感的に感じたジェミニは一気に走り出す。加速と元々の身体能力、掛け合わせればその速さはイスルギの攻撃が放たれるよりも早い　そう踏んでの事である。実際彼の刃は二人に襲いかかろうとした。しかしシエルシが張った封印障壁により攻撃は防がれてしまう。

「イスルギ、上です！！　上を狙って！！」

「判っています。街に被害を出すわけには　！」

魔剣とは、術式により編みこまれている物である。シエルシはそれに触れ、自分の封印魔術の術を組み込んでいく。　槍は白く輝き、その形を変えていく。白い翼を生やした封印の槍。　引き金を引くと同時に放たれるその一撃は一発でジェミニの重力障壁を貫通する。それは術を封じ、破り、相殺する効力を持った攻撃。　封印魔術の特質と魔剣の攻撃力、その両方を兼ね備えていたのだ。

身体に槍が突き刺さり、ジェミニは遙か空に吹き飛んでいく。絶叫と共に遠ざかり、星になったジェミニを見上げ、二人は小さく息を着いた。シエルシは額から零れる汗を拭い、自分の腕を見やった。

「無茶が過ぎますよ、シエルシ……。魔剣の術式に直接干渉するなんて……」

「これは、そう使えるものではないようですね……。少し……疲れました」

「兎に角今の内に移動しましょう。封印魔術の効果が続いている間、彼は動けないはず。追いかけてくる前にこの街を離れなければ被害は広がる一方ですから」

魔力を大幅に消耗し、肩で息をしながら震えるシエルシ。その肩に自らの上着をかけ、イスルギは頷いた。二人はそこから逃げるように走り出す。帝国に逆らう以上、日陰者は当然の事だ。それでもシエルシは走り続ける。北条北斗。消えてしまった彼と、再会するまでは。

「……………。俺は、元の世界に戻ろうとしたわけなんだが……どこだここ？」

ホクトが目を開いた時、寝転がっていたのは不思議な空間だった。白い。果てしなく、白い。白い世界が続いている。広大な、無限に続く世界の中、白い大木が聳え立っている。その根元にホクトは寝転がっていた。

ふと、見上げる視界に影が宿る。そこに見えたのは 巨大な力メラのレンズだった。首から上が機械の女。それが自分を膝枕しているのだと気づいた時、ぎょっとしてホクトは思わず飛び起きてしまった。蒼いドレスに首から上は機械……。カメラのレンズが音

を立てて動き、ホクトを捉えているのが判った。ごくりと息を呑み、後退する。それはどう見ても不気味以外の何物でもなかった。

「な、なんだお前……！？ うおっ！？ ここどこだよっ！！ メリーベルさん！！ ホクト君はここですよーっ！！」

絶叫してみるが、声は只管遠くまで響き渡った。“やまびこ”さえ聞こえてこの空間の巨大さにウンザリする。機械の首の女はすたすたとホクトに歩み寄り、それからその腕をがしりと掴んだ。女ならなんでもいい、がモットーの彼だったが、流石に首から上が機械というのは受け入れがたい。青ざめた表情で、“夢ならいいのに”と思うホクト。機械の首の女はそんなホクトに身体を寄席、合成音声の声で言った。

『……そんなに怖がらないで。せつかくこうして逢えたのに……』

「は……っ？」

しかし、その声には何となく聞き覚えがあった。女は徐に自分の頭を片手で掴み、強引にそれを引きちぎって見せた。首から上が目の前で引きちぎられるスプラッタな景色にホクトは呆然としていたが、やがて首から上が自動的に再生していくのを見て彼の表情はがらりと変わった。

簡潔に言えば、それは戦慄である。首から上が見る見る内に骨格肉……修復していくのである。最終的には髪まで伸びて、すっかり一人の女性の完成形へと到達した。紅い瞳に、紅い髪 美しく艶やかなその肌を自分で触れ、満足そうに小さく笑って見せる。女性の姿となった彼女は そつと、ホクトの頬に手を伸ばす。

「ねえ、久しぶりでしょ……？ やつと逢えたね ヴァン」

その指先が自分の身体に触れるくすぐったい感触をホクトは覚えていた。いや、厳密には彼が ではない。殆ど搾り取られて残りカスしかないような、ヴァン・ノーレッジとしての記憶……それが囁いているのだ。彼女の名前を、彼女の記憶、彼女の温もり、彼女の言葉……。

「……………ミラ……？ ミラ・ヨシノ なのか？」

ククラカンの第二王女、破魔剣ユウガの持ち主。そして在りし日のヴァン・ノーレッジと共に世界を廻り、正そうとした姫……。彼が護れなかった恋人。そして 今は？ 死んだはずの彼女、しかしそれが目の前に居る。悪い夢を見ているかのようにだった。あの北条北斗ともあるう男が、身じろぎ一つ出来ない。美しすぎる紅い瞳に魅了されたかのように視線を反らすことはままならず、甘い香りに思考が麻痺してくる。冷や汗が頬を伝い、その冷たさで漸く我に返った。身を離し、身構えるホクト……。男を彼女は悲しげに見つめていた。

「そう、ミラ・ヨシノ……。ねえ、ヴァン……。せっかく逢えたんだから、もっと話を聞かせてよ。貴方の話が聞きたいの」

「てめえっ！……！ 何者だ！？ ミラの形をしゃがって……ッ！
！ 俺はっ！……！」

「どうしてそんなに怯えているの？」

「……………ッ！！ ガリユウウウウウウッ！！ うおおおお
おおおおおっ！……！」

それは理性的という言葉からはかけ離れた、獣のような突撃だった。ガリユウを構築したホクトは真つ直ぐにミラへと突っ込んでいく。そのミラは手の中で重苦しいチェーンソーのような魔剣を構築し、ガリユウの一撃を受け止める。ホクトが明らかかな敵意を向けるのに対し、ミラはまるで子供のあやすかのような優しい表情だった。

「ミラは死んだ！！ もう居ねえっ！！ テメエはなんだ！？ 何者なんだっ！！」

「せつかく転移に介入して貴方をここに…… “エデンの園” に連れてきてあげたのに……。落ち着いて。私は貴方を傷つけないから」

「これが……落ち着いてられっかよッ！！」

剣と剣をぶつけ合い、ホクトは後ろに跳ぶ。空中に召喚した魔剣を雨霰の如く降り注がせるが、ミラはそれに対して魔剣を掲げ、しなやかに そして美しく、それを振るってみせる。

変形した剣は更に光を帯びて洗礼されていく。まるで蛇のようにしなるその魔剣の刃は荒れ狂い、降り注ぐ剣の雨を叩き落していく。
。 あっさりと攻撃を無力化したミラは着地したホクト目掛けて剣を伸ばし、その足元に突き刺すと自らの身体を一気に引き寄せた。空中で剣を引き戻し、回転しながらそれを放つ。矢のように放たれた刃の切っ先はホクトの手からガリユウを弾き、そして飛び込んできたミラはホクトの腕の中に納まった。

「剣を収めて。暴力は嫌いな……知ってるでしょ？」

「く……っ!？」

「ねえ、どうしてそんなに私を信じられないの……？ 貴方だって

そうして今も生きていますでしょうか？ 私だって生きていたっておかしくはないよ」

「お、俺は……」

「大丈夫。ヴァン……ううん、ホクト。貴方の帰るべき場所は、私なの。貴方は私を求めて……私の影を追いかけてる。だから居場所がないんでしょう？ でもね、私は貴方を受け入れて上げる」

剣を落とし、ミラはホクトの身体を強く優しく抱き閉めた。ホクトの目から戦意が失せ、混乱は更に増していく……。ミラは優しいミラの腕は温かい。記憶が忘れても彼女の事を覚えているのだ。ホクトは戸惑いながら震えていた。目の前に居るものが異質であると感じているのに、完全に拒絶できない恐怖。まるで、呪いでもかけられたかのように……。

「おかえりなさい、ホクト……。ようこそ……“エデンの園”へ。もう一度、やり直しましょう……？ 私たち、ゼダンと共に」

何も言い返せず沈黙するホクト。ミラはそんなホクトの胸に頬を寄せ、嬉しそうに笑っていた。二人の目から涙が零れ、その雫が白い大地に弾けると同時に、ホクトの意識は薄れていくのであった。

S a u d a d e (3)

「さて、実際にミュレイさんをどう救出するか……。結局、戦力はまるで集められないまま慌てて飛び出してきてしまいましたしね」

第五階層エル・ギルス。半分が上界層のプレートにより壊滅し、廃退化した世界の中でもまだ列車は走り続けている。ガタガタと揺れる列車の中、相向かいの席に座ったシエルシとイスルギは夜の草原を眺めていた。

あの日以来、壊れてしまった世界は未だに元には戻せないまま……。シエルシは目を細め、今は亡き故国の事を想う。あの戦いで多くの大切な物が失われてしまった。護りたかった国、故郷、人々、そして家族。殆ど彼女の大事な物は壊れ、そして大事に想う人もまた彼女を護って消えてしまった。

ホクトが居なくなっただ後、重傷を負ったうさを担いでシエルシは歩いた。あの瓦礫の中で過ごした時間は生涯忘れないだろう。歩けども歩けども、死と死と死だけが蔓延した世界……。運良くメリーベルの捜索隊に発見されたから良かったものの、見つからなかったならば今はもうあの死の世界の中に埋もれてしまっていた事だろう。

異形の力……。悪意の象徴。ガリユウという魔剣を持っていた男タケル・ヨシノ。あれがタケル本人ではないという事は判っている。だがそもそもタケルの経歴には不可解な部分が多すぎた。彼はヨシノの血筋ではないし、かといってザルヴァトーレの血筋でもない。どこからとも無く現れ、ヨシノの一族の中に組み込まれていたのだ。

タケルの事を調べれば調べるほど、彼の存在が怪しく思えてくる。実際に彼の悪意が牙を向いた後にそんな事を知ったところで何の意味もないのかもしれない。だが、せめて知っておきたかったのだ。

どんな物にだって理由はあると、そう思いたかった。憎しみや怒り、悪意だけで染め上げられた黒き人の心など、最初から存在はしないのだと……そう信じたかったから。

姉であり国王であったシルヴィアは死んだ。彼女の存在そのものでもある魔剣を奪って、タケルはホクトと共にどこかへ消えてしまった。だからこそ、彼女はタケルに対する注意を怠らなかつた。ホクトが必ず戻ってくるかと信じているからこそ、彼もまた必ず再び目の前に現れるのだと、そう確信していたから。

ふと、窓の向こうの世界に手を伸ばした。くすんだガラスに触れる指先は冷たく、世界の夜の冷たさを伝えるかのよう……。光に映る物はすべて幻、だからこそシエルシはそれを懐かしむ。切ない胸の内……。逢いたかった。何としてももう一度、彼に。

「カントイルから脱出しても、恐らく奴はまだ追ってくるでしょう。いいえ、奴だけではなく……恐らく次々と剣誓隊の刺客の襲撃を受ける事になります。敵にはミレニウムシステムも、探知系の魔剣使いも山ほどいるはずです。逃げ切れるとは思えない」

「……………わかっています。だから、戦って勝ち続けるしかない……そういう事でしょう?」

「これからは些事と思える事全てに目を配ってください。私が貴方を護れるように努力はしますが、それも完璧であるとは言い難い……。出来る限りの用心を」

「今は兎に角、彼女を救出する為に……先手を打ちましょう。このまま逃亡を続けてもいずれば追いつかれ、討たれます。剣誓隊の実力者が出てきたところを見ると、相手も本気ですから」

今までは特に目立った行動など何もしてこなかったが、これから

は違う。あえて危険を冒し、戦わねばならない。もう逃げ回るのはウンザリだったし、それも悪くないと思う。こちらから攻めるのだ。彼ならきつとそうする……そう心の中でホクトの姿を思い描いた。

「まずはローテイスに向かい、メリーベルと合流しましょう。彼女もミュレイを救出する為に策を練っているでしょうし……。シエルシ、少しの間ですが休んでおいた方がいい。私が見張っていますから」

「え……？ その、大丈夫ですか？」

「列車の中は安全……とは言い切れませんが、ざっと車内の安全は確認してきました。この車両には他に乗客も居ませんし、見張っていますから休んでください」

「でも、イスルギは……？ 貴方だって疲れているんでしょう？」

「ローテイスについたらちゃんと休みます。さあ、心配なさらずに」

優しく頷くイスルギの言葉に甘え、シエルシはそつと目を閉じた。するとやはり疲れていたのか、驚くほど早くすつと眠りにつく事が出来た。小さく寝息を立てるシエルシへと目を向け、イスルギは微笑む。その身体に自らの上着をかけ、それから姫の前髪に手を伸ばした。幼い頃から面倒を見てきた姫……。それが気づけばこんなにも強く、立派になっていた。

「複雑な心境……というわけか」

自虐的に笑い、肩を竦める。一から十まで面倒を見ずとも良かった。自分で物を決め、自分で好きな男を作った。理想を掲げ、悲

しみを乗り越え、恋というものに向き合おうとしている……。かつて人形のように笑う事の無かった姫と共にあった彼としてはその変化は嬉しく、しかし少々寂しくもある。まるで大切な妹が、嫁にでも行ってしまうような……。そんな心境に近いのだろうか。尤も、本当の妹であるミュレイが嫁に行こうがこんな気持ちにはならないのだろうか。

「今は、お休みなさい……。その気高き志が、壊れてしまわないように」

かつて、彼女の母は シャナク・ルナリア・ザルヴァトーレは言った。娘を頼むと……。イスルギはその言葉を今でも覚えている。本当の妹を ミュレイを護る事が出来ないから、傍に居る事が出来ないから、その代替品としてシエルシを護っていた……。そういう一面もあつた。確かにそうだ。だが今は、自分の意思で……。彼女を見て思うのだ。何事も、素直で綺麗な心こそ真実なのだ。正しさとは、常に潔癖さの中に産み落とされる。少なくとも彼はそう、信じているから。

列車は二人の思いを乗せて夜の闇を進んでいく。その二人が向かう先、ローティスの街の中を歩くメリーベルの姿があつた。共に転移してきたはずのホクトとタケル……。その二人が何故か一緒に現れなかった事が、彼女の思考を麻痺させていた。焦りもあり、戸惑いもある。もう時間が無い。そう思えば思うほど、何かに急かされるように心が焦るのだ。

「……まだまだ甘いな、私も」

メリーベルは目を瞑り、そして護りたい物を思い描いた。そもそも、この世界の住人ではない彼女が何の為にここに居るのか……。全てはこの世界。ロクエンティアと呼ばれる世界に起因する。こ

の世界という言葉で表現されるすべて、そこにあるロジック、それらを知るメリーベルだからこそ、焦り、人一倍急いでいるのだ。

全てを仲間に話そうと思っていた。少なくとも、この運命に巻き込んでしまった昴とホクト、二人には全てを知る権利があった。それを話さずこの世界の動向を見守ってきたのは、ある意味において彼らに嘘をつき続けてきた事に他ならない。偽るつもりはなかった。だがそれはつもりがあるだとかないだとか、そういう問題ではない。

「……リリアもキツイ事言ってくれるよ。でも……だからこそ、かな。あの子の真っ直ぐな目……綺麗な眼差し……。つけなくなるよ、嘘が……」

壊れかけた世界を見上げ、メリーベルは静かに目を細めた。その様子はどこかすつきりしたような、踏ん切りがついたようなものだった。時は止まらずに動き続けているのだ。どんなに過去を思い描いても……そう。想いは決して、留まる事などないのだから。

S a u d d a d e (3)

「シエルシ殿！ イスルギ殿っ！！ こっちでござるよっ！！」

「ウサク！ 久しぶりです」

「いやあ、ご無事で何より。拙者、メリーベル殿より出迎えを頼まれたでござるよ」

ローティスに列車が到着し、ホームに下りた所でウサクが両手を振っているのが見えシエルシは彼へと駆け寄った。遅れてイスルギが周囲を警戒しながら続き、紅い外套を纏ったウサクと合流する。とりあえず話は歩きながらという事で、三人は駅を出てローティスの街を歩き出した。

半年が経過した今でもローティスの街の機能は著しく低下したままで、そもそも収入源であった上位界層の観光客がぱったりと訪れなくなった事により街全体の活力が低下……。今となっては修復する事もままならず、エル・ギルスに存在するほかの街に漏れずさんだ状況にある。プリミドル東プレートの落下により、エル・ギルスは甚大な被害を被った。直接被害を受けなかったプレートも資源流通の停止や帝国との戦争により、全体的に悲惨な状況にあった。明日の生活さえもままならないような世界がエル・ギルスでは当然となり、だからといってプリミドルは違うのかといえば似たような物である。世界全体の衰退……。戦争と繰り返される魔物の襲撃、人々はそれらに抗う力も持たずただ死を恐れる日々が続いている。

「街は相変わらず酷い様子でござるよ……。ローティスはまだいい方でござる。このたった半年の間にいくつの村や集落が無くなった事か……。拙者たちも何とか手を打とうとはしているのでござるが、どうしたって人手が足りないでござるよ」

「すみません、皆が忙しい時に私は自分の私利私欲で動いてしまつて……」

「あ、いや、そういう意味じゃないのでござるよ!? シエルシ殿は、ホクト殿を探していたのでござるう? それは悪い事ではないでござるよ。拙者もホクト殿の行方は気になっているのでござる」

「全く……。シエルシを放っておいてあの馬鹿はどこで何をしているのやら。実に無責任だ」

「イスルギ、別に私は彼と特に深い間柄ではないんですよ……？
彼が私の事を放っておいたって、別に彼は悪くありませんよ」

少し拗ねた様子で諭すようにそう語るシエルシ。それを左右から挟み込むように歩くイスルギとウサクはじーっと見つめていた。何故だか判らないが恥ずかしくなり、きよるきよるしながら顔を赤らめる。

「わ、私何か変な事を言いましたか？」

「いえ、別に……」

「シエルシ殿は一途な乙女でござるなあ、ウンウン」

「はい……っ？」

「なんでもないのでござるよ。それよりそろそろバテンカイトスに着くでござる。実は拙者もこっちに戻ってきたのはついさっきでござるが、何やらメリーベル殿がシエルシ殿に話があるとか」

三人は久しぶりに訪れたバテンカイトスの扉を潜り、半年前の戦鬪から何とか修復されたエントランスに辿り着いた。そうして螺旋階段を上がり、メリーベルの部屋へと向かう。久しぶりで少しだけ緊張したものの、シエルシは扉をノックして一声かけてからそれを開け放った。

メリーベルは自分の机の上に腰掛け、魔道書を読みふけていた。部屋に入ってきたシエルシたちを見るなり本を閉じ、机の上から降

りて微笑みを浮かべる。久々の再会に駆け寄るシエルシ　その肩を叩き、笑うメリーベルの様子は以前より少しだけ彼らと　こちら側の世界と打ち解けたように見える。

「お久しぶりです、メリーベル！」

「無事に逃げてるようで何より……。一人で旅をするなんて言い出した時はどうなるかと思っただけど、その様子じゃちゃんと色々乗り越えたみたいね」

「……………お互い、色々ありましたから。ホクトは見つかりませんでした。色々他の事が判りました。イスルギを迎えに寄こしてくれたのもメリーベルですよ。お陰で命拾いしました。一人だったらここには戻れませんでしたから」

それからシエルシは色々とここに来るまでにあった事をメリーベルに話し始めた。大雑把にこれまでどこを旅していたのか等をシエルシが話そうとした時、それを遮るようにメリーベルは口火を切る。

「シエルシ、その……ホクトの事で、話があるんだけど」

その真剣な口調に気圧され、思わず黙り込んでしまう。冷や汗を流すシエルシ……。メリーベルの様子から、それが朗報であるとはどうしても思えなかった。最悪の可能性を考慮し、思わず身構える。そんなシエルシの心境を察してか、メリーベルの口調はたどたどしかった。

「その……ホクトは異世界に飛ばされた……かもしれないって話は、一応したよね？　こっちの世界にまだ居るかもしれない、とも言った」

「はい……」

「でも、ホクトはこことは違う世界に……昂が居た世界に居たの。そして連れ戻そうとしたんだけど……」

「けど……？」

気まずい表情のメリーベル。実際彼女にもどう説明すればいいのかわからなかった。世界間移動中の、外部からの干渉。そうとしか考えられない、しかし今のメリーベルの術と知識では太刀打ちの出来ない現象……。彼女は異世界への移動を容易にはしたものの、そのすべてのロジックを解き明かしたわけではないのだ。或いは完璧だと思っていた異世界移動の術の理論がどこか破綻していたのか……。どちらにせよ、メリーベルにはホクトが今どうなったのか、それが全く判らなかった。

その沈黙はシエルシの悪い想像を掻き立てる。胸に手を当て、増えるシエルシ……。その背後ではウサクもイスルギも気まずそうな顔をしている。メリーベルもどう説明すればいいのか判らず思案すると、結果的に場にはただ沈黙だけが残った。その時である。背後で扉が開き、ひょっこりとホクトが顔を出したのだ。誰もが同時に振り返り、目を真ん丸くしていた。メリーベルの手からぼろりと魔道書が零れ落ち、シエルシが目を白黒させながら口をぱくぱくと開け閉めする。

「……………ど、どうした？ 何かあったのか？」

そんな間抜けな言葉と共に焦るホクト。誰かが声を上げるよりも早く、走り出したのはシエルシだった。ホクト目掛けて突っ込み、そして思い切りその身体に抱きついた。慌てて抱き留めるホクトだ

「だが、シエルシの華奢な身体は震え、泣いているのが直ぐにわかった。」

「何かあったのか、じゃないですよ……っ！ 貴方……！ 貴方、今までどこで何をしてたんですか!？」

「……あ、ああ。悪い……？」

「悪いじゃなくて……そうじゃなくて……っ！ もっと他に言う事はないですか……ばか……っ」

ぎゅうつとしがみ付いたまま、シエルシは顔も見せずにそう呟いた。困ったように頭を掻くホクトだったが、周囲三人は何だか呆れたような様子で二人を見つめていた。シエルシは両目から涙を流しながらも、幸せそうな表情で小さく微笑んでいる。ホクトに触れる事が出来る。またこうして巡り逢う事が出来た。それが嬉しくてたまらなかった。だから、見逃してしまったのかもしれない。きつと、彼の顔をいつも見ていた彼女なら気づかないはずはなかったのだ。そのホクトの表情の中にあつた、小さな“異変”に。

「よかった……無事で……。貴方が……。生きていてくれて。おかえりなさい、ホクト……。おかえりなさい……」

「……………シエルシ」

苦笑するホクト、その彼から身を離し、シエルシはまだ手の中に残るホクトの温もりを握り締めるようにそつと指を閉じた。傍目から見れば彼女の気持ちは明らかだったが、ホクトはどうにも気づいていないのかそれとも気づいていて気づかないフリをしているのか……そしてシエルシもまたそれでいいと思っているのか。何とも言

えない空気が流れた。そのシエルシから放たれる甘ったるいムードを壊すようにメリーベルが何度か手を叩き音を鳴らす。そう、話はまだまるで終わっていない。

「ホクト、今までどうしてたの？」

「どうもこうも、その辺ブラブラしてたぜ」

「……………本当に？ 本当にそれだけ？ タケルはどうなったのかわからない？」

「何、あいつどっか行っちゃったのか……………！？ せつかくとっ捕まえたってのに、また厄介だな……………」

腕を組み、唸るホクト。その様子から嘘を感じることは出来なかった。やはり、転移魔法の異常か……………メリーベルがそう自分を強引に納得させようとしたその時だった。まるで思い出したかのように、当たり前のように。シエルシは小首をかしげて言った。

「……………ホクト？ どうかしたんですか？」

「ん？ 何がだ？」

「あ、いえ……………。何だか、凄く苛立っているというか……………慌てているように見えたので」

その一言に、一瞬ホクトの視線が鋭くなる。それこそ見られたシエルシがびくりと肩をすくませるくらいに。しかしそれは一瞬、ほんの僅かな刹那の事であり、直ぐにホクトは普段通りの飄々とした様子に戻ってしまう。

「何言つてんだ？ 俺はいつでももおおらかな心で人と接する紳士だぜ？ いつもとかわんねーだろ？」

ぐりぐりと、シエルシの頭を撫でるホクト。その手の優しさはシエルシには懐かしく、感覚を鈍らせてしまふ。もう先ほど感じた違和感のようなものは消えてしまい、シエルシはその言葉に納得してしまった。

「……………。とりあえず、ホクトが戻ってきたのは大きいよ。これでミュレイ救出作戦を進める事が出来る」

「なんだ、あいつ捕まってるのか…………？」

「それどころか問題は山積みもいところ…………。とりあえず今日はみんな疲れてるだろうし、少し休んで。九時間後に再集合って事で」

「では、拙者たちは部屋で少し休ませてもらうのでござるよ」

メリーベルの言葉でそろそろと部屋を出て行く一同。彼らの姿が完全に部屋からなくなつてメリーベルが一人で煙草を取り出した時ふと、思い返す。振り返ってみる。ホクトの言動…………微かな違和感。

「あいつ…………記憶喪失…………治つたの？」

部屋を出たシエルシはホクトに駆け寄り、背後からシャツの裾をつまんでちよいちよいと引っ張つた。振り返つたホクトは煙草を啜えながら首をかしげる。

「あの、ホクト……？　今までどこで何をしてたんですか？」

「あ……まあ、話すと長くなるな……。まあ後で話すよ。何へラへラしてんだ？」

「……………嬉しいんですよ、貴方に会えて……………えへっ！　きつと戻ってくるって言ってましたもんね……。私、信じていました」

「……………。そうか。“そうだった”な……………」

「え？」

どこか上の空なホクト。ぽりぽりと頭を掻きながら、申し訳なさそうに片目を瞑りつつ……………ホクトはシエルシの肩を叩いた。

「シエルシ……………だよな？」

「……………はい？」

「あゝ、いや、名前は覚えてるんだよ。名前は……………。ただ、なんつか……………色々忘れてるっていうか……………その、なんだ？　記憶喪失っていうか……………だな」

「え……………？」

途端に、シエルシの顔色が青ざめた。そのショックの大きさはホクトにも伝わったのか、ホクトはだらだらと冷や汗を流しながら視線を反らした。シエルシは暫く呆然とした後、その場にくぐりと膝を付いた。ホクトはまるで以前と変わらないようで、まるで冗談を言っているように見える。しかし　そうではないのだろう。いく

らホクトでも、言う冗談と言わない冗談がある。

自分はこんなにもホクトの事を探していたのに、そのホクトは自分の事をすっかり忘れてしまっていた……。それを冷静に頭の中で考える。でも、戻ってきたのだからそれで良いではないか。何度も言い聞かせた。そもそもさつき自分で言ったばかりだ。ホクトとは、そんなに深い関係などではなかった。

そうだ、ただホクトは自分の命の恩人で、憧れの人で……。何に憧れるといえば生き方やその潔さ、真っ直ぐな目……。言動には品格が感じられる、どうにもふざけた調子で、女好きで煙草好きで酒好きで、だらしが無いダメ男の顕現のような男……。思い返せば思い返すほど、ホクトとの思い出が胸の内から溢れてくる。再会出来ただけで、それで良かったと思っていたのに 何故だろうか。涙が止まらず、絨毯の上に零れて滲んだ。

「お、おい……。悪かったって……。泣くなよ……」

「うう……。うう……」

涙目で唸り、顔を上げるシエルシ。じっとホクトに向ける視線……子犬のような様子にホクトは流石に焦った。良心が痛むのは言うまでもなく、その場に片膝を付いてシエルシの頭を撫でた。

「本当に……。全然、覚えてないんですか……?」

「あ、ああ……。まあそのうちひょっこり思い出す可能性もあるけどな」

「忘れたままの可能性もあるんですか?」

「ないと言い切れない……。っておい、だから泣くなよ!!」

「私……ずっとあなたの事、探して……っ！！　なのに、貴方は……貴方って人は……！」

ホクトの事だけが支えだったのだ。絶望の中にいた彼女が今日まで胸を張ってこられたのはホクトに会うという目的の為だった。だが、その全てを否定されたようなこの瞬間、今までの苦労や悲しみが一気に襲ってきたのだ。涙が止まらず、絶望的な気持ちを噛み締めるシエルシ……。項垂れ、歯を食いしばって涙を止め様と試みる。しかしそれは難しい事だった。当然である。それほどまでに、ホクトは　彼女の中で、大きな存在になっていたのだから。

「……………シエルシ」

「……………いいんです。私たちを、護るために……そうだったんですよ。だから貴方は悪くない……貴方は、悪くないけど……。でも私、貴方を待つて居たかった。貴方の居場所に……帰ってくる場所になってあげたかった……。いつも貴方は寂しそうで、ぼろぼろで……。だから護りたいって、そう心から思ったんです……」

立ち上がり、シエルシは涙を拭いた。それから無理に笑ってみせる。その笑顔にホクトは目を細める。シエルシはホクトの手を握り締め、それからにつこりと　優しく微笑んで見せた。

「　　貴方の事が大好きです……ホクト。例え貴方の記憶がなくなっても、私……。別に、愛して貰えなくても良いんです。覚えていて貰えなくても良い。でも……私が貴方を好きだって事だけ……知っておいて下さい」

それが、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレの生まれてはじめ

ての愛の告白だった。勢いに任せてしまった感は否めない。そして状況に流されているのも確かだ。若さ故に未熟、そしてその恋心も真実の愛かと言えば当然その答えは判らない。それでも今のシエルシの素直な、純粹な、真つ直ぐな気持ちだった。それから寂しげに目をそらし、シエルシはとぼとぼと歩き出す。やがてその歩みは走りに変わり、シエルシは逃げるようにどこかへ走り去ってしまった。少女の後姿を見送り、それからホクトは自分の手をじっと見つめた。シエルシが握り締めた手……。優しさや、愛情や、“与える”気持ちや伝わる手……。 “奪う”ことしか出来ない自分の手に触れた確かな誰かの気持ち。思い出す事は出来ない日々……。やりきれない気持ちだった。だから煙草に火をつける。煙を吐き出す。じくりと、胸に刻まれた傷跡から血が流れ出すかのように心が痛む……。だが今の彼に出来る事は何もない。そう、何もないのだ。

「……………大好き、か……………」

ぼんやりとそう呟くホクト。その気持ちを受け入れる事は、きつとないのだろうと思う。けれども彼女が言ったどこまでも優しい、ホクトの自分勝手を受け入れるような言葉……。それだけはどうしても耳から離れる気配もなかった。

Saudade (3) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場アンケートランキング特別編く

はづはづ！ だけで会話が成立すると思っ

うさ子「はづっ！ というわけで、第二位はうさだったのーっ！！
しょんぼり……………」

シエルシ「えッ！？ ど、どうしてしょんぼりなんですか！？」

昴「確か、一位だったらいっぱいご飯がもらえる約束だったからね」

うさ子「うさは……………うさは、ご飯もらえないのです……………。しょんぼりなの……………」

シエルシ「えーと……………。うさ子への投票率は全体の15%でした。
やっぱり票が割れている結果ですね」

昴「一位までは結構差があるけどね」

【コメント抜粋／キャラコメント】

カワユス

うさ子「はづっーっ！… ありがとつなのーっ！」

口調がいい

うさ子「なのなのっ！」

はづっ！

うさ子「はづはづっ！」

うさ子かわいいようさ子

うさ子「はづづーっ！」

「一番ヒロインぽいし、暗くなりがちなストーリーで彼女の存在は貴重。」

うさ子「うさはねえ、皆が幸せならヒロインじゃなくてもいいの〜」

ぬけてる感じが良い

うさ子「はづっ？」

シエルシ「これ、いいんですか　？」

昴「さ、さあ……」

シエルシ「というわけで、ここから先はうさ子の番外編です」

うさ子「なのーっ！……！」

遊樂都市ローティス。帝国婚姻の儀、そしてハロルドの皇帝就任百周年記念式典の直前……。にぎわうローティスの街の中、いかがわしいお店が連なるストリートの一角にそのお店はあった。ピンクのネオンがあしらわれた看板の下、色っぽい服装の女の子

たちが客引きをしている入り口……の反対側に存在する裏口から入ったスタッフルーム。そこに一人の大男が座っていた。男はフォーマルな格好に身を包んでおり、片手には履歴書を持っている。

「何々……？ えーと……？ 過去の経歴……名前が“うさ子”って事しか書いてないけど……」

男が顔を上げる。そこには目をきらきらさせ、耳をパタパタさせるうさ子の姿があった。うさ子は男に顔を寄せながら目を輝かせ続けている。耳パタパタ。男はスキンヘッドの頭を指先で掻いて冷や汗を流した。

彼はこの店のオーナー、通称“マダム”である。サーペントヴァイトのボスであるブラッドとは親友であり、まあそれらの点から推測するのは容易なのだが彼もまたブラッド同様“オネエ”である。平たく言えばオカマだ。

そんなオカマの彼が営業しているのは、若い女の子で男性を接客して楽しませ、金を巻き上げる所謂サービス業である。先日ブラッドから何とかこの子を働かせて上げてほしいと頼まれ、今日は面接の日であった。やって来たのは実に可愛らしい、見た目だけならばなんの問題も無い美少女だったのだが……。

「うさはねえ、うさ子なのっ！ うさはねえ、記憶喪失なのっ。でもね、ホクト君がうさ子って名前をくれたのっ！ だからね、うさはうさ子なんですっ」

「ホクト君……？ まあそれはいいけど、貴方も何だか色々大変なのねえ……。面接に来るのに既にコスプレしてるっていう根性もすごいわ。この耳は作り物？」

「っ、つかんじゃらめえーっ！ それはうさのお耳なのーっ！」

「そ、そう……？ まあ、兎に角実際に働いてみればわかるでしょう。貴方、こういうお仕事を経験は？」

「まったくくないのー」

「そう、じゃあこれだけは覚えておいて。貴方の仕事はお客様を楽しませる事、幸せにする事よ。うちのお店に来るさえない男たちを幸せな気分らせて金巻き上げるのよ」

「……………？ よくわかんないけど、みんなが幸せになるの？」

「まあだいたいそんなかんじね」

「はうっーっ　うさはね、うさはねっ！　みんながねえ、幸せになつてくれたらうれしいのーっ！！　はうはうっー！！」

立ち上がり、両手を広げて耳をパタパタさせるうさ子。瞳の中で星が輝き、マダムは苦笑と共にうさ子を眺めていた。立ち上がったマダムはうさ子の肩を叩き、それから親指を立てて白い歯で笑ってみせる。

「それじゃあ早速今日からお仕事してもらつわよ。言っておくけど、ウチは厳しいからね？　覚悟しておく事！」

「大丈夫なのっー！！　うさはねえ………………。ホクト君より、こわいものはないの…………。がくぶる、がくぶる…………っ」

急にしょんぼりした様子で青ざめ、耳をぺたんこにしてぶるぶる震えるうさ子……。そんなうさ子の肩を叩き、マダムは笑う。理由

や事情が複雑な人間などこの町には掃いて捨てるほど居る。あえて彼女の事情を詳しく訊く事はあるまい。大事なのは仕事がちやんと出来るかどうか……それだけなのだから。

うさぎのみたゆめ

「はづううづうう……っ！ ホクト君、ただいまなのー……」

「……………おかえり。っーか……………待て、なんで俺の部屋に帰ってくるんだお前は？」

バテンカイトスの一室、ベッドに座って本を読んでいたホクトの所にふらふらとうさ子が寄ってくる。ぱったりとベッドの上に倒れこむと、鼻をすびすびさせながら目をしょぼしょぼさせる。ホクトはウトウトしているうさ子の耳を掴み上げ、眉を潜めた。

「あーっ！！ 耳はらめえーっ！！」

「おい、だからなんでお前は一々俺の部屋に来るんだ？」

「……………？ ちょっとホクト君が何ゆってるのかうさわかんないの……………」

「えー？ いやだから、お前の部屋は別にあるだろ……………？ 狭いガ
ルガンチュアじゃねえんだから、お前はお前の部屋に居ればいいだ
ろが」

うさ子はベッドの上をころりころりと転がった後、ホクトの膝元にくっついてにへら〜と笑った。すりすりと頬を寄せるうさ子…
…なんだかもう何も言う気がなくなり、ホクトは本に視線を落としました。

「うさはねえ……。うさは、ホクト君と同じ部屋なの……。はづ…
…」

「狭いだけじゃねえか……。お前すぐ俺をベッドから蹴落とすし、かけ布団もってくし……」

「すりすり……。ホクト君……ねむいの〜……」

「寝ろ」

「寝るの〜……。おやすみ……むにゃむにゃ……」

ベッドの上、うつ伏せになって涎をたらしながら眠るうさ子。ホクトは溜息を漏らし、その身体を仰向けにひっくり返してから布団をそっとかけるのであった。片手で本を閉じたホクトはそれで肩を叩きながら立ち上がり、酒瓶を枕元から拾ってそれを呷りながら部屋を出て行った。

残されたうさ子はすやすやと眠り続ける。ころりころりとベッドの上を転がりながら夢見る事……。うさ子がバイトを開始してから数日、こここのころうさ子はバイトから戻るとくたびれて直ぐに眠ってしまった。

「それでうさ子、ボスにどんな仕事紹介されたの？」

というのはホットパンツのポケットに指を突っ込んだアクティの言葉であった。寝て起きて、うさ子はぼさぼさの髪をそのままに口をむにやむにやさせながら着替えていた。アクティはそんなうさ子の髪型の乱れを直しながら冷や汗を流す。こんな自分の事も口々に出来ないようなうさ子に出来る仕事などあるのだろうか……。そう彼女が疑問に思つのも無理はない。

「ちゃんと働いてる？ いじめられてない？」

「うん、大丈夫なの……。みんな、いいひとばかりなの」

「ならいいんだけど……。あんまり無理しないでね」

「アクティちゃん、ありがとうなの。うさはねえ、いつてくるの
ーっ」

小さなアクティの身体をひしと抱きしめ、うさ子は部屋を飛び出していった。そんなうさ子の背中を心配そうに見送るアクティ……。彼女はうさ子が何故バイトを始めたのかを知っていた。その理由を最初にうさ子が口にしたのがアクティだったのである。ナイショだからと口止めされているもの……。うさ子の現状が不安になってしまつのであった。

うさ子のバイト先　そこでうさ子は露出の多いメイド服に着替えていた。ばたばたと慌しい店内……。そう、そこは所謂メイド喫茶であった。うさ子と同年代の女性があれこれ接客を行う中、例に漏れずうさ子も額に汗して働いていた。

彼女の働きぶりは真面目そのもので、基本的にうさ子は間抜けではあるが人の言う事を素直によく聞く人間であるというのが良く判る。マダムことオーナーはそんなうさ子が懸命に働く姿を後ろから見つめ、一人で腕を組んで頷いている。

「いやあ、うさ子ちゃんはいつも一生懸命でかわいいね〜!」

「はうづ、そんなことないの〜……。でも、ありがとうなの〜っ」

「うさ子ちゃん、毎日一日中居るけど大丈夫なの？ ちゃんと休んでるの？」

「うさはねえ、元気だけが取り得なの〜っ！ だからね……。むにやむにや」

客との会話の最中だというのに突然うつらうつらし始めるうさ子。まるで充電の切れ掛かったオモチャのようである。客はそんなうさ子が倒れそうになるのを慌てて支える。

「うさはねえ……。いっぱい働いて、お金を貯めたいの〜」

「へえ？ なんでまたお金が？」

「ホクト君にね、プレゼントを買ってあげるのっ!! あ、でもそれはナイショだから、秘密にしてほしいの……。っ」

目をキラキラさせ、トレイをぶんぶん振り回しながらうさ子は語る。その様子に周囲から笑いが起き、何故だか理解出来ない本人だけが小首をかしげていた。

「いいなあ、うさ子ちゃんの彼氏は……。幸せ者だよ」

「うづ？ 違うの、ホクト君は彼氏なんかじゃないの」

「じゃあ、お兄さんとか？」

「……………？ よくわかんないのー。でも、ホクト君はホクト君なのっ！ はうはうっ」

うさ子の生活はそんなこんなで二週間続いた。部屋に戻っては倒れて眠り、寝ている時間以外は殆ど通して働き続けた。結果、彼女は客からのチップも含め短期間にしては多くの金を得る事に成功したのであった。マダムから給料袋を受け取ったうさ子はぺこぺこ頭を下げ、ホクトの元へと向かって行く。

そうしてうさ子はホクトにライターを買ってあげる事になり、一緒にローティスの街を歩いた。その時はただ、ホクトに何かがしてあげたいと思っただけだった。ホクトは記憶喪失のうさ子にとって同じ境遇の仲間……そして同じ部屋で一緒に暮らす住人だった。だから彼に対してうさ子が懐いているのは当然の事であり、うさ子自身もそれに疑問を抱く事はなかった。

部屋に戻った二人はその後、あれこれと下らない話をした。尤もそれは会話というよりはうさ子が一方的に話し掛け、ホクトが相槌を打つだけであったが。本を片手に頷くホクトの横顔……それをじっと見つめていると、うさ子は何だかとても幸せな気持ちになった。ごろごろと転がって、ホクトの膝の上に頭を乗せる。頬を寄せながら、そのしなやかな両腕をホクトの足に絡め、満足げにゆるゆるとした笑顔を浮かべるのであった。

「ねえねえ、ホクト君ホクト君？」

「んー……………？」

「彼氏ってなに？」

「……………唐突だな」

肩をすくめ、それからホクトは少し考える。それから空いている片手でうさ子の額を撫で、髪を梳く。きらきらと透き通るようなうさ子の瞳……。ホクトはその中に自分の姿を捉え、それから目を瞑った。

「そういうのはお前にはまだ早い！」

「えーっ！？ 気になるのーっ！！」

「まあ、いつか自分でわかる時が来るさ」

「そうなの？ じゃあ待ってるの……。はっはっ……っ」

足元で丸くなるうさ子。ホクトはまるでペットか何かを飼っているかのような気分に陥っていた。実際二人の関係はそれに限り無く近い物だったのだが……。

「うさはね、ホクト君と一緒に居られて幸せなの。ホクト君はあったかくて、なんだかほっとするの」

「ホクト君だけにほっとするんだな」

「ちょっと意味わかんないの……」

「まあ……良く頑張ったな、うさ子。金を稼ぐ大変さも、これよくわかったら」

「うん、わかったの！ もうねえ、うさはいいうさになったのです

っ

耳をパタパタさせるうさ子の顔を見下ろし、ホクトは優しく微笑む。うさ子はそんなホクトに満面の笑顔を向けた。穏やかで、緩やかで、暖かくて長い時間……。それがずっと、ずっと続くと思っていた。そう、信じていたのに。

「ホクト君……どうして……？ どうして、うさの事叩くの……？
うさが……うさが、悪いうさだから……！？」

「どうして……ミラを殺した！？ 答えるッ！！！！」

大切な、とても大切な人に剣を向けられて漸く気づく事もある。
風の吹き抜ける空飛ぶ居城の上、うさ子は黒き魔剣使いと対峙していた。

「ホクト君、怖い……。怖い、怖い……。どうして、うさの
事いじめるの……？ ごめんなさい、ごめんなさい……っ」

「謝って……それで済むのか……？ 殺し殺されて……それでも憎
しみは消えないのに……」

「うさは……うさはね、ホクト君の足を引っ張ってばかりのね、
悪いうさだったの……。でもね、これから……これからはいいうさ
になって……ホクト君と、一緒に……」

ホクトと共に過ごした記憶。本来ならば決して相容れない、
敵土士の二人が傍に居られた時間。うさ子がホクトの後をついてま

わり、ホクトはそんなうさ子の手を引いていた。ぎゅっと、その手を握り締めてうさ子は感じていたのだ。確かな幸せ、そして人間が人間に感じる、愛にも似た感情を。

沢山の人と触れ合い、そして感じたのだ。知ったのだ。うさ子はもう、人形ではなくなっていた。仮にその存在がどんなものであったとしても、紡いだ人との絆は本物である。当たり前だと思っていたその中で、胸が張り裂けそうなくらいに悲しいこの今で、ただ目の前の人の為に感じる事。

胸を刺し貫く剣の痛みを確かめながら、うさ子は目の前の人へと微笑みかけていた。両手を伸ばしていた。今更になつて気づく。それは、うさぎが見た淡い夢だったのかもしれない。夜が明ければ消えてしまうような、儂い空想だったのかもしれない。それでも思い描いた事は……この気持ちは、きっと消える事はないから。

「ごめんね、ホクト君……。うさは……。ミラちゃんの代わりにはなれなかったの。」

かつて、あの雨の降る荒野でうさぎは思ったのだ。愛する人の亡骸を抱きしめながら俯く彼の姿を見て……。どうか、この人を笑顔にしてほしいと。この人を護ってあげたいと。夢見て、願って、そしてそれは一時だけでも叶ったのだ。

倒れるうさ子の視界が暗くなつていく。その中で、しかし恐怖を感じる事は無かった。脳裏に描く、ホクトの膝の上で見た彼の姿……。笑顔の二人が指を絡める、そんな幸せな　愚かな、小さな、彼女が見た夢だから。

ロマンス(1)

「不満そうな顔をしているわね……グリード」

白い、果てしなく白い空間。全ての階層とは切り離された独自エリアに展開しているその場所の名前は通称“エデンの園”……。時間も空間も意味を持たないその場所で、時の止まった噴水の傍に腰掛けるタケルの姿があった。傍らには紅い髪を揺らしながら微笑むミラ・ヨシノの姿……。タケルは舌打ちし、それから自分の胸に手を当てながら立ち上がった。

「俺の肉体はタケル・ヨシノの物だ……。だが、その中身はこの俺。ゼダンの一人であるはずの俺が、どうしてたかが一般人如きに敗北する……。!? 納得出来るわけがねえだろ、そんなの!」

「本城夏流の事?」

「ああ、確かそんな名前だった。あいつは何者なんだ? 六英雄にあんなやつは居なかったはずだが」

「彼は……。まあ、私たちには基本的に関係ないわ。でも、全く無関係というわけでもないのかも。彼もまた、アニメの導が異世界から召喚しようとした人物だから」

「……………異世界から召喚? あいつらをか?」

その言葉を聞いてタケルは腕を組んで思索する。ミラは全ての事象を観測した上で、本城夫妻の事を推測している。つまり、彼らが

……昴とホクトが本城の家にやってきた事や、彼らの力の意味……。冷静に考えてみればわかる。全ての“間違い”は単純だったのだ。

「今現在この世界にアニメの導が召喚してしまった救世主、北条北斗と北条昴……。二人の召喚がもしも間違いだっただとしたら？」

「は？」

「つまり、本来この世界に召喚したいと思うほど強力な力を持っている英雄がホクトと昴ではなくて……。彼らと所縁のあるあの場所に住んでいたあの夫婦だとしたら？」

異世界を侵略するのはこの世界 “アニメ” の意思である。それが拡大しないように六英雄はアニメを監視し、必要とあればアニメを御するのだ。その六英雄たちは長い長い、気の遠くなるほど長い年月をこのエデンの園で過ごしてきた。しかし六人全員が“監視者”として機能しているわけではない。

中にはゼダンを離脱したりしてかけてしまったアニメを御する力、それを補う為に必要だったのが新しい六英雄の代理人の召喚である。“導”はそれを自動的に実行するシステムとして組み込まれており、比較的近辺に存在する次元から六英雄に相応しい人間を召喚する能力を持っている……。しかし、異世界から召喚されたのは北条昴というまるで役に立たない救世主。しかも出現場所は何故かククラカン。そしてもう一人は。

「本来ならばゼダン側で管理出来なければおかしい救世主の存在が流れている時点でイレギュラー召喚なの言うまでもないわよね。きつと導が欲しがっていたのはあの二人じゃなくて、本城夫妻だったのよ」

「……………。導が欲しがるほどの人材となれば、俺たちと対等か……。しかしイレギュラー召喚ってことはよ」

「ええ。誰かが 第三者が私たちゼダンのシステムに干渉してるのよ。まあ、大体そのあたりもつけてはいるけど」

口元に小さく笑みを浮かべるミラ。その笑顔をタケルは寒々しい気持ちで見つめていた。ミラは常に笑顔を絶やさない……だが、彼女が本当の意味で笑っているところなど見た事もなかった。残酷な事も平然と成し遂げる、ゼダンとしては非常に優秀な人間……。だが同じゼダンであるところのタケルでさえ彼女の考えている事は理解出来ず、それはちょっとした不安要素でもあった。

「じゃあなんだ、ホクトと昴は間違いで召喚されちゃったってわけか」

「その割には頑張ってるけどね。まあ、召喚してしまったものはしょうがないから役に立ってもらわなきゃ。昴の方は洗脳したし……あとはホクトの方ね」

「……………。その、お前が御執心のホクトの事だが……。どうしてわざわざ敵の中に送り返したんだ？ あのままここに拘留して、洗脳でもなんでもしちまえばよかつただろうが」

「そんなの駄目よッア!!」

突然、ミラが大声をあげたのでタケルは目を丸くしてしまう。いつも冷淡な喋りのミラが叫ぶ所など初めて見た物だから、それは驚くのも無理はない。ミラは俯きながら己の身体を抱きしめるように腕を伸ばす。肩に爪を食い込ませ、そして口元にあのいつもの笑顔

を浮かべて言った。

「洗脳なんて駄目よ……。そんな“残酷な事”、ホクトには出来ないわ。だって私、彼の事を愛しているから」

「……………残酷な事って、オイオイ」

呆れるタケル……というのも、北条昴を嬉々として洗脳処置を施し徹底的にいたぶったのが彼女本人だからである。昴の時はあんなに楽しそうに自ら望んでやっていたというのに、まるで掌返したかのような物言いである。ミラは熱に浮かされたように顔を赤らめ、居ても立っても居られないのか、辺りをうろろ歩き出した。

「ホクトの事は、私に全部任せて……。私が責任を持ってゼダンに引き入れて見せるから」

「ほんとかよ……。つたく！ ていうか、俺様としちゃあ別にあいつは居なくてもいいんだけどな」

「ガリユウの力は全部貴方にあげるわ。でも、それで用済みになったらあのカラツポの器は不要でしょ？ だから私がもらいたいの。それは私の自由、当然の報酬、そう思うでしょう？ 思うわよね？」

冷や汗を流しながらタケルは苦笑を浮かべる。七つの大罪を身体に組み込んだゼダンは全員何らかの意味で人格が破綻している……。が、このミラは比較的マシな方だと彼は勝手に考えていた。だがそれはやはり間違いであり、ミラも例に漏れず精神破綻者 狂人であるのだと確信する。楽しそうに笑うその瞳は暗く、とても暗く輝いているのだから……。

「あの男の何がそんなにいいんだ……？ 俺は大嫌いだけどな」

「何って……決まってるでしょ？」

ミラは振り返り、紅い髪の毛の合間から覗く瞳を歪め、当然のように呟く。その手を握り締め 笑ってみせる。その笑顔は決して純粋な物ではなく。しかし歪んでいるとしても立派な……。きっと、愛から出来ているのだ。

「 全て、よ」

ロマンス（１）

「で……。なんで俺はお前と一緒に並んで座ってるんだ……」

バテンカイトス一階のソファ、そこに横に二人で並んで座っているホクトとイスルギの姿があった。ホクトは火のついた煙草を口に咥え、イスルギは腕を組んで目を瞑っている。こうして二人の気まぐずい沈黙は既に数十分経過しており、耐え切れなくなったホクトは冷や汗を流しながらいよいよ質問してみる事にしたのである。

「……………。貴様、記憶喪失らしいな」

「あ、漸く会話始まったのね……。記憶喪失っていうか、まあ混乱っていうか……。元に戻ったり戻らなかつたりするんだよ、いつも記憶も全部消えたわけじゃなくて断片的には覚えてるしな」

「それでシエルシの事はすっぱり抜け落ちると……」

「あ……あなたの事は覚えてるぜ……？」

「私の事を覚えていてどうするんだ……」

溜息を漏らし、額に手をやるイスルギ。そういわれたところでそれはホクトが自由に出来る事ではないのだから、言われてもどうしようもない。灰を銀皿に落とし、ホクトは首をこきりと鳴らした。

「シエルシは貴様の事を半年間ずっと探していたんだぞ……。それが、忘れられていただなんて……不憫すぎる」

「だーからーっ！ 俺の所為じゃねえーっの！！ でもまあ、何故かシエルシの記憶だけすっぱり消えてるんだよなあ……。他の事は結構思い出してきたんだが……」

「まさか貴様……知らん振りをしているだけではないだろうな……？」

「へっ？」

立ち上がったイスルギはがっしりとホクトの両肩を掴み、顔を寄せる。その表情には一切“ゆとり”というものが無い。目は血走っており、口元に浮かべる笑みは引きつっている。

「そういえば貴様は元々記憶喪失のフリをしていただけだったと聞いた……。まさか今回も……」

「違う！！ あれは、記憶喪失だったんだが実は結構すぐ思い出したけど黙っていたってだけで、フリしようと思ってしてたわけじゃねえからッ！」

「じゃあなんだ……？ まさか貴様、シエルシに何かしたのか……！？ それで責任を取れなくなって、逃げる為に記憶喪失だとかなんだとか抜かしているのではないだろうな！？」

「いやっ！ まだなんもしてねえからっ！！！」

「まだとはなんだ貴様アアアアアッ！！ シエルシの身に何かあったら、私は……！ 私は貴様を絶対に許さん！！！」

もう既に許していない雰囲気なのだが、ホクトはそれにツッコむ事はしなかった。そんな事が出来る空気でもない……。ホクトの襟首を掴み、振り回すイスルギ……。そんなイスルギの暴走を傍から目撃したウサクが駆け寄り、背後からイスルギを羽交い絞めにした。

「イ、イスルギ殿！？ それ以上やったらホクト殿の首がとれてしまっでござるよっ……！」

「私是一向に構わん……！！！」

「俺は構うんですけどッ！？」

何とか二人係でイスルギを引っぺがす事に成功し、ホクトとウサクは同時に溜息をついた。イスルギは乱れたネクタイをぴしっと締め直しながらざらりと光る敵意の視線でホクトを射抜く。

「シエルシがどんな気持ちでお前を探していたのか……お前は少し

でも考えたのか？」

「考えたっつの……うるせえな。シエルシはてめえの所有物じゃねえだろうが。俺とシエルシがどうであるうと、てめえには関係ねえよ」

「ホ、ホクト殿……っ」

「ウサクはちよつと黙っててくれ。これは俺たちの問題だ」

溜息混じりに立ち上がり、ホクトは両手をズボンのポケットに突っ込みイスルギを見つめる。イスルギも同じように腕を組み、そのホクトの視線に応えていた。二人の間でオロオロしながら泣きそうなウサクだったが、突然二人がぐるりと踵を返して歩き出したのでとりあえずついていく事にした。

二人はスタスタ歩いてバテンカイトスの外に出る。そうしてすっかり人気の無い大通りに対峙すると、イスルギは上着を脱ぎさりホクトは袖を捲る。一体何が始まるのかと思いつくウサクがきよんとしている、二人の男は唐突にお互いの拳を繰り出したのである。

互いの拳が互いの顔面に減り込み、吹き飛ばされる二人。ウサクは驚き、倒れている二人に駆け寄ろうとするのだが、どちらに駆け寄ればいいのか判らずまたオロオロしてしまう。そんな間に二人は立ち上がり、再び互いに睨みあう。

「二人とも何やってるんでござるか!？」

「見てわかんねえのか？ 喧嘩だ喧嘩」

「見てわかんねえのかって……いや、判るでござるが……。喧嘩つて……そんな、子供じゃあるまいし……」

「男は時に拳で物を解決せねばならない事もあるのだ」

口元の血を拭い、イスルギは再びファイティングポーズを取る。まさかあの冷静なイスルギがこうなってしまうとは思って居なかったウサクは仕方なくホクトに目を向けるのだが、ホクトも似たような様子である。

「俺は俺の生き方を通して。他人のあんたにとやかく言われる筋合いはねえんだよ」

「ホ、ホクト殿……！ 普段何かあっても飄々としてるくせに、なんで今日に限って本気なのでござるか！？」

ホクトはあえて返事はしなかったが、しかしその理由は明確だった。それだけ本気でシエルシの事を考えている……それもあるだろう。だがそれだけではない。彼は今色々と考えねばならない事が山積みであり、精神的に余裕もないのだ。だからこそ受け流せず、衝突してしまう……。

イスルギの言っている事が事実であり正しいのだと頭では理解出来ているし、だったらそれに従うのが大人というものだと彼も理解はしていた。だが シエルシの涙と笑顔を思い出すと言葉に出来ない苛立ちがこみ上げてくるのだ。思い出したくもない事を無理に思い出させるというのなら、あえて黙っていてやる必要もない。そしてそれと向かい合う騎士もまた本気、そして見極めたいと考えていた。この男が本当にシエルシが想うに相応しい人物なのか……。だが、恐らく二人の性格はかけ離れすぎている。まともに話した所で、互いにこの気持ちや自信を伝えられる自信がない。だからこそ、拳に想いを込めるのだ。

所詮魔剣使いなどという人種は戦いでしか自己を表現できない

二人はその見解において一致していた。イスルギはシエルシを護る為の剣である。ならばこの男の　ホクトの“剣”とはなんなのか、それを確かめたい……。何よりシエルシの為に。シエルシを預けられるのかどうか、確かめる為に。

ウサクの静止も聞かずに二人は同時に走り出した。戦う事以外は無能な男が二人、同時に拳を繰り出す。魔剣を使えば周りに迷惑がかかるだろうが、拳と拳の勝負ならば誰にも迷惑をかけない。だからこそ、思い切りやる事が出来る。

「そもそも、最初つからあんたの事は気に入らなかったんだよ！勘違いで襲つてきやがって！！」

「それは貴様も同じ事だ……！！」

「シエルシを護れずほつたらかしにした！」

「シエルシを置き去りにしてほつたらかした！」

「婚姻の儀の時、助けようとしなかっただろ……！！」

「貴様らが邪魔をしなければ、私は直ぐに彼女の傍に向かえたのだ……！！」

「人の所為にばっかしてんじゃねえ　ッ……！！」

「それは私の台詞だ　ッ……！！」

男の拳と拳がぶつかり合い、衝撃が迸る。ウサクは最早少し離れたところでそれを見守る事しか出来なかった。先ほどまでは殺気立ったその空気に魔剣を使い出すのではないかと思っていたのだ

が……今ならば判る。

彼らは冷静に、冷静に戦っているのだ。迷惑にならぬように、その力を己の責任の取れる形でのみ振るう……。戦士としては必須であるその器量、そしてそれでも消せない戦士としての性……。ウサクは苦笑し、二人を見やる。それは思っていたよりも 互いの言葉よりも。存外に、楽しそうだったから……。

「メリーベル……。恋とは……恋とは何なのでしょう？」

「ぶふっ」

思わずコーヒーを噴出したメリーベルの前、シエルシは真剣！な顔でメリーベルを見つめている。途方にくれ、バテンカイトス内で膝を抱えていたシエルシを発見し自室に案内した彼女だったが、まさかシエルシがそんな事を言い出すとは夢にも思っただけだった。

「まさか、大人になってコーヒー吹く事になるうとはね……」

自己嫌悪に陥りつつ、飛び散ったコーヒーを雑巾で拭う。しかし、シエルシはそんな事はお構い無しにじっとメリーベルを見つめていた。暖かいコーヒーが注がれたマグカップを両手で包み込み、少女は真剣に悩んでいた。その真っ直ぐさが判るからこそ、メリーベルは笑わずに話を聞く事にする。

半分ほど零れてしまったコーヒーが注がれたカップを片手にメリーベルはシエルシの隣に座る。シエルシは視線をカップへと落とし、黒い鏡面に浮かぶ自分の冴えない顔を見つめていた。これは重症……そんな言葉がメリーベルの脳裏を過ぎる。

「私……ホクトの事が好きです。大好きなんです。最初はなんていうか……野蛮で粗忽な男だと思いました。いえ、イスルギ以外の男性とはるかに喋った事もなかったもので……下層の人間だということもあり、先入観があったんですけど」

元々シエルシの思想はどちらかといえば帝国に寄っていた。勿論、ホクトたちと共に帝国の現実を見て、実際にそれと戦う人々との出会いと経験により彼女は少しずつ変わっていったのだが……。初めてホクトに出会った時、彼女は彼をたかが下層の野蛮で粗忽な人間……くらいにしか思わなかったのは事実なのだ。

「私を颯爽と助けってくれたかと思えば、かなり奇抜な言動で……正直がっかりしたんです。でも多分その時からずっと彼の事が気になっていたんです……。そういう事ってありますよね？」

「う、うーん……まあ……無いとも言い切れないかな……」

逆に男は多少頼りないというかだらしが無いというか、自分が居ないと駄目……みたいなくらいの方がメリーベルとしては好みである。一応自分の恋愛経験と照らし合わせてシエルシの言葉に頷いてみるも、メリーベルも決して恋多き人生ではなかったので何とも言えない。

「ずっと、彼の事が気にかかって……それが恋なんだと気づいたのはつい最近だったんです。失って初めてわかった事……でも、恋って何なんでしょうか？ 恋とは何の為にあるんでしょう……？」

「えらく哲学的な質問ね」

「……私、思ったんです。恋って……多分、するだけの物なん

だって。私はホクトが好きです。大好きです。それが恋……でもただそれだけです。“恋”じゃ何も出来ない。“恋”じゃ何も護れない……そう思いませんか!?”

身を乗り出し、真剣な表情でじつとメリーベルを見つめるシエルシ。その迫力に思わず頷いてしまうと、シエルシはコーヒートをテーブルにおいて勢い良く立ち上がった。そして握り拳を作り、頷いてみせる。

「私、決めました！ もうホクトに忘れられてたって全然構いません。へこたれるのはもう終了です」

「え、もう立ち直ったの？」

「立ち直った……というわけではありませんけど……。でも、考えてみればとても単純な事だったんです。私は彼が好きで、彼の事が大好きで、でも別に私の事を大好きになってもらいたいわけじゃないから」

果たしてそれは恋と呼べるのか……。一方通行では恋愛は成立しないといえば極論になってしまいうが、全く相互作用せずとも構わないと断言するのもまた破綻を含んでいる。しかしシエルシは優しく笑って言うのだ。

「彼の居場所になってあげたかった。彼が帰ってくる場所になりたかった。いつも寂しそうで、それでも皆の為に頑張るホクトが……。たまらなく好きなんです。かつこよくて、素敵で……。だから、私は彼を愛したい。愛して、護りたい……。勿論それで、彼が私を必要としてくれたらとても幸せです。幸せですけど……。そうでなかったとしても、私のやるべき事に何の差異もないから」

愛して欲しいから愛するのであれば、それは与えるのではなく求める行為である。人の多くはそれを当たり前だと考えている。与えなければ与えられる……ギブアンドテイク。当然の事である。人は代価を支払い何かを得るのだから。それでもシエルシは語ったのだ。本当の意味で何の見返りも求めない、ただ与え、護るだけの事……それこそが愛なのだ。

一人で納得した様子で席に着き、コーヒーを一気に呷ろうとするのだが、熱くて断念するシエルシ。目尻に涙を浮かべながら口元を押さえ、少女は柔らかく微笑んだ。メリーベルはそんなシエルシの頭をそつと撫で、目を瞑る。

「与える事こそ愛、見返りを求めないものこそ本当の愛、か……。本当にホクトの事が好きなんだ」

シエルシは照れているのか、顔を真っ赤にして　それでも目に涙を溜めて頷いた。メリーベルはそんなシエルシの身体を抱き寄せ、背中を繰り返して撫でた。

「そっか……。その気持ちは、きつとホクトに届いてるよ……」

「……………メリーベル」

「だから　大丈夫だから。今はこの部屋には私以外誰もいない。だから、辛いのに無理に笑わなくていいから」

ぎゅっと、メリーベルはシエルシを強く抱きしめた。それを合図としたようにシエルシの両目から涙が溢れ出し、シエルシはメリーベルの胸に顔を埋めて泣いた。背中に食い込むシエルシの指の強さが彼女の悲痛な気持ちを代弁する。メリーベルは目を閉じ、それが

ら顔を上げた。ホクトが悪いとも、シエルシが悪いとも言わない。だがその成立を以ってして悲劇と成す……そんな場合もあるものなのだ。そう、ロマンスというものは。

そうしてメリーベルはシエルシが泣き止むまでの間、ずっと彼女を抱きしめていた。薬品の匂いがこびりついたメリーベルの服……しかし、その腕の中はとても暖かかった。何もかも忘れるくらいに泣いてしまいたかった。彼の前ではずっと、ずっと笑顔でいられるように。

ロマンス(2)

「九時間経過。皆、時間に正確ね」

懐中時計へと繋がる鎖をじゅらりと手の中で転がし、メリーベルは机の上に軽くかけていた腰を上げた。部屋に入ってきた一同を見渡し、それから胸を撫で下ろす。それぞれ色々事情もあるだろうが、きちんと全員が気持ちを切り替えてきているのが顔つきからはつきりと感じられたからだ。

歩み寄ると、何故かホクトとイスルギは顔に傷があるのがわかった。特に重傷というわけではないが、怪我である事に変わりはない。首をかしげていると、ウサクが腕を組んで首を横に振った。事情は聞かない方が話がはかどる……そんな気がした。

「さて、今回はミュレイを救出するのが目的になるわ。それと同時に出来れば北条昴の救出ね。尤も、昴は帝国側にいいように操られているみたいだから無事に救出出来るかどうかは不明。だからとりあえずでいいわ」

「ミュレイを救出さえ出来ればとりあえず時間は稼げるし、そうなれば自ずと昴は追ってくるだろうしな」

そう、今回の作戦の肝は昴よりもミュレイにある。彼女は反帝国の象徴であると同時に今この世界にとって必要な人材なのだ。スラック魔剣の所有者という事もあるが、彼女の人望は世界を再び纏め上げる上で必須の要素である。それにミュレイを救出する事が出来ればホクトの発言通り、その先も状況は好転する可能性が高い。

「だからそれ以外は基本的にまともに相手をしなくても構わないわ。

方法はシンプルに、転送魔術による直接襲撃……および転送魔術による即時脱出よ」

「そ、そんな事可能なのでござるか？」

「私が半年間も何もしてなかったと思う……？ 色々手は打つてあるわ。それに今回からは私も貴方達の戦いに協力するから……つまり私が前線に居れば、どこに居ても転送術を発動出来るってこと」

「え！？ メ、メリーベル……それは危険です！ 貴方が前線に出るなんて……しかも潜入先はインフェル・ノアですよ！？ そんな無茶な……！」

「私の事は心配要らないわ。自分の身を守るくらいには頑張るつもりだし……ね」

メリーベルが取り出したのは銀色のアタッシュケースだった。ホクトはそれに見覚えがあり、何となく納得する。中に入っているのはかつて彼女が製作した、人類が製作する事が可能な武装の中では限り無く到達点に近い物であると言える武器、“神威双対”である。あの本城夏流が使っていた武器なのだから、その戦闘力は折り紙つきだ。それにメリーベルはちよつとやそつとでは死ぬ事が出来ない体……そういう風に出来ているのである。尤もそれを彼らにあえて言う事はなかったのだが。

「旦那に借りてきたのか」

「まあね……。夏流程とは行かずとも、それなりに戦闘も期待していいかな」

「しかし、たった五人で乗り込むとは……少々無謀ではないか？」

イスルギの発言に誰もが同意していた。なせばなるだろう。そんな甘い敵ではないのは既に何度かの戦いで判りきっている事だ。故に当然の事だが勝算というものは用意されている。

「余計な情報は皆の混乱を招くだけだから、今は伏せておくけど……。現場には私たち以外の仲間も集結する事になってる。で、その中でも私たちの役割はミュレイの救出という本筋なの。絶対に失敗は許されないし、余計なことをするほどの長居も無用よ」

「自分の事だけ考えてりゃそれでいいってか……。なるほどなるほど。んじゃま、俺たちはサクっとお姫様を救出しますかねえ。姫救出作戦はこれで何回目だよ？」

「う、うう……。私だって別に、好きで捕まってるわけじゃないですよ……。って、あれ？」

その事は覚えているのか。とは訊けなかった。たまたま覚えていただけかもしれないし完全には覚えていないのかもしれない。それに知っていようが知ってまいが、覚えていようがどうだろうが関係ない。そう腹を括ったのだ。シエルシは何も言わず、思いはごくりと飲み込んだ。

「姫様……。待っているでござるよ！ 絶対に拙者たちが助けに行くでござるっ……！」

「……。ああ。あんなでも、一応妹だから……。情を捨てきれぬは甘さ、しかし身内の縁は切ろうと思っただけ切れるものではない」

「ミュレイさんは、私たちにとって……今の世界にとって必要な人です！」

「とまあ色々理由も思いもそれぞれだが　やる事は一緒だ。いっちょ、帝国にリベンジと行こうぜ　！」

ホクトの掛け声に全員が頷いた。メリーベルがホクトへと歩み寄り、その肩を叩く。ホクトの目に偽りはない　否、きっと彼の存在そのものが偽りなのだろう。気になる事はある。けれども今は仲間としての彼を信じている。自分がこの世界に巻き込み、運命を捻じ曲げてしまった偽りの救世主　。例えそれが彼の代役でも構わない。今は、ただ　。

「……………手を貸して、救世主。一緒にこの世界を救ってやりましょう」

「世界に興味はねえよ。ただ　嫌なんだ、俺は。我俣だから……。大事なモンは一つ足りとも溢したくねえ。全部護りてえ。だから戦う　それだけだ」

「……………強欲ね」

ホクトの脇を小突き、メリーベルはアタツシケースを肩にかけて歩き出した。それに続いてホクトたちが移動を開始した頃　。

第三階層ヨツンヘイム、帝都レコンキスタ、その上空に浮かぶ巨大なる城インフェル・ノア　。夜の闇に包み込まれたその帳の中に浮かぶ白い影があった。白騎士と呼ばれた救世主はインフェル・ノアの外壁の上に座り、静かに眼下に広がる街を見下ろしている。煌く眠らない街の輝き……それに照らされ、彼方より飛来する影があった。

騎士はゆつくりと腰を上げ、空を見上げた。雲を突き破り、近づいてくる影。その甲板の上に立ち、街を見下ろす少年の影があった。黒いマントをはためかせ、少年は風の中ゴッグル越しに昂の姿を捉える。空舞う影は猛スピードで疾走する。リーダーにも引つかからず、レコンキスタの街を突き抜けて……。遅れて今更になつて警報が鳴り響き、インフェル・ノアから次々に機動兵器が放たれ、軍艦が切り離される。謎の飛行物体はそれら目掛けて一斉にミサイルを放ち、それらは次々にインフェル・ノアへと着弾した。

一度は頭上を突き抜けていった影を追い、昂は魔剣を召喚して走り出す。高層ビルとビルの狭間をすり抜けながら疾走する影は漸く闇の中よりその身を晒し、サーチライトの雨を浴びて輝いた。少年はマントを剥ぎ取り、その己の証を翳す。照らされる船体に刻まれた紋章を背負い、少年はロゼ・ヴァンシユタールは闇を見下ろす。その胸に去来する様々な想い。それらを噛み締め、そして手摺に手を伸ばし、その身を空へと投げ出した。潜水艦否、非空挺ガルガンチュアより舞い降りた影は空中で一度瞬き、その両手に二対の剣を持ってインフェル・ノアへと落下していく。

ロゼの周囲に風が渦巻き、インフェル・ノアに着地すると同時に嵐が巻き起こった。少年は強い風の中、その髪を靡かせながら魔王の城を見下ろす。その甲板を真っ直ぐに駆け寄ってくる白い影が一つ。知覚不能な程のスピードで猛然と駆け寄る昂。騎士が剣を振るおうとした瞬間、空より煌く魔剣が飛来した。昂の足元に着弾した剣は光を撒き散らしながら爆発し、騎士は空中へと投げ出される。煙を突き抜けた昂は空中に停止した時間を“設置”してそこに着地し、空中を縦横無尽に移動する。それを追尾するように剣は飛来し。その射手はガルガンチュアの船体の上に座っていた。

身体をベルトで甲板に繋ぎ固定し、腹這いになつて銃を。否、魔剣を構える少女……。闇の中で黒い髪を靡かせながら暗視ゴッグルで狙いを定める。その手に握り締めているのは銃の形をした魔剣射魔剣スピリットである。魔力で構築した魔剣の刀身を銃弾と

し射出し、対象を攻撃する特殊魔剣……。その持ち主であるアクテ
イは遙か彼方を猛スピードで移動する昴を完全に視界に捉えていた。
魔剣による視力強化　及び身体能力の強化は反動で肩が外れそ
うなほどの衝撃を放つスピリットの火力を制御するに十分である。
昴はその降り注ぐ光の剣を回避し、時には切り払っていた。アクテ
イはベルトを引きちぎり、空中から飛来する。スピリットを構え、
落下しながら逃げる昴を撃ちながら。

閃光が一度、二度と連続で瞬く。その度にインフェル・ノアの甲
板の上で爆発が起こった。威力は十分　しかし時間制御による加
速と周囲の状況を低下させる昴に遠距離攻撃は命中しない。アクテ
イは舌打ちし、腰に装備していた小型の装置をインフェル・ノアの
外壁へと打ち込んだ。壁に接着されたアンカーをワイヤーで手繰り
ながらインフェル・ノアにぶら下がり、その壁を走りながらアクテ
イは片腕で昴を狙い続ける。

昴は壁に凍った自分の両足を付着させ、ノータイムで引き離すと
いう曲芸にも似た操作で壁を重力を無視して走り続けていた。連続
で射撃を行うも、昴は止まらない。アクティはワイヤーを切り離し、
その身を再び空へと投げ出す　そこへ迎えに来たかのようにガル
ガンチュアが訪れ、その甲板の上へと着地した。

「ロゼ、やっぱり昴は倒せない！！　時間を稼ぐだけで精一杯だよ
ッ！！」

通信機越しに聞こえてくる声に耳を傾けながらロゼは窓ガラスを
蹴破り、インフェル・ノアへと潜入を果たしていた。飛び散るガラ
スの中、周囲を確認しながら走り出す。アラートが鳴り響く中ロゼ
は両手に携えた魔剣を握り締め、侵入者迎撃用に出撃してきた機動
兵器たちを見据える。

舞うように、前進しながらその両手の刃を繰り出した。それは光

の軌跡を描き、次々に機械をガラクタへと変貌させて行く。少年の
手の中に輝くもの……それは魔剣。 “響魔剣グロシア”。
彼の父が、そして姉であり母でもあった人がその身に宿していた魔
剣である。ロゼは休まず走り続ける。彼らの目的は時間稼ぎだ。
長居をする積りはない。ただ、ミュレイの救出の為には騒ぎを起す
必要があった。つまるところ、それは陽動。だがそれだけではな
い。

ロゼには明確な一つの目標があった。故に彼は危険を承知でイン
フェル・ノアへと乗り込んだのである。外では昴を遠距離から牽制
しながら戦うアクティ、そしてインフェル・ノアの艦隊を相手に時
間を稼いでいるガルガンチュアが控えているのだ。立ち止まる事も
出来ないし、迷っている暇もない。ロゼは通信機に向けてたたきつ
けるように叫んだ。

「アクティ、無理はしなくていい！ 昴を出来る限り抑えてくれ！
僕はその間にヤツに会いに行く！！」

「一人で行くつもり！？ 無茶だよ、ボクも一緒に行く！！」

「これは僕の我侭、僕の勝手だ！ だから本来の目的である、メリ
ーベルたちの援護を止めるわけにはいかない……！ 僕は内側で敵
をかく乱しながらヤツを探す……。アクティ、気をつけて」

「あ、ちょっとロゼ……！？ ロゼってば……！！」

通信が途切れたのを確認し、アクティは眉を潜めた。何故こう、
男という生き物はいつも勝つてなのだろうか……。浮かべるは引き
攣った笑顔……。しかしそれも長くは持たない。本当に引き攣るよう
な事態にならないように、少女はその瞳で敵の姿を捉えるのだ。

「全く……！　どいつもこいつも、いつつも人を置いて先に行くんだから……！！　どうなつても知らないからね、ロゼ　ッ！！」

再びゴーストの中に昴を捉える。しかし、高い命中精度を誇るアクティでもまるであたる気がしない。なんというか　彼女はまるで別格である。以前から強かったが、今は更に腕を上げたというか、洗脳により精神的なゆらぎが無いだけにまるで一分も隙が無い。

恐ろしい敵である。かつて何度か対峙したからこそわかる　だが、今感じるのはただ高い壁というだけの敵ではないということ、それがアクティの中で決定的に違う事だ。今の昴はただ恐ろしい敵ではない。ロゼやホクト、男に意地があるように女であるアクティにだって意地の一つや二つあるものだ。剣を携え、少女は立ち上がる。　あんなにも変わってしまった昴を、これ以上見ていられないから。

勿論、最初はただの敵だった。仲間を殺す、危険な存在。ヴァン・ノーレッジを追う者……だが、言葉を交わし、思いを通わせ、だからこそ思う事がある。判るのだ、もう。他人ではないから。無理解のままではいられないから。正々堂々、その思いをぶつけてみせる。　例え相手が、神に等しい力を持つ救世主だったとしても。

「勇者は勇者らしく……！　そうでしょ、昴……！！？　だから、ボクは　ッ！！」

再び空へと身を投げ出した。今度は逃がさぬと言わんばかりに昴もまた空へと舞い上がる。　アクティは叫びを上げながら白騎士へと、遙か格上の敵へと挑む。夜の闇の中に光が瞬き、それぞれの意地をかけた戦いが幕を開けたのであった。

外が騒がしい事にミュレイが気づいたのは当然の事だった。度重なる爆発音に異常を悟り、牢屋の中で立ち上がる。何かが起きているのは間違いない……だが、一体何が起きているというのか。昴を何とか助けたいと願い、ここまで辿り着いたもの。こうして何も出来ずにむざむざ捉えられている今の自分に、何が出来るというのか。

口惜しいのは自分の無力さ……しかしそれも止む無き事なのかもしれない。無力だからこそ何も護れず、無力だからこそ……今こうしてここにいる。無力で、一人では何も出来ないからこそ。だからこそ、仲間たちと出会う事が出来たのだから。

俯き、格子を握り締めるミュレイ……。と、その時牢屋に誰かが近づいてくる足音が聞こえた。ミュレイがそつと顔を上げると、そこには一つの人影。影はスタスタとミュレイへ歩み寄り、そしてすつと格子に顔を寄せた。

「ミュレイちゃん、見つけたのっ！！」

「……………ッ!? う、うさ子……か?」

「なのなの 待っててね、今そこから出してあげるのっ」

何故か鍵を持っていたうさ子はミュレイをあっさりと牢屋から開放すると耳をぱたぱたと上下させながらにつこり微笑んだ。そのゆるゆるした表情を見つめているとなんだかミュレイの緊張の糸までほぐれてしまいそうだったが、今はそんな場合ではない。

「うさ子、外では何が起きておる？　かなり派手に振動が起きておるが……」

「ガルガンチュアで、ロゼ君とアクティちゃんが頑張ってるのっ！　うさはねえ、その混乱に乗じて別ルートからこつそり侵入したの」

「別ルートって……うさ子のどこにそんな知恵が……」

きよとんと目を丸くするミュレイ。しかし現にこうして助かったのだから文句は何もない。うさ子がミュレイの両手両足につなげられていた封印装置を破壊すると、ミュレイは指先に火を起して力の復帰を確認する。うさ子がミュレイの手を引き、牢屋を抜け出して走り始める頃には大体中で何が起きているのかも推測する事が出来た。

「うさ子、このままではロゼもアクティも直ぐに捕らえられてしまっぞー！　帝国の戦力は強大だ……単身で敵うような相手ではない！」

「だからね、うさはここまでなのっ！　ミュレイちゃんはね、昂ちやんの所に向かって」

足を止め、うさ子が指差したのは甲板へと続く道だった。ミュレイは戸惑いの表情を浮かべ、うさ子を見る。白い耳をぱたぱたさせながら少女はミュレイの手を両手でしっかりと包み込み言った。

「今の昂ちやんを助けられるのは、きつとミュレイちゃんだけなの……っ。だから、行って上げて？　うさが時間を稼ぐから。うさがきつと皆を逃がして見せるから……。だから、今度こそ　！」

「うさ子……お主……」

「さあ、行って！！ 剣誓隊は全部うさが引き受けますっ！ ミュレイちゃんも外へ！ 急いでっ！！」

頷き、走り出すミュレイ。姫は振り返り、走りながらうさ子を見やった。うさぎの少女は片手を挙げ、笑顔を浮かべている。そうして別々の道を走り出した彼女に、心の中で“死ぬなよ”と呟きミュレイは向かう。階段を駆け上がった先。非常隔壁の向こう。夜の闇に晒された、彼女自身の戦場へと。

ミュレイを外まで送り届けたうさ子は真っ直ぐに下層へと向かっていた。インフェル・ノアの重要施設の殆どは出入り口もなく厚い装甲に覆われた下部に集中している。ハロルドも、剣誓隊も、当然のようにそこに収束しているのだ。うさ子は複雑な城内を迷わず進んでいく。そう、まるでこの場所に住んでいたかのように。

一方ロゼはうさ子とは別のルートで剣誓隊の管理するエリアを目指していた。その途中既に何人かの剣誓隊の魔剣使いと交戦し、体力は既に尽きかけている。たった半年で会得した付け焼刃の魔剣では所詮その程度の物……しかしロゼは諦めてはいなかった。歩みを止めるわけにはいかないのだ。何としても 何があっても。

「リフル……お前の仇を……討つてやるまではな」

そう呟いた瞬間、ロゼは派手に後ろに跳んでいた。突然ロゼがもたれかかっていた通路の壁が火花を散らし、大きくひしゃげる。冷や汗を流しつつ、グラシアを構えた。そう、グラシアを常時開放状態にしていたのは戦闘続きという事もあったが、全てはこの為である。

何も居なかった、存在しえなかったその場所に一人の騎士の姿が

あった。巨体を黄金の鎧で固めた騎士。角着き兜を擡げ、片手に大剣を握りビッグホーン中将はロゼを見つめた。何故攻撃を回避出来たのか判らない。そんな顔をしている。だが直ぐに全てを悟りビッグホーンは改めて剣を構えなおした。

「ビッグホーン中将……。あなたの方から出てきてくれたって事は、僕があんたを探してるって判ってると思ってるのかな……？」

「……………」

ビッグホーンは問答無用で剣を振り上げた。ロゼはその攻撃を片手の剣で受け流し、攻撃を繰り返す。しかしビッグホーンの鎧は非常に頑丈で、魔剣で切りかかっているというのにダメージを与えられない気配が無い。ロゼは風を起し、ビッグホーンを押し返しながら慎重に後退した。

リフルを殺した男、ビッグホーン……。しかしロゼは彼に無謀に突っ込む事はしなかった。そんな事をすれば僅かな勝算さえも失われ、永久に彼女の仇を討つことは叶わなくなると知っているから。激情も確かに持ち合わせてはいるが、今はそれを押さえる冷静さが彼に求められる要素である。目を離さずに深く深呼吸する。落ち着いて対処すれば、見切れないわけではない。そう、彼の“目には見えない攻撃”も。

騎士が何も持っていない手を振り上げる。それに反応し、ロゼは魔剣を正面で構えた。突然離れているというのに衝撃が走り、火花が散る。足元に何か落ちるのを感じ、ロゼは確信した。戦える。確かに知識がなければ瞬殺されていただろう。だが、秘密を知っているロゼにはリフルがその正体を暴いた敵には、負けるはずがない。負けてはならないのだ。

「…………… ネタはバレてるんだよ。もう安い手品じゃ僕は殺せない……………」

！ 正体を晒せよ、“シグマール”！ 話があるから二人きりになつたんだろ！？」

ロゼの叫びを浴び 黄金の甲冑はまるで幻か何かのように一瞬で消え去ってしまった。残されたのは一人の男の姿……。シグマール中佐 ロゼがその名を呼んだ男は笑顔を浮かべ、パチパチと両手で拍手を送った。

「すごいな、ロゼ。おじさんの正体を見極めるとはね〜」

「……僕が見破ったわけじゃないさ。見破ったのはあんたが殺した……リフルだよ」

ロゼの瞳に憎悪が宿る。口調も自ずと低く、威圧的な物になった。激情をコントロールしようとするものの、若い心ではその怒りを抑えきる事が出来ない。血が滲むほど剣を握り締め、目の前の仇を睨みつける。シグマールはそれに応じ、何も無い場所から剣を取り出した。

彼の魔剣は“透魔剣センチア”。能力は、“物を感知出来る”なくする”能力である。つまり彼は今この瞬間も鎧 “認識できない鎧”に護られているし、彼の周囲には彼が用意した見えない武器がまだいくつも存在しているのだ。ビッグホーン中將と呼ばれる人物の形をした鎧こそが魔剣本体であり、彼はその中に包まれているに過ぎない。そして認識不能の能力により暗殺を最大の武器とし、事実それであるリフルを容易く討ち取って見せたのだ。

だがロゼはその事実を知っていたし、彼の持つ響魔剣グラシアは高い探知能力を持つ剣である。集中すれば認識不能の存在でさえ何となく感じる事が出来る。知らなければその違和感もあつけない通り抜けるだろうが、情報を持っている今は違う。彼の認識不能攻撃もロゼは対応出来る。だからこそ、冷静でなければならぬ。

それこそが彼の握り締めた勝利の鍵なのだから。

「成る程、リフルか……。昴を殺るつもりが彼女に悟られて庇われたのは痛かったな。元々彼女を殺すつもりはなかったんだけどねえ」

「ふざけるな……。ッ！　父上を裏切り、砂の海豚を裏切り、リフルを裏切ったあんたを……。僕は絶対に許さないッ！」

「別に許して欲しいとは言わないさ。勿論、だからってむざむざ殺されてあげるつもりもないがね」

「どうしてなんだ……。何故、父上を殺した……。？　何故組織を裏切った！！　お前が居れば、リフルだってあんなに苦労する事はなかったんだ！」

「責任の所在を摩り替えるのは良くないなあ、ロゼ。それは君が無力な子供だったのが原因だよ。彼女を護れなかったのも、君が男として弱すぎたのが理由だ」

「判ってるさ……。だから、理由を知りに来たんだ。納得して前に進む為に　！　あんたという、壁を乗り越える為にッ！！」

ロゼが魔剣を構え、風を起す。シグマールは眉を潜め、疲れたように笑みを浮かべ　そして再び黄金の鎧を出現させた。巨大な剣を両手で握り締め、そしてロゼを見やる。あんなに昔は小さかった少年が今、こうしてリフルの　そして彼の父の剣を手に目の前に居る。数奇な運命というものがあるのならば、きつとこんな瞬間の事を言うのだろうか。

『では、おじさんを倒してみなさいロゼ。そうしたら君の知りたい

事をなんでも教えてあげよう』

「言われなくても、力づくで聞き出すつもりだったさ　　ッ!！」

『それは物騒だね、実に……!』

二人が正面から衝突する。半年間、全てはこの為にあつたのだ。口ゼは限られた僅かな時間の中で出来る全てをつぎ込んできた。リフルの為にも……自分の為にも負けるわけにはいかない。そう、これはプライドを賭けた魂の戦いなのだから。

ロマンス(2) (後書き)

くはじける！ ロクエンティア劇場く

* 特別編、術式ってなあに？*

うさ子「ねえねえロゼ先生ロゼ先生？ 術式ってなあに？」

ロゼ「唐突だな……。まあ、術式というものが何なのか、という事に関しては今後本編で触れていくと思うから、ネタバレにならない程度で解説していくとしようか」

うさ子「うさでもわかるかなっ！ うさでもわかるかなあっ!？」

ロゼ「勿論、うさ脳で理解出来るかどうかはわからないけど、まあニュアンスだけ感じてもらえればOKだよ。どうせテキストな設定だし」

くレッスンその1 “術式”についてく

ロゼ「うさ子は術式って言葉を聞いた事があるよね？」

うさ子「本編でたまに出てくる言葉なの。意味は良くわかんないのっ」

ロゼ「では、まず術式というものが何なのかを少し説明するね」

【術式】

ロクエンティアの世界に存在する、魔術的な能力を構築する為に必要な構築式の事。

魔術を発動するにせよ魔剣を出現させるにせよ、この術式というものが関係してくる。魔術も魔剣も大雑把に纏めればすべて術式といুকくりになる。

術式は外見的には何らかのエンブレム、紋章のような形状をしておりその紋章そのものが“詠唱”のショートカットとなっている。本来魔術は長い詠唱と術への理解、訓練が必要である。しかし術式はそれに一定量の魔力を注ぐだけで、魔力を何らかの形に魔術、魔剣へと構築する事が出来る。

紋章は基本的に術者の肉体に直接刺青のような形で刻まれており、そこに魔力を通す事によりショートカットを発動し魔術、魔剣を出現させる。その際、属性色と呼ばれる色で発光する。

術式はこの世界に古くから伝わる物であり、多くの魔術師や錬金術師が開発を行ってきた。現在では人為的に術式を人間に刻み込み、魔術を発動出来るようにすることが可能である。しかしその術式を刻む為にはその術をショートカット無しで行使出来る実力が必要となる。

ちなみに術式といえば普通は魔術や魔剣だが、術式を利用した魔道機械や装置などが存在し、大陸横断列車やシャフトエレベータがこれに該当する。

うさ子「はづつ?」

ロゼ「えーと……。うさ子、君の太股にもエンブレムがあるだろう? 翼を象った紋章だよ」

うさ子「あるよ？ 魔剣出すとね、ぴかーって光って、ばちばちーって雷が出るのっ！！」

ロゼ「僕の肩にも術式がある。これは響魔剣グラシアの術式だね。ちなみに術式はいくつでも身体に刻む事が出来るけど、体表面積を超える術を刻む事は出来ないし、大規模な術式であればあるほどの大きさも比例するんだ。だから一人の人間が身体に刻める術式の数は限られてるんだけど、僕は通常の下級魔術も腕とかに刻んでるね」

うさ子「じゃあ、じゃあ〜！ ホクト君の両腕にびっしり入ってる刺青も？」

ロゼ「あれはガリュウの術だね。ちなみにホクトは両腕の指先から首元辺りまでびっしり占領されてるね。Sランクの魔剣の中でもガリュウの術式の巨大さは半端じゃないんだ」

うさ子「そういえばね、シエルちゃんの背中にもでーっかい刺青があったのっ」

ロゼ「え、そうだったっけ……？ まあ、僕はシエルシの裸なんて見ないからな……。ちなみに魔剣の中にはその魔剣の術式自体に魔術の術式が組み込まれているものもあるね。グラシアは風を起す術式、ミュレイのソレイユは炎の術が組み込まれてるんだ」

↳ レッスンその2 “魔剣” について

ロゼ「さて、魔剣といえばロクエンティアの世界では強者が持つ力

の代名詞なわけ。これは誰もが持つてる力じゃないのは知ってるよね？」

うさ子「なのなのっ！ 特にSランクの魔剣はあ、七個しかないのっ」

ロゼ「じゃあ何故魔剣使いが貴重な存在なのか、そして何故剣誓隊やエクスカリバーが脅威なのか、それを振り返ってみよう」

【魔剣】

魔剣は“まけん”とも読むが、“シン”と読む場合もある。魔剣を持つ者は罪深き罪人である、というのは救世主神話に出てくる一節で、魔剣使いはその巨大な力故に悲劇的な過去を持つ事や過酷な運命を歩く事が多い。

前述した術式によりショートカットで発動し、魔力により構築される刃でありその形状、能力は術式の形によって異なり、同じものは一つとして存在しない。編み出される物は魔剣という呼び名に対し、まるで剣とは程遠かったり剣にしては魔物を両断できるほど頑丈だったりと様々である。

魔剣使いは世界に希少な存在であるが、それはそもそも魔剣自体の絶対数が非常に少ない事が理由に挙げられる。魔術式は現在でも複製、新規開発が可能であるのに対し魔剣式は古来から人から人へと伝わる物しか存在しない。故にその数は年々少なくなり続けている。

この術式を発動するには魔術とは比べ物にならないほどの魔力を消耗する事になり、更にその真の力を引き出すのにはそれ以上の才能が必要である。魔剣にはそれぞれ能力によるカテゴリーが施されており、帝国側は確認した魔剣にSからDまでのランクを与えている。

低ランクになるほど扱いは容易だが能力は低く、高ランクになるほど扱いづらくその能力も強大となる。その中でも最強とされる七つが通称大罪と呼ばれるSランク魔剣なのである。

ロゼ「そもそも魔剣は魔術と違って人から人へと直接継承されていくものなんだ。新しく増やす事が出来ないから、年々数は減って行ってるんだ。魔剣は一つあればすごい力を発揮するけど、今となつてはフリーの魔剣使いは殆どいない」

うさ子「そういえば、剣誓隊が魔剣使いを集めちゃってるんだよね？」

ロゼ「そういうこと。魔剣使いを集めるという事は帝国の戦力を増強すると同時に世界から魔剣使いを減らす事でもあるんだ。しかもホクト……ヴァン・ノーレッジが魔剣使いを無差別に攻撃する事件なんかあったりもして、今の世の中魔剣使いは数えるほどしかないなくなっちゃったんだ」

うさ子「でも、剣誓隊にはいっぱいいたよ？」

ロゼ「あれはプロジェクトエクスカリバーと呼ばれる計画により生み出された人造魔剣使いなんだ。それじゃあ剣誓隊とエクスカリバーシリーズについて少し解説しようか」

く レッスンその3 “ 剣誓隊 ” についてく

ロゼ「剣誓隊とは、帝国が所有する魔剣使いだけの特殊部隊だね。

その人数は純正の魔剣使いだけでも数十人いるらしい」

うさ子「そんなにいっぱいいたら、誰も勝てないの……」

ロゼ「だからこそ帝国は強いんだよ。帝国が何に優れているかという術式の扱いに優れているんだ。術式で動く機動兵器、術式で魔物を操ったり術式による兵器……。帝国の技術力は異常なほど発達している」

うさ子「うさも剣誓隊と一緒に戦ってた時代があったの〜っ！ すごいのです〜いのっ〜！」

ロゼ「特に厄介なのはエクスカリバーシリーズだね。ここではそのへんに触れていくよ」

【剣誓隊とエクスカリバーシリーズ】

剣誓隊とは四人の將軍を中心に構成される魔剣使いのみの騎士団である。黒甲冑に黄金の装飾が特徴で、特に將軍四人は高い魔力とAランクの魔剣を持つ。

しかし剣誓隊も長い下層との戦いやヴァン・ノーレッジの反撃により数百名居たはずのメンバーを減らし続け、現在では数十名を残すのみになってしまった。魔剣使いは基本的に増やす事は出来ない為、戦力が不足した場合補う方法は下層のフリーの魔剣使いを雇い、困いられるしかなかった。

増やす事が出来ない魔剣の術式、それを解析し古代遺跡から発掘したロストテクノロジーと合わせ複製したのが天才錬金術師であるケルヴィーである。ケルヴィーはハロルドの持つ魔剣、帝魔剣ネイキッドをベースに魔剣を作る事に成功した。それが通称エクスカリバーである。

ネイキッドの複製は当然万全ではなく未だ実験段階にある。しかしネイキッドの劣化情報を他の魔術術式により補う事により、魔剣にある程度の特異能力を所有させる事に成功したのである。故にエクスカリバーシリーズにはその名の後に能力を代弁したコードネームが付与される。

このエクスカリバーシリーズは不完全な術式である為、人間の精神と激しく反発し自我を破壊、更に肉体をも壊してしまうという恐ろしい術である。しかしエクスカリバーを馴染ませる為に、レコンキスタ中で“育成”し“教育”を施した子供達に強制的に写植し、量産に成功している。

能力はDランクやCランクの魔剣ばかりだが、それでもただの騎士団よりはよほどに強力で人材の教育さえ出来れば複製不可能な魔剣が次々に生み出せる為、このエクスカリバーシリーズは脅威なのである。

直、エクスカリバーの所有者となる子供たちは特殊な教育課程を経ており、その思想や意識は非常に偏っている。中には元々魔剣に対する高い適性を持つ為、エクスカリバーを与えられても自我を失わないエレット少佐のようなレアケースも存在する。

うさ子「魔剣使いは増やせない……でも、エクスカリバーシリーズは魔剣を増やせた。だからすごいのか？」

ロゼ「そういうこと。レコンキスタでは次々に新しい魔剣使いが教育されて前線に送り込まれるんだ。そりゃ剣誓隊の勢力が拡大するわけだね。仮にザコであるエクスカリバーシリーズを退けても、上には本物の魔剣使いもいるわけだ」

うさ子「はううう……。でも、使うとおかしくなっちゃう魔剣なんて……かわいいそうなの」

ロゼ「帝国の人間はもうそういう風に考える心もないんだろうね……。しかしロストテクノロジーを手に入れたとは言え、魔剣をコピーするんだからあのケルヴィーって術者はすごいよ」

うさ子「そういうえば、うさもケルヴィーが作ったってゆってたのっ」

↳ レッスンその4 “魔剣の継承と魔剣狩り”

ロゼ「さて、ではその貴重な魔剣は如何にして継承されるのかだけ……実はこれはその気になれば即、移植が可能なんだ」

うさ子「はづ？ じゃあ、今うさがロゼ君にミストラルを継承することも出来るの？」

ロゼ「出来るよ。正し、それはやめといたほうがいいとおもっけどね」

【魔剣の継承】

魔剣とは術式である。術式とは身体に紋章として浮かび上がっているものの、それは体内で常時生成され続けている魔力によって維持されている。

仮に一人の人間の体内に常時100%の魔力が存在すると仮定すると、魔剣の術式を刻んでいるだけでその何割か……仮に30%とする……を常時消費している事になる。

つまり、術式を宿している限り魔力は全体の70%を使うのが限界であり、それ以上の魔力を消費すると術式そのものが正常に維持出来なくなり暴走したり完全な状態で構築出来なくなる。特にホク

トのガリユウは常時消費魔力量が非常に大きく、少し力を使いすぎるとその影響でガリユウが暴走、不完全な状態での発動により反動を受ける事になる。

魔剣式の維持にはその所有者が魔力コントロールに長けている事が絶対条件であり、更にもっと根本的に言えば生きている事が条件である。所有者が死亡しその身体から魔力が完全に消失する事により、魔剣式は完全に消滅するのである。

逆に言えば肉体が死んでいても魔力さえ残っていれば術式は稼働しており、それを継承する事も可能である（シルヴィアの首が落とされた後にタケルが魔剣式を奪うのは可能）。そして魔剣式の継承には魔剣維持の数倍の魔力が必要であり、その魔剣の力が強大であれば強大であるほど命懸けとなる。

故に魔剣の継承はその力の大きさもあり、基本的に前所有者の死に行われる事が多かった（大規模な準備を行い、安全に継承する方法もある）。残りの命を懸けて魔剣を継承し、前所有者は死に絶えるのである。その場に継承者が居なかった場合、術式は完全に消失しこの世界から一つの魔剣が根絶する事となる。

継承された魔剣はその魔剣のベースである術式を継承している為その性能は基本的に変化しない。が、その能力を扱いきれるかどうかは継承者の所有魔力量、適性に依存する。

ロゼ「まあつまり、僕は死に際のリフルからグラシアを継承したってわけだね。リフルも僕の父上が死ぬ所に居合わせて継承してみたんだし」

うさ子「じゃあ、うさも誰かが死ぬ時に立ち会わせたのかなあ……？」

ロゼ「ミュレイのように代々一族に伝わる魔剣だとかいう場合もあ

るし、まあそのケースは様々だね。唯一決定的なのは、魔剣は元々所有している人間が誰かに継承しようとしないと継承できないってこと。つまり普通は絶対に奪えないんだ」

うさ子「はうはう？ タケル君とかホクト君は？」

ロゼ「それはガリュウの固有能力……。術式と名のつく物ならなんでも奪う事が出来るんだ。そして再現する……。魔剣は通常発動するのに体内の魔力を使うんだけど、ガリュウの場合は剣そのものが自立性を持っていて取りこんだ命をストックしてるんだ。つまり外部に補助バッテリーがあるってこと」

うさ子「だからあんなにポンポン剣が出せるのっ！！」

ロゼ「それでも枯渇するくらいだし、制御は凄く難しいみたいだけどね……。ちなみにこれは不思議な事なんだけど、魔剣は継承前と継承後で若干形状やデザイン、大きさが異なる場合があるんだ。能力は変わらないけどね」

うさ子「……なんでなの？」

ロゼ「一つだけ確かな事は、魔剣式は所有者の精神と深い繋がりがあるって事かな。所有者に性格や背負っている過去によって若干その形状が変化するみたい」

うさ子「はうはう……なんだか色々急に言われて頭がこんがらがっちゃうのー……」

ロゼ「魔剣にはまだ色々と秘密があるみたいだけど、それは今後の展開をお楽しみに」

うさ子「……なんでうさの術式、太股にあるの？」

ロゼ「腕にもあるでしょ？」

うさ子「あ、ほんとだーっ！？ な、なんで？ なんで二個あるのかなあっ！？ 他にもあるかなっ！ー！」

ロゼ「だからって脱ぎ出して探そうとするなッ！ー！」

ロマンス(3)

「しかし、既にお祭り騒ぎの最中だったとはな……ッ！」

転送魔術によりインフェル・ノア内部に潜入したホクトたちは地下部へと向かい走り続けていた。ミュレイが囚われている牢屋へと続く道へと最短ルートで走る彼らだったが、その行く先には次々に剣誓隊が立ちふさがる。先頭を走るホクトがガリユウでエクスカリバーの所有者達を一気に薙ぎ払うが、ぞろぞろと現れる敵の機動兵器と騎士たちを前に流石のホクトも疲れ気味だった。

「こいつは骨が折れるな……。しゃあねえ、手分けするか……」

「手分けでござるか？　しかしどのよう……？」

「牢屋を探さなきゃならねえから……。とりあえず俺はこのまま内部で剣誓隊をぶっ潰す。丁度いい機会だからな、姫様の救出はお前らに譲ってやるよ」

「ホクト、何を勝手な事を！」

「そつちにはイスルギも居るし、それにシエルシ……お前だって強くなつたんだろ？　せつかくメリーベルに調整してもらったんだ、調子のいい内にガリユウで連中を駆逐する」

駆け寄る機動兵器が放つミサイルを切り払うと同時に影で分解し、次々と放たれる弾丸の雨を大剣を高速回転させて防ぐ。反撃で剣を投擲しながらホクトは爆風を受け白い歯を見せ笑った。

「兎に角俺は俺の好きにやらせてもらうぜ。俺が派手に暴れれば暴れるほどそつちもやりやすくなんだろ!？」

「……………。まあ、確かに……………。わかった、私たちはミュレイを探す。ホクトはこのまま時間を稼いで」

腕を組んだメリーベルがそう呟くとシエルシは不安そうな目でホクトを見やった。その隣に並んだイスルギは魔剣を召喚しその手に構え、ホクトへは視線を向けずに敵を見据えて言った。

「任せても構わないんだな？」

「そつちこそ、姫をちゃんと護れよ」

男二人はそれ以上言葉を交わす事はなかった。二人は勝手に納得して別々の道を歩き始め、残った三人は互いに顔を見合わせて各々のリアクションを返した。メリーベルとウサクがイスルギに続いていき、残ったシエルシは何かを決意するかのように頷いてホクトの背中を叩いた。

「必ず迎えに戻ります。だから、死なないで下さい」

「俺を誰だと思ってるんだ？ 俺は魔剣狩りのホクト君だぜ？ そつちこそ、勝手にくたばるんじゃねえぞ」

シエルシの頭をくしゃくしゃと撫で、ホクトはガリユウを肩に乗せながら走っていく。通路の向こうで爆発が起こり、轟音が鳴り響いた。それに背を向けてシエルシは迷いを振り払うかのように走り出す。

当たり前のように、彼女はホクトについていきたかった。けれど

も今やるべき事はミュレイの救出である。そしてホクトについていたところで自分は足手まといでしかないということを彼女は理解していた。共に戦えぬのは悔しかったが、しかしいつかは並んでみせると誓った。ミュレイを救出さえすれば、ホクトのところに行けるだろう。今は逸る気持ちを抑え、ミュレイを探すしかない。

「……………さあ、ミュレイさんを探しましょう。この世界の……………希望を絶やしてしまわない為に　！」

一方その頃、インフェル・ノア外廓通路　。ガルガンチュアが飛ぶ空の下で魔剣を構えながら走るアクティの姿があった。昴は猛然とアクティへと襲い掛かり、取り付く島も無い。剣による射撃攻撃を続けるアクティだったが、剣の閃光は次々に昴に切り払われてしまう。

間合いを詰めて昴が放ってきた氷結の衝撃を魔剣で防ぐが、アクティの足元は風が吹きぬけると同時に凍結する。マントと髪が一瞬で凍りつき、あまりに急激な温度の低下に苦しみながらも昴の追い討ちの斬撃を防御する。

「昴ッ！！　ねえ、昴聞いてよ！！　ボクだよ……………わかんないの！？　ボクたち、昴を助けに来たんだよっ！！！」

「侵入者を排除……………抹殺する。それが私の役割だ」

翳した昴の掌を中心に時空が歪み、放たれた衝撃でアクティは魔剣ごと弾き飛ばされる。凍った皮膚が剥離し血が流れても少女は諦めず、落下してくる魔剣をキャッチしてそれに片手を翳した。

「モードチェンジ……………！　リロード、“ダガーバレット”ッ！！！」

ライフルの形状をしていた魔剣は光に包まれ、アクテイの手の中で形状を変化させる。二丁の拳銃の姿になった魔剣を同時に昴へと向け、その引き金を連射する。次々に放たれる剣。それを薙ぎ払い、昴は刀を逆手に構えて思い切り振り下ろした。遠距離から放たれる、魔力による斬撃。触れる全てを凍結させ砕く刃……。アクテイはそれを横に回転しながら回避し、反撃で引き金を引き続ける。二人は互いに踊るように距離を近づけ、何度も攻防の度火花と閃光が瞬いた。

「目を覚ましてよ、昴ッ！！ 昴は何の為に戦ってるの！？ ミュレイを護る為なんでしょ……？ 皆を護るって言ったじゃんかッ！
！ なんでそうなっちゃうんだよお、昴 ツ！！！！！」

「死ね」

アクテイの叫びに耳を貸さず、昴は至近距離で刃を振るう。その閃光は見事にアクテイの首を刎ね飛ばす。はずだった。しかしそれは叶わない。昴が放った斬撃は、突如乱入してきたミュレイの扇により受け止められていたからである。

至近距離で刃を交え、見詰め合う姫と騎士。昴が破魔の力を発動し、炎魔剣ソレイユごと自分をを斬り殺そうとしていることに気づき、ミュレイは身を離すと同時に昴の鎧に触れた掌から火炎を放つ。まるで砲撃でも受けたかのように炎を巻き上げながら昴は吹き飛び、外廓の上を転がりながら燻った。

「ミュレイ……ヨシノ……」

「昴……」

二人は見つめあい、そして昴はゆっくりと立ち上がった。白神装

武の力に護られている昴はあの程度の攻撃では倒れない。それは判りきつていた事だ。ミュレイは悲しげに視線を伏せ、眉を潜めた。握り締める拳。こんな事になってしまったのは誰かの所為というわけではない。全ては必然的、しかしそこにあえての責任を問い、所在を明らかにするとするならば……それはきつとミュレイ・ヨシノ、彼女の胸の内にあるのだ。

昴を召喚し、昴と共に戦い、彼女と心を通わせ共に在り続けてきた。それら全てを間違いだつたと否定したくは無い。だが事実として、ミュレイさえ何もしなければ昴はこんな目には合わなかつたのだ。もしも、もつとミュレイに昴を護れるだけの力があれば……。もしも、昴が戦いなどしなければ……。もしも、もしも……。彼女がこの世界に現れなければ。全ては過ぎ去つた過去の事。思い返したところで意味などない、終わつた事だ。だが……。

黒い風が二人の間を駆け抜けていく。ミュレイはそつと目を閉じ、直ぐに開いたその時には既に甘さも弱さも捨て去つた強い目をしていた。片手を翳し、そして振るうようにして扇を開く。剣の名を持ち炎を操る大魔道の力……。今それを彼女に向ける事に、迷いなど何一つ存在しない。

「すまぬな、昴……。わらわにはこうする以外……。これ以外に思いつかぬ……。のう、昴……。？ わらわはな、妹一人救えなかつた愚かな女じゃ。昴、お主の事も救えぬかもしれぬ。じゃが仮にそうだったとしても……。わらわは」

天に光、炎の剣を翳す。究極の力を持った魔剣使い同士の戦い。ヨシノの力を継ぐ者たちの戦い。白騎士は剣を両手で構える。ミュレイは振り上げた炎の力を振り下ろし、その真紅の瞳を輝かせ。護るべき者、護られるべき者、すれ違うそれぞれの想い……。今は戦うしかない。それ以外に何も思いつかないから。だから、戦うしかない。

ミユレイが炎を巻き起こし、昂は破魔の力でそれを叩き割る。ミユレイは息つく暇もなく次々に魔術を発動し、炎の嵐が昂へと襲い掛かる。外廓全体が紅い光に包まれる中、昂は低空で跳躍し、全てを薙ぎ払うかのようにその白き光を振り回すのであった……。

ロマンス(3)

『……………。お前か…………ステラ』

ハロルド王が座する玉座の前、歩く小さな影が一つ…………。顔を上げたのはうさぎの少女。彼女は巨大な黄金の王を見上げ、それから寂しげな笑顔を浮かべた。王は目を細め、玉座の上で頬杖をつきながら少女を見下ろしていた。

「……………久しぶりなの、ハロルドちゃん……………」

『ほう…………？今の貴様はステラか…………？それとも…………“彼女”なのか？』

「うさはうさだよ。どっちでもないの。ねえ、ハロルドちゃん…………もう、終わりには…………。もう、全部終わりには…………出来ないのかな…………？」

『何を今更…………。全てはアニマの器の…………ハロルド・ロクエンティアの為に存在する。この物語は彼女が見る夢なのだ、ステラ…………。全ては夢に始まり、夢に終わる…………それが自然の摂理』

「でもっ！ ハロルドちゃんだって本当はこんな事したくないんでしょっ！？ うさ、わかるの！ うさは…… ハロルドちゃんと同じだから……っ」

胸に手を当て、うさは叫んだ。そうしてゆっくりとハロルドに歩み寄り、耳をぺったんこにへたれさせながら王を見上げる。その瞳は涙で潤んでいた。ハロルドは一度目を瞑り、それから優しくな目で唸る。

『……もう取り返しはつかぬのだ……。余の目的は、ロクエンティアの開放……それ以外に何も無い。名にもないのだ、ステラよ。貴様も余も、ただそのためだけに生み出された……』

「ハロルドちゃん……。皆で仲良く……。皆で、仲良くここに手をとりあってね……。そういうの、とっても素敵なの……。あったかくて、気持ちよくて……。！ ハロルドちゃん、判ってほしいのっ！ うさはね、ステラはね……っ」

『もう、良い……。さあ、ここを立ち去るが良い偽りの器よ……。さもなければ余は貴様を斬らねばならぬ。出来れば同胞の血など見たくはない』

祈るように呟き、王は立ち上がった。それと同時に部屋全体を被っていた隔壁が一斉に上がり、ミレニウムシステムが露となる……。中心部に現れた水槽の中、金色の光の中で浮かぶ幼い少女の姿……。その少女はゆっくりとその目を開き、口から泡を吐きながらうさ子を見据えた。

『余はシステムと一つになり、既に百年……。もうどこにも帰る場

所もなければ、他に成すべき事もないのだ。この場を離れれば数刻と持たず倒れるこの身に一体どんな希望がある？ ステラよ。ステラ・ロクエンティアよ……。全ては遅すぎたのだ。時の針は戻らぬように、その流れを留める事は最早叶わぬ』

「ハロルドちゃん……」

『さあ、立ち去るのか……。それとも余とやりあってみるか？ いか にアニマの器とて、余の“魔剣”には勝てぬぞ』

うさ子はしょぼりした様子で俯き、ぼろぼろと涙をこぼした。

ハロルドはそんなうさ子へと剣を向け、切っ先に悲しみをの色を宿して静止していた。それから永久にも、無限にも等しい時間が流れた。張り巡らされた水槽に浮かぶ、沢山の記憶。うさ子と呼ばれた少女が失い、そしてこの半年の間に思い出した事……。ハロルド王の、罪を背負った一人の王の物語……。

記憶は波に流されてしまう。事實はただ時の経過という事だけを経て想い出に変わってしまう……。どんなに大切な事も忘れてしまえばただの失われた記憶の残滓に成り下がる。もしも、もつと早く……。もつと早く、うさ子という意思が生まれていたのなら……

この孤独な王を救う事が出来たのだろうか？

少女は両手で涙を拭い、唇を噛み締める。それでも涙を留める事は出来なかった。ぼろぼろと、ただ零れ落ちる光の雫……。ハロルドは優しくにそれを見つめ、刃を下ろす。

『さあ、戻りなさい……。ステラ。君の居るべき場所へ……』

「駄目だよ……。駄目駄目、駄目なの……。うさはね……。決めたの。もうね、誰も悲しまない世界が欲しいの……。誰かが泣いたり、苦しんだり、憎しみあったり……。そんなのはもういらぬの。悲劇な

んかいらないのっ」

『ステラ……』

「だからうさはね、戦うの……っ！ うさはね……悪いうさだよ……。何にも出来ない……ただのうさだよ。でもね……ハロルドちゃん？ きつとそれでいいんだよ。うさたちはっ！ それでも生きていたいんだよっ！！」

うさ子が両腕を広げると同時にその腕に魔剣ミストラルが構築される。だがそれは今までのミストラルとは違っていた。より鋭く、より美しく。少女の肩からは二対の光の翼が生えていた。うさ子は涙を流しながらその両手の指を固め、拳を作る。

「ハロルドちゃん、ごめん……ごめんなの。うさはね、馬鹿だから……。うさの脳はね、ちっこくてみんなより馬鹿だから……。こんなやり方しか、思いつかないんだ……っ」

『……ならばそれに応じよう。ステラ・ロクエンティア……貴様を我が障害と認識する。理想の為に我が剣の露と消えよ 友よ』

光の翼を広げたうさ子が走り出す。その拳が瞬く雷を迸らせる。揺れるインフェル・ノア……。うさ子が雷を放つとほぼ同時、外廓では炎が巻き上がっていた。

次々と魔術を発動するミュレイだったが、昴は破魔の力でそれを尽く無力化してしまう。正面から魔剣で斬りあう事が出来るほどミュレイの剣は戦いに向けた形状はしていない。だからミュレイはただ自分の思いを込めて自分出来る事をするのだ。炎を一刀両断する昴の……妹の剣を相手にして。

「……………のう、昴……………？ お主は……………本当に強くなったな……………。最初は魔剣使いどころか、何も出来ないただの気弱な女子だったお主が……………今はここまでわらわを追い詰める」

式神を召喚したところで昴はそれを一撃で分解してしまう。

破魔の力は対魔術戦においては絶対無敵、まるでミュレイに勝ち目はなかった。昔からそうだった。妹のミラと喧嘩をして、ミラに勝てた事など一度もなかった。

昴の剣を扇で防いでも吹き飛ばされ、衝撃波を障壁で防いでも防ぎきれない。ミュレイは何度も外廓の上を転がりまわり、その全身は傷だらけだった。体中が軋んでもそれでも立ち上がる。そう、諦めるつもりなど微塵もなかった。

彼女との想い出を一つ一つ、痛みの中で何故か悠長に思い返していた。記憶を振り返りながら、戦いの中でミュレイの身体は何度も傷つき倒れた……………。それでも心の中にはこんなにも想い出が溢れてくる。どうしようもない、消し去る事など出来るはずのない思い出……………。血を吐き、ミュレイは顔を上げる。何故だろう、笑えて来る。こんなにも自分は弱くて脆い。そしてこんなにも……………昴を救いたいと思っている。

「わらわは……………何をしてきたんじやろうな……………。何を……………成せたと言うのじやろうな……………」

両手を広げ、その手からソレイユが零れ落ちた。昴は一直線にミュレイへと駆け寄ってくる。ミュレイはそれに対し何もしなかった。抵抗は愚か、防御の姿勢もない。必然、昴の構えた刃はミュレイの胸を深々と貫いた。根元まで突き刺さり、そしてミュレイは昴の身体を抱きしめる。

他に昴を止める方法が思いつかなかった。早すぎる昴の足を止めるにはこれくらいしか考え付かなかった。だから、仕方が無い……………。

ミュレイは涙を流し、昴の身体を強く強く抱き閉めた。昴が暴れる度に突き刺さったユウガはミュレイの身体を食い破っていく。それでも それでも構わない。

「昴……今……助けて……やるから……」

昴の身体に直接触れ、ミュレイは術式を発動する。ソレイユの力を昴の身体に送り込み、昴の全身をくまなく探し回った。するとそれはあっさり見つかったのだ。昴の身体を意図せぬ力で動かす原因……。その術式に魔力で干渉し、それを破壊する。光が昴の身体を走り、騎士は悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。その苦しみを少しでも和らげてあげられるようにとミュレイは強く、優しく昴を抱きしめ続ける。彼女の紅い衣は気づけばより紅く、濃すぎる命の色に染まっていた。

「あ……ああ……あ……っ」

「昴……覚えておるか……？ 色々な事が、あつたなあ……。色々な……どれか一つ選べないくらい、色々な……。全部、楽しかった……幸せだったよ。だからわらわは……。なあ、昴……」

血に染まった手で昴の頬を撫でる。ふと、突然正気に返った昴は自分の目の前にミュレイが居る事に気づき、そして一瞬で状況を把握する。信じがたい出来事に思わず絶句する昴……。その顔についた傷を撫で、ミュレイは蒼い顔で微笑んだ。

「かわいそうに、こんなに傷だらけにされて……。わらわの可愛い、可愛い昴……。もう、大丈夫じゃ……」

「……ミュレイ……？」

「もう、誰も……お主を傷つけません。わらわがずっと……ずっと、傍でお主を護るから……。だから……大丈夫じゃ」

「ミュレイ……ミュレイッ！！ ミュレイ、血が……剣があっ！！」

「……お主の声が……好き、じゃ。わらわの名を、呼んでくれる……その、声が……。わらわ、は……」

二人の背後、夜の闇で爆発が起こった。瞬く炎の光に照らされ、影の中で昴はミュレイを抱き上げていた。ミュレイが急に黙り込み、昴の背中を嫌な予感が過ぎった。慌てて肩を揺さぶるも、彼女は何も応えない。

「ねえ、ミュレイ……。ミュレイったら……。ねえ……。起きてよ……。目を覚ましてよ……。！ ねえ、ミュレイ……。！！ ミュレイッ……！！！」

昴が絶叫すると同時に、その声を掻き消すように空に再び光が瞬いた。その瞬きは城内を走るシエルシたちの横顔も照らしていた。シエルシたちの行く先に立ちふさがる女が一人……。その顔を見つめ、シエルシは息を呑んだ。あまりにもその顔は似すぎていたから……。探し人に、しかし決定的に違う何か……。蒼いドレスの姫は冷めた微笑を浮かべ、血の雫をこぼしたように赤い瞳で言った。

「こんにちは、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……」

「貴方……は……？」

「初めまして……ではないんだけどね。幼い頃に会っているわ、何

度か……。でも、きっと忘れてしまっているのよね。だから名乗ってあげる。貴方の為にも、私の為にも……」

女はその手の中に魔剣を召喚し、それを振り回す。力を加えられた刀身は無数に間接を分離させ、まるで鞭のように撓って大地を打った。女はまるでそうする事が自然な事であるかのように、笑顔とはかけ離れた刺し殺すような威圧感を湛えた笑みで、その名を口ずさむ。

「私の名前はミラ……。ミラ・ヨシノ。“改めまして”、シエルシ。これからどうぞ、よろしく」

闇の中に再び光が瞬き、二人の横顔を照らし出す。ミラは目を細め、ゆっくりと靴音を立てて歩み出した。そこに感じるものは単純な恐怖。そして、言葉では形容不可能なただならぬ殺気であった。

大罪（1）

「ミラ・ヨシノ……？ でも、貴方は死んだはずでは……」

「そう、死んだわ。死んだけど、生き返ったの……。どうしてだか判る？ 貴方に私の気持ちが判る？ ねえ、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……」

突きつける刃。瞬く炎の光に照らされて影は何度も揺らめいた。シエルシは息を呑み、思わず身構える。目の前に居るのが本当にミラ・ヨシノなのだとしたら。それは、どんな事実を意味しているのだろうか？

ヴァン・ノーレッジが愛した女性……。この物語の悲劇の中で消え去ったはずの命。ミュレイ・ヨシノの妹、そしてシエルシとよく似た境遇にいた人物……。一度は死んだという彼女の言葉の意味、そしてその敵意と同義の笑顔の意味……。混乱の中、戸惑うシエルシを見て笑いながらミラは歩く。ゆっくりと、靴音を響かせて。

「まあ……貴方に特に用はないの。私にとって重要なのは……バテoncایتスの魔女、貴方よ。そう容易く世界を股にかけられては、ゼダンの面目がないの」

「ゼダン」

「ゼダン……？ ゼダンとは……？ メリーベル、貴方は彼女について何か知っているんですか？」

「知っているからこそ、この世界に居る……そうでしょう？ この

世界がどれだけの悲劇を歴史として紡いできたのか……。そしてこの世界が一体なんなのか……。貴方は全てを知り、知った上でこの世界を利用している……。何も貴方の命を奪いたいわけじゃない。ただ、余計な手出しをしないほしいだけ……。」

イスルギが魔剣を構え、ウサクが両手に小刀を装備して前に出る。しかしミラはそれを意にも介さない。冷や汗を流すシエルシの傍に歩み寄り、そうして微笑んだ。背筋も凍りつくような、刺すような瞳で。

「……私、貴方が羨ましい」

「えっ？」

「貴方の事が羨ましいと言ったのよ……。シエルシ。貴方は皆に愛されてる。貴方は皆に護られて……。貴方は皆に必要とされている……。ね、そうでしょう兄さん？」

目を細め、シエルシを下がらせるイスルギ。兄であり王子である男は妹であり姫である女と対峙する。イスルギの表情は複雑であった。死者は蘇らないのだから、ならば目の前のそれは幻か偽りの類である。しかしそれは実態を持ち、亡き妹の声で、顔で、確かに存在しているのだ。槍を突きつけるイスルギ……。その切っ先を握り締め、ミラは目を見開く。

「兄さんは、姉さんどころか私も護ってくれなかった……。なのに、兄さんはその子を護ってるのね……？」

「……ミラは死んだ。貴様は何者だ……？ いや、貴様が何であるうと私には関係の無い事だ。私はただ、貴様を排除するのみ……。」

「私に刃を向けるの……兄さん？」

「仲間に危害を加えるのであれば……止むを得まい」

イスルギが槍を振り上げた刹那　ミラの唇がゆつくりと動き、何かの言葉を紡いだ。シエルシにはそれが、“だったらしようがないね”という風に動いたように見えた。勿論聞こえたわけではないし、彼女に読唇術の覚えがあるわけでもない。それでも何となくそんな風に笑ったように見えたのだ。

ひゆるりと、音を立ててしなる刃が大地を削り火花を散らす。振り上げた槍は下ろされる事は無く、イスルギに腕は高速でうねった刃の腹にて一瞬で切断されていた。槍を持ったままの腕が血と共に舞い上がり、ミラは実の兄の腕を片手でキャッチし、変わらぬ笑顔に返り血を添えて微笑んでいた。

よるけるイスルギを背後からウサクが支える　と同時にシエルシは走り出していた。まるで　まるで見えなかった。どんな速さで剣を動かせばイスルギの腕を、あの騎士の腕を刎ね飛ばせるというのか……。先ほどからずっと、ミラから強い違和感を覚えていた。それがなんなのか、なんとなく理解する。彼女は　死んだはずだとかそんなこととは無関係にそもそも……異常なのだ。その放つ魔力も、その在り方も、まるで“間違い”が、“矛盾”が服を着て歩いているような、そんなおかしさ……。

勝算は無かった。しかしこのままではミラは何の躊躇も無く兄を微塵に切り刻むだろう。恐らくはあの冷たくも美しい微笑のままである。そんな事はさせないと誓った。故に魔術を発動する。放つ光の刃　それが舞い踊るような動作と共に繰り出されたミラの剣で木っ端微塵に碎かれ、そのままの勢いで刃がシエルシへと飛来する。　。目前に切っ先が迫って漸く自分が死に瀕しているのだと気づき、シエルシが声を上げる間も無く無情にも血の雫は空へと舞い上

がった。

黒い……黒い、雨が降り始めていた。世界の全てがモノクロに見えた。血に塗れたミュレイを腕の中にそのまま、昴は涙を流しながら両目を見開いていた。あんなにも護りたかった人が自分の腕の中で、しかも自分の剣によって貫かれている……。それは俄かには受け入れ難い現実だった。

肩を震わせ、昴は思考を停止する。自然と脳裏を流れる様々な記憶、思い出……。いつも見守ってくれていた、姉のような優しいミュレイ……。二人の関係はどこかおかしく、しかしどこか微笑ましく、そして確かに暖かかった。ミュレイにとって昴はもしかしたらミラの代用品だったのかもしれない。昴にとってミュレイはただの都合のいい居場所だったのかもしれない。互いに利用しあっていた、それだけの関係なのかもしれない。それでも今の昴は信じられるのだ。それだけでは、ただそれだけではなかったのだと。

ミュレイと共に過ごした時間は本物だった。別に……良いではないか。利用しても。何かの代わりでも。それでも手を取り合い歩み、そして心を埋めあつたのは事実なのだから。ミュレイは確かに昴にとって大切な人だった。確かに、彼女は心を通わせたのだ。

「ミュレイ……。私……私ね、ミュレイが居なきゃだめなんだよ……。ミュレイが……。ミュレイが必要なんだよ……。お願いだよ……。目を覚まして……。また昴って呼んでよ……。また抱きしめてよ……。ねえ、ミュレイ……。ミュレイったら……。っ」

何故、こんな事に……。とか。どうすればよかったんだ……。とか。様々な念が思い浮かんでは消えていく。しかしそれらにどれだけの価値が、意味が、あるというのか？ そんな物は意味がない。全く

の無意味、無駄足、徒労。 。 済んでしまった事は変えられない。過去は変わらないのだから。けれどももしも……もしも。その過去を変える力を、持っているのだとしたら……？

昴の脳裏をユウガの誘惑がちらついた。けれどそれを飲み込み、昴は歯を食いしばった。やり直せるのか……？ やり直して、それでいいのか……？ 覚悟は決めたはずだった。なのにこんなにも力は魅力的だ。失った物を、貴方の大事な物を修復してあげましょうか？ 剣は無言でそう昴に問いかける。少女は目を瞑り、拳を大地に叩きつけて叫んだ。

「出来ないよおっ、ミュレイいいいいっ！！ 出来ないんだよお、そんなのはもうっ！！ だって……だって、私はあああああああッ！！！！」

「私は……なんだって？」

声は背後から聞こえた。涙を流しながら振り返るとそこには昴へと駆け寄る影が一つ。 繰り出された蹴りが昴の顔に直撃し、昴の身体は派手に吹っ飛んでいく……。その身体を駆け寄ってきたアクティが支え、二人は同時に見たのだ。そこに居る男の姿。 。 黒衣に身を包んだ長身の男は目を瞑り眠るミュレイの身体を抱き上げ、眉間に皺を寄せて震えていた。弟 タケル・ヨシノと呼ばれた少年だった男は昴を見やり、それからミュレイの身体を揺さぶった。

「姉さん……姉さん！ しっかりしてよ……僕の……僕だけの、ミュレイ姉さん……っ！ ああ、くそう……こんなに血まみれになっ………かわいそうに 着物が汚れちゃったじゃないかあっ！！！！」

「昴、大丈夫!? あいつ……な、何? よくわかんないけど……
滅茶苦茶だよ……」

探查能力に優れていなくとも、アクティは直感的にその恐ろしさを実感した。昴ぶる感情に反応しタケルの全身には術式の紋章が浮かび上がっている。血走った瞳から涙を流し、肩を震わせて怒りを湛えた目で昴を睨む。そうしてミュレイをそっと下に下ろすと頭を抱えて絶叫した。雨が降り始めたインフェル・ノアの上、タケルはその髪を振り乱して呼吸も荒く叫び続ける。

「姉さんが……僕の姉さん、姉さん姉さん姉さん、あああああああああああッ!!!!! ちくしょう! ちくしょう、くそ、くそ、くそがあッ!! 昴ううううう……!! てめえ、よくも姉さんを……動かねえだろがよお、クソがああああッ!!!」

黒い魔力が一齐に解き放たれ、インフェル・ノアの空に黒い光の柱が立ち上る。闇の波動はただそれだけで昴とアクティを吹き飛ばし、二人はなんとかやっとの思いで外廓にすがり付いていた。

「許さねエ……。その身体を刻んで刻んで、刻みに刻んでガリユウに取り込んで復元してからまた切り刻んで、それを百日続けてやるよクソ女……!! せっかく人が今日まで面倒見てやってたっつえのに恩を仇で返しやがって……ッ!! あああクソッ!! 絶対にブチ殺してやる……ラクに死ぬると思うなよ……!!!」

「す、昴……やばいよ……に、逃げた方が良くない……? 何なの、あれ……! ただの魔剣使いじゃない……」

「……………アクティは……逃げて」

昴は唇を噛み締め、立ち上がる。ユウガを再構築し、それを握り締めて前へ……。血走った瞳のタケルはガリユウを召喚し、まるで獣のように大地を這うようにして襲い掛かってくる。予測不能な軌道からの斬撃を受け、昴は必死で剣を振るう。アクティが昴を援護しようとして魔剣を構えるが、ガリユウの瞳がそれを捉え、口を開いてそこから光を放った。アクティ目掛けて放たれた光の矢は魔剣で防御したものの、少女の身体をずたずたに傷付け、雨の中にその小さな体躯を倒してしまう。

「アクティツ!?」

「余所見してんじゃねえぞコラアアアアアアッ!!!!!!」

振り下ろされるガリユウとそれを迎撃するユウガがぶつかり合い、激しくスパークする。何度も火花を散らしながら攻防は続くが、常に攻めの主導権はタケルにあった。その激しい猛攻を前に昴はただ受けに回るしかないのだ。ガリユウの一撃は重く、受ける度にユウガの刀身に輝が広がり、それを握る昴の手からは血が流れていた。

「タケル……? タケルなのか……!?!」

「人の名前を気安く呼んでんじゃねえよ売女がッ!! 俺の姉さんを殺しやがって……絶対に許さねえッ!!」

防御しようとした昴の腕を掴み、ガリユウがそこに喰らい付く。肉ごと、骨ごと、ガリユウは噛み砕いて引きちぎった。昴の右腕は無残に擡げ、既に剣を持てる状態ではない。殆ど皮一枚でぶら下がったような状態であり、止まらない血と痛みというより激しい熱に似た感触が昴を襲う。タケルがその隙に剣を鎧へと叩きつける。とあれだけ強固だった白神装武は砕け、白い鎧の破片が舞い散るの

であつた。

更に繰り出される蹴りが昴の脇腹に減り込み、ごきりと嫌な音を鳴らす。体中を血が逆流するような奇妙な感触と同時に口から一気に吐瀉物と同時に血が驚くほど飛び出してきた。空気が抜けるようなかすれる音で呼吸をする昴の左足をガリユウが襲い、大地ごとその足を抉り去っていく。立つ事もままならず倒れた昴の肩に刃を突き刺し、ぐりぐりと上下に動かしながらタケルは昴を踏みつけた。

「……………弱すぎだろ、雑魚がよお…………。雑魚の癖に…………雑魚の分際で…………俺の姉さんを…………姉さん…………ミユレイ姉さん…………大好きな僕の姉さんッ！！！！。なんでテメエみたいな糞以下の糞女に殺されなきゃならねえんだよ、あああッ!？」

倒れた昴は口と鼻から絶え間なく血を流しながらも、残された左腕を剣へと伸ばしていた。タケルはそれに目を見開き、笑いながらガリユウを更に肩に深く食い込ませていく。信じられない激痛に最早悲鳴なのかなんなのか判らない奇妙な声を上げ、昴は気を失った。しかし直ぐに痛みのがあまり目を覚ましてしまう。タケルは剣から手を離し、昴の首へと両手を伸ばした。そうして握り締めた細く白い首へと思い切り力を込め、鈍い音と共に骨を折ってみせる。昴はそれでまた気を失い。今度は直ぐに目を覚ます事は無かつた。

死んだと…………そう思った。どう考えたって勝てる相手ではなかつたのだ。だが心のどこかでこうして無残に殺される事を望んでいる自分が居たのかもしれない。護るべき人をその手で殺めてしまった空しさ、後悔…………。この程度で全てが許されるなどとは思っては居ない。だが、これで少しは罰を受ける事が出来たのだろうか…………。

意識が途切れた。何も無くなつた。死ぬ…………。そう考えた時だつた。昴の心の中は極限まで研ぎ澄まされていた。何もかも失つたと思つたその瞬間に、心の中で蘇る鮮やかな色…………。真っ白

な世界が急に茜色に染め上げられ、幼き日の夕暮れの中に彼女は立っていた。

そこには彼女へと手を差し伸べる兄の姿があった。兄は昴の手を握り締め、それから問いかけるのだ。“どうした？” “なんでへこたれてる？” そうやって笑うのだ。昴は目を瞑り、それから寂しげに微笑んだ。何故だろう？ 今はとても心が穏やかだった。彼は自分の所為で死んでしまった……失ってしまった大切な人。そして今またそれを繰り返している。

一度は何も出来ず、二度目も何も出来なかった。だから今度こそはと三度目の正直で白騎士となった。しかしそれで何が出来たというのだろうか……？ 結局ミュレイは護れなかった。やり直しても結果は結局ここに落ち着いた。もう、戦う事が嫌になってしまった。疲れてしまったのだ……。膝を抱え、座り込む。夕暮れを背に、兄の顔は見えなかった。もう、思い出す事が出来ない彼の顔……。兄はそれでも心の中に生き続けている。

何の為に戦うのだろうか……？ 何の為に生きたのだろうか……？ 全てがもしも無意味だったのならば、こんな優しい記憶なんて思い出させないまま無慈悲に殺して欲しかった。涙を流し、世界の中で一人震え続けた。そんな昴の肩を叩く人の姿があった。紅い着物に身を包んだ、紅い瞳の君……。ミュレイは膝を抱えた昴を背後から抱きしめ、優しく頬を寄せる。昴はそうしてミュレイの声を聞いた気がした。ミュレイの存在を確かめた気がした。その刹那 唐突に何もかもがどうでも良くなり……。

「……………そうか、やっと判ったよ……………ミュレイ。わかったんだ
お兄ちゃん」

死んだと思った昴が目を見開いた。一度は止まった心臓が激しく動き出す。昴は見開いたその瞳でタケルを捉え、その首を片腕で掴む。一瞬怯んだタケルを謎の白い光が弾き飛ばし、男は遙か彼方で

白煙と共に停止する。その身体は凍て付き、タケルは黒い炎で氷を溶かしながら昴を見やった。

足を失い倒れていたはずの昴がそこには立っていた。破魔剣ユウガの刀身が巨大化し、斬馬刀へと姿を変える。同時に刀身が巨大な光を発し、昴が伸ばした千切れかけた腕がまるで“巻き戻し”の映像のようにするすると修復されていく。気づけば五体満足に戻った昴は顔を挙げ、目を見開いて笑顔を浮かべた。それは気弱な少女が……。 たった今最愛の人を失った少女が浮かべる笑顔だとは思えないほど清く、力強い笑顔であった。

「これが……魔剣の本当の意味……！　これが私が抱える大罪なんだ……っ！　ミュレイ、私は自分勝手だよお……っ！　判ったんだ！　判ったんだよお！！　ふふ……アッハハハハハハッ！！！！！」

「……… テメエ、何笑ってやがる……… ツ！！　姉さんを……… 姉さんを殺しておいてええええええええッ！！！」

「違うね……。それは……… ミュレイが勝手に死んだんだよ　ツ！！！！！」

昴の姿が消え……。直後、上空に煌く白刃があった。厚い雲が割れ、合間から月明かりが差し込んでくる。背を背中に浴び、昴はタケルへと襲い掛かった。ガリユウは一撃で両断され、タケルの身体にまでダメージは貫通する。半身を殆ど切り落とされかけた瞬間その肉体を修復するが、昴は着地と同時にタケルの首を刎ね飛ばした。

血飛沫をシャワーのように浴びながら昴はうっとりとした表情で刀に付いた血を舌で舐め取った。こくりと音を鳴らして唾と一緒に飲み込んでみる。それはとても甘美で、とても苦々しく、そしてうっとりするほど下らない有象無象の味がする。昴はその刃に付

いた血を振り払い、そして目を瞑った。

「ミュレイ……大好きだ……。ミュレイ……貴方を愛してる……。もう、他の事はどうでもいいや。絶対に生き返らせてあげるからね、ミュレイ。何回でも何百回でも。別にいっくもん、こんな世界どうなつても……。勝手に滅べぶなりなんなりすりゃいいだろ」

「テメ……ッ!?」

首を繋げると同時に再びガリユウを構築するタケル。その剣を空に掲げ、封印していた魔力を一気に解き放つ。しかしそれと全く同じ構えを取った昴の口から出た言葉に。タケルは戦慄するのである。

「ロクエンティアコード“剣創”……発動ッ!!」

同時に世界に白と黒の光が瞬いた。雨雲を吹き飛ばし、衝撃はレコンキスタの街へと広がっていく。その力の渦の中心で昴は蒼炎を纏ったユウガを揮い、白い甲冑に全身を包み込んで立っていた。

「……神に干渉……!? まさか……到達したつてのか……自力で……! 自分の罪を受け入れて……ッ!!」

「私は無能なんだ、タケル。君の言うとおり糞以下の女だよ……。でもそんな事はどうでもよかったんだ。全ては些事なんだよ! 私がミュレイを愛しているというたった一つの真実以上の物なんて何もない! 世界も! お前も!! たとえミュレイ本人も!!!! 私の“愛”は絶対不可侵。ッ!! 到達した! 自分の真実に……この“愛”にッ!! ああ、ミュレイ……愛してる! 好きだ! ずっと傍に居たい……ずっとずっと傍で、貴方を見ていたい……」

…。だから、他の事はすべて切り払う。我は我が大罪の代弁者にして我が正義を問答無用で刻むのみ……ッ！！」

「そんな付け焼刃で……俺様に敵うとでも思ってたのかよオオオオッ！！ 思い上がってんじゃねえぞ、ド素人の糞女がッ！！」

「ミュレイが好きだ！ 大好きなんだ！」

「人の話を聞けっつんだよおおおおおッ！！！！」

「お前の事なんてえ！ どおおおおくくくでもいいんだよオオオオオオオオオッ！！」

相反する二色が激突し、空に光が立ち上った。眩い魔力の炎の中、昂は目を見開き高らかに笑う。血走った眼でタケルはそれに応え、二つの異形は激しく対の力をぶつけ合い、空に想いを轟かせるのであった。

大罪（１）

降り注ぐ剣の雨 それを昂はすべて破魔の力を切り払う。そも、この二人の相性は圧倒的に昂に傾いているのだ。魔剣を生み出す能力と、その魔剣を一切破壊する能力……。昂は笑い声を上げ、楽しそうに剣の乱舞を繰り出す。四方八方から襲い掛かってくる剣を一つも打ち漏らす事無く迎撃するその様子にタケルは舌打ちし、ガリユウを構築し炎を纏わせて襲い掛かった。

「俺の姉さんを……姉さんをよくもおおおおッ！！」

「違うね！ ミュレイは私のモノだ！！ お前のじゃないッ！！
私のだ！！」

「いや、俺の姉さんだッ！！」

「私のなんだよ！ そう決めた、今決めた、私が決めたああああああああッ！！ ミュレイ、好きだ……好きだああああああッ！！」

近づいてくるガリユウの切っ先にユウガの切っ先がすんなりと食い込み、すっぱりと音を立てて綺麗にガリユウは縦に両断された。すれ違うと同時に反転した昴は笑顔のまま太刀を上段に構え、切り裂いた魔剣たちの魔力をすべてユウガに収束し、それを纏めてタケルへと叩き返す。

“ 鳴神 ” 。 ユウガが持つ破魔の技の一つが炸裂し、インフェル・ノアの外廓は半分以上がその一撃で吹き飛ばされ、空飛ぶ居城は大きく傾いた。あまりのダメージに浮遊を続けられなくなった城はゆっくりと下降を開始する。上半身が吹っ飛び、下半身だけが残って倒れているタケルに背を向け昴はミュレイを抱き上げ、恋する乙女のように頬を赤らめながらその頬に自分の頬を寄せた。

「……………ミュレイ、大好きだよ」

城が落ちていく。そんな中昴は走り気絶しているアクティを拾って跳躍する。空中に停止した時間のレールを敷き、一気にレコンキスタの街へ。タケルの上半身が再生する頃には既に昴の姿はどこにもなく、タケルはガリユウをインフェル・ノアに突き

刺して空に吼えた。その一撃で更にインフェル・ノアが傾き、失速し始めたのは誰も知らない真実である。

大罪（2）

始まりは恐らく些細な誤解だった。そしてそれは徐々に大きくすれ違い、やがて決定的に取り戻せないまでに成長し、拡大し、心と心の狭間を空けていく物。

インフェル・ノアの最下層付近、ホクトは一人暗闇の中を歩いていた。淡い蒼い光に照らされたその通路の奥にはいくつもの隔壁により閉ざされた一つの部屋が存在している。ホクトは腕にガリユウの術式を出現させ隔壁横のインターフェイスを侵食、ハッキングして次々に扉を開いていった。こうしていくつの扉を潜ってきたのかは判らないが、少なくともこの与えられた“鍵”が本物である事は間違いないらしい。

やがて闇の空間の中に異質な光が現れる。その部屋はもう長年誰も立ち入った事の無い秘密の部屋だった。皇帝ハロルドのみが知るミレニウムシステムとは別に存在するもう一つのインフェル・ノアの秘密……。ホクトは扉を潜り、光の中へと進んでいく。そこにあったのは結晶の樹林だった。

UGで見たあの景色と限り無く良く似たその場所にホクトは思わず眉を潜める。そうして少しずつ、忘れ去った記憶に火を灯すのだ。かつて少年がガリユウと呼ばれる剣に人生を振り回されていた時代……。まだ無力で、一人では生きられなかった時代。生きる術を教えしてくれた人が居た。そしてそんな自分を護ってくれる人が居た。白いドレスを輝かせたその幻影を臉に浮かべ、男は黒き剣を大きく振り上げた。

『 皮肉、そして数奇な運命だな』

ホクトが結晶へと剣を叩き付けるのとはほぼ同刻、ミレニウムシス

繰り返される巨大な剣……それをうさ子は真上に大きく跳躍して回避する。剣の上に回転しながら着地するとその上を走り、空中でハロルドの顔を蹴りつける。しかしその屈強な鎧の前に岩をも砕くうさ子の一撃は減衰され、ダメージは多く通らない。

『余はずっと求めていたのかもしれぬ。変わる物を……。予定調和から外れた混沌を……。故にステラ、余は貴様の変化を嬉しく思う。それを叩き潰さねばならぬのだと知っていても　ッ！』

反撃の拳がうさ子の身体に減り込み、小柄な少女はくるくると回転しながら吹き飛んだ。何メートルも吹っ飛びながらも片手を地面に付きブレーキングを行い、足元に火花を散らせて立ち上がる。うさぎもまた無傷　全てのダメージを受身でほぼ相殺していた。手と手を叩いて目をこらすその姿に王は剣を両手で構えなおし、同じく瞳で応える。

『得心行くまで何度でも思い切り繰り返そうではないか。偽りの我が世の春に、或いは一つの終焉を齎すやも知れぬぞ　！』

「……………。うさはね、皆が幸せになる世界になってもらいたいだけなの。ハロルドちゃんには聞こえないの……？　この世界の大地が……空が。人が、心が、魂が……。涙を流して叫んでいるの。うさには判る。聞こえるの。だからそれを止めてあげたい……それだけなの」

『吹き荒れる孤独と憎悪の連鎖は容易に止められるものではない。そう出来ているのだからな、この世界は』

「だからね、それを壊したいの……。一人じゃ難しいと思うの。うさはね、あんまり頭良くないから……いい方法は思いつかないの。

ばかだから……それでも判って欲しいから……。ねえ、戦う事は悲しいことかな？」

『論ずるまでもない。言葉では判り合えぬからこそ、言葉では結論を出せぬからこそ、人は争うのだから　！』

「　大丈夫？　シエルシ」

声はすぐ目の前で聞こえた。真つ直ぐに続く回廊、ガラス張りの壁の向こうに夜の景色を映し出したその場所でシエルシは止まっていた呼吸をゆっくりと再開した。

首筋に突き刺さったミラの放った刃の蛇は間一髪の所でメリーベルの手で受け止められていた。金色の籠手、神威双対は雷を迸らせながら刃を捕らえて離さない。シエルシ目掛けて繰り出されたミラの刃は切っ先こそシエルシの首に僅かに刺さった物の致命傷とはならなかった。シエルシが庇ったイスルギは片腕を切断され、血を流しながらその場に膝を付いている。止まっていた時間が動き出すかのようにウサクがイスルギをつれて後退し、シエルシは首筋に手を当ててミラをじっと見つめた。

ミラの表情は穏やかで、まるで何も敵意のようなものは感じられない。しかしその笑顔の裏で、その綺麗な赤い瞳の奥で、軽やかで美しい音色を奏でる舌と同じ舌で、何かがある。何かがどろどろと渦巻いているのがわかった。その背筋がぞっとするような感覚には覚えがある。そう、あの日……タケルと遭遇した時も同じようななどす黒い圧力を感じた。足が竦んで立ち上がれなくなるような威圧感……。“絶望”という言葉にそれは良く似ていた。

「よく受け止められたわね、私の剣」

「……………まあ、目はいい方だから」

「そうじゃなくて……。並みの武装なら触れただけで即破壊出来るくらいのはずなんだけど」

「ご覧の通り特別製だから」

「ふうん。私の魔剣とどっちが特別な？ 力比べというのも面白いんじゃないかしら」

「退屈なだけよ」

刃をメリーベルが手放すとそれは風を切りながら主の元へと戻り、一振りの剣の形へと落ち着いた。それを片手で軽く揮い、ミラはじつと優しい眼差しでメリーベルを見据える。見詰め合う二人……その間に割って入ったのはシエルシだった。

「ミラさん！ ミラ・ヨシノさん！！ ど、どうしてこんな事を……！！？ イスルギは貴方の兄であるはずなのにッ！！」

それがどれだけ愚かな行いなのか、その場にいる全員がはつきりと認識していた。問答無用で斬りかかって来る敵に“どうしてですか”などと馬鹿げているにも程があるだろう。しかしシエルシはあえてそれをするのだ。望んでそうするのだ。一つでも迷いがあれば前に進めなくなる……。自分を誤魔化したら生きていけなくなる。真つ直ぐさと純粹だけが彼女の血液であるかのように、当たり前のようにその愚を行使する。故に　それがミラの機嫌を余計に損ねるのだ。

「……………貴方は、本当に純粹ね。純粹で……………正しく……………。まるでこの世界の汚い事なんて何一つ関係ないみたい」

「え……………？」

「私だってね、貴方みたいに生きてかった……………。野原に咲く一輪の花のように……………清らかに。でもね、駄目なの……………。もう駄目だった。私はそういう風には生きられない。そういう自分を知ってしまったから。だから」

放たれる斬撃　それをシエルシは避けようとするが、しなる刃はまるでシエルシの逃げる方向を読んでいたかのように揺れ、鋭い刃の羅列が襲い掛かる。結局またメリーベルがその攻撃を拳で弾き飛ばし、二人の女は再び対峙する事となる。

「ウサク、シエルシとイスルギを連れて先に行つて」

「し、しかしッ！！」

「それが一番合理的なのよ。私はいつでも転送魔法で逃げられるし、貴方達の場所もこっちは把握できる……………。時間を稼いで、それから逃げればいいだけの事よ。簡単でしょう？」

実際メリーベルの言うとおりにするのが正しく思えた。ミラ・ヨシノの介入は予想外だったが、ゼダンがこの段階になって出てこないというのもおかしな話……………。だからこそこの武器を持ってきたのだ。ウサクは少し迷った後頷き、イスルギに肩を貸して立ち上がった。

「待て、ウサク……………。私は、まだ……………」

「腕が一本取れちゃってるでござるよ！ 早く手当てしないと！！」

「シエルシ、貴方も早く」

「い、いやですっ！！ 私も残りますっ！」

シエルシは真顔でそう答えた。一瞬周囲の空気が停止し、それからメリーベルの溜息で再び動き出す……。メリーベルはシエルシに歩み寄るとその額を強めに小突き、それからミラを親指で指し示した。

「アレとこれから一戦交えなきゃならないの。ヤバいのはわかるでしょ？」

「でも、彼女はあのミラ・ヨシノなんですよ！？ ホクトが……。ヴァン・ノーレッジが愛した人です！ 悪い人のわけがないじゃないですかっ！！ きつと、何か洗脳処置とかを施されているに違いないんです！！」

首を横に振り、シエルシはミラを見つめる。ミラの表情は読めなかった。怒っているのか、それとも楽しんでるのか……。無表情なその感情を前にシエルシは噴出す冷や汗にまみれてごくりと生唾を飲み込んだ。相手は最早異形 化け物の類である。それを前にして魔剣さえも持たない二人に何が出来るというのか……。判っている。それでも。

「お話をしましょう、ミラさん……！！ ホクトが喜びます、きつと！！ ホクトは今でも貴方の事が……。貴方の事が、大好きだから……！！」

笑顔を作れたかどうかは難しい問題だった。それを彼女にしるというのも酷だったし、そう出来ずとも仕方ないだけの理由があった。呆れた様子で苦笑を浮かべるメリーベル、その背後でウサクはイスルギに肩を貸したまま様子を伺っていた。そして暫しの沈黙の後　ミラは肩を震わせ俯いたまま己の額に手を当てて言った。

「ホクトなら、もう逢ったわ……。だから彼の心配ならしくなくても大丈夫よ」

「え……っ?」

「だから、ホクトはもう私の仲間になったの……。彼は今頃私の命令を聞いて、私の為に働いてるわ……。何も判っていないのね、貴方……。ホクトが変わった事に気づかなかったの……?」

「そんな……」

ミラの言っている事が信じられないのと同時に、しかし先ほどまで行動を共にしていたホクトの違和感を思い出していた。何となくそう、彼は以前とは違ったようにみえた。記憶喪失だからと思っていたのだが、理由がもしもそれだけではなかったとしたら……。もしも、彼の身に他の何かが起こっていたのだとしたら……。

「貴方にそんな事を言われなくてもね、私とホクトは上手く行ってるの……。なのに、貴方は……貴方みたいなのが横から勝手にホクトを搔つ攫っていくから……ッ!!　許せない……。なんなの、その言い分。貴方ホクトの何なのよッ!!」

「な、仲間です!　“ただ”のッ!!」

「嘘ッ！！ 貴方がホクトをおかしくしたのよ！ 前は私の事しか考えてなかったのに……。今は、貴方の事ばかり……。ッ」

目を瞑り、ミラは苦しげに肩で息をしていた。その様子は鬼気迫るものがある。その状況において直彼女は美しかった。しかしその常時“ぶれない”美しさが逆に奇妙であり、不気味であった。あとずさるシエルシの一步の音がミラの耳に届き、それを合図に死者の姫は顔を上げた。

「私は正常よ、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ！！ 私はホクトの心を手に入れたの！ 私は私の意志でここにいる……。！！ 貴方みたいに流されるだけじゃないの。私は選んだ！ 選択した！ ！ 選び進まない者は何も勝ち取る事なんか出来ないッ！！ そうでしょうッ!？」

再び魔剣を振り回し、シエルシへと襲い掛かるミラ。それをメリーベルが割ってはいるとミラは魔剣に魔力を通して能力を発動させる。振るわれる蛇の剣はしなり、打ち付けた大地に傷を刻むと同時にそこを一瞬で凍て付かせる。凍結する刃を自分を中心に振り回し、ミラはそこに氷のフィールドを構築した。冰山の中に立ち、煌く結晶に囲まれて女は笑う。

「貴方を徹底的にいたぶって無残な姿を世界中に晒して上げる……。そうね、私の玩具にしてもいいわ。一生可愛がってあげるわ。たまにはホクトの“相手”もさせてあげましょうか？ そのほうが楽しいもの ねえっ!!」

「ミ、ミラ……。ヨシノ……。!? あ、貴方……」

「止めなさいシエルシ、もうわかったでしょう？ 言葉が通じるよ
うな相手じゃないのよ、“大罪”に覚醒した人間は……」

「メリーベル……ど、どうすればいいんですか？ どうすれば……。
だって、ミラさんはホクトの……ホクトの大好きな人で……」

「それが戦いに何の関係があるの？ 落ち着きなさいシエルシ・ル
ナリア・ザルヴァトーレ……。目の前の現実を直視するのよ。彼女
はもう死んでいる。もう彼女はミラ・ヨシノの形をしているだけ。

“大罪”に支配され、それに隷属するだけの存在……。もうどうし
ようもないわ。戦うしかないの。わかるでしょう、貴方も」

「でも……でもッ」

頭ではわかっていた。理屈もわかる。だが、納得は出来ない。あ
んなにもミラは美しく、確かにそこに存在しているというのに……。
襲い掛かる氷牙の刃にシエルシは目を見開き、涙と共に術式を発
動する。紅の姫は蒼いフィールドの中心で舞い踊る……。その姿は
とても神々しく、そしてこの上なく……。

大罪（２）

『ロゼ君、君は神の存在を信じるかね？』

刃と刃を交える最中、ビッグホーン中将……否、元砂の海豚副団
長であるシグマールは言う。風の渦巻く中心で少年は男を見上げ、

剣を繰り出した。幾度と無くぶつかり合う刃　その狭間にロゼは何を見るのか……。

『神は確かに存在する……。御伽噺に出てくる神は、この世界にまだ生き続けているのだよ』

「それがどうした！　そんな馬鹿げた離しにどれだけの意味がある！？？」

『意味ならあるさ、ロゼ君……！　君はこの世界をどう思う？　傷つけ合い奪い合う事しか出来ないこの世界を……！』

風が爆ぜ、二人の身体は大きく突き放された。肩で息をしながらロゼは顔を上げる。その消耗度は語るに及ばず、シグマールはそれを見下ろして刃を構えなおした。

『私が何故裏切ったのか、それが知りたいと君は言ったね』

「ああ……」

『簡単な事だ。この場所には　帝国には、私の夢を叶える力がある。そして私たちは罪を償わねばならないのだ。ロイと……それからシャナク。彼女たちが犯した罪を……』

ロゼは額の汗を拭い立ち上がった。シグマールのわけのわからない話は半分ほどしか聞かず殆ど聞き流し、体力の回復に努める。魔剣の扱いはまだ完璧ではなく消耗は激しいしその力を完全に引き出せるわけではない。相手が休むチャンスを与えてくれるというのならそれに乗らない手はない。ロゼはシグマールの言葉に応える事にした。

「父上が犯した罪……？」

『私たちはあの頃、この世界を帝国の手から取り戻そうと必死だった。“大罪”の力さえあれば、この世界を変える事が出来るのだと……。だがそれは間違いだった。帝国にこそ正義があつたのだ。いや……。そんな事はどうでもよかつたのかもしれない。私はね、ロゼ。ただ家族を護りたかつたんだよ』

目を閉じ、シグマールは思い返す。それは既に遠く、忘れ去られてしまった懐かしい日々……。その中で彼は確かに笑っていた。リフルやロイ、そして彼らが護つたシャナクと共に……。だが全ては過ぎてしまった。何もかもが変わってしまったのだ。彼の裏切りによってそれが齎されたのならば、その終焉を悲しむ資格などあるはずもない。

『私はただ、大切な物を取り戻したかつた。だからこの世界を変えなかつた……。けれどもそれは無理な事だつたのかもしれない。神は人に自由を許さなかつた。決して……』

「それが何の関係があるっていうんだ……！ リフルが！ 父上が……！！ お前に殺される理由になんかなるかッ……！！！」

『……そうだな。だからロゼ君、君は私を討つ資格がある。だが討つて何が変わる……？ 死者は蘇らない。君のその感情は余りにも幼く未熟だ。人の生き死になど、この世界の流れの中では有り触れた事』

「有り触れた事……だと……」

ロゼは目を見開き、それから瞳に映る騎士の言葉を反芻した。そう、確かに　有り触れた事なのかもしれない。人は生まれそしていつかは死んでいく。そこには何の忌憚も無いのだ。良いとか悪いとかではなく、兎に角そうなるものなのだ。確かにリフルが言っていた事でもある。憎しみや　それに順ずるような邪な気持ちで刃を取ってはならないと……。

まだ、彼女が生きていた頃の事を思い出す。リフルは剣の稽古をロゼのつける事はあっても魔剣を継承することはなかった。父は死に際、自分ではなくリフルへと魔剣を継承した。その事がずっと気にかかつてはいたものの、今はまだ未熟なのだろうと己を無理に納得させていた。そう、それはまだホクトたちと出会う前、彼らが彼らなりの生活を営んでいた時の記憶である。

ある日ロゼは自分の傍らで本を呼んでいるリフルをじっと見つめていた。剣士はそつと本を閉じ、ロゼへと目を向ける。優しく穏やかで、暖かい眼差し……。リフルは唐突に、不機嫌そうなロゼに向かって語り始めた。

「ロゼ、魔剣とはなんなのでしょうね」

「……術式により構成される魔術武装だろ？」

「そういう事ではなく……。魔剣とは、“力”とは、何の為に在り何が正しいのか……。私はグラシアを先代から引き継いだ時に魔剣使いとしての心得までは引き継ぐ事が出来ませんでした。だから私は今も未熟なままで、そして答えも出ないままなのです」

遠い目をしてそう語るリフル。ロゼにしてみればリフルの力は十分なもの、それは嫌味にしか聞こえなかった。不機嫌そうにそっぽ向くロゼへとリフルは歩み寄り、その頭をそつと撫でて頬を寄せた。

「私はきつと、間違つた魔剣の使い手なのでしょう。ですがロゼ、どうか貴方は真つ直ぐな心で力を扱ってください」

「リフルにだってそうできるはずだろ？ リフルに出来ない事が僕に出来るかよ……」

「いえ、きつと出来ませぬ。私は 私の心は憎悪に囚われ、掻き消す事の出来ない悪意に囚われています。それは私の“弱さ”……。信じる事、赦す事こそ強さなのです。ですがそれでも私は……」

優しかったリフルの事を思い出す度、叫び出しそうな強い失意と憎しみに囚われそうになる。リフルは憎しみに囚われるなど常々言っていた。だからこそ割り切った。平静を装った。けれどもこの仇を前にしては、その付け焼刃の強さは脆くも崩れてしまう。

「リフルは……。確かに世界にとっては有り触れた存在だったのかもしれないよ……。でも、僕にとってはかけがえのない人だった……！ リフルを“有り触れた”なんて言葉で片付けるなッ！！！！僕はあああッ！！」

『憎しみに囚われて剣を使えば剣は曇りに囚われたままだ。ロゼ君、君に魔剣を使う資質はないな』

「うるさあああああああああいいいいッ！！！！！！」

雄叫びと共に走り出すロゼ。猛然と刃を振るうのだが、それはシグマールの刃に次々に捌かれてしまう。何故、どうして……？ 混乱するロゼの視界を真つ白に染めるシグマールの反撃……。吹き飛ばされるロゼは何も考えられない頭の中、リフルの事を沢山思い浮

かべていた。右から左までリフルの思い出を順番にスライドさせていく。そうしてやっぱり思う事があるのだ。“赦す事なんて出来ない”……でも。

倒れ、そしてまた立ち上がる。リフルの言っていた事が今は少しだけわかるような気がした。目の前には巨大な敵……。未熟な自分の力。勝算はどれほどなのか？ わからない。それでも。

「リフル……。やっぱり僕は赦せないよ……。やっぱり僕は……だって。だって、お前の事が……。大好きだったから……」

『そろそろ蹴りを着けるかね？ お互い、過去の思い出に縋るのはみっともないだろう』

「……みっともない、か。そうかもね。僕は子供だから……まだ弱いから。だから想い出に縋って生きている。でも 前に進みたいんだ。リフルみたいになりたいんだ。リフルの事が好きだったから……だから！」

風を起し、心を解き放つ。怒りや憎しみに囚われた心が消せないのならば、せめてその闇を受け入れよう。罪を見つめよう。そしてそれと正面から向かい合い、乗り越えていけばいい。リフルとは違う手段で、自分なりの力で、過去と決別したい……。ロゼの心に拭いた風は一陣の黒い風。何もかも吹き飛ばしてしまうような、あの男との出逢いだった。

過去が心を縛るのならば、明日へと思いを進ませるのもまた過去の風。その力をすべて解き放つ。心を素直に真っ直ぐに。学んだ事、知った事、全てを受け入れる。そして憎しみを肯定するその弱さを風に乗せ、明日へと吹き飛ばす為に。

「勝負をつけよう、シグマール……。僕は仇を討ちたい！」

『ではそれに応じよう。万全なる一撃で……。これで決着だ、ロゼ君。さようなら、過去の妄執よ』

「消えるのはお前だ、シグマール。今の僕は一人で戦っているわけじゃない。お前にはきつと判らないよ……。この気持ちは」

一層強くロゼの魔剣が輝き、風と共にそのシルエットを変えていく。より鋭く、柔らかく、風をイメージした刀身……。ロゼの身体に刻まれた術式が光を放ち、今までに無い感覚を放っている。その瞬きを忘れぬうちに少年は走り出した。傍に彼女がいるような気がした。そう、いつだって護られているから。傍に彼女がいるから。だから自由に、どこにだって羽ばたける。

インフェル・ノアに風が吹き抜けた。それと同時にホクトは地下で剣をその手から消滅させる。彼が立ち去るその背後、結晶の森は無残に砕かれていた。インフェル・ノアに異変が起こる。物語の終焉は、目の前にまで迫っていた。

大罪（3）

「リフル……？ リフル、しっかりしろ！ おいつ！！」

別れの時は、誰にでも平等にやってくる。それは常に唐突で、心の底から納得できる別れなどあるはずもない。この世界で武器を手にとった時から……そう、運命はすべて決まっていたのだ。

けれどもそれでも大切な人との別れは辛く、そしてやはり到底納得の行くような事ではない。それでも剣士は リフル・ヴァンシユタールは大切な人の腕の中で最後の瞬間を迎える事が出来ただけで、それだけで幸せだと感じていた。

半年前、あの天空に浮かぶ太陽の中でリフルは血に染まって通路の脇に倒れていた。状況に気づいてロゼが駆けつけた時には全てが遅く、昴は倒れリフルは血まみれになっていた。服が真っ赤に染まっている事に気づいてシャツを捲り、ロゼはそこから目を離せなくなった。きつく目を瞑り、唇を噛み締めてそれを閉ざす。賢い少年にはそれがどの程度の傷なのか、皮肉にも判断出来てしまったから。ホルスジェネレータの中は暑く、紅いランプに照らされている。色彩の感覚が鈍った世界の中、ロゼは大切な人をじっと見詰めた。口から血を流し、そっと微笑を作るリフル……。彼女は最後までロゼの事を案じていた。堪えきれずに涙を流すロゼの頬にそっと手を伸ばし、首を横に振る。

「悲しまないで……。ロゼ。私の事は、構わずに……」

「構わずにつて……。誰がやった……。？ 誰がッ！！！！」

ロゼとリフルの背後、ミュレイがソレイユを翳し炎の嵐を巻き起

こしていた。仲間を殺された怒りからかミュレイの攻撃に容赦は無く、逃げ場の無い狭い通路という事もあり剣誓隊は引き上げていく。ロゼは炎を背にリフルの顔を撫でた。こうして失う間際になってやっと気づく事がある。リフル……。彼女との間にあつた絆。大切な想い……。自分の正直な気持ち。全ては遅いのだと判っている。だが、それでも。

「仇討ちをしようなどと、思わないでください……。貴方は……。貴方の自由に生きれば良い。何かに、縛られずとも……」

「自由について……。リフル……。そんなの出来ないよ……。出来るわけがないよ！ 僕は……。僕は、お前の事が……っ」

「……。ロゼ、手を……。手を、私の手に重ねて下さい」

言われるがまま、ロゼは自らの手をリフルの手に重ねた。二人は指と指とをしっかりと絡め合い、ぎゅっと握り締めた。温もりを感じる。まだ。それが傷口からすべて抜け落ちてしまうのは時間の問題だろう。だがそれでも、リフルは普段と変わらず優しく笑っていた。

「これから貴方に……。グラシアを、継承します……」

「グラシアを……。？ おい、そんな事したら……」

「どちらにせよ長くは持ちません……」

「でもっ！……」

「ロゼ……。これは私の我侭です……。貴方に……。継承してほしい……」

…。きつと、ロイもそう考えただろうから……」

重ねた掌から熱い物が身体の中へと流れ込んでくるのを感じ、ロゼは歯を食いしばった。術式を継承するのはこれが始めてではないが、魔剣式を継承するのは初体験である。リフルの腕に刻まれた術式が緑に瞬き、それがロゼの腕へと移って行く。まるで彼女の命そのものが流れ込んでくるようで、ロゼはそれを止めたいと思った。けれどそれを彼女が望まないのは明らかで、だから何も言えないし、気の利いた言葉一つ思いつかない自分がもどかしかった。

「ロイは……貴方に、憎しみや悪意に囚われて魔剣を使って欲しくないと、常々言っていました……。彼はいずれ貴方に剣を継承するつもり……だった。でも……うっ」

「よせリフル、もういい……喋らなくていい」

「……私もいずれ、貴方に剣を……。私は、憎しみに囚われてしまった……。貴方を護りたいあまり、貴方を遠ざけてしまった……。それでもロゼ、私は……。私は貴方と一緒に居られて、幸せだった……」

きつく両手でリフルの手を握り締めても、その命はもう繋ぎ止める事は出来ない。そう判っていたのに。冷静さを失い、ロゼはリフルに回復魔術を発動した。ありったけの力で、諦めという言葉が吹き飛ばすかのように。何度も何度も繰り返し……。その中でリフルは目を閉じ、安らかな顔で語る。

「出来る事なら、貴方が大人になり……。砂の海豚を率いる姿を、この目で見届けたかった……」

「見せてやるよ、これからいくらでも！ 僕は強くなるよ……。グロシアをもらって、団長になるよ！！ そうしたらリフルは副団長になればいいじゃないかっ！！」

「私には、無理です……。私は人の上に立つのは向いていませんから……」

「そんな事、ないって……。僕なんかより、ずっとまじだよ！ 僕は大事な事にも気づかない愚か者だ！ 今になって、焦って……取り返しがつけばいいのについて思ってる……！」

「きつと、取り返しは付きますよ……。ロゼ。世界とは……。人生とは。長い長い、バトンリレーのようなものなのです……。私が、ロイから受け継いだように。ロイが、誰かから受け継いだように……。私も貴方に託し、そして貴方も誰かにそれを繋げて欲しい……。貴方の誇りを……。願いを。生き様を。」

「リフルッ！！！！」

ぐったりとした様子で目を開くリフル。その顔色は青く、瑞々しく美しかった彼女の顔とはまるで別人のようだった。ロゼは腕に走る痛みで回復魔術の発動を阻害される。その瞬間、リフルは血に染まった両手でロゼを優しく抱きしめた。

「ありがとう、ロゼ……。これから貴方は、貴方の人生を……。貴方なりの、人生を。」

「リフル……？」

そっと、震える声で呼びかけてみる。しかしリフルはそれには応

えなかった。リフルの腕の中、ロゼは目を見開き涙を流した。うつすらと目を開け微笑んだまま動かなくなった剣士の身体を強く強く抱きしめた。少年の絶叫とほぼ同時、魔剣の継承が終了した瞬間にロゼの腕は輝き、嘆く彼の頭上に剣はその姿を現した。風を纏い、穢れを知らぬ誇りを載せた剣士の剣。自由と、理想と、そして安らぎを運ぶ剣。ロゼはそれに手を伸ばした。力へと手を伸ばした。時の流れが止まず、そして別れが訪れるのならば少年もまたいつかは大人になる。その第一歩を。その力強い腕で刻んだのだ。

リフルとの思い出は絶対に消える事は無い。そして彼女を失った傷と痛みも決して消える事はないだろう。数日後、ロゼは砂の海の上に立っていた。砂の海に浮かぶ、ガルガンチュアの上に。彼の背後には砂の海豚の団員達が並び、そして彼はリフルを包み込んだ棺を見下ろしていた。

どんな葬儀でもきつと納得など出来ないのだろう。それでもロゼは棺の中に眠るリフルへと優しく想いを馳せた。今まで辛く当たってしまった事もあった。もっと分かり合えたらよかった。大好きな……とても愛しい人。失ってしまったらもう戻らない。だから彼はそれを背負って進むしかないのだ。生き残った、受け継いだ、たった一人の後継者として……。

棺をその手で砂の海へと沈め、少年はそれが見えなくなるまでじっと立ち尽くしていた。ナノマシンの海はきつと彼女の棺も、彼女の身体も、粉々に砕いて海の一部としてしまっただろう。リフルがよく一人で眺め、愛した砂の海……その景色の中に彼女もまた還って行く。そしていずれは、少年自身も。

永久の別れ。そして彼女と向かい合い、己の力と、罪と向かい合った。少年は強くなった。大人になった。未熟さは拭えないだろう。だが一歩ずつでも前に進む事は出来る。目をそっと開き、少年は過去から回帰する。戦場に吹き荒れた嵐は止み、今は彼の心を反芻したかのようだただ凧だけがそこにあった。

グラシアを構えたロゼの背後、擦れ違ったシグマールの姿がある。ロゼが膝を付き、それに続いてシグマールは前のめりに倒れた。インフェル・ノアの回廊に静けさが戻ってくる。少年はゆっくりと振り返り、騎士へと目を向けた。

『……………。今のは……………。成る程、風を載せた斬撃か……………。君には魔術の才能があるな……………。ロゼ君。グラシアの刃を風で振動させ……………。我が魔剣の鎧を切り裂くとは』

ゆっくりと身体を起したシグマールの胸には大きな傷が残っていた。騎士はそうしてふらつきながらも立ち上がり、再び剣を取る。ロゼは先ほどの感触を思い出すかのように魔剣に力を込めた。すると風は剣を中心に渦巻き、刃を細かく振動させる。そこから発せられる音は響き渡り、まるで女性の歌声のようだった。音色の中、ロゼは再びそれを構える。不完全な技ながら、止めを刺すには十分である。

「あんたの首をこの一撃で刎ね飛ばすくらいは簡単だ……………。もういいだろう、シグマール。あんたの負けだ」

『そういうわけにも行かないんだよ、ロゼ君……………。大人には、色々事情があつてね……………。』

立ち上がり剣を構えなおすシグマール。姿を消したところでロゼにはそれを感じることが出来るし、まともに打ち合っても攻撃能力はグラシアの方が上……………。勝ち目は明らかに薄い。しかしそれでもシグマールは立ち上がった。納得の行かないままロゼが剣を構えた時である。背後から突然人の足音が聞こえ、ロゼが振り返った瞬間。

「ビッグホーン中将、危険です！！ 下がってくださいッ！！」

『……………！？ エレット君、何故君がここに……………！？』

「たあああああつ！！！！」

エクスカリバー清明を振り翳し、ロゼへと襲い掛かるエレット。しかし戦闘力では明らかにロゼの方が一枚も二枚も上手である。あっさりを受け止められた拳句、風で吹き飛ばされてしまう。壁に叩き付けられたエレットだったが、諦めずに立ち上がり再びエクスカリバーを手に取った。

「私が時間を稼ぎますから、中将は早く撤退を！」

「なんだ、こいつ……………？ あんた、そんな弱いのに良くこんな所に出てこられたな……………」

『止せ、エレット君！！ 君の方こそ逃げるんだ！！』

突然、先ほどまで冷静だったシグマールが慌てた声を上げた。しかしエレットは戦いを止める気配がない。困惑するロゼの視界、通路の奥から迫る足音があった。それはパチパチと手を叩きながら歩み寄り、そうして光の中に姿を現す。

「君は実に良くやってくれたね、ビッグホーン……………。だが、親友の息子相手だからといって手加減するのは良くない。君ならそんな未熟な魔剣使い一人くらい倒せるはずだろう？」

『……………オデッセイか……………！！』

現れたのは剣誓隊大将、オデッセイである。剣誓隊の中で最も強く、限り無くSランクに近い能力を持った剣の所有者でもある彼は何故かこうして姿を現した。ロゼには全く状況がわからなかったが、何となく彼が言う“手加減”という言葉は嘘ではないような気がした。

「やあ、ロゼ・ヴァンシユタール。ちゃんとして顔をあわせるのは初めてかな？」

「…………… 剣誓隊のトップ、オデッセイ大将……………」

「光栄だな、前途有望な若者に名が知れているとは……………。しかし君は我々の深遠に近づきすぎた。残念ながらここでゲームオーバーだ。ビッグホーン、止めを刺せ。それとも“彼女”がどうなってもいいのか」

突然、オデッセイは背後からエレットの首に腕を回した。わけがわからずきょとんとするエレットだったが、首にかかる力が冗談ではない事に気づき苦しさから呻き声を上げた。シグマールは立ち上がり震える手で剣を握り締める。

「た、大将…………… な、何を……………？」

「大方ここで合法的にロゼ君に殺して貰うつもりだったんだろが、そういうわけには行かない。お前にはまだまだ役に立って貰わねばならないからね」

「どういふことだ……………？ おい、シグマール……………？」

『……………くっ……………ッ』

「さあ、“娘”を殺されなくなかったらロゼを殺すんだ。帝国への忠誠を見せる、“中将”」

「オデッセイ……あんた……ッ！」

「君も早く彼と戦った方がいい。君が私を恨むのはお門違いというものだ、ロゼ。君の父親を殺したのも、君の大事な人を殺したのも、私ではなくその彼だ」

刹那、ロゼの思考の中で何かが発火した。我慢の限界という言葉がそれに近かったのかもしれない。少年は猛然と走り出した。剣誓隊最強の男目掛けて真っ直ぐに。しかしエレットが強く首を絞められて呻くのを耳に足が止まってしまふ。そんなロゼ目掛け、大将の振り上げた魔剣が煌いた。全ては一瞬の出来事。振り下ろされる刃が肉を引き裂く音が鳴り、血と共に悲劇は幕を下ろした。

大罪（3）

唸る魔剣、その名は“リヴァイアサン”。水を司る魔の名を関したその剣は“大罪”が一つの象徴。罪を統べる者となった今のミラそのものようにさえある。触れる全てを氷結と同時に砕き、切り裂き、捻る刃……それを前にシエルシに出来る事は決して多くはなかった。

襲い掛かる刃を封印魔術にて叩き落す。しかしその刃の動きはどんどんペースアップして既に目で追うのも困難なほどになっていた。

氷の結界の中に閉じ込められている所為で逃げ出す事も出来ず、シエルシは久々に心から覚悟した。“死”という、ほの暗いたった一文字を。

「さあ、剣が舐る音と共に痛みに吞まれてしまいなさい……。その肉を殺ぎ、骨を砕き、魂を犯し、我が剣は存在を塗り潰し余りある。蒼い血の輝きを見せてごらんさい、“人間”」

「シエルシ、イスルギとウサクを庇って。二人の武装じゃあれには耐えられない」

「でも……」

「でもとかそういう事じゃない。自分に出来る事、今の貴方を必要とする事、よく考えて動いて」

その言葉と共にメリーベルは猛然と走り出した。上着の裏に隠していた無数の試験管を複数同時に抜き去り、それをミラ目掛けて投擲する。当然それはすべて魔剣によって叩きのめされたが、その瞬間に術式が発動する。雷が、炎が、渦となって瞬いた。耳を劈くような轟音は大魔術の発動を意味している。なんの詠唱もなくノータイムで発生した攻撃にしては余りにも高威力……。しかしミラは傷を負っていなかった。耳を押さえて倒れそうになるシエルシの前、メリーベルは先ほどの攻撃を目晦ましに跳んでいた。

「レヴァテイン神討つ一枝の魔剣コルライトニッケその力を我は担う　　ッ！！」

「……………術式詠唱……………？　でも、そんな術詩……………」

「知らないでしょうね。これは、“私の世界の”魔術だから……………」

足に輝く雷撃を纏い、回転しながらメリーベルは落下していく。迎撃に放つ剣の波を腕で受け止め、その上を滑り、回転しながらその踵をミラへと叩き付けた。

「障害を ウルス 討ち滅ぼす者ッー！」

「障壁貫通術式……ッー!?」

放たれた一撃はリヴァイアサンを弾き飛ばし、更に氷の結界を一撃で破壊し貫通する。飛来する攻撃。それを腕で受け止め、ミラは激しく吹き飛ばされた。自らが構築した氷の結界に背を打ちつけ、激しく咽る。腕は焦げ、奇妙な方向へと捻じ曲がっていた。

「……その程度のダメージしか与えられない、か。やっぱり本家には劣るわね」

「……この私に傷をつけたんだから、もう少し喜んでもいいと思うわ。でも、それももうおしまいだけど」

剣を揮い、ミラはその足元に巨大な術式を浮かべる。現れたのは蒼い結晶の鱗に身を包んだ巨大な龍であった。その頭の上に乗り、ミラは高い場所からメリーベルたちを見下ろしていた。龍は開いた口から吹雪を放ち、それを受けたメリーベルの身体は見る見る凍結していく。

「メリーベル!! そんな……!? 龍まで出せるなんて……まさか、式神……!?!」

「さあ、全てを停滞した時間の中に閉じ込めてあげる……。美しい

ものは美しいままに、醜いものは醜いままに　　！！」

再び放たれる吹雪を回避しようとするメリーベルだったが、その両足は完全に大地に接続されていて身動きが取れない。冷や汗を流しながら吹雪を睨んだ瞬間、魔女の身体は氷の結晶の中に飲み込まれ消えて行くのであった。

『何事だ……！？』

「はわわわ……っ！？　ハ、ハロルドちゃん……？　インフェル・ノア……傾いてない……？」

二人がそれに気づいたのはインフェル・ノアが既に落下を始めてから数分経過してからの事だった。戦いに夢中になっていたのだが、流石に無視出来ないほどの異常に気づかざるを得なくなった。ハロルドはそつと何も無い空間に手を伸ばし、そこに立体的な下層コンソールを出現させる。いくつかの映像が出ては消えてを繰り返し、そしてついに気づいた。

『……………！？　動力結晶樹林が、破壊されている……！？　いかん、このままではインフェル・ノアは浮力が維持できず墜落する……。それだけではなく、ミレニウムシステムも維持できなくなる……』

「えーと、それって大変なの？」

『すごく大変だ！！　く……っ！？　この身体も維持出来なくなる……。こ、こここまでか……』

膝を付くハロルド。それに駆け寄りうさ子は傍でぴよこぴよこ跳ねていた。一応心配しているのだが、ただ傍をちよろちよろしているようにしか見えない。ハロルドは苦しげな様子でうさ子を見やる。うさぎは耳をパタパタさせながら張り切った様子でハロルドを見つめ返していた。

『……………ここを出ろ、ステラ…………。もう、インフェル・ノアは長くは持たない。ミレニウムシステムが停止すれば、帝国の全てが停止する…………』

「ハロルドちゃんは？ ハロルドちゃんはどうなるの？」

『…………余は…………インフェル・ノアと一体。この城が消えれば我が身も消えるのが定め…………』

「それって死んじゃうってこと！？ ど、どうにかならないかな！？」

問いかけるが、ハロルドは何も応えない。うさ子は慌てて周囲をきよるきよると見回したが、時間切れなのかハロルドの身体がうっすらと透け始めていた。うさ子は慌ててその身体に触ってみるが、腕が貫通してしまい耳をぴーんと立てて目を真ん丸くする。

「ハロルドちゃん…………すけてるのっ」

『見ればわかる…………』

「ハ、ハロルドちゃん消えちゃだめなのっ！！ 消えちゃだめなのっ！！ がんばれよお…………！ もっとがんばれよお！ あつくなれ

よおーっ！！」

『………………。何を言っているのだ、貴様は……………』

それがハロルドの最期の言葉だった。消えてしまった黄金の王の居た場所をうさ子は暫くウロウロし、それから唐突に思いついたかのように振り返る。その少女の視線の先。ミレニウムシステムの中枢部である水槽の中に入った一人の少女の姿がある。何を思ったのかうさ子はそこに駆け寄り、何かを決意してその水槽へと己の拳を叩き込むのであった。

大罪（4）

「 どういうつもりなの、ホクト。違うでしょ、それは。貴方が立つべき場所は、“そっち”じゃないのに」

氷河の息吹が全てを飲み込んだ。そう思った刹那の時である。結界を食い破り、現れた黒き影はその片腕に掴んだ闇の力を以ってミラ・ヨシノの放った攻撃を食い止めていた。術式を構成する魔力全てを吸収したガリュウは瞳を見開き、それと同時に男は顔を上げた。ホクト。ヴァン・ノーレッジの身体に北条北斗の意識を持つ男……。彼の登場はミラにとっても、メリーベルにとっても、当然全ては予想外だった。

剣に着いた氷の結晶を振り払い、ホクトは口に煙草を啜えた。ミラは氷の龍から飛び降りると剣を片手にゆっくりと男へと歩み寄る。その大きな背中を背後からシエルシたちは見つめていた。何故だかそこから目を離すことは出来なかった……。いや、離してはいけなかったのだらう。真実と呼べる物は自分自身の目で確かめるしかない……。そう彼らは知っていたから。

紫煙を吐き出し、ホクトは冷たい風の中で顔を上げた。感情の色を読めないその視線はじつとミラを捉えている。ミラはそんなホクトの傍で足を止めた。二人の間にあるのは感情の探り合い？ それとも無意識の疎通だらうか。いや、それはきつとどちらでもない。ホクトは目を閉じ、それから小さく呟いた。

「……………俺は……………自分の事が判らない」

それは男の口から出た本音、そして彼の真実だった。無数の意識の海の中に漂う黒き魔剣の担い手。いや、彼の存在は魔剣を担う

為に存在する。故に扱われているのは彼自身なのかもしれない。ガリウウという魔剣が生存する為に必要な契約者　ただそれだけ。記憶も安定せず、魔剣の術式は常にホクトを蝕んでいる。寄るべき場所も、帰るべきところも彼にはないのだ。そんな彼にかけられたミラのまじないは確かに必要な物だったのかもしれない。ホクトの心の中に欠けている部分を埋めてくれるのかもしれない。だからこそ、ホクトは歩み寄るミラに抵抗しなかった。ミラの伸ばす指がホクトの顔を撫で、優しい笑顔が気持ち満ちてくれる。

「あんたの言うとおり、インフェル・ノアは破壊した……。この城は直に地に落ちる。帝国はこれでおしまいだ。ミレニアムシステムも動かなくなる……。全てはゼダンの思惑通りに、な」

「そう……。良くやってくれたわね、ホクト。ありがとう」

「インフェル・ノアを破壊……。！？　貴方達は帝国側の人間ではないんですか!？」

「私たちをそんな小さな括りに閉じ込めないで頂戴、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……。我々ゼダンはこの世界を守護し、監視し、管理する存在……。全ての罪を償う者……。ホクトは大罪の所有者、そして神に近い存在……。彼は私たちの仲間になったの。同士になったの。そうでしょう、ホクト？」

ホクトは無言で煙を立ち上らせ続ける。そうして男は剣を振り上げ、それを背後のシエルシへと突きつけた。黒き闇の刃　それが自分に向けられる事になるなどと彼女は一度足りとも考えた事はなかった。しかし今こうして実際に向けられて初めてわかる事がある。その、黒き刃は……。余りにも重く、苦しく、“闇”という言葉葉を凝縮したかのような鋭い威圧感に満ちている。向けた先に死を

ばら撒く死者の剣……それが蝕魔剣ガリュウなのである。生唾を飲み込み、収まらない悪寒にシエルシは呻き声を上げた。ホクトの表情はわからなかった。何も考えていないようにも見える。ただ、煙が静かに漂い続けた。

「ホクト……そうなんですか？ 貴方は……貴方は、もう……私たちの知っているホクトではないのですか……？」

男は答えない。そんなホクトの前に立ち、シエルシは何を思ったか黒き魔剣の切っ先を自らの手で掴み、自分からそれを喉元に突きつけた。背後でウサクとイスルギが慌てるのが判ったが、それはメリーベルが留めてしまう。彼女は見届けたいと思ったのだ。シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……十分すぎるほど、“馬鹿”の称号を関するに相応しい女。“馬鹿女”の極みが、この“馬鹿男”の極みに対して何を成すのか……。個人的にも、そしてこの世界の命運を担う意味でも確かめたかった。ごくりと生唾を飲み込み、ただ見守る……。この男女の絆の行く末を。

「もしも“それ”が、貴方の心の空白を埋めるのなら……。その剣でどうぞ私の命を奪ってください。それで貴方が幸福になれるのであれば、私はその礎になりたい……。私の命一つで貴方の笑顔が買えるのなら、容易い対価です。さあ、ホクト　ヴァン・ノーレッジ。黒き魔剣狩り。その心が正しく導くがままに、その力を揮いなさい　！」

「俺は………」

「殺しなさい、ホクト。それはこの世界を濁す存在よ？ 私と貴方
の間にある絆を邪魔する物なの。この世界に要らない　不純な、
邪悪な、偽りに満ちた存在なの。殺しなさいホクト。この世界の為

に 私の為に」

「ならば殺しなさいッ！！ ヴァン・ノーレッジッ！！！！ 貴方の意思で！ “ 女子供の言葉 ” ではなく、貴方自身の意思で！！」

シエルシは声をあげ、前に出た。ガリュウの切っ先がシエルシの肉へと食い込み、紅く血を溢れさせた。それを見たホクトは怯えるように背筋を震わせ、一步後退する。だがそれを逃がさないと言わんばかりにシエルシは剣を手繰り寄せ、凜とした声で言い放った。

「逃げるつもりですか！？ 魔剣狩りの名が廃りますよッ！？ 貴方は常に前に進む人でした。決して逃げず 惑わず。人々の希望を背負い、願いを背負い、そんなつもりはないって顔をしながら平然と困難をクリアする…… そんな人でした。なんて情け無い！

貴方は女子供の意思にも劣る軟弱者ですかッ！！！！」

「ち、違う……。お、俺……。俺は……っ」

首を横に振りながら後退するホクト。背後からその背中に腕を絡め、ミラは優しくホクトの顔を撫でた。二人の女はとても対極的であった。片方は男を否定し、片方は男を容認する。だがそれはどちらが否定でどちらが容認だったのだろうか……？ 苦しげな表情のホクトはミラの手を握り締め、きつく目を閉じた。まるで認めたくない現実から目をそらす子供のように。

「かわいそうなホクト……。いつも周囲の身勝手な重圧で苦しめられているのね……。貴方は何なの……？ 貴方はそんなにホクトを苦しめたいの？ 貴方の存在がホクトを苦しめているのよ！ 貴方さえ居なければすべて上手く行く！ 全てがッ……！！」

「　　そうかもしれません。私はいつもホクトに助けられました。ですが　それが何だと言うのですか」

シエルシは剣を払い除け、一步前に踏み込んだ。それがどれだけ重い一步か……それは語るまでもない。究極の闇の力を前に少女はそれでも前へと進んだのだ。己の意思で。恐怖と戦い。理性を押しつけ。命を惜しむ弱さを消し飛ばし。ただ、“正義”の為に。蒼き瞳は海よりも深く、宝石よりも美しい。この世界にある矛盾のすべてを討ち払う力を持つかのような、真実を知る眼差し。ミラはそれに怯えた。一瞬だけ、けれど確かに　恐怖したのだ。何故だかは判らない。だが判るよりも早く、判らされるのだ。

「私は彼に、一度だって助けってくれと頼んだ覚えはありません！」

「な、何を……！？」

「彼が勝手に助けたんであって、私は別に彼の事なんかどうでもよかつたんです！　でも、彼は助けてくれました。だから　だからホクト、貴方を好きになった！　貴方の生き方に心から惚れ込んだからっ！！　貴方みたいになりたいって、そう心の底から願ったからっ！！　貴方が好きです、ホクト……。どんな時も退かず、己の誇りと正義に忠実で、馬鹿でお調子者だけど圧倒的に“最強”な貴方が大好きです！　なのに……その体たらくはなんですかッ！？」

己の胸に手を当て、姫は叫ぶ。男は怯んで後退した。ホクトを抱きしめたミラはシエルシを威嚇するように睨む。この戦いは既に物理的戦闘から精神的根性論へと舞台を移しつつあった。若干啞然とするギャラリー三名の前、シエルシは顔を赤くしながら言葉を続ける。

「貴方はそんなによわつちい人じゃなかった！　どんな時でも強かった！　貴方さえ居れば何もかも万事上手く行くんだって思えるくらい、貴方は私たちの希望だった……！　何でも出来て、私なんかよりずっと頭もよくて、力もあつて、なのに……なのに、ずるいつ！」

「ず、ずるい……？」

「ずるいですよそんなのっ！　強いのに！　かつこいいのに！！　どうしてそう生きようとしませんか？　そんなに女の腕の中が心地良いなら私が一生抱きしめてあげますっ！！　貴方の望む事はなんでもしますっ！！　貴方はただ強く立派でいてくれれば後の事はどうでもいいんですっ！！　ホクト　お願いっ！！！！　そんな“情け無い”貴方なんて乗り越えて！！　私と……結婚しましょうっ！！！！」

「……ハイハイハイ

っ！？

「……」

という、誰もが啞然とする言葉と共にシエルシは両腕を広げ、真っ直ぐにホクトを見据えた。それに応じるようにホクトは再びガリユウを構えた。一組の男女が、馬鹿と馬鹿とが向かい合う。二人は真っ直ぐに見詰めあい　そしてホクトは刃を大きく振り上げた。誰もが目を伏せなくなる刹那、その中でもシエルシは真っ直ぐにホクトを見つめていた。時が止まるかのように、誰もが沈黙していた。そしてその後　誰かの笑い声が聞こえた。笑っていたのは他でもない魔剣を振り上げたホクト本人である。そして男はその剣で　背後のミラ・ヨシノを振り払ったのである。

驚きを隠せずに後退するミラ。ホクトは目をきつく瞑り、それからその剣を改めてミラへと向けた。シエルシが目を輝かせ、メリーベルとイスルギが盛大に溜息を漏らす。ウサクは緊張に耐え切れな

かったのか青白い顔で目を白黒させていた。そんな状況の中、納得が行かないのはミラである。顔を上げ、悲しげな眼差しで問いかけた。

「どうして……!? 貴方はシエルシのことなんて何も覚えてないはずなのにっ!! その記憶は私が全部消したはずなのにっ!!!」

「あ、やっぱりお前が消してたのか……。お前の言うとおり、この馬鹿の事はまるつきり覚えてねえよ。でもな……。何となく判ったんだ。自分がどうしたいのか、天秤にかけた時。俺は多分、何度繰り返したってこいつに“傾く”んだって」

「ホクト……」

「ミラ……俺はまだきつと、あんたの事が好きなんだと思う。あんたが必要なんだと思う。でもそれで自分を曲げる事はやっぱり出来そうにないよ……。たとえあんたが神様だったとしても。俺にとつての女神だったとしても。それでも俺は、ヴァン・ノーレッジじゃないから……。俺は 北条北斗として、生きる道を自分で選ぶ」

「……………ホクト……………そんな……………」

その時、再びインフェル・ノアを巨大な揺れが襲った。動力を失った浮遊城はゆっくりと墜落を開始している。傾く城の中、ミラは戸惑いを隠せないままに後退する。ホクトは近くに居たシエルシを片腕で担ぎ、黒き魔剣を空に翳した。

「なん、で……あんたが……!？」

傾く城の中、ロゼは立ち尽くしていた。目の前には自らを庇い、オデッセイの剣の犠牲になった騎士が一人……膝を着いて倒れている。それは彼がロゼを庇い、オデッセイの剣に斬られた事を意味していた。停止する空気の中、振動は無視出来ないレベルとなりオデッセイもロゼも立っていられずによるける。ロゼが倒れると同時にオデッセイは壁にもたれかかり、エレットを手放すと自らは走り去っていく。

「シグマール!! おい、しっかりしろ! シグマールツ!!」

慌てて駆け寄るロゼの呼び声でようやくエレットはそこに倒れているのが自分の直属の上官である事を知った。任務中以外はビッグホーンとしてではなく、シグマールとして活動していた彼はつい数日前までエレットと共に居た。ジェミニとの任務でシエルシを追いオケアノスに向かって以来見ていなかったが、鎧を解除し血に染まっていた彼は確かに上官であるシグマールであった。

状況が理解できないエレットは戸惑った様子でシグマールを見つめた。その瞳には恐怖、そして混乱が宿っている。シグマールはそんなエレットを見上げ、普段通りの頼りない笑顔を浮かべた。

「……やあ、エレット君……。元気そうで何より……」

「大佐……? 大佐が、ビッグホーン中将……?」

「あんだ、何やってんだ！ 手を貸せ……！ 自分の父親だろ、助
けたいと思わないのかッ!?」

ロゼの怒号でエレットはびっくりと背筋を震わせる。彼のいう事は正しく、しかしある意味において正しくはない。エレットには家族などいなかったし、今日この日この瞬間まで帝国のためだけの教育を施され、剣誓隊になる為だけに生きてきたのだ。そんな自分に突然父親がいるといわれ、それが目の前の上官だったとして、それをすんなり受け入れる事が出来るわけもない。立ち尽くすエレットにロゼは眉を潜め、それからシグマールの傷に回復魔術を発動する。それがどれほどの意味を持つのかはわからなかったが、やらないよりはマシだと考えた。

「いやあ、すっかり全部君の世話になってしまったね……。ロゼ……君は強くなった。きっとロイも喜ぶよ」

「あんだ……どうしてだ？ どうして言わなかった……」

「エレットのことかい……？ 言ってどうする……。言ったところで何が変わるわけでもないだろう……。？ 私はね、ロゼ。エレットの父親だなんて名乗れるようなまともな男じゃあない。そんな男じゃあないんだよ」

神の国、帝国。そこではあらゆる事が夢から現実へと姿を変える。かつて帝国との戦いの中で失った妻が居た。そして帝国に囚われた娘が居た。男は親友を裏切り、その首を代価にそれを取り戻す資格を得たのだ。死者をも蘇らせる力……。 “大罪” の力ならばそれが可能だと、そう聞いていたから。

全てはオデッセイの口車に乗せられた自分の罪である。彼はその後、帝国に逆らう事が出来なくなり帝国の言いなりとなって人を余

りにも多く殺しすぎた。最早戻る事は出来ない……。自分の意思で死ぬ事すら出来ないのならば、せめていつか納得の行く形での死を望もう、そう思っていた。だがオデツセイはそれすらも読んでいたのかもしれない。目の前に、エレットが現れた。その時彼は全てを悟ったのだ。もう、ラクに死ぬ道など残されていないのだと。

「欲が出たのが、いけなかったね……。こんなおじさんでも、エレット君と一緒に……。幸せに生きていけるかな……。と、思ってしまっただから……」

「あんたは……。あんたは、馬鹿だ……。なんで……。なんでリフルに助けを求めなかった……。？　なんで僕に言わなかったッ！！」

「言つて、それで憎しみは消えるのかね……。？　ロイを殺した事実がすべてだ……。それは決して消えない。だが、これでやっと自由になれる……。もう、多すぎる借金を返済するのは疲れたんだよ、おじさんは……」

「勝手な事言つなよ！！　勝手に父上を、リフルを殺しておいて……。ッ！！　勝手に庇つて死んで……。そんなのアリかよオッ！！！！」

拳を大地に叩き付ける口ゼ。その叫びは複雑な彼の心境を表していた。絶対に殺してやると誓った仇。憎しみに囚われるなといったリフル。力を継承したくとも出来なかった父、そして全ての齒車を狂わせた男の理由……。知らなければいい事が山ほどあった。ただ憎しみに囚われていけばどれだけラクだったろう？　だが、今はもう違う。知ってしまった。憎しみではない力で戦う事も。彼の理由も。だからもう戻れない。子供であつた頃には、もう。

「エレット君……。すまないねえ。最期に、おじさんの我侭に付き

合ってくれないか……?」

「は、はい……大佐」

呼ばれて慌てて駆け寄るエレット。人の死に際に立ち会うというのも始めてであり、エレットの顔色はあまり良くなかった。そんなエレットの手を握り締め、男は目を瞑る。

「煙草を……一本くれないかな。胸ポケットに入ってる……」

「わかりました」

震える指で煙草を抜き、それを啜えさせる。ライターを探すエレットの傍ら、ロゼは指先で魔術で火を起した。それにあやかり紫煙は無事に立ち昇り、崩れ往く城の中で静かに漂う。

「いやあ、おいしいなあ……。娘に、息子に……。まるで家族が出来たみたいだよ。本当にすまなかったね、二人とも……。だがもう、これでおしまいだ。ロゼ君の復讐も、エレット君の悪夢も……。直、終わりを迎えるんだ」

「大佐……」

「その、大佐というのは止めてくれないかな……。ああ、そうだなあ……。パパ、と……。パパとそう呼んで見なさい……」

煙草を啜え、冗談交じりにそう笑うシグマール。壁に背を預け、男は虚ろな瞳で娘を見つめる。母によく似た娘だった。初めて出会った時から気づいていた。名乗り出る事は考えていなかった、でもこうして伝える事が出来た。皮肉にもそれはロゼのお陰である。

だからこの奇跡の時間を、せめて自由に使いたかった。

戸惑い、恥ずかしそうに俯くエレット。しかしやがてシグマールの手を握り締め、目尻に涙を浮かべて顔を上げた。ロゼは二人から目をそらし、背を向ける。それはロゼなりに二人の最期の為に気を遣った結果だった。

「パ……。パパ……」

「うん……」

「パパ……」

「うむ……」

「パパ……パパ！　パパ……！」

「ははは……。そんなに呼ばなくていいよ……。なんだか、照れるじゃあないか」

その言葉をきっかけに、エレットはシグマールの胸に飛び込んだ。煙草くさい、血と汗のにおいをする父の腕の中でエレットは震えていた。シグマールは目を瞑り、そつと様々な事を思い返した。

最愛の妻を失った事……。帝国と戦った事……。かけがえのない親友と、仲間達と……。共に理想を追いかけた事。リフルを育てた事、そしてリフルを殺した事……。全ての罪、記憶、それらは彼の中で息づいている。それは彼の命が完全に消え去る瞬間、きつと露と消えてしまうのだろう。それをせめて忘れぬように、ロゼもエレットもしっかりと心の中に刻み込んだ。

「さあ、もう二人とも行くんだ……。インフェル・ノアが落下を始

めている……。ここから離れるんだ」

「シグマール……」

「ロゼ、君がもしも最期に咎人の願いを聞き入れる心優しい人ならば、どうかエレットを……。エレットを帝国から連れ出して欲しい。そして世界の広さを見せて……。彼女を、救ってくれ……」

「パパ……！ シグマール大佐……！」

大きな音と振動が響き渡り、更に城は傾いた。ロゼは拳をきつく握り締め、唇を噛み締める。そうしてエレットの手を掴むと、強引にそこから歩き出した。ロゼに逆らいその場に残ろうとするエレットだったが、ロゼは力任せにエレットを引っ張っていく。

「大佐……大佐……！ 待つてください、大佐も一緒に……！ 大佐
ああああああああ ツ……！！！」

崩れていくインフェル・ノアの中、シグマールはひらひらと力なく手を振っていた。二人がその視界から消え去るまで見送ると安心したように目を瞑る。最期に味わう煙草は渋く、いつもより少しだけ苦い気がした。紫煙を吐き出し、そうしてそっと目を開く。男は最期の最期、救われたように微笑んだ。

「 やあ、ロイ。来てたのか……。リフルも……。迎えに来てくれたのかい……？ おまえ」

そこには誰も居なかった。だが男は霞む視界の中、そっと手を伸ばした。指先に確かに感じる温もり。もう失って、決して戻らないのだと知った愛しい人。その感触に微笑み、次の瞬間シグマール

ルの啜えていた煙草は床に落ちて消えたのであった。男はもう動かない。前のめりに座り込んだまま、男の居たエリアは闇に閉ざされていった。

大罪（5）

「ロゼ ツ！！ こっちこっち！！ 飛び移って！！」

「アクティ……！！」

外廓へと飛び出したロゼと並走するように現れたガルガンチュアは周囲の艦隊からの攻撃を受け、各所から火を噴いていた。メリーベルによって改造処置を施されているとは言え、いくらなんでもこの猛攻の中で耐えていたのだから仕方の無い事である。インフェル・ノアが傾きながら崩壊していく様子に艦隊も引き上げ始めていたが、それでもまだ激しい攻撃にさらされている事には違いない。

気の抜けた様子で走るエレットの手を引き、ロゼは歯を食いしばって走り続けた。ここが正念場 生きて帰る為に絶対に妥協出来ないシーンである。全速力で走りながら先にまずエレットを引き寄せてガルガンチュアの方へと向かわせる。船は外廓接触ギリギリまで身を寄せるが、それでも距離は数メートル開いたまま。

「船に飛び移るんだ！ これからあんたを風で吹っ飛ばす……いいな！？」

「え！？ わ、私は……その……」

「いいから備えろ！ アクティ、こいつを頼むッ！！」

掴んだ腕を放るようにしてロゼは風を巻き起こしエレットを軽々とガルガンチュアへと放り投げた。甲板の上でアクティがエレットを受け止めたのを確認し、自分も飛び移ろうとした時である。上空からの砲撃がロゼとガルガンチュアを分断するかのよう降り

注ぎ、爆発の炎が船を引き離してしまふ。吹き飛ばされて転がるロゼの上空を帝国の飛空艇が飛来し、ガルガンチュアはそれに応援する為に少しずつ離れていく。アクティは魔剣を使って追っ手を迎撃するが、中々インフェル・ノアへと近づく事が出来ない。

「くそ、ここまでできて置いてきぼりか……？ う、うわっ!？」

次の瞬間更にインフェル・ノアが揺れた。既に城は傾きすぎており、その傾斜は許容できる範囲を明らかに超えていた。ほぼ真横に倒れた状態で落下を続ける城……。ロゼは外廓から振り落とされる直前、何とか外廓の外装ユニットの隙間に足をつけ、踏ん張って耐えていた。

強い風の中、目を細めて街を見下ろす。ガルガンチュアが再び近づいてくるが、動きが安定しない。攻撃は相変わらず続いているし、インフェル・ノアは揺れたり移動したりと実に挙動が安定していなかった。接触すればガルガンチュアも危険なのは言うまでも無く、ロゼの救出は慎重に行わねばならない。彼らはここから脱出し、更に帝国の追っ手を振り切るといふ逃走劇を控えているのだ。ガルガンチュアがこれ以上破損する事は赦されなかった。

万事休すという言葉がロゼの脳裏を過ぎる。甲板ではエレットとアクティがロゼへと声をかけているが、風と砲撃の音でそれはよく聞こえなかった。これ以上ガルガンチュアを自分一人の為に残すわけには行かない。ロゼがそう覚悟を決めた時であった。

「ロゼ……ゼ……く……ん……っ!!」

「……………この間延びした声は……まさか……?」

苦笑を浮かべながら頭上を見上げる。傾いたインフェル・ノアの外廓を駆け下りてくる影。白いうさぎの少女は垂直の壁を蹴っ

て微妙な段差を利用しつつロゼの元へと向かってきていた。ロゼはそれに腕を伸ばし、うさ子はロゼの腕をしつかりと掴んでそのまま傾斜を駆け下りていく。落ちていのか走っているのか判らないその状況下、うさ子は両足に魔力を込めて思い切り跳躍した。まるでそれは跳躍というより、何らかの魔術概念を使用した射出である。空へと舞い上がったうさ子を救出する為にガルガンチュアが迫るが、うさ子は良く見ると“両腕”がふさがっていた。片腕にはロゼをぶら下げ、もう片方の腕では何故か見知らぬ少女の身体を抱えている。空中ではたばたと両足を振り回したり、耳を上下させたりしてなんとか滞空時間を稼ごうとするが、そんなコメディチックな動作が実を結ぶ事はない。空中から落下を始めるうさ子 その首根っこを掴む腕があった。

ガルガンチュアの手摺に片足を引っ掛け、身を完全に放り出してうさ子を掴んだのは昴であった。昴は強風の中、片足を軸に人間三人をガルガンチュアの甲板の放り投げ、自分も身軽に甲板へと舞い戻る。何とか無事に脱出に成功した彼らだったが、誰もがまだそこから離れようとはしなかった。

「はうううう……死ぬかと思ったの……！ 昴ちゃん、ありがとうがとなのっ」

「どういたしました。それより他の連中は無事かな？」

「わかんないのー。でも、メリーベルちゃんは転送魔術が使えるはずだし……」

「とりあえずここは撤退するのが吉！ ロゼ、早く船の中に！ あんたたちもボケーっとしてないでさ、ボクだってこんなところで死にたくないんだからっ……！」

アクティに急かされ一同はぞろぞろと船の中に入っていく。そうして全員がガルガンチュアに収納されたのと同刻、浮遊城の中で黒い光が瞬いた。それは城の外廓を破壊し、中身を露出させながら広がっていく。光がガリユウの輝きなだと気づいた一同はそれぞれ顔を見合わせ、全速力でその場を後にすることを決めた。あれなら。 “彼”なら。きつと、 “何もかも上手く行く” と信じられるから。

「逃がさない 絶対に認めない……！ ホクト……貴方が私を裏切るなんてエエエエエエ ツ！！！！！」

絶叫と共に蒼い輝きが周囲の全てを凍結させていく。氷河の海の侵略を男は黒き闇の一閃で振り払う。大罪と呼ばれる力同士の戦い……だが、その大罪の扱いにおいてホクトは天才的だった。それも無理は無い、恐らく彼はこの世界のあらゆる存在の中で最も大罪に愛された男……。大罪の所有者の心はあらゆる意味において欠落し、湾曲している。彼もその例に漏れず、 “おかしな” 人間だった。だが彼はそんなおかしさを制御する術を持っている。本来ならば何もかもを暗い尽くす暴虐の剣、ガリユウ……。それを制御する為だけに彼という存在が在るのならば。それは神に愛された究極の予定調和。 “絶対最強の魔剣使い” でなくてなんだというのか。

彼は元からその存在がガリユウの為にある。力の大半をタケルに奪われた今でも。魔力が圧倒的に不足し、呼吸もままならず喘ぐような苦しみに曝されている今でも。大罪を前にして、男は愚かである。大罪を前にして、男は勇敢である。この世の罪全てを前にして男はそう 馬鹿正直である。それ以外に彼の強さは何も無い。そのほかに必要ない。それを彼は知っているのだ。少なくとも彼は。

「メリーベル、転送魔術で先に戻ってる！！ 後から追いつく！」

「……………ホクト……………」

「大丈夫だ、信じてくれ……………なんて言葉に意味はねえよな。でもな、言わせてくれよ、“それ”……………。俺は戦う事に決めた。戦わなきゃ男が廢るってな。女子供に、言われちまったからよ……………ッ！！」

メリーベルは少し考え、それから直ぐに術式を発動した。三人の姿が浮かび上がった魔法陣の中に消えていく……………それを妨害するかのようミラが動くが、ホクトはその注意をひきつけるようにあえて前に出た。

ミラが両腕を左右に広げると無数の魔法陣が浮かび上がり、そこから夥しい数の流水が生まれた。それは一本に纏まって螺旋し、まるでレーザー光線のようにホクトへと襲い掛かる。水圧カッター……………ホクトはその何もかもを両断する攻撃の嵐の中、シエルシを抱きかかえて逃げ回った。攻撃はインフェル・ノアの外廓を無残に切り刻み粉碎する。ミラは最早目的がなんであったのかすら忘れているほどに頭に血を上らせている。ホクトは冷や汗を流し、抱えたシエルシに問いかけた。

「よお、流石にこりやまずい……………！ 死ぬかもしれねえぞ！？」

「構いません！ 一緒に死にましょう！！」

「 なら、その命は俺が預かった。さあ、行こうぜ人類代表
！ 神様に馬鹿の力つてヤツを思い知らせてやる！！」

「はい……………！ はいッ……………」

「ホクトオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！」

ミラはリヴァイアサンを揮いながら水圧カッターでの攻撃を続けてくる。水圧の閃光を前に、シエルシはホクトの腕から離れて両腕を伸ばした。空中に浮かび上がる剣、剣剣……。剣の群れは一斉に水圧カッターへと襲い掛かり、衝突し、その術式を無力化していく。ただの水に変わったそれらは空中にばら撒かれた。まるで静止した時の中に泳ぐようにホクトとミラは見詰め合う。そうして互いの罪を激突させ、空中で　ただ墮ちながら。戦い続ける。罪深く、愚かしいダンス　。蒼い瞳は愛する男を刻みたくて仕方がなかった。闇に愛された男は笑いながら刃を振るう。そう、彼は笑っていた。笑わなければならない。笑っていてこそ、男は　。

「怖エえな、ミラ……。怖エえよ」

「え……？」

「俺は何もかもが怖くて仕方がなかった。今も何もかも超怖エえ。仲間を作る事も　ッ！！　誰かと共に在る事も　ッ！！　自分の存在！　大罪の意味！　この世界の正義！　俺はッ！！　ただガリユウを使う為だけに存在する俺はッ！！　ただただ怖くて仕方が無かった！！　どうしようもねえヘタレ野郎だ、けどな　ッ！！」

ミラのリヴァイアサンがうねり、ホクトへと襲い掛かる。それを刃で弾き、空中に闇の剣を無数に出現させる。一斉にミラ目掛けて放たれた剣をミラはリヴァイアサンを振り回して弾き飛ばす。二人はこの瞬間確かに見詰め合っていた。心通わせていた。ミラの目に冷静さが戻ったのはこの頃である。男は声を上げた。叫びを上げた。

「カツコつけてエ！！　女にモテてえ！！　自分を曲げたくねえ！

！ 応援されたら頑張っちゃう！！ 護っちゃう！！ そうだろミラ！？ 男の子はなあ……ッ！！ カッコつけなくなったら死んでるのと同じなんだよオツ！！！！！！」

「それで貴方が傷ついて！ それで貴方だけがボロボロになって！ それが嫌で仕方が無かったんでしよう！？ 護ってあげるわ私が！ 永久に！！」

「俺はどうしようもねえ男だ！ 酒呑んで煙草吸って、女遊びはやめられねえしギャンブルも大好きだ！」

「そんな貴方でも私は愛していた！！ 真っ直ぐで純粋な貴方を愛していたッ！！」

「そうだ、真っ直ぐで居たい！ この世界の正義だとか周りの目だとかそんなこたあどおでもいいんだよオオツ！！ だから俺は！！」

目を瞑る。心の中に思い描く全て。この世界に生きる命。祈り。罪と呼ばれる力。世界に成り立ち。己の成すべき事。仲間達の姿。失われた記憶。あの日の夕焼け。剣の痛み。闇の光。暖かな時間。愛した人の温もり。悲しみに暮れた心。

弱さ、強さ、迷い、力、進むべき道。ホクトは取り戻す。全ての暗示は解けたのだ。男は剣を掲げ、己の存在の名を叫ぶ。彼はこの世界にガリユウを使う為だけに存在する。ならば彼が究極の魔剣使いでないならばなんだというのか。何度でも繰り返す己の肯定。男は約束の言葉を口ずさむ。全てを台無しにする、神に唾するその言葉を。

「ガリユウ、コード“ロクエンティア 剣創” 発動ッ！！」

黒い光が瞬き、男の姿をすべて飲み込んでいく。闇の光は広がり、その中でシエルシは不思議と包み込まれるような暖かさを感じていた。闇の中でホクトがシエルシを抱き留め、そうして顔を上げる。空を仰ぐ。限界を作られた閉ざされた世界。その全てを今、完全にブチ壊したい。

「……………シエルシ、俺は化け物だ。ただ何もかも壊すだけの怪物だ。そんな俺でも…………受け入れてくれるか？」

シエルシは一瞬目を丸くし、それから当たり前のように頷いた。その笑顔はホクトの心に突き刺さり、閉ざされていた心を押し開くに余りある一撃。

「答えるまでもありません。思い切りやっちゃってください」

「……………了解したよ、姫。了解さ……………！ やってやる。見せてやる！ これが俺の…………俺たちの」

『大罪だあああああああああッ！！！！』

「な、なんだあれ……………！？」

レコンキスタを離れ始めたガルガンチュアの中、ロゼは冷や汗を流しながら声を上げた。堕ちていくインフェル・ノアから巨大な闇が生まれようとしていた。黒き翼を広げた龍。巨大な、とても

巨大な、何もかも飲み干すような漆黒の龍。昂はそれを見つめ、静かに微笑を浮かべていた。そう、彼女がそれを　魔剣ガリュウの本物の姿を見るのは二度目である。

その力は一度暴走し、昂はその時それを前に撤退する事しか出来なかった。二度目にそれはザルヴァトーレ崩壊時、仲間達を守る翼となった。そして今闇の龍はどす黒くこの世界の欲望を渦巻かせながら帝国の終焉を演出している。目を瞑り、昂はそこから背を向けた。もう見る必要はないと思ったから。これでもう　勝ちが決まったようなものだから。

遠ざかる船　そして龍は翼を雄雄しく広げ、インフェル・ノアを受け止めていた。それはこのまま堕ちればレコンキスタの住人をまき沿いにし、中に乗り込んでいた者たちも全滅していた事だろう。だがホクトはそれをあえて受け止めた。闇雲に命を奪わないで欲しいというシエルシの願いがわかっていたから。巨大すぎる罪の龍の前にミラは空中に浮かび、それをただ呆然と見上げていた。彼女の力と比べてもそれは余りにも大きすぎる。ゼダンと呼ばれる者たちでも到達できないようなはるか高み　そう、ホクトは既に創力の中枢に繋がっているのだ。大罪と呼ばれる力を経由し男は神に限り無く近い力を手に入れていた。その代償を思えば　ミラの動悸は治まる事は無かった。

「それが貴方の選択なの……ホクト……？」

龍は風を纏い、光の中で羽ばたいていく。帝国から遠ざかっていく龍の影　それは一度だけミラを顧みた。恐らく今のガリュウならばミラを消滅させるのも簡単な事なのだろう。だが男はそうしなかった　いや、そうできなかったのかもしれない。だがそれは誰も望まない事だった。少なくとも彼の姫はそれを望まない。きつとまだ全ての人類が分かり合う手段は残されていると、そう心の底から信じているから。

ホクトはシエルシを両腕で抱きかかえたまま、“我龍”^{ガリュウ}の中で遠くを眺めていた。このままどこか遠くへ行ってしまうおつか……そんな下らない事を考える。だがそんなことよりももっと早く、言わなければならぬことがあるだろう。やらなければならぬことがあるだろう。だから男は笑みを浮かべ、その優しい眼差しでシエルシを捉えた。

「おかえりなさい、ホクト」

全てはお見通しだった。姫が微笑むとホクトはそれに応えた。唇が言葉と共に思いを紡ぐのならば、それはきつとともシンプルなストーリー。そう、全ては思いの中にある。例えその世界が、どんなに大罪に 穢れていたとしても。

大罪（5）

その後の事を、少しだけ語ろうと思う。
私こと北条昂は無事にガルガンチュアに乗って帝国からの脱出に成功した。私たちの襲撃によりインフェル・ノアは沈み、そしてゲオルクが中心となって待機していた反帝国組織が動き出し、帝国はあつという間に崩れていった。というのも、剣誓隊の殆どが既に逃げ出しており、将軍クラスも最期まで戦っていたのはジエミニだけである。肝心のハロルドは消え、帝国は完全に崩れ去った……というわけだ。

それからの流れは本当にあつという間だった。瞬くような瞬間の連続で、帝国の百年の歴史はあつという間に無かった事になってし

まった。これから帝国がどうなっていくのかはわからない。生き残った人々はミレニアムシステムによる管理とハロルドという絶対象徴を失い放心状態で、帝国民全員が裁かれるべきではないという声も上がり始めている。尤も、ここから先の政治的な話は私には関係の無い事なのだが……。

この世界を救うなんてことは結局出来なかったのだと思う。私は救世主なんて名前ばかりで自分の事ばかりが可愛かったんだ。でも今はそれも悪くないと思えるようになった開き直ったというか……納得したというか。自分の浅ましさを受け入れたというか……まあそんな感じで。今はとりあえずローティスに身を寄せてそこで街の復興を手伝っている。ローティスは元々交易の中心だった町でもあり、戦争で行き場をなくした人々が集まる場所にもなっていた。少しでも誰かの居場所を護る事が出来たら……というのが私の今のところの考えだ。

色々あって、なんだかすごい事になって、それが終わると急に燃え尽きたように全ての気持ちが終わってしまったように思う。若干の無感情と怠惰な平和な中、私は今日も生きている。この、遠い遠い世界の中で……。

「昴ちゃん昴ちゃん、どこ見てるの〜?」

「……………空?」

「はう…………? 昴ちゃん、燃えつきちゃったの? あれからもう三日だもんね〜」

耳をぱたぱたと上下させ、うさ子はニコニコと笑っている。バテンカイトスの前、階段の段差に腰掛ける私の隣にちょこんと座り、足をぱたぱたと振っている。そんなうさ子の頭を撫でながら私も少し彼女の平和な空気を分け与えてもらいたかった。

うさ子は相変わらずで、今日も平和にうさ子らしくしている。そんなうさ子を横から見ていると視線に気づいたのか彼女もこちらへ目を向けてきた。なんというか、知性のない目をしている。くりくりとした、真ん丸い目だ……。うさ子の頭を撫でると私は立ち上がり、それから身体を大きく伸ばした。

「さてと……そろそろまた行って来るかな」

「ズンズン」

「 ミュレイの、お見舞い」

「は……。ベッドの上は退屈じゃあ……。わらわも早く仕事に戻りたいのう……」

と、ベッドの上で駄々をこねているのは私のお姫様であるミュレイである。部屋に私とうさ子が入ってきたのを確認すると目を輝かせ、それからひらひらと手を振った。さて、この人が何故生きているのかという話になるのだが……。

彼女は私の剣に突っ込んでくる時急所を外し、そして瞬間的に全魔力を消費して強力な回復魔術を発動し傷を塞いだらしい。まあ確かに自分から突っ込んで来て置いて死なれても困るのだが、生きていたら生きていたで色々と言句もある。魔力の消耗とダメージの所為で気を失っていただけだと気づいたのはこっちに帰ってきた後で、その時は私も嬉しくて泣くべきなのか、怒って泣くべきなのかを迷ったものだ。まあどっちにしる泣くんですけどね。

早くククラカンを復興したくてたまらないミュレイだったわけだけど、当たり前のようにメリーベルから外出禁止を受けてベッドに

押さえ込まれている。勝手に抜け出さないようにと術式で動きを封じられているらしく、そこまでする必要あるのかなと思いつつもまあやっぱりこの人のことだから必要なんだろうなあ、と納得もしている。そんなわけで、私の大好きな人は今日も元気にふてくされています。

「昂……メリーベルに言っこの術式を何とかするように言ってくれぬか？」

「駄目だよミュレイ、怪我治ってないんだから……。ていうかどっちみちミュレイが回復魔術に優れてなかったら死んでたでしょあれ」「死なない勝算があったから実行したんじゃない、そんなに自分に自信がなかったらもうちっと別の手を考える」

「でも、その後どうなるかはわからなかったでしょ？ 無茶である事に変わりはないよ……っ」と

ベッドの上に腰掛けるとミュレイは優しく微笑んでくれた。私は彼女の手に分の手を重ね、そっと指を絡める……。うさ子は誰かがお見舞いに持ってきたリングをもぐもぐ勝手に齧っていた。まあ、別にいいんだけどね……。

「しかし、問題はまだ山積みじゃ……。戻ったら忙しくなるぞ、昂」

「そうだね。だから今の内に体を休めておいてよ……。ミュレイが苦しんでるのは、私は耐えられない」

「……うーむ、真顔でそんな事を言われると若干顔が熱いのじゃが」

「私もだよ……ミュレイ」

二人で至近距離で見詰め合っていると、何となく頭がぼーっとしてくる気がする。ああ、ミュレイかわいいよミュレイ……。どうしてこつちの世界でも同姓婚不可なんだろう。この世界の法律を作ったやつは絶滅すればいい。

まあ法律で認められていようがどうだろうがそんな事は関係ないのだ。私はもうミュレイを愛し続けると決めただし、もう勝手にしてやるのだ。彼女が嫌がろうがなんだろうが、自分の自由にしてみせる……。そんな黒い感情が漏れていたのか、ミュレイは怯える子羊のような目で私を見ていた。笑顔でそれを濁し、うさ子が齧っていたリンゴを一つ拝借する。

「!?! うさのりんごが……」

「別にいいでしょ、ミュレイのなんだから……もぐもぐ」

「いや、わらわのなんだから鼻が食べちゃだめじゃないか……」

「いいんだよ、ミュレイのものは私のものなんだから」

そんなやり取りをしながらリンゴを咀嚼していた時だった。部屋の扉が開き、そこからひよっこりとホクトが顔をのぞかせたのである。ここ数日すっかりどこへ行ったのかわからなかったのだが、ホクトは何故かボロボロで酷く疲れた様子だった。うさ子はそんな事はお構い無しにホクト目掛けて突っ込んでいく。

「ホクト君ーっ!!!!!! 帰ってきたのーっ!!! はっつっつー!!!」

「おー……帰ってきたぞい……。うさ子、元気そうだな……」

「はうはうっ　うさはねえ、いつつも元気なの〜!!　そういうホクト君はなぜだかよくわからないけどボロボロなの……」

「ああ……。実は色々あつて、魔力が持たなかったんでエル・ギルス
の辺境に墜落して……。山超え野を超え、まあ色々歩き回って
たら三日かかったわけだ……。もう、そろそろ眠い……」

「ホクト君すっかりしてなのっ!!　はうっ!?　ホクト君がく
たばっちやうよっ!!」

ぶるぶるしているホクトを抱きかかえ、うさ子もぶるぶるしている。二人ともぶるぶるしているのがおかしくてつい笑ってしまう私の隣、ミュレイも呆れたように笑っていた。ホクトは気を取り直し、ボロボロの姿のまま私の前に立った。

「よう、元気が昴」

「……………元気だよ、ホクト」

「まあ、色々積もる話もあるが……お前が無事でよかった」

そう言って私の肩を叩くホクト。よほど疲れているのか、うさ子に縋りつかれたままホクトはさっさと部屋を出て行く。そんな背中を呼び止め、私は今なら素直に言える気がした。

「……………おかえり、お兄ちゃん」

ホクトはどんな顔で振り返るだろうか？　そう考えると少しだけ

わくわくする、そんな平和な日の昼下がりの記憶。しかし全ては解決したわけではなかった。本当の問題はここからで、私たちはその問題を前にあまりに無力だった。

時は更に数日後。始まりはとある一人の少女の自覚めからだった。彼女の名前はハロルド。うさ子がインフェル・ノアより救出してきた、ミレニアムシステムの生体コンピュータであり、“大罪”を持つゼダンの一人である。

大罪（5）（後書き）

くはじける！ ロクエンティア劇場く

テラフリーダムカオス

うさ子「なのっ！……！！！」

シエルシ「……………」

うさ子「はわーっ！？ なんて行き成りへこんでるの！？」

シエルシ「アンケートが…………再開されました…………」

うさ子「うん…………されたね…………」

シエルシ「あとは何も言わずとも良いかと…………」

うさ子「…………はうっ？」

ホクト「まあへこたれプリンセスはほつといてと…………。長かった帝国との戦いも何とか一段落、次から漸く新展開に入れそうだ」

昴「長かったよね、すごく」

ホクト「長かったなあ…………。そんなわけで登場人物が大体出揃ったので、アンケートの後半戦が開始だ。ちよつと項目も増えたりしてな」

昴「でもこれ見るとすごいよね。女性キャラクターより圧倒的に男性キャラクターのほうが人気になりつつある」

ホクト「な……。これは何を意味しているのか……」

昴「とりあえず読者層が今までと違ってきているような気はする」

うさ子「……はっ?」

ホクト「まあそんなわけでアンケートが出来たって事は長らく音沙汰なしだった劇場でやる事が出来たって事だ! 今回はキャラの声優について」

うさ子「声優ってなあに?」

ホクト「いや、もしもいたらっただけの話な。そういう投票コメントがあったからふと思って」

昴「……うさ子の声は誰がいいかな」

ホクト「大橋のぞみ」

昴「……。ストイックすぎない、それ」

ホクト「そうか……?」

うさ子「何の話だかよくわかんないけど、うさはお肉も食べるよ?」

ホクト「それこそ何の話ですか」

昴「ミュレイの声優は誰がいいかなあ……えへ、えへへ……」

ホクト「なあ、ちょっとみないうちに妹がヤバい人間になってた場合ってどんな顔したらいいんだ？」

うさ子「えっとね、笑えば良いと思うよ？」

ツルギノセカイ(1)

「ホクト君ホクト君、起きて〜！ 起きてなの〜っ！！」

「う、うぐう……」

「はうううっ！ はうはうっ！」

大逃亡の末、何とかローティスに辿り着いたホクト。帝国との戦いは一つの終着を向かえ、彼は束の間の休息を楽しんでいた。ぐっすりとはテンカイトスの一室で眠るホクトの上、うさ子は押し掛かつて執拗にホクトを揺さぶった。仕方が無く目を覚まし、うさ子の首根っこを掴んで部屋の隅に投げつけてホクトは欠伸を浮かべながら立ち上がった。

「人が寝てるのに、ドタバタするんじゃないやねえ馬鹿うさ……」

「あのねーっ！ ホクト君ね！ メリーベルちゃんが呼んでたのっ！！ うさはねえ、ちゃんとホクト君を起してあげたのっ！ うさ、偉いのっ！！」

「……………そうですか……………。まあいいや……………って、うおっ！？ 十二時間も寝てたのか俺は……………スゲエな……………」

ベッドの脇に置いてあった時計を手に取り、思わず驚嘆するホクト。そんなホクトの身体に飛びつき、うさ子はすりすりと頬を寄せ、耳が楽しそうにリズムカルに上下しているのを見てホクトは優しく微笑んだ。

「うさ子隊員？ 隊長はメリーベル司令官の所に行かなきゃなんねえんすけど？」

「はづづーっ　ホクト君、お話が終わったらうさと遊ぶの〜っ！
うさねえ、ホクト君とお話したい事がいっぱいいっぱいあるので
す〜！」

「はいはい、終わったらな……って、ん　？　うさ子、お前……
ちよつといいか？」

「はづづ？」

目をきよとんと丸くするうさ子。そのうさ子の身体をしげしげと
眺めホクトは青ざめた表情を浮かべた。それからうさ子を置いて唐
突に部屋を出て行き　戻ってきたと思ったら傍らにはアクティの
姿があった。

「うさ子、お前……前に風呂入ったの……いつだ……？」

「う……？　ホクト君、ふるってなあに？」

「おま　！？　たまにリフルとかシエルシに入れてもらってただ
ろ！？　お前なんかケモノみたいな匂いがしてんぞ！？　アクティ、
頼む……この野良うさを風呂に入れてやってくれ……！！！」

「……別にいいけど、そのためだけにボクは呼び出されたの……？」

眉を潜め、眠たげに目を擦るアクティ。ホクトはアクティに頭を
下げながら二人を強引にバスルームに押し込んだ。元々“そういう

目的”の為にある部屋であり、バスルームは二人で入っても十分すぎるほどの広さであった。ホクトはうさ子にちゃんと身体を洗うように厳しく命令すると、二人を残して部屋を出て行った。

残されたアクティは仕方なく溜息を漏らし、うさ子の服を脱がせ始める。うさ子の服はエル・ギルスでは見ないような特殊な服で、脱がす方法はうさ子自身も知らなかったので苦労した。結局背部にあったボタンを押すと勝手に布同士が剥離し、コンパクトな形に収まる事に気づくと後は簡単に進んだのだが……。

バスルームに入り、アクティは湯船にお湯をしながらシャワーをうさ子の頭から浴びせた。うさ子は驚いたのか悲鳴のような声を上げていたが、馴れてくると楽しそうに頭を泡だらけにしてわしわしと洗っていた。そんなうさ子の背後に立ち、頭をこしこしと擦りながらアクティは小さく溜息を漏らした。

「まったく、ホクトはボクの事なんだと思ってるんだか……。うさ子ちゃんと目を閉じてなきゃだめだよ？ シャンプー入ったら目が大変な事になるからね」

「た、大変な事になるの……？」

「……最悪もげるかも」

「はっうっう　　ッ!?　　怖い、怖いっ！　　うさ、目は瞑ってるの!!　　絶対あけないのっ!!」

悲鳴を上げ、ぶるぶるし始めるうさ子。背後からそんなうさ子の髪を洗いながらアクティは笑った。緊迫した空気は漸く緩みを見せ、少女達には歳相応な日常が広がっている。そう、戦いは終わったのだ……。永きに渡る支配の時代は終わりを告げ、今新しい世界の時代が幕を開けようとしている。

「……………それで？ 見舞いに来るのは構わぬが、そう押し黙っていられてはむしろ身体に毒なんじゃが……………」

ミュレイの病室、ベッドの上で呟く病人に傍らには椅子に腰掛けたイスルギの姿があった。男は数分前にここにやってきたのだが、特に何を言うでもなくじつと座ってミュレイを見つめていた。その空気に耐え切れなくなったのか、ミュレイは苦笑を浮かべ声をかけた。なんだかんだで、それは長い間離れ離れで言葉を交わす事もなかった双子が過ぎす、久しぶりの二人の時間だった。

イスルギは少しの間考え込んだ後、無言でリンゴの皮を剥き始める。しかし不慣れである所為か、それはなかなかはかどらなかつた。見かねたミュレイがそつとリンゴをイスルギの手から奪い、しなやかな指先で見事に皮を剥いてみせると男は少しだけ気恥ずかしそうに視線を反らした。

「相変わらず異常に不器用じゃなあ……………。天性の不器用さというのは、そうそう直るものではないらしい」

「……………そうだな。確かに俺は不器用だ。久しぶりに会うお前に……………気の利いた言葉の一つかけられん」

「そんなものは最初から誰も期待はしておらぬわ……………。しかしまあ、数奇な縁もあったものじゃな。また我らが共にこうして同じ時を過ごす日が来ようとは」

剥いたリンゴを切り分け、ミュレイは一欠片口に放り込み残りをイスルギに渡した。男も同じように一欠片を咀嚼し、複雑そうな表

情を浮かべる。それもそのはず、この二人は本来ならばもう二度と言葉を交わすはずもなかった運命の双子……。片や、ククラカンを率いる炎魔の姫。片や、ザルヴァトーレの姫を護る騎士……。擦れ違った二人の立場は噛みあわず、そし噛みあわないままで続くはずだった。しかしそれがどんな運命なのか、こうして再び同じ時の中に居る……。

「その……傷の具合は、いいのか？」

「んむ、大した傷ではないのう。既に何ともないようなものじゃが、メリーベルがちゃんと休めと煩いのでな」

「そうか。なら、良かった」

「そういうお主こそ腕の調子はいいのか？ 切り落とされたと聞いていたが」

「ああ……。落とされた腕はウサクが拾っていてくれたからな。ここに戻って繋げる事が出来た。お陰で何とか騎士を続けられそうだ」

接続面に術式が刻まれた包帯を巻き、イスルギはその腕を服の上からそつと手で触れた。お互いに見つめあい、それから言葉は続かなかった。確かに幼い頃一緒に育ったとは言え、二人はあくまでも引き離される運命……。国の都合、大人の都合、それぞれの都合……。二人にとってお互いの存在は決して忘れられず、しかしもう触れる事の敵わぬ虚像。瓜二つな美しい紅の血族の双子、二人の間には静かな沈黙だけがあった。

「……………さて、俺がここに居てもお前に気を遣わせるだけだな。」

そろそろ行くでしょう」

席を立ち、背を向けるイスルギ。そんなイスルギの背中にミュレイは寂しげに笑顔を浮かべた。妹は立ち去る兄を見つめ、兄はそんな妹の視線に足を止めていた。僅かな静寂。そして兄はゆっくりと振り返る。

「ミラの事……タケルの事。一族の中からあのような存在を産み落としてしまった罪は我らが償わねばならないだろう。私は戦い続ける……これからも、ずっと」

「……………そうじゃな。罰は受けねばならぬのう。それがどんな理由であれ……それが、家族という物じゃからな……………」

「そうだ、それが家族というものだ。だから。お前一人が背負う必要は無いという事だ」

顔を上げるミュレイ。イスルギは既に扉を開け、部屋を出て行っていた。ぱったりとベッドに倒れこみ、ミュレイは窓の向こうを眺める。広がる夜空……闇の中の光。苦笑を浮かべ、目を閉じた。確かに戦いは終わった……けれども。これからまだやらねばならない事は山ほど残されている。それは途方も無く、一生を使い切っても足りない程の壁である。だが、一人でそれを乗り越えるわけではない。きっとこの戦いで結んだ仲間との絆が……。離れ離れになっても決して断ち切る事の出来ない絆が……。自分の背を護っているのだと、今はそう信じられるから。

ツルギノセカイ(1)

「よう、我が妹よ」

「……おはよう、クソ自堕落な我が兄よ」

ホクトと昴、二人はメリーベルの部屋の中で顔をあわせるなりそんな挨拶を交わした。薬品棚から漂う独特の薬類の匂いの中、メリーベルはビーカーに注いだコーヒートを片手にホクトを待っていた。既に部屋に来ていた昴は出された黒いビーカーを前に戸惑った様子で、ホクトはそれに習ってソファに腰掛けた。

「二人とも呼び出してしまつてごめんなさい。でも色々と話さなきゃならない事があるから、そろそろ……ね？」

「俺が寝すぎなのが悪いんすか、そうツスカ……。まあいいや、とりあえず状況を再確認するとしてようぜ」

ミュレイ救出作戦から予期せずインフェル・ノアの破壊に成功したホクトたち。彼らの活躍により帝国を支えたミレニウムシステムは機能停止に陥り、浮遊城は地に落ちた。結果帝国の機動兵器は一斉に使用不能に陥り、更に兵士たちも王と象徴である浮遊城を失つて戦闘意欲を失っていた。たったそれだけで全てが上手く行かなくなってしまう帝国は恐らく磐石で、しかし脆い組織だったのだろう。反帝国組織による一斉反撃が始まり、それにより帝国は陥落した……。永きに渡る帝国による下層支配は終わりを迎えたのである。

「でもそれでこの世界がすべて上手く回るわけじゃない……。帝国

と下層との折り合いもあるし、これからどうやってこの世界をまとめていくのかも問題だよな」

「昴の言うとおり、この戦いはあらゆる意味でこの世界全体を疲弊させたわ……。誰もかも戦う事に疲れているの。帝国の人間は皆殺しにしろっていう声もあるけど、大多数は帝国を下層に解放して新しくこの世界全体に利益を齎す界層として再編するという意見で纏まっているみたいね」

「ま、そのほうが圧倒的に利益になるからな。帝国の国力があれば下層の復興も早いだろ？」

「でもその当の帝国の住民は次々に自殺しているそうよ。神たるハロルドが居なくなつた以上、彼らはもう何も心の拠り所がないものね……。生き残つた帝国の住人は自意識が希薄で、生きているのか死んでいるのか判らないのが殆どだそうよ。一部の特権階級はまだ帝国の栄光に縋って各地で小競り合いを起しているみたいだけど、それも直に鎮圧されると思う」

「……………後味は決して良くないね。まあ、私たちがしていたのは戦争で……………そうである以上、この結果は判っていた事だけだ」

ピーカーから立ち上る湯気を見つめ、昴は零すように呟いた。帝国がしてきた事を思えば当然の報いなのかもしれない。だが帝国に属している人間ならば全員が処断されるほどの悪であるとは誰にも言い切れないのだ。帝国も、下層の人々も、誰もが疲れている……。戦いが終わった事を実感している人、まだ終わっていないのだと、終われないのだと考えている人……。様々な人間がいる。様々な考えがある。この、縦に繋がる世界の中で。

「それで……俺たちはこれからどうするよ？ 帝国を倒した英雄だ
くっくって騒ぐ空気でもないよな」

「皆疲れてるんだよ……。私も兄さんも、救世主と褒め称えられる
ような人間じゃないしね。それに私たちの立場は複雑で、皆それぞ
れ元は敵同士だったり、味方同士だったり……」

「色々あったよなあ、思えばよ……。あゝ、そっぴやお前……一度
向こうの世界に戻ったらどうだ？ 旦那と奥さんが心配してたぞ」

「え、あー……。うーん……。そうだね……」

「その件についてなんだけど、ちょっと話があるの」

割り込んだメリーベルの声色はいつに無く厳しかった。二人は自
然とお互いに顔を見合わせ、身構えるようにメリーベルを見やった。
三人の異世界の住人はお互いに見つめあい、そしてこれから辛い話
をしなければならなかった。お互いの運命、存在の意義、そしてこ
の世界がなんなのか……。メリーベルはその唇で最初の罰を紡ぎ出
す。それは、昴やホクトにとっては辛い事実となった。

「もう、昴は元の世界には戻れないわ」

「えっ？」

二人が声を重ねて驚くのも無理はない。何故ならばホクトは実際
に向こうにいつて戻ってきたし、メリーベルは次元を超える魔女で
ある。そんな事は簡単な事のはず……。しかし昴は戻れないと言っ
た。その言葉の矛盾に思わず首を傾げてしまう。

「昴、貴方は一度時空を超えて過去に戻ったわよね？ でもそれは実際は過去への時間移動ではなく、別次元への次元移動である事は気づいてる？」

「……何となくだけど、そんな説明はされたかもしれない。別の可能性のミュレイに再召喚させたんだよね？」

「それに伴い、貴方という存在は既に元々貴方が居た世界とは別の次元にズレ込んでいるの。つまり私たちがいるこの場所は本当は貴方が存在すべき場所じゃない……そういうこと」

「んー……？ それがどうしてこいつが元の世界に戻れない事になるんだ？」

「昴が仮に元の世界に戻ったとしたら、そこに居る別の可能性の昴を殺す事になるの。つまり、他の昴が居るべきはずの所に貴方が行ってしまふ事で、どこかの世界のどこかの可能性軸のどこかの昴を貴方が侵略する事になる。で、その昴同士がもしも鉢合わせになつたりしたら……」

メリーベルは手をパーに開き、首を横に振った。三人の間に沈黙が流れる……。異次元の昴同士が顔をあわせるというパラドクス……。勿論、昴と昴がお互いの存在に気づく事が無ければ同じ世界に存在する事も出来るのだらう。だがそれはつまり、どちらかの昴しか、昴が居るべき場所にはいられない事を意味しているのだ。

あの本城の家に戻った時、昴は別の昴の居場所を奪う事になる。そうして二人の昴が顔をあわせてしまった場合、そして本城夫妻が昴は二人居るのだと認識してしまった場合、二人の昴の間にどんな事が起こるのか……。それはメリーベルにも予測不能である。本来は絶対に一つしかないはずのものが二つになる……。それだけで異常な

のは言うまでもないが。

「つまり昴、貴方は元の世界にはもう戻れなくなっただけで事。まあ昴を一人犠牲にすればそれも可能だけど」

「なんだかえらくややこしい話だな……」

「もう少し細かく説明したりする事も出来るけど、わけのわからない話になるから要点だけ抑えていればいいわ。昴、貴方はこの世界に残り……」

「それは別に全然構わないけど」

あっけらかんと告げると、昴はおそろおそろ黒いビーカーを口に運んでみた。何かの薬品が残っていたらいやだなあと思いながらも、とりあえず一口味わってみる。ホクトとメリーベルは無言で昴を見つめており、それに気づいた昴は苦笑を浮かべた。

「私こつちの世界好きだし、別に構わないよ。本城夫妻に会えないのは寂しいけどね」

「そ、そう……？ 本当にいいの？」

「うん、全然構わないよ。私は一生ミュレイの傍にいて誓ったばかりだし……あちっ」

猫舌なのか、口にしたコーヒーを恨めしそうに睨む昴。メリーベルはその間にホクトを手招きし、二人は昴に背を向けてひそひそと話を開始した。

「おい、俺の妹なんかちょっとすごい事になってるんだが……どうしたらいいんだ……？」

「まあ、本人がいいと言うならいいんだけどね……。でも、あれはある意味すごい前向きなんじゃない？」

「前向きすぎだろツ！？ お兄ちゃんはなあ、妹には平凡な幸せを味わってほしいと思ってるもんなの！」

「ねえ、二人ともそろそろ話を進めない？」

背後から昴の声が聞こえ、二人は同時に背筋を震わせた。まあ、本人がいいと言っているのだからいいのだろうが……何とも言いえない空気になってしまふのは言うまでも無い。

「それで、これから私たちが何をすべきかなんだけど……。それについて詳しく説明するには、まず帝国が管理していたミレニウムシステムを調べる必要があるの。それと同時にUGに眠る古代遺跡…… “フラタニティ” に赴く必要があるわ」

「フラタニティっていうと、ロゼの親父さんが調べてたっていう……」

「そう……。かつて、シャナク・ルナリア・ザルヴァトーレを中心とした反帝国組織が発掘した古代遺跡……それがフラタニティ。その奥にはこの世界の“神”が眠っているの」

「神……？ またスケールが大きい話だね。それが例のゼダンって連中と関係あつたりする？」

「そういう事。まあ、とりあえず出発は数日後になると思う。専用の機材の準備とか人材も集めなきゃならないしね。だからその前に“祝・帝国打倒お疲れ様会”を催す事にしたから……。二人はとりあえずその指揮を執って欲しいの」

「はあっ!？」

二人して声を上げたが、強制的に渡された会のしおりに二人は同時に目を向ける。表紙には猫のイラストが書いてあり、その猫の口から噴出しでお疲れ様会と書いてあった。微妙なデザインに冷や汗を流す二人……。メリーベルは少しだけ顔を赤らめて咳払いした。

「兎に角、あのデコボコなメンバーを纏められるのは中立的存在である二人だけでしょ？ 全員に声かけて、準備の方よろしくね」

「あ、あ……？ まあ、俺は別にいいけど……。昴はなんか納得行かない顔してるが……」

「メリーベル、この表紙のイラストはないと思う……！ ここにはミュレイを書くべきだよ！」

「よし、我が妹よ……少しお兄ちゃんと一緒に休もうな？ きつと疲れてるんだよ……お前」

遠い目で妹の肩を叩くホクト。しかし昴はまるで話を聞かず、メリーベルの机から羽ペンを持ってくるとそれで凄まじい勢いでイラストを量産し始めた。ホクトとメリーベルは背後に回り、その様子を眺める。完成したのはミュレイを中心としたちびキャラ達によるイラストで、仲間達が仲良く手を取り合っているのがわかった。すごいのかすごくないのか、全く得にならない特技にホクトは静かに

目を瞑る。

「メリーベル、これで印刷して。せっかくみんなが集まるパーティなんだから、どうせなら派手にやるっよ」

「……昂って絵が上手なのね」

「あ、メリーベルちょっといじけてるな？ 猫が消えたから……いてててッ！？ 足踏むこたねえだろーがッ！？」

こうして様々な事は後回しにとりあえずのお疲れ様会が始まるうとしていた。量産される昂のイラスト……それがミユレイの手に渡り、彼女が後に赤面して悶えるのは語るに及ばぬ事である。

ツルギノセカイ(2)

「墓標　という事か」

背後から聞こえた声　。乾いた風の中、シエルシはゆっくりと振り返った。かつてザルヴァトーレという国が営まれていた、第四界層プリミドールの西プレート……。崩落し、今は第五階層エル・ギルスの荒野と成り果てたその広大なる瓦礫の世界の前、姫は白いドレスをはためかせ佇んでいた。背後に立っていたのはゲオルクで、男はズボンのポケットに片手を突っ込んだままシエルシの隣に並んだ。

「……ええ。もちろん、きちんとした供養はするつもりです。これからこの荒野を発掘して……出来るだけの人々の骸をきちんと弔ってあげたいから」

「そうだな……。この荒野には、ザルヴァトーレ国民の殆どが眠っている……。決してその痛みは消せるものじゃない。俺たちが、一生忘れてはいけない記憶の一つだ」

「……はい。その、ゲオルク……？　貴方は……ザルヴァトーレの王子だと聞きました。貴方もここに、弔いに？」

「まあ、そういう事だな……。シルヴィアが逝ったと聞いた。俺は所詮ザルヴァトーレには戻れない、見捨てられた男だ。あいつを弔ってやる資格なんてないのかもしれないがな」

「いえ、姉さんはきつと喜ぶと思います。貴方が……兄さんが、こうして忘れないで居てくれるだけでも」

「兄さん、か……。うーむ、照れくさいもんだな。これまで通り、ゲオルクさんって他人行儀のままでないか？ 俺は君の兄貴としては随分とチャチな男だ」

「ふふ、そんな事はありませんよ。それに、貴方が私の兄さんでもそうでなくても、それは大した問題ではありませんから。人の本質は関係性だけで決まるものではなく……。私たちは私たちとして、これからも生き続けるのだから」

風に吹かれ、シエルシの金色の髪は美しく舞う。ゲオルクはそんな彼女の姿に在りし日の妹の姿を思い重ねた。強く凛々しく美しく。母から娘へ。姉から妹へ……。絆は、強さは、その誇りは確かに受け継がれているのだと実感する事が出来る。男は目を瞑り、それから夜空を見上げた。空の広がった西側の向こう。虚無の世界はどこまでも続いている。そのどこかには、天国と呼ばれる場所があるのだろうか……。

「これからどうする？ 国も無くなり、帝国も無くなった。今の君は、十分に自由だ。どんな生き方をしようが誰にも関係はない……。だが、一個人的興味として知りたくはあるな」

「そうですね……。私はこれからこの世界を正す方法を見つけないかと思っと思っています。行く行くはザルヴァトーレの再興を……。しかし、それだけでは世界は平和にはなりません。支配するのでもなく、逆らうのでもなく、情性でもなければ欲でもなく、情も無ければ無慈悲もない。そんな世界にする為に必要な事……。難しくとも、実現したいんです。理想とは、叶える為にあるのですから」

「簡単にはいかないぞ、そいつは」

「だからこそ遣り甲斐があります。一生を賭けて取り組むだけの価値があります。争いを望まぬ人々が争わずに済み、そして人の欲が人を支配せず、狂った統治が自由を奪わず……。矛盾したそれらの答えを一生かけて紡いでいくつもりです」

「気の長い話だ。だが……そうだな。そんな人間が一人くらい居てもいいのかもしれない。俺は……そう思うよ」

シエルシの肩を叩き、ゲオルクは笑う。離れ離れになり、言葉を交わす事もなかった兄妹がもう一組。この世界はどうにも擦れ違い、そしてお互い傷つけあうように出来ているかのようだ。純粋無垢なる願いであるほどそれは叶わず、何かを求め叫ぶ声ほど誰にも届かず、世界は何度も擦れ違いと過ちを繰り返してきた。だがその一つの夜明けを告げるかのように、離れ離れに廻る運命は一つに重なり始める。

姫は振り返り、兄の顔を優しく見上げていた。二人が交わしたの
は握手。これからも歴史は留まる事無く紡がれ続けるのだ。である以上、彼女も彼も生き続け、戦い続けるが定め……。これから
は敵同士としても味方同士としてでも、兄でも妹でもなく……。
人一人、一つ肉の身体、魂として生きていく。そこには二人の確かな
な絆と誓いがあった。

「さて、そろそろ戻るとしよう。君も疲れているんだらう？」

「ええ、本当はくたくただったんです……。エスコートをお願いできますか？ ククラカンの騎士よ」

「ククラカンでは騎士とは言わず、武士と言っただよお姫様」

差し出された手を取り、シエルシは淑やかに微笑んでみせる。立ち去る二人の背後、瓦礫の世界の中に残された花束。それは風を受け淡く囁くように輝き、まるで二人の新しい人生を祝福しているかのようであった。

「いやあしかし、平和な世とは実に良いものでござるなあ〜！憎しみ合わず、争わず……実に良き事でございますよ！」

「……………そうでしょうか」

バテンカイトスの前の通り、街を眺めながら声を上げるウサクの姿があった。その傍らにはバテンカイトスへと続く入り口前の階段に腰掛けたエレットの姿がある。エレットはずっと膝を抱えたまま、まるで放心しているかのようにぼけーっと街を眺めていた。エレットにとってローティスに来るのは二度目……。しかし一度目とは余りにも心境が違いすぎる。彼女の心の拠り所であった帝国は既に消滅し、行くあてもない……。そんなエレットが呆然としてしまうのは仕方の無い事で、ウサクは困ったように冷や汗を流すのであった。

「ロ、ロゼ殿……早く戻ってきて欲しいでございますようっ……拙者、エレット殿を笑顔にする事は出来なさそうでございますっ……」

しくしくと涙を流しながら空を見上げるウサク。そんなウサクに駆け寄るロゼの姿があった。ロゼはウサクの肩を叩くと、待たせていた侘びにドーナツが入った袋を差し出したが、ウサクはそんな事は気にせずロゼに飛びついていた。

「ロゼ殿ーっ！！拙者、心細かったでございますよーっ！！」

「うわっ!? ひつつくなよ、気持ち悪いなあ……っ！ それよりこいつ、大人しくしてた？」

「してたでござるよう……。大人しすぎて拙者が独り言喋ってるよ
うで寂しかったでござる」

「そ、そう……。まあドーナツあげるから赦してよ……」

紙袋を空け、マスクを外してドーナツにかじりつくウサク……。そんな少年を背に、ロゼはコートを翻してエレットの隣に座る。エレットはロゼが来た事にも気づいていないのか、ぼんやりと虚ろな目のままであった。

「……。なあ、あんたはこれからどうしたいんだ？」

「……。どうしたい……。判りません……。私は帝国軍人です……。帝国がなくなったらただの軍人……。いえ、それ以下なんです。他の事なんて何も出来ない……。やろうとも思いませんでした」

「でも、今は何だって出来る。何をしてもあんたの自由なんだ。何かやってみたい事とかないのか？ 一個くらいあるだろ？」

しかしエレットは黙り込んだままだった。ロゼも本当は判っていたのだ。それが酷な質問である事は……。帝国の騎士として育てられた子供達には他の人生なんて在り得ない。ミレニウムシステムにより生まれながらに全ての運命が決定付けられている帝国の人間が、それ以外の事について学習しているはずもないのだ。全く一切の無駄なき教育はその分野に置いては圧倒的な能力を持つ人間を生み出す、それ以外の部分に関してはまるでノータッチである。何をす

ればいいのか、どう生きればいいのか、命令されなければ判らない人間……。そんなエレットに自由に何かをしるという方が無理な話なのだ。

溜息を一つ漏らし、ロゼは自分が抱えていた紙袋をエレットの膝の上に乗せた。紙袋の中に入っていたのは女性用の衣類で、ロゼは先ほどまでそれを買いに街に出ていたのである。首を擡げるエレットにロゼは咳払いしてから言った。

「まず帝国の制服を脱ぐことから始めたらどうだ？ それで、街を歩いてみよう。一人では何処へ行けばいいのか判らないなら、僕と一緒に行く。そうやってあちこちを歩いて、色々な物を見て、色々な人と話してみるんだ。そうすれば自分というものが見えてくると思う」

「自分……？」

「自己認識というものは周囲の存在との相対的な判断により構築される物なんだ。色々な経験をすれば自分が見えてくる。僕の仲間はいいやつらだよ。ちよつと変わってるのが多いけど」

そうして笑い、ロゼは空を見上げた。そうエレットに言葉を投げかけ、しかしそれは同時に自分へ言い聞かせる言葉でもあった。色々な経験をして、色々な考えを持ちたい……。ただ何かを憎むだけではなく、それ以外。様々な価値を得れば、様々な世界が見えてくる。世界が見えれば自分も見える。今少年の目の前に広がっているのは、大切な物を失った悲しい世界だ。しかしそこには無限の可能性がある。少年は今、漸く物語のスタートラインに立ったのだ。そう、自分自身を知る為の壮大な物語の始まりに……。

「僕はガルガンチュアで世界中を旅するんだ。この世界のまだ知ら

ない事、知らない場所、知らない人……。全てを見つめ、そして自分の存在する意味を見つけない。人生はリレーだってリフルは言つてたけど、だったら僕はそのバトンを何とし、それを誰に託すのか……。決める義務があるんだ」

「……………。ロゼはすごいんですね。私より年下なのに、ずっとしっかりして……。私は偽者の魔剣を振り回す事だけしか出来ない中途半端な存在です……。私には、ロゼのように生きる事は……………」

「出来るかどうかじゃない、やるかどうかなんだ。人間はそれぞれが自由な意思を持っている。どんな下らない事や馬鹿げている事でも、人は選んで進む事が出来る。僕はこの戦いの中でそれを学んだ。だからエレット、あんたにもきつと出来る」

立ち上がり、そうして夜空に手を伸ばすロゼ……。少年の瞳は遙かな世界を既に捉えている。それはキラキラと輝き、多くの悲壮を背負って空へと舞い上がるのだろう。夜の光を浴びて立つ少年……。エレットはそれを羨ましく見つめていた。少しだけ、勇気をもらえるような気がする。彼と……。ロゼと一緒にならば。

「あゝ、いい雰囲気のところお邪魔して申し訳ないんだが……。ロゼ、ちょっといいか？」

「うおわっ！？ ホ、ホクト！？ 昴も……………？ 急にどうしたの？」

ひらひらと手を振りながらバテンカイトスから出てくるホクトと昴。昴はウサクに、ホクトはロゼにしおりを渡した。そこに描かれたイラストに眉を潜めるロゼ……。ウサクは……。何故か喜んでいた。

「メリーベルがパーティーしようってよ。ロゼも声をかけるの手伝

「つてくれ。砂の海豚の連中もねぎらつてやらないとな」

「そりゃ構わないけど……このイラストは……いや、何も言つまい……」

「そつちの帝国のお嬢さんも一緒に連れて来いよ。いつだったか、ちよつとやりあつた事もあるんだ。な、エレット君？」

「……魔剣狩り……。それにあつちは白騎士ですね。なんだかロゼのまわりはすごい人ばかりです」

「いや、こいつ全然凄くないから。殆ど二トみたいなものだから。女好きでだらしが無くて、フラグ乱立させて一切回収しようとしな鬼畜だから。絶対近づかないほうがいいよ。あと昴はちよつと変だから。近づかないほうがいいよ」

首を横に振り、真顔で語るロゼ。そんなロゼに思わず笑つてしまふエレット……。なんだかんで二人は上手くやつて行くのかもしれない。憎しみ合い、いがみ合う必要はないのだ。戦さえなければ、人はきつとわかりあうことが出来る。

「酷いな、お兄さん結構これでも頑張つてんのよ……？　そういやロゼ、今はもうギルドはないんだし砂の海豚つてどういう組織になつてるんだ？　ギルドやつてるならエレットも入れてやればいいだろ？」

「いや、もう砂の海豚はギルドじゃなくなつたよ」

ドーナツを取り出し、一口齧りながらロゼは振り返る。ポケットから取り出したのはリフルがつけていた眼帯であつた。それを自ら

の顔に装備し、ロゼはにやりと笑ってみせる。

「今の砂の海豚は か・い・ぞ・く」

少年の新しい戦いは既に始まっている。彼女が、そして彼らが紡いだ物語……。それを受け継ぎ、誰かに伝える為の物語。その冒険の中へ今、少年は船を乗り出したのだから……。

ツルギノセカイ(2)

「はああうううううッ おいしそうなご馳走がいっぱいっ
ぱいなっ！っ！ はうはうっ！っ！ はうはうっ！っ！」

歡喜の声を上げ、涎を垂らすうさ子の前にはかつてギルド本部として利用していた空間に作られた巨大なパーティー会場が広がっていた。無数に並んだテーブルの上には豪華な料理が並んでいる……。うさ子はばたばたとそれに駆け寄り、骨付き肉を手にとってかじりついた。目をキラキラと輝かせ、そのままむしゃむしゃとがっついていく……。そんなうさ子を背後から見つめ、アクティとシエルシは苦笑を浮かべていた。

「随分と豪華な会場だねー。これ全部メリーベルが用意したのかな
ー？」

「うさ子……せっかくドレスを貸してあげたのに、直ぐ汚してしま
いそうですね……」

「まあ……しょうがないんじゃないかな……色々な意味で」

うさ子の服は一着しか存在しなかった為、汚れていたそれは洗濯することにしてその間誰かの服を借りる事になったのだが、アクテイの服は寂しい部分がサイズ不一致だった為結局シエルシのドレスを一着借りる事になった。一見するところのお嬢様のように見えるうさ子だったが、動き出すと元気すぎて気品は感じられない。

「アクテイちゃん、シエルシちゃんっ！！ これすっごくおいしいのー！ これ全部食べていいのかなあ？ うさのかなあ？」

「いえ、それは多分みんなのだと思いますよ」

ぱたぱたと耳を振って喜びを表現するうさ子。それを遠巻きにイスルギとゲオルクはワインの注がれたグラスを打ち合わせて眺めていた。会場は飲めや歌えやの大騒ぎで、それらの喧騒から逃れるようにして二人は壁際で語る。

「しかし、こうして集まってみると何とも協調性の感じられない面子だな」

「ああ、全くだ……。私たちも恐らくその協調性というやつには欠けているのだろうな」

「だがまあ、こんな日がたまにはあってもいいだろう。俺もお前とは一度ゆっくり話してみたかった。お互い、姫の相手で普段から疲れているだろうしな」

「私も貴方とは色々と語ることもある……。お互い兄として、王子

として、そして姫を護る騎士として……。これからも、同じ苦勞を分かち合う事になりそうだ」

二人は同時に笑い、それから溜息を漏らした。お互いに色々と思ひは尽きず、それは主に二人が護衛する姫の事である。その姫らは男達の心配も他所に、楽しげに騒いでいた。横から眺める笑顔は可憐、だからこそ色々と思う事もある。口元に手を当てて笑うシエルシを見つめ、イスルギは気づけば涙を流していた。

「お前……大丈夫か？」

「いや、いつ育て方を間違えたのかな……と思つてな……。あんなに純粹無垢で野に咲く花のような乙女だったシエルシが、何故あんな馬鹿男に引つ掛けられてしまったのか……。あ、頭がクラクラしてきた……。酒の所為だと思いたい……」

「馬鹿、お前相手が異性なだけいいだろ。ミュレイを見てみるよ」

虚ろな目でミュレイを指差すイスルギ。そのミュレイは昂に抱き寄せられ、頬にキスをされていた。思わずワインを拭いたイスルギは口元を汚したまま目を擦り、何度もそれを我が目で確認してみるのが、現実は無情でありちよつとやそつとで変わるはずもない。

「女同士であんな調子で……。俺はどうすればいいんだ……。俺、ミュレイを護っていく自信がなくなってきたぜ」

「……………我が妹ながらあれはどうなっているんだ……………？ あれと比べれば相手が異性なだけまだ……………ホクトは……………。いや、断じて赦せんツ！！ あんな駄目男と結婚したら、シエルシはきつと一生苦

劣するに違いないッ!！」

拳を握り固め、齒軋りしながら空に叫ぶイスルギ。ゲオルクは苦笑を浮かべながらワインを呷り、面倒くさくなつたのがボトルごと手にとつてそれをイスルギに投げ渡した。

「今夜はとことん付き合つぞ」

「……………私はこのワインを一気に行けたら、ホクトを殺りに行こうと思つ」

「好きにしる」

ボトルを一気に呷り、中身をごくごくと飲み干すイスルギ。その片手の中に輝くボトルに映りこんだ光の中、ミュレイは昂にくつつかれて困つたような表情を浮かべていた。昂は既に酔つ払つているのかメリーベルに抱きつき、ほっぺたに何度も何度もキスを繰り返している。その異様な熱気にウサクは遠ざかり、一人で寂しく壁際にグラスを傾けている。ミュレイはワイングラスを片手に昂のキス攻撃を受け、遠い目をしていた。

「こ、これ……………ちょっといい加減にせんか! いくらなんでも羞恥プレイどころじゃないわッ!！」

「ミュレイ……………好き好きっ! 大好き! 愛してるう〜!」

「む、むむむ……………!? お主、酒なんか飲んだこともないんじやるう!? そうなんじやるう!?」

「楽しそうでいいじゃない。お似合いよ、二人」

他人行儀にグラスを傾けながら笑うメリーベル。ミュレイは恨めしげにそんなメリーベルをにらみつけた。錬金術師は静かに笑い、そして過去の経験を語る。

「私の知り合いにもそんな感じの二人が居たわよ。いつもイチャイチャしてて……女の子同士で」

「そ、それはどうなったんじゃ……?」

「うーん……さあ、どうなったんでしょうねえ……」

「ここまできて引つ張るとかお主!？」

「ミュレイ、だっこお」

巨大な胸の谷間に顔を突っ込み、鼻はもぞもぞと暴れる。ミュレイが顔を赤らめてそれを何とか制御しようとする背後、ホクトはエプロンをつけたままで料理を皿に盛っていた。好きなだけ酒を呷り、好きなだけ料理を貪る……とは言え、この料理たちの調理にはホクトも参加していたので、結局自分で作って自分で食べているだけでもあったが。

「俺の妹何処に向かってるんだろう……。旦那……。すみません。俺、妹を真人間に出来そうもありません」

「ホクトくくくんっ!!! うさはね……。うさはねーっ!!!」

背後から突然飛び込んできたうさ子の頭部がホクトの背中に直撃し、思い切り咽る……。涙目のホクトの背後、うさ子はドレスを着

て頬をすりすりとこすり付けていた。そのドレスというのがシエルのドレスであった為、肩と胸元が露出しており意外とスタイルの良いうさ子の身体をしっかりと強調している。ホクトはまるで思い出したように冷や汗を流し、うさ子を見て言った。

「うさ子、お前　　女の子だったのか」

「なんだと思ってたんだよ、ポケッツ!!」

うさ子の代わりに怒り、突っ込みを入れたのはアクティだった。いくらなんでも失礼にも程がある発言だったが、ホクトにしてみればうさ子は女の子というよりは……。

「なんか……うさぎかなにか？」

「うさはねえ、うさなのですっ!」

「……………。あのね、うさ子？　ホクトは今あなたの事をものすごく馬鹿にしてたんだよ?」

「うっ?　でも、うさはうさなのですよ?」

「いや、そうなんだけどそうじゃなくて……………」

困った顔のアクティの傍ら、うさ子は目を真ん丸くして首を擡げる。そんなうさ子の頭をわしわしと撫で、顔を寄せてホクトは笑った。

「お、ケモノくさくないぞ〜!　ちゃんとシャンプーのにおいがするな。偉いぞ、うさ子」

「うさ、偉いのっ！ ホクト君に褒められたのーっ！！ はっはっはっ
っ」

「よしよし、うさ子隊員……ミッシヨンコンプリートだ！」

「はっはっはっ」

何故か敬礼する二人。アクティはそんな二人を見つめ苦笑を浮かべている。そうしてアクティの隣にならんだシエルシは優しく微笑み、ホクトを見上げる。ホクトは人差し指でシエルシの額を小突き、それから悪戯っぽく笑った。

「よう、元気そうだなシエルシ。墓参りはもういいのか？」

「ええ、もう大丈夫です。というか墓参りではありませんけど……」

見詰め合う二人の間に言葉は無かった。ただじつと見詰め合うだけである。その何だかよくわからない空気にくさ子はきよるきよると二人の間視線を泳がせ、アクティは背を向けて顔を赤らめていた。言葉が無くとも心が通じる雰囲気……そんなのは恥ずかしくて耐えられそうもない。

「ねえねえホクト君ホクト君？　なんでシエルシちゃんとじーっと見詰め合ってるの？」

「ん？　さあ、なんでだろうな？　うさ子、お前口の周りベッタベタだぞ。ほれ、じつとしてる……拭いてやつから」

耳をばたばたしながら口を閉じるうさ子。それをナプキンで拭く

ホクトはまるでうさ子の兄か父親のようであった。パーティーはそれぞれと思惑の中、しかし愉快に進んだ。そして暫く時間が経った時である。宴も酣という雰囲気の中、突如扉が開き新たな参加者が現れたのである。

颯爽と歩いてくるその姿に誰もが目を奪われた。というのも、その少女は色々な意味で不思議だったからである。子供の身体、そしてそれに似つかわしくない鋭い眼差し……。何よりも特異だったのはそう。その外見がうさ子と瓜二つであるという事である。まるでうさ子をそのまま小さくしたかのような姿の少女は会場に入り、メリーベルの隣に立った。その少女の参加を確認し、メリーベルはマイクを片手に声を上げる。

「はい、皆注目。これから新しい私たちの協力者を紹介します」

全員の視線が集中し、会場を静寂が包み込んだ。それを好機としメリーベルは一息に宣言した。

「彼女の名前はハロルド・ロクエンティア。元ハロルド帝国皇帝、そして元ゼダンの一人だった人です」

会場は静まり返ったままだった。唐突過ぎて誰も信じられなかったし、信じられたとしてもやはり唐突過ぎてなんのリアクションも返せない。そんな中、ハロルドはメリーベルからマイクを引いたくり静かな口調で告げる。

「紹介に預かった、余がハロルド・ロクエンティア……。この世界を統治していた者だ。どうぞ一つ、これからよろしく 諸君」

沈黙はやはり続いていた。その沈黙の中心でハロルドは静かに笑

みを浮かべる。それぞれの視線が交わり　そして物語は新たなステージへと進んでいく。そう、ついには神の領域へと……人類は足を踏み入れ始めたのだ。それを彼らが知るのは、もう少し後の話である。

ツルギノセカイ(3)

「貴様らが知りたいのはこの世界の事……そしてゼダンの事……そうだろうか？」

ワイングラスになみなみと酒を注ぎ、ハロルドはそれを一気に呷った。ごくり、ごくりと喉を鳴らして幸せそうに目を細める少女……。それがそもそもハロルドであるというのが納得の行かない現象だったが、一同はハロルドの立つ場所を取り囲みその動向をじっと見つめていた。

ハロルド・ロクエンティア。世界と同じ名を持つ者。銀色の髪に黄金の瞳を持つ超人。百年帝国を率いて下層を苦しめた狂気の王。様々な姿を持つ彼女だったが、あの黄金の巨体の中身がこんな幼い少女だとは誰も予想していなかった。ハロルドは笑みを作り、腰に片手を当てて語り続ける。

「何を鳩が豆鉄砲食らったかのような顔をしておる。貴様らが見ていたのは余の魔剣。帝魔剣ネイキツドよ。尤も、あれは莫大な魔力を消費するのであまり使いたいものではないがな」

「帝魔剣、ネイキツド……？」

この世界には魔剣と呼ばれる物が様々存在するが、その全てが何れも剣であるとは限らない。刀や大剣もあれば銃のような形をした物、槍、盾、ハンマー、拳銃はシグマルが使っていた透魔剣センチアのように迷彩能力を持つ鎧が本体である事もある。ネイキツドはセンチアのケースに近く、しかし大きく違う点が一つある。

センチアが所有者の周囲を護る鎧として構築されるのに対し、

ネイキッドは鎧ではなく自立的に稼動する機動兵器を召喚するのである。それこそがネイキッド。つまり今まで誰もが見てきた皇帝の姿とは、ハロルドが構築した魔剣ネイキッドだったのである。

「余はこの世界でもトップクラスの魔力を持つ超人だ。故にその能力と特殊な演算能力を用いてミレニアムシステムの一部として組み込まれていた……。その間帝国を指揮するのはネイキッドに任せておったというだけの話よ」

軽快に笑うハロルドだったが、周囲はなにやら重苦しい空気である。帝国の元帝王が目の前にいるという事もそうだったが、今まで戦っていたのがただの“ロボット”だったと言われたのである。どんな顔をすればいいのか判らなくなるのは当然の事だった。そんな中、あえて前に出たのはホクトだった。

「それじゃあ、お前がハロルド王であるというのは紛れもない事実なんだな」

「という事になるな、若いの……。こうして生身で鉢合わせするのは初めてか？ さて、とりあえず　この周りの連中が構えた物騒な代物を下げるように言っってはくれぬか？」

周囲を取り囲む仲間達は全員がほぼ同時に魔剣を構築し、それを小さな少女へと突きつけていた。無数の剣の切っ先を浴びながらしかしハロルドは眉一つ動かす気配は無い。そんなハロルドに駆け寄り、仲間達から庇うようにしてその身を抱きしめたのはうさ子であった。

「みんな、待つてほしいのっ！ ハロルドちゃんはねえ、仕方が無かったの！ 仕方が無く帝国に居たのっ！ うさね、ハロルドちゃ

んとお友達なの！ ハロルドちゃんをいじめないでほしいの……おねがいなのっ」

「うさ子、そいつが今まで何をしてきたのか忘れたの？ 友達とかそんな事は関係ないんだよ、うさ子。そんな下らない事で刃は下るせないんだよ、うさ子。私はね、うさ子 もう戦いなんてのは“ごめんこうむる”よ、うさ子」

ぞくりと、背筋に悪寒が走る。うさ子の背後から少女の首元に刃を突きつけていたのは昴だった。その瞳は黒く渦巻き、一切の感情を感じる事が出来ない。敵なら殺す、邪魔なら殺す……そこに迷う余地など存在しないと瞳は語る。その刃がうさ子の喉を掻き切ろうとした刹那、刃を止めたのはホクトであった。

「いらら止めなさい……！ うさ子を殺してどうする？」

「敵の味方は敵だよ兄さん。兄さんも邪魔をするならこの場でケリをつけたっていいんだ。邪魔をするなよ 魔剣狩り」

「……………全く、もう少し考えてから行動した方がいいぞ？ よお、白騎士」

白と黒の影は至近距離で睨みあう。が、直ぐに昴は緊張を解いて笑みを浮かべた。その姿からは先ほどまでの殺気は一切感じられない。昴は“冗談だよ”と笑い飛ばすとうさ子の喉から僅かに染み出した血を指先で撫で、それを舐めながら後退した。かくぶるかくぶると震えるうさ子……。そこには“もしも裏切ったら殺す”というメッセージが込められている気がしてならなかった。

「す、昴ちゃん怖いの……。ホクト君よりずっとずっと怖いのー

……。はづー……。はづー……っ」

耳をぺったんこにしおらせながらうさ子は涙ぐんだ瞳で呟いた。しかしどちらにせよこの状況が最悪である事には変わりないと、そこで空気を切り替えるかのようにシエルシが手を叩いた。

「この場で剣を向け合って話をしても無意味です！　まずは代表者同士による論議を行きましょう！　ミュレイさん、それからメリーベル……うさ子も関係ありますね？　私と一緒にハロルドから事情を聞き出しましょう」

「ミュレイが行くなら私も行く。それから兄さんも付き合っ。いざハロルドが暴れ出した時瞬殺出来るだけの戦力はそろえておくべきだと思っから」

「……お前一人で十分そうな勢いだが、まあしょうがねえな……じゃあそういう事で、一旦お開き！　残りはパーティーを続けてくれー！」

ホクトはハロルドを担ぎ、逃げるようにして会場を後にする。しかし続けてくれといわれてもそう簡単に続けられるような雰囲気ではなくなってしまう。すっかり醒めてしまったパーティー会場から抜け出し、ホクトたちはメリーベルの部屋へと急いだ。その間ずっとホクトに抱きかかえられたハロルドはワインを飲んでいたので、味が気に入らなかつたのか溜息をついたりしていた……。

「ふう……正に一触即発だったじゃねえか……。勘弁してくれよメリーベル」

部屋に入るなりそつとハロルドを下ろし、溜息を漏らすホクト。

メリーベルは流石に気まずかったのか冷や汗を流していた。しかしまずはハロルドが生きているという事、そしてこの少女がハロルドであることを伝えるのが先決だと思っただけなのである。結果的にそれは要らぬ混乱を招く事になっただけのような気もしたが……。

ハロルドは部屋のソファの上に座り込み、うさ子がその隣に座った。向かいにはシエルシとミュレイ、向かい合う席の間にメリーベルが立ち、ホクトと昴はそれぞれ見張りのようにハロルドの後ろに立った。そんな奇妙な緊迫感が満ちた部屋の中、いよいよ重大な世界の謎が解き明かされようとしていた。

「それで、先ほどうさ子は仕方が無かったと言っていましたね……？ それに、ゼダンの事をハロルドは知っているようでした。もう大体予想はついていますが、帝国の成り立ちにはゼダンと呼ばれる者達が関与していたのですね？」

「ほう、流石はザルヴァトーレの姫君……我が妻となった娘だ。聡い……。その通り、帝国はゼダンによって発足した組織……国家……。余もまたゼダンによって管理される人間であった。そして同時に、余はゼダンの一員でもあった」

「教えてください、ハロルド……。ゼダンとは何者なのですか？ 貴方は何故帝国を……？」

「それを語ると少し長くなるが　まあ、貴様らにも無関係とは言えぬ事だから……。時に、貴様らは救世主の伝承を聞いたことはあるか？」

救世主伝承　。それはこの世界の成り立ちを表現した一つの伝説である。かつて暴れ狂う怪物であったとされるこのロクエンティアと呼ばれる“世界”を、異世界からやって来た六人の救世主が制

した……という物語の事を指す。それはシエルシだけではなくミユレイも、メリーベルもよく聞き馴染んだ話である。イマイチその流れが見えないのはホクトと昴の二人だけで、しかし二人は余計な口を挟む事はしなかった。

「ゼダンとは、その伝承に出てくる六英雄の事を指し示している。つまり　ホクトや昴のような異世界から召喚された英雄の事だ。そして余もその一人……という事になる」

「なんじゃと……！？　では、お主は伝承に出てくる異世界より現れこの世界を救ったと呼ばれる救世主の一人だとも言うのか!？」

「いや、それとは違う。オリジナルの“六英雄”^{ゼダン}は既にその殆どが死んだか離脱し、現存するゼダンは抜けたゼダンたちを補った後継者に過ぎぬ。余もその一人でな、百年ほど前にこの世界に召喚され、ゼダンの後継者とされたわけだ」

少女には元々暮らしていた世界があり、元々彼女には別の名前があった。彼女が生きていた世界では驚異的な科学文明が発達しており、魔術という概念は存在しなかった。少女はこの世界に召喚された事をきっかけに魔術を知り、その魔術と己が知っていた機械知識を組み合わせ帝国の基盤となる技術を構築した。

ハロルドという名は元々彼女が持っていた名前ではなく、与えられた名前であった。ハロルドはロクエンティアという異世界で別人として生きる事を強いられ、そしてその運命に閉ざされるかのようミレニウムシステムへと組み込まれた。彼女に逃げ場は無く、生き続ける為に王でなければならなかった。そして彼女は叶えるべき願いをずっと胸の内に隠してきたのである。

「ゼダンは帝国という国を使ってこの世界を支配し、永続させる事

を目的としていた。余はその案に乗り、この世界を存続させる為に今日までやってきたつもりだ……。だが、ゼダンとは……。ゼダンという者達は、余りにも歪んでいる。余も含めて　な」

「大罪」

呟いたのは昴だった。ホクトもその言葉の意味には気づきつつある。そう、大罪　それがこの世界を支配するゼダン……六英雄の剣であることは最早語るまでも無い。世界に七つ存在するとされる大罪の剣　それは伝承に伝わる通りの存在なのだ。

「かつてこの世界は生れ落ちた時、一人の神を呼び出した　。世界を創造させる為に」

言葉を続けたのはメリーベルであった。メリーベルはまるで全てを見てきたかのように、自分が経験したかのように語った。そう、どちらにせよ彼女は二度目……。こうして世界を産み落とした“神”と闘う事、そしてその運命に逆らう事　。全てが二度目なのだから。

「世界はそれだけでは生まれる事が出来なかった。だから一人の人間を召喚し、それを神の代行者とした。世界に本物の神なんて居ない……。いわば世界そのものが神と同義。だが神は言葉を持たず、意思を持たず、力を持たない……。故に変わりに思考し、紡ぎ、世界を産み落とす者を望んだ。それこそがこの世界の神　」

「……………神は寂しかった。自分一人しかいない世界は嫌だと願った。世界はそれに応え、他者を取り込む為に異世界へと侵略の腕を伸ばした……………」

更に続けたのはシエルシだった。それは伝承　しかし確かに過去に起きた事実である。誰もが知るようなその伝説の景色を思い浮かべてみる……。馬鹿馬鹿しいとは思わない、今ならば想像出来る世界を生み出した一人の神、その孤独と戦う為にこの世界は異世界へと戦争をけしかけたのだ。襲われたのは六つの世界　。六つの世界の人々は侵略する“荒れ狂う世界”という存在に対峙し、それと戦った。

「結果、荒れ狂う世界は封じられた　六つの世界の六人の英雄の手によって。伝承ならばそこで終わりだ。だが……現実はずう」

そう、例え物語が終わりを告げたとしても　現実が続いている。世界は終わらない。存続する限り、滅ばぬ限り、永遠に続いていくのだ。六つもの世界を壊滅同然に追いやった“世界”は封じられた……。だが、世界は今もこうして存在している。

「この世界はまだ続いている……。何故だか判るか？　この世界は眠っているだけで、まだ生きているからだ。あらゆる物を飲み込む世界の意思……。それを七つの大罪と呼ばれる剣の形に固定し、封じた。それにより世界は意思を奪われ眠りについたのだ。ゼダンの役割とはその大罪を護る事……。この世界を封じ続ける事であった」

目を瞑り、語るハロルド……。誰もが思わず黙り込んだ。ゼダンと呼ばれる英雄達がこの世界を封じ、長い長い、気の遠くなるような年月を過ごしてきた事　。そしてハロルドもまたその一員として世界を“護ろう”としていたという事実の意味……。判らなくなってくる。何故それがこんな悲しい世界を生み出すに至ってしまったのか　。

「大罪とは……。七つに分断されたこの世界の罪そのものだ。そこに

はこの世界を乱す災いの源が圧縮されている……。言わば、神の原罪だ。それは本来ならば清い心を持つはずのゼダンの心をも侵食した……。この世界の歴史とは、ゼダン同士の戦いの歴史でもある。そう、彼らは取り付かれてしまうのだ……。禍々しい力を持った、“魔剣”の魅惑に……」

大罪を持つ者はその身に巨大な罪を宿す事になる。世界に生きる生き物が持つ感情とは比較にならないレベルの、膨大な感情である。それは“心の闇”と言い替えても良いのだろう。術式を身に宿した時から大罪はその者の心を壊し始める。結果 この世界では創世から繰り返し、何度も何度も救世主同士の戦いが繰り返されてきたのである。

救世主たちは身体を蝕む神の悪意に耐え切れず、互いに殺しあった。それぞれの剣には“一つに戻りたい”という意思があり、それは本人達も知らぬような部分で運命をすり合わせ、殺し合いへと差し向けるのである。本来ならば絶対に戦うはずのない救世主たちが何故か偶然、不思議と殺し合い剣を束ねて行った……。奪ったそれはまた何者かに奪われ、英雄同士の戦いは果てしなく続いた。

「貴様らも心当たりがあるのではないか？ 大罪を持つ者同士は決して相容れぬ……。不思議と運命に引き寄せられ、殺しあう事になるのだ。何度も、何度も……。な」

ヴァンとステラがそうであったように。ステラがミラを殺したように。ミラがヴァンと出会ったように。ミュレイとミラが分かり合えなかったように。ミュレイがシルヴィアと戦い続けたように。ホクトと昴が、ホクトとステラが、ハロルドが……。彼らは戦い続けた。何度も何度も戦い続けた。戦いたくないと心のどこかで思っても、何故かそうしてしまう。“何故”といわれても理由など無

いと答えるだろう。彼らには全くそんなつもりはなかったのだから。あくまでも自分の意思で　そう主張するだろう。だが結果的に、全体的に見れば、大罪を持つ者たちが世界を乱し続けていたのは紛れも無い事実なのである。

「それだけではない。大罪がある限り、その悪意はこの世界を蝕み続ける……。全ての魔剣は大罪より生まれた物……。大罪はただあるだけで“魔剣”を増やす……。魔剣はまた運命を狂わせ世界に戦いを呼ぶ。判るな？　これが無限に続くこの世界の煉獄の正体だ」

誰もが呆然と黙り込んでいた。全てが運命、全てが争いの原因……：そう言われてもスケールが大きすぎて直ぐに納得は出来なかった。だが大罪を持つ者たちは直ぐにその言葉を何となく理解するのだ。ここに居る大罪の所有者は五人。彼らは全員、この世界の戦いの中で中心的な役割を担っていた人物なのだから。

「罪が罪を産み、魔剣という力が人の世を狂わせ争いを生む……。確かにそうかも知れぬ……。わらわたちは常に何かと戦ってきた。本当は誰も戦いなど望んでいなかったはず。だが繰り返される悲劇が刃を下ろすことを良しとしなかった……」

「そんな……。それじゃあ……。！？　戦いを望んでいるのは……。この世界そのものだっていうんですか？　この世界の罪が……。世界に争いを招くとも言うのですか！？　そんな理不尽な話　ッ」

立ち上がり、テーブルを叩くシエルシ。だがここでハロルドを責めたところでなんの解決にもならない事はシエルシにも判っていた。暫しの沈黙が過ぎ去り……。ハロルドは改めて口を開いた。

「大罪はこの世界を封じる鍵そのものだ。故にそれを破壊する事は

出来ない……。大罪が失われた時、それはこの世界へと還元され目覚めるのだ。この世界 “アニメ” と呼ばれる化け物がない

「アニメ……」

「大罪は封じる事もできず、そしてその封印は日に日に衰えている……。かつてこの世界を封じた六英雄の時代から何千年も経っているのだ。封印が衰えるのも当然……。そしてこの世界には新しい罪を産む存在が増えすぎた。そう “人間” だ」

元々この世界には人間がいなかった。だがアニメを封じる際にこの世界には結果的に人間が移民する事となってしまった。そうして彼らがこの世界で営みを繰り返すうちに……。自然とそれはあふれ出す。人が生きれば当たり前のように生じる心の闇……。それが徐々にこの世界に蔓延し、封印を緩める手助けをしているのである。

「手っ取り早くこの世界を黙らせるにはこの世界に存在する人間全てを可及的速やかに排除する必要があった。だが、余はそれに反対した……。そして応急処置として構築したのが人間の絶対数と動向を管理し、極力この世界に悪意を溢れさせないようにするための“帝国” だ」

シエルシはその言葉で直ぐに気づいた。ハロルドという絶対王が存在するからこそ、これまで下層の人間たちはちまちまと反乱を起すことはあれどその憎しみの矛先はすべてハロルドに向けられていた。ある意味において世界は纏まっていたのである。感情を廃し、考えない人間を生み出す帝国教育……。下層の圧倒的武力による支配。全てがもし、ハロルドの計算の手の内にあつたとしたら……。？
すべてが“この世界を出来る限り落ち着かせる” 為にあつたとしたら……。？
ぞくりと、悪寒が駆け巡った。シエルシには直ぐにこ

れから何が起こるのかがわかってしまった。とても恐ろしい……絶望的な未来……それはすぐ目の前まで迫っている。

「帝国が……帝国が無くなって、ヨツンヘイムの人々は嘆き苦しみ、自殺までしている……。下層の人々はヨツンヘイムの人々を憎み、小競り合いも止まない……。どうなるんですか、これから……？ 帝国という支配者が居なくなり、その空席を狙って戦争が相次いだらッ！……！ この世界は 封印はどうなるんですかッ！？」

シエルシの悲痛な叫びで誰もが気づいた。そう、もう止めることは出来ない……。今はまだ戦争直後で落ち着いているものの、人の歴史は戦争、支配、革命の三拍子 それはきつと崩れる事はないのだ。世界に新たな混乱が齎され、新しい度立ちが齎された。だがそれはこの世界に何を招くのか……？ 何も知らずに人々が抑圧されていた感情を爆発させた時、アニメは 。

「……封印の箍が外れたが最期、この世界は暴走を開始する。アニメと呼ばれる化け物が闊歩し、数千年前と同じようにあらゆる世界を食い尽くそうと暴れまわるだろう」

やけに、時計の針が刻む音が煩く聞こえた。心臓の鼓動が高鳴るのがわかる。勿論、全員良かれと思ってやっていたことだ。帝国を倒せば自由になれる……そう思っていたの事だった。勿論、帝国は紛れも無く悪だった。絶対王政による理不尽な政治があった。だが……それは統べて、このアニメの話が無ければの場合である。

そんなIFを語った所で何の意味もないが、誰もが驚きと同時に強い意志を失いかけていたのは事実だった。自分達のできた事はなんだったのか そう思えば足元は竦んでしまう。ハロルドは目を瞑り、黙り込んでいる。誰も口を開こうとはしなかった。ただ、暗い沈黙だけがそこに横たわっている……。

「……余は、この世界を何とかして覚醒から遠ざけねばならない。その為ならば貴様らと喜んで手を組もう。世界の均衡を崩した責任……貴様らには取ってもらわねばならぬ。覚悟はいいか、人間……。これからは、この“世界”の運命が相手だ」

ツルギノセカイ（3）

「話し合いましょう。考えましょう。私たちにも出来る事がきつとあるはずですよ」

搾り出すような声と共にシエルシは顔を上げた。誰もがシエルシへと目を向ける。まだ希望を捨てていない、絶望に屈していない姫を見やる。その瞳はまだ遠い理想を捉えている。それはまだ、燃え尽きたりしてはいない。

「教えてください、ハロルド……。どうしたら私たちは……過去と同じ過ちを繰り返さずに済むのですか……？ どうしたら、もう！誰も傷つけあわない世界に出来るのですか！？」

「その為に、うさたちはゼダンと戦わなきゃいけないの」

黙っていたうさ子が口を開く。ハロルドはそれに同意するように頷いた。敵は世界。そして英雄。心してかからねばならない。それは正に、神話に挑むが如き逆。シエルシは頷き、そして仲間たちは頷きあう。まだ何も終わっていないし、始まってもない。

そう、全てはここから……。この時から、始まるのだから。

「 よう、何を一人で黄昏ちゃってんだ？ へこたれプリンセスさんよ」

「ホクト……。いえ、なんだか何もかもが唐突過ぎて……。これで全部終わりで、何もかも丸く収まって、平和な世の中になるなんて思っては居ませんでした……。それでも……。やってきたこと全てを否定されては、辛いものがありますね……」

バテンカイトスの中央螺旋階段、いつかのようにシエルシはそこに腰掛けてぼんやりと考え事をしていた。背後から現れたホクトは立ったまま背後からシエルシを見下ろしている。背中が大きくはだけた黒いドレスの隙間、シエルシの背中に刻まれたザルヴァトーレの術式が目に残った。ホクトは目を細め それを見なかった事にして話を進める。

「ゼダンを倒せばそれで全部解決でもない……。ハロルドの苦労も、今なら少しは判るってもんだな。でもま、なんとかかなんだろ。これまでだって何とかしてきたじゃねえか」

「……ええ、そうですね。そうですね……。何とかしましょう。何とかしなければならぬなら、やるしかないならやるまでです。でも……。ホクト、私は痛感しました。私はやはり、とても無力な存在なのだ」

ホクトや昴、ミュレイにうさ子……。彼らは恐ろしい力を持った魔剣、大罪の所有者である。それはこの世界を救った六英雄と同等の力を持つという事を意味しているのだ。いわば、彼らもまた生き

た伝説……。メリーベルは世界を渡り歩く魔女で、他の仲間達にも色々と長所や背負う物がある。そうしたものの中でふと、思い出したかのように感じる寂しさがあつた。自分の両手を見つめても、それはまだ綺麗なまま……。口先では色々と言ってきたけれど、肝心な所はいつも人任せだった。

「私には、強大な敵に打ち勝つような力もない……。この世界を変えような技術もない。背負うべき故郷も失い、私には何も無い……。時々自分の無力さが酷く憎らしく思えます。私は 余りにも弱い」

「俺はそうは思わないな。お前ホラ、ミラと対峙した時あいつと真正面からぶつかり合っただろ。言葉でも力でも……。お前は一步も退かなかつた。俺に剣を向けられてもお前は揺るがず、真つ直ぐ俺を見詰め返した。そんな馬鹿はそうそういねえ。それは簡単に出来る事じゃねえからな」

「……。なんだか褒められているのか貶されているのかわかりません」
「褒めてんだよ。もちつと嬉しそうな顔してみい？ んっ？」

シエルシの背後に膝を下ろし、ホクトは背後からシエルシを抱きしめるように腕を回した。片手でくしゃくしゃと頭を撫でられ、もう片方の手をシエルシは自らの手でぎゅっと握り締めた。“敵わない” そう思った。ホクトはいつでも強い。それは確かに、時々無謀な事をしたり、本当に時々は迷ったりもする。けれども彼は自分を曲げたりしない。自分を曲げた瞬間死んでしまうような愚かな人種なのだ。常に真つ直ぐ前へ。それがどれだけ愚かしい事だとしても、彼はあらゆる意味で正直なのだ。己の理想にも、欲にも……。だからこそ、裏表無く信じられる。

ホクトの傍に居ると何でも出来るような気がした。どんな窮地にいたってホクトが助けてくれると思えた。彼と一緒になら、何だって……どんな壁だって……全部壊して突き進む事が出来ると、そう思う事が出来た。ホクト以外では駄目なのだ。ホクトに助けられ、そして心から彼を助けたいと願う。その感情が“愛”ではないというのなら何だというのか。気づけばシエルシは涙を流し、切なげに目を閉じていた。滅び行く世界の中で、何も無い自分の中で、この心だけは永久に揺ぎ無い……それがとても嬉しかったのだ。

「思えば……色々な事がありましたね」

「そうだな」

「時には離れ離れにもなりました。でも、貴方の事を忘れた事は一日足りとも無かった……。私はもう、どうしようもないくらい貴方の生き方に心奪われてしまっているのでしょうか……」

「俺はお前の事忘れてたわけだが」

「別にかまいませんよ、そんな事。紡いできた時間はまた何度でも紡ぎなおすことができ……？ あれ、ホクト……？」

シエルシの“色々な事がありましたね”という問いかけに対し、“そうだな”と答えたホクト。そういうばとところどころ会話に違和感があったのだ。振り返り、ホクトを見やる。男は悪戯っぽく笑みを浮かべ、シエルシの髪に頬を寄せて言った。

「ミラに奪われていた記憶は、お前のお陰で取り戻せたんだよ。インフェル・ノアで戦っていた時にな」

「そ、それじゃあ……?」

「ちゃんと全部覚えてるから安心しろ。お前がカンタイルで追っ手に追われていた事も……アンダーグラウンドでとっ捕まって変態にいじめられた事も。婚姻の儀とか……色々な」

「……貴方も意地が悪いですね、つくづく……。まあ、そんな事だろうとは思っていましたが……」

二人して笑いあい、それから暫しの沈黙……。しかしそれは決して重苦しいものではなかった。二人で同じ目線で、同じ物を見る……。目くるめく様々な感情が渦巻くこの世界の中で、確かな物を感じていく……。一人では出来ない、けれどきつと二人なら簡単な事。それが今はとても大切なように思えた。

「ありがとうな、シエルシ」

「……はい?」

「俺は……お前の言葉が嬉しかったよ。あんまりカッコイイ話じゃないが……俺はヴァン・ノーレツジであると同時に北条北斗であり、そしてそのどちらでもないと言える。俺にはヴァンの記憶も、北斗の記憶も交じり合って存在している。俺はハンパなんだ。どちらにもなれない、どちらでもない……そんな存在。俺には成すべき事も、還るべき場所も無い……そう思ってた」

誰かと共に居たとしても、自分が嘘の塊ならばそれは間違いであるかのように思えた。常に迷いながら、その時自分に選べる最良を探してきた。それでも彼は常に圧倒的な孤独の中にあり、そこから抜け出すことなどとうの昔に諦めていた。だが　そんな自分にも

仲間が出来た。大事なものがどんどん増えていった。いつ死んでもおかしくない、けれど死んだ所で失うものもない世界……その均衡が壊れるのが怖かった。

仲間を作る事も、誰かと共に歩む事も、全ては恐怖の対象でしかなかった。故に男は饒舌でありながらも寡黙で、そして陽気に見えてその本質は冷静だった。冷たく鋭いナイフのような心を持ったヴァンの姿……それは彼の今と何も変わらなかったのだ。そんな自分に、いつでも真っ直ぐだったのがこの姫だったのだ。

「お前は迷っている俺を一步前に進ませてくれた。いつだってそうだ。お前を助けなきゃならないって思うと、自然と足が前に出てたんだ。お前に懐かれても困るし、誰かと一緒に居たら戦いに巻き込む事になる……だから傍に置きたくなかった。でもそれってさ、俺がお前の事を大事に思っているからこそ、なんだよな……」

「ホクト……」

「何も信じられなくて怖かった俺に、ミラは全てを受け入れると言ってくれた。でも……お前は俺がどうであれ、俺を支えてくれる。俺がどんなんでも関係ないんだ。一方的で強引で……でも馬鹿みたいに真っ直ぐで。お前と一緒になら、揺るがない自分で居られると思っただ。お前と一緒になら 自分を好きで居られると思っただ」

耳元でそんな言葉を囁かれシエルシの顔は真っ赤になっていた。しかしそれはとても嬉しい言葉でもあった。やはり、これで良かったのだ……そう思っただけ目を瞑った直後である。なにやら胸の辺りに違和感を感じ、恐る恐る目を開いてみる。するとそこには背後から自分の胸を揉みしだくホクトの手があった。無言でホクトの顎に膝をぶち込み、立ち上がると同時に回し蹴りをホクトの即頭部に直撃させた。手摺を壊して吹っ飛んだホクトは螺旋階段から落下し、遙

か下のエントランスまで落ちていった……。

「あな……貴方はッ！！なにをつ！してッ！！いるんです、
かあッ！！！！！」

「……………ナイス、おっばい……………」

「下らない事を言わないで下さい……………。私は今、少々気が立っています……………」

エントランスまで飛び降りたシエルシは倒れたホクトの上に着地した。ハイヒールが鳩尾に減り込み、ホクトは情けない悲鳴を上げた。そうして悶えるホクトを見下ろし、シエルシは妙に冷静な笑顔を浮かべている。それが逆にとても怖かった。

「いや……………なんかいい雰囲気になってきたから、そろそろイケるかなあと思って……………」

「何がイケるのか判りませんが、貴方のした事は立派な犯罪ですよ……………？ はい、ちゃんと悪い事したら謝りましょうね、“ぼっや”……………」

「……………いや、だけど……………。あれ、だつてお前俺の事好きなんじやねえの……………？ 俺なんかおかしい事したかな……………？」

「いいから正座をしなさい。確かに私は貴方の事が……………好きですが、それと胸を揉んでいいかとは全くの別問題です」

「俺は……………お前のでっかくて形のいい柔らかかそうなむちむちおっぱいを長い間狙っていたんだ。そもそも最初にお前を助けたのはそれ

が理由だったと言つても過言ではない」

「死にたいんですか」

そのトーンが余りにも低かったのでホクトは大人しく正座して黙り込む事にした。ホクトはちよつとやそつとで死なないのは既に周知の事であり、ちよつとナイフを突き刺したり火であぶったりしたくらいでは死なないのは間違いないのだ。シエルシがホクトを“しばらく”方法は実にバリエーション豊かであると言える。

「いやしかし……若い健全な男女がな？ いい雰囲気になったらこう空気に流されてやつちゃうのもアリだと思ふんだ俺は……。見ず知らずの関係じゃないんだし、お前だつてそういう経験くらいあるだろ？」

「私は処女ですッ!!」

何故か真顔で宣言するシエルシ。直後、自分が何を叫んだのかその意味を頭の中で反芻し、顔を真っ赤にして涙目になっていた。そもそも婚姻の儀の為に処女でなければいけなかったという誰もが忘れ去っているような設定が彼女にはあり、必然男性経験などあるはずもなかった。

「そ、そもそも私は……その……えつと……！　そうです！　こんなわけのわからない展開からでなく、そういうのは順序を追って進んでいくべきです！！　せつかくロマンチックな感じになったのになんて貴方はそんなんですか!？」

「まあ待て、俺と付き合うならそれくらいは覚悟してくれないと……。いいか？　俺の思考は魔剣戦闘の事が三割、二割が遊ぶ事で、

「一割真面目な事……残り四割はエロい事で構成されている」

「何を堂々と宣言しているんですか？ 殺しますよ」

「そもそもそんなんじやお前結婚なんか出来ないぞ？ お嫁さんが何をやる物なのかお前知ってるのか……？」

そのホクトの一言で在りし日のシルヴィアから受けた歪んだ嫁入り修行の記憶がフラッシュバックしてくる。青ざめた表情を浮かべ、シエルシはその場に屈んで頭を押さえ、プルプルと小刻みに震え出した。

「姉さん、そこは入れるところじゃない……出すところです……」

「は？」

「そもそも冷静に考えてみたら私、ハロルドと結婚していました。つまり……不倫になります」

「不倫する姫つて聞いたら急になんか物凄くエロいような気がしてきました本当にありがとうございます」

「というか、ハロルドは女の子だったわけ……。私……これからどうすればいいんでしょうか？ なんだか何もかも嫌になってきました……」

遠いところを見つめ、呆けたような表情を浮かべるシエルシ……。その頬に一筋の涙が流れ、ホクトはそれを横から冷や汗を流しつつ見つめていた。冷静に考えてみると、色々と問題は山積みである。本当に色々と……。

「まあ……帝国が無くなった以上もう関係ないんじゃないか……？
元気出せよ……な？」

「はい……ありがとうございます、ホクト」

と、そこで真正面から再びホクトがシエルシの胸を鷲掴みにした。シエルシは笑顔のまま眉間に皺を寄せ、両腕に刻まれた術式を発動する。バテンカイトスの中に大きな揺れが起こり、数分後ホクトが倒れている姿が発見されるのであった。

S O - R A (1)

「第三階層より上の領域に、ガルガンチュアを飛ばす？」

荷物の積み込みが開始され、新しい戦いの為にどたばたと準備が進められる慌しいガルガンチュア船内、艦橋で出発の準備を進めていたロゼに舞い込んだ依頼……。それはこの世界の誰もが到達した事のない不可侵領域、第二界層ジハードへの旅であった。

唐突過ぎる話にロゼが戸惑うのは当然の事だったが、全てはこの為だったとも考えられる。元々ガルガンチュアは潜水艦ではなく、潜水能力を持つ特殊な飛空艇であった。その封印された力を解放したのがメリーベルで、更にそこに彼女は様々な能力を付与している。主に耐久力、周囲の結界が強化され、システムも最適化されエンジンも大幅に強化された。これにより今ガルガンチュアはこの世界に存在する飛空艇の中では頭一つ、二つ抜きん出た性能を持つ代物と

なっている。その改造はインフェル・ノア攻略戦の為に施されたのだが、過剰に強化されたそれは第二界層への道を開く為にあつたのかも知れない……今ならそう思える。

艦橋に立ったメリーベルとハロルド、それからうさ子はロゼに見取り図を渡し、ロゼはそれに目を通していた。そもそも第二界層ジハードとはどんな世界なのか？ どこにあるのか？ どのように到達するのか……？ 前人未到と呼ばれたその界層への道が困難であるとされるには当然いくつかの理由が存在する。

まず、帝国によりジハード行きは堅く禁じられていたという事。帝国は第二界層に人間が立ち入る事を絶対に赦さなかった。この問題に関しては帝国が消滅した今大きな問題ではない。最大の問題は三つある問題のうち、残りの二つである。

「まず、ジハードへの道は物理的に存在しないの」

「……というと？」

「界層を界層を繋ぐセントラルエリアのシャフトエレベータが通じていないのよ。動力系のラインが通っている塔はあるけどそれだけ……。塔の外壁をよじ登って何十キロも進む事は出来ないわ」

「だからガルガンチュアで飛んでいくしかないって事か……。でも、その為にはまず……」

「そう、ジハード周辺に存在する特殊防壁……システム“SO-R A”を無力化する必要がある」

このロクエンティアと呼ばれる世界は無の空間の上いくつつかの界層がぼつかりと浮かんでいる……そんな世界である。故に界層の外側から飛空艇で飛んでいけば、事実上ジハードに到達する事は可

能なのだ。今まではそれだけの技術力を持った船が無かったという事があるが、今は改造されたガルガンチュアがある。問題はそのジハードの周辺に展開されている特殊防壁システムである。

それはジハードへ接近する物を物理的に排除するシステムであり、巨大な魔力結界とそれに近づく者を迎撃する能力を持つ。ジハードとは空に浮かんだ孤立した巨大要塞のようなものであり、いくらガルガンチュアでも現在の装備ではジハードへ進む事は不可能なのだ。

「よつて、更にガルガンチュアを強化し、防壁システムを突破する方法を考えなくちゃならないの」

「それが、さっきのゼダンって連中を倒すって話と関わってくるわけ？」

「そうだ。ゼダンはジハードより先の世界を根城にしている……。奴等を叩く為にはジハードへの突破が必要不可欠……。防壁S O - R Aは我らが何としても突破せねばならない壁なのだ」

「しかし、そのゼダンって連中を倒せしても大罪ってやつは消えないんだろ？ ゼダンを倒してどうするんだ？」

バテンカイトス内部、必要な物資などを掻き集めリストにチェックを入れる昴の傍らにゲオルクとアクティの姿があった。そう、確かにゼダンを倒した所でこの世界から大罪が消滅するわけではない。そしてアニマの封印が再施行されるわけでもないのだ。だが、ゼダンは何としても倒さねばならない相手である事に違いはない。

「ボクもその辺疑問なんだよね。それにゼダンってなんなんだろ…」

…？ ちらつと説明は聞いたけど、正直よくわかんないよね」

「ゼダンっていうのは……。この世界を護り、封印し、それを維持する為に必要なシステム……。みたいなものだよ」

“六英雄”^{ゼダン}……それは何度も殺し合い、憎しみ合い、互いに争いながらもしかし至上目的であるアニマの封印だけはきちんと行ってきた。それは実は今のゼダンも変わらず、彼らは好き勝手に動いているように見えてその行動はすべてアニマ封印の為なのである。

彼らは先日 of 戦いでインフェル・ノアを襲撃した。それはハロルドがゼダンを裏切った行為を続けていた事がバレたからなのである。ハロルドは帝国皇帝としてゼダンの手足となり働いていたその裏で“アニマの器”を覚醒させる準備を進めてきた。ハロルドにとってアニマに護られた創世神、アニマの器は個人的にも何とか助けねばならない運命の相手であった。それにアニマの封印はこのままではいずれは解けてしまう……。そんな先送りの方法を打開する為にもアニマを宿した張本人を目覚めさせ打開案を探ろうと言う考えがあったのだ。

しかし器の覚醒はアニマ覚醒を早める結果となる。それをゼダンは良しとしなかったし、既に帝国がいくら下層を支配したところで支配しきれなくなってきていたのは既に明らかであった。故にゼダンは帝国の役割を放棄し、代わりにこの世界の人間を別の形で支配しようと考えているのだ。それにただ支配しようとしなくとも、単純に封印を長持ちさせたいのであれば人間の数を減らすだけでいい……。その彼らの選択の一つがザルヴァトーレのページなのである。

「あいつらがどんな考えで今動いているのかは良く判らない。でもあいつらはこの世界を維持する為に他の物を犠牲にしすぎる……。帝国がなくなつた今、連中は別の手段で人間を支配しようと考えてるかもしれない。もっと強力に……。ね。或いはこの世界の人間を全て

滅ぼすつもりなのか……」

「な、なんかスケールが大きすぎてピンとこないなあ……」

「帝国を倒しても、結局人間に自由の余地はないって事だよ。本当に自由に解き放たれたいのなら、神をも殺す覚悟が必要になるって事」

苦笑し、リストのページをめくる昴。アクティはコンテナの上に乗って考え込んでいた。話を横で聞いていたゲオルクは額の汗をタオルで拭い、それから小さく溜息を漏らした。

「全く、次から次へときりがないな……。だが、ゼダンを倒してどうする？ 大罪は？」

「今の所、そこから先は殆どノープラン……。ハロルドはメリーベルには考えがあるのかもしれないけどね。それに、どちらにせよ連中を野放しには出来ないよ。六英雄って言ったって、その全部が健在なわけじゃない。連中の手元から実際大罪はあちこちにばら撒かれているしね……。何でだか判らないけど」

「ばらばらに世界に飛び散った大罪……。それを管理するのがゼダンの役割でしょ？ なんか変じゃない……？ なんかボクはまだこの話、裏があるような気がするんだよなあ」

「まあそうだったとしても、俺たちのやるべき事に変わりはない。ゼダンを倒し、本当の平和を手に入れる……。そうだろ、シエルシ」

バテンカイトスを出発し、ガルガンチュアが停泊しているローテイスのターミナルを屈指してホクトとシエルシは歩いていった。そう、どちらにせよやる事は変わらないのだ。ゼダンは倒すべき敵……それ以外の何者でもない。だがゼダンを倒した所で世界はよくなるのか……わからない。考え続けねばならないだろう。

帝国を倒せば平和になる、もつとよくなる、そう考えて戦ってきた。でも今はただ戦うだけではいけないのだという事がはっきりと判ったのだ。彼らは知らなければならぬ、この世界の事……この世界の全て。そして知らねばならぬ事を知り、見聞きしたその現実の上で戦わねばならないのだ。闇雲に剣を振り回すのではなく、曇りなき眼で世界を見定める事……それが今の彼らには必要な事なのだ。

「何を成すべきなのか……その判断を下す為にも、まずはゼダンの事を知らねばなりません。行きましようホクト、彼らの住む天上へ」
「だな。しかしまあ、防壁システム“SO-R A”か……。突破の為の改造はレコンキスタでやるそうだから、暫くは帝国……じゃなくってヨツンヘイム暮らしたな。ローテイスとも当分はお別れだ」

「ええ。より、上の世界へ……。何だか前に進めている気がします」
「そりゃいいんだけど……俺は気が思いぜ。SO-R Aを突破するとなりや、あの人と面合わせなきゃならないだろうしな……はあ」

いつに無く気の重そうな様子で溜息を漏らすホクト。シエルシはそんなホクトの隣に駆け寄り、一緒に歩きながら顔を覗き込んだ。ホクトは何とも言えない、微妙な表情を浮かべている……。

「あの人……って、誰ですか？ ホクトの知り合いですか？」

「あゝ……。まあ俺のっていうか、ヴァンの……な」

「ヴァン・ノーレッジの知り合い……？」

「そ……。まあ、なんつーか……。あれだ。ヴァンの魔剣の師匠で……育ての親みたいな人だよ。これがまた偏屈なジジイでな……。気が重いよ」

とぼとぼと歩くホクト。彼は気が重いというが、シエルシとしては少しだけ興味があつた。あの魔剣狩りの師匠……。彼を育てた人物知らなかったこと、少しずつ判っていく。知らなければいけないこと、どんどん増えていく……。それでも明日も見えない世界の中でとりあえず前に進んでいく。恐ろしきは立ち止まる事。前に進めなくなる事……。それだけなのだから。

S O - R A (2)

「はづ〜…………… はづはづ……………」

「……………」

「はづはづ、はづ〜…………… すりすり、すりすり……………」

「……………なあ、うさ子……………。いくらなんでもくつつきすぎじゃないか？ 若干ウザい……………」

飛行開始直前のガルガンチュア内部、そのまた大食堂の中でホクトは冷や汗を流していた。ほつぺたをすりすりするとホクトの腕にこすりつけるうさ子が先ほどからずっとホクトにべたべたとくつついており、ホクトは身動きも取れない状態であった。漸くヨツンヘイムへの出発準備が終わり、これから一休みしながら気ままな空の旅なのだ……………これでは気の休まる気配がない。テーブルを挟んだ向かいの席ではシエルシが紅茶を飲みながら目を瞑っており、その沈黙がまた何とも痛かった。

すりよってくるうさ子の耳を掴み、強引に引っぺがしてポイッと放り投げる。しかしうさ子はまたとことこと戻ってくると、ホクトの腕にくつついてすりすりと頬擦りしていた。いつに無くホクト君にべたべたすることに熱中しているうさ子にホクトは困り果てている。

「ホクト君、また皆で旅が出来てよかったの〜っ！ うさはねえ……………うれしいのっ〜！」

「そ、そうツスカ……………。しかしどうした？ いつになく往生際悪く

ひつついてくるな。普段は引っぺがすとへこたれて戻ってこなくなったりするもんだが」

「ホクト君、せっかくまた会えたのに全然うさと遊んでくれないの……っ！ うさはねえ、ずっとホクト君とお話したかったし、一緒にごはん食べたかったし、ぺたぺたしたかったの。 すりすり……。 すりすり……。」

「まあ、こつち戻ってから結構忙しかったしな」

うさ子の頭を撫でながらホクトは呆れたように笑う。目を瞑り、一生懸命にすりすりしているうさ子……。まあ、たまにはいいかと思いはじめ紅茶の注がれたマグカップに手を伸ばすが、やはりシエルシはふてくされた様子なのでこのままではいけないと思いき直す。別にホクトは何も悪くはないのだが、無言のプレッシャーに冷や汗が止まらなかった。

「そんなに怒るなよシエルシ…… やきもちか？ やきもちなのか？
うさ子がこんな調子なのは今に始まった事じゃねえだろ」

「別に怒ってませんよ？ うさ子がそんな調子なのは今に始まった事ではありませんしね」

にっこりと笑顔で答えるシエルシだったが、それが逆に恐ろしかった。うさ子はテーブルの上に置いてあったクッキーを二つ纏めて口に放り込み、キラキラと目を輝かせながら二人を交互に見やった。

「なんだかねえ、うさはとっても懐かしいのですっ！ シエルシちゃんに、ホクト君に……。リフルちゃんが居ないのは寂しいけど……でも、お友達が沢山沢山増えたのっ！ これならきつと、口ゼ

君も寂しくないの！ うさたちはねえ、ロゼ君が寂しくないように頑張るのですっ」

「あー……。そういや、俺たちの妙な運命もこの船から始まったんだよなあ。もう一年以上前の事になるのか……。何だか色々懐かしいな」

「言われてみるとそうですね……。私がカントイルに流れ着いて……。ホクトが帝国軍の輸送列車に捕まっ……」

「そうそう、今思うと数奇な運命だよな……。って、そういやうさ子ってガルガンチュアの食料盗みに侵入してとっ捕まっただったよな」

「はうー……。うさはね、本当におながすいてはらぺこさなんだっのー……。死んじゃうかもしれないのー……。だからね、しょうがなかったと思うの……。はう」

「……。そういえば、それも何だか本当に不思議ですよ。うさ子は本当は帝国のガーディアンだったわけで……。ホクトは元々は魔剣狩り……。私たち、もうずっと長い間仲間だったみたいに思えるけど、本当の付き合いはたったの一年程度なんですよね」

しつとりと、思い出に浸るようにシエルシは呟いた。うさ子は耳をぱたぱたと上下させ、ホクトの隣の椅子に座った。そうしてクッキーを頬張りながらホクトへと目を向ける。男は紅茶を飲みながら天井を見つめ、過去を回想していた。

「ああ、あの時の事か……。そいつは俺たちよりも昴の方が詳しいのかもな。本当の意味での当事者は今となっちゃあいつ一人だ」

「うさはねえ、昴ちゃんと一緒にホクト君と戦ってたの。それでね、ホクト君がガオーってなって、わーってなって、なんかすごくなったの。おっきくて黒かったのっ!!」

「すみません、まだ私うさ語はちょっと理解が追いつかないみたいですよ……」

遠い目で沈黙するシエルシ。うさ子は小首をかしげながらニコニコ微笑、ホクトはクツキーを齧っていた。そんな三人の所に歩いてきたのは昴であった。ホクトたちと同じく準備を終えて休憩に来たのか、ジューサーからドリンクを紙コップに注ぐとそれを一気に啣り、ホクトたちへと視線を向けた。

「よお昴、お勤めご苦労さん」

「……兄さんも少しは手伝ってよ。積荷を運ぶくらい出来るでしょうに……。メリーベルとハロルドが今後の予定を話し合ってるみたい。ブリッジに居てもロゼの邪魔になるし、こっちに逃げて来たんだ」

「昴、丁度いい所でした。今貴方の話をしていた所なんですよ」

「私の……？ まさか兄さん、何か恥ずかしい子供の頃の話とかをしてたんじゃないよね……？」

「いや、そんなんするか……。ほら、俺たちがまだ戦ってた頃の話だよ。そういえば昴はガルガンチュアに乗るのは初めてだったっけか」

「この間の脱出の時に一回乗ったけど、じっくり歩くのは初めてだ

ね。見た目より広いし快適だし、過ごしやすいと思うよ」「

シエルシの隣に座った昴はクッキーに手を伸ばしたが、次の瞬間うさ子が皿を手に取り、全てを口に流し込んでしまった。沈黙する昴……。満足そうにほっぺたをゆるゆるさせながらクッキーを咀嚼するうさ子だったが、後頭部をホクトが鋭く叩くと目を丸くしてぶるぶる震えていた。

「戦ってた頃の話っていうと……。えーと、ローティスでの戦いあたり？」

「いや、もっと前だ。この肉体の所有権がまだヴァン・ノーレッジにあった頃だな」

「ああ……。なんか、思い出すと色々あったかも……」

「昴、時間があるのならその話を聞かせてくれませんか？ 私も貴方達が私たちと出会う以前に何をしていたのか知りたいですし……」

「ガルガンチュアでもレコンキスタの港までは半日かかるそうだから、時間なら沢山あるよ。そうだね……。あんまり面白い話でもないし、大体予想もついていると思うけど……」

片目を瞑り、苦笑する昴。それからテーブルを指先で叩きながら記憶の糸をゆつくりと手繰り寄せ始めた。回想するのは彼女がまだ彼らと手を取り合う事など想像もしていなかった時代……。昴は自らの記憶をホクトやうさ子と照らし合わせるかのようにゆつくりと語り始めた。目撃者の居ない、物語の始まりの物語を。

魔剣の術式の力を破魔の力で打ち破り、その能力を無力化する

。その作戦の結果が招いたのは大罪の暴走であった。昴とステラによるヴァンへの攻撃はある意味において成功、ある意味においては失敗だったと言える。昴が繰り出した式を破壊する一撃こそ、彼らの物語の始まりとなったのだから。

術式にダメージを負ったガリユウはその時点で完全な状態では無くなってしまった。本来のガリユウという魔剣は他の大罪同様、“完璧”な存在なのである。魔力の過消費で暴走を起したり、所有者に大きな負担をかける事も無い……。大罪の魔剣は当然それ相応の代償を求めるが、現在のガリユウのそれは他の大罪よりも一回り上なのは言うまでも無い。傷を負った術式は莫大な力を制御できなくなり、結果として暴走が大きく引き起こされる事となった。

ガリユウは普段はその形を剣にとどめているが、本来の姿形は所有者をも飲み込む巨大な黒き龍である。その力は正に世界を飲み干す伝説の力の名のままである。“剣”の概念を持ったその龍の力は現在のホクトでは不完全であり、それが本来あるべき大罪の力とは若干ズレ始めているのは言うまでも無い。

昴の攻撃により術式を破壊されたヴァン・ノーレッジは暴走に巻き込まれ、意識を完全にガリユウへと飲み込まれる事となった。同時にその暴走に巻き込まれ、ステラは瀕死……。同様に術式に傷を負い、不完全な自意識であるうさ子が発生するきっかけとなってしまったのである。二人の大罪を持つ者はそれぞれ本来の力を失い、不完全な形で本来あつてはならない意思を宿したと言えるのだ。

「えーと、つまり昴が居なかったら……ホクトとうさ子は存在しな

「かつたと言つ事になるんでしょうか？」

「そうかもね……。私は今でもヴァンを倒した事を後悔はしていないよ。兄さんの自意識が表に出た事でこの世界の状況は好転したと思うし、うさ子と兄さんが手を取り合えたのもその為だしね」

「まあ結果俺たちの術式……。大罪は不完全な形のままだったりするんだけどな。その後俺はどっかで帝国軍にとつ捕まっただらうか？ うさ子も似たようなもんだろ」

「うさはねえ、気がついたらどこだか判らないところをうろつろしてた。それでね、ガルガンチュアにおいしそうな食材が一杯積み込まれるのを見て……。つい」

「……………今思うと、私たちのその戦いがこの世界に大きく影響を与えたのかも知れないね。世界の運命が分岐したってどうか……………」

昂が思い返すのは彼女が“二度目”の挑戦をする前の事である。婚姻の儀が行われた時、そこに居たのがもしもホクトではなくヴァンであったならば……。この世界の歴史はどう動いていったのだろうか？ ヴァンもステラも二度と分かり合う事も手を取り合う事も無く、ミュレイが死んだ後の世界で何が起きたのだろうか……。？ もしかしたら、それはそれで上手く行っていたのかもしれない。帝国とギルドとの戦いも起こらず、帝国の支配は磐石でこの世界は結果的に危機を回避出来たのかもしれない。

考えても意味のない事だが、もしもあの時ヴァンがミュレイを殺した歴史が正しかったのだとしたら……。ヴァンはその後、どんな世界を望んだのだろうか？ 小さく溜息を零し、昂は何とも言えない気分に陥っていた。頭を振ってその思考から逃れる。今更そんな事を考えても何の意味もない事だ。だがしかし……。ヴァン・ノーレ

ツジの事が今でも気になっているのは紛れも無い事実である。

「……兄さん、ヴァンは……魔剣狩りは、この世界で何をしようとしていたんだろう」

魔剣狩りと呼ばれ、世界の全てを憎み、魔剣を集め力を求め、あらゆる運命に逆らい続けていた男……。彼が望んでいた物、彼が欲した未来……。今こうして世界の真実に近づいて、漸く今になってヴァンやミラが見ていた景色に追いつこうとしている。もしもこの世界を変える手段があるのだとしたら……。それはヴァンやミラやシヤナク、過去に生きた人々の成そうとしていた事の中にあるのかも知れない。

「んー、ヴァンのしようとしていた事……。か。今なら何となく検討もつくけどな」

あっさりと答えるホクトに思わず昴は驚いてしまう。だがホクトはそれを語るつもりはなかった。恐らくそれは今ここで話をせずとも、自ずと彼らの行く先にて明かされるであろう。推測の域を出ない今、わざわざ語る必要も感じない……。ニヤリと笑うホクトをジト目で見つめ、昴はそっぽを向いた。

「まあいいよ……。これから嫌でもその辺は掘り返す事になるんだろうしね」

「そういえば、これから向かう場所ではヴァンの過去の知り合いが居るんですね？　どんな人なんですか？」

「あー……。ジジイだよ。もう何千年も生きてる爺さんだ。ヴァンにガリユウを継承した男で、元ゼダン……。って所だろうな。待て、

俺だって今ヴァンの記憶を思い返してみてもそんなだろうなーと思うだけで、実際会うまでわからん！」

じーっとホクトを見つめる二人とよくわかっていない一匹……。別にホクトとゼダンの話を隠していたわけではないのだ。単純に記憶の混乱……。そも彼は最近までゼダンがなんなのかはよくわかっていなかったのだから。そんな頼りないホクトを見やり、昴とシエルシは溜息を漏らした。

「まあ……。兄さんがうさんくさいのは今に始まった事じゃないしね……」

「でもねえ、きつとうさたち皆の力をあわせればなんとかなるのっ！……うさはねえ……。がんばりますっ！」

「うさ子の言う通りですね。私たちは元々は互いに争う仲だったりもしましたが、今はこうして世界の為に手を取りあうことができている」

「世界の為……。というよりは利害の一致だけだね。私は別に救世主然とするつもりはないし……」

「俺も自分の為に戦ってる。でもいいじゃねえか、それでも俺たちは一緒に進めるんだからな」

四人で頷きあい、何となく話が纏まっているような空気になる。そんな中うさ子が席を立ち、もそもそとテーブルの下を潜ってシエルシと昴の間に割って入り、二人の腕を同時に組んでにつこりと微笑んだ。何が楽しいのかご満悦の様子で、左右の二人はそれを朗らかな表情を見つめていた。

「うさたち、仲良しのっ」

「ええ、仲良しですね」

「仲良しなんだ……。えーと……。まあ、いいけどね」

「それでね、ホクト君のお嫁さんになるのっ」

三者三様の表情から一変、うさ子だけがニコニコと微笑みシエルシは啞然、昴は項垂れて笑いを堪えていた。ホクトは丁度紅茶を飲み干した所で、冷静な様子でうさ子が何を言い出したのか見極めようとしていた。

「……えーと、なんでそうなっちゃうのかな」

「うさね、ホクト君のお嫁さんになりたいのーっ！ はうはうっ！」

両手をぱたぱたと振り、耳をピンと立てたままうさ子は宣言した。大よその事情を既に察知した北条兄妹は頷くと同時にシエルシへと目を向けた。そこには顔を真っ赤にしてしどろもどろになっているシエルシの姿があった。

「う、うさ子……。急に何を言い出しているんですか……」

「うさねえ、聞いたの〜！ シエルシちゃんがね、ホクト君のお嫁さんになるってっ！！ うさもー……。うさもホクト君のお嫁さんになるーのーっ」

「ひ、ひいい……。っ！ うさ子、それは、ちが……。っ！ 何で広ま

「つちゃってるんですかそれええええッ！！！！」

「あー……。そういえば、ミュレイが楽しそうに皆に喋ってたかも……」

ボソッと呟く昴。かく言う彼女もミュレイから聞いたクチである。元を正すと情報流出元はメリーベルであり、何となくミュレイとの話の中でそんな話題になり、それを聞いたミュレイが面白半分で広めているのである。結果、仲間内でその話が広まっている事を知らなかったのはシエルシだけとなっていた。

「お嫁さん”ってなー”って、ミュレイちゃんに聞いたのっ！そしたらね、お嫁さんになったらね、だんなさんがね、毎日毎日ご飯をおなか一杯食べさせてくれて、毎日毎日一緒にここにこしてられるって言うたのっ！！お嫁さんになったら、ホクト君がぎゅーってだっこしてくれるのっ！！はうはうっ！！」

「……………抱きしめてくれるって……………」

「今日、階段の所でシエルシちゃんとホクト君……………」

「いやあああああああああああ！！！！見てたんですか！？見ていたんですかッ！？」

頭を抱えて泣き出しそんな表情で絶叫するシエルシ。丁度その頃おなかをすかせたうさ子はバテンカイトスの中をうろつろつしており、その際にシエルシがホクトに背後から抱きしめられているのを目撃していたのである。とりあえず食欲に負けてその場は去ったものの、その記憶が綺麗サッパリ消えるはずもなく……………。

「ホクト君、うさもー。うさもだっこー。だっこしてほしいのー」

「そりゃ、俺は構わんが……」

「ひい〜ん……。私いきなりこの船の中で上手くやって行けるのか不安になってきました……」

テーブルに突っ伏したままぶるぶると震えるシエルシ。その肩を叩き、昴は真っ直ぐな眼差しで頷いた。顔を上げるシエルシ……。そんな彼女に告げた一言。

「愛だからしょうがないと思うんだ、私は」

その言葉は励ましているのか諦めると諭しているのかよくわからず、というよりそもそもシエルシの問題より昴の問題に対する言葉のような気がした兄であった。ホクトは戻ってきたステラを膝の上に座らせ、背後からうさ子をぎゅっと抱きしめる。うさ子は満足したのか、目をキラキラさせて喜んでいた。

「はっうーっ　　ホクト君、だっこしてくれたのーっ！」

「……………よかったね。そういえばうさ子、お嫁さんの意味本当に判ってる？」

「う？　わかってるよ？」

「お嫁さんっていうのはね、相思相愛じゃないとなれないんだよ。それが何か邪な目的があるか」

「おい、変な事を吹き込む……。ただでさえうさ脳なんだからよ

……」

「うさ、ちゃんと結婚のことしてます！ うさはねえ……ホクト君の事大好きなのっ！ ホクト君、好き好きなのっ　ホクト君もねえ、うさの事好き？」

「……………まあ、好きだけどな」

「じゃあ、”そうしそうあい”なの……っ　はうはうはうはうっ……っ」

なんだかそれでいいのだろうか……と思う北条兄妹。相変わらず瀕死でブツブツと何かを呟いているシエルシと嬉しそうに耳を振り回しているうさ子……状況は非常に対照的である。

「ホクト君、ホクト君」

「ん？」

首を擡げるホクト。そんなホクトへと振り返り、うさ子はその唇に自らの唇を重ね合わせていた。それから何度もホクトの頬にキスを浴びせ、頬をすりすりとこすりつける。ホクトは何とも微妙そうな表情を浮かべ、鼻はじーっとホクトを見つめる。シエルシは気づいていないのか、相変わらず念仏のように何かを唱えていた。

「皆でホクト君のお嫁さんになるのっ　はうはう」

「おお、いいなそれ。俺は大歓迎だぞ」

「……………命がいくつあっても足りないと思うよ、兄さん」

そんなシエルシの言葉で締めくくられ、その場は一旦お開きとなった。それぞれ自室へと戻っていくホクトたち……。一人残されたシエルシは誰も居なくなつた食堂の中、ずつとうつ伏せになっていた。数時間後にアクティとロゼがやってくるまでその調子であり、その間彼女が何を後悔していたのかは推して測るべき事柄である。

SO - RA (3)

光の結界にて港に繋がれたガルガンチュアを見上げ、ホクトはレコンキスタの街の中で風に吹かれていた。かつてはハロルド帝国があったその界層も、今や下層の人間がどっと流れ込み変革の時を迎えようとしている。

空中に固定されたガルガンチュアを帝国の作業用飛空艇が囲み、SO - RAを突破する為の改造作業が行われている。両手をズボンのポケットに突っ込んだまま、変わり行く世界の中で男は紫煙を煙らせる空を船が舞い漂い、光の道路が町中を立体的に繋ぐ近未来都市レコンキスタ。墜落したインフェル・ノアが傾いたまま街の端に食い込んだその世界の中、新しい時代の幕開けを感じる……。そんなホクトの背後、歩み寄る昴の姿があった。二人は並んでターミナルの外から街を眺める。色々な事があったが、今はそれなりに前に進んでいると思える。二人は同時に見つめあい、それから同時に向かい合った。

「さてと……。そろそろお互い、行動を開始しないとね」

「そうだな。俺は師匠に会って来る……。それでSO - RA超えの情報を聞き出して来るわ。あの爺さんはゼダンを抜けて単身SO - RAを超えてきたんだからな。何か有用な情報もあるだろう」

「私たちはミレニウムシステムの再起動と同じく情報収集、ガルガンチュアの改造……。準備が終わったら一度UGのフラタニティに行くらしいから、それまでには戻ってきて」

「……。あいよ。そうだ、ハロルドに小型のエアバイク一つ借りてく

って言つといてくれよ。ちょっと遠いからな……」

今後の話をする二人の背後、どたばたと駆け寄ってくるうさ子の姿があった。その傍らには何故かケルヴィーの姿があり、ホクトも昂も同時に眉を潜めた。途中で派手にすっ転んだうさ子を助け起し、ケルヴィーは二人の前に立った。

「どうもお久しぶりですねえ、魔剣狩り……それから白騎士。お元氣そうで何よりです」

「ケルヴィー……生きてたんだ」

「勿論生きていましたとも。そんなわけで、今後は皆さんに力を貸す事になりました。ハロルド様の命令ですからね、仕方在りません」

「そんなあっけなく仲間になるのか……。お前にプライドみたいなものはないのか」

「下賤な思考ですねえ、魔剣狩り……。私にとってハロルド様は神……。地獄の底のようなこの世界の中で私に研究の場と資金を提供してくれたのはハロルド様だけでしたからね。まあ、今回からはガルガンチュアとかいうあの船に乗り込ませてもらいますが……。しかし興味深い……。異世界の錬金術で強化されていますからね。ゼダンの事と言い、貴方達との旅はとても楽しくなりそうですねえ……」

一人、満足げに笑うケルヴィー。その隣でうさ子は耳をぱたぱたさせながら三人の顔を交互に眺めていた。昂はケルヴィーがこういう性格だと知っているので特に何とも思わなかったが、ホクトとしては自分の身体を勝手にいじくった相手という事であまりいい気は

しなかった。

「うさもねえ、ケルヴィーのお手伝いする事にしたの。ケルヴィーはねえ、うさにとっては家族みたいなものなのよっ」

「まあ、これが私の最高傑作……魂をサルベージした“器”だとは思いたくありませんが……まあこれはこれで可愛いので良しとしましよう」

うさ子の頭をなでながらケルヴィーは複雑そうな表情を浮かべた。それから眼鏡を中指で押し上げ光らせながらホクトを見る。ホクトは腕を組んだままその視線に首をかしげていた。

「しかし、恥ずかしながらゼダンとか言う連中の存在に全く気づかないとは……私も不覚でした。それに剣誓隊の研究成果を失う事になるうとは」

「は？ 剣誓隊に何かあったのか？」

「この間、貴方達の襲撃でインフェル・ノアが落とされた時、殆どの剣誓隊の隊員が数名失踪しました。それと同時に私の研究データが何者かに盗まれたのです……。調整中だった新型エクスカリバーのデータも奪われてしまいましたね。まあ、犯人は大体見当がついています」

剣誓隊の中で四人の將軍のうち一人は死んだ……それは確定している事実だ。ロゼが姿を追っている大将オデッセイは現在行方不明、同じくルキアも行方不明である。最後までインフェル・ノアの中を駆け回り、仲間の避難誘導を行っていたジェミニは反帝国勢力に捕まり、現在は投獄されている。となれば失踪した二人の將軍のうち

どちらか……。ケルヴィー的にはその更にどちらなのかが大体予想がついていた。

「まあ、盗まれたデータは普通は活用出来るようなものではないし、内容は全て私の頭の中に把握していますから特に問題はありませんがね……。とりあえず、S O - R A 超えのための改造に関しては任せてください。短期間で何とか仕上げてみましょう」

「ケルヴィーはねえ、帝国で一番頭がいーのっ！ メリーベルちゃんもね、ケルヴィーとだったらもつとすごい船が作れるかもってゆつてたのお〜　ケルヴィー、がんばるのっ！　うさもね、がんばるのーっ！〜！」

「あくまでも私は自分の知的好奇心にしたがつて行動するのみですからね。妥協もしませんし、出来る限りの全力を注ぎましょう。異世界の錬金術に神の技術……。私が知りたかった知識が今、この手の中に……。ふふ、ふふふふ……。っ」

若干その黒い笑顔に先行きが不安になる兄妹であったが、隣でうさ子がニコニコしているとそれが丁度黒さを相殺しているようであり、あまり危機的には感じなかった。兎に角帝国の技術力が味方につくというのは大きな前進であり、これからの戦いの中で必要になる事柄である。昴は小さく溜息を漏らし、腰に片手を当てて笑った。

「まあ、私たちは私たちに出来る事をするだけだね……。政治的な事はミュレイとかシエルシに任せっぱなしなんだし……」

「うさ子、博士の邪魔せずちゃんとお手伝いすんだぞ？」

「はうはうっ　それじゃあホクト君、行ってらっしやいなっ！」

お土産期待してるねっ！」

ケルヴィーの背中を押し、うさ子は手をぶんぶん振りながらターミナルの中へと姿を消してしまった。ホクトと昴はそんな二人を見送り、また一つこの世界が変わっていく足音を感じるのであった。

「ま、俺はちよっくら行つて来るわ。あの様子じゃガルガンチュアの改造は直ぐに終わっちまいそうだしな」

煙草を片手に首を鳴らし、面倒くさそうに歩き出すホクト。その背中を見送り昴は優しく微笑んだ。ターミナルへと入り、エアバイクへと乗り込むホクト。その背後、唐突によじ登るシエルシの姿があった。無言で振り返るホクトの背中にぎゅっとしがみ付き、シエルシはヘルメットをつけて微笑んでいる。

「……………いや、お前他に色々やる事あんじゃねえの……………？」

「いえ、私も知りたいんです。ヴァン・ノーレッジの過去の事とか、貴方の事とか……………。私も一緒に行きます。いいですよね？」

「……………はあ。駄目って言ってもどうせ聞きやしねえんだろ？ お前はよ……………」

苦笑を浮かべるシエルシ。それを合図にホクトはエンジンを唸らせ、ターミナルからふわりと舞い上がった。レコンキスタの空を舞うバイク……………。折り重なるような光の道を掻い潜り、ホクトは空を駆け抜けていく。しがみ付いているのがやっとなのか、シエルシは目をぎゅっと瞑ってそんなホクトの背中にくつついている。ホクトは背中に当たる柔らかい感触にニヤニヤしながら、あえてバイクを滅茶苦茶な軌道に走らせるのであった……………。

ヴァンの師匠であり、本来の魔剣ガリュウの正当継承者であるその男を連れ戻せというのはほかならぬハロルドからの頼みであった。連れ戻す事が不可能ならばせめてS O - R Aを突破する為のヒントを聞き出して来い……こちらはロゼの命令である。団長の命令にギルド……もとい海賊の一員であるホクトは動かざるを得ない。そんな建前もあったが、彼は個人的にもその男に会いたいと考えていた。勿論、出来る事ならばそうそう会いたい類の人間ではない。しかしこの状況下、彼しか知らない事が余りにも多すぎるのだ。

レコンキスタを出てから四時間……。やがて世界は雪が降り積もる銀世界へと姿を変えていた。帝国の人間は基本的にレコンキスタからは外に出ない為、未開の地と呼んでいいその世界にはなんら手の加わらない雄大な自然が広がっている。ホクトはそんな何の目印もないような雪原の上を真っ直ぐに突き抜けていた。大分移動も落ち着いてきたのか、シエルシはヘルメットを外してひんやりとした風の中に髪を晒して心地良さそうに目を細めていた。

「ホクト、この白いのはなんなのでしょうか？ 不思議な土地なのですね、ヨツンヘイムは」

「これは雪つーものでな……。ああそっか、こつちの世界じゃ珍しいのか……。ていうかお前寒くないのか？ いくらエアバイクには風遮断の障壁がついてるとは言え……」

「え？ 別に大丈夫ですよ、涼しくて気持ちいいくらいです」

柔らかに微笑み返すシエルシをサイドミラーで確認し、ホクトは小さく溜息を漏らした。目指すべき目的地は近くにまで迫っていた。記憶を頼りに進んできたホクトだったが、ここまでの道則は過去と何一つ変わってははいない。見えてきたのは雪原の中にポツンと聳え立つ小さな丸太小屋であった。まさかいくらなんでもあれは違うだろうと冷や汗を流すシエルシの願いも空しく、ホクトはその近くでエアバイクを停車させた。

バイクを降り、雪原を歩いていくホクト。それに続いてシエルシも同じように歩き出した。雪の上に靴跡が残り、シエルシはその初めの足の裏の感触に楽しげである。ホクトははしゃぐシエルシを無視して小屋の扉へと手をかけた。しかしそこでホクトの動きは停止してしまう。本当にこの小屋に入るべきかどうか迷っている……そんな背中にシエルシが首をかしげた。

「どうしました、ホクト？」

「いや……なんかどんな顔して会えばいいのかなーと思ってな……」

「魔剣使いの師匠なのでしょう？ 普通に会えば良いのではないですか？」

「そういう問題じゃねえんだよなあ……。なんつーの？ 色々あって気まずいんだよ……。バッチリ俺は師匠の言いつけを破ってるわけだしな……」

「全くだ。一体どの面下げて会いに来たってんだ、ヴァン」

声は二人より更に背後から聞こえた。ゆっくりと二人同時に振り

返ると、そこには巨大な熊の死体を片手でズルズルと引きずりながら歩いてくる男の姿があった。上半身裸で下半身は袴という奇妙な出で立ちの筋肉質なその男は銀色の髪を揺らしながらシエルシの隣を抜け、ホクトの前に立った。雪のついた両手のグローブを叩いてそれを落とし、男は目を隠していたサングラスを上げる。真紅の鋭い眼光がホクトを射抜き、ホクトは小さくなって視線を反らしていた。暫くの間それで沈黙が成立し、そして更にそれは男の張り手がホクトの身体を派手に吹っ飛ばした事で打ち破られた。吹き飛ばされたホクトは雪の上を転がりながら果てしなく突き進んで行き、やがて近くの森の中へと姿を消していった。啞然とするシエルシ……そんな彼女へと振り返り、男は眉間に皺を寄せて言った。

「どこかで見た顔だと思ったら……。小娘、てめえまさかシヤナクの娘か？」

「ハ、ハイ……」

「……シルヴィアとか言うやつか？」

「いえ、えーと……シエルシ、です……」

「成る程……。で、そのシエルシ姫が一体こんな辺境に何の用だ？あの馬鹿と一緒にというのも奇妙な組み合わせだな……。まあ、然るべきと言えばそれまでだが」

男は顎鬚を片手で撫で、シエルシへと近づいてきた。改めて見るとその巨体は明らかに2メートルを超えており、長身のゲオルクやホクトよりも更に大きい。冷や汗を流し、固まってしまうシエルシ……。その頭を大きな手でわしわしと撫で、男は目を瞑った。

「でかくなつたな。立ち話もなんだ、中に入れ。茶くらいは出してやる」

「ハ、ハイ……！」

のっしのっしと歩いていく男に続き、シエルシは小屋へと歩いていく。二人が小屋の中に入って扉を閉じた頃、漸く森の中から這い出してきたホクトは雪原に血をぶちまけながら肩で呼吸を繰り返していた。こうなるであろう事は判っていたのだが、いざ食らつてみると流石に冗談では済まされない火力である。盛大に溜息を漏らすと同時に咽返り、とりあえずはその場に座り込んで空を見上げるのであつた。

一方その頃小屋の中に案内されたシエルシは丸太で出来た簡素な椅子の上に座り、カップに注がれる紅いよく判らないお茶を見つめて冷や汗を流していた。前も後ろも傷だらけの肌の上に男は上着を羽織り、ずいっとカップを差し出した。それは明らかに彼のサイズであり、シエルシは両手で持っても重いくらいであつた。

「下層で何が起きているのかはロクに知らねえが、ここにシヤナクの娘が現れる日が来るとはな……。あの馬鹿とはどういつ関係だ？ 何故一緒に居る？」

「えーと、ホクトは私を助けてくれた人で……」

「ホクト……？ ヴァンはどうした？」

「あ、えーと……その……」

どんな風に答えたらいいのか判らずにしどろもどろするシエルシ。そんなシエルシの背後、窓が外から開いてホクトがひょっこりと顔

をのぞかせた。男は眉を潜めてそれを睨んだが、ホクトは両手を振って敵意が無い事を懸命に表現した。

「待てよじいさん！ さっきの攻撃もそうだが殺すつもりかよ！」

「てめえ……。俺の言いつけを護らずに好き勝手ガリユウを使ってるらしいじゃねえか、ああ……。？ てめえの都合でガリユウを使うなってガキの頃から何度も何度も言ってるのに、いい度胸じゃねえか」

「いや、それはホントすいません……。でもしょうがなかったんだって。あー、シエルシ……。このじいさんが俺の師匠……。名前はブガイ……。蝕魔剣ガリユウの元々の所有者で、元ゼダン……。だったか？」

「……。昔の話だ。しかしどうして下層の人間がヨツンヘイムにいる？ 帝国はどうなってるんだ」

「話すとその辺長いんですけど……。あの、寒いんで俺も中に入りたいんだけど……」

「おめえは外に居る馬鹿が。凍死しろ馬鹿が」

がつくりと肩を落とすホクト。ブガイは葉巻を啜えると指先から黒い炎を出し、それで火をつけた。ホクトとシエルシは交互に語るようにしてこれまでの出来事をゆっくりと語り始めた。それは何時の間にも及び、すっかり外は暗くなってしまった。それでも中に入れてもらえないホクトの髪は凍り始めていたが、シエルシは暖炉の傍で暖かい飲み物を飲みながら楽しそうに話を続けていた。

「というわけで、私たちはゼダンを倒す為にSO・RAを超えたいんです。ブガイ、貴方はSO・RAを超えてこの界層に降りてきたと聞きました。ハロルドも貴方の力を必要としています」

「俺あ元々ハロルドには手を貸さねえって決めてんだ。それは今更覆らねえよ……。しかし、下層ではこのたかが数年の間で色々な事があつたみてえだな……」

「あんたが隠居している間に状況はかなり変わってるんだ。師匠、SO・RAを超えてゼダンを倒す……それはあんたの昔の目的でもあつたはずだろ」

「師匠じゃねえ、てめえはもうとつとくに破門済だ阿呆が。それに、俺はもうゼダンと対峙するつもりはない……。俺はこの世界の行く末を、この世界の人間に委ねると決めたからな」

大量の煙を口と鼻から噴出するブガイ。その迫力に啞然とするシエルシは気を取り直したように立ち上がり、ブガイへと歩み寄つた。ここで何の情報も聞き出せないようでは単なる無駄足……。それぞれるか貴重な情報を逃す事になってしまう。シエルシは引き下がらず、ブガイに懇願した。

「ブガイ、ではSO・RAを渡る方法だけでも教えてくれませんか？ 私はこの世界を私たち人間の手で変えたいと思っています！ 貴方が戦いたくないというのならそれは構いません。ですがせめて、私たちに先に進む方法を教えてはくれませんか!？」

「……。小娘、てめえはシャナクによく似ているな……。あいつもこの世界を人の手に取り戻すと躍起になつてた。けどな、それは叶わねえ願いだ。世界は終焉を運命付けられている……。この

世界は成り立ちからしてそういうもんなんだ。諦めな、嬢ちゃん……
…かわいそうだが、先に進んだ所でこの世界は何も変わらん」

ブガイはそう語ると席を立ち、そのまま奥の部屋へと引っ込んでしまった。それを見届けて窓を乗り越えて中に入ってこようとしたホクトだったが、何故か結界が張られているのか壁に激突したかのように仰け反り雪の上に倒れこんだ。それから窓を閉じ、きちんと扉を潜って中に入ろうとする。しかしやはり結界が張られており、弾かれて倒れこんだ。雪塗れになったホクトは無言でガリユウを構築し、それで結界を切り裂いて中に踏み込んだ。

「あのクソジジイ……対俺専用が発動する結界術式張り巡らせてやがった……」

「……ホクト。ブガイから話を聞き出すのは想像以上に難しそうですな」

「あのジジイ既に隠居気分だから……。大事な大罪を俺に託したのだからその責任から逃れる為だろ」

「もう、ホクト……少しは素直になっただらどうですか？ 本当は久しぶりに会った師匠に認めてもらいたいんでしょう？」

「ちーがーいーまーすー……。はあ、やっぱり無理無理、あのジジイを仲間にするのなんて絶対無理。ホラ、帰るぞシエルシ……無駄だっただんだよ所詮」

「いえ、私は諦めたくありません。もう少しブガイと話がしてみたいんです。それにここでシッポを巻いて逃げ出すなんて、かっこ悪いですよ……ホクト？」

腕を組み、ホクトは不機嫌そうにそつぽを向く。ふてくされる子供のようなホクトへと歩み寄り、シエルシはその頭を片手で撫でた。優しく言い聞かせるような眼差しに折れたのか、ホクトは溜息を漏らして椅子の上にとっかかりと座り込んだ。

「ったく、わかったよ……！ お前置いて行ったら帰って来れなくなるしな……。もう少し粘ってみるか……」

「ふふふ、そうですね。ありがとうございます、ホクト」

ホクトの身体についた雪を払い除け、微笑むシエルシ。二人はそれからどうにかしてブガイを連れ戻す作戦をこっそりと話し合ったのだが、扉一つ隔てた向こうにいるブガイは出てくる気配も無い。ホクトは強引に扉を破ろうかとも思ったのだが、この小屋に入る時の数倍の結界が張り巡らされており接触しただけで蒸発しかけたホクトはボロボロの姿のまま床の上に転がって血を吐いていた。

「な、なんで俺だけこんなボロボロになってんの……？ 何しにきたんだ、俺……。泣きそうなんだけど……」

「……………ホクト、ブガイはどうして貴方の事をそんなに怒っているんでしょうか？」

「そりゃあ……じいさんは、ガリユウをこの世界を良くする為に使えと、人を助ける為にだけ使い、自分の為には使わなくなってたからな。けどヴァンはミラを殺されて復讐の為にガリユウを使った……。結果ガリユウは色々な命を勝手な都合で奪いまくったわけだ。そりゃ、じいさんも怒るさ」

身体を起し、どこか寂しげな眼差しで語るホクト。なんだかんだ言いながら自分が悪いという事は判っているのだ。しかしそれは今の彼が悪いのではなく、世界に反逆した魔剣狩りの罪である。ホクトはそれも込みできちんと理解し、反省しているのだ。しかし同時にその約束はもう護れないのだと、自分の意思でそれを破るのだと自覚している。それが彼の拗ねたような態度へと繋がっているのである。

なんだかんだ言いながらも親の居ないホクトにとって剣の師匠であるブガイは父親のような物……。疎遠になったままというのは寂しいものなのだろう。素直になれないホクトの横顔にシエルシは目を輝かせ、ホクトの隣に座ってその手を握り締めた。

「貴方って時々子供みたいで可愛いですね」

「はあ……？」

「大丈夫ですよ、きっとブガイも話せば判ってくれるはずですよ。だから元気を出しましょう……ね？」

「余計なお世話じゃ……全く。はあ、それにしてもマジでどうするか……。あのジジイ当分出てこねえぞ。すっかり夜になっちまったし……」

「……そうですね。ホクト、ブガイとの話を聞かせてくれませんか？　そこから何かがわかるかもしれません」

ホクトはあからさまに嫌そうな顔をし、それからそっぽを向いた。しかしシエルシはじーっとホクトを見つめ続ける……。その眼差しに耐え切れなくなったのか、ホクトは片手で髪をわしわしと乱しながら諦めたように語り出した。

「……全然面白い話じゃねえぞ？」

「ええ、構いませんよ。お願いします、ホクト」

「……………はあ。まあ、丁度いい機会だと思っか…………。お前にも、関係がないわけじゃないんだしな…………」

そう呟くとホクトは立ち上がり、椅子の上に座り込んだ。シエルシもそれに倣い、彼の隣に座る。ホクトは窓の外に降り始めた雪を眺めながら、過去の時間へと思いを馳せる。

「俺がブガイと会ったのは……………まだヴァンが五歳くらいの時の事だった」

魔剣使い同士の戦いで瓦礫の山へと変わってしまった一つの町があった。エル・ギルスの辺境にあったその町で幼い少年は泥だらけになって歩いていた。誰も生きている者は居ない、まるで世界の時間が停止したようなその刹那の中で少年は見たのだ。黒き巨大な刃を片手に月を見上げる男の姿を。それは、彼がまだ魔剣狩りと呼ばれていなかった時代の物語。黒き魔剣を廻る、一つの物語である。

「あの頃俺は孤児で、町で盗みなんかをやりながら路地裏でコソコソ暮らしてた。マンホールの中で生活していたお陰で町で起こった魔剣使いの戦闘に巻き込まれず、俺だけ偶然に生き残ったんだ。ブガイはそんな俺にとって、戦い方を教えてくれたたった一人の男だった」

ホクトはカップに注がれたお茶を見つめ、その水面に過去を映し

出す。シエルシはホクトの言葉に耳を傾け、そっと目を瞑る。静かで儚い白い夜が、二人のを包み込むかのように幕を開けたのであった……。

飛翔（1）

「ハロルドちゃんっ！！ はうーっ！！」

レコンキスタのターミナル、頭上にガルガンチュアを浮かべる場所ではハロルドは空を見上げていた。かつて王であった存在は今やとても小さな少女の器に閉じ込められ、既にその威厳を振りかざす事も無い。変化する世界の中、それでももしも変わらないものがあるとすれば、それはきつと、永久に近い命を得た彼女へと向けられたもう一つの存在の心くらいだろうか。

振り返ったハロルドは背後から駆け寄るうさ子へと視線を向けた。うさ子は両手をバタバタ振りながら、耳をパタパタ上下させ、両足をドタドタさせながらハロルドへと直行してくる。その途中でうさ子は盛大に躓き、顔を鋼鉄のターミナルの床に叩きつけ、泣きそうな顔でヨロヨロと近づいてきた。

「……………大丈夫か？」

「はううう……………。ハロルドちゃん、何してるの……………？」

「……………歴史の移り変わりを見ていたのだ。帝国の崩壊、世界の再構築……………アニマの覚醒の予兆。全てがこんな風にならなくなってしまった事など、余は想像もしていなかった」

視線を細め、そこに様々な思いを乗せる。吹き抜ける風の中、ハロルドはまるで時を遡るかのような感触を味わっていた。世界というものは不変であるように見えて変化し続けているものだ。それはよくよく観察しなければ判らない事だろう。しかし、長い長い歴史をその目で見つめてきたハロルドには十分過ぎるほど感じられた。

世界は動き出したのだ。良くも悪くも、新たな展開へと向けて……。

「ステラ、貴様はどうするつもりなのだ？ アニマが覚醒すれば、この世界は崩壊するだろう。その瞬間は確実に近づいている。そしてそれは今の我らの力では決して止める事は叶わない」

「……………うーん？ うさはねえ、この世界の事はやっぱり良くわかんないままなの。“ステラ”が教えてくれる通りにしてるだけなの。でも、ステラはやっぱり諦めてないよ？ うさはねえ、ステラが諦めない限り、その可能性を信じていきたいの」

「……………あの、ステラがか？ やれやれ、変わっていくのは世界だけではないらしいな……。余も……………この世界の人間の力の前に、何か忘れかけていた大切な物を見せつけられた気がしたのだ」

何度叩き潰しても、人間はまた這い上がってくる。この世界の殆どを絶望が埋め尽くしたとしても、その闇を掻い潜って抗ってくる人間は必ずどんな時代にも一人はいたものだ。そしてそのたった一人の輝きが闇を打ち払う力となり、結ばれたいくつもの絆は時に世界の情勢を大きく変化させてきた。“英雄”とたった二文字で括られてしまうようなその存在は確かに在ったのだ。そう、今のこの世界にも。

ハロルドへと齒向かった魔剣使いたち。己の運命さえも知らず、戦いのために流され何度も刃を交えてきた人々……………。異世界からの救世主は己の力を握り締め、確かに王と対峙した。支配者を前に孤独な反逆……………しかしそこには彼らの命の輝きがあった。何度敗北しようが何度叩きのめされようが、失意のどん底に落とされてもまた這い上がってくる。そんな人間の眩しさに少しばかり目が眩んだのかも知れない。

「余は 彼女を救いたかった。全ての始まりはただそれだけだったはずなのに、気づけば余には何も選ぶ余地は無くなっていった。大切な世界を護りたかった……だが、余は貴様らの絆の前に敗れ去ったのだ」

「ハロルドちゃんは……一人でも何もかも護ろうとすぎてたんだよ。うさはねえ、一人じゃ生きていけないの。うさたちはねえ、みんな力をあわせて、手を繋いでね？ そうやって前に進むしかないの。寂しさも苦しさも、痛いつて叫んでる心も全部一緒に連れて行く……。一人なら出来る事もあるよ。でも、一人じゃ出来ない事もいっぱいあるの」

優しくうさは微笑み、ハロルドの小さな手を握り締めた。包み込むように両手でそっと、ぎゅうっと握り締めた。暖かいうさ子の手……ハロルドはそれに自らの手を重ね、微かに微笑んだ。

「……そんな貴様らの弱さに賭けてみたくなったのだ。尤も、味方になったとは言えないがな」

「がーん！？ そ、そうだったの……？ ハロルドちゃん……しょんぼりなの……」

「当然だろう？ 既に仲間になどなれるはずもない。だが、余は貴様らを上の世界へ飛ばしたいと考えている。見届けたいのだ……その叛逆の物語が、果たして神さえも超える力となるのか……。もしもそうだとしたら、余は余の存在の全てを賭け、この世界に償わねばならぬだろう。そうでないのなら 貴様らの甘い幻想は余が断ち切らねばならぬな」

「それでも、うさたちは進むと思うなあ……。それにね、ハロルド

ちゃんも直ぐにわかるよっ！ ホクト君はねえ、すごいっ！ か
つこよくてねえ……みんな、ホクト君と一緒に居ると何でも出来ち
やう気になるの〜 はうはうっ

「英雄、というものなのだろうな。あの男の持つ存在の資
質というものは」

黒き刃を担ぎ、この世界に再び現れた男。かつて楽園を追放
されたゼダンが出逢い、そしてその力を托した少年。ハロルドへと
反逆し、そして世界の真実に限り無く近づいたあの女王が抱えてい
た傭兵騎士……。数奇な運命と言えば他に表現の方法もないだろう。
だが思えば全てはあの男が中心となり、運命の渦は巻いていたよう
に思えるのだ。

「ハロルドちゃん、一緒にご飯食べるのっ！！ あのねえ、ミュレ
イちゃんがね、ご飯作ってくれるってゆってるの〜っ はうはう
っ！」

「……………では、先に行っていてくれ。直ぐに追いつく」

「はうっっ！ ちゃんと来てね〜！ うさ子隊員は先に行ってます
っ！」

両手をブンブン振り回し、耳をパタパタ上下させ、ドタバタとう
さ子は走り去って言った。その背中を見送り、ハロルドは自らの掌
をじっと見詰める。沢山の過去とこれからの僅かな未来……。天秤
を前にして王が望んだ“重さ”の形。今その意味が試されよう
としている。

ゆっくりと、ハロルドは歩き出した。もう戻れはしない古の時代、
そして今日までの日々……。過ちだとは言つまい。これからの未来

に希望があるとも言つまい。ただ彼女は見届ける義務がある。少なくとも、見届けなければならぬだけの理由がある。そう、彼女は同じ異世界からの救世主として、彼らを……。

「………………。ところで、食事はどこでとるのだ」

足を止める王。小さな少女の前には人が行き交う広大なターミナルが広々と横たわっていた。

飛翔（１）

「じいさん、俺に魔剣の使い方を教えてくれよ」

大罪を持つ黒き魔剣使いとその少年の出逢いはそんな一言から始まった。闇の焰に焼かれ、炎上する街……。少年は素足で瓦礫を踏み、男の背後に立っていた。

戦いの切欠は単純な事であった。ゼダンから抜けたブガイは当時他のゼダンから追われており、追っ手との戦闘は彼らの力に相応な物となり、勝利したブガイは無傷であったものの、戦場となった街は廃墟と化してしまっていた。既に生き残りは居ないと思っていた矢先、現れた一人の幼い少年……。ブガイは振り返り、小さな少年を見下ろした。

少年はボロ布を纏い、ぼさぼさに長く伸びた髪の間からじつとブガイを見上げていた。伸ばした小さな手は何かを欲するように何度もブガイへと伸ばされる。薄汚い餓鬼　その程度にしか男は思わなかった。普段の彼ならば相手にもしないような、そんな子供で

ある。だが男は何故か気まぐれに振り返ってしまった。そして、問いかけたのだ。

「小僧、力が欲しいのか？」

「ああ」

「何故力を欲する？ 見ての通り、この剣はお前の故郷を奪った力だ。時にあらゆる物を傷つける諸刃の剣なのだ。その巨大な力、何故欲する？」

「護る為に」

ブガイは黙って少年を見下ろした。小僧と鼻先で笑い飛ばすような薄汚い彼……しかしその前髪の合間できらりと輝く眼差しは決して腐ったものではなかった。ブガイにとって、その少年の真っ直ぐな眼差しはまるで奇跡のように感じられた。この世界は支配の中に長く置かれ、人々の目は夢も希望も無くして淀んでしまっていた。しかしこの少年は違うのだ。

この地獄のような闇の炎に囲まれた廃墟の中で。故郷であるはずの街を何もかも打ち滅ぼした剣士を前に。この世界に存在を赦されぬかのようなぼろぼろの格好で。しかし、必死にそれでも何かを掴み取ろうと手を伸ばしたのだ。

「俺、強くなりたいんだ。じいさんすげえ強いんだろ？ じゃあ、強くしてくれよ。その魔剣、俺にくれよ」

「力が恐ろしくはないのか？」

「……………怖くなんかねえよ。力があれば護れるんだろ？ 大事な

もんとか、自分とか……。力があれば、失わずに済むんだろ？ だつたら怖くなんかねえ。怖くなんか ねえよ」

それは力を知らぬが故の子供染みた理屈だった。だがブガイはその少年に何処か自分と似通った部分を見出した気がした。この世界の中、行き場も無く頼れる者も無く、仲間も失い居場所も失い、既に彼は存在を赦されぬ者となった。

生半可に手に入れた不死の力は彼の肉体を衰えさせる事もなかったし、ゼダンとして世界を支配し続ける運命に逆らった男にはこれから何度も何度も追っ手が迫る事だろう。孤独な逃亡生活……。そこに隙といえ隙があつたのかもしれない。男は片膝をつき、少年の顔を覗き込んだ。真っ直ぐで、きらきらと輝く眼差し……。男は無言で少年が差し出す手を握り締めた。

「力が欲しければ、付いて来い。小僧、お前に本当に魔剣を扱っただけの才能があるのならば……。その時はこの絶対最強の魔剣をくれてやる」

「絶対……。最強？」

「そうだ。この剣 蝕魔剣ガリュウは最強だ。あらゆる魔剣の中で、神の作った剣の中でも唯一無二、絶対最強の剣だ。こいつを持つ人間は常に争いに巻き込まれ、しかし己は不死であるが故にあらゆる物を失う運命にある」

「あらゆる物を失う、最強の剣……」

「それでもこいつが欲しいか？ この剣を手にしたいか？」

少年は少しの間思索し、それからゆっくりと頷いた。ブガイは笑

い、それから無言で踵を返して歩き出す。闇に包まれた荒野……少年は慌てて男のあとを歩き出した。

「小僧、名前は？」

「……ヴァン。ヴァン・ノーレッジ。じいさんは？」

「俺か？ 俺は……そうだな。ブガイ……とても名乗って置こうか。本当の名前は……随分前に、なくしちまったからな」

こうして始まった魔剣使いと少年の旅は五年に渡って続く事になる。その旅の間、ヴァンは只管にブガイにこき使われ続けた。修行の一貫として生活に必要な作業は全て彼の役目だったし、寝る間も惜しんで剣術と魔術の訓練が繰り返された。

最初のうちはあまりのハードさに何度も倒れそうになったヴァンも、徐々に年月を重ねる内に戦士として立派に成長していった。魔剣はいつになっても継承される気配は無かったが、ブガイはヴァンが魔剣使いとなる為に必要な様々な技術を叩き込み続けた。一人で生活する為に必要な事……。剣の扱い、魔術の扱い……。魔剣とは何か。

二人の旅は順風満帆とは行かなかった。途中彼らは何度も他の魔剣使いと戦い、魔物と戦い、ヴァンはそうだとは知らなかったがゼダンの追っ手と戦った。最初は逃げ回っている事しか出来なかったヴァンも知らず知らずの内にブガイと共に戦えるまでになり、十歳にも満たない少年が大人が持つような剣を片手に魔物や魔剣使い相手に立ち回ったのである。少年は魔剣さえ与えられはしなかったが、己が強くなっているのを実感していた。ブガイはそんな少年に多くの言葉を投げかける事はしなかったが、少年が死に掛けると決まっ

て助けに現れた。

ヴァンは師匠とも言えるブガイの事を信頼していたし、尊敬もし

ていた。しかし当のブガイは結局何故自分がヴァンを育てているのか、その理由に気づく事はなかった。何故……そう考えつつも常に共にあった。一つところに身を置く事も無く、逃亡を続ける流浪の旅……。ヴァンは孤独な魔剣使いの背中を見て育った。そして転機は彼が十歳になるうかという頃、突然起こったのである。

それは普段通りの戦いだった。ただ一点異なる点があるとすれば、襲ってきたのは帝国を統べる絶対王者であるハロルドであったという事。ハロルドとの戦いは激化し、ブガイは深い傷を負った。一対一の戦いならばそこまで大きく差をつけられる事はなかっただろう。だが、彼には護らねばならない大切な足手まといが居たのだ。二人はハロルドから逃れた深い森の中、そこで一つの約束を交わした。少年の手を握る男の血に塗れた手……。そしてもう一人の黒き魔剣使いがそこに誕生するのであった。

「　　いいか、小僧。これからお前が欲しがっていた力をくれてやる」

肩で息をする、珍しく憔悴した様子のブガイにヴァンは別れの時を感じていた。だから首を横に振った。しかしブガイはお構い無しに剣の継承の儀式を始めるのだった。

「　　くれてやるって……じいさん、あんたその魔剣が無くなってどうやってあいつに勝つんだよ!？」

「　　勝つつもりはない。ただ、ここから逃げる事は出来る……。いいかヴァン、良く聞け小僧。これから俺たちは一旦別行動を取り……。再度、合流する。合流場所はここより一つ下の界層……。第四界層プリミドルだ。場所は……。セントラルターミナル。到着したら、掲示板にメッセージを残してくれ。俺が先に着いたら書いておく……。一ヶ月経っても連絡が無かった場合、お前は一人で逃げる」

「一人で逃げろって……じいさん、正気か!？」

「俺は一人でも大丈夫だ。魔剣なんぞなくとも、そう簡単にくたばりはしない。だがお前は魔剣の力が無ければ生き残れないだろう。餓鬼だからな」

「でも……俺に使えるのかよ……!? そりゃ、くれって言ったのは俺だけだよ……!」

彼はもう、出会ったばかりの少年とは違う。己の力量もわきまえ、そしてブガイの並々ならぬその力も理解している。ガリユウが恐ろしい力を持つ魔剣であるという事も、それを扱うのが困難で在るという事も判っていた。だからこそ戸惑う。師匠の無事を案じてその力の大きさに動じて。しかしブガイは少年の肩を力強く叩く。それはとても不思議な感覚だった。

孤独で、孤独なままに生き続ける。そんな自分の宿命を呪った事もあった。ガリユウなどなければいいと考えた事もあった。だがこの少年と一緒に過ごすうちに、賭けてみたくなったのだ。信じてみたくなった。人間の持つ可能性が……この少年の才能が、運命が、ガリユウという化け物を飼い馴らすのではないか……そんな可能性を彼は感じていた。だから托すのだ。もしかしたら、死ぬかもしれない。最後になるかもしれない。彼にとってこの剣が必要になるかもしれない。だから、托すのだ。

ガリユウがあれば彼の周囲には争いが引き寄せられるだろう。だが五年の間に教えられる技術は全て叩き込んだ。十歳のヴァンはその状態で既に並みの魔剣使いなどに劣る事はない強さを兼ね備えていたのだ。才能はある。ならば、そこに己の掛け金全てをつぎ込んでみるのも悪くはない。

「小僧、お前ならきつとこいつを飼い馴らせる。お前にはガリュウを使うのに必要な事は一通り教えたはずだ。いいか、プリミドールのターミナルで俺を待て。金と荷物を持って、全速力でここから逃げろんだ。時間は俺が稼ぐ。急げよ」

「じいさん……」

「さあ、行け！ もたもたしている暇はない……！！」

「……ターミナルだな！ 先に行ってるからな！！ 絶対生きて来いよ、じいさん！！」

そう叫ぶヴァンに背中を向け、ブガイはハロルドの元へ向かっていった。やがて激化する戦闘の音が遠くから聞こえ、ヴァンは腕に刻まれた術式の熱さを感じながら走り出した。言われた通りに走った。どこまでもどこまでも走り続けた。ブガイは少なくとも嘘は一度もついた事はなかったから。だから信じて走り続けた。プリミドールまで。

「……………それで、どうなっただんですか？」

「どうもこうも、そのままジジイは一ヶ月経つても姿を現さなかった。ってわけだ。思えばあの真面目なジジイがやらかした、たった一回の約束不履行だったな」

雪が降り積もる小屋の外の景色を眺め、ホクトはそう締めくくった。長い語りが終わる頃には既にそれなりの時間が経過しており、シエルシが握るカップの中に注がれたコーヒーもこれで三杯目であった。不貞腐れたように語るホクトの横顔を眺め、姫はそっと暖かいコーヒーを口に運ぶ。

外には人の気配も無く、ただ雪だけが降り続けている。世界中の全てが静寂に包まれたかのように錯覚する刹那……。二人の間の時間はまるで止まっているかのようにだった。ホクトは溜息をつき、それからテーブルの上に頬杖をついた。すっかり乾いた前髪から除く綺麗な瞳はどこか寂しげで、シエルシは同じように行儀悪く頬杖をつき、片手でホクトの髪をつまんで見せた。

「……ブガイさんの事が好きだったんですね、貴方は」

「ちげーよ……。あいつのお陰でガリユウを継承してっからは、ケチのつきっぱなしだった。なんかよくわかんねえけどやったら悪党とかに襲われるし……。そんな時だったな……。お前の母親……シヤナクと会ったのは」

「お母様……ですか？」

「……まあ、いつ言い出そうかと迷ってたんだが……。俺はシヤナクとは結構長い付き合いでな。何年も一緒に帝国と戦った仲間なんだよ。シヤナクには随分と世話になったからな。俺がお前を助けるのは、彼女の願いでもあった」

「……………そうだったんですか」

「さて、そうだな……。じゃあ次はその話にするか。俺がシヤナクと会ったのは、プリミドールのある街での事だった。丁度、俺がじいさんと出会った時と……。よく似たシチュエーションだったっけ」

シエルシの手の上に自らの手を重ね、ホクトは笑いながらそうして語り始めた。雪は降り積もり、静寂の夜が続いていく。シエルシ

は目を細め、優しく微笑んで男の言葉に耳を傾け続ける。二人きりの僅かばかりの時間　目を瞑れば、彼の過去の景色が思い浮かぶ気がした。始まりはやはり荒野と、そこに立ち尽くす少年の姿からであった。

飛翔（1）（後書き）

くはじける！ ロクエンティア劇場」

* 一週間ぶりです*

うさ子「はうはうっ！ はうはうっ！..！」

シエルシ「..... なんだか納得行きませんね」

昴「どしたの？ 急に難しい顔して」

シエルシ「だから どうしてアンケートでやたらと本城夏流に投票されるんでしょうか」

夏流「俺のせいじゃねえだろ.....」

シエルシ「むむむ.....！ こうなったらホクトに組織票を入れて、何とかロクエンティアの威厳を取り戻すしか！」

昴「単純にディアノイアが人気なんじゃない？ ロクエンティアの三倍くらい読者いたでしょ」

夏流「俺は面白いと思うけどなあ、ロクエンティア.....」

昴「.....あの、貴方が言うとなんだかイラつときますよ」

シエルシ「.....ホクトにもっと頑張ってもらわないと」

うさ子「じゃあねー、うさが一番になるのーっ！ー！ そしたらねえ、
美味しい物をいっぱいいっぱい食べさせてもらうのー！ー！」

シエルシ「……………それはそれで納得行きませんがね」

昴「（じゃあどしどしやいの）」

飛翔(2)

「SO - RAを超える為に必要なのは、三つの要素だ」

ロクエンティアと呼ばれる世界は第一から第六までの界層によって織り成された世界である。しかし、長らく“そうである”とはされてきたものの、実際に全ての階層を踏破した人間は居なかった。

その理由は第三階層ヨツンヘイムに築かれた帝国が第二界層へと誰一人通そうとしなかった事、そしてその第二界層そのものが巨大な結界防壁装置、通称“SO - RA”によって護られているからである。そしてハオルドが判っている事と言えば、SO - RAを超えるた先に何かがあるのか、そしてそれをを超える為に必要ないくつかの事柄だけである。

改造を終えたガルガンチュアは以前の何倍もの力を手に入れ、移動速度も行動継続時間も跳ね上がり、特殊結界発動装置と無数の魔道砲を追加装備し、この世界において右に出る物が無いほど強力な結界船となった。以前より大幅に人員も増えた艦橋でハオルドは立体映像の地図を広げ、そこを指差し語る。

「まず、SO - RAが存在する虚空領域まで潜入出来る防御能力を持つ結界を積んだ飛行船の存在……。これはこの船ガルガンチュアが該当する。改造は現段階でほぼ完璧で、残す所は微調整のみだ」

異世界の技術を持つ錬金術師であるメリーベルと、帝国随一の技術者であるケルヴィー……。二人の力によってガルガンチュアは今までとは比べ物にならないほどの力を手に入れた。元来ガルガンチュアは頑丈で高度な技術力を残す、古代文明の遺産である。それが

強化改造され、世界の限界を超える船としては十分すぎるほどである。

「次に、二つの結界をコントロールする必要がある。封印結界はホルスジェネレータにあるデステイニー……それからディアナドライブのスパイラルによって解除が可能だ。これは第二界層との間にある次元のズレを修正するのに絶対に必要な事柄となるだろうな。解除を行うには二人の姫……ミュレイ・ヨシノとシエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレの力が必要だ」

二つの結界の同時排除　しかしそれでもまだ第二界層へ続く道は開かれないのだ。その欠けた要素に関して、“そういうものがある”という事は知っているものの、ハロルドも実際にその情報を耳にした事はなかった。知っているとするれば他のゼダンなのだが……まさかゼダンが協力してくれるはずもなく。

「ふむ……。となると、やはりホクトが向かった元ゼダンとやらの情報が頼りになるのかのう……。しかし、この第二界層より上には何があるのじゃ？」

「行ってみればわかる事だ。口で説明した所で、理解するのは難しいだろう……。兎に角この計画の肝はホクトにかかっている、というわけだ」

ハロルドはそう言い切ると立体映像をオフにし、マントを翻して椅子の上に腰掛けた。黄金の鎧を装着したハロルドは以前の巨大な鎧姿に近づけようとしている意図が見えるのだが、実際にはただ子供が鎧を着ているようにしか見えない。ミュレイは腰に手を当て首を鳴らしながら外の世界を眺めた。暗闇に沈む街……。夜明けまではまだ時間がある。腕を上げ、背筋を伸ばす。ハロルドは腕を組み、

静かに目を瞑り項垂れていた。その背中を叩き、ミュレイは言った。

「しかし、そんなに偉そうにしているてもあんまり威厳がないのう」

「………………。そういつつもりでやっているわけではない。これは余の基本姿勢だ」

「ふふ、そうか？ まあ、この計画が上手く行けば第二界層への道は開かれ、この世界の未来もまた見えてくるじゃろう」

「上手く行かなければ、全ては終わるだけだ」

「なんとかなるじゃろう。これまでもどうしようもなさそうな事はかりじゃったが、案外何とかなって来たものじゃ」

「随分と楽観的なのだな」

「後ろ向きな考えは何も生み出しはしない。抗うと決めた以上、それを貫くまでよ」

小さな扇子を片手にそれを夜空へ向け、遠くを見据えるミュレイ。過去には様々な事があった。だが今はそれを後悔せずに歩いていくだけの強さを持っている。常に後悔せぬように生きるのならば、死ぬその瞬間もきつと晴れやかなまま逝けるのだらう。様々な傷つけあった過去……それを背負い、希望の船は飛び立とうとしている。そう、その過去にどんなものがあつたとしても。

雪が降り注ぐ景色を背景に、シエルシは山小屋の中で目を見開いていた。ホクトはそんなシエルシとは目を合わせないまま、寂しげな表情で話を続けていた。思わず立ち上がったシエルシはぎゅっと拳を握り締め、それからやるせない表情で項垂れながら言った。

「それは、本当なんですか……？」

ホクトは何も応えなかった。だがその沈黙が何よりも的確に彼の気持ち表現していた。シエルシは暫く立ち上がったまま黙り込んでいたが、小さく息を着き、目尻の涙をそのままに微笑を浮かべた。

「……………ありがとうございました……。私、そんな事全然知らなくて……………」

「あー……………いや……………。もうちょっと、怒ってもいいんだぞ？ その……………俺にも色々責任はあったんだし……………」

「いえ、そんな事はありません。きっとあの人は……………自分の意思で……………。そう、信じたいですから……………」

長かった昔話が終わり、シエルシはゆっくりと腰を下ろした。すると一気に全身から緊張感が抜け、その反動からか瞳に涙があふれ出した。目を瞑り、それをかき消そうとしても悲しみや痛みは消える事はない。だがそれでいいのだろうと思った。痛みも悲しみも、忘れなければきっとそれは力になる。今はそう、思えるから……………。

声を押し殺して涙を流すシエルシを見つめ、ホクトはやるせない表情を浮かべていた。そつと伸ばしかけた手を引つ込め、しかし思い直してシエルシの肩を叩く。誰かに触れる事を恐れてはいけないと、彼もまた今はそう思えるから。二人は手を取り合い、同じ過去を共有する。痛みの中で……………見つめあった。そんな時、突然扉が開いてブガイが姿を現した。ブガイの登場に二人は慌てふためき、シエルシは椅子から転げ落ちてホクトは机の下に潜り込んだ。そんな二人を見下ろし男は一言。

「お前ら……ここは俺の家だぞ……？ 何を思いつきくつろいでやがる……」

「いいいい、いえ……その……す、すみません……」

「じいさん、俺は暴力反対という言葉の世界に掲げたい」

「テメエは黙ってる」

ブガイが木製のテーブルを叩くとそこを中心にテーブルは一撃で崩壊し、更に拳はテーブルの下に潜んでいたホクトの頭頂部へと減り込んだ。目が飛び出るほどの衝撃に喘ぐホクト……その頭を掴み上げ、ブガイはギロリと至近距離でホクトをにらみつけた。

「じいさん……い、命だけは……」

「……………」

「ブ、ブガイ！ えーっと、ホクトは……えーっと、貴方の弟子なわけで……っ！ー！」

「ああ、そんなことは言われずとも判っている……ったく、この縁は切り離したくても切り離せないらしいな……」

ポイっとホクトを放り投げ、ブガイはどっかりと椅子の上に座り込んだ。あのホクトが部屋の隅で丸くなり、子犬のように震えているのを見てシエルシは何か新しい感覚に目覚めそうになったが、そんな事よりも今は別にやるべき事がある。

「それで、ブガイ……あのっ」

「SO・RAの超え方、だろ……？ 全く、どうしてそこまでして第二界層に行きたいんだか……」

「この世界を変える為です」

シエルシは頷き、真っ直ぐな目で言った。同じくブガイも真っ直ぐにシエルシの瞳を覗き込み、二人の睨み合いのような状態は暫く続いた。その間もホクトは部屋の隅でぶるぶるしているだけで何の役にも立たなかったが、先に折れたのはブガイの方だった。

「世界を変える為、か……。ついさっき、その小僧がした話を聞いてもまだそれを言えるのか……」

「何も揺らぎはありません。私は……私は、愚かです。でもこの愚かしさを誇りに思っています。力で勝てないのならば、せめて気持ちでは負けたくない……だから」

「わかった、教える」

「はい、だからそこは難しいと思うのですが……って、え！？ お、教えてくれるんですか！？」

「ああ。流石ルナリアの末裔……根性が違うな。それに そつちの小僧もただ馬鹿みたいに力を振るっていたわけじゃなさそうだ」

涙目のホクトが膝を抱えたまま顔を上げる。ブガイはそんなホクトに優しく微笑み、そしてシエルシの肩を叩いた。

「あんなろくでなしの駄目男だが、あんなら任せられる。しっか

り手綱を引いてやってくれよ」

「へ……？ はい？ はあ、わかりました」

と、呆然と応えるシエルシだったが、暫くしてその言葉の意味に気づく。顔が見る見る真つ赤になり、それから首を横にぶんぶん振りまくった。そんなシエルシの様子にブガイは笑い、それからホクトを指差した。

「SO・RAに行く為の最期の鍵……それは、その小僧が持つてる剣だ」

「……ホクトの剣……？ というと……ガリュウ？」

「というよりは、“大罪”を持つ人間ならば最後の扉を開く事が出来るわけだ。残念だったな、お前達がここまで来たのは完全に無駄だったわけだ」

つまり別に何も考えていなくても最後の扉は開いたと、そういうオチだったのである。シエルシは深く溜息を漏らし、ホクトはゆっくりと立ち上がった。正面から見詰め合う弟子と師匠……。シエルシは気を利かせ、ホクトの背後に回りその背中を押す。ホクトはよろめきながら前に出て、それから師匠の顔を見上げた。

「行くのか？」

「……あ、ああ」

「何故、世界を変えたいと願う？ 何故その力を求める？ お前の中にその答えは見えているのか？」

いつだったか、荒野で見詰め合った二人の間にあつた言葉。五年にわたる逃亡の日々……それらの先に見た未来。離れ離れの間に感じた様々な経験、そして今ホクトの後ろには護るべき人たちが大勢居る。

この世界の事も、自分の事もハッキリしているわけではない。だがもしもハッキリしている事があるのだとすれば、それはホクトが自分の大切な物を護りたいと思っっているという事だけだ。故にそれは初心から変わらず。しかし遠回りして彼が見つけ出した本当の願いなのだ。

「俺は、何かを護る為に力を使う。じいさんからしたら、そりゃ俺はまだまだ未熟だろうけどな……。でも、それでも俺は 護っていくよ」

振り返り、シエルシの手をぎゅっと握り締めるホクト。そうして優しく微笑む少年の横顔を見てブガイは在りし日の事を思い返していた。この世界の闇を何度も見せ付けられ、それでも真っ直ぐで居ようとし続けた少年……。彼の心に安らぐ瞬間などありはしなかったのだろう。だが今は違う。彼には居場所がある。護るべき人が居てそしてその全てに彼自身が護られている。

「……………今度来る時は、この世界を救った時だな」

「小僧の癖に生意気を言うな。だが そうだな。剣を持つ者として、その責務は必ず果たせ。必ず……護れよ」

少年と男はかつて誓った。そして今、男と男はまたここに新たな誓いを立てたのだ。シエルシは後ろからそんな景色を眺めて思う。確かに、無駄足だったのかもしれない。けれどもこの出来事無駄

だったと彼女は思わない。ここで起きた事、知らなかったホクトの一面、そして過去の真実……。それは胸の内にもしまっておこうと思つた。ホクトは振り返らず小屋を出て行く。シエルシはブガイに小さく頭を下げ、それから雪の中を歩くホクトを追いかけた。

突然の来客が立ち去り、ブガイは静けさを取り戻した小屋の中で一人椅子に座ってぼんやりとしていた。弟子との再会、そしてこの世界の希望を背負う少女を見た。長く生きた所でなんの特もない……そう考えていた事もあつた。だが今はそれは間違ひだつたと思える。そう、世界は移り変わっていく。どんなに絶望的な世界でも、それを変えようとする者は必ず存在するのだ。

「希望……か」

失いかけた言葉を胸の内でも反芻する。目を閉じ、在りし日の記憶を思い返す。護るべきものに背を向けて逃げ出した英雄の臉に映る過去……。それは決して、優しいだけの物語ではなかったが。

飛翔（２）

神の眷属が定めた世界の限界を超える為の儀式が始まるうとしていた。

ディアナドライバとホルスジェネレータ、月と太陽の中で二人の姫が同時に術式を発動する。その身に宿した王家に継承されてきた光。それは二つの“人工衛星”の中で増幅され、同時に空へと放たれた。

全ての階層に住む人々が空を見上げていた。世界の限界のその向

こうにある世界を見上げていた。紅と蒼の光は衛星から放たれ、空に突き進んでいく。そしてまるで矢のように天を射抜き、ヨツンヘイムの上空に存在した次元の歪みを正していくのだ。

誰もが同じ気持ちで空を見上げていた。何かが始まるような予感がしていた。この争いの尽きぬ世界の中、何かに管理された世界の中、真の自由を求めた飛翔が今始まるうとしていたのである。空に浮かぶガルガンチュアの中、ロゼは空に開く門を見上げていた。二つの光が織り成す虹の門……仲間達は艦橋に集まり、それを見上げていた。

「お待ちせしました！ ディアナドライバはゲート開放状態で固定完了です！」

「こちらと同じく終了……。さて、新しい旅立ちの始まりじゃな」

二人の姫が転送魔術で艦橋に戻ってくると、ロゼは頷いて空を見上げた。ポケットから取り出した大切な眼帯を装着し、髪を縛ってガルガンチュアの起動術式を発動する。

空に浮かんだ剣の船をつなぎとめていた鎖が一齐に放たれ、ガルガンチュアは白い光の翼を広げてふわりと舞い上がる。船体を囲むように浮かび上がる特殊な防壁の魔法陣……。幻想的な輝きを纏い、尾を引きながら船は動き出す。

「それじゃあ……皆いいかな？ 第二階層に行ったら次にいつ戻ってこられるか判らない。それでも構わないね？」

誰も何も言わなかった。というより、そんなセリフそのものが野暮というものだろう。ロゼも反省し、苦笑を浮かべて門を見据える。ホクトがガリユウを手に前に出る。昴はユウガを握り締め、ミュレイがソレイユを、ハロルドがネイキッドをそれぞれ掲げた。四つの

大罪が最後の扉を開き、ガルガンチュアは夜空へ羽ばたいていく。

「行くよ……！　ガルガンチュア、発進　ッ……！」

光の螺旋を描き、船は飛んで行く。真っ直ぐに、上へ上へ……。見上げる人々の目が眩むほど、輝きを残して……。誰も到達した事のない、第二界層へ……。

瞬く光の雲と次元の歪みの中をガルガンチュアは突き進んでいた。激しい揺れと衝撃が襲ったが、誰も怯えてはいなかった。皆それぞれ、ここに辿り着くまでに胸の中に抱いた思いがある。それがあつ限り、決して迷う事は無いだろう。

突き抜けた空　……。そこにあつたのは、空中に聳え立つ巨大な塔であつた。本来ならば界層と呼べるものがあるはずのその場所に大地は無く、無数の浮遊大陸が散らばっている。結界を解除し、ガルガンチュアは姿勢を制御しながらゆっくりと舞う。そして誰もが窓の外に浮かぶ景色に目を奪われていた。

「……帰ってきたの。うさたちの故郷……第二界層、ジハードに」

うさ子が窓にへばりつき、目をきらきらさせながら呟いた。そこはまるで夢物語の天上楽土のよう。白い鳥達が群れを成して自由に飛び回り、遠くどこからか聞こえてくる鐘の音が響き渡る。浮遊大陸のどれもが緑に溢れ、楽園は果てしなく続いている。光の世界。もしもこの界層を表現するとすれば、その言葉しかきつと当て嵌まらないのだろう。下層の地獄絵図とは隔絶されたこの世界は、まさに文字通り穢れ無き世界だつた。

「あそこ！　あそこがね、一番大きい浮島なのっ！！　ロゼ君、あつちに……“エデン”に向かつて……！」

「うさ子、ここの事知ってるの……？」

「いーからいーくーのーっ！ はうはう！ はうはうっ！！」

「わ、わかったよ……。まあ、他に行くアテもないしね……」

全ての浮島の中で最も巨大な大陸、そこには純白の世界が広がっていた。他の大陸とは異なり、その大陸は白い大地に覆われている。UGで見たような結晶の樹林が咲き乱れ、中央には巨大な結晶の建造物があった。鐘の音はそこから聞こえているようで、近づくほどに音は大きくなってくる。ロゼはガルガンチュアをその大陸の端に着陸させると、魔術アンカーで船を大陸に固定した。

真っ先にそこから飛び出していったのはうさ子だった。ぱたぱたと走っていくうさ子を追いかけ、それぞれが各々のリアクションを浮かべ白い大地に降り立った。浄化された世界の中、うさ子は白い大地に足跡を刻む。小さな小さな結晶の粒子を含んだ風が吹き、昴はそれを見上げた。ホクトはそんな昴の隣に並び、背中を叩いた。

「ついに、わけわかんねーところまで来ちまったな」

「……………とても綺麗な世界だ。でも……………私は下の世界の方がいいかな。見てよ兄さん、ここには生きている物なんかないんだ。森も、鳥も……………何もかもが作り物なんじゃないかって気がする」

結晶の葉をその指先で砕き、昴は目を細めた。紅いマフラーが風にはためき、昴はしっかりと前を見据えて歩き出す。例えこの世界がどんなに美しくとも、ここからはゼダンの……………神の領域なのだ。もう後戻りは出来ない。ここからはただ、血も涙もないような戦いだけが横たわっているのだ。

だがしかし二人が振り返るとアクティやロゼも未開の大陸にはし

やいでいる様子だし、うさ子はその場でくるくると楽しげにはしゃぎ周っている。ミュレイやメリーベルはそんな子供達を眺めては微笑み……なんとも和やかな雰囲気である。ホクトと昴が苦笑を浮かべたその時、うさ子が急に大声を上げた。

「ああああああ　　っ！！　はうっくくっくっ！！　ホクト君、昴ちゃん、こっちこっちなの！！　みんなこっちなのーっ！！」

「どうしたんだアイツ……？　普段からうさ脳だが、今日はいつになくハイテンションだな」

そうしてうさ子に歩み寄ると、誰もが思わず我が目を疑った。うさ子が指差す先、そこには白い大地を踏みしめて歩く現地住民の姿があつたのである。まずこの世界に人が住んでいるという事が驚きだつたのだが、最大の驚愕は別の場所にあつた。

誰もが同じ場所へと目を向けていた。というのも、その視線の先小さな少女の頭には、うさ子と同じ耳のようなものが生えていたのである。全員が同じように首を動かし、うさ子と現地住民の少女とを交互に見やる。どう見ても、二人の頭から生えているものは同じであつた。

「はうはう！　はうはう！」

うさ子は唐突にそんな事を言い出した。何がなんだかわからないが、まあなんだいつものうさ語か……そう思っていた時である。

「……………はうはうっ？」

なんと、全く同じイントネーションで少女もその呟いたのである。“まさか”……その三文字が全員の脳裏を過ぎった。

「はづはづ！ はづはづ！ なのなの！」

「はづ……。はづはづ。なのなの」

「なのなのーっ！！」

“会話”である。明らかに二人の間には会話が成立していた。ダラダラと、冷や汗が止まらない。なんだか目眩までしてくる始末だ。だが……。どうやらそういうことらしい。

「……あれは、ジハードに住む人間ならば扱える、一種の言語だ」

「「「「 なにイイイイイイイイイイイイツ！？」 「「「「

まるで補足するかのようにはハロルドがそう説明すると、誰もが同時に叫んだ。ばつと一斉にうさ子を見やる。まさか、あの全く意味のなさそうなうさ語が本当に“うさ語”だったとは……。

「みんな、こつちなのー！ なんだかねえ、村に案内してくれるって！ どうかしたの？ みんなお目目がばつちり開いちゃってるけど……」

「……いや、スゲエもんを見た……」

「う？ ホクト君、へんなの〜。うさ、先に行くねっ！ はづはづっ！」

ばたばたと耳を振り、走っていくうさ子。そのあとで暫く誰も動く事が出来ず、ただ空しい風だけが吹きぬけて行った。ハロルドが

咳払いし、一人歩き出す。それを合図としたように一人一人がトボトボと歩き始めた。

「納得……いかねえ……」

ホクトの咳きは誰にも届く事はない。何はともあれこうしてジハードへの道は開かれ、新たな戦いが始まるのであった……。

「全然纏まってねえし、やっぱり納得いかねえ」

続く。

飛翔(3)

そこは、静寂に包まれた世界だった。
造られし命が住まう楽土、“エデン”……。巨大な鐘堂を中心に展開されるその街にはヨツンヘイムのような機械的なデザインの建造物は一切存在しない。まるで彫刻のような、絵画のような、生活感のない甘美な世界が只管に広がっている。

土は白く美しく、しかし命を育まない。木々はただ在るだけで、崩れては再生を繰り返す……。流れる水は澄み渡り、しかし人が飲むには美しすぎる水なのだ。全てが停止したかのように時の流れから、世界の流れから隔絶され、エデンは今日も静まり返っていた。

頭から生えた白い耳をはやした人々は、大人も子供も確かに暮らしていた。だが彼らは何をしてもなく、まるで歩く彫像のようである。誰もが美しく整った顔つきで、誰もが皆生きる為に何をすることも必要もない。エデンの住人は食べる事も眠る事も無く、永久の命を約束されている。故にそこは時の止まった世界……。命が育まれない世界。造られし者の楽園 エデン。

「……………帰ってきたのか、余は…………。この、作り物の世界に…………」

ハロルドは目を細め、結晶で出来た家々を見渡した。うさ子はエデンの住人たちを集め、なにやら会話を行っている様子だった。同じくうさぎの耳 否、“感情交換神経”を持つハロルドにはわかった。うさ子がどんな話をしているのか。どんな人々がそこに生きているのか。

かつて王であった彼女は生まれ出でた場所への帰還を果たした。もう二度と踏む事は無いと思っていたエデンの大地…………その白すぎる砂を踏みしめる。下層の人間達は物珍しい景色に歩き回り、あちこちを散策していた。しかしそこにあるのは見ても別段面白みも無

い、まるで美術館のような世界だ。直ぐにそれぞれが戻ってきて、一箇所に集まった。

「どっちにいつても、同じような景色が続いているでござるよ……。これでは迷子になりそうぞござる」

「こつちも同じ。ボクも迷子になりかけたし……」

「ホクト、これからどうする？ 僕らはとりあえずガルガンチュアに戻るつもりだけど……。船を空けるわけには行かないし、エデンの地質調査とかもしようかと思って」

「なんだ口ゼ、そんな事もやるのか……？ まあいいや、直ぐ出発出来るようにしておいてくれ。俺はもう少しこの辺を調べてみる」

砂の海豚のメンバーと別れ、ホクトはうさ子の傍に歩いていく。うさ子と同じうさ耳一族は誰もがうさ子のようにニコニコしており、耳をぱたぱたさせている。老若男女、誰もがうさみみである。だがしかしホクトには強烈な違和感があった。

「……こいつら……生き物なのか？」

ホクトの言葉に反応するかのようには、うさ子は耳をしょんぼりさせながら振り返った。その目はキラキラと輝いているが、やはり違和感は大きくなるままだ。そう、うさ子と比べてここの人間達は表情はあれど無感情、まるで……。そう、うさ子ではない、もう一つの人格……。ステラのようだった。いや、ステラよりもこの土地の人々はより無感情、より無思考である。うさ子はホクトのシャツの裾をぎゅっと掴み、首を横に振った。

「うさたちはね……人間じゃないの。うさたちはね……ゼダンが造った……“人造人間”だから……」

うさ子が顔を挙げ、耳をぱたぱたと上下させる。するとうさ耳族たちは一斉に散り散りに去っていく。そうして開けた道の向こう、鐘の鳴る場所を指差し、うさ子はホクトの手を引いた。

「ホクト君にね……見てもらいたいものがあるの。うさと一緒に来てくれるかなあ？」

「……？ ああ、そりゃもちろん。おい、何人が一緒に来てくれ。鐘堂を調査する！ あー……昂！ それから……あー……」

「私も行きますッ！！」

猛然と走ってくるシエルシ。その後ろには真剣な表情のイスルギが続いてくる。先ほどまでイスルギと一緒に居たゲオルクは無言で首を横に振った。結果集まったのは昂、シエルシ、イスルギ、ミュレイ、メリーベル、そしてハロルドだった。

「……お前ら集まりすぎじゃね」

「だって、なんだか事の真相がわかりそうな気がしたので……」

「そうだよ兄さん、大事なことなんだから皆知りたいに決まってるでしょ」

「ま、行ってみましょう」

メリーベルがホクトの肩を叩き、それぞれがぞろぞろと歩き出す。

肩を落としそれに続くホクト……しかしうさ子はずっとしよんぼりと元気のない様子だった。そしてその意味を、彼らは直ぐに知る事になる。

鐘堂の重苦しい両開きの扉を開くと、そこには果てしなく奥まで続く回廊があった。そしてその左右にはずっとずっと奥まで巨大な水槽が並んでいる。昴とホクトはそれに見覚えがあった。厳密には全く同じものではない。だがそれは……インフェル・ノアの中で見た景色に酷似している。

「これって……！？ まさか、この街の人間……！？」

「そう、この水槽の中に入ってるのがね、うさたちなの……。うさたちはね、“穢れ”を持たない人間としてここで生み出された……。アニマを覚醒させない人間として」

うさ子とはことごと奥へと進んでいく。水槽の中に浮かぶ、うさ子耳の人々。うさ子はガラス面に手を触れ、悲しげに微笑んだ。

「うさたちはね、このうさ子耳のお陰で言葉を話さずとも分かり合う事が出来るの……。うさたちはね、沢山の身体を持つけど、一つの命なの。一つの生き物……。一つの存在。だから、絶対に争わない。誰もがここにこして、誰もが全てを愛して……。そういう命として、造られたの」

「……………アニマを覚醒させない為に……か？」

ホクトはうさ子に歩み寄り、そう訊ねた。そう、この世界に生きる人間の“悪意”がアニマを覚醒へと導くのならば……。悪魔を目覚めさせぬ、新しい人類を造ればいい……。そうした計画が過去にあったのだ。そしてその実験場として用意されたのがこのエデン、

そしてその計画で作られたのがうさ子やハロルドだった。

彼らは語り合わずとも理解しあう生き物だった。食べずとも、眠らずとも、欲を持たずとも生きていける。個であると同時に総体であり、故に彼らは争わない。醜い心を持つ事もない。永久に純粹無垢。しかし、彼らはそうであるが故に自我を持つ事を赦されなかった。人の形をした人形……。指定された行動原理に則って動くだけのロボット……。機械仕掛けの人形は決して人間にはなれなかった。だからこの計画は頓挫したのだ。

「もしも、全ての人間が争う事無く分かり合えたら……ううん、どうしたら争わずに済むのか……うさたちはね、ずっとずっと考えていたの。そうだよ、ハロルドちゃん……？」

ハロルドは腕を組み、うさ子同様複雑そうな表情を浮かべていた。二人はどんどん奥へ進んでいく。緊迫した空気の中、ホクトたちはそれに続いた。最奥には再び扉があり、その向こうへと続く道を開き、うさ子は眩しそうに目を細めた。

扉の向こう、光の世界にあったのはミレニウムシステムと同じような造りの部屋だった。一番驚いたのはメリーベルで、その理由は明らかだった。そう、彼女はこれと同じ物を以前にも見ていたのだ。地下の遺跡　フラタニティにて。

「……このエデンを建造したのも、この計画を発案したのも、全て余のやった事だ。余は……元々、人間を全て滅ぼすつもりでいた。そして、エデンの民を変わりにこの世界に根付かせるつもりだったのだ」

「……どうして？ わざわざ人間を滅ぼす為にエデンの民を用意したりして……。私にはよく話が見えないんだけど」

昴の疑問はこの場に居る全員の疑問でもあった。だがそれは元々の外れな疑問なのだ。ハロルドは何も人間を消し去りたかつたわけではない。ただ、この世界を　否。この世界の“神”を、護りたかつた……。救いたかつただけなのだ。

「……………この世界に一人ぼっちというのが、どれだけ辛い事だから……貴様達は考えた事があるか？」

ハロルドは背を向け、そして部屋の中央にあつた大きな円柱状の水槽へと手を伸ばした。既に水も抜かれ、中には何も無いその水槽を撫で、少女は目を瞑る。そこに確かに居たのだ。ここは、ゼダンが集う場所……。かつてのゼダンが在つた時、この場所に神は居ただのだ。

「神は寂しさのあまりアニマを生み出した……。アニマは神の寂しさを紛らわせる為に、異世界への侵略を行った……。ゼダンはアニマを封じる為にこの場所に残つた……。わかるか？　この世界の物語とはつまり、突き詰めれば“子守”なのだ。眠りし神を優しく見守り、あやす事……。荒れ狂う神の力を癒し、レクイエムを謳う事……。それこそがこの世界の運命。故に余は……。彼女を護る為に、彼女が寂しくないように、ホムンクルスを作つた。この身体もその計画の一環で生み出したものだ。余のもともとの体では、永久に等しい時間の流れには逆らえない。老いがある限り、私は神の傍に居続ける事は出来ないからな」

「それじゃあ……。ハロルドは、神様を護る為にその身体になつたの？」

「……………尤も、ネイキッドの力を継承出来る程の肉体では無くてな。定期的に魔力を充電しないと動けない、ろくでもない身体になつて

しまったがな」

自虐的に笑い、ハロルドは空を仰ぎ見た。鐘の音はこの部屋の真上から聞こえてくる。吹き抜け構造となったその場所は、塔の頂上から音が反響し、何度も何度も聞こえてくる。目を瞑れば思い返すことが出来る、神と共にあつた時間……。否、神だとかそんな事はどうでもよかった。ただ美しいと感じた。護りたいと感じた。だから……。護ろうとした。ただそれだけの事だった。それだけでよかったのに。

「この人間に心は宿らなかった……。研究は大失敗だった。この肉体も、いつかは朽ちて果てるだろう……。新しい楽園を生み出せないのならば……。！ 彼女が笑ってくれないのならば……。！ この世界を管理するしかなかった……。彼女を護る為に……。彼女を、目覚めさせる為に……」

ハロルドは振り返り、それからホクトたちを見渡した。全ては既に遅い事。全ては既に遠き日の事……。だがここに来て、ハロルドは何年ぶりかわからない感情の昂ぶりを感じていた。何故、こんな事になってしまったのかと、意味のない後悔をしたくなる。そんなハロルドの手を握り締め、首を横に振るうさ子の姿があつた。

「ここはね、ハロルドちゃんと……。それからうさ子の、夢の残骸なの……。うさもハロルドちゃんも、きつと裁かれるべきなんだと思う。でも、皆にはこの事を知っていて欲しかったの。うさはね……。きつとここで生まれて、ここで死ぬと思うから……」

「……。夢の残骸、か……。なあ、うさ子は一体何者なんだ？ そそもも冷静に考えてみると、“大罪”を持つてる時点で大体推測は着くんだが……」

「う、うさはゼダンじゃないのっ！ うさは……。はう……。あのね、うさもね……。半年くらい前に、ステラちゃんと“対話”して知った事だから、よくわかんないんだけどね、別に皆に隠してたわけじゃなくてねっ」

左右の人差し指をつんつんと合わせながら上目遣いに皆を見るうさ子。仲間達は顔を見合わせ、うさ子の言葉を促した。少女は耳をぺったりとしおらせながら、消え入りそうな声で言った。

「……………うさはねえ……………？ あのねえ……………？ この世界のね、神様のね……………。えっとね……………？ “ステラ・ロクエンティア”のね……………？ サルベージした魂を定着させた……………“擬似・アニメの器”なの……………」

「……………すまん、ちょっと色々新単語があってよくわかんなかった。えーと、なんだって？」

「だからねえ……………。はう……………。うさはねえ……………？ 神様の代用品っていうか……………。コピーっていうか……………。つまり、この世界の神様のね……………偽者っていうか……………。はう……………。あのねえ、サルベージした魂のねえ……………」

「いや、あれだ……………とりあえず確認していいか？」

「はう」

額に片手を当て、ホクトは冷や汗を流しながらうさ子を見やる。

うさ子はホクトの顔をじーっと上目遣いに見つめながら目をうるうるさせている。

「つまり……お前が、“神”……？」

「……なのなの」

「……え？ ステラ・ロクエンティアって神の名前なのか？」

「なのっ！ ハロルドちゃんはねえ、うさの身体……擬似・アニメの器の余剰パーツに魂を定着させてえ、新しい体にしたの！ だからねえ、うさとハロルドちゃんは家族なのっ」

「そうじゃなくて、お前が要するにこの世界の神なのかって話」

「……ほう……！？ ホクト君、怖い……！ うさもねえ、知らなかったの……。言おうと思ってたけどねえ、なんか言うタイミングがわかんなくてね……？ ほう……」

“ごめんなさいなの……”と呟いたうさ子を前に全員が固まっていた。大飯食らいで泣き虫で、にこにこして元気で強くて明るくて、うさ耳の神様……。彼らの目の前に君臨したその事実が、静寂の世界の時間を更に止め様としていた。

飛翔（3）

「ありえねえ……。これが神とか……。ありえねえ……」

「は、はうつ！？ なんだかごめんなさいなのっ！ みんな、なんか元気がないのっ！？ うさのせいなの！？ うさのせいなのっ！？」

慌てふためくうさ子の周囲、仲間達は全員地べたに座り込んで俯いていた。どうしたらいいのか判らずに涙目になるうさ子、その後から身を乗り出しハロルドは笑った。

「まあ、そう驚く事も在るまい。こういふ言い方は問題だが……うさ子への魂のサルベージは失敗したのだ。そうでなければ帝国など出来なかった」

「失敗……？ じゃあのうさ脳の中に詰め込まれてるのはなんだ……？」

「単刀直入に言うと、判らん。この魂のサルベージ計画というのは、“神”を目覚めさせる計画のひとつでな……。神が目覚めればアニマも覚醒する。だから普通は神を目覚めさせる事は出来ない。だから魂だけを……意識だけをサルベージしようとしたのだ」

この部屋の中央の水槽には元々はうさ子が入っていた。厳密にはステラ・ロクエンティアの写し身の素体が入っていたのだが……。神は今も世界の最下層で眠り続けており、神が眠っているからこそアニマも眠り続けている。これは封印の性質上どうしようもない事実なのだ。だが、眠りの封印に晒された彼女を哀れんだゼダンがいた。それがハロルドだったのである。

ハロルドは何とか眠る神とコンタクトをとろうと考えた。そのために言葉を交わさずとも相手と意思を交わすための交換感情神経通称うさ耳を作り出し、そして神の意識だけを別の器に移動させ

る事を考えた。つまり神の本体は眠り続け、アニマの封印も継続される……。その上で神の意識だけを切り抜き別の器に宿すことで、神を封印の宿命から開放しようとしたのである。

「だが、それは失敗に終わった……。結果、器には“ステラ”という人格を宿す事が出来たが……。それはこのほかの住人の例に漏れず、心が宿らなかつたのだ。つまり、サルベージに失敗したという事だな」

「……それで、偽者のステラの人格が生み出された……と」

「ミストラルを彼女に宿したのは、“彼女が本来持つ心”の一つでも心に宿せば、もしかしたら神の心が目覚めるのではないかという淡い希望からだった。“大罪”は神が“求める心”そのものだ。故に余は全ての大罪を彼女に宿そうとまで考えた……。愚かしい事にな。それはつまり、アニマを覚醒させる事に他ならないというのに」

偽者とは言え神の器に七つの大罪が揃い、そこに神の自意識が覚醒した時、本物と偽者は逆転する事になる。さすればこの世界の大いなる罪は目を覚まし、再び欲望の赴くままに他の世界を侵略し始めるだろう。それはゼダンとしては絶対にあつてはならない、看過できぬ結末だった。

「だから余は計画を途中で斬り捨て第三階層に降り立ち、封印を護り続けるという本来の役割に徹したのだ。結果的にそれが神の為になると信じてな……」

ハロルドの話が終わると、誰もがハロルドを複雑な目で見ていた。その視線に気づきハロルドは自嘲的に笑う。そう、哀れまれるような類の話ではない。ただ、我儂が……。夢が叶わなかつた人間の、良

くある話なのだから。

「それでも余のした事に変わりは何も無い。貴様らは世界を管理する余を倒し、自由を勝ち得た……。事實はそれだけだ」

「……ステラは神の“出来損ない”……。じゃあ、“うさ子”はなんなんだ？」

「それは余もずっと不思議に思っていたのだが……このうさ子という人格は全くの謎だ。何故唐突に発現したのかも全く意味不明だな」

「……結局うさ子の謎は深まる一方ってわけね……」

小さく溜息を漏らし、ホクトは苦笑を浮かべた。ハロルドの後ろに隠れ、おどおどしているうさ子を引つ張り出し、その頭をわしわしと撫で回す。怒られるかと思っていたうさ子はきよんとした様子で仲間達を見渡した。

「ま、うさ脳だからしょうがねえか」

「そうだね……。うさ脳だからね」

「はい、うさ脳では仕方の無い事です」

「うさ脳では良くあることじゃのう」

「……流石、うさ脳」

「……。なあ、うさ脳って何だ？」

一人だけ空気が読めないイスルギを無視し、仲間達は交互にうさ子の頭を撫で回した。もみくちやにされながらうさ子は嬉しそうに耳をパタパタと振り回し、それから元気良くホクトに飛びついた。

「ホクト君、みんな！　ありがとうなのーっ！！　うさはねえ、これからもがんばるのーっ！！　はうはう！　はうはうっ！！」

「ま、元々なんだったかはしらねえが今はうさ子なんだ、別にそれでいいだろ……？　俺も人の事は言えないしな……」

うさ子が飛びついて頬擦りするホクトを見つめ、ハロルドは優しく微笑みを浮かべた。どうしても笑顔にしたかったあの人の笑顔……それもきつと、こんなふうに眩く弾けそうなくらい、きらきらと輝いているのだろっ。

過ちを犯し、どうしようもない宿命に縛られ、そうやって生きてきた。ゼダンとなるべく異世界より召喚され、そして故郷から遠く遠く離れたこの大地で生きていく意味を見つけた。うさ子がホクトを心から信頼しているように……今なら少しは何かを信じられる気がする。信じられたらいい……そう、思えるようになった。

「そんじゃま、ここに居てもしょうがねえし……そろそろ引き返すとするか　？」

ホクトがそう宣言し、踵を返そうとしたその時である。鐘の音が一層大きく鳴り響き、真上から何か落ちてくるのが見えた。真っ先に反応したのは昴で、ユウガを構築してホクトの横に立ち、それを振るう。真上から落下してきた黒い剣を担いだシルエットはユウガと打ち合い火花を散らすと、部屋の奥にふわりと降り立った。

「　　また会ったな……北条昴」

「…………タケル」

黒い剣　ガリユウを担いだタケルは髪をオールバックに固め、鋭い眼差しで昴を射抜いた。仲間達が全員同時に臨戦態勢に入る中、うさ子が慌てた様子で声を上げた。

「だ、だめなの　　っ！！！！　　ここは、ハロルドちゃんの大切な場所なの！！　うさたちの想い出の場所なのっ！！　だから……壊さないで！　壊しちゃ、だめえ　　っ！！！！！」

その叫びをまるで合図としたかのようにタケルの影は膨れ上がり、鐘堂を闇の炎が包み込んでいく。うさ子の目の前で、無数の命が育まれた水槽が壊れていく。流れ出す光の雫……そして崩れていく人の形をした命。それでも……。仮に作り物だったとしても……。それでも、生まれてこようと必死に生きていた命　　。

うさ子の叫び声が響き渡り、タケルは黒き龍へと変貌した。巨大化する影は壁を突き破り、空に黒き翼を広げる。涙を流して手を伸ばすうさ子の体を担ぎ、ホクトはそれをシエルシに預けた。男は黒き魔剣を手に取り走り出す。対峙するは闇の龍……切り裂く刃は同じく闇。漆黒の光を纏い、ホクトは黒の鎧を纏って空へと大きく跳躍した……。

終焉の鐘（1）

「こんな山奥に客人とはな。こんな時世にどうした……？　な
あ、ブラッド」

ヨツン Heim に降り注ぐ雪……。新しい時代を迎えようとしているこの世界の中で、かつて栄華を極めた国は静けさの中にあった。ブガイの小屋の中に入ってきたブラッドは上着の肩に積もった雪を払い、旧友との再会に苦笑を浮かべる。

「こんな時代だからこそ、よ……。久しぶりね、“桐野双志”……。旧砂の海豚が解散して以来だから……。何年ぶりかしらね？」

「その名前はとっくの昔に捨てた名前だ。しかし、この間の小僧と
いい小娘といい、また随分と懐かしい顔だな」

「あら、長らく音信不通だったとは言え……。一度は共に世界を変えよう
と戦った仲じゃない。同じゼダンの“裏切り者”としてね……」

勝手に椅子の上に腰掛けたブラッドに仕方なくブガイは茶を出し
持て成した。それが彼なりの、そしてこの質素な小屋で出来る最大
限の手向けであった。二人の間に流れているのは懐かしい旧友との
再会を喜ぶようなものではなく、まるで通夜のような空気である。
そう、彼らは彼らなりに吊っていたのだ。己の、そして己たちが見
た過去の理想を。

「……ヴァンとシエルシに会った。俺たちにとって時の流れは無意
味なものだが、それでも流れは続いているのだと思い知った。年老
いたものだな、お互いに」

「私は今でもピッチピチよ？ でも……どう？ 貴方が育てた“子供達”の姿は」

「良くも悪くも直情だな……。そういうお前は今までもあいつらと共に行動していたんだろう？ 相変わらず人が悪いな」

「貴方も同じでしょう？ 私はただ、この世界の人間の行く末を見守りたかっただけ……。人の可能性の模索……。新たな時代の呼び水だからルールを護ってハロルドとは直接戦っていないわよ？ “ゼダン”はゼダンを殺めるべからず”……貴方が何百年も前に制定した掟よね」

カップを傾け、ブラッドは懐かしく微笑む。かつては二人とも彼らと同じように大罪の力を手に、この世界を変えたいと願っていた。異世界から召喚された彼らは英雄として、昂やホクトと同じ立場にあった。

見ず知らずの世界に呼び出され、戻る事も出来ず、理解に苦しむ世界の法則の中に囚われ絶望した……。ブガイにはブガイの世界が、ブラッドにはブラッドの世界があった。だが全ては等しく無意味ではなく、それは彼らにとって護るべき世界だった。全ては巧妙に、まるで人の心を知り尽くした悪魔が仕組んだかのように……。彼らはその力を選ばずにはいられなかったのだ。

ゼダンの間での対立や騒乱は下層にまで影響を及ぼし、全てを投げ捨て争いの現実から目をそむけようとしたブガイ……。そしてブラッドはブガイがエデンを立ち去った後、同じくその力を放棄したのである。

「地上で再会した時は、やっぱり運命の輪から抜け出すのは不可能なんだって痛感したわよね。良くも悪くも私たちはゼダン……。そ

うである限り、その運命からは逃れられない。逸脱したまま、戻る事の出来ない塵芥……」

「だが、大罪は今真に罪を抱くべき子らの手の中にある。まるで責任転換のように聞こえるかもしれないが、これからの世界は彼らが決めるべきだろう。他の誰かに命令されるわけでも、“運命”などというわけのわからない言葉に左右されるでもなく……な」

「いいえ、きつとそれでよかったのよ。私の手の中からユウガが去っていったように……。貴方の手からガリュウが去っていったように……。経緯は色々あったけど、結果として魔剣は彼らに継承された。不思議よねえ……。あの兄妹を見てみると、私たちの事を思い出さない？」

「……いや、お前は“弟”だろう……」

「何か言ったかしら ……?」

ブガイは無言で口を閉じ、冷や汗を流した。途方も無い年月が流れ、その最中で変わった事もある。変わらなかった物もある。だが今はその全てをひっくりくるめ、ありのままを受け入れられる。

「ハロルドは彼らと同じ景色を見るつもりらしいわね……。覚えてるかしら？ あの子がゼダンになった時の事……。まだあの子に、あの子なりの名前があった頃の事 ……」

“少女”は、何の力も持たないただの人間だった。唐突に異世界に召喚され、そしてそこで過酷な運命を強いられたのだ。そう、

昴やホクトがそうであったように……。

途方に暮れる少女の景色の中、彼女が見惚れる光があった。水槽の中で眠り続ける、自由を知らない無垢な神の躯体……。何故だろう、それがとても哀れに見えたのだ。何故だろう、それがとても美しく見えたのだ。触れたいと、声を聞きたいと　そう願ったのだ。彼女を救う為に使う人生ならば、それはそれで悪くはないかもしれない……そう思った。元々、“現実”の自分には帰る場所も生きる理由もなかった。無の存在である彼女の前に現れた神……。その名の通りそれは彼女を救い、そしてその心を狂わせてしまったのかもしれない。

女神に恋をした少女は全てを賭けてそれを取り戻そうとした。彼女に自由を。彼女にぬくもりを。彼女に愛を。その努力の日々が紡がれた世界が今、目の前で崩れようとしていた。たった一人の戦いが……夢の残骸が……終わろうとしていた。

天高く鳴り響く鐘の音は崩壊の音色か、或いは再生の前兆か。崩れていく鐘堂の中、その音色を瞳に宿してハロルドは目を閉じた。溢れ出る涙は何故だろう、とても暖かい。轟音の中で、それでも鐘の音は響き渡るのだ。何度も、何度も……。

聖堂から去っていく人々、降り注ぐ瓦礫……。それから自分を護るように、神の模造品が少女の身体を覆う。うさ子はその身を挺してハロルドを降り注ぐ瓦礫から護っていた。そう、最初から……。最初から全ては簡単な、シンプルな事だったのだ。

「ハロルドちゃん、逃げるの！　早く……逃げるのっ！」

「……うさ子……」

「こんなところでっ！！　ぼーっとしてっ！！！！　生きて……生きてなきや意味なんかないのっ！！　貴方は……貴方は、私にそう言うたではないですかッ！！」

それはどちらの言葉だったのだろうか？ 気づけばうさ子の眼差しは鋭くも優しく、強い光に満ちていた。神の逃げ場所を作ろうと思っただけの輝いていた日々……それが崩れる中、暴虐の王は確かに神の声を聞いたのだ。幾千の血を浴び、死肉を踏みしめて到達した“祈り”の向こう……。そこに、確かに神は居た。否 最初から居たのだ。信じる場所に神はあつた。そう、心の中に……触れられない物だったとしても。

「判った、気がする……。ここが……崩れていくのを見て……判った気がしたんだ」

「ハロルドちゃん……？」

「私はこんなにも、神の姿に恋焦がれていたのだ……。だが……。ああ、これでよかったのだ……。これでやっと、囚われた魂も……。時間も……。私も……。きつと、歩き出せる……。また、前に……」

縋るようにうさ子の腕を掴み、ハロルドは涙を流しながら微笑んだ。そんなハロルドの姿をじっと見つめ、うさ子はその小さな身体を抱きしめる。美しいレリーフが刻まれた天蓋は崩れていく。だがそこから降り注ぐ光こそ、彼女たちが真に望んだ希望なのかもしれない。

「寂しかったのは……。私の方なんだ……。私は……。だから……」

「……。もういいの、ハロルドちゃん。もういいの……。うさはね、怒ってないよ。うさはね……。ハロルドちゃんを、赦してあげよう。この世界に純粋な悪なんて存在しない。うさたちは……。擦れ違ってしまっただけなんだよね」

王の手を握り、天使のような少女は笑う。そして二人は走り出したのだ。ハロルドの向かう先、出入り口には仲間達が二人を待っていた。置き去りになどしないのだ……彼らは。例え元々が敵同士だったとしても。決して許しあう事が出来ない存在だとしても。人はそう、彼らは手を差し伸べるのだ。

「一緒に生きるの、ハロルドちゃん……。それで、いいと思うな。人はね……？ ハロルドちゃん、“人間”はね……。それでも……ぎゅっつと手を繋ぐ事が出来るよ。怖くて辛くて、明日に進むのが嫌になるような毎日でも……。それでもうさたちは、せーのって足を踏み出す事が出来るよ。だから……」

“一緒に行こう”。少女の声は免罪符のように彼女の心の中に響き渡った。来る日も来る日も飽きる事無く水槽を眺め、その中の神へと思いを馳せた日々……。それがあり、そして愚かな日々があり、今があるのだ。

何を恐れていたのだろうか？ 人間はこんなにも当たり前で有り触れた存在なのだ。何一つ特別な事などない。皆自分の為、誰かの為、こんなにも馬鹿馬鹿しいくらいに当たり前なのだ。当たり前前に手を伸ばす事が出来る……それが人間だから。

肩を借り、肩を貸して歩いていく……。何の為にこの世界にやって来たのか。何の為に、戦ってきたのか……。背後には聳える黒き龍。ハロルドは己の存在を確かめる為に、王として。ゼダンとして。人間として。それと対峙する事を選択した。

「ひゃあああああああッははははははッ!!!!!! ころ
だ……! ころでなくっちゃなあ……ッ!! 面白くねえよなああ
ああああああッ!!!!!!」

巨大な黒き龍の肩に立ち、タケルは仰け反るようにして高笑いを響かせていた。龍はその背中に無数の剣で出来た翼を広げ、空に高らかに吼えた。その振動は大地を鳴らし、雲を吹き飛ばす。そんな聳える剣の龍を前に怯む事無き剣士が二人。

一人は黒き鎧を身に纏い、全身を魔剣と一体化させ限界まで能力を向上させた“魔剣狩り”……。もう一人は白き鎧を身に纏い、美しい破魔の太刀を握り締めた“白騎士”である。龍が吼えると同時に周囲から吸い上げた魔力は大気に反重力の力場を生み、二人の足元からパラパラと音を立てて瓦礫が浮き上がったいく。

「……さて、顔を見るのももう何度目か判らないけど……彼の相手をしなくちゃならない」

『全く、いい加減ウンザリだぜ……。こっちは戦いを終わらせようって毎日気張ってんのによ』

「でも、私たちは救世主だ」

『俺は自分の為に戦うぜ?』

「理由はどうでもいい。ただ共通して私たちには目的がある。そ
うでしょ?」

『ああ、そうだな。その通りだ。あいつには貸しがある。ゼダンに

は腹も立ってる』

「『立ちふさがるならぶっ潰し、叩きのめす!! あいつをボコボコにして泣かせてやる!! そう誓ったッ!!!!!! だからッ!!!!!!』」

魔剣狩りが黒き翼を広げ、ふわりと舞い上がる。白騎士がその刃を下段に構え、走り出す。二人は上下から同時に龍へと向かって動き出した。

「ミュレイは絶対に渡さない……!! 貴様はここで退場してもらっッ!! タケル・ヨシノ!!」

『っーか、俺のガリユウを……返し やがれえええええええええええええええッ!!!!!!』

突っ込んでいくホクト目掛け、龍はその手を大きく振り上げる。叩き付ける拳動は遠目に見れば早くはないが、その質量的に見れば事情ならざる速度である。文字通り空が落ちてくるかのおうな一撃にホクトは大地に叩きつけられ、更に跳ね上がった。空中で制動し、次の攻撃に備えるホクトに再び龍の攻撃が迫る。

「無駄無駄アツ!! これがガリユウの全力なんだよ!! てめえらみてえな出来損ないの救世主ちゃんと、絞りカスに何が出来るって、ええッ!？」

「それは 自分の目で確かめればいい」

ホクトへと迫る龍の拳 それはピタリと空中で静止していた。ホクトの足元に立っていた昴が空にユウガを掲げ、龍の腕を“停止

”させたのである。その隙に跳躍した昴をホクトが片手で抱き、タケル目掛けて放り投げる。

空中を猛スピードで突っ込んでくる昴は身体を捻り、回転しながら一撃を放った。一閃。衝撃は斜めに広がり、龍の肩へと深く鋭く、吸い込まれるようにしみこんでいく。防御に使ったタケルの持つガリユウに亀裂が走り、龍の片腕が落ちるのはほぼ同時だった。

「破魔の能力か……！？ 刀身の魔力を増幅して斬撃を放出……だと……！？」

「私たちは、確かに一人一人では弱いかもしれないね。でも、誰も今まで見た事はないでしょ？」

『俺たち仲良し兄妹の コンビネーションプレイってヤツをな！』

落下していく昴の背後、ホクトは超巨大な剣を両腕で担いでいた。それは以前帝国の戦艦を一撃で破壊した剣である。それを空中で助走をつけ、思い切り投擲する。巨大な龍がそれを俊敏に回避出来るはずもなく、剣はぐさりと龍の頭を貫いた。

「ゼダンってのは、一人での戦いに馴れすぎているんだよ」

「き……さまらああああ……ッ！！！！」

龍が消滅しかけたのを脇目にタケルは剣を収縮し、魔力を束ねて強固なガリユウを作る。落下と同時に黒き炎を巻き上げそれを全身に纏った。

「二対一は卑怯だ〜って喚いてもいいんだよ、“くそがき”」

『ま、だからってやめてあげないけどな。だーっはっはっはー！』

「……図に乗るんじゃないぞ……。テムエらは追い詰められてるんだ。それを忘れるんじゃない。立場は俺様が上だ。俺が……戦場のルールなんだよオツ！」

タケルはガリユウを片手に構築したまま　もう片方の手の中に新たな魔剣を構築する。それは光を纏い、ガリユウとは対照的に白く美しく輝いている。ホクトも昴もそれには見覚えがあった。忘れるはずもない、何故ならばそれは　。

「……“永魔剣エリシオン”……！？」

「そうだ！　こいつも“大罪”……大罪なんだよオツ！！　大罪が二つ！　それが使いこなせる俺は最強って事だよな……！？　そう思うだろ、お前らッ！！」

二対の大剣を引きずるようにタケルは走り出した。ホクトと昴は同時に魔剣で左右それぞれの剣を受け止める　が、その攻撃の重さは以前とは比較にならない。踏ん張りが利かずに吹き飛ばされる二人　。空中に浮かんだ敵目掛け、タケルは剣の弾丸を無尽蔵に乱射する。

「ひやははは！！　あはははははは！！！！　踊れ踊れ！！　無様に踊れよ……ハッハアアッ！！！！」

ホクトを庇うように前に出た昴が破魔の剣で片っ端から攻撃を相殺するが、それも段々と追いつかなくなってくる。剣の持つ魔力の濃度が以前とは桁違いなのである。やがて一つを相殺しきれなくな

った時、全ての剣がどつと流れ込んできた。ホクトは昴を抱えて闇の結界を展開して防御し、同じく剣を打ち返して反撃するが……。

「駄目だ、相殺できねえ……！ あっちの方が何倍も、何十倍も魔力が詰まってやがる……！？」

「当たり前だろ……！ ああ……お前らこのエリシオンの能力を知らなかったんだな？ そうなんだな？ じゃあ教えてやる。知りたいだろ？ なあ……！」

ガリユウから放たれた黒い魔力の渦が二人を吹き飛ばす。二人は全身をズタズタに引き裂かれながらも白い大地の上に何とか着地を果たしていた。黒き魔剣ガリユウ……それは確かに強力な剣だ。だがその最大の弱点は魔力の消耗が激しすぎる点にある。どう考えても先ほどの攻撃はタケルの持つ魔力の限界を超えていた。いくらゼダンと言えども、ホクトが全く手も足も出ない程の魔力差などあるはずもない。

「答えは簡単だぜ？ このエリシオンって剣はな、こいつそのものが“無限”の魔力を供給する存在なんだよ。いくら魔力を使っても消耗する事がない……まあ、これは剣というよりは杖……いや、補給ユニットって所か。スゲエだろ？」

「……なるほど、道理でガリユウの能力が桁外れにあがってるわけだ」

「破魔の能力も私の魔力に依存する以上無限じゃない……。全部相殺しきれなくても当然か……。ある意味、最強の能力だね……」

全身の傷口から流れる血を気にも留めず、昴はぎゅっとユウガを

握り締めた。ホクトも当然諦めては居ない。ガリュウを両手で構え、タケルを真つ直ぐに睨み返した。

『大丈夫か、昂？』

「……当然。メリーベルの鎧がなきゃやられてたろうけど、まだまだ負けを認めるつもりはないよ」

『俺はちよつとやさつとじゃ死なねえから、いざとなつたら盾にする。あんまりお前がボロボロになると……多方面から苦情が殺到するんだよ』

「……そ。じゃあちゃんと護つてね お兄ちゃん」

「麗しい兄妹愛つて所か……？ いいねえ……俺はそういうの好きだぜ。ああ、そうとも……それだけが世界で大切な物……今の俺を支える全てだから……」

「……どうしてゼダンなんかになつた？ お前はあのままミュレイの傍に居ればそれで良かったじゃないか……」

「そんな事をテメエに指図される筋合いはねえんだよハゲツ！！ 姉上はなあ……。姉さんはなあ……。お姉ちゃんはなあ……。実の弟でもなんでもない僕を愛してくれたんだ……！ 家族のように扱ってくれたんだ……！ なのに、テメエが来たから……。テメエみたいなの邪魔者が現れるからよオツ……！！」

『実の弟じゃないの！？ じゃあ……別にいいんじゃないの……？』

「良くないんだよ兄さん……？ ミュレイは……私の嫁だツ……！！」

拳をぎゅっと握り締め、高らかに宣言する昴。ホクトは妹がどこか遠くに去っていく足音を聞いた。

「俺はなあ……？俺は、何年も何年も姉さんを見てきたんだ……。姉さんはこの世界で一番美しく聡明でまさに神のような女性だ……。姉さんは常に苦悩し、己の良心の呵責に苛まれ、地獄のような景色の中でより一層輝いてきたんだよ！」

「……まさか……タケル、お前はミュレイが苦しむ姿を見る為に、ククラカンやザルヴァトーレを裏で操ってたのか？」

「いや、さすがにそんな個人的感情で動かないだろ」

「その通りだ！！」

「その通りなのオオオオオツ！？」

「私には判る。ミュレイはあんなでも実はDMだからね。苦しんだり一生懸命なミュレイの姿を見ると萌えるって事はとっくの昔に気づいているよ兄さん」

「俺はお前がもう帰ってこないんだって事に今気づいた」

「まあ……この世界に戦乱を齎す事によりアニマ覚醒を早めるって理由もあったけど……。お前たちは俺様たちの思惑通り戦乱を拡散させ、ついには帝国までも潰しやがった！！“ありがとう”と声を大にして言いたいね！！これで世界は崩壊の一途を辿る！」

「世界を守護し見極めるのがゼダンの役割じゃねえのか！？ テメ

「エラ何がしたい！ 何が目的で暗躍する！？」

ホクトの問いかけにタケルはニタリと笑い、それからゆっくりと歩き出した。二つの大罪を手にした男がホクトと昴へと襲いかかるうとした、正にその時である。

「……もう止める、タケル！！ 止めてくれッ！！」

戦場に声が響き渡り、昴とタケルがほぼ同時に振り返り、遅れてホクトが目を向けた。そこにはソレイユを片手に立ち、悲しげにタケルを睨むミュレイの姿があった。

終焉の鐘（1）（後書き）

くはじける！ ロクエンティア劇場く

* ネタバレラッシュ*

アクティ「それにしても……うさ子が神様かあ……。なんかやだね」

ロゼ「同感……」

うさ子「うさはねえ、神様としてこれからも頑張るのですっ！ 来週からこの小説は、“神様うさ子っ！”というタイトルに変わるのっ」

アクティ「んで、色々とネタバレラッシュが続いているわけだけど……そろそろ設定集を出したほうがいいよね」

ロゼ「まあわけわかんなくなりつつあるからね……」

うさ子「あれ、うさ子の話は無視なの……」

ハロルド「うさ子おおおおおおおおお！！ 余だあああああ
あああ！！ 結婚してくれえええええっ！！」

うさ子「ひい……っ」

アクティ「ねえ、どうして大罪関係者って急に何かに目覚めちゃうのかな……」

昴「どうして私に言うの？」

アクティ「いや……なんか覚醒してるから」

タケル「大罪持ちでは良くあることだよ」

ロゼ「綺麗なタケルだ!？」

アクティ「なんかさあ、むしろ大罪持ちの中では……ホクトが一番安定してる気がしてきた」

ミュレイ「む、わらわが一番真人間じゃろう?」

ロゼ「いや、ミュレイは周囲がカオスだから」

ハロルド「はあああああつ!!! うさ子かわいいようさ子……はあはあ! はあはあ!」

うさ子「やあああああつ!!! なんか怖い、怖い!」
服の中に頭突っ込むのやめて!」

ロゼ「……別にいいけどさ、絶対本編でそれやんないでね」

終焉の鐘（2）

「な、なんだ！？ 何がどうなってるの！？」

「ロゼ、あれっ！！」

突然の異常事態に戸惑うロゼの隣、アクティが空を指差した。鐘堂が崩壊し、タケルが現れた事は遠目にも判ったのだが、問題はそれだけではなかったのだ。

空に浮かび上がった巨大な魔法陣が回転し、突如としてそこから無数の影が放たれた。それは白い翼を生やした魔物。人型の怪物。それは次々に出現し、ガルガンチュアへと突っ込んでくる。ロゼは慌てて船を動かし、思い切り舵を切った。

「なんだあの魔物……！？ あんなの見た事ないぞ！？」

「ロゼ、早く結界を展開して！！ ボクたちは甲板に向かうから！！ おじさん、行くよ！！！」

「……だから、俺はまだおじさんじゃないんだがな」

冷や汗を流して抗議するゲオルクを連れ、アクティが甲板へと走っていく。ロゼは船の周りに結界を展開させるが、翼を持つ怪物は自在に魔術を発動し、ガルガンチュアへと攻撃を降り注がせる。S O - R Aを超えるほどの強度を持つ結界船だけあり魔物の攻撃程度ではビクともしなかったが、如何せん数が多すぎる。

翼の魔物たちは次から次へとわらわらと湧き出し、それは天を覆い尽くしかねない勢いであった。雨のように降り注ぐ魔法攻撃……

そして魔物はその手に次々に剣を構築していく。それは量産型の魔剣、“エクスカリバー”……。遠巻きに見ただけのエレットは直ぐに気づいた。彼らの正体、化け物に成り果ててしまった命の意味を。

「……エクスカリバー隊……!?!」

「な……!?!? あれがエクスカリバー隊だっていうのか!?!? でも、あれは……!?!?」

「判らない……。でも、あれは明らかにエクスカリバーです……!?! 私……私も、行って来ます……!?!」

「あ、ちよつと!?!? ああもう、誰か舵を代わってくれえつ!?!? 僕も甲板に行きたいんだよ ツ!?!」

ガルガンチュアはその船体に無数に設置された砲台を起動し、一斉に光を空へと放った。一閃の瞬きは空を埋め尽くす魔物を焼き払い、しかしそれも焼け石に水である。次から次へと湧き出してくる敵に何度も砲撃を繰り返すが、魔剣を装備した魔物は結界を食い破り、徐々に領域に侵入を果たそうとしていた。

甲板に並んだ砂の海豚の戦士達は空を見上げ、そのおぞましい光景に恐怖した。大きく口を開き、カチカチと歯を鳴らしながら魔剣をぶら下げ怪物たちは迫っていた。それが全て元々は人間だったなど、誰が信じられるだろうか。探知能力に優れたエクスカリバー清明を持つエレットですら我が目で見えるまで信じられなかった。それが、ヨツンヘイムで育てられた子供達の成れの果て。

「エレット殿、どうするつもりでござるか!?!?」

「わ、私も戦います!?!? 彼らは……私にとって、どうしても戦わな

ければならない相手のようですから……」

「まあ、神様の世界にまで足を踏み込んだんだ。“天使”が総出でお出迎えというのも案外ズレてはいないだろう」

「おじさん、あれじゃ“悪魔”だよ……。まあ、相手がなんだろうとボクたちのやる事は変わらないけどね　！」

アクティが魔剣スピリットを構築するのを合図に全員が武装を開始する。それと同時に結界を食い破った一部の魔物がガルガンチュアへとなだれ込んだ。戦闘が開始された船が頭上を過ぎるその眼下でミュレイはタケルとの対峙を果たしていた。長年連れ添った姉弟の再会　それは最悪の形で果たされたのだ。

「……………姉さん」

「タケル……………もうやめるんじゃない。これ以上、この世界に悲しみや混沌を撒き散らすな……………！」

「姉さん、それは違うよ。それは違うんだ……。僕はね姉さん、姉さんの為を思っちゃっているんだよ。そう、全部全部姉さんの為なんだ」

「わらわの……………為……………？」

「姉さん……………覚えてる？　僕は……………死んじゃったんだ。ミラ姉さんが死んだ後……………直ぐにね？」

両手を広げ、タケルは優しく笑う。その言葉で漸くミュレイは思い出した。かつて二人の間起こった出来事……。すっかり記

憶の彼方に閉ざしてしまっていた想い出の一つを。

ミラが死に、自暴自棄になっていった時期……ククラカンはザルヴアトーレの攻撃を受けた事があった。その時現場の指揮を執ったのがタケルであり、タケルはその戦場で負傷していた。その後何事も無く平然とタケルは無傷で帰ってきたのだが　思い当たる節といえはそれくらいしかない。ミュレイは動揺を隠せず顔を上げる。タケルは微笑み、両手の剣を引きずりながら姉へと歩み寄る。

「姉さんだけに責任を押し付けるあの国も……姉さんを苦しめるあの国も……この世界全部が嫌いだった。だから僕は姉さんの代わりに戦おうと思ったんだ。でもね……力が足りなくて僕はアツサリ殺されちゃったんだ」

「な、何を……？」

「でも、凄いな！　僕は神の力を得て蘇ったんだよ！！　そして誓ったんだ……この腐った世界を破壊しつくして、姉さんを僕だけの物にするって……！！　見てよ姉さん、これが“力”　だよ！！　僕は強くなつたんだ！！　姉さんに護られているだけの僕はもうとつくに死んでたのさっ！！！！」

振り上げたガリユウを大地に叩き付けると、影が伸びホクトと昴へと襲い掛かった。大地から次々と出現する剣の山……。全身を切り刻まれるホクトと昴が悲痛な声を上げ、倒れる。だがそれは決して急所を狙った攻撃ではない。ただ二人を傷つけ苦しめる為だけの攻撃である。

「あの最悪なザルヴアトーレも、僕がパージしてやったんだ。姉さん、僕は偉いでしょ？　僕は頑張ってるでしょ？　姉さん……僕を褒めてよ。僕を認めてよ……」

「タケル……」

「僕はこの世界のルールを全てブチ壊して、姉さんを僕だけの物にするんだ……。ああ、可愛い可愛い僕の姉さん……。脆く儂く、可憐な姉さん……。姉さんは僕のものだ……。僕のものなんだ！　はははははははっ！　……！」

余りにも変わり果てた弟の姿にミュレイは最早何一つ言葉を発する事も出来なかった。文字通りの放心状態である。立ち尽くすミュレイに迫るタケル　だが、その前に昴とホクトが立ちふさがった。

『しっかりしろミュレイ！　あんたの弟は頭がイっちゃってるが、あんたはまともだろ！？　気を確かに持て！！　魔剣使いの戦いつてのはな、気合で負けたら終わりなんだよ！』

「そっだよミュレイ……。ミュレイは何も悪くない。ミュレイには、指一本触れさせない」

「昴……　ホクト……」

「だからさあ……！！　お前達のそういう態度が気にいらねえんだよオオオオオオツ！！」

猛然と接近したタケルの斬撃が二人を同時に吹き飛ばす。エリシオンを叩き込まれた昴の片腕はへし折れ、ガリユウで斬り付けられたホクトの胸からは鎧を貫通して血が流れている。タケルは大地に二つの魔剣を突き刺し、両手を片手を額に当てて歯軋りした。

「ミラ姉さんを奪ったホクト……！！　そしてミュレイ姉さんまで奪

おつとする昂……！ テメエらは俺様にとって邪魔すぎんだよ……！

「タケル……何が……何がお主をそこまで……」

『つたく、話を通じねえんだよコイツは……！ ミユレイ、もういから下がってる！ 戦えないなら足手まといだ……！』

「私も同意権だよ、ミュレイ。コイツは話しても無駄だ……。二つも大罪を持つから……。心が余計に壊れてる。もう、助からないよ」

「……昂……」

心苦しそくに拳を握り締め、目を瞑るミュレイ。その背後、ミュレイの肩を叩くシエルシの姿があった。シエルシは無言で頷き、それからミュレイを後ろに下がらせる。

「苦戦していますね、二人とも。助力の必要はありますか？」

「うさもね、戦うのーっ！！ はうはう！ はうはうーっ！！」

うさ子がミストラルを展開し、ホクトの隣に並ぶ。シエルシも魔術を発動出来る状態で昂の隣に並び、その二人の間にハロルドが割って入った。

『おいおい、いいのか？ 仲間にならないんじゃないかなかったのか？』

「状況が変わった……という事だ。手を貸すぞ救世主。王の力を存分に見せてやろう」

ホクトがガリユウを、昴がユウガを、うさ子がミストラルを、そしてハオルドがネイキッドを構える。ずらりと並ぶ“大罪所有者”の戦線を前に、流石のタケルも旗色が悪かった。後方に跳躍し、それから舌打ちしてはき捨てるように叫ぶ。

「まったく、大罪に選ばれたほどの人間が揃いも揃って仲良しごっこかよ!? 大罪所有者ってのはなあ……殺しあうのが似合ってたんだよ!」

「うさたちは、大罪を持っているからって道を間違えたりしないのっ」

「余は余、貴様は貴様……こいつらはこいつらだ」

「私は自分で選んでここに立っている。誰かに指図されているわけじゃない」

『って、わけで……これは共同戦線じゃねえ』

“至極真つ当な、個人的な大罪所有者同士の一対一の喧嘩”

その“かける四”である。列を組んだ大罪能力者四人は揃って一步踏み出し、靴音を鳴らしてタケルへと迫ってくる。それを啞然とした様子で見送り、シエルシは振り返ってミュレイの肩を支えた。

「ミュレイさん、大丈夫ですか……?」

「……わらわは……何も……何も見えていなかったのだな……」

自嘲的な笑みを浮かべるミュレイ……。それも無理の無い事だった。彼女は最もタケルと共に時を過ごした。最もタケルの傍に居た。

タケルをいつも見ていたはずだった。だが……気づく事が出来なかった。全てはタケルの所為ではなく、何一つ弟の事が見えていなかった自分の所為なのかもしれない……そう思った。

ネイキッドが光を放ち、巨大な黄金の鎧騎士へと変貌する。その肩の上に座り、ハロルドは足を組んでタケルを見下ろした。うさ子が両手の間に作った電撃を放ち、それを昂が刃で受けて増幅し放出する。放たれた雷の斬撃は大地を刻み、タケルへと迫った。回避しようとするタケルの背後からホクトが襲い掛かり、刃を放って動きを止める。雷が瞬くと同時にタケルが立っていた周辺の大地は蒸発し、更にそこに上空から落下してきたネイキッドの拳が叩き込まれ、大地が大きく陥没した。

大罪を持つ者の戦いは周囲の地形を書き換えながら続いている。それを遠巻きに眺めながらミュレイはシエルシの手をぎゅっと握り締め、目を閉じていた。やはり……振り返ればあるのは後悔ばかりよかった事など数えるほどしかない。何度も何度も間違えてき人生。これで“大人”などと、笑わせるのも大概にしると言いたかった。

いつになっても、いくつになっても、力不足で手が届かない……。何度も何度も間違え、それでも無理矢理前に進んできた。その結果今、自分が見てこなかった罪のツケを払わされているのだ。ミュレイはゆっくりと瞼を開き、傍らに立つシエルシを見つめた。

「……………ザルヴァトーレを壊したのは……………やはり、わらわかも知れぬな」

「……………ミュレイさん」

「わらわがすっかりしていれば……………こんな事にはならなかった。こんな、惨い戦いなど……………ありはしなかったのかもしれない。シエルシ、お主にはわらわを裁く権利があるじゃろう……………。じゃが……………も

「うっすだけ、待っててはくれぬか？」

顔を上げ、タケルを見やる。ネイキッドの拳をガリユウを受け止め、エリシオンを反撃で繰り出すタケルの姿はやはり以前とは余りにも違いすぎる。自分の知っているタケルはあんな男ではない……だが、それはただの言い訳なのだろう。

「責任は、誰かが負わねばならない……」

ゆっくりと前を向き、一步を踏みしめる。沢山の思い出　後悔
しかしその全てが悪かった事だとは思いたくない。今こうして目の前にある現実から逃げたくなかった。シエルシはそんなミュレイを支え、そして強く頷いた。良くも悪くも　二人は同じ運命を背負う、分かり合える人間だから。

「責任を一人で負う必要はない」

そんなミュレイの隣、一緒に歩く男の姿があつた。イスルギ・ヨシノ　彼女の兄である。ミュレイは少しだけ驚いた顔をして……しかしああ、やはりと思ひ直す。シエルシはそんな二人を見送り、足を止めた。魔剣を構築し、二人が前に出る。うさ子の脇を抜け、鏢迫り合いするホクトも後退し、ハロルドは片目を瞑って傍観する。昂は刃を鞘に収め、主の傍らに戻った。

道は開かれた。そこに立っていたのは紅髪の炎の姫　ミュレイ・ヨシノである。今この世界で最も尊い命　人々を統べる者である。姫は炎の剣を召喚し、それをしっかりと握り締めた。その肩を支え、イスルギが頷く。

「……すまない皆。ここは私とミュレイに預けてくれないか」

『……そりゃあ、まあ構わんけどな……勝てるのか、お前？』

「勝つさ。勝たなければ意味が無い……そうだろう？」

ホクトが武装化を解除し、ガリユウを肩に乗せて溜息を漏らす。そうして二人の男はハイタッチを交わし、ポジションを変更した。一方不安そうな昴の脇を通り、ミュレイもまた前が出る。戦う為に責任を取る為に。そして明日へ進む為に。

「ミュレイ！ タケルはエリシオンを持つてる……！ ミュレイとイスルギじゃ、勝てるはずが……！！」

「……昴、あまりわらわを舐めない事じゃな。わらわは大罪が一つ、炎魔剣ソレイユのミュレイ・ヨシノじゃ。それにこれは わらわがやらねばならない戦い」

昴の頭をぼんと撫で、ミュレイは優しく微笑んだ。そんな真つ直ぐな目をされては何もいえなくなってしまう。昴は大人しく道を開き、愛しい人の凛々しい背中に願いを込めた。対峙するヨシノの名を冠する三人……。白い大地に風が吹きぬけ、雲間から光が降り注いだ。

「姉さん……僕とやろうつてのかい？ 僕は姉さんの為に戦ってるの……」

「タケル ここまで来てお主と理解しあおうなどとは思わぬ。わらわはこの世界の新しい未来へ進んでいく……そう、仮にお主がその邪魔をするのならば 我が紅蓮の炎がお相手しよう」

「悲しいよ姉さん……でも、何故か嬉しくもあるんだ……。姉さん、

これで僕は姉さんを殺せる！！ 姉さん……姉さん、ねえええさあ
あああんっ！！ ひやはははははは ツー!?」

と、タケルが走り出そうとした直後その足元から轟音と共に火柱
が立ち上った。それは雲を突きぬけ天まで燃やす大魔術である。何
の詠唱も挙動も無く、ミュレイはただソレイユを握り締めているだ
けでそれを発動したのだ。炎の中から逃れ、飛び出すタケル……し
かしその身体を大きな爆発が飲み込んだ。

声も上げられずに吹き飛ぶ肉体 だがガリユウの能力で彼の命
はストックされている。そしてそのストックはエリシオンの力で無
限である。木っ端微塵に肉が弾けたその場から超回復を始めるタケ
ル……だがその復活しきらない肉体を再び爆炎が焦がした。

「が ツー!?」

「 余り、感情に任せて魔術を使うというのは自重していた
のじゃがな。いい加減、わらわも腹を括ったぞタケル。この大陸全
てを破壊するつもりで 相手をしてやるっ」

「 ……ガリユウの再生が追いつかない……!? ソレイユの力……
それだけじゃないな……!?」

「 別に、わらわはソレイユの力など無くてもこのくらいの魔術は使
いこなせる。まさかソレイユの力をこの程度だと思い込んでいたの
ではあるまいな ?」

巨大な剣の扇は分離し、一つ一つの刃となってミュレイの周囲を
回転する。それが大地に突き刺さり、それぞれの点を結ぶようにし
て魔法陣が浮かび上がった。大地から 空から 世界中から。
魔力という魔力がそこに集約し、淡い光の柱がミュレイへと降り注

ぐ。

直後、放たれたのが巨大な雷撃だった。一撃で大地を砕き、土を焦がし、空を焼き払い、雷はタケルを黒焦げにする。その焦げた身体を閉じ込めたのは巨大な氷塊。そしてそれを砕くように大地が隆起し、氷は粉々に弾けタケルの肉体もバラバラに吹き飛んだ。

次から次へと放たれる、大魔術と呼んで差し支えの無い破壊それが息つく間も無く次々と放たれるその景色に驚いていたのはタケルだけではなかった。周囲の仲間達もその圧倒的火力にただただ啞然とするしかない。確かに白兵戦闘ではミュレイに勝機はないだろう。一撃でも食らえば彼女は倒れるだろう。だが 遠距離から一方的に攻撃する彼女の力はタケルの能力に左右されない。

「あの姫……あらゆる属性の魔術を全て使いこなせるのか」

「えーと、ハロルドちゃん……あれはどうゆうことなのかな……？」

「……噂には聞いた事がある。世界には稀にそういう才能の持ち主がいるらしい。確か “アンリミテッド限界突破者” とか言っただか」

炎が、雷が、氷が、光が、闇が、あらゆる破壊が目くるめく降り注ぐ戦場。タケルはその猛然と襲い来る破壊を前に完全に蹂躪されていた。大気を唸らせるような莫大な魔力を抱いたミュレイの身体は淡く輝き、大地から汲み上げ続ける術式の力が彼女へと魔力を供給し続けていた。

エリシオンとソレイユは対と成る剣。そしてその能力も良く似ている。エリシオンは剣の内部で無限の魔力を生成する。そしてソレイユは 剣の外部から無限の魔力を吸収するのである。タケルは一人の人間と戦っているように見えてその本質は全く非なる物なのだ。つまり彼は “この世界” と戦っているに等しいのだ。

ソレイユはミュレイの感情に呼応し無限に力を吸収し続ける。そ

の力は余りにも巨大すぎて、あまりにも制御が難しすぎて、彼女自身全てを手中に収めているわけではない。だからこそ、感情を制御してきた。心を冷静に保ってきた。“炎”とは属性を指し示す言葉ではない。それは 圧倒的に相手を焼き尽くす、“徹底した火力”を指し示す言葉。

「……すんげえ。俺らも離れないと巻き沿い食らうなこりゃ……。あれは……絶対相手にしたくないわ」

「ミュレイちゃん、すごいのがすごいっ！ うさはねえ……見直したのっ！ 滅茶苦茶強いっ！」

「……あれだけの力を持つていながら力に溺れず傲慢にも成らず、か……。大したものだな……。あの姫は」

「ミュレイ……」

バラバラの肉片となったタケルだったが、その身体はエリシオンを中心に再生する。完全に再生を待たない肉体で動き出したタケルは内臓をばら撒きながら、片腕だけを伸ばしてミュレイへと迫る。ミュレイが目を見開き、それを防ぎきれないと思った瞬間間に割ってはいるイスルギの姿があった。巨大な盾でタケルの放つ剣を防ぎ、槍でその身体を貫く。

「悪いな……！ 妹に触れさせるわけにはいかないんでな……！」

「て、てめえ……！？」

「退け、イスルギッ……！」

ミュレイが両手を天高く掲げ、空に光が立ち上る。それと同時にイスルギはタケルを突き刺したまま槍を射出し、彼方までタケルを引き離した。魔術が発動すると同時に大陸に降り注ぐ光の雨。浮遊大陸エデンの半分近くを粉碎するその魔術はタケルへと降り注ぎ、大陸ごと徹底的に破壊していく。

あまりのその威力にホクトたちが退避を行う中、それを見下ろす影があつた。空に浮かんだその影　ミラ・ヨシノは背後からミュレイへと迫り、剣を振り上げる。だがそれにいち早く気づいたシエルシが封印の剣を放ち、その動きを牽制した。

「家族同士の喧嘩に割ってはいるのはナンセンスですよ、ミラさん」

「……私もその家族なんだけど……シエルシ・ルナリア・ザルヴァ
トーレ」

終焉の鐘（２）

「全く、まさかエデンまで本当にノコノコやってくるなんて……ふてぶてしいにも程があるわ。ここは神の領域　ただの人間が入っていい場所じゃないのよ」

両手を腰に当て、ミラは呆れた様子でふわりと落下してくる。風が吹きぬけ、シエルシは再びミラと対峙を果たす。“あの時”はろくに戦う事も出来なかった。彼女を信じたかった……それは勿論今もそつだ。だが。

「……あら、戦うつもり？ 大罪どころか魔剣一つ持たないただの人間の分際で……私に勝てるとても？」

「ミュレイさんの言葉や、ホクトの言葉で気づきました。戦わないで済めばそれで確かに最良ですが、最善を尽くす為には戦わねばならない場合もあります。例えそれがどんなに負け戦だったとしても

—

真つ直ぐに睨み返すシエルシの綺麗な瞳は必要以上にミラの勘に触った。龍の剣を召喚し、それを波打つように振り回してミラは無言で睨みを利かせる。だがそれに退くわけにはいかない。退くはずがない。誰かを愛するという事は誰かを愛さないという事。誰かを護るという事は誰かと戦うという事。その罪を背負う覚悟がないのならば ここには立ってられない気がするから 。

終焉の鐘（3）

ミュレイとタケルの天変地異にも似た争いを背景に二人の女が向かい合っていた。片や、ザルヴァトーレの血を引く封印の姫。片や、神の力を得た死者の姫。二人は等しく愛の為に戦ってきた。その間に善悪や優劣は恐らく存在しない。

ミラ・ヨシノとシエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレは奇跡的なまでに酷似している。外見や口調がではなく、その魂の在り方のよくなものが似ているのだ。同じく世界の平和を願う。同じく、人を傷つける事を忌み嫌い。同じく、世界と戦った。そして同じ一人の男を愛した。その形や魂は違えども 二人は似ている。とてもよく、似ているのだ。

その間に差があるとすれば、彼女たちの立場くらいのもの……。世界を思う気持ちも、世界を愛する気持ちも、ホクトを愛する気持ちも変わらない。二人は得る者と奪う者であり、だがそれ以上の差は何一つ存在しないのだ。二人は同じモノ……。同じカタチ……。そう、きつともしもこんな出会い方ではなかったら 最良の親友になれた程に。

「貴方がホクトを愛している事は知っています」

「貴方がホクトを愛している事は知っているわ」

「でも、貴方はもう以前のミラさんではないんですね」

「そう、私はもう以前のミラ・ヨシノとは違う」

「貴方は護るべき世界に牙を剥いた」

「私はこの世界に失望している」

「だから……私は貴方と闘わなければならない。抗わなければならない」

「貴方を消さなければならない。私にとっての理想を貫く為に」

ミラは魔剣を片手に周囲を凍結させていく。シエルシはそれに魔術で応じようとしたが、それより早くシエルシを背後に引張る腕があつた。後ろに引張っていたのはうさ子であり、その隣には昴の姿がある。

「シエルシちゃん……ここは、シエルシちゃんの出番じゃないの」

「彼女の相手は私がするよ。一応……私は彼女とは因縁があるんだ」

「で、でも……っ」

「シエルシちゃんは、誰かを傷つける人であつて欲しくないの……。シエルシちゃんはね……とっても優しくてあつたかくて……。うさたちにとって、還るべき場所なの。だから……シエルシちゃんはシエルシちゃんの理想の為に、今は闘わないで」

「うさ子……」

戸惑うシエルシの隣、昴はユウガを片手にミラと対峙する。かつて同じ剣を手にした二人の女が向かい合う……。破魔の剣を片手にこの世界を護るべき存在……。それが今は運命の悪戯で対峙している。

「……破魔剣ユウガ……。私の剣で私と対峙するつもり？ 北条

昴……」

「私は……私は、ミュレイにとって貴方の代用品だった。私は貴方の代わりにこの世界の為に闘った……。貴方は生きていなければいけない人だった。でも貴方は死んでしまった。貴方が居ないから。そして私は貴方の居場所を奪ってしまった」

「そうね……貴方は私のものであったはずの全てを奪ってしまった。でも今更それがなんだと言うの？ まさか、謝ったりして穏便に済ませるつもりかしら？」

鞭を片手に笑うミラ。しかし当然、昴はそんなつもりで対峙しているわけではない。今日の前に居るのはミラ・ヨシノ。だが昴には確信があった。“彼女”も。“彼”も。決して“本物”などではないのだと。

昴はミラの刀を手にして今日まで闘ってきた。破魔剣ユウガは主を失っても直、時を止めてこの世界に留まり続けた剣である。だがそれは“違う”のではないかと、そんな考えは常に昴の中にわだかまっていたのだ。そう、この剣は “本当”のミラ・ヨシノを導いてくれる。

どんな時も昴と共にあったこの剣こそ、ミラ・ヨシノそのもの。ならば目の前にいるミラはただミラのカタチをした物に他ならない。そう、シエルシの言うとおりなのだ。あんなものがミラ・ヨシノであるはずがない。昴の中の何かがそう叫んでいた。だから、確かめようと思った。他に救う手立ては無いと思った。だから剣を両手でしっかりと構えるのだ。

「……ミラ。貴方はいつでも私を護ってくれた。私と共に在った……。貴方が望んでいたのはあんな姿じゃないんでしょ……？ ミラ……私は貴方を……誰よりも信じられるから」

「……戯言ね。まあいいわ、誰が相手でも同じ事よ。全員纏めて惨殺してあげるから」

ミラがうねる剣を振るうと、それはぐるぐると渦巻くようにして周囲に氷の領域を作り出していく。昴はその中に閉じ込められ、仲間達とは隔絶されてしまった。氷の結界に取り込まれた昴の背中を見つめ、シエルシは慌てて助けに入ろうとする。それを止めたのはやはりうさ子だった。

「うさ子！ 放して下さい……！ 昴がっ……！」

「……………今のミラちゃんを助けられる方法があるとするれば、それは昴ちゃんの“破魔”の力しかないの。シエルシちゃんにはシエルシちゃんの役割があるように、昴ちゃんにも昴ちゃんの役割があるんだよ」

「うさ子……！ では、私の役割とはなんですか！？ 私だって闘えます！ 私だって皆の仲間です！！ 魔剣は無くとも……心は常に共にあります！」

うさ子に食って掛かるシエルシ。そんな二人目掛けて迫る剣の姿があった。空から飛来したそれをシエルシは咄嗟に封印魔術で相殺する。だが、放たれた攻撃はシエルシと同じ……封印の剣だった。

振り返る二人の視線の先、そこには黒髪を靡かせるネーヴェエの姿があった。ネーヴェエ・ルナリア・ザルヴァトーレ……。シエルシの姉である女は大地へと降り立ち、風を受けてその髪を靡かせていた。

「ネーヴェエ姉様……！？ ど、どうしてここに……？ あれからどうしていたんですか……？ 私、てっきり姉様も……！？」

しかしシエルシの言葉はそこで途切れてしまう。ネーヴェエの隣に降り立った男の姿を見たからである。ネーヴェエの傍に立っていたのは 元帝国剣誓隊大将、オデツセイであった。一体どういう組み合わせなのか…… 困惑するシエルシ。だがそれが決している意味ではないという事には当然気がついていた。

「やあ、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ。皆お揃いで賑やかじゃないか」

「……大将、オデツセイ……！？ どうして貴方が……！？」

理解の追いつかないシエルシとは対照的にうさ子は既に臨戦態勢に入っていた。オデツセイを前にミストラルを構え、鋭い目つきで睨みつける。うさ子だけではない、ハロルドとホクトもオデツセイを囲むようにして戦闘隊形に入っていた。そう、彼が持つその“魔剣”を見れば、事情は大よそ掴む事が出来る。

「魔剣狩りに…… 皇帝ハロルドか。随分と怖い人に囲まれたものだ」

「ロゼから話は聞いてるぜ……？ どうも前に会った時からテメエは気に食わなかったんだ」

「貴様……やはりそういう事か。余が第三階層に降り立った後に召喚されたゼダン……そういう事だな」

「気づいていなかったとは意外だね。でもまあ……無理も無いか。それに貴方は勘違いをしている、ハロルド。私は別に貴方より後にゼダンになつたわけではないからね」

片手を腰に、もう片手で剣を握り締めオデッセイは首を擡げるようにして笑みを作る。その何もかもを見透かすような眼差しを前にホクトもハロルドも緊張した様子だった。だがシエルシにとってはオデッセイよりも気になるのはネーヴェエの方である。

「ネーヴェエ姉様、どうしてゼダンと一緒に……？ 姉様に何かあったんですか……？」

「……シエルシちゃん……貴方はまだ気づかないの……？ 私は別に、何かがあつてゼダンと行動を共にしているわけじゃないの。私は、最初からゼダンの一人なのよ」

「そ、そんな……？ 最初から……」

「シエルシちゃん、貴方には私たちの気持ちは判らないでしょうね……。私も、タケルも……。この世界に呪われた存在なのよ。だからこの世界を壊したかった……。『アニマ』さえ覚醒すれば、この世界はあつと言つ間に崩壊するわ。それこそ、まるで全てが夢か幻であつたかのよう」

ネーヴェエはシエルシへと歩み寄り、そしてその手を天に掲げた。周囲に浮かび上がる半透明の黒い剣。それはシエルシが扱う物と全く同じ、封印魔術である。違いが在るとすれば属性……。シエルシが光であるのなら、ネーヴェエは闇……。シエルシはそれに応じる形で止むを得ず魔術を発動した。

「ネーヴェエ姉様ッ！……！」

「少し、昔話をしましょうか……？ 誰にも邪魔されない場所で……二人きりで」

降り注ぐ黒き封印の剣。二人の姫は互いに剣と剣を衝突させる。相殺に次ぐ相殺の連鎖。二人の間で何度も何度も光が交わっては爆ぜた。一頻り攻防が終わったのを合図にネーヴェはふわりと舞い上がり、結晶の森の中へと舞い降りていく。シエルシは一瞬ホクトたちの事を気につけ、それから走り出した。

誰もシエルシを止める者は居なかったし、そんな余裕もなかった。シエルシにはシエルシの戦いがある……そう、彼女は己の宿命と向かい合わなければならぬ。うさ子もホクトもそんな事は承知の上だった。だがそれより何よりも、この最後のゼダンを相手にする事の難しさの方が問題だったのである。

「さて、これで漸く舞台は整った……というところかな？ 大罪を持つ者は全てこの場に揃った。後は全ての剣を私が回収すれば、アニマ復活の準備は整うだろう」

「貴様……。余の下についているフリをして、この機をずっと狙っておったのか」

「私はね、ハロルド。元々君の元に下ったつもりはない……。君が帝国を統べる事も、君がこの世界を守ろうとする事も、私はすべて傍観していただけだ。魔剣狩り、君の戦いも実に面白かった。良く出来た喜劇だったよ」

「テメエか……いつも俺たちの事を見てた“傍観者”は……」

「表舞台に立つのはあまり好きではなくてね……。君たちが“役者”ならば私は“演出家”といったところかな。私という存在も大罪という剣も、全ては物語の為の舞台装置だよ」

「アニメを復活させて、この世界を壊して……！ それで何がしたいの！？ うさたちは、そんな事望んでないのっ！！」

「ふむ……？ まあ、私に言わせればこんなものは暇潰しの一つだよ」

あつげらかと答えたオデッセイの一言に三人は驚きを隠せなかった。だがそれこそがオデッセイという男の本質である。別段、善悪や大義があつてやっていた事ではない。アニメが復活して世界が滅ぼうが、帝国が討たれて世界が混乱しようが、そんな事は別段興味の無いことなのだ。

オデッセイには目的と呼べる物が一切存在しなかった。彼は自分の為に何かをするという事を知らず、他人の為に何かをするという事を知らない。帝国にまぎれていたのは、そこが“特等席”だったから。ザルヴァトーレを滅ぼしたのも、“その方が面白そう”だったから。人々が苦しむ姿こそ彼の娯楽であり、その苦しみを踏破しようとする姿もまた彼の娯楽なのだ。

別段、アニメが復活しようがしまいが彼にとってはどうでもいいことだ。ただ、アニメが復活するかもしれないと騒ぎになれば、ホクトたちがエデンまで乗り込んでくると思った。そのほうが“面白そう”だったから、別段特に何か防衛策を敷く事もなかった。そして今はここがオデッセイの特等席。現実と最悪の敵に脅かされ、緊迫した表情を浮かべる彼らこそがオデッセイの最高の娯楽なのである。

「暇……潰し……？ 暇潰しって言ったのかよ、テメエ……」

「ああ。私はゼダンだが、別にこの世界がどうなるうと関係ない。私は既に時空を超える技術を持っているし、アニメを制御する方法も何となく検討はついている」

「馬鹿な！ アニマは決して管理できない存在だ！！ 何より貴様以外のゼダンが黙ってはいないぞ！！」

「ああ……他のゼダンならもう何十年前に全員始末してある。やつらはやつらなりに、この世界を護ろうとするさかったからね」

「な　ッ!？」

驚愕し、目を見開くハロルド。その表情を楽しむようにオデッセイは口元に穏やかな笑みを浮かべる。うさ子も、ホクトも、信じられない物と対峙しているような気分だった。目の前に居る男……彼こそが真の意味でたった一人ゼダンの生き残りなのである。

「野に下り、後は私の言うとおりに動いていた君は何も知らなくて当然だ。タケルやミラやネーヴェはゼダンだが……まあ私の手下という意味でゼダンであって、真の意味でのゼダンではない。既にゼダンという組織は形骸化し、私の私物となっているからね」

「それじゃあ……てめえがこの世界の絶望の原因だつていうのかよ」「その通り。この世界に魔物を増やしたのも……。帝国の戦力を増強させたのも。タケルやネーヴェを使ってプリミドールの戦争を長引かせたのも……。全ては私の計略の一つ」

「……ひどい……ひどすぎるの……！ どうしてそんな事が出来るの……？ どうしてそんなに笑っていられるの……!？」

「いや、その方が退屈しなくて済むからね」

オデッセイがそう笑った直後、ホクトとハロルドが同時に襲い掛かっていった。二人が繰り出す斬撃　だが二人の動きはピタリと停止していた。刃はオデッセイには届かない。ただ二人は目を見開き、何か信じられない物を見たという顔をしている。

「私はね……この世界に初めて君臨した六英雄の一人だった。アニマを封じた時も、丁度君たちみたいに正義感の強い仲間と一緒にだったよ。私は酷く退屈だったが……しかしアニマとの戦いはこう、燃える物があつてね」

オデッセイは身体を捻り、二人を纏めて蹴り飛ばした。すると二人の手の中から魔剣は瓦解するかのようにして消滅していく。何が起きたのか判らない　三人ともそんな顔をしていた。ただ不気味にオデッセイの持つ紫の刃が淡く光を放っていた。

「だが、アニマを封印してからは退屈の連続だった。なまじ死なない身体でね……。大罪同士で闘うように仕向けてみたり、この世界に魔剣をばら撒いて見たり……色々やったが中々面白くはなかった。だからまあ、アニマが復活して大暴れしてくれば胸が“すつと”するんじゃないかと思つてね」

「ふ、ふざけないでっ！　うさたちがどんな気持ちでこの世界を生きてると思つてるのっ！　皆がどんな気持ちで……どれだけ苦しんで、泣いて、ここまで来たと思つてるのっ！？」

「それがいいじゃないか。物語とはそうではなくてはならない。友情、努力、勝利……。三拍子揃った素晴らしい物語ではなかったかね？

“ロクエンティア”は

「ペラペラペラペラ男の癖にウゼエんだよ……。もう喋る

んじゃねえ、テムエは。そこを動くんじゃねえ、今直ぐブチのめしてやる」

「全く同感だ……。貴様だけは絶対に赦せん。ここまでコケにされたのは長い人生の中でも初めてだ……。死を以って贖って貰うぞ」

ホクトとハロルドが同時に立ち上がり、同時に魔剣を構築する。オデッセイはその姿を楽しそうに眺め、目を細めて笑みを浮かべる。淡く輝く刃を片手に、ゆっくりと前へ出た。

「さて……。賭けをしようか？ ゲームをしよう、諸君。ここで君たちが私を殺せば……。世界は少しはマシになるかもしれない。もつとも、ほんの少しだけだけでもね。世界は勝手に自滅の道へと進んでいく。私を倒した所で意味はないかもしれない。だが “赦せない” だろうか？ ならばその感情の赴くままに怒りを爆発させてみせてくれ。その感情の昂ぶりこそ、私にとって最高の麻薬なのだから」

終焉の鐘（3）

「 シェルシちゃん、貴方はとても真っ直ぐで……。とても良い子ね。私はそんな貴方の事が好きだった」

「ネーヴェエ……。姉様っ！！」

結晶の森の中、飛び交う二色の剣の姿があった。二人の封印の魔

術師は互いに全力を賭して腕を競い合う。それはかつて二人の母が二人に伝えた魔術。相手を傷つけず、自由と力だけを奪う魔術……。それが今は奇しくも二人の姉妹の決別を意味していた。

樹林の中、二人は結晶樹木を壁にしつつ攻防を繰り返す。既に何十回魔術を発動したかわからない。汗を流し、肩で息をしながらシエルシはネーヴェエへと目を向けた。

「どうして……どうしてなんですか、ネーヴェエ姉様……？ まさか、あの男に何かされたんですか！？ だったら、私たちと一緒に……っ！！」

「それは違うの、シエルシちゃん。私はね……自分の意思で望んで彼に従ったの。この世界を……壊す為に」

ネーヴェエが放った剣がシエルシに迫り、それはシエルシの作った剣を砕いて彼女の腕に突き刺さった。痛みはなかったが、そのたった一撃で腕の感覚がなくなってしまふ。まるで他人の物のように重くなった腕に焦るシエルシを前にネーヴェエは語り続ける。

「シエルシちゃん、私はね……ルナリアの血を引いていないの」

「え……？」

「ルナリアの正当な後継者は、シルヴィア・ルナリア・ザルヴァトーレと貴方……シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレだけ。私はね……貴方とシルヴィアの影武者なのよ」

「う、嘘……」

「嘘じゃないわ、そうやって育てられたもの。私の命は貴方達がい

ざという時、代わりに死ねるようにしてお母様が設定したもののな
よ」

「お、お母様が……！？ そんな……そんなことって……！？」

「お母様は優しくて聡明な女性だった……貴方はそう思っているん
でしょう？ でも実際は違うわ。彼女は帝国に抵抗する為ならばど
んな手段も選ばない冷酷な人間だったのよ。私は呪ったわ……。シ
ヤナクから最大の愛を受ける貴方とシルヴィアを。でも、私は身代
わりとして生きるしかなかった……他に生きる術なんて知らなかつ
たから」

更に放たれる一撃　それがシエルシの片足を貫いた。感覚を失
った足はまるで棒のようで、シエルシはそのままのめりに倒れて
しまう。傷は無い　だが、目前まで迫るネーヴェエに対して何も出
来なくなってしまう。

かろうじて反撃を放とうとする片腕も剣で貫かれ、シエルシはネ
ーヴェエの伸ばした手に抵抗する事もできなかつた。優しくシエルシ
の頬を撫でるネーヴェエ……。その表情は不思議と穏やかだった。

「知ってた……？ タケルも、ゲオルク兄様も……二人ともザルヴ
アトーレの王子だった　って」

「え………？」

「どうしてザルヴァトーレやククラカンは勝手なのかしらね……。
兄も妹も離れ離れにされて……。国と国とが争って……。私は何の
為に生まれてきたんだろうってずっと考えてた。そんな時に……気
づいたの。彼の……オデッセイの言葉で」

ネーヴェエは両手をシエルシの細い喉に向ける。白くしなやかな指がシエルシの喉に食い込み、ぎりぎりとして締め付ける。呼吸が苦しくなり、苦痛に顔をゆがめるシエルシ……。それを楽しげに見下ろし、ネーヴェエは微笑んでいた。

「私ね、これでも貴方の事……。好きだったのよ。大好きだった……。可愛い可愛い妹だと思って……。でも、やっぱり駄目。やっぱり私、貴方の偽者なんかじゃ満足出来ない……！」

「ねえ……。さ……。ま……。っ」

「シエルシちゃん、この世界はどうしてこんなに狂っているんだと思う？ この世界はね、成り立ちから全てが狂っているのよ……。だから全てを壊して、またゼロからやり直したいの。私は世界再生の女神になるの……。終焉は同時に再生の始まりでもある。私はそれで、私自身になれるのよ」

「ぐっ……。っ」

締め付けが徐々に強くなり、呼吸もままならなくなってくる。酸素を求めて喘ぐシエルシの姿をネーヴェエはうつと見下ろしていた。爪はシエルシの喉に食い込んで血を滲ませる。ネーヴェエは穏やかな表情のまま、狂気に心を委ねていた。“本物”を殺す事。他に生き残る術は考えられなかった。

「大好きよ、シエルシちゃん……。愛してる……。だから……。私の為には死んで……」

「あ……。っ……。っ……。っ」

「死んで……」

「ね……え……さ……。め……な……さ……」

「え？」

「ねえ、さま……。ごめん、なさい……。ごめん……。なさい」

シエルシは両目から涙を流し、謝罪の言葉を呟いていた。何故かそれに驚いたネーヴェエは手を離し、一步仰け反った。残った片腕を大地に着き、シエルシは激しく咽た。涙をぼろぼろ零しながら……姉の姿を見上げながら。

「シエルシちゃん、何を謝っているの……？ 私はこれから貴方を殺すのよ……？ なのにどうして……どうして謝ったりするの？」

「わたし……。何も知らなかった……。姉様……私、何も……うう……っ！ 全然わかってなかった……。！ 全然、姉様の気持ち……わかって、なかった……。っ」

啞然とするネーヴェエ。身体が恐怖から小刻みに震えていた。そう、“恐怖”。得体の知れないその感情にネーヴェエは困惑する。シエルシは泣いている。それはきつと自分の為の涙だ。そう思うとまるで身体が石になったかのように重く、一步も動ける気はしなかった。

「私、バカで……。世間知らずで……。姉様の事も、お母様の事も……この世界の事も何にも知らなかった……。何にも知らなくて……ごめんなさい……。姉様、ごめんなさい……」

「シエ、シエルシちゃん……。わ、私……」

「姉様は……姉様です。私の代わりなんかじゃない……。姉様は、優しくて……。姉様は……。綺麗で……。お願い、もうやめてください……。！一緒に帰ろう、お姉ちゃん……。？」

頭を抱え、ネーヴェは後退する。この後に及んでまだ シエルシは自分を赦そうとしている。国を滅ぼす事に加担した。シルヴィアが死んだのだから、その責任は自分にもある。この世界は混沌の中に埋もれ……。シエルシもその所為で酷く苦しんだだろう。胸を締め付ける良心の呵責。ネーヴェは壊れたように笑い、腰に下げていたサーベルを手を取った。

「シエ、シエ……。シエルシちゃん……。それは無理よ……。無理なの。私はね、もう沢山の人を殺してしまったの……。私はね……。オリジナルになるのよ。私は……。オデッセイが神になった世界で、女神になるの……。それはとても素晴らしい事なのよ……。？もう、誰も私を偽者だなんて呼んだりしないわ……」

「姉様……」

「ゲオルグ兄様だって、もう私たちの事を裏切らない……。何もかもを支配できる世界になったら、また皆で一緒に暮らせるわ……。きつと。今度は……。争いの無い世界に……。ふ、ふふふ……」

よろりと、ふらつく身体を引きずるようにしてネーヴェは歩き出す。片手には銀色に光るサーベル……。シエルシはそれを見上げ、悲痛な表情で全てを見届けていた。

「さささささようならららら、シエルシちゃん。わた、わたしは……わたしは……」

「好きに、してください。私は……抵抗しません」

振り上げたサーベルに映るシエルシの蒼い眼差し。真っ直ぐで、あらゆる真実に負けない力を持った瞳。それは凛々しく輝き、ネーヴェエの瞳にも映りこむ。

悲鳴にも似た痛々しい叫びが森の中に反響し、サーベルが振り下ろされる。シエルシは最後の最後までその一挙一動を見つめていた。全てをありのまま、受け入れる為。肉を裂く不気味な音と共に血飛沫が舞い上がる。シエルシは最後、ゆっくりと目を閉じて心の中に想い出を浮かべた。

シルヴィアと、自分と、ネーヴェエと……三人で一緒に暮らしていた過去。三人ともそれぞれ分かり合えてはいなかったのかもしれない。それでも笑い-in-っていた……幸せだった過去。きっとこんな運命でなければ、ずっとずっと続いたはずの過去。もう戻らない……過去の記憶を。

終焉の鐘（4）

「どうしたの、シエルシちゃん？ またシルヴィア姉様に怒られたの？」

在りし日の、ザルヴァトーレの宮殿……。そこには日の光が降り注ぎ、優しい水のせせらぎが響いていた。庭園の水路の前で膝を抱えるシエルシの傍、ネーヴェは一緒に座って笑顔で語りかけてくれた。

シルヴィアが厳しく強い姉であったように、ネーヴェは優しくシエルシを包み込むような姉であった。二人の姉は別々の強さと優しさを持つていた。シルヴィアはついシエルシを思う余り強く言い過ぎる傾向があり、シエルシはそのたびにへこたれてはこうして逃げ出したりしていた。

母が居なくなつた後、膝を抱えてへこたれるシエルシを慰めるのはネーヴェの役目だった。ネーヴェはいつも、どこにいても、どんな時でも……シエルシが泣いていたら傍に駆けつけてはその頭を優しく撫でてくれた。まるで母親のような愛情を、惜しみなく注いでくれたのだ。

「シルヴィアねーさま、きらいっ！ ネーヴェねえさまの方が、すきー……」

「こらこら、シエルシちゃん……だめでしょそんな事を言つては？ シルヴィア姉様も、貴方をいじめたくて厳しくしているわけではないのよ。全部貴方の幸せの為ですもの、仕方が無いわ」

「でも、シルヴィアねーさまこわいもん……。直ぐ勉強しろとか言うし……」

「そうね……。でも、貴方はやっぱりこの国の未来を背負う子だから……。私たちに出来る事は叱ったり、慰めたり……。そんな事だけだ。でも、貴方の事をいつも想ってる。大切な家族だものね……」

「……………シルヴィアねーさまはね、シエルシが剣の稽古してるとおこるの……。シエルシも、シルヴィアねーさまみたいに強くなりたいだけなのに。そしたら、シルヴィアねーさまを助けてあげられるのに」

「……………シエルシ……。貴方はとても優しい子……。とてもとても、可愛い私たちの妹ね」

膝の上に頭を乗せ、にこにこ笑うシエルシ。その髪をさらりと撫でてはネーヴェは様々な事をシエルシに伝えた。家族を愛する事……。誰かを信じる事……。悲惨なこの世界の中で、それでもシエルシに愛を教えたのは彼女だったのだ。今のシエルシがいるのは、ネーヴェのお陰だったのかもしれない。

どうして……。何故、こうも擦れ違ってしまうのだろうか。誰かに仕組まれていたから……。それもあるのかもしれない。でもこれは、きつとそんなに単純なことではないのだ。誰かの所為だとか……。そんな風に解決できるような事ではない。でも、“仕方が無かった”なんて言葉で片付けられるはずもない……。人と人が傷つけあうのは定めだったとしても、それでもそれは悲しすぎるから。身も心も引き裂かれるような、悲痛な想いに満ちているから。

血飛沫が上がるのを、シエルシは呆然と眺めていた。ネーヴェが振り上げたサーベルは、彼女の胸を深々と刺し貫いていたのだ。心臓を一突き。正にその言葉の通りである。口から血の泡を吹き、見開いた空虚な瞳から一縷の涙が零れ落ちる。目の前で崩れ落ちる

れは砂のように。ちょっとした心のスキマから零れ落ちてしまう。
大切な想い出の全て……。愛した日々記憶……。涙は止まらない。
止まるはずがなかった。ぎゅっと、ぎゅうつとその手を握り締めた。
指を絡め、きつく、きつく……。

「酷い……酷いよ姉様……。こんな所で死ぬなら……。死んでしま
うくらいなら……。私に何も知らないまま……。苦しまないようにし
てよ……。ッ！　こんなあんまりだよ……。！　こんなの、背負え
ないよ……」

「……。貴方は、背負わなくて良い……。本当は、心のどこかで死ね
る場所を探していたのかもしれない……。貴方に、知って貰えて……
。貴方に、泣いてもらえて……。こんなに幸せな事って、ないわ
……。」

「シルヴィア姉様もっ！！　ネーヴェ姉様もっ！！　貴方達はどう
してそう勝手なの！？　私、子供じゃないッ！！！！　子供じゃな
いよ！！！！　相談してよ……。！　もっと早く聞かせてよッ！！！！
！　もっと、もっと私を求めてよ……。死んでも意味なんかないよ
……。生きて……。生きる事が戦いなんじゃないの……。？　貴方達は
ッ！！　そうやって勝手に……。私をまた孤独にする……。ッ！！」

「……。ゆるして……。くれないよね……。？」

「ゆるさない……。絶対に赦さない……。死んでも、赦してなんか
あげないよ……」

その言葉で心の底から安堵したかのように、ネーヴェは安らかな
笑みを浮かべた。瞼が重くて仕方が無いと言わんばかりに、目はゆ
っくりと閉ざされていく。それが閉ざしきるよりも前にネーヴェの

鼓動は停止した。力なく、血によって滑る手……。シエルシは目をきつく瞑り、姉の顔に頬を寄せて泣いた。

「どうして……。どうして……。どうしてっ！！ どうしてっ！！
！！ どうしてええええええええええええええええええええええええ
ッ！
！！！！」

生きる事が失い続ける事ならば、もうこれ以上何も背負えないと思った。もうこれ以上前に進めないと思った。けれども何故か身体を起している自分がいた。バカみたいに進もうとしている自分がいた。

片腕片足で地べたをはいずり、前に進もうとする醜い自分が居た。ネーヴェは 最初からシエルシを殺す気なんてなかったのかも知れない。ただ、殺して欲しかっただけ……。それが叶わないのなら、ただ死ぬとき傍に居て欲しかっただけ……。歪んでしまった姉妹の絆、それはシルヴィアも、ネーヴェも、同じ事なのだ。

分かり合うつもりがあれば、きっと分かり合えたのに。もっと早くそれを知っていたら、支える事が出来たのに。腸が煮えくり返るほどに憎かったのはただ己の無力さだった。自分が子供だったから。バカだったから。何も護れなかった。何も救えなかった。愛する人の一人救えずにして何が人間。何が姫か。何が革命者か。

「うううううう……っ！ うううううううううううう……っ！！」

獣のような唸り声を上げ、泣きながら這い回る。木々の中で、神の国で……。それでも前に進む。痛みが滅茶苦茶に背中を押している気がした。自分への怒りが立ち止まる事を赦さなかった。絶対に強くなる。もう何一つ失わないくらい 強く、強く。

「 僕の……負けなの……？ 姉さん……」

焼け野原となった大地の上、タケルの四肢は無残に分解され、塵のようになつていた。エリシオンとガリユウを握り締めた腕は既に肉体から切り離された部分に転がり、タケルの肉体は生命維持が既に停止し、ガリユウの力でかろうじて生きながらえているだけだった。

再生が追いつかないレベルでの大魔術の直撃。防御も反撃も出来ず、一方的にタケルは無慈悲な炎に焼かれた。かつての弟を見下ろすミュレイ……。その瞳は赤く輝き、しかしやはり悲しみは隠せなかった。

「エリシオンは……？ 無限の魔力は……？ おかしいな……。僕は、最強になつたはずなのに……」

「……………エリシオンならば、ここにある」

ミュレイが拾い上げたエリシオンはタケルの腕とセットになっていた。その刀身には分解されたソレイユが突き刺さっている。無限の魔力はミュレイのソレイユに吸い取られ続け、今はタケルまで回らない状態にあつた。ガリユウの命のストックも既に尽き掛け、文字通り今のタケルは絞りカスだった。

「エリシオンを、取り込んだのか……。ソレイユは……。天敵だったんだね……。流石、姉さん……。強いや……」

「……………タケル」

「姉さん、覚えてる……？ ミラ姉さんがいなくなったあと……姉さんはいつも泣いてたよね……。僕は無力で……姉さんの涙を止めてあげる事も出来なかった……。魔剣使いになれたらよかったのに……そうずっと考えてた」

王子の交換制度を例外的に受けたタケルは、敵国で素性を隠して孤独に生きていた。そんなタケルに優しくしてくれたのがミラとミユレイの二人……。本物の家族として、共に過ごしてくれた。しかし彼には魔剣への適性がなく、ゲオルクやイスルギのように姫を護る事は出来なかったのだ。

「姉さんを護りたかった……。この世界を、変えたかったんだ……。でも……姉さんはやっぱり強いや……。姉さんは……やっぱり、僕の姉さんだ……」

「……この、ばかもの……。っ！ そんな事……。っ！ そんな事っ！ 当たり前じゃろう！？ 天地がひっくり返ったとしても変わる事の無い……！ 歴然たる、事実じゃ……」

「姉さん……大好きだよ……。大好きな姉さん……。どこで、おかしなっただんだらう……。僕……間違ってたのかな……？」

「ああ、間違いも間違い……。大間違いじゃ。お主がそんなになつてまで闘う必要なんてどこにも……。塵芥ほどもなかった。お主は……ただ居てくれるだけで……。よかった」

膝を着き、ミユレイはその両腕でタケルの残骸を抱きしめた。強く抱きしめすぎれば崩れてしまうその身体を、そつと優しく……。どんな姿になつても、どんなに変わってしまったても、変わらないものはきつとある。例えこの世界の誰もが彼を赦さなくとも、自分だ

けは赦してあげよう……そう思った。家族だと思った過去に偽りは無い。どんなに狂ってしまった運命の中にあっても、共に過ごした時間の価値は何も変わらない。

共に時代の中を生き、道や手段をたがえてもそれでもこうして巡り会った。敵同士として何度も悲劇を受けても……それでもこうしてまた巡り会ったのだ。どんなに残酷な世界の中に居ても、変わらない確かなもの……。ミュレイは微笑み、タケルもまた笑っていた。腕のない少年はミュレイを抱きしめ返す事は出来ない。だが……それでも気持ちは通じていた。

彼を正義とは呼ぶまい。だが、悪と呼ぶ事もしない。赦し、愛し、そしてその魂を背負っていく……。それがこの憎しみが連鎖する世界の中で大切な事なのではないか？ 今はそう思える。魔剣の支配から逃れ、今のタケルはとても穏やかに見えた。だから……少なくとも、“これでいいんだ”と思える。

立ち上がったミュレイは背後に立つイスルギの槍を借り、それを手にしてタケルを見下ろした。タケルは目を瞑り、そして穏やかに語る。

「さあ、僕を殺してくれ……。姉さんの手でなきゃ、死ねないんだ……。納得できない……」

「……。わらわは……。結局、お前に何もしてやれない愚かな姉だったな」

「それは違うよ……。姉さんは、最高の姉さんだ……。僕にとってかけがえのない……。たった、一人の」

目を閉じ、ミュレイは風を受けていた。何もかもが止まってしまえばいいのと思った。だが、背負わねばならないのだろう。これからこの世界で生きていく為に……。背負っていくしかないのだ。

握り締めた冷たい剣、それを掲げる。涙と共に貫く槍の一撃こそ、彼の魂への真の手向けだった。

穏やかな表情のまま消えていくタケル……それをミュレイは涙を流しながら見送っていた。やがて槍は大地を貫いた形のまま、タケルの姿は消えてしまった。震える背中をイスルギが抱きしめると、ミュレイの振るえる手から槍は落ち、小さく音を立てた。

「……良く頑張ったな」

「……何も……してやれなかった。何も……何一つ……」

「ああ……」

「何の為に……闘うのだろうか……？ 何の為に……生きて……。何の為に……死んでいくのだ……？ こんな事、誰も望んではいなかった……望んだ事などなかったッ」

振り返り、イスルギの襟首を掴み上げるミュレイ。止まらない涙をそのままに、悲痛な眼差しでイスルギを睨む。男はただ成されるがままにその拳動と感情を受け止め、妹を見つめ返す。今の彼に出来る事は、せいぜいその程度だったから。

「何故……！ どうして……！ この世界は……っ！！ わらわは……無力なのだ……！？ 弟一人救えないで……何が護れる……！ 何が救えるっ！！ この世界を救う資格なんてわらわにはない！ わらわには……っ！？」

その時、イスルギの平手がミュレイの頬を打っていた。己の顔に手を当て、項垂れるミュレイ。イスルギは今度は逆にミュレイの襟首を掴み上げ、顔を近づけていった。

「俺たちに出来る事は、嘆く事ではない……わかっているんだろう？ この世界の歪んだ運命を正す事……ただそれだけだ。“それしか”出来ないんだ。それだけが……死んで行った人間に対する贖罪ではないのか……？」

泣き崩れるミュレイをイスルギは再び抱き支えた。声を上げ、子供のように泣いた……。その涙の一滴が、一つ一つこの世界に染み渡っていく。絶望的な悲劇が連鎖するこの世界の中へ……。もしも、全ての罪を償う手段があるのだとしたら。だがきつと、それを選びはしないのだろう。罪を背負い、咎人として生きていく……。それこそがこの世界の人間には相応しいのかもしれない。

二人の頭上をガルガンチュアが通り抜け、戦闘の轟音が顔を上げさせる。戦いはまだ終わつたわけではないのだ。まだまだやらねばならない事は山ほど残っている……。イスルギは立ち上がり、そして空を仰ぎ見た。

「ここが正念場だ、ミュレイ。立ち上がり……進んでいこう。それだけが今の俺と君に出来る事なんだ」

「……………」

そつと立ち上がり、振り返るミュレイ。もうそこに弟の姿はなかった。だが戦いはまだ続いている。これからの自分にはまだ出来る事があるかもしれない。今救えなくとも、違う何かをこれから救えるかもしれない。ならばまた涙を流し絶望しない為に……。今は歩くべきなのだ。闘うべきなのだ。嘆くだけならいつでも出来る。だが今、この時、この場所でしか出来ない事がある。鉛のように重い足を一步、大地を踏みしめ感じる。まだこの世界に生きている。生きていくのならば。成さねば成らぬ事を、全て成すだけだから

終焉の鐘（４）

「貴方は私……。確かに私の後を継ぐ存在……。でも、何故私と一対一に持ち込んだのかしら？」

「自分なりのケジメ……。かな？ 私は今までずっとミラ・ヨシノの存在に助けられてきた。これからもそうだと思う。だから 私は貴方を解き放つ義務がある」

「貴方達は勘違いしているわ。私が欲しいのはホクトだけ……。邪魔をするシエルシを消せば別にそれでいいの。貴方には興味ないわ」

「そっちがそうでも、こっちはそうはいかないんだよ。ホクトはもうわかってるんだ。だからここを私に任せた……。君には判らないのか？ ミラ・ヨシノという存在が」

「まるで私より私を理解しているかのような口ぶりね」

「“そう言っている”んだよ 聞こえなかった？」

不適に笑う昴がユウガの力を解放し、銀色の光を放つ巨大な太刀へと変貌させる。それに呼応するかのように昴の髪も銀色に染まり、その瞳は紅く輝いた。

走り出した昴の速度は目で追う事すら困難なほど素早く、縦横無尽に氷の結界の中を駆け回る。それをミラはしなる剣、リヴァイアサンで追っていた。互いの反応速度は互角。動きは昴の方が早い。リーチでは圧倒的にミラに武があった。二人は高速で駆け巡り、刃を交える。一度、二度、三度とぶつかり合う度に火花が散り、二人の真紅の瞳が交錯する。

「君はミラなんかじゃない……！ ミラは……このユウガを持っていた彼女は、他人の為に己を犠牲に出来る人だ！」

「でも、それでは何も得られない。どれだけこの世界の為に尽くしても、人はまた裏切るわ。世界の運命がそう出来ているから」

「運命なんて言葉は物事が上手くいかなくてふてくされてる駄々っ子の言葉なんだよ。私は知っている。運命なんてものは存在しないって事を。在るのは己の進む道……それを決め、切り開く力だけだ」

破魔の斬撃が氷の世界を切り裂きながらミラへと迫る。それをミラは跳躍して回避し、リヴァイアサンを鞭からガトリングへと変貌させる。火を噴き高速で射出される弾丸。それを昴は時間停止の連続で防いでいた。

「私もそうだった……。私も、どうしようもないものを運命だと考えて逃げていた。自分は運命に逆らっているんだと言い聞かせて逃げたんだ。でも違った……。運命なんてどこにもない！ 私は自分で決め、誰の所為でもなく正義でも悪でもなく、自分自身の為に闘う！」

「……貴方　目障りね」

ガトリングが更に変形し、そこから閃光の矢が放たれる。昴はそれをユウガの一閃で両断した。背後で起こる爆発　その風に髪を鮮やかに靡かせ、少女は顔を上げる。

「己の罪から逃げようとしている時点で、君は自分に負けている…」。君はもう死んだんだ。君はもうどこにもいない。取り戻せるものなんてなにもない　！」

「いいえ、取り戻してみせるわ…！　愛する人を…！　愛する世界を…！　今度こそ、やり直してみせる…私の力で　ッ！　！」

二人もまた、良く似ていた。取り戻したかった物。間違えてしまった手段。誰かを大切に思う気持ち…。昴は傍に沢山の仲間が居た。間違ってもそれを正してくれる仲間が居た。沢山の経験があり、沢山の前進があった。数え切れない成長がこの世界であり、彼女は一回りも二回りも大きくなった。

心を閉ざし生きていた現実世界での日々…。ミュレイに甘え、怯えるだけだった日々。闘おうと決意し、失った日々…。取り戻そうと必死になり、それでもまた沢山の物を失った日々…。それから全ては決して無意味などではない。無理解や無秩序や、失敗や後悔は全て彼女の背中を押す力となる。前へと進む原動力となる。

ミラには傍に仲間が居なかった。彼女は間違いを正してくれる人がいなかった。だからこうして間違っただけ、間違っただけで、間違った姿で存在する。それは“不幸”だ。同時に自分は幸せなのだという証明である。存在の意義を　この場所に生きる意味を。今はもう迷ったりはしない。間違えたりはしない。誇りを胸に生きていける…。そう、今の北条昴なら。

「私は……罪深い人間だよ。私は間違っている……存在そのものが揺らいでいる。でもね　それでいいんだ。君もそう気づく事が出来れば何か違ったのかもしれない。どんなに醜い心でも……。どんなに目をそむけたくなるような自分でも……。そこに、確かに“心”がある　！」

降り注ぐ氷の嵐、それを剣の乱舞で斬り捨てる。舞う光の嵐。昂はそれを浴びて真っ直ぐに輝いていた。揺ぎ無い信念　自分を憎み、そして愛する心。揺るがない“ゆらぎ”……。矛盾し続ける自己。だがその全てをひつくるめ、今は信じる事が出来る。そう、その一歩一歩を。

「大切な物を護る為に、誰もが必死に生きている。闘っている！　君が間違いだなんて言わない。君が悪党だなんていわない。でも、それを認めるわけにはいかないんだ！」

「なんて身勝手な屁理……！」

「ああ、自分勝手さ……。でも、それでいいんだ！　そんな自分を引きずって背負って、憎たらしいって笑えればいいっ！！　私は君を切り捨てる！　至極個人的な理由でッ！！」

「なら、私も自分勝手にやらせてもらうわ……。貴方のそんな屁理屈になんて付き合ってられないもの」

氷の龍が出現し、それが口から光を放った。だが昂はそれさえも刃の一振りで消滅させてしまう。彼女の剣の軌跡は全ての断罪と浄化を意味する。ありとあらゆる魔と名のつく存在を一刀の元に切り払う破魔の力。昂は既にその力を完全に使いこなしていた。沢山の物を背負い、沢山の過去を背負い、今を走っている。

だから恐怖はない。怒りもない。悲しみはないし、ただあるのは無だけだ。駆け抜けるその一挙一動が極限の冷静さの中にあり、そしてそこから繰り出される一撃は神をも下す執行者の破壊である。剣でそれを受け止めたミラ……しかしその剣を両断し、ユウガは今だ余りある。

「さあ、試そうじゃないか。私の愛と君の愛、どちらが上なのかを……！」

再構築した剣にて打ち合うミラ。二人は高速で何度も刃を交え、氷の世界の中で激突した。衝撃が広がり、境界が崩れていく……。至近距離で見詰め合う二つの視線。それは互いの存在を決して受け入れず否定しようと、ただただ真っ直ぐに輝いていた。

終焉の鐘（5）

「この世界に、“神”など居はしない。この世界には罪と罰が満ち溢れている。在るのは人……ただそれだけだ」

オデッセイは剣を片手にふわりと空へ舞い上がる。それに呼応するかのようには大地は隆起し、白い砂を巻き上げて空を濁していく。雲は光を遮り世界からホクトたちを遠ざけようとしているかのようだった。

渦巻く膨大な魔力は大罪を持つ者の証。そう、それは原初から続く七つの滞在が一つ、最後の究極魔剣“幻魔剣ペルソナ”であった。紫色の光は周囲を照らし、空はその色を変える。ホクトたちが立っていた大地も剣の脈動に誘われるかのように競りあがり、変貌を遂げたその大地が彼らの最後の戦場だった。

「私はただこの散漫としている世界の中に一つの方向性を打ち立てたいだけだよ。ただこの永遠に等しい時間に娯楽が欲しいだけだ。“世界”の一つや二つ、なくなってしまうところで問題はない。重要なのは抗う人の美しさだ」

「オデッセイ……。テメエは真正正銘、最悪の敵だな……。ラスボスには上出来だよ。この世界を裏から操って、神様にでもなったつもりか？」

「神はいない。だが、造る事は出来る。そもそも神とはなんだ？ 全知全能なれば神なのか？ 命を操る術を持てば神なのか？ ならば私は答えよう。“我、ここに到達せり”！」

オデッセイがペルソナを空に掲げると、無限に湧き出す天使たち

がホクトたちへと一斉に襲い掛かってきた。ホクト、ハロルド、うさ子の三人は魔剣を展開してそれを迎撃する。だが世界をも飲み干すかのようなその悪意の濁流に吹き飛ばされ、三人は苦悶の表情を浮かべた。

「見たまえ、これが命の力だ。人間の力だよホクト君……。ハロルドが作った、“人造人間”^{ホムンクルス}の研究データ……。そしてケルヴィーが解析した蝕魔剣ガリユウのデータを手中に収めた私は、最早命を自在に組み替える事も容易いのだ」

「余の研究を……。!? まさか、貴様……。ツ!!!!!!」

「そう、彼らは人間でありながらホムンクルスでもある……。尤も、君が作ったホムンクルスのように中途半端ではないがね。ガリユウからくみ上げた“世界の根本”……。命の記憶から彼らにはそれぞれの完成を求めてある。素晴らしいだろう? これが君のネイキッドから奪った、本物のエクスカリバーだよ」

「ふざけやがって……。ッ!! ハロルド! うさ子オツ!! 細かい事は抜きだ……。! アイツを ぶっ殺すぞおおおおおおお おおおおッ!!!!!!」

ホクトの周囲に数え切れぬ剣が召喚され、それが空を多い尽くす天使を次々に射殺していく。ハロルドは鎧化したネイキッドの腹部の装甲を開放し、そこから黄金の光を放つ。うさ子がそれに続き射出した無数のミストラルの輪が雷撃を迸らせ、空に次々と爆発が起こった。舞い散る光の羽と阿鼻叫喚の中、光源を背にオデッセイは笑う。

「面白い……。やはり並の天使では相手にもならぬか。では、これな

らばどうかね？」

更にペルソナが輝き、空に無数の魔法陣が浮かび上がる。そこから現れたのは十二体の天使の姿だった。だがそれは先ほどまでの量産型とは違う。それぞれが見覚えのある魔剣を持った、白銀の騎士である。ホクトもうさ子もハロルドも、当然その意味には気づいた。気づいたからこそ……それを赦す事は出来ない。

「どうだ、素晴らしいだろう？ 私が数万年の時をかけて解析した七つの大罪……その模造品だ。ガリユウの中に記憶されている魂のデータが私に最後の素材を提供してくれたのさ。礼を言わせてくれ、ホクト君……そしてこの実験に付き合ってもらおうか」

「Sランク魔剣使いが……十二人も……？ うさたち、そんなの……勝てるの……？」

「勝てるかどうかじゃねえ。数の問題じゃねえ。偽者なんかには負けてやれるほど……俺たちが背負ってる物は軽くねえんだよ……！」

改めてガリユウを構え、黒き鎧を全身に纏うホクト。彼が空へと跳躍したのを合図にうさ子とハロルドも天使へと攻撃を開始した。十二体の影はぐるぐると頭上を一定のコースで規則正しく回転していたが、ホクトが接近したのを確認するや否や一斉に襲い掛かってくる。まず空から雷が落ち、爆発が起こり、巨大な剣を担いだ騎士が何人もホクトの身体を斬りつける。それをガリユウで何とか裁こうとするものの、余りにも数が違いすぎた。

「くそっ！？ こいつら……！！ 邪魔だ……退けえええええええええええッ……！」

「ホクト！ うさ子、ホクトを援護するぞ！ いくらガリユウがあるとは言え、あれでは くっ！？」

「ハロルドちゃんっ！！」

銀翼の騎士が二人、ハロルドへと襲い掛かった。巨大な剣が叩き込まれ、ハロルドは大地へと叩きつけられる。そちらに気をとられたうさ子の頭上から雷が降り注ぎ、光の槍が次から次へと飛来する。ミストラルの力で飛翔し、それを回避するうさ子。それに追いついてきた同じくミストラルを持つ騎士が左右から同時にうさ子へと襲い掛かった。

空中を疾走しながら戦いは続く。うさ子は左右から繰り出される挟撃に必死で絶えていたが、一発の蹴りが脇腹に減り込むとペーは一気に飲み込まれてしまう。左右から滅茶苦茶に殴られ、うさ子は結晶の樹林に墜落していった。

「それはエクスカリバーのような出来損ないの模造品ではないよ。一つ一つが限り無く大罪に近い力を持った武装だ。そして彼らは自我を持たず、剣の持つ欲望に忠実だ……。君たちのように理性を持たないから、力を無意識に抑制する事もない」

「うさ子！ ハロルド……くそっ！？ 死ぬんじゃねえぞ……！ 死ぬなよオツ！！！！」

次々と襲いかかる天使をガリユウで弾きながら前進する。その体中を剣が貫いたとしても男は死ななかつた。腕を切り落とされ、首を刎ねられ、足を縊られ、それでも男は前進する。腕をくれてやる代わりに足を、足をくれてやる代わりに腕を切り落としながら……。想像を絶する戦いがそこにはあった。不死身の怪物とそれに群がる翼を持つ怪物……。どちらも既に人間ではなかつた。血や肉をばら啄

ばまれながらも男は闘い続ける。その視線の先、常に頭上の“神”を睨んで。

「……驚異的な戦闘力だな。歴代のガリユウを持つ人間の中でも君は最強だよホクト君。まあ、あまりあっさりやられてしまっても面白くないのだがね」

「そこから動くんじゃないやねえぞクソ野郎……！　今直ぐこいつらを皆殺しにして　ッ！！！！」

ガリユウを片手で大きく振り上げ、闇の炎を纏った一撃で周囲を一気に薙ぎ払う。天使たちが一斉に怯み、悲鳴を上げる中その返り血を浴びてホクトは瞳を紅く輝かせた。

「　次はテメエをぶっ殺す！！」

「自惚れないほうがいい。彼らはまだ死んだわけではないのだから　ガリユウの直撃を受けて仰け反った天使たちも、直ぐに戦闘可能な状態に復帰する。そして次々に剣を構えてホクトへ突撃していった。四方八方から次々と剣が男の身体を貫き、ホクトは全身から大量の血を噴出し、気の遠くなりそうな激痛の中で歯を食いしばっていた。

　これまでも死にそうな戦いなんていくらでもあった。そう、別にこれが初めてじゃない。長い長い間、ただただ戦いだけを繰り返してきた。生まれてから今まで……いいや、きつと死ぬまでずっと……。

　ブガイにこの剣を継承され、そして一人でこの世界の中に放り出された。そこで数々の悲劇を経験し、沢山の人と出会った。失っては手に入れ、また失う日々……。それは彼の物で、そして彼の物で

はない。他人の住む世界　　自分には何の関係も無い世界。そう思っていた。

けれど、この踏み出す一步は確かに自分の物。この痛みも苦しみも、自分の物だ。誰かを愛し、守り、共に戦い、共に歩く事……それは他の誰のものでもない、彼の得た財産なのだ。空虚な人生などそこにはない。仮にこの物語が全て誰かに仕組まれたものだったとしても　それは彼が得たたった一つの誇りだから。

退かず、負けず、決して諦めず……。振り返ることなどもう必要はないのだ。きつと、還るべき場所を護ってくれる人がいる。自分を信じてくれる仲間達が居る。だから……負けるわけにはいかない。どんなに苦しい場面でも。どんなに絶望的なシチュエーションでも笑って剣を握るのだ。

そう、その一振りが希望を繋ぐ軌跡　。彼の心の闇こそが、この世界にとつての光　。吼える声は、喉を枯らして絞り出す声は、この世界に恐怖と絶望をばら撒く悪意……。だが、それこそが彼の得た力なのだ。

ありとあらゆる命を貪り食らいつくすその闇の剣を引っさげ、男はついにようやくここまで辿り着いた。神を気取った愚か者に裁きを下す為に　。ならば、剣を。ならば　ただ剣を。剣だけが存在の全て。世界に自分を示す事が出来る言葉。醜き争いの中に居てこそ、その力はより輝きを増していく。

ホクトの剣が天使を弾き飛ばす。切り払う。大罪を持つ剣士を相手にホクトは単身で恐るべき戦闘力を発揮していた。まだまだ本気ではない。ただ本気の出し方を忘れてしまっただけ。もっと早く剣を振れる。もっと強く剣を振れる。もっともっと反応出来る。もっと。もっと。もっと。

「……………どういうことだ？　どうなっている？」

思わずオデッセイが呟いた言葉……。それは眼下での戦いを意味

している。能力的には劣るはずのホクトが、たった一人で十人近い大罪を持つ魔剣士を相手に立ち振る舞っているのである。いくらガリユウが強くとも、あそこまで強力なわけではない。現に同じガリユウを持つタケルはミュレイに敗れたではないか。

否、そうである。そうだったのである。“あれでもまだ” 半分なのである。その可能性に気づいた時オデッセイは背筋がゾクゾクするのをハッキリと感じた。あの男はまだ全力ではない。なのにあれほどまでに強い。まるで付け入る隙のようなものがないのだ。絶対強固なその意志は、完全にガリユウを制御しきっている。故に 剣はその限界を超え、男の要求に応えるのだ。

火花散る、闇の乱舞。左右から、上下から、天使は次々にホクトへ襲い掛かる。だがそれをホクトは剣一つで薙ぎ払う。打ちのめす。叩き返す。轟音が、嵐のような剣戟の音が響き渡っていた。楽園の上に紛れ込んだ悪魔……あの男こそ、最強の魔剣使い。

その時、結晶樹林から光が立ち上った。舞い上がってきたのは白い翼を広げたうさ子である。その両手には片方ずつに天使の首を握りつぶすかのようにぶら下げ、冷酷な瞳でオデッセイを見つめている。それはうさ子ではなく 戦闘用の人格、ステラである事は明らかだった。鋭く無機質な視線がオデッセイへと突き刺さる。ステラは二体の天使の頭をぐりゃしと握り潰し、トマトのように飛び散った脳を指先から払って羽ばたいた。

「オデッセイ……貴方には判らないかもしれない。長い年月を生き……この世界の中で無限の命を持つ貴方には見えないかもしれない」
『でもね……うさたちは知ってる。この世界の人間は日々成長し続けている。それはこの世界の人間が持つ大いなる可能性なの』

「彼はその体現者……。人の罪を一新に背負い、それすらも放り投

げてしまうような、そんな雄雄しい剣の断罪者」

『うさたちは、一つになれるよ』

「私たちは、同じ世界を見つめる事が出来る」

『おまえには、それが出来ない！ おまえは 誰かと手を取り合う事で生まれる力の強さをしらない！』

「ホクトは一人ではないのです。貴方にも見えますか ？ 彼の傍に居る……彼と共に在るものの力が ！」

ガリユウは命を汲み上げる剣。死者の剣。記憶の剣。そこには彼が今日まで闘ってきたあらゆる魔剣使いの、関わってきたあらゆる人々の記憶が記録されている。彼は常に学習し、成長し、進歩を続けているのだ。ガリユウは進化を続ける剣。だからこそ最強。無限に等しい命を生きる者にとって、一日一日のなんと些細な事か。しかし、ガリユウはこの何万という時の中で。果てしない人の世界の争いの中で。それを学び、成長し、そして持ち主から持ち主へと継承されながらそのカタチを進化させてきた。ホクトの手の中にあるのはただの剣ではない。いわば 世界の生と死の歴史なのだ。

ステラは空中からホクトの傍に落下し、同時に天使を蹴り飛ばす。ホクトと背中合わせに二人は武器を構え、どちらからともなく頷き微笑みあった。こんな地獄のような戦場でも彼らは笑う事が出来る。追いついてきたハオルドの重い一撃が天使を頭から両断し、三人は並んで敵と対峙した。

「ステラか……！？ お前ら、自由にチェンジできるようになったのか！？」

「私がうさ子を認め、うさ子が私を認めた時点でそれは自在です。うさ子は貴方を助ける為に肉体の所有権を引き渡しました。私は彼女の想いに応えるまでです」

「……フン、見せてやれ魔剣狩り。貴様の強さを……。あらゆる者の心を救う、お前のその力を」

「ああ、言われなくてもやってやるさ。気にいらねえから叩き斬る……！ 赦せねえからぶつ殺す！！ かかってこいよ、森羅万象ツ！！ 俺と、俺の“死神”^{ガリユウ}が相手をしてやる ツ！！」

ずらりと並ぶ天使の向こう、オデッセイは目を細め静かに佇んでいた。言葉無き、無情の笑み。世界の敵は、予想しえぬ“異常”の登場を喜ぶかのように、ただ天の上より人を見下ろしていた……。

終焉の鐘（5）

「あれ！ ホクトたちが何かと闘ってる！！」

空を舞うガルガンチュアの甲板の上、アクティが遠くを指差した。その視線を辿り、近づいてくる天使を薙ぎ払いながらゲオルクが振り返った。

「……これはまた、すごい事になっているな！」

「こちらも、余所見をしている余裕はないでござるが……ロゼ殿、何とかならないのでござるか!？」

「どうせあれを倒せば終わるんだろ……!? ブリッジ! 障壁展開能力を抑えてもいい……! 主砲でホクトを援護するッ!！」

「主砲って……マジ?」

「マジだあああああああッ!!!! 全エーテルキャノン発射準備!! 目標 “あのへん” ツ!!!!!!」

ロゼの絶叫を合図に結界が消滅し、天使の攻撃が次々とガルガンチュアに降り注いだ。各部で火の手が上がり、それでも光の船は空を舞う。襲い掛かる天使をアクティが撃ち落とし、ロゼは切り払う。船は真つ直ぐにオデッセイ目掛けて突き進んでいく。

ガルガンチュアに搭載された四つの主砲が同時に火を噴いた。放たれた巨大な光の矢は空を焦がし、全てを蒸発させながら世界に明確なラインを敷いていく。横槍を食らった上空の天使たちは一斉に消滅し、その攻撃はホクトたちをも巻き込みかねない勢いで降り注ぐ。

「うおおおおおっ!? 俺たちまで殺すつもりか ツ!？」

走るホクトとハロルドの首根っこを掴み、ステラが翼を広げて空へ舞い上がる。四門の主砲は大罪を持つ天使達を業火で焼いてく……。続いて爆発が起こり、白い大陸は大きく燃え上がった。その頭上をボロボロになりながら墜落していくガルガンチュアを見送り、ホクトは苦笑して剣を構えなおす。

「サンキュー、ロゼ……！ お前はやっぱり最高だ！ 誰もお前を弱虫なんて言ったりしない……。お前は……砂の海豚の指導者だよ！」

「ガルガンチュアの露払いです。さあ、行きましょう魔剣狩り」

「ああ、行こうぜステラ……！ これが俺たちの……！！ 最強の共同戦線だッ！！」

走り出したステラは両手を黄金に輝かせ、雷を纏ったその拳で天使の身体を射抜く。砲撃で脆くなったその身体は一撃で崩壊し、ステラは次々に天使を叩き割っていく。ホクトはそれに続いて魔剣を一斉に放ち、逃げようとする天使の動きを封じた。

「行くぞ、ネイキッド……！！ 我が敵を薙ぎ払えッ！！」

黄金の鎧の瞳が輝き、変形を始める。それは巨大な剣となり、ハロルドを乗せてバーニアを吹かした。猛然と天使へと突っ込む巨大な刃。それは敵を貫き、粉碎していく。

ばたばたと倒れていく天使を脇目にオデッセイは風に吹かれて微笑んでいた。その男の前に三人の大罪の使い手が迫る。それぞれがそれぞれの目的の為に。そしてそれぞれが一つの目的の為に。

「素晴らしい力だ。賞賛に値するよ」

「貴方は私たちを少しばかり怒らせすぎました。覚悟はよろしいですか、偽りの神王よ」

「余の欺き、余の神聖な研究を悪用し……それは余と神に対する最高の侮辱だ。徹底して貴様をなぶり殺す」

「まあ言いたい事は色々あるが……さつさと死ね、くそつたれ」

「そういうわけにはいかない。私は　　まだまだ死ねないからね。我が最後の大罪の力を以って、君たちをお相手しよう。これが……私の万年の月日が作り上げた力だ」

ペルソナを掲げたオデッセイの周囲に紫色の光が広がっていく……。それは空間を歪め、空を虹色に染め上げていく。不気味で、見ているだけで吐き気がするおうなおぞましい景色……。その光が降り注ぐ場所でオデッセイは変貌を遂げようとしていた。

「私は全ての滞在を研究しつくし、その力をペルソナに取り込んだのだ……。これが　　世界を食い尽くす化け物、“アニメ”の力だ……！」

両腕を広げたオデッセイの背中に六つの剣が突き刺さり、それが光の翼へと変貌していく。　　。無数の魔法陣が浮かび上がり、その光の中でオデッセイは純白の衣装に包まれた。まるで天使……。いや、それこそ伝説の神のように。

「この力はまだ未完成でね……。君たちの持つオリジナルの大罪を得る事によって完成となるだろう。誇るがいい、人間よ……。君たちは新たな神の秩序の誕生の礎となれるのだよ」

「うっせえこのオカルト野郎ッ！！　　偉そうにいつまでも上から目線で喋ってんじゃねえ！　クソありがてえ話どうも……。　　でもなあ、そんなのはカルト教団でも設立してからやってな！！　　俺たちには……。ありがた迷惑なんだよオッ！！」

ホクトがガリユウを片手に走り出す。一斉に放たれた剣の雨は天から降り注ぐ光によって弾き飛ばされてしまう。オデッセイは翼を飛ばたかせ、光の像を残しながらホクトへと迫る。その剣の一振りにはガリユウのガードを貫通し、ホクトの上半身を一撃で蒸発させた。続けてその背後で啞然としているステラへと剣が迫る。ハロルドが鎧の騎士でそれを庇うが、それもまた一撃で破壊……。木っ端微塵に消滅してしまう。衝撃の余波はハロルドさえも切り刻み、王もまた驚愕と血の中へ沈んだ。そして剣はステラの胸を貫き、血飛沫が高々と空に舞った。

「ん……もう終わりか？ あっけなかつたな……」

血を流し、ステラはその場に両膝を着いて前のめりに倒れた。血は止まらない……。ナノマシンの再生能力を持つはずのステラの身体が再生しないほど、その一刺しで体組織の隅々に至るまで死が充満していたのである。横に倒れたハロルドもピクリとも動かず、ホクトは下半身だけを残して立ち尽くしていた。

「信じられない物を見た……という所か。それも無理はないな。だがこれが神の力……世界を終焉に導くアニマの力だよ」

「そんな、な……。大罪所有者が、三人がかりで何も出来ない……？ そんな事、あるはずが……」

そんなステラの頭を踏みつけ、オデッセイは楽しげに笑っていた。圧倒的な力の差……絶望的な戦況。“勝てない”……そんな言葉がステラの脳裏を過ぎった。戦場によくやくシエルシが現れたのは正にそんな時で、信じられない驚愕の光景に姫はただ打ち震えていた。

「少しばかり遅かったね、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……」

…。既に君の希望は潰えた後だよ。夢の残骸が散る景色の色合いはどうだい？ 中々どうしてオツなものだろう？」

「ゼダン……！ オデッセイ……！！！」

「残念ながら君には私に逆らうほどの力もないだろう？ 全ての大罪は私の中へと還り、真のアニマが復活する……。私は七つの大罪を操り、アニマを意のままに操るだろう。君にも見せてあげたいね。この世界が絶望的な力によって蹂躪され滅ぶ姿を……」

しかし、シエルシは既にオデッセイなど見ては居なかった。それが気に入らずオデッセイは眉を潜める。シエルシへと歩み寄り、足を引きずってやっと立っているシエルシを見下ろした。姫の目に……恐怖はなかった。真つ直ぐに睨み返してくる。それがとても不思議だった。

「……君は何故私を恐れない？ 君はまだこの状況において、何か奇跡が起こるとでも想っているのかい？ 残念だが、全ては終わったんだ。後は」

「立ちなさい」

またもやガン無視である。オデッセイは無言でシエルシを睨んだ。シエルシはオデッセイなど眼中に無いと言わんばかりである。その腕を掴み、強く捻り上げた。シエルシの腕など棒切れよりも脆く、容易く押し折れてしまう、その激痛に表情を歪め、それでもシエルシはオデッセイを意に介さなかった。

「立ち上がりなさい……」

「私を見る、シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ」

「闘いなさい……」

「……………君はどうかやら非常に愚かだったらしい。この状況が一切理解できないとは。一体誰に語りかけている？ この場に立ち上がる者がいるとでも」

「
いるんだな、これが」

シエルシの腕を掴み上げるオデッセイの腕、それを背後から掴む男の姿があった。上半身が完全に吹っ飛び、ナノマシンすら破壊するほどの強力な“死”を与えた……。だとこの数回の会話のやり取りの間に完全復活を果たし、ニヤリと笑う男が一人。

振り上げた拳がオデッセイの顔面に減り込み、神を名乗るペテン師は大きく吹き飛ばされた。その男をシエルシはただただじっと見つめていた。男は風の中髪を靡かせ、倒れたオデッセイを見下ろしている。

「……………馬鹿な。完全に破壊をし尽くしたはずだ。仮にガリュウの力を使っても、こんなに早く復活するなど……………」

「ごちゃごちゃうるせえよ。まだ何も終わってねえ。それより……………
良くも人の女に傷つけてくれたな。死んで詫びろよ　パチもん野郎」

ガリユウを再構築し、片腕で構えるホクト。もう片方の腕でしっかりとシエルシを抱きしめ男は真っ直ぐな眼差しでオデッセイを見つめていた。男は立ち上がり、蘇った男を睨む。そして問いかけた。

「貴様……貴様ら……一体何者なのだ……？」

二人は少しだけ呆気にとられたような顔をし、それから互いの目を見詰め合ってからオデッセイを見やった。そして笑いながら二人声を重ねていった。

「『世界最強のバカップル』」

風が吹き、終焉の鐘を鳴らす。物語の決着はもうすぐ目の前まで迫っていた。

終焉の鐘（5）（後書き）

くはじける！ ロクエンティア劇場く

祝、百部達成

うさ子「百部達成なのーっ！！！！！！ はあうはうううううう！！！！」

ホクト「いやーめでたいめでたい」

昴「すごいすごい」

うさ子「すごい棒読みなの！？」

ホクト「いやまあ……長く続きすぎだろ。そろそろ読者も飽きてくる頃だぜ」

うさ子「そ、そんな事ないのっ！ 読者のみんなはもう中盤くらいから常時ダレ続けているのに諦めずに読み続けてくれてるのっ！！ みんな心優しい読者様なのっ！！！！」

昴「それより作者が飽きてくる方が問題でしょ」

ホクト「しかし百部もあるとホント色々あったな……。どんなオチになるかで全ては決まるが、とりあえず皆こここまでご苦労さん」

昴「こんな長い小説に付き合ってくれてありがとう」

うさ子「うさはねー！ みんなみんな大好きなのーっ！！ はうはう

！ はっはっ！…！

ホクト「さて、ロクエンティアもいよいよラストスパートだ。ここから溜めに溜めたフラグを回収しつつ、怒涛の勢いでエンディングまで突っ走るぜ！」

うさ子「うさもがんばるのー！」

昴「……………で、百部記念に何かやらないの？」

ホクト「そんなもんやってる暇ねえよ」

うさ子「じゃあねえ、うさが皆の為に何かするの〜」

ホクト「いや……………いい」

昴「いいよそっぴいの」

うさ子「最近みんなが冷たい気がするの……………！？」

二人とも「……………ここでやるっていったらめんどくさい事になるだろ

」

うさ子「……………みんな、心がすさんじゃってるの……………。うさはねえ……………悲しいの……………」

ホクト「まあそんなわけで、あと十部くらいの付き合いだ。みんな、ロクエンティアを最後までヨロシク」

アニメ覚醒(1)

「……………ガリユウの能力を超えた超回復能力……………か。データにはない力……………それが成長というものか」

「それもあるけどな。男は自分の頭の上に限界なんてもんは作っちゃいけないんだよオデッセイ。てめえの頭の中にだけ天井作って喜んでろよ、バカが」

「根性論でどうにかなるものでもあるまい……………貴様、一体どうやって……………」

正面から睨みつけるオデッセイをホクトは無視し、怪我をしたシエルシの様子を気遣っていた。冷や汗を流しながらも気丈に笑みを浮かべて振舞うシエルシ……………それが逆にホクトの怒りを煽った。

燃える黒炎の光は彼の爆発しかけた静かな感情を体現している。ふつつつと煮えたぎる怒り……………。シエルシを置き去りに男は歩き出した。ガリユウと言う名の魔剣を肩に乗せ……………。

神を名乗る男とそれに反逆する男、この世界で最も強い力を持った男が二人、額と額をぶつけて睨みを利かせていた。渦巻く膨大な魔力……………。オデッセイが笑みを浮かべそれに応じるようにホクトもニヤリと笑った。

「勝てるとも思っているのかね？ この私に……………」

「勝てるとも思ってたのかよ？ この俺に……………」

「当然だ。勿論……………ああ、思っているとも……………！」

二人の男が同時に剣を振り上げる。激しく振り下ろされ打ち合う刃が二つ。何度も影を重ね、強く強く音を響かせた。力は圧倒的にペルソナが上回っている。打ち合うたびに崩壊するガリユウを高速で再構築し、ホクトはそれにと何か食らいついていた。

「この世界を終焉に導くにあたり、君は実に便利な道具だったよホクト君……！ 君はあらゆる争いを巻き起こし、それに無様に立ち向かってきた！ 世界が憎悪に満ちていくその最中、君は無関係なつもりであらゆるものを壊していたのだよ……！」

「……………チツ！ ベラベラ良く回る舌だな……………！ ああ、そうだよ！ 俺はどうせ嫌われモンだ！ 壊す事しか出来ねえ……………！ 闘うしか能がねえ！ でもな、男はそんなもんで丁度いい！ どうせ男は何かを生み出すのには向いてねえんだからなッ……！」

「私は万物を創造する力を持ち得た！ 君には到達できない世界に足を踏み入れたのだ！ 壊す事しか知らない君が、造る者である私に叶うはずも無い……！」

ペルソナの一撃で破壊されたガリユウ、その隙を穿つオデッセイの一撃。切っ先がホクトの胸を貫き、心臓を射抜く。だが男は口から血を吐きながらまだ闘志を失ってはいない。それどころか更に熱く燃え上がるかのように、ホクトの感情は前へ前へと猛り続けていた。

「どうした……………？ 俺を殺したいんだろ！？ この程度で創造神気取りとは笑わせるゼツ……！ テメエに何が出来る！？ さあ、証明してみるよ……………神の力ってヤツをなァッ……！」

その時、ホクトの背後から電撃が迸った。それはオデッセイへと直撃し、男は吹き飛んでいく。よろけて倒れそうになるホクト……それを支えたのは血まみれのステラであった。

「……………ホクト……………貴方はこんな時でも、決して諦めないのですね」

「当然だ。ちっと、待ってる……………。今アイツを……………ぶっ殺してくっからよ……………」

と、口では強がって見せるがその足取りはよろけていた。ホクトの肩を支え、ステラは優しく微笑んだ。そうしてその手をホクトの手に重ね、そっと指を絡める。

「貴方の可能性に賭けてみたくなりました……………。だから……………うさ子、貴方も力を貸してください……………」

目を瞑り、ステラは淡く光を放ち始めた。ミストラルの術式が刻まれたステラの太股が輝き、その光が失われていく。それに呼応するかのようにホクトの肉体は一気に回復し、そしてガリユウの術式は大きく拡大していく……………。

「こいつは……………ミストラルの術式……………？ ガリユウに食べさせようってのか……………!？」

「私は……………もう、闘えそうもありません。だから、貴方に……………。貴方なら、きつと……………。信じ、てる……………。だから……………ホクト君……………がん、ばって……………」

立ち上がり、電撃を受けても無傷だったオデッセイはホクトとス

吹き飛ばされるオデッセイへ剣が無数に放たれ、電撃が降り注ぐ。その猛攻を受け、しかしペルソナの一振りですら遠距離攻撃の嵐を無力化する。まだ、威力が足りない……。舌打ちするホクト、その背後から投擲されたものがあつた。

「ホクト、これを使えッ！」

「イスルギ……!? って、これガリユウと……エリシオンか!？」

「お主なら使いこなせるはずじゃ!! 大罪だろうがなんだろうが……お主は“魔剣狩り” ! その名の如く、神の力全てを使いこなして見せよッ!!」

ホクトの足元に突き刺さったガリユウの片割れとエリシオン……それをホクトは同時に引き抜き、分解してそれを取り込んだ。身体に刻まれる罪の術式……。爆発的な魔力が男の体内に流れ込み、激痛と同時に意識の混濁が発生する。

ガリユウが一つに統合されていく。本来彼が持つ力が、彼の中で溶け合い、交じり合い、一つの形へと変貌していくのだ。それを妨害するかのようにペルソナから紫色の閃光を放つオデッセイ……。だがそれは間に割って入ったネイキッドの鎧で防がれていた。

「使え、魔剣狩り……! 奴に勝てる可能性があるのは、最早貴様だけだ……! ネイキッドを……余の力を……! 貴様に、くれてやる……!!」

「行くのじゃ、ホクト!! 全てを終わらせる!! もう、これ以上悲劇を産み落とさない為に……!! お主が護るべき、“女”の為に……ッ……!!」

ネイキッドが分解し、無数の機械的なユニットとなってホクトの周囲に展開する。それに次々に放たれたソレイユの剣がドッキングし、黄金の炎を噴出す鎧となってホクトを護り固めた。足元に巨大な魔法陣が浮かび上がり、男はより強固に、巨大に、鋭く、そして密度を上げたガリユウを両手で握り締めた。

「ば、馬鹿な……！？ 生身の人間が……大罪の内、五つを取り込んだだと……！？ 耐え切れるはずがない！ 精神が崩壊するだけだ……！」

「……だから……勝手に……！ 俺の限界をオオオオオオッ！！ テメエが偉そうに決めてんじゃねええええええええええええッ……！！！」

ホクトの身体から光が放たれ、それが空へと立ち上っていく。莫大な魔力は一気に男の身体に逆流するかのようには収集し、ガリユウを今までとは違う形に変貌させていく。黒き大剣……それはより機械的に、生命的に、虹にも似た光を纏い、美しく……神々しく、力強く輝いていた。

「ば、馬鹿げている……。なんだこの魔力の収束は……！？ 永遠機関であるエリシオンの力か……それとも……！？」

「御託はいいからかかって来いよ……！！ そっちから来ねえなら……こっちから行くぞ！！ 輝け、ガリユウ……！！ あいつを……ぶっ潰せええええええええッ！！」

「う、うおおおおおっ……！」

虹の剣を担ぎ、男は猛然と突っ込んでくる。そして、それに負け

じと走り出すオデッセイ。神に限界まで近づいた男二人の激しい攻防が始まった。剣と剣が激突し、魔術と魔術が飛び交う。周囲の地形を破壊し変貌させながら、二人の男は戦いを続けていた。

エデンの大地を砕き、二人は空中で何度も交差する。ホクトの速度は最早目で捉えられるようなものではなく、オデッセイはそれに何とか対処するのがやっとであった。状況は明らかにホクトに傾きつつある……その事実にはオデッセイは戸惑いを隠せない。

「何故だ……！？ 万の月日を生きた私が……！！ 全ての大罪の力をコントロールしているはずの私が、押されている……！？ そんなことが……。そんな、馬鹿げた事が……」

「俺たちはなあ……！ 一人じゃ何も出来ねえ！！ 人間は皆誰かと繋がってなきゃ生きていけねえ！！ 何も出来ねえ無力な存在だ……！ けどどな、絆つてのは……どんなものでも乗り越える力になるんだよ……！」

「絆だと……綺麗な事を……！ そんな空虚な絵空事が現実に打ち勝てるはずがない……！」

「うっせえ馬鹿がッ！ テメエとは背負ってるモンの重さが違うんだよ……！」

「背負っているものならば私の方が重い！ 私はこの世界を背負っているのだ……！」

「世界だとかそんなもんはどうだっていいだろッ！！ 俺が護りたいモノはなあ……ッ……！」

ペルソナの防御を突き崩し、ガリュウの一撃が繰り出される。そ

れはオデッセイの身体を斬りつけ、血飛沫が舞い上がった。

「クソ生意気な団長が率いる、クソくだらねえ地味くマイナー海賊組織とかな……！」

「が……っ!?」

続けて剣を振り上げ、それをオデッセイへと叩き込む。目にも留まらぬ連続攻撃……体中を切り刻まれ、オデッセイは逃れる事も出来ずサンドバツクのようにただ一方的に斬りつけられるだけであった。

「やたら食うわりこれといって能もねえ、文字通りうさ脳の小娘……！ こえーこえーククラカンの姫と、その周辺機器……！ かつて一緒に闘った仲間……！ 気まぐれで拾った女の子！ それにやったら捕まりまくる、クソ頑固な馬鹿姫……！！」

大切なものなんて、なくなっと思ったとっていた。大切なものなんて、ないほうがいいと思っていた。

護りたくても失うばかりで、自分が何の為に存在するのもわからなかった。どこにも帰る場所はなくて、どんなに闘っても孤独が付きまとっていた。

居場所は無いと……そう殻に閉じこもり仲間に嘘をついた。誰も心の中に入れようとしなかった。信じようとしなかった。それでも戦いの中で少しずつ仲間が増えて、少しずつ打ち解けて……。氷が溶けて行くかのように、暖かさは少しずつ身に染み込んで行った。

自分の為に泣いてくれる人が居た。自分の為に笑ってくれる人が、怒ってくれる人が居た。それだけで十分だと思ったのだ。それ以上に必要なものなんかにもない。それがこの世界の全てに匹敵する。別に多くを求めなくていい。幸せだと思える瞬間があればそれ

でいい。

「下らない仲間達だ。どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。皆我侬で、個性的過ぎてどうにもなりそうもない。それでも一緒に歩いてきた。別に誰かがそうしようと言いだしたわけじゃない。自然とみんな、同じ道を歩いてきたから。」

「下らないと笑われてもいい……。それでも、俺は……この世界を愛してる。そうだ、皆を愛してる。あの女を　愛してる！ “愛”だ！　スゲエ言葉だろ！？　何だって出来る！　何だってやれる！　“愛”ってだけで、全てが限界を突破する！　俺は　この世界が好きだあああああああああああッ！！！！！」

もう会えないと思っていた妹と再会できた世界。何も無い自分に居場所をくれた世界。大切な仲間達をくれた世界。自分を愛してくれる人に出会わせてくれた世界。世界、世界、世界……。全てを奪った世界。でも、世界は全てを与えてくれる。

万物には与えられた刹那がある。運命とは存在しない、ただの逃げの言葉なのだ。全ての物に平等に選択肢があり、平等な力がある。生まれ持った物だけが全てではない。勝ち取った物だけが全てではない。失ったとしても、得たとしても、それでも世界は与え、奪い、それを繰り返す。

剣はオデッセイへと深々と食い込んでいた。しかしオデッセイは最後の気力を振り絞りそれを弾き返す。体中から血を流し、空に浮かぶ二人……。その狂気的な様子は崩れていくエデンを背景に、より非現実的なエッセンスを加え、まるで神話のページを見ているかのようだ。

「素晴らしい力だ……！　それが……魔剣を司る思いの力か……！」

「頭ガンガンいてえ程に伝わってくるんだよ……。うさ子の……ハ

ロルドの……ミュレイの……！　そこにタケルとシルヴィアを加えてやってもいい！　皆の熱いハードが、俺に戦えと叫んでいる！」

「では、私もその想いに応じよう……！　ペルソナの真の力を味わい、無間地獄の中へ落ちるといい」

ペルソナの輝きが周囲を飲み込んでいく。それを防ぐ先手必勝ホクトのガリユウがオデッセイの首を刎ね飛ばした。だが……手ごたえがまるで無い。オデッセイの死体はぐにやりと溶け、まるで粘土のようにうねっている。

突如、ホクトの身体中を襲う激痛。見れば全身を数え切れなほどの剣が貫通していた。天地が逆転し、頭から大地に落下していく……。見る見る大地が近づき、頭部がぐしゃりと潰れた。だがまだ意識がある……。ホクトは頭がつぶれ、脳がぶちまけられた自分の身体を俯瞰していた。

理解の及ばぬ不気味さと極限まで引き伸ばされた激痛に悲鳴を上げなくなるが、しかし既に声帯が機能していない。喉を食い破って現れたのはぞろぞろと群れる黒い虫だった。ホクトの身体をむしゃむしゃと食い破り、虫は体内から次々と増殖し続ける。

余った肉体を無数の茨が絡めとり、そしてその茨はどこからともなく発火する。身体は灰となり、風に舞った。そのミクロの一粒一粒に感覚があり、ホクトは言葉に出来ない絶望的な気持ち悪さに喘いでいた。

身体がなくなっていく……。いや、もうそれは人間だとは言えない。灰は大地に降り注ぎ、大地からはホクトの腕や、足や、眼球や髪の毛や、脳味噌の一欠けら一欠けらが生えていく。奇妙な光景だった。そしてそれは驚異的な速さで成長し、肉体は大地の上でぐらぐらと揺れる。

絶叫したかった。しかしそうする事すら赦されない。そのまま何年も何年も月日が過ぎ去り……。大地はホクトの肉で出来た樹林に覆

われていた。その頃になると既に意識は限界まで磨耗し、自分が何をしているのか、そもそも自分がなんだったのかもわからない。ただそこに在る景色を俯瞰し続ける……そうして月日が何百年も流れた。　　ような、“気がした”。

「　　っはあ」

ホクトは空中に浮かんでいた。普通に浮かんでいる。先ほどまで意味不明の経験をしていたかと思えば、今度は普通に浮かんでいる。夢でも見ていたのか……だがそれにしても余りにもリアルな、余りにも気が遠くなるような夢だった。まだ意識がはつきりせず、各神経の接続がカットされたかのように身体が自由に動かなかった。視線の先、オデッセイは小さく笑みを浮かべている。ペルソナの光は無慈悲にホクトを絡め取るうとしていた。

「……おや、先ほどまでの勢いはどうした？　ペルソナの夢はそんなに強烈だったかな？」

「……………ゆ……め……………？」

意識がはつきりせず、いまいちオデッセイの言葉の意味が理解出来なかった。そう、幻魔剣ペルソナの真の能力……それは超強力な、相手に対する催眠なのである。

先ほど見せられた幻覚は完全にホクトの五感を支配した。そしてありもしない幻想を見せ付けられたのである。だがホクトの肉体はそれを現実だと認識しており、故に脳も麻痺しているし肉体も命令が行き届かないのだ。だからと、ただ空に浮かぶホクト……それを遠巻きに眺めてオデッセイは笑う。

「君は強かった……だが、私のペルソナだけはオリジナル……。君

の持たない力だ。君にこの幻想を　踏破する力はない」

次の瞬間、ホクトは何故か全身血まみれになっていた。その目の前にはガリユウが突き刺さったミラが立っている。ミラの身体はポロポロと崩れ去り……そして拭い去れない剣の感触だけが残った。

「や、止める……」

振り返れば剣を突き刺され、バラバラに引きちぎられたうさ子の死体がある。ホクトは闇の中、涙を流しながらそれから遠ざかっていく。

「俺のせいじゃないんだ……」

炎が巻き起こった。気づけば子供の姿になっていたホクトの周囲、人々が焼け死んでいく断末魔が響き渡った。少年は耳を塞ぎ、その場に膝を着いた。

「俺のせいじゃないんだ……！　しょうがなかったんだっ……！」

地下深くの牢屋の中、服を引き破られて複数の男に陵辱されるシヤナクの姿があった。それをホクトは牢屋の向こうで見ている事しか出来なかった。

「俺は護ろうとした！　助けようとしたんだっ……！！　でも出来なかった……仕方なかったんだ……！」

「本当に……？　本当に仕方がなかったのか……？」

振り返るとそこにはもう一人のホクトの姿があった。ホクトは血

に染まったガリユウを握り締め、引き裂かれたシャナクの死体を踏みつけている。

「シャナクを殺したのはお前だ」

「違う……！ シャナクが殺せと言ったんだ！」

「お前は自分の母親のように思っていた彼女が見ず知らずの男に犯されるのを見て失望したんだ。だから殺したんだろ？」

「違う　！」

「お前は寂しいヤツだよ……。母親の愛情も知らず、マンホールの下で暮らしてきた……。父親のように思っていたブガイにも逃げられ、母親はあんなザマだもんな」

「……………俺は……………俺は、孤独なんかじゃない……………」

「お前は家族からも疎まれていたじゃないか。本当は昴の事だった重荷で仕方がなかったんだろ？ 昴を殺そうとして……………しくじったからビルから堕ちたんだろ？」

「違うッ！！」

ビルの屋上、二人は立っていた。昴は突然背後からホクトへと抱きつき、強い力で死へと導いていく。それを振り払った瞬間、昴は笑いながらビルから落ちていった。ぐしゃりと、肉が爆ぜる音が響く。下は……………見る事が出来なかった。

「お前は本当は死にたかったんだろ？ もうウンザリだったんだろ

「？」

「俺は昴を護りたかったんだ……」

「でも、護れなかったのよね？」

振り返る。雨が降りしきる荒野の中、ミラがじっと見つめていた。優しい声で、ホクトに微笑みかける。それすらも恐ろしく、男は震えながら後退した。

「護ろうとした……護ろうとしたんだ。来るなって俺は言った！
なのにお前が勝手に割って入ったんだ！！」

「そう……。そうやって責任を他人に転換するのね。貴方はいつも
そう……。正面から私と向き合った事なんて一度もない」

「……やめてくれ……！」

「貴方は自分を真つ直ぐに見られる事が恐ろしくてたまらないのよ。
憎しみに満ち溢れ、壊す事しか知らない世界を呪った存在……。その
醜さを見透かされたくないのよ」

「もう、やめてくれ……」

「貴方は哀れよ……」

「頼む……。もう、やめてくれ……」

「貴方は……。本当に、哀れな人」

暗闇の中、ホクトは一人きりで立ち尽くしていた。一步も動く事が出来なかった。もう、誰も彼を責める人間はいない……。だが、歩く事は出来そうになかった。ただもう……。静かに終わっていくだけだった。

そんなホクトの背後、歩いてくる誰かの足音が聞こえた。振り返る事も怖くて耳を塞いだ。けれどその肩をそっと叩き、誰かが優しく抱きしめてくれた。そっと振り返る。そこには……。白い影があった。ただ、白い……。とても白い影があった。

「もう、いいんだ……。俺に、皆と一緒にいる資格なんてない……。俺は……。俺は、世界を憎んでいた。恨んでいた。何もかもぶっ壊したかった。でもそうする勇気もなかった……。俺は、臆病者だ……」

貴方は、孤独なんかじゃありません

どこか、遠くから声が聞こえた。突然闇の中に光が走る。凍えた魂に火が点る。エンジンが回り出す。その声一つで、目を覚ます事が出来る気がした。

「貴方は……。！ 貴方はこんな所で負けるような人じゃない！ そのうでしょう……。！？ ホクト……。！ ホクトオオオオオオオオオオ
ッ！！」

目を見開き、男は剣を握り締めた。幻想の闇が崩れ去り、ホクトは光の降り注ぐ空に戻ってきた。頭上を見上げると、エデンの浮島から大声で叫んでいるシエルシの姿が見えた。もう目が覚めたのに、

まだぎゃあぎゃああ何かを喚んでいる……。苦笑を浮かべ、男はしっかりとした視線でオデッセイを捉えた。

「……ペルソナの幻想を……!? ならばもう一度……!」

「もう同じ手は効かねえよ」

剣を一振り それは、過去を振り払うイメージ。闇を打ち砕くイメージ。それは幻覚の光を拒絶する光……。真上に、戦いを見ている人がいる。愛を注いでくれる人が居る。負けてしまったら格好がつかない。ここでやられたら好きな女にいい格好が出来ない。だから、前へと進む。剣を振り上げる。そうだ、何もかも等しく自分なのだ。それをひっくりくるめて愛を与えてくれる……。そんな人の為に。今は何もかもを忘れて馬鹿になろう。カラツポの頭でただ、この終焉を駆け抜けよう。

「終わりだ……オデッセイ!」

「馬鹿な……!? そんな事、あるはずが ツ!？」

その身体をガリユウが鋭く斬りつけ、オデッセイは落ちていく。
。遙か彼方、次元の狭間まで……。ホクトはそれを見届け、そして静かに目を瞑った。

「……俺は、弱い。でもな……強がりでも、いいだろ? それでも……誰かを愛しても……。いいよな ミラ……?」

オデッセイの断末魔の声を聞きながらホクトは空に舞い上がる。そうして愛する人が待つ場所へと降り立ったのだ。白い光が舞うその大地の上、シエルシは両目に涙をいっばいに溜めてホクトへと飛

びついてきた。もう二度と離さないといわんばかりに、傷だらけの胸に顔を押し当てて……。

「ホクト……！　ホクト、ホクト……！」

「……あいよ」

「ホクト……よかった……。生きててくれて……。よかった……」

「おう」

「信じてた……。貴方なら、負けないって……。絶対に勝つって……私……」

「当然だろ？」

「ホクト」

二人は見つめ合い、ホクトの指先がシエルシの涙を拭った。二人は強く互いの身体を抱き閉めあう。心を重ねる……。光が降り注ぎ、世界が二人の愛を祝福しているかのようにだった。

目を閉じ、ホクトは思う。自分の存在の否定……。苦悩……。孤独……。これまで様々な事があった。だが、今は彼女を護る……。ただそれだけの為に生きている。これからも、ずっと……。

「……さあ、帰りましょう……。ホクト。皆が待っています」

「ああ、そうだな。ハラもへったし……。きつとつさ子がおなかぺこぺこなの〜って待ってるぜ」

「ふふふ……そうですね。それじゃあ、私が特訓した料理の腕を披露してあげましょう」

「それは……戦闘の後にはチト厳しいぞ……」

「むー……。それはどういう意味ですか？ 全く貴方は本当に、意地の悪い……あっ」

「ん？」

シエルシは無言でホクトを突き飛ばした。よろめき、首をかしげるホクト。その脇を鋭い刃が通り抜け、シエルシの胸を貫いた。何が起きたのか判らないホクトの目の前でシエルシは血を吐き、身体を震わせながら微笑んだ。

「……………よか、った……………」

そうして刃が引き抜かれるとシエルシの身体はふわりと崩れ、仰向けに倒れた。ホクトはその身体を抱き留め……ただ目を見開き目の前の受け入れ難い現実を見つめ続けていた。

アニメ覚醒(1)

「シエルシ……？ おい、しっかりしろ……シエルシ！」

しかし、シエルシは何も反応を示さなかった。瞑った瞳から涙が

して世界は 滅びの時へと動き出すのであった。

アニメ覚醒(2)

「目覚めた……。彼が……！」

昴と斬り合っていたミラがそう呟き、後退する。それと同時にエデンの空に黒き光が立ち上り、遅れて激しい衝撃が走った。昴は剣でそれを受け止め、ミラもまた同じように衝撃の元へと目を向けていた。

「目覚めた……？ 何の事だ……？」

「ふふ、彼が覚醒したのよ。もう誰にも止められない……。私の願いは、これで叶う！」

剣を収め、ミラは結界を解除すると素早くその場から引き返していく。昴も同じく刃を収め、黒き光の方角を見やった。ミラの事も気にかかるが、今はそれよりもあちらの方が問題である。

今までも様々な強敵と戦ってきた昴だったが、これほどまでに邪悪な力を感じたのは……。これが“二度目”だった。視線を凝らし、森の向こうを捉えようとしてみるがそれは叶わない。だが……。目で見えずともはつきりと感じ取れる物がある。

何か、これまでに以上によくない事が起ころうとしている。虫の知らせにも似た悪い予感に急かされ、昴が走り出したその道の向こう……。黒き翼を広げ、ガリユウを片手に佇むホクトの姿があった。その傍らには血に染まったシエルシが倒れ、そしてオデッセイが笑う。

「ホ、ホクト君……？」

「ど、どうなったのじゃ……?」

「ホクト君、シエルシちゃんが……!?!」

ふらふらと起き上がり、傷だらけのうさ子はホクトへと歩み寄った。しかし次の瞬間　ホクトは歩み寄るうさ子へと剣を繰り出したのである。放たれた斬撃はうさ子の身体を傷つけ、血飛沫を舞わせる。誰もが啞然とする中、間に割って入ったのはハロルドであった。

振り下ろされたガリユウがハロルドの肩から深々と食い込み、腕を落として足へと食い込む。ただ震え、うさ子はそれを見ている事しか出来なかった。彼らは既に大罪所有者ではなく、魔剣使いでさえないのだ。七つの大罪の内、五つの力を手に入れてしまったホクトを前にして出来る事等何一つ無い。横に薙ぐ闇の一閃がハロルドの上半身と下半身を切断し、うさ子の身体にばたばたと血が滝のように流れ落ちた。

「　　まずは、一人」

それはホクトの言葉ではなかった。彼はこんな風に冷たくは笑わないし、視線にはもつと熱が籠っていた。うさ子は本能的な恐怖に駆られ、背筋がぞくりとするのを感じる。そして痛みと疲労の余り気を失い……ハロルドの亡骸の上にはたりと倒れこんだ。

次に動き出したのはミュレイ、そしてイスルギであった。ホクトは黒き竜巻となり、凄まじい勢いで大地を砕きながらミュレイへと迫っていた。しかしミュレイも大罪を既に持たず、ただの魔術師に成り下がっている。繰り出される龍の一撃、それを受けたのはイスルギの盾だった。

「逃げるミュレイ！ こいつは違う……！ 俺たちの知っているホクトじゃない！」

「イスルギ……！？」

「邪魔をするな……。まあ、この程度 邪魔にもならないがな」

身体を捻り、ホクトは再び剣を放つ。その破壊力は一撃でイスルギの盾を粉碎し、蒸発させてみせた。剣は猛々しく荒れ狂い、吼える。そして口を開いたガリュウがイスルギの胴体に喰らいつき、そのほとんどを噛み千切ってしまった。

胴体を失い、血を吐いて倒れるイスルギ。ミュレイはそれを見届けるより早く魔術を発動する。だがその指先をホクトのガリュウが切り落とし、続けてその両足を切り払った。

片腕と足を失い、ミュレイは白い大地の上に倒れこむ。その頭に切っ先を突きつけ、黒き魔剣使いは静かに佇んでいた。何も出来ない。早すぎて何も見えなかったし、強すぎて防御も出来ない。目の前にいるのは確かにホクトなのに、彼はもう何かが決定的に違ってしまった。

「指先一つで数多の魔術を操る炎魔の姫と言えども、そのご自慢の腕が無くては何も出来まい」

「ホクト……貴様……」

「……勘違いをするな。俺はホクトなどではない。俺は ヴァン・ノーレッジだ」

振り上げた刃 それが黒く煌いた刹那、ミュレイを守ろうと間に割って入ったのは昴であった。昴のユウガとホクトのガリュウ

黒白の魔剣が激突し、魔力の波動が拡散していく。昴は足を失ったミュレイを片腕で支え、後退する。その身体は既にたった一度の切り合いで何度も切り付けられ、白神装武は砕けようとしていた。鎧があっただので、たまたま生き残れた……ただ、それだけの話である。

「兄さん、何をやっているんだ！　これは……これは全部兄さんがやったことなのか!？」

「お前に兄さんと呼ばれる筋合いはないが……成程、白騎士と奴は血縁だったか。道理で似た力を放つ」

「昴……逃げる。奴は……大罪を五つ、取り込んでいる……。奴に、ユウガを渡してはならん……」

「大罪を……?」

男の身体は無数の魔方陣で覆われ、ガリユウは今までにない形に進化しようとしていた。渦巻く黒き波動……ただ立っているだけで全身に汗がじつとりとにじむような、そんな気迫……。昴は立ち上がり、ミュレイを支えたまま男を睨み付けた。

「破魔剣ユウガか……。渡してもらおうか。それは俺の理想の為に必要な力だ」

「……渡すわけにはいかないな……。お前が兄さんではないというのなら……彼が守ろうとしたものの為にも、渡してやるわけにはいかない」

そう凄む昴ではあったが、状況はどう考えても最悪以外の何者で

もなかった。昴はミュレイを抱えるために片腕でしか戦えないし、そのミュレイも瀕死の状態である。見ればほかの仲間も既に致命傷を負っており、助かるようにはとても見えなかった。だが、諦めるわけには行かなかった。もう後ろ向きに、絶望から逃げ出したくはなかった。ただ　自分が納得出来る、自分が愛せる自分で居る為に。

「す、素晴らしい力だ……。流石は憎悪の権化、ヴァン・ノーレッジ……。やはり、貴方は我等がアニマの新たな器に相応しい……」

よるめきながら、血塗れのオデッセイがホクトへと……。否、ヴァン・ノーレッジへと歩み寄っていた。戸惑うホクト、そしてヴァンは振り返りもしない。オデッセイは既に致命傷を負っており、いつ事切れてもおかしくないような状態だった。そんなオデッセイに昴は一か八か声を飛ばした。

「オデッセイ……。兄さんに何をした!!」

「か、簡単な……。事だよ。ククク……。！　私は、ガリユウを……。ヴァン・ノーレッジの魂を調査したのだから。ペルソナの暗示で、別人格を表に立たせる事など容易い事……」

「ペルソナ……。？　別人格……。？」

以前、ホクトは一度帝国に捕らえられた。そこで強力な封印措置を施され、彼の魔剣と肉体は帝国によって調査し尽くされたのである。それにより、彼の肉体の中には本来のヴァン・ノーレッジという人格と、異世界から召還された精神だけの存在、北条北斗が存在する事が判明したのだ。

ヴァンの意識はガリユウに飲み込まれ、既に一つの人格としては

機能しないレベルにまで薄まってしまっていた。それもすべてはステラと昴による魔剣狩りを倒そうとしたあの作戦の影響である。精神そのものを再構築する情報である烙印を破壊され、ヴァンの精神は完全に崩壊したのだ。

「だが……彼らは既にいわば情報の集合体……。断片化したヴァンの意識をペルソナの暗示でサルベージし、一箇所に固定する……。これは、ハロルドが残した研究成果だよ」

「兄さんは……北条北斗はどうなったんだ？」

「さあ……？ 最愛の女を目の前で殺され、絶望に打ちひしがれ心を閉ざした彼の人格に最早ヴァンを退ける事は不可能……。今度こそ、彼がガリユウになってしまったのでは？」

「そ、そんな……」

見ればシエルシは胸から血を流し倒れている。うさ子も、ハロルドも、イスルギも……ミュレイも。すべては彼一人おかしくなってしまうただけで、何もかも狂ってしまった。昴は改めてユウガを握り締める手に力を込めた。

「さあ、魔剣狩りよ……！ 思う存分その世界への憎しみを振りまき、ありとあらゆる世界に終焉を齎す新たな神に……！？」

次の瞬間、オデッセイの肉体は切り裂かれ、ガリユウによって食いちぎられていた。それによりついに幻魔剣ペルソナさえもがガリユウの一部となり、吸収されてしまう。七つの大罪と呼ばれる力のうち、六つをも手にしたヴァン……。残す神の断片は、昴が持つユウガのみ。

だが、この状況のどこに希望があるというのか。昴は何度も何度も様々な状況をシミュレートしてみるが、まるで状況が好転する気がしない。何より目の前の男に勝てる気がしない。元々世界最強の魔剣使いと呼べるほどの男だったのだ。それが今や大罪の殆どをその手中に収め、仲間さえも容赦なく切り殺す悪魔の人格へと戻ってしまった。そう、全ては彼の悪夢……。彼とこうして刃を交える事は昴にとってはむしろ自然な事だったのかもしれない。

この魔王がミュレイを殺し……。この魔王の存在がこの世界の未来を大きく変えてきた。彼は諸刃の剣だったのだ。ホクトである限り、あらゆる絶望を打ち払う希望となる。そしてそれが裏返った時……。あらゆる未来を破壊する、絶望の象徴へと変貌する。ごくりと生唾を飲み込み、深く息をついた。一瞬でも隙を見せれば斬り殺される。緊迫した空気の中、ミュレイは昴の手をぎゅっと握り、首を横に振った。

「逃げろ、昴……。わらわの事はいい。もう……。良いのじゃ」

「何がいいんだ……。！ 何もよくないッ！ 私は貴方を見捨てないと誓った！ 貴方を守ると誓ったんだ！！ その誓いはこの魂に賭けて絶対に破るわけには行かない……。！」

「昴……」

「私にはミュレイが必要なんだよ！ たとえどんなに絶望的な状況だって、ミュレイを守る為なら戦える……。私に……。私に、兄さんと戦う勇気を貸して……。ミュレイ」

ヴァンの影がゆらりと動き、次の刹那には既に目の前に刃が繰り出されていた。昴はそれを何とかユウガで防ぎ、片腕で時間の加速と停止を駆使してヴァンの攻撃を防いでいく。怒涛の連続攻撃は点

いていくのがやっとという様子で、昴は歯を食いしばり必死でそれに抗っていた。

距離を開いたヴァンはガリユウの形を変化させ、それを大地に突き刺した。黒き剣の翼を広げ、放たれたのは大魔術。炎の嵐が吹き荒れ、落雷が降り注ぐ。昴はそれを全てユウガの力で無力化し、斬り払っていく。だがその猛攻と同時にヴァンはガリユウを振り上げ、上から襲い掛かるうとしていた。

一撃が肩に叩き込まれ、鎧が碎ける。錬金術の力で強固に作られたメリーベルの鎧……。今まで何度も昴の命を守ってきたその鎧が一撃で碎けていく。腕からは血が流れ、体中痺れているのか痛んでいるのかよくわからない。ただ目の前の攻撃を捌く事だけに集中し、必死になってそれをやり過ごす。昴に出来る事は今となってはその程度で、だがあの魔剣狩りを相手に片腕で持ちこたえるその様子にミュレイは驚かすには居られなかった。

昴は成長した。泣き虫で、弱虫で、他人と関わる事を恐れていた少女……。だが今は違う。二人はいつかの日のように対峙する。だがその意味も、形も、心も、あらゆるものがあの時とは異なっている。

「負けられない……！　負けられないんだ！　私は……私はあああああッ！！！！！」

「……素晴らしい剣捌きだ。魔剣の力を完全にコントロールしている……。殺すには惜しい腕だ」

刃と刃が激突し、甲高い音が鳴り響く。刃越しに白と黒の影は睨み合い、そして同時に距離を離れた。完全に息が上がっている昴に対し、ヴァンは余裕の表情である。明らか過ぎる劣勢……。これ以上は時間の問題だった。

そんな昴の苦しみをさっさと終わらせてやろうと言わんばかりに

ヴァンはガリユウを掲げ、空に無数の剣を出現させる。百……千……万……。空を埋め尽くす魔剣、魔剣、魔剣……。地獄がひっくり返って攻め込んだんじゃないかと思うほど、それは禍々しく恐ろしい。昴はその空が落ちてくるかのような魔剣を見上げ、ただユウガを握り締めて声を上げた。

雄たけびをかき消すかのように頭上から剣のスコールが降り注ぐ。昴はそれを加速した動きで薙ぎ払っていく……。ユウガの力は破魔の力。触れる全ての魔剣を一撃で消滅させてしまう。だが、それでもその力には限界がある。

黒い魔剣の波はまるで蟲のようだった。ぞわりと昴へ襲い掛かり、小さくか細い彼女の光は剣の中に埋まってしまふ。やがて何もかもが一通り墜ち、昴へと襲い掛かった後……。そこには全身に剣を突き刺し、瀕死の状態でなお立っている昴の姿があった。ヴァンの表情がはじめてそこで驚きに变化する。背後のミュレイは傷一つなくあらゆる攻撃を彼女はただ片腕で碎いて見せたのである。

「……………ミュレイ、は……。やらせ、ない……。もう……。彼女は……殺させない……………」

「……………。お別れだ、最後の大罪使いよ」

歩み寄り、止めを刺そうと剣を振り上げるヴァン。昴の腕は既に上がらず、ただ虚ろな目でそれを見届ける事しか出来ない。ゆっくりと、スローモーションのように襲い掛かる刃……。それを弾き飛ばしたのは、ユウガが放つ眩い光だった。

その光はヴァンの身体を焼き、男はたまらず後退する。光はどんどん強く増して行き、その光は昴の身体に突き刺さった剣を浄化し、そして傷を癒した。何が起きたのかわからない昴の目の前。光は一つに収束し、形を作っていく。

「……貴方は……」

浮かび上がった女の姿に昴は見覚えがあった。それはつい先ほどまで刃を交えていた敵……ミラ・ヨシノである。だが光で構成された彼女は服装も、髪も、目も、何もかもがあのミラとは異なっていた。いや……こちらこそが本来あるべき彼女の姿。昴の持つユウガに自らの手を重ね、姫は優しく微笑む。

なんとなく、昴は全てを理解した。ユウガが……消えずにこの世界に残っていた理由。自分がこの剣を手にして戦ってこられた理由。自分がここにこうして立っている意味……。ミラはずっと傍に居たのだ。ずっと近くで見守ってくれていたのだ。ずっと、ずっと……どんな時でも。どんな苦しい時も。嬉しい時も。彼女は昴と一緒にいた。だから。それは別に特別でもないし、唐突でもない。

「ありがとう、ミラ……。おかげでもう少し……まだ、もう少し……やれそうだよ」

“がんばってね”と、ミラが囁いた気がした。ミラは再び光へと戻り、それはユウガと一体化していく。封印術式が一気に開放され、その剣は本来あるべき形へと回歸していく。

昴の身体を白銀の鎧が覆い、巨大化した刀を少女は再び握り締めた。破魔剣ユウガ……。かつて魔剣狩りヴァン・ノーレッジと共に生きた姫が使っていた剣。世界を変えようと、世界を守るうとした女の剣。それは。ただただ純粋な愛と希望によって構成されている。

「……ミラか。余計な事を……」

「ミュレイ……ごめん。今の私じゃ兄さんを助けてあげられそうもない。だから……一旦引くよ」

ミュレイを抱きかかえる昴。その背中にヴァンは再び襲い掛かった。しかし彼女がまとった強烈な光がヴァンの闇を寄せ付けず、激しく弾き飛ばしてしまう。戸惑うヴァン……その身体はまるで灼熱に焼かれたかのように熱く焦げ付いていた。

「す……昴ちゃんっ！ シエルシちゃん……！ ハロルドちゃんが……！」

気を失っていたのか、うさ子が身体を起こすと同時に叫んだ。それに反応し昴は時間を停止させて走り出す。以前より長く……以前より正確に。ヴァンには何が起きているのかまるでわからなかったが、気づけば倒れていた仲間たちは一箇所に集められ、ついでにガルガンチュアが迎えにやってきていた。

「時間操作か　！」

「うさ子、みんなを連れてガルガンチュアへ……！」

「昴ちゃんも、早く……！」

「私は　あいつに挨拶をしてからだッ……！」

走り出す二人……。白騎士と魔剣狩りは互いの刃を激突させる。より強力になった破魔の力は全てを侵食するガリュウとも互角に切り結ぶことが出来る。放たれる闇の剣は浄化の光が全て分解し、はじいてしまう。だがやはり魔剣の数が違いすぎる。ヴァンはエリシオンとソレイユを取り込んでいるのだ。魔力は無尽蔵……。正面からやりあうには昴だけではどうにも厳しい。

「兄さん！ きつと助けるから……！ きつと、迎えに来るから！
！ だから 待つてて兄さん！ 今度は私が、兄さんを助けてあげる番だからっ……！」

「既にあの男は消えた……。お前の声は誰にも届かない」

「いや、届かない声なんてないんだ。聞こえないはずなんかないんだ。お前にはわからないかもしれない。でも 兄さんはきつとまだお前の中に生きてる！」

至近距離で刃を交え、二人は見つめあう。昴の眼差しは全てを見透かし、そして見極めようとするかのように紅く輝いていた。ヴァンはそれを不快そうに睨み、剣で弾く。吹き飛ばされた昴は空中で体制を整え、浮遊大陸から飛び降りると同時にガルガンチュアへと飛び移った。既に出発準備が整っていたガルガンチュアの甲板の上、ゲオルクが昴へと腕を伸ばす。昴はその手をとり、船にぶら下がる形でエデンから離脱するのであった。

遠ざかっていくガルガンチュアを見送り、ヴァンはそれを追撃する事はしなかった。その気になれば追う事も出来たが、今はそれよりも先にやるべきことがある。崩れかけたエデンの鐘堂を見やり、男は一人ゆっくりと歩き出すのであった。

アニメ覚醒（２）

ガルガンチュアの中、医務室へ運び込まれた仲間たち……。メリーベルや砂の海豚の医者たちが懸命に手当てをしている中、うさ子

は耳をぺったんこにしょげさせてハロルドの手を握り締めていた。ベッドの上に並べられた上半身と下半身はもう永遠につながる事は無く、もう二度と彼女の声を聞く事は出来ない。両目いっぱい大粒の涙を溜め込んだうさ子自身もまた、酷い怪我を負っていた。もうハロルドは助からない……だから手当てが行われていない。それがうさ子には悲しくて仕方がなかった。

「ハロルドちゃん……。うさね……。？ うさはね……。？ ハロルドちゃんとね……。これからもつと、もつともつと、楽しいこと、したかったの……。幸せなこと、いっぱいいっぱい……。教えてあげたかったの……」

ぎゅうつと、両手でハロルドの手を握り締めるうさ子。そうしてハロルドのまぶたをそつと閉じ……。耳をパタパタと上下させながら必死に涙をこらえた。だが堪えきれない涙はぼろぼろと零れ落ち、血に染まったベッドのシーツに新しい染みを増やしていく……。

結局、助かったのはミュレイだけであった。そのミュレイもなんとか一命を取り留めたものの、瀕死の重傷である事に違いは無い。まだ完全に回復すると決まったわけではなく、失われた手足は戻らないだろう。ハロルドが命を落とした……。シエルシが……。イスルギが命を落とした。多くの仲間が死にすぎた。うさ子は涙をこしこしと両手でぬぐいながら振り返る。そこには血塗れになりながらなんとかミュレイを助けようとしているメリーベルの姿があった。

ここにおいても邪魔になるだけだと、うさ子は肩を落として医務室を後にする。外に出るとそこには疲れた様子の昴の姿があった。昴は壁に背を預け、座り込んで片膝を抱えている。うさ子はその隣に座り、膝を抱えてしょんぼりと耳を落とした。

「ごめんね、昴ちゃん……。うさ……。みんなを守れ無かったの……」

「うさ子のせいじゃないよ……。うっん、誰かのせいじゃない。私たちだって覚悟はしてたんだ……。誰かを失う事になるって事くらい……」

「……。シエルちゃんも……。ハロルドちゃんも……。イスルギ君も……。死んじゃったの……。うさ……。うさね、大事な人たちが殺されちゃうのを、見てる事しか出来なかった……」

「うん……」

「ホクト君……。ホクト君にはもう……。逢えないのかなあ……。？
ホクト君はもう……。うさたちの知ってるホクト君に、戻ってくれないのかなあ……。？」

昴は目を瞑り、それから静かにホクトの事を想った。そう、誰かが悪かったわけではない。だがもっと早く自分があの場に駆けつけていれば……。そんな後悔を消せるはずもなかった。昴は苦しい心を押し殺し、笑顔を作ってうさ子の頭を撫でる。それは彼女の、今の彼女だから出来る強さだった。

「私がつくと、ホクトを取り返してみせるよ。今度こそ……。必ず」

「昴ちゃん……。はっっ……」

ぶるぶると小刻みに震え、涙を流すうさ子。その身体をそっと抱きしめると、うさ子はずっと我慢していたのか子供のよう大声を上げて泣きじゃくった。うさ子に釣られてか、昴の目からも涙がこぼれた。本当は悔しくて、悲しくてたまらないのだ。誰だってそう、同じなのだ。こんなにも……。こんなにも、世界が悲しみに満ちているのだから……。

「さあ、うさ子も医務室で寝てないと。うさ子だって死にそうになってたんだからね」

「……うさ、へいきなの……。うさ……みんなのお手伝いがしたいの……。うさにもね……。こんなだめなうさでもね……。何か、出来ることがあれば……。お手伝いしたいの」

「……そっか。それじゃあロゼの所に言って、手伝える事が無いか聞かなきゃね」

「はうっ！ 昂ちゃん……。ありがとうなの。昂ちゃんも……。無理しないでね？ なでなで……」

うさ子に頭を撫でられ、昂は驚いた表情を浮かべた。それからやわらかく微笑み、涙を一筋こぼして頷いた。とぼとぼと、元気のないうさ子の背中が遠ざかっていく……。昂はそれを見送り、拳を鋼鉄の壁へと思い切り叩き付けるのであった。

「……守ってみせる……。今度こそ……。絶対に……っ」

ガルガンチュアはエデンの空を飛んでいく。絶望と、失望と、悲しみに彩られた空を……。どこまでも……。この世界が終わる、その時まで。どこまでも。

アニメ覚醒(3)

なんだか、とても……とても長い夢を見ていたかのような気分でした。

夢の中で私はある一人の魔剣使いの記憶を辿っていました。彼は……ヴァン・ノーレッジは、とても孤独で……とても寂しい人……。彼の人生は、どうしようもない数々の悲しい運命に導かれ……。そして、どこかがおかしくなってしまったのかもしれない。

彼は生まれてすぐに親に捨てられ、祖父母の手によって育てられました。しかしその祖父母はある日野党に殺され、ヴァンは一人で生き残る事になりました。彼は街の地下に逃げ込み、そこでまるで獣のような生活を強いられたのです。

生きる為に盗みを働く日々……。時には捕らえられ、一晚中暴行を加えられる事もありました。私はやめたと何度も叫んだけど、夢だからか誰にも声は届きません。必死に彼をかばおうとしてみても、彼の身体にはただ痣が増え……。私の身体は透明なまま。

彼は毎日毎日必死になつて生きていたのです。汚泥を嚼らねば生きていけないような掃き溜めの中で……。そんな彼の目の前に、ある日炎を引き連れて一人の魔剣使いが現れました。彼が現れ、それからは少しだけ彼にとっては幸せな日々が続きました。

毎日毎日、彼は師となつた男と共に笑顔で暮らしていました。彼が生まれてから初めて見せた笑顔……。それがずっとずっと続けばいいのに。でも、それは長くは続きませんでした。数年後、彼はまた師匠と離れ離れになり……。そして、あの力を手に入れてしまった。

闇の魔剣、蝕魔剣ガリュウ。全てを飲み込み、喰らい尽くす運命の魔剣……。彼はそれを持つが故に様々な戦いに巻き込まれていきました。その中で何人も何人も、望まぬ人を斬り……。望まぬ死と直面するのです。彼は呪いました。この世界を呪い続けました。

そして事件は起こったのです。

魔剣の力が彼の悪意に反応し暴走……。街一つを破壊し……。彼はその瓦礫の中に立ち尽くしていました。もう何もかもが壊れてしまった……。どうして彼にばかりこんな悲しみを背負わせるの？ 私は彼の代わりに泣いてあげたかった。でも……。彼の身体を優しく抱きしめてくれる人が現れたのです。

それは……。私の母、シャナク・ルナリア・ザルヴァトーレでした。彼女は反帝国組織を率いる革命の女神として各地と転戦していたのです。その途中、偶然彼と母は出会ったのです。母は彼を仲間に迎え入れ、そして自らの右腕として活躍させました。

彼にとって幸せな時間がまたやってきたのです。失われた母の面影をシャナクに重ねた彼……。彼は母の為になんでもやりました。何とでも戦いました。その中で母は彼に力を使う者の覚悟と責任を説いたのです。力に振り回されるのではなく、それを制御し正しく扱う事が必要なのだと。

彼はもう乱暴に剣を振り回すだけの人間ではなく、立派な一人の騎士でした。ですが、帝国との戦いは激化し……。シャナクは囚われの身となってしまうのです。そして……。彼にとって忘れられない日がやってきました。

アンダーグラウンドに捕らえられた女王を救いに単身乗り込んだ彼は、そこで虐げられ、陵辱され、生きていくだけの人形と成り果てたシャナクの姿を見たのです。彼は大声で泣き叫びました。私も一緒に泣きました。母は……。わかっていた事ですが、とてもとても惨い仕打ちを受けたのです。

彼は一人UGで暴れ回りました。たくさんの人を殺して、殺して殺しまわって……。でも心の中では助けてと叫んでいたのです。もう殺させないでと泣いていたのです。身体は大きくなっても彼の本質は安らぎを求めるただの子供でした。そして母は……。最早自由に生きる事のかなわなくなつたその身を斬るように、彼に頼んだのでした。

どうして……こんな事になってしまったのかと。どうして……彼
はこんなにも悲しいのかと。私はずっと泣いていました。彼は自ら
が殺した母の亡骸を抱きしめ、涙を流していました。それはとても
とても美しい、儂い光景でした。彼の心にあつたのは闇なんかじゃ
ない。ただ……報われない孤独な光だったのだと、私はそう気づき
ました。

女王殺しの騎士は一人、帝国と戦い続けました。あらゆる敵を斬
り殺し、斬り殺し、斬り殺して死体の山を積み上げて、彼はそれで
も斬り殺しました。亡き母の為に……。彼はいつしか魔剣狩りと恐
れられるようになり、そして彼はその呼び名に相応しくその心を黒
く塗りつぶしていったのです。

そんな殺戮の戦士の前に、ある日一人の女性が現れます。それは
シヤナクと同じ、優しく人を許す心を持ったククラカンの姫でした。
姫は男を抱きしめ、もう戦いは止めましょうと説きます。彼はよう
やく剣を下ろし……そして姫との旅が始まったのです。

心のどこかで彼はもう、失うことを覚悟していました。でも姫は
大罪の使い手で、彼と同じくらいに強かったのです。彼と彼女は世
界中を転々とし、様々な問題を解決しました。たくさん闇と、た
くさんの光を見ました。そしてゆっくりと、彼は彼女を愛するよう
になったのです。

二人にとつてとても幸せな日々が続きました。帝国の追撃は続き、
彼は姫を守るために戦いました。でもそれは守るための戦い……復
讐ではなかったのです。彼にとつて満たされた、優しい戦いでした。
黒き闇の騎士は、一生姫を守ると誓いました。しかしククラカン
という国はそれを許しません。二人は駆け落ちをしようと、逃げる
ように旅を続けました。しかし……その幸せな時にも終わりがやっ
てくるのです。

姫は彼をかばって死に絶えました。その時、彼の中で決定的に何
かがおかしくなってしまうのです。与えては奪う、この恐ろしい
地獄のような世界……この世界にある全ての光も闇も憎み、呪い、

殺意で突き刺そうと男は吼えたのです。

彼は各地を転戦し、殺しに殺しを重ねました。その途中、気まぐれでギルドに加わったり人助けをしたりしながらも、心の中で疼く憎悪の炎をかき消せずに苦悩していました。がんばれ……負けるな！ 私は声をあげます。でも、彼にそれは届きません。せめて誰かが彼の傍にいてくれたら……こんなに彼は苦しまなかったのに。

そうして彼の一生が終わったのは、異世界からやってきた白き救世主の刃の煌きを見た時でした。男は心のどこかでこれでいいと思いました。もう、これで何も殺さなくて住む……と。眠りについた彼の心の中に別の人格が生まれ、そして彼は彼が願ったように、もう誰かを憎む戦いはしないと誓ったのです。

でも……なぜでしょうか？ 今の彼は激しい世界に対する憎悪に埋め尽くされていました。魔剣狩りと呼ばれた彼は、シャナクから聞いたアニマの話信じていました。だからこそ魔剣を集め、神の力を手に入れようとしていたのです。今まさに彼は神の力を手に入れようとしています。そして……彼はこの世界で最強の、孤独な……とても悲しい魔王になりました。

誰でもいい、彼の本当の気持ちを聞いてあげて！ 彼を攻撃しないで！ 彼を許してあげて……！ 声を上げて叫んでも、白き勇者は彼と刃を交えるのを止めません。私は……私はただ、見ているだけ……。

魔王は何故、こんなにも世界を憎んでいるのでしょうか……？ あんなにも優しい気持ちがあつて、あんなにも誰かを愛せる人が……どうして。私は暗闇の中、ただ全ての景色から遠ざかります。どうして私には身体がなくて、声も出せなくて、手も伸ばせないの……？ 考えて……私は何かを理解しました。

ああ……。もう、私の物語は……終わってしまったんだ、と……。振り返るとそこには仲間たちの姿がありました。彼らはいよいよ、最期の戦いに向かおうとしています。この世界を終焉が包みこみ、数え切れない命が失われていく今……。彼らは、それでもまだ尚抗

おうとしていたのです。

私は……ただ、見ていただけ。手伝ってあげたい。一緒に居てあげたい。でも……何も出来ない。自分の無力さが悔しく、私はただ暗闇の中で手を握り締めます。何もかもが遠い……。自分の身体なのに、まるで動く気がしない。私はもう……。何もかも……。終わってしまったのですから。

アニメ覚醒（3）

世界を終焉が包み込もうとしていました。覚醒を始めたアニメは世界中に魔物をばら撒き、人々はそれに抗おうと必死で団結しようとしていました。

崩れていく世界……。帝国も、反帝国組織も、元ギルドも……。全てが集まり、一つになろうとしています。全ての界層が崩壊を始め、大地が失われていく中、人々はインフェル・ノアをはじめとした浮遊、飛行施設に集まり、何とか世界から脱出を図るしかありませんでした。

第二界層ジハードを後にしたガルガンチュアはインフェル・ノアに格納され、そこで修理と補給を受ける事になりました。そのインフェル・ノアに降り注ぐ魔物たち……。彼らは剣を取り、それぞれが守るべきものの為に戦いました。

ヨツンヘイムの街が崩れさり、プレートは次々に落とされていきます。それもそのはず、この世界を支えるメインシャフトが動き出していたのです。第二界層以下の全てのプレートが崩落を初め、慣れ親しんだ世界は次々に失われて生きました。

私は浮かんだ世界の上から、世界の本当の姿を見ていました。こ

の世界は……。ロクエンティアと呼ばれた世界は……。一つの巨大な、とてもとても巨大な剣だったのです。シャフトの外壁が崩れ去り、そしてプレートが無くなった空間に光の刀身が出現します。それは、世界に穿たれた一振りの刃……。アニマの身体へと突き刺さった巨大な剣。六英雄がそれぞれの世界の一部を切り取って作った一つの巨大な剣だったのです。

そう、アニマは最下層……。UGの更に先に眠っていました。結晶に覆われた巨大な神は今はまだ“世界”の最終安全装置によって覚醒を阻止されています。突き刺さった剣……。それが抜け落ちた時、世界は本当の意味で終焉を迎えるのです。

ヴァン・ノーレッジはその剣のコントロールを掌握しようと、第一界層へ向かっていました。剣の柄に値する第一界層は、アニマの封印を解き放つ為の装置が隠されているのです。七つの大罪全てがそろったわけではなくとも、ヴァンは世界中の魔剣をその身体に宿しています。彼はもう、アニマを覚醒させるに十分な存在だったのです。

あらゆる世界を飲み干す力、アニマ……。それは暴食の魔剣ガリユウに導かれ、徐々に覚醒が始まっていました。私はそんな崩壊していく世界をただ俯瞰する事しか出来ません。そんな私の背後から、誰かの声が聞こえました。

「……………あそこに、戻りたい？」

そこに居たのは……。ミラ・ヨシノでした。光だけとなった彼女と対峙し、私はようやく自分の肉体を自覚します。いいえ……。それは魂と呼べる物だったのかもしれませんが。私たちは互いに空の上、形の無い身体で向かい合います。

「世界は滅びを迎えようとしている……。ううん、もう全ての階層が崩れた今、彼らに帰るべき場所はない。インフェル・ノアが落ち

たら、もう彼らは死ぬしかないわ」

「……………もう、どうにも……………どうにもならないんでしょうか」

「……………ヴァンはきつとアニマの封印を……………封印の剣、ロクエンティアを解き放とうとするわ。そうなれば最期……………アニマはヴァンの言うとおりに動き、あらゆる世界を食い尽くす神になるでしょうね」

「貴方は……………貴方は、ミラ……………？ それとも……………？」

「私はこの世界に残留する、ミラ・ヨシノの心の欠片……………。シエルシ、貴方はもう十分頑張ったわ。もう、これ以上傷つく必要なんてないの。あそこに戻る必要は……………ないのよ」

ミラは私の肩を叩き、そして私たちは一緒にインフェル・ノアを見下ろしました。次々に襲ってくる魔物の群れ……………。それに先陣を切って立ち向かうのは昴でした。彼女は一人ボロボロになって、ずっとずっと戦い続けています。彼女はこの絶望だらけの世界の中まだ諦めていませんでした。そんな彼女を希望の光とするかのように、集った人々は諦めずに戦い続けます。

「それでも私は……………戻りたい。見ているだけなんて嫌なんです。あそこで……………みんなと一緒に戦いたい」

「でも、貴方にはもう身体がないわ……………」

ミラは背後から私の身体を優しく抱き寄せ、目を瞑ります。そう……………私はもう、身体を失ってしまったのです。もう、どうにも出来ない。どうにかしたくても、何も出来ない……………。無力で、ちっぽけで、どうしようもない……………弱い自分。そんな自分が嫌で嫌で、私は

ずっと……変わりたかって、そう願っていた。

「復活しようとしているアニマに対抗する手段は……たぶん、たった一つだけね」

ガルガンチュアの艦橋、残された仲間たちは集いメリーベルの言葉に耳を傾けていた。つい先ほどまで魔物の襲撃があり、昴も仲間たちもボロボロに傷ついていた。だが休んでいる時間はない。回復魔術でたましましても最期まで走り抜けなければならないのだ。そう、この世界が終わってしまう前に……。

「昴……これは私たちにとっても無関係な話じゃないわ。恐らくアニマは覚醒したらこの世界を食い尽くし……次は私の住んでいた世界か、貴方の世界に向かうはずよ」

「……私の世界に……？」

「……色々事情があるから詳しくは説明している暇がないんだけど、私の住んでいた世界と貴方の住んでいた世界はある事情から非常に近い存在なの。そして、私はアニマの存在を知り……自分の世界を守る為にこの世界にやってきた」

メリーベルがその異変に気づいたのは数年前の事である。彼女の住んでいた世界に未知の魔物が現れ、世界を混乱が襲ったのだ。その騒ぎはすぐに解決したものの、元凶が何なのかわからなかった。魔物が異世界から来た物だと知り、メリーベルは異世界へ通じる扉を開いてこちらの世界へ調査にやってきたのである。

結果、世界を超えて被害を撒き散らすこの世界の異常性と危険性

に気づき、その問題を解決するためにこの世界に残ったのである。そして今その危惧は現実の物となろうとしている。今はまだ影響はないが、アニメが完全に覚醒してしまった時、彼女たちの住む世界はその襲撃を受ける事となるだろう。

「そうならば、夏流やリアも平穩無事につてわけにはいかなくなるわ」

「……だからメリーベルは……二人を巻き込まないように黙ってたんだね」

それはメリーベルなりに二人の幸せを考えての結論だった。二人には気づかれないように、この問題を解決しなければならぬ……。結果、彼女の立ち回りは完璧だったとはいえないだろう。この歳になってようやく、“彼”の苦労を知る事になった。それはそれで、いい経験だったのかもしれない。

「とにかくこのままじゃこの世界が滅ぶだけじゃ済まないわ。私たちの世界……そして全ての世界がアニメによって崩壊する……。それだけは絶対に阻止しなければならぬ」

「だが、アニメをどうする……？ 六つの世界の一部を切り取って封印を作るしかなかったような代物だろう？ 俺たちに今更何が出る……？」

ゲオルクの言葉に誰もが黙り込んでしまう。そう、最早スケールが違いすぎるのだ。魔剣使いだとか大罪だとかそんなレベルではない……。相手は世界そのもの。今、これだけ疲弊した戦力で一体何が出来るというのか……。しかしメリーベルはあえて強い口調で言葉を続けた。

「“神”に対抗するのならば……“神”にすぎないわね」

「神……？」

「アニマは元々この世界が生み出した“守護者”なのよ。その存在は“アニマの器”と呼ばれる存在に依存しているわ。現状は、大罪を集めたヴァン・ノーレッジが器に該当する。ということは、前の器はもう開放されているはずよ」

それは“元々のこの世界”であるUGに封印されている。UGとは本来あるべきこの世界の大地であり、その上に無数の封印、緩衝装置として作られた界層を貫き封印の剣であるロクエンティアが突き刺さった事により、世界は成立していた。故にこの世界の原初、この世界を作った神はUGにて眠りについていないはずなのである。今まではそれを覚醒させる事が出来なかった。彼女の覚醒はアニマの覚醒を意味している。だがアニマが覚醒し、新たな器を手に入れた今彼女もまた夢から目覚めているはずなのだ。もしもこのどうしようもない状況を何とか出来るとしたら、それはこの世界を作った……アニマを作った神以外にないだろう。

「結局、最期は神頼みってわけね……」

「ロゼ殿、そう言わずに……。拙者も、その最期の希望にかけてみようと思うのでござるよ」

「どつちみち、ボクたちに出来る事はもうそんなに多くないからね」

「………いってみるの。うさたちに出来る事………この世界の為に、出来る事……。きつと、まだ何かあるはずだから………」

うさ子の言葉に頷く仲間たち。彼らはガルガンチュアから直接、転送魔術を使ってUGへ向かう事になった。その間メンバーの半分は残り、インフェル・ノアの防衛……。実際に現場に向かうのは、ロゼと昴、そしてうさ子とメリーベルの四人だけであった。

UG、そこに眠る古代遺跡……。フラタニティ。昴たちはその中へ足を踏み入れた。結晶の森の中、ロゼは興味深そうに周囲を眺める。そこはかつて父が研究していた古代遺跡……。冷たく反響する靴音の中、疲れた様子の昴を気遣いロゼはゆっくりと歩く。うさ子も、昴も、誰もがみんな疲れていた。もうエデンの戦いからずっと、戦いっぱなしなのだから。

「……こんな時に何言ってるのって思われるかもしれないけどさ。僕たち……今日まで色々あったけど、よくやってきたよね」

「……はう。ロゼ君、がんばってたの。うさもね……。みんなもね、がんばったの」

「だからさ……。僕は最期まで諦めたくない。諦めないで……。最期まで足掻きたいんだ。リフルがくれた命を……。僕は、無駄にしたくない。みんなもそうだろう？ 何かを受け継いで、僕たちはここにいる。みんな何かを背負ってる。だから……。もう少し頑張ろう。そんな疲れた顔……。悲しい顔、しないでさ」

ロゼの言葉で昴は少し驚き、それから笑顔を作った。うさ子も元氣よく耳をばたばたさせ、うさ語で何かを叫んでいたが誰も聞いていなかった。というより理解出来なかった。そうこうしている内に彼らはずいに、神の眠る場所へとたどり着いたのだった。

「これが……。神……。？」

「はづつ……？ うさと、おんなじ顔なのー……」

「そうみたいだね……。父上はずっと昔にこれを見つけていたのか……。すごいな……」

神は……少女は結晶の森に守られるようにして光の中で眠っていた。柔らかな光……。結晶は全てがよく見ると一つ一つが剣である。その中で礫にされているかのようにして眠る神は、確かに神々しかった。

昴はそれに吸い寄せられるように近づいていく。その靴音が空洞に鳴り響き……。それが神の浅い眠りを覚ますかのように、ゆっくりと顔を上げさせた。神はその目そつと開き、昴を見つめる……。その顔はまさしくうさ子そのものだった。

「……やっと、逢えたね……昴」

「え……？」

「昴だけじゃない……。ロゼも……。メリーベルも。うさ子も……。みんな、知ってるよ。ずっと……。長い間、夢を見てたんだ。私の……。長い長い、夢……」

神は自らの手で拘束の結晶を砕き振り払うと、ふわりと一同の前に舞い降りた。そうして裸の姿のまま、にっこりと無邪気に笑ってみせる。ロゼだけが明後日の方向を向いていたが、その神にうさ子は駆け寄ってじつと顔を覗き込んだ。

「うさにそっくりなのーっ！？ はづつ……！？ びっくりなのー……」

「こんにちは、うさ子……。ずっと、私は貴方と意識を共有していたの。だからうさ子、貴方の事も……。みんなの事も、よく知ってる」

「うさの……意識……？」

「そう……。うさ子、貴方の中にサルベージされた私は、貴方と一緒にこの世界を見てきた……。みんなの戦い……。みんなの思い……。それを感じて……」

神は目には見えない空を仰ぎ見るかのように天を見上げた。そこにはただ結晶の光が降り注ぐ世界だけがある。その神々しい、静かな気配に誰もが思わず言葉を詰まらせていた。神は優しく微笑み、そうして昂へと向かい合う。

「こんな世界に呼んでしまって……。ごめんなさい。でも……。貴方はこの世界にとって必要な人だから……」

「……。教えてくれ。どうすればアニマを葬る事が出来る……。？ どうしたら、私は兄さんを救える……。？」

「新しい器は、より明確な破壊という意識をアニマに与えてしまった。アニマはその命令に純粹に従うだけ……。新しい器は私よりもずっと強い意志を持っている。もう、私にはアニマを止める事は出来ない」

「そんな……」

「でも、それは私一人だけなら……。という話。うさ子……。昂……。みんな……。この世界にいる人たちの力があれば……。アニマを倒す

事は出来ずとも、封じる事は出来るかもしれない……」

アニメとは、この世界に召還された創造した守護者……。彼女の孤独を癒す為に存在する、たった一人の“ともだち”……。それは、彼女が心の中に宿っていた七つの感情を元に、全てを飲み込む純粹な存在として世界に猛威を振るった。

そして今、彼女の中にはアニメに奪われてしまった感情以外にも残っているものがあつた。ただ、悪意だけが……。寂しさだけが心を満たしていた過去と今は違う。彼女はうさ子にサルベージされた魂を通じてこれまで様々な物を見つめてきたのだ。そう、それは数え切れない人々の愛と勇気の物語。

「うさ子が私に教えてくれた……。愛、勇気、友情……。たくさんの優しい気持ち。貴方たちは失意や絶望の中で、それでも愛を忘れなかった。誰かを愛そうと必死になって戦っていた。私は貴方たちからその力を教わった。だから……。今なら出来る事がある」

神はうさ子へと歩み寄り、その手をぎゅっと結んだ。繋いだ手と手……。うさ子と神の身体がゆっくりと輝き出し、その優しい暖かな光が空間を包み込んでいく……。

「う、うさ子……!？」

「……うさ子、貴方はこの世界を守りたい……?」

「……うさ……うさはね、守りたい……。この世界を……仲間を、友達を、大切な人を……」

「彼を 助けたい?」

「うさは 助けたいのっ！ もう、誰も泣かなくていい世界がほしい！ うさは……そのためならなんでもするっ！！！！！」

「……わかった。なら、貴方のその傷ついた身体と……貴方の中に芽生えた二つの心をちょうだい。私も力を貸すから……」

「え……？ ど、どういう……！？」

戸惑うロゼの目の前、うさは光の粒に変わっていく。そうして光は神の身体の中に溶け合い、一つに交じり合っていく……。うさ子という人格……。ステラという人格……。二つの魂が神という器の中に溶け合っていく。

そう、ステラは神の魂だった。何も知らない無垢な神の心……。そしてうさはそんな神の身体の中に芽生えた、もう一つの魂。愛を知るために、愛するために生まれてきた心……。ステラだけでは無機質で不完全だった心に、うさ子というゆらぎが生まれた。そしてそれが本来あるべき魂へと還っていく……。

神は眩い光を放ち、そしてその形を変えていく。それは……神がこの世界に生み出した最期の希望。人間の手の中に託された、もう一つの大罪。否、それは大罪と同じ工程で作られた、しかしまったく魔逆の意味を持つ剣……。

愛や、勇気や、友情や……。たくさんの暖かい心。うさが持っていた全ての存在に対する愛情……。その愛の輝きが結晶となり、剣の形を紡いだのである。それは静かに大地に突き刺さり、白く刀身を輝かせた。

『これが、今の私に出来る精一杯……。あとは……この剣を貴方たちが上手く使えるかどうか』

「う、うさはどうなったんだ！？」

『うさはね、この剣の中で一つになったの。この剣はうさの気持ちそのものなのーっ』

「……………つさ子」

『うさ、ぜんぜん悲しくないよ。うさはこうなるべきだったから……。ううん、きつとうさはこのために生まれてきたから。だからね、みんなを守る剣になって……今度はうさがみんなを助けるよ』

昴はその剣に歩み寄り、剣を一息に引き抜いた。美しく澄んだ刃の音色が響き渡り、刀身は輝きを弾いて眩い……。世界中の愛を集めたようなその剣は、大罪と対を成す物……。

『……………“剣”は、人を傷つける象徴。でも、同時に何かを守る為の力の象徴でもある。剣はただ力、それは人の心と同じ。扱い方次第……全ては在り方次第。だから人はその力を恐れ敬い、そして信じなければならぬ……。私は、私が生み出した化け物に抗う為に、貴方たちに力を託します』

「それでも……それでも私、あそこに戻りたい……。私……まだ、諦めたくない……」

天の上、私はミラと向かい合いました。そんな私に彼女は呆れたように笑いかけます。とても愛らしい、優しい……慈愛に満ちた笑顔。彼女は私の手を握り、言いました。

「……………本当に好きなのね。彼の事が」

「はい」

「なら……力を貸してあげる。貴方の時間を、巻き戻してあげる。貴方はもうこの世界の摂理から外れた存在になる……。それでも……かまわない？」

「構いません」

即答だった。そうだ、そんな事は些細な事だ。私は彼を愛している……。まだこんなところで死んでいるわけにはいかないのだ。だから……そのほかのことなんて些細な事だ。

私の身体を光が包み込む。きつと、ミラは私たちのことをずっと見守っていてくれたのだと思います。その最期の最期の力で、彼女は私に命を託した……。光に包み込まれ、吸い込まれていきます。そうして私は……もう一度、諦めない為に……。今度こそ 希望を守る為に。

「 創神剣ロクエンティア ” 　それが、この剣の名前ですね」

突如、昴の持つユウガが光を放ち、そこから伸びた手が神の剣を握り締めていた。完全に命を絶たれたはずのシエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレがそこには立っている。そうして神の剣を握り締め、仲間たちへと振り返った。

「この剣　私に使わせてくれませんか？」

「……………てか……………シエルシッ!?　ど、どこから出てきたの!？」

「私が、ある人をお願いして呼び戻してもらったの。この剣は、本当に“彼”を愛する人間じゃないと使いこなせないと思うから……」

守る為に、傷つける為に、奪う為に、維持する為に……剣はただこの世界にあり続ける。だがこの剣は生み出し、与える為に存在する剣……。誰も傷つけず、誰も壊さない剣。だからこそ、それは普通の使い手ではこなせない。

『シエルシ・ルナリア・ザルヴァトーレ……。封印の力を継ぐ者。貴方なら、この滅ぼすのではなく、愛する為の剣を使いこなせる』

『うさもね、シエルシちゃんならきつと大丈夫だと思うの！ とうか、シエルシちゃんしかいないのっ！ はうはうっ！』

「ありがとう、うさ子。ほかの皆も良いですね？ まあ だめといても、聞きはしませんが」

シエルシは踊るように流麗な動きでロクエンティアを振るう。光の風が起こり、シエルシはその髪を風に輝かせた。神の愛の剣……。大罪と対を成す剣。究極の剣がこの世界に産み落とされた瞬間だった。

「……さあ、行きましょう。私たちの大切な人を取り戻す為に」

遙か下、UGよりも更に奥深く……。世界という名の剣に貫かれた巨大な悪意が動き出そうとしていた。新たな器となった男はその反対側、天の上にて両手を振るう。遙か彼方まで広がる空を掌握し、全ての世界を睨みつける。最期の戦いは、すぐ目前まで迫っていた。

剣創のロクエンティア（1）

「まさか……こんな事になるなんてね。この旅を始めた時は、考えもしていなかったなあ……」

ガルガンチュアの改修工事が進む中、インフェル・ノアのドックでそれを見上げてロゼは呟いた。思い返せば全てはあつという間の事だったようであり、しかしとても長い戦いだっような気もする。

全ては彼が……ホクトが嵐のような風と共に巻き起こした夢の残骸……。彼はこの世界にある様々な鎖を解き放ち、それぞれの心に風を吹き入れていった。時に彼の行いは悪であり、間違いであり、しかしその一つ一つが不思議と誰かの心に響く……そんな男だった。ロゼもまた、彼と共に存在した事により変わった一人だろう。それは彼のおかげであり、皆のおかげであり、そして自分自身の力でもある。数多の困難は少年を一回りも二回りも強くした。数え切れない痛みと共に……得た確かな日々。それが今少年の脳裏で何度も繰り返し再生されていた。

少年の隣、過去を思い返す彼の横顔を眺めるアクティの姿があった。二人とも、当然のようにこんな事になるとは思っていなかったし、こうなった今も信じられないで居る。最後の最後、立ちふさがる敵はヴァン・ノーレツジ……。彼らにとって大切な人の身体を持った男なのだから。

特にアクティは複雑な心境だった。アクティはヴァンが本当は悪い人間ではないのだと言う事を良く知っている。本当は寂しくて、辛くて、悲しくて……それでも戦う他に何かを表現する手段を知らない、哀れな男なのだ。どうにかして助けてあげたいと思う。けれど……今のアクティにとって大切な事は一つではなくなってしまう。

「帝国を倒せば平和になる……。アニマを倒せば平和になる……。多分、それは違うんだろうね。ボクたちは、ボクたち人間は、そういう形であり続ける限り、きつと争いを繰り返してしまう。そう、宿命付けられているかのように」

「……でも、僕たちはこうして一緒に戦う事が出来る。世界に大地はなくなってしまうけど、エデンには浮島があるし、インフェルノアだってある。僕は戦いを終わらせて、この世界の行く末を見届けたいと思うよ。そして出来るなら、世界の平和のために戦い続けたい」

「これから、かあ……。ボクたちが大人になる頃には、この世界はどうなってるんだろう」

「それを決めるのはこの世界の誰かじゃない。きつと、僕たち自身なんだよ」

「そっか……。そうかもね。じゃあ、ボクもそうしようかな。とりあえず生き延びて……。この世界が良くなるように、何か考えていけば……」

大切な人を失い、人と人が争い、上や、下や、数え切れない差別偏見……。それらを人間はひつくるめて抱えている。アクティモまた、帝国の人間を全て赦せるわけではない。だがそれは誰でも同じ事なのだ。

争う事の全てが悪だろうか？ 何故、争いは起こるのだろうか？ 大切な物があり……。譲れないと思うから。それを手放したくないと、得たいと思うから……。人は争うのだ。それは魂にとって至極当然の事……。ただの、肉体を持つ存在としての“反射”なのかも

しない。

それでも人は時に手を取り合い、時に裏切り……それでもまた誰かを信じてみたり……。けれどそれで良いのだと思える。迷い、苦しみ、時には傷つけあい……。そうして生きていく。この世界が失われようとしている今になつて気づく事もある。アクティはやはり、この世界の事が好きだったのだ。

悪い思いでは数え切れない。だがそのところどころに転がっていたきれいな小石を拾い集めて、何とか自分を形成していたのだ。幸せと呼べる物があつたのだ。それが吹き飛んでしまふ……。虚しさ、悲しさ……。それは自分がこの世界を愛していた証拠。この、掃き溜めのような……地獄のような世界で、生きていた証なのだ。

「これから生まれてくる子供達が……こんな気持ちを味わわずに住む世界……そんな世界に出来たらいいな」

自らの手をじっと見つめ、それを握り締めるアクティ。最期の戦いは目前にまで迫っていた。生き残れるかどうかはわからない。勝てる保障も見込みも無い。だがそれでもやらねばならない……。誰の為でもなく、自分の為に。この物語を、自分なりに終わらせる為に……。

「ロゼはいいよね……。ボクには何にも無い。背負うべき物もないし、守るべきものもない……。改めて思ったよ。ボクは自分の事しか考えてなかった。自分がよければそれでよかったんだ」

「僕だつて似たようなもんだよ。それに……アクティだつて背負つてる物も、守るべき物もあるだろう？　僕たちはこれまで一緒に肩を並べて戦つてきた。ずっとずっと……。この船のクルーも、皆も、アクティをきつと家族みたいに思つてるよ」

「……そうかな？ そうだったら、いいな」

少しだけ照れくさそうに笑うアクティ。その肩を叩き、ロゼは大
人びた笑顔を浮かべた。その面影に、どこかあの隻眼の剣士の姿が
重なる……。きっと、失った分だけ誰も何かを引き継いでいる。
何かを受け継いでいる。だからそう、きっと……“いけとしげるもの森羅万象” 全て
に、無意味な存在なんてないのだ。

「 やろう、僕たちに出来る事を。出来る限りの力で」

「……うん、そうだね。やろう。やってやろう。ただの人間に何が
出来るのか……子供に何が出来るのか、思い知らせてやろう」

二人は笑いあい、拳と拳を軽くぶつけ合わせた。そんな二人の背
後からウサクとエレットが近づいていた。二人が手を振り声を投げ
かけるとロゼとアクティは少しだけ慌てた様子で身を離れた。

「ロゼ殿〜！ アクティ殿〜！ 皆最後の補給や休憩に入っている
でござるよ。お二人もあまり無理せず、ゆっくり休むといいでござ
るよ。大変なのは、これからでござる」

「……そういえば、ロゼ君とアクティちゃんはここで何をしていた
んですか？」

「……青春？」

「バカ、何意味判んない事言ってるの……？」

冗談交じりに肩を竦めるロゼにアクティは笑いながら軽く肘打ち
した。後からやってきた二人にはよく意味はわからなかったが、ま

あ特に二人とも気にする事もなかった。性格的に。

「しかし、すごいでござるなあ……。これ、本当にアニメの居るところまで連れて行ってくれるのでござるか？」

興味津々と言った様子でガルガンチュアを見上げるウサク。そのボディには地下遺跡フラタニティの部品が組み込まれ、更に改造が行われようとしていた。その改造が終わった時、ガルガンチュアはフラタニティの力を得て、より早く、より強くなる。そうなればこの船は彼らをアニメの所まで連れて行く最後の希望となるだろう。

ロゼもアクティもその改造がちゃんと終わるかどうかが心配でやってきていたのだが、途中から話し込んでしまい後回しになってしまった。四人並んでガルガンチュアを見上げる……。滑らかな流線型のボディが光を弾き、無数の光のワイヤーに吊るされて輝いていた。

「世界中の人々が力を合わせ、アニメに立ち向かう……。拙者たちはこの船でアニメを封じに行く……。なんだか気づかぬうちに大仕事になってしまったでござるな」

「なんだか、皮肉ですね……。もう何もかもが終わってしまっているというのに、だからこそ人々が純粹に手を取り合い戦える……」

「いや、きっと僕たちはこれでいいんだよ。こうでなきゃ……きつと意味が無いんだ」

「何はともあれ、あとは拙者たちがやるだけでござるよ。緊張するでござるが……。しかし、やらねばならないのでござる」

「今度こそ、本当に命がけの戦いになるね。ボクたちの中の誰かが、

死んでく事になるかも」

「……それでも……やってやらねばならないんですね」

四人は誰が言い出したわけでもなく、輪を作つてその手を同時に重ねた。願い、祈り、誓い……様々な気持ちを込めて。彼らは彼らなりに生きていく。明日を　　絶望から勝ち取る為に……。

「この戦いが無事勝利で終わっても、この世界はもう駄目なんですよ？」

昴の問いかけにメリーベルは沈黙という名の肯定で答えた。医務室の中、昴は眠り続けているミュレイの残された片手をしっかりと握り締め、祈るような気持ちでその寝顔を眺めていた。

決戦まで残された時間はあまりにも少ない。このままアニメが完全に復活してしまえば、もう彼らに成す術はないのだ。メリーベルは空いているベッドの上に腰掛け、静かにため息をついた。泣いても笑っても、これが最後……。重苦しい沈黙が医務室へと降り注ぐ。

「元々この世界は、アニメを封印する為だけにあつた……。アニメを目覚めさせず、完全に殺さない絶妙なバランスで……。だから、この世界に、この大地に、もう人を生かすだけの力はないと思う」

「……そっか。そうだよね……。それでも私たちのやる事は変わらない。アニメを倒し、兄さんを……。倒す」

「本当に良いの……？ 私が言うのもなんだけど……貴方は別世界の人間。本来ならばこんな厳しい戦いに巻き込まれる事はなかった

はずなのに」

「もしもの話なんて今してもしょうがないよ、メリーベル……。それでも私はここにいる。確かにここにいたんだ……。この世界の結末なんて関係ない。私は私が納得できるように、最後まで生き抜くだけだよ」

「そう……。強くなったのね、昴」

どこか寂しげにメリーベルはそう呟き、それから昴に銀色のアタツシユケースを渡した。その中身は昴も理解している……。彼女の現実での師匠、本城夏流がかつて使っていたという武装である。

「これはきつと、貴方の持つユウガの莫大な力をコントロールする手助けをしてくれるはず。夏流もきつと、貴方に使ってもらいたいと思ってるわ」

「でも……。壊しちゃうかもしれないよ？ 多分すごく過酷な戦いになると思っし……」

恐る恐る訊ねる昴。メリーベルは懐かしい気持ちのまま立ち上がり、そうして昴の身体を優しく抱きしめた。彼女はとても弱い女の子だった。でも、今は数々の戦いや苦難を乗り越え、精神的にも肉体的にも大きく成長した。その成長を心から嬉しく思っからこそ……メリーベルは昴にあの時と同じ言葉を託す。

「壊してもいいから……。何度でも、貴方の為に作ってあげるから。だから、生きて帰ってきて」

「……。うん。ありがとう、メリーベル……。きつと……。きつと、勝

「つよ……」

昴は少し驚きながらもメリーベルの身体を抱き返した。ミュレイは相変わらず意識を失ったままで、昴はそんな彼女の頬を撫でて優しく微笑む。

「私が守るべきものは、ミュレイだけじゃない……。師匠や、奥さんが住んでいる私の世界を……。メリーベルの住んでいた世界を……。この、あらゆる全ての世界を……。守ってみせる。今度こそ……絶対に」

「……まあ、この世界の事は心配しなくてもいいと思う。多分、私の世界に生き残りは移民でも出来ると思うから」

「え！？ ほ、ほんとに!？」

「ええ。文明なんかもそんなに違いはないと思うから……。というか、この世界の文明は界層によって違ったりするし、すぐに適応出来ると思う。こつちの世界の“王”とは、ちよつとした知り合いだから」

「え……メリーベルってそんなすごい人だったんだ……。まあ、只者じゃないのだけはなんとなくわかるけどさ……」

「私の事より、今は目の前の問題。だから昴、後の事は気にしないで思いつきりやってきなさい。後腐れないように……。全力で」

昴は強く頷き、そうしてアタツシユケースを開いた。黄金の手甲を装着し、故郷の師匠に思いを馳せる。今の自分を見たら、彼は認めてくれるだろうか？ 笑って受け入れてくれるだろうか？

きつと彼は何もかもひっくるめて、自分のありのままを見て頷い

てくれるだろう。あの家での生活があったからこそ、今の自分がある……。追いつきたいと思う。追い抜きたいと思う。大切に思うからこそ……。認めてもらいたい。

「がんばるよ、師匠……。師匠に笑われないように……。最後まで諦めないでやり抜くよ。だから師匠……。私を護って」

ぎゅっと握り締める拳。黄金の力は静かに輝き、昴の言葉に応えようとしているかのようだった。昴は一度ミュレイを振り返り、それから笑顔を作った。

「行って来ます、ミュレイ……。今度会う時には、きっと何もかも、貴方を苦しめる全てがなくなっているように……」

メリーベルは出て行く昴の背中を見送り、静かにうな垂れた。きつとこの戦い、誰もが無事というわけには行かないだろう。誰も失わずには済まないだろう。だがそれでも、生き抜こうと懸命に戦う若者を止める事は出来ない。そしてその真っ直ぐな意思と力だけが、この世界を変える希望の力となるのだという事を……。メリーベルは知っていたから。

「……大丈夫よ。きっと彼女ならやり遂げる……。きっと、無事に帰ってくる。だから……。信じて待ちましよう？　ね、ミュレイ？」

目を瞑ったままのミュレイの頬を涙の雫が伝う。メリーベルは苦笑を浮かべ、それからきつとその場を後にした。何もかもが終わっていくこの世界の中で、未だ輝く確かな物……。その存在を、彼女もまた信じ続けていたから。

剣創のロクエンティア（１）

『うさはねえ、この世界に産まれてきて良かったの。シエルシちやんや、ハロルドちゃんや……ホクト君！ 皆と会えて……とつてもとつても楽しかったのっ』

割り当てられた自室の中、シエルシはかつて自分が着ていたザルヴァトーレのドレスに着替えていた。純白のドレス……その大きく肌蹴た背中には翼の紋章が浮かんでいる。その白き翼を覆い隠すかのように、姫はホクトがいつも着ていたジャケットに袖を通した。彼の好きだった煙草のにおいが染み付いた、うさ子が彼にプレゼントしたライターを忍ばせた上着……。なんとなく、ホクトが力を貸してくれるような気がして気持ちが引き締まるようだった。

『だから、この世界の物語をバッドエンドで終わらせたくないの。皆幸せになれるように……戦つてもきつとしようがないんだけど、でも皆がこれから笑っていられるように……。うさはね、そんな風に戦えたらいいなあって思うんだあ』

「……そうですね。誰かを憎むのではなく、誰かを愛せるように……戦えたらそれが一番です。それにしても……うさ子？」

『はづ？』

「貴方……剣になっちゃったのにやたらとしゃべれるんですね」

部屋の壁に立てかけられた創神剣ロクエンティアことうさ子に向

かつてシエルシは冷や汗を流しながら言葉を投げかける。剣はしばらく黙り込んだ後……当たり前のように言った。

『だってうさ、剣になったただけでうさはうさだよ？ うさねえ、元々人間じゃなくて人間っぽい形になってただけで、それが剣になったってだけなの〜っ！ はうはう！ はうはうっ！〜！』

「……………そうなんですか」

『それにねえ、メリーベルちゃん曰く、そのうちこの剣の力に慣れたら自由に形を変えられるようになるって〜。だからねえ、そのうちうさはうさの形に戻るのですっ』

「じゃあぜんぜん問題ないんですね……。なんか、うさ子が決死の覚悟で剣になったような気がして感動してたんですが……」

『！？ うさは……うさは、いつでも決死の覚悟なの……！ うさは……いつでもがんばってますっ！』

「ふふふ、そうですね。ええ、きっとそうですね……」

剣を膝の上に乗せ、シエルシはベッドの上に腰掛けた。うさ子ごと創神剣ロクエンティアの刀身を指先で撫でると、うさ子がくすぐったそうにもだえるような声を上げる。シエルシは優しく微笑み……そうして目を閉じる。

「ありがとう、うさ子……。これまで色々……。本当に色々あったけど……。貴方が傍に居てくれてよかった。最後、貴方と一緒に戦えて……。良かったです」

『うさもねえ、シエルシちゃんにはいっぱいいっぱいありがとうなの。うさもね、皆に感謝してるよ。でも……シエルシちゃん、いいの……?』

「え?」

『うさ、剣になっちゃったからわかるの。シエルシちゃんの時間は……止まっちゃってるんだよね? もう皆とは違う、ズレた存在になっちゃってる……。それじゃあもう……戦いに勝利しても、シエルシちゃんはずっと、ずっと、一人ぼっちのままになっちゃよう……。?』

「何を今更! ぜんぜんそんなのへっちゃらですよ? 私はその止まった時間の中で、自分出来る最良を考え続けます。むしろ、この時間を止めてくれた彼女に感謝しているくらいですから」

『シエルシちゃん……。じゃあ、うさはシエルシちゃんの傍にずっと、ずっといてあげるね? うさはねえ、シエルシちゃんとずっと友達だからね?』

「ふふふ、当然ですよ? 私たちはずっと友達です。ずっと、ずっと……何があっても。ありがとう、うさ子……」

一人と一振りの剣は、それからゆっくりと様々な思い出を語った。二人が出会った時の事……。これまでの戦い、そして離れ離れになっていた時間の事や、過去の事……。どれも、決して楽な話ではなかった。けれどもそこには確かに笑顔があつて、幸せがあつた。前に進もうという、強い意志があつた。だからこそ彼女たちはここに存続しているのだ。

いつだって諦めずに戦ってこられたのは、いつだって諦めない彼

が居てくれたからだ。彼はどんな時でも冗談交じりに、こんなのおつちやらだという顔をして恐ろしい困難を乗り越えていく……。苦しみも悲しみも、誰にも見せずにただ笑うその強さにどれだけ助けられたらだろうか？ 出会いから、先日の別れまでの間……。どんな思い出話をしてもしそこには彼の、ホクトの名前があつた。彼は本物ではなく。偽者ですらなく。何者にもなれず。孤独で、半端で、異端で……。それでも、彼はいつだって真っ直ぐだった。

くじけそうな時、決まってヒーローのように颯爽と現れては真つ暗闇の現実を一発で粉碎してしまうのだ。力強く、ぎゅっつと手を引くのだ。だからどんな泥沼の中からも歩き出せる。彼はあらゆる希望だった。不器用で、子供っぽくて、そして最強の魔剣使い……。今は敵となつた……。最後に戦わねばならない、彼の物語。

「……私は、彼の事が大好きです。愛しています。だからこそ……きつと彼が望まない“今”を認める事は出来ない」

「ホクト君は、世界の終焉なんて望んではいなかったの。きつと、それはヴァン君も一緒……。だからね、解き放つてあげなきゃいけないの。きつと限界まで肥大化して、悪意に飲み込まれているのはホクト君じゃなくて、あの魔剣……。ガリュウだと思つから」

蝕魔剣ガリュウ……。世界最強の魔剣にして、持つ者に過酷な運命を強いる剣……。その中に取り込まれた無数の死者の怨念が、大罪の中に含まれた神の悪意が、彼の肉体と精神を蝕んでいるのだ。だからこそ……。それが、本当は望まれない事であるがこそ……。それを、解き放たねばならない。誰よりも彼を愛するからこそ、誰よりも彼を理解するからこそ、彼を徹底的に否定しなければならぬ。

「私は彼を救いたい……。それはきつと、ただの私の我侷なんです。それでも私は……。彼を救いたい」

『力を貸すよ、シエルシちゃん。ホクト君のこと、好きだから……。赦してあげよう？ きつと、ホクト君はうさたちを赦してくれるよ。シエルシちゃんを……赦してくれるから』

剣を抱き、姫はうさ子の暖かな心を感じていた。とても鋭く、何もかもを切り裂くようなその結晶の刃に触れてもシエルシには傷一つつかなかった。この剣は何かを傷つけない剣……。護り、そして癒す為の剣。まるでうさ子の心そのものようだった。そしてそれは姫の願いの形そのものでもある。

「……さてと。それじゃあ、行きましようか。きつと皆も集まっている頃です」

『はう！ うさたち、最後の出撃なのっ！』

「ええ、これで最後です。これで、この世界を……本当の意味で赦しましょう。終わらせましょう……全てを」

部屋を出て行くシエルシ。その腰には鞘に収められたロクエンテイアの姿があつた。一步一步歩を進めながら、シエルシはホクトから教わった様々な事を思い返す。

剣の使い方、魔術の扱い……。それだけではない。笑い方も、怒り方も、知らなかった自分を次々に彼は見つけていく。数え切れない幸せがあつて、数え切れないときめきがあつて……。恋や、愛や、言葉に出来ないような優しく強い想いが胸の奥深くから湧き出してくる。

こんなにも好きだからこそ、戦おうと思える。立ち向かおうと思える。それがどんなに辛く悲しい決戦であつたとしても……乗り越えられる。仲間が傍に居る。この胸の中にたくさん思い出があ

る。だから　今よりもつと向こうへ。この絶望の一步先へ……踏み出す事が出来る。

インフェル・ノアの格納庫、そこに仲間たちは集まっていた。ウサクがシエルシに気づいて手を振り、仲間たちが次々にシエルシへと振り返る。うさ子が優しく笑っている気がした。皆が自分を呼んでいる。こんなにも絶望的な状況なのに、何故だろう……とても心穏やかだ。

「……行こう、シエルシ。共に……世界の果てへ」

昴が手を差し伸べ、それをシエルシはそつと受ける。白き騎士の少女と白き姫の少女は言葉もなく誓う……。胸の奥、心の中、魂の上で……。

「必ず、勝利を」

二人の言葉が重なる。心が重なる。かつては泣いてばかりだった昴も……。諦めてばかりだったシエルシも……。二人にはそれぞれの物語がある。それぞれの過去がある。そしてそれぞれの物語の、たった一つの終着がある。

仲間たちはガルガンチュアへと乗り込み、最後の戦いの地へ向けて飛び立っていく。孤独な……とても孤独な戦い。けれどもそれは彼らにとって必然たる決戦である。誰もが別々の、しかし一つの想いを胸に羽ばたく……。飛翔する剣の船は天へと舞い登っていく。それぞれの、複雑な思いと決意を乗せて……。

剣創のロクエンティア(2)

剣の船は、大空へと羽ばたいて行く。界層を超えて、次元の壁を越えて、もう一度エデンへ……。その、エデンの先へ。

沢山の魔物がその行き先を阻んでも、フラタニティの力を得たガルガンチュアを止める事は出来ない。見る見る内に空へと舞い上がり、何もかもを超えていく船……。彼らがそうして辿りついたのは巨大な剣の世界の最上階……。第一界層、“バベル”……。それは塔の最上階。ロクエンティアという名の世界の剣の柄……。掛け値なしの最果て、そこは透明のスクリーンのような大地の上に存在する不思議な空間だった。大地には崩落していく世界の様子が映し出されており、まさにそこは世界を管理する存在の住まう場所である。その中枢、無数の光のスクリーンに囲まれてヴァンはガルガンチュアを見上げていた。

空中で一度静止したガルガンチュアの甲板から二つの人影が飛び降り、バベルの大地へと墜ちていく。それはシエルシを抱えた昴の姿だった。足元に氷の道を作りながら昴はシエルシを両腕で抱え、そつと大地へと降り立つ。それを見届けてガルガンチュアは引き返し、今度は世界の最も深い場所への潜航を開始した。

スクリーンの海を突き破り、光を巻き上げて消えていくガルガンチュア……。それを背景に白騎士は姫を下ろし、自らの手の中に刀を構築する。終焉の大地の上、シエルシと昴は黒き闇の魔王と対峙する。王はガリユウも持たずに歩み寄り、そして二人に問いかけた。

「仲間全員でかかってこなくて良かったのか？ まさか、たった二人で挑んでくるとはな」

「貴様が相手では人数は意味を成さないだろう？ 私たちは貴様に

匹敵し得るだけの力を持つ戦力……。少数精鋭だよ」

「……理に適った事か。だが、アニメは間も無く復活する……。僅かな時間でこの俺を倒せるかな」

「残り時間が僅かなら、きつと皆が引き伸ばしてくれませぬ。延長戦と洒落込みませんか、ヴァン・ノーレッジ？ 貴方が呪うこの世界……容易くやらせたりはしません」

昂がユウガを鞘から抜き、シエルシモロクエンティアをすらりと抜いて手に構える。結晶の刀身を持つ細身の剣……。ロクエンティア。それはホクトのガリユウとは対照的な、似ても似つかない剣。シエルシの……。うさ子の、透き通った心がその刀身となるのであれば、ガリユウを形作る感情はどんなものだろうか。

三人が対峙するまさにその時、ガルガンチュアは真つ逆様にアニメ目掛けて降下を続けていた。あつという間に全ての階層を一から六まで突き抜け　UGよりも更に向こう。この世界という名の封印の剣の切っ先へ、希望の船は落ちていく。黒く渦巻く、巨大な闇の中へ……。

そこに居たのはこの世界という規模の剣を胸に突き刺した、巨大な巨大な黒き闇の巨人だった。黒く、どろどろと渦巻くその色一つ一つが全て神の悪意そのものである。そしてそれは今世界最強の魔剣使いの剣とリンクし、剣の中に取り込まれた数え切れない悪意によって満ち満ちている。憎悪の化身　全てを破壊したいと言う欲求に囚われたその魔物は巨大すぎる腕を伸ばし、剣を掴んでそれを引き抜こうとしていた。

剣の開放はすなわちアニメの完全復活を意味する。それだけは避けなければならぬ。姫と騎士が、二人の少女が今このアニメを復活させようとする敵と戦っている。それを無駄にしてしまわない為に　どうしても、時間稼ぎは必要なのだ。

「あれがアニマ……？ な、なんてバカでかさ……」

「あんなのどうやって相手をすれば良いのでござるか……？」

「とにかく回りをうるちよろしながら砲撃してみるしかないだろう。甲板に出て応戦するぞ……！ すぐに奴は魔物を放ってくる」

ゲオルグの言葉の直後、迫るガルガンチュアに気づいたアニマはその巨大な口を開き、大量の魔物を吐き出してきた。ガルガンチュアは船全体の装甲を変形させ、巨大な一振りの剣に似た形へと変貌する。そして光をまとって魔物の群れを食い破り、旋回しながら淡く光の尾を引いていく。

一斉に放たれた魔術砲弾がアニマへと降り注ぎ、巨大な獣の悲鳴が響き渡った。もちろん、致命傷には程遠い。何発打ち込めば効果があるのかもわからない。それでも船は再び戦場へと舞い戻っていく。

甲板へと出た口ゼたちはそれぞれが武器を手に取り、ガルガンチュアへと近づいてくる魔物を迎え撃つ。船は攻撃に集中させなければ、あの巨大な化物にダメージを与える事は出来ないだろう。護りは彼らが自分自身の手で果たすしかない。アクティが空にスピリットの銃弾を放ち、それを合図に口ゼが剣を鳴り響かせる。

「さあ、ここが最後の戦場だ……！ シェルシと昂がヴァンを止めるのが先か、僕らが殺されるのが先か……！ せいぜい試してみようじゃないか！」

「拙者、ここで死んでも悔いはないでござるよ……！ 皆と一緒に戦えた事を誇りに思うでござる……！」

「縁起でもない事言わないでくれる……？　ボクはまだ、こんなところで死ぬ気はないよ！」

「そうだ。俺たちはまだ死ぬわけにはいかない。特に、子供たちにはまだ未来があるんだ……。せいぜい死なないように気張ってくれよ」

「私はまだ、世界を知らない……。シグマールさんとの約束を護るためにも……。ここで死ぬわけにはいかない！」

それぞれがそれぞれの思いを胸に、魔剣を取った。それは何かを傷つける力……。そして同時に、何かを護る力。襲い掛かってくる翼を持つ魔物たち……。何もかもを埋め尽くすようなその魔物の群れに、少年たちは真っ直ぐに立ち向かっていく。

天の上、バベルの空間ではシエルシと昴、そしてヴァンのにらみ合いが続いていた。やがてヴァンは呆れたような声と共に手の中にガリユウを構築し、それを大地に突き刺して顔を上げた。

「……やはり、俺の最後の敵はお前たちか……。白騎士……。そして、シエルシ・ルナリア・ザルヴァートレ」

「ヴァン……。貴方はどうして、こんな事を……。？　こんな事をしたところで、貴方の空虚な気持ちも埋まるわけではないのに……」

「お前に何が判る……。？　俺は何もかもを失ってきた。護ろうとした全てを悉く目の前で失ってきたんだ。俺はこの世界を憎む……。俺をこの世界に産み落とした、この世界そのものを憎む　！」

「貴方が本当に護りたかったものは、人や……。命や、世界ではなかったはずです！　ヴァン……。どうか目を覚まして！　貴方は、シヤ

ナクやミラや……沢山の人との間に確かに愛情を感じていたはずでしょう!？」

「黙れ　！　愛が何だというんだ！　愛があれば何かが護れるのか!?　救われるのか!?　俺はもう、愛を信じない……。俺はこの力で孤独になる。自ら望んで、この世界の孤独の全てを手に入れる。それが我が理想……我が魂が安らぐ唯一の方法なんだ!」

「シエルシの言葉を借りるわけじゃないけど……ヴァン、私は愛の力を信じている。愛さえあればなんでも出来る……そんな気になるんだ。だから私はお前とも戦える。例え、お前が兄さんと同じ存在だったとしても　」

昂がユウガを振り、改めてその太刀を両手で構えた。黄金の手甲は昂の腕を伝い、刀身に魔力を注いでいく。以前のユウガを数段上回る力を入れたそれは、最早ヴァン・ノーレッジにさえ匹敵する。何度も何度も対峙し、何度も何度も刃を交えてきた二人……。やはり、当然、そしてこの決着は二人にとって必然だったのだ。彼女の存在がこの世界の運命を歪めた。本来ならばもっと早い段階で世界はこう“なるべき”だったのだ。だが……彼女の存在がヴァンを封じ、ホクトを目覚めさせた。ならばこれは当然の戦いである。彼女が歪めた運命……再び捻じ曲げられるとしたら、彼女をおいて他にいないだろう。

ヴァンが大地にガリユウを突き刺したまま、四方八方から二人目掛けて魔剣を放った。次々に降り注ぐ剣　だがそれは昂にもシエルシにも届かない。昂はシエルシを背にユウガの結界を発動する。それは新たに覚醒したミラの力……。破魔の波動を周囲に拡散させ、全方位の魔力をキャンセルする力である。ヴァンは遠距離攻撃を諦め、重く鳴り響くガリユウを引き抜いた。

「厄介な能力だな……。なら、大罪の内六つを取り込んだこの剣はどうだ……。？ 相殺不可能な絶対的魔力……。最強の魔剣の力を思い知れ」

ガリユウはぎよろりと目を剥き、空に吼えた。獣のように口を開き、ダラダラと涎を垂らして二人を見つめる。ヴァンはうつすらと笑みを浮かべ、破壊の権化と化したガリユウを片手に猛然と走り出した。

剣創のロクエンティア（2）

繰り出されるガリユウの一撃　それに昴はユウガを合わせる。シエルシを護るかのように前に出た昴……。彼女には考えがあった。そしてその考えを遂行する為に、シエルシだけは絶対に護らねばならない。

ヴァンが刃を横に薙ぎ、昴はそれを跳躍し回避、ヴァンの背後を取ると同時に刃を放つ。振り返らずにガリユウの反応のみでそれを受けたヴァン……。二人は何度も位置を入れ替え、壮絶な戦いを演じる。刃と刃が何度も火花を散らして音を奏で、昴とヴァンはダンスの中で見つめ合う。大罪を飲み込んだ剣ガリユウと、ミラの愛の結晶であるユウガ……。その二つが音を立て、爆ぜるように何度も何度もお互いを拒絶し続けていた。

それは正に過去の再現。かつて二人がまだ敵同士であった頃。ヴァンがミュレイの命を奪おうと、ソレイユを奪おうとしていた頃のように……。昴の感覚は斬劇の中で徐々に切れ味を増していく。得の停止や加速を使わずともガリユウと互角に打ち合える程に……。

スクリーンに映し出されるのはガルガンチュアに襲い掛かる魔物の映像。その映像の上、白と黒の魔剣使いは踊り続ける。

二人の攻防、それを眺める人影は二つあった。昴の背後、ロクエンティアを片手にしたシエルシ……。そしてヴァンの背後、悲しげな眼差しでシエルシを見つめるミラの姿である。そのミラはシエルシをこの世界に引き返したミラとは違う……。そう、所詮あのミラも、あのタケルも、全てはオデッセイが情報から再構築したホムンクルスに過ぎない。定着する魂は完全ではなく、ただそれ“らしきもの”ではない。本当のミラの魂が今昴の剣の中にあるというのなら、そのミラの形をした存在は虚構に過ぎない。その事実は誰より彼女本人が一番良く判っていた。

踊る、黒と白……。斬撃の衝撃が大地を削り、音を立て、この天の上の更にも上の世界に鳴り響く……。シエルシは言葉もなくただミラを見つめ続ける。そしてミラは……。何かを言いかけ、その口をそっと閉じた。

彼女にとって大切な事は、きっとヴァンと共にある事だったのだろう。悲しげに目を細め、シエルシはロクエンティアを見つめる。半透明の刃はきらりと光を浴びて輝き、そして小さく声をかけた。

『シエルシちゃん……』

「……判ってます。彼女はただ、見届けに来ただけ……。本当の自分と、自分が愛した人……。その戦いの結末を……」

加速した昴は音を超え、衝撃波を放ちながら剣を繰り出す。昴の移動の軌跡をなぞるかのように大地が燃え上がり、打ち込むその一発の重さは鋼鉄さえも滑らかに切り裂くだろう。猛スピードでの猛攻……。ヴァンはそれを右手にガリユウ、左手にエリシオンを構築して打ち払っていた。

片手を翳し、時を停止させる昴。それを相殺するかのようにヴァ

ンも同じく手を前に突き出した。二人の掌の前に魔方陣が浮かび上がり、それが同時に硝子が碎けるような音と共に散っていく。その光を掻い潜り、昴は低い姿勢から飛び込み剣を放つ。切っ先はヴァンの胸を浅く斬りつけ、反撃に繰り出した蹴りが昴の脇腹へと食い込んだ。

吹き飛び、同時に左右に散る二人……。昴は口の中にあふれた血を吐き出し、ヴァンは両手の二対の剣をくるりと回し、改めて構えなおす。二人の戦力は互角……。否、やはりまだヴァンに分があった。ヴァンの魔力は無尽蔵……。そして何より魔剣使いとして非常に優秀である。昴も健闘はしている。だが、このままでは届かない。

「どうした？　せつかく二人居るんだ、同時にかかってきたらどうだ？　そうすれば少しは話が違うかもしれないぞ」

「昴……」

「判ってる。兄さんを助けたいんだろ？」

「創神剣ロクエンティアなら、恐らく彼の中にある大罪を相殺する事が出来るはずです。でも、それほどまでの力を刀身に収束するには時間がかかります」

『うさが頑張ってラブパワーをためるからっ！　昴ちゃん……時間稼いで！』

「……ラブパワーって……。まあいい、チャンスは一回だけだよ。それで兄さんを取り戻せなければ……。二人係りであいつを殺すしかない」

「判っています……。昴、ありがとう」

シエルシは目を瞑り、そして結晶の剣を掲げる。刀身に光が集まり、徐々に輝きを増していく……。シエルシの足元には巨大な魔方阵が浮かび上がり、そこから放たれる小さな光の粒が次々にロクエンティアへと吸い込まれていった。

突然術式を発動したロクエンティアに反応し、ガリユウが怯えるように震える。大罪と一体化したヴァンにとって、それは既に何か説明を受けずともはつきりと感じ取れるほど危険で不快な光だった。シエルシの掲げる剣……。それだけは絶対に受けてはいけないと、全ての大罪が叫んでいる。それは昴にも影響を及ぼすはずだったが

彼女は何故かユウガの力を鈍らせる事はなかった。

ユウガもまた、淡く輝く白い光に包まれていたのである。それはミラの魂の光……。ミラは己の魂をユウガに宿して死んでいった。その残されていた僅かな彼女の力が昴を護っているのだ。しかしそれも長くは持たない……。ミラが完全に消え去ってしまったら、昴を護る物はもう何もなくなってしまふ。

どちらにせよ、時間との戦い……。昴にせよシエルシにせよ、ヴァンとて同じ事だ。タイムリミットは迫っている……。震えるガリユウを制御し、ヴァンは冷や汗を流しながらシエルシを睨み付けた。しかしその視線を遮るかのようになり、昴が間に割って入る。

「 退け、白騎士……」

「そういうわけにはいかない。最後まで……付き合ってもらおうか、魔剣狩り ！」

昴が動き出し、ヴァンはそれに応じる形でガリユウを繰り出した。だがその動きは先ほどまでのキレがなく、すれ違う昴の一閃はヴァンの片腕を切り落とした。それは切断された腕が大地に落ちるより早く影によって回収され、何事もなかったかのようにくつついてし

まう。破魔の力を以ってしても、今のヴァンはもう殺せるような存在ではないのだ。だが、それでいい。ヴァンの身体を傷つけるのが目的ではないのだ。昴は背後に回った勢いそのまま、ヴァンの胴体を背中から切りつける。男はよろめき、繰り出したガリユウは昴にはかすりもしなかった。

「貴様ら……!?!」

「悪いがもう少し付き合ってもらおうぞ……。どうせこれで貴様との因縁も最後なんだ……。楽しんで、行けよ　ッ!」

昴が力を振り絞り、刃を繰り出す。それが再びガリユウと激突し、激しく大気を震わせた。

その頃、アニメと戦う仲間たちは傷つき、魔物の群れに苦戦していた。次々に被弾するガルガンチュアはいくら強固な装甲と結界を持つとは言え、無敵の船ではない。徐々に推力が低下し、敵に追いつかれ、包囲され、集中攻撃を受けつつあった。

甲板の上に立ち、ロゼたちは何とかそれに抵抗していたが、無尽蔵に湧き出し続ける魔物は倒しても倒しても文字通りキリがない。肩で息をしながら魔物を殴り飛ばし、ゲオルクが振り返りながら叫んだ。

「お前ら無事か!?　傷ついてる奴は少し下がってる!　ここは俺が何とか持たせる!」

「何を言っているのでござるか……!　ゲオルグ殿もボロボロでござるよ!　それにどうせ、逃げる場所なんてないでござる!」

「そつだよ……!　ボクたちはここを凌がなきゃ帰る場所すらないんだ……。へこたれているわけには、いかない……!」

アクティがスピリットを構え、刃の弾丸を連射する。それが魔物に命中し、墜落していくが……すぐに次の魔物がやってくる。その魔物を切り払い、ロゼはアクティをかばって前に出た。

「皆、お互いをカバーしあうんだ！ チームワークで何とかこの局面を乗り切らなきゃ！ アクティ、僕の背中を……！」

「チームワークって言ったって、限度つてもんがあるよ……！」

「あ、ああっ！？ 皆さん……上です！ 上を見てください！」

エレットのエクスカリバーが何かが見れた事を感じる。誰もが慌てて上を見上げると……そこには何かが続々と上から降り注ぐうとしていた。誰もが青ざめた表情を浮かべ、絶望が色濃くなっている……。だが。

「あれは……インフェル・ノアです！！」

エレットの言葉に続き、降下してきたインフェル・ノアは一斉にアニメへと攻撃を開始する。次から次へと機動兵器や戦艦が出撃し、アニメやガルガンチュアを取り囲む魔物たちへと襲い掛かった。

わけが判らずに困惑するロゼたち。そんなロゼたちの立つガルガンチュアの看板へと二つの人影が落下してきた。それは巨大な機械の人形のような魔剣、プリメーラに抱えられたルキアとジエミニであった。

「ヒーロー参上！ 遅れてすまなかったな！ だが、主役は遅れてやってくるもんだ。なぜならそのほうが 目立つからな！」

「……誰？」

「声を重ねるなアアアアアッ！！！！」「元”帝国騎士団剣誓隊少将！重力使いのジェミニとは俺の事だ！」

登場するや否や能力名を名乗ってしまうあたり、非常に頭が悪そうだった。それは以前イスルギとシエルシが彼と出会った時とまったく同じリアクションである。だが今回はその時とは違う事もあった。

「ルキア少将……！？ どうしてあんたが……？」

「……この馬鹿が、どうしても一緒についてウザいから……仕方なく」「何言ってるんだ！ この世界の人々が一つになろうとしている今！俺たちが手を取り合い戦わなくて……どうするんだ!？」

と、叫びながらジェミニは接近していた魔物の群れ目掛けて重力の波動を放つ。魔物が一斉に弾き飛ばされ遠ざかるのを見て口ゼたちは啞然として振り返る。

「お前たちの熱い思い……俺たちも受け取った！ インフェル・ノアはケルヴィーたちが修理してあの様子だ！ 剣誓隊もこのミッシヨンに参加するぜ！」

「まあ……なんか結果的にそういうことになったみたいだから……よろしく」

ため息混じりにぺこりと小さく頭を下げるルキア。彼らの頭上を元ギルドの船団が一斉に通り抜け、爆薬をアニメマへ投下していく。

帝国の戦闘母艦から魔道砲が連射され、空を埋め尽くす魔物へ降り注ぐ……。魔剣使いたちが。元ギルドのメンバーたちが。元帝国の騎士たちが。ザルヴァトーレの。ククラカンの。この世界に生きる沢山の人が……。集まり、そして魔物と戦っていた。アニマと……。己の運命と戦っていた。何もこれは驚くべき事ではない。これはホクトたちがエデンへ向かった時には既に決まっていた約束なのだ。

「手を貸してくれるのか……？ よくわかんないけど、記憶にない人……」

「ジエミニ少将です！？ あんまり酷いと泣くぜ！？ 力を貸すも何も、俺は目立てればなんでもいいからな。それにオデッセイの裏切りには頭にきてるんだ」

「右に同じ……。だから、私たちは別にあんたたちに力を貸すために来たわけじゃない」

「自分たちにとっての戦いを……。ここで、ケリをつけにきたってだけの話だ！」

迫る魔物、それをルキアのプリメーラが長い腕を振り回し、粉碎する。ジエミニは二対の魔剣を振り回し、次々に魔物を撃退していく……。先ほどまで諦めムードが漂いつつあった戦場に、次々に活気が湧き上がってくる。

それでもまだ、これでもまだ、尚まだ 戦況は圧倒的に不利だ。戦場に出てきたからといって何かが出来る人間ばかりではない。次々に仲間の戦艦が撃墜されていく……。彼らは戦う力などろくに持たなかったのかもしれない。それでも……。集まったのだ。

帝国と反帝国……。憎みあい、いがみ合っていた人々。しかし空に

舞うガルガンチュアを見て、誰もが心を動かされたのだ。どうせ帰る場所はない。どうせ護るべき世界はない。だから　彼らは己の意思で。主義主張でもなく、善悪でもなく、ただ人の人間として…ケリをつけに来たのである。

「みんな…まだやれるよな！」

「もちろんでござるよっ！　拙者、勇気百倍でござるー！」

「ボクたちは、一人じゃない…。ボクたちは…傷つけあうだけじゃないんだ…！」

アニメとの戦いを映し出す大地のスクリーン、それを見下ろしながらシエルシは強く思いを込めていた。想いを　。心を　。愛を　。昴は冗談だと思っただかもしれないが、愛の力を充填するというのは決して間違いなどではない。シエルシは刀身に思い切り、ありったけの気持ちを込める。それだけが　そしてそれこそが唯一、大罪に対抗する手段なのだ。

神は心の中にある闇をアニメとして放ち、それを制御する悪意の中枢を英雄が剣の形にした…それが大罪である。ならばこの剣は神の愛そのもの…。神がこの世界をうさ子として、人間として生きて知った光の全て…。あらゆる邪悪を跳ね除ける、全ての罪を包み込む…愛の力。掲げた神の力に光が収束し、それは渦巻き刀身を徐々に巨大化させていく。

「…神よ…。この世界を護ろうと戦う、世界を愛する全ての人の子らよ　！　神の剣に集え…！　我が魂に、集え　！！」

一気に光が降り注ぎ、それは光の柱となって天をも貫き広がっていく。その光の中、シエルシはその背中に淡く輝く純白の羽を広げ、

大剣と化したロクエンティアを両手で構えた。

「私は彼を救いたい……」

『うさも、ホクト君を助けてあげたい!』

「『 私たちは、この世界を愛している 』」

創神剣ロクエンティアの異常に気づき、ヴァンが慌てて振り返る。だがその動きを封じるように昂が腕を翳して術式を発動する。ヴァンの周囲に時間を固定する魔術が一斉に発動し、ヴァンは一歩も身動きが取れない状態に拘束されてしまった。

「き、貴様……!?!」

「……終わりだよ、ヴァン。さあ勝負だ……。シエルシの愛と、貴様の憎悪……どちらの感情がより強く、勝っているのか……」

シエルシは光の翼を羽ばたかせ、浮遊しながら剣を振り上げて舞い上がった。ヴァンの真上。そこから落下しながらシエルシは光そのものを大罪へと叩き込む。沢山の思い出……涙を流し、齒を食いしぼり、そしてシエルシは愛する人の身体に刃を食い込ませて行く。

「創神剣ロクエンティア……! 神よ……! うさ子……!! 私に、ホクトを救う力を ツ……!!!」

『はぁうううううううううう~~~~ツ……!!!』

刃が接触している部分から黒い闇の力が浄化され、ホクトの身体

から弾き飛ばされていく。愛の光と憎悪の間……それがせめぎあい、眩すぎる輝きがバベルを覆いつくしていた。昂は少し離れた場所からその様子を固唾を呑んで見守るしかない。

「大罪が……！？ 俺の、憎しみが……負けるというのか……！？
どれほどの……どれほどの、光が……お前を……！？」

「この光は私の光ではありません……！ これは……ホクト、貴方が私にくれた光です！ だから この一撃で貴方を救済しますッ
！！」

より一層光を放ち、ロクエンティアは浄化の力を増していく。シエルシは思い切り両腕に力を込め、思いを込め、叫びながら剣を振りぬく。ヴァンの身体を袈裟になぎ払う一閃 その衝撃の余波はスクリーンの大地を片っ端から叩き割り、全てを砂嵐に変えていく。

「うわあああああああああッ！！！！」

更に低い姿勢から身体を捻り、再び両手でロクエンティアを繰り出す。止めの駄目押しが横にヴァンの身体を薙ぎ払い、再び激しい衝撃がバベルを襲った。体に十字の光を刻まれ、ヴァンは自由に動かない身体を震わせながら目を見開いた。

「大罪が……消える……だと！？」

「貴方は……とてもかわいそうな子。だから、これでもう……
終わりにしましょう。これが貴方の……。貴方にとっての、救済と終焉です」

刃を振り、シエルシは光の刀身を解除してそれを鞘に収める。そ

の鞘が閉ざされる軽やかな音色と共にヴァンの身体の内側から光が溢れ、男の肉体は光の中に飲み込まれていった。

人になってよく覚えてなかったけど……これが兄さんだ。本当の……北条北斗だよ」

「では……あれは？」

気絶した北斗のと黒い鎧を纏ったホクトを見比べる。だが考えてみればすぐにわかる事だ。ロクエンティアによる攻撃は、恐らく完全ではなかったのだ。つまり“失敗”。確かに北斗をガリユウから分離する事には成功した。だがそれだけである。ガリユウは未だに健在……。北斗とヴァン、その二つが別々に存在し続けている。だがヴァンへのダメージも相当なものだったのか、黒衣の男は荒々しく呼吸を乱し、胸を切り裂いた十字の傷跡に苦しんでいた。大罪へ、確かに攻撃は通ったのだ。だがその刹那、ヴァンは北斗を切り離してその場から逃れた……。それが真実である。

『ふわぁ……？　これがほんとの北斗君なの……？　なんか、昴ちゃんと似てる？』

「そりゃ、兄妹だからね……って、それどころじゃないよ。どうするんだ、アレ　！？」

ヴァンは憎悪の鎧を纏い、その背中に六つの大罪の剣を並べて両腕を広げた。ダメージは負っている　だが、最強の魔剣使いはまだ健在なのである。ロクエンティアは先ほどの一撃に殆どの力を込め、使い果たしてしまった。更に大罪浄化の光を受け、昴のユウガも弱まってしまっている。文字通りの絶体絶命……。そんな中、ヴァンは鎧を軋ませながら一歩二人へと歩み寄る。

『やってくれたな……。まさか、大罪の対存在をぶつけてくるとは……。だが、残念だったな……。俺は……まだ生きているぞ』

低く笑い出し、やがてそれは高笑いへと変わっていく。くぐもった声が響き渡り……シエルシと昴は打ちひしがれた表情を浮かべた。作戦は失敗したのだ。アニメは健在、大罪も健在……ヴァン・ノーレッジは未だ世界に影響を及ぼし続けている。

『その剣は危険すぎるな……。そいつを渡してもらおうか。その剣に大罪が相殺出来るのならば、大罪でその剣を破壊する事も可能だろう』

「……ッ！ シエルシ、兄さんを連れて下がって！ ヤツは私が相手をする！」

「で、でも……！？」

「今のロクエンティアじゃ力が足りなすぎる……！ 勝機を待つんだ……それしか手段はない！」

焦った様子で叫ぶ昴。それもそのはず、次にロクエンティアが力を放てるのはいつになるのか検討もつかない。それに下の世界ではアニメと仲間たちが戦っているのだ。こちらの戦闘が長引けば長引くほど、下の仲間たちの危険は大きくなる……。のんびりとロクエンティアの力が戻るのを待っている余裕はないのだ。

雄たけびを上げ、昴は果敢にヴァンへと突っ込んでいく。だがヴァンに既に油断はなく、そして手加減もない。六つの大罪の力を万全に生かし、繰り出すガリユウの一撃。それは昴では防ぎ切れず、その身体を鋭く切り刻み、弾き飛ばした。

「昴ッ……！」

『は、はづつ……！ 昴ちゃん……このままじゃ、昴ちゃんがっ！』

「うさ子、なんとかさっきのもう一発出来ないんですか!？」

『そんなにほいほい強いのは打てないの……。はづつ……。うさもがんばってるけど……力が足りないの……』』

「そんな……!? 昴、逃げて!! 殺されてしまっつ!!!!!!」

シエルシの叫びは昴には届いていた。だが引き下がるわけにはいかない……。シエルシがやられてしまえば、創神剣ロクエンティアが奪われてしまえば、それこそ一環の終わりである。昴は必死でヴァンの動きに対応しようと喰らいつくが、六つの大罪を自在に使いこなすヴァン相手では余りにも力が至らない。次々に切り付けられ、蹴り飛ばされ、昴は血を吐き何度も大地に叩き付けられた。

遠のいていく意識の中、それでもまた立ち上がる……。震える足で、血染めの指で、何度も何度も……。ヴァンは昴をいたぶるように何度も何度も攻撃を加え、昴はその度に悲鳴を上げてもだえ苦しんだ。

「昴! 昴 !! もう止めてください、ヴァン!! 何が……何が貴方をそうまでさせるんですかッ!!!!!!」

『俺は憎悪の化身……。世界がそう望むからこそ、俺はそう在るのだ。この世界に存在する悪意の結晶、大罪……。それがこんなにも俺に馴染んでいる。あれだけ望んだ力が……。全てを破壊する力が手の中にある。それを使わないほうがおかしな話だろう?』

昴の髪を掴み、ヴァンは強引にその身体を引き上げた。昴は全身から血を流し、腫れた顔でヴァンを睨みつける。その喉元にガリユ

ウを突きつけ、ヴァンが笑った。その時である。背後から彼の腕を掴む手があった。その人物は……意外な事にミラ・ヨシノであった。

「もう止めましょう、ヴァン……。貴方はこんな事望んでいなかったはずよ……」

『……………ミラ』

鼻を手放し、ヴァンはゆっくりと振り返る。そんなヴァンにミラは優しく微笑みかけるが、その表情は一瞬で急変する。その胴体をガリユウの巨大な刃が貫いていたのである。口から血を吐き、崩れ落ちるミラ……。その胴体から刃を引き抜き、血を振りまいてヴァンは静かに低く笑った。

『俺の邪魔をするからそうなるんだ……。お前はなあ……。もう死んでるんだよ。もう終わってるんだ、俺の中で……。人に絶望を与えられるだけ与え、勝手に死んだ哀れな姫……。お前は用無しだよ』

「……………ヴァ、ン……………」

震える手を伸ばし、ヴァンへと微笑みかけるミラ。その身体をガリユウが食いちぎり、何度も何度も噛み千切って飲み込んでいく。グロテスクな音と共に内臓や血がぶちまけられ、その光景にシエルシは思わず口元を押さえた。

『見ろ、これが世界の闇だ……。ああ、なんて心地良い……。闇が俺と同化し、俺は闇の一つになる……。この世界中の闇が俺の中で渦巻いているんだ。俺の孤独は癒される……。数え切れない、憎悪の渦の中で』

「狂ってる……」

『大罪を持つ者が狂気を口にするのか……？ ああ、俺は狂っているとも。だからこそ俺を狂わせたこの世界を、俺は全ての闇で飲み干してかき消してやるんだ』

再び昴へと歩み寄り、剣を振り上げるヴァン……。昴はユウガでそれを受けようとしますが、身体が言う事を聞かない。シエルシが大声で昴の名前を叫び 昴が己の死を覚悟した、その時である。

「おいおい、ちょっと待てよ。人の妹……何勝手に殺そうとしてんだ」

誰かの声が聞こえた。そして、足音が聞こえた……。とても、懐かしい声だった。昴の背後、一人の男が立っていた。黒き長髪を靡かせ、魔剣も持たずに佇んでいた。だが何故だろう、それだけでとても心強く感じた。懐かしい声、懐かしい感覚……。傷ついた昴はゆつくりと振り返り、そして彼の顔を覗き見た。

優しい、とても穏やかな笑顔だった。長い間捜し求めた……。追い求めた笑顔が、あの頃と変わらずにそこにあつた。座り込んだ昴の頭をくしゃりと撫で、そうして目を細め、笑う。昴は両目から涙をこぼし……。その胸に飛び込んだ。

「兄さん……お兄ちゃん……っ！！ 会いたかった……ずっと、ずっと会いたかった……っ！！」

「……長い間、心配かけさせちまったな……。でももう大丈夫だ。俺は、ずっとお前のお兄ちゃんだよ」

「私……私、お兄ちゃんにずっと謝りたくて……。ずっと、ずっと……謝りたくてっ」

あの日、あのビルの屋上で止まってしまったままの時間がゆっくと動き出す。奇妙な……。とても奇妙な再会だった。再会はとつくに果たしていたはずだった。けれどあの懐かしい声で、懐かしい顔で……。それがたまらなく切なく、寂しく、嬉しかった。北条北斗は妹を抱き、その頭を優しく撫でる。二人の兄と妹の邂逅は　　こんな時になって、ようやく果たされたのだ　　。

だがそれも長くは続かない。ヴァンはお構いなしに二人の前に刃を振り上げていた。シエルシがそれに気づいて声を上げる　　よりも早く、北斗はヴァンを鋭く睨みつける。魔剣も持たない、ただの人間の睨み……。それに何故かヴァンは気圧され、後退を余儀なくされていた。

それは理解に苦しむ事態だった。不要だと判断し、身体から切り離れた別人格……。所詮魔剣一つ持たないただの人間。それが何故この傷ついた少女を抱きかかえて睨むだけで、これだけの威力があるのか。迫力などというレベルではなかった。男はまるで怪物のように、獣のように、そして剣のように……。鋭利な眼差しで、文字通りヴァンを射抜いたのである。

「……大丈夫だ。あの日の事は、後悔なんかしてねえよ。お前は何にも悪くねえ。悪いのは全部、お前を護れなかった兄ちゃんの方だ……。だから……。な、昴？　もうちょっとだけ、休んでくれよ。もうちょっとだけ……。俺に任せてくれよ」

昴がきつく握り締めたユウガ、それにかかる指を一つ一つ取り外し、北斗はユウガを握り締める。そうして傷ついた昴を護る為に前進　　。ヴァンの目の前に立ち、二人の魔剣狩りは対峙する。

『貴様……』

「俺はヴァンではない、北斗君だ……ってな。よお、“魔剣狩り”……。随分と調子がよさそうじゃねえか、ああ？」

『図に乗るなよ、異世界の人間風情が……。その大罪の欠片で何が出来る？ 貴様には何も出来はしない。何も……！』

「そりゃわかんねえさ。俺は救世主 この世界を救う為に召還されたんだぜ？ なら、伝説になぞらえてやってみるのも悪くないんじゃないの？」

北斗はユウガの柄から紐を一本引き抜き、それで長髪を括った。そうして深く息を吸い……大きな声で叫ぶ。

「 シェルシ・ルナリア・ザルヴァトーレッツ！！！！！！」

「は、はいっ!？」

「……俺一人じゃ勝てそうにもねえ。力……貸してくれるか？」

振り返り、北斗は優しく微笑みながら片手を伸ばす。何を言いたいのか、何がしたいのか……何故かすぐにわかってしまった。そうしてどうしようもないくらいに実感するのだ。彼は北条北斗……。自分たちが愛し、そして信じた人なのだ。だから 姫は迷い無く、神の愛を乗せた剣を男へと投げ渡した。

北斗はロクエンティアとユウガ、二つの剣を左右に持ち、以前と変わらぬ勇姿を見せる。ジーンズに革ジャンのラフすぎる格好の英雄はその姿からは考えられないほどかけ離れた、美しい剣の構えを見せる。それは、彼が ホクトが北斗であるという事の証。もう

一人の、世界最強の魔剣使い　その力を持つ、証だった。

『この俺と戦うつもりか……？』

「色々だせえところ見せちまったからな。それくらいやんなきゃチヤラってわけにはいかねえだろ？」

『ク……クククツ！　思い上がるなよ、人間……！　俺は世界の悪意と同化した神となったのだ！　それから切り離された程度の貴様に、一体何が　！？』

次の瞬間、北斗の放つロクエンティアの一撃がガリユウを砕き、更にヴァンを遙か彼方へと吹き飛ばしていた。結晶の剣と純白の剣を重ね、男は静かに目を細める。状況がよく飲み込めず、昴もシエルシもただ呆然としてしまう。

「シエルシ、昴を頼む。俺は……あのラスボスをぶっ倒してくる。それでゲームセット……エンディングへ一直線、だろ？」

「北斗……、貴方は……」

「いいから……もうちょっと待ってるよ。もうお前らには指一本触れさせねえから。絶対に　傷つけさせねえから」

駆け出した北斗、それを迎え撃つ為にヴァンは無数の剣を放つ。その全てを左右の剣で蒸発させ、北斗はニヤリと笑う。何故　？　何が起きているのか？　理解が追いつかないその身体をユウガの一撃が切り裂く。傷は再生する……だが、北斗は尚も猛攻を繰り返す。

左右の剣の連続攻撃　ヴァンは成す術無く一方的に斬りつけら

れるだけである。反撃しようとしても、何故か身体が動かない。何故？　まるで魔剣が、大罪が、身体を蝕んでいるかのよう。

「魔剣つてのはな、魂なんだよ。人間が持つ心……想いそのものだ。その魔剣を全てテメエが思い通りに出来ると思うなよ」

『な、何だと……!?!?』

「テメエが背負ってるのは、ミュレイや、うさ子や……ハロルドや！　皆の想いなんだよ！　この世界にある力が憎しみだけだと思っ
てんじゃねえッ！　うぬぼれてんのは……テメエの方だがッ！！
！！」

繰り出される光を纏ったロクエンティアの一撃　それが大地を
砕き、ヴァンと北斗は墜ちて行く。落下を初め、第一界層から見る
見る下へ。二人の男は空中で何度も何度も刃を交える。だがそ
の悉くが北斗に優勢であり、納得がいかないヴァンは雄たけびを上
げた。

『何故だ!?　何故貴様ごときに凌駕されるッ!?』

「俺は一人で戦ってるんじゃねえ……とだけ言っておこうか。カッ
コイイだろ？」

『ふざけるな!!』

「ふざけてねえよ、大マジだ……!　テメエが奪った命……それが
テメエに抗おうと反逆してるのさ。そして俺はお前でもある……。
同じ能力を持った存在だ。それが同じ能力の剣を持ち……そしてテ
メエは大罪に足を引っ張られてる。どっちが優勢かなんて子供だっ

てわかるだろ？」

『有り得ん！ 俺は完全に大罪を制御しているはずだ！』

「完全に制御なんて出来るかよ、人間の心だぞ？ お前の中に居るハロルドが……。お前の中に居る、シルヴィアが……。俺をお前から切り離れた。お前を倒せと俺に力を貸してくれている。何もかも思い通りになると思うなよ、魔剣狩り。“孤独”では、“愛”には勝てないと相場が決まってる ツー！」

『ぐ……おおおおおおおおおッ！！！！』

ロクエンティアがヴァンの胸に突き刺さり、大きく光を放っている。北斗の背後には、うさ子が……。ステラが……。そしてミラがいる。二つの剣に宿る様々な思い……。それを北斗は理解し、受け入れ、行っている。それこそが本当の意味で魔剣を制御するという事……。力ではなく、心で操るのが魔剣。そんな事は、初歩の初歩。

「この世界からとつと消え失せろ、“大罪” ツー！ そんなに一人が寂しいなら 道中騒がしくなるように、全部纏めて送ってやるよオッ！……」

墜ちて行く北斗は加速し、ヴァンにロクエンティアを突き刺したまま見る見る全ての階層を越えていく。そうしてガルガンチュアの上を埋め尽くしていた魔物を次々に巻き込み粉碎しながら、最下層に眠るアニマへと迫った。

『ま、まさか……貴様……！？』

「貫け……ロクエンティアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

ロクエンティアが眩く光を放ち、北斗はまるで流星のようだった。一閃　空を瞬いた輝きは魔物を貫き、そしてアニマの胸を貫通して過ぎ去っていく。闇を貫く光の一撃　アニマは内側からもだえ苦しみ、徐々に消え去っていく。

『ば、かな……！？　アニマが……消える……！？』

「“神”はもう以前とは違う、うさ子はな……もう人を愛する気持ちを知っている。誰かに優しく出来る女の子になったんだ。ただ孤独を埋めるためだけに力を使っていた頃とは違う。この剣は　この世界を生きた人々の祈りの剣だ」

『北条……北斗オオオオオツッ！！　貴様あああアツッ！！！！』

「　悪いな。ヴァンじゃなくて……北斗君だよ　」

剣を引き抜き、北斗は空中で二対の刃で同時にヴァンを切り裂いた。落下の強風の中、北斗は静かに目を瞑る。切り裂かれたヴァンが落ちていくのを見下ろしながら空中に停止した時間を作り、その上に着地する。二つの刃は北斗の手の中で輝き、彼の勝利を祝福しているかのようだった。

「さて……それはいいんだが、どうやって帰るかな……。そこまで考えてなかったし……」

『はっ……。うさも飛べないの……』

「マ、マジ……？　空くらい飛べるのかと思ってたんだが……駄目なのか」

そうして呆然と立ち尽くしている北斗へと迫るガルガンチュアの姿があった。北斗はそこで大声を上げて両手を振り、ガルガンチュアを呼びつけた。何とか救出されたホクトは甲板の上に立ち、仲間たちへと声をかけた。

「いや、助かったぜロゼ！ ナイスタイミングだ！」

「……誰？」

本日二度目の声が重なり、北斗は思い切り転びそうになった。しかしその手に握られているのはユウガとロクエンティアである。何も言われずとも、何となく推測はつく。

『このお兄さんはねえ、北斗君なのっ！ ヴァン君と分離してねえ……ヴァン君をやっつけちゃったのっ！ はうっっ！』

「……この人が北斗殿でござるか！？」

「確かに、昴と似てるかも……」

「な、なんだ？ 思ったよりイケメンすぎてびっくりしたか？」

『北斗君、イケメンさんだったの！ はうはう！ はうはうっっ！』

うさ子のゆるゆるした声に、甲板にどつと笑い声が沸いた。そんな中一緒になつて笑っていた北斗だったが……すぐに異変に気づいて表情を変える。ガルガンチュアから飛び出してきたメリーベルが北斗を見つめ、その腕を取って首を横に振った。

「まだよ……。まだ、終わってないわ……！」

「……どうやらそうらしいな」

『はづ……？ どういうことなの？ もう、大罪の気配は感じないけど……』

「だから、ヴァンはもうこの世界に居ないの……。アニメの残滓を引き連れて、別の次元に逃げ込んだの。北斗……追える？」

「ああ、任せてくれ。奴とはキツチリ決着つけなきゃな」

頷き、有無を言わず転送魔術を発動するメリーベル。状況がまだ把握出来ていない仲間たちは巻き込まれないようにと後退し、北斗の横顔を眺めた。北斗は腰に二対の剣を挿し、片手をひらひらと振って笑って言った。

「んじゃま、ちよつくら止め刺しに行つて来るわ。皆……元気だな」

「え……？ 北斗……？」

ロゼが声をかけるより早く、北斗とメリーベルの姿は転送魔術の光の中に消え去ってしまう。しばらく甲板には転送魔術の魔方阵の光が残っていたものの、それも消えてしまつと北斗の痕跡は何もかも全て消えてしまうのであった。

まるで北斗そのものがこの世界から居なくなつてしまつたような気がして、不思議な胸騒ぎが襲つた。ロゼは不安げに空を見上げる。アニメが消えた影響か、魔物は既に衰え始め、あとは駆逐戦闘が残るだけであった。気を取り直し、ロゼはガルガンチュアを空に羽ば

たかせる。

次元と次元を超える虹色の空間の中、北斗は眩い光に目を凝らしていた。メリーベルの姿が近くにはないのは不安だったが、恐らく彼女は彼女で異次元へ転送しているのである。やがて光を超え北斗は懐かしい景色を見下ろし、空の上に出現した。

それはかつて彼が住んでいた町……。夜の街は光を瞬かせ、北斗を迎え入れているかのようだった。空中で二対の剣を装備し、降下しながら足場に氷の道を作り、滑り降りていく……。着地した北斗の傍を風が吹きぬけ、夜の世界を背景に北斗は静かに目を細めるのであった。

剣創のロクエンティア（3）

「さーて、奴はどこに行ったかな……っ」と

『北斗君北斗君、ここ……どこの？』

「んー……。俺の住んでた町」

『はづっっ』

「俺の故郷って事だよ。つまり 異世界って事」

『はづっっ！？ うさ、異世界に……北斗君の世界に来ちゃったの！？ はづっっ！ すげいの、すげいのっ！！』

無邪気にはしゃぐうさ子。だが状況は思っていた以上に悪い。こ

の暗闇……そして広い町。ヴァンがどこに逃げ込んだのか、まるで
検討もつかなかった。とりあえずはメリーベルと合流する事が先決
……北斗はやたらとしゃべるつさを片手に、懐かしい街へと繰り
出すのであった。

剣創のロクエンティア（４）

私たちの戦いを一つの物語だったとするのならば……そう、それは誰かが誰かを赦し、愛する為の物語だったのかも知れない。今になって、私はそう思う。

異世界に召喚された私は、きっと自分を赦す為に闘っていた……。私は自分を赦せないまま……兄さんを見殺しにした弱い自分が大嫌いなまま、ただ毎日を無為に過ごしていたように思う。

本城の家に呼ばれ、そこでの生活は楽しかったし幸せだった。でも、それは彼らが私に痛みを与えない存在であっただけに過ぎないのだ。私は彼らと共にすごしている間、弱い自分を忘れる事が出来た……ただ、それだけだ。

でも、わかつているんだ。本当に弱い自分は、必死になって抗わなきゃ乗り越えられないんだって事……。馬鹿みたいに無茶して、わんわん叫んで、それでやっと見える物があるって事……。赦せる物が、あるって事。

その行いの全てが正しかったなんて思わない。何もかもうまくやれたなんて胸は張れない。でも……それでも、間違いながら……。時々、自分の弱さに打ちのめされながら……。それでも前に進んできた。それは誰だって同じなんだ。誰かが特別不幸なわけじゃない。誰かが優れているわけじゃない。人はみんな、同じ大地の上に立たされている。

振り返ってみると、そこには沢山の可能性がある。例えば……召喚されなかった私。ミユレイを守れなかった私……。どれも全部同じ私。ただ分岐点に立たされた時、どんな風に動けたか……。運みた必要な要素で決まっているだけに過ぎない。だから正解なんかじゃない。でも、それは間違いでもない。

人に出来る事は、所詮自分の事くらいだった。私は赦せない私を赦す為に旅をした……。定期的に考えれば、たった一年程度の旅だ

った。でも、私はその中で沢山の出会いを経験し……沢山の想いを経験した。

心の底から笑い、絶望に打ちのめされて涙を流した。迷い、戸惑い、そして歩み……転び。その全てがどれだけ人間らしかったろう？ 私は召喚された私を赦せると思う。間違いだらけの自分を赦して上げられると思う。それくらい、今は自分の事を好きになれたんだ。

弱くて、情けなくて、甘ったれで……自分は悪くないって何もかも他人のせいにしていた私……。そんな小さい子供みたいな私の頭を撫でて、手を引いてあげる……。きつと今なら出来るんだ。兄さんが見ていたものを、私は今同じ目線で見る事が出来る。少しは追いつけたかなと思う。きつと彼なら……笑って私をほめてくれるだろうから。

長かった物語の結末は、決して優しいだけのものではなかった。でも、私はそれを受け入れられる。背負っていけると思う。きつと、もう二度と逢えない兄さんも……同じように、そんな自分を認めてくれるだろうから。

あの戦いの後、剣の世界に起きた全て……私はそれを見届け、記録したいと思う。彼は……そう、伝説になったのだ。異世界より表れし救世主の伝説……。その伝説は、また誰かの手で書き換えられていくだろう。

その物語の出来る限りを見届けて、それを知り、赦し、愛したいと思う。私たちが犯した罪は一生消えないのだ。誰かが赦したとしても、私たちは私たちが赦せない。矛盾したその二つの赦すという言葉の狭間で、私たちは己と対峙する。

だからきつと、私たちの戦いを一つの物語だったとするのならば……そう。それはきつと……誰かを愛し、赦す為の物語。憎しみでも後悔でもなく……それぞれが、前に進んでいく為の物語だった。

剣創のロクエンティア（４）

『北斗君は……どうして死んじゃったのかなあ？』

うさ子がそんな事をつぶやく傍ら、北斗はあの日、自らが命を落としたビルの上に腰掛けていた。風が吹き抜ける、真昼の屋上……。誰も人っ子一人寄り付かないその場所は立ち並ぶビルの中でどこか別世界のようだった。

男は空を見上げ、ぼんやりと懐かしい空気に耳を澄ませる。車の走る音……。人々の声……。雑踏。何もかもが懐かしい。かつて自分が存在していた世界……。そこに戻ってきたのだ。懐かしくないはずがない。そしてその気持ちこそ、彼が北条北斗である証拠であった。男は剣を腰から提げたまま、風に長髪を靡かせている。のんびりとした、平日の昼下がりが……。誰もがあくせくと働き、学び、そんな時間の中これだけゆっくりしていられるのはなんだかとても得をしているような気分になる。

「そっちなあ……。どうして死んじゃったんだろっちなあ……」

『はっ……？ 北斗君にもわかんないの？』

「……死因って意味なら、わかるけどな？ こっからダイブ！ 頭から、グシャァッ！ ひでえもんだぜ？ 見たいか？」

『……うさ、遠慮しておくの』

「だろ？ 俺だって遠慮してえよ。でもそうなっちまったんだ。不思議だよな……」

異世界に導かれ、そこで北斗が経験した全て……。壮絶な戦いもあれば、くだらない小さな幸せもあった。そんな中、数え切れない悲劇があり……。すれ違いがあり。誰かがそう望んだわけではない。でも、小さな小さな赦せない気持ちがある。望まぬ争いに、望まぬ力……。望まれぬ罪。人は驚くほど残忍で、そして驚くほど穏やかだ。

誰かを愛するその両手で、誰かを傷つける事が出来る……。その二面性を信じられないと嘆くのか、希望の形なのだと捉えるのか……。それは人の価値観それぞれだろう。どんな悪人にだって、きっと優しい気持ちはある。どんなに清く生きようとしても……。ふとした間違いを起こすことがある。

例えば、決して望まなかったはずなのにビルの屋上から落ちる事になったり……。それはもしかしたら偶然だったのかもしれない。もしかしたらただの事故だったのかもしれない。でも、そうだったのは。そうなる経緯は。きっと、北斗自身の中にあっただのだ。

「先の事ってのは、わかんねえもんだよなあ……。まさか、こうしてまたこっちの世界に戻ってくる事になるなんてな」

『うさは、いろいろなものが見れてうれしいの〜！ はっつー！』

「……あのね、お前を消せないせいで俺がどれだけ苦労してるかわかってるか……。？ ま、こっちの世界で剣提げてる奴を見つけたとしても、せいぜいコスプレしてる危ない野郎にしか見えないだろうけどな……」

『こすぶれ……。？ あぶない？』

「この世界に剣なんか持つてるやつはそうそういないんだよ……。どう考えても剣を持ち歩いてたら危ない奴だ」

『じゃあ、北斗君は危ないやつなの？』

「……まあ、そうなるんだが、改めていわれるとちよっとショックだな……」

うさ子とくだらないやり取りを繰り返して、肩を落とす北斗……。そんな彼の背後、屋上へ上がってくる女の姿があった。それは白衣を纏い、眼鏡をかけて変装したメリーベルであった。

メリーベルの姿を捉え、北斗は片手を上げて挨拶する。歩み寄る二人……。そして風の中、同時に歩みを止めた。眼鏡を外し、メリーベルはそれを胸ポケットに収めて語り出す。

「とりあえず、接触は出来たわ」

「そうか、そいつは良かった。んで……様子はどうだった？」

「んー……。まあ、無事ではあるけど……あまり芳しくはないわね。彼女……孤立してるっていうか」

メリーベル・テオドランドの転移魔術で北斗がヴァンを追いかけてきたこの町で、彼らが起こした行動……。それは昴への接触だった。ヴァン・ノーレッジがわざわざこの世界に逃げ込んだのは、当然口クエンティアと呼ばれた世界とこの世界が近いということもある。だが……理由はきつとそれだけではないのだ。

本来ならばヴァンは、何の問題も無くあの世界を滅びに向かわせる事が出来たはずだった。だが彼はそれが出来なかった……何故か

？ それは昴が異世界から召喚され、あの婚姻の儀の際に彼へと立ち向かったからである。昴の召喚……それがあの世界の全ての運命を狂わせていたのだ。

ミュレイを殺し、そして婚姻の儀に乱入したヴァンはそのままハロルドを打ち倒し、全ての魔剣を手に入れるはずだった。アニマは復活するはずだった。結果的にその結末には結びついたものの、そこにたどり着くまでに大きなタイムロスをしてしまった。結果……北斗たちが結束する時間を与え。彼らに成長の余地を与え。そして……全てが頓挫した。

ならば、何もかもをもう一度やり直すのならば邪魔になるのは昴の存在だ。ヴァンが逃げ込んだ先……それは昴が召喚される前の世界である。ミラ・ヨシノの魂を取り込み、彼は擬似的にだが全ての大罪の力を得た。アニマは全ての次元を時間軸無視して自在に移動する力を持つ……。そのアニマが作ったルートにギリギリで滑り込む形とは言え、メリーベルと北斗は何とかヴァンを追う事に成功した。

となれば、やるべきことはたった一つだ。歴史を正しく進ませる為に……昴を救う事。そして彼女を正しく異世界へ転送すること……それだけである。北斗は昴に顔が知られてしまっているし、そもそも本来は死んでいるはずの身だ。実際に接触する役目は、メリーベルが負担することになった。

「他人に心を閉ざしている……という感じね。彼女が孤独なのは、あなたへの罪の意識のせいじゃなかった？」

「うぐ……。な、なんとかしてやりてえが俺が出て行くと話がややこしいからな……。リアル幽霊だぜ」

「……まあ、問題は彼女にもあるのよ……。心は開けと言われて開けるものじゃないわ。おのずと、自分から開いていくものなんだか

ら

「……だな。しかし、大事な妹をまたあんな地獄みたいな世界に突き落とすつてのか……。なんつーか……。やりきえねえな」

腕を組み、北斗はうなだれてため息をついた。彼の気が重いのも無理は無い。これから昴は沢山の苦難に直面する。最後の最後まで地獄の中であぐることになる。それを思えば……。あんな世界はほうっておいて、昴は召喚されないほうが幸せなのではないか、とも思っってしまう。

だがそれを今の昴が聞けばきつと赦してはくれないだろう。そんな事したらもう一生お兄ちゃんとは呼んでもらえないだろう。彼女は強くなる……。悲劇の中で、苦悩の中で。そしていつか……。弱い自分を受け入れられる存在になる。

「ヴァンはまだ見つからないんだよな？」

「ええ……。でも、ヴァンだって昴の事は見覚えあるだろうから、見つかるのは時間の問題ね」

「それまでは待機か……。なんつーか、じれったいな」

『うさは町をうろろろしてるだけでたのし〜の〜っ』

「俺にとっちなじみの町なんすけど……」

「まあ、こればかりは仕方ないわよ。私は引き続き大学に潜入し続けるから、あなたはサポートをお願い」

「あいよ……。つてか、大学って結構テキトーなんだな……。お前

が潜入してて誰も気づかないとは」

「気づいてるけど……あの組織はそういうものなんじゃないの？
部外者も結構出入りしてるみたいだし」

「……んまあ、な」

「それじゃ、私は続きがあるから。じゃあね」

白衣を翻し、メリーベルは立ち去っていく。その背中を見届け、
北斗は手持ち無沙汰に空を見上げた。そうして……ゆっくりと彼も
また、ビルの屋上から去っていくのであった。

うさ子を引きつれ彼が向かったのはかつて暮らした実家……。あ
るいは、昴と一緒に歩いた河川敷。カブトムシを取ろうと早朝に繰
り出した山の中……。一緒に通った学校、幼いころ作った秘密基地
……。まるで思い出の欠片を一つ一つ拾い集めるように、北斗は歩
き続けた。

「……どうして、大事なものを守れないんだろうな」

『はづ……？』

「どうしてさ……大切だって、本当に大切だって思ってるのに……
そんな大事なものを忘れたり、失ったりしちまうんだろう」

夕日に照らされ、茜色に染まる川……。それを眺め、北斗は両手
をポケットに突っ込んでつぶやいた。うさ子はしばらく考え……。し
かし、その答えはやはり簡単には出ない。

『きつと……大事であれば大事であるほど、むずかしいの……。守

ったり、傷つけたり……。全てのものが、一筋縄じゃいかないから」
「……そうだな。好きなはずなのに傷つけたり、愛しているはずなのに遠ざけたり……。俺……もつとちゃんとおにいちゃんらしくしてやりたかったのに」

川原に転がっていた小石を一つ拾い上げ、それを水面に鋭く投げつける。それは水面で何度かパシャパシャと音を立てながら跳ね、川の中腹あたりで沈んでいった。北斗が何をしたのかわからなかった。さ子は驚愕し、興奮した様子で声をあげる。

『北斗君、今のは魔術なの!?!』

「いや……ただ石を跳ねさせたただけだ。昔、昴がこれを出来ないってんで友達に馬鹿にされてな……。二人で……こう、練習したんだ」
石を再び投げつける北斗。そんな景色に、在りし日の自分たちの姿が自然と重なった……。半べそをかきながら石を懸命に投げる昴と、お手本を見せる自分……。二人はいつでも一緒だった。出来るようになるまで昴は諦めたがらず、日が落ちた後も二人はずっと小石を投げ続けていた。

昴は負けず嫌いな性格で、子供のころは男勝りだった。昴はしょっちゅう兄にも噛み付くようなやんちゃな子供で、よく勝手におやつを食べられたり……。ゲームソフトを奪われたりしていた。でも北斗はそんな昴がかわいくて仕方が無かった。大事な大事な……たった一人の妹だった。

自転車に乗れないと泣いていた昴を手助けし、補助輪が外れた時……。初めて昴が自分ひとりの力でゲームをクリアした時……。昴が受験に受かった時。いつもいつも、北斗はその背中を見守っていた。優しく微笑んでいた。振り返って満面の笑みを浮かべる昴……

そんな妹が大好きだった。

小石を手の中で転がしながら北斗は笑みを浮かべ、目を閉じる……。色々な事があった。でも、ずっとそばにいて守ってあげる事が出来なかった。大切な妹……。可愛い妹……。結局、自分は彼女に何もしてあげられない。

「俺は……。兄貴としてはどうしようもねえ部類に入るんだろうな。妹の事さえ忘れちまったり……。世界を壊そうとしたり。勝手にくたばったり……」

『……。北斗君は、がんばってるよ？ 北斗君が本当は一生懸命で、いつも必死だってことみんなわかってるよ。うさも……。わかってるよ』

「どうかな……。本当はきつとどうにもならないって諦めてたのは俺のほうなのかもしれない。シエルシが倒れた時……。改めて思ったよ。俺は無力なんだってな」

投げた石は水面を跳ねず、沈んでいつてしまう。北斗は両手を叩いて泥を落とすと、少々大きめの石の上に腰掛けた。

「……。強くなりたかったんだ。早く大人になりたくて……。昴を守りたくて……。背伸びしてたのかも……。結局、中身はガキのまんまだった」

『北斗君……』

「だから、昴を今度こそ守るって決めたんだ。もう遅いなんて思わない……。俺は、大事な妹一人くらい守ってみせる。兄貴の腕ってのはそのためにあるんだ。ちっこい弟や妹を守るためにある……。だ

から俺は、闘うよ」

立ち上がり、踵を返す北斗。思い出の中では生きられない……。時は流れ続けているから。だから……。今は、今の自分に出来ることをするしかない。

北斗はそれから昴にぴったりとくつつき、護衛を続けた。通学路……授業中。昴がいくところにくつついて行つた。そうして昴の暗い表情や悲しげな横顔を見て、どうしようもなく寂しくなつた。

どこにだつてついていく。どんなときだつて守っている。本当は、ずっと……。ずっとそばにいて、守つてやりたいけど。でもそれは出来ないから……。せめて今だけは、ずっとそばにいる。これから沢山経験する悲しみや苦しみから彼女を守ることが出来ない。でも……。せめて、今だけは……。守つていく。見守つていく。どんな時でも……。ずっと。

それは北斗にとって幸せな時間だつた。だからなんだといわれればそれまでだろう。だが……。彼はそれで良かったと思つていた。やがて、ヴァンが昴の前に現れても……。彼は彼女を守ることが出来たから。

現れたヴァンは黒衣を身に纏い、ガリユウを握り締めて怯え戸惑う昴の道行きを閉ざす。暗闇に包まれた町……。北斗は迷わず、白いコートを羽織つて飛び出していく。

ヴァンと北斗は異世界の大地で再び刃をぶつけ合わせた。戦いの中、北斗は様々な思いを胸に抱く……。そうして北斗は昴をかばうようにして背に隠し、声を上げるのだ。

「逃げる、昴……！」

「あ……？ えっ？」

ヴァンのガリユウを弾き、北斗はヴァンへと猛攻を仕掛ける。そ

う、もう絶対に間違えるわけにはいかない。手放すわけにはいかない……。だから、逃げる昴を守る為、男は最後の死闘を繰り広げる。

『何故邪魔をする……。！？ 俺はただ、すべてをやり直したいだけだ！ お前にだってその気持ちは分かるだろう！？ 何もかも失った魂だけの存在よ……。！ お前はやりなおしたいとは思わないのか！？』

「思うさ……。そりゃ俺だって思うさ！ でもな……。そんな風に何もかも台無しにしていわけがねえんだよッ！！ 俺は ツー！」

異世界の大地で、仲間たちと出会った。大切な人を見つけた。離れ離れになった妹と再会する事が出来た。

「ああ……。いいじゃねえか、それで！ 俺は……。約束をきくと果たしてみせる！ ヴァン……。お前は確かに間違っではないのかもしれない。お前は悪くないのかもしれない。でもだからって 何もかもを壊していいわけじゃない！！」

触れ合う刃と刃……。爆ぜる火花と鳴り響く音色……。現実離れた幻想的な戦いの中、何度も何度も思い出す。これまでであった様々な出来事……。

今は、それでよかったんだと思える。失っては取り戻そうと闘った沢山の人たちの悲しみの物語……。北斗は、あらゆる世界の中で最もヴァンを理解出来る。二人は一つの身体の中に居た……。だからこそ 理解出来る。

彼はとんでもなく不幸だった。とにかく不幸だった。大事なものを次々と失った。でも、だからといって “赦される” わけではない。それは免罪符にはならない。過ちはただ過ち……。悲劇はただ悲劇。それを広げ、誰かに求めてはいけない。闇を 広げてはい

けない。

打ち合う力が彼らの思いを代弁していた。ビルからビルへと飛び移り、何度も月夜に音色を繰り返す二人……。本当に大切な物を沢山見つけた。帰るべき居場所を見つけた。そして　今、守りたいたった一人の妹を見つけた。

「俺は還る……！　俺のいるべき世界へ！　俺が在るべき場所へ！　俺を待つ人の所へ……！」

ガリユウが闇の中で吼える。だが　ロクエンティアの輝きが全てを無力化していく。二つの影は夜の中で重なり合う。ヴァンの胸を貫くロクエンティア……。返り血を浴び、北斗は悲しげに目を閉じた。

「……俺を、倒して……それで、大罪が消えるとしても……？　違うな……。今度はお前が背負うだけだ。アニメを……世界の悪意を……」

「……そうかもな。それでも……俺は、やってみようと思う」
そつと剣を引き抜き、北斗は一步身を引いた。ヴァンはその場に崩れ……穴の開いた胸に手を当て、笑った。

『滑稽……だな……。同じことの……繰り返した。俺も、お前も……孤独の闇に吞まれ……消えていく……』

「……だとしても、俺はアニメを背負っていく。守りたい物を守れるように努力し続ける。俺は……諦めない。闘い続ける。もつと強くなる。いつか……全ての罪を打ち滅ぼせるまで……」

ヴァンは笑い、そうして光となって消えて行った。北斗はあえてそれを受け入れる……。黒い光の粒……。それを己の身体の中に宿していく。七つの大罪……。そして、アニマと呼ばれた孤独の塊を身体の内にも宿していく。

アニマは絶対に消すことは出来ない。今のロクエンティアではせいぜい大罪を相殺し、アニマを眠らせることしか出来ない。だから……。その闇を抱えて、これからも生きていく。それは想像以上に過酷な事だろう。だがそれでも……。やり遂げたいと思う。

『……北斗君……。いいの？』

「ほつたらかशीといたら、またどつかの世界で形になつちまうだろ？ そうなるくらいなら、俺が持つてたほうがいい」

『でも……。それじゃあ、北斗君は人間じゃなくなつちゃうの……。ずつとずつと、永遠にアニマを見張つてなきやいけないの……。』

「……。だな。ま……。気長にやるさ。どうせもう、やることはこれつきりだ。俺は……。こういふ生き方が性に合つてる」

闇を抱え、北斗はヴァンをも赦そうと思った。何もかも全てを赦す事はまだ出来ないかもしれない。それでも……。時間をかけてゆっくりと理解しあえたらいいと思う。ガリユウの中に眠る数え切れない負の魂……。それと、向き合う為に。

北斗はビルからビルへと飛び移り、最後の役割の為に走り出した。月を背に影は往く。約束の場所へ。あのビルの屋上、あのビルの淵、立つ昴とメリーベル……。昴を異世界に転送する為に、術式の発動と同時にメリーベルは昴を突き飛ばした。そういう手はずになつていた。だから北斗は余計なことはいらないようにと思つていたのだが……。結局、駆けつけてしまった。

落ちていく昴の手を握り締め、北斗は彼女を吊り上げる。月光を背にした彼の姿は昴にはよく見えなかっただろう。そしてきつと、転送のショックで忘れてしまうような些細な事……。それでも計画を崩されて呆れるメリーベルを背後に、北斗は最後のわがままを通す。

「これから、つらい事がいっぱいあるかもしれないね。でもな……それはきつと、お前を強くしてくれる。だから……がんばれ。がんばれよ、昴。大丈夫だ、どんな時でも俺と一緒にいる。俺が傍に居る……」

昴は目を見開き、小さく誰かの名前を呼んだ。そうして つながれた手が放たれ、少女は落ちていく 異世界へと。北斗はそれを見送り、目を閉じ……そうして振り返る。メリーベルは腕を組み、不満そうな顔で北斗を見ていた。

「そんな怖い顔すんなよ……。どうせ忘れてるって」

「……………まあ、いいけどね……。一つ、謎も解けたし」

「謎？」

「あなたがいつ、あの世界に召喚されたのかって事よ」

それ以上説明せず、立ち去っていくメリーベル。北斗はうさ子と共に目を丸くし、そうしてその後を追いかけた。去っていく二人の背後……昴を転送した魔方陣の中に吸い込まれる光があった。それはずっとずっと、肉体を失ったその時から彼女の傍にあった、彼女を思う一人の男の魂……。

昴が、傷つかないように。昴を……守る為に。せめて傍に居よう

と、彼はずっと近くに漂っていた。召喚された彼は肉体を持たず……しかし、昴を助けるために身体を得たのだ。

世界に漂う名も無き魂を受け入れ、喰らうのがガリユウなら、彼がそれに宿ったのもある意味当然の流れだったのかもしれない。その魂はやがてその肉体の所有権を奪ってまで昴の前に姿を現すことになる。が……全てはきつと、当然の事だったのだ。

記憶を失い、何もかもを失い、それでも彼は昴を守ろうとした。傍にいようとしたり。道中、争うことはあったかもしれない。けれど二人はきつと……ずっと、ずっと、最初から……傍に寄り添っていたのだ。

「……さて、最後の仕事も終わったし……還りましようか、あの世界に」

「そうだな……。ま、こっちに来てやった事はたいしたことないけどな」

「あるでしょう？ あなたはアニマを封印する、新たな“器”となった。これからどうするつもり？ もう簡単には死ぬことさえ赦されないわよ」

「……ま、戻ってから考えるさ……。テキトーにな。時間ばかりは腐るほどあるんだ。それなりに……見つけるさ、答えを」

煙草に火をつけ、男は空を見上げる。くすんだ夜空に煌く星……。どんな闇の中でだってきつと輝いてみせるだろう。そう……彼女なら。

それが、彼らの物語の終わり始まり。全てはここから始まり、そしてまたここに還るのだ。

誰かを愛し、守り、そして語り継がれていく罪のエピソード。そ

れは、彼らが望み思い描いた夢の形……。

剣創の、ロクエンティア　　。

「……………眼が覚めたか？」

目の前には綺麗な真紅の瞳があった。燃えるように紅い髪……時代錯誤の和装。ああ、なんだ。全部夢だったんだ。ふと私は安堵する。握り締めていたのは、彼女の白くて柔らかい手だった。綺麗な手だ、と呆然と考えた。待て。そうじゃないだろう。

周囲を眺める。どこだ、ここは？ 見覚えがない。何故か、布団の中に寝かされている。全身汗びっしょりだ。何故？ 何が？ どうなってる？

「ようこそ、“ロクエンティア”へ。歓迎するぞ、救世主よ」

剣創のロクエンティア（5）

それからの私たちの事を、少しだけ語りたと思う。

ロクエンティアと呼ばれた世界は滅び、人の住める世界では無くなってしまった。生き残った人間はとりあえずメリーベルの力でバテンカイトスに押し込まれ、丸ごとそのまま別の世界へ移住する事が決まった。

彼女がもともと住んでいた世界はロクエンティアと比べると非常に広大で、きちんとした大地があり、難民を受け入れるだけの余裕があった。私もその例に漏れず……そして共に闘った仲間たちは、新しい世界でそれぞれの道を選んだ。

ロゼはアクティやエレットを始め、ギルドの生き残りを連れてこの新天地を冒険すると言ってガルガンチュアで飛び出して行った。なんでもこの世界はまだ未開の土地が多いらしく、いつかそこに移住してきた人々が暮らせる楽園を作るんだとロゼはとても張り切っていた。アクティもそんなロゼの案にまんざらでもないのか、しようがないと言いながらも喜んでついて行った。

帝国もククラカンも、全ての組織が解体され……私たちの間にあった垣根は存在しなくなった。でも、全てが終わったわけではない。何とか元の世界を元通りにしようという計画も持ち上がっていて、その為ゲオルグとウサクは元の世界に残った。二人は失われてしまったククラカンだけでなく、全ての大地を復活させると意気込んでいた。それはおそらく遠い……とても遠い、どうしようもなく果てしない時間の先にしか実現しない理想だろう。けれど、やって出来ないことはない……。誰かが始めなければ、夢は夢でしかない……。二人はそう語り、私たちの元を去って行った。

あの戦いの決着がどうなったのか、私は聞かされていない。戻ってきたのはメリーベルだけで、彼女はただ何も言わずにユウガを私へと差し出したのだ。戦いが終わっても私に帰るべき場所はない……

…それは、私が犯した罪の証なのだ。

私はもともと私が居た世界へは戻らず、この新天地で生きていく事を決めた。そこで私は……世界を旅するのでもなく、世界を元通りにしようとするのでもなく、ただ一人の人間として生きていく事にした。皆には悪いと思うしそれを否定するわけじゃない。でも……私にはもつと大事な事があつたから。

生活していくためにはそれなりに収入が必要で、私は新しい世界の学校で働く事になった。なんでもこの世界には英雄学園という、様々な分野の英雄を育てる学園があるらしく、私はその中の一つに就職した。驚くべき事にこの世界では異世界からの来訪者は別に珍しいものではないらしく、誰もが簡単に私たちを受け入れてくれた。今となつては当たり前のように教鞭を執り、子供たちに様々なことを教え、そして逆に教えられたりしている。そして、この世界を救つたという英雄の名前を聞いた時……私はとんでもなく驚く事になるのだが、それはまた別の物語のお話だ。

何はともあれ、私たちは新しい生活へと移ろうとしていた。私はその、シャングリラという街で暮らすことになり……そして、転機はそれから半年後に訪れた。

「……………本当に、一人で行くの？」

シャングリラは草原に囲まれた街で、巨大な城壁に覆われた要塞都市だ。その街を背景に私はメリーベルと向き合っていた。彼女もこちらの世界で半年ほど過ごしていたのだが……何を思い立ったのか、また別の世界へ旅立つというのだ。

「またいつ、ロクエンティアみたいな世界が出てくるかわからないしね。それに、アニメは消えたわけじゃない……ただ封じただけ。だからもつと腕を磨いて……アニメを消し去る方法を探してみるつもり」

「……そっか。そういえば、不老不死の術を探して旅をしてたんだよね……。アニメの一件が片付いても、メリーベルの旅は終わらないのか」

少しだけ寂しい気持ちはあった。けど、きっと彼女はひよっこりと帰ってくるだろう……。そんな気がする。トランク一つだけ片手に、彼女はあっさりと全ての世界を超えていく……。まさに、世界を渡る魔女という言葉がふさわしい。

風の中、彼女は髪をなびかせながら微笑んでいた。きつともう……。私は彼女が居なくても大丈夫だと思っ。メリーベルには本当に色々世話になって、その借りは多分一生を賭けても返しきれないくらいだけど……。でもだからこそ、彼女の新しい旅立ちを見送る義務が私にはあるのだ。

「そっちこそ、本当にいいの？ 私が居なくなったら……。当分会えなくなると思うけど」

「……それは、いいんだ。ミュレイがそう望んでいるから。私は……彼女の思う通りにしてあげたいから」

「……そう。それじゃあ、せいぜい仲良く元気だね」

「メリーベルの方こそ……。色々ありがとう。お元気で」

手を振り、別れを告げた。彼女は背を向け立ち去りながら片手を上げ、ひらひらと振る……。なんともさっぱりしていたかつこいい女の人だった。思えば彼女には何から何まで全部世話になったものだ。だがこれで後生の別れというわけではない。きつと、メリーベルとはまた逢う事になると思う。なんとなく……。そんな気がするの

だ。

こうして私は新しい世界で生きていく事を決めた。けれど仲間たちがそれぞれの道を歩き出し、メリーベルが立ち去った今でも孤独というわけではない。私の傍には……ミュレイがいる。彼女と共に暮らし、これからも生きていく。そう、私は誓ったのだ。

ミュレイが座った車椅子を押し、私は町を歩いていく。ミュレイは両足と片腕を失い、一人では生活できない状態になってしまった。だから私はミュレイの面倒をこれからずっとと見ていこうと思う。メリーベルの力を借りれば、義手や義足を手に入れる事も出来る。けれど彼女はそれを望まなかった。

この傷も、痛みも、これから背負う不自由も……全ては自分の犯した罪の証だから、受け入れていく……ミュレイはそう語った。私たちは間違え、そして傷つけあい……生きてきた。ミュレイは自分を見つめなおし、罪を償い一人の人間として生きて生きたいと言っていた。ミュレイが自由に振舞う事が出来ないのは悲しいけれど……それが彼女の望みなら、私はそれを叶えてあげたい。

「……しかし、せつかくの休みなんじゃから一人で気分転換でもしてきたらどうじゃ？ わらわの面倒を見ていたら何も出来んだろう」

「何言ってるんだよ、私はミュレイと一緒にいられるのが一番楽しいんだ。ほら、公園に着いたよ……。たまには外出しなきゃ、ミュレイだって息が詰まるでしょ？」

私は車椅子を押しながら公園へと入った。噴水が盛大に水を吐き出し……その周りで子供たちが遊んでいる。冷たくてさわやかな風が吹きぬけ、私は生きている事を強く実感する。

そう、これからも生きていく……。どんな形でも、どんな想いを抱えてでも……。私たちはそんな自分と向き合う義務がある。そしてそれを受け入れていく勇氣がある。だから、これからも歩みを止

めたりしない。願いを忘れたりしない。

ミュレイと共にあり、彼女の手足となつて生きていく……。それは人から見たら大変だとか不幸だとか思える事なのかもしれない。でも私はまるで何一つ後悔していない。今度こそ……。私は本当の意味で彼女を守ってみせる。彼女の心を……。守り抜いてみせる。彼女の騎士として。彼女を守る勇者として。北条昴、ただ一人の人間として。

「不思議なものじゃな……。もう、何もかも失つたと思つていたのに……。世界はこんなにも広く、何もかもを受け入れる」

「……大切なのはきつと、そんな世界を正面から見つめ、受け入れる事なんだよ。ミュレイ……。私たちはきつと、これでよかつたんだ」

ミュレイがうなずき、微笑みながら私の手に自らの手を重ねる。私たちはそうして時間も忘れてぼんやりと暖かい日差しの中で噴水を眺めていた。やがて暫くそうしていると、正面から剣を背負った子供たちが歩いてくる。そうして私の名前を呼びながら手を振るのだ。

「お主、なかなか人気の先生みたいじゃのう……。？」

「か、からかわないですよ……。一緒に行くう、ミュレイ。みんな良い子なんだ。紹介したい子が沢山いるんだ。話したいことが沢山あるんだ。聞いて……。くれるかな？」

彼女は何も言わずに優しく微笑んだ。この暖かい日溜りのような笑顔を守つていこうと思う。これからもずっと、ずっと……。だからこれで私の物語はおしまいだ。これから続くのはきつと、私ではない誰かの物語……。私はきつとその誰かの物語の中で、また登

場人物になるのかも知れない。

でも、私のやることはもう決まっている。もう迷うことなんて何も無いんだ。私はミュレイと共にあり続ける。これからもずっと、彼女と一緒に歩いていく。大変なこともあると思う。厳しい現実には直面もするだろう。それでも……繋いだ手は決して離さない。

ゆっくりと、車椅子を押し歩き出そう。そんなゆっくりとしたペースでも、きつと笑って受け入れてくれる。がんばれって背中を押してくれる。そうだよね……きつと。兄さん、貴方なら。

白い、白い砂の大地の上を歩く一人の男の姿があった。男は風を受け、その長い髪を靡かせる。手にした煙草から紫煙が揺れ、果てしなく透き通った青空に抜けていく……。

男の背後、うさぎの耳を生やせた人々が暮らしていた。男は振り返り、その景色を眺める……。崩壊したエデン……。それでも彼らはこれからもこの時の止まった世界で生きていくのだろう。男もまた、その世界の住人となったのだ。

アニメを消せない以上、この場に留まりそれを封じ続ける役割が彼にはあった。彼はこの剣の世界の王であり、守護者であり、神となったのだ。新たな器として……これからはこの世界を管理していかねばならない。

それは気の遠くなるような長い年月を犠牲にしなければ成し遂げられない大事だ。だが彼はそれをある程度楽観的に考えていた。きつとアニメも、うさ子のように……学ぶ事が出来ると信じているから。だからせめて、誰に見せても恥ずかしくないように立派に生きていこうと思った。もう、何一つ溢さない様に……闘おうと思った。あらゆる運命と名のつく悲劇から、全てを守ってみせる。彼の野望はまだ始まったばかりだ。そう、その手始めがこのうさぎの村……。人を守り、愛する事で愛された人はまた誰かを愛し、それを伝え

ていくだろう。憎しみが連なり連鎖するのであれば、愛もまた同じく連鎖していく……。気の長い、とても気の長い計画だ。でも……北斗は知っている。それでも愛は確かなもので、そして誰かを救う力を持っているという事を。

「北斗君、北斗君ーっ！！ はうっっ！ はうはうっー！！」

「おー。今日も元気そうだな、創神剣ロクエンティア」

「……うさ、そんな名前じゃないの……。確かにうさは剣になっちゃったけど、今は元通りうさはうさなのですよっ」

剣から元の姿へと自在に変化する事が出来るようになったうさ子は白い大地を踏みしめ北斗へと駆け寄ってくる。そうして北斗の胴体にダイブすると、ほっぺたをすりすりと何度もこすり付けた。

「よしよし……。それはともかくどうした？ お前、あの村を復興させるんじゃないかったのか？」

「うさ村はねえ、だんだんと軌道に乗ってきたのっ！ うさはねえ……うさ村の村長さんになるのーっ！！」

「いやまあ、もう既に村長みたいなもんだと思うが……」

「あ、そうだ！ あのねえ、シエルシちゃんがご飯出来たから北斗君呼んで来てくださってゆったのーっ！ はうっ……うさ、おなかぺこぺこなのー……っ」

「あゝ、そうなのか。よし、じゃあうさ村まで競争するかー！」

「なのなのっ!!」

二人は丘を下り、うさ村へと下っていく。実験に失敗したホムンクルスたちが暮らすうさ村へ……。その村ではうさぎの耳を生やしたホムンクルスたちが村の中央部にテーブルや椅子を設置して大規模なお昼の時間を迎えようとしていた。毎日お昼の時間はこうして村中の人間が集まり、一緒にご飯を食べるのだ。

村の中心部ではドレス姿のシエルシが村人たちへ食事を配っていた。小さなうさ子たちがもぐもぐとパンをかじる中、シエルシは穏やかに微笑んでいる。そんなシエルシへと駆け寄り、北斗とうさ子はおなかをさすりながら言った。

「おかーさん、おなかすいたー」

「誰がお母さんですか、誰がっ!? もう、二人とも……ご飯の時間には遅れないでっいつも言っているのに」

「うさ、遅れてないの! うさはねえ……毎日ご飯の時間二時間前にはここに座ってるの!」

「いや、働けよ……。この村自給自足なんだから……」

「北斗君のほう働いてないのっ!!!! うさはねえ……うさ村の村長さんのっ!! だから、二時間早くご飯を待っててもいいのっ!!!!」

「言ったな、うさ子の分際で……?」

にらみ合い、バチバチと火花を散らす二人……。その二人を同時に叩き、シエルシはにっこりと微笑んだ。

「じゃれあってないで、早く手を洗ってきてくださいね……？」
「飯要らないなら別にそのままいつまでもじゃれててもいいですけど」

「……ご、ごめんなさい」

こうして彼らなりの日常が続いていく……。手を洗った二人が食卓に着き、一斉にいただきますの音が響いた。それぞれが食事を摂る姿をシエルシは優しく微笑みながら眺めていた。

アニマを封じるといふ生活は、いつまで続くかわからない。だが北斗にもシエルシにも、うさ子にも無限に等しい時間があつた。だが彼らはだからといって何か特別なことをするでもなく、当たり前のように一日一日を大切に過ごしている。

好き嫌いをする小さい子供たちを追いかけ、食べさせようとお姉さんぶるうさ子……。それを北斗とシエルシは笑いながら眺めていた。心を持たなかつたうさ子に心が芽生えたように、人と人との関わりの中できつとホムンクルスも心を芽生えさせていくだろう。事実彼らは以前よりずっと人間らしくなり、笑うようにもなった。

穏やかで、平和で……。とてもささやかな日々。でもそれで誰もが満足していた。これから何が起るのかなんてことは誰にもわからない。もしかしたら唐突にアニマが目覚め、この世界は滅ぶのかもしれないし、永遠にそうならないのかもしれない。でもたった一つ確かなのは今日の事、そして明日の事だけ……。今日を毎日必死に生きていけば。明日を毎日、信じて眠ることが出来れば。どんな唐突な終焉だつて笑って受け入れられるだろう。抗えるだろう。何度でも……。そう、何度でも。

「しかし、本当にすっかりお母さんだな、シエルシ」

「……なんだかその呼び方はいまいち釈然としないのですが」

「そう怒るなつて。皆お前に懐いてるじゃないか。いい兆候だよ」

「……そうですね。彼らが心を取り戻して……これから新しい世界を作っていく礎になる。そんな未来が……いつか実現するといいいのですが」

「そうしたら俺らはまさにアダムとイブだな」

「……はい？」

「あー、いや……こつちの話だ。それよりシエルシ……」

北斗は顔を上げ、シエルシの顔を覗き込む。かつて姫だった女性
は優しく穏やかに微笑み、その瞳の中に北斗の姿を映し出す。テ
ブル越しにその手を取り、北斗も同じように微笑んだ。

「……ありがとな、一緒に居てくれて」

「何を今更……。私は、貴方が嫌だと言ってもついていくんですよ
？ それは貴方が一番ご存知でしょう」

「……そうだな。そういや、そうだったな……」

北斗の手に自らの指を絡め、シエルシは強く握り締めた。暖かい
ぬくもり……そして気持ちが伝わってくる。何もかもが絶望に彩ら
れ、破壊されたこの終焉の世界の中にも……希望は確かにある。そ
う、こんなにも身近に……その掌の中に。この世界の絶望に負けな
い輝きが、眠っているのだ。

「ずっと……貴方についていきますよ。貴方となら……どこまでだつて」

「……ああ。きつと……きつと、これからもずっと皆を守るよ。シエルシ……お前を守り続ける。だから俺の居場所で居てくれ。俺についてきてほしい。これからも、ずっと……」

二人が見つめあい……そうして暫くの時間が流れた。なんとなくいい雰囲気になっていたそこにうさ子が飛び込んできると雰囲気はぶち壊しになり、耳をぱたぱたさせるうさ子を北斗は苦笑しながら見やった。

「北斗君、シエルシちゃんっ！！ 二人ばかりいちゃいちゃしてずるいのーっ！ うさもーっ！！ うさもいちゃいちゃするのーっ！！」

「い、いちゃいちゃなんかしていません！！」

「そつだそつだ、本当にいちゃいちゃしてるのは夜だ」

「貴方は何を言っているんですかあああああああッ！！！！」

テーブルを乗り越え、シエルシが蹴りを放つ。しかし北斗は身軽にそれを回避し、ひっくり返りそうになったシチューの注がれた器を片手に逃げ去っていく。シエルシはおたまを握りしめ、それを追いかけて走り出した……。

「……はう。それが、いちゃいちゃしてるっていうんじゃないのかなあ……？ ね？」

うさ子は耳をぱたぱたさせ、周囲に立っていた子供たちに問いかけた。子供たちがうなずき、そして彼らの視線の先……男は食事を続けながら飄々とシエルシの攻撃をかわし続けている。

「待ちなさい北斗！ 貴方という人は、子供の前でなんて事を言い出すんですか！ いい加減その態度を改めなさい！」

「って、言われてもな……」

「言われてもな……じゃありません！ 今日という今日は、納得するまで話に付き合ってもらいますからね！！」

「すみません、おかあさん」

「お母さんじゃありませんええええんツ！！！！」

白い大地の上、二人の影が走り抜けていく。風が吹きぬけ……修復された鐘堂から清らかな音が鳴り響いた。それは結晶の森に……白き大地に……そしてきつと、遠く世界を隔てた場所に居る仲間たちへ届く事だろう。

鐘の音と共に、彼らの物語は終わりを迎える。そして新たなそれぞれが幕を開けるのだ。その全てが幸福に彩られた物だとは誰にも約束できない。だがそれでも、逃げずに……。きつと立ち向かうのだろう。ずっと、ずっと……。

うさ子が小さなうさ耳の少女を抱きかかえ、空を見上げる。抜けるような蒼さの向こう。きつと同じ空でつながっている。そう信じられる仲間たちの心の中で、この物語は終焉を迎えるだろう。

これは、そう。

神に抗う男と罪を背負った少女の、世界を終える為の物語。

剣創のロクエンティア

「……信じられるよね、きつと……。うさたちの愛が……誰かに届くって」

優しいぬくもりを抱きしめ、神の剣は空を仰ぎ見る。それはいつか誰かに届く、確かな愛のメッセージ。紆余曲折を経て辿り着いた……荒唐無稽な“ファンタジー幻想譚”である。

…「うわあああん！」

うさ子「わーんわーん！！ うわあああんっ！！！」

昴「子供だ……。子供が二人居る……」

北斗「まあ……。またいつか会える日が来るさ。メリーベルや本城夫妻みたいにな」

昴「それちょっとリアルでいやなんだけど」

うさ子「みんな、みんな大好きなお！ ありがとうなのーっ！！！」

シエルシ「えぐえぐ……えぐえぐ……っ」

北斗「なんか言えよ」

昴「それではみなさん、本当にお疲れ様でした」

北斗「みんな、ありがとな！」

一同「「「「 さようならーっ！！！！！！」」」」

シエルシ「えぐえぐ……」

昴「泣き止まないんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7039i/>

剣創のロクエンティア

2010年10月8日22時39分発行